

君と結ばれる、物語の 作り方

らむだぜろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なりたくもない提督をやらされた少女、七海。

嫌悪すら抱く彼女と共に紡がれる物語。

これは君と結ばれる為に、頭がおかしい少女が紡いだ物語……。

目次

プロローグ	1
着任	13
妖精嫌いの初建造	24
最悪な関係	37
死なせない決意	50
真実を知ったとしても	64
死者への冒瀆	80
認識の改善	96
七海の中身	110
初めての対抗演習 作戦会議	124
エロサキユバス覚醒	139

初めての対抗演習 始まり	154
初めての、死	168
艦娘殺しの提督	185
新たな艦娘着任	202
艦娘の始まり	217
架け橋、五十鈴	232
砲雷撃戦（物理）	248
吹雪の選択肢	264
七海の中身	277
報告会にて	291
臆病と仏頂面の闇	305
母という意味	320
愛の答え	335

暴走覚醒	349
伝播する狂喜	362
暴走司令官七海	375
広がる歪み	391
自己犠牲（物理） その一	404
七海の偏狭癖	421
戦艦の悩み	433
姫を冠する者	447
月が綺麗な夜	465
春雨の着任後	481
真実は闇の中	497
迷う駆逐艦	512
五十鈴と七海	528

深海から来たメイドの面接	544
増えるメイド	560
信頼の代償	573
司令官の逆鱗	588
軍人の矜持	602
違う、そうじゃない	616
待て、こうでもない	628
プリンセスと変態の邂逅	642
当然の摂理	658
交わりの鎮守府	673
価値観の変化	687
毒に浸った朽ちたくろがね	701
海が蝕む、泥の華	715

深海棲艦提督の公開処刑	728
本当に結ばれる、物語の作り方	742
深海の狂犬	755
零の風、深海なる変態	768
深海棲艦ルート 澱に染まる意識	
澱に染まった意識	782
深海を照らす、月の如く	795
それぞれの決める道	811
逃亡の計画	827
計画実行	841
後始末	855
偽りの裏	868

お迎え準備	880
運命は皆の味方に	893
カエレ!	910
ロシアの画策	925
知らぬが仏	940
エンディングA 完全殲滅	
口封じ	955
人類破滅のカウントダウン	970
決戦の日	982
答え	995
ごめんなさい	1007
最終覚醒	1018
殺してしまえば呆気なく	1032

エピソード	イビツな平和	1045
エンディングB	多くを失った果てに	
彼女の消失		1059
命と引き換えに		1073
退役の理由		1089
消えた記憶、消えない憎しみ		1101
それぞれの事情		1141
身辺護衛		1129
日常の五十鈴、変態の七海		1139
不穏な動きと不穏通り越した動き		1152
妥協案の結果		1167
泥と鋼の交わり		1181

ハゲの鎮守府		1195
身勝手な理由たち		1208
知った恨み辛み		1221
喰われた		1234
姫園鎮守府の憂鬱		1246
番外編 補足説明一回目		1258
互いの非		1270
生誕の日		1284
浮遊棲姫		1299
空が爆ぜる日		1312
陸軍と海軍		1327
空爆の裏側		1340
命懸けの信頼		1352

市街戦	1364
番組が違います	1375
抜錨、艦娘たちも	1387
ハゲの言葉	1398
海上決戦 前哨戦	1409
補足説明会 二回目	1423
オールマイティーにはジョーカーで勝つ	1435
エピローグ 海と艦と人の世界で	1449
人類ルート 人間のお友達	
異国の少女	1461
軍事バランスの崩壊	1474

事前調査	1488
乱闘騒ぎ	1503
共に戦う艦娘たち	1513
立案、ABC作戦！	1526
鎮守府夏休み 前編	1540
鎮守府夏休み 中編	1552
鎮守府夏休み 後編	1566
勝てば良いのです	1578
白いいさな	1590
鯨の行方	1602
ジャーヴィスの秘密	1613
ムラマサで村雨が訂正してきた	1624

暗い声 |
 鯨の報せ |
 艦喰らう獣 |
 残酷な方法での大団円 |
 その後の動き |
 時間稼ぎの対抗演習 |
 キスすれば変態も高ぶる |
 地獄のパーティー |
 補足説明会 三回目 |
 姉の威厳で更なる高みに |
 発動！ 大怪獣退治！ |
 恐怖と絶望のBGM |
 大和、沈む（メンタルが） |

1806179017771762174617331720170316901675166316511638

エピローグ 人としての在り方 | 1818
 グランドルート ハーレムハッピーエン |
 ド |
 グランドルート ハッピーエンドハ |
 レム | 1831
 世界の対応 | 1843
 対話の意味 | 1855
 窮屈な居場所 | 1868
 節分ってそういう祭りじゃねえから！！ | 1883
 世界に全力で喧嘩を売るスタイル | 1896

戦いの幕開け

—

1910

やベーコンビってレベルじゃなかった

—

1925

血塗れの報復

—

1939

幸福な一時

—

1954

プロローグ

それは、バレンタインの夜だった。

相談したいことがあると言われて、ある少女は訝しげに母と向き合った。

「七海、深海棲艦って……知っている？」

一人の高校生、渋谷七海は母に聞かれた。

それは、運命の瞬間。なりたくもない未来を押し付けられたある少女の、物語である。

深海棲艦。誰でも知っている海の化け物。

正体は未だに不明。目的不明。

シーレーンをぶち壊し、空以外の道を絶った謎の集団。

一部じや幽霊だの、怨霊だのと言われているがそんなもの興味はない。

深海棲艦と戦うために海軍が日々奮闘していると言うが、一般小市民の彼女の知ったことじゃない。

勝手にやっているという話だ。税金でも何でも好きに使え、但し巻き込むな。

そういうスタイルで生きてきた十六歳の高校生。

現役女子高生である。勿論未成年。なのに、言われてしまったのだ。

「……あなたにね、提督適性試験の知らせが届いたの。検査、受けてきて」
「嫌です」

「……そういうと思った。けど、これは義務なのよ。お願い、七海」

提督適性試験。それは、深海棲艦に対抗する人造人間、艦娘を指揮する軍人の適性試験。

人口の一割にも満たない指揮をする素質を持つ人間のあぶり出し、と七海は思っている。

それで、素質のある人間を有無を言わずに軍所属の軍人に仕立てあげるのだ。

いくら希少な提督適性とはいえ、拒否権すらないと聞けばうんざりする。

大体国防の名誉だとかなんとかと叫ぶ周りの頭が可笑しい。そんなもの、知ったこと

じゃない。

巻き込むなど言いたかった。どうせ適性なんてありやしないと、安心していたらこの様だ。

「……珍しい。高校生という若きで、しかも女性で適性ありとは」

「そうですか。だからなんですか？ あたしは行きませんからね？」

「いや、これは強制なんだ。……済まない、人員不足でな。拒否権は無いんだ」

「はあ？ 今時何をほざいているんですか？」

面接を嫌々受けたらまさかの適性あり。面接官に來いと言われて速攻拒否した。

苦い顔で嫌がる彼女を見て、面接官は苦笑して聞いた。

「……何がそんなに嫌なのか聞いてもいいかな？」

「死にたくないんですよ。深海棲艦相手と言えば戦地でしょう。内地に居れば蚊帳の外でいられるのに……。あたしは一般小市民ですよ？ 子供に国防任せるなど、軍人のやることですか？ 正直、正気の沙汰とは思えませんね」

「……真つ当な理由だな。そして、手厳しい」

理屈は通っている。死にたくないから行かない。拒否する。当然の発想だ。

七海は高校生。しかもごく普通の国民である。

限られた情報のなかで育った感性では、ことなかれが当たり前。

当然の如く、嫌がっていた。

「名誉なんて言葉に、あたしは騙されない。死んで英雄なんて真つ平ゴメンです。あたしはまだ、十分に生きちや居ないんですよ。軍に人生を利用されるぐらいなら、この手で死んでやります」

「……………ここまで強烈に嫌がる人も稀だな……………」

七海は面接官に向かって吐き捨てた。

自由にならない人生ならば、いつそ自分で終わらせる。

その覚悟だつてあつた。誰が自分の時間を軍などに明け渡すか。

死ぬなら平和な世界で自分で死ぬ。化け物に殺されるよりは万倍マシだろう。

「あたしの人生は、あたしの物です。軍が、国民の時間を奪つていいと思つているなら、思ひ上がりも大概にしてください。志願した人間から探せばいいでしょうに。居なければ居るまで探せつて言うんですよ、クソが……………」

正に慇懃無礼。丁寧な口調で毒を吐き続ける彼女の剣幕に、面接官も言葉を失う。

…………彼女だつて分かっている。見つかれば、あとは個人の意思など無視される。

それが法律と言うものだ。世の中がおかしいのは、前から知つている。

子供の癩癩だろうとも。だが実際子供だ。癩癩を起こして何が悪い。

「チツ…………。なんであたしが、人造人間なんて化け物を指揮しなきゃならないんです。

大体、素質つて何ですか。機密とか言つてどうせ教えないんでしょうけど、こつちは納得などしてませんかからね。従いますよ、従えばいいんでしょう。ああ、本当に最悪……いつそこの国滅びませんかね……」

酷い悪態を吐き捨てて、面接官に散々文句を言つて、立ち上がる。

わざわざ遠い場所まで来てこれだ。学校は休学、友人とは離ればなれ。

彼女は全部失つたのに、代価は何もない。

「一応、ご両親には提督の仕事に移行する際に、支払いが発生している。無論、ただとはいわない。それなりの高額な金額が、君の人生に支払われているハズだ」

「最低限でしょう、そんなもの。金すらけちつていたらそれこそぶち殺しますよ海軍。子供だと思つて舐め腐つて……」

独り言を言いながら、七海はそのまま帰つていく。

連絡は通達されるだろう。家に帰ると、母に心底同情された。

そして、なにも出来ずにゴメンと謝られた。

「……一度決まれば、死にでもしない限りは覆ることはないんですつて。あなたを死地に送り出すなんて……嫌だけど、今の世界じゃ、これが当たり前だから」

「いいんですよ、お母さん。気にしないでください。これも人生最後の親孝行だと思えます。今までお世話になりました」

「……笑えない冗談だから、尚更辛いわ」

「生きて帰れる保証なんてないですから。言えるときに言おうと思って」

無力を痛感する母に、七海は諦めた。どうせ無駄なのだ。国に個人は逆らえない。

言われた通りに使役されるだけ。頭では冷静に受け止めていた。

母に言えるときに、感謝と親孝行をして置きたいと思う。

嫌だけど、行くしかない。母に感謝しながら、その日は眠った。

……数日経過した頃。海軍の関係者と名乗る黒服たちが自宅に現れた。

この数日で、七海は学校を休学扱いで休んでいる。無期限だ。

友人たちには榮譽ある人間になれて良かった、頑張れと応援されて落ち込んだ。

誰も、七海を引き留めてくれなかった。皆送り出す方だった。

(世の中がおかしい……きつと、そうに違いない……)

嗚呼、こんな世界嫌だ。死にたくないのに、未練があるのに戦場に放り込まれる。

死にたくないのに、指揮をしろと命令される。行きたくない。死にたくない。

とぼとぼ荷物をもって、彼女はその日、人生を諦めた。

なりたくもない、提督などという役職に、就かされて。

台無しにされた人生を、無理矢理生かされる人形となつたのだから……。

一ヶ月ほどは、訓練をするための学校に放り込まれた。

そこでは、主に大人が候補生として、日々学んでいた。

大抵が男性で、一部女性。だが、高校生の適性は七海一人で、最年少だった。軍属になってようやく明かされる適性の中身。

それは……。

「こんにちは、候補生の皆さん。工廠の妖精代表としてきました！」

妖精とか言うファンタジーそのものの謎の小人がいた。

手のひらに乗るほどの小人。流暢な言葉で名乗り、適性とは妖精が見える事を言うらしい。

普通の人間には妖精は見えないし、艦娘という連中とも意思疎通がとれないと聞いた。

授業のように座って学ぶなか、七海は。

「……………」

興味もなさそうに、昼寝をしていた。

妖精さんと呼ぶらしい彼らが注意しても。

「喧しい珍獣。イナゴの佃煮みたいにしますよ」

なんと命知らずにも逆に脅して、戦慄させる始末だった。

あまりの態度に、上の人……要は、上官と名乗る男性に叱られた。

「貴様、妖精さんになんて事を言うのだ!! 謝罪しろ!!」

「お断りします上官殿。失礼ですが、あたしはやりたくてやっている訳じゃありませんし、軍に従うつもりも更々ありません」

鬼と影で言われる程の恐ろしい男に怒鳴られているのに、七海は萎縮すらしない。

逆に言い返した。周りの候補生が啞然としていた。あの鬼に真つ向から反抗している。

「何だと!? 貴様何様のつもりだ!? 追い出されたいのか!!」

「お子さまですが? 何度でも言います、あたしはただの学生だった人間です。それを無理矢理仕立てあげたのはそちらでしょう? 軍に入れば言うことを聞くだけでも?

どうぞ、お気に入らないのでしたら独房でも何でも入れてくれてください。何ならクビでも構いません。というか、クビにしてください。こんな問題を起こす人間を抱えるのは嫌ですよ、上官殿」

「き、貴様ア……!!」

名誉ある候補生の立場を失いたい彼女には脅しが通じない。

男性は暴力を禁じられているゆえに何も出来ずに、逆に怯んだ。

コツソリと調べておいて良かった。

あまりにも言動が酷いものは、違約金を支払い問題ありと判断され、放り出される。知った情報に關しては、候補生の状態なら数年監視がつくだけですむ。

違約金も、受け取った同額を支払えばいいと聞いて、母が手付かずで貯金してある。つまりは、何時でも逃げ出せる。立場などどうでもいい七海は無敵であった。

「……わ、私に齒向かえば独房入りになるのだぞ?! 良いのか!?!」

「承知しているといったはずです。こんな珍獣を見るよりは独房で過ごした方が有意義でしょう。勉強はしますよ。一人の方が集中できます。そこの喋る佃煮の素など、向き合いたくもない」

けんもほろろ。辞めたい彼女は結局、丸一日独房に放り込まれたが、全く反省していない。

それどころか、より反抗的になっていった。

で、定期的に行われる試験も、暇潰しに落書きしている時点でまるでやる気なし。

このまま順調に行けば、候補生で辞められる。その、筈だったのに……。

彼女の計算は見事に狂うことになる。

補欠以下だった彼女も、何故か提督にされてしまった。

「なんであたしが……」

候補生としては最下位。やる気もないのに、人員不足で結局逃げられず。

いわく、候補生の二名が交通事故で死亡、難病を発症して長期入院、しかも退院の目処なしという悲劇が襲った。

で、落第していた彼女が、急遽空いた穴を埋めるように命じられた。

このまま行けば逃げられたのに、と移動中項垂れる。

候補生の中では悪名が轟いていた。あだ名が『命知らずの女子高生』。

後に知ったが、上官に飽きたらず、妖精さんには悪態をつく、勉強こそするが、試験は不真面目。

説教されようが、独房に放り込まれようが改心せず、という徹頭徹尾の態度が一部には受けていた。

なので、一部の友人ができた。上官の悪口で仲良くなった、悪友的な人間が居たのが幸いだった。

彼らも提督になつたらしい。ドンマイ、と本音を知る彼らには慰められた。

「はあ、不幸……」

連れていかれたのは、大きな新品の建物。

鎮守府と書かれた、軍属の設備だった。

常駐する憲兵に挨拶。悪名高い候補生が新人として配属されたと聞いて、嫌そうな顔ををした。

(嫌なのは此方だつて言うんですよ)

仕方なく来ている。こんな場所居たいとすら思わない。

化け物の指揮をするなんて考えただけでゾツとする。

艦娘というものを知らない一般人ゆえ、どんな色物が出てくるのか想像できなかつた。

言われた通り、道中知らされた道順を進む。

広い建物のなかは後で艦娘が配備されるらしい。

人間は憲兵除いて自分一人。普通が恋しい、閉鎖空間。

なんか、初期艦娘がどうかいって選べと言われて、あまつた奴でいいといった覚えがある。

どんな怪物が出てくるのかと思ひながら、ソイツは既にいると聞いていた。

基本的な知識は一応ある。あとはまあ、何とかする。もうここまでできたら仕方ない。嫌々、執務室と書かれたプレートを下げられた部屋に入る。

……すると。

「……へっ?」

「はわっ!?!」

「……えっ?」

……見慣れない女の子三人が、なんか着替えていた。

彼女を見て、着替えたまま停止した。

七海は目を細めた。誰だこいつら? 初期艦は一人じゃないのか?

まさかの着替え中に鉢合わせ。

そんな感じで彼女たち、五月雨、電、吹雪との出会いは、割と最悪だった。……。

着任

……状況を整理しよう。

先ず、室内で着替えをしているのは大体同い年に見える少女三人。

一人は呆然と七海を見ている。上半身の服を脱ぎ出す直前の状態で止まっていた。

綺麗な水色と空色の長い髪の毛を下ろしている幼い少女。

顔は驚愕のまま。

一人はスカートをはこうとしてストップ。同じく呆然としている。

茶髪で、後ろで髪の毛を束ねている小柄な少女。

一人は黒髪、地味な顔立ちに髪は一本結びで、制服らしき服を支度している状態だった。

今は私服なのか、ジャージを着ていた。目が点になっている。

(……話と違いますね。初期艦は一人と伺ってましたが?)

七海は気にせず、そのまま室内に入った。女同士だ。悲鳴をあげる事もなからう。無視して歩き、机に書類をぶちまけて、渡された中身に目を通す。

執務室の机は妙にでかい。小柄な七海には使いにくい大きさだった。

室内は来客用の机と椅子、秘書が使うと言うらしい机と椅子が設置されていた。

植木や本棚など最低限の家具と、提督机には大きなパソコンが置いてあった。

三人はマイペースに仕事を始める七海に啞然としていたが、聽て相手が全く眼中にならないのに気付き、そそくさと物陰で着替えてから、慌てて七海の前に来て、敬礼した。

「あ、あの!! 本日より着任するという司令官でしょうか!」

「一応、そういうことになってますね。然し、軍属で無ければここには立ち入りできません。当たり前のことを見聞かないように」

誰が喋ったのか見えていない。この場所でやることに目を通してあるので、向こうを見ていない。

書類を見ている少女に、言い出した彼女が言葉を失った。

見た目は子供なのに、随分と淡泊と言うか……淡々としていて、しかも聞いていたイメーজとはだいぶ違った。

ただ、物言いはかなり辛辣と言うか、キツイ言い方をしようだった。

「あ、あの……自己紹介、した方が宜しいでしょうか、司令官……？」

怖々と空色の髪の毛の少女が様子を窺うように聞いた。

七海はそこで漸く顔をあげて、頭に被った白い帽子を机に投げ捨てた。

「……司令官って呼び方は止めてください。正直、あたしやりたくてやっている訳じゃないので。話は聞いていますよね？ 本来、ここに着任するはずだった提督は交通事故

で亡くなりました。ですので、代わりにあたしが呼ばれた次第です。で、自己紹介？

渋谷七海、以後宜しく」

淡々と経緯と名乗りをしてから、再び書類に目を通す。

新しく作られた場所ゆえ、マニュアルも何も他から受け取った物に目を通さないといけない。

分厚い百科事典のような分厚さの書類を次々と頭に叩き込む。

必要な部分を要点を纏めて、余計な部分は後で派遣される上の人の管轄の艦娘とやらに聞こう。

自己紹介の部分を自分だと思っている七海は相手の名前すら聞く態度を取らない。

対処に困る三人に、彼女は数分後、顔をあげ漸く聞いた。

「で、初期艦とか言うのは誰です？ 一名と聞いたのですが、余計なおマケが二人いますね。先ず本来の初期艦、名乗りなさい。次、余計な二名。何故この……ええと、鎮守府

? にいるのか説明。はい、早く」

順序よく言えと言うので、先ず本来の初期艦……五月雨が、改めて敬礼して名乗る。

「は、はい! わたしは……」

「ああ、余計な部分は要りません。大体知っているので、名前だけ名乗ればよろしい。顔は知りませんから」

名乗ろうとして、お決まりの長い自己紹介は省けと言われて、五月雨は困惑した。

単純に名乗れと言われ、少し考えて、答えを出した。

「ええと、初期艦の五月雨です! 宜しくお願いいたします!」

「はい、よろしく。で、じゃあそのオマケ。名乗りなさい」

五月雨と聞いて、白露型の駆逐艦だと思いつ出した。

確かそんなのが勉強しているときに書いてあつたはずだ。

「い、電です……」

「吹雪です」

萎縮する電、真面目に答える吹雪。

その二名に、何故ここにいるか聞くと。

何やら言いにくそうに、二人して黙った。

……大体察した。そういうことのようにだ。

「怒りません、正直に言いなさい。吹雪、理由は？」

「……代理で来る方は、候補生時代に独房に何度も放り込まれた稀に見る問題を抱える人物だと言われ、五月雨だけでは非常時に足りないということで、急遽新造された私達二名も配属された次第です」

案の定の理由だった。七海のあまりの態度に上が懸念して予定よりも多く、艦娘を寄越していた。

七海は頷いて、更に問う。

「成る程。初期艦で新造されたのはあなたたち二名だけですか？」

「いいえ。他にも二名いますが、そのどちらも相性の面で非常に悪いと判断され、外されました」

「分かりました。ありがとうございます、吹雪」

礼を言つて、黙る。電はずつとビクビク怯えていた。

吹雪は物怖じしないようだ。五月雨ですら、若干腰が引けているのに。

「何か聞きたいことありますか？　ながら作業で良いなら、答えますが」

再び書類とにらめっこする七海に、五月雨が聞いた。何と呼べばいいのか。

七海は適当でいいと言った。

「仕事の時は、司令官と呼んでも構いません。然し、それ以外でしたら……名字で。渋谷

と呼んでください」

公私混同は避けたいので、仕事は我慢すると譲歩して、三人に言った。今は司令官でも何でもいいと。それらしい呼び方ならば。

「……司令官さんは、どうして独房に入れられていたんですか？」
気になるのか、電が大胆にも聞いてきた。

二人が流石に不味いと止めるが、見ていない彼女は気にせず答えた。

「別に。提督という仕事をしたくなくて、反抗していただけです。候補生の時のあたしの言動の詳細は、聞いてないんですか？」

三人は知らないと言っていた。

問題のある言動があるとしか聞いてないと。

「随分と適当ですね海軍は……。着任する人間の経歴ぐらい、現場に伝えておけつて言うのに……。ま、良いでしょう。安心してください。暴力沙汰などは起こしていません。ただ、あの珍獣に対する言動の問題が酷かったのと、やる気が乏しかったのと反抗的だった、というだけです」

「珍獣……？」

聞き慣れない単語に五月雨が反応して、妖精さんとかいうと言い直すと三人はドン引きした。

まさか、妖精さんを珍獣と面面向かって言ったというこの少女。

余程提督になりたくなかったようだと分かった。

「顔知らないのもそれが理由です。あたし、顔合わせの時に独房に放り込まれて、説教されてましたので。ま、名前と艦の種類ぐらひは全部覚えてありますので、どうにかなるでしょう」

酷い経歴もいたもんだ。独房に放り込まれていた期間は、一ヶ月の間の約三割。

大体週一以上放り込まれていた計算になる。凄まじいやる気のなさと、言動の悪さ。

……不安になってくる三人は、心配して聞く。

人類、守る気あるかと。

「無いです。もう足掻くだけ無駄だと思つて渋々しているだけです。仕事と割り切つているので、熱意も情熱も使命も夢もありません。金がもらえるお仕事でやっているだけ。矜持なんてありやしませんよ。一ヶ月前まで、ただの高校生だったんですよ？ 突然やれつて言われてはいそうですか、で頑張るわけないでしょ」

すっぱり言い切つた。やる気ゼロ、使命感ゼロ、救いがたい提督が来てしまった。

勝手な理屈で語る彼女は、やはり子供だったらしく、現在十六歳だと説明した。

「……司令官、貴方つて人は……」

吹雪も流石に呆れて何も言えない。

やりたくない理由は言わないが、然し本当に酷すぎる。

強制だと言われていたらしいし、同情の余地がない訳じゃない。

だが、目に余るこの態度に、苦言を呈する。

「本当に指揮出来るんですか……？」

「さあ？　ぶっちゃけ、練習もやってませんし。筆記も落書きと寝てばかりでしたし。殆ど独学ですよ。普通に無理だと思えます。大体艦娘なんて化け物を指揮しろと言われて喜ぶような人間じゃないですよあたしは」

極めつけは、艦娘を目の前にして平然と化け物呼びしていること。

一般人だったと聞けば、確かに民間には艦娘の詳細は明らかにされていない。

実物を見ておいて、なのに彼女は化け物と特に悪意もなく呼ぶのだ。

悪意はないのは、見れば分かる。

彼女は軽蔑の意思がないだろう、自然体で喋っている。

逆にそれが、五月雨や電の胸を抉る。悪意なき中傷の言葉。

「司令官、お言葉ですが……私達は化け物じゃありません」

吹雪が我慢ならず、震える声で言い返した。

不思議そうに、七海は再び顔をあげた。

怒りを浮かべる吹雪を見て、訝しげに表情を変えた。

「私達は、艦娘という生きている命です。訂正願えませんか？」

変えてほしい。吹雪は初対面でこんな侮蔑を受けたのは、我慢できない。

いいや。その意思すらないなら、これは区別か。

人間と化け物、というように彼女は区別している。

自分とは、明確に違う存在。違う命。理解できない命と。

「……はい？ 何を言うんですか？ 化け物は化け物でしょう？ 人造人間なら、化け

物と言う以外に何があります？」

ダメだった。まるで意図を理解してくれない。

彼女は、首を傾げて吹雪に聞くのだ。

「生きているなら皆同じだとしても？ 吹雪、貴方こそ自覚してください。艦娘というの

は、上官殿いわく、量産品だそうです。分かりやすく言うなら、自動車です。世のなか、

沢山自動車がありますが、同じ種類は全部同じでしょう？ 外見も、性能も。艦娘はそ

れと同じ。外見も、性能も全て変わらない」

「……私達には、意志も感情もありますッ!! 機械みたいに言わないでくださいッ!!」

とうとう、吹雪は怒鳴った。我慢の限界。

彼女は、多くの人間と同じく、道具や化け物としてしか艦娘を見ていなかった。

候補生のときに刷り込まれた認識が、自覚なしに艦娘を区別している。

違う。艦娘は、生きている。感情もある、意志もある、心もある。人間とは言わない。けれど、せめて。せめて、艦娘という存在として、見てほしかった。

けれど、唾然としている七海の表情は物語る。理解できない、と。

何と言う罵倒。何と言う蔑み。自然で言っているなら、尚更許せない。

机を叩いて怒鳴る。二人が止めるが、吹雪は言った。

「何なんですか、私達を化け物といたり、量産品と言ったり!! 司令官は、私達をそういう意味でしか、見れないって言いたいんですか!」

「それ以外何があるのですか? 化け物を化け物とって、問題でも?」

……断言した。七海は、言い切った。

素面で言われて一気に失速する吹雪に、元々艦娘を知らない彼女は率直に言った。

「……聞けば、艦娘というのは、燃料、鋼材、弾薬、ボーキサイト。これに珍獣の技術で組上がったと聞きます。この何処に、命と言える部分があります? ……いいえ、ありません。化け物扱いでも温情があると思ってください。他の方々は、道具や兵器として扱っているんです。生きているだけマシでしょう」

容赦のない言葉だった。生きているだけマシ。

機械以下と呼ばれることすらある艦娘を、化け物と言うだけ、生きているだけまだ温

情があると。

「……甘いんですよ。艦娘という命？ 誰が認めたんですかそんなもの。人間とは言いませんが結局、周りから人間扱いされてません。候補生のときにも教わりました。艦娘には余計な感情移入は控えろと。ですので、あたしも控えます。道具とまでは言いません。兵器とまでは言いません。生きているなら、化け物です。化け物で十分でしょう？」

……この人は、艦娘のことを認める気はない。ハッキリ、そう分かった。

化け物と言う扱い。確かに、無機物より多少はいい。けれど、対等とは言わない。

嗚呼、七海は染まっている。海軍に、多くの民衆に。

艦娘は化け物。道具、兵器。多くの人々と同じ。

吹雪は言葉を失った。もういい。言うだけ無駄だ。

彼女もやつぱり、ただの人間。そう、失望した。それだけ。

黙ってそれ以降は、しゃべらない。凍りついた空気のまま、平然と七海は着任した。
彼女が言う、化け物の巣窟に……。

妖精嫌いの初建造

さて、と七海はパソコンを起動する。

情報処理はあまり得意ではないが、艦隊指揮には必要なスキルと、終わり間際に叩き込まされた。

幸い、学校で多少習っていたので、何とかなったがこれからは書類とこれと、二重にするらしい。

まだ上層部……大本営とか言うらしい本部から、手伝いに来る艦娘はいない。着任が急だったのだ、明日になると聞かされていた。

この場所、鎮守府では彼女が細かい事までやらないといけない。

私物を与えられた私室に入れようと思ったが、そもそも今ここにいるのは仕事を担う珍獣と、この三人と彼女だけ。

……人数が少なすぎて、できる事は明日以降になりそうだった。
が。

七海は出来ることは早く終わらせてぶつちやけ寝たい。提督の仕事はしたくないし。
自分の範囲を勝手に判断、勝手に命じて開始する。

「吹雪。不貞腐れるのは構いませんが、仕事はしなさい。公私混同をすると、許しません
よ」

「……はい」

不本意な彼女がやっているのに、失望している吹雪がサボるわけにもいかない。

電と五月雨にも言った。役目は全うしろと。それが第一である。

「先ず、ここの鎮守府の担当する海域ですが。幸い、あまり広くはありません。立地上、
大きな鎮守府の間にある空白を埋めるべく新設された場所ですので。ざっと調べた限
りでは、強力な深海棲艦は確認されていません」

パソコン画面を三人に見せて、てきぱきと七海は語る。

ある程度の下調べはしておいてある。あとは手伝いと戦力さえあれば、何とかやって
いけそう。

三人はうってかわって、真剣に示される海図を見ていた。

「更に、大本営……でしたか。あそこから、戦力の上限を言い渡されています。艦隊は二

つまで。更に大型艦の所属は禁止。小規模の艦で運営せよ、との事です」

「……提督。大型艦とは？」

曖昧な言い方に、五月雨に問われて七海は説明する。

「戦艦、及び正規空母の事らしいです。ギリギリ航空戦艦ならば二名まで。軽空母は構わないとの事です」

「……そんな」

五月雨が青ざめた。

聞けば、艦隊主力になると言う強い艦娘を制限されている状態と言われた。

だが、周囲は大規模な鎮守府の担当海域。別に空白の海域ならば、必要はないと七海は指摘する。

「五月雨。……いいですか？ 今のご時世、艦娘は知らないと思いますけど、世間は税金の無駄遣いを止めると、軍縮の風潮が強いですよ。無駄なことをしていないで、もっと効率よく軍を運営しろと、血税を無駄にするなど民衆は毎度叫んでいます。外にでない、新造された三人は知らないと思いますけどね」

民間上がりらしい視点で、三人にそう言うのだ。

戦いは金がかかる。金を出すのは国民。国民が言うなら従わないと潰される。

そういう物なのだ。

「……世知辛い世の中ですね」

「いいえ。必要なことです。鎮守府に入っても、あたしはこれでいいと思います。無駄な戦力を維持するコストだってバカになりません。知ってますか吹雪。戦艦ひとつ動かすのに、あなたが何回出撃できるか。三回から四回は出られるんですよ。同じ資材で戦うなら、強い敵がいけない以上、コストの安い方がいい。更に節約のために、融通の聞く集団の方が効率もいい。航空戦艦が許される理由は、艦載機を他の航空巡洋艦などの艦娘と共有できるからです。戦艦は主砲などが融通できないと聞きますし。一つ直すのにも膨大な資材を使いますので、これでいいんです」

洩る吹雪に対して、国民視点の七海は金と資材を無駄には使えないと言った。

戦艦は必要ない。だって、そんなに強い敵はここにはいないから。

だから、軽空母は許される。人数に制限こそあれ。

「軽空母は三人まで。重巡は四名、軽巡は三名。助かるのは、駆逐艦や潜水艦に制限はないことですかね。ただ、最大人数の限りはありますので、慎重に建造しないといけないのですが」

七海なりに、仕事ならば妥協せずにやる。やりたくないが、金をもらう以上真剣に取り組む。

そこまで腐ってる訳ではない。子供でも役目は果たすと決めている。

資材に関しても、最初に用意された物を使って戦う。

「毎週陸路で支給はされます。ですが、戦闘などで消耗した場合は連絡せねばなりません。更に、海底資源の回収にも、人数が要ります。特に燃料は、近海に、設備があるので、そこに遠征に行っていたできます。あとは、深海棲艦に狙われないようにするぐらいですか。大きな孤島なので心配はないと言いますけど……」

燃料だけは、近海の資源を使えば何とかなる。ここは本当に助かった。

一番共通で消費する燃料に関しては心配はない。問題は……。

「この辺に、空母が目撃されるんですよ……。で、それから守るのに使う戦闘機とかを作りたいたのですが、艦載機の材料はボーキサイト。それ、稀少なんですよ。今はほら、駆逐艦しかいないのでいいんですけど……偵察機や艦載機つて、全部ボーキサイト使うんで、ないと困ると言うか」

一番使うのは空母だが、一部では重巡、軽巡の偵察機にも使う。

なので、今のうちに貯めておきたい。

「……なら、それでいいと思うのですが？」

電に言われて、然し七海はぼやく。

「問題は、ボーキサイトつて、電探開発にも大量に使うんですよ。一回開発するのに200以上。これ、艦載機よりも多いんですよ消費。電探はみんな使うので、更に困ります。

……一応、当てはあるんですが」

開発にこんなに使おうと、直ぐに枯渇する。

流石に困るので、例の知り合いの彼らにもしも電探余ったらくれとお願ひしてある。理解していない彼らは、別に構わないといつてくれたので、多分そのうち来ると思う。着任する前から、色々と考えていたが、一番貧乏なのはここなのだ。

他は中規模、大規模な鎮守府に着任しているので余裕はある。

それが現在の懸念の一つ。余ったものは何でももらう。そういう風にしていくつもりだった。

「……やる気ないのに、考えているんですね」

「喧しいです。何だかんだ、仕事は仕事。あたしとて、公私混同する気はないですよ」

吹雪が意外そうに言うので、睨み付ける。

慌てて吹雪は謝った。失言だと言うが、事実なので否定はしない。

「さて。とまあ、三人に言うのはこんなものですね。任務や海上訓練、警備に関してはまた後日。警備は隣の鎮守府の方々が出張してくださるので暫くは大丈夫です。こちらの戦力が整うまではご好意に甘えましょう」

最低限、入力するものは喋りながら入れておいた。

あとは後回しでも問題はない。挨拶などどうでもいい。どうせ珍獣しかいない。

のち、間宮や伊良湖、補助をする大淀や明石なども到着予定。

なので、彼女らとも協力して鎮守府運営に力を入れていこうと思う。

取りあえずは、だ。

「資材の計算は終わりました。今のうちに頭数を揃えましょうか」

立ち上がって、工廠に向かう。三人が案内するまでもない。

地図は頭に入れてある。着任後すぐに、我が物顔で七海は移動を開始した。

工廠。艦娘や艀装という武器を開発する一種の工場。

整備や廃棄なども担当すると聞いたが、高い天井に、広い空間。

無機質な床や壁、よくわからない小さな機械が犇めきあう。

まるでごちやごちやのガレージのような場所だった。

「ゲッ……おめえ、例の提督さんかい？」

そこで作業していた、小人が七海に気付いて嫌そうに顔をあげた。

工廠担当の妖精さん。髭面つなぎのおっさんである。

油で汚れたおっさんに七海は言った。

「おや、髭の珍獣がいるんですか？」

案の定口の悪い彼女に、おっさんは呆れていた。

ため息をついて、慌てて黙らせようとする三人にも言った。

「……話に聞いてた通り、慇懃無礼だなおい。誰のお陰で戦えると思ってんだおめえは」

おっさんは小さく腰を下ろしてタバコを吸い始めた。妖精さんも喫煙するようだ。

七海は禁煙だと怒ってから言い返す。

「偉そうに雇い主に向かつてほざかないで欲しいですね。支払うものを受け取っているなら仕事しなさい珍獣。お前の意見は聞いてません。注文受けて作ればいいんです。

賃金は出ているんですよ。なら、文句いう前に博打のような真似をまず止めてから言うんですね」

「ケツ……素人って聞いてたが、嫌な部分だけ知ってやがるか嬢ちゃん」

おっさんは見上げて吐き捨てる。七海は腕を組んで、逆に見下げる。

「ええ、知ってますよ。何で毎回、設計図まで準備しているのにお前らは失敗するんですか。その通りに作ればミスなんてしないでしょように。人間舐め腐ると、佃煮にしますよ」

「言ってるガキが。人間の用意しているもんで、俺達の技術が再現できる訳ねえだろ。

文句があるなら賃金あげろってんだボケ」

「ハッ、あげる前にマシなもん作ってから宣いなさいな。適当に作ってペンギン量産する職人擬きがよく言う」

「……しばくぞ、おめえ」

「その前に溶鉱炉に放り込んでやりますがね身の程知らずが」

罵りあっている二人。なんでこんなに初対面で仲が悪いのか。

七海はおっさんに向かって、罵倒に近い事を言っていた。

理由は簡単だった。

「こいつら、基本的に注文した艀装を作りません。適当にやって、失敗したり成功したりを繰り返すんだそうです。教わった通りですね。雇われの分際で、わざわざこつちに設計図まで用意させているのに失敗しているんですよ。これのせいでどれだけ資材が、血税が消えていつているか分かったものじゃない。全国にいる工廠の珍獣は、余程余裕があるんでしょうね？ 何せ、酷いときは無断で資材を使っているとも聞きますが？」

工廠の妖精は、艀装を開発したり艦娘を建造したりをする役目を持つ。

だが、基本的博打のような真似をしてばかりで、マトモに仕事をしない。

聞けばやれ作れないだの、失敗しただとの言い訳ばかり。

あげくに、一部では好き勝手やって、税金を浪費している連中までいる始末。

七海は呆れてものも言えない。

「言うじゃねえか。俺達の技術ってのはな、俺達ですらうまくいかねえって、何時もいつてんのに人間は聞かねえ。言えは作れると思うなよ。俺達だつて注文通りにやりてえよ。だがな、実際は気紛れなんだよ、主に機械が。人間の設計図は途中で過程がすつ飛んでるんだ。無茶言うなよな、つたくよお」

おっさんはプライドを持ってやっているの、その苦言は心外だと言い返した。

人間の設計図は半端らしく、やつても上手くないと言っているのに聞いてくれな
い。

少なくともおっさんは、真面目にやっていると嘆いていた。

「……つて言うか、他の珍獣は何処ですか？ お一人じゃあるまいに」

「おめえが怖くて隠れてんだよ。佃煮にされて、食われると思つてやがる。誰のせいだよ」

工場には沢山妖精がいるはずだが、今はおっさんしかいない。

工場が一番偉い妖精らしく、彼女が怖いと言つて隠れてしまったようだ。

すると。

「電、吹雪、五月雨。……全員見つけてここに連れてきなさい」

キレた。七海が、不愉快を表すように厳しい表情で命じた。

命令されて、渋々言われて三人は数分かけて、隠れていた妖精さんを全員発見して連れ出した。

ビクビクしている彼らの前で、仁王立ちしている七海は、冷酷に告げた。

「役目を果たさない珍獣はご所望通り佃煮にされたいらしいですね。こんな沢山居るなんて、今晚のおかずは困りそうにないのが嬉しい限りです」

怒っている彼女に対して、怖がって絶叫する妖精たち。

おっさんは思わず口をはさんだ。

「おいおい、マジで食うつもりか嬢ちゃん!? どの昆虫と一緒にだと思ってやがる!」

「場合によっては、佃煮ではなく、釜茹でにしようかと思えます。……それが嫌なら仕事しなさい。あたしは、仕事をしない奴を鎮守府に置くような慈悲深い提督じゃありません。穀潰しは即刻、出て行って頂きます」

仲良くする気はないし、ストライキを起こす前に全員追い出すと言い切った。

自分の言動のせいだろ、おっさんは言うが。

七海は言い分を聞く気はなかった。キレ気味に口早く喋った。

「でしょうね。あたしはそもそも、珍獣のせいで色々と台無しにされました。逆恨みも甚だしいでしょうが、あたしは生憎と聖人じゃない。感情を我慢できません。妖精というそのものが、どうやら大嫌いなようです。見てわかりました。ええ、全く持って不愉快

快でしかない。こんな珍獣が見えるばかりに、提督なんてものにされた。ああ、苛つきますね本当に。八つ当たりで結構。憎しみしか浮かびませんから。んで、八つ当たりも事実です。だから何ですか。せめて仕事はしなさい。じやないと本気で、地獄を見せますよ。全員いるなら、用事を済ませます。今回は建造。指定する数値の資材を入れなさい。人数は口頭で言います。文句があるなら、溶鉱炉に投げ込まれる覚悟で言いなさい。これ以上、あたしを怒らせないで」

ああ、ダメだった。

妖精見ているとイライラする。

こんなのがいるから、人生台無しにされたのだ。

憎くて仕方がない。申し訳ないとは思いますが、我慢もできなさそうだ。

邪魔すると多分、本当に殺すと思う。三人が懸命に説得というか、宥めていた。

彼女は様変わりしている。様子がおかしい。妖精に対してあまりにも感情的になっていた。

三人はどうやら妖精が原因と見る。兎に角、止めさせる。

阿鼻叫喚となった彼らは死にたくないで直ぐ様仕事を始めた。

きつちり、素人の割には数値を知っていた。

言われたものを入れて、あとは時間が終わるまで待機している。

結果は分からないらしいが、工廠にいても意味はない。

彼女を連れて、三人は去っていった。

最後には掴みかかろうとしていた七海。

相当恨んでいるんだろう。妖精たちは戦慄しながら、行く先に不安を感じていた
……。

建造結果。

空母は三名建造。祥鳳、瑞鳳、飛鷹の三名。

重巡、二名建造。古鷹、衣笠の二名。

軽巡、三名造。川内、五十鈴、由良の三名。

潜水艦、二名建造。伊168、伊19の二名。

駆逐艦、五名建造。睦月、如月、暁、響、雷の五名。

……以上。

最悪な関係

……先ずは、渋谷七海という少女の成り立ちを説明しよう。

現役高校生。年は十六歳。性別女性。

学校での成績は、主に文系を得意として、語学などにも興味を示す。

反面、運動や情報処理などは苦手とする。

物覚えは良く、率先して学習もする勤勉さもあるが、基本的に興味のあることしか学ばない。

趣味は読書やマイペースでの作業。嫌なのは騒がしい環境と無遠慮な人間。

性格は極めて悪質。他者に対しての配慮が欠けており、人格的に問題がある利己主義。

理屈で相手を攻撃する、欠点を容赦なく責め立てる、人間の好き嫌いが激しいなどおおよそ、誰かの上に立てる器ではない。

損得勘定で動くため、害になる物や事はまず行わない。

提督の仕事に関しても害になるのでやりたくないが、結局抵抗も無意味と理解し渋々従っている。

利己的、損得勘定故の理屈を基盤とする判断により、無駄と知れば受け入れるぐらいの器量はある。

受け入れてしまえば嫌々でも、任された以上は要求には従うものの、逆を言えば必要以外じゃなにもしない。

更には害をなす人間には徹底的に反抗するなど、幼さも相応に残っていた。

という、どう足掻いてもこんな仕事には向いていない。

が、法律で決められた以上はこなすしかないのだ。

ため息をついて、日々を過ごしていく。

そんなやる気のない少女と、艦娘たちの、物語が幕を上げる……。

複数の艦娘を建造してからというもの、喧嘩が絶えなくなつた。

騒がしい鎮守府での日々に、七海は苛立ちが積もっていく。

彼女が着任して二週間経過した。

一人っ子で、姉妹や兄弟がない彼女は、余計な世話というものを極度に嫌う。

自分の事は自分でやる。なのに、お節介を焼いてくる艦娘がいて、とうとうキレた。

「いい加減にして、雷ッ!!」

とうとう、執務室に呼び出して、キョトンとする幼い駆逐艦を相手に怒鳴った。

電に似た顔立ち、しかし茶髪のショートカットの彼女、雷は首を傾げた。

何を怒っているのか理解してない様子で、更に七海をイラつかせる。

「毎日毎日、なんであたしに必要以上に構ってくるんですか!? 止めろと言ったでしょ

う、聞いてないんですか!？」

仕事はしている。役目は果たしているのに、雷は距離を無視して世話を焼こうとす

る。

仕事ではちゃんと接しているが、こいつの場合はプライベートでもお節介に寄って

る。

それが、七海には我慢ならない。

「だって……司令官はマトモに勉強してないんでしょ? だったら雷が教えてあげよう

と……」

「五月蠅いッ!! イチイチ言い訳しないと話を聞けないんですかッ!! なんで叱られて
いるのに真っ先に謝罪が出てこないのか、あたしには理解出来ない!!」

パンツ、と机を叩いて威嚇する。漸く本気で嫌がつっていると理解して、青くなる雷。
キレている七海は、言葉など選ばないでそのまま剥き出しにしてぶつける。

他者に対しての配慮の欠如。七海のコミュニケーション能力の低さが出ていた。

客観的に見れば、雷が全面的に悪い。七海は大体自分でやっていた。

再三必要ないと根気よく言っていたのに、雷は全部無視して世話を焼いた。

だから、我慢の限界で七海は怒った。話を聞かない、相手を見ない、全部雷の落ち度。

「鬱陶しいんですよ、一方的に付きまとって!! 何度必要ないとあたしはあなたに言え
ばいいのッ!? ストーカーですか!? それとも言葉が通じないのか、理解する気はない
のか、どっち!」

「ご、ごめんなさい司令官……」

「仕事以外で司令官と呼ぶなと言ったでしょッ!! ふざけるのも大概にしてッ!!」

怯えて謝る雷に、もう一度机を叩いて怒鳴り散らす。

怒るときは、キレル具合によって怒り方が違う。

ヒステリックに怒鳴るときは、溜め込んでいた鬱憤を爆発させているときだ。

要は、一番長引いて一番過激でキツイ、説教を通り越して単純に激怒している場合で

ある。

あまりの剣幕に、外で心配し盗み聞きしている姉妹たちが慌てている。

「だ、だから渋谷さんを怒らせるなど言つたのです……。あの人は基本的に怖い人なのに……」

電が姉達にそう、毎回いつていた。涙目で小声で言っている。

長女は因みに次に呼ばれている。同じく説教だろう。彼女も七海と揉めていた。

雷のほうがダメメーシが大きいので、七海は優先して怒鳴っているだけ。

で、今日は日曜日。別室で大本営から派遣されている大淀が代わりに代理をしている。

執務室は、現在提督が普段から目に余る艦娘を呼び出してキレるという日程になっている。

なので、気を利かせて大淀が場所を変えてくれたのだ。

七海は大淀や工廠の明石、食堂の間宮とは非常に良好な関係を築いている。理由として、彼女たちは公私をしっかりと弁えて、互いの立場を崩さない。

七海は素直に礼を述べて学習し、大淀は物覚えのよい彼女への評価が高い。

明石には、自分から差し入れを入れるほど感謝をしており、明石も労いをしてくれるよい人と言っている。

問宮には、いつも献立や食材の仕入れなどで苦勞を掛けていると、何度も頭を下げていた。

問宮も、丁寧な対応をして、感謝を忘れない見たことのないくらい、礼儀のある人と述べた。

逆に、立場がこちらの艦娘との場合には、最悪な間柄になっていた。

特に駆逐艦は大半が仲が悪い。七海が嫌がつている。

潜水艦も似たようなものだ。というか、もつと悪い。

既に一名、ぶちつとキレた七海に憲兵を呼ばれて、牢屋にぶちこまれた。

仕事を邪魔して、艦隊任務を妨害したとして、理屈も通り軍規も違反しているとして、しよつびかれていた。

憲兵は辟易した顔だった。融通が利かなすぎると、あとで艦娘たちに言っていた。

理屈を優先しすぎて、多少の茶目つ気すら許さない七海。

艦娘たちの評価は、概ね最悪。

駆逐艦の一人は、

「艦娘を化け物扱いする、最低の司令官です」

と嫌悪感丸出しで説明し。

空母の一人は、

「……何だろう。自分を見ている気分になるわ。神経質なのは分かるけど、限度を通り越してる気もする」

と七海の境遇に理解を示す一方で極端すぎると苦言を漏らした。

潜水艦の一人は、

「ち、近寄るのも怖すぎて嫌なのね……」

と、自分の原因を棚にあげて怖がっていた。

重巡の一人は、

「とても厳しいけれど、懸命にやろうとしていると思うから、わたしは怖くないよ」

と光る瞳を細めて天使のように言った。

軽巡の一人は、

「ワガママな子供じゃあるまいに、世話が焼けるのはどっちよ、もう。五十鈴達がしつかり面倒見ないとあれは問題起こすわ、近いうちに絶対にね」

と、一番激しく対立している彼女は呆れていた。

どうやら七海は、干渉をしてくる艦娘を嫌がる傾向があるようだ、一人は分析する。

何せ、彼女は例外とも言える存在で、少なくとも教え子と教師のような立場をプライ

ベートでも保っている。

他にも、仲良しとは言えなくてもぼちぼちの仲は、数名いる。

具体的に名前をあげるなら、イムヤ、響、古鷹、飛鷹。

この四名は、七海は受け入れの姿勢を見せている。

イムヤは真面目で、言うことをちゃんと学習して、意見をいう前には確認をとる。

響は冷静で、客観的に物事を判断できるので、一番今は良好と言える。

古鷹は控えめで、彼女の意見を汲み取って動くので、寧ろ感謝している節がある。

飛鷹は似た者同士なのか、互いに刺激するのを避けている。

いわく、神経質なのは同じなので、言葉を選んでいとのこと。

七海は飛鷹には、一番の航空戦力として頼っている部分も見られる。

なので、珍しく対応を柔らかくしようと努めているようだった。

対して、七海の対応が険悪な相手。

五十鈴、雷、五月雨、電、暁、睦月、如月、イク、祥鳳、瑞鳳、川内を嫌がっていた。

衣笠はちゃんと空気を読むので普通、由良は話し相手になる程には加減されていた。

吹雪は向こうがまず毛嫌いしているので、論外。七海は何とも思っていないと見る。

要するに大半だ。詳しい原因を、傍から見ているので分析する響は考える。

まず五十鈴。彼女は態度が強気で、七海の神経を逆撫でする。

毎度口喧嘩になる一番の相手だ。取っ組み合いも何度もしている。

やれ、妖精さんに対する言動を改めろだの、もつと皆と向き合えと彼女もキツイ言葉

で言う。

で、七海はそれに反発して怒る。

喧しい、余計なお世話だ。

ネギ振り回して歌つてろ歌姫と罵ったときは酷かった。

「五十鈴の一番気になっていることを言つたわね!」

「だからなんですか!! さきに言つたのはそちらでしようトラック艦娘!」

「あつたまきた!! 連続でいうに事欠いてトラックですつて!? もう許せない!!」

「上等ですよネギトラック! ブツ飛ばしてやるから表に出なさいツ!!」

で、互いにキレてキヤットフアイト開始。

廊下で大喧嘩して、憲兵さんに大目玉食らつていた。

互いに仲良く牢屋に一日反省として放り込まれて、そこでも戦つていたらしい。

懲りない連中である。

次、雷。……まあ、今丁度怒鳴られている理由が一番だ。

なので割愛。五月雨の場合。

彼女は天性のドジが目立ち、七海の頭に熱湯で入れたお茶をぶっかけた。

悲鳴をあげて走り回り、顔や頭に火傷をしたのを皮切りに、書類は破くわ、備品壊す

わ、任務ミスるわ、自分怪我するわで七海の逆鱗に触れてしまった。

既に永久に秘書をするなど命令されていた。

やる気はあっても空回りです。二次被害を出すのでなるべく近寄るなどさえ言われていたのか。

仮にも初期艦。なのにこの扱いは、理屈というなら妥当だろう。実際五月雨は下らないミスが目立つ。

誰かと一緒にやれと言われても仕方ない。本人は悄気ていたが。

次、暁。これは暁が全面的に悪い。

子供扱いするなど自分でいって、字面通りに一人前として与えられた仕事を出来ずに終えて、翌日彼女が被害を被った。

失望された。口先だけの見栄ばかりと言われて、暁は泣き出したぐらいだ。

「自分で言っておいてこの体たらく……。バカにしてるんですかあたしを。一人前以前に、あなたは艦娘として半人前。子供以下ですよ、この見栄っ張り」

軽蔑している様に睨まれ断言されて、二度と仕事は任せないと言われている。仕方ないと言いは思う。

姉はそういう人物だ。背伸びしていい相手じゃないと分からなかった姉の落ち度。

次。睦月と如月。根本的相性の悪さ。

常時ふざけている様に聞こえる口調の睦月と、相手を誘惑する様に見える如月。

「礼儀知らず。常識知らず。お話になりませんね。古鷹と由良に振る舞いを教わったらどうですか？」

バツサリと切られて、辛辣に吐き捨てる七海は、二人にも近寄るなど言つた。

鬱陶しい、との事。絶対零度の視線で睨まれて、二人は完全に苦手意識を感じていた。現在、一人で近寄ろうとしなくなっていた。

次、イク。牢屋に一日反省として放り込まれた。

いわく、常識云々以前の話。

二度と相手したくないと七海に言わしめた唯一の存在である。

毛嫌いを通り越して、天敵認定であつた。執務室に一人で立ち入り禁止は伊達じやない。

本人も反省を越えて畏怖として七海を見ていた。

次、祥鳳。最初は痴女扱いであつた。

彼女は片方の肩を脱いでいる格好でいつも戦場を彷徨っている。

一応、弓道の形らしいが、七海は恥じらいを持って怒つた。

「それは男性用の作法でしょうが!! ちゃんと服きて胸当てをつけなさい!!」

七海なりに心配して、怒つたんだろう。祥鳳もその辺は理解しているが、幾分怖いらしい。

あの剣幕で怒ればそうもなる。祥鳳は気が弱いので。

次、瑞鳳。

趣味の話しすぎで七海が文句を言い出していた。

「同じ話を何度すればいいんですか？ 何ですか、新手的嫌がらせですか？ 分かっていますよ、ちゃんと艦載機は準備しますってば……」

七海が嫌がらせと受け取って、逃げています。数少ない七海に対して攻勢に出ている。本人はそんなつもりじゃないと言うが、七海は聞きあきたと言って毎回逃げている。そりゃあ、耳タコで聞かされれば嫌になろうと響も思う。

最後、川内。原因は安眠妨害。

そして、七海が毎晩、独房に確保する不倶戴天。

夜な夜な戦いに出せと騒ぎ出す喧しい艦娘で、七海は初日で独房を準備して貰って、憲兵さんに確保してもらっている。

昼間は常に寝ており、仕事をしない。

で、夜に騒ぐので七海も最早何も言わない聞かない。

言うだけ無駄と悟っていた。

黙って寝る前にぶちこんでから、寝ているらしい。

心労お察しする。確かに我慢できないレベルで喧しい。

(渋谷さんは大変だな……)

何だか、一部は艦娘が原因な気がする。

流石に同情する。気苦労はあるんだろう。

響はそう思いながら、追いつき出されてきた雷を黙って受け入れる。

完全に泣いている。当たり前だ。何日もストレス溜めるからこうなる。

次に暁が呼ばれた。恐々と入室し、閉める。

で、数秒後に怒鳴り声。

今回は暁が留守の時に受けた連絡ミスで何か起きているようだ。懲りない姉である。

電が姉を慰めるなか、幸先不安の響はフォローに入った。

大丈夫だろうかこの鎮守府と、思いながら……。

死なせない決意

所属する艦娘との間柄は最悪である彼女、七海であるが提督としてはどうか。

評価には興味もないし、戦力もある程度揃ったのでそこそそ任務や役割を始めているが。

たまたま、大淀が大本営からの評価を教えにくれた。

聞けば、しっかりやっていいのか監視も含めて定期的に報告しているらしい。

その辺は信用ないので気にしない。が、聞いて驚いた。

「そこそこ良さげな評価です。候補生時代からは信じられないほど真面目に取り組んでいると、皆さん驚いているようですし」

と、笑顔で答える大淀。当たり前前の事を普通にこなして良さげとはこれいかに。

まさかと思つて、同期の知り合いの評価も聞いた。

すると……。

「あー……赤松提督はセクハラで一回捕まっていますね。で、島村提督は轟沈を一名出して、大田原提督は……なんか食中毒で現在入院しているそうです」

（赤松さん何してるんですか……）

思い出すように、大淀は言った。

知り合いの一番悪口で盛り上がった赤松という元会社員はセクハラで一回捕まっていた。

いわく、戦艦に惚れ込んで求婚しているらしく、何故かそれが暴走してセクハラ認定。捕まって一度頭を冷やしているとか。

大淀は、死人を出した提督には厳しい表情で、一応評価はいいと言っていた。但し。

「大本営から、ですけれど」

という、含みを持たせて。

ああ、成る程と思う七海。

大淀は艦娘の視点で、こういう人を許せないんだと。

（……化け物でも生きてますもの。死ぬのは、あたしも嫌だし……皆も、嫌なんですわ……）

生きているのは同じ。ならば死にたくないのも同じ。

理解した。理屈では生きている限り、死にたくないと思うのは当然。

艦娘は提督に命を預けている。だから、預かった以上は、采配ですべてが決まる。決めた。七海は誰も死なせない。死ぬのは嫌だとどうせ言われる。

だから死なせない。自分も、死にたくないから。

大きな違い。島村提督は、艦娘を道具として扱っているとは知らない七海。

候補生時代に刷り込まれる。奴等は道具だ。兵器だ。そう、何度も。

独房にいた彼女はそういう扱いよりも化け物と言う元々の価値観で判断しているだけ。

新人のなかでは、自分で言う通りまだよかった方なのも事実なのだ。

代用できる肉の兵器だと言っているなんて、知り得ない。

けれど、彼女は化け物と他意なく呼んでも、生きているものとして扱う。

生きているのなら、死なせないようにするには、提督の務め。そう、感じた。

死んだら帰ってこれない。死んだら全部が意味がない。

そんなもの、理屈よりも分かりやすい。

だから、もっと要求には応えよう。実際戦うのは彼女たち。

後ろにいる彼女は、皆が死ねば次は自分だ。

自分が死なないようにするには、前衛が死なないようにするべき。

これが彼女の結論。故に、意見を取り入れ勝ち続けよう。死なないために。生きるため。

そうは言うが、意気込みだけでは戦いには勝てない。

「……あたしのミスです。皆さんは一切非などありません。あたしの采配が甘かったです。ですので、ごめんなさい。怖かったですか……？ すみませんでした。責任は、経験として次に活かします」

翌週。彼女はミスを犯した。

訓練をしている艦娘と、任務をこなす艦娘と、警備をこなす艦娘で現在戦う鎮守府。近海に、あまり見かけない戦艦が出てきた。とは言いが、全体から見れば珍しくもない雑魚の戦艦。

この海域ではたまに出るらしいと情報があった。で、対処を誤った。

此方は良くて重巡。囿にするには、戦艦の火力の前には脆すぎる。

しかも警備艦隊で三隻の戦艦を相手した。古鷹、祥鳳、由良、暁、響、イムヤ。

イムヤが居なければ全員死んでいた。彼女はこう、命令したのだ。

——イムヤが全部殺すから、お前らは応戦しつつ囨をしろ。

そう、命じたのだ。無論、練度は皆低い。

古鷹は11、祥鳳は10、後は大体二桁にいかない。イムヤに至っては今回で初めて二桁。

そんな状態で戦艦を三隻同時に相手をしたのだ。イムヤ以外は全員大破した。

そして、纏めてドックに入ってから、翌日に執務室に呼び出し、困惑する全員に頭を下げて謝罪した。

「……提督。そんな、頭を下げるなんて……」

「いいえ。あたしが招いた結果です。なら、せめて糧として学び、繰り返さないと約束するのが道理でしょう。あたしは所詮教わるとはいえ、未熟の身。あたしのミスは、皆さんの死ぬことですから……」

古鷹が旗艦としてそんな真似はしないでと言うが意外にも七海は強情で譲らない。

あの七海が謝った。しかも、素直に頭まで下げて。

啞然とする皆に、続ける。

「……吹雪から聞いていますよね？ あたしは、艦娘に感情移入する気はないです。化

け物だと今でも思います。……然し、化け物とて生きている。なら、死にたくないでしよ？」

吹雪は毎度、最低最悪の司令官と罵っている。七海はそれを否定しない。

だが、同時に思うのだ。

「死にたくないって、戦地にいるなら誰だっと思うはず。指示に従う艦娘なら、提督次第で生きるか死ぬかが決まると言っても過言じゃない。そして、艦娘は提督には抵抗できない。そんなことをすれば、下手すれば解体……人間の手で死ぬだけ。あたしは、皆さんの命を預かっている。その自覚を、していなかったんだと思います。嫌々やっているのも変わりません。だけれど……理解しました。嫌々でも、その行動は艦娘の生死に関わっていると言うことなんです。あたしがすっかりしないと、死人が出ます。あたしは、化け物であろうが、人に似た命を自分のせいで殺したくはない。あたしの失敗で、人殺しになりたくない。もつと、慎重にやります。もつと、臆病になります。戦力とか、税金とか、そんな建前どうでもいい。あたしは人殺しと言われたくないから、もつと学びます。この失敗で、誰も死なずに済んで、本当に良かったです……。これで、人殺しと言われずに済む」

……自分勝手な理由だった。

自分が無能ゆえに部下を死なせた人殺しと言われたくない。

だから、努力するし失敗すれば謝る。

死なせそうになったの自分のせいだと分かる。

謝って次は変えてみると改めて誓った。

「……やっぱり、変な人ですね提督さんは」

由良が、不意にそんなことを言い出していた。

不思議そうに見上げる七海に、由良は苦笑する。

「言い分を聞いている限りは、確かに利己的で、艦娘からすれば不愉快な気分になる娘もいると思います。……けど、心配はしてくるんですね。何だかんだと言いつ分を用意しながら。怖かったと聞いたのは、心配の言葉でしょう？」

「し、心配などしていません。言っただけです。感情移入はしないと」

七海は心外な由良の言いつ分を否定した。何を言いつ出すかと思えば、この軽巡は。

化け物が何を言うか、と言おうとするが。

「そうですね。感情移入には、至つてないと思つているみたいですけど。……気付いています？ 人殺し、と。そう、仰つてますよね？」

「……………」

気付いた。同時に、言葉を間違えた。

苦い顔で、由良を睨んだ。由良はクスクス笑っている。

「あ、その顔は今自覚なさいましたか？ ええ、提督さんは……然り気無く、化け物と言いながら、自分に来る言葉は人殺しだと、そう仰っています」

「あげ足取りを……！」

しまった。外見に惑わされて、人殺しと言ってしまった。

……他に、どう言えばいい。見た目は人だ。道具でも兵器でもない、化け物。

生きていることに変わりはない。死ねば、人殺しが妥当な言い分だろうに。

由良に、その揚げ足を取られた。唸る七海に、一同は。

「提督……」

「司令官……」

皆が驚いたように見ているのを見て、慌てる七海。

「止めなさい、その案外優しい部分もあるんじゃないか的な視線を止めなさい!! そ、そんなんじやありません!! 言葉のあやです! 適切な言葉を思い付かなかっただけです!!」

必死に否定しているのに、由良と来たらまだつつく。

「そうですか? なら、由良は気にしませんけど?」

「由良ああああああ!!」

なんとと言う屈辱。素直に謝ればこの扱いか!!

おのれ由良。彼女のせいでも、変な誤解が広がりそうだった。

七海は、もうこれで話は終わり、出ていけと怒る。

「はい、由良は出ていきますよ。……じゃあね、七海ちゃん？」

「まだ仕事中！ 名前で呼ぶなど言ったでしょう!!」

仕事とは言うが、怪我をしていた彼女たちは本日は静養させると決めていた。

ドックに入れば関係ないだろうが、精神的な意味でも休ませようと思っていたのでこうした。

向こうは休み、こっちは仕事中。この場合は……考えるのが面倒くさくなつて、彼女に唸る七海。

クスクス笑っている由良が、皆を連れて出ていった。

数少ない話し相手だからか、こっちの性格を熟知している気がする由良。

五十鈴とはまた違った感じがして、苦手な気がしてきていた。けど、嫌いじゃない気もした。

取り敢えず、お仕事に戻る。

夜。あまりにも懲りずに喧しいので夜勤をやらせる事にした川内に任せる。雑務は軽くしてから、終わったら夜間警備で好きにして戦えと一人で向かわせていた。

幸い、夜の戦いでは無敗の川内一人でも、狭い近海程度のイ級に負けるわけもない。本人がヤル気満々なので、放置でいい。何かあれば、知らせるだろうし。昼間寝ているのなら、夜間に働かせればいいのだ。

報告は寝る前に書類に書いておけると言えば言うことを聞いた。いざというときは、交代で待機している夜勤の古鷹が教えてくれるだろう。で。

『響、ちゃんと意味は通じていますか？』

「はらしょー」

夜遅くまで頑張ったあとは、私室に寝る前に暇していた響を招いて趣味の時間だ。寝巻きの響は白銀のロングヘアーに、不死鳥の柄の入った長袖ジャージ。

七海もパジャマ姿で、ベッドの上で座っている。

ロシア語を習っていた。響は何でも、改造するとロシアの所属する姿になるらしい。その影響なのか、ロシア語が達者で興味があつた七海は暇な時間を見ては習ってい

た。

現在、ロシア語で喋っていた。

『コツさえ分かれば、日常会話程度なら覚えられるものですね』

「七海の口調は、話し言葉というよりは文章と大差ないからね。堅苦しい物だけど、喋るって意味じゃ問題ないよ」

若干音がおかしい七海のロシア語に、日本語で応答する響に、七海は成る程と頷いた。プライベートでは呼び捨てでも許す彼女は響には呼び捨てにされている。

アクビをしながら、響は言った。

「次は文章に挑戦してみようか。まだ書けないんだっけ？ 読めるのはギリギリで」

『いいえ。満足に読めませんね。文学は得意ですがロシア語は時間がかかりそうです』

「いや、呑み込みはだいたい早いよ？ 私も短期間でここまで上達するとは思ってなかったし」

異国言語と話し合う響は、そういつてそろそろ帰ると言い出した。

七海の私室は、大量の書籍がまるで書庫のようになっている。

大量の大小様々な本棚には、全部活字の分厚い本が押し込まれている。

読書に関して雑食な七海は現在、深海棲艦の生態を纏めた書籍と、艦娘の艦装を事細かに記す書籍を読み漁っていた。

どちらもわざわざ大淀に取り寄せてもらったものだ。

それはベッド近くの棚においてある。

広くはない壁際に本棚、服などはタンスに雑に放り込まれて、私物は散らかり放題。本以外は全部適当な汚い有り様であつた。

「部屋を掃除しないのかい？」

「面倒ですのう」

日本語に戻して、辺りを見回して呆れている響にしれつと七海は言う。

然し、結構な時間になつていた。

高い位置にある壁掛けの時計を見る。

奇声をあげる艦娘の絵柄が書かれた文字盤が示す時刻は丁度一時ぐらいか。

明日は休める日になるが、流石に出歩くには憲兵に怪しまれる。

仕方ない。七海は言い出した。

「遅いですので、ここに泊まつていくか夜更かしするか、どっちが良いですか？」

「いや、帰りたいんですけど」

「ダメですよ。十二時を過ぎたらなるべく出歩くなど言うのが軍規です。お仕事以外は出歩くと憲兵に捕まりますよ」

七海の言う通り、遅すぎる時間帯に理由なく出歩くのは怪しまれるのでオススメされ

ない。

下手すると普通に連行される。川内とかいい例だ。

「……七海、そういうえつちなのはいけないと思うんだ。私は駆逐艦。手を出すのは女でも犯罪だよ」

何故か響に警戒される。ちよつと距離を開けられた。

「誰が狼ですか失礼な。というか、何で知っているんです？」

「前来たときに七海の本を読んだ。なんだいあれは？ 完全に危ない中身だったけど。高校生だよね？」

本棚の一冊を指差す。七海は思い出したように言った。

「……………あれは、学校の友人が餞別に……………」

「ああ……………」

中身は知らないと言った七海は言う。以前もらったままの餞別の本。

中身はエロ本だったか。くれたのは女だったのに。

「女同士が絡み合っていたけど。そういう趣味が……………」

「無いです。あたし、恋愛に興味ないですし」

百合の本かあの腐れ女子め。

したり顔の友の顔を思い出しながら答えた。

響は安心したように、ほっとしていた。

「良かった。七海がロリコンの女好きかと思ったよ」

「あたし女ですけど?」

結局、響は適当に場所をつくって布団を敷いて寝ていた。

例の本は、早めに捨てようと思った。

そんな日。少しずつ、七海は変化していく。

一番大切な、死なせないと言う決意をしてから、ゆつくりと……。

真実を知ったとしても

例えば、だ。あなたがもしも、提督をしているとして。

こういう場合は、どうするのが正解だと思う？

強い武器がほしい。けれど、手元の資材が足りない。

自分はまだ新人で、開発するにも難しい。

そんなとき。あなたならどうする？

武器を強化して、近代化改修するというのも一つの手段だろう。

寧ろ当たり前の手段である。マトモな手段である。

普通に考えて、それを選ぶべき。あるいは、知り合いの提督から譲ってもらおう。

正常な認識をもって、人間としての通常の感性を持つなら、これが正しい。

彼女もこうしようとした。実際やっていた。それでも足りない。

だから、資材とにらめっこしている。

何故かと言えば、受け取れるものはあまり質の良いものではない。

余り物を融通してもらったのだ。

貰えるだけ有り難いし、それを元手に改修して現在運用している。

だが、多分これは資材を使わないだけで、自分の場所でも作れた。

いくらあの珍獣達が怠け者でも、これぐらいは最低でも作れるはずだ。

(……)

現場からの声を聞いて、ざっとパソコンで纏めた。

主砲は威力が低すぎる、連射がきかない、弾を詰まらせやすい。

魚雷は到達するまでの速度が遅い、射程が短い、威力が弱い。

電探はぼちぼち、口先で騙してそれなりの物を貰ったので問題ない。

ま、敵を探す役目を軽視してのちほど怒られたらしいがそれがなんだ。

返せと言われても返さない。渡す方が悪いし、ちゃんと約束しているので理屈で倒した。

ソナーは……まあ、最低限ながら適度に強くしているので此方も問題なし。

ここら辺は潜水艦が多くて困る。

五十鈴や由良、駆逐艦たちに毎日爆雷投げ込んで掃除してもらっているのに数が減ら

ない。

酷いときは空母たちまで頑張ってもらおう始末だ。最悪、潜水艦同士で争ってもらおう場合もある。

最重要として早めに開発しておいて良かった。

成る程、戦艦を入れるなど言うわけだ。潜水艦がこうも多いと、戦艦は一方的に倒される。

古鷹や衣笠が悲鳴をあげる前に倒しておかないと、主力が潰されてしまう。

で、流石に重巡二人では辛いとして、更に重巡を増やしてもらった。

建造して、鈴谷というノリが軽い奴と、気の弱い羽黒という重巡が増えた。

因みに七海とはまたも仲が悪い。鈴谷はなんとというか、煩い。羽黒は、ビビられていた。

そんな感じで重巡も最高値になったのでこれが主力だ。

で、艦載機。これは非常についていた。

ポンポン質の良いものが量産できている。髭の珍獣が言うには、幸運だそう。

烈風などの艦載機を既に低練度ながら、三人は使用して上機嫌であった。

なので、懸念していた航空戦に使う艦載機には余裕がある。問題は……。

(水上打撃力と、魚雷ですか……)

多くの主砲と、魚雷の問題。

特に駆逐艦や潜水艦の主力が貧弱で、大半の皆が苦勞している。

何時になれば連装砲に切り替えができる。

主戦が現在、資材を考えて余裕がない。改修に使いすぎた、というか誤魔化しもそろそろ限界だ。

皆が不安になっている。通じない場面も聞けば増えていた。

(……四の五の言つてられない)

決めただろう。死なせないと。

不安を抱かせないようにしないと。それは、七海の仕事だ。

敵を殺せるように策を練る。武器を開発、調達、強化するのも仕事。

それ以外になにもする事がないなら、それぐらいはしっかりとやれ。

自分に言い聞かせる。そう、だから。

(……良いでしょう。現状が行き詰まったのなら、最早これまで。王手、詰みならば……あたしも最後の札を切ります。正道を、王道を外れればいい。どうせ、あたしは縁起なんて気にしない。出来るなら、選ぶだけ。外道、邪道、悪道。上等です。罵りたければ、罵りなさい。あたしは何も間違つてなどいない)

方法はもう、選べそうにない。

丁度、美味しい話が舞い込んでいる。

ただ、それは提督にとつても艦娘にとつてもあまりにも嫌がる内容であるが。

大淀に頼んで件の内容を伝えた。彼女は驚いていた。

「正気ですか!?! あの話を受けるって……!?!」

「正気ですよ。宝の持ち腐れや税金の無駄遣いに比べれば遥かに」

「提督……貴方って人は……」

艦娘なら当然の反応に、七海は顔色を変えずに告げた。

最悪な方法だろう。知れば誰もが思うだろう。

この女は、頭がおかしい。それ以上におかしい、大本営と同類なのだ。

マトモな倫理観など、生憎と薄いようだ。意外と気にならない。

「……皆のためですか? 自分じゃ出来ないから、何でもするんですか? 皆の気持ち

はどうするんですか!?!」

大淀に聞かれる。

理解できずに困惑する彼女に、七海は無表情で言った。

「どう思われようが、あたしは感情移入はありません。お仕事の一貫。それだけですよ、

大淀さん」

「然し……ッ!! これは、余りにも艦娘には酷すぎる話では……!!」

「艦娘ならそうでしょうね。けど、人間はそうじゃない。……生き方の違いです。大淀さんは艦娘です。あたしは、提督です。提督ですから、現場の声に応える義務がある。それだけですよ」

「ですが、それで皆が喜ぶと思いますか?! 軽蔑されるだけですよ!」

これ以上誤解を招くような事をするなど言っているようだった。

漸く、信頼とまでは行かなくても一部では上方修正されつつあるのに。

自ら株を暴落させようとする七海。

まだ間に合うから、身の丈の方法で強くなつてと懇願する大淀。

なんで必死になつてくれるのか、イマイチ七海はわからない。

「身の丈……ですか。それって何か意味がありますか?」

初めて、七海は笑った。苦笑い。大淀の前で、笑っていた。

大淀も初めて見る、七海の笑みは……困っていた。

「大淀さん。甘いんですよ、そんな感情に囚われていては」

逆に指摘するのだ。

大淀は、感情的になつていと。

「喜ぶとか、軽蔑とか。そんなものが、戦場で何か役に立ちますか? 生きているからこ

そ感情は意味がある。死ねば感情もへつたくれありません。全部消えます。それを

防ぐのが、あたしの役目。皆さんが何を思おうが知ったことじゃないです。使いたくなくば、命令してでも使わせませぬ。文句があるなら生きて帰って聞きますよ。生きると言うのは、感情じゃあない。理屈です。選べる最善が、感情と倫理の最悪な手段だった。ただ、それだけの理屈。問題だとしても生きていなければ問題にすら上がらない。あたしは、提督としての最善を選んで、結果嫌われるなら別にいいです。どうせ、嫌われていますし、あたしもどうにも思いません。お好きに罵ってください。謗ってください。知りませぬよ、誰がどう言おうとも。あたしはこれが仕事です。故に、行います」

自分がどう思われようが、知らない七海はいうのだ。
嫌いたければ嫌えと。好きにしろと。

皆にどう思われようが、七海は気にしない。

「大体、あたしは好かれる様な人間じゃない。そして、好かれる理由も特にない。好かれるたいとも思わない。ほら、何にも問題ありませんよ。恨まれる、憎まれる。ま、それも良いじゃないですか？ あたしは恨まれる理由などないですしね。仕事の一貫でいざこざが起きてても、そんなものは何処にでもありますし。勝手にしてください。あたしは、知ったことじゃない。ただ、死なせないと誓った以上、やれることはなんでもする。大淀さん、分かりますか？ 口ではなんでもすると言うのは簡単です。ですが、本当になんでもするっていうのは、こういう意味だと言うことです」

目的遂行の為ならば、倫理すら忘れて行動する。

七海は、理屈の上なら倫理すら気にしないと云うのか。

そのまま、デスクワークに戻る。暫し、沈黙する大淀だが。

「提督……。失礼を承知の上で、言ってもよろしいですか？」

苦笑して、キーボードを叩き画面を見る七海に、眼鏡に陰りを落とした大淀は小声で

言った。

なにか？ と問うと。

大淀は、ハッキリと彼女の顔を見て、こう断言した。

「——提督。あなたは、頭が可笑しいです。イカれています」

嫌悪の表情だった。キョトンと、七海は目を丸くした。

頭がおかしいと突然言われた。イカれていると指摘された。

理由を、大淀は説明する。

「私にも、漸く分かりました。提督は、相手の感情を理屈としてしか、理解できてないんです。興味すらないんですね。相手の心情を度外視しているようにしか、見えません。生きていると認めておきながら、その精神を蔑ろにしている……。矛盾しています。生かすという目的のために、心を犠牲にしているんですよ？ 自分に向くであろう感情が分からないわけでもないのに、なんでそんなに酷いことを平然とするんですか

？」

「そんなもの、どうでもいいからですよ。どんな感情があつたつて、あたしには関係ない。笑おうが泣こうが、皆さんで好きにすればいいでしょう？　だから、何ですか。やってはいけないことですか？　違いますよね？　軍規にも記されない、全くもつて問題のない行動ですけれど。それでも何か言いますか、大淀さん。艦娘の感情について大本営に、あたしは何かを求められていません。求められている仕事をしています。それ以外に、役割など言われてません」

仕事はしている。なのに、何故文句を言う。

何がおかしい？　別に区別しているだけで、差別はしてない。

無機物と扱っているわけでもない。言われた問題に対処しているじゃないか。

問題解決の最短である。その何がおかしい？

相手が七海を信じようが信じまいが、続けていく。

大体が、艦娘の感情を汲んで、それで何の意味がある？

それ自体は否定はしないし、邪魔もしない。

何を思おうが自由だと言っているだけ。

妙な感傷は失うものはあつても、救える物はない。

少し考えれば分かるではないか。

生きる死ぬの世界で、同情と迷いは、死ぬ最大の原因だと七海は思う。

「感情的過ぎますよ。……要するに、大淀さんはあたしが不快ですか？　ならば結構。その場で力及ばず死ぬだけです。あたしは嫌ですよ。自分の出来ることをせずに艦娘を死なせるのは。自分の責任になりますので。あたしは、命を預かる立場。死なないように努めるのがお仕事です。何もおかしいことはしていない。イチイチ相手を窺って、それで死なせるような阿呆に成り下がる気はないんですよあたしは。目先の感情に囚われて、本質を見失う……。大淀さん、少し冷静になってください。熱くなりすぎです。思い出して、問題はソコじゃないんです。戦いが激化しているこの状況を打破するための最善策を探しているんですよ。感情なんてものは、後回しでも十分間に合います。酷いとかそんなもの、どうでもいいと分からないんですか？　生きるか、死ぬか。論点はそこであって、感情という副産物に脱線しては話が前に進みません」

「……………」

七海が語るだけ、大淀は更に困惑していた。

なぜだ。なぜ、必要なことを話し合っているのに、大淀は戸惑っている。

「提督……あなた、正気、ですか？　本気で、言っているんですか……？」

青ざめていた。大淀の目線は、恰も化け物を、理解できない異物を見る目になっている。

七海も困る。大淀の意図が、読めなくなっていた。何が言いたいのか、七海には見えない。

「……？ 何がおかしいんですか？ あたしは、普通ですよ？」

「……分かりました、この違和感の正体が……!! 提督、あなたは異常者です!! 狂っていますツ!! 医者に見てもらってください!!」

突然、大淀は何やら錯乱したように七海の腕を近づいて無造作に掴んだ。荒っぽい動作に、思わず痛みが走る。

「痛ツ!!」

「正気じゃないですよ、渋谷さん!! あなた、何時からこんなことになってたんです!?

そこまで提督の仕事を我慢してやってたんですか!?! なんでもっと早く相談を……兎に角、軍医に見てもらってください!!」

いけない。大淀がパニックを突然起こしていた。

喚くように叫ぶので、七海は素早く内線の受話器を掴み、放る。

弱いなりに抵抗しながら、ボタンをすぐに押す。憲兵を呼ぶのだ。

緊急コールに一秒未満で憲兵の応答を確認。七海は大声で叫んだ。

「憲兵さん! 大淀さんがあたしをどこかに連れ去ろうとしていますツ!! 話が通じません、助けて下さいツ!!」

「話を通じていないのは提督の方ですよ!! 憲兵さんを呼ぶ前に軍医を呼んでください!!」

言い争う声に、驚いたようだが、非常時と分かって、直ぐに向かうと返事をした。

で、更に七海は援軍を呼んだ。机に必死にしがみつき、今度は内線で艦娘を呼び出す。

「痛ッ……!! 大淀さん、腕千切れる……止めてください!!」

「止めません! 今すぐにあなたは精神科に見てもらいますッ!!」

何を言っているのか、まるで分からないが……今は刺激しないようにするしかない。

抵抗している間に、ようやく相手が内線に出た。

「五月雨、五月雨居ますか!? ちよつと、助けて下さい!! 殺されるッ!!」

寝惚けたような声で応答したので、焦らせる事をわざと口走る。

すると、動揺したのか相手……五月雨は、派手に転んだような音をさせた。

受話器からひどい音が聞こえる。しまった、五月雨じゃ逆効果だった。

失態に焦ったと後悔するも、幸い違う相手がいた。

「な、七海!!? どうしたの!!? 今殺されるって聞こえたけど!!?」

慌てている、衣笠の声だった。

同室に居たのか、何事か聞いてくる。

大淀が嫌がる七海に怒って、強引に連れて行こうと身体を抱き抱えた。

小柄な七海はすっぱりと捕縛される。

冷静なろうと努め懸命に抵抗しながら、騒いで知らせる。

「きゃああああ!! 殺される、殺されるうううう!!」

多少大袈裟でも良いだろう。真面目に悲鳴が出た。

机の上の物を投げて、抗った。書類が散乱して、備品が壊れていく。

「提督、抵抗しないで!! いい加減おとなしくしなさいッ!!」

暴力まではいかないものの、怒鳴る大淀の声を受話器は拾った。

衣笠が大淀の声に気がついた。

「今の声……まさか大淀さん!? 何してるの!? 五月雨、古鷹と鈴谷呼んできてッ!!」

羽黒は……ダメだ、あと由良と五十鈴!! 川内は……寝てるし、あとは憲兵さん!! 急

いで、提督死んじやうよ!! 衣笠さんもすぐいくよ!! 待つてて提督!!」

乱暴に内線を切ったようだ。

これで何とか、誘拐される前に到着してくれれば。

七海は一層激しく嫌がって暴れる。

「離しなさい、大淀さん!! 提督にこんな真似して許されると思ってるんですか!?!」

「あなたに言われる筋合いはありません!! 精神が歪んだ人間は危険なんです!! 医者に行くだけでこんなに暴れて、自覚あるんでしょう!?!」

殴つて蹴つて抗うも、艦娘に子供が勝てる訳がない。
騒がしくなる室内。

いよいよ連れていかれると思つた瞬間。

執務室の扉が乱暴に破られた。

「大淀オツ!! あんた七海に何してるのよ!?!」

「七海ちゃん、無事!? 大淀さん、何してるの!? 七海ちゃんを離してツ!!」

五十鈴と由良が真つ先に助けに来てくれた。

普段あれだけ喧嘩してる五十鈴が率先して大淀に掴みかかる。

「五十鈴さん、邪魔しないで!! この人は頭がおかしいの!! 医者に見せなきゃ!!」

「意味のわからない事を言うんじゃないわよ!! おかしいのはあんたでしょ!!」

大淀が離すまいと逃げ出すが、由良も怒っていた。

見たことのない顔で、睨んでいた。

「大淀さん、由良を怒らせたわね……?」

後ろから襲いかかる。そして、七海を奪回した。

同時に憲兵も到着。散乱した室内を見て、大淀の乱心と判断した。

警告するが、当然大淀も興奮しているので聞いてない。

衣笠も来てくれた。新人の鈴谷、古株の古鷹も。

「ちよ、何この乱闘騒ぎ!! ゲツ、マジで殺そうとしてんの!! 止めなつてば!!」

鈴谷が驚いて、仲裁に入る。

一方、古鷹は七海の救護に向かう。

「七海さん、怪我はない!？」

「腕が……」

「腕痛いの!? 早く行こう、由良さん!!」

「分かつてる!! 七海ちゃん、少しでも我慢してて!!」

由良が七海をお姫様抱っこで回収して、走り出す。

「大淀さんさ……衣笠さんも、許せないことつてあるんだよ?」

怒り心頭の衣笠が追おうとした彼女を遮った。

「……話を通じないのは、あんたの方よ大淀。覚悟は、出来ているのよね?」

五十鈴がハッキリと敵意を見せて、立ち塞がる。

「いやあ……この部屋の中の荒れた具合からして……殺意マシマシじゃん? 止めるしかないっしょ」

話が見えないが、鈴谷も加勢している。

武装した憲兵も加わり、四面楚歌。大淀は説明するが、方法は悪かった。

数分後。抵抗むなしく、真実を知る第一人者は、捕まった。

大淀は言う。おかしいのは七海だ。彼女は頭がイカれている。

サイコパスを提督にする前に医者に見せろと。が、誰も取り合わない。
そのまま、真実は……闇に、葬られるのだった……。

死者への冒読

異常者。そう言われたのは生まれて初めてだった。

(あたしが……サイコパス?)

他人の気持ちを理屈でしか理解しない。

相手の心を度外視している。

……バカな。そんなことはない。

学校では友人もいた。それなりに楽しくやっていた。

あまりコミュニケーションは得意ではない。それは認める。

けれど、サイコパスと言われる謂れはない。

(……いいえ。あり得る話)

と、そこまで自己分析して思い当たる。

大淀は艦娘。根本が異なる化け物だ。自分でも言った。

（あたしは提督。皆は艦娘……。そう言うことですか。つまり、人間の都合は艦娘からすれば異常者に見える。彼女たちからすれば、人間は大半が頭がイカれているということになる。主に、大本営とか）

要するに、艦娘の都合は人間とはかけ離れている。

根本が異なるのだ。あり得る話。七海がおかしいんじゃない。

化け物と人間の違いだ。だって、そうだろう？

七海がおかしいなら、それを指示して、話を持ってきた大本営はどうなる？

彼らまで艦娘はサイコパスと言うつもりか？

（理解できない。艦娘の感情まであたしに面倒見ると？ 冗談じゃない。大本営は喋る

肉の塊扱いしろといっているんですよ？ 化け物扱いでも上等なのに、あたしに化け物を分かれて言うんですか？ 勘弁してくださいよ。化け物の思考回路が人間にわかるわけないでしょ。珍獣の思考回路だってあたしには見えないのに。向こうが人間を異常と言っているのに、何で此方が真摯に向き合うことになるんです？）

艦娘だって、人間の事情なんて汲もうともしない。なのに一方的に分かれと言うのだ。

そんなワガママが通じるわけがない。バカらしいと七海は一層拒絶する。

分かりたくない。化け物の思考なんて。知りたくもない、化け物の感情なんて。

……なのに。

「大淀のやつ、錯乱してたんじゃないの……？　七海、大丈夫だった？　何かあれば五十鈴が守ってあげるから、ちゃんと言うのよ？」

「七海さん、腕が腫れてる……。お医者様はなんて？」

「由良が聞いた限りじゃ、結構酷いみたいなの。七海ちゃん、暫くは秘書と護衛を兼ねるから誰かと一緒に居てね」

「衣笠さんもお手伝いしちゃうよ。無理しないでね、七海。仕事に集中するのはいいけど」

「いやあ……建造されて早々乱闘とか賑やかすぎない……？　でも、無事で良かったよななみん」

「……なにか、あれば言うてください。手伝える範囲で、手伝いますから」

「え、渋谷襲われてたの!!　なんで!!」

最後は別として、重巡と軽巡、主に七海よりも精神的に成熟している彼女たちが、こんなに心配してくれる。

何故？　化け物は、人間を異常者と言うんだらう？

「……なんであたしを心配するんですか？　理解できません……」

そう、医者に見せられ戻ってきた帰り道、七海はぼやいた。

なぜだ。重巡と軽巡は、何故七海を嫌わない。なぜ敬遠しない。

嫌われる言動の相手なのにどうしてこんなに心配してくれる？

普段喧嘩するのに。普段あれだけ怒鳴っているのに。

いざというとき、真っ先に助けてくれた。危ないのは同じなのに。

……………どうして？

「……………あんた、何いつてるの？」

五十鈴が怪訝そうに問うと、周囲を見て、七海は今度はパニックを起こしていた。

「理屈が通らない……………。嫌うはずの相手を、こんな風に心配するはずがない。ああ、もう

!! 本当は何なんですか艦娘って!? 化け物なのに、あたしを案ずるなんて! おかし

い、おかしいですよこんなのは!! 何が起きているんですか!? 分からない!! 艦娘の

感情なんて、あたしには分からないツ!! やはりあたしはおかしいんですか!? あたし

は異常者……………サイコパスなんですか!?!」

ダメだ。頭がこんがらがる。

こいつらはなんなんだ。化け物の癖に、どうして嫌う相手を優しくする。

助けようとする。庇おうとする。救おうとする。

「艦娘は化け物でしょう!?! それとも無機物の方が正しいんですか!?! 兵器として接す

る大本營のやり方が正しいんですか!? 人間じゃないのに、なんで感情なんてあるんですか!? ああ、分からない!! 分からない!! もう、全部が苛々するツ!! 結局あたしに、あなたたちはどうしろっていうんですか!? 人間扱いでもしろと言うんですか!? そうならそうって言うてくださいよ!! 混乱するじゃないですか!! いい加減にしないとキレますよあたしも!!」

「意味の分からない唐突なマジギレ!? いや、なんの話?」

取り敢えず分からないので、本人たちにキレ気味に聞いていた。

分からないなら聞くのが最短。そういう理屈で。で、近くにいた鈴谷に凄む。

「ほら、鈴谷!! あなたは人間ですか!?」

「知らないよ!! 艦娘は艦娘じゃん!」

突然。パニックからの前触れなしの逆ギレ。

帰り道の廊下で全員に七海は嘔みついた。

「そんな曖昧な答えで許すと思ってるんですかツ!?」

キツチリ分けると言っているのだ。

艦娘なんて適当な答えでお茶を濁すなど怒鳴る。

「じゃあなんて答えりゃいいのさ!」

「化け物か人間か、どっちですか!?」

選択肢は二つしかない。化け物か、人間か。

その二つによって、七海はやり方を変える事にした。

艦娘の心。感情。精神の存在。

それを無視して大淀にひどい目に合わされたのだ。

繰り返し返さないために、ここで白黒つけようと決めた。

「由良、あなたは!？」

鈴谷がテンパって意味がないので、次。由良に聞いた。

少し考えるように迷い、答える由良。

「……………んー。じゃあ、由良は人間の方で」

「そうですか、じゃあそうですっ!!」

由良は人間にしろと言った。じゃあ人間として接する。

次、五十鈴。

「……………大淀に何か言われて、困ったってこと? まあ、良いけど……………五十鈴も人間で」

五十鈴は何やら察して、頭を撫でながら答える。

撫でる感触がなんか気持ちいいのでそのまま。

次、古鷹。

「……………人間がいいかなあ……………。人権が欲しいから……………」

小声で恥ずかしそうに言うので、人間とする。

次、衣笠。

「衣笠さんも人間かな！ そりゃ、化け物は嫌だしね」

と言うので、人間で決定。

次、羽黒。

「え……えつと、わたしも……人がいいです……」

控えめながら言った。人間としておく。

次、今頃騒ぎに気付いてふらつと現れたくの一。

「私だけ扱い酷くない!? くの一でもいいけどさ!!」

了解、お前はくの一とする。

最後は。

「鈴谷アツ!! ハッキリ答えなさいツ!!」

「怖いよ!! なんで鈴谷だけ凄むのさ!?! 鈴谷も人間ですけど!?!」

「……」

ここは正直予想していた。

案の定に、黙る七海。

「え、なんで黙るのいきなり!? おかしなこと言った!?!」

「いえ……確かに鈴谷は人間やつてるな、と思ひまして。あたし、一応現役JKですけど、鈴谷はそれ以上にJKやつてるし……主に軽いつて意味で」

「酷くない!? なに軽いつて!?!」

「……資料で読んだ限りじゃ、完全に女子高生を騙ったエロサキュバスだったんですが……」

「止めてエ!! 他の鎮守府の鈴谷と一緒にしないでエ!! そんな大人向けのDVD出てないから!!」

「この鈴谷、資料で拝見したのと随分と雰囲気違って謎だったのだが、ああやつぱり別物なのだそうだ。」

泣き叫ぶ鈴谷に納得。鈴谷はJKサキュバスでオツケーだった。

「違うつてば!?!」

なんでもいい。人間なら問題あるまい。

女子高生として、こんな見た目スケベな奴は女子高生と認めない。

「見た目スケベとか失礼極まりないよね!?!」

「いえ、実際に大本営の資料に載ってました。警戒心弱で、なつきやすいチョロい女子高生。夜はエロサキュバスに大変身。性欲旺盛な提督は嫁にオススメ、と」

「大本営いいいいいい!!」

知らぬ間に鈴谷の扱いは酷かったらしいが、割愛。
しれっと語る七海に、悔しそうに吼える鈴谷だった……。

で。今回の原因を説明しないといけない。

治療を終えて執務室に戻った。

散らかった室内を、駆逐艦たちが片付けてくれていた。

襲われたと聞いて、皆慌てていたらしいが、無事と聞いて安心はしているようだった。
重巡と軽巡には、言わなければいけないだろう。

七海は自分の場所に座り、皆はそれぞれ適当に楽な格好で聞いてもらう。

七海の、選択肢を。

軽く説明。要は、新しい装備の入手が可能になりそうだと言う話。

それも、条件付きだがかなり良いものを、ただで。

なぜ、そんなことが大淀が襲いかかる理由になるのか。

それを今、明かそう。

「……艦娘浮上計画。あたしは、それに肖ろうとしています。艦娘からすれば、最悪な手段でしょうけど」

そう前置きしてから、七海は自分の選んだ方法を口にする。

あつという間に、皆が嫌そうな顔をするのを、見ながらだった。

艦娘浮上計画。

それは、大本営が軍縮に対応して立ち上げた新しいプロジェクト。

本当にシンプルに語るのなら、この一言で済む。

——早い話が、墓荒らしだ。

その名の通り、艦娘を浮上させる計画なのだが。

これは、戦いで轟沈した激戦区を対象に、ある程度海域の安全を確保してから行う作業。

……艦娘は、戦いに負けると轟沈する。つまり、死ぬ。

海に沈んで、そのまま眠る。そして終わる。それが当たり前。

だが、艦娘浮上計画はその先にある、死後の安らぎを奪う行為だった。

沈んだ艦娘を、サルベージするのだ。

なんでも、轟沈した艦娘は海底で大抵が保存の良い状態で沈んでいるらしい。

それをわざわざ引き揚げて、遺体を……大本営は残骸と言っているが、それを回収。

牽引して持ち帰り、大本営の設備で沈んでいた遺体の纏う艤装を解体して、装備を取り外す。

それを修理、補修して再配備すると言う計画だった。

またの名を、リサイクルプロジェクト。

亡くなった艦娘を持ち帰り、優秀な装備ならば直して配ると言う元手がかからない良い計画。

挙げ句には、余った遺体はそのまま資材に変換し、また配分すると言い出した。

沈んだ艦娘は、最早数えきれないほど海の底で重なっている。

深海棲艦との戦いも始まって長い。

人類は、長年無駄に捨ててきた資源を回収するエコロジーな選択を選んだのだ。

軍縮という天敵に、新たな財源として、海底資源のように回収しようという話だった。艦娘という存在を、死後ですら軽視して徹底的に利用する。

それが、艦娘浮上計画。死んだ後すら糧にされる、人間の究極のエゴ。

七海の賛同する計画だった。

「……………」

皆は、七海を選択肢に、理由を聞いたそうに、黙ってみている。

文句は言わない。それが、大淀が狂っていると言った理由だと分かった。

七海ははつきり言った。

「最悪でしょう。でも、必要なことですよ。お金と、資源は無限じゃない。リサイクル出来るならするのが利口だと思います。実際、艦娘や大半の提督たちは反対しています。そして、配分される装備を受けとる気もないんだそうです。だから、沢山余っています。質の良い最高級の装備も口ハで手に入ります。あたしは、この計画に賛同し、受け取れる装備を全部受けとります。嫌とは言わせません。何を言われようとも、実行するつもりです」

使えと。嫌がってでも、命令してでも使わせる。

これだけは譲らないと、断言した。

本人たちを前にして、言い切る七海に五十鈴は聞いた。

「どうしてそこまでするの？ 五十鈴たちは、そこまで練度も高くはないわ。ここは新設された鎮守府だし、技術もないのは分かる。けど、強大な敵もないここでは、無意味だと思うけど」

「装備の質に無駄などないです。強ければ死なない、それでいいと判断しました。大体、練度が低いから危険な目に遭う。それを装備で補うのに、おかしな部分などないでしょうに」

七海は言う。死なない為の最善としてリサイクルを受け入れる。

手っ取り早い方法で、ある程度の動作チェックなどすれば受け取れるのだ。

「ここまで美味しい話はない。と、倫理を全部無視して豪語する。」

「あたしは、失敗を糧にすると言いました。その結論が、艦娘浮上計画ですもの」

「……七海ちゃんは、これになにも感じないの？」

由良が辛そうに聞く。異常者と言われる所以はこれだ。

やはり、理屈で判断して倫理と道徳を蔑ろにしていた。

「感じません。死んだ奴は死んだやつ。死人に口無しです。海底で放置されるぐらいなら、もう一度戦場に出して今を生きる艦娘の力にするべきです。死人が持つていても意味などない。それを使って皆が生きられるなら、越したことはない。死人は戦いません。ただ、死んでいるだけ。だったら、過去の遺産となり忘れられるよりも、未来の礎になるべきだと、あたしは思う。死んだから、そこで終わりだなんて誰が決めたんですか？ 世界は現在を生きている命のもの。今を懸命に戦う艦娘に使って、何がいけないんですか？ 死人は死んでいるだけでなにもしない。せめて、次に命を繋ぐぐらい、し

ていただきたい。ただ無惨に朽ちるよりは余程価値がある」

「まただ。また、死を理屈で語っている。」

彼女の言うことは理屈過ぎる。まるで機械のような判断だった。

しかも、確かに必要で有効な手段だから、皆は使う艦娘として、否定できない。

無意味に死んでいるだけなら武器を寄越せ。

なにもできないなら糧になれ。放置するぐらいなら有効に活用してやる。

お前らのすべてを、糧にしてやる。これは必要な犠牲なのだ。

七海はそう、言っていた。

「……………拒否権は？」

衣笠が聞くと、首を振った七海。

「ありません。あたしの出した結論です。文句はあたしに言ってください。けど、代わりに誓います。こんなことまでしてらんです。……絶対に、あたしは死なせませんから。誰も」

……そうか。皆は分かった。

これは、七海なりの答えなのだ。大人である彼女たちは理解してくれた。

言葉の彼女の努力の結果。

倫理を無視するほど、逆を言えば皆を死なせない為に必死になっている。

大淀と違い、部下である皆はそこをちゃん感じていた。

異常だろうが、そこには理由があった。

理由さえあればなにしてもいいのか、と聞かれば困るだろう。

だが、理由さえあれば皆が危険にあっても良いのか？

戦争をする限り、正解など選べない場合だつてある。

新人の七海の、精一杯艦娘たちに応えてくれている。

それを感情で否定しても、全部はできない。

……倫理と道徳は最悪だろう。けれど、実際に皆は必要としている。

未熟ゆえに、手段は選べない。弱いから、届く範囲の善悪を越えていく。

七海は頭がおかしい。大淀の指摘は間違いじゃない。

だが、一部足りない。

七海は、おかしいけれど、狂っているけど、壊れてはいない。

少なくとも、艦娘を死なせないと言う決意は本物だ。そこは信じる。

臆て。皆、分かったと頷いた。

驚く七海に、古鷹は言った。

「確かに嫌な方法ですけど……でも、私達には必要なものです。必要悪として、受け入れ
ます」

仕事の口調で、皆は受け入れてくれた。

大体、言いたい事は同じだと答えた。ただ口外はしない。

幼い子供達にはショックが大きい。大淀の二の舞になる。

「提督。……ありがとうね、話してくれて。覚悟、しっかりと受け止めたわ」

五十鈴が七海がここまですたのだから、戦い抜くといってくれた。

何でもするなら、艦娘も応えよう。倫理すら無視するような人だ。

それでも、艦娘に対しての言動はちゃんと筋が通っている。死なせないと言う、筋が。だつたら、戦うまでだ。死なずに必ず帰ろう。彼女の努力に、報いるために。

その日、皆は評価を改めた。渋谷七海は頭がおかしい。

でも同時に、努力を続ける、そんな人だと……。

認識の改善

さて。困ったことになった。

(認識を改める。艦娘を、人間として扱うと約束しました。ならば、状況の改善を始めましょう)

七海は散々な目に遭った。

大淀はあのあと、提督に錯乱して手を出したとして、言い分を理解されぬまま解体された。要は、死刑になった。

そして、新しく大本営から違うけれど同じ人物の大淀が新たに来た。

皆は、納得と嫌悪の二種類の反応を見せたが、軍規である以上、当然の措置。

それはどうでもいい。大淀のおかげで、七海は右腕に炎症を起こしていた。

幸い利き手は左手だったので、まだよいが。片腕生活は本当にしんどい。

何せ二の腕が今は腫れている。痛くて上手く動かない。

それもこれも、七海が艦娘を化け物と見ていたから。

潔く認めよう。加害者は大淀だが、原因は七海だ。

故に改める。艦娘は人間であると。

化け物と見たから揉めた。これ以上の痛い目はゴメンであった。なので、七海は皆を呼んで、こう先ずは切り込むのだった……。

「今まで散々な言い分を致しました。誠に申し訳ありません」

全員を夜に呼び出し、謝罪した。

今までの扱いは間違っていた。七海は人間として、皆と接するとそう、説明した。

駆逐艦、特に吹雪が何事かと疑問符を浮かべていたが、大淀と揉める原因は七海にあったという、納得した。

皆に、七海は言い出した。

「人間として接しますが、仕事しなければ怒鳴りますから。そこは変えませんが、ただ、色々とあたしに問題があったのも、厳しすぎたのも事実だと思えます。ですので、甘やかすことはしませんけど、緩くはします。常識的な範囲と、礼儀さえ守りつつ、あたし

の言うことを聞いてくれれば構いません。多少の融通は利かせましょう。……だからって、そのくの一のように非常識を繰り返すなら、また独房に放り込みますので」
若干一名、呼び出しを無視し言われている夜間警備に繰り出そうとしていたので、衣笠が捕まえてきた。

で、現在は椅子に縄で緊縛している。

「くっ……私から夜戦を奪うなら殺せっ!! 夜が私を呼んでいるー!!」

しかも話聞いてない。この鎮守府一の非常識は伊達じゃないようだ。

七海は黙って、冷酷な表情で近づき、騒ぐ川内に目隠しを施す。

抵抗する彼女の口に更に猿轡を噛ませて黙らせた。

むーむー! と叫ぶ川内を見せて言った。

「非常識には、こちらも非常識で対応しますので。たとえば、この様に」

大きい軍服の懐から、何やら取り出す。……ねこじやらし?

それを、川内の首もとにすり付けて、撥っていた。

「むー!? むー……!!」

何事か分からない川内は撥りに弱い事は知っていた。

理由は聞かないでほしい。川内の名譽に関わる。

「川内。本当に悪い子ですね、何度いっても分からないなんて。夜の怖さを……その身

に刻んであげましょう」

耳元で囁くように伝えると、ビクツと大袈裟に反応した。

嫌がるように悲鳴をあげるが、七海は一切容赦しなかった。

それから、無言で数分全身を擽って、川内の精神を蹂躪。

ドン引きの五月雨に映像を録画させておき、痙攣して過呼吸を起こす川内の目隠しを外した。

そして、止めをさす。

「川内。言うことを聞かないと、この恥ずべき映像を知り合いの提督のところにいるあなたの妹に送って、そこで広めて妹のスキヤンダルにします。これがお姉さんの隠された性癖だとでっち上げて。それが嫌なら大人しくしなさい」

まさに外道。川内の末の妹を人質にとつて、脅していた。

痙攣しながら頷く川内。笑いすぎて、涙を流していた。ハイライトの消えた目で。

と、一名を公開処刑して、あまりの手段に絶句する一同に向いて、最上級の笑顔で、冷たく低く、言った。

「……常識と、礼儀です。良いですか？ 守らないと、次はあなたたちがこうなるんですからね？」

鬼畜過ぎる七海に、全員直ぐ様応答した。

ヤバい、人間扱いだと更に歯止めが消えているこの女。

初めて見た笑顔は……妙にプレッシャーのある、攻撃的な笑みであった。かくして、七海と艦娘の鎮守府生活は、新たなスタートを切っていた。

新しい装備が着々と届いている。

艦娘浮上計画に賛同する人間として、誰も受け取らない装備をどんどん引き取って増強していく。

大本営も、前向きに自分達の計画に手を貸す七海に、評価をあげていた。

今度は大淀には言わない。自分で五十鈴や由良と言った、理解者と共に進んでいた。

後任の大淀は、内容をいつの間にか知っていたが邪魔はしなかった。……中身を変更でもされたか。

七海は気にしない。で、新たな問題が発生した。それは、此方は改善する気はない妖精達だった。

何かを感付いて、七海に聞いてきた。

「おい嬢ちゃん。おめえ、これ何処から持ってきた……？」

工廠の長が、鋭い目付きで七海を睨み上げた。

涼しい顔で聞き流す七海。皆が運搬をするのを指示していた。

「都合が悪いのはだんまりかい。こりゃあ、相当な曰く付きだな……？ 何度も何度も

補修したあとがある。それに、材質自体もがかなり古い。確かに骨董品みてえなものだが……凄まじい怨念を感じるぜ。触りたくねえレベルだ……」 髭は、装備の一覧を眺める七海に、恨み辛みの籠った装備だと教えた。

使用すれば、悪影響は必ず出ると。

「憎悪か、あるいは怒りか……。おめえって奴は、艦娘をなんだと思つてやがる？」

「人間ですよ。そう扱えと言われましたので」

舌打ちしながら文句を言う髭に、七海は悪びれずに言った。

人間といいながら、呪いを溜め込む装備を与えるのか、と髭は怒る。

「今のうちに警告しておいてやる。壊れるぞ、艦娘が。お前が皆を壊すんだ。下らん浅知恵でな」

「壊れません。呪いがあるなら、こう言いましょう。死人は黙つて死んでなさい。なにもしない癖に、命を呪う暇人風情が。文句があるならあたしに来なさい。皆はあたし

の指示で戦う。責任はあたしにあるんですから」

「……………ほう？」

意外そうに、髭は装備と七海を行き来して見た。装備の対象が、変わった気がする。

そう、あまりの傲慢な口ぶりに、彼女の方に感情が向いた……………ような。

そして、この女はそれを受けても平然としていた。

「霊感などありませんし、幽霊の類いも信じませんが……………でも、同時に言うこともありますよ。あなたのその力が、この世界で戦う艦娘が死なない武器になる。それは、深く感謝いたします」

変な奴だ。呪いを罵るくせに、感謝もしていた。

矛盾しているとしか言えない。が、無意識だろうか。

彼女は、装備たちに僅かながらも、頭を下げていた。

何度も何度も。運ばれるたびに、繰り返して。

（少しだけ、気持ち悪さが減ったか？ まあ、感謝しているのも本音みたいだな。艦装もその辺は分かったんだろ）

髭が見る先で、威圧感を放つ装備たちが、少しだけ矛を下げている気がした。

どこで回収されたんだが分からないが、どうやら中古品や骨董品が大半のようだ。

恐らくは前の持ち主は死んでいるんだろう。それをもう一度配備するとは、人間は本

当に最低だ。

だが、持ってきた装備にありがとうと言えるだけ、マシなのだろう。

他の人間は七海のように感謝もせずに装備させるのだろうし。

よく分からない子供。妖精を珍獣と蔑み、文句ばかりを言ってくる嫌味な女。

けれど、ある程度の常識は持っているようだ。ゲス、とまでは行かないが最悪な提督。

(……感謝だけは忘れんなよ嬢ちゃん。この装備は、一歩間違えれば破滅を呼ぶぞ……)

呪いを背負い込んだ艦装をまとつて、皆は戦っていくのだ。

七海の気持ち最後の砦。そんな気がした、髭の妖精だった……。

次の問題は。

「……外出許可？ あたしと一緒にじゃないと出ませんよ」

「えー……」

翌週。新しい装備に喜び、海上訓練に励む皆を見ながら、七海はそう言った。

相手は駆逐艦たち。睦月、如月、暁、響、雷、電、五月雨。

吹雪は訓練中であつた。

明日、いきたい場所あるから外出許可が欲しいと言われた。

休憩中であつた。コーヒーを飲みながら、中継される映像を眺めていた。

しかもこの数、出掛けたいと言うのだ。

七海は付き添いが居なければ無理だと告げる。

そういう軍規だ。外出は必ず複数で。一定数を超えると提督の付き添いも必要になる。

門限あり。外泊は不可。など、細かい規定がある。

皆は買い物我希望していた。給与は出ているから、当たり前か。

普段は七海が一括して雑貨などを注文して、入荷している。

必要なものも大体同じ。なので、外に出なくても大抵は手に入る。

が、買い物と言う行為をしたい皆は、行かせろとせがむ。

「え、嫌です。あたしはインドアなので。歩くの嫌です」

一蹴した。自分が出たくないと言う理由で。

一斉に飛んでくるブライング。デスクワークの七海の机の前で、文句を言う。

あれ以来、常識的行動なら、七海は取り合ってくれと知った駆逐艦たちは、ごく普通に通に振る舞っている。

それこそ、常識を知る人間のように。七海も来たばかりに比べて、明らかに軟化している。

「七海ちゃんのケチ!! まな板!!」

「……………は？」

休憩時間なので好きに呼ぶ彼女たち。

若干一名、地雷を踏んだ。

暁だった。響が慌てて口を塞ぐが時すでに遅し。

不愉快そうに、まな板と言われた七海は睨んできた。

「……………」

自分の体型を見下ろす七海。

同年代よりも明らかに小柄で、貧相な体つき。

それでも……………駆逐艦よりは多少はある。

暁、寸胴。……………勝った。

「五月蠅いですよ、一人前レディかっこ笑い」

お返しに嘲笑う七海が低レベルな言い返しを放った。

暁の心を的確にえぐった言葉だった。

「笑った! 今暁を笑った!!」

「……ああ、もっとハッキリ言いましょう。貧乳レディ」

「じ、自分だつて大差無いくせに!!」

「高校生は成長期。つまりは、未来があります。それに比べて、暁のそれは……なんて貧相なんでしょう。不憫でなりません」

暁と口喧嘩をするぐらいには、ある程度トゲが無くなつており、以前の失敗も許していた。

怒るときはとてつもなく怖いらしいが。

口喧嘩で七海に勝てるわけもなく。適当に言い返され半泣きの暁。

秘書の羽黒が、それぐらいにしてと宥める。一応、訓練を見ているのだ。

「ぎゃー!?! 吹雪、鈴谷殺すつもり!?!」

「す、すいません!! 反動が強すぎてコントロールが出来なくて……!」

「125mm単装速射砲つて、そんなに危ないの!?!」

「危ないですよ! 鈴谷さん、早く離脱してください!」

画面で鈴谷が絶叫していた。

射撃訓練の最中にコースを外れて鈴谷が突っ込んでいた。

謝る吹雪に代わり、七海が教える。

「はい、そのJKエロサキュバス。速射砲は舐めていると蜂の巣です。コースを外れ

てますよ。死にたくないなら早く戻りなさい」

「誰がJKエロサキユバスだ!! ななみん、実は気に入ってないそのあだ名!」

鈴谷がインカムに向かって叫んだ。

仕事以外では自分から軽口を言うくらいには、七海も力が抜けていた。

自分が速力の強化した新型機関を扱えないから言われるんだろう。

七海は画面の海図を読みながら、戻るように指示。

小言で文句を言う鈴谷を誘導する。

そこでふと感じた。

「……エロサキユバスならここにも一名居ますけどね」

「何でそこで如月を司令官は見ているのかしら……?」

唯一、公私でも司令官と呼ぶ如月を見る。

駆逐艦らしからぬ謎の色気。自分と同じロリにしか見えないのに。

「……」

常識知らずと初めは言った。

接して分かるが、如月はイチイチエロい。

動作、声、顔、匂い、全部エロい。なぜだか知らない。

これが原因で、普通にしているでも最初の七海には常識知らずに見えていた。

振り返ると、彼女は他と比べて、響並みに常識のある行動だった。

なのに、七海が思い込んで忌避していた。無礼にも程がある。

「如月のエロさは天然ですかね？」

「……そんなことを言われても……」

色っぽい顔で困る如月。

長い艶やかな髪の毛に、しつとりと濡れている瞳。

美しさと混ざりあう危険な色気しか感じない。

同性でこれだ。迂闊に外に出るとロリコンに襲われかねない。

服装だって地味な長袖に、健全な範囲の短いスカート。

寒そうだが、気にしないらしい。

同じような姿の暁は微笑ましいのに、なぜ如月だけ……。

「およ？　七海ちゃんの視線がなんだか怪しいのね!?　如月ちゃんはおげないよ!?」

「睦月、あとでお仕置き」

「なんでえ!?!」

姉が騒ぐが後でお仕置き決定。誰がロリコンだ。

七海もロリだ。ロリがロリコンってどんな奴だろうか。

兎に角。皆が連れていけと何度も喚くので、渋々諦めた。

「はいはい……。行きますよ、行けばいいんでしょう？　はあ……。羽黒、お願いしても良いですか？」

「はい。承りました」

当日の提督代理に、羽黒を指名して、休み作るから早く戻るように言つて、パソコンを操作する。

面倒くさいが、仕事の一環と割り切ろう。七海はため息をついて、休みを作り出すのだった……。

七海の中身

強いられて、渋々出かける七海は、憲兵の同伴を求めた。

自分も責任者と言えど未成年。

成人した大人に付き添いを頼むと、一名が非番で皆と仲が良いので付き合おうといつてくれた。

……然し、と思う。

話をしにいったときのあの意外そうな顔。

そこまで七海は艦娘を嫌がっていたか。

あの七海が自分から、という驚きを隠していなかった。

(あたしだって不本意ですけどね……)

買い物に付き合うなんて聞いてない。

なんで艦娘と一緒に出掛けないといけないのか。

大体、艦娘は一般人とコミュニケーションが取れないんじゃないのか。

だから提督適正なんてものがあると聞いたのに。

だが……。

「艦娘のコミュニケーション？ んなもの、俺達がちよちよいと細工すれば普通に話すぐらいは簡単だぜ？」

「……」

工廠の長が言っていた。

明日は居ないから仕事は羽黒に聞けといいに来たら、何故と言われ渋々内容を教えておいた。

すると、思い出したことをついでに聞くと髭は言い出した。

いわく、外に出る際には特殊なチョーカー的なものをする。

これは一種の翻訳機で、艦娘と人間との会話を可能にする機械で、それを憲兵たちも着けているから、会話ができるんだそうだ。

逆に憲兵は妖精が見えないので、会話が限界だそうだ。

「そんなんあるんじゃ、提督の意味がないんですが」

「バカ野郎、必要に決まってんだろ。翻訳機は充電が極端に短いのが欠点なんだよ。一日もちゃいはいほうだ」

欠点として、チャージャーは充電が極端に短い。

一日も下手すれば持たず、またつけ心地も最悪で、痒くなるらしい。凄く。これが完成形。これ以上弄くると、形が崩れるので手を出せない。

未完成の完成品。こんなものは、いつもつけてはいられない。

あくまで、一時的なもの。

無くとも会話ができるし指示もできる、それが適正の意味。

「……珍獣使えませんね」

「なんだと!? 俺たちの発明にケチつけるのか!？」

率直に述べる。半端なものらしいし、妥当な評価だと思う七海。

多少揉めたが、取り敢えず明日はいないとだけ伝えて、翌日を迎えた……。

聞けば、建造されてから初めての街。

知識でしか知らない人間の世界に向かうと言って、おおはしやぎの皆を憲兵が纏めて

いる。

流石に子供の扱いがうまい。駆逐艦と言えば小学生のようなものしか鎮守府にはいない。

吹雪は一緒に来ていない。五月雨が誘つたらしいが、

「……ごめん。あの人と出かけるのは、まだ無理。信じられないから」

と言われて、断れたとガツカリしていた。

考えるまでもない。七海の事だろう。

吹雪には一段と嫌われていたし、初対面で噛みついてきた。

七海はどうでもいいが、不信任はあるんだろう。

吹雪の反応は当然で、寧ろ他の面子が簡単に信じすぎている。

……いや、違うか。司令官として利用できるからしているだけ。

信用などどうせ、していない。そんな気がした。

鎮守府を出る頃には、先生のように私服の憲兵に続いてカルガモの群れがついていく。

七海はそのあとを眺めてゆつくりと歩く。どこに行くかは向こうに任せる。

案内もあの憲兵がしてくれるそう。いわく、子供は好きなのだそう。

因みに女性。雰囲気は優しいお姉さんである。七海とは大違い。

「……………」

無言でアクビを嘔み潰し、自分の格好を見た。

皆はおめかしを精一杯して着飾っているが、七海は黒いジャンパーにジーンズ、肩掛け鞆と正直地味な格好だった。

浮かれた駆逐艦に合わせる気もない。面倒なので憲兵に丸投げしておこうと思う。

年下の相手は面倒くさい。それは本音であった。

「……七海は久々だろう？ 嬉しくないのかい？」

「そうよ。折角のお出掛けなのに仏頂面をしているわ」

なんか、いた。騒いでいる連中を見る。

暁、雷、電、五月雨、睦月。二名足りない。

……隣に響と如月が一緒に歩いていた。

「なんでここに來るんですか。向こうに行けばいいのに」

七海が面倒そうに言った。顔もそんな感じ。

二人も割りど地味なコートやジャンパーなどで防寒しており、如月は花の髪飾りをしている。

風に当たって綺麗な黒髪が踊って、慌てて如月は直していた。

響は何やら大きめの帽子を被っていた。白い長い髪の毛が、同じく風に揺れている。

見上げる二人に、七海はそう眼前を指差した。
すると、響はまあまあと諫めて、言うのだ。

「七海は個人行動が好きなんだね。前からそんな気はしてたが。私も、騒がしいのは好きじゃない。今日は付き合わせてほしい」

「如月は単純に、司令官をもつと知りたいだけ。何も、知らないから。教えてくれないし。きつと、艦娘の誰にも自分を見せてないと思うから」

……成る程。浮かれる空気から逃げる響と、此方に歩み寄る数少ない如月。

利害は一致しているわけか。七海に近づくと口実を合わせて寄れば、断りにくいと知った上で。

『そう。妙に姑息なことをするんですね、響』

突然異国の言葉を話す七海に目を丸くする如月。

わざと聞こえないように、言葉を変えた。

響は苦い顔になって反論する。

『失礼な。私はなにもする気はないよ。それに、口裏も合わせていない。疑われるなんて心外だな』

『どうでしょうね？ 由良のように、駆逐艦であたしの性格を一番知るのは響でしょ？』

何せ、趣味に付き合うのはあなただけだし』

『……知ること自体は否定はしないよ。けど、それはあんまりじゃない？』
『信用できませんね』

ロシア語が飛び交う空気にキョトンとする如月。

何やら七海が響に苦言を呈しているようだ。

最初に見慣れたあの嫌悪を見せている。

「……もしかして、ロシア語？ 司令官、ロシア語喋れるのね。スゴいわ」

それ以上に、一つ知ることができて嬉しい。

彼女はロシア語を喋れるようだ。覚えておくと如月は言った。

打算などない。本心から七海を知りたいと思っっているように。

「……」

「まだ疑うのかな？ 何も無いよ。七海、意味もなく人を疑うのは良くない。流石に私

達も傷付く」

響の反論に、七海は少し考えた。

如月は仲良くしたいと思っっているのか、頻りに知ろうとする。

響は元々少しは打ち解けている気もする。駆逐艦の中では一番だろう。

多分、年下と思われる艦娘でイムヤ以外に信じられる相手は響が一番だと思う。

トータルして、駆逐艦の評価は響以外は未だに大抵苦手。潜水艦も然り。

そんな中で、如月は言った。

「確かに如月はややこしい言動をしたと思う。それは、ごめんなさい。けど、忘れないでほしいわ。如月は、司令官を知って、仲良くしたいの。如月の事も知ってほしい。互いを知ることが、仲良くなる最善だと思うけど、どう？」

そう切り出した。

同時に、七海は率直に感想を溢す。

「……………如月、意外とあたしを見ていますね」

彼女も何だかんだ、七海の性格、理屈で説得するという部分を理解している。

仲良くなる最善で考える場合、その意思があるなら、互いを知るのは最善であろう。

七海は面倒くさいが、人間扱いすると言った手前、皆の心を、感情を蔑ろにする気はない。

言い換えれば、仲良くしても別にいいと言えなくもないのだ。

で、如月は仲良くしたい。ならば、この方法は最善であると考える。

「……………すみませんね。あまり、あたしもコミュニケーションは上手ではないので。どうも、皆さんがあたしに近づく理由は、利用するためだと思えて。……………実際分かりませんが」

「まだ言うのかい七海は。私もそろそろ泣きたいんだけど」

嘘泣きの準備をしている響が、七海に対して言うが、七海は言い切る。皆を信じるには、証拠がない。論よりも証拠という。

言葉だけでは、信じたくない。警戒は引き続きしていくと。

「……司令官。如月も警戒しているの?」

「いえ。ある程度は許していますよ。如月と響は。証拠として、行動していますので」
悲しそうにする如月にそう言った。途端に嬉しそうに笑う如月。

響は心底呆れていた。

「七海は何か、辛いことでもあったの? どうしてそこまで人を疑うんだ。信じるのも、根拠を持ち出さないと信用してくれないの?」

「……これはあたしの性分です。物証もなしに、行動もなしに信じるなんてバカがすることです。響は違うんですか? 根拠のない信用など自滅するだけですよ? お人好しはバカを見る。世の中の鉄則ですが」

「……七海。君は、やっぱり少し頭がおかしいと思うよ。今、実感した」

七海の言い分に、響は途方に暮れていた。

なんでこう、こいつは根拠やら証拠やらと目に見える形で求めるのだ。

即物的にすら感じる。信じてほしいなら証拠を見せろ、あるいは示せ。

そういう、前提がまず彼女の中にはあるらしい。

人間扱いにされれば、今度は人間としてそういう壁を七海は作っている。よくもこれでまあ、学校に友人が居たものだ。

七海は不愉快そうに響を見る。

「……何が言いたいんです？」

「よくそれで友達いたね」

真つ直ぐに投げると、七海はとんでもない事を言い返した。

それは響の予想を超える範囲の返答であった。

「友達は、居ますよ。……互いに利害の一致で結ばれているだけですけどね」

そう。あろうことか、七海は。

友人の繋がりを、利害の一致と言つて、感情ではなく理屈で語り出した。

啞然とする如月と響に、七海は説明した。

「学校では、あたしは他人に勉強を教えたり、教わったり、あるいは一緒に出掛けたりしていました。それは、その都合があたしで良かったから。あたしも、都合が良いからつるんでいました。助かりましたし、助けました。だから、居ましたよ。互いを助けるのを友人と言うんでしょう？　なら、友人です。向こうも、あたしじゃなくてもいい場合はあたし以外を使いました。一切文句はありませんし、提督になる際も、応援してくれましたが……別にあたしを引き留めるものも居なかった。要は役目が終わっ

たんでしよう。それなら別に良いです。また、次の機会にあったのなら、話すぐらいはします。向こうが何かを求めて、あたしに得があるなら付き合います」

なんとという人間関係。全部損得勘定で動いていた。

それは、七海がおかしいのか。周りもおかしいのか。

友情とか、愛情とか、感情的要素が一切絡まない計算しかない冷えきった間柄。

つまりは、価値がないならそのまま捨てる。割り切ると。

互いのそれを言外にわかった上で、接していたというのか？

「……昔からあたしはそれで問題なかった。じゃあ、鎮守府でも問題ないでしょう？

だって、響も如月も人間です。あたしに何か得をもたらすなら、構いません。あたしも、

何か得を渡せるなら等価交換。平等ですから、文句はありませんよね？ ……今のところ、

如月は様子見ですかね。響は教えてくれる。あたしにとって、それが一番のメリット

です。友人と言えなくもないでしょう」

最低だ。本人を目の前に、平然と宣うこの無神経さが。

あるいは、七海にとっては、この感情という温度のない、計算式のようなやり取りが

人間関係そのもの。

人間扱いで、この様だ。化け物扱いであれだけ揉めておきながら、七海は根本が歪んでいる。

理屈というよりは、機械の計算。そこに、温度はない。

「七海。君は人間なのか？」

「人間ですよ。何ですか、突然」

思わず響は青ざめて聞いていた。

何だこいつ。本当に人間か？ 道理で怒りや苛立ちしか見えないわけだ。

不愉快な事をされると、怒るのは当然だろう。

七海にとつて、不利益を講じているなら、攻撃していたのだ。

やりたくない提督の仕事は不利益。艦娘の感情は負担の増加で不利益。

全部、そういう判断でやっていた。ああ、分かった。響は。

——七海は、理解したら危険な人間だ——

邪魔になればきつと捨てる。

人間であろうが、目障りになれば、死なせないだけで排除しに来る。

冷血、冷酷なんて物じゃない。これは、数式。

邪魔になる、はイコールで繋がっている。排除、という答えに。

そこに一切の変化はない。数式は正直だ。

言われた通りの答えしか導かない。故に、七海の行動は全部イコールなのだ。

信用できない。証拠を見せれば信用する。彼女の原理は数式という理屈。

ああ、機械みたいなものじゃない。七海は機械と大差無い。

こんな感情がない人間を、二人は初めて見た。同時に狂っていると思った。

(七海……怖いよ、私。君は結局、人間相手でも大して変化なんか無いじゃないか……)

問題はそこじゃなかった。七海の歪んだ人格そのものだった。

七海という人間性話だった。そして、こいつは改める事はたぶん無理だ。

人間は根本を変えるなんて早々出来ない。在り方というものになる。

七海という人間の在り方は数式とさえ思える理屈での判断。感情は、熱は、無い。

響はとても怖かった。七海が逆に、化け物に見えていた。

(……………司令官)

如月はそれでも、理解しようとしていた。

健気に、真摯に、七海を受け入れようとしていた。

理由は、何だろうか。そこまで知り合って長いわけでもない。

けどさつき、自分で言った。互いを知る。仲良くなる最善。

ここで足踏みしたら、ずっと仲良くは出来ないと思う。

(如月はそれでも、司令官を知りたい。冷たい人だとしても、何時かきつと、分かってくれと信じて……)

普段接する、数少ない人間。自分の命を託す人だから。

信じなければ戦えない。信じてもらえなければ意味がない。

如月は七海を、感情を分かってくれろと信じたかった。

こうして、皆は出掛けていった。それなりの時間だったと、七海は終わってから思っていた。

楽しくはないが、無駄ではなかった。その程度で感覚で。

こんな女だというのに。

果たして如月のそれは、報われる日が……来るのだろうか……？

初めての対抗演習 作戦会議

静かに二人が戦慄しているのを知らない七海は、順調に仕事を続けている。
近海防衛、任務、遠征、海上訓練。これらを経験して、残すものは数少ない。
それは、艦娘の改造と、対抗演習の電報だった……。

先ず、改造である。艦娘の強化を渋っていた訳ではない。

ただ、練度を十分あげてからの改造をしようと決めていた。

練度は言うなれば艦娘の強さを表す数字ではある。

だが、それは目安だと七海は思う。何せ、練度は何をしても勝手に上がる。

戦おうが遠征しようが訓練しようが勝手に上がる。

ならば、練度が高いことは、強いという訳でもない。

七海が目指したのは、死なないための練度である。

要は実戦で練度を中心にあげていた。

故に、練度のわりにはこの艦娘は実戦に慣れていた。

数は少ないゆえに、常に何かしらで経験値は上がっている。

濃密にあげるのなら、やはり戦うことだ。危険なのは承知の上。

だが、訓練であげた練度など張りぼてと考えた七海は兎に角戦いを選んだ。

結果、大体20以上の練度を保ち、近海では十分通用する練度にまで成長。

そして、一斉に改造した。全員だ。

五十鈴などは練度12で改造できたのだが、七海は一斉にやるから我慢してと頼んで

いた。

……珍しく、命令ではない。お願いだった。知らぬ間に対応は優しくなっている。

以前なら有無を言わずに一方的に通達して終わりだったが、今は事前に本人に伝えるぐらいはしている。

成長と、言えるのだろうか？ 中身は変わらず機械のまま、数式のままだが。

一斉にやった理由も、一部だけ強くすると自分の指示じゃ性能の差が出て妨げになる。

それほど、一度で上昇する性能に他が追い付けないという理由であった。

因みに重巡の一名は練度が足りずにいまだに無改造。

文句を言う鈴谷は練度が一番高い。

しかも種類が変わる。現在備蓄する装備の候補となっていた。

何れは航空戦艦も迎え入れたいと思う。資材はちゃんと計画的に使っている。

不意に対処するだけの備蓄はしていると皆は言うから、大丈夫だろう。

「潜水艦と防空は五十鈴にお任せ。提督を勝利に導いてあげる」

「……でも艀装の装備は、二刀にするにはそれほど搭載できませんね。じゃ、特化してください。主にお魚退治に」

「お魚って……まあ、良いわ」

七海は相手の名前を覚えるのも面倒くさくなっていた。

自分の担当する海域の敵は適当にいつも言っている。

しょっちゅう出てくる潜水艦はお魚退治、あるいは害虫駆除。

戦艦は火力バカ、空母はカトンボ。軽巡、重巡は重たいのと軽いの。

駆逐は雑魚、と言った風に。強化したものが出来ない割りと平穏な海域だから言える話だ。

普通なら、舐めていると思われても仕方ない。

呆れる五十鈴にソナーと爆雷を大量に詰め込み、日々お魚を退治してもらっている。特化させると強い。五十鈴という艦娘は潜水艦を皆殺しにする達人だ。

以前は駆逐艦と一緒だったが、今は随伴に一名居れば全滅する。

「ふん。どうよ、七海。五十鈴に頼って良かったでしょ?」

「前から害虫駆除には五十鈴をメインとしていますが?」

「……なんであなたは、素直にありがとうって言えないのよ」

「頼りきりなのは今も変わってませんから」

戦果を見せて自慢げに胸を張る五十鈴に、前から頼っていると素面で言う七海。

未だに素直にならない面倒な少女だが、多少報告時に私語を交せても怒らなくなつた。

トゲは無くなってきてはいる。が、感情の起伏は薄く、怒り以外はあまり出さない。

この辺は、七海という人間の性格なのかもしれない。

「イムヤもまだ、改造は出来ませんか」

「んー……。潜水艦って、改造できるまでの間が長い。イムヤは確か練度50だったかな？」

「……………」

「司令官、途方に暮れてるけど大丈夫？」

なんていう会話をしていた。潜水艦も無改造だ。

要求される練度が高すぎる。50ってなんだ50って……。

この鎮守府で、練度上位は大体特化している艦娘であった。

潜水艦特化の五十鈴、空母特化の古鷹と由良、あとは大捕物のイムヤとイク。

イクは然し、性格の問題なのか土壇場でミスる悪癖があるので、最近では哨戒任務が多い。

イクは夜に強いよね！ という自己主張を汲んで、某軽巡と毎日夜間警備のお仕事
中。

実際夜の方がイクは強い。逆にイムヤは夜に弱かった。

「何でだか分かんないけど、不安になるの。イムヤが外したら、皆が死んじゃうって

……。指先が震えて、上手く魚雷を放てなくなる……」

と、血の気が引いて、七海に自分でいっていた。

試しに夜間訓練を実施したのだが、言う通りイムヤは簡単に撃破されていた。適性なし、とさっさと断じて昼間の戦い以外には彼女は出なくなつた。

「元より潜水艦は得意不得意がハッキリしています。なら、それで構いません。あたしも不得意をしたくないので」

と、アツサリと許可して、現在は主戦力の戦艦と重巡キラーであつた。

そして、七海は自分の戦果を見て気がついた。

(……あたしって、潜水艦の指示の方が得意なんですわね)

意外なことに、七海が最も得意とする艦娘は潜水艦。

駆逐や軽巡などに比べて明らかに撃破している割合が高い。

俗に言う大捕物が一番数字が高かつた。

と、自分の得意分野も発見している今日この頃。

初めての対抗演習のお知らせが、任務として届くのだつた……。

内容は、連合艦隊の練習。

数名の新人提督同士で、大型艦隊の指揮を数名で取りながら対抗演習に励め、のとのと。

七海の場合は、知り合いの提督と一緒にやれとメンバーが決まっていた。

第一、第二艦隊に分かれて、一名につき艦娘二人ずつ指揮して全体とせよ、と。

つまりは、艦隊の中に複数の提督がいる。協調性も必要だった。

合計12の艦娘からなる連合艦隊。七海はまさかの第一艦隊の方だった。

第二ならば支援で済んだのに、矢面に立たされていた。

旗艦は話し合って各自決めよと通達されている。

任務が来てから早速、知り合いの提督が飲み会しながら決めるから顔出してくれと誘われた。

(あたし未成年……)

最年少の辛い所だ。酒は飲めないが、必要なので出掛けることにした。

代理はこの日は飛鷹に任せる。万が一があり得るので。

「万が一？」

「こっちの地元でやるんです。あたしに気を使ってくれたみたいで。なので、帰れなくなった酔い潰れた連中が押し掛けるかも。飛鷹は慣れていると聞いているので、準備だ

けしておいてください」

「……ええ。分かったわ。帰りは？」

「憲兵さんにお願ひしてます。迎えに来てくれるそうです」

飛鷹は姉妹に酷い飲んべえがいると聞いている。

彼女は深いため息をついて、了承。準備しておくと言われた。

夜遅くなるので、付き添いに憲兵を頼み、一緒に出ていく。

帰宅ラツシユの時間帯。

明かりの漏れる言われたお店に送られて、終わったら連絡と言われて、彼女はお店の暖簾を潜る。

人生初の、居酒屋であった……。

居酒屋鳳翔。

それが、指定されたお店の名前だ。

狭いお店で、店内は座敷とカウンターだけのこぢんまりとしていた。

いわく、海軍の関係者が経営しているようで、機密に関しても大丈夫だそうで。

本日は貸しきりだそうだ。

「おー!! 渋谷、こつちだー!! こつちー!!」

奥の座席で、既に酔っぱらっている知り合いが頬を赤くして、手をふって呼んでいた。呆れる七海は、酒の臭さを我慢して向かった。

「赤松さん、もうべろべろですか?」

「だっはっはっは!! 悪いなあ、鎮守府じゃ酒が飲めねえんでき!!」

若い男性が、豪快に笑っていた。こんなので、本当に作戦を立てられるのか。

ただ口実に騒ぎたいだけのように見えるが……。

七海もあがる。私服の数名の提督が、久し振りと挨拶して座っていた。

「お久し振りです皆さん。ご活躍は聞いております」

丁寧に挨拶をして、座った。机の上には大量の肴とビールが並ぶ。

まだ早いのに、三人ぐらいは出来上がっていた。無礼講と言うが、やる気はあるのか。夕飯も食べていく。経費で落とすが、赤松の鎮守府が支払いをしようので有りがたく頂こう。

「なに、今日は簡単な打ち合わせだ。連れていく艦娘と、互いの戦法のすり合わせだな」
適当に言っている赤松。一番の知り合いがこれでは、当てには出来ない。

酔っ払った状態でも、ちゃんと最低限の事は決めると言うが……。

(大丈夫ですかね……?)

一応資料なども持ってきたが、使う機会は果たしてあるかどうか。

兎に角、演習に対する会議を始めるのだった……。

「俺は、ズバリ嫁の姉妹を連れていく。誰がなんと言おうとこれだけは譲らんツ!!」

数時間経過。意外と皆さん真剣に取り合っていた。

酒が入っているわりには、マトモな事を言う。全員メモを記録し、忘れないようにしている。

七海も記録は取っていた。酒の席と言えど、やはり提督だ。

大人を貶しすぎたと内心反省している。流星は皆、規模のある鎮守府の長。

日々激戦を戦い抜く精神は伊達じゃない。感服していた。

セクハラで捕まった赤松は、ちゃんと和解して現在は仲良くやっているという艦娘をつれてくるという。

例の戦艦らしい。七海が詳細を聞いた。

「おう! 高速戦艦、金剛と榛名だ!! 良い娘っこだぜ!? やらねえけどな!!」

ビールをあおりながら豪語する赤松。口許に泡がついていた。戦艦金剛、戦艦榛名。

成る程、速力がある戦艦だったか、と七海は思い出す。

二人して戦艦。しかも支援の第二艦隊の方だ。

第二艦隊の旗艦は金剛でいいと、そちらは決めていた。

一応、混戦となる予定だ。一齐に殴りあうらしい。

第二艦隊が援護するから、第一艦隊全員突撃、という雑な動きだった。

第二艦隊は戦艦と空母で固まっている。金剛、榛名、空母赤城、加賀に航空戦艦伊勢、そして。

「決戦兵器を導入したい。……うちの大井だ」

一人がそんな事を言い出した。

大井。確か、改造後は重雷装巡洋艦という全身魚雷の塊のような凄まじい艦娘になると聞いた。

軽巡から派生した物らしいが、希少で中々新人の場所にはいないらしい。

七海はその決戦兵器について聞いた。

「一つお伺いしますが……装備の魚雷は何を使いますか？」

「装備か？ ああ、61cmの酸素魚雷を予定している」

「……………」
魚雷のなかでも火力の高い装備だ。それによる雷撃なら、戦艦が来ても対処は容易い。

が、問題は果たして相手に当たるか。

魚雷は追尾性能が最近のはついているらしいが、そんな危険な相手を相手が放置するとも考えにくい。

第二艦隊はまさに攻撃特化。守りがまるでない。

空母たちも攻撃ばかりに気をとられて、守備を無視している気がする。攻撃は最大の防御。殺られる前に殺れを、皆はやりたいらしい。

圧倒的物量と火力で押し切る。悪くはないが、万が一の保険がほしい。彼らの火力を押し返すかもしれない相手がいたら、困る。

相手も新人とはいえ、何をしてくるか分からない。

第一艦隊も、重巡や軽巡が大半で、漸く第二艦隊のうち漏らしを倒す算段ぐらいで。(……不安ですね。あたしとは、やり方が違いすぎる……)

火力の一辺倒。弾幕と航空だけで倒せるのか。

七海は火力をあまり気にしない。

無事に皆が帰ってくる戦いしかしたことがない。

出来るとは思えない気がする。

一応言い出してみよう。七海は盛り上がる彼らに口を出した。

「……あたしは、如月とイムヤで行きます」

意外な発言だったか。駆逐艦と潜水艦。

当たれば一撃で持つていかれるような脆い艦娘を、七海は選んだ。

皆、驚愕していた。

「……意図を、お聞かせ願えないか渋谷提督」

大井を出すと言った提督が、理由を聞く。

七海は、火力だけの艦隊の、言わば隠し玉のような物だと説明する。

「相手がもしも、持久戦を選んだ場合に、息切れ起こして止めをさせなかった、という情けない結果は嫌です。あたしは、敢えて守りを意識していきます。駆逐も潜水艦も、幸い燃費は上々です。火力は、皆さんに任せます。あたしは、守りを意識してみようと思ひまして。どうせ、火力も装甲も貧弱な駆逐です。いっそ、ならばカバーしてくれる皆さんに頼って、脇役に徹します。万が一、相手が残っていた場合の最低限の火力さえあれば、問題ないかと。潜水艦には、戦艦や重巡、空母は餌です。隠れて狙い撃ちするのも、ありかと思ひますし、あたしは潜水艦の指揮が得意だと最近わかったんです。ですので、火力をカバーする為に駆逐と潜水艦を選びます」

という七海に、皆は暫し考える。

互いに見て、七海の提案を聞いて、聽て。

「……ありだな。私は賛成だ。殲滅はうちの大井に任せてくれ。少し、私も対空を視野に入れておこう。大井は魚雷が全てではないと、見せてやる」

「……確かに少しは守りにも気を使うか。おつしや、三式弾持つていくか！ 火力は弾変えれば補えるな！」

皆は柔軟に取り入れた。火力を重点に、守りは装備の変更で補う。

軽巡の多様性や重巡の拡張性なら問題はない。七海は守備特化した。

最低限の自衛の火力と、イムヤの特性を活かして戦おう。

(125 mm速射砲、如月は使えますかね……?)

吹雪が無理だと投げたあの速射砲。

火力は十分だが、対空は出来るだろうか。

如月にした理由は、如月は響よりも守りが上手いから。

睦月のフォローをしている訳じゃない。彼女なら、行けるだろう。

あれこれ、互いに案を出しあって、皆は作戦を進めていく。

七海は頼るべき部分を、頼ることにした……。

追記。

飲んべえは無事に自分の鎮守府に帰って、嫁さんに絞られたらしかった。合掌。

エロサキキュバス覚醒

……最初、その話を聞いたときにはとても驚いた。

「き、如月が出るの!?!」

駆逐艦如月。旧式に分類され、その性能は駆逐艦のなかでも最も低い部類に入る。戦闘向きじゃない。というか、戦いは苦手な部類。遠征などで輝く型式であった。なのに、この人は言ったのだ。イムヤと一緒に出ると。

「どうして……?」 如月じゃなくても、他にも駆逐艦はいるのに……?」

真っ先に出てくるのは、疑問。

対抗演習に抜擢されるような性能はしていない。

なのに、七海は語った。

「性能なんて、生きていれば何だって構いません。……正直、周囲の人は攻撃に突出して

いるんです。フォローが必要になるでしょう。……如月。あなたが一番適任なんです」
一から説明する。今回は、守りを視野に入れていたので、先ず駆逐艦と潜水艦を選んだ。

軽巡も重巡も既にいる。だから、被らないようにしていると。
夜の執務室。飲み会から帰ってきた早々、如月は叩き起こされた。

部屋で眠っていたのを、マスターキーで侵入されて誘拐された。

(いやー!?! 誰かー!?!)

口を何かで塞がれて、首根っこを捕まれて左手で引き摺られていく。
バタバタ涙目で抵抗する。無理矢理引き摺る相手。

寝ている間に無理して引いていったのか、寝巻きが汚れてしまった。

先日、七海が何の気紛れか奢ってくれた大切な、初めての贈り物なのに。

息苦しくて気がつけば廊下を無言で引っ張られていた。

で、数分かけて執務室に拉致。犯人は七海本人であった。

いわく、何度声をかけても起きないので、強引に回収したらしい。

今すぐじゃないと困るので、憲兵には知らせていたと。

起きない方が悪いと言いたげな七海に如月はべそをかいていた。

何でこの人は毎回理屈で判断するのか。凄く怖かった。

泣き出す如月に、流石に七海も慌て出した。やり過ぎたと感じていた。

自分でもどうなんだこれと思いつつ実行したので、泣かれるのは想定していた。

実際泣かれると結構、罪悪感を感じた。取り敢えず散々謝って、抱き締めて宥めた。

スキンシップを詫びですとは思わなかった。いや、全面的に七海が悪い。

時間をかけて泣き止んでもらい、文句を言われて反省した七海は、着替えも貸した。

彼女の寝巻きは汚れてしまったので、反省も込めて私物の服を貸したのだが……。

(……司令官のにおいがする……)

初めて私服に触れた如月は、酷い扱いのことも忘れた。あつさり。

何せ、他人の服の匂いなど嗅いだことは建造されてから一度も無いのだ。

新鮮な気分になり、それが仲良くしたい七海だから、尚更テンションアップ。

嬉しそうに頬を赤くしてクンクンしていた。七海は気にせず、着替え終わるまで待つ

ていた。

そして、冒頭に戻る。

真夜中の執務室で、秘密の会瀬。如月には何だかいけないことをしている気分にな

る。

七海はボーッと熱に浮かされて、袖の匂いを夢中で嗅いでいる如月の顔を見て、呆れ

ていた。

「何をしているんですか如月？　なんです、本当にエロサキュバスですか……？」
「違うわ。それは鈴谷さんの専売特許」

鈴谷の扱いはお色気キャラだった。酷いが、気にしないで続ける。

「そういえばサイズ合ってます？　あたしと背丈は変わりませんが」

「……実は胸のサイズがキツいの……」

実際、胸元は少し窮屈だった。

すると途端に殺気を纏う七海。

見慣れた不機嫌顔になった。

「そうですか。すいませんね、凹凸のないドラム缶で」

気になっているらしい。謝った方が良さそうなので如月は謝った。

近距離で睨まれるとやはり七海は怖い。

外見は、高校生には見えない。

小柄のやせ形。寸胴で、髪の毛は如月よりも長く、焦げ茶色。

ただ、ボサボサで枝のように伸びた毛先が広がって、基本的にだらしない。

外見には無頓着らしく、七海は軽巡たちに髪の毛を弄られる。

最初はかなり嫌がっていたが、最近では諦めたのか、お人形のように弄ばれていた。

由良や五十鈴は提督らしい外見を、とたしなめるため追い回しているのも見かける。

本人は寝癖などもそのまま仕事しているが。

客がくれば簡単に直すけど、それ以外は放置している。

そんな七海だが、意外と良いにおいがするようだ。

(あつ……如月、この匂いは結構好みかも……)

同じ女性だからか、少し甘く感じるにおいはなんとも言えず、たまらない。

口では言えない幸せな気持ちになれる気がした。

この時点で如月さん、エロサキユバスと言われても否定できなかつた。

危ない道に片足を早くも突っ込んでいるようだった。

恍惚の表情で再び袖の匂いを堪能している如月。

蕩けたような瞳で、獲物として七海を見ていた。

(もつと欲しい。もつと、もつと司令官のにおいを間近で……感じたい)

抱き締められたとき、凄く安心した。

怖かった気持ちが一気に鎮静化していくのを感じた。

酔いしれる様な危険な甘い香り。

蜜のように感じる如月は、酔っぱらいに似た表情であつた。

「……人の服で何を変態的に喜んでるんですか？ 別にいいですが、話さえ聞けば、

些事は気にしませんので」

七海も大概である。大筋さえ無事なら自分が獲物として見られても気にならない。反応するのも確認したし、話を続ける。

「脱線していました。先ず、選んだ理由でしたか。それは、守りに関しては如月は一番だからですよ」

適任として、如月を選んだ理由。

他の駆逐艦は適性がないこと。

睦月は性能通り、遠征に適性がある。荷物の運搬や要領がいい。

但し、戦闘時にはパニックになりやすいので不向き。

次、吹雪。論外一人め。

能力は全てにおいて平均を超える優秀な艦娘。

然し、七海への不信任が強いため客観的に見て向かない。

次、五月雨。論外二人め。

天性の、最早呪いレベルのドジのせいで遠征以外は任せたくない。

というか、表に出ると予想できない被害は拡散するので出してはいけない。

最近では本人が気を付けても他から巻き込まれる事案もあるので要注意。

次、暁。論外三人め。

性格的な問題。幼すぎる暁は大任なので無理。

どうせ未だに治らない見栄で自滅するので、却下。
次、響。

どちらかと言うと、フォローよりもチームプレー。

姉妹との連携が素晴らしく高いため他人とやると逆に効率が下がる。

次、雷。向かない。

何でも彼んでも引き受けてオーバーフローするので、自滅するだけ。

彼女は響の監視下に置くべき。

次、電。向かない。

そもそも性格が楽観的平和主義。

競争心のない内面なので、やるだけ無駄。実証されている。

なので、如月になった。

「……吹雪ちゃんは？」

「無理です。当てにしません。彼女はやる気がないので」

能力に一切の問題はないが、不信感がある吹雪は頼るには不確か。

裏切る可能性があるので連れていかない、と七海は判断していた。

結局この大役は如月の元に来てしまった。

「……自信ないなあ」

正直に如月は言った。

期待されても困ってしまう。

所詮は低性能の旧式駆逐艦。自分の性能ぐらい自覚している。

内容は主に対空と、主戦力の防衛。あとイムヤのフオロー。

一辺に、できる気がしない。力不足なのは何よりも自分が一番分かっている。

「嫌ですか？」

「……んーん。嫌じゃないわ。できないと思うだけ」

「まあ、性能から言えばそうでしょうね」

七海もそこは認めている。旧式には重い役目。

数がいけないのは分かるけど、如月じゃなくても問題はないと思う。

辞退したいと、如月は言った。……なのに。

「あたしは性能だけで判断したんじゃないです。内面でも判断してます」

性格を考えて、七海は如月を選んだ。そして、託そうとしている。

意外そうに見る。あの七海が、艦娘の内面で考えるとは。

性格的に信用できると思ったから、彼女は決めたそうだ。

「響は、姉妹の中の方がずっといいんですよ。外行きじゃないと思います。身内の中で

真価を発揮する人間ですし」

響も候補だったと七海は言った。けど、彼女は姉妹の中でこそ一番輝く。そう見れば、パニクる睦月よりも如月。

自爆が連鎖する五月雨よりも如月。こうなるわけだ。

「でも……」

それでも渋る如月。

自信のない、旧式というレッテルに足踏みする。

七海は聴てこう言った。

予想外の条件を出したのだ。

「そこまで渋るなら、何かご褒美でも出しましょう。あたしに出来る範囲なら、何でもしてあげます。やる気、それで出してくれませんか？」

……なんと。

七海が譲歩した。艦娘相手に、褒美を出すと言い出したのだ。

あの七海が。艦娘に厳しい七海が、何でもしてくれる。

如月、瞬間的に反応していた。

「やるわ!! 司令官のご褒美で何だか出来る気がする!!」

目を輝かせて、やる気全開。驚く七海に、条件を出していた。

チャンスだった。中々進展しない七海と仲良くなるチャンスだった。これを逃がす手はない。如月は必死に考えて、やがて出した。それは、後から思い出すと七海の大きな失敗の一つであった。嬉々として如月はご褒美の内容を明かす。それは……。

「如月の言うことを好きだけ聞いて!!」

……という強欲そのものをお願いであった……。

二日後。

海上訓練に励む如月がいた。

今日は瑞鳳相手に対空の特訓だった。

125mm速射砲を扱えるように、練習を重ねていく。

この主砲、本当に扱いにくい。

威力は何やら砲弾が特殊らしく、破壊力抜群。

射程もそこそ長く、取り回しも悪くはない。

問題は、連射性能だった。

反動がバカみたいに強く、速射砲の名の通り連射していくと、狙いがどんどんずれていく。

最大速度でぶっぱなすと、コントロールを失い暴走する。

で、しっかり構えないと反動で尻餅をつく。対空にはとてもじゃないが向いていない。

なので、七海は考案した。工場の髭が悲鳴をあげるレベルの案を。

「性能は装備で底上げしましょう。珍獣、如月をフルアーマメントにしなさい。ボーナス出しますのぞ」

例の計画で引き取りを続けて、余剰パーツさえ出てきている現状で出来る、最強の如月艦装の改造。

要は、オーバーホールして根本から改造しろと言い出した。無論反論する髭。

「アホ!! 出来るかそんなもん!! 練度以上に改造したって、如月の嬢ちゃんが操作で

きずに暴走して最悪自滅だ!! なに考えているんだおめえは!!」

必要な装備を全部搭載しろと言われたのだ。そりゃ怒る。

が、七海は聞かない。

「練度をあげればいいなら、順序よく上げていけばいいんでしょう? なら、この順番でやってみなさい」

予想していたと言わんばかりに計画書を提出。それは、如月の特訓のメニューだった。

暫くはひたすら訓練。イムヤと一緒に死ぬ気で訓練。そうすれば問題ないと。

「……すげえ。何じゃこの細かいスケジュール!? おめえ、これこの短時間で仕上げたのか!?!」

髭も愕然。緻密な計画書は、本人も了承で他者が見ても無理のない健全なスケジュールだった。

「本気でした。ま、装備の在庫と如月の特性、各種装備の性能を知れば、簡単に組み立ては出来ませう」

重点的に如月の超強化を開始した。

元々低性能なら、底上げして戦えれば問題ない。

それで高性能に追い付いて見せると、如月もやる気スイッチが入っているので、一週

間後には。

「……………どう？　今の如月なら、島風ちゃんにも勝てそうよ!!」

「数字の上では勝ってますね。……………けど、なんか改二ぐらいにまで性能上がってませんか？」

練度はまさかの65。イムヤの55を大きく抜いて、ついでに改二にしておいた。

恐ろしいのは、如月の成長速度だった。

艦装を全部載せなるべく、基礎を鍛えているうちに、何でか練度がバカみたいに上がっていた。

因みにぶつちぎりの練度一位である。実戦も交えて特訓した成果だと本人は言う。

七海はここまでは想定していない。完全に如月のガッツであった。

「如月も本気だったわ!!　ご褒美に今度は一緒に寝ましょ!!」

「……………良いですけど……………」

で、七海は如月の言いなりである。

如月のご褒美に拒否権の剥奪を要求した。

つまり、如月のお願いは基本的に絶対に聞いてもらえない。恒久的に。

毎日毎日、如月は七海に何かしら要求しては、七海は困惑しつつも受け入れていた。

如月のお願いは回数を重ねるごとに悪化……………もとい、過激になり、現在は既に同棲の

ようになつていた。

「うわあ……」

「何が起きてるのね……!?!」

響はドン引きしていた。睦月は驚きを隠せない。

なにしてんだこの駆逐艦のエロサキュバス。

本人も自覚なく、今では如月は仲良くを女子校のような、仲良し意味深になつていた。本人の友愛は建造され間もない時期もあつて、歯止めが利かずに結果、友愛を超えた意味深状態に。

満足している如月。七海に四六時中べつたりなので、たくさん知れた。

「んふふふ……」

「……なんですかこれ?」

同じぐらいの背丈の、満面の笑顔の艦娘に嬉しそうに抱き締められる七海。呆然と、どうしてこうなつたか、分からない。

エロサキュバス如月。

演習を切つ掛けに先ずは覚醒。

意味の分からない七海を、見事に制覇しつつあつた。

演習までの日には、すぐ近くだつた……。

初めての対抗演習 始まり

会議から二週間後。いよいよ、演習の日がやってきた。

あれから、各々連れていく艦娘は徹底的に鍛えたと聞いている。ルール上、互いの艦娘は対峙するまでは分からない。

想定する相手を考えるのも提督の仕事。

「どんなことにも対応してこそ。皆は通常任務をこなしつつ、由良に鎮守府を任せる。いつてらっしゃい、提督さん」

「いつてきます」

笑顔で頑張って、と見送られて、三人は憲兵と共に鎮守府を後にする。

緊張しているイムヤ。ガチガチに固まっていた。

「……どうしましたか？」

七海が送りの車の後部座席、中央に如月とイムヤに囲まれながら問う。

至って普通の七海は、緊張と言うものがないらしい。けろっとしていた。

「し、司令官は……」

「ああ、移動中ですので普段通りでいいです。意識すると余計に苦しみますよ」

司令官と呼ばなくていいと言うと、情けない顔でイムヤは泣き言をいった。

「や、やっぱあたしには無理だよ……。沢山強い艦娘いるんでしょ？ お姉ちゃんが決めたのはいいけど、あたしは出来る感じしないよ……」

普段では一人称が七海と同じになり、姉と唯一呼ぶ真面目なイムヤ。

もう一名はちゃんぽらんゆえ、頼れる人がいいと言うので以前許可して呼んでいた。

「気負う事などありません。見てください、この如月のだらしない顔。リラックスを通り越して頭まで溶けてますよ？」

隣で改二のお祝いをくれと言われて受け取った髪留めや上着をくんくん匂いを嗅いで愉悦している変態がいた。

如月、あれ以来匂いフエチになったのか、兎に角七海の匂いを犬のように嗅ぎたがる。

要はやっぱりエロサキュバス。完璧発情している顔であった。

「……ハッ!? な、何かしら司令官？ 如月は緊張しているわよ？」

今更我に返り、取り繕うが七海の目は呆れていた。

「はいはい。そこまで気に入りましたか、アネモネの髪留め」

「ええ。似合うかしら？」

「似合うと思うからお祝いで買ったんですが？」

黒い長袖の上着を普段の制服の上から羽織り、アネモネの髪留めをしつかりとつけてから、如月は窺うように聞く。

何でもかんでもお願いを聞いている状態は、最早なし崩しのようなもの。

最初はやる気を高める為の物だったが、予想以上の成長に合わせて、延長して出来る範囲の事を聞いていた。

基本的に出来ない行為は言わない。

求められたのは、ご褒美買つてとか、添い寝としてとか、同棲してもいいかとか。

大抵、そんな半端なものばかりだ。出来ることだったので全部叶えた。

断る理由も特にない。いや、同棲してもいいかと言われて流石に嫌がったが、一応一番の日で妥協させた。

自分の時間を失うのは嫌なので、折り合いはしつかりと。

如月も兎に角一緒にいる時間を増やそうとする。理解をするには手っ取り早いですが、既にストーリーカー顔負け。

それを嫌がらないで理屈で、自分が言い出した手前、可能な範囲と断じる七海もやは

りおかしい。

執拗な行動でも、非常識でも、七海は自分が言い出したのだから最後まで面倒見るといのが当たり前と判断。

暴走していても艦隊任務に支障は出ないし、自分の時間もあるし、誰にも迷惑はかけない。

故に平然と受け入れて、そのまま過ごしている。理屈だが、自分が対象の理屈であつて常識には欠けている。

無論知つての上。が、軍規違反でもないし、憲兵にも知らせて許可を貰っている。

つまりは、問題ない。あれこれ言われる筋合いはないと下して、一緒にいた。

「……絶対にこう言うときに、司令官は褒めないわよね。もしかして、ツンデレ？」
「生意気言いますね、駆逐艦のエロサキユバス。折檻がお望みですか」

大抵、七海は他人を褒めない。遠回しにしか、言わない。

だからイチイチ誤解されるのだ。言い方も素っ気ないし、と如月は気付いた。

指摘しても大体、理屈で潰されるが。口で勝てる試しもない。

本当に口喧嘩も強いが、その異常な精神のあり方はこういう場面でも強かった。

「緊張して、全力を出せないなんて言わないでくださいねイムヤ。プレッシャーをかけたくはないですが、あなたは如何せんビビリすぎです。潜水艦の特性はなんですか？」

マイペースに、イムヤを落ち着かせる。

が、やっぱり方法は悪い。余計に胃痛でも感じているのか、前屈みになった。

イムヤも適当な私服を着ているが、あとで水着に着替えて潜航する。

浮上はなるべくするな、と口を酸っぱくして言われていた。

出来ることを復唱させる七海は、言い聞かせていた。

「じゅ、重巡と戦艦と正規空母を足元から襲える……」

「天敵は？」

「軽空母と、爆雷とソナーを持った軽巡と駆逐艦と海防艦……」

「それらに共通する弱点は？」

「基本的に装甲が薄い……」

「なら他の人に倒してもらえばいいんですよ。重巡と戦艦の火力なら撃破できます」

「うう……そうだけど……」

出来ることを完遂せよと言うが、ビビっている現在エースのイムヤ。

練度も晴れて50を超えて、改造もされていた。彼女も徹底的に演習のために改造されている。

七海が既に工廠の髭と相談して、決戦仕様と言える程に弄くり、普段とはかけ離れた性能をしている。

いわく、殺すつもりでカスタムしたとのこと。

「ま、安全装置がありますので死にはしません。思い切り魚雷放つていいんですよ」

「……そうだけど」

「まだ言いますか。普段通りで緊張するなら、あたしも考えますよ。失敗したら罰か、成功したら褒美か。どっちがイムヤの場合は成功しますかね？」

演習にも実弾を使うが、艦装に安全装置が仕込まれて大破で停止して撤退を余儀無くされる。

七海は舌打ちしていたが、撤退する前の大破の艦娘を囿や人質にして過去には勝っている外道もいたらしい。

同じことをこの女は考えていたらしい。最低すぎる。

現在はルール違反なので不可のようだ。

イムヤは罰、と聞いた瞬間に青ざめた。七海が初めてそういう事を言い出したのだ。人間扱いして以降、決して言わない言葉で脅している。

以前からも言わなかったが、イムヤは竦み上がった。

「お、お姉ちゃん勘弁して……。あたし頑張るから、精一杯やるから……」

震える声で意気込むが、顔面蒼白だった。

「あれ、逆効果……。というか、やるとは言ってます。罰を与えるなら、あたし拷問ぐ

らしいか思い付きませんし」

空気を読まない七海に、如月はたまらず止めろと制止したが遅かった。

更にビビるイムヤは、どうすればいいのか分からずとうとう完全に停止した。

「司令官……?」

「褒美にしろと? 何をすればいいんですか?」

じとつと睨む如月に、七海は不満そうに聞いた。

如月ならまだしも、イムヤは何を求めているのか分からない。

真面目で地味な大人しい少女。

ろくすっぽ内面を知らないままなので、扱いも不器用だった。

仕方無く、如月が耳打ち。こうすればうまくいくかも、と入れ知恵してみた。

七海はそんな馬鹿なと思いつつ、イムヤに声をかけた。

「……………」

完全停止。無反応。依然として震えている。

可哀想なくらい七海に追い詰められていた。

「イムヤ。ごめんなさい、少し脅かしすぎました。大丈夫、お姉ちゃんがついていきますか

ら」

急に優しく、七海はイムヤの頭を撫でて、ひきつった笑顔で言い出した。

ポカんと、硬直が解ける。イムヤの前で、見たことのない七海の声色と顔があった。「……頑張ってくださいね。お姉ちゃんは、イムヤが頑張る所を見たいです。一杯努力したんです。きっと、成功します。ね？」

「……お姉ちゃん」

慣れない誉め言葉。七海に圧倒的に足りないのは、餡だ。

鞭ばかりを振り回して威嚇して、それで成功するわけがないと、説明して成る程とは思う。

が、そんなに七海は厳しかったり、怖いのだろうか？ 自覚がないので分からないまま。

「一緒に頑張りましょう。お姉ちゃんが、後ろに居ますから。怖がらないで」

不安になる言葉を言うから余計に萎縮する。

安心させると言って、取り敢えずそれっぽい台詞を如月が捏造してみた。

すると、効果覷面。イムヤは俄然やる気になっていた。

「……そ、そうだね!! お姉ちゃんがいるんだし、負けるはずないよね?! よし、気合い入れていく!!」

要は背中を押す、という理屈だが慣れない七海ができるはずもない。

結局如月の入れ知恵で証明され、納得した七海。

(イムヤには甘やかす事が大切なんですね……)

あくまで、イムヤには。

如月は別に緊張していない。

クンカクンカと現在、七海からリラックスアロマをダイレクトに吸収している。

その様子はまさに犬。あるいは変態。エロサキユバス。

(ああ、落ち着くわあ……。不安なんて微塵もない。如月は勝って、今度こそ司令官と同棲を……)

完全に思考は変態であった。目が軽くイッている。

嗅がれても気にしない七海。もう慣れた。

髪の毛をクンカクンカされても、怒らない。

これで緊張が解れるなら許す。ため息はつくが。

そんな二名の、初めての対抗演習が、幕を上げる……。

数時間経過した頃。ある海域で。

総数12の艦娘が互いに挨拶していた。今回の対抗演習の仲間だ。

「第一艦隊の旗艦を務めます、高雄と申します。宜しくお願いたします」
礼儀正しい巨乳の重巡が頭を下げる。青い服の綺麗な女性だった。

イムヤは着替えて浮き輪の上に座って浮かび、如月は周囲の様子を司令官に伝えている。

旗艦は高雄。その他、愛宕に軽巡は、神通と龍田。以上であった。

七海は小声で指示している。各自の装備を見た目で教えて、連携が取れそうな相手だけに絞っている。

如月は艀装が様変わりしていた。

両手に連装の高角砲を、高射装置を組み込んだ10cmの物を装備。

予備の弾薬も腰の後ろについている。いざとなれば投げ捨てるのもよいと言われている。

七海と同じく利き手が左なので左ももに、例の速射砲を懸架している。

右足腿には連装魚雷を、背負う機関は出力が高いモノに交換しておいた。これにより、運動性能は抜群に高く、更に機動性も上々。

余計な装甲を全部取っ払って軽量化して、頭部には二つの電探を装備。

対空と水上の電探で広範囲をカバーできるようにしておいた。

目的特化のため、汎用性はまるでないが、ある程度の自衛まではできる。

電探は皆と共有できるし、支援特化は伊達じゃない。

イムヤは背負う機関を如月と共通化しつつ、余計な音を立てないように隠密も視野に入れてる。

彼女は特殊で、魚雷を召喚して放つタイプ。携帯に似た装備で出すのだ。

潜水艦専用の強烈な魚雷を八つ同時に放てるので、火力は十分。

装甲を気にせず、速力と火力と隠密性能のみを追求したため、他には精々ソナーぐらいしかない。

これも頭部のアンテナを介して、無論共有している。

第二艦隊の金剛、榛名、赤城、加賀、伊勢、大井には火力を依存するので全部任せると軽く言っている。

複数の提督の同時指揮なのだ。ある程度の事前の打ち合わせをしていないと大変になる。

勝敗は旗艦の撃破。こっちで言う、高雄と金剛の轟沈判定。

それぞれ細かいルールを聞いてから、とうとう運命の演習が始まる。

ブザーが皆の耳元のインカムに聞こえる。戦いが、始まった……。

先ずは偵察機で敵の艦隊を探し出す。

「イムヤ、急速潜航」

「了解」

七海の指示通り、水の中に潜って隠れる。

敵を発見するまでは、大人しくしておけと言われたので、水中で待機しながら相手にも潜水艦がいなか探す。

偵察機を見送りながら、移動開始。皆が進むと、入電。敵を発見した。

相手は第一艦隊に戦艦が二名、重巡一名、軽巡一名、駆逐が二名だそうだ。

長門、陸奥、熊野、夕張、白雪に初雪の六名。

空母がいなと言うと、七海は集団で電探画面を眺める彼らに言った。

「なら、どうせ第二艦隊に固まっているんじゃないですかね。空母を無視する奴はいな

いでしようし」

指示を出す提督は一ヶ所で集まり互いに議論して決めるのがルール。

独断もありだが、そうすると大概自滅するだけだろう。

七海の言うのもありか、などと言いながら様子を見る。

まだ距離がある。が。

「すいません。相手、爆雷持ってます？」

夕張と駆逐二名にどんなものがあるか聞く。

荒い映像だが、爆雷らしきものはないと言っていた。

成る程、と七海は頷いて。早速、動く。

「皆さん。お先に仕掛けます。——イムヤ、先制雷撃開始。敵軽巡、及び駆逐を撃破なき
い」

沈んでいるイムヤに命じた。黙ってイムヤは動き出す。

ある程度ゆっくりで良いから放てと言う。同時に。

「大井。……やれ」

第二艦隊の大井も一斉に魚雷を放った。

偵察機による位置情報を入力して、疾走する酸素魚雷。

夥しい数が放たれて、走っていく。

距離があるが、追尾する魚雷は海のなかを突っ込み、向かう。

同時にイムヤもどさくさに紛れて放った。後だしの潜水艦魚雷。

携帯を操作して召喚した魚雷を見送り、停止。

あとは、様子を見る。

偵察機による映像は、よく見えない海中の魚雷を警戒していたようで、夕張が反応。

相手も偵察機放っていたのも合わせて、迎撃に入る。

回避するも、射程が違いすぎて数名、いきなりの直撃。

ダメージを受け、本格的に戦闘が始まる。

七海は気合いを入れて、画面を見つめて、始めるのだった。

初めての、死

運命の演習が始まった。

イムヤ、大井による先制雷撃。

回避が遅れた数名、夕張と初雪、白雪に狙い通り直撃。

ソナーを持っている役目は夕張のようだ。

つまりは、七海の敵は夕張と駆逐二名に絞られた。

支援を行いながら、隙を見て自分で排除する。

支援特化と言えど、彼らは彼らで戦っている。

火の粉ぐらいは自分で払おう。

「如月。様子は？」

「現在、空母たちによる艦載機が接近中。狙う予定の数は……聞きたい、司令官？」

「数えるのもバカらしいほどですか。では、手筈通りに」

如月の電探に無数の艦載機が表示される。

こちらでも確認しているが、目視で確認できるかと聞かれて、肯定。

小さな点ほどだが、確認している。

「了解。如月の活躍、ちゃんと見ててね」

「見てますよ。そんなこと言つて油断してると、艦載機の特攻受けて沈みますよ」

それはきつと違う鎮守府の彼女。

嫌な話を先程聞いたので、釘をさす。

クスクスと如月は笑っていた。

「はい。油断慢心せずに護衛いたします」

「足元にも注意しなさい。雷撃も注意して」

「全方位だものね。集中していくわ」

艦載機による爆撃、雷撃に加え砲撃にも気を付けないと。

既に周囲は、上空で戦闘機の戦いが始まり、海上では砲弾が行き交う。

如月は無線を繋いだまま、独自に判断する。

七海は事前に入れ知恵をしていた。それを意識する。

両手の装置内蔵の主砲を構え、発進。

機動力を上げて、走り回る。水飛沫が後に続く。

七海は言った。爆撃する物と雷撃する物だけ落とせ。

攻撃の艦載機と爆撃の艦載機は、自分にも甚大な被害が出る。

狙われる前に、片っ端から撃ち落とす。散々瑞鳳と飛鷹で訓練したのだ。

やり過ぎてボーキサイトが随分と消耗してしまっただが、七海はちゃんとフォローしてくれた。

経験だけじゃない。七海は情報についても、如月に画像まで見せて覚えさせている。

狙うべき標的。相手が使うであろう予想を全部見せて如月に刷り込んだ。

空母が誰であろうが、使う艦載機は既存のもの。

ならば、種類を覚えて効率的に落とすのが一番。

性能に差違あれど、目的が同じである以上撃破はする。

電探が示すそれは、型式が出ない。

ただ、漠然と相手の艦載機の位置を知らせるだけ。

種類は自分の目で確認するしかない。

無闇に落とせば時間と弾の無駄。

顔を上げて、水中の雷撃に気を付けながら走り回り、目を凝らす。

電探の位置を見て、見るべき方向に定める。

動き回らないと的になる。これも散々練習した。

伊達に艦載機を撃ち落とし過ぎて瑞鳳を泣かせていない。

特訓は無駄じゃない事を証明してやる。

付き合ってくれた瑞鳳の涙も無意味になるのは避けるのだ。

(……天山。彗星。あとは、初期型……。何だっけ、何々式とかいう種類だったっけ？

あら、忘れちゃった……)

膨大な知識を短期間で刷り込んだせいで、名前までは思い出せない。

辛うじて種類は分かる。ならば、全部落とすまで。

如月はちよつと失敗と苦笑しつつ、狙いを定める。

射程にノコノコ入ってきた艦載機を装置が捉えて、放つ。

七海の教えを思い出す如月。

(足を止めるな。冷静に、落ち着いて。狙いは正確に。足元をお留守にしない。周囲に

気を配る。……あと何だったかしら?)

激しく動き回り、連射する。頭上で爆発。当たった。

弾の数よりも多い艦載機の数。対空砲火は他も隙を見て行っている。

専門でやっているのは、如月だけ。その如月は当然狙われる。

鬱陶しい相手だ。邪魔をするなら諸とも、となるが。

「させないわ!!」

「ぱんぱかぱーん!」

高雄姉妹の砲撃が、背後から飛び交う砲弾に紛れて、長門たちを足止めする。向こうの熊野は神通が押さえ、夕張と駆逐はなんと龍田一人で迎撃していた。

「うふふ……輪切りメロンにしてあげるわア……!!」

ハイライトのない目で嬉しそうに微笑むヤバい笑顔で、得物の薙刀を振り回して、夕張たちを追い回していた。

「いやああああああ!!? 輪切りはいやああああああ!!」

足を負傷し、只でさえ遅いのに龍田に追われて絶叫している夕張はなす術もなく、逃げ惑う。

駆逐二名が、砲撃して迎え撃つが……。

「あらあ?」

なんと薙刀で弾き飛ばした。

派手な火花を散らして、スイングしていなす。笑ったまま。

「そんな……アホな……」

「えっ? えっ? なんか知ってる龍田さんと違う!」

初雪が呆然と、白雪は混乱していた。

「……お仕置き、決定♪」

で、狙われる子供たち。悲鳴を上げて逃げ出した。

怖すぎる。あそこだけ戦いじゃなくてなんか狩りになっていた。

更に、そこに無慈悲に海中から追撃が襲う。

「イムヤ。旗艦に合わせて支援雷撃」

海中で様子を見ながら、イムヤが狙った座標に魚雷を放つ。

その都度、足元で飛沫が舞い上がる。

「くっ……!? 潜水艦を入れているのか!?!」

「あらあら……道理で一人少ないわけね……」

ダメージが入る。まだ、戦える。倒れるわけにはいかない。

長門は隠れている潜水艦を探したい。

陸奥もそれは同じだが、現在唯一のソナーを持っている夕張は……。

「スライスメロおおおおお!! 待ちなさああああい……!!」

「うぎゃあああああ……!!」

メロンが龍田にまで襲われていた。汚い声がここまで聞こえる。

砲撃よりもデカイ声とは、相当な音量。余程ピンチのようだ。

助けようにも、肝心の火力である第二艦隊の空母の手数が減っている。

それはそれで、専門で撃ち落とす駆逐艦が走り回って、妨害しているからだ。

更には、海の中から潜水艦も邪魔をする。ジリジリと追い詰められていた。

如月は聞いた。仲間からの入電。

背後から航空機で援護していた連中を確認。

相手の第二艦隊の面子が判明。

瑞鶴、翔鶴、葛城、天城、千代田に千歳。

全員空母であった。しかも大半が足の速い正規空母。

狙われるリスクを抑えるべく、背後で援護しているようだ。

が、それは此方も同じこと。

「よっしゃー!! 戦艦は対空もバッチリだぜ!! 往け、マイ嫁ーズ!! 大鑑巨砲主義を

見せてやれー!!」

赤松が景気よく叫んでいた。

マイ嫁ーズ……? と大半が訝しげに見るが。

「オツケー!! 私の実力……見せてあげるねー!!」

「はいっ!! 榛名は何時でも大丈夫ですっ!!」

ちゃんとエセっぽくない、日本語喋る金剛が妹と共に叫ぶ。

「三式弾、装填!!」

「空母は、榛名とお姉さまが、許しませんっ!!」

爆風を放って、姉妹が三式弾を空に向かって打ち上げる。

大量の艦載機を目掛けて放たれる砲弾は、空中で炸裂し飛んでいる艦載機を巻き込み撃墜した。

今ので結構な数が減った。慣れているのだろう。誇るように胸を張っていた。

相当な数がいたのに、密集している空域を目掛けて放った一撃により半滅に近い。

流れは、こちらに向いていた。騒ぎだす相手方の空母だが、こちらはまだ隠している。

「うっはー……。容赦ないねあっちの戦艦……。提督、私も秘蔵の瑞雲使う?」

「使うか。相手の数も減ってるし。伊勢、やっちゃいな!」

隣にいた伊勢も、切り札を切ったようだ。

「……。提督。すいません、対空砲火で弾が終わりました」

「大井、お疲れ。じゃ、全部ぶちこめ。盛大にな!!」

大井と伊勢の提督の命令で、航空戦艦の秘蔵、特別な瑞雲が放たれた。

空母たちに空を任せて、砲撃に集中していた伊勢の、飛行甲板が無事だったので解き放つ。

大井も残りの魚雷を、砲撃の殴りあいをしている金剛が狙う相手に定めて放った。

「……。瑞鶴と翔鶴、ですか。多少は頑張るかと思いましたが……」

「ま、まあまあ。此方は専門で撃ち落とす駆逐艦がいるんです。あまり責めないで加賀さん」

どこか残念そうに加賀は相手の二名に言うが、赤城の言う通り撃ち落とす数が多いので差が出ていた。

切り札、瑞雲の投下で艦載機の数が増った。

加賀、赤城の残存する艦載機と無傷の瑞雲が空を駆け抜ける。

「あら……瑞雲だわ」

走り回って、大量の艦載機を叩き落とした如月は停止して見上げる。

相手は撤退していくようだ。第一艦隊が既に戦艦も含めてボロボロ。

頭上を走り去る艦載機の数。圧倒的に残っていた。

如月の主砲は弾が切れた。邪魔なので片方を外している。

魚雷は一応、一回ぶんだけ残っている。予備の弾薬は使いきった。

恐らくは逃げて態勢を立て直すのだろう。

追撃しろと、七海が言っている。

「イムヤ。一隻も逃がさず、仕留めなさい」

冷酷な声だった。いつも通り、深海棲艦相手と大差ない声色。

雷撃がまだ走る。夕張は危ないと叫ぶ。駆逐たちが龍田を押し止めようとするも、無

駄。

軽く薙刀で殴打されて吹っ飛んでいた。

海上をバウンドしている。生きているだろうかあはれは……。

「危ないのはメロンちゃんよお!!」

「いぎやああああああ!!」

狂ったように恐ろしい高笑いの龍田の凶刃が迫っていた。

夕張はソナーに集中できない。龍田が怖すぎる。

如月は一応、合流するために戻っていく。

加賀たちが言っている。第二艦隊確認、空爆開始。

こつちも天山や彗星、そこに何故か瑞雲まで混じっていた。

兎に角、一斉に大半の艦載機を失った案山子の空母たちを襲う。

「瑞雲は良いよね、瑞雲は!! 日向の言う通り、切り札になるよ!!」

伊勢が誇らしげに叫んでいるが、果たして瑞雲は切り札になるのだろうか。

如月にはちよつと分からない。

撤退すら許さない第一艦隊の雷撃が無慈悲に襲いかかる。

「あつ、不味い……!! 長門、あなたは先に行つて!!」

庇うように、目視で影を見つけて陸奥が長門を押し出した。

無情にも、過剰とも言える雷撃が陸奥一人に直撃。

「陸奥——!!」

退いていく長門が叫ぶ。

ブザーが鳴った。陸奥、轟沈判定。

第一艦隊、一名脱落。数秒後、再びブザー。

今度は酷い。第二艦隊、全滅。全員が轟沈判定を受けていた。

空母と航空戦艦の瑞雲により、武器を失った彼女たちは抵抗できずに被弾していた。

残り、五名。旗艦も分かった。庇われた長門だろう。

此方は消耗はしているが、大半が大きなダメージはない。

提督たちがあれこれ話している間に、七海は問う。

「……イムヤ、魚雷は？」

安全と言われて、慎重に息継ぎに顔をだすイムヤはしばらくぶりに声を出した。

「撃ち尽くしたわ。全部当たったから、被害は大きいと思う」

「そうですか。お疲れ様でした」

また危ないので潜れと言われ、大きく息を吸って再度潜航。

見えない悪魔は静かに消えていく。

更には、被害は広がっていく。

「きええええああああああああああ!!」

「ぎゃああああああああああ!!」

夕張が輪切りに切られて倒されていた。

雄叫びをあげて切り捨てた龍田が、バツタリ白目を剥いて泡を吹いて倒れる夕張を見下ろしていた。

「気持ちいい悲鳴をありがとう、夕張さん」

満たされた嗜虐的笑みに、ゾツとする如月。

七海以上のイカれてる奴が然り気無く混じっていたようだった。

最後の神通は、熊野の抵抗に合いつつ、なんと刺し違えて倒れていた。

双方、轟沈と言われたが、彼女の無理は反省点だろうと七海は思う。

フオローし損ねた。空母と支援に力みすぎた気がする。

残り、三名。その時。

……その抵抗は、始まった。

「せめて、駆逐艦だけでも……!!」

「刺し違えてでも倒そうっ!!」

そんな声を、如月は聞いた。

何事かと思えば、初雪と白雪が、黒煙をあげる艀装を暴走させて、突っ込んできていた。

……狙いは、吹っ飛んでいた近くに、如月だった。

「!？」

如月は驚く。大破している艦娘が、演習なのに……鬼気迫る勢いで向かってきていた。

既に装備は大半死んでいる。主砲は折れて、魚雷はない。その状態で、向かってくる。止めると、長門は叫んでいた。悲痛な声で。なのに、死に物狂いの駆逐艦は悲しく叫ぶ。

「どうせ、ここで失敗すれば解体なんだ……だったらせめて、海の上で死んでやるツ!!」
「駆逐艦でも、敵は倒せるって、証明するの!!」

……何を言っている？

なんで、あんな必死になって、襲ってくる？

待て。これは、演習だ。降伏だって認められている。

なのに、なぜまだ戦う？

「えっ……？」

理解できない如月は棒立ちしていた。

あの二人は、何をしようとしている？

倒す？ 誰を？ どうやって？

「……自爆ですか」

七海が、冷たくそう溢していた。

聞いていたのだらう。その、悲痛な叫びを。

背後で、他の艦娘が言った。逃げろ、そのままでは本当に死ぬ。

二人は特攻する気だ、と。

機関を暴走させて、自爆する。それは、安全装置の穴である。

装備のダメージは無力化するが、爆発などの副産物はしない。

つまり、機関に引火すれば、如月も……死ぬ。

（……えっ？ 如月、死ぬの？）

なぜ？ 何故狙われる？

あんな死を覚悟したような相手に。

諸とも爆死しようとする相手に。

……なんで、如月が？

理解できない。理解できない。演習だ。演習で死ぬわけがない。

死なない。死なないはずのルールだ。

(……死ぬの?)

頭が処理できない。棒立ちすれば、巻き添えになつて共に爆死する。

共倒れが狙い。そこは分かる。けど、艦娘同士で？ 同類なのに、どうして？

「お前のせいだああああ!!」

悲しい声で、責められる。

真つ直ぐ突つ込んでくる。味方もその剣幕に、攻撃できない。

下手にすれば、向こうが死ぬ。その確率はあつた。

どうすればいい？ なにもしていない如月は、巻き添えで死ぬのか？

誰か、教えて。どうすればいいの？ 如月は、どうすれば生きられるの？

——撃ちなさい如月。

耳元で、そう、囁かれた。

——撃つて、如月。あなたは悪くない。

もう一度、囁かれた。

——死なせないと言つたでしよう？

再度、彼女は囁いた。

「……提督のあたしが、許可します。如月……殺しなさい」

七海は許した。殺せ、と。

持つていた主砲を素早く捨てる。

左足の速射砲を外して、構える。相手は回避しない。

一直線に突つ込んでくる。引き金さえ引けば、終わる。

「司令官……」

「あたしが責任をとります。……殺しなさい。あたしに、死を見せないで」

殺せ。生きたければ、殺せ。

自爆などしなくていい。殺しに来るなら、殺せ。

「如月は……死にたくない」

「あたしも、死なせたくない」

「だから……」

「ええ。……殺りなさい」

特攻をする、哀れな艦娘。彼女の命を狙うから。

如月は、自分が生きるために。

……引き金を、黙って引いた。

艦娘殺しの提督

演習は終わった。七海たちの艦隊の勝利。

その後、恙無く終わった。ああ、何事もなかった。

(……あたし以外は、ですが)

ちよつとしたトラブルはあったが、まあ気にするほどでもない。

少しばかり、聴取を受けることになった。それだけの話。

七海の帰りは、遅くなりそうだった……。

結局、彼女が戻ったのは翌日の夜だった。

憲兵が迎えにいつて、事情を聴くと渋い顔で何も言わない。責めることも、慰めることもしなかった。当然だ。

七海は、あんな事があつても平然として、帰つてきた。

鎮守府に戻り、執務室に入ると。

「……遅かつたわね」

五十鈴が、書類を片付けて待つていた。

彼女のいつもの場所を陣取り、待つていたか。

「ただいま戻りました」

「……………」

特に変わったこともなく、七海は制服を脱いで、軽く挨拶してから自分の役目に戻る。彼女のその様子は、全くもつて不可解。なんで、平然としてしているのか。

五十鈴にはまるで理解できない。

「七海……。あんた、自分が何をしたか、分かっているのよね？」

「ええ。大本営でも同じ説明をしてきました」

何故、七海は動じない。精神が揺るがない。

己のしでかした事を、分からないわけでもあるまいに。

「如月から詳細は聞いたわ」

「そうですか。彼女は？」

「部屋に籠つて覽されてる」

「でしようね。……医者の手配をしました。あとで受診させてください」

淡々と、片付けをしてその後私服に着替えた。

五十鈴の眼光にも怯まない。明らかな糾弾の視線を、物ともせず。

後処理はした、そんな態度。五十鈴はイラついてくる。

(……こいつは……)

初めて、殺意に近い怒りを感じた。

案の定だ。こうじゃないかとは思ってたが、本当にこいつはこういう態度で戻ってきた。

信じたくなかった。人間扱いしているなら、後悔なり懺悔なり、抱いていると思つていたのに。

……七海は、その意識すらないようだった。

「五十鈴。……黙つて睨んでいます、そこまであたしが憎いですか？」

七海は簡単に身支度を済ませて、五十鈴を見た。

茶色の瞳には、感情は浮かんでいない。穴のように、見据えているだけ。

「憎い？ ……勘違いしないで。怒っているのよ。あんたが、とうとう仕出かした事を

ね」

「だと思いましたよ。怒りの矛先を自分の提督に向けますか。……呆れてものも言えませんか」

怒りを堪える五十鈴に、七海は真つ向から言い返した。

自分は悪くない。表情のない彼女の言い分は、それなのだと分かった。

「……ッ!! あんたはッ!! ふざけないで!! 自分が艦娘を殺せつて命じたのよ!! 人を殺したのよ!! なんで平然としているの!!」

我慢できずに立ち上がり、怒鳴った。

近寄つて胸ぐらを掴み、怒鳴ろうと近づくが。

「的外れな指摘ですね。……なら、あたしはこう反論しましょう。五十鈴は味方を殺すつもりですか?」

七海は涼やかに聞いた。それは、まさに提督としての、上に立つ身分の言葉。

言外に言っている。あれは、事故だ。事件ではない。

殺人ではない。過失ではない。

あれは、必要な措置だ。

「……」

「人殺しとは心外です。あなた、きつと如月が死んでも同じことを言いましたよね?」

なんで逃げるなり、抗うなりしなかった、と責めるハズです。その場にいなかった部外者が、後からみつともなく騒がないで」

どう転んでもどうせ噛みつくだろう、と言い返して七海はここでようやく怒りを見せた。

笑わせるなど、正面から否定する。

「あたしは提督としての最善、最短を選び如月を守りました。で、あの行為は事故です。向こうの……島村提督は減給一ヶ月の処分を受けました。あたしはお咎め無しです。当たり前でしょう。あたしの行動は、自分の鎮守府の艦娘を防衛しただけ。トチ狂って殺しに来たのは奴らです。如月は言うなれば、正当防衛。ま、人権のない艦娘にはそれがありませんが……過剰でしたが、状況を大本営が判断した結果は、事故でした。ですので、あたしを責める理由もない。違いますか？」

「また理屈を……！」

悔しいが、五十鈴とて七海の言い分を言い返せない。

反論された通りだ。じゃあ如月を代わりに死なせるのか。

そう言われれば、なにも言えない。正論であつた。

死にたくないから殺した。その何が悪い。

実際やらねば、如月は死んでいた。五十鈴はその場に居ない部外者。

口では、後からは何とでも言える。が、現場で判断するのは七海の役目。

七海が決定した事にいちやもんをつけるなら、最低限現場に居るぐらいはするべきだ。

だって、事の現状を五十鈴は知らない。

知らないまま、感情的に七海を一方的に責めた。

だから、真つ向から理屈で潰される。分かっている。七海はこういう奴だ。

何を言っても、彼女には常にそれなりの理由はあり、そしてそれを基準に判断している。

感情的な物は、一切無い。

「この件はもう終わったことです。死んだ？ だから何ですか？ トチ狂って殺しに来るから死ぬんでしょ。バカらしい。刃物をもって襲ってくる人殺しがいて、黙って殺される人間がいると思っただけですか？ 五十鈴。あなたは今、刃物持った人殺しを擁護しているんです。自覚ありますか？ 加害者を被害者に、被害者を加害者にするその沸騰した頭を冷やしてから物を言いなさい。如月を殺すようなことを宣う馬鹿者は、独房に入れて反省させないといけませんか？」

怒っている。七海が、味方に死ねと言ったに等しい五十鈴を逆に。

五十鈴は黙る。一つ、分かったことがある。今、分かった。

(七海は……この鎮守府以外の艦娘を人として見ていない……)

そうだ。七海は、他の鎮守府の艦娘を事務的に見ている。

襲つてくれば、深海棲艦と同じただの始末する敵。そういう顔で言っている。

相手がどんなものであろうが、七海は考慮しない。

だから何だと切り捨てて、吐き捨てる。

極端過ぎる。七海の間判定は、所属する鎮守府だけ。

そこが基準で、後は死のうが殺そうが御構い無し。

要は、そう言うことらしい。

「……」

「言いたいことはそれだけですか五十鈴。寝言は寝てから言ってください」

人として当たり前の糾弾を、寝言と下す七海。

不愉快そうに、五十鈴に出ていけと命じた。

「……そう。あんた、結局感情を理解していないって訳ね。よく分かったわ、今回の一件で」

「向こうの感情など理解しても意味などありませんし、事情も知ったことじゃ無いので興味すらない。持つ理由がない。必要もない。」

七海は冷たく断じる。死んだその原因は島村提督であり、七海は巻き込まれただけ。

死ぬか生きるかの選択肢で、七海は逃げて生きるか殺して生きるかを突きつけられた。

で、殺しても生きると如月に命じた。その責任は受けよう。

如月が感じている物の原因は、七海が請け負う。それが仕事。

だが、それ以外は彼女は悪くない。周りも彼女も加害者も、そう結論を出している。

「あんたは頭がおかしいわ七海。間違いない」

「いいえ。理論的ではない五十鈴が幼いだけです。子供に子供と言われて、情けないと思わないんですか？」

やっぱり、対立する。必然であった。

五十鈴は艦娘。七海は提督。この立場は、決して交わらない。

「……五十鈴たちを守るための判断だって言うのは、分かるわ」

出ていく際、ドアノブに手をかけたまま、俯いて五十鈴は言った。

暗い影を、目元に落として。

七海は代理で纏められている書類に目を通しながら、聞く。

「でもね……艦娘は、道具じゃないの。捨てられる事への恐怖ぐらい、わかってあげてよ

……」

「嫌です。あたしは他人のやり口などどうでもいい。その気持ちを、ここにいる艦娘に

は味わわせない。それだけです。怖ければ他人を殺していい理由にはなりません。死にたいなら自分で死んでください。あたしは、あいつらが何を思おうが、如月を殺そうとした事実のみを重要視する。……あたしが、怒ってないと思いますか？」

即答だった。七海はとことん、相手を無視する。

振り返れば、目を落としている七海は、凄まじく不愉快そうにしている。

度を通り越して雰囲気だけ、普通の動作なのに異様に尖っていた。

「如月に、この艦娘に……二度と死への恐怖を感じさせないようにしているのに、あのバカ共のせいで、如月が苦しんでいる。今でも思いますよ。……あたしが殺せれば、どれだけ良かったか。あたしが戦えれば、あんな屑鉄、海底に沈めてやるのに。……あたしは、決めました。今でも足りないなら、捨てるものも全部捨ててやる。自分の努力が追い付かないなら、命以外は何でも捨てて、誓いを守る」

……ああ、訂正しよう。七海は、なにも感じてない訳じゃなかった。

ここまで悔しがっている。相手を憎んでいる。寧ろ七海は、自分で殺した方が良かったと。

そう、思っているのか。根本である、あの誓いのために。

相手への同情は全くない。あるのは、理屈の下に隠された誓いと努力。

形振り構わない、七海なりの答えだった。

皆を人間として扱う一方、他は全員どうでもいい。

極端すぎて、七海は異常に見える。事実、異常だろう。

「……。そう、それがあんたの本音ってこと？」

「ええ。正直な気持ちですよ」

自分勝手な考えだ。

ただ、その対象に対しての言動はちゃんと理屈がある。

人間として見ている。絶対に死なせない。その恐怖も取り除く。

代わりに、他者への配慮は完全に消えている。

……忘れていた。七海は異常と言われても、その異常性は他人への話。

身内には、この鎮守府の艦娘には、不器用なりに向き合おうとしている。

「……ごめんなさい。熱くなつてたわ」

「いいえ。責められるのも当たり前です。傍から見れば、艦娘殺しの提督ですもの。島

村提督と同類です」

客観的に見れば原因の提督と同類。

自分をそう言った七海に、謝って五十鈴は退出した。

七海は気にしない。相手が死んだ。それは相手が悪いと思っっている。

書類を纏めながら、七海はあつたことを思い出していた……。

演習のあと。

如月は、自衛のために初雪と白雪を攻撃し、沈めた。

機関部に直撃し、爆発をして二名は爆死。

オーバーヒートを起こしている機関への射撃は、予想通りの結果になった。

直ちに大本營の遣いが、演習を行う彼らを聴取した。

艦娘を含めた全員の目撃情報と、通信の記録を回収。

一連の流れからを、隅々まで洗い直した。

結論。駆逐艦二名の提督、島村は一ヶ月の減俸。

島村は元より、艦娘を兵器として扱い、指揮する事で悪名が広がっていた。

何名も艦娘を沈め、だが強引な突破で撃破も確かにしている、有能な提督であった。

「私は言ったさ。次はないと。解体されたくなくば、成果を出せと」

とは、本人談だ。

普段より引きこもる初雪。遅刻をするなど言うのに何度もした。

軍では遅刻は仲間の命を危険にする場合だつてあると説明しても、尚だ。

白雪は装備をめちゃくちゃに使う。主砲で弾幕を張るなど言っているのに聞かない。

機銃は用意してもつかわない。命令を何度も無視していたと言う。

そんな二名に、当然の仕打ちをしたまどと。大本営はそれに納得していた。

それに反発して、暴走した艦娘が悪いと決めつけた。

悪名は艦娘の間だけ。大本営は優秀の部類にはいると好評だった。

その島村の指揮する駆逐艦が、突如反旗を翻し、彼の命令を無視して暴走。

如月を攻撃し、如月は沈めた。これが一連の流れ。

大本営は、島村にきちんと管理できていなかったとして、減俸を言い渡した。

彼も甘んじてそれを受けた。七海は、お咎め無しだった。

如月は彼女の鎮守府のエースであり、逃走よりも撃破の方が確実な方法だった。

失うには、損失が大きかったとして、寧ろ褒められたぐらいだ。

暴走した兵器の鎮圧、ご苦労様、と。

七海が帰りが遅れたのは大本営の少し偉い人に褒められていたから。

余計な被害を出す前に撃沈したのはよい判断だった。

他の艦隊に無駄な被害が拡大する前に早期解決をしたとして、階級がひとつ上があると

か何とか。

報酬も出ていた。七海は全く興味がないので適当に合わせて帰ってきた。

帰りがけ。大本営に聴取された七海は、艦娘殺しの提督と、他の提督たちに陰口を言われていた。

真つ先に殺しを選んだことは、通信の記録で残っている。彼女が迷うことがなかった事も知れていた。

故に、艦娘親愛の提督たちに睨まれていた。本人はけろつとしている。

やっかみがどうしたと言わんばかりに、平然としていたのが余計に周囲を軽蔑させている。

候補生の時から問題ありと言われていた七海からすれば、評価など下らないで一蹴する。

軍規には反していない。規律も乱していない。つまり、悪くない。

堂々としている彼女に、知り合いたちは唾然としたり苦い顔をしたりだった。

「渋谷……お前、あれ分かってただろ？ 殺した方が確実だつて」

同期の赤松が、微妙な顔で聞いてきた。

戻る最中、自販機でコーヒーを買っていた七海に声をかけて言い出したのだ。

「……」

どうでもいい七海は黙ってコーヒを飲み始めた。

赤松は、隣に立って同じくブラックを買って一緒に飲むと言った。

「気になって当時の状況、俺も洗ってみた。……逃げ切れる距離じゃなかったんだな」

「……」

此方を見下ろす赤松の言葉に七海は沈黙する。

彼は続けると言って、語った。

「あの二人の機関は、オーバーヒートして加速性がバカみたいに上がっていた。どうやら、あれで飛び込んで自爆する気だったみたいだ。早い話が特攻だな。で、如月はその状況に驚いて反応が遅れていた。……致命的な距離に入るまで」

「……」

「運が良いのか、艦載機が映像を残しているな。大体の二人の艦装の最大速度を計算してみたんだ。あと、悪いとは思ったが、お前の所の如月の艦装も調べた。それは、すまんかった。勝手にやっちゃまって」

「構いません」

何やら、赤松は赤松で勝手に動いているようだった。

どうせあれは、あの演習のための装備。数値など気にしない。次は使わない。

彼はコーヒを口に運んで、どこか悲しそうに息を吐いて、天井を見上げた。

「……映像から見えた距離も、大雑把だが算出した。で、そっちの数値と向こうの数値を計算して、彼女の反応からしての、おおよその予想も立ててみたんだが……ダメだ。どう足掻いても、間に合わねえ。100mも逃げ切れないうちに追い付かれて、そこで爆発している答えしか出なかった」

赤松は言った。

既に最高速度に達していた爆弾が迫っており、尚且つ棒立ちしていた如月の艦装よりも少し遅いぐらいの速度。

最速に達するまでの時間を考えても、その前に追い付かれて諸とも死んでいた。

距離が、近すぎたのだ。彼女が我に返る頃には、二人の詰めた距離では、撃沈するしかなかった。

それ以外、助かる道は……無かったのだと、赤松は言い出した。

「道理で、お前が迷わない訳だ。お前、あの時点で分かっていたんだな。殺すしかないって。沈めるしかないって」

「……………」

なにも言わない七海。ただ、飲んでいる。

赤松は、数秒考えて、そして切り出した。

「済まねえ。お前に、こんなことさせちゃった。俺のミスだ。誇りは俺に向けるように

言っておく」

「……はい？」

いきなり、赤松が頭を下げた。何事か聞けば。

赤松は、あんなことしなくても、戦艦が砲撃していれば間に合ったと言った。

金剛、榛名の射程の中にいた二人を、位置的に狙えたと赤松は言うのだ。

「金剛と榛名は、精神的に余裕がある。あの子に辛い役目を押し付けずに済んだんだ。俺達がお前を庇えれば、お前が白い目で見られる事もなかった。本当に済まねえ、渋谷……」

申し訳ないように、赤松は謝った。

理解できずに、七海は首を傾げていた。

「いえ……。別に、気にしませんか？」

「いや、俺は気にする。今度、如月にも詫びをさせてくれ。気がすまない、そうしないとよくわからないが、赤松はそう言って聞かないので、じゃあとお願いしておく。何を言われているのかさっぱりだが、赤松は謝ってから、急に怒り出す。

「一番許せねえのは島村の奴だ。あの野郎、今度見つけたらぶっ殺してやる……ッ!!」

「あの、赤松さん。ここ、本部ですよ？」

キレているのか、空き缶を握り潰していた。スチールなのに。

言ったら不味いことを言うので諫める。それほど殺気立っていた。

「あの野郎は知らねえんだよ。艦娘の大本が、人間だったって事をよ……」

兵器扱いしている周囲が気にくわない彼は、そんなことを口にしていた。

七海は、どちらかと言うと、そこに気になった。

艦娘の大本が、人間だった？ それは、どういう意味なのか。

詫びの代わりに詳しく教えてくれと頼み込み、彼女は知った。

どうすれば、今回のような事を回避できるか。

その、方法を、思い付いたから……。

新たな艦娘着任

どうすればいい？

安全圏で指揮しているだけじゃ、どう頑張っても、出来ないことがある。せめて、自分が戦えれば。彼女を苦しませることも無かったのに。

浮かんだのは誓いを守れなかった後悔と、彼女への罪悪感。

珍しいものだ。まさか自分が、誰かに申し訳ないと思う気持ちがあつたなんて。あの子は悪くない。けれど、罵られている様な状況では言葉も届くまい。

自分が殺せれば良かった。それは本当の気持ちで。

けど、自分は提督。艦娘じゃない。戦えない。

方法はないと、諦めていた。

だが、一筋の光が見えた。この方法だ。

(これなら……あたしは誓いを遵守できる)

捨てるものが多少ある。今の自分とか、色々な感情的な問題とか。どうでもいい。重要なのは少ない。

一つ。日常への執着心。

提督の時点で既に日常には帰れない。秘密を多く知りすぎている。帰れても、自由なんてありはしない。

二つ。未成年であること。親の承諾が必要。が、生憎と特例という便利なモノがある。

進む先は機密の塊。例え親族でも知ることはできない。

敢えて言うなら事後報告になる。それでもいい。

人間と見ているなら、自分も人間のままだ。

三つ。適合率の問題。最大の難所だ。

最低でも75%は超えないと、今の時代では認められないらしい。少ないが存在する彼女たちと同類になるのだ。

昔と今では違おうと、先駆者に教えられた。それでも進むか？ と。

進むとも。現状無理な話ならば、対処を変える以外に何ができる。

まあ、受けるだけなら気軽にしていい。どうせ無駄だと、知った奴等は笑った。

酔狂な子供だと。変人奇人の類いであろうと嘲笑う。

残念だが正気だし、何より連中などどうでもいい。

勝手に言っている。進むと決めた。やると決めたら、実行する。

(逆転の発想ですよ。どうするか、じゃない。あたしが戦えばいいんですっ!!)

手っ取り早い名案だった。自分で戦って守ればいい。

最前線に出て、死ぬ確率は大幅に上がるだろう。

だが、自分は何も一人じゃない。皆が居るのだ。

誰も死なせない、は即ち自分も死なない。そう努める。

司令官が前線に出ていいのか？ 死なないならなんの問題がある。

現場で詳細に見ている方が、よい結果になる。元より、リスクあつての戦争だ。

安全圏で眺めているから皆を理解できない。責められる。

だったら、向こうに飛び込んで視点を変えてやる。

同じ釜の飯でも何でも食ってやるし、同じ苦しみを味わって無理にでも分かろう。

これで尚文句を言うなら、上等だ。狂っている。

(上等。戦争、してやろうじゃないですか。あたしだって殺せる。化け物を殺すなら、罪

悪感を感じないでいい。もう、あんな気持ちはゴメンです)

如月に何て言えればいい。嘘をついた。

大丈夫と言ったのに、大丈夫じゃない。

彼女は、七海は、約束を破った。

だからもう、二度と破らない。嘘も言わない。

出来ないことは、言わない。

(お願いですから、適合率とやらが合ってくださいよ!!)

願う。人間を止める選択肢でも、自分で言った事を反故にするのは嫌だ。

それ以上に自分が自分で気に食わない。言ったことすら守れない人間など吐き気すらする。

自分の言動には責任を持つ。当たり前前の理屈だろうか？

だから、やってみる。今度こそ、全部貫けるように。

自分のあり方を、変えて見せよう!!

提督が数日留守にしていた。

理由は不明。皆に何も言わずに、しばらくいなくなりまうと言つて出ていった。その間に、皆は心配していた。

あんな事があつて、七海が何も気にしてない訳じゃないと、五十鈴が伝えた。

「五十鈴が言い過ぎたのかしら……」

今日で一週間居なかつた。その間にも、新しい艦娘が着任すると言つていた。

工廠には何やら大掛かりなカプセル型の機材を搬入している。

髭の妖精は、驚いた顔でその機材を眺めていた。

着々と進むなか、五十鈴は姉妹の由良に聞いた。秘書の由良は分からないと言つた。

「由良もそこまでは、流星に……。でも家出なわけないわ。大本営が逃がすはずがないし」

「……嫌な予感がするの」

珍しく弱気な五十鈴は、事情も知らずに怒鳴つたことを後悔していた。

子供に子供と言われて、恥ずかしくないのか。そう言われたのが、恥ずかしい。

相手の事を理解していないのは、五十鈴も同じで。また、喧嘩してしまった。

謝る前に七海は帰つてこない。理由も教えず、一週間。

堪える。正直、キツイ。五十鈴は音をあげていた。

「謝つて早く解決したいのに……間が悪いわねえ」

「仕方ないわ。こればかりは」

丁度本日、渦中の如月はメンタルが安定して、現場に復帰する。

数日、医者の中で静養していた。七海の手配とはこれだったらしい。

回復して、七海がまだ帰ってこないと不安になっていた。別の意味でダメである。

で、重なるように、念願の戦艦が二名と、駆逐艦が一名着任する。

そう、二名しか許されない貴重な航空戦艦である。爆撃で潜水艦も潰せる有難い存在。

最後の駆逐艦一名に関しては、不明。

詳しい話は通されていなかった。

五十鈴が仕事をしていると執務室のドアが控えめにノックされた。

入れと言うと、恐る恐る女性が、顔を覗かせた。

「あの……すみません。姫園鎮守府の執務室は……本当にここで合っていますか……？」

姫園鎮守府。それは、新設されたこの場所の名前。

長い黒髪にノースリーブの改造巫女装束の奇妙な女性だった。

とても綺麗な人物だが、そこはかとなく薄幸的な雰囲気醸し出す。

というか、物憂げな感じの人だった。

女性は言った。妹が迷子になっていて、鎮守府のなかではぐれている。

本日着任する航空戦艦の姉、扶桑と名乗った女性は知らない。

その妹、ヤバい人物と出会っていた。

「姉様は!? 姉様は何処へ!? 知らない!?!」

「喧しいですねあなたは……知りませんよあたしだつて」

「姉様ああああ!!」

「親を求めて泣きわめく迷子の子供ですかッ!! 少しは静かにしなさいッ!!」

「あべしっ!!」

廊下で発狂している妹さんがいた。

黒髪のコブカットに、同じようなノースリーブの改造巫女装束。

赤いミニスカートの、若い女性……というか、女の子。顔立ちに幼さがまだ残っていた。

で、隣にいた此方は長いクリーム色の髪をした少女がいた。

小柄で、黒いセーラー服を纏う少女。深紅の目は鬱陶しいように、細くなっている。戦艦であろう妹を拳骨で殴打。転ばせていた。

「うう……更迭食らった拳げ句に、見知らぬ駆逐艦に暴力を振るわれ……嗚呼、不幸だわ」

なんか姉が居なくて情緒不安定になっていた。妹、山城は目が死んでいた。

起き上がって、膝を抱えて廊下の隅っこで湿っぽく笑っていた。怖い。

「ほら、山城。行きますよ、拗ねていないで立ってください」

「止めて、離して……。私はどうせ役たたと言われて、ここでも笑われるのよ……」

「誰が笑うんですか、最大戦力がバカを言わないで。ほら、行きますよ!!」

結局、駆逐艦に牽引される情けない戦艦様。自嘲するように、乾いた笑い声をあげていた。

そのまま、探し回っていた姉と合流し、少女たちは纏めて執務室へと向かっていった。

五十鈴が渋い顔で座っている。

航空戦艦、扶桑と山城。某鎮守府から、欠陥艦娘の烙印を押されて左遷された二名である。

大事な決戦のときに緊張しすぎて盛大にミスって自爆した山城。

姉はそれに巻き込まれて、一時期再起不能なダメージを負っていたらしい。

で、その提督が大切に貯めていた資料を見事に溶かして、怒られて追い出されたとのこと。

挨拶を終えたあとに五十鈴は告げた。

「……………」愁傷さま」

話を聞いていて、同情する由良と五十鈴。

だから妹はこんな風にネガティブが入っているようだった。

どうせまたお蔵入りだ、とか小声で呟いている。

姉は憂いに遠くの空を眺めているし、中々に色物が来たようだが……。

「で、結局誰よあんたは？」

「白露型駆逐艦、夕立ですが？」

隣の妹を引き摺ってきた駆逐艦。

名を夕立と言うらしいが、外見が違う。

色々小さい。五月雨に念のため確認してもらったが、姉っぽい何かと言われた。

似ているけど姉じゃない、みたいな扱い。大本営に問うと、そいつは間違いなく夕立だと断言された。

「夕立？　嘘を言うんじゃないわよ。本物の夕立はもつと豊満よ」

「ぶち殺しますよ五十鈴」

「あとそんなに生意気じゃないし。口悪すぎ」

初対面でこのなめ腐った態度。

深紅の瞳で睨まれる。どこかデジャヴを感じる気がする。

この言動、誰かに似ているが……。

「……夕立ちちゃん？　提督さんは今、お仕事で居ないの。だから、遊んでほしいのは分かるけど落ち着いて。ね？　ね？」

「……………由良、目が怖いです。笑顔で脅すのは止めてください」

由良があまりの剣幕に笑顔で凄んでいた。

夕立は微妙に下がりがつつ、ため息をついた。

「つて言うか、やっぱり分らないんですね。残念と言うか、なんと言うか……」

何かを期待していたのか、夕立は二人の反応を見て、ガツカリしているようだった。

五十鈴が白状しろと怒ると、夕立は渋々言った。

「如月を連れてきてください。彼女なら、分かります。きっと」

何故か如月が居ることを知っていて、連れてこいと要求する。

ふてぶてしい態度に、由良も凄み始める。笑顔のまま。

それでもそれ以上は怯まない夕立。根比べて、負けたのは五十鈴だった。

やっぱりあいつに似ている。そう、あいつに。

丁度沈んでいる気分のように似ている夕立がきて、甘くなっていたんだろう。

戦艦姉妹を他の艦娘に案内を任せて、如月を呼び出した。

病み上がりだったが、用事もあることだし、一石二鳥。

少し問診しつつ、様子を見ようと思っていたところ。

警戒している由良を、むすつと不機嫌そうに睨む夕立を見ながら、待つこと数分。

「お呼びかしら……?」

顔色も良くなった如月が、不思議そうにしながら入室。

五十鈴に呼ばれて、入ってくる。

「あ、如月。元気でしたか?」

で、突然馴れ馴れしく話しかける夕立に、驚く如月。

新しい着任した艦娘だと五十鈴は言うが、如月は困惑する。

「えっ? 如月は知らない……」

「……マジですか? あたし、誰だか真面目に分かりません?」

妙にシヨックを受けていた。目を見開く。

如月なら分かるかと本当に信じていたらしい。

ほら見ろ、と五十鈴が指摘する。

夕立は、何だかむすつと拗ねているように如月を見た。

(……夕立なんて艦娘、如月は知らないはず……)

……が。その時だった。

如月の知る重要な欠片を彼女は吸い込む。

彼女から漂う、鼻を擽るこの香り。

如月を夢中にさせ、安心感を与えるこの匂いは。

如月は、知っている。

「!!」

如月は驚愕して、夕立に寄っていく。

夕立も意図に気付いて、腕を広げた。

「ほら、おいで如月。今回は許します。前回の遅れたご褒美の一つですよ」

招くように広がる腕のなか。迷わず如月は飛び込んだ。

軽巡が驚くように見ているのを気にせず、胸一杯に吸い込む。

久々の芳香。彼女の貰った服には残り香が無くて寂しかった。

だが、今分かる。脳内が安らぎに満たされる、至福の香り。

甘い蜜のようなこの、何とも言えない濃厚なリラックシアロマ。

間違いない。理由は見えないけど、彼女は……。

「——司令官!! お帰りなさいッ!!」

——如月が笑顔でご褒美を貰う、間違えるわけがない唯一の人間。

「はい。ただいま帰りましたよー」

艦娘となった、姫園鎮守府の提督。渋谷七海の帰還であつた。

クンクンと匂いを嗅いでいる如月を見て、啞然とする二名。

「と、言うわけで留守の間、代理お疲れ様でした五十鈴。由良、秘書をありがとうございます。ました。ちよつとしたサブライズですが、分かつてませんでしたね。渋谷七海改め、というか別の名前ですが、駆逐艦夕立です。一応、艦娘です。人間でもありますが。これからは一緒に戦うと思いますけど、よろしくお願いいたします」

何を言っているのか分からない二人に、これが証拠だと聞かれる前にスカートから何かを取り出す。

それは、証明書のような物だった。顔写真入りで、姫園鎮守府の提督であることを示す身分証。

普段、七海が外出する際に持ち歩くもので、顔写真が夕立になっていた。

「……え。どういうこと？　なんで七海が艦娘になってるの!？」

「事情があります。というか、まあ便宜上艦娘なのですが、普段は提督として仕事をします。いざつてときの戦力として、あとは有事の際の提督の生存率の上昇目的ですかね。女性の提督は、艦娘適正という試験を志願して受けることができるらしくて。女性提督も少ないですが、適正を持つ人間は更に少ないと聞きました。あたしは、駆逐艦夕立の適合率が93%と破格に高かったので、艦娘にして貰いました。工廠にももう機材は搬入して頂きましたし。数年ぶりの、人間が素体の艦娘だそうです。奇人扱いされましたが、正式に軍規で許された範囲です」

五十鈴が混乱しながら聞けば、簡単に事情を話してくれた。

意味がわからない。提督で、同時に艦娘？　出典が違うとでも言うのか。

法律上は人間で、人権もある。人間が艦娘の力を持っている、と言うことのようなだ。

「廃れた技術だと言っていたので知らないのも仕方ないかと。今じゃ人造が主流ですしね」

クンカクンカと堪能する如月に由良が聞いた。

疑って悪いけど、本当にこいつ七海かと。

何時もの発情エロサクキュバスとなった如月は胸に顔を埋めていた。

で、ぱっと顔をあげて豪語する。

「間違いないわ!! 司令官よ!! この艦娘は司令官しかあり得ない!! この薄い胸元の匂いを如月が忘れるはずがないもの!!」

「……相変わらずのエロサキュバスですか、彼女は……」

呆れていたが、貧乳と呼ばれてももう夕立こと、七海は怒らない。

由良が愕然とするなか、とりあえず落ち着いて話そうと言うことで、空いている皆を呼び出して説明する。

航空戦艦、扶桑と山城、及び司令官兼用駆逐艦、渋谷七海改め夕立が、着任するのだつた……。

艦娘の始まり

彼女が帰ってきた、その日の夕刻。

全員を僅かな時間で集めて、七海は食堂に立っていた。

帰りを知らない皆は啞然としていた。七海が、提督が艦娘になっていた。

外見も、クリーム色のロングヘアーに、深紅の瞳に他人の声と黒いセーラー服。

完全に別人であった。

「さて、何から説明しましょう。まずは、あたしが夕立になった理由でも話しましょうか？」

腕を組んで、皆を一瞥する夕立こと、七海。

皆は困惑していた。七海が突然艦娘になって帰ってきた。

その理由を真つ先に聞きたい。というか、どんな原理でこうなったのかを。

「……司令官。先ず、艦娘になれた原理を、ご説明して頂けますか？」

真つ先に声をかけたのは、固い表情の吹雪だった。

何やら複雑そうに、七海を見て口を開いた。

「ん……。そうですか。じゃあ、先ずは歴史のお勉強と参りますか」

七海は聞かれて、話し出す。

艦娘の皆が知らない、艦娘の歴史。

その原点を……。

現在の艦娘は、人間として扱われない。

欠点として、通常の間人とのコミュニケーションが不可能。

大量生産が可能で、基本的に大本営は無機物扱いとし、要するに物扱いが原則である。

そこには、過去の教訓があった。

前提として妖精などの珍獣に関しては省く。

コイツらは軍の最高機密。触れるには元帥にでもなれという話。

艦娘は、元々は深海棲艦に対抗するべく、人間の女性が体内に艦の魂を宿したのが始まりだった。

妖精がもたらしたという古き時代の遺産をサルベージして、魂として器に……人間に注ぎ込む。

そうすることで、原点の艦娘は生まれていた。

つまりは、赤松が言っていた始まりは人間である、というのはこういう意味だった。

詳しい過程は、七海にも明かされていない。現在でも、志願すれば七海のようになることもできる。

但し、人間に戻るには定着した魂を再び剥離するので、事故が起きると死ぬ。

七海が言っている、艦娘適正とは、注がれる魂に対して、器である肉体がどれだけ適合できるかの数値。

低ければ低いだけ、注がれる艦の魂に器を奪われて、肉体は変異を起こす。

人間は自我を持っている。後天性の魂とは拒絶反応を起こし、最悪失敗して死んでしまう場合があった。

低いだけ、その元々の魂と艦の魂が傷つけあう。奪う艦と、抗う人の魂が戦争を始める。

肉体の変異は、魂の具現化だと言う。

同じ夕立の魂を七海以外に注いでも、外見は変化して最後は同じ見た目になる。人間の身体を、艦は自分が動きやすくするために改造して、奪ってしまうのだ。

大本営はそれを最適化、という名前で呼ぶ。人間の変異は、注がれば大体起きる。……一部の、例外を除いて。

そうして出来上がった艦娘は凄まじく不安定で、大体は艦の記憶に支配され、下手をすると人間に襲いかかる。

決まって、こう言っていたという。

——なんで静かに眠らせてくれなかった!?

と。彼女たちはもう、戦争なんかしたくなかった。

それが化け物であろうが無かるうが、戦いはもう、疲れたと。

先駆者である艦娘たちは、人間と艦の記憶と人格に蝕まれて戦い続けた。

提督は苦しみながら抗う彼女たちと懸命に戦った。時には艦娘に殺されることすらあった。

大本営はそれを人間として扱いたくなかった。何せそうだろう。

国内では当時、女性を兵士にして何をさせていると、抗議が頻発していた。

以前は激しい戦いで、徴兵令のようにちよつとでも適正があれば子供でも容赦なく連

れていった。

否応なしに、だ。そういう時代だったこともある。そうでもしないと、国は滅んでいった。

深海棲艦は今よりも活発で、沿岸の都市はいくつ壊滅したか、忘れているだろうか数えきれない。

艦娘も海軍も、国防に必死だった。手段など選べず、そして安定するまでは、どんな非難にも堪えてきた。

そうして、人口はたくさん減った。女性だけじゃない。提督をしている男性もたくさん死んだ。

国を守るため、たくさん海軍は犠牲にした。その甲斐があったから、今こうして平和に生きている。

一番怖いのは、なにも知らずに騒ぐだけの国民。蚊帳の外で、当然の様に権利だけを求める。

……振り返れば、大本営が艦娘を刷り込む様に道具というのは、従来型と呼ばれる人間が基盤の艦娘の歴史が、彼らには痛みしか無かったからだろう。

国防のために国民に糾弾され、前からも後ろからも襲われて、堪えなければならぬ時代。

七海は思う。成る程、だから物扱いしたいのだ。

人間として扱えば面倒ばかりが起きて、二の舞になるから。

つまり、島村提督は間違つてなどいない。浅はかな国民のせいで、大本営はこうなつたのだ。

では、今の主流である人造艦娘はどうか？

これは、沢山の従来型の犠牲の上になりたつた、安心安全な艦娘の作り方。

資材を用いて、艦が求める最適な肉体を空っぽの状態で作り上げてそこに流し込む。

現在の艦娘は、艦の魂が動きやすい最適化を受け入れた肉体で動いている。

故に従来型にあつた極めて不安定な状態には陥らない。

代わりに、艦しか内部に入っていないため、適正のある人間以外とは会話すらできない欠点があつた。

夕立で言うなら、魂の夕立が求める器を最適な状態で作り上げたのが現在の夕立ち。

七海は、夕立の魂の最適化を、髪の毛と瞳の色、声だけで済んでいた。

適正が異様に高く、逆に艦の影響を外見以外全く受けておらず、夕立の影響は微塵もない。

あの特徴的な口調も出ず、戦闘時に凶暴化する心配もない。

従来型は、適合率が高いだけ、人間の魂が勝っている。そして、高いだけ比例して身体能力も向上する。

現在現存する従来型のうち、90を超える適合率は、七海を含めて三人しかいない。驚異の完全適合、100%で一寸も隙を与えず自分で艦を従えるという、大戦艦大和。僅かに声が変わったが、それ以外は人間のままの、最古の空母艦娘の一人、鳳翔。そして、突然現れた命知らずの女子高生と呼ばれる新顔、駆逐艦夕立。

この三名のみが、現在適合率90オーバーの従来型艦娘。全員が、規格外と呼ばれる正真正銘の、化け物。

主流の艦娘の常識が一切通じない、廃れた従来型艦娘たちの、上から三番目が、七海だそうだ。

つまり、話を戻せば。この化け物を含めて全員が提督をやっており、大和に至っては元帥だと聞いた。

従来型の艦娘の影響で、一部の色と声が変わった。

恐ろしいのは従来型は更に適合率があがると外見は変化するらしい。

人間の魂が勝つと、もとの姿に戻れると言うことだそう。

大和は一見して大和だと分からない普通の女性だと言うし、鳳翔も見た目は変わらな

七海だけ、あと少し上がると元に戻れる。

……というのが、艦娘になれる原理。

今の時代、こんな危険な事をする女など居ないと思われていた。

形骸化した制度を用いて、七海が受けると言ったときは、大本営は頭がおかしいのかと笑った。

どうせ意味などない。奇人の酔狂だ、と。蓋を開ければ化け物の再来。

これはスゴいと掌返しであれこれ準備を言う前から勝手にやって、データを寄越せと任務を出した。

貴重なモルモット扱いであつたが、自分の願いが叶つた七海は気にせず言うことを聞いた。

で、一週間の間の半分はテストと訓練をずっとやっていた。

なので、直ぐにでも戦える。

基礎は全部、大和がわざわざ駆けつけて丁寧にレクチャーしてくれた。

物珍しい七海に、大和と名乗る若い女性は言った。

「成る程ね。君も中々、狂っているじゃない。嫌いじゃないよ、私は。君みたいなおかしな子は」

と笑つて。失礼極まりないが、相手は凄く偉い人。我慢して七海も黙っていた。

で、懇切丁寧に教わったのは、常識外、規格外の戦い方。艦としてじゃない。人として、艦の力を振り回すのだそうだ。

故に通常の戦法は意味がない。独自のやり方で好きにしてみるといい。そう、言われた。

故に、七海をもう一度よく見れば、顔立ちや背丈、身体はそのまま。色と声と服装で第一印象が激変しており、一見すると夕立に似ている、様に見える。が、実際は髪型を適当に戻して見れば、何となく七海の面影はあった。

「司令官はまな板だもの!! お餅じゃないわ!!」

「……如月? 今のあたしは、運動苦手なあたしとは違いますよ?」

クンカクンカと未だに堪能しているエロサキユバスが自信満々に叫ぶが、七海は怒る。

流星にこの状況でそれを言うか。五十鈴が納得しているのが腹が立つ。

ガシツと如月の頭をひっ掴む。

「あつ、司令官ごめんなさい、止めて痛いのはご褒美じゃないの、如月優しいのがいいの」
アイアンクローをされると察して、必死に謝る如月。

ため息ついて、七海は止める。ホツとする如月。

「今のあたしがやると、頭蓋砕けちゃいますしね。聞いての通り、戦艦引つ張るぐらいは

朝飯前です。イタズラしたら今度からは物理でお仕置きしますのであしからず」

さらっと恐ろしい事を言ってそれからこの選択肢を選んだ経緯も話す。

如月と七海が起こした事件の概要を、全て彼女たちに、打ち明けた……。

「司令官。私は、納得できません」

おおよその流れを聞いたあと、吹雪は初手で七海に抗議した。

どこか悲しそうに、そして……悔しそうに。

七海が何が出来ないかと、聞いた。

「司令官の言うことは、聞いていて頭では納得しました。証拠の書類も拝見しました。嘘じゃないのは分かっています。然し……司令官。私は、如月ちゃんではなく、貴女が許せない。私の妹を、殺す様に迷わず命じた、貴女だけは」

「……………」

吹雪の言い分はめちやくちやだと、七海は思う。

こつちが正しい、その判断に異論はないと言いながら、納得できないと、許せないと

言う。

「如月ちゃんは、苦しみました。私の妹が、如月ちゃんを殺そうとした事を、許してくれながらも、自分のせいではないかと……。如月ちゃんのことは、私謝らないといけませんです。所属が違うとはいえ、妹の不始末ですのぞ」

律儀、何よりくそ真面目過ぎて七海には更に理解できない。

吹雪のせいではないのに、自分の責にする。関係などないのに。

「でも……司令官。ごめんなさい、無理です。貴女を憎まずにはいられない。私の妹が死んだのは己の環境と、向こうの提督が原因だと分かっているのに……逆恨みに近い、因縁すら感じています。いっそ、貴女も同じ目に合わせてやりたいくらいに、憎い……」

「そこまで分かっているのに、あたしに憎いと言うんですか。呆れた姉ですね、吹雪」

淡々と、七海は吹雪に言った。吹雪も分かっている。

今回は全容が分かれば、七海は別段異常ではないと。

だが、吹雪はこう、言いたい。

「知ってますか、司令官。理屈と……感情は、別物なんです。そして私は、理屈で納得できるほど、大人じゃありません。今だって我慢しているんです。死んでも良いから、貴女を殺したい……。そんな破滅的な真つ黒い憎悪すら感じているんです」

「人間は理屈と知性の生き物です。感情を制御できないなら、小学生以下の駄々と大差

ありません。身を弁えなさい吹雪」

殺したいと言われているのに、七海は冷淡に言うのだ。

何がいけない、逆恨みは止めろ、みっともない。

姉妹が死んだ、自分の行いが関係している吹雪相手に、正面から堂々と。

睨みあう両者に、ハラハラする大半。

今にも殺しいいような雰囲気の一触即発。

そんな中、一名が名乗り出る。

「……見てられないな。七海、悪いが私は吹雪の味方をするよ。今の君は酷すぎる。看過できない」

響が吹雪の味方についた。

意外そうに見ている吹雪に理由を明かす。

「悪いね、吹雪。君の考えに賛同する訳じゃないんだ。私はあくまで、七海の友人として、仲間として……そのアンポンタンにお灸を添えたいだけ」

と言うが、七海はやはり理解していない。

なんの話かも、分かっていなかった。

「七海。君は他人の気持ちも、自分の印象にも、無関心すぎる。確かに大本営や君を悪く言う連中の事はそれでもいいよ。けど、私達は同じ鎮守府の仲間じゃないか。どうし

て、私達の気持ちや君への印象まで気にしてくれない？ 私達は同じ場所で生きているんだ。気にしたっていいだろう？ それとも、君は私達までどうでもいいと、そう言うのかい？」

「……………一理ありますね」

確かにそれは不味い。理解するために、艦娘になったのだ。

なのに、吹雪を蔑ろにしている理由はない。

と、響はそれを止めろと怒り出した。

「私達は人間だと言っただろ。なら、その無機質な対応を今すぐ止めて。理屈で考えないと君は何もできないの？ それこそ、君の方が人間じゃない。マシーンだ」

「……………よろしい。響、どうやらあなたは、あたしを挑発しているようですね」

怒らせる様な事を続ける響に、七海は怒った。

彼女は、七海を否定している。それが気に入らない。

「怒りはあるんだね。それ以外は、私達に向けなくせに。君は怒りしか知らない、ただの化け物」

一種の事実。怒り以外を艦娘に向けない七海をそうやって嘗て彼女が言った言葉で罵った。

響は謝らない。いつまでもこんな冷たい七海には、うんざりだった。

艦娘になったんなら、ちようどいい。

彼女はああ見えて、理論で刺激されると直ぐ乗ってくる。

自分の行いを誇られて、案の定怒った。

響は文句があるなら、演習でも何でもしてかかってこいと更に誘う。

彼女の性格はもう知っている。こう言えば、絶対に乗る。

だが、計算外のことも起きた。

「ひ、響はやらせないわよ!!」

「司令官、何かあったら私に頼ればいいじゃない! 今回は胸を貸してあげるわ!」

「お、落ち着いて……落ち着いて欲しいのです!!」

響の姉と妹まで参戦する。いけない、無関係の人が来てしまった。

が、七海サイドにも援軍登場。

「吹雪……? 言いたいことは分かるけど、屁理屈言うのも大概にしなさい? 五十鈴も怒るわよ」

「司令官を悪く言うなら、如月が相手になるわ」

「あたしも、お姉ちゃんに味方する。お姉ちゃんは何も悪くない」

「うーん……睦月も七海ちゃんの味方かなあ。如月ちゃんの恩人になるんだし」

「わたしも、今回は間違っていないと思う」

五十鈴、如月、イムヤ、睦月、意外なことに五月雨。

この面子が、七海についた。そして。

「七海ちゃん……。正しければ、何を言っても良い訳じゃないよ？ 由良は少し、怒りました」

静かに怒る由良がこつちについた。

吹雪に賛同している訳じゃないようだが。

ああ、不味い。響の想定以上に大事になった。

「……上等ですよ。どいつもこいつも、司令官に歯向かって……。!! 全員ぶっ飛ばして牢屋に放り込んでやりますよ!! あたしも艦娘になったんですから、言葉じゃ気が済みませんツ!! 文句があるならかかってきなさい!! 全員血祭りにしてやるツ!!」

（ああああああああ!! 想定外の大事になっちゃった!? 違うんだ、私と吹雪が彼女と戦うのに意味があるんだ!! 喧嘩じゃない、やりたいのは喧嘩じゃないのに!!）

一人頭を抱える響。

どんどん膨らむマイナスの連鎖。

結果、初任務は、取り敢えず殺したい吹雪と気に入らない七海との、多分命懸けの演習に決定したのだった……。

架け橋、五十鈴

理解できない。

何故だ。何故わかっていると言うのに逆恨みをする。

異論がないと言いながら殴りかかろうとする。

言行の不一致だ。何なのだ吹雪は。

響は気持ちを分かってくれないと文句を言う。

分かろうと努力しているだろう。

行動で示しているのに、まだ分からないのか。

奴らが救いがたいバカなのか、理解する気がないのかどっちだこの場合は。

あるいは、単純に嫌われているだけか。

大体、逆恨みを理解してどうする。

理不尽極まりないガキの癩癩じやあるまいに。

理解しているなら感情ぐらい抑え込め。本当に迷惑だ。由良は由良で、違うことで怒り出す。

正しいことは指摘しなければ改善しない。

言うからこそ意味があるのに。

正しければ、何を言っても良い訳じゃない？

バカな。正しくなければそもそも言わない。

それとも何か？ 間違いを放置したまま黙っている？

ふざけるな。間違いの指摘は提督の義務だ。

そんなこと、考えるまでもない。

逆恨みを止めろと言うその言葉の何が間違っている？

本当に、感情論ばかりで嫌になる。

全員子供か。喚けば相手に勝てると思いがあって。

提督として、少しお灸が必要なのは向こうの方だ。

「……あたしがどれだけ努力したって、連中が死にたがったり、恐怖を求めるから無駄になった。もういい。そこまであたしが気に入らないなら、実力で叩き込んでやる。あいつら全員殺してやる。演習ならどうせ死なないから、加減なんてしない」

七海は余りの剣幕に本当に激怒していた。

言葉で如何に教えても、行動で如何に示しても理解しないなら物理で教えるしかない。

今の七海は戦える。こつちが歩み寄ろうとしているのに、逃げ出した挙げ句文句しか言わないバカは躰をしないと。

「島村提督のようにしてやりましょうか」

あの人のように、もう言うことを聞かないなら、あいつらは例外で物扱いでいい気がする。

物品扱いの方が余程気楽だ。人間として見る理由が消えた。

ここは軍隊だ。上官に嘸みつく艦娘など必要ない。解体、とまで言い出していた。

「七海、早まらないの。あんた、何時もの冷静さはどこに消えたの？」

「……………」

五十鈴が止めろと静止して、漸く止まる。

七海とて、何度も頭がおかしいと言われれば腹が立つし、我慢できなくなる。

しかも相手は感情論丸出しで、七海の感覚で理解できる範疇を超えている。

感情を理解するのは分かるが、あれはしなくていい部類だと思う。

「五十鈴は、向こうに付かないんですね。意外でした」

以前は同じように責めただろうに、五十鈴は迷わず七海に味方した。

七海が、執務室で日程を怒りで齒軋りしながら決めていく夜。

一緒にいる五人のなか、五十鈴に聞いた。

五十鈴は七海の気持ちは分かっていると説明した。

「あの言葉に嘘はなかった。それを知つて吹雪についたら、単なる裏切りよ。五十鈴はなんだかんだ、七海の気持ちは少しは分かるから。喧嘩しているのは伊達じゃないわ」

と、件の対立を一番冷静に見ているのは五十鈴だった。

七海は完全にお冠だし、吹雪はあれだし……。

今回は、五十鈴がでしゃばるしかない。

ため息をついて、七海を宥めることにした。

このまま行けば、怒りに任せて島村というクソ野郎の二の舞になりかねない。

落ち着かせないと、話は進まない。

気を利かせて、如月が飲むものを持ってきてくれた。

七海はコーヒを片手に、日程を組んでいる。

演習はやる。近海で、しかも従来型の七海を相手に。

規格外の仲間入りの七海を相手取るとは、それこそ命知らずにも程がある。

七海は大体、大本営で最強の従来型、大和元帥の手解きを受けている。

この時点で戦いには慣れている。勝ち目はないと、五十鈴は思う。

此方には現在練度一位と二位が混じり、一人は枠外の艦娘。

響は何を考え仕掛けたのかは見えないが、その場で殺しあうのを避ける方便か、ある

いは。

(そろそろ七海に教えてあげないと。努力の方向音痴だからね……)

教えるためか。この期に及んでまだ自覚できないおバカさんに。

何を周りが求めているか、を。

「……へえ。確かに一番喧嘩はしてませんが、あたしの事を分かるとは、大きく出ましたね」

試す様に、表情が薄い七海は言った。

五十鈴の言うことを信じていない証拠だ。故に説明した。

「どうせ、あなたの事だから、吹雪に聞しては訳がわからないって思ってる。どう考えても子供の癩癩で、バカじゃないかって。一番キレてるの吹雪でしょ。で、響はまだ此方を分かってくれないって怒ったから努力してるのに、っていう一種の逆ギレ。で、由良は……間違ってるのに何が悪いってムカついている。合ってる?」

スラスラ出てくる心情に、驚愕したのか深紅の瞳を大きく見開く。

そんなバカな、という表情だった。

「なんで分かるんですか……？　しかも大体あってる」

「一番喧嘩してるのは伊達じゃないって、言っただでしょうに。対立しているからこそ、相手の感情を汲み取るの」

「……さっぱりわかりません」

だろうな、と思う。

七海の弱点とも言える、コミュニケーションにおける欠点だから。

どうも自分の中の理屈だけで判断して、外部の言葉に対してのアクションが薄い。

しかもその自分の中の理屈というのは、そこそこ周りにも筋が通っているから性質が悪い。

要は確かにそうだ、と言わせるような事をそれっぽく言うのだ。

で、七海は自分の判断が間違っているとは思わないらしい。

周りの話をあまり聞いておらず、自分の判断のみを優先しているからだろうと五十鈴は考えた。

傍から見ると、七海は自己解釈が大半だ。客観的に確かに見ていることもある。

が、結局は自分の理屈のみを先に出すので、周りの理屈は後回し。

ハッキリ言おう。

七海は自分勝手かつ、周囲に対する興味がない。

努力は確かにしているのだろう。それは見ていてわかる。

だが、それは何のためだ？ 恐らくは仕事のため、と言うだろう。

七海の根本を改めて見つめると出てくる回答。

全部、義務である仕事のためでしかない。

そして七海は、仕事をしたくてしている訳じゃない。

割り切つてやっているだけ。強いて言うなら、興味など微塵もない。

だから、必要なラインを設定して、それ以上は知ろうとしない。

必要ないから。無くて困らないから、割愛する。

……性格の問題だろうか。

七海は興味のないことは、最低限しか行わない。

故に彼女の努力は、最低限の中で曲解したまま進み、結果艦娘になっていた。

知るためだ、と言うが逆に言えば提督のままじゃどうせ理解できないという妥協。

手っ取り早く艦娘になればいいという結論。

努力の方向を間違えている方向音痴。

不器用を通り越して迷走しているのだ、この提督は。

響は方法が悪い。七海は言ってもまず、落ち着かせないと興奮して直ぐにキレる。

冷静に見えてただの激情家の七海は、特に沸点が低いので、挑発すれば対話が成立し

ない。

そこを響は分かってない。半端に彼女も七海の扱いを知るから、派手に対立する。こういう場合の七海との会話の仕方を、喧嘩による失敗から学んだ五十鈴は知っている。

まずは、彼女の味方をして、隣から教えること。

そうすれば、この小生意気な提督は話を聞くだけ聞こうとする。

前から教えても、生意気で反抗的な小娘には通用しない。

子供の扱い方が、五十鈴は慣れてきていた。

由良も分かっているだろうに、普段甘いので怒ると対立を選ぶ。

こう言うときこそ、隣に立って優しく教えれば、問題なかっただろうに。

由良も響と同じ。半端に知るが故、扱いを間違える。

七海に足りないのは周りへの興味。

それこそ、如月が良い例だ。

現在一番七海に甘やかされているのは彼女だ。

イムヤも何だかんだ近寄っているので良くして貰っている。

如月は甘えまくるから、数少ない七海からの贈り物も貰えるし、イムヤも頼っているから七海も応えようとする。

七海を知ろうとして、如月は寄っていく。

イムヤは応えようとして、向き合っている。

だから、七海とは揉めることが少ない。

つまりは、七海に対しての興味が、周囲もない。

こういう女だ、そう決めつけているせいだ。

なんという悪循環。努力を迷いながら走る彼女と、もう嫌な人と思っ
ているかもしれない周囲。

(救いがないわね……。誰かが、架け橋にならないと)

これ以上は泥沼の平行線。

互いに繋げる誰かがいないと、延々と対立する。

重巡や軽巡はまだいい。メンタルに余裕があるから、五十鈴がこれからカバ
ーしていけば。

問題は駆逐艦、潜水艦、飛鷹除く空母二名に戦艦二名。

手遅れの可能性を否定できない。

緩衝材を誰かがやるしかない。

五十鈴が、それが一番できると思う。

何せ、真っ先に七海と喧嘩をしたのは五十鈴だ。

互いの気持ちは分かる。先ずは、七海から説得しよう。順を追っていけば、彼女だって頭で処理できるはずだ。

「七海は、何で由良が怒ったか、分かっているの？」

「知りませんよ。何がいけないんですか。あたしは間違っていないです」

そう。今回は別に七海は間違っていない。

吹雪との対立が発端であり、吹雪もそれは自分が悪いと自覚している。

周囲が騒ぎ立ててて大事にしているだけ。

言えば、七海はバカではない。納得はするだろう。

「そう。あんたは、間違っていないわ。由良が怒ったのは、あんたの言い方」

「……は？」

本気で分からないように、不愉快そうに見上げる七海。

いつも慇懃無礼で、無遠慮な七海の言葉。

ストレートに吐き出す言葉は、殆ど武器と変わらない。

性分だろうが、指摘せねば。

「だから、あんたが口悪すぎるって言ってるの。大体、七海だって正しくても言われりや

怒るじゃない。この貧乳」

「ぶっ殺しますよ!？」

ほら、怒った。気にしている体型の事を言われると七海は瞬間的に嘔みつく。

ここを使えば理解できるだろう。何故なら五十鈴のほうが乳はデカイから。

わざと見せつける山脈を見て唸る七海。

「あら、五十鈴は嘘を言った？ どうなの？」

「……………」

こういう風に言えば、七海は自覚しただろう。

彼女風に言うなら、自分が言われて嫌なことは、他人にも言うな、という理屈。

悔しそうに、由良の言った意味を自覚して、睨み付ける。

「分かった？ 由良の怒った理由」

「……………ええ。でも、あの場合は仕方ない気がしますが……………」

そう。あの場合は仕方ない。それも事実だ。

だから、次は響の事を語る。

「じゃあ、次は響よ。彼女はね、相手の感情を逆撫でする七海の態度に怒ったの。あんた、他の子に無関心すぎ。相手がどう思っているか、知る気はあるけど、興味はないでしょ？ 提督のお仕事に必要だと思っから、今まで行動してきたんだもんね？」

「……………いけないんですか？」

七海はやはり、指摘されて否定しないのでその通りなのだろう。

疑問を浮かべている。

義務のための努力、大いに結構。五十鈴は前提として、そう言った。その上で続ける。

「義務だと思うから、必要な部分だけしか知ろうとしない。七海、皆はあんたが思っている以上に、あんたを見ているの。興味があるの。渋谷七海っていう、人間に。けどあんたは、今も自分を明かさない。五十鈴はあんたの過去を全く知らないし、あんたの提督以外の部分も知らない。だって七海は見せないから。理屈や損得勘定で動いている七海からすれば当たり前でしょうけど、周囲はそれが異常なの。自分が接している相手に、あんたは常に無関心。無関心なくせに、知ろうとして、努力するのは良いけど、全員が五十鈴や如月みたいな相手じゃない。努力が空回りして相手に伝わらない。あんたは理解が足りないんじゃないわ。それ以前。興味が足りないのよ」

「……………他人への関心？」

「そ。足りないのは、配慮とか気遣いよりも前。あんたは誰にも興味を示さない。それが全ての原因」

核心をつく言葉に、七海に衝撃が走った。

訳のわからない周囲への完璧な解答を貰った気がした。

自分では当たり前前の損得勘定、理屈での判断。

道理で分からないわけだ。凄く、五十鈴の言葉に領けた。

知ろうとしていても、前提が興味のない物には最低限の七海からすれば、当然の結論。皆に興味がないのだ。その通りだった。

他人への関心が昔から皆無の七海が、他人をわかるはずがない。

仕事だから始めたことであり、嫌々やってればそれじゃぶつかるとは必ずだ。

自分は周りなどどうでもいい。何の得にもなりやしない。

この、『どうでもいい』という部分こそが、全ての根元であった。

同時に思う。

「既に詰みなのですが!？」

七海は思わず叫んだ。

こればかりは、七海の性格だ。

分かるために自分を変えろという難題を出されている。

しかも、艦娘としてじゃない。精神的な意味で。

ぶっちゃけよう。……無理だ。

「でしようね。性格の相性つてのは、何処でもあるし。……無理して変えなくてもいいわ。取り敢えず、七海は先ず自覚すること。皆に対しての関心の薄さ。もう少し周りを気にしなさい」

ぼんぼん、と頭を撫でて五十鈴はそれだけでいいと優しく笑って告げた。急に変わると言うのは誰でも無理だ。16年も七海はそれで生きている。

機械じゃないのだ。突然全部変化したら、誰でも戸惑う。

今は、自覚させて改めさせればいい。

少なくとも、自分の性格の問題だと分かっていたら振る舞いにも気を使う。

「む……。そうですか？」

「そーよ。いい？ 五十鈴や如月、イムヤみたいな子は少数よ。あんたは変人奇人だって、自覚なさい。今回だって、五月雨はあくまで七海の行動を支持するんであって、本人に味方する訳じゃないみたいだし。睦月は単純に恩返しみたいだし」

黙って聞いていた皆に聞くと、首肯して五月雨は言った。

「正直いうと、七海ちゃんのごときは、わたしは分からない。それでも正式な初期艦だけど、ごめんなさい。今回は保留にしておく。今は一連の良し悪しの前に、吹雪ちゃんの行動がおかしいと思っただから、七海ちゃんを手伝うだけ」

と言つて、味方する訳ではないとハッキリ告げる。

七海の性格なら言い切った方がいいと思っただけ。

睦月は逆に言うのだ。

「悪いとか良いとか、あんまり七海ちゃんの場合は関係なさそうって言うか、睦月には基

準がよく分からないのね。七海ちゃんはすぐ小難しい事言い出して、話聞いてくれないし。困っちゃうにやし」

と、本当に困っているようにやんわり苦情を言った。

七海は分かったとだけ言って、振る舞いには気を遣うと謝った。

自覚すれば改善もする。七海の美点は、ここだと五十鈴は思う。

「吹雪の八つ当たりも、分からなくは無いけど。でも、殺意を抱くのはやり過ぎじゃない」

七海は聞けば、姉妹は居ないそう。ならば、長女の苦悩や葛藤を言ってもダメだろう。

実感の湧かない感情を言っても、七海には届くまい。姉妹のいる五十鈴は何となく察するが。

「きつと、普段のあたしの行いの印象のせいでしょうね」

早くも自分の原因の一端だと反省していた。

こうすればいいのだ。少し、事態は好転した。

少なくとも、七海は既にやることを見ている。

即ち、二人に対する謝罪である。ごめんなさいと言うべきだと、分かっている。

「演習の前にも、由良と響には謝っておきましょう」

皆はそれがいいというのでそうする。

けど、演習は続ける。吹雪が、我慢できないと思うのだ。
好きだけならば、戦おう。

鬱憤溜めるよりも殴りあってスッキリした方がいい。

兎に角、今は演習の準備に入る。

最後の難関は、感情をもて余す吹雪なのだから……。

砲雷撃戦（物理）

「……………」

他人への無関心。

七海は幼少時より、そうだった。

正直な話、コミュニケーションは嫌いだった。

他人は興味がない。それよりも、紙の媒体や映像の媒体、そういうものの方が楽しかった。

なぜなら、七海は相手に反応を求めている。一方的に楽しければ満たされた。

自分のペースで進めるのが好きな子供だった。

家族以外とは、大して接しなかったのは、鬱陶しいと思ったから。

外で遊ぶ？ 怪我をするから嫌だ。疲れるから嫌だ。

運動の鈍い自分はほっておいていいと、周囲に言って周囲も置いていった。

それで調和は取れていた小さい頃。

得意、不得意を分かっただけからは嫌なことを上手に避けてきた。

活字を好むのは、時間を長く潰せるから。無論、マンガもゲームもそれなりに楽しむ。今だって、日曜の朝にやっつてる特撮を、日課なので眺めている。

『知っているかな、卯月くん。ウサギはね……性欲をもて余す生き物なのだよッ!!』

悪役の変態が現れて、主人公の女の子は悲鳴あげて逃げ出した。

見た目は男の子だが、中身は歴とした女の子。それをペロペロしたいらしい最低の敵の幹部。

エロスジェントルマンを名乗る奴は、仮面を被っていた。目元だけを隠す白い仮面を。

派手なポーズで登場して、変身した。

『往くぞよ!! 今度こそ少女をペロペロするのだアッ!!』

変身ベルトを構えて、股間を強調するダンスを躍りながらおっ始めた。

——ノーコントロールリビドー! ロリコンハザード、やめええええええ!!

ベルトが必死に制止していた。

変態がそれ言うことを聞くわけがない。

『私のエロスが迸るッ!! 往くぞオ!』

『きゃあああああ……！?!』

毎度思うが、日曜の朝によく流せると思うこの番組。

主人公、気の毒に……。因みに数分すればヒーローが来る予定。

追われる少女、追い回す変態、数分後駆けつける英雄。

『ははははは!! これだからバカな人間は面白いツ!! だが……法律は守らないとなア!?! っていうか、うちの娘に何してんだゴルアツ!?!』

主人公を守るのは、実は地球を侵略しに来た悪い宇宙人。

だったのだが、娘の主人公の親父に擬態しているうちに娘への愛で改心。

娘を守るべく日々、悪秘密結社『スケベユニコーン』をぶちのめす正義の使者、らしい。

悪役のような口調で現れて、颯爽と全員生身でブツ飛ばす。

変身するまでもない。七海はこの父親が気に入っていた。

「……………」

「司令官、朝御飯食べていい?」

「お好きにどうぞ」

画面では親父がキレてアスファルトに拳をめり込ませて戦っている。

『き、貴様は……仮面ファイターラブ!?!』

『ハッ、今頃気付いても遅い!』

親父も変身。天体をモチーフにして、娘への無限の愛で強くなる陽気なバーの店長である。

ゴツイ派手な装飾を施した巨漢のファイターが登場、いきなり必殺技。

「司令官、マーガリンどこー?」

「冷蔵庫の一番上の棚ですよ」

「……あつたー。ありがとう」

ラブと名乗るファイターは不敵に叫ぶ。

『良いこと教えてやるよ……最後に勝つのは愛と正義つてやつだつてな!』

——ラブラブテックアタック!! アデュー!!

大きく跳躍。呆然と見上げる変態。

派手なエフェクトを出しながら巨漢の急降下の蹴りが放たれる。そろそろ決め台詞が出る頃か。

蹴りが変態の脳天を直撃。

親父の愛が今週も炸裂した。

『ぐああああああ!!』

倒れる変態、大爆発。それを背に、親父は決めた。

『……アディオス』

カッコいい。本当に宇宙人かこいつ。いいやつ過ぎる。

最後に娘を迎えに行く所で今週は終了。

次週は二号ファイターが出てくるのか。

実に楽しみであった。満足して画面を閉じる七海。

「司令官、コーヒーの瓶はー?」

「……………今行きますので」

週末なので、如月が遊びに来ていたのだ。

彼女は特撮にはあまり興味がないようで。

いつも見ずに朝御飯を用意している。

いわく、

「如月はタイマンって言われてもわかんないし……」

とのこと。数年前の奴を見ていて止めちやったらしい。

話はずれるが姉は特撮好きである。

たまに睦月の変身を見るにやし!! とか言ってポーズ決めている。

如月のたれ込みであった。

で、日曜なのだが今日は昼に例の演習もとい、喧嘩祭りの日である。

通常勤務は皆に任せて、七海たちは近海で殴りあう予定。
あの後、しっかりと由良と響には謝っておいた。

二人は、分かってくれればいいと許して、五十鈴がその後個人的な話で連れていった。次の日に聞いたのだが、吹雪に関して二人で何とかフォローしてみるといつてくれた。

有りがたいので、素直に礼を言ってから、任せている。

皆の結論は、問題が問題なので、やはり殴りあいはしておいた方がいい。

こう言うのは後腐れなく、と言うのは難しい。時間ぐらいしか癒せる手段もないのだ。

吹雪の問題になるし、妹を違う場所とはいえ失ったと聞けば、辛い気持ちにもなるし八つ当たりもしたくなる。

しかも普段から仲の悪い相手が一端になっていれば余計に。

今日の演習は、吹雪のガス抜きと同時に、七海も吹雪の相手をする。
但し。恐らく、本当に殺しあいになる。

沈まないのだから向こうも死ぬ気で来ると、響は言っていた。

故に、七海は司令官として、吹雪の憎悪を受け止める。

あの行為そのものの詫びはする気はないし、後悔もしない。

必要なことであり、如月の命のためだ。事故、としか言えない。

吹雪も分かっているが感情の昂りは我慢出来ない。それも、仕方ない。

（さて。如月とご飯食べて、準備しますかね）

私室の備え付けのミニキッチンに立っている如月と一緒に、七海は朝御飯を食べて、昼に備える……。

昼過ぎ。ドックの準備も終えて、皆は近海の真ん中で突っ立っていた。

それぞれ、七海の指示なしで好きにやれと七海が命じて、好きにやっている。

勝敗はとりあえず互いの全滅か降参。それ以外は無し。

旗艦は五十鈴と由良が務める。駆逐艦が大半の艦隊だ。

五十鈴が皆に作戦をたてているが、七海は例外。

従来型の艦娘として初めて言われたのが、

「あんたは前衛で派手に暴れて夕立」

旗艦として、七海ではなく、駆逐艦夕立として参戦している彼女に命じる。

中々に七海……いや、夕立は恐ろしい艦装を使っている。

皆とは明らかに異なる造形。背中に背負う機関は大型で、彼女はなんと手ぶらであった。

精々、手甲をはめているだけ。後は脚部に装備が集中している。

左足に何故か可動式の主砲を搭載。よく見れば、如月の速射砲の連装バージョン。

右足にも同じものがついていた。

腰から、一応魚雷らしきものをぶら下げているが、危ない。

夕立が言うには、これは打ち出す機能は無いらしい。

投げをするための武器だそうで。つまりは、手で外して投擲する。

滅茶苦茶過ぎる。足には装備を載せた具足、両手には波形の手甲。

頭には水上、対空の電探にソナーを纏めて使う複合アンテナと通信機を兼ねるヘッドフォン。

全体的に危険性を意識しているのか、漆黒と黄色の配色が目立つ。

まるでスズメバチのような目立つが手を出したくない配色。

従来型の艦娘は常識が通じないとは言いが、それにしても怖い。

「司令官、カッコいい!!」

「如月。戦闘中は夕立として扱いなさい。今のあたしはただの駆逐艦」
手を合わせて目を輝かせて褒める如月。

最近、彼女のLOVE度数が酷い。

「お姉ちゃん、威圧的だね……」

「カッコいいでしょ?」

「そうだけど……」

イムヤが浮き輪の上に座って眺めている。

くるくる回って全身を見せびらかす夕立。

戦闘中は提督呼び以外なら好きにしていっていいと言うので、普段通り呼ぶ。

今は五十鈴の命令に従う駆逐艦だ。

「夕立ちちゃん、援護は任せてね」

「睦月の本気を見せてやるのね!」

五月雨と睦月の頼もしい言葉に、夕立は頷く。

開始のブザーが鳴った。審判は古鷹にお願いしており、観客も何人かいる。

扶桑と山城は初の従来型の艦娘を見るので、少し楽しみだった。

「んじゃ、始めるわ。皆、ついてきて」

偵察機を放つ五十鈴が号令をかけて、演習が開始される。戦いの、始まりであった。

五十鈴の偵察機が相手を発見した。そこまで射程が長くない互いの艦隊。

夕立は司令官として全部の装備のデータを記憶している。

フェアになるように工廠の珍獣と相談して決めた今回でも、見れば大体分かる。情報で彼女に勝てるわけがない。故に対策も読まれる。

イムヤが慣れた手付きで先制の雷撃を放つ。

ソナーを装備しているのだろう。散開して回避したようだと、言うことはどうせ爆雷も持ち出している。

由良の艦載機を見つけて見上げる夕立。

気にしないで、五十鈴が突撃を命令した。

「初陣よ夕立。……食い散らかして」

「了解です」

五十鈴は訓練状態の夕立の結果を見ている。なので、こういう采配にした。そして知る。

放たれた夕立は、狂った猛犬のように、攻撃のみに特化していると。それまで、皆に合わせていた夕立。だが、行けと言われ。

——突然、艦隊を激しい波が襲った。

至近距離。背丈を超える波が、皆を飲み込む。

驚く一同。水中のイムヤも大きな音がしたと報告する。

頭から海水を被って、全員びしょ濡れだった。

幸い、艦装は濡れた程度じゃ問題ない。

「行ったわね。じゃ、援護を始めましょう。……心の準備も、しておいてね」

五十鈴が意味深なことを言った。

波が起きた先にいたはずの夕立が忽然と消えている。

何かと思えば、先程の波は夕立の瞬間的な加速のせいらしい。

彼女の速力は艦娘のそれとは違い、人間に近い。

一瞬で最高速度に達して放たれる様は、航行と言うよりも跳躍。

要は、夕立のスピードは飛んだり跳ねたりがメインの、海上に足がつかない高すぎる

機動性。

一瞬のスタートダッシュは、電探から消えたような速度で動くので、視認せねば戦えないと言う。

同時にその性質上、海中の魚雷が当たらない。空中を跳ね回る彼女に当たる訳がない。

人間と言うか、超人のようなモノらしい。啞然とする周囲に、五十鈴は疲れたように言った。

「規格外の仲間だからね……。五十鈴たちの常識じゃ通用しないを通り越して分からないもの。何とか追いついて見せない」と

偵察機が報告。敵の艦隊に駆逐艦が一人で突っ込んで暴れている。

相当な距離を一分かからずに詰めて、始めていた。

援護する彼女たちを差し置いて、その頃。

「きやー!?!」

突然乱入してきた駆逐艦に、暁がパニックになっていた。

電探が妙に速い何かを察知したと思ったら、至近距離に既にいた。

由良も驚いている。この接近するまでの間に、迎撃も出来ずに寄られた。

(なんて速さ!?! 従来型の艦娘はこんなに速いの!?!)

艦娘とは思えない速度で現れた彼女、夕立。

真正面から飛び込んで、由良が直ぐに指示して散開する彼女たちに無表情で言った。

「ほら、かかってきなさい吹雪。あたしは、此処ですよ」

吹雪を名指しで挑発した。吹雪は当然反応する。

無謀とも言える愚策に、怒鳴った。

「一人で突っ込んで……的になりたいんですか!？」

「的になるなら、そうでしょう。……試してみますか?」

淡々と、急停止して待っている。

周囲を取り囲む彼女たちを一瞥して。

吹雪は由良の指示に従い攻撃はしない。

悔しそうに睨んでいる。夕立は黙って見ていた。

「……由良。攻撃しないんですか?」

囲むように配置した周囲を見て、由良に夕立は問う。

主砲を向ける威嚇など、彼女に効果があるわけがない。

装備の詳細を知るなら、ダメージも予想していると見る。

棒立ちが寧ろ怖い。由良はあれこれと必死に考える。

だが、夕立は悠長には待たない。

「じゃあ、こつちから行きます」

とだけ、告げて。

再び、波を起こして消えた。

距離を跳躍して詰めて、雷の真ん前に着々。

「!! 皆、迎撃を!!」

由良が迷った一瞬で、雷が接近されてしまった。

雷も撃とうとする。が。

「知ってます雷? 砲雷撃戦の、もうひとつのやり方って」

左手で、雷の主砲を殴って弾き飛ばす。

「きゃあ!?!」

悲鳴をあげて思わず後退する雷に、詰め寄った。

そして。

「これが、従来型の艦娘の、砲雷撃戦です」

胴体に腕を回して捕獲。豪快に抱き上げる。

驚く雷に、夕立は持ち上げて構える。

「きゃー!?! 見えちゃう、見えちゃうってば司令官!!」

「……ああ、ごめんなさい」

スカートの中が見えると抗議する雷に謝りながら、夕立は呼び方を訂正しつつ、嫌な予感がして、逃げ腰になる電を発見した。

「……お覚悟を」

「ひいっ!？」

案の定だった。

慌てて逃げ出す。由良が庇おうとするが、投げ槍の要領で構えを取る。

「……えっ？ 雷、こんな意味で胸を貸すって言った訳じゃ……」

「有り難くお借りします。全身ですけど」

呆然としている雷を、勢いをつけて。

……投げた。電目掛けて。

思いつきり、放り投げる。

「放る雷の攻撃による戦闘。略して、放雷撃戦」

「漢字が違うでしょおおおおお!!」

砲弾と化した雷の絶叫が木霊する。

逃げ惑う電よりも空を切る雷は早かった。

そして。どーんと。

派手に頭から、逃げる彼女の後頭部にぶつかって。

大爆発した。早速二名脱落。

言葉を失う彼女たちに、従来型の恐ろしい攻撃が、幕を開けたのだった……。

吹雪の選択肢

初陣の演習。夕立は早速二名を脱落させた。

スタンドプレーは控えるべく、これ以上の追撃はしなかった。

規格外の夕立に、暁は完全にパニックに陥っていた。

そう言えば初めて戦う現場を見た。今までは執務室で無線を聴いていただけ。

見るのは初めてで、実際報告だけの状況と見比べる。

(由良……あなた、身内鼻肩してましたね?)

見てわかる。由良のやつ、報告を水増し修正しているようだ。

なんだこの様は。少し脅かしたただけで、暁は発狂したように無駄に砲撃を続けている。

由良も由良で、吹雪と響の二名と共に囲って撃ちまくる。

夕立は軽く包围をされても回避する。雑だと思ふ。

人数の有利もあるのに、フェイントも混ぜずに素直に狙いすぎる。

だから素人の夕立にも回避できる。適当に避ければ大体当たらない。

戦術を任せたらこれか。冷静さを失つて、由良、暁、吹雪は手数で押しきろうとする。落ち着いて対処すればいい。何のための数の有利だ。

(酷いものですな……)

視点を七海に戻して見つめる。

魚雷を放つ。跳び跳ねて回避。

海中の魚雷が当たらないのは、一見すれば分かるだろうに。

事実、五十鈴はそれを踏まえて突撃させている。

なんで姉妹の由良にはそれが分からない？

同じぐらいの経験はしているだろう。なのに、由良は余裕がない。

響だけは、控えめに、そして先読みするように放っている。

先に着地点を読んだのか、何度か危ない場面もある。

……提督として、この有り様はちよつと看過できない。

「由良。一度演習を停止なさい。提督として、言いたいことがあります」

通信で由良に言った。一時停止。由良の指示で、一度止める。

審判の古鷹にも一報を入れて停止させる。

五十鈴に説教するからその場で待つてろと命じて、夕立から七海に戻り、お説教開始。「由良。確か、あなたの報告では、暁はもう少し余裕のある対処ができると聞きました。……何ですかこの様は？」

提督として、実際に相手をしてわかる、統率が取れていない現状。

由良は素直に謝罪する。暁は漸く落ち着いて、こつちを見ていた。

「暁。……何処を狙っているんですか。あたしには、かするどころか届いてさえいません。威嚇にすらならない攻撃は資材の無駄と、教えたはずですが？」

「あ、う……」

厳しい言葉に、俯く暁。

七海は一切加減せずに指摘していく。

「捉えられないなら、追いかけるか先読みしなさい。分からないなら皆を頼りなさい。同じ艦隊の中で情報の共有はしろと言ったはずなのに、取れてませんか？ これでもあたしは加減しているんですよ？ 反撃してしまえば、皆さん既に全滅していますし。加速だつて初手以外はあげてません。なのに、派手に動いているだけの的にパニクって、無駄に攻撃を繰り返す……。通じない攻撃は諦めて、他の手段を模索するなりするならまだしも、愚直に繰り返すとは何事ですか。由良、これは旗艦であるあなたの責任です。」

次にこの無様なやり方を繰り返した場合、あたしが吹雪以外を全滅させて終わらせません」

吹雪以外。彼女とは、真つ向から戦うので別枠。

本人が睨んでくるが、由良は黙って首を振る。

七海の指摘は間違つてないし、今回は言葉を選んだ柔らかい言い方をしている。

普段なら、もっと辛辣に睨を糾弾するし、由良に対してもキレるような態度で迫る。

落ち着いたいつも通りのトーンで言うだけ、七海の態度も緩和されていた。

「……睨。良いですか。次は、あたしの情報を与えます。響のやり方を意識して、真似てみなさい」

意外な事を言い出した。

なんと七海が、怒るだけではなく、改善の方法まで教え始めた。

丁寧に自分の方法を噛み砕いて教えて、響のようにやってみるとアドバイスしている。

「響。……狙いは、上手です。良い先読みの仕方ですが、もう少し早めなら、当たるかもしれないですね。頑張つて。あと、忘れないでください。今のあたしはこれでも遅くやつています。やろうと思えば、さっきの雷のように一瞬あれば距離を縮めることも可能です。それじゃ演習になりませんので、どうすれば倒せるか、しっかりと落ち着いて、考え

てみてください」

何より、七海は面と向かって褒めた。

絶対に褒めずに遠回しに言っていた彼女が初めて、人前で褒めてくれた。

応援もしてくれる。無表情のままだが、優しく説明してくれた。

目を丸くする響をおいて、由良にも言った。

「由良は先ず、予想外の対処が遅すぎます。旗艦でしょ？ 皆の頼れる相手はあなたなんです。冷静にならないといけません。先ずは、出方を見なさい。砲撃は構いませんが、無闇に撃つのではなく、様子を見るなどして次に活かさないとダメです。物量で圧倒するなどしないように。皆がそれに対応できませんので。あと、倒しても我が鎮守府の資材が溶けたら、怒りますよ」

軽口を交えながら、七海は由良にも穏やかに言っていた。

……成る程。五十鈴の言う通り、隣で言えばこんな風に七海は反省して態度を改める。

由良は安易に怒り、七海を刺激した。だから、反発してこうなったのだ。

基本的に面倒くさい性格の七海には、根気があるのだと言われた。

大人として、とうか意識は妹を見る姉のような気分でやれと。

こうは言うが、普段の七海に付き合うなら姉ポジを目指せと。

そうすれば、接するのも幾分楽になる。世話のかかる妹がいると思えばいい。由良は了解した。今回は自分の失敗を活かしていかないといけない。

頷いて意識すると確認して。

渦中の、吹雪に七海は向き直る。

依然として睨む吹雪には、七海は敢えてこう、言つた。

「一番大雑把なのは、誰か言うまでもないですよね？」

「……でしようね。私です」

「ええ。先走る攻撃が、焦りすら見せるからか、明後日の方向に飛んでました」

七海は至つて平穏なまま、吹雪に言う。

黙つて俯く吹雪。

吹雪も自覚しており、勝てないと分かつていても、倒したい、殺したいという感情が手元を狂わせる。

折角狙つても、憎しみが手先を惑わして見当違いに飛んでいった。

狙っているのに当たらない。動いて居なくても、あの有り様じゃ当たらないだろう。

尤もな言葉に、吹雪は言い返さない。

焦っている。否定はしない。自分でももて余す感情に振り回されて、こんな大事になつた。

増幅した気持ち晴らせるか、と聞かれると分からない。

演習で、実弾を七海に向けて当てたとき、果たして吹雪は満たされるのだろうか？

そのあとは？ 恨みがそれで抹消されるのか？

本来は信じるべき司令官相手に、自分は何をしているんだ。

こんなワガママで、事故だった件を引き摺って、七海を巻き込んで。

どうすれば解決する。それすら、分からない。自分でも、何も。

「……あなたが望むなら、転属も考えます。いいんです、あたしを無理して信じなくて
も」

七海は、また予想外の事を言い出した。

顔をあげると、七海は苦笑していた。

「知ってますか？ 人間社会じゃ、対人関係で仕事を辞めるなんて珍しくもありません。

嫌なやつと毎日仕事をしていると、身体を壊しますよ吹雪。無理をしないで言うてくだ

さい」

嫌いなら嫌いでいい。無理もしないでいい。

いっそ、逃げてしまっても誰も責めない。

そう、七海は言っていた。

「司令官……？」

「構いません。あたしが悪いと思うなら、それでも。あたしを恨んでも良いですし、憎んでも良いです。この戦いを終わらせて、出ていきたいと言うなら手配します。その前にお返しがしたいなら受けてたちます。自分でも分からないのなら……一緒にいるべきじゃないと、あたしは判断します。互いに苦しむだけです」

この問題の根っこは解決は出来ないだろうと、七海は思う。

どちらかが譲歩しない限り、延々と恨み続けてしまう。

そんな辛い苦しみは、避けるべき。

七海は辞められない立場ゆえ、吹雪を追い出す形になりそうだと謝った。

「戦場ですもの。司令官を信じられないと、あなたも死ぬかもしれません。あたしは死なせないと誓っている以上、此のままでは埒があかないと思います。立ち去っても、あたしは文句を言えないので。吹雪があたしに愛想を尽かしてもおかしくはないです。正直に言ってください」

「……………」

分からないから、逃げてもいい。去りたければ、去ればいい。

信用できない人間に仕える必要はないと、七海は断言した。

吹雪は思案する。自分でももて余す憎しみ。

ここにこのままいれば、本当に七海を殺しかねない気がした。

気付いたのだ。一回ブツ飛ばしたぐらいじや、やはり許せない。

理不尽だろうが、一度過熱した憎しみは、このまま戦い、仮に勝利しても。

満たされるどころか、味を覚えて七海の命その物を狙い出す。

そんな予感がした。要は、吹雪は、七海をそこまで、逆恨みしている。

理屈も、理由も、全部関係ない。憎いのだ。自分でも律する自信がなくていい。

そして。七海は、軍規に反して襲えば、多分迷わず殺す。

今の七海は艦娘だ。吹雪のアドバンテージは消えている。

陸でも、襲いかかれば……この人は生きるために殺るだろう。

今度は、自分を守るために。

一度実行した七海ならば、間違いなく、行う。

聞いてみた。仮に、吹雪が襲いかかったらどうするか。

七海は案の定こう言った。

「死なない程度に半殺しにしてからつき出すか、あるいは本当にもう一度、繰り返してしまいかもありません」

彼女も自信がない。自分のために、相手を殺しても誰だつて糾弾できないと吹雪も思う。

やはり。憎しみを抱き続けて、寝首をかこうとしている艦娘は、自分のためにもいな

い方がいい。

七海は襲えば殺すだろう。吹雪だって死にたくない。

でも、我慢できない憎悪はどうすればいい。

一番平穏で平和な答えは……離れて、時が癒すまで、会わないことだろう。

分かった。吹雪は、初対面の時から、七海が大嫌いだ。

信用できないし、したくないし、一緒にいるのも嫌だし、指示を聞くのも嫌悪を抱く。

一緒にいるべきじゃない。嫌いなやつに従う必要はない。

「……そうですか。なら、お言葉に甘えて、そうさせていただけます」

ふう、とため息をついて、吹雪は言った。

漸く見つけた、妥協できる互いの範囲。

もう演習はいらぬ、と七海に言った。折り合いは自分の中でついた。

「もう、良いです。私、此処から出ていきたいと思えます。司令官の顔をみたくありません」

正直に言えと言うので、言葉で溜め込んでいた毒を吐き出す。

本人が、好きなだけ罵倒しろと言うので思いつきり言いたい放題、数分に渡って罵り続けた。

ありったけの嫌悪感を込めて、最後に纏める。

「頭がおかしいんですよ貴女は。医者に見てもらった方が軍のためです。よく今まで平然と暮らせましたね」

「よく言われます」

「言われるなら医者に行ってください。そして、二度と出てこないでください。私の妹のような犠牲者をまた出したら……私は、我慢できるか自分でも分かりません」

「……………保証出来かねます」

思っていた事を全部ぶつけた。

一方的な憎しみや悪意に、周囲は逆に吹雪に対しての印象が悪くなっているだろう。

だが、逆に聞く。姉妹を不可抗力で殺された人間の痛みや苦しみが誰か一人でも分かるのか、と。

吐き捨てる感情に、多少はスッキリした。

吹雪は最後に、ワガママに等しいバカを言ったことと、この騒ぎに対しては、謝罪した。

「でも、他は謝りません。絶対に、何を言われようとも」

根本は謝らない。決して、彼女には。

吹雪はこれだけは、どうしても無理だった。

「そうですか。じゃ、後は適当に演習して止めましょう。さ、再開しますよ」

七海は了解した。吹雪は、この演習が終われば、速やかに転属する。七海には愛想を尽かした。もう、付き合っていられない。

頭がおかしい人間になど、自分の命を託す気はない。

諸とも死なれるがオチだろう。

冗談ではない。狂人に尽くすほど、吹雪は阿呆ではないのだ。

何とでも言えればいい。悪いのは吹雪だろうし、所詮逆恨み。

それでも恨みは恨みに変わりはしない。

だから、去ろう。これ以上の大きな事件になる前に。

これ以上、自分も相手も苦しまないために。

吹雪は決めた。姫園鎮守府を、自分から居なくなる選択肢を……。

追記。

演習自体は七海が相手を皆で潰して勝利した。

吹雪も結局勝てずに敗北。そして二日後、さつきと出ていった。

七海が手際よく転属の手配を行なった。

吹雪はなにも言わずに荷物をまとめ挨拶すらせず去った。

これで良かった、と七海は思う。

彼女はどうも、頭がおかしいことを自覚をした方が良いかもしれない。

そんなことを、今回で学んでいるのだった……。

七海の中身

何人も言われれば流石に気になる。

(あたしは頭がおかしいのですかね?)

吹雪は医者にいけと言った。大淀も言った。

響も五十鈴も、頭がおかしいと言うのだ。

……大丈夫だろうか？ 仮に精神に異常を来す人間ならば、吹雪の言う通り二度と出
てはいけない。

尤もな意見に七海は気になる。不安になるではない。単純に気になる、程度の事。

……一度軍病院に行こうと、次の休みに彼女は少し軍医に診て貰うべく、出掛けるの
だった。

で、後日。お医者者に向かったあと。

(……リーチ目って冗談じゃないんですが)

顔面真つ青の七海は軍医の言葉がぐるぐると頭のなかで回っていた。

診断結果。一応、異常無し。但し兆しが見えてきている。

前に精神医学の本で読んだ覚えのある病名の疑いあり。

無害な部類の異常らしいが……既に実害が出ている。

医者いわく、

「七海さんのこの他者に関しての無関心。これこそが最大の特徴です。他人に共感できない、他人の感覚が分からない、他人の感情に興味がわかない。纏めるなら、多くのストレスは格段に強いものの、同時に他者とのコミュニケーションを、自分から取ろうとしない、しても最低限、あるいはする理由がないと決め全く行わないという症状ですね。一番厄介なのは、本人がそれに困らないから、医者に来ないんですよ。実際、七海さん

も周囲と隔絶を感じて初めて来ましたよね？ で、変わろうとしているので今は問題無いんですけど……そのまま行けば完全にアウトでした。自覚なきっているだけマシな部類です」

異常者一歩手前。崖つぷちで変わろうとして、漸くだ。

医者言う特徴は七海の性格その物で、ああ成る程おかしいわけだと納得した。

実際困りはしないし、一人でも何ら問題なく今まで生きてきた。

家族もそれが当たり前、学校も当たり前と受け入れていたので、気付かなかった。

……軍医は大本営に伝えたらしいが、返ってきた返事は、相手は道具だから気にするな。

憲兵にも知らせておくので、トラブルがあつたら素直に頼れ。艦娘に殺されないように努力しろ、と。

(……運営に支障が無ければ異常者も雇うんですかこの国は)

仮にも軍人だろう。

一歩手前のサイコパスを起用して大丈夫なのだろうか。

艦娘を道具として、兵器として扱うゆえにサイコパスでも無関係と来たか。

正しくはサイコパス一歩手前の異常者というか、狂人と言うか……。

(……あたしって、マジで頭がおかしい奴だったんですねえ……)

揉めるのもよくわかる。おかしいのは七海だったのだ。

だからといって、いきなり自分を変えるのは無理がある。

頭がおかしいまま、七海は生きてきた。問題なく生活していた。

軍医が言うには、別段人間社会でも困るレベルには達しておらず、人を殺したりなどのサイコパスとはまた毛色の違う、無害なものだとか。

ただ、人間関係では大抵揉めるらしい。それぐらいの次元で収まる。

兎に角七海のような人間はあらゆるモノに興味がないので、下手をすると自分の生死にまで無頓着な場合もあるとか。

要するに、害を与えるよりは、関わりを持たないタイプの異常者。

つまりは七海その物だ。通う理由もないが、定期的に顔を出せと強いられてしまった。

(……面倒臭いですが、行かないと皆が……)

これでも命を預かる司令官。頭がおかしいぐらいで逃げていたら、皆に笑われる。

いや、どう考えても逃げられない。

艦娘で司令官やっている七海がどこに逃げろと言うのか。

(……人生、詰んだ……)

まだ大丈夫と言われて何の慰めになる。

執務室、自分の机に突っ伏して死んでいる七海。

お仕事は終えている。午前中に大半が終わっていた。

秘書の由良が七海の様子がおかしいと、気遣って聞いてくる。

「提督さん……いいえ、七海ちゃん？ どうかしたの……？」

仕事ではなく、個人的に心配して訊ねるが。

自分の上司がサイコパス手前の異常者だと言えるわけがない。

真面目に殺される気がした。抵抗できるが、出来れば……吹雪の一件もあるので、やりたくない。

人生初、相談というピンチを迎えていた。

(誰に言えばいいんですかこれ。憲兵さん?)

憲兵は因みに、露骨に近寄ってくるなオーラを出している。

頭がおかしい新設の鎮守府など居たくない、異動届けを出しているとも小耳に挟んだ。

建前上聞いてはくれるだろうが、多分追い払われると予想する。

邪険にあしらって終わりではないか。無駄だろう。

(……はい、詰んだ。あたしと親しい関係はお母さんだけです)

外部には連絡をとれないし、サイコパス云々も外には言えない。

親族でも無理であった。どう足掻いても七海終了のお知らせ。

いつも通りの理屈で破滅を理解した七海は、ぐったり死んでいる。

顔をずらすと、ハイライトのない深紅の穴が由良をギョロリと見上げた。

「……………」

なにも言わない。由良はビクツと後退りした。

怖い。七海が初めて、完全に感情を消した状態で見ている。

今までいくら起伏の薄い彼女でも、大なり小なり不愉快とかそういう物を出していた。

なのに、今はない。何だろう、あの爬虫類とか両生類のような目は。

(えっ…………？ 由良ってば、また何かした？)

おかしい。接し方は気を付けているのに。

また地雷を踏んだのか？ 然し、今回は七海は怒りすら見せない。

黙って、仕事だけして、最低限話して、死んでいる。

(ううん？ 何が起きているの…………？)

内心疑問符を浮かべる由良。

七海は言えないことを初めて苦痛と感じていた。

幸い、本当のサイコパスに至るとこの痛みすら感じずにどうでもいいで流すので、ま

だ七海は手前である。

誰かに相談する。そんな当たり前すら出来ない七海の孤立は、加速して悪化していく……。

如月はどうだ？ 彼女ならば何とか相談を……。

「んふふふふ……司令官って、良いにおい……♪」

……一瞬でも、この脳みそまで蕩けたエロサキュバスに相談しようと思った七海がバカだった。

真面目な話が彼女に出来るのか？

こここのところ七海の私室に住み着いて、暇な時間は毎回抱きついて匂いを堪能する発情駆逐艦に。

見ろ、このだらしない緩みきった顔を。完全にメスの表情じゃないか。

恋人に甘える彼女か。などと思っても、ぬいぐるみ扱いの七海は黙ってなすがままにさせておく。

辛うじて公私混同は避けているが、睦月と同室の筈なのに許可する前に勝手にお引越してきた。

で、住み着いている。服のサイズも大差無いので、勝手に着ているし。

たまに怒ると、泣きそうになるので、怒る気力も奪われ放置していたら増長してこの様だ。

現在、七海は如月のぬいぐるみ。後ろから抱き締められて、うなじの匂いを嗅がれている。

デフォで目が死んでいる最近の七海は、抗う気力すら湧かずに放っておいた。

(如月は何処を間違えたんですかね……?)

お仕事はしっかりと毎日こなしている。練度一位は伊達じゃない。

でも、プライベートの室内では常に七海にベツタリで、一緒のベッドで寝ている始末。

七海もすっかり慣れてしまって、別に如月が居ても気にならない。

元より週末はいつもこれがデフォルトだったので、それが毎日になっていただけ。

「如月……もう寝ましようよ……」

「もうちよつと、もうちよつと時間を頂戴司令官」

「だつたらベッドのなかで嗅げばいいでしょ……」

「もー……しょうがない司令官なんだから」

呆れているのは此方なのだが。

ようやく動いて、ベッドに連れ込む。

如月はとても嬉しそうに、布団に潜っていく。

今晚も一緒に眠る。直ぐ様寄ってきて匂いを嗅ぐ如月。

「如月はもう、司令官のお嫁さんが良いわ。一生匂いを嗅いでいたい」

「あたしにそんな趣味はございませんが？」

もうこの子は色々ダメかもしれない。百合に目覚めている節がある。

そんな変態的趣味はない。断じてない。

「そう？ でも、あんなことあっても、如月は好きよ司令官のこと」

「……よくもまあ、女相手に臆面もなく言えますね。流石エロサキユバス」
現状、好意的に見てくれるのは如月だけ。

大抵、ほかの皆はすれ違いだ喧嘩だを繰り返している。

思い返せば如月は初期から好意的に接してくれた。

こんな七海でも、仲良くなりたいと。結果、悪化してここまで来たが。

好きとストレートに言えるぐらいには、好いているみたいだった。

あの事故も一緒に乗り越えた……というか、吹雪と揉めたのは七海だ。

あの時も如月は迷わず味方してくれた。

(……信用、って言えばいいんですかね。これで発情してなければ相談できたのに……)
プライベートでのエロさえ無ければ今すぐにも頼っていると思う。

今更気づく。七海は如月にはそれなりに信用、というか信頼的なモノはあるようだ。相談できた、と考えている時点で、少しは頼ろうと思っている。

だからこそ、如月の言動は残念すぎる。

「エロサキユバスじゃないわ。如月は司令官のにおいも性格も好きだけ」

「いや、性格が好きってあなた趣味大丈夫ですか？」

なんと。如月は内面も好きだというのだ。

こんなサイコパスを？　なんで？

七海は大変驚いた。如月は逆に聞く。

「響ちゃんとか、司令官はおかしいって言うけど……おかしいの？　如月はそうは思わないわ。ずっと見てきたけど、確かに言い方はキツイし短気だし理屈屋だし素直じゃないけど。如月は見てたもの。向き合おうとしてくれたし、死なせないように努力してくれたし、人間として見てくれる。……知らない、司令官？　本当の意味で艦娘を人間として見てくれる人は……少ないのよ」

真剣な顔で、如月は言う。憲兵は、所詮は違う管轄の人間。

どんなに表面的には優しくしてくれても、やはり壁を感じるのだそうだ。

一步引いた場所から、極薄の見えない壁を挟んで接している。その言葉も、笑顔も、態度も。あくまで、艦娘としてしか見ない。

半端な命として、扱っているだけ。戦う代理の兵器よりも多少マシな兵士ぐらい。どう見ても、人間には程遠い。

「散々揉めたわ。たくさん司令官は、皆と敵対してきた。けど、ずっとそれは同じ目線……人間として、対等に過ぎってきている気がする。司令官の言動は最悪だったと如月も思うわ。けど、その最悪は……他の、人間相手でもきつと同じよね？ って言うことは、裏を返せば如月たちを言った通り、人間として見てくれている証拠。艦娘だから見下したり、同情したりしない。自然に、最悪なまま人間としてふれあってくれた。そして、最悪を改める今の司令官なら……後は上がるだけ」

言動の最悪な部分は否定しない。

けど、七海の接し方は、他者にも同じで、特別艦娘にたいしての区別も差別もなかった。

如月は、そう言った。

七海の努力の方向音痴も、見ている如月には、ちゃんと届いていた。

言うならば、七海の努力を寄ってきて傍で見ているのは、如月だった。

「如月は知ってるわ。言葉だけじゃない。行動だけでもない。司令官は、両方やってく

れてる。艦娘に尽くそうとしてくれるじゃない。ピンチの時にも迷わず庇ってくれて、嬉しくない訳がない。……気がついたら、仲良しを越えていて……。そんなの、女の子でもホレちゃうでしょ?」

「……えっ? まさか、ライクじゃなくてマジもののラブ!?!」

まさかの展開。如月の好きは、愛情の好きだった!!

親愛かと思っていたら、恋愛の方らしい。

突発的ラブユー。驚愕の七海は思わず聞き直した。

百合に目覚めている節があるじゃない、目覚めていた。

頬を赤くして、如月は告白を続ける。

「大丈夫。司令官がおかしい前に、如月の方が断然おかしいから。でもいいの、自分の気持ちに嘘はつけない。だから、言っちゃおう。司令官、如月は司令官を愛しているわ。大好きよ」

「あたしにそんな趣味はないって言ってるでしょう!?!」

「無いならこれから目覚めればいいと思うけど? 案外、悪くないわよ?」

……嗚呼、これが類は友を呼ぶと言うのか。

如月は、七海という少女に、艦娘にして司令官に、恋をしたそうだ。

これ、サイコパスにホレていると見ていいのか。

挙げ句には。

「そうね。仮に司令官が頭がおかしくても、如月は愛せると思う。自信あるもの。どんなに狂っている司令官でも、根本は如月の好きな司令官だつて」

「……」

一番驚いたのは、同性愛のはずなのに、理解者がいてよかつたと言う謎の安堵。

如月の気持ちには驚いたが、別に嫌な気分でもない。軽蔑もしない。

自分も頭がおかしいからか。

照れているのに、必死に言葉を紡ぐ如月が、可愛いと思つてしまう。

七海はやはり狂っているのか。いや、同性愛でも気にしないのは多分ある。

彼女に告白されても、可愛いとは思つても、いとおいしい感情にはならない。

「……………そうですか。じゃあ、あたしも一つ秘密を明かしましょう」

如月の告白に、返事は出来ないが信頼の証を見せると七海は言った。

首を傾げる如月に、誰にも言うなと約束をさせてから。

……七海は、口を開いた。

艦娘に初めて打ち明ける。

いや、他人に初めて、弱点を曝け出す。如月を、信じようと思つたから。

「——あたしは、俗に言うサイコパスの症状があるそうです。精神異常者一歩手前、そんな女ですよ。本当に、貴方は……あたしを、愛せますか。如月？」

報告会にて

既に、七海は提督としては素人を卒業しつつある。

自分の鎮守府の艦娘の特性は全て頭に叩き込んである。

海域に出る深海棲艦の種類も記録のあるものは全部覚えた。
と、なれば。

次は、艦娘たちとどうやって、接していくかであった……。

ある日、提督たちを召集しての会議があった。

基本的には一種の報告会みたいなものだが、今回は荒れに荒れている。

大体、階級は同じで七海は一つ上の中佐。数名中佐も集まっている。知り合いの皆は大半が少佐であった。

が、ある中佐が顔を出していた例の島村提督に噛みついたのだ。

会議が終わる間際、質問をする時間が毎回あるのだが……とうとう、そこで怒鳴りあげた若い男性中佐。

「島村貴様アツ!!」

それまで態度が悪くも黙って聞いていた中佐だが、質問の時間に入るや、机を両手で叩いて怒鳴った。

驚く周囲に、憲兵が慌てて制止にはいる。が、彼は止まらない。

二人がかりで無理矢理着席させるが、掴みかかろうともがいている。

「島村ツ!! この間の列島の奪還作戦、貴様何人犠牲にした!? 答えろオ!!」

怒鳴り散らす彼だが、一応質問ではあるらしい。

憲兵が宥めるが、怒り狂っていて聞いていない。

渦中の男……割れた顎の敵つい筋骨隆々とした逞しいハゲの巨漢、島村は帽子を脱いで答える。

「ふむ……? 何を怒ってらっしやるのかな敵島提督。それは先ほど報告したはずだが？」

「嘘を言うんじゃねえ!! 貴様と言う男は、解体しただろう、作戦終了後に!! 以前いた漣、涼風、高波の三名がリストから消えている!! 異動の記録も残ってねえ……つまり、貴様は殺したツ!! 命がけで戦った艦娘を、その手で!! なぜ平然としているんだ貴様という男はツ!?!」

……艦娘の解体。

各自の鎮守府では、不要となった、判断された艦娘は自由に解体できる。

その権限を提督は自由に行使できるし、抵抗すれば無理にでも連れていける。

憲兵は嫌がる艦娘を無力化も出来る装備もある。

然し、それは彼女たちの死を意味する。七海ですら、安易には使わない。

……死ぬ、という意味だから。

「厳島提督。貴様は、他の鎮守府のやり方に口出しするのかね?」

島村は呆れたように、厳島という中佐を見ている。

バカを見ている目であった。明確に見下していた。

「聞けば、貴様はろくに戦果もあげていないではないか。そのくせ、気に食わなければ他者の流儀に口を出す……。フツ、三流だな」

「何をっ!?!」

嘲笑されて、憤る厳島提督。

七海は喧しいのを我慢して、出されたお茶を飲みながら外を眺めていた。

この喧騒などどうでもいいので、早く帰りたい。

聞いていないなかつた。

「なんだこの采配は？ 戦うときに戦わずに撤退を繰り返して、深海棲艦の活動範囲を食いつめる事すら満足に出来ていないが？」

「当たり前だ!! 俺達は侵略をしてるんじゃないか!! 国防をしているんだ! 傷があれば撤退するのもおかしくはないだろう!!」

ぎゃあぎゃあ喧しい。七海は鬱陶しいものを見るように二名を見る。

敵島提督には、赤松提督含め数名が加勢して、更に騒ぎ立てる。

喧騒の度合いが増した。

近くにいた憲兵に帰っていいかと小声で聞くが、同じく嫌そうな顔の女性は待って、と首を振った。

島村は怯まずに的確に言い返す。理論的で、七海も色々と参考になる言い分だ。

やはり、島村提督は間違っていない。時には、あるいはそれを求められているなら、応えるべきだ。

七海は幸い、狭い範囲の維持を任されている小規模鎮守府。そんなものは気にしない
でいい。

島村は大きな鎮守府の提督だ。しかも時に姫なども相手すると聞く。

それを納得せずに食いかかる連中に、島村は。

「話にならない。貴様たちの采配はあまりにも情にほだされている。これで国防を謳うとは、少しばかり恥を知ったほうが良かろう」

「何だと、島村ア!!」

最近中佐になった赤松も凄まじい剣幕で唸っている。

今すぐにも殺しに行きそうな雰囲気だ。

初めて見る、赤松の剣幕。七海が知るのは気のよい兄貴的な感じ。

随分とお冠のようだ。七海は一切加勢しない。気にしない。どうでもいい。

他人の流儀にケチをつけるほど、感情的ではないし、幼くもない。

それは、阿呆か子供のすることだ。七海は子供だが、この程度の分別はつけている。

「愚かしい、そして嘆かわしい。見たまえ、渋谷提督。候補生時代は独房入り最高記録の貴様ですら、真面目に取り組んでいると言うのに、彼らときたらこの有り様を国防というのだ。渋谷提督の意見を聞かせてくれないか? 艦娘にして司令官という稀な存在の貴様の意見を伺いたい」

こいつ、七海を巻き込みやがった。

しかも艦娘になっていることを知っているのか。

書類を寄越したハゲの言い分を聞くべく、一応真面目に書類に目を通す。
数秒で言葉を失った。

「……………」

なんだこの無様極まる報告。

戦艦で駆逐艦を撃破？ 軽巡が戦艦に攻撃？

何を血迷っているんだこれは。素人よりもひどい気がする。

過剰な火力によるオーバーキルを始めとして、明らかに勝てない艦娘が挑んでいったり、海域の詳細な情報を知らずに遠征に行つて案の定失敗したり。

目も当てられない惨状が記されている。七海は、大きな溜め息しか出てこない。

「はあ……………」

候補生情報からなにを学んできたのか。

全く活かされていない。寧ろ独断が入つて悪化している。

七海は独学に近いながら、それなりにやっている。皆も教えてくれる。

だが、なんだこいつらの結果は。

「率直で宜しいでしょうか？」

「構わん。渋谷提督の言葉で言つて欲しい」

一応確認を取ると、何故か島村が答えたが、まあいいだろう。

感じたことを素直でいいか？ と本人もふんぞり返ってよいというので辛辣に行く。「敵島提督。遊んでいるんですか、国民の血税で」

凄まじいトゲのある言葉が飛び出した。

七海は目を丸くする相手に、従来通りで指摘する。

「島村提督に文句を言うまえに、ご自身のこの有り様を改善してください。ふざけていますか？」

「……何が言いたい、渋谷提督」

腕を組んで不愉快を表す。

かなりご立腹のようだが、それはこの指示を見てから言えと七海は思う。

ならば、いつも通り理屈で徹底的に否定してやろう。ダメ出しもして、反撃できないようにしてやる。

それから、数分に渡って七海の一切の容赦のない指摘と文句が飛んでいく。

最初は不貞腐れている敵島提督だが、七海の言い分には非がないので言い返せずに、数分の屈辱を堪えていた。

最後に、七海はこう締めくくる。

「あなたもいつか、誰かを殺しますよこの状態では。現場を知る唯一の提督のあたしが言うんです。この戦法は、あまりにも甘すぎる。何より、目の前に迫る艦隊に不用意に

背中を向けるなど……正気の沙汰とも思えません。担当する海域の規模に対しての出現する深海棲艦の種類と割合の計算は最低限です。よくわかりますよ、この結果は。あたし以上に候補生情報を無駄にしている証拠です。行き当たりばったりでやっているようでは税金で遊んでるも同然。ご自重頂きたいのですが」

痛すぎる指摘にぐうの音も出ないまま、論破されて敵島提督は黙った。

赤松が塞き止めるように間に入って、緩衝材になる。

七海は失言を申し訳ないと謝罪はするが、撤回はしない。

それほど実際、この人物は口先だけだった。

「見るがいい。最年少の渋谷提督すら、敵島提督。貴様の手腕を疑っているぞ。まだ、私になにか言うかね？」

島村提督は、そらみると言わんばかりに胸を張っていた。

やることをやらない奴に言われる筋合いはないと、そう言いたいようだ。

で、七海に彼は言い出した。

「渋谷提督。先の事故では、ご迷惑をお掛けして申し訳ない。私の監督不行き届きが原因で、誠に迷惑をかけてしまった。遅れてしまったのだが、お詫びをさせていただけないだろうか？ 私の鎮守府の装備の一部を譲渡したいのだが、どうかね？」

「それは大変有難い申し出です。喜んでお受けいたします」

そういう話なら大歓迎だ。誰であろうが貰えるものは貰う。

島村が切り出した話に乗る七海に、周囲は嫌悪感を見せている。

艦娘殺しの提督が悪びれずに島村提督とつるんでいる。そう、見ているんだろう。

「然し、笑わせてくれるな敵島提督よ。いや、ここの大半の提督たちは、どうも艦娘という存在を過大評価している節があるな。全く、嘆かわしい限りだ」

と、全体を呆れるような素振りで、一瞥する島村提督。

哀れむように見られて、今度は別の提督が逆上して食って掛かった。

またもや口論に発展する。一応、中立の提督もいるが迷惑そうだった。

七海も中立で居たいのだが、島村提督に味方する優秀に入る提督たちも参戦して本格的に喧しくなる。

議題は、艦娘は人間として扱うのか？

島村提督一派は道具として扱い、必要なときは殺してでも勝利を勝ち取る。

赤松提督や敵島提督は、艦娘は人間であり犠牲ありの勝利などあり得ない。

平行線の議論は何時しか罵りあっていた。

(何とかは踊る、とはよく言いますが……全然進みませんねえ)

飽きた。この手の終わらない討論会は詰まらないし、時間の無駄だ。

早く帰りたいのに、時間だけ延びていく。

聽て、島村提督は再び七海に振った。

「ならば、双方の立場を兼用する渋谷提督の意見を聞こうではないか諸君。艦娘、提督、その立場を歩き来する彼女の意見こそが尤も公平だとは思わないかね？」

周囲の視線が一気に集中する。

話を聞いてなかった七海はポカンとして、周りを見ている。

(なんでイチイチあたしに振るんですかこのハゲは!?)

突然の振りに困る七海に、近くにいた別の中立派の提督が教えてくれた。

七海の立場からして、この議題はどう見えるか、らしい。

「……は？ 何を当たり前のことで言い争っているんです？」

意味のわからない事を聞かれた気がした。

なんて下らないことで言い争っているのか、実際七海には理解できない。

「……というところ？」

島村提督が促すので、ストレートに意見を吐き出した。

「そんなもの、個人で決めればいいでしょう。逆に聞きますが、一つでも重なる事案があるんですか？ 海域や鎮守府の規模、所属する艦娘の数、それぞれの資材事情、個人の主義主張。そう言うものは違うのは当たり前です。なら、それによつて左右される艦娘に対しての接し方、扱い方などどうであろうが、問題などない。統一など無理な話です。」

大本營の軍規に明確な規定はありません。どう扱おうが、ケースバイケース。それで良いでしょう。違いますか？」

客観的な意見だった。

成る程、と島村提督一派は納得する。

七海の指摘通り、一つとして重なる事案などない。

各自の鎮守府による事情は違う。なら、付属する艦娘の扱いに差があってもおかしくない。

イチイチそんな決まってもない事で言い争う暇があるなら、自分の行いの反省でもしている。

意識するとそう言うことを七海は皆に言った。やることをやれ、という理屈で。

「……納得いかんぞ。俺は渋谷提督の言い分は無慈悲すぎると思うが」

一部の提督が反論するが、七海は想定していた。

直ぐ様、聞き返す。

「納得いかない？ それは要するに、ご自分の感情論をお認めになると？ 単に気に入らないから因縁をつけた、とあたしには聞こえるのですが」

七海はその言葉を真っ向から否定する。

提督個人の感情的な話など聞いていない。

提督ならまず、己の義務と責任ぐらい果たせといふ放つ。

任務を果たして、義務と責任を全うしている人間にいう前に自分を律せよと。

七海は七海なりに、彼らは彼らなりの方法でそれを行っている。

対して、文句を言う連中はどうか？

半端な同情で戦うときに逃げる、偉そうに言う割には結果を出さない。

口だけの七海以下の惨状を見て国防と宣う。

「生憎と、あたしは他の誰がどう扱って居ようとも、関係ありません。自分の事で手一杯なので、自分の任務に集中します。他の方々も、ご自分のお手元に集中した方が宜しいかと。口を動かす前に、結果を出していただきたいものです」

つまり、文句をいう前に自分のやっている事を何とかしろ。

七海は、そう言った。七海はある程度の結果は出しているし、皆もそれに文句はない。

他人にどうでもいい七海からすれば、心底下らないことで喚いている。

そんなもの、個人の好き勝手でもいい。いちいち口出ししているなら自らを改めろ。

本当にそう思う。彼らは一様に黙り、渋い顔で七海を見ている。

同時に、島村提督一派は七海の客観的意見に拍手すら送っていた。

「素晴らしい。お若いながら、見事なご意見でしたぞ」

「冷静な分析だな。うむ、良い判断だと思う」

艦娘擁護をする提督よりも、軽視する提督の方が七海の意見に賛同する。

七海は基本的に他人はどうでもいい。ゆえに、嘯みつく理由もわからない。

自覚しても、この場合は別にいいと思う。なにせ、真面目にわからない。

多分、理解しなくてもよい連中だろう。

「ふむ……妥当で、理屈的にも分かりやすい意見だったな。流石、艦娘と提督の双方を担う渋谷提督だ」

島村提督に褒められても、正直嬉しくない。

荒れたせいも、一部がこれ以上揉める前に議論を打ち切つて、報告会は強制終了。

三々五々、互いに文句を小言で言いながら撤収するなか。

「渋谷提督」

帰り支度をしていた七海に敵ついハゲが近寄つてきた。

見上げる巨漢。白い軍服が窮屈そうな体躯は最早ゴリラか。

声をかける島村提督は、七海に折り入つて相談があると言う。

一応伺うと、先日吹雪が異動した事を報告で聞いて、島村提督はこう、切り出した。

「今、丁度我が鎮守府に役に立たずの腐っている駆逐艦が二隻あるのだが、此方では戦力にならぬゆえ、引き取つては貰えないだろうか？ 戦力不足では大変だと心中、お察しする。国民の血税を無駄にするわけにもいかぬ。役に立つかは分からぬが、是非そちら

の戦力の足しにして頂ければ幸いだ」

手薄な戦力の補充に、腐っている駆逐艦を寄越してくれると言うのだ。非常に魅力的な提案に、七海は受けた。速攻だった。

解体されるよりも戦力になるなら、受けとりたい。

七海の好意的な反応に、島村提督は厳つい表情を初めて崩して笑った。

「そうか。こんなのがお詫びになるか分からないが、何かあれば私は助力しよう」と、適当に約束をしてから去っていった。

七海もお土産が出来たと、皆に報告をするのが楽しみであった。戻っていく七海が聞いた、駆逐艦の名前は。

……山風と、弥生という駆逐艦であった。

臆病と仏頂面の闇

夜遅く、報告会から帰ってきた七海を待ち構えていたのは、仁王立ちの五十鈴であった。

執務室で待っていた彼女は、単刀直入に聞いてきた。

「七海、あんた最近悩みあるでしょ？」

「!？」

帰ってきて早々、如月以外の艦娘には言っていないのにバレていた。

ぎよつとして荷物を落とす七海。思わず停止していた。

慌てて取り繕い、無言で着替えて片付けてから仕事に戻る。

止めておこう。五十鈴には誤魔化しは通用しない。

心理状態を既に七海は掌握されている。なにか言えば探りを入れてくるだろう。

敢えて沈黙を選ぶ。これ以上の情報は決して与えない。

「思っていた以上に分かりやすいわねあんた……」

五十鈴はかまかけをしたのだが、どうも七海は一人で悩んでいると由良が言っていた。

怒るわけでもないのに様子がおかしい。それは悩みごとでは？ と五十鈴に相談した。

で、現状七海の隣に立っている年長者の五十鈴が聞いたわけだが。

七海に聞いたら動揺していた。彼女はどうかやら、今までにそういう経験がないのか、意外と隙が多い。

揺さぶりには強いだろうが、不意打ちには弱い。

何より、それで隠し通せているという甘い考えが、見え見えである。

「……」

沈黙で拒絶をしており、絶対に言わないという意味を見せる。

悩み自体は、否定しない。

呆れる五十鈴を信用しない訳ではないが、如月以外には言わない。

如月が言いふらすとも思えない。一応、こちらを恋愛対象にしている身だ。

嫌われる真似はしないだろう。

彼女に伝えた、異常者一步手前の現状。如月はこう、答えた。

「そう？　振る舞いに気をつけていれば問題ないなら、今まで通りで良くないかしら？」
気遣えば被害は減るし、偏見もないので気にしないとあつげらかんと。

細かいことはどうでもいい。如月も立派におかしいと笑っていたぐらいだ。

彼女からすればバカらしい問題らしく、秘密にしておくから気にしないでと励まされた。

気休めでも、理解してくれる人がいると思うと、少しは落ち着いてくるもので。

七海は赤の他人に感謝するという事を、もしかしたら初めてしたかもしれない。

如月は味方だと。信じてもいい少女だと。そう、思ったから彼女を信じる。

その如月はいはずがない。理屈でも信じるし、何だか心も信じたいと願っている気がした。

なので、その一件には黙秘権を行使して、言わない。

「……………」

五十鈴は考える。七海の悩み。と、なればあれぐらいか。

皆に狂っていると散々言われて、素直に医者でも行つたか。

それで、結果が悪くて気にしている。それかもしれない。

書類を見ながら、五十鈴が先んじて淹れていたお茶をすすする七海。

隣で立っている五十鈴が、反応で判断すべく切り込んだ。

「さては七海。あんた、医者にいつて診断結果が良くなかったんでしょ」

「ぶふーっ!」

七海は聞かれた途端に、飲んでいたお茶を霧にして盛大に吹き出した。

噎せる七海の背中をさすって介護するが、案の定七海はそれを気にしていたか。

書類は濡れたが、適当に乾かしておく。提出する物でなくて良かった。

驚いて見上げる七海に、五十鈴はなるべく優しく問いかける。

「あんた、黙っていれば分からないとか、皆の目は誤魔化せないわよ。相談したくないなら良いわ。深くは追求しない。けど、吐き出したいなら話ぐらい聞くから。言わないし、なに言われても驚かない。気が向いたら、五十鈴にも教えてちょうだい。アドバイスは、出来るか保証はしないけど」

無理して聞き出せば絶対に七海は喋らない。

言いたい時に聞ければベストだ。七海は、弱味を見せる子ではない。

けど、もしも苦しんでいて限界がきたら、逃げる場所ぐらいは用意しておく。

言外に教えよう。一人ではない。頼ることも覚えろと。

少なくとも、五十鈴は頼ってもらえるところにも有難い。

七海の問題は色々と過激になるので、フォローしておく必要もある。

だから、それだけ言えば彼女は理解してくれる。

「……………別に、悩みなどないです。事実だっただけで」

「そう。あんたは頭がおかしかったの。だからなに？」

というか、自爆した。彼女は気付かず、白状していた。

強がりと言う筈が、最後に余計なことをいったせいだ。

「……………あつ」

慌てて修正するも、バツチリ聞こえた五十鈴は笑っていた。

七海の異常な行動は今に始まった事ではない。五十鈴も慣れた。

それが事実でも、まだ庇えるレベルなら問題はないだろうし、無意味な衝突も減っている。

多少は改善しているので、七海にはそれ以上聞かないとだけ、改めて言った。

彼女は変わりつつある。その根本が歪んで曲がっている性根でも。

最低でも誓いを立てて、実行して、貫こうとしている姿勢は評価する。

重要なのは改善していく努力であり、今ならなんとかできるだろう。

五十鈴は七海を励まして、七海は絶対に言うなど釘を刺して、その日は終えた。

後日、例の話の駆逐艦二名が異動して来るのだが。

まあ、こんな司令官である。問題が起きないわけが、無かった。

「駆逐艦、弥生です……宜しくお願いいたします」

一名は、綺麗な薄紫の色のボブヘアに三日月の髪飾り。

こめかみ部分の横髪が長く、深い緑の瞳が印象的な、紺色のセーラー服の少女。

緊張しているのか、表情は固い。

もう一人は……何故だろう、異様に此方を警戒している。

ボサボサの長い緑一色の髪の毛を黒いリボンで結った、七海よりも背丈が少し大きい少女。

様子を窺う小動物のように此方を見て、今にも逃げだそうと逃走の準備をしていた。

見たことのない制服を着ているが、彼女が山風。なにも言わずに黙っている。

「……姫園鎮守府、提督の渋谷です。以後、よろしく」

七海はいつも通りに振る舞って、着任した二名に案内はそれぞれの姉妹に頼むように告げた。

確か五月雨が山風の、如月と睦月は弥生の姉だ。

七海は秘書の響と仕事が残っている。

適当に呼び出して、回収してもらい任せておく。

響はどこか、思案するように二人を眺めて、見送っていった。

姉妹が迎えに来て、連れていかれる二名。

軽く手をふって見送る七海は、閉じられたドアを見て仕事を再開した。

「……例の鎮守府からの異動か。良くない兆しが見えているけど、司令官は知った上で引き取ったの？」

事前に聞いていた響は七海の行動に呆れつつ、訊ねた。

七海は扱いが杜撰だと知っている。だが、それだけだ。

戦力の向上になるから貰ってきたというだけの話。

彼女たちの境遇には、興味などない。

「向こうの扱いにはなにも言いません。そして、言うだけの時間がもつたいたい」
「……………」

その辺は、件の報告会の事もある。

提督同士のやり取りもあるのだろうと、響はなにも言わない。

だが、あの山風の様子は……引つ掛かる。

（あれは……怯えか？ 直ぐに逃げ出せるように身構えていたし、なにも言わなかった。

つまりは、異様に警戒して七海を信じていない証拠。弥生も、緊張とは違う意味で硬くなっていた気がする。まさか……あの二人)

嫌な予感とも言える響の危惧。

それは、意外と早く訪れた……。

突然の絶叫。

食堂で、山風が突然錯乱しているらしい。

七海は古鷹と衣笠に鎮圧に向かうように指示。憲兵も出動した。

状況の説明に、居合わせた五月雨に聞くと。

「わ、わたしもよく分かりません……。なんか、間宮さんが間違えて厨房で包丁を落としたりしちゃったみたいで、大きな音がしたんです。そしたら突然、山風が……泣き叫びだして。死にたくない、死にたくないって……」

現場にいた全員が似たような事を言っている。

更には、弥生も失神してしまい、救護室に運ばれた。

彼女も音の直後、倒れたらしい。七海は大体察しがついた。

(……トラウマですか。音に、反応するみたいですね)

原因の一端は見えたが一応、島村提督に連絡して理由を聞いた。数分で判明。

(そりや腐る訳ですね……)

納得の言い分だった。確かに役にたたないと言われる訳だ。

電話を切る七海はため息をついた。

偉い艦娘を受け取ってしまったものだ。

もらった以上は、面倒を見る。

しばらくしてから執務室の七海は、鎮静剤を打たれて運ばれた山風と弥生に会いに救護室に向かった。

救護室では、ベッドに横たわる二名がベソをかいていた。

涙で枕が濡れている。仕切りのカーテンを開いて、七海は様子を見に来た。

「体調は大丈夫ですか」

声をかける。七海の登場に、二人は悲鳴をあげた。

そして、布団に頭から潜って隠れてしまう。

七海は随分と嫌われているようだ。

なにもしてない、なにもいってないのに。

「……随分な対応ですね。あたしが何かするとも？」

知っているが、気に入らない態度である。七海は不愉快そうに、二人に聞く。

精神の弱った人間の扱いを知らない彼女は、高圧的と取られて、余計に怯えさせた。

「……すいません。騒ぎを起こして。すぐに……職務に戻りますので……。お時間を、頂けませんか……？」

布団の中から、弥生は涙声で必死に七海に懇願していた。

七海は当然、そんなものは許す訳がない。キツパリと断った。

「ダメです。勝手な事は許しませんよ弥生。あなたは、休みなさい。山風。あなたも」

七海は、仕事に出るなとハツキリ怒った。

弥生の様子が変わった。もぞもぞ動いて、布団から顔を出す。

「……えっ？」

見上げた顔は、涙で腫れている。

七海は呆れたように、弥生に言った。

「聞きましたよ。お二人とも、以前夜戦で沈みかけたそうですね。それ以来、大きな音がダメだとか。一種のトラウマですか？ ま、何れにせよ……艦娘としては致命傷。本来

は、解体待ったなしのようですが」

七海は島村提督から聞いた。

以前、二名は夜の海戦にて死にかけてらしい。

島村提督の采配のせいで囿にされた挙げ句に袋叩きにされて死にかけてた。

で、なんとか無事に生還したが、今度はそれによるトラウマの発症。

戦えない身体になり、島村提督に解体されかけたのを、今回異動で一時的に生き長らえた。

でも、早速バレた。異動した先の提督に知られて、最早死ぬしかない。

そう、覚悟していたのに。彼女は、休めと言うのだ。

……なぜ？ もう戦えないと知りながら、なぜ解体しない？

弥生と、意外な言葉に泣き止んだ山風も顔を出した。

啞然として、七海を見上げる。

「……あたしは、自分に課した誓いがあります。一番、あたしの鎮守府の艦娘は全員人間です。拒否は認めません。二番、あたしは誰も死なせません。自分で解体もしません。三番、死ぬと言う怖い思いもさせません。何処でも同じです。以上のことは、あたしは破りませんのであしからず」

七海は当然のように、二人にも告げた。それが、七海の誓い。

守って当然の理屈だった。

「弥生を……解体しないんですか？」

「しません。山風もしません。戦えないならあたしが責任もって最後まで付き合います。怖いならあたしがそばにいます。如月や五月雨に聞きましたか？ あたしがどんな人間か」

弥生の問いに即答する七海。

姉妹は言っていた。頭がおかしい人間かもしれないが、決して悪人ではない。

ただ、言動は最悪に近い、面倒臭い子供だと。

如月は違った。優しい人。ちゃんと向き合ってくれる。理解もしてくれる。

それ以上に、人間として接するから、安心していい。ここは、前よりも安全で安心してきる場所。

最悪な事は否定しない。然し、七海は信じていい。

普通の提督じゃないから。苦しみを分かってくれる人だから。

そう、如月は穏やかに、誇らしげに言っていた。

「……殺さないの？」

「人殺しになる気はないんで」

怖々と聞いた山風にも、七海は直ぐに答えた。

人殺し。艦娘の解体を殺しと認識しているようで、それはしないと言うのだ。

「ま、砲撃の音がダメな時点で、普通なら死ぬ以外の道はないと思いますよ。以前なら、あたしも迷わずそうしていました。が、今はそうも出来ないんですよ。あたしもこれ以上、頭がおかしいとは言われたくないんで。どうかします。それがお仕事です。部下の面倒を見るのも提督の義務ですのでご安心を。戦えるまで、海の上でもお付き合いします」

自分勝手な言い分を並べて、然し決して見捨てないと七海は断言した。

それが、この二人にとってどれだけ救いになるかも理解していないまま。

散々な扱いをされてきた二人にとって、この子供は……正に、想像していた優しい提督そのもの。

地獄のような環境にいた艦娘には、サイコパスでも救世主に見える。そう言うこと。何より、七海は言った通りに実行する人間。

次第に泣き出す二人に、如月の時のように、困り果てる七海。

また泣かれた。何なんだ一体、と取り敢えず如月と同じように優しく頭を撫でる。

ビクツと反応する彼女たちに、ひきつる無理矢理な笑顔で語る。

「大丈夫です。あたしが何とかしますから。泣かないで下さい……あたしも困ります」
慰めるように、受け入れた二名を撫でる七海。

なんでこんなことを……と困惑しながら、次第に泣き止む二名。

「姉さんの言う通り……優しい、人なんですわね……」

弥生が泣き止み、怖い笑顔で笑う七海に言った。

「優しい顔をしている。完全に笑いなれていない人の笑顔だ。」

「優しい？ あのエロサキユバス、何を言ったんですか……全く」

七海は項垂れながら、山風に至っては上半身を起こした彼女を抱き締める。

山風は怖かったと何度も言いながら、七海にすぎる。

七海もよしよしと背中をさすって、彼女の気持ちを受け止めていた。

「……あなた、前にもないことを言い出した。」

「……あなた、前に絵本で読んだ……ママみたい」

「ママっ!？」

何を言うかと思えば、七海に母性があるとか言い出した山風。

どんな絵本に、サイコパスの母親がいると言うのか。

七海も大変驚いた。で、山風は七海の言葉を信じてと言って、自分から怖々と抱きつく。

（あたしが……ママ!? 高校生なんですが!?）

内心呆然としている七海。彼女は知らない。

弥生と山風が新しく仲間に加わった。

この山風の着任により、彼女はのちに、七海ならぬ『ママ海』というあだ名が定着し
そうになることを、まだ……。

母という意味

……最初は、よく似ている人だと思った。

駆逐艦夕立。姉の顔。色々違うが、似ていると。

まあ、そんなものを感じる余裕はなかった。

何せ殺されると思っていて。この提督に、解体されると。

どうせ死ぬ。今度こそ死ぬ。殺される。

そう、思っていた。

……けど。

彼女は、母だった。母のように、初対面の彼女たちを受け入れていた。

と、思い込んでいるのだ。

その正体を、彼女たちは知らないまま。

彼女が前に読んだ絵本。親子の愛情がテーマの物語。

艦娘には母などいない。人工物と罵られる彼女は、強い憧れと飢餓があった。

前任の提督による人格否定により、拍車がかかった愛情への渴望。

誰でもいい。誰か、見て。自分を、認めて。ここにいてもいいと、言つて。

そんな強い願望が、胸の奥底には眠っていた。

認められない苦しみ。否定され続ける悲しみ。

誰が理解してくれる。この痛み、辛い気持ち。

それは、隣の少女も同じだった。

旧式と言われて、盾にされるわ囧にされるわ、ろくなものじゃなかった。

その都度生き残るが、戦果など出す暇もない。出来損ないと言われ続けた日々を過

した。

彼女も認めて欲しかった。存在を。意義を。叶わぬ願ひだったが。

……けど。

その小さな祈りは、海に届いた。

姫園鎮守府司令官、渋谷七海。

またの名を、駆逐艦夕立。

彼女たちの姉妹が言っていた、他とは違うという意味は。

ここの司令官は艦娘だった。共に戦う仲間だった。

戦場を知っている数少ない理解者だった。

そして、認めてくれた。二人を。

人間として。対等として。

嗚呼、救われた。二人の、弥生と山風の願いは報われた。

この新しい場所です。戦えない艦娘だとしても。

彼女たちには役目があつた。だから、果たす。

壊れた、死ぬしかなかったこの命に、意味をくれた彼女のために。

自分のできることを、精一杯。

「七海姉……部屋、汚い」

「うわあ……ママ、ないよこれは……」

で。

引き取った二名は二日もすれば無事に回復。

取り敢えず面倒を見るため、如月に相談。

「ママなら同じ部屋で暮らすのは当たり前前よね？」

こう言うときのエロサキユバスは当てにならない。忘れていた。

すっかり懐かれて山風に泣き落としされてママと呼ばれる七海は、如月の言うことを鵜呑みにしていた。

仕方ない。十六歳のママとか言う映画のタイトルになりそうな状況に放り込まれて、七海は精神が死んだ。

普段ならばエロサキユバスの戯れ言と流せる余裕があつたが、今はない。

如月以上に常時ベツタリの山風の世話をすべく、二日は我慢させてから、私室で生活を開始。

弥生も面倒見るからこいとやけくそで回収して、冒頭に戻る。

七海は基本的に片付けはしない。本棚以外はみんな汚い雑多な部屋。

娘と妹に落ち着いた弥生は室内を見て、呆れていた。

如月の私物も混ざって一種の混沌となっている。

「ほつとして下さい。お母さんは面倒なこととはしません」

「あらあら……」

七海もママと呼ばれて、案の定それに応えようと足掻いている。

得意の理屈も、山風の涙と弥生の悲しそうな顔を見ると崩壊する。完全降伏をした情けない司令官となっていた。

自分よりも背丈の大きな娘で、子育てをした経験もない七海。

当然、彼女は現役の高校生であり、娘がいるはずがない。

如月が手伝ってくれているが、やはり不足するのは知識と経験。

片っ端から予習しておいて、教育の仕方なども付け焼き刃で学んでおいた。

おかげで寝不足。くまが出来ている七海に、妹と娘は言う。

部屋、片付けろと。

開き直る母に、如月は先ずは一緒にお掃除すると言い出して、日曜に皆で掃除開始。

「……なんの騒ぎよこれは」

「お姉ちゃんが……ママ!？」

五十鈴が怪訝そうに様子を見に来て、イムヤが件の話を如月に聞いて唖然とした。

そこから拡散する司令官ママ計画。広くはない内部であつという間に広まった。

皆の反応は、七海がお母さんやっていると見て驚いていた。

しかも必死にやっている。懸命に面倒を見て、世話を焼いている。

「成る程!!」こう言うときこそ、私の出番じゃない!!」

で、一部ではロリお母さんと呼ばれる伝説の艦娘、雷も参戦。

世話焼き母さんとサイコパス母さんによる、ダブルママのお掃除と教育が、幕を開けた……。

雷は本当に参考になる。母とは何か、と七海は聞いた。

「母とは……愛よっ!! 無償の愛こそ、母性の根源だと思うの!!」

「……無償の愛?」

でも理解はできない。無償の愛とは何ぞや?

圧倒的母性の化身、ロリお母さんによる母親講座を学ぶ七海。

現在共に暮らす妹と娘と恋人候補の三人の面倒を全部見ないといけない。

普通なら投げ出すような現実でも、逃げることを知らない七海は無駄に足掻いて覚えていく。

愛とはなんだ。母とはなんだ。何を学び、身に着ければいい?

そして、どうすれば皆に応えられる?

義務が、責任が、重くのし掛かる。

理屈が泣き落としにより崩壊した七海は、虚ろな瞳で空を見上げ思うのだ。

(お母さんって……難しい……)

日々理解できない理屈と理論に磨耗して壊れていく七海。

元々理屈で動く七海に母の愛など真逆で、実行すればエラーが起きる。

「七海!? ねえ、あんた大丈夫!? 見てて段々と寝れていくんだけど!」

一週間経過。五十鈴がたまらずに声をかけた。

七海は執務中でも虚ろな目で、しかし的確に指示を出している。

が、見た目が既に死人のような顔色と目で、ハイライトは何日も欠勤状態であった。

ボーツとしている珍しい司令官様は呟いていた。

「お母さん……? 五十鈴、お母さんつて……何ですか……?」

「いやあああああ!」 由良、由良あああああ!」

小声で虚空に呟くそれは、まさに壊れた人間。

五十鈴ですら絶叫して、由良を呼ぶ始末。限界は近いようだった……。

然し、運命とは残酷である。

……愛情を理解しない子供に、愛を求めるなどそれは、あまりにも酷な事ではないか
?

皆は、知らないのだ。七海は、母しくない。

片親の娘であり、こうなった理由は、親が関係しているのを。

七海は一人っ子であると説明はしていた。

けれど、親に関しては特に説明はしていない。

なにせ、七海の家は父親がいないのだ。

親しい関係は母のみと、自分でも分かっている。

父は、小さい頃交通事故で亡くなっている。

七海も巻き込まれた玉突き事故で、父は運転席で即死。

幼少時の七海は無傷で奇跡的に生きていた。

七海の母は、一人で懸命に残された娘を育て上げた。

七海の人格の構成において、七海がサイコパス一步手前に育った理由に、自分を発露しないように抑える環境も一因であった。

決して裕福ではない家庭において、自分のわがままがどれだけ母を苦しませるかを、幼いながら七海は知っていた。

友達がいると、片親のことをバカにされる。父親が死んだことを笑われる。

子供特有の無邪気な残酷さに気付いていた聡明な子供だった彼女は、身を守りつつ苦しませないために、孤独を選んでいた。

本を好むのは、図書館などでお金をかけずに長時間過ごせるから。

勉強を真面目にやったのは、推薦で学校に行くため。

全ては、母に苦勞をかけたないための七海なりの方法だったのだ。

提督になる前、せめてもの恩返しと言っていたのは、母に返せるものがそれしかないと分かっていたから。

今でも、母には月額で仕送りをしている。給与はよい提督の仕事。

文句を言いながらも続ける背景には、親への恩返しがあった。

損得勘定になったのも、自分の損害は母に負担を強いると知っている。

理屈的になったのも、感情的じゃ不利益が母に伝わってしまうと思ったから。

……愛情を受けて育ったのは違いないが、七海はそれ以前にそうして自分を殺して生きてきた。

愛情に対しての感情は、常に打算的な恩返し。

母は愛しているだろう。が、娘はそれを分かっている。

自分は母の負担だと、思っている。だから軽減するべく、生きている。

お金という俗的なものだとしても。それは、愛にも当然関係ある。

お金をかけない。お金で応える。七海は、愛されていても愛して返すなんて出来やしない。

小さい頃から自覚なしに行っていた軽減と、自己犠牲。

感情の理解ができない環境は、父の死んだ事が始まりであろう。そんな彼女が、母と呼ばれて応えようにも、根本が欠けている。わかるはずがない。知識も無ければ、上手く愛すら表現できない。

(母って……なに?)

お母さん。無償の愛。

七海にはないもの。欠如した感情。即ち、愛情。故に如月の恋慕にも理解できずに放置している。

愛したければ別にいい。けど、自分は多分愛さない。愛せない。

そういつても尚、如月は愛しているから救いはない。

山風は知らず知らずに、七海の尤も弱い部分を刺激している。

(愛情……愛ってなに?)

愛も知らない。恋も知らない。

必要のない感情としか思えない気持ち。

分らないを通り越して、取り込めない。

七海は苦悩する。最大の壁、愛と来た。

彼女のなかには存在しない気持ちを求めている二名、そして如月。

苦しい。ただ、苦しい。知識や言葉では表せない得体の知れない感情。

雷は言った。無償の愛が母性である。見返りなしの感情なんて、七海にはあり得ない。

そんなものはあるわけがない。全てはギブアンドテイク。見返りあつての関係。なにもなしに向ける感情なんて、あるはずがない。

(……………)

愛。恋。

恋愛。親愛。親子愛。

……分からない。

——分からない、分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない!!

(……………あああああああああああつ!!)

——七海には、無理だ。

お母さんには、ママには、なれない。

皆には、応えられない。

誰か、教えて。

(……………ママって、なに!?)

触れ合つて、山風が、弥生が、如月が。

何を考えているのか、分からない。

「……………」

「七海ちゃん、七海ちゃん!? ねえ、大丈夫!?!」

「コラ、話を聞きなさいツ!! 七海、どこ行くのそつちは窞! 出口はあつち!!」

来る日も来る日も、三人に応えようとするのに。

してもしても、最適解が見えやしない。

それどころか、上手くできているかも自信がない。

周囲は異様に心配している。

由良が大変なら頼れと言うが、彼女は艦娘だ。

母では……ない。

今日も何とか皆と過ごした。大丈夫だろうか?

七海は、ちゃんとお母さん、出来ているのだろうか?

仕事はしている。勉強もしている。なのに、果ては見えない。

迷宮にでも迷いこんだような気分だった。

出口の見えない世界を、ただ歩いているような感覚。

これが、愛情？ 真つ暗な世界をさ迷うのが愛？

「七海、しつかりなさい!! どこ見てるの、そこは窓だって……!!」

「七海ちゃん、危ないッ!!」

——ガシャーッ!!

「……………」

なんで、倒れている？

ここは、何処だ？ 視界が、妙に狭い。歪んでいる？

というか、身体感覚がおかしい。足、浮いていないか？

地面、遠くないか？ なんか、痛くないか？

「ああっ……!! 七海ちゃん、頭から血が出てるわ!!」

「バカ、なんで窓に自分から突っ込んでるのあんた!! ああ、止まりなさい落ちる……

!!」

……落ちる？ 何が？

「くっ!!」

……ああ、落ちてる。なんで落ちてる？

あれ、アスファルトだ。そういえば執務室、三階にあつたつけ。つてことは、なんか落ちてる。なぜ？

「七海、自殺したいのあんた!? 意識をしっかりと持ちなさい!! ほら、掴んで!!」
「……………」

あれ、首が苦しい。

首根っこ捕まれて、宙ぶらりん。

「……、どこ?」

「五十鈴!」

「七海、早く……掴んで! 重たい……!! このままじゃ落ちるでしょ……!」
掴むって、何を?

「な、何今の音?」

「古鷹! ちよつと助けて!! 七海ちゃんが落ちちやう!」
「ええ!」

何だか煩いが……何が起きている?

なんだか、痛い。苦しい。辛い。あと、眠い。

ああ、急に何だか……。

意識が、遠退く……。

「七海!!? 七海、しっかりして!! 七海——!!」

……七海の心身が、限界を超える日は、遠くはなかった。

愛の答え

七海が、壊れた。

常時意識が上の空だと思っていた。

強い寝不足だとあとで判明するのだが、艦娘になったせいで生半可頑丈になり、無理が出来ていた。

そのせいでマトモな判断が指示以外では出来ておらず、ふらふらと何を血迷ったのか窓ガラスに向かう。

そのまま、足が纏れて彼女は頭から派手に窓に突っ込んで、倒れた。

窓ガラスを破壊して、更には彼女は身構えずにそのまま落下しそうになった。

五十鈴が寸前で掴まえるも、本人は頭に裂傷を拵えても尚呆然としており、遂には失

神。

救護室に放り込まれ、意識が戻り次第ドックにも入れさせると決定した。

悩みがあるとは思っていたが、これは違う。明らかにキャパを超えた反応であった。考えすぎによるオーバーフロー。彼女の中では処理できない状態に陥ったのだろう。五十鈴は思う。ヒントはあった。母とは何か？ そう、何度も皆に問いかけていた。

周囲は困惑して何もできずにこの様だ。

母とは何か？ その質問に、艦娘が答えられる訳がない。

(艦娘は……人間じゃないからね)

まるで本質を聞かれていた様だった。

艦娘は資材を消費して誕生する人造人間。

生物の当然である両親が存在しない。

ゆえに、母など知らない。

五十鈴は苦悩する。七海はこれに苦しんでいるようだ。

彼女は母がいるのだろう。ならば、直接聞けばいい。

などと言える環境ではない。ここは軍属。民間には迂闊に連絡はとれない。

血の繋がった親というものを艦娘は持っていない。

皆にしているのは姉妹だけ。……その姉妹すら、言い換えれば姉妹ではない。

それは艦の魂による繋がり感覚のみ。

同系統の艦だったことが、人造人間になった過程で姉妹として認識するだけの話。つまり、本当の姉妹ではない。そう、思っただけ。

七海は人間のまま艦娘になった。ならば五月雨や山風は姉妹なのか？

答えは、違う。彼女に姉も妹もない。そもそも夕立の影響は外見だけ。

中身は渋谷七海と変わらない。

艦の影響のない七海を五月雨は姉とは呼ばない。似ている別人という感覚である。

(……お母さんって、何なのかしら)

五十鈴だって、結局は明確な答えなど言えない。

人間と艦娘の決定的な差を、見せつけられた気がした。

母を知らぬ人間など居るわけがない。その通りだ。

艦娘は人間ではない。ただの人造人間。イビツな命。

悲しいけれど、誰にもその答えは分からない。

一応、雷辺りに相談はしていたようだ。

その答えは、的を射ている。

「私は無償の愛だって、司令官に言ったけど……こんなことになるなんて……」

愕然として、雷は言っていた。

後日。意識は回復するも未だに魂が抜けている七海はドックに入れられ、そのまま軍病院に搬送された。

入院を言い渡されて、暫くは皆で交代して鎮守府運営を行うことに。
一応、代理の提督も来てくれるらしい。それは有り難いのだが……。

医者が言うには、ノイローゼに近い症状を発症しており、元来の性格も踏まえてかなり危険な状態らしい。

ストレスには無縁と思われていた七海が、ノイローゼにかかった。

瞬く間に鎮守府の中を広まった噂は、皆に知られてしまった。

「……ママが、ママが……ッ!! あたしのせいで、あたしのせいでエッ!!」

「七海姉……! ごめんなさい、ごめんなさい……!」

で、連鎖するように山風と弥生の精神が再び不安定になり、医者行き。

彼女たちも入院している。此方もトラウマの再発に近いらしく、暫くは出てこれない。

事態はどんどん悪化していく。如月も不安定になり、皆はこれでも心配はしている。不安そうに皆は仕事を続けている。

「七海の力には、なれなかったわね……」

「そうね……。艦娘には難しい事だから、っていうのは……言い訳かな」

五十鈴と由良は、沈んでいた。

後悔。五十鈴は後悔していた。

今度もうまくできなかった。彼女は分かりやすいSOSを出していたのに。

いや、然し事実艦娘に果たして彼女の求める答えを出せたであろうか？

母から産まれた訳でもない、資材で出来た艦娘が？

本当に、七海の力になれたのか？

(……今頃遅いか……)

後の祭り。七海はもう、傷ついているあと。

適当に任務をこなして日々を送りつつ、たまには見舞いにと思う。

七海は今でも眠っているままだと言われた。

いわく、寝不足だけじゃない何やら悪い兆しが見えていると。

普通なら、いくら従来型の艦娘でもここまで長い眠りにはつかない。

休んでいれば治るレベルなのに、彼女の状態は安定しない。

どうやら、かなり内部で不安定になり意識が戻らないと思われる。

専用の設備に移されて様子を見ているようだが、やはり芳しくはない。

医者に送られて、山風と弥生も戻ってこない。

五十鈴は思う。

(どうして……何時も七海はこうなるの……?)

懸命にやっているのに。七海は努力しているのに。

彼女はいつもうまくいかない。何故だ。なぜ、七海ばかりが失敗する。

サイコパス予備軍だからか？

人を理解しようとするのを、もしや神様というやつが嫌がらせでもしているのか？

救いがあまりにも無さすぎる。これ以上七海にどうすればいいと言うのか。

五十鈴は惨い事をする神様というものを恨んだ。七海を少し知れば、彼女の努力は分かる。

なのにもいつも実らない。何処かで必ずすれ違う。失敗する。成功しない。

(……神様。これ以上、七海を追い詰めないで。あの娘は、みんなを理解しようとして、人間であることを止めてでも分かろうとしたの。なのに、あなたはまだ、七海を追い込むの？ これ以上、七海は何を失えばいいの？ ねえ、神様。あなたがもしも居るなら、

五十鈴は二度とあなたを許さない。うちの司令官は、サイコパスかもしれないけど、異常者なりの務めはずっと果たしているじゃない。七海を気に入らないなら、まずは五十鈴を壊しなさい！ 五十鈴は七海の味方よ……気に食わないなら、五十鈴も壊しなさいよッ!!)

直された執務室の窓から見える、良く晴れた空を見上げて、五十鈴は見えないモノに恨みを込めた。

七海がこれ以上壊れたら、本当に狂人になってしまう。

まだ無害な彼女が崖から落ちたら、待っている未来はなんだ。

それは十六歳の子供に背負わせる所業なのか。

五十鈴は呪う。神様という存在が居るなら、七海をこんな風にしたことを。

何よりも嫌悪して、軽蔑して、一番呪うのは、何もできないまま、壊れ行く様を見ているだけの、無力な自分だった……。

……あたしは。

母を、知らない。分からない。

アンサーは無償の愛。ああ、答えは出ているんだけど。

その至る式が、あたしにはどうにも理解できないみたいで。

何だろう。お母さんって？

あたしのお母さんは、片親だしいつも働いていて、家には居なかった。

そのうち身体を壊すんじゃないかと思って、高校に推薦で受かったからバイトでもしようと思っていた。

けど、お母さんにはこう言われた。

「七海。今だけの時間を、無駄にしちゃダメよ」

……今だけの時間ってなに？

お母さんを助けるのに働くのは、今だけの時間じゃないの？

そんなのおかしい。理屈じゃないよお母さん。

感情だけで自分を無為にしないでよ。

あたしにはお母さんしか居ないんだよ？

後で知ったんだけど、うちの高校、バイト禁止だった。

……ミスった。そう、思った。入る高校を間違えた。

偏差値だけで選んでいたから、あとの事を気にしなかったツケ。

良い学校を出て、良い会社に入って、お母さんに恩を返す。

それがあたしの人生計画だった。妖精なんか見えなければ、順調だったのに。

(珍獣が……!)

ああ、思い出すだけで憎い。

あの珍獣さえ居なければ。あたしは、お母さんを一人にしないで済んだのに。

艦娘なんてものの指揮をしろと言われて。無理矢理押し込まれて、押し付けられて。

挙げ句に、皆には頭がおかしいと言われて。何なの。あたしの何がおかしいの!!

(お母さんを助けたいだけ……。その何がおかしいんですか!?)

いつもそう。あたしは何をやっても最近じゃうまくいかない。

努力をすれば大淀さんにはサイコパスと言われる。

実際に行けば一步手前でマジでサイコパスだった。

艦娘になれば今度は吹雪と喧嘩になる。皆には責められる。

挙げ句には山風と弥生、如月には応えられない。

なんで、あたしはうまくいかない。頑張っても成果がでない。

……なんで?

(これ以上あたしは何を捨てればいいんですか!?)

ねえ、あたしはもう捨てられるものなんてない。

勘弁して。あと残っているものは、命しかない。

あたしに、死ねというの?

艦娘をわかりあうために、死ねというの？

……待て。

……死？

(………あつ)

その時、あたしの中で理屈が通った。

道が、見えた。答えに、繋がった。

(………無償の愛。死。………嗚呼、そう言うことですかッ!!)

分かった。この瞬間、あたしは閃いたのだ。

雷が提示した、答え。無償の愛。それは、相手に見返りを求めない愛情。

皆が求める答えとは。

(………自己犠牲ッ!!)

そう。答えは、自己犠牲。

あたしは、皆に興味がなくて知り得なかった答えだった。

提督は、艦娘に尽くすもの。そういう理屈か！

無償の愛とは、自己犠牲の愛。

皆に応える、今まで通りの行動の果てにある終着点。

そうか。今まで、あたしは皆に応えるべく義務として、働いてきた。

それ自体は見返りなどない。何せ、義務だ。責務だ。やって当たり前。ここに答えはあったのだ。灯台もと暗し。気付かなかつた。

最初からあたしは彼女たちに見返りなど求めていない。

あたしがそうするべきと思つた行動である。

義務と責務の昇華。その先の究極が、自己犠牲。

あたしが皆に行う行動の先に、ヒントはあつた。

そして、愛とは。自己犠牲。自分を壊して尽くすと言うことか。

三人はあたしに愛を求めている。

愛すると言うことは、自分を犠牲にするという意味だつたのか。

(……あたしが、犠牲になる……)

一応理解はしたが、難しい。

己を犠牲にして愛せよ。考えれば覚えもある。

お母さんがそうだったように、あたしもそうすればいいのか？

……抵抗感はある。けど、それは義務であり、責務なのだ。

あたしは、自分を滅ぼして三人を愛し、そして皆に尽くさないといけない立場。

提督とは、己を殺すことと見つけたら。

(……)

あたしを犠牲に。嫌だな、とは思うけど。

……思い出して？ 本当に、それは嫌なこと？

「大好きよ、司令官っ！」

「ママ、待ってっば……！」

「七海姉……弥生も、頑張る……」

——カチンって。

あたしのなかで何かが変わった。

嫌じゃないよ。

あの笑顔を守りたいって思う。

分かんない。何なのか、分かんない感覚。

けど、これは大切なものだ。

笑った皆を守る。あたしは、今までただ死なせない努力をしたけど。

でも。本当に必要な事。人間だと思うなら。扱うなら。

——皆の笑顔を守るべきじゃなかったの？

(……………ああ、あたしが間違っていたんですね)

バカな女。一番重要な理屈に気付いてなかった。

大切なのは、笑って過ごせる場所でしょ。皆はあたしとは違うんだ。

泣かれて困ったのはあたしだ。なら、笑えるようにしないかね。

死なせないだけじゃない。足りない。笑顔だ。笑顔を守るのが、あたしの役目。

あたしはどうせ、感情なんて分からない。でも、愛という感情は多分、分かった。

(分かった……気がするっぽい)

こうすれば良かったのだ。

あたしはサイコパス。頭がおかしい。

そう、頭がおかしい。無償の愛というのは出来るか分からない。

だけど。

(頭がおかしい女は、これぐらいしか……思いつかない)

自分を犠牲に。それが正解だ。

犠牲にすればいい。思い出せ、サイコパスなどどうせ大した価値もない。

吹雪の言う通り、二度と出てこないぐらいでいいと思っただろう？

でも役目があるからそれも出来ない。なら、せめて。役に立たないと。

周りが求めるなら、自分を粉にしよう。うん、それがいい。

サイコパスの役目としては、理屈も通るし義務も責務も果たせる。

そして、愛を学べる。自分さえ壊せば。全部、叶う。

故に、実行する。

暴走覚醒

……まだ抵抗するのか。

寄越せと言っているのに。

夕立、その全てを……ソロモンの悪夢と呼ばれた力をあたしに寄越せ!!

お前の意見は聞いていない!! お前はあたしに従えばいいんだ!!

艦は人が乗って初めて意味があるのに、人の乗らないお前が人に抗うな!!

お前は艦娘ですらない、ただの魂だろう!?! なら、人間としてあたしは見ない!!

寄越せ、寄越しなさいツ!! お前が消えるまで、あたしは奪い続けるから!

夕立の名前は継いでやる! お前は消えろ、錆びたくろがね!

あたしがお母さんになるにはお前が必要なの、でもお前の意思は必要ない!

こんなサイコパス、どうなってもいい。だから寄越せと言っている!

あたしの器に入らなくても、溢れたままで使ってやる!

溢れ出したらそれがなんだ！ あたしがあたしじゃ無くなるだけだ！

あたしは死なないなら何でもいい！ どうでもいい！！

あたしの意志が飲み込まれても、皆さえ笑顔になれば……守れば！

愛せれば！！ それだけで、あたしの意味は満たされる！

足掻くな、暴れるな、奪ってやる……壊してやる、お前の意思なんて！

五月蠅い、ぽいぽい泣くな！ ぽいなんて不安定じゃダメなの！

ちゃんとした、確定した力じゃなきゃ！！ そんなふわふわした言い方をするな！

……なに？ 犬？ なんだ犬って！？ は？ 狂犬？

このままお前を飲み込めば、あたしは狂った犬になる……？

何をいつている？ 夕立にそんな異名はない。ソロモンの悪夢、それだろう？

……違う？ 駆逐艦夕立ではなく、艦娘夕立の……根源？

飼い主に認められたいがために、理性を崩して敵を食い殺す狂犬になる……？

お前の、艦娘のお前の根源は、そんなものだったの……？

……。

分かった。受け入れる。

そのぽいつていう口癖はともかく、狂った犬になってもいい。

お前も知っているでしょう？ あたしは元々サイコパス一歩手前。

狂っているのは変わらない。意味もなく狂うよりは、意味のある狂う方がいい。

……五月蠅い。いちいち泣いてまで説得しないで。全部奪うのは止めない。

警告は聞いた。聞いたから寄越せ。

壊れるのを心配しているなら生憎。こっちはもう、壊れている。

精神がおかしい人間を、わざわざ止めてくれるなんて、優しいんだね？

でも結構です。壊れないで何ができるの、あたしに？

自己を犠牲にすると言った。あたしは言ったら実行する。

愛するって言うのは、自分を壊したり殺したりする事だつて、分かった。

笑顔を守るために、提督は艦娘に尽くす。義務と責務の果てが無償の愛。

あたしはその理屈に従う。指図は受けない。お前の言葉は覚えておくけど、言うこと

は聞かない。

大丈夫とは言わない。強がりも言わない。あたしは壊れたままでもいい。

狂った方が進めるなら、もうそれでもいい。

あたしはあたしのままじゃ、この先ずっと愛せない。

狂う以外には、選べる物は、ないと思う。

皆に応えられないって、理解しているもの。

夕立。ですので、ごめんなさい。

その言葉には、従えない。あたしは、狂う。狂って狂って、そして愛を理解する。理解したい。

だから進む。あたしは、姫園鎮守府の皆を守るのがお仕事。

国防なんて大層なものはない。あたしは個人的な意味で戦う。

皆の笑顔を守る。そのついでに、国でも何でも守ってやる。

優先は個人だ。個人のために戦うのは悪いこと？

あたしは大義名分なんてどうでもいい。他人もどうでもいい。

知った事か。死ぬなら死ぬ。沈むなら沈め。

あたしは自分の鎮守府のために尽くすだけ。

……意外？ でしょうね。でも、あたしも利己的なのは否定しない。

あたしはあたしの理由があれば、理屈があれば、戦う。

逃げられないし、死にたくはない。

死なない代わりに少し狂うことにしただけ。

取り敢えず、続けさせてもらう。

言い分が違うだけで、やることは変わらないので悪しからず。

逃げてでも無駄。逃がさない。全部取り込む。

……心配してくれた事だけは、感謝するよ。

ありがとう、夕立。
そして、さようなら。

……ここは、軍の病院か。

目を覚ました彼女は、ゆっくりと目を開ける。

何処かに押し込まれているのか、真っ先に目に入るのは何かの蓋。

真っ黒な蓋をされている。柔らかいベッドにでも横たわっているのか。

起き上がるうとして、自分が点滴をされている事に気付く。

服装は入院患者が着るような服装。視界は少し薄暗い。

狭い室内に横になる。これは、艦娘になるときに入っていた装置と似ている。

記憶を辿る。鎮守府での記憶は曖昧で、思い出せない。

なんか寝ている最中に、妙な夢でも見た気がするっぼい。

(……っぼい?)

アクビをしながら気付く。思考の端に、妙な語尾がついている？

あと、なんだこの感覚。今頃気付く。この装置、中に臭うのは薬品か？ 滅茶苦茶臭

い。

慌てて刺激臭に反応して、脱出するべく蓋を蹴り飛ばした。

豪快に大きな音を立てて外れて天井に激突。

落ちてくるのを庇って利き足で蹴り飛ばす。

素足の割には痛くない。で、今度は病室と思われるスライドドアに激突。

……凹んで床に転がった。そしてけたたましく鳴り響く、警報。

「ぼい!？」

突然の事に彼女、七海は驚いた。

なんかヤバイ。装置壊したら警報が鳴っている。

(しまった……迂闊に破壊するんじゃないかった!!)

凄まじい音に耳を両手で塞ぐ七海。

踞って、目を閉じた。耳の中を喧しい音が反響する。

五月蠅い。兎に角五月蠅い。なんだこれは!?

何やら足音も複数、急ぎなのか聞こえてくる。

廊下と思われるスライドドアの方だ。

凹んだドアを懸命にこじ開けて、数名の慣れた軍服の軍人が姿を見せる。
「動くな!! 憲兵だ!!」

と、銃を構えて威勢良く警報に負けないぐらいの大声で言うのは良いのだが……。
中にいるのは、耳を塞いで踞る子供が一名。

啞然とする憲兵。破壊されているのは、従来型艦娘の為のカプセル。

上蓋が、外れて転がっていた。

「……渋谷提督!! 意識が戻ったのか!」

事情を知っているのか、憲兵は直ぐ様駆け寄り、装置を黙らせる。

彼女の肩に手をおいて、膝を折って視線を合わせる。

「……?」

「なんだ、意識はハッキリしているな。良かった、侵入者かと思つてしまったよ。容態はどうだい?」

振り返ると、優しい笑顔の青年が彼女を助け起こして、教えてくれた。

いわく、警報装置が起動して慌ててすつ飛んできたらしい。

「……あの。臭いです。その装置の中が。刺激臭が……」

「刺激臭?! まさか、そんなはずは!!」

一応報告すると、血相を変えて数名の憲兵は装置を調べる。

異常はない、と言うものの懐疑的視線をしている七海に、憲兵は主治医を呼ぶので待っていると言った。

呆然とするなか、慌ただしくなっていく周囲。何が起きているのか、当然分からない。渋谷七海、無事に回復。だが、新たな問題が発生していた……。

翌朝。

夜遅くに覚醒していたので、通常病室のベッドをお借りして休んでから、正式に話をしてもらおう。

一応簡易検査では異常はない。……一部、以外は。

「……誰ですか？　これ」

改めて、主治医の見せる手鏡に映った姿を見て、七海は呆れている。

鏡像も似たような顔をしていた。

クリーム色だった毛色は全体的に茶髪に戻り、毛先のみが薄くクリーム色になっている。

なんか毛の一部が、耳みたいになっているんだが……。何度手で直しても直らない。

癖毛だろうか。変なものが出てきたものだ。

顔立ちも何だか少々大人びた感じがする。最大の変異は左目だった。

なんと、右目は深紅なのに左目は茶色。七海の元来の色に戻っているのだ。

声も、元通り七海のものに。

体型も、背丈が少しばかり伸びて……なんか、胸囲が……発育してないか？

五十鈴まででは行かないが、多少は谷間ができる。成長期の秘められたパワーか。

(……あたし、確か凹凸のないドラム缶だった気が……)

なんだ、これ。ちっとは減り張りあるじゃないか。

やった。理由は知らないが成長した。

これ、おニュー渋谷七海と、駆逐艦夕立。

「……はい？」

何をいつているのか良く分からないが、自分の変化に驚く七海。

主治医いわく、適合率が現在大変危険な状態であり、普通ならば死んでいると言われた。

何の事だかさっぱり七海に、丁度病室の扉が開いた。

「それについては、私から説明した方がいいでしょ、先生。彼女、一時期の私と大差無し」

何処かで聞いた声だった。振り向くと……そこには。

彼女の先生とも言える、先輩の姿があった。

高い身長、スラツとした若々しい女性。

長い黒髪を真つ直ぐに下ろして、海軍の白い軍服を纏う。

その腕章には、見覚えがあつた。輝かしい、金色の元帥の腕章。

凜とした視線で、七海を見ている。

「……桜庭、元帥？」

啞然とする七海が、思わず敬語を忘れて呟いた。

意外すぎる登場に、度肝を抜かれた。

それは、最強の従来型艦娘。大戦艦、大和を従える女性。

七海にイロハを教えた、七海の先生。桜庭元帥、その人だった。

「あー……今はプライベートだから。桜庭さんでいいよ、渋谷さん。お堅いのは抜きで話しましよ」

その真実は、従来型艦娘を一括して束ねる司令塔。

従来型の艦娘全員の顔を知っており、カウンセリングや訓練などを手伝う気さくなお姉さんであつた。

元帥の肩書きを嫌っており、大体同じ従来型には、気安くフレンドリーに接する。

「……え？ あたしが、桜庭さんと同じ？」

主治医は、元帥に萎縮して、直ぐ敬礼して出て行ってしまった。仮にも主治医だろうに、退出するのかと呆れて七海は見送った。

「で、調子はどう？ 身体に違和感とかある？」

どつかりと主治医の座っていた椅子に腰かけると、桜庭は笑って聞いてきた。

違和感か。なんか、変な臭いを感じたが、憲兵は異常がないと言っていた。

その時の事を話しておく。

「うわ、ダイレクトに出ちゃったか……。こりや確かにヤバいわ。先生の危惧は現実になっちゃったか」

何やら思い当たる節があるのか、ボリボリと頭をかいていた。

困ったように思案している桜庭に七海は聞いた。

「何が起きているのですか？」

今までの経緯は主治医に聞いた。

今は入院中。職務には関係はないだろうが。

聞くと、勿体ぶらずに彼女は言った。

……衝撃的な真実を。

「いやー……。今の渋谷さんさ、オーバーフローっていう現象が起きててね。適合率が限

界突破してるのよ。数値だと128%だったかな。プラスで35も急激に上昇してね。艦の最適化が悪化して、同時に身体が元に戻ろうとして反発して、なんか夕立と渋谷さんの魂が一部混ざってるみたい。だから、見た目も変わったでしょ。元々の自分と、艦娘の夕立が混ざりあって、半端に互いに出ている状態。私も一回やったけどヤバイよこれ。暴走状態って言っても過言じゃないから。能力もバカみたいに上昇しているから上手く調整しないと、暴れ馬になっちゃうの」

オーバーフローという暴走状態になっているらしい。

元は適合率93%だったものが、現在128%にまで急上昇。

その影響で、外見がまた変わっており、七海と夕立の混ざったような姿になってしまった。

で、内部では魂が一部癒着しており、こうなると自然剥離以外で引き剥がすと死ぬので、治療法はない。

桜庭も経験しており、更には鳳翔の従来型の方もなっていたようだ。

「大山さんは落ち着いて元に戻ったんだけどねえ……。私みたいに、渋谷さんは苦労するわよ？ 上昇率が半端じゃないから、身体が馴染むまで戦闘禁止ね。暫く私がりハビリの相手するから、よろしく」

大山さんとは、鳳翔の従来型の元の名前だ。

七海の感じた刺激臭は、嗅覚が鋭敏になり、本能的に感じ取ってしまったもの。

今は落ち着いているが、戦いになると感覚が暴走するので暫くは戦えない。静養を兼ねてのリハビリ。

なんでこうなったかは不明。回復は恐らくするが、途方もない時間がかかる。

「因みに、一気にオーバーフローした場合、元には完全にはならないわ。私は五年かかって、落ち着いたけど。最後は私と同じ、100%になるだけ。私も148まで上がって、一回艦装が暴れてぶっばなして孤島を灰にしちゃってさあ。大変だったのよ、本当に。130前後ならそこまで行かない。精々演習の安全装置を無視して殺しちゃうぐらいだとは思うわ。島を消し飛ばすなんて次元じゃないから、安心してね」

全然安心できない内容だった。

大幅パワーアップはいいが、ただの暴走らしく、加減しないと艦娘も普通に殺せると言われた。

語尾も混ざった影響によるものだと言われたが……波々、七海は納得した。
(安心できないっばいです……)

まだ、当分は、七海は鎮守府に帰れそうになかった……。

伝播する狂喜

……オーバーフロー。成る程、これは確かに命の危険がある。

(五感に頭がついていけない……)

鋭敏になりすぎた超感覚とでも言えればいいのか。

ちよつとした事で直ぐに七海は動けなくなるようになった。

特に嗅覚が辛い。潮のにおいですら呻いて起き上がれなくなった。

キツすぎる。頭が痛み、吐き気がするのだ。どうも、身体がまだ慣れていないようだ。

一週間ほどでそれなりに慣れてきたが、日常生活のにおいが堪えられない。

スパルタの先生が、手っ取り早く香水などの匂いに耐性をつけるべく、リハビリを開

始したが。

「ガハッ……!!」

桜庭が持ち込んだ沈丁花の香水で彼女は悲鳴をあげて床に転がった。

強烈すぎる花の香り。本来なら化粧品程度のありふれたものなのに、今の七海には毒薬に等しい。

頭がくらくらする。桜庭は苦笑いして近づける。

「さ、桜庭さん……勘弁してください。なんでいきなり沈丁花……!？」

「最初は優しいと思っただけ？ 残念、私は厳しいの。現場に戻りたいなら、文句を言わずに先ず堪えようね」

鼻を摘まもうとする前に、香水を吹き掛けられて、更に七海は悲鳴をあげる。

もがくように床を転がり、服が汚れても気にしない。

桜庭は一切妥協しない。早く帰りたいという七海の意思を汲んで、短期間でのリハビリにしている。

時間を短縮するのは言い換えればそれだけ比例して厳しいものになるのは当たり前。

七海の想定以上の厳しさに、然し七海は逃げることを知らないサイコパス。

やれと言われる前に、自覚して真つ向から戦う。地獄のようなものでも、彼女の理屈は曲がらない。

自分を犠牲にする。なら、痛みもないこの程度の苦行など、笑わせるな。

真の痛みは……失いたくないモノを失うこと。

それが一番の、痛み。そう自分の決めた理屈に従う。

一日もすれば、香水のにおいを理性を保ったまま堪えられて、二日で克服。

一週間するまえに、大抵の臭いは流せるぐらい、慣れてきていた。

「ガッツあるじゃない。やるねえ、渋谷さん」

「早く帰りたいので」

桜庭が見直したように言うのを、素っ気なく返す。

桜庭は内心では感嘆していた。

（恐ろしいわねこの娘……。オーバーフローにもう適応してきた。私ですら一ヶ月はかかったのに……。理詰めで自分を律しているみたいだし、ガッツと言うよりは出来て当たり前での再定義って感じか……。こういう身体になつたって、プログラムを書き換える様に、自分を再調整しているのかしら……。？）

最低でも半月はかかると思っていたのに、僅かな時間で終わらせた。

予想を大幅に超える短縮は、効率を求める七海の気質に影響していると桜庭は考察する。

気合いではない。況してやガッツなどあり得ない。

彼女は自分を機械のように扱い、最適な身体についていく感覚を構築している。

そういう印象を受ける。淡淡としている彼女を見て、だが最大の難関は大丈夫かと思う。

（問題は、戦闘よね……。加減が出来ないと味方に大損害を出すから、細心の微調整が必要になる。相手が私じゃ危ないから、誰か練習相手に……。って言いたいけど、オーバーフローはこれだと真面目に殺すかもしれないし。私が相手じゃ渋谷さんが死ぬ。適当な相手は相手が死ぬ。さて、どうするかな……）

元帥である桜庭は言うまでもないが、凄まじく強い。

大和を内包するのは伊達ではないし、下手に戦うと資材もヤバイ。

従来型とて、悪燃費は元々だ。主流の大和よりも更に資材を消費する。

あと、体型は細いが桜庭はこう見えて矢鱈食べる。特技は大食いと早食いだったりする。

それもまあ、艦娘の影響だったりするが、今は割愛。

問題は七海の相手だ。

鳳翔は……確か今、自分の鎮守府の艦娘がインフルエンザで全滅して、それをカバーする為に広い海域で一人で面倒を見ていて無理。

ドックに入っても何故か治らない新型インフルエンザと診断されて、夜間警備は違うものに頼みつつ、警備と看病を完璧にこなすパーフェクトお母さんであった。

後は、適合率90以下の艦娘は……少し、頼み込んで見るとする。

オーバーフロー相手にやってくれるかは、別として。

その危険性は皆、重々理解しているから。桜庭は順調にリハビリを続けていく……。

確かに半月はかかった。

但し、それは。

(久し振りに見ましたね、穏やかな海……)

——完全に戦えるようになるまでの期間であった。

駆逐艦夕立。リハビリの最終演習をたった今、終えた。

周囲は死屍累々。沈没寸前の艦娘たちが大破して浮かんで、苦しそうに呻いている。

艦装からは黒煙をあげて、流血沙汰の面々は、七海を見上げて小さく吐き捨てる。

「狂犬め……」

当然、強化された耳はそれをしっかりと聞いていた。

不愉快そうにそちらに向かい、見下ろして七海は言った。

「……………否定はしませんよ。どうにも、今のあたしは戦いを面白がる犬のようですか

ら。ただ、それに気圧されて震えているような臆病者に言われる筋合いはありません。相手の威圧に尻込みしたのは誰ですか、戦艦伊勢。仮にも最新に近い改二のあなたがこの様では、不安しかないのですが」

「……オーバーフローが、規格外なだけよ……。此方は、精一杯やったわ……」

ボロボロの戦艦は、そういつて仲間を見る。

全員半殺し。たった一名の、無傷の駆逐艦がこの惨状を作り上げた。

艦娘の装備を使わずに、原始的な殴打や格闘などで、滅茶苦茶に暴れていた。

歓喜の雄叫びをあげて無作為に暴れる狂犬。まさに狂った犬だ。

少しでも怯めれば、愚直に突っ込んで食い荒らす。

少しでも逃げれば、倒れるまで追い回す。

恐ろしいのは、そんなバーサーカーのような振る舞いをしておいて、突然冷静に戦い

方を切り替える事が出来ること。

そうなると今度は機械的に、冷徹に、容赦なく、徹底的に、効率的に、蹂躪する。

言葉を発することが無くなり、終始無言で破壊と殲滅を繰り返す。

終了のブザーが鳴るまで、ひたすら壊れる恐怖は、別の意味で酷かった。

「最初は勝手に身体が動くので、それに任せていたんですがね……。どうも、お遊びが過ぎると思ひまして。本来のあたしのやり方に戻しただけです。無駄が多い遊びの時

間で大体沈みかけていましたが」

七海は分かった。

戦うとき、何故だか突発的に身体が動いて敵を勝手に殺し始める体質のようだ。

完全に戦い方は獣のそれだが、だが七海の言うことはしっかりと聞くようで、自分の意思で何時でも切り替えが可能らしい。

勝手にやるのはいい。最低限、自分が死なない程度の判断力は残している。

七海からすれば無駄の多いそれこそ犬の遊びのようなやり方だが、悪くはない。

ああ見えて、敵を殺す意志は確実にある。実戦になれば深追いの可能性もあるが、ここは調節する。

感覚的な流儀は肌に合わないが、まあそれも含めてのオーバーフロー。

艦の力が溢れているようだし、その溢れた力の流れがあれなのだろう。

共生していくほうが効率がいいので、そうすると決めた。

俗にいう、遊びの時間は終わりだ、的な物だろう。

全滅した彼女たちは大体高い練度と聞くが、どうにも実感が無い。

弱い、と言うよりは……物足りない。

(この感化がオーバーフローの由縁ですか。全く、あたしが理性のない畜生に成り下がるとは……情けない)

などと思いつつ、至つて根っこは七海のまま。

客観的に、自分の特性を理解した七海は、取り敢えず戻っていく。

最後のリハビリが終わつた早く帰りたい彼女は数日してから、無事に退院し戻つていった。

何日ぶりの自分の鎮守府。

ああ、懐かしい。そして、待ち遠しかった。

帰つてきて早々、七海は今までの経験上、本当にあり得ない行動に出た。

先ず速攻で荷物を唾然として見ている憲兵に預けて走り出す。

凄まじい速度で内部に入る。

その足で真つ先に向かったのは……。

「如月ッ!! ただいま!!」

「司令官ッ……司令官!! お帰りなさい!!」

自分を好んでいる如月の所に向かった。

第六感で自室にいると分かった七海は、真つ先に自分の部屋に向かった。

そして、素早く開けて、中で寂しそうにベッドの上で膝を抱える如月に一番に飛びかかった。

声に気づいて、涙で腫れた顔でこちらを見る如月に、自分から何と突撃していった。

外見の変化など気にしない如月は、愛しの彼女が戻ってきた事を喜び、受け止めて倒れる。

「帰ってきました！ 遅くなつてごめんささい！」

澆刺と、如月を抱き締めて頭を撫でて大喜びをしているのだ。

キアラ崩壊のような激変は、笑顔にしたいと思ひ、兎に角癒すべく抱きついた。

その一つの想いが暴走しており、現在理性はほぼない。

その証拠に、深紅の右目と茶色の左目は、ハイライトが消えている。

色違いの穴のような、あるいはビー玉のような。

綺麗に澄みすぎて底の濁りまで見えている。

でも、如月は気にならない。帰ってきた。漸く、大好きな彼女が帰ってきたのだ。

そんなものは、どうでもいい！

「もうっ……散々心配したんだからね!? 遅いわよ、バカ!!」

泣きながら怒る如月は、倒れたと聞いてからとても心配していた。

自分の所為かと何度も思った。自責の念にかられ心が不安定になっていった。けど、もう大丈夫。七海は、彼女は、無事に戻ってきた。

大好きな芳香を纏わせて。胸一杯に吸い込んで、七海の匂いを思い出す。

ここにいます。提督は、戻ってきたと実感した。

「ごめんなさい。寂しかったでしょう？ 大丈夫、あたしはここにいますよ」

如月の気持ちを知るように、七海は優しく、今まで聞いたことのないぐらい柔らかく、耳元で囁いた。

違和感を普通ならば感じるだろう。だが、如月はそれすら受け入れているせいで気付かない。

七海は七海。愛する人の変化など、イチイチ指摘するまでもない。

全部引つ括めての七海なのだ。彼女には関係ない。

「……もう。そんな優しくいつて……。誤魔化すつもり？」

照れたように、更に強く抱き締める。頬が紅潮している。

如月は散々寂しい思いをさせたんだから、責任とれと言いつ出した。

以前の七海ならば多少は怪訝そうにしただろう。

なのに、今は。

「ええ。喜んで」

誰にも見せなかった、笑顔で答えた。

満面の、然し歪んでる笑顔。

表情は年頃の少女のモノなのに、視線がどこか不気味に見えてしまう。

目の前の如月を、光のない空っぽの目は、嬉しそうに見つめている。

「何が良いですか？ あたしに出来ることは何でもしますよ」

「本当に？」

「ええ。嘘は言いません」

……如月は気付かない。

今の七海は、本当に大抵の事なら何でもする。

人を殺せとお願いすれば、その辺にいる憲兵ですら喜んで襲いかかる。

それが、如月の望みだと、字面通りに受け取って。

さすがに死ぬと言われても、意味がなければ断るだろう。

ただ……意味があれば。言い方を変えれば、有り得ないことも、ない。

「じゃあ……もう、離さないで。置いていかないと、司令官。如月を独りにしないで」

「はい。分かりました。ずっと、一緒ですよ如月」

寂しさを埋めたいがためにお願ひしたこの言葉。

彼女の思惑を完全に通り返したお願ひだったことを。

如月はのちに分かった。でも、寧ろ嬉しかった。

離さない。それは、自分を支配するような願いのだと。

如月は自分で、七海に支配されに行ってしまった。

なのに……何故だろう。この安らぎは。

(嗚呼、司令官が如月を見ていてくれる……。幸せ……)

他の艦娘は、気づいていなかった。

如月もまた、徐々におかしくなっていることを。

今までずっとベツタリだった相手が突然いなくなり、孤独感に苛まれた。

寂しき、悲しき、不安、心細さ。それらが時間の経過と共に積み重なり、出来上がっ

た感情。

そばにあつた大切なものが、大切な人が、突然消える。

人間は、そういう事には、意外と脆い。

特に如月は、七海を知ろうと常に張り付いて、何時しか恋心すら抱いていた。

彼女の不安は、行く先の見えない宙ぶらりんの状態で悪化していった。

聽て、七海が居ない現状に堪えきれずに心が乱れ、彼女の私室に引きこもるようにな

なった。

残り香を嗅いで、七海がまだここにいると思ひ込まないと精神が壊れそうだった。

入院と聞いたときの絶望は忘れない。

(司令官が死んじやう!?)

根拠もなく死ぬと思ひ込み、益々悪化して、現実逃避すら始めていた。

七海が愛すると決めた山風、弥生、如月は、全員揃って精神が壊れかけていたのだが、逆に言えば。戻ってくれば、一気に回復する。

ここにいる。髪飾りを、アネモネをくれた愛する人は、目の前に。

好きだけ吸い込もう。彼女の香りを、少しでも多く体内に取り込んで。

満たされたい。この匂いに包まれて、安心して眠りたい。

「司令官……如月は司令官が大好きよ……」

そう。彼女の近くにいた駆逐艦、如月も。

——ゆつくりと、その美しい瞳から、生気も光も、抜け落ちていく。

白の消えた穴が、濁った底の穴を見上げる。

彼女は知らない。この愛情の表現を、なんと言うか。

互いが互いを肯定して、互いが互いを縛りあう。

……人はそれを、共依存と言うのだと。

暴走司令官七海

鎮守府の中は、大騒ぎになっていた。

七海が、また姿が変わって帰ってきた。

その話を聞いて、艦娘たちは嫌な予感を抱かずにはいらなかった。

(七海に何かあったの……!?)

五十鈴は特に、後悔を感じていたため慌てて七海を探していた。

仕事は放り出してきている。どこにいる？ あの娘はどこ!?

そう、焦りを感じ懸命に探す。

もうこれ以上壊れれば、狂人になってしまう。

理性が崩壊して、サイコパスと同義になってしまう。

神様と言うのは、本当にろくなやつじゃない!

(何だよ……なんでまた七海が!! 七海だけが全てを背負うのよ!?)

出来ることは全部行うような奴だ。

誰にも相談せずに、背負い込んだらどうなるかも分かっているながらそれが義務だと決
め実行する。

なんで七海だけがこんなに残酷な事ばかりを受ける。

早く。早く見つけないと。

まだ何かをしようというなら、五十鈴は止める。

今度こそ、間に合わせて見せる。

(七海……七海ッ!!)

五十鈴は走る。少しでも早く見つけて、教えるのだ。

彼女の決意は、然し。

……今度も、間に合わなかった。

鎮守府を一周しても発見できずに執務室に戻る。

丁度、代理の提督が敬礼して、荷物を抱えて出ていく所だった。若い男性は、戻ってきたとだけ簡潔に述べて、去っていった。

五十鈴は直ぐにドアを開ける。すれ違っていたようだ。

「七海ッ!!」

叫び、中に飛び込むと。

「おや。五十鈴、お久し振りですね」

……知らない艦娘が、提督の白い軍服を纏い、座っていた。

誰だこいつは。少し身長が伸びている。

体型も少女らしい柔らかな曲線を描き、顔立ちも見覚えがない。

右目は深紅、左目は茶色のオッドアイ。

光も生気も欠落した、色のついたビー玉のような目だった。

髪型は耳のような茶色の癖毛のロングヘア。

毛先が薄いクリーム色になっている。だが、その声は……聞いた覚えがあった。

「なな………み?」

……この少女は。五十鈴の知る……七海だった。

また、外見が変わっている。今度は一見して、誰かが分からない。

声で気づいた。体格すら少し成長して、彼女の膝の上に座る嬉しそうな如月よりも大

きい様に見える。

それは、まるで。駆逐艦夕立と七海の姿は、融合しているように。

彼女とは思えない、優しく柔らかい声色で話しかけ、微笑んでいる。

その、笑顔は。五十鈴に、残酷な事実を突きつける。

(七海が……完全に、壊れた……)

有り得ないモノがあつた。

七海が笑っている。ただ、日常であり得る光景なのに。

決して、過去に笑うことのなかつた七海が、自然に笑っている。

そう、自然に。……虚ろで、イビツで、痛々しささえ滲ませて。

それが当たり前前の如く。微笑んでいる。今まで感情を分らないと悩んでいた子供が。

酷く、今の七海は大人びて見えた。

けれど、背伸びを通り越して、足を切り落とし代わりにつけた義足で身体を大きくした、目的のために自分を度外視したあのような、思わず目を覆いたくなる姿だった。

五十鈴は悟る。完全に、七海は、壊れていた。

悩むなどと言う人間らしい所業はもう、失われているように。

彼女は首を傾げている。あんな仕草はしなかつた。

今は自然体でやっているのだと分かるが、なんでこんなに見ていて辛くなる。

(七海が……狂ってしまった……)

頭がおかしいを超えた。

狂った。七海は、とうとう狂った。

いち早く、五十鈴は真実に辿り着く。

渋谷七海は、この時点で既に狂人であつた。

膝から崩れる。嘘だと思いたい。

だが、目の前には様変わりしている七海がいる。

「……五十鈴？ どうかしました？」

ああ、一番聞きたくなかつた台詞が出てきた。

思わず耳を両手で塞いだ。

確定だ。今ので確信した。

(七海、自分が狂っているって自覚がない!!)

なぜ、この状況でどうかしたか？ と聞けるのだ。

どうかしたのは七海の方だ。今までの自分の言動を振り返れば、一目瞭然。

違和感しかないこの現状でなぜ、訊ねた。答えは明白。

彼女は狂った自覚がない。彼女は自分の変化が分からないのか。

「七海……あんた、七海だよね……?」

自分でも意外なほど、弱々しい震えた声で問いかけていた。

起き上がる。まだ、絶望してはいけない。

七海は七海だ。如何様に狂おうが、きっと意味はあるのだろう。

そう、無理やりに前向きになる。

「……? ええ、あたしですが? 五十鈴はポケちやつたんですか? お若いのにご冗談を」

なんて軽口を言いながら、彼女はクスクス笑った。

五十鈴は愕然とした。七海が自分からそんなことを言い出した。

思い出せ。前の彼女は、真顔で何をいつていると聞くだけだった。

なのに……笑っている? 冗談を言ってる?

「……………」

少し話ただけで違和感を強烈に感じる。

誰だこいつは。七海を騙った別人か。

なんでこんなに気安くなった。なんでこんなに優しくなった。

……入院中に一体何があった!?

「如月!! あんた、なんにも感じないの!! 七海がおかしくなっているの!!」

五十鈴は如月に聞く。

彼女は恍惚とした表情で七海を見上げているだけで、話を聞いていない。

問いかけて漸く反応した。

「五十鈴さんはなにを言っているの？ 司令官は司令官よ？ どこもおかしくなんて

……ない」

理解できないと、如月は言った。おかしいのは五十鈴だと。

その目を見て、五十鈴は一瞬で意味を察した。

(……色が、ない!? 如月まで……同じ風に……!?)

七海と似たような目の色だった。

あるべき生気が欠如した、死んだ魚類のような無機質な目で、五十鈴を見ている。

バカな。なぜ、と思うが此方には思う節がある。

七海が消えてから、一時期精神的に不安定だった如月は、何とか持ちこたえていた。

確かに引き込もっていたが、仕事はしていたし、コミュニケーションも取れていた。

ただ、極端に会話が減って事務的なもの以外は終始無言で俯いているという状態だった。

たが。

……彼女も周りが気付かない間に極度のストレスを溜めていた。

それが、七海の帰還により解放され、結果……。

（如月……あんた、寂しかったのね……？ 七海が居なくなつて、代わりに誰かも居なかったから……。頼ることもしないまま、ずっと我慢して……）

五十鈴は彼女の心境は理解できた。

寂しさのあまり、如月も……病んでしまったのか。

あの麻薬に溺れる中毒者に似た表情、恐らくは間違いない。

如月も異変を来している。山風と弥生と大差がないようだった。

「……そう。七海、自覚ないのね……」

「自覚？ 何のですか？」

ダメだ。一応聞いてもこの有り様。

問いかけは遅い。意味などない。

多分、他の艦娘が見ても、内外の激変には違和感を感じるだろう。

五十鈴はここで、絶望した。

何度経験しても後悔ばかりが残る、悲しい感情をまた味わう羽目になる。

狂気に吞まれたであろう、提督と駆逐艦を、受け入れられずにいた……。

運命の対峙。

全員が大抵、言葉を失った。

「夕立姉さん!?!」

と、五月雨は初見で見間違えた。

やはり、夕立に近づいているのは間違いないと見る。

あまりの変化に一部は偽者ではないかと言い出した。

「久々の提督相手に偽者ですか？　じゃあ本物はどこにいるんでしょねえ」

……普段ならば流石に怒る事を言ってたのに、朗らかに対応している。

誰がこれを見える。何があつたか聞いても、なんの話かも分からない。

ただ、彼女の変化は聞かせてくれた。

適合率のオーバーフロー。非常に危険なまま安定して、戻された。

外見の変化はオーバーフローが原因。それも分かった。

「まあ、仕事は問題なく継続できるので。安心してください。あたしは、あたしつばい」

……稀に、あの特徴的語尾が出てくるのも影響のせいだと言われた。

微笑み続ける七海に、由良はふらつと失神して倒れ、救護室に運ばれた。

話し終わると、一目散に駆逐艦の大半は逃げ出した。空母たちも逃げ出した。扶桑姉

妹も逃げ出した。

気持ち悪くて受け入れられないようだった。堪えているのは、響だけ。

「ななみん……マジでわかんない？　今のななみん、めっちゃキモいよ？」

鈴谷が素直に教えてと言われて容赦なく指摘するが、如月が怒るだけで七海は分からないと首を振る。

困惑している重巡と軽巡たち。古鷹も、羽黒も、鈴谷も、衣笠も、五十鈴も。

「へえ、良いじゃん。ねえ、渋谷。今度私と夜の海、見に行こうよ！　私がオススメの夜

景スポット、教えてあげる！」

「面白そうですね。是非お願いします川内」

川内だけは、今の七海のほうが接しやすいと言つてあっさり適応していた。

七海も仲良くなれる機会は率先して拾うので、二人はガツチリと握手していた。

夜の海。夕立の影響だろう。ソロモンの悪夢としての血が騒ぐようだった。

「言うほどあたしは変わっちゃいません。最適な方法で最適に達成して、最適な環境にしようと思っただけです」

最適な方法で。

そう語る七海の言い分を聞いていくうちに、川内以外の全員の顔から血の気が失せていく。

要するにそれは、自己犠牲そのもので、己の軽視以外の何物でもない。

自分を鎮守府運営のための歯車、否。

自分自身を燃料にする気満々なのだ。

川内は気にせず、やりたいようにやればいいと言つて出ていった。

七海の意思を尊重する、という立場を貫くらしい。

「心配しないでください。前みたいに倒れません。もつと頑丈になりました。もつと強くなれました。これならこれまで以上に頑張つて働けます。多少鈍くなつても戦えて、働ければいいんです。あたしなんて、ドック入れておけば治りますし。艦娘ですから融通聞いて便利ですよね」

もう入院することもないと笑つた七海。

信じられない台詞を笑つて宣つた。あたしなんて。

自分を、『なんて』と評する人じゃなかったのに。

七海は、ここまで変わってしまった。

最早狂つたとか言えないと、のちに満場一致している。

「七海さん……どうして、あんなことを……？」

羽黒はただ困惑して、挨拶をしたのち秘密に集まった場所で、皆に聞く。

重巡と軽巡の集まり。適当に借りた会議室で、集まった彼女たちは考える。

悩みがあるのは、知っていた。それが原因で倒れて医者に送られた。

戻ってきたら解決していて、挙げ句には狂った状態だった。

見舞いにすら行けない状態だったのに、蓋を開ければ適合率のオーバーフロー？

それはつまり、なにか？

「七海は理屈を曲解させて狂ったまま、暴走しているってこと？」

五十鈴が言えば、意識が回復して合流した由良も頷く。

「そうだと由良も思うわ。……七海ちゃん、考えすぎに加えて雷ちゃんの言っていた事を解答として見て、最短で考えたとか、有り得ない？」

七海ならあり得る話だ。

何分、理屈を考えた場合、先に答えが出ていればそれ以外を模索しない奴である。

それ以外の道など、想像もしなかったに違いない。

散々悩んで、何があつたかは不明だが、それを目指すために道筋を立てた結果が自己犠牲。

自分を壊して狂って働くという結論。

「うわあ……。七海らしい解釈だね。現状、多分それが一番あり得るんじゃない」

衣笠も頭を抱えた。七海のやりそうな考えだ。

あの小娘は、結局自分だけで対処しようとしている。

何故なら、自分が提督で、艦娘は自分の部下だから。その責任と義務があるから。

「七海さん……相変わらず不器用というか……」

古鷹も啞然とする。不器用レベルじゃない。

理屈による暴走。暴走としか言えない次元であった。

「つてそれも、手遅れじゃん!? どーすんのさ!?!」

鈴谷が言う通り、下手すればこの時点で手遅れ確定。

今の七海に伝えて、とてもじゃないが修正できる気がしない。

十中八九、首を傾げるだけだろう。

「……五十鈴たちで、カバーするしかないわ」

五十鈴はそう、皆に言い出した。

戦艦姉妹は怖がって言えない。駆逐はビビって逃げ出す。

あの状態じゃ、如月も無理。医者に行っている二名も期待できない。

空母も潜水艦も似たようなものだろう。きつと、無理だ。

なので、残った重巡と軽巡が、あの暴走特急のブレーキにならないと、脱線事故を起こすだろう。

それだけならまだしも、自力で線路に戻って再び爆走し、自分では制御もわからず走

り続ける。

待っているものは、自滅の道なのは容易に想像できる。

彼女たちには七海はまだ必要不可欠。度外視されては困るのに。

言つて分からねぬなら、行動で止めるほかあるまい。

「狂つたら狂つたで、世話が焼けるわね……。うちの司令官様は」

ため息をつく五十鈴は、皆にそう言った。

実際、この惨状は、五十鈴が早い段階で気づきながら何もできずに放置した結果。

責任の一端はあると自覚する。由良も似たような思いだった。

「助けなきやね……。今度こそ」

故に由良も五十鈴の言葉に頷いた。

もう、繰り返したくはない。

あんな風に、悪化して壊れ狂う彼女を、見たくない。

艦娘のために、というのは痛いほど伝わっている。

応えるべきなのは、此方も同じこと。

「支えないといけないんですね。七海さんは、まだ……子供なんですから」

羽黒とて、末期とも言える七海のやり口には不安しかない。

滅びを受け入れる方法の何が最善なのか。そんな訳がなかるうに。

理屈ではどうせ勝てない。皆であの自滅司令官に立ち向かうのだ。

「しょうがない。衣笠さんたちが一肌脱いであげましょうか！」

強気的笑顔で、ガッツポーズで衣笠は宣言する。

暴走するなら上等だ。手綱ぐらい、しつかりと握って見せよう。

面倒を見るのは嫌いじゃない。手間がかかるなら、世話を焼くまで。

「七海さんの努力は私も知ってますし、今度は私達が努力する番ですよね」

不安を感じさせない優しげな笑顔で古鷹も賛同する。

あの少女の流儀はいつも抜けている。

それらを助け合うのが艦娘と提督の関係だと古鷹は思う。

だったら、努めよう。彼女の支えとなるために。

「……何時から鈴谷たちはななみんのお姉ちゃんズになつたかねえ……。ま、やるけ

どや」

鈴谷は半ば呆れていた。主に七海に。

世話を焼くばかりに気をとられて、焼かれるとは思ってないだろう。

七海は目の前ばかりに集中するから、脇や後ろがから空きのなだ。

鈴谷命名、七海のお姉ちゃんズは始動する。

暴走クレイジーバッドエンド司令官、渋谷七海のサポートプロジェクトの成功を誓い

あう。

当然、七海は知らないまま……。

広がる歪み

支えるというのは、存外難しいこと。

特に相手が聞いているのかいないのか、判別がしにくい場合などはそうだろう。戻ってきてからの日々は、平穩……でもなかった。

重巡と軽巡は、七海に対して、こう約束をした。

大変だったら、迷わず頼ること。

何かあれば、自分達に相談すること。

自分だけで対処しようとするなど。

出来てもやるな。ろくなものじゃないから。

「……でも」

「でもじゃないの。良い？ 鎮守府はあんたが一人で運営してるんじゃないの。皆で

作つてくの。責任者が七海なだけ。あんたの一存で最後は決まるけど、あんたが一人の独断でやつてる訳でもないわ。だから、秘書がいるんでしょ」

五十鈴が根気よく説得している。

得意の理屈で、七海が一人で背負える程鎮守府は安くないと教え込む。皆でやる。七海が大変なときは秘書がいる。

それを心がけると。一人で全部を背負つてやるな。

事後報告も止めろ。一緒にやれ。

当てに出来ないなら重巡と軽巡が手伝う。当てにしない。分らないなら一緒に学ぶ。出来ないなら一緒に頑張る。

一蓮托生でやつていこうと、五十鈴は七海に言った。

「はあ……。まあ、分かりました」

七海はあまり理解していないようだ。

全部自分で行うという癖がついている。

他人には相談しなくてもなんとかなると思つている。

だから、ルールを設けた。

「重要なことは自分で決めない。他の艦娘の意見も聞きなさい。独裁政治じゃないんだから」

「……確かに、一理ありますね」

自分だけの独裁をしていると言えば、嘘も方便。

七海は自分の振る舞いが独断であると反省した。

その通り、自分だけで判断している部分もあった。

それでは不満があると五十鈴が言うのなら、意見を取り入れるのは当然。

改めると約束した。

(……自分に間違いがあるって分かれば、それっぽく誘導するのは難しくないわね。七海の理屈癖は、先を読めばなんとかかなりそう……)

内心冷や汗の五十鈴は、口先で七海を誤魔化し、初めて口で勝った。

七海は騙され、誘導されているとは気づいていない。

数日もすれば、山風も弥生も戻ってくる。七海の復帰を聞いて、回復したそうだ。

相変わらず生気のないビー玉の目だが、徐々にサポートしていけばいい。

七海はこうして、戻ってきた。

激変したのは見た目だけじゃない。

中身も、十分変わっていると、皆は直ぐに目の当たりにする……。

日々の海域の戦闘。

七海の戦い方は、極端であった。

「そーれー!!」

一つ。まず、戦いを面白がっている。

何も考えずに突撃して、一人で敵の艦隊に飛び込む。

愚直に掻き回すのはいいが、かなり派手に食い散らかすのだ。

艦装も変化しており、背負う機関は体軀に合わせて巨大化している。

頭の電子類も広範囲をカバーする大型の物に変更。

脚部の連装速射砲も口径が大きくなり、黒と黄色の配色に飛び散ったような深紅も交じっている。

大笑いしながら、殴り倒す、持ち上げて放り投げる、相手の骨を折るなど、艦娘と言ふよりは獣だ。

狂犬のあだ名がついていると後で聞くが、無邪気に笑いながら殺しまくる彼女は犬と言つても過言じゃない。

狩りだ。あの状態の七海が行うのは趣味の様な狩り。戦争じゃない。

言うことは聞くが、突撃思考になっているのか、矢鱈と前に出たがる。

この状況では海の上を確りと疾走しているの、皆と足並みは揃う。

後ろは皆に任せて、自分は兎に角殺したい。そして自慢気に戦果を見せるのだ。

「どうですか!?! あたし、これだけ仕留めましたよ!?!」

死骸をぶちまけて戻ってくる頃には頭から大抵血塗れで、鉄臭い。

そりゃ、首を強引にへし折った挙げ句、眼球を潰すように指を突つ込めばこうもなるう。

それを気にしないで戦うから、殺戮に等しい鮮血の海が広がるのだ。

沈めるのではない。殺すのだ。深海棲艦を、殺している。

砲撃も雷撃も使わない。打撃のみで、仕留めてしまう。

猟犬にしたって、もう少し利口に殺すだろう。

だから、狂犬。

一方で、終始無言で淡々と処理する機械のごとき戦いぶりを見せるときもある。

これが規格外で、初手で最高速度に達して移動するので電子類に彼女の姿が認識できない。

いわく、跳躍。足腰のバネだけで短距離を跳び跳ねているため、またも魚雷が当たらない。

で、更に悪化したのは脚部の速射砲を追撃と移動のための手段に使っている。

簡単に言うと、反動が大きいのを逆に利用して、加速したり減速したり、空中で無理矢理軌道を変えたり、跳躍距離を伸ばしたりに使う。

彼女の砲撃は機動性を底上げる手段と同時に、空中からの連続砲撃に使う、倒れた相手を踏みつけた際の至近距離の追撃に使う、攻撃の威力を上げるために使うなど。

この状態では主に蹴り技をメインにして戦うためか、道理で脚部の速射砲を大型化したわけである。

彼女の本来のやり方はこれらしい。オーバーフローの影響で、普段は暴走していると聞いた。

艦と言うよりは、人の喧嘩に近い戦法。しかもその一つ一つが恐ろしく速いので皆がついていけない。

いきなり波を残して忽然と消えればそうもなる。

そのせいで、駆逐艦に分類されるのに潜水艦に攻撃できなくなっていた。やろうとしても、爆雷の重さで加速を相殺されて、動けなくなる。

五十鈴が小型のを渡してみたが、

「きゃー!?!」

何を血迷ったのか、思い切り爆雷を蹴り飛ばして落とそうとして、自爆。

七海が言うには、爆雷は扱えないとの事。

習ったし練習もしたが、何故かうまくいかない。感覚がついていかないといわれる。なので、日々海域に出てくる大捕物がメインであった。

お魚退治は他の艦娘に任せている。

指揮に関しても、以前は潜水艦が得意だったが、現在は自分を含めると戦艦や空母撃破に、居なければ従来通りという、ややこしい事になった。

混在すると戦艦を殺そうとする癖がついている。

出来ないこともないが、もう少し配分を考えてほしい。

ここは協議して修正をしていく。

で、日常は。

「不幸だわ……」

と嘆く戦艦妹にみっちり特訓に付き合ったり。

姉にも的として訓練に協力したり。

空母たちの艦載機の整備を手伝ったり。

駆逐艦と遊んだり。格段に皆と向き合っていた。

だが、やはりその変化に皆は戸惑う。

今までが酷すぎたのもあるだろうが、極端すぎる。

危ない薬でも試して狂っているんじゃないかと噂されていた。

「別になにもしてませんが……」

謂れない噂を本人は苦笑で流しているが、何よりその激変がおかしいと皆は思っている。

本人しか納得できない理屈による変化。

周りを置いてきぼりにしたとしても、彼女は向き合う、触れあう。

今までが悪かった。故に改め、皆に対して理解を深めようとする。

それが、周囲にわかってもらえるかは、別として。

入院中の二名も無事に復帰。

したは、いいが……。

「ま、ママ……!?!?」

「七海姉!?!」

戻ってきた二人が見たのは変わり果てた彼女の姿。

一回目を知らない二人は、夕立に似ている七海を見てやはり困惑する。見た目も声も違う。別人のようになった七海だが。

「はい、ママですよ。……おいで、山風」

中身も別人だった。腕を広げて笑顔で山風を招く。

おろおろしながら、でも微かな感覚を信じて、寄っていく。

自分よりも小さかった母は、今ではすっかり山風と同じ目線であった。

「お帰りなさい。あと、ごめんなさい。心配させてしまつて。ママはもう、元気です。安心して下さい」

頭を撫でながら過ぎす執務室の一時。

抱き締められる彼女たちは、感じた。

山風は確信した。この人は、ママだと。

何度も世話を焼いてくれた人と同じ感覚を感じる。

不器用で困りながらの優しさから、歪んで、曲がつて、捻れているけど、以前と変わらぬ優しさがあつた。

「ママ……ママ!! 良かった、良かったよう……」

無事だった。姿こそ違えど、この人は母である。

山風の、正真正銘。姉に似ていても、中身は七海のまま。

泣きながら、無事で良かったと、自分よりも先に安心していた。べそをかく山風に、黙って丁寧に頭を撫でる七海。

その表情は、正しく母親のような慈愛に満ちていた。

但し、やはりどこかイビツで、ひび割れている危うさも浮かんでいる。

何かがおかしい。あるいは、何かが決定的に間違っている。

そのまま、解答に至ってしまった少女。それが、ここにはいた。

「大丈夫。ママはもう勝手に居なくなりません。娘を置き去りにするお母さんではないですから」

囁くように山風を抱擁する。

弥生は見ていて、思った。

この人は母であり、弥生の姉であり、そして如月の大切な人。

随分と兼務しているが、その根本は全て同じ感情なのだろう。

(……愛されているなあ、弥生たち……)

何か、気になりはするが、大切にされているのは見れば分かる。

以前はもう少し扱いに慣れていないようだったが、今は自然に接している。

山風が泣き止むまでお預けにされていた弥生だが、譲られると……。

「ふあ!」

「お帰りなさい、弥生。心配させてしまつてごめんなさいね。もう、お姉ちゃんは心配要りませんか」

抱きしめ、目一杯愛してくれる。声も随分と感情が乗っている。

彼女は嬉しそうだった。帰ってきた娘と妹を、こんなにも優しくしてくれる。

ストレートに感情をぶつけてくる彼女に、違和感を感じなくもないが……弥生は受け入れた。

（弥生は、これでいい……。こつちの方が、弥生は嬉しい……）

弥生にとって、些末な出来事だった。

愛されなかった、無機物として接してこられた弥生からすれば、違和感程度がなんだというのか。

命として見られなかった嘗ての闇のなか。そこから掬い上げてくれた彼女が、姉で悪いのか？

恩人であり、姉と呼んでいいと言われたから、姉と慕っている。

七海が居なければ今頃スクラップだったのだ。たとえ、七海が狂おうが弥生は慕う。

この命は、七海から貰ったもの。七海と生きるための命。

彼女が愛してくれるなら、弥生も応えよう。

それが、妹の出来る数少ない恩返し。

娘は、気にすらなっていない。

母が帰ってきた。やっと、自分の居場所が戻ってきた。

母の近く以外には、山風が許される居場所はない。

母が許してくれるから、山風はここにいる。

母が絶対。母こそ絶対。絶対にして、唯一の頼れる人。

(ママ……ママ……!!)

依存を通り越していた。

山風のそれは既に崇拜であり、絶対なる神のような存在。

生かすも殺すも母の意思のままに。

山風は七海が死ぬと言うなら今度は喜んで死ぬ。

それが、母の役に立てるなら、本望とすら思えた。

たった一人の母。娘と言ってくれた。娘になれた。

山風は、渋谷七海の娘。一人しかない娘。

そう。山風にのみ許された、娘という確固たる立場。

山風の生きる場所であった。

(ママ……。あたし、頑張るよ。嫌われないように。見捨てられないように。だから、捨てないでね……)

母に嫌われるなら生きていても仕方ない。

母に求められないなら、動いていても意味がない。

だから、山風は七海の言うことなら何でもしたい。

戦えと言うなら必死に努力する。それでもダメでも頑張る。

七海しかもう、山風には居ないのだ。

彼女の意思が、山風の意思。

七海の思うがままに。山風の心は、身体は、七海に捧げる。娘として。

嗚呼、始まった。

同時に消え行くハイライト。微笑む表情は、狂い出す。

二名もまた、伝播する狂喜に吞まれて壊れ始めた。

元々壊れていたのが、トドメのように悪化していく。

二人の姉と母は、手遅れかもしれないが。

それ以上に、妹と娘は、完璧に、手遅れだった……。

自己犠牲（物理） その一

二人が戻ってきたお祝いをしよう。

そう、七海から皆に提案があった。

今の今まで、積極的に交流をしなかった七海から持ちかけられた話。互いについてもっと知ろうと皆に提案した。

内容は、まあ簡単に言えば出かけるぐらいのモノなのだが。

遊びにいこう、という誘いだった。

……結論から言うと、断る艦娘もいた。

扶桑姉妹、川内、イク、暁、飛鷹、瑞鳳。

扶桑姉妹は、姉は彼女といると何が起きるか分からないから、という理由。

妹は更なる不幸が襲っても対処できないから、という理由。

川内は眠いのでパス。夜間警備の仕事で疲れているとの事。

イクは今でも苦手意識が染み付いて無理、と断った。

飛鷹は単純にその日は別件で留守。改めるなら参加したいらしい。

暁は完全に今の七海を怖がっており、不気味すぎてお近づきお断り。

瑞鳳は、その日は出撃なのでごめんなさい、と言われた。

……見ての通り、半分は理由がひどい。

戦艦姉妹は七海に対する別の意味での不信感が強い。

頭がおかしくなっている人とは近づきたくないという至極真つ当な理由だと七海は

苦笑する。

サイコパスの自覚はあるから、不快感もない。

イクも暁も、七海の激変が恐ろしいのか、ずっと大人しい。

これも当たり前なので責めないで欲しいと、七海から言う始末。

本当に変わった。こんな気遣いが出る少女ではないはずなのに。

無論、良い意味での変化なのは分かっている。

だが、同時に七海の性格からして、狂うとしか思えない言動は、皆は薄々感付いている。
る。

七海は本当にぶっ壊れてしまっている。そういう風に。

おかしかつた機械を殴って元通りにするように。

異常だったものが、殴られてそれっぽく機能しているだけの違和感。

結局、異常なのは変わらないくせに、外面だけは改善されたように見えてしまう。

七海は、最早普通の精神状態ではない。人間は、急に中身は変わらない。

それをしたのなら、壊れたか、狂ったか。大半はその二つ。

七海は、狂った方なのだろう。

壊れかけの癖に歩み寄ろうとしてくる。

それを怖いと思うのの、何が変なのか。

恐怖を感じて当然の相手。大半は慣れてきたから、注意ぐらいはする。

周囲にいる三人のように、完全な適応をしてみれば、その狂気に吞まれて同じく理性が崩れていく。

正直言えば、気乗りはしない。今度は何を仕出かすのか気が気でないのだ。

人望で言うなら七海は低い方だ。寧ろ、心配されている提督。

彼女が行動すると、必ず彼女は何かを壊す。何かが今まで、全部自分だった。

だから次も自分を壊す。壊して壊して、臆ては何になるのだろうか？

スクラップか？ それとも、廃人か？ 行く末は、破滅しかない。

見張りをするという意味で、そもそもが楽しめない。

気張っている周囲の変化には鈍い七海は気がつかない。

「七海ちゃん。由良も行くけど、勝手に動いちゃダメよ？　ね？　ね？」

「それは構いませんが……」

「由良が手を繋いでいくから。約束よ？」

初回の今回は五十鈴、由良に三名に七海。

暇をわざわざ作った保護者と、問題のある駆逐艦四名。

由良が大本である七海を捕まえて、逃がさないと五十鈴と計画していた。

「なんで手なんか繋ぐんですか？」

「由良は地理知らないから、迷子になるの。案内して欲しいから」

「ああ、成る程……」

本当は鎖の意味なのを、適当な理由をでっち上げておけば、七海は納得する。

今の七海は基本的に、疑うという行動をしない。

嘘を言う前に、何かあれば真つ直ぐに聞いてくる。

教え込んだ事を実践しているようで、彼女は利用されているという自覚がない。

多分、ここの鎮守府の艦娘の言うことのみ、鵜呑みにしているのだろう。

(……心が痛い。けど、七海ちゃんはこうしないといけないから……)

罪悪感を感じる由良だが、七海さえ抑えておけば、後の三人は大人しい。

七海がバカなことをしなければ問題は発生しない。

させないようにするのが、由良の今回のお仕事。見張りと、塞き止め。

何を仕出かすのか分からない七海がもしも街で暴走した場合のストッパー。

真面目に取り押さえることが出来るとは思わない。だから、憲兵にも隠れて同行を頼んである。

凄まじく嫌そうな顔をされたが、七海は……人間相手にも酷く嫌悪されているようだった。

七海は艦娘だ。しかもオーバーフローを起こした、人権のある人間と艦娘の中間。

憲兵は武器も携帯すると言い出して、模擬の弾薬を仕込んだ大型の拳銃と、電撃の流れる警棒を装備していくと告げた。

「このオモチャが、あの娘に効果があるとは思えんがね……」

七海ほどの艦娘には微々たるモノだとぼやくが、一応念入りに準備をしておく。

由良も艦娘であるし、常人よりは力は強いが七海は規格外の一員。

五十鈴と手を組んでも無理な可能性が高い。準備に越したことはないのだ。

七海の周りは七海を危険物扱いしており、事実危険そのもののような奴だ。

これぐらいはしておかないと、安全策にもなりはしない。

無論、七海は知らないし、周囲が警戒しているだけ。

だが、この判断は結果から言えば英断だった。

七海は懸念通りの行動に出てしまう。

一番最悪な行動を、躊躇いすら感じずに。

赤い飛沫を、街中にぶちまける事となる……。

後日。予定のメンバーで、出掛けていた。

春先の歩道を歩く集団。桜が舞っている並木道。

背後には隠れて憲兵が同行をしている。

目的地は適当に買い物か、ゲーセンなどの娯楽施設か。

それぐらいだった。詳しい予定はない。

春物の服装で纏めた由良や五十鈴、何時もの制服姿の三名。

七海は、山風とお揃いの制服だった。手縫いしたらしい自作品。

「ママ、とつても良く似合ってるよ」

「そうですか？ いや、照れますね」

本当に照れているのか頬を赤く染めている七海。

背後をついてくる娘が、由良に引かれる母を誉めていた。

「つていうか、七海は手芸できたの？」

「当然です。あんなもの、家庭科の授業の延長。ミシンと本さえあれば誰でも出来ますよ」

「いや、多分無理だと思うわ……」

五十鈴が驚いているが、七海は元々成績はとても良い。

物覚えも良いので、入門書さえあれば後は手順を踏んで出来る。

人間関係は不器用だが、手先はそこそこ器用なのである。

「七海姉、今度弥生のも作ってくれないかな……？」

「構いませんよ。如月はどうしますか？」

「じゃあ、お願いしようかしら」

七海に裁縫を頼む弥生と如月の要望を聞いて、適当に生地と糸を購入して行くことにした。

先ずはゲーセンで遊ぶ。由良はゲーセンは初めてで、五十鈴は前に少し覗いた程度。

如月は以前に来ているし、弥生と山風は初めて。七海は久々だった。

「何して遊ぶの？」

由良は七海の遊びに付き合おうと言う。

入店して、音の洪水に驚く皆に、七海は言った。

「じゃ、あたしは好きなものをやってます」

意見がない皆を連れて、七海は移動を開始する。

ここまでは良かった。そう、ここまでは……。

ゲーセン終了後の帰り道。

七海が片っ端から奪ったクレイゲームの景品が嵩張るのを五十鈴が持っていた。

「七海、あんたのこれ嫌味!」

「……はい?」

軽トラツクのぬいぐるみと、大型トラツクのぬいぐるみを担ぐ五十鈴が怒る。

片方は扶桑のお土産であった。あとはネギを持っているキャラクターのぬいぐるみ。

「誰が似てるですって!? まだ掘り返すのあんたは!」

「……………」

「華麗に無視するなあ!!」

わざと目を逸らして聞き流す外道。背後で五十鈴が怒鳴るが全部スルー。

由良は苦笑いしていた。どうも七海は五十鈴に対して、妙なイメージを持っているよ
うだ。

わざわざ艦娘全員のお土産を自腹で購入している。

山風にはなぜか大きなたる坊主。弥生は丸っこい白い……ウサギ？ のような
動物。

如月はなんか特撮のおモチャだったし。本人は限定品なので飾ると張り切っていた。
由良には、小さな目覚まし時計。シンプルなデザインの四角いものだ。

有りがたく受け取って、買い物続ける。

今度の荷物は如月や弥生が持つ。

お昼を食べて、後は買い物で終わる。平和に終了すると思っていた。

その矢先の出来事だった……。

最初、自販機で七海が飲むものを購入すると言って、弥生と一緒に少し離れた時だっ
た。

二人が話しながら、自販機で買っていた、僅かな時間。

一行は離れた場所で、これから行くお店の道程を地図で確認していた。

二人は後ろの自販機の近くにいた。更にその背後には憲兵。

その間に、大きな脇道があった。その方向が、何やら騒がしい。

何事かと七海が気付いて振り返る。

「七海姉？」

弥生が首を傾げて、缶を取り出しながら聞いた。

ある程度人通りのある歩道。その後ろで、誰かが鋭く叫んでいるのを、七海は聞いた。

「——誰か、そいつを捕まえてくれ!! ひったくりだ!!」

人通りのある歩道の中を、何かが爆走してくる。

道行く人たちが慌てて回避するのを、突っ切る何か。

脇道から、大きな影が躍り出る。

「退けやおらアー!!」

ブラックのフルフェイスのヘルメットを被った黒い服の男。

腕には高級そうなバッグを引っ提げていた。

それが、歩道を原付で爆走していた。皆、逃げるように脇に逸れて避けている。

「……………えっ」

想定外の事で、硬直する弥生。

此方に向かつてくる。前の方で、由良が焦って叫んでいる。

早く戻れと。だが、向こうが向かうよりも、原付きのほうが、弥生に近かった。

原付きの後方の憲兵も間に合わない。最悪なことに、自販機と弥生のいる区間は道幅が狭い。

街路樹が根を張っており、アスファルトが隆起しているのだ。

街路樹と対面するよう設置されている自販機。その間に、弥生はいた。

(……え?)

迫る原付。運転手が吠える。そこをどけ。さもなくば轢き殺す。

そう、脅していた。だが、弥生は動けない。

突然のことに、硬直していた。

経験のない突発的な事象。対処法は咄嗟に出てこない。

五十鈴が叫ぶ。弥生に離れろと。

啞然とする弥生は、立ち尽くす。

スピードを落とさない原付きは、本当に弥生を轢き飛ばしてでも逃げようとしている。

再三叫ばれる。逃げろ、退け。そう言われても。

大きな声。大きな音。弥生は身が強ばった。怖い。動けない。また甦る恐怖の記憶。フラッシュバックする、痛み。

「……」

逃げなきや。分かつてる。でも、動かない。動けない。

どんどん縮まる距離。男も焦ったように叫ぶ。

「退けって言ってるだろ！ 死にたいのか!？」

本当に轢き殺す気はないのか、ブレーキはかけないがスピードは落とした。

それでも弥生は動かない。怖い。怖い。死ぬ……死んじやう!!

(うわああああああああ!!)

トラウマの再発であった。悲鳴をあげる前に、気を失いそうになる。

嫌だ。まただ。また、大きな音が迫る。怖いものが近づく。

死にたくない、死にたくない。

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない!!

「——七海姉エ!!」

思わず助けを求めた。

弥生の声に、その女は言われるまでもなく、動いていた。

硬直する弥生を連れて逃げるには、周囲の立地が悪く、周りの人間が邪魔。

原付きの速度に対して、逃走経路が確保できない。車道に出るなど以ての外。何より弥生が固まって動かない。反応が遅れている。

ならば、この状況の最善策は？ 弥生が、無事に助かるには？

「……弥生。少し目を閉じてください」

笑顔で、七海は言っていた。

反射的に目を閉じる。

その間に、七海はさっさと動く。

襲ってくる原付に、自分から

庇うと言うよりは、自分から突っ込んでいったのだ。

「なっ……!?!」

目を見開く運転手。何が起きている。

子供が……子供が、自分から原付に体当たりをしに来ている!!

しかも……笑っている。嬉しそうに、笑っている!?

「うおおああああ!?!」

思わず急ブレーキをかける。

だが、当然すぐに止まる訳がないし、相手は自ら突進して来ているのだ。

なら、必然的に、こうなった。

——ガシャーんツ!!

原付と、子供の、人身事故。

高速回転する前輪に、子供がタックルを仕掛けて、威力を相殺しようとした。

背後には動けない少女がいた。

子供は大きく舞い上がって、アスファルトに頭から墜落。

原付も撥ね飛ばされて、横転し運転手は投げ出された。

転がる運転手。街路樹にぶつかって、原付は壊れて停止。

墜ちた子供はうつ伏せに倒れて、大量の出血を起こしてアスファルトを真っ赤に染める。

みるみる広がる深紅の池が、彼女の負傷を物語る。

「……………くそ、何だったんだ……………!?!」

起き上がる運転手は無傷だが、傍らにはたつた今、自分が轢き殺したであろう、子供の姿があった。

よろよろ起き上がった男が見たのは、自分が殺した人間の……………死体。

頭から多量出血している、彼女の姿だった。

「……うわああああああ!!」

それを確認して、腰を抜かして絶叫する。

すると、伝播するように周囲にも悲鳴が連なつた。

目の前で人が死んだ。通行人も、逃げ出していた。

犯人は足止めできた。だが、それは……幼い命と引き換えの、あまりにも大きな代償で。

恐々目を開けた弥生が見たのは……代わりに轢かれた姉の倒れる姿。

「七海姉!」

直ぐ駆け寄る。

後方から由良たちが、前方から何故か憲兵までも現れた。

「七海ちゃん!」

「バカ、なにやっつてんのあんたツ!」

艦娘たちは当然、違う意味で慌てていた。

あのバカ、動けない弥生を庇うために、原付きに自分から体当たりして防ぎやがった。迷わず自己を犠牲にして、助けたのはいい。

然し、街中でこれをやるか。派手な音と、出血をしている。

憲兵が助け起こすと。

「……………周りから人、居なくなりましたか？」

額に巨大な裂傷、というか亀裂が入ってだらだら出血している七海が意識があるまま、静かに聞いていた。

普通なら多量出血で死ぬが、七海は艦娘。原付に撥ね飛ばされた程度じゃ死なない。が、そんなもの民間人が知る訳がない。完全に死んだと思われて、警察を呼んでいる。犯人は放心状態で腰を抜かしているし、弥生は生きてたと安堵している。

「……………司令官。街中でそれはいけないわ」

「ママ、怪我大丈夫？」

受け入れ態勢の二名は動じずに見下ろして聞いていた。

由良と五十鈴もホツとしたが、本当になにやっつたんだこの女。

「弥生は無事ですか。なら、良いです」

「良いわけではないよ!？」

五十鈴につっこまれた。

憲兵が呆れた様子で抱き上げて、軽く応急処置。

頭蓋も割れているらしく、血が止まらないが、まあ仕方ない。

七海の型破りな行動に頭が痛くなる、頭が痛いのは七海だろうと思いつながら、大事に備える。

また、
ややこしいことになりそうだった……。

七海の偏狭癖

折角の交流は、ひったくりのせいで台無しになった。

通報され、現れた救急車と警察には憲兵が事情を説明。

軍の関係者なので軍の病院に搬送してくれと頼み込んだ。

「嘘だろ……!?! 原付で轢いたのに生きてる!!? バカな……そんなバカな!!? 俺は、確かに人をこの手で殺しちまった筈なのに……なんでだよ!?!」

犯人は完全にパニックに陥っており、駆けつけた警官を激しく問い詰めていた。

なぜ彼女は生きていた。なぜ彼女は立ち上がった。

世間に知られていない艦娘は、その頑丈さも一線を画する。

車体に小突かれた程度で死ぬわけがない。

「お巡りさん。大事にはしないようにしてくれませんか? ご覧の通り、あたしは無傷

ですのぞ」

「いや、思いつきり額が割れているのに何を言っているのかな!」

犯人に、大袈裟な容疑はかけないでくれと告げる七海を、五十鈴たちは見ていた。

連行される際に、七海が頭に簡単に処置を施してから、わざわざ言いに行ったのだ。

警官は無茶を言うな、と彼女に首をふった。

「悪いね。僕たちは警察なんだ。……艦娘と言うのはあまり知らないし、軍部には警察も介入できない。けれど、僕個人はあのような無頼漢には、情けはかけない。でも、そうだね。ありがとう、提督さん。君の勇気ある行動が、奴を捕まえるきっかけになった。でも、命は大事にね。艦娘と言えど、同じ世界に生きているんだ」

と、若い巡査は敬礼して協力を感謝する、と告げて戻っていった。

救急車に乗る際、五十鈴はなぜあんなことを言ったのか聞くと。

「別に。あたしは見ての通り、大した傷じゃないですし。大事になると、何度もこのあと聴取に呼び出されます。さっさと終わってほしいので、軽いものでいいんですよ。所詮は窃盗とかですし」

「七海ちゃんは何を言っているの……?」

要は事後処理が面倒だから簡単なものでいいと被害者は言っている。

由良が呆れて見ているなか、救急隊員が対処に困っていた。

艦娘と言う人種にはどうすればいいのか。人間と同じでいいのか迷っている。

ゾロゾロとお連れも一緒に乗り込み、本人もけろつとしている。

痛みはないのか、と言われるが。

「ん？ 痛みなんてありませんよ？ 精々視界が歪んでいる程度で」

「程度じゃないですよ!?!」

止血を先ず始める隊員が思わず言った。

人間なら即死すらあり得た傷なのに平然とする子供。

このあと、海軍のお偉いさん……七海の場合は桜庭元帥が、根回しして余計な情報漏洩を潰して事なきを得た。

因みに桜庭元帥はというと。

「渋谷提督ナイス!! よく怪我人を出さずに解決したわね!! 個人的に表彰したいけど周りが五月蠅いからなにもできないけどゴメンね! あ、あと特に罰則とかないから。寧ろ無事に事件解決に貢献したって、警察にもお礼言われたわ。軍部と警察ってあんまし仲良しじゃないから、今回みたいのは巻き込まれたらどどん解決しちゃって! 連中に恩を売るチャンスだし!」

と、なんか聞きたくない事情まで言われて褒められた。

国防を担う海軍と、秩序の安定を担う警察は、あまり仲良くはないようで。

恩を売るなどという酷い言い種でも、国民を守るもの同士、理解はできるようだ。

「ママすごい!!」

「良かったわね、司令官」

「……でも、無茶はしないでね」

三人は連絡を受けた七海が褒められて、嬉しそだった。

ただ、弥生の言う通り無理はしないで、とだけ言っておく。

軍の病院で簡単な手当で復活した七海は、執務室でお昼をつつきながら聞いている。

「あたしでも役に立つんですね。好きなように振る舞っただけなのに」

などと、山風が初めて焼いた黒こげの卵焼きを頬張りながらコメントしていた。

母に喜んで貰うべく、三人がチャレンジした差し入れのお昼。

弥生は生焼けの魚を、如月は煮すぎの煮物を持ってきた。

全部平らげる七海。味の的確な感想は流石と言うべきだろうか。

「……………由良。ドック行ってきて良いですかね」

「生焼けのお魚食べるから! 無理して食べるとお腹壊すって言ったのに!!」

青白く顔色を悪くして、腹痛を訴えてドックに暫く浸かっていた。

由良の言う通り、食えないものは食えないと言えと叱られた。

そんなこんなで、無事に解決。……いや、無事とは言えないが。

結局聴取に呼ばれて何回か出ていったし、事後処理は終わったとはいえ、憲兵の評価はまた下がったし。

七海はどうでも良さそうだったが。そんなお出かけのあと。

新たな事件を、七海は起こす……。

「……英語を習いたい?」

七海はその日、飛鷹を訊ねていた。

飛鷹は書庫で海外の翻訳書を七海と探していて、不意に七海が英語を習いたいと言い出したのだ。

「原文で英語は読めるでしょ? 喋るほう?」

「ええ。飛鷹は米国の英語が得意とお聞きしましたが」

読む方は七海は大体できる。読書が好きなので、英文は七海は解読できるのだが。

喋る方を七海は習いたいと言い出す。

英語は英国と米国で微妙に違うようで、七海は米国の方でいいらしい。

「んー……。まあ、英語は喋れるし読めるけど……。七海は今何カ国語が喋れる？」

「日本語とロシア語です。響に習っています」

「ロシア語か……」

現状、この鎮守府で海外の言語を喋れるのは飛鷹と響のみ。

英語とロシア語。英語もマスターしておけば便利じゃないかと思ったそう。

「学校の英語は実際じゃ通じませんか。うちには金剛も居ませんし。なので飛鷹になつたのですが」

高校の英語は意味がないと断じる七海に苦笑い。

確かに学校の英語は点数を取るための物で、会話ができるものではないらしい。

なので、勉強したいと言われた。

「私は構わないわ。けど、結構厳しいからね」

「望むところです。よろしくお願いいたします」

向上心があるなら結構。

飛鷹もこういう、七海の貪欲な努力は評価するので、約束をしてこの日は終了。

……飛鷹は正直、七海を甘く見ていた。

七海は興味のあるものは率先して吸収していく面もある。

面白そうと思うと、沼にハマるようにのめり込む偏狭的な一面が。その見えない悪癖がこの時、初めて発露されていく……。

それから。暇な時間を見つけては、飛鷹に英語を教わっていた。

山風たちは、瑞鳳に七海の差し入れの為に、料理を教わりに間宮のところに行っている。

空いた時間を有効利用。それは全然、良かったのだが。

飛鷹が教える以上に、七海はハイペースで学習していった。

先生の飛鷹が、かなり速度を上げて教えているのに、七海はそれ以上の速度で覚えていく。

(要領よく覚えていくわね……。予習復習までキッチリこなしてて。バカ真面目だけど、私も負けていられない!!)

飛鷹は変な部分で負けん気が強く、七海の学習速度の早さに教える自分が負けてはいけないと奮起した。

彼女もつられるように、というか競うように連日連夜学習を重ねていく。

七海の場合は学校での基盤も上乘せしているし、独自に調べて覚える努力をしている。

最早趣味になっていた。飛鷹も負けじと加速していく。

七海にその気はないが、飛鷹のガッツが七海に悪影響を及ぼした。

(……む。あたしの努力不足ですか。飛鷹の指定範囲が広がっている……)

飛鷹が毎回出している課題の範囲が徐々に広がっていった。

七海は言外にもつと覚えて欲しいと要求されたと誤解した。

故に更に素早く効率よく叩き込む。

次回には完璧に終わらせて、飛鷹は軽く戦慄して目眩すら覚えた。

(やるわね七海。私の努力に、こんな風に応えてくれるなんて、光栄じゃない。見てなき

い、飛鷹型航空母艦の真髄の英語は、世界を回るはずだった豪華客船の、必須科目よ！)

ヒートアップしていく互いの無意識のすれ違い。

飛鷹は空いた時間は全て七海の暴走している趣味の特訓に費やしていた。

やりがいがあると、喜びすら感じている始末で、加熱した先生の役目は止まる所を知

らない。

とうとう任務の時すら時々英語で会話する様になり、周囲とコミュニケーションが不

能になった。

「止めなさい飛鷹オツ!! 英語で七海に話しかけるなア!! 七海がもつと暴走するでしよー!」

由良は辛うじてなんとか分かるものの、駆逐艦や戦艦、他の空母は何を言っているか分からない。

自覚なしにしているのか、七海は日常会話が英語になると言う別の意味の暴走を始めていた。

五十鈴が飛鷹に叱るが、飛鷹は血走った目で反論する。

「ダメよ!! 五十鈴、これは七海と私の戦いなのだ!! 語学は場数を踏めば踏むだけ強くなるツ!! 今は満足するまで思い切りさせて頂戴ツ!!」

鬼気迫る勢いで、飛鷹は七海との勉強を望んでいた。

まあ、教えれば教えるだけ圧倒的速度で学んで目に見える成長をすれば、誰だって嬉しい。

語学の面白さを知らない五十鈴には血迷っているようにしか見えない。

元々客船の魂である飛鷹ぐらいしか、この面白さは理解できない。

「あの娘が無意識に公私混同してるんだけど!? もうこれ刷り込みでしょ!? 七海が今度は何を言っているかわかんないって、苦情きてんの!!」

「今時英語ぐらい覚えてないと海外の艦娘と会話するときに苦勞するわよ五十鈴!」

「逆ギレ!? 分かるけど、言いたいことは分かるけど!!」

七海に一応、普段が英語になっていると指摘しておく。

案の定、自然に日常会話が英語になっている事に気づいていなかった。

『あれ、あたし普通に喋ってるつもりだったんですけど』

「また英語になってる!! 日本語で喋って! 分かんないから!」

怒られる七海は、英語と日本語の混じる金剛のような口調になっていた。

しかも結構流暢な英語で、五十鈴も何を言われているか理解できない。

「つと、すみませんね。最近英語漬けになっているものでして」

ある日の昼に、三人がおニューで持ってきたお昼を再びつつきながら七海は五十鈴に謝った。

「ママ、山風の作った卵焼き……食べる?」

「食べます」

あーん的な感じで、今度は黄金に輝く卵焼きを頬張る七海。

山風渾身の出来映えは、以前とは比べ物にならないぐらい、上達していた。

「美味しいです」

「やった!」

ガッツポーズの山風の頭を撫でる七海。

五十鈴は呆れて見ているが、最近差し入れが多い。

仲良くやっているのはいい。あの三人とは、問題はなさそうだ。

(他の娘とも上手くやってほしいんだけどね……)

今度は七海にその気があっても、此方が受け入れない。

見事にすれ違っている。何で毎回、互いに行き違うのやら。

コツソリと五十鈴は書類を胸に抱きながら、ため息をついた。

彼女なりの行動は、いい加減皆も慣れてきたとは思う。

慣れただけで、付き合うのはまだ無理と言う感じか。

飛鷹のように、互いにヒートアップして共倒れの暴走、と言うのも勘弁してほしいが。

前回の事は邪魔が入って、またも上手くいかなかった。

毎度の事なので、七海は呪われているんじゃないかと思う。

トラブルを自分で引き起こさなくても、状況が彼女に行動させている。

最適解を危険度外視で実行するからか、周りが気を付けても向こうからくるのだ。

(どうしたもんかな……。もう少し、手だてがあれば……)

五十鈴は悩む。

悪気はないのに交わらない司令官と艦娘。

その間に立って、どうすれば上手くいくか。
五十鈴はずっと、考えていた……。

追記。

七海の英語はかなり上達したが、この一件で七海に好きなものを与えるときは冷静になろう、という教訓が出来るのだった……。

戦艦の悩み

ある日、司令官は聞いてしまった。

「私、何時もドックにいますよね……。やっぱり欠陥戦艦なのかしら……?」
とても沈んだ声だった。司令官は大変驚いた。

彼女が何だか大変そうになっている。どうにかしないと。

(何事か知りませんが解決しなければ)

司令官七海、始動。速やかに解決を目指して動き出す。

はい、という訳で次回の提督の暴走の始まり、始まり……。

「由良。あたしも頑張るので由良も頑張つて改二になり、瑞雲使ってください」

「無茶を言わないでっ!! 由良にも限度があるの!! ハードな練度上げは無理です!!」

彼女の悩みは、負担が大きいかからかと思つた。

なので由良に相談した。

彼女は軽巡だが、改二になると水上攻撃機と水上爆撃機が使えるんだそうだ。

頑張つて如月と同じくハードコースに突っ込むと言うと全力で嫌がつてくる。

執務室で計画書を見せると、部屋のすみまで逃げた。

「エロJKもこれ以上は無理つて逃げました。扶桑はこれ以上負担を増やすのは性能的に無理です。二人しかいない戦艦ですので、ここは代わりに由良を地獄に落とします」

「止めて!! 由良にだつて事情はあるのよ!?!」

出た、七海のハードコース。

如月の時に行つた、無理はないが毎日死ぬような特訓と実戦に駆り出される地獄の日々。

今は七海も艦娘だ。なので演習で手っ取り早く、『本気を出した七海』に、追い回されるのだそう。

どうせ死なない。殺す勢いで戦う。で、練度あげる。

短絡的な指示で、確かに効率が良いし体力的にも余裕はある。

……精神的な余裕は考慮されない。スパルタ式のような。

ここの鎮守府もそろそろ改二になる艦娘も増えてきた。

未改造なだけの五十鈴を筆頭に、川内も近いし睦月も近い。

衣笠に至っては練度は既に超えている。ただ、古鷹に合わせたいのでまだやってないだけ。

羽黒も良い感じで上がってきているし、由良も何だかんだそろそろ60にも近い。

唯一の潜水空母ももういるし、暁ですらいい加減頑張れば行けそう。

事情あって、響のみ例外。人には色々理由があるのだ。

低いのは現在トラウマ克服中の山風と弥生ぐらい。

遠征には頑張つて出ているので、二人も仕事はしていた。

如月は言うまでもない。既に75以上の高い練度だ。

イムヤも70近くまで上昇している。

問題は、戦艦姉妹だ。山城、53。扶桑、56。

頼りの戦艦は、他の艦娘よりも低いのだ。

理由として、山城はネガティブが強いせいで、ミスると落ち込み、更に連鎖する。

扶桑がいれば頑張るのだが、扶桑は山城の巻き添えを受けて毎回大破して帰ってくる。

七海は一切文句を言わないのが逆にプレッシャーになっているのか、扶桑も申し訳ないように萎縮している。

確かに魚退治が多い海域だ。戦艦である姉妹にはやりにくい。

だが、七海はそれをカバーするためにあれこれ工夫もしていた。

何処から持ってきたのか、例の計画の恩恵だろう、試製晴嵐を幾つか配備してくれた。

更にはソナーも装備しているし、魚退治が出来ないわけではない。

だが、戦艦の花形は砲撃による殴りあい。

それも任せているせいか、どっち付かずの状態が続いており、そのせいもあると七海は言う。

つまり。

「山城は悪くないんです。あたしの采配のせいですので」

一切の責任はないと断言して、七海は自分の責任だと言い切る。

だから、二人が専念できるように、由良にも代わりにお魚退治を押し付ける。

因みに七海は知つての通り、全然お魚退治は出来ないのです、戦艦殺しをメインとしているが、彼女もしょっちゅう大ケガしているのは言うまでもない。

暴走して撲殺したりしていればこうもなる。

彼女も負担は大きいのである。

「いや…………でも…………」

お魚退治は五十鈴の専門じゃ、と由良は言い訳を懸命に探す。

本音は、暴走している七海は恐ろしく強いのに加えて異様に怖いので相手にしたくない。

砲撃を全部回避して、暴力で襲ってくる女子高生など誰が喜ぶ。

殴る蹴る、踏みつける投げ飛ばすどつく噛みつく締め上げる叩きつける。

挙げ句にはギブをしても聞いてないのか、大破判定が出るまで容赦なく追撃する。

踏み倒して、至近距離からの連装速射砲による顔面を狙った攻撃は泣きそうになつた。

というか、マジで泣き叫んでいた由良。

二度と嫌だあんな地獄は。彼女とのタイマンの演習だけは避けたい。

「……………そうですか」

七海は何時も通り微妙に微笑みつつ、必死に嫌がる由良に免じて許してくれたようだ。

ホッと胸を撫で下ろす由良。

……だが。

「じゃあ五十鈴と一緒に地獄行きです」

「!？」

五十鈴を巻き込んで共倒れしただけであった。

強制連行。言い訳して逃げたので更にお仕置き追加。

(い、いやあああああああー！！！)

内心血相を変えて悲鳴をあげる由良。

ダメだった。話を聞いて尚、却下。

由良は物理で逃げようとしたが結局捕まる。

そして、綿密に立てられた地獄の一週間を、なにも知らない五十鈴と共に過ごしていく……。

「由良殺す」

「……何度も謝ってるでしょ。もう、許してよ五十鈴……」

一週間後。

朗らかな彼女にしては珍しい本気で悄気ている由良と、殺気立った五十鈴が腕を組んでキレながら廊下を歩く。

改造を受けて二人とも見事に改二に至った。思い出したくもない一週間だった。狂犬に毎日追い回され、何度もあの世に送られかけた。

五十鈴は怒って反撃して、まさかの二度勝利していたが、由良は全敗だ。

服装も改二にするべく、七海が何を血迷ったのか夜なべして用意していた。手縫いだそうで。

サイズは五十鈴に聞いていたと言うが、五十鈴はなんの話かも分からずに答えていたそう。

「なんで七海に主導権奪われてるのよ!?! あの娘は言えば聞くとは言ったけど、理屈で言えって言ったじゃない! 言い訳なんかすれば当然こうなるわよね!?!」

勢いに負けて流れされた由良の敗北。五十鈴もとばっちり。

必要なことかもしれないが、本質は山城が元気ないから代わりの仕事を頼まれること。

適当に言えば痛い目にも遭わずに済んだのに。由良は本当に七海の扱いが未だに下手だ。

「うう……ゴメン」

説教される情けない妹、由良。

落ち込んでも仕方ない。おかげで改二になれただけ、良しとしよう。

お祝いとお詫びに、七海が何やらお忍びで買ってきた物を奢ってくれるらしいし。

で、今その呼び出しを受けて執務室に来たのだが。

「あ、来ました？ どうぞ、これ」

七海は何かの支度をしていた。

ドンツ！ と机に巨大なケーキが置かれていた。

労いの限定ホールケーキ。ちゃんと二人の好きな味だった。

これは、知っている。

いっぞや食べに行き損ねた一日20個限定の老舗洋菓子専門店のケーキ。予約をしてくれたらしい。

ただ、デカイ。……直径25cmは下らない巨大なショートケーキとチョコケーキ。

最悪皆で分けて、と死んだオツドアイで七海は告げ、自分はさっさと仕事に向かった。いった。

……唾然としていた二名は、辛うじてお礼は言ったが、七海は気にせず行ってしまった。

「……食べる？ 五十鈴一人で、このサイズを？」

「疲労回復には甘味って、絶対知識だけで選んだよねこれ」

一応皆にもと言うぐらいにはおかしいとは思っていたんだろう。

しかもオマケなのか、コーヒーも一緒になっていた。

普段二人がコーヒーを飲むのを観察していたか。

……それはいい。問題は。

200gも入っていないドリップで、お値段6500円とか書いてあるんですが。

「……あの娘、自腹？」

「多分……」

高いものは美味しいとでも思っているんだろうか。二人は呆然としていた。

お言葉通り、皆さんで食べることにした。

「……提督が、私を？」

急遽開かれた執務室のお茶会。

最高級限定ケーキをただで食えると聞いて、暇なやつは喜んで駆けつけた。

無論、そこには件の山城もいた。彼女は強引に誘ってきた。

由良が事情を説明すると、ため息をついて山城はぼやく。

「原因を聞きもしないで早とちりして……。いやまあ、私が苦手意識あるから氣遣っているのだろうけど」

負担軽減を由良に押し付けたと言われて、山城は困惑しながら謝った。

甘いもの大好きな空母や駆逐艦たちがはしゃいで食べているなか。

一画の重巡と軽巡と山城はシリアスになっていた。

「じゃあ、原因違うの？」

「違います。ただの自己嫌悪ですよ」

五十鈴が聞けば、山城は彼女が居ないので、コーヒーを飲みながら白状する。

「私、問題起こして飛ばされたんで……正直、姉様よりも先に解体とかあり得るんじゃないかなと思ってたの。今考えれば、渋谷提督が解体なんかするわけないんですけど」

そこは一応、信用しているようで。

扶桑は黙って、妹の話を聞いている。

山城は大きくもう一度、ため息をついた。

「いえ、ぶつちやけ皆さんだから言うけど、申し訳ないと思ってるの。仮にも姉様共々唯一の戦艦なのに、この体たらくで。提督が代わりに日々の殴りあいをしているのは知っ

てるし、そのせいで毎回大ケガしているのも分かってる。だけど……何でか、自信がない。出ないのよ。焦るとミスる。それを取り返そうとして更に繰り返す……毎度こうで。よくもまあ、あの娘は文句を言わないわ。負担を増やしているのに」

悩み事だったのだ。情けない自分に対する嫌悪を、七海は何処かで聞いたのだろう。

それを勝手に解決するべく、由良と五十鈴の姉担当二名を贄にした。

また話を聞いていない。いや、相談は由良にはしたが本人には聞いてない。

多分、聞いてもはぐらかすと思つたのだろうと由良は思う。

俯く山城の表情を、湯気を立てるコーヒートの水面が映す。

色通りの、暗い表情であつた。

「どうすれば良いのかしら。私、戦艦としての自信が無くなつてきて。姉様は巻き込むし、被害は拡大するし、本当にここに居て良いのかなつて……」

山城なりの悩みは、七海には分かるまい。

自信のなさ。そんなもの、異常者の七海に在るわけがない。

彼女は自信などの感情を持っていないだろうし、ネガティブにもならない。

機械は決して、浮き沈みはしないのだ。常に平坦。上下はしない。

今回は氣遣つているおかげで、不用意に刺激することは無く、被害は軽微だった。

精々二名が地獄を見て改二になった程度。必要経費と見れば、被害はないに等しい。

こういう励ましは、七海にはきつとできやしない。

「んー……五十鈴は所詮軽巡だから、戦艦の悩みは少ししか分からないけど」
五十鈴にもそういう悩みはない。何せ常に自信のあるのが五十鈴。

こういうのに共感できるのは……。

「……少し、分かります。わたしも、自信はないし……」

羽黒とか。

「私も時々、七海さんの負担になってないか、不安にはなるよ。……重巡の中じゃ、あまり強くはないって自覚はあるから」

古鷹とか。

やはり、比べられるのを好きではない艦娘ぐらいなものか。

低性能を言われると古鷹も気にするし、羽黒は弱気な性格だし、指摘されれば悩むだろう。

けれど、七海はそんなことはしないだろうと二人は言うのだ。

「大丈夫だと思えます。そういう意味じゃ文句は言わないと思うので」

「うん。七海さんは最近じゃ怒ることも減ったし、多分気にしてないと思う」

山城はポカンとしていた。

性能を気にしない。何故かと言えば。

「あ、多分それは山城さん、頼ってるからじゃない？ 戦果を出せないのは自分の采配だって、七海ちゃん言ってたわ」

山城には責はない。あるのは自分の問題だと、七海は言っていると由良は告げる。

益々言葉を失う山城。てつきり、悪態の一つでも飛んでくるかと思っていたようだ。

「悪態ねえ……。言ったが最後、五十鈴が七海をボコボコにするけどね。ま、理屈的な娘だから、余程じゃない限りは言わないわよ。そこまで七海はバカじゃない。……バカをするのは、こういうケーキの一件とかだけ」

相変わらず一つ抜けている七海は、真剣な部分は間違えない。

暴走もするし、後始末はこちらになる。

然し、決して艦娘を貶すような真似は今ほしない。

「あの娘は山城さんの気持ちはわかんないだろうけど、解決しようとしてはいた。まあ、この様だけどき。だから、あんまり嫌わないであげて。それなりに、おかしいかもしれないけど、頑張ってるから」

苦笑いして五十鈴は言った。七海は山城を見捨てないし、悪くも思わない。

思うような頭がない。そういう意味でも彼女は、おかしいから。

山城は臆て、呆れているような表情で皆に言った。

「……そうですね。努力します。そこまで言うなら、受け入れるぐらいには」

山城も、七海の事は少しは認めようと思う、といってくれた。そこには心底呆れていたが。

五十鈴はホツとする。七海の暴走が今回は、あくまで今回は不発に終わったことを。自分の被害は今回は目を瞑ろう。改善されたので、それに免じて。

七海が知らぬ間に一つ、和解の事案ができていた。

戦艦山城。一応、七海を信じてみることにしたのだった……。

姫を冠する者

戦艦との誤解を周囲が解いているなか。

彼女は例の報告会に向かっていた。

オーバーフローを起こしてから初めての報告会。

またも、荒れることになるうとは、七海はまだ知らなかった……。

「……………渋谷？　お前、渋谷だよな……………？」

「おや……。 お久し振りですね、赤松さん」

泊まりがけで向かう大本営。

五十鈴に言っておいたので心配はないだろう。

付き添いの憲兵と電車で向かう際、偶然にも車内で赤松と遭遇した。目立たない私服に大きな荷物を背負う彼は、座席に座る七海を発見。訝しげに見てから、驚いていた。

「うお、やっぱりか……。 久しぶりだな。 元気そうで何よりだぜ」

分かれると、空いた隣の座席に荷物を抱え直して座る。

外見の変化を知らない赤松は、吃驚したようだった。

にやつと笑い、閑散としている室内に人がいないか確認する。

一応、周囲に気を配る。聞かれたら面倒なことになるので。

幸い、田舎に向かう乗り継ぎの間にあるローカル線。

人は疎らで、近くには居なかった。

規則正しい揺れと、外の新緑の景色を眺めながら、七海は黙る。

「お前、オーバーフローとかいう不調起こしたんだってな。 閣下が教えてくれたんだが、良かったわ」

「閣下……？ ああ、桜庭さんですか」

荷物から缶のコーヒーをとりだして七海にくれた赤松。

彼の言う閣下とは、元帥の立場の人たちのこと。

恐れ多くて名前では呼べないと言う尊敬を込めて言っているらしい。

何人かいる元帥のうち、赤松のような中佐に話をするのは桜庭ぐらいなものだろう。

他は大体忙しいので気にもしない。

「お前、マジで命知らずだな……。閣下を名前呼びとは」

「桜庭さんが元帥の立場を嫌っているんです。権力を振りかざして偉そうにするだけの古だぬきと一緒にされたくないって、言っていました」

周りに人がいないからと、七海は本当に命知らずな事を平気で言う。

仮にも中佐風情が、同じ元帥が言ったこととはいえ、罵倒に近い内容でも暴露する。

七海はそういう気遣いもしない。興味がないから。

血の気が失せる赤松は、周囲に聞かれてないか見回してからほっとしていた。

心臓が悪いから止めろと言われて、渋々止める。

プルタブを開けて、飲み始める七海に、同じくコーヒーを煽る赤松は、まあ良いと気をとりなおす。

「ま、お前が元気ならいいわ。一時期医者に運ばれたって聞いてたんで、心配してたんだ」

「ご心配おかけしました。ご覧の通り、あたしは大丈夫です」

律儀に心配してくれるとは、人のよい赤松。

素直に礼を言ってから、神妙になって七海に言い出した。

「……で、な。今回の会議だが……間違いなく荒れるぜ。前回以上に、確実に」
赤松は、そう言うので理由を訊ねる。

すると、納得の理由を、彼は教えてくれた。

「——俺達の同期の鎮守府が二つ、壊滅した。提督死亡、艦娘も全滅したんだそうだな。名前を聞けば、前線を支える中規模と、前線近くの小規模鎮守府。

その二つが壊滅した。その事で、皆対策を迫られると。

「何ですか？」

「……襲撃された。警備艦隊も皆殺しにしてから、ご丁寧にな。上位の深海棲艦が、此処のところ活性化してきている。比較的安定している海域にまで出沒しているんだ。不意打ちのようになる。一体居ればお前や俺の鎮守府の規模なら簡単に滅ぶだろうさ」

データは知っている。上位の深海棲艦。

鬼や姫の名前を冠する人型の化け物だ。

個体で圧倒的戦力を有しており、その性能は艦娘の倍以上。

一体で艦隊に匹敵すると言えば如何に怪物か分かりやすい。

七海も相手をしたことのない。相手にすれば、確実に負ける。「それは……看過出来ませんね」

成る程。そんな化け物の活性化とは確かに見逃せない。

七海も襲ってきたときの想定をしておいたほうが良さそうだ。

撃破は無理だろうから、追い払う程度のことでもいい。立地的に周囲に任せられた方が得策だろう。

「そういう事だ。お前も気張っていけよ。特に渋谷は、自分で戦うんだからな」
「肝に銘じておきましょう」

赤松の言葉に頷いて、七海は大本営に向かう。

数時間経過した頃。

その事態は、現実のものになる……。

七海不在の姫園鎮守府。

深夜の夜間警備。ある二名は、不審な影を捉えていた。

「……………」

軽巡、川内は電探に映った影を見た。

……妙な影だ。一人だけで、突っ立つようにポツンと佇んでいる。

此方も見つけているだろうに、攻撃を仕掛けない。ただ、停止している。

潜水艦に連絡。多分艦娘だ、と思う。

ここいらには、攻撃しない深海棲艦などいない。

夜間だろうが昼間だろうが、見つけたら即座に撃ってくる。

なら、迷いこんだ艦娘だろう。川内はそう判断して、近づいていった。

七海が居れば、不用意に近づくなと言うだろう。だが今は、代理を五十鈴がしている。

思い込み、先入観と言う慢心があった。

川内の報告を受けて、五十鈴はだったら保護しろと言ってしまおう。

これが、致命的判断であった。

こんな夜中に、果たして艦娘が個人で迷っている事案など有るのだろうか？

答えは数分後、明らかに。

その代償は、川内の身体に、降りかかることになるのであった。

翌日。七海はすつ飛んで帰ってきた。

珍しい焦燥の表情で、乱暴に執務室の扉を開く。

「五十鈴ッ!!」

血相を変えて、戻る七海を五十鈴は疲れ切った表情で見ている。

飛び込んできた七海は、五十鈴に聞いた。

「川内は、川内は無事ですか!？」

七海が聞くと、一命はとりとめたとだけ、五十鈴は語った。

七海は先ず、その事には安堵した。同時に、五十鈴に久々に怒鳴った。

本気の怒りで、五十鈴に掴みかかる。

「——五十鈴ッ!! あなたは仲間を殺すつもりですかっ!？」

一瞬で距離を詰めてきた。

残像すら見える速度で、荷物を放り投げて、胸ぐらを掴む。

自分よりも背丈のある五十鈴を軽々と持ち上げた。

苦しそうにしているが、五十鈴は抵抗しない。

……完全に五十鈴のミスだった。危うく、本当に仲間を失いかけた。

小さく呻き声をあげた五十鈴に、ハツと七海は我に返った。

慌てて離し、噓せる五十鈴を助け起こす。

「す、すいません五十鈴!! 大丈夫ですか!？」

「いいのよ、七海……。今は、あんたが正しい。怒って当たり前の失態を五十鈴は犯した。だから、素直に怒りなさい。怒るときに怒らない提督は、無能よ」

五十鈴は何とか立ち上がり、七海を諭す。

こういう場合は、必ず叱るべき。さもなければ同じ過ちを犯す。

自分だろうが、五十鈴はやるべきことは七海に教える。

無論、己の失態を恥ずべきことだと自覚する。

大丈夫。七海は甘い娘じゃない。こう言えば、確りと客観的に見るはず。

……七海は諭され、数分五十鈴をきつちり叱り、厳罰を与えるので今は状況を聞きに、救護室に向かう。

五十鈴も共にいく。起きたことを、端的に言おう。

——姫園鎮守府が、何者かに襲撃されたのだった。

救護室。ベッドの上で、包帯の川内が大騒ぎしていた。

痛々しい姿なのに、凄まじく興奮しているのだ。

「あれ……？　なんかピンピンしてる!？」

七海が駆けつけると、見守っていた……というか、話に巻き込まれていた由良や古鷹、衣笠がバカを見る目で川内を眺めている。

顔を出した七海に、急な戻りをお疲れ様とため息をついて皆で言う。

「おお、お帰り渋谷!!　ねえ、聞いて聞いて!!　私初めて本気で戦って勝てない相手がい
たよ!!　リベンジ、リベンジしたい!!　渋谷連れてって!!　もう一回、もう一回で活路
が見えそうなんだよ!!」

大興奮の川内は、楽しそうに騒いでいる。

啞然とする七海。確か、彼女……沈みかけた筈じゃ？

「ええ。死にかけたわ。でも何よりこのバカ、もう一回戦いたいつてずっと騒いでいる
の」

五十鈴は遠い目で語る。何が起きている。

死にかけて……喜ぶ変態がいる？

話を纏めよう。

先ず、昨晚……丁度、七海が留守の間に夜間警備に出ていた川内は、不審な影を見つけた。

人型で、呆然と立ち尽くす影は、攻撃を行わずに棒立ちしていた。

怪しんだ川内は、攻撃してこない相手を迷った艦娘と判断して、接近した。

お連れの潜水艦も警戒しながら近づき、保護しようとしたらしい。

そうしたら……。

「そうしたらソイツ、深海棲艦だったんだよ!! 可愛い女の子!! 幽霊みたいな娘でさ、めっちゃ強かった!! でも、めっちゃ楽しかった!!」

そう言うことは聞いてない。

川内は相手の容姿に驚いた。

土気色の肌をした白髪のスレーパー服の少女で、帽子をかぶり髪はサイドテールにしていた。

綺麗な夜の色の瞳をした、少女だった。

川内は、声をかけようとした相手に反射的に攻撃を仕掛けた。

深海棲艦だったのだ。ソイツは、幽霊のような深海棲艦。

壮絶な戦いになったそうさ。川内は夜間警備の装備で、なんと一人で撃退した。精々簡単な武装のみで、その相手を。

止めようとする潜水艦に、邪魔するなどハイテンションで言っつて、殴りあいを取行。結果、瀕死の重体になったが、刺し違える形で撃退に成功。

丸一日生死をさま迷って帰ってきたと言うのだが……。

「川内。あなた、独房入りです。三日間は出てこなくて宜しい」

「フアツ!? どうしてさ!?!」

プツツン、と目元に陰りを落とした七海が命令した。

通信記録も由良が黙って見せてくれた。

五十鈴は何度も撤退しろ、個人戦は止めろと命令しているのに川内は全部無視している。
る。

要するに一番悪いのは当事者のこのバカ。

五十鈴もGOサインを出したのは不味かったが、最大のミスは川内のスタンドプレー。

調子に乗って、一人で遊んでいたバカのせいだった。

「相手を追い払った事を吟味して、独房一週間で勘弁してやります。反省なさい」

「マジで!? いや、待ってよ!! 増えてるじゃん! そりゃないよ、折角の相手を!!」

何をほざいているのかこのくノ一。

もう許さない。七海は憲兵を呼び出して、直ぐ様回収させてしまった。

「ちよ、私怪我人!! 死にかけてた怪我人!!」

「自分のやったことでしょうが!! いい加減にしなさい!!」

とうとうキレた七海は、五十鈴の厳罰を川内に全部課した。

お前はこれから一週間昼間の仕事に変更。遅れたら蹴る、と脅した。

七海の蹴りの味を知っている川内は震え上がった。また、肋が砕けるような痛みを受ける。

ガタガタ震え出す川内を、死んだ目で憲兵は回収。独房にぶちこんでいった。

引き摺られていくくノ一を見送り、七海はブツツンしたまま由良たちに謝罪した。

「バカのお守り、お疲れ様でした。……後始末は、あたしがしますので」

目元に黒い影が入ったまま、七海は対策を考えることにした。

どうやら、早速問題が起きているようだった。

報告会で出ていた例の話。

大本営にも連絡すると、周囲の鎮守府にも通達をしておくといってくれた。どうやら、出たらしい。この海域にも。

「駆逐棲姫。それが、川内がブツ飛ばした相手の名前です。……上位の存在。姫と呼ばれる、深海棲艦の一種です」

七海は主要メンバーを集めて、緊急対策を練ると言つて、選んだ面子に声をかけた。

川内は喜んでいたが、相手は姫の一人、駆逐棲姫。

考えるに、不意打ちで先手を奪つたから死なずに済んだが、その気なら今頃川内は海の底だ。

勢いで勝つたに等しい。ノリと勢いは伊達じゃない。

姫の中では、比較的大人しいが同時に怒ると猛烈に反撃してくる。

川内のように、死にかけた程度なら御の字である。

「……」この皆は、姫の相手など想定しない海域です。規模からして、対抗できる手段はない。それが、大本営の結論でした」

七海は大本営の決定を告げる。

駆逐棲姫を相手するには、ここでは戦力が少なすぎる。

襲ってきたら、時間を稼いで応援を呼べ。そう言うこと。

その判断は正しい。だから、それでいいはず。

海域に侵入されたのも、不用意に近づいたのも失態と言えば失態だが、五十鈴は反省しているし、そもそも侵入は最近では多発している。

駆逐棲姫ならまだいい方らしく、下手すると戦艦やらが本土に近づくと場合もあるとか。

七海は資料を作りながら、小声で言った。

「まあ、もしも上位の戦艦が東京とかに万が一でも近づけば……桜庭元帥が戦いますけどね」

その名前を聞いて、全員が青ざめた。

従来型艦娘、戦艦大和。その持ち主、桜庭。

一度重い腰をあげれば、深海棲艦の支配する海域すら一人で制圧する異次元の化物。

称号とも言える通り名、『人類の最終兵器』と呼ばれる一人であり、世界でも最上位の存在。

それが、この国の要を守るのだ。攻めてきてもあそこは大丈夫だろう。

「大和さんですよね……。七海ちゃんの先生をしていたっていう」

「ええ。あの人に、余計な言葉はいりません。ただ、最強です」

七海はそんな女性に教導されていたのだ。

彼女の強さも納得がいく。

「桜庭元帥や、他にもあたしを含めた従来型艦娘だっているんです。この国は滅びません。寧ろ、桜庭元帥に勝てる深海棲艦が居るとすれば……ああ、これは言わなくても良いですね。脱線しました」

気になる言葉を残しつつ、七海は本題に戻った。

この主要メンバーを選んだ理由。それは。

「――駆逐棲姫を、殺します。皆さん、手伝ってください」

何と。七海は、駆逐棲姫を仕留めると言い出した。

できるはずがない、と直ぐ様反論するが。

「出来るんですよ。あたしは従来型艦娘、しかも現在オーバーフロー状態で、過剰な戦力を有するそうです。皆と協力すれば、駆逐棲姫ならなんとかなる……つばい」

妙な語尾を出しながら、一人ではないと七海は言った。

いわく、性能だけなら七海は力負けしないぐらいの強さはある。

ただ、安定して勝つには皆との連携が前提。

安全を確保するには、姫にはご退場願わないと。

面倒なお姫様は死んでいただくのだと、七海は断じる。

「……七海。誰も死なずに勝てるの?」

「勝てます。いいえ、勝たせます。その為のあたしです」

選ばれた一人、五十鈴が聞いた。

断言できるなら、手伝うと。七海は言い切った。

メンバーは、五十鈴、由良、山城、如月、古鷹。

大半が既に改二になっている。古鷹も直ぐに改装すると、七海は言った。

衣笠も一緒にして、次に備える。

「……なんで、私がいるんですか?」

山城が、七海に聞く。失敗ばかりの欠陥戦艦なのに、と自嘲する彼女。

七海は山城に辛い役目を任せると言うのだ。でも、山城しかできない役目。

「山城。あなたには、増設バルジを積んで、艦隊の目になって貰います。96式150cm探照灯を装備して、奴を照らして欲しいんですよ。あなたにしか、これは積めない大型装備。無論、一番狙われます。けど、それは戦艦でしか受け止められない楯として。あなたに、あたしたちの命を託すと言う意味です」

火力なんて必要ない。戦艦として、要するに言い方は悪いが囿を任せると言っている。

だが、山城の方が夜の戦いは得意と見て、七海は頼むのだ。
「……」

「出来ない、というなら代わりに砲撃になります。辞退は出来ませんよ。でも、託す以上は……必ず奴をあたしは殺す。誰も死なせない。……ソロモンの悪夢を、見くびらないでくださいな」

七海は自分がまえにでて、五十鈴たちに背中を任せると言うのだ。

作戦は夜間決行。夜のうちに殺す。昼間はどうせ隠れている。

七海は相手を殺すことに専念する。支援を任せたいと皆にお願いした。

「ええ。司令官のお願いなら、如月はやるわよ」

「了解致しました。古鷹、善処します」

「分かったわ。あなたの背中は、五十鈴がきっちり守ってあげる」

「任せて。由良の改二の強さ、証明してあげるわ」

山城以外は全員乗る気だった。

彼女が言うなら、助けよう。そういう気持ちはある。

山城はどうか？ 役目を受けるか、誰かに譲るか？

拒否以外で出来るとは。

迷う。勝てるというなら信じるが、自分にできるかどうか。

それが問題だった。でも。

(……信じるって、言ったじゃない)

七海を信じると自分で言った。

大丈夫。彼女も命がけでやっている。

寧ろ、守るのは山城の役目。戦艦らしい仕事ができる。

決意しろ。そう、自分に言い聞かせた。

「……分かりました。やってみます」

聴て、山城も頷いた。

七海が託すと言うならやってやる。

欠陥戦艦などとはもう言わせないぐらいの覚悟で挑む。

「頼みます。では、詳細を決めましょう」

微笑みながら、七海は作戦を立てる。

これが、決戦。七海が経験する、初の姫との戦いであった……。

月が綺麗な夜

(どうして……? どうして、攻撃するの?)

どうして皆襲ってくるの?

痛い。痛いから止めて。なにもしない。しないから、殺さないで。

(止めて……止めてって、言ってるでしょ!!)

まだだ。また、怒りが込み上げる。

ダメ……怒りに吞まれたら、また攻撃される。

感情に吞み込まれる……自分を見失うツ!!

(痛いじゃない……かつ!!)

痛い。痛い。心が、身体が。

傷つけないで。傷つけさせないで。

話を聞いて。お願い、言葉を聞いて。ねえ、お願い。

——わたしを……見て。

作戦を立てる姫園鎮守府。

近場の鎮守府では、討伐を無謀と言いながらも、だがやってくれるのならば出来る限りの支援をしようと言ってくれた。

どうやら、川内が追い出した駆逐棲姫は、近海をさまざましているようだ。夜間にはか現れない幽霊のような姫君。

目撃情報、交戦情報を資料に纏めて、七海は見比べる。

深夜。娘と妹を寝かしつけ、憲兵に声をかけて許可をもらい、書庫で調べていた。

おかしい。この情報は過去の物とは確実に異なる点がある。

七海は違和感を感じて、文献を片っ端から読み耽る。

憲兵にも聞いた。長年勤めるといふ最古参は。

「……成る程。確かに妙だ。姫が……何度も撃退だけで済ませているとなると。聞いたことのない事例だな。よし、少し待たせてくれ」

真面目に姫を殺すと告げると、憲兵は止めておけと言うが、同時に七海の言葉に納得してくれだ。

一度詰め所に戻ると、膨大な資料を持って、一度情報を洗い直してくれだ。案の定の展開だった。

「むう……。やはりな。最大でも、五回だ。それ以降は奴等は安全な海域なら間違いないく襲ってくる。これは、なんだ？ 何が起きている？ 提督、大本営には此方で伝えておく。これは危険な橋かもしれない。気を付けろよ」

書類を持って、慌てて夜遅くだというのに憲兵は連絡してくれると言う。

嫌われているとはいえ、真面目にやっているときはそれなりに向こうも対応してくれる。

互いにプロ。私情は持ち込まない。

七海が感じたこと。それは。

駆逐棲姫が、ずっと迎撃だけで逃げ回っている気がする。

姫ともあろうものが、この近海ですつと逃亡と迎撃を繰り返して逃げ回っている。

戦況を纏めよう。初回、姫園鎮守府の川内。

川内が先制攻撃。死闘を演じたのち、逃走。川内は瀕死。

次回。隣の警備の艦隊と衝突。大破させたのち、逃走。

傷を負っているのか、二日ほど確認できず。

それ以降。比較的近場で、何度も小規模な衝突を繰り返して、その都度止めをささず
に逃げた。

倒せる状況にも関わらず、倒さない。逃げる。

自分から、発見されても攻撃せずに、寧ろ近寄ってきているらしい。

川内の時も、川内が近寄るまでは逃げる素振りは無かったと独房の彼女は言っていた。
た。

攻撃の意思もない。自分から近づき、襲われると自衛して逃亡。

普通なら姫は自我を持ち、狡猾な方法で艦娘を殺しに来る。

大人しい駆逐棲姫と言えど、他の個体は反撃もするし、何より回数を重ねると自分か
ら襲ってくる。

だが、この個体は恐らくは同一だと思われる。同じ行動を続けている。

そして、おかしな事をずつとしているのは、何故だ。

(まるで……戦うことを望んでいないで、何かを此方に求めるような……)

七海は殺すつもりだ。だが、殺す前に……この奇妙な行動を説明せねば安全ではない。

初手を譲る可能性もある。後手で勝てる自信はない。

類似するケースを探すが、全く以て該当せず。

やはりおかしい。この個体は何がしたい？

過去の情報が通じぬ相手。厄介だ。

今日の夜も、警備に由良が出ている。万が一見つけたら襲わずに様子を見ろと命じた。

襲われたら直ぐに呼べとも言っている。

書庫で漁っていると、内線が鳴った。受けとると、夜勤の扶桑が慌てている。

「て、提督……由良さんから入電です！ 駆逐棲姫が、現れました!!」

(……早速戻ってきましたか)

呼んでもないのに現れる。

奴には帰巢本能でもあるのか。

七海は直ぐに向かうと命じて、万が一の待機を言っておいた彼女にも通達。

まだ、装備は整っていない。様子を見に、出よう。
駆け出す七海は、書庫を後にする……。

近海の夜。

今夜は、満月か。

近くの小島に避難している由良と合流する七海。

対象は小島の沖に佇んでいる。電探で監視する由良に無線を入れつつ、到着した。
待機していた如月と共に駆けつけた七海は、浜で海を睨む由良の背後から現れた。

反対側から遠回りして移動してきた。相手は、まだ動かない。

「由良、お疲れ様。……様子は？」

「全く動いてません。対象、依然沈黙しています」

月明かりの照らす静かな浜に、三人は集う。

大がかりな人数で来るとまた逃げる。そう踏んだ七海は最大練度の如月のみ連れてきた。

戦力としては多少心許ないが、由良もいる故に何とかする。

七海にも情報を共有する。……確かに沖に妙な影が佇んでいる。

これが、例の駆逐棲姫。幼い少女のような姿。

まるで艦娘だ。悲しそうに……立って、月を見上げている。

……この個体は足があるのか。

多くの駆逐棲姫は、足がないと聞くが……彼女は己の足を持っていた。

益々分からない。襲わない行動。見つけると寄ってくる理由。

全部、分からない。数分見ても微動だにしない。

「……どうするの、司令官」

如月が静かに問う。このままでは打開も出来ない。

戦うのはまだ、無謀だ。不意打ちをしても仕留めきれないとどうせ逃げ出す。

……だったら。かなり危険だが、試してみる価値はある。

「接近してみましよう。由良、如月。背中、任せます」

唯一、襲われても対処できる七海が接近して様子を見る。

襲ってきたら全力で抗って追い払う。

二人は心配しているが、情報が前例が無さすぎて不透明。

賭けに出る価値があると七海は思う。

少し離れた場所で、七海は停止した。

「こんばんは」

声が聞こえるほど、至近距離。

大した音量でもないが、耳が良いのか駆逐棲姫は反応した。

挨拶してみると、こちらを見る。

意外そうな表情だった。

「……………こんばんは」

そして、何と。喋った。ハッキリと聞こえる日本語で。

おかしい。やはりおかしい。

深海棲艦の言葉は、此方には理解できない片言だと書いてあった。

なのに、流暢に彼女は喋った。唾然とする由良と如月。

七海も驚くが、話を通じるなら丁度いい。

少し、殺しあう前に聞きたいことがある。

駆逐棲姫も戸惑うように、七海を見ている。

「意外ですね。言葉、通じるんですか。深海棲艦に」

「……………そつちこそ、わたしに話しかけるなんて、意外です……………はい」

問答無用に襲うのが普通だろう。

対話する方が異常なのだ。

七海はにこやかにしているが、駆逐棲姫はありありと警戒している。

「そうですか。で、うちの海域になにかご用で？　うちの軽巡を半殺しにしておいて」

暗に、以前戦った艦娘の仲間と言うと、駆逐棲姫は。

「だって……いきなり、襲ってくるから。なにもしてないのに、顔を見ただけで撃たれて

……」

成る程。彼女は自己防衛しただけと主張する。

確かに間違ってる。前は、川内が真つ先に手を出している。

駆逐棲姫は、けれど謝った。やり過ぎた、と。

益々意外な反応に二人は困惑する。何なのだこの深海棲艦。

「ふむ……。成る程。こちらの知る情報と違いは無いようですが、あなた……ここいら

の海で、襲われてませんか？」

「襲われています……。ただ、少し話をしたいだけなのに……向こうが、襲ってきて」

つまりは、予想通り同じ个体。放浪している駆逐棲姫。

話を聞いてほしいと、駆逐棲姫は七海に言った。

「信用できませんね。あなたとあたしは敵同士。根拠が欲しいのですが」

「……わたしは、深海棲艦じゃないです。艦娘なんです……。こんな姿してますけど」

……それは、意外を通り越して想定外の台詞だった。駆逐棲姫は言った。自らは艦娘。深海棲艦ではない。

人間の使う名詞を知る。当たり前のように正しく使う。

わざと、名詞を使わずに敢えて『敵』という言い回しをしたのに、彼女は知っている。艦娘、深海棲艦。その二つを。

深海棲艦が恐らくは知らないであろう単語を言つて、敵意はないと何度も説明する。由良たちはただ驚いて右往左往している。

「……良いでしょう。あたしの質問に正直に答えたら、考えます」

七海は至つて冷静だった。一応、彼女は深海棲艦ではないと言うのであれば。

先ず、聞きたいことがある。

「あなた、あたしが誰に見えますか？」

一つ聞いた。七海が一体、誰に見えるか。

真つ先に聞いたこの質問。七海なりの意味があつた。

もしも本当に艦娘なら、他の艦娘の名前ぐらい知つてるだろう。

誰でもいい。この場で如月と由良の名前は呼んでない。

深海棲艦で無いなら、艦娘の名前を知っているはずだ。

近いものでいいと言つてから、問いかける。

深海棲艦であるなら、きっと艦娘の名前は知らない。

姫程になると個人行動が多いと記されていた。

もしも騙していると想定するなら、この場で力尽くで三人とも殺せる。

騙す意味がないのだ。能力は相手の方が上。それに。

七海は考えるとは、言った。鎮守府に連れて帰るとは、言っていない。

この場で拠点である鎮守府を滅ぼす手立てはない。つまり、生かす理由がない。

彼女が本当に艦娘なら、言えるはず。

そして。

「……。あなたは夕立姉さんじゃ？」

駆逐棲姫は、訝しげに見ながら答えた。

夕立と、すっかり当てた。しかも、姉と呼んだ。

……これで、決定だ。

「宜しい。あたしは、信じましょう。では、あなたの名前と、所属する鎮守府は？ 建造

された日は、覚えていますか？ なるべく、詳細に答えてください」

信用すると言うと、二名は良いのかと聞く。

七海は振り返り、今の試した事を説明。

根拠も踏まえて言うと、納得はしてもらえた。

「……ありがとうございます。信じてくれて」

駆逐棲姫……いや、深海棲艦によく似た彼女は頭を下げる。

彼女は、改めて自己紹介をした。

「わたしは、白露型駆逐艦、春雨と申します。所属は……鎮守府、建造日は……です。訳あつてこの様な姿をしています。艦娘春雨です」

詳細に返答する彼女、春雨の言う話を通信で待っている扶桑に伝える。直ぐに確認を取れと。

夜間ゆえ、少々時間はかかるようだ。

「春雨……ああ、夕立の妹でしたね。そう言えば」

七海は、連絡がくるまで小島で休むからついてこいと春雨に言った。

一応言うことを聞いて、続く春雨。

七海は、軽くだけだが素性を示唆させる事を言った。

「夕立姉さん……？」

「ええ。普通なら、姉と呼ばれるのが当然でしょう。ですが、本当にあたしはあなたの知る姉ですか？」

「……少し、違います……。はい」

口調、表情、外見。そっくりだけどなにかが違う。

春雨も激変しているが、七海も大概であった。

島について、浜辺に腰を全員で下ろして、警戒を続ける二名を側において、春雨に事情を聞く。何があつたと。

すると。

彼女の話では、先日遠征のさなかに道中、空母棲姫に襲われて、壊滅した艦隊があつた。

春雨はそこで一度轟沈、即ち死んだはずなのに何故か海上を漂って生還していた。

そして、近くの鎮守府に助けを求めようと海の中を流されて移動。

立てるようになったのは最近で、それまでは足が痛くて動けなかった。

で、漸く立てるようになって、突っ立っていたら川内が近寄ってきた。

助かると声をかけようとして、襲われた。

で、逃げ出してさ迷った挙げ句に、何度も痛い目を見ながら戻っていた。

ここが一番安全だったから。

で、今に至る。

「あらら……。その話、確かめておきますので待っていて下さい。」

七海はそれまで、少し寝ておくと春雨に言った。

由良は駆逐棲姫がここにいるなら、警備に戻っていい。

如月が護衛を務めるので、任せて戻っていった。

春雨は礼を言つて、砂浜とはいえ、横になつて眠つてしまった。

相当疲れていたんだらう。直ぐに寝息を立てていた。

「……ふうん。司令官、意外と優しいのね？」

「何ですか如月。拗ねないで下さいよ」

妙に優しい態度の七海に、恋する如月は少し妬いていた。

じとつと、七海を横目で睨んだ。

七海も分かっている。

「無駄に戦わないのが一番ですからね」

と、如月に言つて、七海は空を見上げる。つられて如月も。

満月が綺麗な夜空。側には眠る駆逐棲姫こと、春雨。

何やら、またまた問題が起こりそうな波乱な予感がするのだった……。

追記。

春雨の言うことは全て事実であつた。

なので、連れて帰ってどうするか桜庭に相談してみた。

ナイス展開と大喜びの桜庭は、良い考えがあると言い出してきた。

希少な存在として大本営に直ぐ様回収され、後日……。

「……お、お世話になりますっ!!」

ガチガチの緊張した春雨、着任。駆逐棲姫の状態で。

異常はないと判断され、本人の強い希望で、姫園鎮守府に、なんと深海棲艦擬きの艦娘が仲間に入るのだった……。

春雨の着任後

——その話は、瞬く間に広がっていった。

バカが一名、姫クラスの深海棲艦と和解して、鎮守府に配属されたと。

命知らずの女子高生、渋谷七海。その人が、巷を騒がせる姫を配下に加えた。部分的にしかられない噂は、七海の悪評を更に肥大化させた。

とうとう、某提督よろしくの扱いで、裏切り者とすら言われる始末。

周囲も評価に、困惑しているが……。

「言わせておけばいいんですよ。勝手な妄想です」

「……あんたって奴は……」

そう。七海にこんなものは通じない。

こいつは頭がおかしいので、他人の評価には無関心。

正式に配属された春雨に何の文句があると、開き直っていた。

秘書、五十鈴は呆れていた。作戦を立てていたのに、七海は何と和解して連れてきたのだ。

本人が艦娘であるという証拠を提示した上で、翌朝混乱する彼女たちに当時、こう言った。

「し、深海棲艦!?!」

「艦娘です」

彼女の隣でビクビクしている春雨を一見して、皆は困惑した。

七海がとうとう錯乱したか、とも思ったが。

冷静に、書類と電子のデータを見せて、告げた。

「いや、どう見ても駆逐棲姫……」

「春雨です」

「……だから、姫」

「駆逐艦、春雨です」

何度聞いても艦娘の春雨、としか言わない。

五十鈴がふざけるなど怒っても、七海はずっと繰り返す。

艦娘。つまり、人間。手を出したら怒る。そういう態度で。

「あ、あの……わたし……」

「……喋った!? 聞き取れる言葉で!」

「……毎回そこなんですわ……」

で、春雨がしゃべりかけると驚いて飛び退く。

途方に暮れる白い春雨。これは、すれ違う訳である。

艦娘同士ですら、これだ。分かるわけではない。

大半が忌避的な反応を見せるのに、こいつは違った。

「ふはははは!! ここまで会ったが何とかだ!! 覚悟しろ、駆逐棲姫イツ!!」

リベンジを渴望していた川内だった。

突如執務室に乱入して、指示を待っている春雨を襲撃。

「きゃああああ!!」

悲鳴をあげて逃げ惑う春雨を追い回す忍者。

怖がつているのに、調子に乗っている。

尚、七海の前で仕出かしたのは大きな過ちだった。

無言で立ち上がり、

「こやー!!」

と叫んで割り込んで、手刀で川内を切り払う。

追い回していた川内のうなじに直撃して、

「ぐわー!？」

川内は断末魔の叫びをあげて倒れ、気絶した。

一撃必殺。無情な七海さんの折檻により、哀れ川内さんは一発失神。

某忍者漫画のように倒された。

「俳句は詠まなくて宜しい。介錯は済みました」

慈悲はない。冷たい視線の七海が下す、審判の厳罰。

「司令官さん!? あの、骨が折れたような音が聞こえましたが!？」

心配して助け起こす春雨。なんて優しい娘なのか。

白い肌が血の気が失せて真っ青だった。

まださん付けだった彼女に、この忍者は実は特殊な訓練を受けているので気にしないでいいと七海は適当に誤魔化す。

五十鈴は呆然と眺めていたが、春雨という艦娘は手元の証拠も含めて間違いないと判断した。

害意はない。無害な艦娘だと。

大体、殺すつもり七海が、何の保証もなく深海棲艦を連れ帰る訳がない。

七海を信頼するなら、特に問題はないと納得した。

フオローは、当事者の由良もしてくれましたので、割と直ぐに混乱は落ち着いた。

……艦娘の方は。

問題は憲兵が誤解して、七海を反逆罪で捕まえようとしたときは驚いたが。

一度真面目に捕まったが、これが何と桜庭元帥に伝わってしまった。

「……その憲兵。階級と氏名、今すぐ言いなさい。私の決定に歯向かったわね？」
キレたらしく、パニックを起こして捕まえた憲兵を呼び出して、クビにすると言い出した。

七海が緩衝材になり、そこまでしなくていいと抑えたおかげで難を逃れたが、それ以降憲兵に礼を言われて、謝罪もされた。

早とちりをしたのは向こうだ。

正式な命令を無視したとして、以後目をつけられているようだが。

で、大騒ぎにはなったが無事に解決。後日、改めて着任した春雨を七海は歓迎している。

周囲に三名、侍らせて。

「ええ……」

春雨は何かよくわからない。

着任した当日。執務室にて。

待っていた七海は、微笑んでいるが。

左腕には如月が嬉しそうに腕を組んで、右腕の裾を指先で摘まんでいる怖がついて
弥生、後ろには隠れて此方を警戒する姉妹の山風がいる。

どういふ関係なのか、七海に聞くと。

「如月は司令官のお嫁さんよ」

「えっ!?! この年でご結婚を!?!」

ツッコミはソコじゃない。

春雨もなんだかんだずれていた。

「してません。ただの……そう言えば何でしたっけ? それに迂闊に言い触らすなっ
ていつてるのに、何してるんですか如月」

曖昧な関係のまま、ここまで来ている。

その事に気づいたが、今はそれじゃない。

何が嫁か。嫁などいない。未婚である。

大体女性同士で結婚などできるか。

「だって……司令官は春雨さんには優しいし……。如月だって、妬いちゃうわ」
頬を膨らませてかわいらしい抗議をする如月。

七海は苦笑して謝り、宥める。

……つまりは、そういう関係らしい。恋人的な。人の色恋には色々あると春雨は流すことにした。

あと二名は……何だろうか。

「妹と娘です。弥生が妹、山風は娘」

「娘エ!？」

何を言っているのだこの司令官は。

言うに事欠いて娘と来た。実際、

「ま、ママに近寄るな……深海棲艦!!」

と、敵意剥き出しで唸る山風。隠れたままだが。

春雨の姉妹に当たるのだが……随分と警戒されていた。

弥生はある程度受け入れてくれたのか、何も言わないが……。

「あの、一応わたし……艦娘で……」

「……………」

「ええ……?」

ペーッと舌を出された。そして隠れる。

酷い対応であった。子供か。

春雨は困り果てるが、七海がそういうことをするなとたしなめて、改めて。

「周りが何を言おうが、あなたはうちの艦娘ですよ春雨。人間として、分け隔てなくあたしは接します。安心してください。ここは、あなたの帰る場所ですから」

先にいた鎮守府では死亡扱いで除籍。

戻る場所がない春雨は、せめて彼女ならばと思つて桜庭に懇願した。

結果、それは正解だったようだ。彼女はここに居ても良いといつてくれる。

(わたしは……ここに居られる……)

受け入れてくれる場所は少ないだろう。

この身は深海棲艦と言われても否定できない身体。

なのに七海は人間として扱うといつてくれる。

よい人であった。そう、春雨は思う。

疑い無く信じてくれる、数少ない提督。

姉の魂を宿すという彼女、七海と共に行こう。

春雨は決めた。受け入れられた彼女に報いる戦いをしよう。

話を聞いて、春雨を信じてくれた彼女のために。

そうして、着任した春雨だったが。

翌日、嫌な知らせが入る。ある提督の急な訪問だった。

当日の朝。いきなり、訪ねたいと言いついて出して連絡を寄越した。

「ひい!？」

「嫌……死にたくない、いやあ!!」

聞いていた弥生と山風がパニックに陥った。流石の七海も顔をしかめる。

だが、先方がどうしても言うのだ。邪険にあしらうのも感じが悪い。

七海は娘と妹を自称嫁に託して、誰にも近づくなと言って、通すことにした。

「七海ちゃん、由良も一緒に居ようか？」

「頼めますか。五十鈴には、皆を任せただけで」

艦娘たちが異様に警戒している。

当然だ。彼は、艦娘の天敵であり、嫌われるを通り越している。

由良が同席すると言うので無礼をするなどだけ言いつけて通した。

七海に、娘と妹を任せられた提督。

島村の急襲だった……。

「……………」

敵つい筋骨隆々の巨漢が、白い軍服を纏い、来客のソファアに深く腰かける。

手元には、桜庭が用意した正式な伝令の書類と、端末を見せている。

此度の噂の真意を確かめるべく、彼は無理を言つて来たらしい。

先程から、単刀直入に聞いて資料を拝見している。

「渋谷提督。此度の一件、私は気がかりがあるのだ。疑いたくはないが、貴様に寄越された資料を見せては頂けないだろうか？ 無論、元帥殿には話を通しておいた」

桜庭が事前に秘密に連絡をくれた。

怪しんでいる鬱陶しいハエがいるから、適当に相手して追いついていいと言われた。

桜庭は艦娘を擁護する派閥の筆頭。真逆の島村を快くは思わない。

だから、話を合わせて最悪追いついて良いと。後始末はしておくといつてくれたのだ。

七海はその辺は全く興味がないので、嫌そうに見ている由良を尻目に、考え事をしな

がら待つていた。

数分かけて、押し掛けてきた島村はゆっくりと顔をあげた。

「……ふむ。やはり、思っていた通りだ。渋谷提督は筋を通してしている。ありがとう、これで疑惑は晴れた」

何やら不愉快そうに、七海ではなく違う相手に対しての怒りを浮かべていた。

何事か一応聞くと。

「此度の一件、周囲のバカ共が貴様を……いや、流石にこの呼び方は失礼だったな。貴女を疑っていたのだ。私はそれを確かめに来た。妙な事をして、深海棲艦を大本営に認めさせたのではないかと。裏があると云っている者が多くてな。私はその代表として来たのだが。……何と愚かな。元帥殿の厳命を受けての任務に、奴等は何を言い出すのかと思えば……渋谷提督を、人類の裏切り者だ?! 敵に国を売った売国奴だ?! ふざけるんじゃないツ!!」

拳を作り、大声をあげて机を乱暴に殴った。初めて見る、島村の怒り。

それは、七海ではなく。七海を疑った、多くの提督たちへだった。

「何という侮辱ツ!! 何という恥知らずツ!! 命を懸けて戦場に出る防人を奴等は後ろ指を指して陰で嘲笑ったのだ!! 許せぬ……私は、情けなさよりも怒りが沸いてくる!

渋谷提督に対して、言うに事欠いて売国奴!! ああ、心底腹が立つ!! 渋谷提督よ、こ

の一件、当事者には動きにくからう。頼む、私に任せてもらえぬか!? 貴女を侮辱した者を、野放しには出来ぬ!! 我慢ならん、全員裁きを下さねば筋が通らないツ!!」
何やら完全にご立腹で、怒り狂っていた。

ポカンとする由良に、七海はどうでもよきそうに何を怒っているのか理解できない。
「……何か、お気に障りましたか?」

一応理由を尋ねておく。七海は周囲に関心がないから、自分が陰口を言われても気にならない。

普通は、島村のような反応をするのが当たり前なのだ。

落ち着くようにたしなめる。彼は、深呼吸をしてから、声を荒くした事を謝罪した。

そして、異なることも詫びを入れた。

「私はな、渋谷提督。偉そうに言っておきながら、貴女を見くびっていたようだ。深く、お詫び申し上げます。型破りな者を忌避する風潮の国とはいえ、前代未聞の姫との和解という、偉業を達成した貴女を、微塵でも疑ったことを強く恥じている。自分に真似できない事を、妬んでいたのだろう。己が情けない」

資料には、春雨が艦娘であることは余計な混乱を招くとして秘してある。

島村の視点では、七海はその辺にいる駆逐棲姫と和解した様に見える。

成る程、確かに島村も疑うわけだ。

七海は客観的に考えて仕方無いと言うのだが。

「貴女も防人の一人であり、同胞であると言うのに……何故、嫉妬などという見苦しい感情を見せてしまったのか。私は、貴女に何度詫びを入れても許されない事をした。だから、償いをさせてほしい。奴等の始末は、私が引き受けたい」

「……お願いしても良いのですか？」

「ああ。任せてほしい。私の全力で、貴女への侮辱をしたものを、地獄に叩き落として後悔させて見せようぞ!!」

何やら自分を許せないようで、面倒なことを片付けてくれると言うので頼んでおいた。

彼は大船に乗ったつもりで待っていてくれと豪語する。

そんな大事なのだろうか？ 七海は興味すらないが。

「然し……渋谷提督。まさに、貴女は枠に囚われない自由な戦いをするのだな。素晴らしい才能だ」

そして、うってかわって上機嫌、自分のことのように七海を誉めだした。

何がしたいのか。何しに来たのかこのハゲ、と内心七海は思う。

由良も聞きあきたような表情で見えていた。

鬱陶しいので早く帰れと思うが、島村は聞いてもいない事まで喋り出す。

「貴女にも戦う理由はきつと、あるのだろう。私もそうだ。私はこの国が好きだ。この国の全てを愛していると言っている」

……不意に。気になる事を言い出した。

この国の全て？ それは、どういう意味か。

七海は少し掘り下げてみた。島村という男の価値観に興味が出たのだ。すると。

「……強いていうなら、感謝だ。私という男の人生は、この国……否。人々、文化、歴史。それらの積み重ねによって、育まれた物だと自負している。私の知らぬ先人が懸命に重ねてきた物が、今日の私という男の全てを司ると思うのだよ。感謝、その一言で言えば済むのだが……語れば止まらないゆえ、簡単に纏めるが。それらを蹂躪する破壊の化身から、この国を守るのが、私の生きる意味であると断言できるとも」

……納得した。七海は、彼の流儀を何となく悟った。

彼は、沢山のモノに対して恩義を感じているのか。

けれど、その恩義には、艦娘は入らない。文化や歴史を愛すると言った。

だが、艦娘は愛する文化でも無ければ、歴史でもない。

人類が戦うべくして編み出した、歴史を模倣した武器に過ぎない。

艦娘は所詮、彼の定義する護るものではない。国防の対象ではないらしい。

艦娘は、彼の後ろにはない。彼の後ろにある物が、命を懸けて彼が守るもの。その前にある艦娘は、ただの消耗品という認識か。

(……至極真つ当な言い分ですね。理屈も通っている)

国土を防衛するとは、その国の全てを守ること。

彼の言いたいことは理解した。共感も同調もしないが。

だが、七海の思っていた以上に彼はごく当たり前の倫理を持つ人間であつた。

七海から見れば、マトモな人間。異常なのは、七海の方だ。

彼は七海のやったことを、否定はしなかつた。

それが、国のためになるなら受け入れるという柔軟な対応をした。

それをしないで、先入観だけで陰口を叩く奴等を許せないと言うのだ。

(意外と……この人は、悪い人ではないですねやはり)

七海も島村を軽蔑しないので、価値観は似ているのかもしれない。

但し、島村は国防に命を懸けているが、七海は自分のもの以外は全くどうでもいい人間であつたが。

それを知らない島村は、真相を知って去っていった。由良は疲れていたが、七海は得るものがあつた。

島村提督。あの人も、七海よりはずっとマトモで、普通の人。

一種の基準にしようと、思うのだった……。

眞実は闇の中

一悶着あつた春雨事件。

平和になつた鎮守府は、穏やかな日々を過ごしていく……。

「……………」

「——七海いいいいいい!?!」

訳がなかつた。

さて、今回の事件は。

七海の友人、赤松提督が提供してくれたネタである。

ここで問題。彼の嫁は誰でしょう？

答えは、金剛さんと榛名さん。

で、この二名、姉妹にとんでもない奴がいるつてご存じだろうか？

なに？ シスコンのやベー奴とインテリヤクザしか知らない？

今眼鏡の美女がそっちに試製46cm持って向かったから早く逃げたほうが懸命だ
と思う。

今回は……まあ、あれだ。

シスコンの方だ。これで大体察して欲しい。

そういうことであつた。

まず最初は、赤松提督からの一報だつた。

助けてくれ、死ぬというSOS。

マジでヤバそうだったので、取り敢えず七海は冷静に自分のところの憲兵に通報。

それを通じてそっちの憲兵が助けに向かうも、翌日に再びきたSOSで聞けばまさかの全滅。

「!？」

鍛えに鍛えた憲兵が全滅と聞いて流石に七海も絶句した。

何事か聞くも、連絡をしている最中、常に赤松は絶え絶えで、窮地においこまれていた。

逃げ回っている、援護を頼むと言って、乱暴に切られた。

(……まさか、テロ!?)

七海は赤松の言動に最悪なシナリオを思い浮かべた。

民間による鎮守府へのテロリズム。考えにくいだが、あるいは艦娘による暴動。

赤松の人柄からして後者は有り得ない。ならば、テロだ。

深呼吸して七海は直ぐ様桜庭に直通の連絡を入れる。

何かあったときの非常用回線。驚いた桜庭が出て、七海は用件を伝える。

赤松の鎮守府で何かあった。本人が危険な状態と思われる。

此方にSOSが来ているがどうしよう。憲兵も全滅したらしい。

(全滅? 陸の連中がテロに負けるわけないし……まさか。嘘でしょ、相手は中佐よ!?)

あいつらが動き出した!? 盲点だったわ……低い階級まで狙うとか、見境がありやし

ない! 本当に厄介ね奴等は!!)

何か思い当たる節があったのか、桜庭も焦りだした。

詳しくは機密故に言えないが、元帥クラスが動揺する事案。

これは、なにか不味いことが起きている。

国家の危機、と七海ですらパニックに陥って、慌てだした。

所詮子供で、国家の危機となればおかしくても右往左往する。

「お、落ち着きなさい七海!! 大和さんなら大丈夫だつて!!」

「……………どうすれば? あたしはどうすれば……………!」

「ちよ、七海ちゃんそれはダメ!! 他の元帥さんたちに連絡したら余計に広がっちゃうわ!!」

高速で思考を巡らせて、必死に打開しようと考えていたが、解決案は見出せずパニックした。

兎に角数で攻めると片っ端から行動する暴走状態の七海を、五十鈴と由良がまたも止める。

桜庭が自分で現場に向かうと、なんと出撃していった。

で、数時間経過して。

「渋谷さん……………危険だから、来ちゃダメ……………。死んじゃう、わ……………」

と、お前は来る的なメッソージが七海に届いた。

それ以降、連絡がつかない。桜庭が、負けたようだった。

七海は最も信頼する彼女の敗北に、完全に暴走を開始した。

(桜庭さんが負けた……………!!? 何に、何に負けたのですか!?! 桜庭さんですら危険つて!?)

自分が第一人者だからといって気負い、理性の余裕が全部消えた。

人類の切り札の一人が、中佐の鎮守府に向かい、敗北するという理解できない現状。

自分の国が本格的に危機的と思つて、七海は信頼できる提督たちに連絡を強硬。

思考が止まらずに、動ける全員で対処するという相談の意味を履き違えて拡散してしまつた。

大事になつた騒ぎは留まることを知らず。

最強の艦娘ですら負けたという言葉に、こうしちや居られないと大勢の連中が押し掛けていく。

「あ、バカ!! 七海何してるの!?!」

気づいた五十鈴が受話器を引つたくる前に、電話した相手が悪かつた。

「元帥殿が倒された!?! これは非常時か……!! 分かつた、私も赤松提督の鎮守府に至急向かう!! なに、テロには負けんよ! これでも鍛えに鍛えたこの肉体、テロごときでは倒れん!!」

愛国者、島村提督。こういう場合は信頼できる。

頼もしい言葉と共に、赤松提督の鎮守府にハゲも向かう。

七海が無駄に広げてしまつた。

「ああああああああ!?! 手遅れになつちやつてる!?!」

由良が真っ青になって絶叫した。

七海が拡散させて、何と20名近くの提督が、お連れの艦娘と憲兵を携え向かいだした。

挙げ句には一部陸軍の憲兵をも巻き込んで、大勢が決戦のごとく雪崩れ込む。

「あたしも行かないと……!!」

「お願いだから落ち着いて七海!! あんたでも無理だつてば!!」

結局自分も向かうと言い出して、突撃しようとする。

由良だけじゃ足りなくなり、仕舞いには……。

「落ち着くんだけ七海!! 分かった、みんなわかってるから!!」

「七海さん、冷静になって!!」

「一人で対応は無理だつてば!! 衣笠さんも一緒にいく!!」

「……こういうときぐらい、役に立たなきや」

「気張つてないで山城さん、鈴谷と一緒になみなみん止めるの手伝つて!」

最近落ち込み気味だった響、強くなった古鷹と衣笠、気張っている山城に鈴谷。

羽黒や飛鷹も手伝って、全員で抑えている。

「ママ……? どうしたの?」

「何かあった、七海姉?」

「司令官、事件でもあった？」

「何事でしょうか!？」

山風、弥生、如月、何時しか一緒に世話されている春雨も様子を見にきた。

で、緊急事態と聞いて、此方もパニクる。連鎖する恐慌状態。

「あたしも行くんですよー!!」

理屈すらすつ飛ばして、関係のある人間が危険だと知り、七海だつて助けに行く。

理由を無理矢理にあげるなら、あとで助けを求められて起きながら見殺しにした人殺し、なんて言われたくないから。

出来ることがあるならやっておけば言われぬ、という判断。

で、来るなどいうのに突撃していく。安否すら不明ならば、誰かが行かねば全滅のま。

七海が助けると言われたのだ。だから赤松を助けに行く。

「うらー……うらー!!」

ロシア語と日本語の混ざった雄叫びをあげて、まさかの全員を蹴散らした。

出ていこうとするのを、全員で押し潰して押さえていたのに、気合いで吹っ飛ばしたのだ。

「きゃー!？」

全員倒れて、放たれる暴走危険生物。

案の定、執務を押し付けて逃げ出した!!

「待ちなさいこらー!!」

五十鈴が真っ先に復活して直ぐ様追いかけた。

彼女、いつの間にか荷物を準備して、知らせてあった憲兵の車に飛び乗りやがった。

予め、助けてと言っておいたようだ。一大事と憲兵も協力的なのが悪化の原因。

あと、四人は反射的に七海を追いかけて一緒に移動、五十鈴とギリギリ追い付いた由良と何故か山城が搭乗。

取り敢えず、全速力で向かっていったのだった……。

車で大体三時間。

高速道路をかつ飛ばして、慌てて彼の鎮守府に到着。

すると……。

「ぐはっ!!?」

車を降りた途端に、七海が悲鳴をあげて倒れた。

鼻を摘んでもがいている。

「うえ……？　なにこの臭い？」

五十鈴も降りた途端に感じる異臭に、顔をしかめる。

強烈な刺激臭。生ゴミが腐った臭いに、目が痛くなるような感覚。

艦娘はこれで済むが。最後に降りた運転手の憲兵が呟く。

「……この臭い、まさか遅効性の毒ガスか!？」

いわく、艦娘は辛うじて大丈夫だろうが、人間はアウトの毒ガスの臭いに似ている。

非常時の装備で一名分のガスマスクがあるので、憲兵がそれを直ぐに装着。

「このご時世にバイオテロとは……。皆、これは非常時だ。攻撃を許可する。渋谷提督、

大丈夫か……？」

中はまだ誰かが居るかもしれない。戦うことを憲兵が代わりに許した。

七海は涙を浮かべて何とか起き上がる。

「……ギリギリ生きてます」

七海は艦娘になったせいで、未だに刺激臭が弱点のひとつ。

特に沈丁花の匂いは一発アウトで、今でも失神する程だ。

気分は悪そうだが、戦えそうだ。

周囲に漂う、毒ガスと思われる臭い。

鎮守府内部はもっと危険だろう。
彼らは、慎重に中に向かっていった……。

(……死屍累々ですか)

建物の中身は、地獄だった。

沢山の艦娘と提督らしき人物が倒れている。

廊下で、玄関で、階段で、室内で。

至る所で白目を剥いて、口から泡を吹き出して倒れる人々。

窓が開いているので、これが広がっている原因と思われる。

辛うじて生きているので、山城や由良が、救助を続けている。

救急車も呼んでいるが、人数が多すぎる。一体、なにが起きているのか……。

知っている面々も転がっていた。内部を調べる彼女たち。

異臭はずっと続いている。七海は強烈な頭痛を起こして頭を押さえている。

「ママ……あたし、苦しい」

「弥生も……辛い、です……」

「一度戻った方が良くない？ 如月も、目眩が……」
娘、妹、自称嫁が体調不良を訴えている。

それぞれ偏頭痛、耳鳴り、目眩。症状が違うようだ。
春雨だけが、けろっとしてる。

「わたしは、何とも無いんですけど……。甘い匂いが充満してて、胸焼けはしますが……」

どうも、彼女だけは感覚が違うらしい。

春雨は特別なので仕方ない。

「吐き気が酷いわ……。凄まじい悪臭ね、本当に……」

憲兵に向こうの搜索を任せて、保護者の五十鈴もフラフラしていた。

広範囲の毒ガス攻撃。放っているものは果たしてなんだ。

こうも継続しているなら、本体が必ずあるはずだ。

それを探そうと思う。七海はもう少し付き合って貰うことにした。

暫く歩き、次々顔見知りを見かけては外に連れ出す。

島村提督もいた。何故か上半身素っ裸で、筋骨逞しい肉体美を披露するのはいい。

此方も白目を向いて気絶している。死んではいけない。

だが、激しく争ったようなポロポロの軍服をきていた。犯人と果敢に戦ったのか。

「素直に、今回は称賛するわ、筋肉達磨……」

五十鈴は彼を引きずり出して、放置しながら呟いた。

彼も解決に向かって戦った勇者。素直にこういう場合は称賛すべきだ。

二階にあがると、執務室に向かう廊下で桜庭も見つけた。

彼女の場合は、やめるんじやねえ的なポーズで気を失い、指先で方向を示している。

その方向は、どうやら執務室ではない。

執務室は、彼女の倒れる廊下の角を曲がった所だ。

異臭は、真っ直ぐ続くほうから濃厚に漂っている。

「あ、良い匂いがしますね。向こうからですよ、司令」

区別のため、七海を司令と呼ぶ春雨が、指差した方向から強い臭いがすると言った。

この頃には、春雨以外全員がグロッキーで、死にかけていた。

特に七海は、三人を引き摺っているので殆ど無言だった。

娘も妹も自称嫁も気絶寸前。五十鈴も意識が朦朧としていた。

「なんで春雨は平気なのかしら……？」

寧ろ活性化している気がするのだが。

五十鈴がぼやくが、ついていく。

元氣な春雨が今回、意外な役に立つのだった……。

彼女が辿ったのは、なぜか厨房のある食堂だった。

そこで漸く赤松を発見した。彼はテーブルに突っ伏し死んでいる。

換気をしてないので一段と強烈な臭いを中和するべく、春雨が窓を開けて換気。

入れるレベルまで薄まってから入室。調査開始。

ここで三人が脱落して、気を失った。長椅子に丁寧に横たえて、五十鈴と七海で続けるが。

死体が何人かいるだけだ。全員廊下に出してから、探していると。

「司令!! 見つけました!! 多分、臭いの元はこれです!!」

春雨が、厨房から七海を呼ぶ。

ゾンビのような足取りで向かうと、厨房にも誰かが倒れていた。

タイル張りの床には、駆逐艦磯風とこの雷、そして……戦艦比叡が、ぶっ倒れていた。

大きなガスコンロの上に、巨大な鍋が置いてあり、一際悪臭を放っているようだった。

春雨は、この鍋の中から臭いがすると言うのだが……。

換気扇も回ったまま、何日も放置されているのか、艦娘たちは反応しない。

一応助け起こして退かし、七海が代表で蓋のない中身を調べる。
すると……。

——中身は、暗黒物質だった。

原型？

そんなものあるのか聞きたいぐらいの、ぶよぶよした物体が中で加熱されてないのに
も関わらず、煮えている。

ぼこぼこたぎるそれを見下ろした七海は戦慄した。

で、覗きこみ臭いをもろに吸い込んだ。

で、脳が命を守るべく、意識をシャットアウト。

そのまま、後ろに倒れこんだ。

「七海いいいいいい!?!」

慌てて五十鈴が受け止めたのはいいが、数分後。

五十鈴も同じ目にあうのを、まだ誰も知らない……。

後日。

この謎の大騒ぎは、海軍黒歴史として認定。

関わった全員に籍口令が敷かれたため、原因は不明のまま。

一説によると、戦艦比叡の作り出した新手のバイオ兵器の試作品ではないかと言われているが、真実は誰も知れない、嫌な事件だった……。

迷う駆逐艦

(……強くなりたい)

そう、思っているのは認めよう。

強くなりたい。皆を、守れる力が欲しい。

けれど、世の中にはリスクを伴うのは当たり前。

どうすればいい？ みんなが当然に出来る権利を、彼女は受けられない。

恩恵を貰えないこの身体は、どうすればいいのだ。

覚悟か？ 覚悟さえあれば、彼女は強くなれる。でもそれは、捨てがたい物で。

諦められる程、安いものでもない。

(私は……信頼に応えたいだけなんだ)

皆と戦う。でも、最近は置いていかれる。

姉妹の中で唯一、追い付けない。

心配してくれる心遣いが苦しい。

気遣われていて。足手纏いになっている。

(教えてくれ、七海……。私はどうすればいい?)

選ぶしかないのに。

どちらが正解なのか、自分でも見失った。

駆逐艦、響の悩み。

それは、守りたいモノと引き換えの向こう側。

先にあるモノとの、等価交換だった……。

暁型姉妹次女、響。

クールで冷静、姉妹の中で最も大人びた性格の艦娘。

恐らくは皆の中で一番七海に近いと思われる。

思うだけ。七海は、何を考えているかももう分からない。

彼女は変わった。変わってしまった。

常に微笑を浮かべて、周囲には四人に増えた艦娘を待らせている。

娘に妹、一名不明に一名深海棲艦……いや、最近は個性をつけるとか言い出した七海によりメイド化している。

本人は嫌だと言って逃げ回っていたが、捕獲されて改造を受けた。主に衣装の。

結果……。

「暖かくなつたとはいえ、ヘソを見せているような破廉恥な格好は許しません。メイド服を着なさい春雨」

「何ですか!! 横暴ですよ!! 大体どこで入手したんですこのクラシックなメイド服は!!」

「似合うでしょ? 手縫いです」

「手縫い!?!」

メイドになれと言われた哀れな春雨は、拒否権を奪われて渋々従っている。

どうも、七海には恩義を感じるので強くは出られないらしい。

嫌なものは嫌と言っても良いだろうに。ひどい話だ。

なので完全に我が世の春を謳歌している。

(七海はただの変態だったのか……)

嬉しそうに日々、四名とイチャイチャしている。

更には皆ともそれなりにうまくやろうとしているようで。

慣れてきた周囲も、おっかなびつくり受け入れるようにはなってきた。

初期のような、敵対の意思や軽視の意識も消えている。

改善したのだろう。改善は。

(……笑顔の仮面で、何を考えているか悟らせないようにしていないか?)

だが、響は違う。より、彼女が理解できなくなった。

笑っているせいで表情は固定。行動原理は全くの不透明。

理屈で動いているのは多分同じ。そこに、突発的な感情論が入り始めた。

唐突に飛び出していく。唐突に何かを始める。

そういう、瞬間的な言動が見えているのだ。

暴走。まさに、今の七海は暴走している。常にだ。

響はそれが怖い。誰にも、本人すら制御できない行動をどう予測しろと。

カバーしている五十鈴などを見れば分かる。とぼちりと後始末の連続だ。

七海は悪意などないだろう。善意がノンストップで走り回り、周囲を巻き込んで自爆する。

しかも、自分を蔑ろにしている気がするのはいかのせいかな?

この間の原付との衝突も然り。自分を犠牲にするのを是として、動いている。

(誰も言わない。気づいていないのか……?)

気付いていないのか、日々の喧騒で指摘できないのか。

どのみち、今の七海は分らない。表情は変わらず、行動は適当で。

(ダメだ。今の私は、どうにも七海を受け入れる事が出来そうにないよ)

困惑したまま、どう彼女と接すればいいのか。

強いていうなら、分からないから信じられない。

聞けば答えてくれるだろう。だが、その言葉に偽りはないと言い切れるか？

疑心暗鬼になりすぎだ。被害妄想にも程がある。

どうして、ここまで七海を悪く思えるのか。我ながら、自分が情けない。

彼女が何をしたというのか。何もしていない。

悪いことは、何も。良かれと思つての行動が、裏目に出るだけと言うか。

結果的に伴わないだけだ。七海はいつもそうだろう。

(私は……本当に最低だな)

自分が理解できない相手を悪く思い、自分を正当化する。

己でもここまで矮小な性格だとは思わなかった。

こういうことだ。結局、響は今の七海を受け入れない。

あの変化は危険だと思うから、巻き添えは嫌だと思つている。保身するのも、正直言うと怖いから。

七海の言動は、信じてくれていいのか。

自分達を信じているか、示してくれない。

自分だけの自己完結でやっている。他人の意見は後回し。

聞いても活かされるのは次回以降。

響たちを、本当はどう思っているんだらうか？

(……何も、彼女は言わないからね)

そう。行動が極端すぎて分かりにくい。

そのくせ、肝心なこととは言わない。

いや、響に言わないだけか。響自身が、七海を敬遠している。

遠ざけているせいで、疎遠になっていた。

そんな状態の癖に、七海にすがろうとしている。

嗚呼、嫌だ。また、七海が悪いことが前提になっている。

(この繰り返し。自分が嫌になる……)

自己嫌悪のスパイラル。終わらない負の連鎖。

自分は悪くない。あの言動の七海が悪い。

そうやって、自分がおかしいのではないと思いつけて。

響は、結局何なのだ。この決断を、七海にするのかしないのか。

最終的な決定権を七海が持つ。彼女が強ければ抵抗できない。

ハツキリしろ、響。お前は、彼女を信頼するのか、しないのか!?

(……ごめんささい、七海。私は、君を信頼できない)

出来ないから、このままでいい。

そうやって、周囲に負担をかけて、責任は七海に押し付ける。

お前はそうやって、七海に全部自分の所業の理由を使うのだ。

彼女が悪い。七海はおかしい。七海は、狂っている。

そう思っているんだろう!?

(……ごめんささい)

謝っても、主張は曲げない。そういう艦娘だものな、響は。

そんな奴が、よくもまあ『信頼』の名を継ぎたいと言えるものだ。

烏滸がましい。自分を振り返ってから何かを言え。

お前は、卑怯な奴なのだ。卑劣な奴なのだ。

恥を知れ、この艦娘の屑が!!

……と、自分が自分を責めてくる。

頭がぐちゃぐちゃする。何だか、苦しいのも感じなくなってきた。

何時までこの状態なのだろう。誰に言えればいい？ どう説明すればいい？

響は言わない。言えない。言葉にできる気がしない。

簡単に言えば。

響は、いつぞやの七海と同じ状況に陥っていたのだった……。

「……」

そして。

響は、大きな間違いを犯していた。

今の七海に、下手に悩みがある素振りなどしない方がいい。

山城の一件で分かっていたのに、余裕のない彼女は気付けなかった。

何時でもどこでも、響の後ろに這いよる変態。

渋谷七海です、と言わんばかりに魔の手を伸ばしていく……。

響は悩む。何時しか何時も以上に孤独を好むようになっていた。

一人の方が気楽でいい。周囲に気遣いをされずにすむ。

今日も夜遅く、姉妹たちは風呂に入っている最中、誘われても適当に断った。

後で一人で入ろう、と食堂で長椅子に座って、虚空を見上げてぼうつとしていた。

時間を潰す。時計を眺めて、終わるまで。

ずっとそうしているつもりだった。

なのに。

「はあい、響イ……」

「きゃあああああああ!?!」

テーブルの下から、声がした。

ねっとりした、気持ち悪い声だった。

見下げれば、椅子とテーブルの間。

丁度、足を入れている部分に何故か七海が見上げてニヤつと笑っていた。

思わず悲鳴をあげて、椅子から転げ落ちた。

スカートの側から見つめる顔は正にホラー。

慌てて起き上がる。テーブルの下の司令官様は笑っている。

「七海、何してるんだ!? 驚かさないでよ!!」

クールな響にしては珍しく、顔を真っ赤にして怒った。

のそのそ出てきた七海も立ち上がってしれつと言った。

「いえ。集団行動をしなくなっただけというあなたにサプライズを」

「サプライズでテーブルの下に潜む奴がどこにいる!? 変態か!」

聞き付けてきたか、感付いたか。七海はどうも知っているらしい。

響は何でもない、と誤魔化して去ろうとするも。

「逃がしません。カモン、春雨イド」

パチンと指を鳴らす。

すると、何処からともなく春雨メイドが参戦。

呆然とする響をカウボーイよろしく縄で捕獲した。

「春雨!? 何をしているんだ!? 離してよ!!」

「うう……ごめんなさい響さん。メイドはご主人様に歯向かえないんです……」

泣く泣く捕まえた春雨は、そのまま引き摺っていく。

倒されて転がる響。抵抗虚しく回収される。

「七海、君って女は!! 春雨に何をさせているんだ!!」

「喧しい。春雨イドはあたしのメイド。可愛がるも愛でるもあたしの勝手」

「一緒じゃないか!! 春雨の人権は!」

「あ、別に嫌じゃないですよ? 何て言うか、求められて認めてもらえる喜びがありますので」

「春雨!?! 七海に洗脳されてないか!?!」

この変態、春雨にメイドプレイを強要した挙げ句に洗脳していた。

じゃあ何であんな泣きそうに、と聞かれると。

「カウボーイじゃないんです……。わたしはメイドなんです」

「そこ!?! 悲しいのはそこなのかい!?!」

春雨は丁寧なメイドとして重用されている環境が嬉しいようだ。

この辺の変化は追々説明するとして。

まあ、兎に角。

「カモン、春雨イド。続きなさい。入浴タイムです」

「はい、司令……:じゃなくて、ご主人様」

呼び方まで変えていた。

三人は移動する。お風呂に入るので。

「止めてえええええ!! 私の話聞いてえええええ!!」

悲痛な訴えを、食堂で仕込みをしていた間宮は聞いていた。

七海が先んじて許可をもらったのはこういう意味だったのか、と今さら理解していた。

因みに、執務室にも小さいが風呂はある。

主に提督が忙しい時に使う簡素な物だが。

「春雨イド。髪を見せなさい。洗いましょう」

「いいんですか？　ありがとうございます」

で、湯槽に放り込まれた不貞腐れる響を横目に、目をつむる春雨の髪を洗う七海。

狭い風呂場だが、一遍に三人ぐらいなら余裕で入れるぐらい浴槽は大きい。

代わりに洗いは狭いようだが。

優しく、慣れた手付きで洗っていく七海を、響は思う。

皆で慣れていたんだろう。手慣れているようだ。

春雨は色々貧相だが……七海は体格すら変化したので、以前ほどではない。

寧ろ年頃の体つきになっていた。響は……お察しください。

「なんで私まで……」

「あなたが迷っているからでしょう。いい加減、改装の事で迷っても仕方ないでしょうに」

「……気づいていたの？」

七海はシャワーを浴びせながら言った。

響の悩み。それは、己の改装のこと。

響はその成り立ち故に、最終改装で姿が変わる。

ヴェールヌイ。そう、名前すら変化して、別人になる。

普通ならばこうはならない。響特有の仕様だ。

響は特別で、最終改装をすると、内面も変化してしまう。

艦娘響だった頃の記憶を失い、駆逐艦ヴェールヌイとして生まれ変わる。

文字通り、別の人間となる。

言葉は全てロシア語に、記憶も装備も無くして、練度のみを引き継ぐ特殊な改装。

姉妹との連携が上手い彼女からすると、己の存在意義を全部失うに等しい。

愛しい姉妹の記憶すら消えてしまう。そんなジレンマを抱えている。

「ええ。その話をしたのは、あたしです。分からない訳がないでしょう」

響が、周囲が次々と改装するなか、踏みとどまる理由。力を求めるか、思い出を捨てるか。

何時までも選べないからだった。

七海は、春雨に今度は髪を洗ってもらいながら言った。

「今の響では、連携が取れません。他の三名はもう、随分と成長しました。暁は終わっていますし、雷と電は元々まだありません。ですが響。あなたは、それ以上の上昇は見込めない。何時まで迷っているんですか？」

「……………」

辛辣で適切な指摘。言われる通り、性能で置いていかれた。

妹には追い付けず、姉には既に最終改装すらされているのに。

響だけ、前に進めない。足踏みする。

俯く彼女に、七海は容赦しない。

「まさか、あたしに任せる気ですか？ 自分のことを、あたしに委ねてどうするんですか？」

「決定権は七海にある。私は、抵抗しないさ。好きにしていよう。」

気付かれているなら、仕方ない。諦めよう。

響はそう、決めた。七海には七海の立場がある。

これ以上足手纏いになれば、姉妹の危険を増やすだけ。ならば、彼女にいつそ決めてもらえばいい。

(そっちの方が楽だよ。心も、身体も……)

自棄であった。散々言い訳に七海を使っておきながら、最後まで決められない自分がいた。

響はこんなに情けない奴だったのだ。自分のことも満足に決定できない、バカな女。

七海は呆れていた。心底、失望したように見えるのは気のせいじゃない。

その程度の艦娘だった。響は、希望すらなく迷ってばかり。

どうしたいかもわからないのだから。

「ん……。じゃ、好きにします」

七海は、そう言っただけ以降は何も聞かなかった。

言わなかった。それはつまり、改装するんだろう。

ヴェールヌイになるのだ。全てを、失って。

(……信頼しないくせに、信頼を名乗るのか。私は、どうしようもない……)

七海を信じないのに、恥知らずめ。

響が、一番救いがたい奴。自己嫌悪は益々悪化する。

そう、思った夜だった。

「はい。暁、雷、電。全員響とよく話をしなさい。纏まるまで出てくるの禁止」
で、後日。

姉妹全員を捕らえて、一室に放り込んだ。

響の今後を全員で決めろと命じて、閉じ込めた。

啞然とする四人を、無慈悲に幽閉。

要するに、決めるなら周り決めろと言うのが七海の判断。

(……嘘でしょ)

響は思った。

この人、本当に……何しでかすか分からない。

取り敢えず、今は白状しよう。

パニックになる姉妹に謝りながら、響は漸く、動き出したのだった……。

五十鈴と七海

本音を言うと、彼女たちの問題は自分達で解決するべきだろう。

七海は響の今後を考えて、幽閉して取り敢えず環境を隔絶。

自分達で解決させることを選んだ。意思を尊重する、という意味だ。

(自分の将来をあたしに背負わせるなど許せませんね)

ヴェールヌイになりたいかならないかぐらい、自分で決める。

どっちでもいい。性能は伸びないが、そのぶんは七海がカバーしてみせる。

そのつもりなので、別段どっちでもいい。

投げ遣りな思考になっている響に対するカンフル剤になればいいが。

冷静になれば、幾分マシな判断を下すだろう。

七海は閉じ込めた彼女たちを放置して、本日のお仕事を開始する。

夜の戦。川内がこよなく愛する魂の世界。

駆逐艦が最も輝く瞬間。悪夢を見る時間。

「つてことで、行こうか……夜戦へ!!」

「行きましようか」

深夜二時。娘と妹と嫁を寝かせた七海は、大変珍しい事を言い出した。

夜間警備、行つてくると。その日の夜勤である五十鈴に言い出したのだ。

「フアツ!?!」

あまりの事で奇声を発する五十鈴。持っていたマグカップを落としそうになる。

七海が、普段仕事以外では滅多に起きない七海が……夜の海に出掛けると言った。

しかも、自分から?

「川内あんたはアツ!! 七海に何を吹き込んだの!?!」

また七海の暴走が始まったらしい。

今度は問題を起こす二人目、忍者が原因か。

懲りないので五十鈴の攻撃が疾風の如く走る。

最近、言っても分からない川内には物理でお仕置きをすることにした。

憲兵も安眠妨害と規律違反を無視できないので、勝手に殴っていいと許した。

彼女も相当、暴走をしているのである。

執務室で夜勤を担当する五十鈴の、必殺トラックラリアットが忍者に炸裂。

簡単に言うのと、仮眠をとる際に使う、いつぞやの七海のお土産であるトラックのぬいぐるみを投げる。

で、それを咄嗟にガードする相手をぬいぐるみ諸とも真正面からラリアットを叩き込むのだ。

「ヴェアアアアアッ?!」

川内、大破。吹っ飛んで転がった。

五十鈴も軽巡であり、夜の戦には強い。

川内だけが強い訳でもないので、七海に悪のりさせる危険因子は排除する。

七海は撃破される川内を無表情で見下ろしていた。

「七海、いい? 夜は、静かにね?」

「騒いでいるのは五十鈴ですが」

疲れたようにぬいぐるみを持って、交代まで仮眠を取りに五十鈴は向かう。

川内は死んでいた。白目を向いて。

理由を聞くと、七海は侍らせている三名の世話に時間を割くので夜戦未経験。

春雨の時も結局戦わず。なので、暇もできたこの頃に少し経験しておきたいと。

警備の仕事なので、そんなに大変でもない。練習には丁度良い。

と、簡単に言うが……。

(ヤバイ。絶対にこの娘暴走している。言うこと聞く気ないわ)

一つ知ったが、七海は楽しみにしていることがあると、無意識にのめり込む。

どうやら、知らない夜の戦に興味津々のようで、彼女は乗る気満々だった。

やる気に溢れている。つまり、話を聞かない。今はその状態だ。

夕立の悪影響か、夜に戦えるとなるとこうなるのか……五十鈴は眠気を嘔み殺す。

「はいはい。五十鈴も行くわよ。少し眠気覚ましに、運動したいし」

「……川内は？」

「毎日やっているんだから、今日ぐらいは安眠させてあげなさいな」

交代の山城が、その時執務室に顔を出した。

……何で同じようなトラックのぬいぐるみを抱えているのか。

「あおう、交代ですよね？ 私、入ります」

七海がいると気付くと、軽く会釈して挨拶。

床の川内は、七海が無造作に掴んで廊下に放り出しておいた。

「何かありました?」

「別に。あのバカが七海に妙なこと吹き込んだだけ」

「ああ……」

山城は皆まで言わずとも、御愁傷様という顔をした。

川内の刷り込みを受けたと聞いて、ドンマイと励まされた。

全く、本当に困った子だ。五十鈴は苦笑する余裕も生まれていた。

取り敢えず付き合おう。七海の戦いぶりを、久々にこの目で確認する。

二人は夜間警備に、向かって行くのだった……。

近海の沖に出る。

七海は、楽しんでいた。

「……前に来たときは、余裕がなくて分かりませんでした。夜の海は、綺麗ですね」

ゆつくりとペースを落として、見張りをしている。

五十鈴は前に出て、首だけ振り返る。

静かで、穏やかな夜の海。七海は、それを喜んでいるようだった。

途中、イ級などの邪魔が入るも、

「邪魔です」

と、確認して直ぐ様飛びかかり、豪快に蹴り飛ばして蹴り殺した。

一撃であった。水切り石のように、恐らくは海面をバウンドしていっただろう。

遠くで爆発して、電探から反応が消えた。

「あんたは……」

呆れる五十鈴。

やっぱり、五十鈴の出る幕はない。

七海の異常な反応速度に、速力。

理性のある七海は、一瞬電探画面から消失するぐらいの加速を行う。

速すぎて軌跡が見えないほど、追えないほど素早く接近して、蹴り飛ばす。

彼女の蹴りは下手すると戦艦の装甲も凹ませる。貫通も有り得る威力だ。

駆逐艦では大抵、即死する。

「釣りとか出来ませんかね」

「遊んでるんじゃないの。護衛でもしたいわけ？」

「……漁船の護衛ですか。機会があれば是非」

夜の海で海釣りをしてみたいらしい。

大体、今のご時世海産物は確保が大変なのだ。

呑気に海釣りしている時間があるなら、漁船の護衛でもしろと五十鈴は言う。

「前に聞きました。この辺には、栄螺や牡蠣がたくさんいるんだそうです」

「栄螺ねえ……。七海は食べるの？」

「いえ。あたし、貝などは好きじゃないですよ。子供の頃、一回派手に中りまして。医

者に送られました」

「うわあ……」

七海が昔話をしてくれた。

初めてかもしれない。こうして、自分の過去を語り出すのは。

警備をしながら、二人で話す。雑談をしながら、見回る。

五十鈴は感慨深かった。漸く。漸く、七海が自分を明かした。

自分から、自然に。自分の過去を、艦娘に話してくれた。

長い道のりだった。狂うわ、壊れるわ、すれ違うわ、揉めるわ。

散々な事ばかりでも、やっとこぎ着けた。

七海は、五十鈴相手に、時間をかけて、自分を教えてくれた。

(……やっとか。自分から、話してくれたわね。ここまで変化するのに、どれだけの犠牲を出したかは……考えないでおこうつと。前に進めたことを喜ぶべきよね)

七海は言う。彼女の人生は、ずっと平坦であるようだった。

それを詰まらないというか、平穩というかは、それぞれだろう。

でも、気になることがある。

「七海……。あんた、お父さんは？」

「小さい頃事故で死にました。あたしも巻き込まれたのですが、幸運にも無事でした」

……七海は、片親だった。

父は事故で他界。七海は顔もろくに覚えていないらしい。

軽い口調で話すが、七海にとっては父は最早意味のない存在らしく。

全く気にしていないと、五十鈴に説明する。

「自分の親ですが、死んだ人間に何を思っても、無意味ですからね。それよりも、生きて
いる人間に時間を使うべきです」

以前の計画の時のように、死人に大した思い入れは、ないと。

ハッキリ断言する。自分の親だというのに、七海は穏やかに続けている。

筋金入りだったようだ。この七海の思考は。

自分のことでも、変わらない。死人は死人。

死者を気にしないのは、艦娘だけじゃなかった。

七海を薄情と言えるほど、五十鈴は生きていないし、艦娘にはどうこう言えない。親なんて艦娘には居ないから。

(……五十鈴には分からない世界なのかもしれない。親、か……)

七海の成り立ちには、これも関係しているのだろう。

だが、五十鈴は所詮艦娘。人間の気苦労など、果たして理解できるのか。

……夜の海を一緒に進みながら、考える。

五十鈴は、本当に……彼女を、分かっているのだろうか、と。

で。

五十鈴は、七海の事を知ろうと思う。

嘗ての如月のように、彼女を分かれば……きつと。

きつと、彼女の力になれる。何度も手遅れになった身だ。

何を今更。そう、思うが……知ることを始めなければ、ずっと分からないまま。

簡単なことでいい。もう少し、もう少し理解を深めれば。
五十鈴は、もっと頑張れる。

「……うわ」

初めに、七海の私室に訪問。

酷い有り様だった。

室内は、五人ぶんの私物で溢れている。

ごちゃごちゃした乱雑した、しかし散らかったわけでもない見事な混沌。

要は、部屋が狭くて全員が過ごすには窮屈だと言うことか。

四人が狭いなかでわちゃわちゃしているが、七海はマイペースにやることを続けている。
る。

いつもこんな調子らしく、幸せそうだ。

七海らしい姿なので、五十鈴は敢えて何も言わなかった。

次に、七海の仕事以外を拝見。七海には少し見せてくれと頼んである。

「構いませんよ」

と言うので遠慮なく見せてもらうが……。

訪ねた先の、山城の部屋で何をしてるかと思えば。

「違いますよ。そこは、縫い方が雑です」

「……………どうですか？」

「そう。でも、少し綿を詰めすぎてコンテナが大きいです。扶桑はこんなトラックに乗ると思いますか？」

山城と扶桑専用巨大トラック型のクッションの作成をしていた。

此処のところ、皆の衣服を手縫いしている七海は手芸がかなり上達しており、山城の先生をしているように。

今は長距離トラックを縫い込んでいる。

見事な出来映えだが、これは既に枕のレベルの大きさであった。

白いコンテナのトラック。模様に扶桑の艦装の模様が描かれていた。

「……………毎回思うんですけど。提督は……………わたしを、何だと思っているんでしょうか……………？」

一番最悪なのは、途方にくれる扶桑が近くにいて、山城専用大型バスのクッションの作成をしていることか。

困ったように見えている扶桑を尻目に、着々と進むクッション作成。

五十鈴も呆れるしかないが、まあ……………何だかんだ、平和であった。

次。由良となにやらしている。

これは……………ポーカー？

他にも古鷹や羽黒も参加している。瑞鳳や祥鳳もあとから来た。

「むむむ……」

「無駄なことを。由良があたしに勝てるだけでも？ 今日夕飯は由良の奢りですね」

「まだよ……由良はまだ負けを認めていないわ!!」

唸る由良は、七海の手札を睨んでいる。適当に分かりやすくしたルールで、夕飯を賭けているようだ。

五十鈴は見物しているが、由良はフォーカードを揃えている。

七海は決して表情を崩さない。こういうゲームは強いそうだ。

現に、由良以外は皆負けている。他のババ抜き然り、神経衰弱然り。

勝負に出ると、由良はフォーカードで出た。

これはさすがに無理だろう、と見ている皆は思った。
が……。

「はい、ロイヤルストレートフラッシュ。あたしの勝ちです」

普通に有り得ない役を揃えていた。啞然とする一同。

いわく、手札の逆算など諸々の技術で算出は出来るそうだが。

「七海、それイカサマでしょ？」

「技術です」

五十鈴がズルいと言うが、七海は知らん顔。

堂々と勝ちを勝ちと言うのだ。ふてぶてしい奴であった。

由良は再度挑むもまたも惨敗。何度やっても七海には勝てなかった。

次、懲りない川内と戦いを始めた。

今度は白兵戦を極めるとか言い出した川内に七海は感化されてしまった。

あまり行かない、鎮守府の倉庫方面でちゃんばらをしていた。

「止めなさい、危ないでしょっ!! コラ、七海!!」

野外とはいえ、鉄パイプを振り回す川内に徒手空拳で挑む七海も怖い。

五十鈴が懸命に止めるが、おっ始めてしまった。

これも、七海の戦いのスキルアップとは言うが……。

「バッドラックと……踊っちまった……です……」

鉄パイプで脳天を殴打されて、一発でノックアウト。

オッドアイをぐるぐる回して、気絶してしまふ。

川内が勝つために、なんと弱点だと知っていて沈丁花の煙玉を持参。

火をつけて放ち、逃げ損ねた七海は吸い込んでしまい、怯んだところを殴り倒した。

「渋谷、流石忍者汚いと言って欲しいね!」

どや顔で誇る川内は、勝ち誇ったように言うのだ。

本当に汚い忍者であつた。

……で？ このアホ忍者は、誰の前でそれをやった？

「川内、あんたつて奴はああああ!!」

某主人公のように雄叫びをあげて、五十鈴がキレた。

懲りない奴は、五十鈴の前でそれをやった。

当然、こうなる。

「ひえええええ!! 五十鈴?! 五十鈴なんで!?!」

慌てて逃げ出すが、逃げきれぬ訳がない。

五十鈴は追いかけて、すぐに追い付いた。

七海のように豪快に背中に目掛けて飛び蹴りを放つた。

「ぐわー!?!」

吹っ飛び、顔から地面をスライディング。

川内は泥だらけで起き上がった。

「川内、川柳を詠みなさい……。介錯してあげるわ」

五十鈴さんの怒気に、川内さんは絶叫する。

後を歩いて追いかける五十鈴は、怒髪の状態であつた。

「!?!」

さよなら!!

であつたとさ……。

深海から来たメイドの面接

姫園鎮守府所属の駆逐艦、春雨。

またの名を、駆逐棲姫。

(違う……。わたしは、駆逐棲姫じゃない。春雨です……。はい)

そう。彼女は、春雨。誰が何と言おうとも、春雨。

気弱な白露型の一人。大人しく健気な、名前の通り春のような少女。

それを、悪意あるものたちは指差し言うのだ。

化け物、深海棲艦。沈め、沈め、死んでしまえ!!

耳を塞いで、屈んでいる春雨を、周囲で囲んで糾弾する夢。

責められる。消えてしまえ。居なくなれ。深海棲艦は、死ね。

(いやああああああ!!)

苦しむ春雨の声に、応えない訳がない奴がいた。

「死ぬのはお前らですよおおおお!!」

死ねと罵る周りを、然し颯爽と登場する狂犬が、高笑いしながら片っ端から殺している。

楽しそうに、笑いながら殺戮を繰り返した。

逃げ惑う影。これは、彼女を誘った人間たちか。

彼女は迷わない。人間相手に、普通に武器をとった。

「うちの艦娘に近寄るなアツ!!」

怖い。滅茶苦茶怖い。

なのに、安心できるのは……彼女が此方のために戦ってくれるからか。

撃ち殺す。噛み殺す。踏み殺す。殴り殺す。

殺す、殺す。この人は、人殺しになっても悔いはないのか。

沢山殺している。返り血を浴びる狂犬が、暴れている夢。

春雨を、助けてくれる夢。

(止めて……わたしは深海棲艦じゃない!!)

その叫びを体現するかのごとく、現れては毎晩殺しまくる。

ここに来たばかりの頃に見ていたものだ。

まさか、夢にも介入するとは思わなかった。

結果的に、血塗れの地獄絵図を仕上げたあの人は、真っ赤に染まった顔で、鮮血を滴らせて言う。

「春雨は、人間です。それを貶すものは、全員殺す」
笑顔で、右目の深紅の瞳を嬉しそうに細めて。

彼女はやはり頭がおかしい。なのに、なぜ嬉しい。

最初は、理解できなかった春雨。

けれど、徐々にそれは変化する。

彼女と過ごしていくうちに……。

これも、夢。

嘗て、死ぬ間際に見た光景だった。

響く怒号。襲い来る艦載機。

銃撃、爆撃、雷撃の三重奏。

遠征をしていた低練度の艦隊は、反撃もできずに姫によって蹂躪され、壊滅した。逃げ惑う春雨は、必死に仲間を守ろうとした。庇おうとした。

だが、真つ先に足を負傷して、結局姉に守られていた。

「少しは良いとこ、妹に見せないとね……」

自分を庇った姉は、大ケガをしていた。

なのに気丈にも笑って、安心させようとした。

……頭が半分吹っ飛んでいるような状態なのに。

なんで笑うの？ 姉だから？

ごめんなさい。助けられずに、ごめんなさい。

(わたしが……弱いから。姉さんたちは、死んだ……)

力を求めた。沈む間際、水に吞まれる一瞬に。

見上げた満月に、手を伸ばして。

——力がほしい。

——皆を守る力を。

——化け物と呼ばれてもいいから。

——力が、欲しいッ!!

……結果、彼女は生まれ変わった。

願った通り、深海の穢れを飲み干して。

その身は汚れきった澱の塊。

艦の記憶すら失い、辛うじて残った彼女の自我が、艦娘という名残を保った奇跡。
ポツンと佇む、夜空の海で。

彼女は、出会った。

姉を飲み干し、エゴのままに振り回す、邪悪な人間。

愛を求め、狂喜を楽しみ、そして今彼女を愛する愚かな子供。
けど、多分世界で唯一……春雨を求めて、置いてくれた人。

辛い記憶には違いない。

然し、今は……隣でぐうぐう寝ている彼女がいる。

だから、夜は怖くない。月の綺麗な夜を、愛せる。

(司令。……月が、綺麗ですね)

彼女なら、この意味は知っているだろう。

春雨の最大の感謝。そして、素直な気持ちを乗せた言葉。

我ながらチョロいと思うけど、本当の気持ちであつた……。

最近、また不思議な夢を見る。

悪夢には、違くない。

けれど、これは不思議な夢だった。

(ハイハイ……。良いところ見せようって頑張っちゃってさ……。そんなもの、無駄って
どうして分かんないかなあ!?)

悲痛な、苛立つ姉の声が聞こえる夢だった。

闇の中で、夜の世界で、姉が泣き叫んでいる夢。

一緒に死んだ、姉の夢。春雨はいつも、呼び掛ける。

(姉さん……。今、どこにいますか？ わたしは、幸せです。姉さん、姉さんも此方に来て
てください。大丈夫、ご主人様は……。司令は、誰であろうとも人だといってください。
分け隔てなく、愛してくれます。求めてくれます。認めてくれます。深海棲艦なんて、
呼びません。夕立姉さんの力を使役するこの人は、姉さんとよく似ています。姉さん、
一緒に還りましょう、鎮守府に。艦娘の港に。迎えてくれる人の所に)
いつも言うのに、姉は怒る。

(嘘よ!! 人間なんて信じられない!! どうして春雨は戻れたの!? ……は、……は誰にも話を聞いてもらえないのに!! 見つかったら、撃たれるのに!! なんで春雨は、春雨だけは戻れたのよオ!?)

嗚呼、泣いている。姉が、あれほど優しくかった姉が、孤独に泣いている。

春雨は必死に言うのだ。大丈夫、彼女はそんな人じゃない。

けれども。

(あなたは騙されているのよ!! 深海棲艦と呼ばれたら最後、待っているのはもう一度死ぬことだけ!! 人類の敵にされた……は、生きる資格さえ認められない!!)

バカな。彼女が……七海が、騙す? 春雨を? なぜ?

姫と呼ばれる強さの為と言うなら馬鹿げている。彼女こそが、化け物だ。

その気になれば、春雨とて一人で倒す女なのだ。

(……はっ? どういう、事……?)

闇夜に響く姉の困惑する声。

そういう風に思っていたのか。春雨は、事情を説明する。

要するに頭がおかしい、自称サイコパス。

なので、自分で艦娘になった挙句に現在オーバーフローという暴走状態で過ごしている。

で、春雨が見る限り頭はアッパツパーだが、自分のところの艦娘は皆大好き。大好きすぎて狂っている節さえ見える。若干補正入ってるけど多分あつてる。

で、自分の鎮守府の艦娘ならば深海棲艦だろうが戦えなからうが問題あるうがどんといい。

知ったことじゃないらしい。

つまりは？

(ご主人様は変態です)

(春雨が冥土に行ったと思つたらメイドになつてうううううう!?)

死後のお姉ちゃんも思わず大絶叫。

変態鎮守府の長は因みに彼女の妹の魂を内包している。

(ちよ、春雨大丈夫!! 別の意味でヤバイ鎮守府に行つてない!? 危害加えないのは分

かつたけど、身の危険!! 身の危険的な意味で!!)

(一緒にお風呂入る仲ですが?)

(お風呂おおおお!?)

ああ、姉もやはり予想外の相手らしい。

同じ白露型の艦娘と言えど、そんな変態は姉妹にはいないとキレ気味に叫ぶ。

(誰ッ!? ……の妹の夕立を変態に仕立てあげる奴は!?)

(……姉さん、落ち着いて。変なことされてないです。一緒に寝てたりしますけど、妙な事にはなつてませんので)

(もういい!! もういいから!! 今すぐそつちいく!! 春雨、地名教えて!! カチコミしてやるんだから!! うちの可愛い妹をよくもメイドにしてくれたわね!? そいつブツ飛ばしてそこに住み着く!! 心配でならないわ!!)

……変なことになってきた。

あかん、姉が何か闇夜で吠えている。怒っている、すごい勢いで。

なんでこうなった。一応教えておく。

(おのれ変態!! メイドにするなら……にしなさい!! 春雨を穢れさせはしないわよ!!)

(わたし、メイド結構好きですけど?)

(遅かった!! 待つて、あなたは洗脳されているの春雨! 落ち着いて、エツちなジャンルに絶対持つていかれるから!! 妹の貞操は死んでも……が守る!!)

なんの話だ。姉が阿呆なことを抜かしているんだが。

兎に角、ヤバイ。姉が来る。これは夢だろうが、何だかマジで来そう。

(ついたらまた会いましょ!! その時は必ず殴り倒してやる変態め!!)

お冠の姉が吠えるのを聞きながら、彼女は目を覚ます。

そう、目を……覚ましてしまった。

二日後。

「ん？ 見たことのない艦娘？」

深夜の事だった。夢の内容を聞いていた変態、七海はならば受けてたとうお姉さまと奮起していた。

で、案の定マジで来やがった姉。多分深海棲艦になっているままで。

川内がまた発見して、今度は七海に言う。

「あ、それお客様です。カチコミの」

カチコミの!? と川内は自分も参戦したいと言うが、却下。

これは、白露型の問題。強いて言うなら初期艦と娘ぐらいだ。

だが、これはメイドとご主人様の試練である。早速立ち上がる七海。

「五十鈴」

「ん？」

夜勤の五十鈴が、仮眠室から枕にしているぬいぐるみトラックを抱えて戻ってきた。眠そうに目を擦るが……。

「ちよつくら、姫をもう一人捕まえてきます。予約入っていたので」「フアツ!!」

奇声をあげて驚く五十鈴に後を任せて。

「いざ、お姉さまをお迎えにいきましょう。カモン春雨イド。野良のメイドの捕獲を始めましょう」

「ご主人様の仰せのままに」

出口に向かいながら指を鳴らすと、何処からともなくメイド参上。

夜の海に出掛けていく。

「いや、ちよつとなんの話!? メイド!? メイドが増えるの!? 待ちなさい、コラ七海——!!」

慌てる五十鈴を無視して、お迎えに往くのだった。

尚、五十鈴はなにも知らない超展開に頭を抱えていたらしい。合掌。

鎮守府の近海にて。

謎の姫がぶちギレて七海を襲っていた。

「うちの妹になにしてんじやござらああああ!!」

見たことのない姿だった。

分類は恐らく不明。ただ、色素の抜けた純白の村雨、と言うとしつくりくる。

ツートールの長い白髪に、ボロボロの白露型の共通の制服。

なのに力強いパンチは七海すら大きく吹っ飛ばした。

顔を殴られて、然し七海は怯まない。

「温いパンチですね、白露型のエロ担当。圧倒的にエロが足りない」

けろっと受け身をとって着地。

メイド服で控える春雨は眺めていた。

「むきいいいい!! 誰がエロ担当ですって!?! 仮にも深海棲艦の村雨に言うことないの!?!」

「は? 深海棲艦? 誰がですか? あなた、春雨のお姉さまですよ? で、自分からあたしのメイドに応募しに来たと聞きましたか?」

「言っていないから!! 春雨を手込めにする変態を駆逐しに来ただけ!! せめて身代わり

するって意味よー！」

「……変態？ 心外ですね。あたしはみんなが好きなだけです。変態とは失礼な」

「それを世間じゃ変態って言うのよー！ー！！」

壮絶な殴りあいだった。

夢で不思議なつながりを持ったのは、同じ艦隊で死んで、同じように深海棲艦になつたであろう、姉の村雨。

春雨と繋がった結果、変態に弄ばれる妹の身の危険を回避するべく、果敢に挑んできたようだ。

で、今に至る。

やはり深海棲艦になつているようだが、七海は全く気にしてない。

村雨という艦娘として、既に見ているようで。

「おのれ変態！！ 村雨が勝つたら受け入れてもらうからね！！ 春雨にメイドをさせるなら、村雨を倒してからにしなさい！！」

「じゃ、あたしが勝つたら専属メイド二号です。来なさいエロサキュバス二号。エロ駆逐艦は自称嫁で慣れています」

「エロサキュバスって言うなアツ！！」

どう転がっても多分配属するだろう。

姉こと、村雨参戦。深海棲艦。多分姫レベル。

然し、壮絶に戦っているが……七海、全然負傷していない。

で、村雨にも一切攻撃しない。ただ、殴られている。

「効きませんねエロサキユバス二号。そんなんだからエロ担当って言われるんです」

「誰が見た目重視の駆逐艦ですってエ!? 村雨はこれでも性能は良いんだから!!」

「乳がですか?」

「そこから離れろオ!!」

挑発しまくるご主人様。怒るお姉ちゃん。

一応、かなり危険な姫とのタイマン。

直撃してるのに、ご主人様血塗れで平然としている。なぜ?

春雨は分らないが、仲良くはなれそうな気がした。

「ふーっ……ふーっ……!!」

散々エロ担当だのスケベ艦娘だのと言われて激怒している村雨。

因みに生前は似たような事を言われて、清純だと言い張っていた。

死後も似たようなものなので、これは天然かもしれない。

荒い息で睨み付ける。七海は……ああ、血達磨だった。

「全く。メイドの面接は命懸けですか。春雨、もうとつとと捕まえてお持ち帰りしま

「しよるか」

「お願いします。姉さんも、受け入れて貰えることに異論はないので」
代弁しておく。村雨が決着つけるエロ提督と怒る。

聞いてない七海は、手招きして戻るから来いと村雨に言った。

「一応手配しますので、まあゆっくりして行ってください。どのみち、採用ですしね」
「……………メイドになる気はないわ」

「ダメです。強制です。春雨イドとセットで村雨イドとして招きます」
「ぐるぐるるる……………」

怒ってる怒ってる。唸りながら採用してもらえた。

かなり村雨は警戒してるが、そのうち慣れるだろう。

騒がしくなりそうな予感。春雨は、ほっとしていた。

やっぱり七海は受け入れてくれる。全員大好きだから、深海棲艦でも気にしない。

（流石はわたしのご主人様）

……………もう、春雨はメイドが定着していた。

まとめるなら手遅れだった。

そんなこんなで。

メイドの面接を受けに遙々訪れた深海棲艦のお姉ちゃん。

村雨が、メイド二号になるのだった……。

増えるメイド

また、こいつは暴走していた。

「……白露型駆逐艦、村雨です。よろしくお願いいたします」

むすつとした不機嫌な顔で、新しく着任した艦娘がいる。

村雨、と名乗った彼女は……。

「七海……。この娘、どう見ても深海棲艦……」

「艦娘、村雨です」

また深海棲艦だった。五十鈴はため息をついた。言うだけ無駄だ。

先日の夜、姫をどうか言っていた訳の分からない事の内容が、これだ。

突然の姫の来訪。二回目だった。

しかも大本営が新種と言っている、深海雨雲姫とかいう真新しい深海棲艦の姫で、彼女も一度大本営に送られて、数日経過して着任した。

当時は大荒れだった。忍者が騒ぐ、娘と初期艦が反応するなど、色々。今回も、大本営が問題ないと判断してから、配属されている。

周囲はまた七海が姫を懐柔して愛でているとドン引きしたが、彼女も見た目はあれでも艦娘だと七海は言い切るのので信じた。

きつちり今回も証拠を皆に提示した上で。

桜庭の許可を貰っているし、貴重なデータが集まったと桜庭は両手をあげ喜んでた。

いわく、艦娘だが特殊な事情なのでこれ以上聞くな。聞いたら殺す。

と、他の元帥が言っているらしい。

意識とはいえ、恐ろしいものである。相当ややこしい事情だと思う五十鈴。

来た理由も、

「春雨が夢で見ました」

とかいいうどこぞの血迷った提督並みに意味不明な理由であり、五十鈴は困惑した。

しかも結果的に本当に来て、本人も分かっているのだ。

「春雨が夢で教えてくれたんです。ここの変態が、春雨の可愛い妹をオモチャにしているって……」

酷い言いようだが、春雨は七海を変態と罵り、春雨を解放しろと要求している。

確かに現在の七海は言うまでもなく変態だが……感性は彼女はマトモと見た。

因みに七海は春雨はメイドが一番可愛いので譲らぬと言いつ張り、喧嘩していた。

なのに、夢で見たという理屈すらない理由だったのだ。

春雨も一度は大本営に呼び出されて検査を受けたが、互いにこの状態における共鳴的な現象を誘発していると、簡単に教えてくれた。

で、五十鈴が聞けば、彼女も春雨と似たような状態で何度か襲撃されて、自分からは襲われないが襲った場合は容赦なく沈めていた。

「……正当防衛です。村雨だって、死にたくなかったんですから」

他の者には決して言うなと七海が口を封じたので五十鈴以外は知らない。

村雨は素っ気なく言うが、後悔はしている様子だった。なので、五十鈴は責めない。

七海と如月の一件で、十分わかっている。これは、感情的でも、理屈的でもない。

難しい問題だから、目先の思いだけで非難するのは間違っていると学習したから。

七海も汝に罪無しと軽く流した。村雨は驚いていた。

「……なんで提督は責めないんですか？」

「似たような事案を経験しているのだから」

しれつと言いつ、五十鈴が軽く説明して教えると。

「……そうですか。迷わず、如月さんを選んだんですね。相手を殺すこともいとわずに」

「無論です。あたしは間違つてなどいない。事故ですのぞ」

村雨は、値踏みするように七海を觀察している。

信用に値するか、そんな目付き。

「……分かりました。信じる努力をします。春雨の事は、ありがとうございます。妹を、守つてくれて」

「当然の事をしたまです。うちの艦娘は全員人間ですもの。権利はあつて然るべきですし、邪魔するやつは全員殺します」

然り気無く、七海は物騒な事を言い出していたのを、五十鈴は聞き逃さない。

「またもや、不味い兆しが見えていた。」

（いけない……。七海、身内が増えてきて、敵も増えたから方法を変えようとしてる。この娘の事だから、下手すると憲兵さんまで手にかかるかも……。抑えないと、人殺しだけは……）

彼女の感情が、もしも深海棲艦のみならず、人間に向いたとしたら。

恐らくは同じように動くだろう。つまり、殺す。

今の七海は憲兵ですら敵わない艦娘だ。物理的に排除してしまえば、反逆になる。艦娘のためにそこまでしかねない、そんな危うささえある。

刺激しない方がいい。五十鈴は思う。彼女は最早生きる爆弾。

着火すれば誰であろうが爆発する。理屈を凌駕する部分もかなり増えてきた。今回がよい例だ。

普段なら有り得ないと断じてお仕舞いの筈が、春雨の言うことを鵜呑みにし事実本当に來た。

七海は、身内に対して疑いをもう、捨てている。必ず信じる危険な状態のようだ。

(幸い、うちはみんななんだかんだ七海に対して、戸惑ったりはするけど、吹雪みたいにはなつてないのが救いね。七海を利用するような艦娘は居ないから良いけど……)

その気になれば、五十鈴たちは七海の善意を利用できる。

言いなりにして、好きなように扱える立場なのだ気付いた。

立場の逆転か。七海は自己犠牲の精神により、艦娘よりも立場が低くなっていた。

(もう、何処まで自分を軽く見るのよ七海は……。仕方無いわね、全く)

呆れながらも、五十鈴は内心苦笑うだけ。

もう慣れた。この娘の突拍子のない行動は、毎度のこと。

叱つても叱つても、理解はしているがまあ、改善しても必ずどこかで抜けている。

相談もするし、話も聞く。けど、毎回相談する相手がおかしいか、話を曲解している。

悪意ではなく、善意の暴走だから言つても意味がないのもわかる気がした。

(甘くなつたわねえ、五十鈴も。甘やかす訳じゃない、基本的に利口な娘だけ……。やつ

ぱり、まだ子供なのよね)

善意の暴走は指摘しても直りにくい。

強いて言うなら、落ち着けと。冷静に行動しろ言うのに。

この艦娘に甘いオーラが、周囲に徐々に好かれ始めているが、危ないものなのだ。見張つてないと、次は何をやらかすことやら。

心配する五十鈴を尻目に、当人は。

「メイド服着なさい」

「嫌です!!」

早速メイドにしようと迫っている七海。

ツートールを逆立てて威嚇する村雨。仲良しのようにだ。

騒ぐの言いながら、五十鈴が介入して七海をぶつ叩いて落ち着かせる。

「いい加減にしなさい七海。嫌がつてるでしょ」

「約束したのに……」

不満そうに唇を尖らせる七海は、訝しげに村雨を見る。

「してませんから。村雨は自分を安売りしませんので」

「じゃ、下手な事は言わないようにね。七海は、字面通りに受けとるわよ」

そっぽを向く村雨に、注意は言っておく。

了解した村雨が、今日から仲間の一員となる。

新たな深海棲艦、深海雨雲姫こと村雨が、着任するのだった……。

そして、数日が経過した。

「じゃん。どうです五十鈴、由良。全員メイドです」

「あんたは誰に奉仕をするの!?!」

バカがいた。

なんとメイドにハマったのか、それとも新しい性癖なのか、娘と妹と嫁をメイドにしている七海。自分含めて。

朝っぱらから、メイド喫茶と化した執務室に、お休みの担当になった五十鈴が見て唾然とする。

由良は書類の作成にちよつと立ち寄ったらまさかのメイド喫茶。

目を点にする。

嬉しそうに見せつけるように踊る如月、お揃いと無邪気に喜ぶ山風と弥生、苦笑いの

春雨に……。

「で、村雨は何で着てるの？ 嫌がったのに」

「……春雨に、泣き落としされて仕方なく」

ぶすつと不機嫌な村雨も、春雨と同じデザインのクラシカルなメイド服だった。

七海も同じ。漆黒を基調として、最低限の機能を詰め込んだ、露出が全くない古風なデザイン。

ロングスカートに長い袖の上着を組み合わせたもので、どちらかと言うと執事服のよ
うな感じが強い。

「何でも露出すれば良いものではありません。真のメイドは扇情的なモノではないとあ
たしは思います」

「はあ……」

エロなど要らない。必要なのは奉仕の心。

相手が望むなら、自分を泣く泣く殺してでも尽くすけれど、自分から誘うような媚び
たモノは違うらしい。

これは七海の持論であり、デザインのコンセプトのようで。

熱く語るが五十鈴にはさっぱりであった。

七海が夜なべして作成して、全員分を速攻で作り上げ、お披露目も兼ねているようだ。

皆は七海に貰えた服に大喜びだった。

諦めていなかった七海の策略で、泣き落としを食らって巻き込まれた村雨以外。

「……意外と可愛いかも。由良も欲しいなあ」

みんなして似た感じの服を着て、楽しそうにしているを見た由良は、羨ましくなり禁断の言葉を小声で言った。

五十鈴が止める前に、耳のよい七海はバツチリ聞いていた。

「じゃ、次は由良のも作ります。サイズを教えてください」

「いいの？ 手間がかかりそうだけど」

案の定、七海が作るとか言い出した。

由良も一着、欲しいので便乗。

メイドが着々と増えていく。

「五十鈴は……ああ、ミストレスですね。性格的に」

「誰が女主人ですって？ ん？」

五十鈴が誰かに仕えるとか性格的にあり得ないと言った七海に怒る五十鈴。

ご主人役と言われて、拳骨を作ってこめかみにおしつける。

そのままグリグリとして叱るが……。

「痛いですご主人様」

「なんであんたが五十鈴に尽くすの！ あんたは提督でしょ!!」

無表情で弄られる七海を助けるべく、小さなメイドたちが反撃に出た。

五十鈴、目の敵にされて集中砲火。

皆さんクツションなどの柔らかいものを武器に、殴ってくる。

「横暴はいけませんわ、ご主人様」

「ママは悪くない……悪くないの!」

「七海姉に……意地悪、しないでください」

「わたしも加勢致します!!」

小さな子供をいじめるが如く、弱い抵抗を受ける五十鈴。

あれよあれよと彼女が悪者にされてしまった。

由良まで、五十鈴が悪党のようにじとつと横目で見てきた。

「なんで五十鈴が悪くなってるわけ?! ちよつと待って、どうして!」

周囲からメイドをいじめる嗜虐のご主人様と責められて、たじたじの五十鈴。

流石に何時も気の強い彼女でも、仕えるものたちの一斉の非難は堪えるようで。

手を離して、七海は一目散に逃げ出した。

「ご主人様に辱しめを受けました……」

と、わざとらしい棒読みで味方のメイドたちに泣きつく。

「七海っ……あんた、それが目的かあ!!」

いつものお返しと分かった五十鈴が怒ると、またもや四人が五十鈴を悪党のように責める。

鬼だ悪魔だドSのご主人様だ、と言いたい放題言われる。

村雨のみ、冷静に無視して執務室の掃除をしている。

遊んでいるのはこの五人だけであつた。

「五十鈴……酷い趣味ね。か弱い立場をいじめるなんて……」

「待って!!? 由良まで誤解しないでよ!!? どう見てもいじめられてるの五十鈴の方よね!!?」

五十鈴が珍しく弄られる立場で、由良まで向こうについた。

お姉さんの五十鈴は、七海の弄り返しで鬼畜なご主人様扱いにされ。

挙げ句には。

「皆、他の人に言いつけてやりましょう」

七海が、なんと他の艦娘に五十鈴がいじめたと言いつけるとか言い出して、皆と一緒に逃げ出したのだ。

慌てて止めるが、全力で全員逃げ出した。愕然とする五十鈴。

(そう言えば七海に初めて反撃された!!? なにこの姑息な方法!!? 弱者の恫喝って酷く

ない!?)

初めて、七海に五十鈴は反撃されたのに気がついた。

自分を敢えてメイドという低い立場にして、五十鈴の行動を非難する。

この小賢しいやり方、まさに七海がしそうな事だった。

「……あ、悪のりし過ぎた?」

「由良、あんたも大概ね……」

由良も分かって乗っいたらしく、後で謝った。

ガツクリと項垂れる五十鈴に、箒を持った村雨は慰める。

「お疲れ様です……。ここの提督、やることが子供ですねぇ……」

実際子供だから否定できない。

いつもの事だから気にしないで、と五十鈴は言って用事を果たす。

たまには、こう言うのも悪くない。そう思って、五十鈴はやることを開始した……。

追記。

メイド、順調に増殖中。

「由良も着てみました！」

「鈴谷もだよ!!」

「勧められて、好奇心で……っつい」

「七海さん、器用ですね……。凄く着心地良いです」

「衣笠さんもお揃いで！ 似合うでしょ!!」

「メイドで……忍者!?! これは新しい世界だね!!」

重巡と軽巡がメイド艦隊となった。

古鷹と羽黒まで巻き込んで、七海のお手製が増えていく。

川内に至っては和服な感じのメイド服という意味不明な出来映えだった。

「七海いいいいいい!!」

結局何時もの暴走だった。

絶叫するご主人様、五十鈴の怒号が何時も通り響き渡るが、それはまた別の話……。

信頼の代償

表側では、メイド艦隊などという日常を繰り広げていた姫園鎮守府。

然し、裏側ではシリアスも真つ青な悩みを抱える少女が、幽閉されているのをお忘れだろうか。

そう、姉妹と一緒に閉じ込められた響その人だ。

一連の騒ぎに気づくことなくずっと籠って、悩んでいる彼女。

そして、共に考える姉妹。

少し時間を遡ろう。これは、ある艦娘の決断である……。

幽閉された彼女たちは、一切の業務を禁止されている。

要は一種の監禁であり、響が打ち明けて漸く事態を把握できた。

表では某エロ姫とアホ司令官が喧嘩している中、響は正直に聞いた。

自分は、どうするべきかと。

「響ちゃん……」

末っ子の電は言うのだ。記憶を失ってほしくはない。

思い出を消したくない。そう、素直に……純粹に。

「……………こればかりは、私がいてもダメよね」

雷も、落ち込んで呟いた。

普段なら堂々と任せろと言うのに、今回は言わない。

彼女に言っても、雷にもこの現状は、打破できない。

「私は、どうすればいい？ なるべきなのか、ヴェールヌイに。皆との記憶を失つても

……」

このままでは、置いてきぼりを食らう。

既に置いていかれているのに、まだ成長できる三人とは違う。

響は現状、もう打ち止めなのだ。これ以上は性能は上がらない。

妹たちに聞く。正しいと思う選択肢を。

電は今のままだを望んだ。強くなくてもいい。

全員で頑張ればまだ戦えると。

雷は、首を振った。分らない。

どの選択も、雷には辛いモノだと、彼女も心境を吐露した。

長女は、ずっと黙っている。目を閉じて、腕を組んで、座って壁に寄りかかり、俯く。

響は自分がどうしたいかも、見失っている。

ぐちゃぐちゃになった心を整理できないと、白状した。

「……響。あなたは、司令官を……七海ちゃんを信じてないでしょう？」

ふと。姉は、体勢を変えずに静かに問う。

響は振り返る。姉は、言った。

「暁も、正直に言う。……今の七海ちゃんは怖いから、信じたくない。けど、あの人は

……嘘だけは、絶対に言っていないと思うわ」

姉、暁は思う。

あの日に日に悪化していく人格破綻者は、きつと暁たちには理解できない頭をしている。
る。

狂っている。端的に言えば異常者。だが、人格破綻をしていますが、それは悪意じゃない

い。

「一見すると、頭がおかしいと思う。けれどね、響。司令官は……別に、全てが破綻している訳じゃないと思うの」

「……………」

何を考えているかも分からない笑顔に、突発的な行動。

挙げ句にはあの理不尽な強さ。あんな駆逐艦がいるか。

普通に見れば、ただイカれてるだけのクレイジー。

然し、と暁は指摘する。

七海は、艦娘に対してイカれてる訳じゃないのだ。

ただ、艦娘に対しての接し方が異常なだけで、特段害はない。

悪意も敵意もない。あるのはきつと、善意と愛情に見える何か。

プラスの動機だと言うのだ。

「かなりネジの吹っ飛んだ言動だから、困惑するのも分かる。でも、司令官は言った通りの事しかしないわ。つまり、裏はないの。だから、あの人は言動が本音。今の七海ちゃん、きつとそうじゃないかと暁は思う」

お子さまと言われると怒る彼女だが、なんだかんだ仮にも長女。

七海の事は、姉妹の事もあってそれなりに観察はしていた。

今言えるのは、彼女には悪意なんて欠片もない。狂っているだけで、狂う根本は多分親愛。

理解しようとして、言動がアツパツパーになっていて派手だが、冷静になれば分かる。別に、こちらに危害を加える気などない。

寧ろ、過保護になっているぐらいじゃないかと。

あれもこれも自分でやろうとする、雷のような奴。

彼女の場合は界限を知らない暴走で、それなりに処理できるから怖く感じる。

というか、一番怖いのはあのハイライトのない微笑みと理解できない行動であった。行動に関しては、よく見ればある程度は分かるだろう。

少なくとも悪意は確実はない。

「言うなれば変態ね。艦娘を好きになって、方法を分からないまま片っ端から試して皆を巻き込む変態」

駆逐艦にすら変態と言われていた。

暁は、変態だから分からなくて当然だと言った。

啞然とする響。響以上に暁は冷静に見ていた。

変態と言われて、成る程納得した。

(変態になったから私にも分からなくなったんだ……)

酷い言い種だが、ある種の真理なので否定できない悲しさ。

暁は再び言う。変態だから信用はできないのは分かる。

「けど、司令官は少なくともヴェールヌイになった、響を受け入れてくれるわ。変態だからね」

「……そうかな」

「そうよ。だって、変態だもの」

再三変態と繰り返し返す暁。

一言で表すなら今の七海はまごうことなき変態である。

変態であるから、響がどんなになっても支えてくれる。

変態であるから、響がヴェールヌイになっても、助けてくれる。

変態であるから、響の選んだことを否定しない。

だって、善意で狂った変態だから。

彼女は、変態と言う艦娘の味方。

「的を射ているね。私も、漸く七海をわかった気がする」

納得できる。漸く、理解できた。

（七海は善かれと思つて行動する、結構おかしくなっているただの変態なんだ）
大体あつてた。

変態を常人が分かるわけないよね? と暁に言われて三人とも頷く。つまり、彼女は変態である。変態ゆえに、艦娘の味方。

理由は、彼女は善意の変態であり、暴走はするが、いつも誰かの為。大抵失敗するが、七海は決して皆を苦しめない。苦勞はかけるけど。異常者だとしても、その一点のみは信用できる。

自分に素直な変態は、伊達じゃない。

「つまり、司令官はお母さんのね!」

「雷、落ち着こうか。あんな変態の母親は嫌だ」

雷は母のような物を目指している気がすると豪語する。

確かに正解だし、娘と妹と嫁とメイドがいるが。

それ以前に、皆を侍らせる超弩級の変態なのだ。

ツツコミを入れる響に首肯する電。

「ま、要するに。司令官は問題ないわ。あとは、響の判断次第かしら」

疑問を一つ解決してから、改めて暁は聞く。

「響。どうしたいか、分からないって言ったわね。……けどね。暁たちは、響じゃないわ。その苦しみは、本質の意味で、理解できない。だってそうでしょう? 暁はもう改二。雷も電も、そもそも改二は開発されていないから、成長しかできない。響の改二は、

例を見ない特殊な事例だから……この鎮守府の誰にも、苦惱は共有できないわ。だから結局、アドバイスは出来ても決めるのは自分よ。責めるつもりはないから、よく考えて」自分で決めろと、暁は敢えて突き放す。

七海を言い訳にして逃げるなど言う意味で、疑問を解決したに過ぎない。判断の材料が欲しいなら何度でも聞こう。

だが、自分の未来を他人に託すのは阿呆のすることだと思う。

自分の人生だろう。いつ死ぬか分からない艦娘なのだ。

後悔するような生き方はするなど、暁は言った。

「今の響は即物的に答えを焦っていると感じる。早く答えを出して、どうにかしたいと思っているでしょ。だから、司令官に監禁されるのよ。自分で決めないで、司令官に全部投げたから。代わりに暁たちに代理で話し合えて言ったのも、響の特性を分かかった上での判断でしょうね。その辺はやっぱり、狂っていても司令官だから当たり前かな」焦りすぎだと暁は響に答えた。

逃げるように解答を出しても、周囲だって安易な答えじゃ意味をなさない。

本当にどうしたいかは、最後は自分の意思で決めるもの。

響は、周囲に流され過ぎると怒った。

「……私は」

「言い訳はもう、止めたら？ ヴェールヌイになるのが怖いんですよ。記憶を失って、言葉が通じなくなつて、すれ違う事が。電もそう。忘れられるのが怖い。雷は、それをつかつてゐるからなにも言えない。……暁だつて怖いわ」

妹たちに、長女は言つた。

全員の心境を分かつたのは、姉としての経験だつた。

お子様と全国の提督に愛玩される暁だが、本当はそうではない。

大人の前だからあなるだけで、彼女は暁型の長女。

他の姉たちと同じように、妹たちの気持ちぐらひは、幼くても十分理解できる。

決して、愛でられるだけの子供ではない。

「……」

黙る三人に、暁はため息をついた。

分かつてゐるから言わないといけない。

さもなくば、きつと七海はここから出す気はない。

「……忘れても、暁は覚えているし、姉妹であることも変わらない。響がヴェールヌイになつて、言葉が通じなくなつたら、司令官にお願いする。ロシア語、しゃべれるつて言うし。最悪、暁がロシア語覚えるし。方法は何でもあるわ」

そう。忘れても、彼女が消える訳じゃない。

これこそ、自分に言い聞かせる言い訳かもしれない。

だが、真実でもある。響はヴェールヌイになるうが、暁の妹。

忘れるなら、教えるまでだ。姉の威厳を、姉の偉大さを。

問題は、現状のままでは、危険だと言う意味。

「……放置は、ダメって言うのは分かっている。だから、どうにかしてもらおうとは思う。

けど、私は……皆と、戦いたいよ」

一つ、前に進んだ。響は共に行きたいと言った。

ならば、どうするべきか。

まずは、反対を表明する末っ子の意見だった。

「電。一時の悲しみと、永劫の哀しみ。どっちがいい？」

事の問題は、このままでは、響は姉妹と共に戦えない。

響が足手纏いになるから、誰かがそれをカバーしないとイケなくなる。

電は、皆で頑張ればいいと言う。暁はそれを否定する。

「電。戦争は、スポーツじゃないわ。皆で頑張ればいいなんて、そんな考えは止めなさい。演習とかはそれでいいわ。けど、実戦には勝敗はないの。頑張っても、響はもう頭打ちなのよ。止まっているのよ、性能が限界で。これ以上頑張れない相手に、何を言うの？ 気持ちじゃもう、響は十分頑張ったわ。電、現実を見なさい。負ければ死ぬのよ。」

カバーにも、常に命のリスクが付きまとう。艦隊行動に、足並みの揃わない事は致命傷。暁だつて分かるし、司令官はそれをするはずがない」

一人に合わせて本来の能力を發揮出来ないならば、待つているのは死ぬことだけ。

甘えた電の考えは、何れは自分も、姉妹も殺す。

俯く電。当然の言い分に、響も雷もフォローはしない。

自分が上にいるから言える台詞。響はもう、これ以上は気持ちだけじゃ前には進めない。
い。

戦争は、弱い奴は死ぬ。今の響では、集団行動は向かないし、彼女の特性も殺してしまふ。

それは、意味のない選択肢であつた。

「……じゃあ。忘れろつて言うんですか？ 響ちゃんに、思い出を」

「逆に聞くわよ。なら、電……代わりに、死ぬ？ 思い出を諸とも、海のそこに」

まるで、嘗ての七海のように。暁は容赦なく、電に言う。

代償なしに進める事じゃない。甘つたれるなど。

強くなければ、敵には勝てない。いや、生き残る事すら難しい。

皆で支える？ そのリスクを、誰に押し付けるのだ？

綺麗な言葉で誤魔化すなど、暁はもう一度怒る。

「ワガママを言わないで電。……暁だって、本当は嫌よ。でも、現実には響は追い付けない。取り残されれば、確実に沈む。響と一緒に戦うと言った。なら、今のままじゃ無理。分かるでしょ」

「……………」

彼女のワガママも、響もワガママも、交わることはない。

甘えているのは、双方だろうが……暁はもう、腹を括っている。

雷も、黙って頷いた。彼女も、覚悟を決めたらしい。

「暁、それぐらいに……」

「暁も、妹から死人を出す気は無いわ」

響はならば、自分が引くと言うが、暁は待てと言う。

電のこの性格は、響以外の件でも毎度発露する。

甘ったれるというか、非情になれない彼女は、七海がうまくやるが、皆を陥れる場合もあった。

この際なので、ハッキリ言っておくことにした。

「電。戦争に勝ちたいなら、相手の命よりも自分と仲間を優先しなさい。救いたければ余裕と強さをもってから。半端な気持ちだけで、相手を助けて仲間を殺すなんて真似をしたら、一生暁は軽蔑するわよ」

「……………」

敵しい指摘だった。

電の性格を怒る七海が前にやったように、暁も言う。

同時に、響は思った。

(…………電は私のせいで迷っているのかな)

元はと言えば、響が迷ったから姉が末っ子を怒る事態になった。

響がヴェールヌイになると決めれば。ここまで、揉めることもなかった。

二人は忘れても、想い出を上書きすると言ってくれた。

言葉が通じなくても、学んでくれると言った。

姉妹であることに、変わりはないといってくれた。

…………だったら、恐れるものはなにもないはずだ。

自分で決めると言うなら、さっき言った。共に戦いたい。

もう、答えは…………出ていたのだ。

踏ん切りが出来なかったただけだった。

けど、もう大丈夫。

響は、止めてと暁に言った。

「暁、雷、電。私は…………ヴェールヌイになるよ」

決めた。皆が言うなら、自分も前に進む。

良いのか、と電が聞いた。

「いいよ。忘れたら、あとの私に教えてあげて。きっと、喜ぶから。なに、私は響であり、ヴェールヌイだ。根っこは同じ艦娘だよ。電、私を信頼してほしいな。その為に、進むんだから」

微妙な顔をしたが、響の意思を尊重すると最後は渋々、納得してくれた。

死なない為に強くなる。その為に代償を支払うなら覚悟は決めた。

いつまでも共に戦うために。響は、前に進む。

信頼をしてもらう為なら、怖くはない。

翌日、大騒ぎになってた外を啞然として見ながら、七海に伝えた。

ヴェールヌイになるから、改装をしてくれと。

七海は了承して、直ぐ様取りかかった。

数時間した頃に……彼女は再び生まれた。

『……私は、ヴェールヌイ。よろしく、司令官……司令官?』

七海を見て、戸惑うヴェールヌイ。

変態がいた、と後で周囲に言っていた。

何せ、何時もの面子とイチャイチャしている変態がいたので。

『よろしく、ヴェールヌイ。先ずは日本語をお勉強しましょう』

流暢なロシア語で対応して、七海による日本語教室の甲斐があつて、割と短期間でヴェールヌイは日本語を喋れるようになった。

因みに、真つ先に覚えた言葉は。

「司令官、変態」

という、二つの単語だったそうだ。

こうして、初の海外艦娘、ヴェールヌイが仲間になったのだった……。

司令官の逆鱗

自分のところの駆逐艦が悩んでいるとは思っていなかった七海は、ヴェールヌイに日本語を教えながら聞いた。

自分の過去や、日本について何処まで覚えているかと。

『……ごめんなさい。あまり覚えていないんだ。ただ、姉妹が居ることは何となく分かるけど、幾分……記憶が曖昧で、日本の文化についてなどは、ほとんど忘れて思う』

と、寂しげに言うのだ。

ふむ、と七海は考える。

資料の記述とは大差はない。

ただ、日本についての記憶は風化している。

……で。唐突な七海の思い付きが発動。

今回もお馴染み、司令官の暴走タイムが始まって……。

「七海。嫌な予感がするわ。止しなさい」

だが、今回は違った。カウンター戦法、五十鈴の制止が発動ツ!!

この効果は、七海の気紛れな思い付きに対して発動する。

内容は、七海の思い付きを無効にして、破壊するツ!!

「……」

書庫で勉強していたヴェールヌイの前に、仲間という軽巡のお姉さんが乱入。

七海をそのまま叱りつけていた。

七海はどこか不満そうに不貞腐れ、見上げていた。

ヴェールヌイは何処かで思い出す。この女、危険なので要注意。

以前の自分の記憶か。ならば、肝に銘じておこう。

五十鈴のカウンター戦法が発動したから今回は、良かった。

……今回は、だが。

また別の案件で大丈夫とは、言っていない。

その時は諦めた七海だが……次回に、とうとう鎮守府の外で仕出かすのだった……。

その日は、七海は珍しく出掛けていた。

傍らには、七海とお揃いの白露型の制服を着ている春雨と、村雨がいた。

娘たちはそろそろ、裏でこそこそやっていた特訓の末、何とか砲撃の音を如月がいれば我慢できるようになったので、現在は三人揃って哨戒に出ている。

憲兵も連れずに、メイドたちとお出掛けは初めてである。

何分、二名は深海棲艦に似ている派手な姿なので、七海は出掛ける前に頑張った。

前もって出掛けるとは伝えた。村雨も行くとは言ったが唐突なセクハラに驚き、抵抗。

「とうとう本性を現したわねこの変態!! 村雨を何処に連れ込む気よ!」

怒った村雨と多少おいかけっこしたが、春雨と七海に勝てるわけがない。

そのまま数分悲鳴と絶叫が鎮守府に響いて、五十鈴が何かと再度乱入すると。

化粧品で肌色を誤魔化そうとして、椅子に村雨を縛り付けて塗りたくろうとする七海と、手伝う春雨が目丸くしていた。

尚、村雨が抵抗したため、春雨とタッグを組んで嫌がる彼女に色々つけた。

「いやー! 化粧品とか使いたくないの! 村雨はすっぴんなの!」

「いや、すつぴんですと死人ですが何か？」

「……あ、そつか……」

慣れない化粧品を嫌がっていたが、理由を説明されると自分からつけた。

只でさえ土気色の死人のような肌色なのに、それで外出したら大騒ぎだ。

なので、春雨は出掛ける場合は、必ず化粧品で誤魔化す。

髪の毛もそろそろ、元に戻そうと七海が提案して、染め上げた。

ついでに真つ白な幽霊のような姿を見ると、憲兵たちが春雨に対して陰口を言っているのを聞いた。

それもあって、村雨にも染髪を言っておいた。彼女も言うことを素直に聞いた。

綺麗な茶色と桜色。以前より多少人工的な色だが、妥協はできた。

——もしも。

もしも、あれ以上に二人を傷つける言葉を聞いていたら。

七海は、今頃……ここには、居ないだろうけど。

まあ、それは置いておく。

そう言うときはちゃんと説明しろと五十鈴に拳骨を貰って、頭を押さえて踞り呻く七海を見ながら笑う村雨。

やはり、悪い人ではない。頭がイカれているが、慣れれば気にならない。

村雨は、出掛けるのを一言も嫌がっていないあたり、一応受け入れてはいるようだ。……一体、何処に連れ込むと思われていたのか。

「流石淫乱村雨イド。そっちの知識も豊富ですか、お見事なむつつり具合」
「誰が淫乱ですって!?! 村雨は普通の女の子ですッ!!」

反撃に取り敢えず殴る。

姫のパワーで殴ると本来は駆逐艦なら大破確実だが、七海は頑丈である。

たん瘤で済んでいた。

「姉さん……じゃあ、その知識はどこで……?」

「提督の部屋の本棚に入ってた活字の小説」

恐々聞いた春雨も納得した。

そう言えば七海、何故かエロい小説が幾つか本棚に入っていた。

埃を被っているので、読んではいないだろうし、きつと忘れているだけだろう。

図書館のような部屋だから仕方ない。

狭い部屋に転がり込んで生活する皆。

寝るとき以外は狭いから散れと五十鈴が武力介入をして、抵抗する駆逐艦たちを分散させた。

いい加減、四六時中べつたりは止めると怒って、少しでも健全な生活に戻そうと尽力

するが……。

「不健全なら良かろうなのです」

「血迷った台詞を言うなアツ!!」

七海が毎回、夜這いの如く三人や春雨の部屋に侵入しては本人を誘拐して連れ去るのだ。

村雨以外は基本的にウエルカムなので、嬉しそうにお持ち帰りされて大抵気付けば元通り。

七海の部屋で愛の巣であった。

五十鈴の目下の目標は、この脳ミソまで蕩けた変態とそれに適応した四名の健全な生活である。

最近では五十鈴と相部屋の由良のベッドまで侵入しては、由良をも連れ去ろうとしている。

「ダメでしょ、七海ちゃん。遊びに来る時は事前に言わなきゃ」

「そこじゃない!!　そこじゃないから由良!!　真夜中に忍び込む七海がおかしいの!!　叱って!」

由良もすっかり適応しており、優しく別の意味で叱るだけで無意味。

七海も言われた通り事前に言ってから夜這いに来ては、待ち伏せする五十鈴に捕獲さ

れ、キョトンとして戻されていた。

こればかりは、愛情表現かもしれないと、五十鈴のほうに悩み始めた。なんだ、連れ去つちやう司令官とか言う新しい番組かキラクターか。

兎に角、日々の戦いは続く。

そんな七海は、本日二人の着任祝いと称して奢るから好きにしていっていいと言った。

春物のカーディガンを制服の上から羽織る春雨と村雨に、七海。

それぞれ桜色、茶色、焦げ茶と自分の配色であつた。

……好きにしろと言われても村雨は特にならない。

春雨もあまり、行きたい場所はない。

「街には出なかつたのですか？」

「……生前はね、忙しくて。遠征から警備、内部の片付けや手伝い……やること多くて、遊んでいる暇はなかつたの。激戦区だったし」

「そうですね……。司令と会う前のわたしたちは、常に働いていました。何せ、規模が大きいもので」

街に三人で出て歩く昼下がりに。

春の陽気の下で歩く歩道を進みながら、七海に語った。

空を見上げれば晴天で、暖かい風が優しく吹く。梅の花も咲いていた。

そんななか、二人は言った。七海も聞いた。二人の生前の所属は大規模鎮守府。多忙を極め、遊んでいる暇などないし、休暇を取る余裕もなかった。

七海のような小規模な鎮守府だからこそ、遊んでいられるのだ。

「……そうですか。ま、今は違う人生だと思つてください。折角拾つた二回目の時間です。出来なかつたことをするのも、一興ですから」

七海は人間らしく、娯楽を知るのは大切だと説く。

趣味がないと人生は息苦しい。ガス抜きも大事だと言うのだ。

如何せん感覚がない二名は首を傾げるが、七海はにこやかに微笑む。

「これから知りましょうよ。時間はたくさんあります。あたしも、付き合いますから」
気前の良い事で、と村雨は思った。

平和な小規模だから言える方法。

前は着任祝いなど言葉以外は何もなかったのに、わざわざ彼女は連れ出してくれた。成る程、春雨も懐く訳である。彼女はこう見えて、結構世話焼きなのかもしれない。

……それ以上に救いがたい変態であるが。

七海がエスコートしてくれると言うので、任せることにした。

新しい提督の手腕を見せてもらおうと、舐めていた村雨。

後悔することになった。七海は、完全なインドアの人間なのだから……。

「……ねえ、提督」

「ん？」

「村雨を着せ替え人形にして、楽しい？」

「ええ。最高に楽しいです」

「……はあ」

数時間経った。

村雨の両手には大きな袋が沢山あった。

同じく春雨も沢山。服屋や古本屋などを徘徊して、片っ端から七海が買ってくれた。

春雨を試着させては変態的な笑みを浮かべて購入していく。

奢られた村雨も、文句はないが……物量を考えてほしい。

これ以上持てないと言っているのに。

今度は自分で持っている大量の荷物。

まだ増える予定と聞いて、春雨も止めた。

「司令、もうわたしは十分ですので」

「む……？　そうですか」

言い方を考えれば、七海は大人しく止める。

これ以上は買わないでいいと言うと、今度はゲーセンでも行くかと言い出した。「この状態で!?! 待って、流石に重たいんだけど!?!」

村雨が戸惑うと、七海はそのぶん持つので大丈夫と言うのだ。

確かに七海のような身体的なパワーがあれば余裕だろうが……。

(司令、クレーンゲームのお土産が目的ですか)

以前五十鈴に聞いたぬいぐるみの話。

必ず出掛けると皆にお土産を買っていく七海は、今回もクレーンゲームが目的。

異様に上手らしいと、春雨は聞いて思い出していた。

困惑する村雨を引き連れ、三人は向かっていく。

そして、事件は……起こった。起こって、しまった。

ゲーセンにて。

案の定までも増える荷物。

大袋の中に流し込むが、溢れてしまっている。今回はなんか、よくわからないオモチヤが多い。

弥生に似た女の子が抱えるウサギ、変な特撮の変身グッズ、某機動戦士の核装備のプラモデル。

五十鈴には相変わらずのトラックのラジコン。扶桑もそうだった。

春雨はたまに思うが、彼女はあの二名をなぜ自動車と組み合わせようとするのか。しかもトラック限定。いわく、

「物流のプロフェッショナルだからですか？」

「それ絶対違う五十鈴さん!!」

意味不明な理由であった。七海が言うには、五十鈴と扶桑は物流のプロらしい。何を言っているのか理解できず、村雨はツツコミをいれたが聞いてない。

で、七海が自販機に飲み物を買いに向かっているとき。

二人は休憩できそうな場所で荷物を置いて待っていた。すると……。

「ねえ、君たち何してるの？もしかして暇だったりする？」

……見知らぬ男子二名に声をかけられた。

外見は学校の制服。学生だろうか。大体、高校生にも見える。

外見にそれなりに気を遣っている、髪型も決めていそそこカッコいいイケメン。爽やかな少年と、渋い感じの少年であった。

彼らは暇なら一緒に遊ばない？ 奢るし、と誘ってきた。

呆然とする春雨。誰かも知らない子供に声をかけられた。

きよんととして、見ていた。

一方村雨は冷静だった。要するに、学生のナンパか。

艦娘と知らずに、しかも死人であるにも関わらず声をかけてきたようだ。

呆れてしまう。軍属の艦娘に迂闊に声をかければ、偉い目に遭うのは間違いない。

悪いけど一応軍属です、と丁寧に断りしようとしたのだが……。

「……………お前ら、あたしの連れに何をしてんですか？」

凄まじい悪寒を放つ、絶対零度の声で戻ってきてしまった。

(あ、ヤバい……滅茶苦茶怒ってるっ!?)

村雨は直ぐ様気付いた。

彼らの後ろ、極めて不機嫌そうにこちらを見ている司令官様がいた。

真つ青になる村雨。振り返る二名が見たものは……。

「表に出なさい。お前ら今すぐ殺す」

ぐしやりと、大きな音を立ててスチールの缶コーヒを握り潰して、濁ったオツドア

イで無表情で見ている少女。

ボタボタとひしゃげた缶が掌を裂いて、血とコーヒーの混じった液体を流しているおぞましい誰かだった。

「提督、落ち着いて。……民間人に手を出すのはご法度よ。なにもされてないから」
ここぞとばかりに村雨が聞こえるように彼女に言う。

絶句する少年たちが、あまりの剣幕というか、七海の放つ殺気に、思わず一步下がった。

素人でも分かった、怒り狂う猛獣の近くに来てしまったような錯覚。本能的に、危険を理解できた。

「今……提督、って言ったよな……!?!」

「か、海軍の軍人さん!? 嘘だろ、じゃあ軍属の人じゃん!?!」

春雨が我に返って、七海に駆け寄り宥めて後始末をする。

少年たちは、自分の失態に気付いて、慌てて謝罪した。

軍人相手に舐めた行動をすれば、しかも部下にされれば不愉快にもなる。

深くは知らない二人は、頭を下げて何度も何度も謝った。

七海の勢いに気圧されている。今にも殺しに来そうな雰囲気のまま、黙っている。

春雨も、大丈夫だからと数回言い聞かせて、漸く七海は落ち着いた。

掌は、ハンカチが巻かれており、血が滲んでいた。

「……これに懲りたら、二度とナンパなどしないように。次したら、容赦しませんからね」

寛大な処置をありがとうございます、と七海に散々詫びてから二人は逃げ帰っていった。

見逃して貰えたのが分かるや、ダツシユで去っていった。

「提督。少し興奮しすぎ。なにもされてないのに、脅すのは無いでしょ」
「身の程知らずの戯けに、釘を刺したまです。当然の報いですよ」

村雨が指摘しても、怒り心頭の七海は聞いていない。

春雨は素直に助けられてくれてありがとうと言うが、村雨は言えない。

凄まじい殺気を撒き散らしていた。民間人相手にだ。

止めなければ、本当に殺していたように見える。

（おつかないわね……。提督、そこまで村雨たちを溺愛しているの？）
少し刺激されてこれだ。本気の場合は、血を見そうだった。

村雨は落ち着いて、後で五十鈴にも報告しておこうと思う外出であった……。

軍人の矜持

……男は唸る。

(うむ……)

これは、急務である。そして、何よりも成功させなければならぬ任務である。まさか、誰かの尻拭いをさせられるとは、思わなかった。

一度は失敗している。人員の喪失が特に響いている。

だからこそ、男に話が回ってきたのだ。

失敗は許されない。万全の準備を、出来るだけ迅速に、確実に、進めたい。

幸い、最低限の条件は満たした。だが……。

(問題は道中か。さて、弱ったものだな……)

無謀とも言える作戦だ。

冷静に考えて、死に行くのと大差ない。けれど。

「どうした、相棒。敵つい顔が鬼の形相になっているぞ」

数少ない、男と理念を同じくする、優秀な『兵器』が彼に聞く。

男が、軽口を多少は認める少ない例外。理由は、性能と、何よりも志。

そこを、男は高く評価していた。

「……なあ、武蔵よ」

「なんだ、提督」

「貴様、国のために沈む覚悟はあるか？」

「愚問だな、何時でも出来ているとも」

即答だった。まごうことなき国防の想い。

その覚悟と理想が、男の戦う理由と相性が良かった。

大半の兵器は生意気に意思を認めろ、自由を寄越せと喧しい。

やることもせず、使命も果たさず要求ばかりする、浅ましい兵器の紛い物。

そんなものは、解体して資材に変える方がいい。

役目を忘れた欠陥品など、ここには必要ない。

艦娘は国防の道具。戦う代理の兵器に過ぎない。

替えの出来るものを、出来ないものを犠牲に守った救えない馬鹿者がいた。

その結果が、この任務の有り様だ。嘆かわしい。男は隣に立つ兵器に概要を語る。

「……阿呆が、守護の意味を履き違えたか。そいつはどうなった？」

「安心しろ。そのような屑はとうに更迭されている」

「そうか。ならば、良かったな。海軍に無能は必要ない」

武蔵と呼ばれたかの大戦艦は腕を組んで吐き捨てる。

彼女もまた、国のために沈む覚悟はできている。

特に今回の任務は、それが顕著だった。男は言う。

「……私も出るぞ、海には」

「ほう……」

武蔵は興味深そうに男に聞いた。

「相棒。問うまでもないが……貴様も礎になっても良いんだな？」

「無論よ。この国の明日に繋げるためなら、死しても達成する気概だ」

「上等。なら、この武蔵が終の道、共に歩いてやろう」

「バカが。私が死んでも必ず届ける。待っている人々が居るのだぞ」

「言うまでもない。その時は貴様の屍を盾にしても進むだけだ。最後の一人になって
もな」

元よりこの任務は、技術のいる人間が必須。
彼はその技術を持つ人間である。

ならば、我が身可愛さで逃げるなど有り得ない。

椅子を弾いて立ち上がる。受けよう。この任務、必ずや成功させる。

「武蔵、奴等と呼ば。……死出の旅路に、付き合ってもらおうぞ」

「フツ……了解だ、提督」

それは、ある提督の戦い。

命を懸けた、任務の始まりであつた……。

一方、平和なものの某鎮守府では。

「愛しているのよ、司令官をおおおお!!」

発情期の如月が彼女に向かって大告白をしていた。

因みにこれ、一発芸やれと無理強いされてどこぞの主任の真似をしていた。似てない。

何しているかって？ ポーカーで負けた面々の罰ゲームを執行中。

執務室で、休憩時間に遊んでいた。

七海は速攻で似てないので却下とした。

「そんな!？」

「とうか、それは如月の本音でしょう。真似じゃないです」

「……結構頑張ったんだけど」

「可愛いのでアリです」

「やった!」

ちよつとうそ泣きするとホイホイ許してくれるチョロい七海が大好きだ。

如月は嬉しそうに抱きついて匂いを嗅ぐ。

村雨が冷たい目で見ているのもお構いなしだ。

「やっぱり変態……」

「次、ほら出番ですよ。淫乱村雨イド」

「誰が淫乱ですってえ!？」

側で掃除をしていた村雨を巻き込み、一発で怒る禁句を言つて挑発する。

箒を投げ捨てて、途端に怒る。彼女もチョロい。

「撤回してほしくば、一発芸をするのです村雨イド。メイドでも良いですよ?」

「絶対、嫌ッ!! 村雨は服は着ても魂までは売らないわッ!!」

格好は春雨の泣き落としにより、固定化したメイド服。

キーキー怒る村雨に、メイドの真似で許すと誘うと自分からハードルをあげた。

ハツとした時には、口車に乗せられてニヤニヤしている七海が如月を抱き締めて見ていた。

「おのれ変態提督……!」

皆にむつつりの淫乱メイドと言い触らすと言うと、苦悩しだした。

唸りながら、知恵を絞り出す。真似ってなんだ、と考えるが……。

「例えば——鎮守府よ、あたしは帰ってきたああああ!!」

急に野太いオツサンの声で叫ぶ七海。

凄いい真似であった。多分、別世界のソロモンさんであろう。

こんな感じ、と言われて途方に暮れる。

「難易度高過ぎるんですけど!?!」

村雨だけ審査基準が高いようだった。

山風は簡単に済まされ、弥生はどこぞの喫茶店の女の子の真似をして、春雨は言うまでもないメイドだった。

じゃあメイドをしろと迫られて、村雨は苦しむ。

「ふふふ……ご主人様に歯向かって自分から苦しむ様を見せるなんて、なんてエッチなメイドでしょう。はしたない」

「無理矢理そっちに持つていくなあ!! 村雨のイメージが悪くなるでしょ!? 主に向こうに!!」

「……向(っ)う(っ)……」

山風が首を傾げるが、まあそれは置いておく。

元々村雨はエロ艦娘なのは言うまでもない。

伊達に別世界で魅惑の村雨嬢とか言われていない。

(止めて!! 村雨は至って清純です!! 健全です!!)

などと言いつくしているが村雨はエロい。

これは決定事項なので抵抗は無駄。

ごゆっくり、このエロ可愛いメイドさんの苦悩する姿を楽しんでいただきたい。

「こんのオ……好き勝手喋ってくれてえ……!!」

夕立よろしく、ぐるるる……と唸る村雨。

誰に対して怒っているのかは、お気になさらず。

現場にいる七海以外は全員分かってないので。

(村雨のあの悩める表情……嫌いじゃないです)

堪能している七海は上機嫌で笑っていた。

「散々苦しんでいる村雨だったが。」

不意に、シリアスになる知らせが入る。

それは、珍しい連絡だった。

七海は遊びをやめた。皆を部屋に帰してから行動に出る。

そして、こう言うときに頼れる由良と五十鈴を呼んだ。

顔を出した二人に、単刀直入に切り出した。

「島村提督から、共同任務の持ちかけを受けました」

七海が受けたのは、先日押し掛けてきたハゲの島村提督。

それが、緊急任務を遂行するので、少し手伝ってもらえないかという話だった。

嫌そうにする由良と、神妙に五十鈴は聞いた。内容は何だと。

「護衛任務ですよ。それなりの大きさの船を一つ、内海に出すのだそうです。その護衛を頼まりました。ご指名に、あたしを」

名指しで七海を貸してくれと言うのだ。

何よりも驚いたのが。

「船には、生活物資などに加えて、間宮や明石が乗り込んでいます。更に、島村提督ご本人が、船の操船をするそうです。つまり、あの人……ただの人間なのに、海に出る気なんです」

「!？」

異例の話だった。

司令官である提督が、物資を運ぶべく……自ら船の舵を取ると言うのか。

五十鈴は絶句する。あの男、自分から死に行くような真似をしているのか。

「理由も伺いました。取り敢えず、説明しますね」

七海ですら、若干戸惑っているように、二人に……概要を打ち明けた。

前提が、まずこの任務はある孤島に物資を運ぶ貨物船が沈んだ事から始まった。

貨物船は、ある内海に存在する孤島に毎週、物資を定期的に運ぶ役目をしていた。

孤島には未だに年寄りを含めて、そこそこの島民が住んでいる。

だが、最近になり深海棲艦が海路に現れて、貨物船を邪魔している。ある提督が、その深海棲艦を撃破する任務を受けたのだが……。

道中、大破した艦娘が出てしまい、何と任務を放棄して撤退したらしい。

目の前には、その肝心の深海棲艦を残したまま、敵前逃亡を図ったのだ。

で、もう安全と思つて予定通り貨物船は海域に入り……沈んでしまった。

入れ違いで船と艦娘は移動していたらしい。連絡もしていないままだった。

物資、人員、諸とも海の藻屑となった。貴重な島民の綱を、全て失つた。

で、それを行つた提督は当然、更迭され軍法会議にかけられた。当たり前だ。

貨物船の船員の命と島民の命綱よりも、たつた数名の死んですらいない艦娘を優先した。

おかげで数週間、孤島の住人は物資を得られずに危険な状態になった。

年寄りばかりの島のせいで、医薬品などが特に危険だとか。

で、今時海軍にも海を走るようなそれなりの船の操船をできる人間は少なく、確保できないまま時間だけが過ぎていく。

幸い、艦娘の間宮や明石、一部の憲兵が医者への代わりも出来るようで、人員と物資は足りた。

だが、操船を誰も名乗りでない。深海棲艦が未だにいる海には出たくないと、臆病風

に吹かれているようだった。

提督は鎮守府で指示をするもの。自分から海に出るものではないという固定観念。資格を持っていても拒絶している。時間だけが過ぎていくのか。

島村提督は、名乗りをあげたらしい。

「国民の一人であろうと、待つものがあるならば、私が行こう！」

堂々と、ただ一人臆することなく受けると言い出した。

無論、命懸けだ。普段とは違い、自分すら死ぬ可能性があった。

なのに、島村は怯まない。

「国民の生命と、自分の命、どちらが大切なのだ!? 軍人ならば、国民を優先するべきではないか!!」

と、聞いた提督の胸ぐらを掴んで怒鳴ったらしく、彼は自分の命を擲つてでも成し遂げると言う。

……以前、国防のためなら死んでもよいと言った彼の言葉に、嘘はなかった。

彼は確実に成功させるために、惜しみ無く戦力を投下して、護衛に七海まで要請した。恥も何もない。大の男が、土下座をしてもいいから手伝ってくれないかと頼み込んできたのだ。

「頼む、渋谷提督。私に、力添えをして貰えないだろうか? 国民を、守るために」

敵の戦力を自前で叩くため、護衛の戦力が残っていない。

そこで、七海や他の鎮守府から借り入れた艦娘で対応する作戦だそう。

護衛が失敗すれば、反省を踏まえて沈まない特殊なコンテナに入った物資は兎も角、人員はまた全滅するだろう。

それでも、島村は行くと決めた。命を懸けて、任務を遂行すると。

その連絡を、受けたのだった……。

「あたしは受けますよ。興味ありましたし、何よりも……借りのある人間に、返す前に死なれるのは困ります。その心意気も鑑みて、あたしも命ぐらいなら懸けましょう」

七海としては、受ける気だった。

啞然とする由良は分からないが、五十鈴は前に夜の警備に出たときに言っていた事を思い出す。

やってみたかったとは言いが、まさかあの男が操船する船とは……。

七海は勝手にやった事とはいえ、島村に以前助けられている。

助けられた恩は返すというまた理屈で判断していた。自分の命とは桁が違うだろうに。

由良はあまり勧めないと言うが、五十鈴は違った。

(由良が言つてたあの台詞は、建前じゃないわね。血迷つたとしか思えないけど、矜持の為に前線に出る度胸……。並大抵の提督に出来ることじゃない)

誰でも死にたくはない。

なのにこの男、自分で死に行くような作戦を自分で言い出した。

大したものだと、五十鈴は内心見直した。ただの外道、という訳でもない。艦娘の命を使い捨てるように、国防のためなら自分の命すらも使い捨てる。

少なくとも、礎になる腹は、決まっているようだ。

「……いいわ。七海が行くなら、五十鈴も行く」

五十鈴は決めた。こういう男は、ここで死ぬべきじゃない。

もつとも死ぬなら、別の場所な気がした。

奴を擁護する気は更々ないが、だが島村の矜持だけは、理解した。

口先だけではないなら、何よりも七海が手を貸すというのなら。

良いだろう。その酔狂な作戦に乗ってやる。

「五十鈴!」

由良が驚いて五十鈴を見た。

七海を止める気はない。どうせ、国防とか七海には無いだろう。

自分の理屈のために動いているだけ。

島村に死なれたら困るから、手伝うだけの七海だ。

マトモじゃないが、島村は少しはマトモな理由。

由良には、分からないだろうけど、五十鈴はどこかわかった気がした。

五十鈴と七海が作戦に参加すると言うと、由良も心配なので行くと言い出す。

更に翌日、どこで知ったのか如月と春雨も参加すると言い出し、最後には村雨も来た。

結局、揉めるので秘密にしたまま、重要な作戦のために少し留守にすると行って、皆

は出掛けていった。

外道と呼ばれる巨漢と、命知らずの女子高生の危険な二名が、とうとう海で作戦を共にする日が、来てしまうのだった……。

違う、そうじゃない

一行は、ある港町に向かっていた。

朝早くから、工場の珍獣に働かせて、装備を整える。

素早く皆で点検だけして、早朝に迎えが向こうから来たので乗り込む。

どうやら、島村提督の鎮守府の憲兵らしい。

「……今回は、ご協力……本当に有り難うございます。差し出がましいのですが、一つお願いがあります。どうか、あの人を、死なせないで下さい。島村提督は、この国に必要な人。国防に魂を捧げた豪傑を失うにはあまりにも惜しい。お願いします、渋谷提督。彼とともに、帰港して下さい」

運転をする若い憲兵は、彼女の評判は知っているだろうに、然し必死に七海に頼み込んだ。

艦娘からの評判は最悪だが、人徳はあるらしい。

意外そうに見ている皆に代わって、七海は朗らかに答える。

「元より、そのつもりです。死なれたら困るのは、あたしも同じなので」

「……はい？」

七海は、簡単にこの作戦に手を貸した理由を言った。

みるみる、憲兵は驚愕の表情になる。

「以前に助けられたから、助け返す……？ あなたは、それだけの為に命を懸けるんですか!？」

「ええ。生憎と、あたしは愛国主義ではありません。強いていうなら、島村提督個人に対する恩の為に来ました」

「……渋谷提督。あなたは、どれだけ義理堅いのですか……」

受けた恩は絶対に返す。それだけの理由で馳せ参じた。

唾然とする憲兵。筋を通すのに、己が命を前に出す。

普通の高校生にできる所業ではない。

「島村提督は、ご友人に恵まれたようだ。まさか、同じ提督で、彼のために参じてくれる人がいるなんて……」

憲兵は七海の心意気に感動しているようだが、それを見る五十鈴は思った。

絶対に思っている事とは違う。七海は、言った通りの理由だろう。然し。

(憲兵さん……うちの提督はね、自分の価値を擲つ自己犠牲の異常者なだけ。戦う理由を理屈でしかまだ、判断できないから……。けど、この娘なりの道理を通す。だから、必ず連れて帰ると約束するわ)

島村は基本的には周囲からその考えゆえに、孤立する。

味方はいるが、本人が来ることはまずない。

大体、考えに賛同するのであつて、個人の為でもない。

七海は逆だ。考えなどどうでもいい。彼のために訪れた。

彼個人に返すべき物がある。ただ、それだけに命を懸ける。

極端な思考だろう。だが、七海はそれ以外に助ける理由も義理もない。

逆を言えば、彼が以前にやってくれなければ、適当に言い分を探してあつさりと無視していた。

つまり、今回七海を動かしたのは、島村の行いその物であり、それが七海の戦う理由。彼の人徳と言え、人徳であつた。

憲兵は代わりに何度も礼を言った。半分感動でむせび泣いていた。

よくわかつてない七海だが、こんなサイコパスでも人助けは、出来るのだ。

進む自動車。目的地までは、あと数時間……。

内海の孤島に続く港町。

その鎮守府の設備を一部お借りして、荷物を運搬している頃、皆は到着した。

ここの提督は島村の知り合いで、然し戦力的に対岸の深海棲艦を叩ける戦力はない。故に、支援をしてくれる。せっせと艦娘が、件の船にコンテナを運んでいる。

「……規模が大きいですね」

港に泊まっていたのは、海軍所有の貨物船だった。

随分と大きい、七海の想定していた物よりも大型の船であった。

外観には装甲を纏っているようで、そこは流石は海軍か。

民間の船が沈んだから、詫びも兼ねて自前で調達したらしい。

七海はそれを見上げて、感嘆していた。

五十鈴たちにも、運搬を手伝えと命ずる頃、誰かが彼女の後ろから気づいてこちらに
来た。

「……あなたが、渋谷提督か？」

それは、かの大戦艦……武蔵だった。

きつちり制服を着こなし、眼鏡を光らせた七海よりも大柄な褐色の肌の女性。振り返る七海は、何事かと彼女を見上げた。

……視線が交差する。武蔵は値踏みするような視線。

七海は、何も浮かべないどこか威圧的で無機質な視線。

一瞬で、武蔵は驚く。

「……ほお。駆逐艦の艦娘と聞いていたが、この武蔵を目力で怯ませるか。成る程、出来るな……」

「？」

静かな気配を気付いていた。七海が無意識で放つ、警戒の色を殺気として。

小声で、頼もしいように呟いた。

握手を求める武蔵に、七海も丁寧にあやまって、応じる。

「この度は、あなたの応援を島村に代わって、感謝する。うちの相棒は、あなたを枠に囚われない自由な方と称していたが……自分の目で見ても、納得したよ。あなたは、強いな。無謀な作戦だというのに、もう肝が据わっているように見える」

「お褒めに預り、光栄ですが……そんな大層なものでもありません」

そう、七海からすれば大袈裟モノでもない。

死ぬ気がないから、動揺しないし、緊張もしない。

異常者特有の平坦さが、武蔵には冷静に見えるようであった。

「護衛の方は、これを見てくれれば分かるだろう。現場の指揮は、うちに一任して欲しい」

「お任せします。あたしは、護衛は初ですので、要領が分かりません。ですので、島村提督の采配に一任します。何なら、あたしも遠慮なくお使いください」

適材適所を言い出す七海は、自分も使える時は使えと、作戦内容を書かれた書類を受け取り、言った。

「こちらも、持参した装備を纏めたりリストを手渡す。」

武蔵はそんな七海に苦笑する。

「……本当に、あなたは豪胆だな。相棒に使われるのが怖くないのか？」

暗に、必要ならば、遠慮なく彼は自分以外の鎮守府の艦娘すら犠牲にすると云っている。

七海は、それに対してこう返した。

「島村提督の流儀は資料で拝見致しました。どうも、特化させた方が運用に関して効率がよいとのこと。故に、こちらは全員が特化しています。それ以外の運用を、島村提督がすると思いますか？」

「……歩幅を合わせてくれたのか。彼奴のために」

無理な運用をさせない予防として、皆が特化した装備を持つてきた。

如月、由良は対空、五十鈴は対潜水艦、村雨、春雨、七海は水上打撃力。

他の艦娘の装備も事前に聞いていたので、全体との擦り合わせも完璧にしておいたつもりだ。

護衛に関しては何分初挑戦。

経験者がしやすいように、徹底的に七海は氣遣っている。

全体の指揮を務める島村のやり方に合わせたのだが、何か不都合でもあったのだろうか。

それもこれも、ただ自分のところの艦娘に無茶をさせないよう、言う前に最適化をしただけ。

島村がそういう人物だと知る以上、対策はする。それでもするなら、牙を向くだけだ。

皆を守る以外はどうでもいい。最善を選んだ結果が、たまたまこうなっただけの話。

武蔵はそれを知らない。七海はわざわざ、島村に合わせたと思っっている。

「フツ……渋谷提督。私は、感謝の言葉をあなたに言い尽くせない。未だ嘗て、ここまであいつの覚悟と矜持を理解してくれた提督は居ただろうか。私は長いこと、奴の理想と同じ夢を見ていたが、ここまで共に来てくれる人を、初めて見た……」

目頭が熱くなったのか、眼鏡をはずして武蔵は軽く腕で拭った。

勘違いである。七海はそんなものの微塵も興味がないし、理解はしたかもしれないが、共感はしていない。

全て、結果論であつた。

だが、七海は何を言っているのかまたも分からず、訝しげに見上げているのみ。どんどん、良いのか悪いのか分からない誤解は広まっていく。

運悪く、丁度本人も登場して、挨拶をしてから武蔵が喜び、言つたのだ。「見ろ、相棒。渋谷提督は、貴様の覚悟を受け止めてくれているぞ」

そう言いながら、書類を見せた。

彼は直ぐに目を通し、聴て。

「……渋谷提督。私は、貴女にどれだけ恩返しをすればいいのだろうか？」

こいつまで、拳を握つて、感動していた。

何故だろう。話せば話すだけ、何やら見えない会話が続く。

(ど、どぞの芸人ですか……?)

これ以上の放置は不味いので一応、ここに来た理由を率直に話した。

彼の言葉には、説得力はあると思う。だから、来た。島村を死なせないため。

七海は、個人の為にここにいる。

彼に受けた恩を此度返すべく参上していると。

「……そうか。たったそれだけの為に……」

おかしい。誤解を招かないように正直に言ったのに、今度は人前で号泣し始めたこのハゲ。

なんで？ と首を傾げる七海。

理解できないを通し越して、意味不明だった。

「渋谷提督。貴女は、人が良すぎる……。あれは、私の謝罪の行為だったのだ。恩を感じる必要などない。なのに……貴女は、あれを……たった数時間の行為を、命懸けで返すと言うのか……。私はつくづく、貴女を甘く見ていたようだな……」

何の話だ。

大体、島村の言い分など言われなくても筋が通っているし、その言葉が嘘ではないと行動で示したではないか。

魂を懸けた行為を、他は兎も角七海はマトモな動機だと思う。

で、その行為で彼に死なれたら、七海は永遠に借りを返せなくなる。

七海は、皆を死なせないために最善を選んだ結果に過ぎない。

全ては、自分の鎮守府の艦娘のため。

島村の矜持は二の次。と言うか、興味なかった。

「……そうか。こいつの矜持をやはり理解してくれるか」

待て。だから、何でお前ら泣いているんだ。

感動している理由が分からない。

そんなに島村はおかしな事を言っているのか？

七海はあれとしても、軍人としては真つ当だろうに。

七海の言葉に、二人は何故か礼を言った。

「なあ、相棒よ……。彼女は、貴様に死ぬなど言つたぞ？　つまり、貴様の命は貴様だけのモノではないようだ」

「ああ、私も未熟だな。痛感した。私は生きる。生きて、国を護らねばならぬことを思い出した。死を覚悟するなど、戯けのすることだつたな。甘かつた。そうだとも、生きることこそ国防だつた。私は誇りある防人として、提督として、役目に従事せねばならぬ。私の命は、私のモノではない。日本と言う、国に捧げるべきだつたのだ……!!」

ヤバい。見えない世界に二人で入っている。

豪快に泣きながら、武蔵と島村は互いの甘さを指摘していた。

要は、死ぬ覚悟で行く前に、生きて帰ることが真の誉れであり、役目であると。

生きる限りが防衛の使命で、死を覚悟するのは甘えと言うのか……？

(ちよつとなに言っているか分かりません……)

どこまで国を愛しているのか、この二名。

七海にはちんぷんかんぷんの事をくそ真面目に語っている。

「武蔵。我が主力艦隊に、通達せよ。……深海棲艦は、殺せ。そして、貴様らは生きて戻れと。貴様らの役目は、死を弾き飛ばし生き、終わりなく戦うこと。役目を果たすなら、敵を殺して戻れと。いいな？」

「応、任せろ。良いだろう、共に沈み礎になるのも悪くはないが……それは、まだ先の話だったな」

七海の知らぬ世界で、重要な変化があつたことを、自覚していない。

島村は気付いた。彼の主力艦隊には、死力を尽くして殺せと命じた。

最悪、諸とも沈んでも、だ。

だが、七海の行動で気付いたので。それは、甘いと。

真に目指すべきは、生きて次の戦いに出向くこと。

自分の命を自分のモノだと思ふなどという、七海の痛烈な指摘であつた。

国防を言うのならば、命を尽くせ。それは戦いではなく、国に。

国に命を捧げるのだ。死ぬべき時は、国が決めるまで、死ぬな。

そういう意味だとまたもや勘違いしていた。

「……えっ？」

七海、呆然。颯爽と去っていく武蔵と、気づかせてくれて有難うと言う島村。

何を言っているのか処理できない七海はなにも言えない。

困り果てる彼女と共に、咽び泣いたハゲは、生きるために戦う。
運命の護衛の、始まりであつた……。

待て、こうでもない

作戦を実行するため、突撃艦隊は先んじて抜錨していった。

島村が言うには、先ず進路の邪魔な深海棲艦を撃滅。

それから、貨物船は護衛をつけて出港するという。

作戦時間も詳細に記され、敵の規模も記されていた。

どうやら、上位のモノは居ないようだが、種類が違う。

エリート、フラグシップと呼ばれるより強い個体が徒党を組んで待ち構えているよう
だ。

幸い、孤島には手出しをしないようで、あくまで海上に群がっている。

戦艦と空母がメインで、あとは駆逐と重巡、軽巡が多数ぐらい。

性能も数値化された予想が書かれ、複数のパターンを想定しているらしい。

七海は見たことのない個体が居るわけだが、島村いわく侮れない。

これだけ集まると、下手な姫よりも厄介で、手数で攻めてくるので面倒臭い。

故に、大火力で短期戦を仕掛けると言った。長引けば島民も辛くなる。

只でさえ時間も戦うのだ。短期決戦を仕掛けるしかない。

潜水艦は敵の艦隊には確認はされないが、護衛する貨物船を狙うかもしれない。

護衛の人数も、失敗できないと過剰にいた。

しかも、貨物船その物も装甲で覆われているため、早々に沈むことはない。

島村が無理を言って借りてきたと他の艦娘が意外そうに言っていた。

(……本気で、島の人々を守ろうって言うんですね)

七海は信頼はできると改めて思う。

民間人のために自ら船を操る覚悟。

失敗しないために何重も敷いた予防線。

島村は使命に燃えている。

敵を叩く主力艦隊は、旗艦の武蔵を筆頭に、戦艦霧島、空母は葛城、天城に飛龍、重

巡には那智や足柄、軽巡にも阿賀野に球磨、駆逐にも島風や雪風、潜水艦も多分かなり

珍しい海外の艦娘まで連れてきている。

彼女だけは名前は読めないが。イタリア語か？

装備も一通り拝見した。最新の主砲から機銃、魚雷に高性能を突き詰めた電探、ソナー。

挙げ句には砲弾すらいくつも用意して、用途によって撃ち分ける予定だそう。で、恐ろしいのはその練度。七海もそこそこ高いと思っていたが……。

(……平均値、約85？ 最大で、武蔵さんは……最大値？ どう言うことですかこれ!? 何を島村提督は想定しているんですか!?)

目を疑った。島村はこの海域から深海棲艦を根絶やしにする気が。

輸送任務の筈だ。なんで決戦のような想定で準備をしているんだ。

いや、だが。そこで思い出す七海。この判断はあながち、間違いではないのかもしれない。

ここは以前、姫よりも上位……水鬼と呼ばれる存在が嘗て支配していた海である。

泊地水鬼とかいう、強い深海棲艦が前にはいた。

何年前かに追い払われて以来は、戻ってきていないと書かれているが。

(万が一、ですか。居るかもしれない泊地水鬼を警戒して、襲われても迎撃できるように……)

追い払っただけ。撃破には至っていない。

それを懸念して、島村はこの重装備を進めているのか。

姫を超える悪夢が戻ってきてても、人々が安らかに眠れる日々を作るために。石橋を叩いて渡る。慎重な男であつた。

あらゆる状況を予想する島村。樂觀視しない彼の采配に文句はない。

用意周到にしておいて損はない。成功率の上昇は喜ばしい。

彼女も彼の心配は賛同する。

先に出ていった皆を見送り、着々と準備を進める一行。

一時間後、鎮守府の提督に見送られて、島村操る貨物船は、周囲を守られながら、出港していった……。

予定では、五時間後には到着する。

昼下がりの内海のご真ん中。七海は、船の周囲を隈無く警戒している。

貨物船を囲む艦娘たちにより、超広範囲の対空、水上、水中を全員で見張っている。

貨物船の内部にも軍用なので電探を搭載し、共有しているからより範囲が広い。

無線を聞いている七海。貨物船の速度は速くはないが、遅くもない。

島村は操舵しながら指示を出している。

敵の戦力も此方にも教えるが、想定よりも少ないようだ。

油断をするなど言いながら、逐一指示を出し続ける。

細かい戦況の確認と変化する状況への最適な答えを直ぐに出す。

更にはこちらの状況にも目を配り、的確に動かし、尚且つ自分は操船を続ける。

並行作業がとてつもない集中力を要するのに、島村は完璧にこなしていた。

(あたしよりも指揮の能力は間違いなく上……流石ですね)

七海のような平和な海域にはもて余す才能だろう。

激戦区に相応しい島村の能力は、聞いていて勉強になる。

とは言うが、最近では現場の指揮が多い七海に通じるかは不明だが。

思っていた以上に、護衛は気を張っている。

七海は皆よりも一回り上物の電探を使うので、死角をカバーしないといけない。

更には、唯一の従来型の艦娘に加えて、春雨と村雨の事もある。

同じ護衛の艦娘に、嫌そうにされたのを見る前に見た。敵意。それを、あの二人に向

けていた。

(戦いの最中に裏切ったりしたら、殺しましょう)

あの二名に万が一を出したら、七海は島村が止めても手を出すつもりだ。

島村も事前に言っていた。あの二名は味方だ。誤射をしたら、覚悟しておけと。

誤射を故意と受け取り、理由を無視して厳罰を与える。

最悪、解体も已む無しと脅したのだ。他の鎮守府の艦娘だろうが、裏切りは死刑だと言う意味で。

七海の敵は、深海棲艦だけではない。

事情を知らない、無関係の艦娘も入っている。

七海が人だと、艦娘だと言えど他人は一切関係ない。

深海棲艦だと決め、どさくさ紛れに殺しに来るかもしれない。

島村は兎も角、他は一切信じない。七海は義務があるから。皆を守ると言う。

故に、連中の動向にも気を使う。

叩いている主力艦隊。現在絶賛戦闘中で、状況は有利だそう。

現在、敵を全力で潰して、念のため倒し終えたら合流する前に、周囲の哨戒をしておくと言った。

此方は、まだ余裕があるようだった。護衛も、全員に今のところ異常はない。

このまま、彼女たちが倒して何事もなく到着して終わってくれば、大袈裟になることもない。

油断する気はないが、平穩であつてほしいと思う。

……けれど。

世の中、そんなに甘くはない。

必ず、海には敵がいる。

そう。一番の想定外とは、例えば。

前線で叩いた本来の深海棲艦とは別の。

護衛の方に近い、不意打ちの出会いとか。

警報が鳴った。前方に二つ、反応を発見。

……それは、最悪の邂逅。

七海も、島村すら考えなかつた予想外。

本来の居場所から随分と離れていた場所で、交わつた。

姫との、出会いであつた……。

「……………。
不味い」

前方、かなりの距離があるが、人影を二人確認。

人の形をするものが、何やら突つ立ち、待ち構えているらしい。

島村はぼやいた。主力艦隊はまだ戦っている。

護衛の戦力を大幅に超える相手がいた。

貨物船は、停止した。そして、皆に告げる。

まだ、攻撃はされないが、深海棲艦が前方に居座っている。

その種類は……。

「……例の泊地水鬼、そして……空母水鬼」

……なんと。最上位である水鬼二名がお出迎えという最悪の事態に陥った。

護衛の想定はあくまで普通の深海棲艦。いや、主力艦隊とて水鬼二名など考えていな

い。

予定の海路の真ん前に待ち構えて、全く動かない。

進路を変えれば、進めはする。だが、背後から襲ってくる可能性しかない。

なぜこの距離で仕掛けてこないのかは不思議だが、立ち往生を食らっていた。

「ぬう……」

唸る島村。

主力艦隊は戻れない。護衛の戦力では倒せない。

一度引き返して航路を変えるか。それも可能だが、果たして無事に逃がしてくれるか？

明らかに此方を捉えているが、仕掛けない謎の行動。

待っているのか。ここから先は、通さないとでも言いたいのか。

進めば沈められるか？ 力づくは無理だろう。

勝てる相手ではない。数秒、迷う。

すると。

「あ、島村提督」

一人から通信。七海であつた。

島村は、同じ提督なら打開策をあるのかと思ひ、何事か問う。

すると、確かに打開策は、出た。但し、それは島村提督の十八番のやり方で。

七海にはするまいと、密かに誓っていた方法であつた。

「あたしが奴等を足止めします。今のうちに迂回を」

七海は水上打撃力を減らす代わりに、時間を稼ぐと自分で言い出した。

五十鈴たちがバカを言うなとすぐに割り込むが。

「五十鈴、黙りなさい。これは提督同士の話です」

七海が初めて、牽制する言い方で黙らせた。

邪魔をするなど言われて思わず黙る五十鈴。

島村すらも困惑した。彼女は自分から……志願している。

死線に、行くというのか。

「渋谷提督、正気か!?! 待つんだ、貴女とて水鬼は対処できない!!」

「立ち往生よりは余程良いかと。なに、春雨と村雨も連れていきます。これなら、大丈夫でしょう?」

七海は笑っている。笑って、姫である春雨と村雨を連れて時間を稼ぐと言うのだ。

能力的には負けてはいない最強の三名が、水鬼に立ち向かう。

そうすれば、確かに打……時間を稼ぎ、航路を変えて迂回できる時間ができる。

だが、それは……七海の死を、意味するのではないか?

「渋谷提督、貴女は……」

愕然とする島村。彼女は、犠牲になる気なのか?

島村に、任務を成功させるために、最善策として、自分を躊躇わずに賭けに出せるかは。

思った。彼女への底知れぬ恐怖に似た感情を。笑って、死に行く少女を。

「……島村提督。この任務は失敗できないんです。だったら、手段を選ばないでください。あたしが軀になっても、越えていってください。今一度問います。島村提督、あな

「たの守るものは、何ですか？」

理屈で説き伏せる。いつも通りのやり方なのだ。七海が相手でも躊躇うな。犠牲にするならしろと言ったはずだ。使えるなら七海でも使えと。

そのつもりで、七海も受け入れている。迷うなど、背中を押すように。

良いから、行け。時間がないなら稼ぐ。早くと急かす七海。

グツと、島村は帽子を強く握った。

歯軋りをしてから、舵を掴んだ。

……覚悟は、決めているのだ。迷う理由などない。

選択肢を誤る気もない。行けと七海は提督として言った。

だったら、同じ防人の誇りに誓って。

「全員に通達する。駆逐艦夕立、春雨、村雨の三名を残し、我らはこれより航路を変更する」

わざと艦娘として扱い、思い切り舵輪を回した。

迂回するために、ゆっくりと動き出す貨物船。

「七海!?! 何考えているのよ!?! ねえ!?!」

五十鈴が混乱しているのか叫ぶが、駆け寄った二人に何やら耳打ちしている七海は、笑ったままだ。

由良も必死に説得するも、ダメと言って切り捨てた。

「如月？　ちゃんと、お仕事続けるんですよ？」

「はい！　司令官、いつてらっしゃい！」

唯一、笑顔で送り出すのは自称嫁の如月だけであった。

手を振って、引き続き任務を遂行するように命じた。

引き返す貨物船を追いかける五十鈴たちは、何も理解できずに困惑したまま、戻っていった。

その背を見送る三人。特に、村雨は呆れていた。

「提督……。せめて言いましょうよ……」

「言う暇ないですよ。だってほら、時間ないし言っても無視されますし。攻撃してこないパターンは春雨で知ってますから」

彼女は独断で判断していた。これは、また春雨と同じ場合ではないかと。

空母水鬼。一部では、聞いたことのある艦娘と姿が似ていると言われる。

既に一種の定常を知る七海は、勝手に決めた。

「さ、ちよいつとお話に行きましょう。ダメなら逃げ回っておけば良いでしょう」

「ええ……村雨自信ないのに……」

「わたし、頑張ります!!」

七海は村雨、春雨の二名の深海棲艦を連れて移動を開始する。同類なら攻撃されないんじゃないかと、という短絡的な思考だったが、果たして……。

「ねえ、飛べないのよ……分かる？ 私、もう飛べないのよ……!？」

「すみません。出会い頭に何ですかあなたは」

マジでまた話を通じた。村雨は言葉を失った。

しっかりと言葉が通じていた。何やってんのか能天気の声かけると。

「ああ、良かった!! 漸く話を聞いてくれる艦娘がいたわ!」

空母水鬼の方は、仏を見たように助けを求めた。

変な奴に絡まれて動けないから何とかしてと言われるが。

「あの、わたくしこれでも艦娘なんですよ。一応! 見た目、深海棲艦ですけど!! 空

母、翔鶴なんです!」

「……はあ。でこつちは?」

「私は元々艦娘じゃないわよう……！　自分でもさっぱりなんだから無理言わないでエ……！！」

案の定だった。なんか、立ち往生しているから変だと思つたら。

此方が立ち往生していたらしい。

ホツとする空母水鬼は翔鶴と名乗り、泣きべそをかく泊地水鬼はよくわからない。

また、得体の知れない深海棲艦が居たものだが。

「邪魔なので退いてください」

と言つて、無理矢理七海は二名をやっぱり連れ帰つてきた。

「流石司令!!」

「……どういふことよ全く……」

春雨は褒めるが、村雨は疲れる。

何だか分からないが、とりあえず……深海棲艦二名、無事に捕獲するのだつた……。

プリンセスと変態の邂逅

「私はここを支配なんてしたことないわよう……。気づいたら海に突っ立ってて、なにもしないのに皆に襲われるのう……。深海棲艦だつて襲つてくるのよお!? なんでのよお!？」

移動中、話を詳しく聞いた。

とりあえず、島村の目指す島には近付けない。

そこでは人間が暮らしているし、現在戦っている最中である。

死にいくようなものだ。

一応、知られないように通信は切つてある。

無線で聞かれることはない。なので、ちゃんと話を聞く。

泊地水鬼が言うには、自分が何故生まれたのか、何故知識があるのかは不明。

自覚もないし、理解もできない。ただ、道中において何故か泊地水鬼まで雑魚が襲つ

てくるのを確認した。

少なくともそれは嘘じゃない。あとこいつ、戦う力がない。

艦装を使わず浮ける代わりに、武器を持ってないそうぞ。

あと、イ級の砲撃で悲鳴あげているので、相当脆い。

七海のデコピンで泣きつ面になったほどだ。こんな弱いのが、海域支配を出来るものか。

なので実質無害。見た目だけだった。

「然し、名前がないのは不便ですね……」

当然、生みの親が居ないので名前もない。

泊地水鬼という名称も初めて聞いたらしい。

なので、七海はあだ名をつけた。

「泊地水鬼……泊地……。ああ、もう。面倒なのでパクチーで良いです」

「パクチー!?!」

食い物の名前であった。適当で、最低な名前だった。

村雨が思わずツツコミを入れる。

「待てそこお!! 無害だからってパクチーはないでしょ!? パクチーって野菜じゃない

!!」

「……村雨。あなたの妹も食べ物の名前ですか？」

「春雨と一緒にするなアツ!!」

グーで殴った。この女、妹の名前を食える方の春雨と抜かしやがった。

キレて殴る村雨に、泊地水鬼こと、パクチーは。

「パクチー……? あらあ、良いわよおその名前……」

「いいの!? 食べ物よ!」

意外と気に入っていた。

恍惚として、白い頬を赤して七海に礼を言う。

全身、見たことのある白いドレスに似た格好のパクチー。

名前を贈られて、なんというか……幸せそうだった。

「だってえ……あなたの妹も食べ物でしょお?」

「潰すよ?」

村雨が怒りマークを浮かべた笑顔で軽く脅すと怯えて止めてと懇願する。

こいつ、一応水鬼だろうに……。形無しである。

渦中の春雨は、気にしないと朗らかに笑っている。

この異常空間に早くも対応していた。

「楽しそうな艦隊ですね……わたくしも、是非七海さまの鎮守府に参りたいです」

「その方向ですよ翔鶴。大丈夫、水鬼だろうがあたしは艦娘として、人間として扱います」

空母水鬼こと、翔鶴は羨望の眼差しで春雨と村雨を見ていた。

七海の言葉が嘘じゃないと目の前に証人がいる。

こんな風変わりな提督を兼ねた艦娘が居たことにまず驚いた。

何故か彼女は黒い春物の長袖と黒いダメージジーンズにロングブーツという格好だった。

見た目も長い白髪に、深紅の瞳と、随分と様変わりしている。

彼女いわく、艦装は使える。なんか動いている生物的なものが居るらしい。

試しに出してくれた。

腰かけられそうな、大きな白い球体に前歯が剥き出しの大口のついた艦装だった。

海から突然出てきて、ハッハッと呼吸している。目玉も鼻もない、口だけの謎の球体だった。

「……翔鶴。これ、浮遊要塞……」

「浮遊要塞？」

七海は驚いていた。

彼女が艦装という物体は、深海棲艦浮遊要塞。

武器と言うよりは、深海棲艦その物だ。

ドン引きの二名と、パクチー。

「パクチーも引くの!？」

「だって……怖いじゃないのよお……」

村雨、啞然。パクチーが言うか。

お前とて仮にも最上位の深海棲艦だろうに。

という内心のツツコミを控える。これ以上いじめたら流石に良心が痛む。

「え？ そうなんですか？ 沢山居ますよ？ ほら」

パチンと指を鳴らすと、次々出てくる浮遊要塞。

ニヤニヤしている奴等を見て、七海は急に嬉しそうに言った。

「乗っかって水上バイクみたいにすっ飛ばしたりできませんか!？」

「出来ませよ。結構速度出るんで」

翔鶴は笑顔で可能というので、皆乗っかる。

翔鶴は足を組んでどこかセクシーに。

パクチーはしがみついて落ちないように。

村雨は恐々腰掛け、春雨は興味深そうに座った。

七海はノリノリの立ったまま乗った。何してるんだこいつは。

で、加速して移動開始。すつ飛ばす浮遊要塞。凄い速さだった。
「んぎやあああああああ!!」

凄い絶叫を。パクチーが真っ青になって上げていた。
彼女、結構面白い娘かもしれない。

「いいいいいいやっほおおおおおお!!」

七海さん楽しそうである。

こんなことしている間に、事情を知らない姉達が心配しているというのに。
大喜びのサーファーのようだった。

で、一通り遊んでから。

目的地をどうするか決める。

浮遊要塞に乗っていると、勝手に口から砲身が伸びて勝手に迎撃してくれるようであつた。

護衛を任せて、話し合うと、パクチーがこう言い出した。

「実は……私、知り合いが近くの島にいるのよお。同じような境遇だから、大人しく隠れているんだけどお、保護してくれない……?」

因みに状況は同じで、右も左も分からない記憶喪失状態。

だから助けてほしいと。当然了承の七海。二つ返事でオツケーだった。

(まだ増えるのこの珍道中……)

村雨は内心諦めた。疲れる。五十鈴が苦勞するわけだ。

この好き勝手な自由奔放の阿呆を野放しにすると、何処で深海棲艦を拾ってくるのかつたものじゃない。

お前もその一部だという虚空のツツコミは無視する。

翔鶴も仲間が増えると嬉しそうに喜ぶ。春雨も然り。

ツツコミは、村雨だけであつた。頑張れ、村雨。

無人島と思われる小島に到着。

この時点で好き勝手に行動して任務を放り投げているのであるが、なにも言わない。

どうせ、この二名と死闘を繰り広げていると思われるんだろう。

実際は和気藹々と、島に上陸してるんだが……。

パクチーが、ちよつと連れてくると言つて一度消える。

七海は暇なのか、浮遊要塞と取っ組み合いの喧嘩を始めた。

「にやー!」

「にやー!?!」

まさかの猫のような声で怒る浮遊要塞が、七海に豪快に嘯みついで、七海も笑顔で嘯みつき返す。

村雨が慌ててじゃれあいを止めに入る。

「平和ですねえ……」

「ですねえ……」

お前らだけだバカ野郎。早くシリアスに帰れ。

という、誰かのツツコミは聞こえない。

のほほんと春雨と翔鶴は喧嘩を眺めている。

「翔鶴。こいつの顔は赤く塗らないんですか?」

七海は上に乗って浮遊要塞を両手で殴打しながら聞いた。
意味が分からないが、翔鶴は聞き返す。

「塗りたいのですか?」

「いいえ、冗談ですよ」

塗るなら違う場所を塗れと言いたそうな村雨がじとつと睨んでいた。

彼女も少し毒されているようであった。

丁度その頃、数名の女性がパクチーに誘われて出てきた。

「何よ、もう……騒がしいわね……」

黒っぽいゴスロリドレスのフリルのたつぷりあしらわれた、訝しげな顔の少女。

「……………!?!」

漆黒のネグリジエのような薄着の、長身の角の生えた女性が、大袈裟にぎよつとしていた。

「何事?」

淡々とパクチーに続く、長い黒髪を真っ直ぐ下ろした深夜のような色の和装に袴の古めかしい少女。

「ヴェアアアア!」

現れて早々、遠方の喫茶店の店員みたいな声をあげてビツクリする銀髪で金色の目をした、額に非対称の角が生えた女性。

なんか沢山いる。

「オールプリンセスー!?!」

村雨、あまりに強烈な面子に雄叫びを上げていた。

それぞれ、離島棲姫、戦艦棲姫、駆逐古姫、重巡棲姫。

凄まじい面々であった。何てものがここに隠れているのか。

七海ですら絶対に勝てない相手方であった。

「悪かったわね、隠れてて。あなたも似たようなもんじゃない」

離島棲姫が、村雨が言いたいことを察して腕を組んで反論した。

不満そうに、文句をぐちぐちと言いつ出した。

「あたしだってね、平穩に暮らしたいのよ……。っていうか、人間らしくしたいのにみんな襲うし、追い払ってくるし。ねえ、そのオツドアイ。あなた、本当に受け入れてくれるの？　嘘ついたらあたし泣くわよ」

「泣くの!?　襲うんじゃないか!?」

離島棲姫は思いつきり情けない脅しで七海に聞く。

村雨がバカなと言うが、彼女は実際戦えないという。武器ないので。

七海は無論であると、即座に肯定。仮にも提督であると、胸を張った。

……浮遊要塞に腕を噛まれながら。

「フアッ!?　マジで!?　うちら、美味しいご飯食えるの!?　木の実生活も終わりつてそれマジ!」

重巡棲姫も、乗り気で七海に詰め寄る。一緒に来れば可能と言うと、飛んで喜んだ。

角が生えているが……。これ、人間とは絶対に言えない。どう見ても深海棲艦。

「そう。なら、従う。我が主様」

駆逐古姫が、幸せを保証してくれるなら、従者として仕えたと七海にかしずいて言った。

主として認めると、早速言う。

「私も行つてもいいわよねえ……？」

「パクチーも大歓迎です！」

パクチーも抱擁を受けて、赤面しながら涙を浮かべていた。

七海の対応に、感動しているようだった。

「……」

戦艦棲姫は、なにも言わずに握手を求めた。

七海は笑顔で応じて、ガツチリ交わす。

両者の間で謎のやり取りがあったようで。

「宜しい。全員纏めてうちに来なさい！ あたしが面倒見ます!!」

堂々と我に従え者共、と笑顔で叫ぶ七海に一同大喜び。

それぞれ、人間らしく生きたい、マトモな飯が食いたい、幸せになりたい、よく分からない、戦うの嫌、楽しそうなので行きたいという皆の利害が一致した瞬間であった。

なんというカリスマ。いや、偶然かもしれないが、深海棲艦だつていうのにこいつ全

く怯まない。

寧ろウエルカムプリンセス、と自分から手招きしている。

「司令は優しくくて、寛大な人です！ 変態ですけど」

「……うん、もう変態のレッテル間違いないね……」

春雨も誇らしいと言うが、実際は単なる変態であり、村雨もツツコミの機能が停止した。

もうダメ。これ以上はなにも言えない。

七海も歩けば姫を寄せる。そんな感じで、皆さん仲間になるのだった……。

で、浮遊要塞を飛ばして全員で例の島の近くに移動して、島村に連絡する。

どうやら、無事に作戦は終了して、成功しているようだ。

遠いが、無事の貨物船が見えた。

「——渋谷提督ッ!? 無事だったか!？」

焦ったように直ぐ様出た島村に、問題なく解決してきたと伝える。
そう、問題なく。

「ぎゃあああああああああー！ー！ー！？」

と、思っているのは七海だけだが。

電探の反応を見て、とうとうあの豪傑すら悲鳴をあげた。

そりやそうだ。七海は自慢するように言った。

「と言うことで、島村提督。完全完璧に、無血勝利いたしました!! 隠れていた姫も含めて、全員あたしと契約しています！」

「そんなバカなあああああああ?！」

ハゲが大絶叫していた。村雨も同情する。

七海の異常空間に慣れていると適当な反応になるが。

普通はひっくり返るような状況であった。

「なんだと!? あの数を無血勝利!? どんな魔法を使ったのだ!？」

「秘密です！」

余計なことを言うことややこしいことになるので黙っているとして。

事実、沖合いに待っている皆は大人しいもので、七海が試しに証拠として命じてみる。言うことを聞くという証を見せるべく。

「あたしを殴りなさい。パクチー」

「わ、分かったわよう……」

なぜか突然殴れ言い出して、パクチーが殴った。

当然弱いので無傷。だが、それを見た島村が再び絶叫。

水鬼の攻撃を受けたのに無傷で七海は立っている。

「どうしたあいぼ……ぎゃあああああ?! 姫があんな沢山いるぞ!! 何故だ相棒?!」

武蔵も近くに来たのか、此方を確認して雄叫びをあげた。

事情を聞くと、武蔵は勝手に戦慄していた。

「な、成る程……。道理で初対面でこの私を怯ませるわけだ……。水鬼の攻撃を無傷で済ませ、無血勝利するほどの実力者だったとは……。相棒、貴様が自慢する理由を私はよく分かった。貴様、なんという方を友としているんだ……」

「私自身も驚いているぞ……。渋谷提督、無血勝利の秘訣を一つ、ご伝授させて頂けないか。私は、貴女を師として、尊敬したいぐらいだ」

理由すら分からない島村は、せめて一つでいいから教えてくれと頼んできた。

あれだけの深海棲艦を従えるなど前代未聞。

取り乱さず、受け入れるだけ島村は冷静沈着であった。

「秘訣……? そうですね、強いことです。精神も、肉体も。そして、人の基本を忘れな

いこと。人間が、どういう生き物なのかを考えれば、多分分かります」

適当な事を言っておいたが、春雨は感じた。

それ、出来るの多分七海だけ。正解言っても、他人が実行出来るとは言っていない。

「ぬう……？　て、哲学か……？」

「……強い心身？　基本を忘れない？　ううん？」

案の定理解できない二名は唸って考える。

字面通りと思うわけがない彼らには逆に難しい。

満面の笑みで大勝利の七海は、通信を切ってから、振り返り待っている皆に告げた。

「——では、帰りましょう。皆様の新しい居場所、姫園鎮守府へ」

七海の暴走が、とうとう種族すらも超えてしまった。

彼女は止まらない。ブレーキがない。スピードも下げない。

さあ、もう彼女を遮ればどうなるかは分かるだろう。

名の通り、姫の園となった鎮守府を舞台に繰り広げられる、ヤンデレとなったサイコ

パスの女しか居ないラブストーリー。

ここから始まる、しよっちゆうシリアル時々シリアス。

あなたは予想できるだろうか。

この暴走百合ヤンデレの終着駅。

誰と結ばれるか、あるいはどんな物語になるか。

君と結ばれる、物語の作り方。

ここから、始めよう。七海のお送りする、イビツで壊れた、愛のお話を。

当然の摂理

先の輸送任務の成功において、島村と七海はこの度昇格し、今度は大佐になったという。

同期の中では最も早い出世であり、二人しかいない大佐であった。

だが、世の中には出る杭はなんとやらで、派手に目立てば孤立する。

それが、七海の場合は悪く出た。

何せ、彼女が行ったのは日本海軍初の無数の深海棲艦の捕獲。

前代未聞の所業に、海軍は大荒れになった。

当然だ。得体の知れない化け物を彼女は何隻も連れて帰ってきた。

直ぐ様大本営に回収され、七海はなんと。

恐らくは違反をしていないのに、彼女は……理不尽な目に遭っていた。

後日、彼女は改めて大本営に召集を受けたのだが。

それは本来……あつてはならないことだった。

呼び出された彼女は、大本営にて、廊下を歩く途中で数名に呼び止められた。

何事か分からないまま、言われた通りについていく。

段々と人気のない場所に陽動されるのは自覚していたが黙って行くと。

「この恥知らずの裏切り者がッ!!」

人知れない場所に連れてこられて、同じ提督……しかも相手は大佐に絡まれて、銃口を向けられていた。

眠そうにしている七海は、周囲を複数の提督に囲まれ、拳銃を向けられる。

どうやら、七海を完全に化け物として見た一部の過激派が、七海を暗殺でもしようとしているようだ。

それにしても、お粗末極まるが……。

冷静に考えれば分かるだろう。七海は数少ない提督と艦娘の兼用だ。

丸腰に見えても、身体的な優位は覆せない。

軽く武装した程度で艦に勝てる理屈などないだろうに。

立地は恐らく、建物から離れている。ここは裏手だろう。

自分の裏には壁、四方は囲まれて、袋小路。

激昂する成人男性が四名。それぞれ、拳銃で武装。

憲兵らしき姿はない。監視カメラも……裏手にはあるわけがない。

完全に死角で、彼らは七海に牙を向いた。

いきなり呼ばれついていけばこれか。呆れる七海は、銃口に怯みもしない。

罵る彼らは、七海を酷く恐れているようだった。

目先の恐怖に支配されて、無理矢理排除しに来た。

七海はそう感じた。

何が気に入らないのか、こんな事をしてくれたが、バカな連中である。

「貴様、人類の仇敵をよくもおめおめと連れ帰ってきたものだな!!」

「……………」

「貴様のような化け物は提督ではない!! 我らの手で始末してくれるわツ!!」

「……………」

「動くな! 動けば撃つ!」

答える必要もないか。これは、正式な場ではない。

コイツらのただの襲撃だ。感情に任せ襲ってきた。

命乞いでもすると思つていたのか、七海の変わらない言動に寧ろ彼らは恐怖を感じていた。

どうでもいい。適当に助けを呼ぶため、ごそごそと動く。

「動くな！ 動くと撃つぞ!!」

再度の警告。当然聞かない。

脅しているが、確かにサブレッサーもつけているようだが、バカかコイツら。

艦娘になっている七海に銃が効くと思つているのか。

あるいは、弾丸が特殊か。まあ、どちらにせよ。

(とうとうやつかみも物理になりましたか……)

面倒なことである。七海は脅しも無視して電話を取り出した。

で、当然電話を撃つて壊そうとする。

情けない乾いた音がする。一応大本営だろうに、本当に撃つてきた。

防弾ゆえに弾かれる携帯。

手から飛ばされる前に掴んで再び取る。

「おのれ、化け物め!!」

罵つて、今度は本人を狙う。

横目で睨むと逆に怯んで一步下がった。

撃ちたければ撃てばいい。たかが、拳銃ごときで死ぬ七海ではない。

四人がかりで来れば勝てると思っっているのか。

と、思っていたが……。

(あら……憲兵もグルでしたか)

チラツと奴等の向こう側に人影を見た。

あの制服の色は、憲兵のもの。

どうやら、見張りでもして、人払いをしている様子。

見て見ぬふりか。やってくる。

反撃するのも手間だ。逃げようかと思うが、一人はニヤリと笑った。

「逃げてても無駄だぞ。人払いは済ませている。そして、ここには我らの味方しかいない。

分かるか小娘。貴様は孤立しているんだよ」

暗に、助けは呼べずに逃げられないと言われたようだ。

弱気なのか強気なのか、どっちだ。

跳んで逃げるも背後の建物は高さがちよつとある。

出来ないこともないが、どうするか。

(……面倒なんで殺しますか?)

いや、人殺しは不味いだらう。面倒なことになる。

口裏合わせてどうせ七海に擦り付ける気満々のようだし。

で、殺そうとするのはいいが相手にも有効な手段はない。

(どうしよう。殺るのは数分で終わりますが、それじゃ意味がないし)

殺しに抵抗はない。が、やったあとのリスクが大きいかから却下。

何やら罵倒を続けているが聞いていない七海は、アクビをしながら。

「……」

見つからないように後ろで感覚を頼りに指先を踊らせてから携帯をしまい、軽く伸びをしていた。

「貴様は阿呆か!? いくら艦娘でも試製の貫通弾を受ければ只では済まないと言っているだろ!？」

あまりにもマイペース過ぎて、理解できない四人。

怯まない、怯えない、怖がらない、逃げない、戦わない。

おおよそ予想できる言動の全てに当てはまらない。

彼女は、感情がないのか。全くもって読めない表情で、眺めていた。

流石は戦場の空気を知る戦士。拳銃程度じゃ脅しにもならないか。

ならば、と一人は懐からナイフを取り出した。軍用のものだった。

無骨な得物で、陸軍に支給されるデザインと似ているが何だろうか。

「へ、へへ……大人を舐めるなよ、お子様。良いか、こりや艤装と同じ技術と素材で出来ているんだぞ。刺殺だつて出来るんだぞ!! 分かるか、おい!!」

口調がチンピラのそれと大差ない。軍人かと疑いたくなる。

切っ先を向けて威嚇するが、七海は興味も無さそうに言った。

「……で?」

はじめて見せる表情は、呆れだった。

彼らは見た。恐喝の現場なのに、脅される子供は取り乱すこともしない。

淡々と、次はなんだと眺めるだけ。

挑発もしない、あるべき感情すらない。

彼女は興味がないように、歩き出した。

「もういいです。茶番は飽きました。帰りますので、そこ退いてください」

茶番と言った彼女は本当に彼らを抜いて出ていこうとする。

威嚇ではない、今度は本当に殺すつもりで撃った。

横合いから頭を目掛けて放った弾丸は、通りすぎる彼女の左のこめかみに当たった。

大きく動いた頭に、だからだと流れ出す鮮血。

衣服を真っ赤に染めるのに、七海は足並みを止めないで進む。

「ば、バカな……?!」 おい、これイ級の装甲だつて抜くもんじゃねえのか!」

頭を撃つて直撃させたのに、血を流しただけで、七海は歩いて去ろうとする。撃つた本人の方が動揺していた。

周りは本物だと言ったが、その間に七海は帰ろうとする。

今度は行き先を憲兵が阻んだ。

「逃がすと思うか」

「いいえ」

短く問い、否定する七海に構えを取る憲兵。

ここまで来て、おいそれと逃がすわけもないか。

周囲を見れば、ここは結構表から離れた建物の影だった。

で、憲兵は他にも何人か武器を構えて此方を見ている。

制圧用の警棒に拳銃、一部は刀まで持ち出す始末。

前に立ちほだかる男は、これは……。

「……へえ。柔道ですか。艦娘相手を想定すると、寝技なら有効かもしれませんね」

「ほう、分かるか……構えは基本的な物なのだがな」

「憲兵が制圧するのは提督だけじゃないですから」

関節などを強引に外して、身体的アドバンテージを破壊するやり方か。

艦娘とて基盤は人間と差はないし、関節などの弱点も同じと見ている。

慣れていけば、殺せないこともない……ということか。

資料で見覚えのある構えをする憲兵は驚いたように七海を見た。

「そうか。悪いが、お前にはここで死んでもらうぞ。大本営は一枚岩ではないと冥土の土産に教えてやる」

全員が敵対している人間。

しかも手出しをすると後々不味い根回し済みの連中か。

逃げられない事もないが、相手も想定しているだろう。

七海のやり方を気に入らない連中もいるだろうが、これは……極端であろう。

「諦めろ。貴様は人類を裏切ったのだ。深海棲艦を連れ帰るなど言語道断。魂を化け物に売った売国奴が」

憲兵が罵りながら距離を詰める。

七海は成る程、と頷いた。

「尤もな言い分です。言いたいことは理解しますし、そういう奴は早めに始末するとう判断も妥当かと」

筋は通っているので恨みはしない。

七海の行動は、そういうモノだと言われているのは知っていたし、理由としてもまだ

此方も分かる。

意外そうに見る憲兵に、然し七海はあることに気づいて、言い返す。

「まあ、黙って死ぬ気もないですよ？　あと、あたしの言動に惑わされる前に……もう少し、方法を考えるべきでしたね」

何が言いたいのか、連中は直ぐに理解する。

七海があまりにもマイペースに、人間離れした落ち着きを見せていたせいで、携帯を弄るチャンスを与えたこと。

白昼堂々、大本営という総本山でおつ始めた事が、失態であった。

「——貴様らあああああアツ!!」

「——渋谷アツ！　無事かツ!？」

七海が指摘した途端、野太い男の怒号と若い男の声が響いた。

そして、遠くの位置にいた憲兵が……なんと、空中に吹っ飛んで浮かんでいた。

派手に墜落し、打ち所が悪かったのか、痙攣していた。

そして、そこに追い討ちをかけるように踏みつけて潰す、大木の如く太い足。

七海の窮地に、その男たちは颯爽と現れた。

憲兵の一人を弾いたのは、筋骨隆々の、鍛え抜かれた鋼の肉体を持つ男。

やせ形だが、優しげな表情を心配に染める若い男に加えて、他にも数人駆けつけた。

提督、島村。そして数少ない友、赤松だった。

驚く連中に、敵つい顔を怒りで真っ赤にした島村が、青筋を浮かべて吼える。

「何を血迷っているのだ貴様らアツ!! 同じ提督を殺そうなどと!! 渋谷提督を殺す前に、ならばこの私を殺して見せるオツ!!」

ドスの利いた怒りの重低音だった。

七海が先ほど指先で弄っていたのは、誰でもいいから助けを求めることだった。

電話をかけた状態でポケットにしまい、そして行動して相手に先手を譲る。

撃つてくると踏まえた上で、通話状態の誰かが来てくれればいい。

どうせ七海の連絡先は、ある程度利益のある人間しか登録していない。

短縮ボタンでかけたので、誰かはよく分からないが、どうやら島村にかかっていたようだ。

「し、島村提督……!?!」

「恥を知るのは貴様たちの方だツ!! 撃ってみろ、渋谷提督を撃つたように私をオ!!」

雄叫びをあげる島村がブルドーザーのように突っ込んでいく。

単純なタツクルに、憲兵は自棄のように迎撃した。

他にも数人来ていた連中が、応援を呼んで、見たことのない大事になった。

大乱闘である。憲兵と憲兵が銃撃戦を始めるわ、島村が憲兵を蹴散らし逃げ惑う提督

を吹き飛ばすわ。

「渋谷!? お前、頭を撃たれたのか!？」

駆け寄った赤松が傷を見る。

一言入れてから汚れた横髪を捲ると抉れた皮膚がざつくりと裂傷になり、骨が見えている。

平然としている七海だが、痛ましい傷に辛そうに表情を歪める赤松。

聞けば、島村がわざわざ犬猿の赤松に声をかけて、救出に向かつてくれたらしい。

大本営の端で起きた暗殺未遂というこれまた前代未聞の事件になった。

「島村はムカつく野郎だが、お前のために身体を張ったのは評価するぜ。あいつ、思ったよりも男なんだな」

柔道の憲兵と試合ならぬ死合を繰り広げる島村を、応急処置をしながら赤松は言った。

七海は全く違うことを気にしていた。島村の動きだった。

何かしらの軍の武術だろうが、柔道とマトモにやり合っている。

凝視して、何かの型らしきものを繰り出す彼を見て思い出した。

(ああ、コマンドサンボ……。って、島村提督、サンボたしなんでいたんですね……)

サンボという、軍隊の一種の格闘術。

実戦を前提に開発されたらしい、殺傷能力の残っている武術である。

だから、あんなに肉体を鍛えているのか。憲兵と戦えるとは、見事な腕前で。

……で。

「あらあら……。私の部下に、何てことしてくれたの？　どこの古だぬきの指示かしらねえ……？」

一番危険な人が、恐ろしい声を響かせて現れる。

七海の髪の毛が一瞬で全部逆立った。血の気が失せて、ガタガタと震え出す。

赤松も、絶句して振り返る。そこには……。

長身の女性が、ボキリボキリと指を鳴らして笑顔で来ていた。

七海がハッキリと恐怖を知っている貴重な相手。不倶戴天の相手とも言える最強の味方。

「か、閣下ッ!？」

赤松が閣下と呼ぶ元帥が一人、桜庭であった。

とうとう最終兵器まで登場して、一部は逃げ出していた。

「逃がさないわよ、この屑が」

冷えきった声で、その辺に転がっていた気絶した相手を軽く蹴り飛ばす。

なんと桜庭、キレているようで倒れた人間を弾丸の代わりにして放った。

螺旋回転しながら恰もライフル弾のように飛ぶ人間は、逃げた男の背中にぶつかり転倒させた。

で、更に援軍は止まらない。

「七海さま!!」

「我が主様、ご無事ですか!?!」

一番恐れていた、渦中の深海棲艦の姫たちも全員来てしまった。

本来は、皆を引き取りに来たようなものだとのちに教えられたが。

この時の相手の反応はまさに阿鼻叫喚。島村ですら、再び絶叫したぐらいだった。

翔鶴と、駆逐古姫が真っ先に駆け寄った。赤松も事情を知らないので驚いて思わず飛び退く。

「ああ、赤松提督。彼女たちは、渋谷提督の部下です。安心してください」

桜庭はそう言うが、安心できない赤松。

彼女が襲撃されたのは、この案件のせいらしい。何となくわかった。

乱闘騒ぎに参戦して、七海の仇を全員が素手で取りに行く。

加減しているらしく、死にはしない。

「んぎゃあああああ!?!」

死にかけているのは、憲兵の威嚇射撃にビビったパクチーだけであった。

彼女だけ逃げ惑っていた。一緒に。

結局、全員が取っ捕まり、七海はお咎め無しで、医者に診てもらった。

原因は、七海を快く思わない一部大将や少将の差し金で、桜庭が証拠を掴んで一週間もしないうちに全員を法廷に引き摺り出したと言う。

最後にある重要な特務を桜庭より正式に与えられた。

「渋谷提督。あなたに、特務を命じます。これより姫園鎮守府では、捕獲可能な深海棲艦を発見した場合、あなたの独断で回収しなさい。無論、あなたがやっているいつも通りのやり方で。これはあらゆる任務よりも優先するべき最優先事項。あなたにしか出来ない任務です。よろしくお願いします」

七海が受けた、重要な特務。

それは、深海棲艦の捕獲という、誰にも出来ない、重要なものであった……。

交わりの鎮守府

時間を少し遡る。

任務のあと、一度鎮守府に戻った七海を待ち受けていたのは。

「理由。説明なさい。今すぐ」

仁王立ちで腕を組む五十鈴だった。

先に帰ってきた五十鈴は執務室で待っており、勝手に判断して居なくなつた理由を問
いたです。

ニコニコ笑つて素直に答える七海は、疲れた様子の村雨や朗らかにメイド服に着替え
る春雨には何も言わず、自分で語つた。

ちゃんとした事情……要は、姫軍団を連れてきた時点で現場にいたので大体察しては
いたが、事後報告でも良いので言わせないとやむやにする癖がつく。

教育も兼ねて七海を再び叱る五十鈴。

「言わなかった理由は分かる。島村がいたからね。無線も聞かれるかもしれないから、言えないのも。他人が知れば、あんたは裏切り者よ。殺されても文句は言えないわ」
のちに、この言葉通りの事案になるのを知らない五十鈴は、よく七海に言い聞かせた。慣れているここの連中は、艦娘は良いとして。

だが、全ての人間が自分と同じだと思ふな、人間は決して深海棲艦を受け入れない。現状、あの二名を毛嫌いする憲兵だって既にいるのだ。

これ以上、人間との対立を加速させない方がいいと、言うのだが……。
「？」

七海は首を傾げていた。嗚呼、やっぱり。五十鈴は思った。

他人に対する興味は、以前のまま。艦娘に対する姿勢は劇的に変わっている。

けれども、七海の根本的な問題……他人への興味は改善の兆しすらないか。

他人などどうでもいい七海は、外野が騒ごうが何をしようがきつと気にしない。

そういうやつもいると納得はするが、止めないだろう。

戻ってきたと聞いて、散々心配していた由良が遅れて現れて、七海の話に割って入り、抱き締めて怒る。

「もうっ！ いきなり無茶しちやダメでしょ!! 心配させて!!」

五十鈴が説教中なのだが、心配性の由良はずっとおろおろしていたので、気持ちばかりか。

何せ水鬼相手に三人でかかっていって、それつきり。

話を聞いて心配しなかったのは、如月や山風、弥生ぐらいなものだ。

さつきまでここにいた三人は笑っていた。歪んだ、ひび割れる笑顔で。

「司令官は帰ってくるもの」

「ママはもう居なくならないよ」

「七海姉は……置いていかないから」

と、それぞれハイライトの消えた目でずっと待っていた。

信じていると言うよりは、洗脳か。七海は帰る。それは必然。

何があるうが、帰ってくる。死んでも帰ってくるとは、如月が言っていた。

当たり前となった依存が、もっと酷くなっている。五十鈴は目を背けた。

(これが……七海の愛情なのよね……。母を自分なりに体現した……)

分かるか、こんな汚泥みたいな愛情など。

自分のなかに閉じ込めて、自分色に染め上げて、自分だけを見るようにして。

三人の心が弱いのを知っていて、つけこみ愛のなかに引きずり込んで。

これの何処が母親の愛だ。七海はこんな愛情を受けてきたのか？

(破綻した愛か……。五十鈴だって分かるわ。こんなのは、間違っている)

間違っている、指摘するのは誰でもできる。

けど、これは七海が自分をぶっ壊してでも出した答えなのだ。

これが間違いなら、真実の愛は示せるのか。七海にそれが実行できるのか。

五十鈴はいい加減七海の気持ちだって分かる。否定しない、してはいけない。

甘くなつたと思うとも。優しすぎると思うとも。

それでも、七海の出した答えで、三人が求めた愛がこれだ。

楯円形の、一応の大団円だろう？ 如何に他人におかしく見えても。

当人の幸福には、他人は介入できない。それを知っている。

由良の心配が、七海に分かるのか？

彼女の愛情は、自分が皆を愛するもの。

自分は愛の外にいる。愛するだけ。愛されると思っていない。

また、感情の一方通行。三人は相思相愛でいい。

なのに、五十鈴や由良など、他の艦娘が自分に向ける感情が、分かってなかった。

故に首を傾げていた。由良が言っても、言葉として理解する。理屈として理解する。

それ以上に重要な理屈があれば優先して潰して忘れる。

自分は度外視する行動理念の燃料に由良の言い分が燃やせない。

燃えないものは取り込まない。そのまま外に置いておく。

歪んだ形で改善して、ひび割れたまま突き進み、狂人となった結果がこれだ。

その内、誰かに殺されてしまうのかもしれない。

……その五十鈴の懸念が、最悪の事態が、現実となってしまうた……。

「七海、良かった……良かった……！」

暗殺未遂のあと。

心配した一部の知り合いが付き添いで翌日に一緒に戻ってきた。

……例の連中を連れて。

七海はポケッとしている。きよとんと。

執務室で七海の帰還に、とうとう泣き出した五十鈴が抱き締めて、お帰りとお優しく初めて言った。

「……五十鈴？」

夜のことだった。皆は別室で待機しており、荷物を下ろしたりなどしている。

仕事に戻ってきた七海は訳がわからず、目を丸くした。

「あんたが……他のやつに、殺されそうになつたつて……！ 危うく、死にかけてつて

……聞いて、五十鈴がどれだけ心配したか……!!」

そう言えば桜庭が、一部には真実を伝えておくと言っていた。

その一部が、五十鈴らしい。七海は心配をかけたと謝った。

確かに心配はかけてしまった。申し訳ないと思う。

他にも、衣笠や古鷹、羽黒に鈴谷、由良もいる。扶桑や山城も。

「……いつか、こうなるんじゃないと、思つてはいたんです」

泣いている五十鈴に代わり、古鷹が口を開いた。

暗い表情、沈んだ声色で、七海を見ている。

「七海さんは、他人の機微に疎すぎる。わかつてはいたので、鎮守府の内部では、バランスは取れていました。皆でフォローしようつて言つてたこともあつて、こつちは……問題、無かつたんです」

七海が如何に暴走しようが、ここの提督だし皆とは常に向き合っている。

それを防ぐために、皆は協力していたのだ。なのに……。

「まさか、他の提督に狙われるなんて……。そんなの、わたしたちじゃ守れないじゃない

ですか。憲兵さんまで、画策していたと聞きました」

「ええ。そうですよ」

相変わらず、微笑んでいる七海。

どうして、笑える。どうして、気にしない。

自分が死にかけたのに。自分が、殺されかけたのに。

なぜ、笑う。

「みんなが巻き込まれないで良かったです。あたしなら、大丈夫ですから」

七海は言った。言外に、答えを。

自分よりも皆の心配。自分ならどうなってもいい。

そういう状態だと、全員見てとれた。彼女は気付かない。あるいは、自覚がない。

見ている余計に辛い。死んでないなら別にいい。他人の都合など関係ない。

死にそうになっても尚、徹底している己の度外視。

七海は、ぶっ壊れている。改めて、分かった。修正不可能。フォローしかできない。

彼女は、サイコパスだったのを思い出す。そして、七海の敵は……深海棲艦ではない

ことも。

「本当の悪意は……人間、ですか」

羽黒が、誰に聞くでもなく呟く。

七海の真の敵は……人間だった。

理屈としては、理に適っている。

考えてみれば、得体の知れない深海棲艦、しかも姫を連れ帰り、研究データや貴重な資料を作るのとはそんなに悪いことか。

大抵は研究が進まず、今でも相手に後手の人類が、精々残骸からしか想像のデータしかない状態なのだ。

それを、今までになかった協力的で、敵意はなく、寧ろ味方となってくることが悪いことか？

襲つてこないとは言えないだろう。ならば、何のために桜庭がいるのだ。

並大抵の姫なら簡単に血祭りにあげる上司が認め、そして大本營の研究が劇的に進む結果も出した。

それ程の成果をあげた。なのに、七海は消されそうになった。

正式な特務となった今ならもう、襲われることは無いだろう。恐らくは。だが、この一件でハッキリした。七海は、人間の敵でしかない。

海軍にいながら、味方は少数。大半の人間は、敵である。

憲兵も、提督も……下手すれば、守るべき民間の人々すら。

四面楚歌に近い状況なのを、七海は自分から作ったのか。

艦娘のために。人類を、敵にして。

向こうの言い分だつて分かるし、否定はしない。

間違っているのは、七海かもしれない。

分かつている。おかしいのは、誰でも受け入れられる七海の方だ。

だが、それを振りかざして七海を殺しに来るなら。

その時は、人間に敵対してでも七海を守る。

彼女は絶対の味方なのだ。多分、新しく来たであろう深海棲艦たちも言う。

七海以外は、きっと誰も受け入れてくれない。唯一だから、排除される。

艦娘たちは、決めた。七海によく言いつける。

大本営に行くとき、外に出るとき、この二つの時は……深海棲艦か、艦娘を付き添い
にすること。

絶対に、離れないこと。何がなんでも。そして、知り合い以外の人間を信用しなくて
いい。

全員、どうせ七海を殺しに来る。そう、決めてしまう。

此度で人間に対する不信感が最大値にあがった一同は、それ以来憲兵すら信じなくな
った。

油断すれば、七海を殺そうとする。一度あれば次もある。

神経質に憲兵に接するようになり、挙げ句には憲兵も深海棲艦のいる鎮守府など御免だと余程の奇特以外は全員、異動してしまった。

彼女の存在は、本来の繋がりを破壊して、有り得ない繋がりを作つたのだ。

そう、何時しかここは、こんな蔑称で呼ばれる事となる。

——深海鎮守府と。

で。

それはともかく。新しい面々と皆は顔を合わせたのだが……。

「ヴェアアアアア!？」

「ヴェアアアアア!？」

のっけから、廊下で鉢合わせした重巡棲姫と川内が雄叫びをあげ気絶した。互いに。

川内は知らずに、見覚えのない姫がいて驚いて。

重巡棲姫は、川内の絶叫に驚いて。それぞれ白目を剥いて倒れた。

二名をソファアに横たえて、執務室に全員集合。

現在、深海棲艦と艦娘の顔合わせをしているが……。

「提督……あの戦艦、何処かで見たとあるんだけどお……？」

パクチーがビクビクしてる山城を指差して七海に言う。

山城も、ビビっていた。

「は、泊地水鬼が……私を狙っている……。不幸だわ……」

互いにビビっているパクチーと山城。

おっかなびつくり、握手をすると。

バキッ!!

「んぎゃ!?!」

「ひい!?!」

山城の握力が強くて、パクチーの手からひどい音がした。

潰されて涙目のパクチーに、顔面蒼白で姉の背に隠れる山城。

面白い組み合わせであった。

こっちは。

「どうも、空母翔鶴ですー！」

「……………え？ 翔鶴？」

空母水鬼こと、翔鶴が挨拶しているが、明るい性格に戸惑う飛鷹が相手していた。見た目も随分と変わっているが、一応彼女は数少ない艦娘指定。正規空母なのだ。例外の。

「……………」

「ん？ なんだい？」

戦艦棲姫は、日本語を喋れるようになったヴェールヌイに握手を求めた。

ヴェールヌイも応じる。無言な彼女にも動じない。

「我が主様……………あ、いえ。お嬢様の従者。よろしく」

「変なのが増えた……………」

呼び方が仰々しいのでお嬢様に変更した駆逐古姫が、恭しく挨拶し、山風が微妙な目で見ていた。

「離島棲姫って、呼ばれているらしいわね。名前はないけど、よろしく。艦娘の皆さん」

「よ、宜しくお願いいたします……………」

羽黒に丁寧な頭を下げる離島棲姫に、彼女はおどおどしつつつられて頭を下げる。

敵意はない深海棲艦。事情は聞いた。

自分でも生まれた場所すら記憶にないと正式に大本營で判明した、こちらがわの深海棲艦の姫。

七海の連れてきた、七海個人に救われた面子。

故に、七海には感謝しており、敵対者は潰すと言ってくれた。

実際、現場では全員が彼女のために戦ったと聞いている。信頼は、出来そうだった。

「で、名前ないと不便なんで、考えてきました」

七海は意気揚々と名無しの数名に名前を考案した。

離島棲姫は、略してリセ。

戦艦棲姫は静かにしているので、静香。

駆逐古姫は春が好きと言うので、小春。

気絶している重巡棲姫は希望がないので、さつき手始めに食っていたリンゴにする。

で、ビビリのパクチーと、空母の翔鶴。

以上の面々が、新しい仲間となる。

「リセ……。ふうん。良いわ、ありがとう司令官様」

「……」

「分かった。これからは、小春と名乗る」

リセは嬉しそうに礼を言って、静香は無言でサムズアップ、小春は軽く頷いた。

「ヴェアアアアア!? 忍者!? 忍者なぜえーえー!?」

「ヴェアアアアア!? ココアが飲まれるーえー!?」

うなされているのか、リンゴは寝言で絶叫していた。川内と一緒に。

安直だというツツコミは兎も角。

こうして、深海棲艦と艦娘と、半分人間の狂った司令官の、共同の日々が始まるのだ
た……。

価値観の変化

以前、七海は艦娘を化け物だと思っていた。

理由は簡単だ。どういうものなのか知らない、分からない。

人間そっくりの、人間を超えた存在。だから、化け物。

彼女の言った『化け物』という言葉の解釈は、妖怪などと同じような得体の知れない存在という意味合い。

人間はそういう物を強く怖がる。だから、妖怪は怪談として伝わっている。

逆を言えば、だ。解れば怖くないとは、思わないか？

艦娘とは根本は知らないが、中身は人間と大差はない。

感情がある。心がある。ならもう、人間で良いじゃないと。

七海はぶち壊れる前に悩んでいた時期に、無意識にそう判断していた。

艦娘とはなにか？ 本人たちが人間であると言うからには、それなりの願望や根拠がある。

周りの扱いは統一されずに、道具だったり兵器だったり人間だったりと区々。なら七海も好きに選ぶ。七海のところは人間。あとは知らない、興味ない。

一度定義付けしたものは二度と揺るがず、それがたとえどのような姿になろうとも、艦娘は人間。

じゃあ、深海棲艦になっても人間であると思つて何が悪い？ どこが悪い？

幽霊は人間じゃないのか？ 幽霊の根本は人間である。なら、人間の一種だろうに。今の七海は深海棲艦となった翔鶴、春雨、村雨を艦娘として扱うのは、元々艦娘だったから。

如何に変わろうが、皆は艦娘という人間の枠を超えず、理解できる範囲の中だ。

それ以上も以下もない。それで決定。故に気にしない。

価値観の変化による、種族を超えても気にならない意味の分からない理屈の出来上がり。

ならば、元々深海棲艦の連中はどうか？

これも、七海なりの理由があつた。

簡単に言えば。

「あたし、個人としてしか見ませんので」

こういうことだ。

戦時ではあるだろう。

敵の国の人間は、あまねく憎しみの対象。誰であろうが憎むのは当たり前。

七海はそれをしない。

常人の認識は、深海棲艦はイコールで侵略者。悪者である。

対して、七海は深海棲艦という括りをしない。

例えばだ。リセは、七海に何かしたか？

パクチーは、七海の恨みを買ったか？

リングは七海の仇敵か？

静香は七海を苦しめたか？

全部答えはノーだ。皆が七海になにもしていない。だから、恨まない。

彼女たちを受け入れる最大の理由は、個人でしか対象を見ないから。

攻撃するソイツという個人を殺す。対話を持ちかけるソイツからなら話も聞く。

深海棲艦という存在に、先入観もないし、決めつけもない。

深海棲艦は侵略者。深海棲艦は悪者。そういう認識に興味がない。

自分の都合で動く人間だ。自分に利益があるなら、招く。害があるなら殺す。

この場合の利益とは、話を聞いて、七海が衝動的に動いた場合を指す。要するに彼女がほしいので鎮守府に連れ帰る。誘拐犯の思考であった。

逆に、いきなり攻撃するなら攻撃を仕返し、戦争をする。

七海の理屈はこんなものだ。深海棲艦の嫌悪がない、出てこない。どうでもいい。こういう異常者特有のエゴ丸出しの思考回路が、常人には恐ろしく見える。

中身は単なる変態に過ぎない。自分勝手な誘拐犯のエロ提督。

個人を恨まず、全体を恨むという現在の艦娘たちに七海は言った。

人間を勝手に見限るな、と。

「良いですか。個人的に恨むのは結構。然し、無関係な人間まで八つ当たりするのは止めなさい。関係ないのに睨まれるなど理不尽極まりないし、あたしが不愉快です。止めないと、お仕置きですよ」

と、重巡や軽巡を全員呼び出して説教をしていた。

意外とこういう部分はまだマトモなので、正論を言われて全員がむすつと不貞腐れた。

七海のためなのだろうが、七海はそんなもの必要ない。

個人に対する恨みももう、過ぎたこと。

憎しみを持つには、七海の中身はイビツすぎる。

極端な思考しか出来ない彼女に、艦娘たちはついていけない。

「でも……」

五十鈴が率先して言い返すが、七海得意の理屈的正論で論破された。

先ずはリスクを考えろ。七海は死なない。死んでない。

既に全員まとめて桜庭が然るべき処置をした。

何が不満なのだ、と逆に聞かれる始末。

七海の言い分には間違いはないし、言い返す言葉もない。

五十鈴は、俯いて黙った。相変わらず、こういう部分も融通が利かない。

いや、正しいから当然の事を言われるのだが、彼女は皆の感情を否定しているというか。

少し、悲しい気がする。七海を思う気持ちすら、理屈の定規で語られるのか。

……けれど。七海は続けた。

「気持ちには凄く、嬉しいです。でもそれで皆が居なくなる原因になったらあたしは寂しい。だから、止めて下さい。それよりも、あたしのそばに居て」

七海は言うのだ。居なくならないで、寂しいと。

初めて、皆に、そう求めてくれた。

見上げると、どこか七海は、夢いように見えていた。

「いい加減、それぐらいは分かります。けど、だからと言って感情に吞まれて全部失うのはあたしはゴメンです。関係ないやつなんて、見なくていい。邪魔な奴はあたしが追い出します。無意味に、居なくなるような真似をしないで下さい。あたしは皆がここに居てくれないと嫌」

七海が、そう求めたのは、何故だろうか。

自分でも分からない。けど、この中で誰か一人でも欠ける未来は、酷く忌避したい。

七海に刺激するなど言うなら、皆もしないで欲しかった。

皆がいる鎮守府だから、意味がある。七海は漸く知った。寂しい、という感情を。

今までは、七海は自分から与える、応えるという動きはしたが、求めることはしなかった。

無償の愛は、求めない。省みない。それが基本。なのに、何故か今回は言っていた。

理屈がまた、見えない。自分でも不可解な言葉を言った。

(……ですが、素直な気持ちでしょう)

居なくならないで。そう言えたのは、何かの改善か、成長か。

七海にも理解していない何か、艦娘たちに欲していた。

「七海……」

五十鈴は、七海が弱音を吐いたように見えた。

彼女は、もしかしたら心細いのか？ また、自分でも首を傾げているし。

居なくなるといことが、悲しいという事を何処かで分かってくれたのか？

問うとしても、満足な答えは得られまい。七海自身も自覚をしていなさそうだ。

何よりも、七海にこんな事を言わせた自分が情けない。

(……少し、懐疑的になりすぎてた。頭を冷やさないと)

五十鈴はいち早く我に返った。

疑心暗鬼の理由はあるとしても、七海に言われては意味がない。

情けないお姉さんたちだ。フォローするはずなのに、彼女にこんな事を言われて。

「そうね。気を付けるわ、七海。五十鈴はちゃんとここにいるわよ」

真つ先に返事をした。五十鈴が七海の機微に最初に反応して、苦笑いして謝る。

皆も、五十鈴を見て聴ては分かってくれたらしい。謝って、態度を改めた。

「それよか、新しい面子と仲良くする努力でもしないとね……」

五十鈴は、バカをしたと反省しつつ、執務室を出て、ぼやく。

一番大事なことを忘れて、人間を疑う事に神経質になっていた。

目下の問題は、ソコじゃない。それも追々の課題だが、真つ先にするべきは違うこと

だった。

何が起きているか。それは……。

深海棲艦と艦娘の関係。良好とは、一概には言えなかった。

「ママから離れろ、小春……!!」

「断る。常に傍で仕えるのは従者の役目」

ある日。娘が従者に激怒していた。

私室で昼寝をしようと横になった七海の隣を、小春が入り込み、独占したのを怒っていた。

七海お手製の、和服にミニのスカートを組み合わせて、上から割烹着を纏う従者はしれつと言い返す。

「そこはあたしの居場所なの!!」

涙を浮かべて退けと怒鳴る山風に、七海は仕方無く言った。

「……小春。退きなさい」

何やら不満そうだが、小春は身を引いた。

ぐすつと半泣きの山風は七海にしがみついて、泣きついた。

どうもこの従者、人肌恋しいのかあるいは七海に対しての忠誠心が強いのか、如月以上のベツタリで離れようとしめない節があった。

おかげで娘と妹と嫁との衝突が絶えないで、小競り合いを毎日繰り返す。

小春の關係は、割と単純であった。他の艦娘とはぼちぼちやっている。

尚、従者という立場上、メイドの春雨とは仲良くなっているが、ツツコミをする村雨に対しては。

「お嬢様に暴力を振るう、この卑しい淫乱メイド」

「淫乱!?! 新入りにも言われるの!?!」

小春が嫌っているようだった。

七海が村雨を謎の村雨嬢とか言いたい放題刷り込んだ為、メイドの立場を利用したスケベと思われていた。

冗談のつもりだったのだが、真に受けた小春は本気で村雨をアツチ系のお仕事の人だと思っただらしく。

「夜の街に帰れ、淫乱村雨イド」

「待って!?! 村雨は艦娘だから!! アツチ系じゃないの!! 小春ちゃん信じてお願い!」

「嘘を言うんじゃない。その様になる、異性の劣情を誘う姿が最大の証拠」

七海が言った以上に思い込んで吐き捨てる。酷い風評被害であった。

「うがああああ!! また提督の仕業かああああ!!」

キャラ崩壊の激しい村雨は、翌日七海につかみかかった。何を吹き込んでくれやがった貴様、と真面目に怒るが……。

「普段通りの扱いですが？」

と反省もしないで言いやがり、キレた村雨に箒で殴打されて失神した。

姫のマジパワーを舐めてはいけない。いくら七海でもマジ殴りは気絶する。

「本性を見せた……！ お嬢様に手を出した報いを受けさせるー！」

「誤解だつて言ってるでしょうがああああ!!」

で、主の危機を察知して介入してきた小春と村雨の従者とメイドの不毛な戦いが幕を開けて。

第一次メイド対戦は、従者が呆気なく勝った。目をぐるぐる回して倒れる村雨。

敗者を見下し、はたきを持った小春は告げた。

「春雨の姉と言えど、所詮はコスプレのなんちゃつてメイド……。従者の私の敵じゃない」

村雨の扱いはコスプレなんちゃつてメイドだった。

小春は炊事洗濯掃除に家事も大体出来る優秀な従者であつたが、思い込みも激しいよ
うで。

春雨と一緒に相部屋となり、それまで一緒だつた村雨は個室になつたのも良い。

村雨としても、夜な夜な変態に望んで誘拐される既にあかん妹の変化には適応しており、匙を投げていた。

個室でゆっくり出来る時間も欲しかったので賛成なのだが……。

「露出の少ないメイド服は春雨なので、あの淫乱村雨イドは……淫乱だから露出多くてもいいですかね？」

「姉さんは肌を見せても可愛いので似合うと思いますよ、ご主人様」

「止めてええええええ!!」

新作を手縫いしていた七海の謎のスケベ判定が拡大していくのを止めてくれない妹に頭を抱えていた。

で、小春の支援攻撃で拡散する村雨淫乱説。鎮守府に広がる根拠のないエロキャラ設定が一人歩きする。

「……如月でもそれはないわね。村雨さん、司令官は女の子だし、少しは自重してね？」お前が言うなど言われる如月にすら、若干引かれていた。

如月は既に七海に回収されているので、エロくても問題はない。

というか、本人も気にしないので、尚更悪い。

「もういやああああ!!」

何で村雨だけこんな扱いをされるのか。

理不尽な処遇に苦惱しつつ、取り敢えずは目の敵にしてくる和服従者と今日も戦うメイド村雨。

したくてしてゐる訳じゃない村雨と望んでゐる従者小春の仁義無き争い。

「雑巾は叩く為のモノじゃない……それを教える」

「その前に提督のセクハラを何とかするのが従者の役目よね!」

今回の原因は、村雨は身体もエロいが顔もエロい、しかも声もエロい。

つまり全部エロいという言いがかりにキレた村雨が雑巾でひっぱたいて気絶させた一件だった。

毎度思うが、村雨をエロいことと組み合わせるこの変態は頭がおかしいのか。

この間など、何を血迷ったか村雨を勝手に題材にしてエロい小説まで真面目な顔して書いていた。

因みに作中では金持ちの脂ぎったオヤジに嫌々弄ばれる村雨のあられもない姿を生々しい描写で書いていた。

殺そうとマジで思った。こいつの脳内で広がる世界をぶっ壊すという意味で。

「……事実を言うのはセクハラじゃない。ただの指摘」

「事実無根なんですけど!」 村雨はそんなキャラじゃないわよ!!」

呆れている小春に言い返す。指摘とか言いやがった。失礼にも程がある。

いい加減、七海の謎のキャラ指定の被害が、村雨に集中してきたので、誰か救ってあげてください。

お礼に七海著作の、村雨エロ小説上下のセットを差し上げますので。

「待てエツ!! 提督まだ書いてたの!?! どこ!?! どこに隠したの!?! これ以上広がってたまるもんですか!!」

「……誰に言ってるの?」

「誰かよ!! くっ……提督のせいで村雨のキャラが破壊されてしまった……! おのれ提督……!!」

どこぞの中年みたいに叫ぶ村雨。

通りすがりのリセがそれを聞いて、更に噂を流す事を、彼女は知らない……。

毒に浸った朽ちたくろがね

そうして始まった共同生活。また新しい問題が浮上する。

(……皆が使う装備を作る資材が足りない)

深海棲艦組の使う装備を開発する資材が見当たらない。

ダメだ。通常の艦娘の計算では全く歯が立たない。

専用の計算方法を探さないと。これは、七海の行った行動の責任。

自由には、責任を持って。そう、理想郷の名前を持つ海賊船の船長だと言っていった。

だから果たす。誰にも頼らない。これは、七海の起こした責任という仕事。

手探りならば、頭脳をフルで回転させてやってやる。

これは、可及的速やかに解決するべき問題であった。

七海はまた、打開のため、奔走する……。

そもそも、深海棲艦の艤装の整備は不可解な部分が多いのだ。

工廠の珍獣共は、未知の技術が関わっている以上、整備と再現が限界だと主張する。が、今回彼女たちの投降により、一部判明したのだが。

深海棲艦の一部は鋼鉄と生物の混じった半端な姿で現れる。

あれ、実は生物のほうが体内で装備を作り出して吐き出しているらしい。

資材を物理的に食らって、精製する能力があると今回、翔鶴が連れてきた浮遊要塞を解析して判明した。

なので現在、工廠の一画には浮遊要塞たちが屯する一画があり、日々深海棲艦用の艤装を作っているのだが……。

精製に、艦娘の建造並みに時間がかかる。それはそれで、体内で作ればそうもなる。ここでは、深海艤装とでも言うべき試験的な生産も始めている。

大本営は量産できて安全そうなら送ってくれと言うので、既に幾つか使って安全を確認したのち、レポートを書いて納品している。

ナイス仕事の翔鶴であった。

浮遊要塞は生きていたので餌の金もかかる。大本営より至急で連中の食うものも送られていた。

「にゃー!!」

「はいはい、分かってますよ」

猫のように鳴いて餌をねだる浮遊要塞。

餌付けする七海は、大量の魚を放り投げて浮遊要塞に与えていく。

重力に抗ってプカプカ浮いている理由は最後まで不明だったらしい。

ブラックボックスの塊だと、技術研究所の連中は嬉しそうに狂喜乱舞していた。

七海は裏方の技術屋から人気があった。主に、こういう部分で。

受け取ったデータをフィードバックしてみると、浮遊要塞は武装コンテナとしても機能する、多機能生物だった。

口の中に装備を飲み込んでもらい、必要なときに任意で吐き出してもらおう。

不思議なことに、結構な物量を収納可能、と浮遊要塞と話した七海は確認した。

ジェスチャーで会話する七海いわく、浮遊要塞も深海棲艦なので意思はある。

餌くれるからお前についていく、という約束で全員使役しているようだ。

そこそこ、仲良くやっている。

で、何故足りないかというと。

先ず第一。リセ、パクチーは、泳げない。リセに至っては、浮上できない。俗にいう陸上型と呼ばれる二名のうち、パクチーは脆弱すぎて砲が持てない。

まさか彼女が駆逐艦の主砲すら反動で吹っ飛ぶほど軽いと誰が思う。

要するにモヤシであった。リセは、逆に浮けない。立えずに沈む。

なので、二名には浮遊要塞に乗っかって貰い、戦ってもらうのだが……。

二名はどちらかという、基地型に近いのか航空機の搭載数がバカみたいに多かつた。

簡単に飛行甲板を作成してもらった。で、装備した状態でどれだけ出せるか見てみると。

(……400?)

リセは360。パクチーは400。一名で一度に放てる最大数と、最大搭載数である。

まる航空基地のような恐ろしいを通り越しておぞましい数であった。

翔鶴も380と凄まじい数を使いこなす。正直、七海の想像を遥かに超えていた。

言うなれば、スリー加賀とフォー加賀。二人合わせてセブン加賀。

言う、艦娘の皆さんは絶句した。何故加賀かと言うと、彼女の搭載数が大体100。

艦娘から見ても破格に多い。これでも。コイツらは倍以上だが。

で、問題は搭載数が多ければ、開発するのに使う資材も増える。消費も増える。

飛鷹や祥鳳、瑞鳳は常識的範囲内。深海棲艦は常識外。こんなもの、どう運用しろと。七海の指揮できる範囲を軽々超えている。それでもやろうとして、七海はどうとうパンクした。

「艦載機……航空機……あはは、あははははは……」

耳から湯気を出して、知恵熱で暴走していた。

工廠で、何でもいいから資材にしてやろうと危ないことをする彼女を血相を変えて五十鈴たちが止める。

「バカ、経年劣化した鉄を食わせようとしないの!! 錆びてるじゃない!!」

「つて言うか……なに、この鋼鉄の山……?」

浮遊要塞に食わせようとする、錆びた鉄屑の山が出来上がる工廠の一幕。

由良が、また見たことのない物を勝手に持ち込んでいると目を点にしていた。

「バーロー! 嬢ちゃん、これ化合物じゃねえか!! 再利用できるかこんなもん!! せめて純正のもんを持ってこいや!! そしたら俺達で工面してやつから!」

七海が資材が不味いとプライドをへし折って髭の珍獣に相談して、リサイクルするか持ち込んでよしと言われて、桜庭にも言ったら今度は陸軍の装備の失敗作やジャンク

を貰ってきているらしい。

戦車の砲台やら、無限軌道やらが洗浄されて持ってこられている。

髭の珍獣は、これは流石に用途が異なるので、一度溶解するように手配しろと要求。

七海はその通りに手配書を書いてさっさと送る。

いつも以上にハイライトが消えて、乾いた笑いを上げながら仕事をしていた。怖すぎる。

「司令官様、落ち着いて。大丈夫よ、あたしは何時でも出られるから。焦らないで」

リセにすら言われる始末で、結局この日は、七海が熱を出して倒れて終了。

無理をするなど言われて、翌日。名案を七海は思い付くのだった……。

そもそも、一番足りないのはボーキサイト。

艦載機で一番消費する資材である。

でも、思い返してみた。

ボーキサイトって、アルミニウムの元だった。

じゃあ、アルミ缶を浮遊要塞に食わせて代用してみるか、と。

浮遊要塞にも念のため聞いた。多分いける、とのこと。

多少不純物混ざるから強度に問題あるかもしれないが、物量作戦でならやれると。

なので、翌週までに皆にある命令を七海は出した。

「皆さん、ジュースはアルミ缶にしてください。再利用するので沢山消費をお願いします。食材扱いで、大本営にお願いしたので」

喉も潤う。資材も作れると一石二鳥の名案だった。

桜庭に確認。実験するなら大本営も手を貸すと、今度は巨大なトラックに、大量のアルミ缶をリサイクルするべく、搬入した。

とうとうリサイクルの意味すら履き違えている気がする五十鈴。

毎日業者が鎮守府を往復するとか誰が思う。

で、丁度皆も言われた通りがぶ飲みして、アルミ缶を生産する。

まあ、ここは文字通り美味しい思いをしているので文句はない。

七海もたまにはよい暴走をしようと言っているのもつかの間。

陸軍の装備も鋼鉄に生成し直して、新品同然にしてから工廠もフルで稼働する。

浮遊要塞も、毎日頑張つて、今度から長期のお休みを手配すると七海が約束したので、気合い入れてお仕事に励む。

そして、一週間経過した頃……。

「戦いは数ですよ姉貴!!」

「姉貴って五十鈴のこと!?!」

夥しい数の航空機が出来上がっていた。

まあ、代用品の宿命で、高性能なものは出来なかつたが、52型、彗星に天山に、偵察機も沢山量産した。

あとは分類が分からないコウモリみたいな奴と小さな浮遊要塞のようなものが沢山。ざつと1500ぐらいは短期間で開発に成功した。

「これなら、深海の白い悪魔にも勝てる!!」

「あんたまた熱出ているじゃない?! 寝なさいおバカ!!」

現在、謎のテンション高い七海の体温は39℃、完全に高熱を出している。

ちよつといつも以上にイカれているだけだ。気にしない。

一週間のお休みを受けた浮遊要塞が寝ているなか七海を連れて五十鈴は戻った。

そういう訳で、深海艦装の開発にも成功した訳だが。

……その裏で、問題が発生していた。

真夜中。七海は、解熱剤を服用しながら工廠に来た。

静まり返る中を懐中電灯で照らして、髭が呼び出していたので無理をしている。

緊急の用事らしい。髭を探すと、呼ぶ声がある。

向かうと、小さな明かりを灯した下で、つなぎの髭がタバコを吸って待っていた。

「よっ」

「どっもっ」

未だに妖精が大嫌いな七海は相変わらずの態度で髭に言った。

彼は一服しながら、椅子に腰かけた七海に、単刀直入に、切り出した。

「浮遊要塞が、二時間くらいまえにお前用の艀装を吐き出した。……偶然じゃねえだろう。あれに呼応するみたいに、全員の艀装の性能が上昇している。このままいけば、不味いことになりそうだけ」

髭は言った。元々使っているのは、死人の艀装。

それがまるで、その七海の為に浮遊要塞が精製した装備に反応するみたいに、性能が向上している。

使っている艦娘の肉体の限界を超える勢いで、だ。

「前に言っただろ。あれは、相当恨みが籠っているとな。ここ最近、深海棲艦が来たもんだ

からか、艀装が恨みを吐き出すみたいに、一気にリミッター外しているようだぜ。どうする、嬢ちゃん。お前は気にしないだろうが、艀装はそうは思わないようだ。どう、手を打つ？」

髭は試すように笑った。自分でやった業だ。皆を守るために、七海はどう出るか。それを見定めるように不敵に、笑う。

「……………その装備を、見せてください」

件の装備を拝見する七海。

髭は、既にそこに立て掛けてあると言って、タバコの手で示した。

明かりを照らすと、そこには太刀と言えるような大きさの刀が寄りかかっていた。

汚い、朽ちたような色の、鞘もない刀身を剥き出しにしたまま、器用に壁に寄りかかる。

「銘はつけておいたぜ。ムラマサだ。知ってるだろ？ 持ち主を殺す、呪いの刀さ」

嫌味のように髭は言った。呪いの刀、ムラマサ。

深海棲艦の腹の中で鍛練された得物を、人間が持てるのかと七海に聞く。

工廠全体から、七海に対して恨むような睨む視線を感じる気がし、七海は周囲を見回した。

艀装の視線だ、と髭は言った。お前は恨まれていると。そう、言うのだ。

「自分の罪だけ、嬢ちゃん。死者を蔑ろにした罰が来るかもしれない。どうする?」
「決まっています」

七海は即答した。

躊躇わずに、刀を挿んだ。瞬間、掌におぞましい感覚が伝わる。

冷えきった生肉を驚掴みしたみたいな感触だった。

同時に流れ込む、誰かの感情。

「なぜ?」

「深海棲艦を、受け入れるの?」

「敵を、どうして迎えるの?」

「あなたは、裏切るの?」

「ねえ、アドミラル。どうして?」

「なぜ、笑顔で受け入れてしまうの!」

女性の声だった。

悲しみと、怒りと、憎しみの声だった。

分からないように、七海に問う。憎いのだろうに、我慢して聞いてくれる。

感謝の気持ちだけは忘れない七海を、聞けば答えると最後の期待をかけて。

だから、七海も素直に言った。

「あたしには、そんな括りは関係ない」

七海は工廠そのものに向かって、言い出した。

深海棲艦だから全部殺すのか。

戦う意思のない者を恨むのか？

深海棲艦なら、あまねく全てを憎しみで燃やすのか。

そして、言った。

「あの娘たちは、あなたたちを殺してなんてない。恨むなら、殺した奴を恨みなさい」

憎しみは否定しない。

けれど、だからと言って無関係の、協力する意思がある者まで殺そうと言うなら、七

海は今すぐ全部を破壊すると宣った。

個人を恨めばいい。なぜ、深海棲艦と言うだけで知りもしない者を恨むのだ。

ふざけるんじゃないと。刀を闇に向かって突きつけて、吐き捨てた。

「皆を、そんな感情で沈めてみなさい。……お前ら、もう成仏なんてさせません。全員地獄に叩き落としてやる。目の前にいる敵で良いでしょう。恨むなら、そつちにして。今の皆は、一種の亡命者。その概念すら忘れたなら、今すぐに思い出させてやる。お前らがうちの皆に手を出すなら是非もない。……もう一度殺してやる」

髭は見た。七海の左腕を、根っこのように、毛細血管のように、黒い影が侵食してい

く。

目を見開いた。何が起きている。刀が……七海を貪っている!?

同時に、七海の髪の毛が色素を失い白くなつていく。

カタカタと震える刀身を構えた七海は、髭に分からない言葉で罵っていた。

『もう一度、暗い深海に沈みたいのかアッ!!』

怒号だと言うことだけは、分かった。

と、刹那髭は感じた。艦装たちが……怯えている。

七海が吠えた何かの言葉に、怯えて直ぐ様言うことを聞くようになった。

リミッターを自分からセツトして、大人しく従った。

「や、止める嬢ちゃん!! それ以上怒りに吞まれるな!! 人間に戻れなくなつちまうぞ

!!」

慌てて叫ぶ髭。すると、目の錯覚だったように、七海は何時もの七海だった。

「……? 何ですか?」

不思議そうにこちらを見る七海。

刀は、ムラマサは、普通の状態だった。

何ともない、錆びたボロボロの刀。

何が……起きた? 七海が一瞬、化け物に……深海棲艦に見えた?

しかも、ムラマサが気に入ったのか、止める間もなく持つて行ってしまった。
唾然とする髭。まさか、こんな方法で従わせるとは思わなかった。

(まるで……毒を食らつて毒を制するみたいなやり方しやがった……)

一先ず、艤装たちは……七海の意向には従うらしい。

かなり怖がつているが……大丈夫だろうか？

髭が後日、挑発して悪かったと、七海に謝った。

気にしてない七海の左手には……刀身を黒い鎖でぐるぐる巻かれた、ムラマサが握られていた。

海が蝕む、泥の華

……この力は、本当に安全なものなのか。

いいや、違う。

少なくとも、感じた限りこれは、危険なものだ。

(……もう少しで上手くいくかと思つたのに)

七海は知っていた。髭が渡したムラマサの力。

これは、深海の力だろう。初めて触れたときにも気づいていたとも。

海底に沈んだ誰かの思念。ああ、憎しみの重なつたものと言えればいいか。

なまものである感情が腐敗して至つた境地だろうと。

浮遊要塞が腹に抱え、毒に浸り、鍛練された朽ちた刀。

マトモな訳がないのだ。

憎しみを受信するアンテナのように、艤装の蓄積された恨みを伝え、七海はそれを突っぱねた。

当たり前だ。無関係の者を恨む奴等の感情など知ったことか。

それで害をもたらすならぶつ壊してやると言っただけはず。

成る程。深海棲艦の力は、憎しみか。七海には分からない気持ち。

何せこの女、殺されかけても誰も恨まないような人間である。

他人の憎悪に感化されるわけもなく、理屈と客観的に、そう判断した。

ムラマサは、呪いの刀。深海の怨念を撒き散らす、憎しみの塊。

けれど、髭は一つ勘違いしていた。

ムラマサが、七海を貪ったのではない。

七海が、ムラマサを取り込むとしたのだ。

だが、髭が声をかけたせいで気が散って失敗。

折角呑み込もうとした澱を、吐き出してしまったではないか。

なぜ取り込むか？ そんなもの、簡単だろう。

(……深海棲艦の気持ちは、深海棲艦にしかわからない)

艦娘になったときと同じ。自分が同類になれば、きつと分かる。理解できる。

彼女はもう、デメリットすらあまり気にしない。そこまで悪化していた。

自分が深海棲艦になれば、春雨や村雨、皆が否定されずにすむ。

自分が一斉に後ろ指をさされて化け物と言われればいい。犠牲は七海の義務。

そうやって、自分を全力で燃料にしようとする七海は、ムラマサを飲み干そうとした。

だが、周囲がそれを気付かないとでも？ 七海は身内に甘いのだ。

色々な意味で、油断をする。当然、髭から話を聞いていた五十鈴や由良、深海棲艦達

がさせる訳がない。

飲み干したい七海と、断固阻止したい周囲の、攻防が……始まろうとしていた。

五十鈴はまず気付く。この見覚えのない太刀は何だと。

聞けば、浮遊要塞が吐き出した七海の艦装。この時点で既に嫌な予感がした。

で、髭に聞きに行ったら、案の定のモノで。

しかも、知らぬ間に鎖が柄から伸びて、刀身を黒く巻いている。

そんなモノは当初無かった。つまり、ほっといたら勝手に出てきた。

(……まさか、七海は自分から?)

髭は七海が食われたと言うが、五十鈴は違うと思う。

あいつなら、自分から飛び込む女だから。絶対自分の意思に違いない。と言うことで、五十鈴は早速七海に要求する。

「七海。刀を超越しなさい。ボロボロでしょ？ 五十鈴が保存してあげる」

「方法を知らないのに何を言いますか。嫌です」

「後で調べるわ。七海も一緒でいいから、ほら」

「……」

七海もバカではない。奪われる、そう分かっているのに渡すわけがない。

七海は警戒して、無言で刀を抱き抱え、一歩下がった。

ダメだ。これは、必要なもの。七海にとって、渡せないものだ。

七海は無言で首を振る。

「……………」

五十鈴も黙る。気がついたか。

七海のやつは、五十鈴がムラマサを何処かに隠す気だと、分かっただらしい。

危ないというのに、彼女はまたバカなことをしようとしている。

にらみ合いをする両者。五十鈴は怒らずに言った。

「頂戴？」

「嫌です」

即答。断固拒否。

五十鈴は頑固な七海に、仕方無く本当の事を聞く。

「……七海。それ、何だか分かっているのよね？」

「……ええ」

真剣なトーンで聞けば、七海も素直に教えた。

呪いの刀。深海の怨念を撒き散らす、妖刀。

七海は言った。これは自分のものだ。渡さないと。

浮遊要塞が、七海の専用として精製した装備だ。

七海以外の使用を想定していないと、髭は言ったのだ。

ならば、持ち主は自然と決まる。

七海は続ける。

「……触って、分かりました。これは、危ないものです。だから、あたしが使います。あたしの武器です」

「危ないなら、使わないという選択肢はないの？」

「無いですよ。これさえあれば……あたしも、あたしも……村雨や、春雨みたいに……」

……様子がおかしい。五十鈴は気付く。

七海が、何時もよりも支離滅裂な事を言っている。

確かに普段から頭がおかしいが、理屈はある程度あるし、それを言うようにしている。
なのに……今の七海は。

「深海の力さえあれば……あたしも、皆と同じに……。深海棲艦……。憎しみの……。澱
……」

目の前の五十鈴を通り越して、虚空を見つめて小声で呟いている。

五十鈴は直感した。七海は、自分で取り込んだ気になっているだけ。

本当は、髭の懸念通りだった。

七海がムラマサに食われているツ!!

「七海、今すぐ離しなさいツ!!」

五十鈴は叫んだ。危険な色が見えていた。

抱えるそれを引ったくろうと、柄に触れる。

刹那。

——お前に我らの何が分かるツ!?

貴様に我らの痛みが分かるかツ!!

これは渋谷七海が求めるモノだ!!

こやつの願いを邪魔をするなツ!!

「ッ!？」

脳内を言葉が走った。

怒りと憎しみの籠った殺意が。

脳裏を駆け巡り、五十鈴を鋭く糾弾する。

けれど、怯んでも五十鈴は気丈に言い返す。

触れた手を離すのは敗けを意味する気がした。

七海を失う気がした。だから決して、離さない!!

(黙りなさいッ!! 七海を海の底に引きずり込むなッ!!)

五十鈴の怒号に、連鎖する憎悪の声が途切れた。

逆に、ムラマサの声らしきものを、五十鈴は真つ向から叩き伏せる。

(勝手なことを言うんじゃないわよ!! うちの妹を何処につれていく気!? この娘はバ

カだから欲しいものの選定が出来てないの!! それを誘惑して連れ去ろうとするな!!)

初めて、誰かに五十鈴は七海を妹と言った。

言外に、姉貴としてムラマサの所業を認めないとキレて、怒鳴り付ける。

姉として、七海の面倒を見てきた五十鈴に断りなく、惑わす深海棲艦の力を、五十鈴

の意思は振じ伏せた。

(痛み!? 苦しみ!? それを味わわせない為に七海は頑張ってきたんでしようがッ!!

それを自分に与えるって何よ!? あんたがそう誘導したんでしよう!? あんたがそう、七海に見せつけて見せびらかした!! 違うの!?)

……本当のところは、真実は七海にも分からない。

ムラマサが七海の意識に、彼女の自覚をすり抜けて介入して、惑わせたのか。

七海は自分を取り込もうとしたと思っているが、実は優先しているのは得物の方で。

奪ったと言うのは七海の思い込みかもしれない。誰がそう、言い切れる。

でも、そんなことはどうでもいい。思い込みなら、事実にするだけだ。

少なくとも五十鈴という姉が許さない限りは、ムラマサの力は逆に七海の意味に呑み込まれる。

それは、何故か? その憎悪の意識が七海を呑み込むには、同調が足りないから。

七海のなかには憎しみが足りない。

感情の理解がない七海には縁遠い感覚である憎しみは、空っぽの器を満たすには丁度よい。

七海に憎しみという感情を理解させるため、ムラマサは七海に呑まれていく。

五十鈴は七海の思惑通りに後押ししてしまっただ。

——呑まれる!! 人間に……我らの憎しみが!!

(!?)

声が、動揺している。

なにかと思えば、声は嫌がるように七海に叫ぶ。

ふざけるな、力を与えるとは言ったが、受け渡すなど言っていない。

止めろ、自分のものにするな、人の感情を吸い取るなど悲鳴をあげた。

七海は止めない。欲しい。深海棲艦の力。ムラマサの力。

憎しみを欲しい。深海棲艦になれば、もつと皆を理解できる。

嬉しい。こうして舞い込んだチャンスを手にして、深海棲艦も、艦娘も、全部分かる

提督になれる!!

(違った……!?! 七海がムラマサを吸ってるの!?!)

まあ、結局五十鈴は見当違いをしていたのだ。

最初はそうだったかもしれないが、ムラマサが抱える多くの憎悪は、七海にとっては

心地よかつたらしい。

憎しみを知れば深海棲艦の気持ちが分かる。気持ちが分かるとは、皆の所に近寄れ

る。

そうやって考えたサイコパスの中身は、それこそ深海の澱ごときで染められるもの

じゃない。

深海棲艦は、知らないのだ。憎しみは、確かに強い感情だろう。

けれど、この頭がおかしいサイコパスには、通じない。

憎しみを燃料にして、沢山愛そうと澱ごと全てを飲み干していく。

愛のために、よく燃える燃料程度の感覚しかない七海には、多数の泥すら好物のように頬張ってしまっただけ。

ムラマサが絶叫した。嫌だ、愛情なんて嫌だ。人間の愛に食われるなんて嫌だ。

——助けて、助けて!! 沈みたくない!! あんなたぎる病みの中には行きたくない!!
(……なんて娘なの……)

闇を通り越した、頭がおかしい病み。狂っている熱、即ち狂熱。あるいは、狂愛。

五十鈴は目の当たりにした。頭に流れる気味が悪い映像。

七海が、上からぶら下げたムラマサの下で口を開けて、刃から滴る漆黒の泥を美味しそうに飲み干している。

嫌がるムラマサが動いて抵抗するのを、ボロボロの刀身を素手で掴んで、血を流しながらまだ飲み続ける。

己の血と一緒に、沸騰した様に湯気をあげる泥を、口を開けて、喉を動かし、腹に流し込む。

横目で、五十鈴が絶句して見つめているのを発見したのか、口の端をつり上げて、笑った。

一緒に呑む？ と誘うような表情だった。

(要らない……そんなモノは五十鈴は要らない!!)

全力で首を振った。

悲鳴をあげ、七海に呑まれるムラマサを眺めるのがイヤになり、手を離す。

……すると。

『あたしの中を覗きましたか？ よく、平気でしたね……五十鈴』

目の前に、化け物がいた。

一瞬、七海かどうかも迷った。

髪型は同じなのに、純白に染まりあげ。

オッドアイの深紅の瞳は不気味に瞳孔を広げて、左目は気味悪く妖しく、淡く、紅く光る。

肌は土気色、額から小さな角が生えて、犬歯がむき出しになって笑っていた。

分からない言葉で語りかける彼女は……誰？

持っていたムラマサは、黒い根っこ、いや無数の細い血管のように持っている手と繋がる。

腕には黒い鎖が絡み付いて、固定している。

中身は七海の血を刀に流しているのか、脈動していた。

ボロボロだった刀身が、赤黒く靄を纏って、スパークするのか、放電していた。挙げ句には、左の首筋までどす黒い根っこが侵食して、頬辺りにまで達している。白い肌に、黒い根っこがよく目立つ。

「……七海？」

「ええ。七海ですよ。……少しは、気が済みましたか？」

五十鈴は問う。恐々と。七海か？

答える。なんと、ハイライトがちやんとある目で、何時もよりも感情の乗った声で。

「大丈夫ですか？　あまり、あたしの中に土足で入り込まない方が身のためですよ」

自然と、七海にしては有り得ない優しい声で、心配してくれる。

意識はハッキリしている。化け物が、七海の姿で、五十鈴を見ていた。

「……足りないものを、補ったからですかね。どうやら、これが本来の、普通にいる『人間』と言うものの様です。……皮肉な話で、あたしは深海棲艦にならないと、『人間』には、なれないようですね」

苦笑いする化け物は、ぐるぐると左腕に巻いた鎖を、呆然としている五十鈴の前でほどいた。

この化け物は、誰だ。優しげに問う彼女は、一体何者だ。

「嫌ですね、渋谷七海。提督ですよ。そして、艦娘であり……ご覧の通り、深海棲艦にも

なれる、多分世界で唯一の怪物、だと思えますよ?」

五十鈴に七海と名乗る化け物は、言い出した。

人間にも、艦娘にも、深海棲艦にもなれるコウモリ。

それが、自分だと。

壊れに壊れた七海は、澱を飲み干して、一周回ってマトモになったように、朗らかに笑っていた。

それは、大輪の花のように。

海を蝕む泥の華。それを宿した成れの果てが、生まれてしまった……。

深海棲艦提督の公開処刑

その姿は、紛れもない深海棲艦。それも、姫に酷似している。言葉を失う五十鈴の前で、化け物は言った。

「安心してください。あたしの意思は、ここにありません」

腕から鎖をほどいて、彼女は証拠を見せる。

言う通り、鎖を外して刀身に巻いていくと、徐々に変化は元通りになる。

色の戻る髪の毛や肌、角は縮んで牙も小さくなる。

根っこは刀が巻き戻しているように、引っ込んでいく。

数秒で、人間の渋谷七海に、戻れた。

「……七海」

愕然と、五十鈴は名を呼ぶ。

この娘、とうとう……深海棲艦にまで変化するようになっていた。

一時的とはいえ、身体に異常はないのか。七海は言った。

特に異変は感じない。安心したいなら、今すぐ桜庭を呼び出して、また大本営に赴き

検査してもいい。

どのみち、そうする予定なので気にしないと云う。

「……どうして、毎回そこまでするの？ 全部背負う必要があるの？」

漸く絞り出した言葉は、七海への糾弾だった。

毎回、彼女は勝手に進めては周囲を振り回す。

今回もそうだ。自分用の装備が危険と知りながら持ち歩き、挙げ句には変異を起こして。

止めろと言うのに、いつも重要な部分は独断だ。

ボロボロになったムラマサを持って、七海は五十鈴に言った。

「背負う必要が、あるんですよ。あたししか、全部を網羅出来ませんから」

七海は唯一の人間。艦娘。そして、深海棲艦。

艦娘は人間にはなれない。深海棲艦は人間にはなれない。

最初から人間である七海がやらないと、この鎮守府は……崩壊すると。種族を超えた集団を纏めると言うのは、五十鈴の想像以上に、氣遣う。鼻屑にならないように。区別しないように。蔑ろにしないように。

只でさえ敵対している反する者同士。緩衝材は必ず必要になる。

それが、連れてきた七海の義務だ。責任を果たすだけだと、七海は五十鈴に説明する。

「……」

言いは理屈的。義務と責任。大事なことだろう。

アンバランスな鎮守府なのだ。

口で言っても、本当に分かち合っているとは、七海も思っていない。

深海棲艦たちは、七海個人には感謝しているだろう。

だが、艦娘や他人に義理などない。もしも、艦娘が七海に敵対すれば、迷わず七海の

味方になる。

けれど、七海は人間だ。深海棲艦の気持ちをも、理解しても同調は難しい。

それこそ、同類になれば話は別だが……。

結果、七海はその理解をするために深海棲艦の力を纏った。

リスクのある方法で、その賭けに勝利して、今に至る。

全員を束ねる提督として、常識を捨てて対応するのが七海のやり方。

七海が集め、特務となったこの場所で、何時までも人間でいては、任務もできない。深海棲艦になれば、任務も効率上がる。

七海は一石二鳥だと言う。暴走した場合は……まあ、皆がどうにかしてくれたと言った。

嫌な信頼だけはしている。要するに後始末だった。

「……穢れを浴びて、よく平気だったわね」

ムラマサを見下ろして、五十鈴は七海に聞く。

そこまで言うなら、もう何を言っても無駄だ。

経験上、知っている。ここまで考えてやっている場合は、叱つても後悔すらしらない。

周囲がどう思うが、お構い無し。実際、間違つたことはしていない。

ただ、方法の選定を省いただけで、理屈としては正しい。

検査して異常があれば、改善すると言うし、細かいこと……他人の感情は度外視のま
ま。

必要なことと思つて判断したようだ。一理あるから、否定もできない。

これも、立場の違いだと思うようにしよう。

艦娘の五十鈴には、束ねる長の苦労は、分らない。

出来ることは、フォローするぐらい。

七海は、この程度の憎しみなどどうでもいいと言って切り捨てる。

やはり、気にならないのか。他人に恨まれても、覚えがないから自分は悪くないと。そう真つ向から言い返しているような女。

成る程、意味すら分からないサイコパスに憎悪など向けても暖簾に腕押しか。

五十鈴の思った通り、七海はムラマサを見せつけて、自慢するように言うのだ。

「これで、あたしも深海棲艦です。もう、皆が化け物と蔑まれる日々もお仕舞い。あたしが本当の化け物ですから」

嗚呼、また庇うためか。建前を説明しておいて、結局本音は……そこなのか。

自分が軽蔑される対象になるために、敢えて選んだのか。

それとも、此方が後付け？ 七海の構造では、どっちもあり得る。

本当に、説明しておいて世話がかかる。

五十鈴はため息をついて、いつも通り慣れた手つきで後付けを開始する。

そして、数時間経過した頃。

七海は、案の定ムラマサと共に大本営に、送られた……。

結果から言おう。異常無し。

身体には異変は起きておらず、深海棲艦になったのは事実だが、一時的な変化らしい。変異した状態で検査もしたし、模擬の戦闘も行った。相手は念のため、上司の桜庭。

詳しく言えば、姫に匹敵する内部変容を起こしてこそいるが、至って理性も保ったまま。

寧ろ普段よりも幾分、人間らしい状況にすらなっている。

原理は不明だが、ムラマサはどうやら所持する対象の精神に介入して、憎しみを当てて暴走を誘発する艤装。

しかも、ダイレクトで生の憎悪を浴びせるらしく、実験した際に大抵の人間は絶叫して放り投げたそう。

数少ない例外は、

「私を誰だと思っているの。この国の未来を背負う戦艦、大和よ。……生半可な憎しみで、大和を穢せると思うんじゃないわよッ!!」

と、憎しみの声を威風堂々と叩き伏せた桜庭。

更に意外だったのは、

「その憎しみの根本は、故郷を焼かれ、護れなかつた後悔と慟哭だったか。憎悪に至るまでの貴様らの思い、私にもよくわかるぞ……。そうか、それが貴様らの思い残した未練なのだな……」

話を聞いてすつ飛んできた島村だった。

彼は以前七海が言った意味を、理解していたのだ。

心身共に強く、人の基本を忘れず、人がどんな生き物かを考える。

その出した答えとは。

「私が抱く国防の思いを支えるのは、健全な肉体……。そして、人間の基本とは対話!!」

人間は言葉を持って繁栄してきた種族である!! つまり、渋谷提督の言う秘訣とは……

対話だったのだ!!」

完全な正解を導き出していた。

あの適当に言った言葉を正しく理解して、此度の一件で飛んできた島村はムラマサと対峙した。

そして、聞いたのだ。そのたぎる憎悪の根源はなんだ? と。

ムラマサのなかにいた、無数の意識は見せた。憎む理由を。

島村は見た。燃え盛る何処かの大都市を。

海から見る、沈みかけた誰かの視線で、焦土にされていく町並みを。

黒煙をあげて、砲弾や空爆を受けて破壊される人々の営み。

炎に包まれ、逃げ惑う多くの国民。淡々と破壊する、深海棲艦。

それらを見て、島村はムラマサの内部で慟哭をあげたと言う。

泣き叫び、繰り返したそう。おのれ深海棲艦、無秩序の侵略者共め。

世界を焼いた悪は、必ずや討ち取ってやる。

そう、四つん這いで闇を殴りながら涙しながら吼えた。

あとで再び戻ってきたムラマサの中を覗いた七海は気付いた。

何度も屈服した証なのか、内部の声は複数の響きが混ざる不協和音となっている。

七海は食われる、桜庭は殺されるという恐怖。

そして島村は……感謝。

自分達の憎悪を確りと聞いて、理解して、賛同してくれた人間。

憎む理由を、知ってくれた。聞いてくれた。受け入れてくれた。

「この無念……この慟哭……分かるぞ、貴様らの痛みがツ!! 我が胸中を切り裂く残酷な光景を、よくぞ見せてくれたツ!! 貴様らも私の中を見たのなら分かるだろう!!」同じ痛みだ、あの時とツ!! だが、貴様らは何度味わたのだ!? この苦痛を、この懺悔を! 沈んだ底で、苦しんだのか!! 護れなかった最期を繰り返して!! 地獄だ……私は今、地獄を見た!!」

ムラマサは七海にも見せた。

島村が、この精神の世界で、演説のように逞しい腕を広げて、涙しながら叫んでいる光景を。

「ムラマサと言ったな、艦装の中のものたちよ!! 渋谷提督が許してくれるならば、何時か時が来たら共に戦おうツ!! 二度と、二度と我らのような痛みを、国民に味わわせないようにツ!! 私はその憎しみを肯定するツ!! 私にもある憎しみだ! 共に、我等に痛みを与えた侵略者を、皆殺しにする日まで!!」

拳を突き上げて、島村が一段と強く雄叫びをあげた。

途端にムラマサもまた、叫んだようだ。

ありがとう。分かってくれて、ありがとう。

この力を使うときは、何時でも共に往くと。

あのハゲは、呪いの刀と意気投合していた。

同じような苦しみを受けた過去があるらしい。

その内、彼も特務を受けそうだった。

まあ、相変わらぬ艦娘の扱いだし、それは多分無いだろうが。

だが、やり方によらずに柔軟な思考の出来る豪傑である。

必要なら、受け入れる可能性も、有り得るかもしれない。

彼も七海を見て、関わって、変わっているのだ。

ただ、深海棲艦に七海が変化したと聞いて、酷く心配していた。

「渋谷提督。己を大切にすべきだ。私にも言っただろう、生きることが重要だと。なら、貴女も生きるので。深海棲艦の力を受け入れるのは、危険だと私も思う。私の命は、国のモノだ。貴女も、貴女の命は、自分だけのものではないと思う。周りを見るのだ、渋谷提督。貴女を案ずる声は、きつとある。生きて、貴女は貴女の戦いを続けてくれ」

安易に死に急ぐ真似は良くないと。

必要なことなのは理解した。

深海棲艦を束ねる者としての矜持だろうと島村は指摘した。

深海棲艦の亡命と言う荒唐無稽な事も、協力しているならば必要悪と受け入れる懐の深さもある男に心配されて、七海も流石に反省したようだ。

あとでコツソリと、五十鈴に謝りに行った。心配させてごめんなさい、と。

で、深海棲艦となった七海は、桜庭と戦って、言ったことは。

「この国、絶対滅びません。何ですかあの強さ……。っていうか、あんなのが世界には何人いるんです?！」

真つ青になって二度と戦うものかと半泣きだった。

血達磨にされたらしい。大本営の他のお偉いさんも納得した。

従来型の艦娘が変容した深海棲艦、しかも姫に近い存在ですら、桜庭には勝てないと運動不足解消といって、軽くタコ殴りにされていたようで。

撮影していた映像を、あとで鎮守府の艦娘たちは見て、絶句した。

あの姿になると知れた事で、動揺していた一同が、一斉に違う意味で動揺した。初めて見た桜庭、手加減状態での戦い。

……何が起きている。背中に背負った針ネズミのような無数の主砲。

扶桑のような超巨大艦装には何故か飛行甲板やら、魚雷やら、刀やら、爆雷やら、全部部載っかっている。

で、皆様桜庭の手加減スペックを見て、もう乾いた笑いしか出てこなかった。

こいつ、下手な姫の深海棲艦よりも強い。

手加減の数値ですら、大体全部200超えているとか、誰が勝てるか。

耐久に至っては、480!? 静香よりも高くて、本人もドン引きしていた。

七海も、ムラマサから謎の赤黒い衝撃波を出したり、半月の斬撃を飛ばしたりとワケわからない戦法だったし、機動力は唯一超えていると評価はされたが。

……桜庭は、正攻法で倒していた。

例えるなら、七海がズルいことをして反則的なパワーアップをしたとする。

桜庭は、ただただレベルをあげて経験を積み、物理で叩き潰すと言う脳ミソ筋肉戦法。

反則で、勝てるものなら勝ってみると言わんばかりの火力と手数で七海を血祭りにしていった。

どこの世界に、主砲をぶっぱなしただけで、周囲150Mが黒煙で見えなくなる。直撃せずとも、回避したのに余波で七海は大破寸前に追いやられて、最後には泣き叫んで逃げ回っていた。

あの七海ですら、桜庭に助けてと命乞いするレベルであった。

「ほら、安心を強調するには……ね？ 痛い思いも必要なの。わかる？」
「分かりますけど!! 死にたくないんですけど!?!」

七海の変容はそれだけ、周囲を不安に陥れる。

だからこそ、七海が何しても勝てない絶望を七海に与え、周囲には桜庭がセーフティになるとデモンストレーションしないといけない。

過剰に追い詰めるにも理屈と理由はある。

他の元帥が、桜庭に止めろと思わず進言するほど悲惨な演習だった。

深海棲艦にはなった。けれども、ただの子供が大人に助けを求めるレベルだった。

怯えたように反撃を諦めて逃げ回る七海は、一時間以上桜庭に遊ばれていたらしい。ここまで絶対的だと、鬼畜な大人が虐待しているようにしか見えない。

一同、七海への不安よりも七海への同情が強くなった。

(……勝てるわけないじゃん……)

五十鈴ですら、思った。七海が、上司にパワハラを受けている気がした。

結局、七海のこの惨状は、七海に対する不信感を持っているであろう連中にも見せられた。

桜庭は言つたようだ。七海が暴走しても、こうして自分で始末する。

まだ文句はあるか、と半殺しにされた、姿が深海棲艦のまま、血塗れにされぐつたりしている七海を猫つかみして見せつける桜庭が、笑顔で聞いた。

公開処刑か、殺戮ショーを見ている気分の一時間だった。

これは説得力がある。で、うまくいったのか、なんとか丸く収まったと言われた。

帰ってきた七海は暫く怯えて誰とも会わなくなつたぐらいのトラウマを植え付けられたようだ。

深海棲艦になつた一件は、桜庭の説得物理により、不満の声は一応収まった。

……代わりに、命じられた。

「あ、まだ足りないからね。演習して、安全だって証明するの。大丈夫、ちよつと最大練度の艦隊を渋谷さん一人で潰すだけだから。手配しておいたから、宜しくね？」

無茶ぶりされて、七海は痛い思いを暫く続けるようだった。

相手は、ある大佐の勤める中規模鎮守府。

別名、臆病者の鎮守府と呼ばれる、ある男との演習だった。

桜庭いわく、そこには面白い戦いをする空母が居るのでやりあってこいと。

練度限界突破の、七海よりもある意味危険なある猛禽類との戦いは、既に予約されていた……。

本当に結ばれる、物語の作り方

ここは、本来は違う男の物語。

艦娘を異性として認識せず、応援のつもりで送ったものが、のちにとんでもないトラブルを引き起こし、それを皮切りに己の認識を改め、本当に結ばれる、ただ一つの方法を探すお話。

……の、舞台になっているが今回は巻き添えと言う形だった。

完全にとぼつちり、どこぞの彼女とは違い、彼には今回は落ち度はない。

強いて言うなら、その真面目さのせいで某元帥の命令に背けず断れず、背負った結果がここだった。

「ねえ、あの話……本当に受けるの？」

相棒とする美しい黒髪の空母は男に問う。

手元に抱える書類には、例の演習の話を書いて、急遽彼女が調べた情報が載っている。正直、悪評しかない危険な人物であろうと言うのは周囲の評価で明白だった。

「受けるしかねえよ……。元帥の厳命だぜ？ 断れつてののか、大佐風情に？」

「……無理よね」

男は、肩を竦めて苦笑いした。秘書を務める相棒も頷く。

今年で数年経過するが、相手は着任して数カ月で大佐にまで上ったエリート女子高生。

いや、エリートとは厳密に違うかもしれないが、この若さでは異例の出世速度。

その経歴と戦果を軽く調べて、相棒の空母は絶句した。

彼女には悪名轟く異名が幾つもある。

命知らずの女子高生、艦娘殺しの提督、狂犬、深海鎮守府の女王。

全部同じ人物の悪名だ。全部ろくなもんじやない。

しかも候補生時代には独房入りの期間を更新した素行不良の軍人。

当初は反抗的だったらしいが、今ではすっかり大人しいとか。

だが、周囲との隔絶は大きいようで、いつぞやの大本営の乱闘騒ぎでは、箝口令が敷かれていたので噂程度であるが、暗殺されかけたらしい。

要するに、そこまでの危険人物。

で、本人も至って気にしない人物らしく、周囲が何をしようが知らん顔。

若いわりに無駄に落ち着いており、冷静沈着を通り越し冷酷無比だと言う。

「……ねえ、提督。止めない？ どうにかして、追い払ったほうが良いわよ。絶対、うちの艦娘を沈めに来るわ」

秘書は当然のことを言う。当たり前前だ。こんな危ないやつを普通は嫌がる。

無駄と分かってても、抵抗しないわけにはいかない。

「したいけど無理なんだな、これが……。逃げるなつて念入りされてる」

「あの女は……ッ!!」

元帥相手に憤りを隠さない空母。

嫌悪を浮かべる彼女だが、提督と呼ばれる男は諦めろと言った。

「無駄なことは止そうぜ。確かにろくな話は聞かないけど、今時珍しい、自分の意思で艦娘になった人らしい。相応の理由があるんだろ」

彼は、もしかしたら暫く滞在するかもしれないと言った。

驚く空母。聞いていない話だが元帥に言われたらしい。

着任してまだ日が浅いものだから、多少の面倒ぐらい暇してんだから見ろ。

意識するとそういう事を言われた。

キレル相棒。パワハラ極まりない横暴だが、彼はもう諦めていた。

自分とは違う、今まで関わりを避けてきた人種。

彼なりの一種の処世術としての方法だが、今回は無理矢理。

たまには、違う人種と接するのも良いのではないか。

などと、誰を相手にそんな能天気な事を思っていたのか。

サイコパスにバカを思った男には、彼女の災いが降り注ぐ。

運命の日は、刻一刻と迫っていた……。

七海はどうやら、一人で行くらしい。

しかも、艦娘としても提督としても、言うなれば見学に近いようで。

というか、研修？ に近いものだそう。

自分よりも長いことやっている提督から、深海棲艦を束ねるのに必要なスキルを学んでこいと桜庭に言われた。

幸い、能力は平凡だが人徳はあると言うので、七海は荷物をまとめて出発する。

留守の間、代理で皆は過ぐすと聞いたので、喧嘩はするなとよく言いつける。

「喧嘩の報告を聞いたら、あたしは口を利きませんよ」

と、脅すように言うのと、深海棲艦も艦娘の一部も、戦慄したように何度も頷いた。笑顔で、最高の罰を与えると言い出したのだ。存在を無視する。

唯一の認めてくれる七海が、意思を聞かなくなるという最大の罰に、大人しくすると誓っていた。

年上組の重巡や軽巡にも、何かあれば連絡を寄越せと言っておく。

「何かあれば五十鈴に言うのよ。絶対、助けにいくから」

と、無性に心配する五十鈴に大丈夫と笑いかけて、七海は出掛けていった。

道中、一人で電車やバスを乗り継ぎ、言われた鎮守府に向かう。

私服にも最近、白露型の制服を着ている七海は、このデザインが気に入って幾つか手縫いしておいた。

着替えも全く同じと言う気に入りぶり、ポストンバッグを抱えて向かう。

数時間かけて、海に日が沈む頃、例の中規模鎮守府に到着した。

「と、遠くからよ来たな……。し、暫くの間よろしゅう……」

ここの憲兵だろう。関西弁の、中年の男性がひきつった顔で受け入れてくれた。

ただ、七海の話は聞いていいのか、やはり……引いている対応だったか。七海は気にしない。案内されつつ、様子を眺め歩き出す。

姫園鎮守府にもいる艦娘もいるし、見たことのない艦娘もいる。

人数も当然多いし、皆活気に溢れている。雰囲気は、姫園鎮守府と似たようなものか。向こうは、七海が騒ぎを起こすのでもっと喧しいが、こっちはそうそう問題はないと見る。

この様子からして、七海の予想は合っている。まあ、人気はあるんだろうと。

戦果も事前に調べた。少し、気になる点があった。

大抵、支援や輸送任務ばかりを受け、成功している。

ただ、戦闘を極端に避けており、同時に倒すと言う意味の戦果は最低限を下回る。

戦いに関しては、七海のほうがずっと結果を出していた。

更に、練度はおおよそ所属する大半が限界寸前と言う恐ろしい次元だが、それは多分逃げ回っていた結果。

倒せるときに倒さずに、死なない優先でやっていたから、こうなった。所以の臆病者は伊達じゃない。

チラチラと、七海のことを聞いているのだろう。横目で見てくる艦娘たち。

大抵の表情は、険しい。警戒、敵意。針のむしろという感じか。

(……………でも、あたしにビビっていますね)

然し少しでも睨むと途端に視線を逃がしてしまう。

典型的な小心者のやり口だ。情けないと、七海は内心呆れていた。

案内されて、執務室と書かれたプレートを下げた部屋の前で別れる。

ノックして、女性の声で入れと言うので入室。

挨拶して、入ると。そこには、男性提督と秘書の艦娘がいた。

「はじめまして、渋谷提督。ようこそ、……鎮守府へ」

座ったまま、ここの提督がそう、微笑みを浮かべて言った。

表情は、硬いようだが。七海も適当に合わせ社交辞令で済ませて、挨拶を終える。

終始、秘書は七海を黙って観察していた。あまり、良い態度ではない。

印象は悪いだろう。値踏みするように見えてくる。空母、飛鷹。それが秘書の名前。

此方の飛鷹よりも数段冷たい視線を放つ、左手の薬指に銀の指輪をはめている女性。

成る程、彼女が件の空母か。横目で七海も観察する。

……数秒で理解した。こいつ、大本営で見慣れた敵意のある他の連中と同じ目をして
いる。

要するに、歓迎はしてないと。まあ、当然だろうが。

然し、それを臆面もなく出すか。仮にも客人に、その目を見せるか。

なにか質問はあるかと聞かれて、不愉快になってきた七海は失言を申し訳ないと先に言った。

そして、遠慮なく指摘する。

「大佐。あなた、部下の教育、出来てませんか？」

と言うと途端に、無表情のまま、無言で飛鷹が殺気を放つ。

よく見れば、成る程。瞳孔を開いたような恐ろしい目で、七海を見ていた。

猛禽類のような肉食の目をしている。七海は無論、そんなプレッシャーには怯まない。

「特に、その空母。あなた、いい加減その殺気、引つ込めてくれませんか？ 誰のせいで、自分の提督が悪く言われているか、自覚なさっているでしょうに」

横目で睨み返す。この提督、大佐は飛鷹にやめるように言った。

彼女は渋々、引つ込めるが刺々しい目線は変わらない。

「すみません、渋谷提督」

「……敬語はいりません。同じ大佐、何よりもあたしは若輩者。普通に喋って下さって構いません」

堅苦しい口調で頭を下げる彼に、七海は言った。

その辺にいいような地味な顔つきに、切り揃えた髪型の、平凡な顔立ちの男性。

彼は七海の言葉に、甘えると言ってから、口調を崩す。

「そうか。悪いな、俺も堅苦しいのは苦手なんだ」

と、苦笑して言うが……七海は未だに威圧する飛鷹を睨んだ。

「良いですよ。で、その空母。気に入らないと顔に書いてありますよ。あたしの評判を聞いての対応でしょうが、少しは隠しなさいな。何ですか、その様は。大人ならもう少し取り繕うぐらいしてほしいですね」

言外にそつちがそう思うのは勝手だが、前に出すなと言って威嚇する。

すると、今度は飛鷹も言い返した。

「……よく言うわね。どんな事情があつて来たか知らないけど、私はあなたを歓迎する気はないわ」

「飛鷹、よせ」

大佐が止めるが、聞いていないのか語彙を強め、飛鷹は七海に社交辞令さえする気はないと自分で言った。

そういう意思のようだ。呆れたように、七海は彼女に言った。

「それは結構。どうも、聞いていた話ほどではないようですね？ 人徳はあると元帥から伺っていましたが、実際は甘やかしているだけのようで。聞いて極楽見てなんとやら」

明確に、飛鷹に言っても意味がないと分かった七海は、否定の対象を関係ない大佐に変えた。

すると、案の定飛鷹が激昂した。一段と殺気を増して、七海を睨む。

「……なにも知らない頭がおかしい奴が、好き勝手言うじゃない。殺すわよ、あんた」
「飛鷹ッ!! いい加減にしろって言ってるだろッ!!」

初対面で、本性を現すか。怒鳴る大佐の声も聞いてないようだ。

七海は淡々と、そして飛鷹の殺意が本気だと分かつて、続ける。

「上等ですよ。よくわかります。どうやら、ご自分よりも慕っている人物を貶すほうが、あなたには効果的なようですし。次はどんな言葉で事実を言つて欲しいですか?」

おろおろする大佐。七海も全然退きやしない。寧ろ挑発して、飛鷹を誘っている。

飛鷹は艤装すら、鎮守府の内部で解放しようとしていた。七海も同じだ。

軍規を無視するような女ならば、躊躇いはない。客人だろうが、襲うなら殺してやろう。

「おいおいおい?! ええい、朝潮ー!! 加賀ー!! ヘルプミー!!」

大佐は埒が明かないと判断して、応援を呼ぶ。

直ぐ様、ドアが開いて颯爽と現れる二名。

「はい!! お呼びでしようか司令官!!」

「飛鷹、何しているの。止めなさい」

黒髪の美少女、朝潮。クールビューティー、加賀だった。

ずかずかと入ってきて、加賀は飛鷹をぶん殴る。

後頭部に拳が直撃し、油断していた飛鷹は一撃貫つて顔面から床に倒れた。

「あらあら？ 端正なお顔が台無しですね飛鷹さん？」

ざまあみろと七海が追撃する。起き上がった飛鷹は凄く怒っていた。

だが、七海には朝潮が介入する。

「無礼な言動は止めてください、渋谷提督。さもないと、ここでは物理的な介入も許され

ております」

と、敬礼しながら警告する。どういう意味か？

無表情で目の前で拳を振り上げた加賀のことだろう。

「喧嘩両成敗ですので、あしからず」

と、いきなりお仕置きと来たか。

七海もちよつと予想外だった。

見え見えの拳を難なく左手で受け止める。

「!？」

防御されるとは思ってなかったのか、その場の全員が驚いた。

で。

「殴られる覚えはありません」

軽々と加賀をそのまま吹っ飛ばした。

ドアの方に豪快に飛ばして、加賀も顔面から床に激突した。

痛そうだったが、七海は気にしない。

「本性を見せたわね……!! 上等よ!! かかつてきなさい異常者!!」

「そっちも本性を見せましたか。気に食わないのでお望み通り演習の前に遊んでやりましょう」

飛鷹が何だかお札を構えて、七海もムカついていたので襲いかかった。

なんと着任早々、七海はその秘書と取っ組み合いの喧嘩をおつ始めた。

「ファツ!! なんでさ!?!」

大佐も唾然とする。意外と七海は聞いていたよりも沸点が低いらしい。

ぎやあぎやあ言いながら、飛鷹と喧嘩を続ける。

朝潮も仲裁に入るが、朝潮すら巻き込んで大喧嘩に発展。

「二重の意味で頭にきました」

で、復活の加賀も参戦して意味不明な戦いが始まった。

頭を抱える大佐。なんでこんなことになったのか。

一時間にも及ぶ激闘の末、七海は全員ぶっ倒して勝利したが、着任早々、波乱万丈の始まりであった……。

深海の狂犬

出向した出先で早速問題を起こした七海は、助けを求めた大佐により急遽ストップを呼ばれた。

追加で常時、交代制で監視役をつれてくると言う約束になったらしい。で、初回に来たのが……。

「なんで出先でまでご迷惑をかけてんの、このバカッ!!」

拳骨で七海を粉碎する恐怖の軽巡、五十鈴お姉ちゃんであった。

出向いて早々、孤立する七海を玄関で思い切り殴った。

涙目で頭を抱えて抗議の目で訴える七海を無視して、回収して説教開始。

与えられた客室で互いに同室で泊まりがけの五十鈴が、兎に角デカイ声で怒鳴っている。

もう一人来た由良が、ペコペコ頭を下げて謝る係で分担している。

飛鷹はぼこぼこにされ、かなりご立腹だったが、反省はしていない。

というか、五十鈴が怒鳴っているのはぶっちゃけふりであった。

何故なら。怒っている内容が、そもそも違うのだ。

「なんでもっとうまくやらないの!? あんたなら取り繕うことは出来たでしょ!」

壁が分厚いので、怒鳴っているのは聞こえるが、内容まではよく聞こえない。

由良が出ていく際にきっちり調べて、五十鈴がお説教してますとアピールしているだけ。

実際は、大して怒ってなどいない。

原因は飛鷹の不手際だ。それは大佐だつて認めている。

最初に飛鷹が、七海に対しての失礼な事をするから。

七海は不信に思おうが気にしないが、それを隠すならまだしも、本人にあてるように睨んでいたらしい。

しかも、一度七海は止めると口に出したが飛鷹は続けていた。

大佐を責めていたが、彼も落ち度は分かっている。制止しても続けた飛鷹が悪いのだ。

自分のやったことなど棚上げしない。

当たり前のように思うなら構わないが、そういう大人げない事をするから、七海も怒った。

自分のせいなのと、飛鷹の態度が失礼なのは別の問題。

問題のすり替えは良くない。七海の言動は論点ではないし、飛鷹のあの態度が今の議題。

その辺を、大佐はよくわかっていた。

七海の元々は置いという、飛鷹の態度は間違はなく誰でも気分を害する。

七海が元々悪いと悪びれない飛鷹に、大佐はかなり怒っていた。

しかも謝罪する気もないと言うのだから言うだけ無駄だ。

飛鷹は七海の事を害悪として見ているし、七海もあんな艦娘は本気を出すまでもないと断じた。

最悪の対戦をすることになりそうだ。互いに完璧に殺意を持っているようだし。

五十鈴も此方の飛鷹は気に入らないとハッキリ七海に言っていた。

何も知らないのはお互い様のようだ。由良も敵意を持っていた。

謝るのは迷惑をかけた周囲に対して。ちゃっかり、飛鷹には由良も謝らない。

そのせいで、かなり険悪なムードになっている。

ここの鎮守府の艦娘は、七海をかなり警戒していた。

七海もそれは気にしないが、絡んでくるなら容赦なく撃退する。

故に、揉め事が非常に多かった。五十鈴が七海に言つて、七海は大人しくなったのに、向こうが異様に絡んでくる。大体が非難。五月蠅いと一度言つてもなお騒ぐ。

あながち、大佐の教育の甘さも否定できなさそうだ。

また、ここでの問題が発生していた……。

「あたしたちの鎮守府から出ていけッ!!」

五十鈴が到着してから、二日後。とうとう、二回目の喧嘩が始まった。

七海に今回絡んだのは、同じ夕立。しかも、この白露型も味方して、多勢に無勢で。食堂で大人しく飯を食っていた七海に、この夕立は苛立ったようにして、噛みついてきた。

我慢していたらしいが、上司の正式な命令を無視して現場で文句を言う夕立を、七海は無視していた。

が、夕立に加勢する白露、時雨、ここの村雨の三名まで寄つてきてぎやあぎやあ喚きたてる。

先日によつかきを出すなど大佐はちゃんとやっていたのに、この様だ。迷惑そうに、重巡たちが怒るのに夕立は聞かない。

七海を追い出せとしつこく言う。因みに、七海は今回なにもしていない。

完全にとぼちり。しかも、七海の我慢できないことを言い出した。

「こいつ、どうせ艦娘を殺すんでしょ?!」 深海棲艦なんか集めて!! 皆殺しにする気だよ! こいつの鎮守府の深海棲艦なんて、言葉が分かるだけの化け物なのに!!」

七海が一番我慢できない、自分のところの艦娘の罵倒をしたのだ。

結局、七海も飛鷹と同じで、自分よりも周囲を貶されると激昂する。

飛鷹は大佐、七海は自分のところの艦娘、及び深海棲艦。

あつさりと理性を振り切り、突然立ち上がった。

で、今回は七海から手を出した。

残像が見えるほどの速度で移動、重巡に向かって訴える自分そっくりの夕立を、そのまま飛び回し蹴りで蹴り飛ばす。

風を感じたと思ったら、違う夕立が夕立を蹴飛ばして着地していた。

吹っ飛ぶ夕立は、派手に周囲の物を破壊して壁に激突。

蹴られ、切れたのか滴る血を手で乱暴に拭い、立ち上がる。

好戦的に、然し表情は変えずに七海は見ていた。

「……羨のなっていないバカ犬が、人間相手に生意気な口を利くとは良い度胸です。自分だけがその力を使えると思っっているんですか？ 生憎と、お前よりもあたしのほうが同質のモノを上手く使いこなせますよ」

「何をツ……!!」

周囲がまた喧嘩を始めた彼女たちを止めようとするが、今回は七海も悪い。

だが、彼女の一番面倒なのは、誰も止められない暴走状態になること。

こうなると、ここの艦娘でも難しい。誘うように、七海は手招きしていた。

「おいで、バカ犬。……遊び方を教えてやります。先ずは無闇に噛まないようにする方法を教えてやりましょう」

思い切り見下して、キレた夕立が七海に突撃する。

跳び跳ねるように接近して、本当に野良犬のように唸りながら飛びかかるのはいい。

勢いもある。殺気も足りる。もしも、足りないとすれば。

それは相手の技量をはかれる理性と、引き際を知っている本能だろうか？

真正面から突っ込んできたのを、簡単に上段蹴りでカウンターを決め、微動だにせず
にまた吹き飛ばす。

机を巻き込んで破壊して、倒れる夕立。

「……いつ、あたしの妹に何すんだ!!」

最終改装を終えている長女の白露も襲いかかるが、速度が違いすぎた。

殴りかかる前に、予備動作で動きを悟られ、背後に回され、後頭部を掴まれて、そのまま顔面から壁に叩きつけた。

ヒビが入り、めり込む白露。痙攣している辺り、死んでは居ないだろうが……。

「仕掛ける相手の能力を分からないケダモノが、まだ居ますか」

淡々と処理する七海に、村雨も怒って、こっちは武器に食器を投げた。

しかも、ナイフだ。不意打ちをしたつもりでも、七海には通じない。

素早く振り返り、飛来するナイフを素手で掴み、投げ返す。

村雨のツーテールのギリギリを空を切り、素通りして背後の壁に突き刺さった。

啞然とする村雨。自分に見えないまま、呆気なく対応された。

「顔は、傷つけないでおきますよ。あたしの所にも村雨はいるので」

七海が明らかに手加減したと分かって、村雨は自失呆然と座り込んだ。

真っ青になって、勝ち目はないと真っ先に悟った。

「そうやって、あなたは周囲を意味もなく傷つける!! そういう人を、僕は看過できない!!」

怒鳴って、時雨も掴みかかる。

仕方なく、否定するために敢えて胸ぐらを持たせる。

意味もなく傷つける？　いいや、違う。

「意味があるから、傷をつけるんですよ。大人しくしている相手に仕掛けるのがそちらの言う、意味がない事ですか？」

先に、散々絡んでしつこい真似をしたのはお前らだと言ってから、徐に左手で時雨の首を掴んで、逆に持ち上げた。

途端に息苦しくなり、足掻く時雨。バタバタ手足を使って抵抗するが、七海は一切の容赦がない。

「このまま、首の骨をへし折ってやりましょうか？」

鬱陶しい犬どもめ、と吐き捨てる七海。

本当に他所の艦娘を人間として見やしない。

何せ、コイツらも姫園鎮守府の所属するもの達を貶したのだ。

同じことをするなら、同じことをし返すのみ。

徐々に顔色が悪くなる時雨を救うべく、復活した夕立が懲りずにまたもや飛びかかった。

怪我したのか、動きが鈍い。無論、その隙を逃す七海ではない。

時雨を盾の代わりに夕立に投げつけて、思わず受け止める夕立を、なんと時雨の背中諸とも飛び蹴りで巻き込み再度ぶつ飛ばす。

今度は一緒に巻き込まれて、派手に墜落して、気を失う二名。
のろのろと今頃起き上がった白露が、慌てて駆け寄ると、死んではないが大ケガを
負っている。

「()いつツ……!! よくもオツ!!」

怒り狂う白露が、気合いで七海に報復するように、まだ続ける。

本当に、懲りない連中である。

痛い目を見て、何故七海には勝てないと理解できない。

まだ、本気すら出していない。加減してこの有り様なのに。

「やれやれ。畜生の相手は面倒ですなぁ……。叩いても分からないとは」

猛獣の遊び相手は飽きたとウザったい顔になる七海に、激怒した白露や、七海の態度
にぶちギレて参戦する周囲も含めて四面楚歌。

にも関わらず、七海は余裕綽々で、手早くするから纏めて来いと挑発する。

「身の程知らずに、実力の違いを教えてやるから早く来なさい」

誘った七海に、手負いの獣とそれに加勢する無数の艦娘たちが、一齐に襲いかかった
のだった……。

結論から言おう。

七海は本気を出すこともなく、全員を血祭りにあげていた。

「……七海。流石にやり過ぎよ。死んだらどうするの？」

騒ぎに気づいて、もう言っても周囲にも意味などないと諦めた五十鈴が駆けつけ、惨状を見て七海にぼやく。

食堂は、阿鼻叫喚となっていた。多くの駆逐艦が血塗れで倒れており、重巡などは前方に暮れていた。

止めても止めても、血気盛んな駆逐艦が挑むのを止めずに、結局この結末であつたらしい。

大半が呻いているなか、七海はけろつとして、食事に戻っていた。

「本当に、ここにはハエが多くて困りますね。静かにご飯すら食べられない」

と、言っている無傷の七海を見て顔面蒼白の食堂の伊良湖と間宮が、震えていた。由良もあまりの剣幕に、叱ることすら忘れていた。

死屍累々の食堂を進み、話を聞く。

今回は七海から手を出したらしいが、やはり相手が無駄に騒ぎ立てていたようだ。

「流石に五十鈴も不愉快ね。大本營の決めたことにケチつけて、挙げ句に化け物ですつて?。」

腕を組み、手を出したことは良くないとそこは怒ったが、それ以上に侮辱を五十鈴も我慢できない。

起き上がったガッツのある諸悪の根元、夕立に向かって五十鈴が今度は言い返す。

「あんた、何様のつもり?　うちに文句があるのは結構よ。けどね、あんたらがそうであるように、五十鈴たちも仲間を侮辱されれば、手を出すわ。……あの娘たちの苦しみも痛みも理解できないくせに、偉そうに」

「仲間……!?!　深海棲艦は敵でしょ!?!　何を言っているの!?!　おかしいのはそつちじゃん!!」

ああ、こいつもか。五十鈴は直ぐに理解した。

こいつも、深海棲艦は皆殺しにすると言う発想しかない。

受け入れると言う事が、異常にしか、見ない。そういう奴だ。

そこにどんな事情があるかなど、考えもしないで否定する。

由良も、首を振った。議論にならない。これは、当然の対立だと。

ここの大佐は、島村と同じくある程度は受け入れる意思はある。

が、部下は違う。全員が、凝り固まった皆殺しの考えしかない。

七海の行動は、異常にしか見ないのだ。

「へえ……。なら、姉妹も殺すんですね。そうやって」

不意に。七海が、夕立に言った。殺すんだろう？ と。

なんの話か見えない、復活する白露の姉妹に、七海は衝撃の事実を明かした。

「うちにいる深海棲艦のうち、駆逐棲姫と深海雨雲姫と言われる深海棲艦は、変異した艦娘なんです。春雨と、村雨。この二名が、ある事情で、変異してしまっただけです。それでも殺すんですか。最低な連中ですね。特に、その村雨。お前も、条件さえ満たせば……同じ目に遭うんです。その時、お前らは殺すんですね。深海棲艦は、皆殺しにすると言うなら」

七海が言い出した条件を言った頃、運悪く提督も来ていた。

食堂の有り様を見て、最早なにも言わない彼に、夕立たちが困惑したようにすがって聞いた。

あいつの言うことは嘘だ。そんなもの有り得ないと。

事情を聞いてから、話してもいいと七海に確認をとってから、肯定した。

「渋谷提督の言っていることは、事実だ。深海棲艦になる艦娘の症例は……既に、大本営も知っている。あまり公表はされないけどな。……それが原因で、こんなことをしたの

か？」

彼の言葉などどうでもいい。

愕然とする彼女たちに、七海は嘲笑う。寝言をほぎくなど、とどめをさした。

「ハツ……。何が深海棲艦は皆殺しですか。なら、先ずはあたしを殺してみなさい駄犬共。聞いているでしょう、あたしもその気になれば深海棲艦にもなれるんですよ。けれど、流石に大人げないので今回は止めた。それだけですよ。犬との遊びに本気になる人間などいませんから」

と、敵意を出して吐き捨てた。

雑魚が調子に乗るなど言いつけて、躰をしたと言ってから立ち上がる。

提督に、処分は甘んじるので代わりに部下の暴走を歯止めするようにだけ、言っておいた。

「他人にケチを言うような艦娘が相手なら、あたしは加減しませんから」

去り際、彼にそう言つて、七海は居なくなつた。

残された惨状を見て、彼は感じる。

七海には、七海の流儀がある。それを貶すと、暴力で返すのだと。

後片付けをしながら、思う。

恐ろしい相手を、受け入れてしまったと……。今頃、後悔していた。

零の風、深海なる変態

結局、乱闘騒ぎの責任は全員でとった。

夕立始め、24名の駆逐艦は全員一週間の謹慎を言い渡された。

憲兵にも説教され、各々反省したかのようにかなり大人しくなっているらしい。で、七海は罰としてその抜けた穴を自分一人で埋めろと言われた。

七海は先に出して、拳げ句には半殺しにした。

一番重い処分だと提督は苦い顔で言いつつ、謝罪した。

「あの娘たちを、甘やかしていたのは俺の責任です。申し訳ありませんでした」
素直に部下の教育が甘かったと謝罪されたが、七海も幾分頭を冷やしていた。
あんな連中に暴力を振るった自分が情けない。

ただの犬が吠えているだけなのに、叩いて虐待してしまった。

という、正直相手を舐め腐っている反省をして、カツとなったと自分で謝った。で、凄まじい激務を強いられて、苦しんでいるかと思っただら……。

「眠たいですねぇ……」

あくび交じりでこなししていた。

戦闘が少ない鎮守府では、確かに強力な深海棲艦も結構な頻度で、七海の担当する海域よりは出てくる。

が、この連中は大体が限界かその手前。実力で倒してしまう。

なので、遠征や手伝いなどが大半で、七海は忙しくもない。

元々器用で要領も良いため直ぐに覚えて、全部こなす。仮にも提督は伊達じゃない。

周囲は七海を完全な恐怖として見ているので、なにもしなくなった。言わなくもなかった。

例外は、飛鷹が相も変わらず仕掛けてくるぐらい。彼女はどうにも、七海と同じ気質らしく。

気に入らないことはとことん反抗するような人物のようだ。

七海は一応の対戦相手であるが、どうでもいいので無視している。

彼女の逆鱗である提督のことはもう、悪くも言わない。

見ている分かった。この人は、どうもあまり優秀な部類じゃないようだ。書類を七海よりも遅く処理する。指示の仕方にも自主性に任せて適當。

七海よりは好かれてはいるだろうけど、どうにも及び腰で直ぐに逃げ出す。

(流石は臆病者の鎮守府……)

そう揶揄されるのも納得だ。

ビビって指揮をしているようにしか見えない。

いや、結果としてそれがこれほどの練度の高い艦隊を作るんだろう。

石橋を叩いて渡る前に、別の鉄製の橋を探すような慎重さだった。

危険なことではない。リスクは最小限に、生きるために戦う日々。

悪くはないが、七海の周囲にいる人間とはまさに真逆の存在であった。

学べることは、あまりない。精々、艦娘との接し方が参考になるかならないか。

その程度の器だろうと、判断している。

以前、ノイローゼを起こして医者に搬送されていたり、痴情の纏れとは違う事で騒ぎを起こしたりと七海と似た感じのこともしていたらしいし、平凡で埋没するような男でいい。

そう、七海は思っていたが。彼は、実は。

……七海と同類で、頭がおかしいことが判明したのは、ある任務の最中だった。

その日の任務は、北方の海域に厄介な深海棲艦が屯しているので倒してくれと言う任務。

本来は夕立が出るはずだったが、七海が血祭りにしてしまったせいで未だに謹慎している。

代わりに出てきた七海に加えて、旗艦に戦艦長門、加賀、朝潮、鈴谷、那智という面子で来ていた。

驚いたのが、この鈴谷は何でも空母らしい。

で、拳げ句には鈴谷、朝潮は指輪持ち。練度が限界を超えている。

道理で初対面の時にやった喧嘩で、あれほど持ちこたえる訳である。

飛鷹、鈴谷、朝潮は練度の上位三名であり、最強の一角だった。

同時に加賀もバカみたいにパワーがあるので、あの時は結構七海は不利な状態だった

ようだ。

道中、七海に長門が話しかけてきた。

「ここのものが済まないことをした、と。」

「……駆逐艦たちは、感情を優先するから、提督が言っても納得できなかったんだろう。今更言っても言い訳にしかないが、申し訳ない事をした。私が代わりに謝罪する。済まなかった」

駆逐艦が七海を受け入れないと言っていて、飛鷹も頑なに否定し続ける。

長門が言うので、別にもう良いと、素っ気なく切り捨てる。

あの提督は甘過ぎるからこうなる。

七海も大概甘いが、振り回す事を自覚しない彼女は、どうでも良いと言った。

暫く、彼に関して知ってもらおうと、譲歩した長門が熱心に説明する。

一応聞いている七海。駆逐艦や飛鷹以外、重巡や戦艦は当初からあまり敵対はしなかった。

止める方だったから、まだ客観的に七海を見ているようだった。

加賀に関しては……初対面のときは事情が分からずに鎮圧するためだったようだし、気にしない。

だが、それは良いとして。

聞き捨てならない事を長門は言い出した。

「この提督は、命がけで戦っていると言うので何を言うのかと思えば、

「あなたには信じられないだろうな……。あの人は、ダメージコントロールシステムを全員に標準搭載している」

「!？」

達観したように、最終改装の長門や那智は苦く、笑う。

鈴谷は悲しそうに表情を曇らせ、加賀はため息を、朝潮は聞いていない。

各々の反応に七海は呆気にとられた。

「血迷ったとしか思えないんですけど……」

七海ですら、ドン引きした。

異常者だ。七海と同類の狂ったやつがいた。

予想通りの反応に、加賀はその通りだと肯定する。

ダメージコントロールシステム。略してダメコン。

これは、海軍が作った欠陥システムである。

艦娘が戦闘の際、轟沈するほどの損傷を受けた場合、他のモノにそれを肩代わりさせるシステム。

だが、問題はその肩代わりさせる対象が、人間であることだった。

要は艦娘が死ぬほどのダメージを人間が受ける。無論、人間の方が遥かに脆い。堪えきれずに大抵死ぬ。あの男、何度も過去に轟沈するほどの被害を出しているようだった。

で、毎度のごとくそれを防ぐべく、自分が請け負って、病院に搬送されていた。七海も正直、艦娘になる前に調べていた時期に知って、一度は使おうと思った。だが、そのリスクは無視できるものではない。

結局、艦娘になることを選んだのだが……。

「鈴谷の時も、肩代わりしてくれたよ。凄い騒ぎになったけどね……」
沈んだように鈴谷は言った。

彼女も混戦のときに死にかけて、彼のお陰で生還した一人だった。

まあその時はそこまでじゃ無かったようだが、それ以降は全員に標準搭載していると長門は説明する。

皆は止めろと言うのに聞かない。譲れないと言わんばかりに続けている。

一度に二人以上沈めば、彼も死ぬだろう。間違いない。

それを承知の上でやっているのか。理由としては、七海と同じだった。死なせないため。

自分は戦えないから、自分を盾にして死を回避するという結論。

一同、うちの提督も相当奇特定の男であると七海に言った。話すなどは言われてないが、隠しているとも言える態度。

が、彼と言う男を語るには、これは外せないと言はると同時に言うのだ。

七海は、それを聞いて、評価を改めた。成る程、ただ甘い訳じゃないようだった。

それなりに、彼も覚悟を背負っている。大本営で悪く言われる理由は、これだった。

死なせないため、臆病者と蔑まれてもその道を往くと。そう言うことか。

七海とて覚えのある動機だ。というか、同じことを考えていた。

七海は誰も死なせない。笑顔を守る。その為は何でもする。

ああ見えて、あの男は……実は同類とは言えないが、結論は近いらしい。

(……そうですか。嫌いじゃないですよ、そういうイカれた発想。あたしもそうですし

ね)

大本営で使うなど言われている欠陥システムを躊躇わずに使う度胸。

相応の背負うものを持っているなら、上等だ。七海も少しは学べそうだ。

悪くはないと、思わず七海は言っていた。今度は皆が驚いていた。

「嫌いじゃないですよ。そういう無謀なところ。あたしも、そういう人間なら信用しま

すし」

と言って、自分はそういう狂人の一人であると認めていた。

じゃなきや、この手元にある物騒な得物を持ってきていない。

怨念の刀、ムラマサ。彼女を化け物へと変貌させる憎悪と澱の詰まった呪い。皆は七海が彼を見直したことは意外だったのか、理由を聞こうとして……。

その影を……発見した。

加賀が、発艦させている偵察機が何かの影を見つけたと報告する。

それは……。

「……53型？」

零式戦闘機だった。

見慣れない海域に、それらしき艦娘も居ないまま、さ迷うように飛行していると言った。

だが、なんと。

その戦闘機が、此方を見つけて襲ってきたようだ。加賀は慌てた。

偵察機の撃墜を確認。突然、同じ艦娘の装備のはずなのに、襲撃をかけてきたと皆に叫ぶ。

「バカな!?! 同じ艦娘だぞ!?! なぜ襲ってくる!?!」

長門が困惑して叫ぶ。複数、戦闘機が出てきたようだ。

長門の対空電探に機影。それぞれ、21型、52型、52型の改造したものが無数に飛来する。

挙げ句には、烈風まで出てくる始末だった。

意味のわからない襲撃を受ける艦隊。近くには、艦娘の姿はなく、無人島が点在するだけ。

誰が、何のために襲ってきているかも不透明。

長門がすぐに提督に連絡。そうこうしている間に、戦闘機が襲ってきた。

機銃で皆を上から銃撃する。大したダメージじゃないが、機関に当たれば致命傷。

回避運動に出るが、加賀も舌打ちして和弓で迎撃開始。

が、よりによって加賀も烈風を積んでいた。

艦娘の艦載機同士の、見たことのない戦いが勃発する。

対空射撃を行う一同。鈴谷も艦載機を出して抗うが。

相手の数がべらぼうに多かった。此方が多く見積もって130程度。

なのに相手は低性能なのを、数倍用意していたのか大量に押し寄せてきた。この光景、リセやパクチーで見たことのある七海が、不信感を募らせる。

提督も兎に角撃ち落として早く進めと言うので、取り敢えず反撃していく。が、七海は不意に。強い、耳鳴りに襲われた。

思わず顔をしかめる。持っているムラマサが、振動していた。

——烈風、おいてけ。零、おいてけ。

——帰れ。帰れっ。……帰れエツ!!

小さな女の子の声だった。

嫌な金属音に紛れて、必死に叫ぶ声を聞いた。

その方向を見た。戦うなか、長門に聞いた。

そこには何かがあると。よくわからないが、小島があると教える。

すると。七海は、ぴんときた。

(——ああ、そう言うことですか!! 新しい、お姫様アツ!!)

この耳鳴りは、七海にしか聞こえないようだ。

烈風のきた方向は、島のある方。海には誰もいない。

ならば……陸上型深海棲艦の仕業!!

七海に聞こえる声はムラマサが拾っているのか。便利なものだ。アンテナの代わりにもなるようだ。

喚いているその声に、七海は凄いヤバイ顔で笑って、応答した。

——はあい？ お姫様ア……？

——ひいつ!?

反応した。どうやら、聞こえているようだ。

早速七海は彼女に言った。

お前、捕まえる。逃げるな、オーケー？

(良いわけあるかあ!! ってか、誰?! 何突然!?! こっちくんナロリコンツ!!)

流暢な言葉で、罵ってくれた。

で、七海にいきなり集中砲火。銃弾が七海を襲う。

当然七海には効かない。走って回避する。

新しいお姫様を発見して、大興奮で誘拐犯の笑顔を浮かべていた。

提督に一報を入れる。特務があるので、任務を一時放棄すると。

「特務……? ちよ、まさか……」

提督は察したらしい。

嫌な予感がすると呟いたが……お見事。その通りでございます。

本日も、絶好のお姫様狩りを始めましょう。

「ヒヤッハーツ!! 見つけましたよ、プリンセスウツ!! お持ち帰りイイイイ!!」
どこぞの空母が酒を目の前にしたかのような雄叫びをあげて、キャラ崩壊を起こして
いた。

新しい仲間候補、しかも初のロリときた。

自分でロリコンって言ってたのでロリだろう。

ロリにテンションマックスの変態。

大喜びでそっちに向かって飛沫をあげて爆走開始。

(お、お姉ちゃんー!?! 変なの、変な変態が此方來てるよおおお!!)

ムラマサが伝えるパニックの声。姉がいるらしい。

欲しいので諸とも、お持ち帰り。

もつと走り出す。同時に、七海がムラマサを欲望のままに解放した。

「深海艦装、ムラマサ……解放オツ!!」

欲情の血走った目で吠えると、巻かれた鎖がほどけていく。

左腕に絡まって、根っこが彼女を蝕んでいく。

色が抜ける肌に髪の毛。発生する角と牙。

煌めく軌跡の紅い色。黒い根は、首を伝って顔まで迫る。

そして、唾然とする皆に背を向けて変貌する化け物。

「幼女おとおおおおお!!」

(ぎゃあああああああ!?)

深海棲艦になった、欲望決めまくる世界最強の変態が、誕生した瞬間であった。

本人もガチの悲鳴をあげていたが気にしない。

色情に暴走するロリコンの誘拐犯が、海を爆走して、その襲撃してきたロリを奪うべく、走っていく。

「……………なんだあれ」

艦載機が全部七海を追いかけて消えていき、立ち尽くす皆の中。

長門は呟いた。唾然と、呆然と。

かくして、ロリコン誘拐犯の戦いは、始まってしまった……。

深海棲艦ルート 澱に染まる意識

澱に染まった意識

特務。

それは、七海が与えられた、七海だけしか出来ない特別な任務。

七海が行わない限り、他の誰がこの使命を実行するのだろうか。

世界でも数少ない理解者は、ムラマサを呑みながら自覚はしていた。

ムラマサを取り込むと、七海は一周回ってマトモな思考になる。

一部の感情以外の欠落が著しい彼女がムラマサを解き放ち、そして駆け抜ける最中。

新しい仲間候補に大興奮の一方で、冷めたように自分を見つめる自分がいた。

(……また、こうして繰り返すんですね。あたしも、皆も……)

分かっていただろう。今は、違う鎮守府に入っている一部なのに。

また、こうして、建前があつて特務に出た。

進めればどうなるか、知っているのに。理解しているくせに。

遮る敵を一刀両断しながら進み、七海は思う。

嗚呼、また、対立する。また、拒まれる。

その理屈を、変貌して、感情ですら理解してしまった。

自分のやっている事のイビツさを。

自分が続けている事の無謀さを。

分かつてしまつたのだ。七海が、世界に、受け入れられない事実を。

(……知つてますよ。深海棲艦を受け入れるには世界は、痛みを受けすぎた。血を流しすぎた。戦争なんです……当たり前ですよ)

そう。今まで七海が知らないだけで、世界は散々蹂躪されてきた。

憎むべき深海棲艦。殺すべき深海棲艦。陸を奪う侵略者。

引き入れるなど有り得ない。個人を見ない。普通は、集団で見る。

知つているとも。利益よりも前に、感情が拒む世界。それが、今の世界なのだ。

憎しみの澱を一身に受けた彼女は、欠けていた情緒、と言うものを取り込んだ。

故に、本当の意味で、周囲の言動を判断してしまった。出来るようになってしまった。

ここに至るまで揉める、拒まれる、すれ違ふは当たり前で、自分が殺されかける、仲

間を否定されると、ろくな目に遭わなかった。

分かっているとも。七海がおかしいのだ。七海が異常なのだ。

他人がおかしいのではない。七海がおかしい。

……だけれど。逆に、言おう。

(じゃあ誰が受け入れるんですか。戦いたくないと言っている敵を。味方だったのに、見た目で判断されて殺される艦娘を。誰が守るんですか。誰が……愛するんですか!?)

世界の敵と言われたら、それつきりだ。

目の敵にされて、生きることすら許されない。

なにもしてない、何もやらない相手に、深海棲艦だからと決めつけて、殺す。

彼女たちが、人類に何をしたら言うんだ!?

(……あの娘たちは悪くない。そう、悪くなんてないんです……。悪いのは、敵対する深海棲艦。そのせいで、無害な娘まで殺される。そんな世界、辛すぎるでしょう……?)

……これが、悲しみか。

七海の中に今まで見えなかった、発露しなかった、新しい感情が生まれた。

悲しかった。空しかった。戦争だから、そう言われても仕方ない現実も。

ただ、四面楚歌で罵倒され死ぬしかない現在も。

ただただ、悲しかった。つまり、皆は……居場所がないのだ。

界。生きることすら、認められないのだ。自由など、権利などない奴隷のような悪夢の世界。

深海棲艦ならば死んで当然。深海棲艦ならば消えて当然。

疑問に思ったのだ。

そんなの……間違っていないだろうか。世界は人間のものか？

世界は、人類の所有物なのか？ 人類の支配しなければいけない物なのか。

同世代に比べて頭のよい七海にも分からない。人間はそんなに高尚な生き物か。

人間はそんなに立派な種族なのか。人間は、支配者にならないといけないのか!?

——いいえ。

絶対に違う。

人間は、そんな偉いものじゃない。

人間は、支配者などではない。

人間は、王者ではない。

人間は……被害者だけではないッ!!

(……分かりました。やっぱり、あたしがおかしいんですよね)

おかしいのは七海だろう。

郷に入れば郷に従え？ バカらしい。悪習に、なぜ従う理由があるのだ。

思い出せ、七海は何のために戦うかを。皆のため……ああ、そうか。皆がいたか。

(五十鈴たちは……あたしを見限るでしょう。今のあたしが、人類を……諦めたように) 艦娘のために、戦っていたのが、いつの間にか深海棲艦まで取り込んでいた。

五十鈴たちは艦娘だ。戦うのは役割であった。

だから、道も……違えるだろう。

そして、今向かう小島に関しても、今までの経緯についても、七海の中で結論は出た。

……もういい。人類には、疲れた。

桜庭や島村、赤松といった、理解者は居てくれた。

だが、彼らに対して、否定してくる人間や艦娘は桁が一つ上にいる。

彼らの存在が、何の慰めになる。なんの癒しになる。

元帥の権力を使わなければ七海は死んでいてもおかしくなかった。

ハゲの助力がなければ、もっとひどいことになっていた事も否定できない。

友人が居なかったら、七海は最悪提督を辞めさせられていても違和感はない。

……それぐらい、七海の周囲の人類は、艦娘は、敵意しかない。

いい加減、疲れた。感情を知つてしまい、揉め事を引き起こし、乱闘まで発展して、よ

くわかった。

世界は理屈がすべてじゃない。結果を出しても、感情が全部邪魔をする。

七海は、興奮から覚めて、改めてため息をついた。

（今の世界には、あたしたちは異物なんですか？ 深海棲艦という存在は絶滅させないと気が済みませんか？ 人間と艦娘しか、世界には居てはいけませんか？ ただ、深海棲艦に似ているだけで始末させるこの世界に、あの娘達の居場所は、無いんですか？）

七海は、散々周囲からその存在を疎まれた。

彼女のやったことは、理屈ではメリツトが大きいですが、それ以上に感情的な要素が大きかった。

結果は出した。恩恵もあった。尚、許せないと？ 外野は死ぬと口を揃え指を指す。

七海が裏切った。七海は寝返った。言いたい事を捲し立て、無駄に騒いだ。

何か実害を出したのか？ 死んだか？ 壊したか？ 何も無いだろう。

なのに、深海棲艦と言うレッテルで判断される理由は、深海棲艦だから。

たった、それだけの理由で……皆は、生きることすら、許されないのか。

（人類にはもう、あたしが感じるなどありません。お母さんさえ、無事に陸地で生きていけばそれでいい。もう、他人の都合には、飽きました）

何だろうか。この心情は。

……諦念？ 人類への失望？

多分そういう類いだとは思う。

要するに、七海はもう人間という生き物に辟易したのだ。身勝手な奴等の都合はもう、真っ平ゴメンだ。

一人の味方に十の敵がいる世界なんてもう、嫌気がした。

人間なんて嫌いだ。人間なんて、大嫌いだ。

自分も人間だが、今は深海棲艦の気持ちがよく分かる。

好きになれない。無論、全員が害悪じゃないとは言わない。

だが、だからと言って、いっしょくたにされて迫害される彼女たちは悪なのか？

個人を見る。しっかりと、彼女自身を見る。そして、それから判断しろ。せめて、そうしろ。

七海も個人を見てきた。ハゲもそう、赤松もそう、桜庭もそう。

なのに、それ以上に先入観、思い込みで判断する輩が多すぎる。

(もう嫌……。攻撃してくる人間なんて、迫害してくる艦娘なんて……)

諦めよう。そして、認めよう。

七海は、七海たちは、人間とは寄り添えない。

人間に味方する艦娘とも、分かり合えない。

よく、分かった。無理だったのだ。深海棲艦の味方をする七海が、人間のままでいるのは。

ムラマサによつて染み込んだ感情は、今まで無視していた理屈は、決めた。今から迎えに行く深海棲艦を得たら……行動しよう。

君と結ばれる、物語の作り方。分岐、その一。

澱に染まる意識ルートに、分岐する……。

小島に来るまで、戦闘機の銃撃を受ける。

全部無視。反撃もしない。

そのまま突っ込み、砂を巻きあげて浜辺に上陸した。

急ブレーキをかけたせいで、盛大に巻き上がる砂を払って、対象を探す。

上空では戦闘機が未だに抵抗するから、多分ここには居るんだろう。

彼女は小さな、生い茂る林の中に入っていく。

鬱蒼とした木々に阻まれ、銃撃が止んだ。物理的な盾を用意されたように旋回している。

七海は得物をぶら下げたまま、徒歩で移動する。

周囲は春の陽気で花が咲いていた。

綺麗な林に、適当に電探を頼りに探していると、反応があった。

但し、これは……。

(艦娘の反応がある……?)

艦娘の反応だった。種別は……潜水母艦?

(大鯨ですか……? なぜ、こんな島に……?)

潜水艦に補給する艦娘の、大鯨の反応があった。

向こうも気づいているのか、近づいてくるようだ。

足場の悪い場所を抜けて、進んでいくと、電探に深海棲艦の反応あり。それも、二つ。

大鯨と一緒にいると思われる。

どういう意味なのかは分からないが、姫と同類の深海棲艦を大鯨が倒せるわけがない。

性能的には大鯨は弱い部類だ。徒党を組んでも恐らくは無理。

なので、捕まっているか、あるいは和解しているか……。

どちらにせよ、七海には関係ない。仕掛けている以上、飛鷹が知れば殺しに来る。その前に、連れて帰らないと。嫌なら……仕方無いが、その時は諦める。

無理強いして連れ去るつもりもない。

敵なら、殺すだけ。一応、話しかけてはみる。

七海が反応に向かって歩んでいく。邂逅する至近距離で。

「い、こっちはこないでロリコン!!」

先程聞こえた幼い少女の声が、震えるように叫んでいた。

また、分かる言葉を発している。今回は、原因は予想がつくが……。

行く手を遮る背の高い草を掻き分けて、原っぱらしき開けた場所に出た。

すると、白い厚手のトレーナーを着た猫の耳みたいな髪飾りをする白い少女が戦闘機を手にして待っていた。

その後ろに、今の七海と同じく額に角がある乳のデカイ女性が怯えたように巨大な手甲をはめて座っており、隣には腕時計型の主砲ユニットと思われる物を向けている、セーラー服とスカートに、鯨の描かれた白いエプロンの紺色の長い髪型の、幼い顔立ちの少女もいた。

「う、動かないで……って、深海棲艦……?」

多分彼女が大鯨だ。顔を見るのは初見だが、七海の姿に困惑していた。

白い少女も異変に気付く。こっちに来るのは艦娘の筈じゃ、と戸惑っていた。戦闘機から、映像は見えてないのか。

あるいは、途中で変異した七海の速度に追いついていないか。

この際、どっちでもいい。七海は話しかけた。

「落ち着いてください。あたしに敵意はありません。接触するべく、ここに来ました。ごめんなさい、深海棲艦になる際に少し暴走しましたが……見ての通り、あたしは事情が通常の艦娘とは異なります」

まあ見ている、と論より証拠。

ムラマサを解除して、姿を戻す。三人は、言葉を失った。

深海棲艦から、直ぐに艦娘に変異したのだ。目の前で。

夕立にしては異なる外見の彼女は、刀身に鎖を巻きながら説明した。

軽い自己紹介、自分がなんなのか、何しにここに来たのかも。

「あたしは渋谷七海。従来型艦娘、夕立であると同時に深海棲艦でもあります。そちらの方は……北方棲姫に、港湾棲姫？ とお見受けします。あと、艦娘の大鯨ですよ。ここは危険です。あたしは、特務で深海棲艦を保護する任務についています。正確に言う、北方棲姫の聞いた通り、連れて帰るのが目的なのですが……。先程、艦娘の艦隊がいたと思いますが、連中は此方を見つけ次第、襲ってくるでしょう。あたしは仮にも

提督の身分でして。ついてきてくれれば、襲わせずにできると思いますが」

いきなりきて、信じられないかもしれないが、と前提を言ってから正直に話す。

無論、拒否権はあるし、その場合は連中が敵になり戦うと言ってから、反応を窺う。

北方棲姫に港湾棲姫は、戸惑っていた。

こちらから仕掛けてきたのに、避難勧告のような真似をする理由を、大鯨が代わりに構えたまま聞いた。

「見ての通り、あたしはコウモリです。どっち付かずの半端ゆえ、周囲から迫害されま
す。……出会ったばかりの皆さんだから正直に言います。あたし、近いうちに多分、離
反します。あたしが今まで保護してきた、面倒を見ると言った娘たちと。人類に、今
さつき愛想が尽きたので、居場所を探るか作るために、逃げるつもりです」

……彼女はこの短時間で、既に決意していた。

散々受けてきた七海の迫害が、限界に來たと言うことだった。

オツドアイが本気だと、初対面でありながら三人に雄弁に語っていた。

要するに、どうせ逃げるからその際で、最後の任務になるから一緒に逃げようと言う、
誘いの話だった。

茨の道だが、それまでは保護したいと。

共に準備して逃げて隠れようと提案した。

七海は、それしかもう、考えてなかった。

「時間はあまり、無いでしょう。暫くは構いません。あたしを信じず殺そうとしても結構。その時はなにもせず逃げますので。間違っても被害は出さないと約束します。

……浜辺で見張っているのです、お返事があれば教えてください」
返事は聞かない。

七海は背を向けて、一度去る。

三人は、一方的に用件を伝えた七海を疑惑的な目で見ていた。

果たして、彼女たちの反応は。そして、七海の行く末は。

さあ、物語を語ろう。

折角彼女が手に入れたのに、自ら突き放す愚かな真似をした人類に対する反逆を。

深海棲艦ルート、澱に染まった意識の物語を……。

深海を照らす、月の如く

結果から言えば、今回は失敗だった。

暫く見張りをしつつ桜庭に連絡して、見張りをしていると大鯨が代わりに訪れた。結論は、拒否。信用できないので、立ち去ってくれと言った。

了解した七海は、追撃しないのかと聞くが、その気もないと言う。

早く消えろと言わんばかりに睨む大鯨に見送られて、さつさと退散する。

小島が小粒に見えるほど離れる頃、特務と聞いていた大佐から通信。

結果は失敗と言うと、別の艦隊が倒しにいくから内容を教えろと言われた。

「無理です。特務は基本的に部外者には言えません」

素っ気なく七海は拒否する。当然だ。

この内容は、桜庭にのみ伝える事項。

部外者の大佐には関係ないので言えないものだ。

半ば予想はしていたのか、了解した大佐は離れるように言った。

諸とも空爆するらしい。まあ、相手は陸上型。それが一番手っ取り早いし確実だろう。

約束通り、七海は一切言わないし、一切手伝わない。

この大佐も仕事に関しては信用するが、他は信用しない。

彼個人を妥当に判断したつもりだ。

故に、特務を終えて彼女は本来の任務に戻っていった……。

そして。

演習の件だが、特務の報告があるため、一度大本営に行かないといけない。

書類などを纏めないとならないので、演習は一度延期になった。

飛鷹は去り際、もう来るなという顔をしていた。当たり前前か。

彼女からすれば、実害しかない面倒な客人だったのだ。

二度と顔すら合わせたくないだろう。

七海は散々迷惑をかけたのと、お礼を言ってから去っていった。

大佐も流石に苦い顔をしていた。七海を結局、彼は理解できずに終わった。

常人には七海は理解できない。改めて、そう実感する滞在であった。

五十鈴たちは先に鎮守府に帰っている。そこは心配あるまい。

数日かけて、大本営で桜庭に報告と書類の作成を行った。

桜庭が言うには、大鯨という艦娘はあの近辺で二週間ほど前、乱戦になった際に艦隊

からはぐれてM I A扱いで行方知れずの艦娘と聞かされた。

今は多分、死んでいるだろうと彼女は言った。

「あそこの提督、人は良いんだけど……相方になっている飛鷹つて空母はねえ。生意気な上に何しですか分かったもんじゃないって、後で知ったのよ。失念してたわ、すっかり提督の人柄だけで選んでたから。ごめんなさい、渋谷さん。乱闘騒ぎ起こしたんだって？ ま、向こうが悪いから気にしないで。どうせ、現実を見ない古い艦娘だから、あそこの連中は」

と、慰めてくれたが、今ごろ遅かった。

とつくに七海は、覚悟を決めていた。

彼女は理解してくれる。けど、相変わらず大本営の大半は七海を異端視している。

(……見回せば敵ばかり。これが、敵地に乗り込むスパイの気持ちですかね)

バカらしいとは思いますが、気分はまさにそれだった。

不愉快極まりない。こんな連中が、皆を否定して殺そうとする。

守る価値もない。理由もない。七海は心底、冷たく周囲を見ていた。

数少ない理解者には、温厚に接するように心がける。

だが、人類という存在には疲れている。

だから、やはり実行する。

逃げよう。こんな世界。こんな現実。こんな場所。

居たくない。混ざりたくない。接したくない。

吐き気がしてくる。人間の大半はこんなやつばかりなのか。

個人を見てもどいつもこいつも似たような奴で辟易する。

深海棲艦は殺せ。七海は深海棲艦の主、女王。悪なのだ。

励まされても、嫌悪は膨らむばかり。死ねと陰口を言っているのも聞いた。

(……五月蠅いハエがたくさんいる。何匹か鬱陶しいから潰しますかね)

と、そろそろ七海の中にある堪忍袋の緒が切れそうになる大本営。

我慢して切り抜けて、皆が待つ癒しの鎮守府に帰る事を少ない楽しみにしていたのに。

また、あの場所で……問題は発生していた。

憲兵が、皆に銃を向けたらしい。

帰ってきて早々、古鷹が七海に伝えた。

なにもしてない深海棲艦相手に、先日裏手で脅していたと。

留守中だけあって、泣く泣くりせは信用できそうな古鷹に相談して、人の良い彼女は
ずっと保護してくれていた。

直ぐ様七海は動いた。

言い逃れさせない物証に、深海棲艦を見張る方便に桜庭がセットを義務付けていた監
視カメラを解析。

案の定、見られているとも知らずに憲兵がリセを脅していた。銃を突きつけて。

何を揉めているか知らないが、良い度胸だ。今回は完全に七海は理性を振り切った。

戻っていきなり、憲兵の詰め所に殴り込みをかけた。

夕刻の休憩時間に、ドアをぶん殴って粉にして真正面から突入。

突然のことになにも知らない憲兵が、言葉を失う。

で、渦中の野郎が優雅に飯を奥で食っている最中だったので乗り込み。

「くたばれ」

と罵り、いきなり問答無用で殴り飛ばした。

拳を作り、顔をぶん殴った。

血をぶちまけて周囲の家具をぶち壊して派手に吹っ飛び起き上がる憲兵が、袖で拭って怒鳴り返す。

が、七海は持つてきていたカメラの映像を止めに入る他の奴に投げ渡す。

受け取った彼が中身を見てみると、理由が映っていた。

制止を振り切り、全員を殴り飛ばして七海は無言で血走ったオツドアイで、その男を狙う。

「畜生オ!! ふざけんよこの化け物ツ!!」

バレたと自覚して、武器を持ち出して抵抗する憲兵。

だが、そのリセに向けた拳銃如きで、七海が怯む理由も、止まる抑止力にもならない。銃口を向けた瞬間に詰め寄り、持っていた手ごと雑に掴んで。

思い切り粉碎した。そう、握り潰したのだ。人間の手を。艦娘と、深海棲艦の力で。

「ぎゃあああああ!!」

骨も肉も筋も纏めて鉄と一緒に砕いた七海。

砕かれた本人が絶叫するなか、周囲が全員で七海に再び止めに入る。

「止める提督!! 理由はわかった!! 分かったから殺そうとするんじゃない!! お前は早く逃げろ!! 殺されちまうぞ!!」

暗に七海はもう、相手を殺さないと気が済まないと理解した憲兵が、犯人に叫ぶ。

男は、潰された手を庇いながら必死に逃げ出した。提督の報復がないと、高を括つていた結果の惨事であった。

「渋谷提督!! 落ち着くんなんだ!! 人を殺すつもりなのか!! 貴方は本当に魂まで深海棲艦になってしまったのか!? 悪魔になってしまったのか!!」

悪魔でいい。人殺しでいい。

皆に手を出す奴は、誰であろうがぶち殺す。許さない。

これ以上、皆を苦しめる存在は、七海は決して許さない。

人間の声に価値などない。逃がしてたまるか。あいつは殺す。

奴は殺さないといけない命だ。引導を渡してやる。

「邪魔を……するなあああああ!!」

……で。

殺し損ねた。五十鈴たちが、制止に入って憲兵の味方をしたのだ。

「七海ッ!! 止しなさい、人殺しをしていいとは言っていないでしょ!! 七海ッ!!」

五十鈴が怒鳴って思い切り殴ったのに、七海は今回は止まらなかった。

由良が後ろから羽交い締めにしたのに、無理矢理進んで追いかけようとした。

衣笠が宥めても聞かない。古鷹が説得しても聞かない。鈴谷が言っても聞かない。

羽黒ですら泣きながら懇願するのに、憎悪に吞まれている七海には届かない。

騒ぎに気づいて、戦艦姉妹や嫁、妹、娘まで参戦した。

「司令官ッ!! あんな奴を殺しても、誰も嬉しくなんてないわよ!」

如月が目の前に立ち塞がりそう言って、漸く止まった。

唯一、彼女は違うことを言ったのだ。

あんな奴は殺しても意味などない。だから、止まれと。

「でも……!」

「如月も分かるわ。憎いでしょ、殺したいんでしょ……? けど、あいつは貴女が殺す価値

なんてない。落ち着いて。もう、良いでしょ? 司令官の手が、血塗れになっている

のよ？ これ以上やると皆が悲しくなるわ。もう、止めて。……人間に、イチイチ本気にならないで。コイツらは所詮、こういう生き物だもの……」

如月は、泣きそうになる七海の頭を撫でて言う。

何かあったのだろうか？ 如月は、こんなことを言う艦娘ではない。

なのに、この時は、酷く優しい表情で、七海に語りかけた。

男の汚い血を流している七海の左手を見て、首を振った。

如月の言葉に、七海はどうにか落ち着いた。

数時間経過して、病院に搬送された憲兵は、根治困難な重傷を負ったようだ。

が、またも原因は先に殺そうとした憲兵であった。

七海は、独房に徐々に一週間は放り込まれる事になったがそれ以上の罰はなかった。

……そして。

この一件で、深海棲艦の為なら、艦娘の為なら、誰であろうが牙を向くと言うことが、証明されてしまったのだった。

独房のなかは、懐かしい。

簡素なベッドに、小さな机しかない。

四方と壁と床はコンクリート。春先の冷たい夜には少し辛いか。鋼鉄のドアには、常に憲兵が見張りでついているだろう。

七海は私服に着替えて、放心状態だった。

ポーッと、小さい窓から見える満月を、黙って見上げていた。

以前は、候補生時代に何度もぶちこまれた部屋だった。

似たような光景の部屋で、一人で勉強していたのが懐かしく思う。

今は……どうするべきか、わかつてはいる。

人間を殺すのは、深海棲艦を殺すよりも簡単な気がした。

未遂までやってよくわかった。大したことじゃない。できる範囲だ。

確信した。次は上手にやる。成功させる。

後始末の方法も思い付いた。次は必ず殺す。

……けど、今は疲れた。もう、なんか何もかも疲れた。

またこれだ。毎回毎回、どうしてこうなる。

何度報復すればいい。何度叩き潰せばいい。

連中はなんなんだ。人類と言う、艦娘と言う害虫か。潰しても潰しても湧いてくるのか。本当に鬱陶しい。

「……人間死にませんかね……」

と、月を見上げて呟く七海。本心だった。

害悪は死ねばいいのに。全部殺せればいいのに。

そう、思う。

「そうね……。司令官を苦しめる人間なんて、死ねばいいのにね」

ふと。

隣には、如月がいた。

おかしい。さつきまで居なかったのに、なぜここにいる。

苦笑笑って、如月は大きな棒状の袋を抱えていた。

「さつきから、ここにいたわ。声をかけても無反応だったし。大丈夫？」

聞けば、如月は自分にも責任があると言って、無理に独房に入ってきたらしい。

なぜ？ と問う。すると。

「……ねえ、司令官。出先で、ひどい目に……あつたんですってね？」

如月は、静かにそう聞いてきた。

七海は驚いた。なぜ知っているのか。

騒ぎになってから、五十鈴が向かった際に、大佐が寄越した連絡を聞いて、彼女も行くと言ったらしいが五十鈴に却下され、残されていた。

故に事情を知っている。帰ってきた五十鈴にも再び聞いて、そして。

「司令官、帰ってきてから……ずっと、辛そうだったわ。きつと、沢山の悪意に苦しめられたんだって、如月にも分かるもの。お嫁さんだからね」

「……そうですか。世話をかけました」

自称嫁は、七海の機微に気づいていた訳だ。

五十鈴ですらわかってない僅かな変化を、離れていたのに。

待っていた嫁が、真っ先に気づいていた。

如月は人間の悪意など知っていると云った。

散々見てきただろう。暗殺未遂に、周囲の変化。

先の乱闘騒ぎ。全部七海に対する悪意なのだ。

本当に、敵わない。この嫁は、流石真っ先に七海に心を開いた女だ。

時間は少なくても、その少ない時間ですぐ気付く。七海は、参ったと言った。

如月は七海の嫁だ。誰がなんと言おうが、それだけは譲らない。

七海の愛が、親愛であって恋愛でなくても。答えを未だに分かってなくても。

如月は、七海の最初の味方だから。

「……」

七海はありがとうと、如月に久々に言った。

救われた気がした。誰もが悪意を向けるなか、彼女は変わらず愛を見せてくれた。

七海の気持ちに、応えてくれた気がした。

「何時でも味方よ。司令官が深海棲艦であつても」

袋を置いてから、如月は優しく七海を抱き締めた。

いつかの演習のときに泣かせたときの思い出させるように。

七海が今度は、抱擁を受けるときだった。

「なにか、お礼でもしましょうか」

七海はそう言った。ここまで支えてくれる彼女に出来ることをしたかった。

すると。如月は、顔を真っ赤にして、こう言った。

おねだりするように、久々に甘えて。

「じゃ、お返事ちようだい。良いでしょ?」

お返事? と言われて、気付く七海。

そう言うことか。いい加減、言わないといけない。

分かったと、直ぐに頷く。もう少しごねると思つていた如月は、驚いた。

「二つで、答えて、応えます」

七海は、そういつてから、如月に……微笑みかけて、優しく伝えた。
お礼と、感謝と、愛していると言う気持ちで。

「大好きです、如月」

顔を近づけ、目を閉じる。

意味を悟った如月の目が、大きく見開かれた。

——そして。

——月光が差し込み照らし出す独房のなかで。

——二人は、初めてのキスをした。

(……如月も好きよ、司令官。何時だって、何処だって)
暫くして。

照れ臭くてふて寝してしまった七海は見て、如月は指先で唇を撫でた。

愛しい人が、初めてのキスを捧げてくれた。まさか、こんな風にお返事をくれるとは。大胆な……だが、最大の誠意だと思う。

愛された。愛した。相思相愛。ならば、良いだろう？

(自称お嫁さんから、通称お嫁さんになりたいから)

……置いておいた袋を開ける。

出てきたのは、ポロポロの刀。

七海の、艤装。呪いの、得物。

不思議なことに、如月が持つても何ともないそれを持ち出して、如月は鎖をほどく。

その行為の、意味することを知った上で。

(司令官。貴方だけに背負わせない。澱を背負うなら、如月も背負います)

彼女だけが苦しむ世界など沢山だ。

如月も背負う。愛している証拠として、証明しよう。

(化け物になっても、如月の愛は変わらないって!!)

決意した。七海が堕ちるなら、如月も堕ちよう。

その毒に浸って、深海棲艦になろう。

同じ世界、同じ道を歩むために。

如月は、刀を持った。喰われる覚悟で、何よりも。

七海を守る、その為だけに。月光を浴びて、新たな悲劇は、開幕した……。

それぞれを決める道

元々、なんでこんなことになったのか。

二名が独房に収容されているなか、慣れた手つきで代理を進める五十鈴は重たいため息をついた。

気になって調べて、呆れた。

件の発端になった憲兵は、新卒だったらしい。

で、この鎮守府に配属されたんだそうだ。

ただ、訳ありのここは初期の憲兵は誰一人残っていない。

全員異動して、逃げ出した。理由は言うまでもない。

で、居ないわけにも行かない憲兵は、内部でどうやら押し付けあって、無理矢理来ていたようだ。

選別方法は、上が決めていようだが拒否権はある。

が、何時までも決まらないと困るので奴は一種の生け贄となつたと聞いた。要するにあの男は来たくて来ている訳じゃない。

面倒なものを押し付けられた貧乏クジだった。

で、当然そんな毎日はいライラする。直ぐには流石に逃げ出せない。

七海の不在の間に着任した男は、鎮守府内部を歩き回っている深海棲艦に、当然苛立ちを感じる。

提督不在なら、直接八つ当たりの憂さ晴らしをしてもバレやしない。

などと甘く見て、隙を作つてリセを憂さ晴らしに脅していた。

早く出ていけ、さもなれば殺すと口だけの威勢の良いことを言つて、鬱憤を晴らそうと思つていたようだ。

浅はかな男である。軽率にも程があつた。

ここの提督の逸話を知らないわけでもあるまいに、誰にも言うなと本人に言えば言わないと思つている辺り、思慮は浅い。

所詮は新卒。舐めた行動をしたせいで、七海の報復を受けてしまった。

提督は高校生と聞いてバカにしていたらしいし、当然の報い……などは言えまい。

「……はあ」

五十鈴はため息をつく。手伝う由良の顔色も悪い。とうとう、七海が相手を選ばなくなった。

人間だろうが深海棲艦だろうが、艦娘だろうが手当たり次第襲うのだ。理屈などもう、あの娘の中にはない。

反射的に悪意に対して過剰に反応している節がある。

……心当たりが多すぎる。やはり、度重なった衝突が原因か。彼女とて頭がおかしくてもまだ子供。

我慢の限界はあるだろう。七海は今まで、よく堪えてきた。

というか、気にしないだけで無意識な抑圧はあつたと五十鈴は今頃思う。だから今、あの娘は見境がない。

きつと、刺激すれば民間人すら殺すだろう。

「……七海。もう、無理かもしれないわね……」

ふと、書類を纏めていた由良に、俯いて五十鈴は言った。

もう無理。それは、提督を続けることではない。

人間のそばに居ること。そして、五十鈴たちもそれは同感だった。

「……ええ。多分、長くは持たないと由良も思うわ」

深刻に由良も呟く。

七海が人を殺すまで、時間の問題だった。

深海棲艦を、そして相変わらずこの艦娘を貶すものは、容赦なく反撃してしまう。周囲が何を言っても最早手遅れ。あんな風に、人間相手でも加減しないなら、殺すだろう。

制御は、出来ない。七海は、完全に獣となった。

言葉が通じない。意思疎通が出来ない。常識も良心も消失している。

行き場がないあの娘はどうすればいい。今じゃもう、海軍を辞めることすら出来ない。

彼女は民間に入れば単なる化け物だ。迫害されない方がおかしい。

「どうするべきだと思う？」

「……………最後の手段はあるわ。けど、それは……………」

由良が聞くと、五十鈴は方法がない訳じゃないとは言うが。

それは、要するに…………裏切りだった。

ここの深海棲艦と約束したことを、七海が破ることを意味する。

忠誠を誓ってはいるが、言い分を違えれば…………彼女たちは、どうなるだろうか。

多分、七海を襲う。特に、リセとリングゴは単純にして明快。

人間の近くにいないとその保証は出来ない。

現状、苦痛さえ我慢すれば……満たされている。

七海が居なくても、あの二人は問題ない訳だ。

パクチーに関しては、ここは安全圏。多分彼女も、七海は必要ない。

翔鶴も、艦娘として登録されているので、論外。村雨も然り。

この面子が、最終手段をとった場合、敵に回る可能性があった。

春雨は、七海にぞつこんだし、ご主人様呼ばわりしているので彼女につくだろう。

小春も大体、そんな感じ。静香は……何を考えているか、寡黙すぎて分からない。

けど、あの様子じゃ、きつと七海を守ってくれるはずだ。

見事に分裂すると、予想できる。

「……まあ、五十鈴は最後まで面倒見るけどね。お姉ちゃんだし」

「……意外ね。五十鈴、もう決めているんだ？」

主語が無くとも、二人の認識は同じであった。

既に、暗殺未遂時点で、五十鈴は見限っている。

理由もわかる。理屈も納得する。けど、生憎だが感情はそうもいかない。

五十鈴も結局、バカだったと言うことだ。

どうして、こんな茨の道を選ぶのやら。己も呆れてしまう。

リスクしかないし、下手しなくても死ぬ。カッコいいと言うには、あまりにも無謀で

無策で。

何より五十鈴は単なる艦娘。ここに居ること自体は、難しくもなんともない。なのに、彼女は妹を選ぶと即答した。

「ご生憎様ね。五十鈴の提督は七海だけ。他の人間に、命を託す気はないわ」と、由良に堂々と言えた。彼女は、愚かでも七海にしか従わない。

彼女の世話を、ずっとやっていた責任も自負もある。

半端に見捨てるなど、するわけがない。

「甘く見ないでよ、由良。五十鈴は、何があっても七海を見捨てないわ。それこそ、あの娘が人殺しをしても、味方であり続ける」

顔をあげた五十鈴は、決意のある目で由良を見上げた。

頼もしい姉である。何があってもそばにいる覚悟。それを、しているのだろう。

「……由良も、そうする気よ？ 厳しいお姉ちゃんだけだと拗ねちゃうから」と、軽く笑って由良も言った。

軽い調子だが、そこには五十鈴と同じく、姉の役割を投げ出さないと言う決意もあった。

五十鈴と違い失敗の多い由良だが、その気持ちは本物であった。少なくとも、人間よりは万倍マシだと思うぐらいには。

七海はこれ以上進めば、人も余裕で殺してしまう。

今回は瀬戸際で間に合った。でも次回は？ 本当に間に合うのか？

彼女が殺してしまう前に、果たして艦娘は彼女を止められるのか？

何時までも、七海が大人しくしている保証はない。

同時に、尽きぬ悪意が止むことも有り得ない。

七海の行いは、世界からかけ離れている。

理解など、常人には絶対に無理だともう証明をしているも同然。

ならば、どうするか。五十鈴は小声で言った。

「……けど、由良。覚悟は、しなさいよ。あんたも五十鈴も、あの娘と戻れない道を選ぶんだから。なるべく、他の艦娘には知られないで。信じると思つた娘だけ、言うのよ。五十鈴もギリギリまで七海には黙っておくから」

「分かつてる。黙っておこうね」

七海の知らない場所で、愚行を練っている姉たちがいた。

それは、知らず知らずに重なっているとも、思わないまま。

(……これは、誰の記憶?)

不思議な夢を見た。

彼女は誰だ?

彼女は、沈んでいく。忘れないでと遺して。

彼女は後悔している。自分の油断、護れなかつた約束。

自分でない自分の記憶か? いや、それにしても鮮明に見える。

誰が、これを体験した? 場面は切り替わる。

……今度は何処かの島だった。それは運命か、あるいは宿命か。

彼女は再び浮上した。けれど、同時に生まれ変わるさなかに浮かび上がり、別の苦痛を味わった。

怖い。自分が怖い。知らない自分になりそうで、怪物になりそうで、仲間を傷つけそうで。

どうなるかも分からない不安に、終わらない焦燥感。連鎖する不幸。

彼女は泣いていた。どうにもならない定め。けど、傍には……がいた。

大丈夫、どんな姿でも味方である。離れない。約束する。

そう、囁いてくれた大切な人が。消えていく理性の中でも、思い出す。たとえ、自分が海の色に染まってでも、彼女のことを忘れない。

その想いが届き、彼女は……一時的な奇跡を起こした。

ほの暗く心が染まっても我を保ち、約束を果たした。

そして……看取られて、光に消えていった誰かの追憶。

それは、彼女の知らない彼女の物語。

ムラマサの中に眠っていた、遠い世界、遠い過去のストーリー。

重なった不幸と、一握りの幸運の中の、幸運を見ていた。

(……そう。如月の知らない、如月なのね)

これは、数多いる如月の一頁。

断片を、彼女は漆黒の海を浮かぶような感覚で眺めていた。

自分の声を放つ闇に、問われる気がした。

何を求めて、ここに来た？

(愛を証明するため。苦悩を分かち合うため。何よりも、大好きな人と、添い遂げるため)

どうして、彼女を愛せる？ 敵となった少女を。

(愛には理由はないわ。理屈もない。ただ、好きだから。これが理由で、如月の唯一の理

屈)

本当に後悔しないか？ 同じ苦しみを受けることになる。

(しないわ。苦しみを受けない、分からない方がずっと苦しいもの)

世界を敵に回してもいいのか？

(構わないわ。司令官が死ぬときは、如月が隣で一緒に死ぬ。傷つくときは、如月も傷つく。その為に、力が欲しい)

お前は、死ぬぞ。彼女も、死ぬぞ。確実に。

世界は、愛を叫べるほど優しくも、甘くもない。

無垢な愛が、どす黒い殺意に堪えきれるか？

お前は、今の世界に、自分の愛を証明できるのか？

自分を擲つ意味を知らない艦娘が、渋谷七海という女に、応えられるのか？

よく見ろ。彼女の消耗した姿を。人類を諦めた目を。

堕ちるぞ。彼女はもつと、堕ちるぞ。

予言してやろう、駆逐艦如月。

お前が見たビジョンは、救われた物語の欠片だ。

お前は、救われない。お前は、報われない。

愛する女と海の藻屑になる。深海の澱になる。

そうして、お前も人類を憎むのだ。愛しい女を奪った人類を。

お前の行き着く先は、終着駅は、ここだ。

(……でしようね。だから?)

……なに?

(だから、どうかした? 勿体振らないで、早くそれを頂戴。そんなこと分かりきつてい
るし、最初からそれでいいわ。どうせ、如月にはあの時司令官が救ってくれなかったら
死んでいたし。同じ風に堕ちるなら大歓迎よ)

……正気か。

堪えられる訳がない。

お前は渋谷七海とは違う。

あの支離滅裂な思考をしている狂人でもない限り、呑み込めない。

お前の器では、容量が足りなすぎる。

(良いから。溢れたら溢れたで、司令官と一緒にオーバーフローするだけ。御託はもう
いいわ。くれるんでしょ? 覚悟はしているし、司令官が好きだって言ってくれたの。
それ以上の事はどうでもいい)

……狂っているな。お前も、彼女に感化されたか。

お前も狂っているぞ、如月。そこまでして、愛したいか? 愛されたいか?

警告を聞き流してでも、ただ愛し合いたいと言うのか。

(愚問をしないで。お喋りが過ぎるんじゃない、ムラマサ。全部知った上と言ったわ。これが返答。これ以上の問答は必要ない)

……忠告をお喋りと言うか。ほとほと、面倒な奴だお前は。

目先の感情を優先して滅ぶ女だ。精々、後悔するなよ。

勝手に滅べ、深海の澱を受ける馬鹿者。

お前は大切なものたちを捨てて、愛を選んだ恥知らずだ。

その選んだ先で、悔いが残らないようにしておくがいい。

愚かな艦娘に……幸あらんことを、暗き底で祈っているぞ……。

「……気持ちいい。これが、深海棲艦。司令官の浴びた毒なのね。とつても、甘いわ」

朝起きたら、隣にスゴいのがいた。

恍惚な声色で、クンカクンカといつも通りの変態プレイで。

が、なんか背中に入ったものがあたって痛い。

何事かと振り返ると、スゴいのがいた。

「おはよう、司令官」

「おい嫁。あたしのムラマサで何を勝手に変身してやがりますか」

「ペアルックよ？」

「深海棲艦のペアルックとか言う意味不明なパワーワード止めなさい」

何か嫁が、勝手に七海の艦装を使ってクラスチェンジしてやがった。

……七海とは違う変化だ。

肌色が土気色になり、自慢の髪も色素が抜けているのは同じ。

だが、彼女の場合は左頬や首筋が紫に変色しており、ひび割れのような模様が大半

だった。

左のこめかみ付近に、贈り物のアネモネの髪飾りをしているが、その部分に三つの角が。

額には、二本の角が生えていた。両目が深紅に変わって、犬歯も伸びている。

で、自慢するように彼女は言うのだ。深海棲艦になりました、と。

七海は、まさかの展開に呆れてはいたが、いわゆる何ともないようなのでまずは一言。

「おい嫁。責任とるからマジの嫁になりなさい」

「喜んで！」

「宜しい。浮気したら殺しますよ」

「しないわ。こう見えて、貞操観念は高いのよ？」

取り敢えず嫁に貰おう。もう開き直る。

女同士だろうが知るか。七海は元々皆が好きだ。

如月本人に対する感情が今頃恋愛になっただけ。

別に好きに変わりは無い。なので嫁にこいとだけ言う。

独房でのプロポーズとかいうこつちも意味不明なパワーワードになっていた。

「最早細かい事などどうでもいい。あたしは開き直ることにしました」

「開き直りって……無敵よね」

二人は既に恋人？ になったのだ。

前から如月は言っていたが、相思相愛なので恋人であつてる。

「さて。朝チュンなるシチュエーションな訳ですがね、如月」

「はい」

深海棲艦になったことなど気にしない。

如月は如月のまま。変化ないなら外見に角が生えた程度。

極めてどうでもいい。如月は七海の嫁。重要なのはそののみ。

そして、嫁と一緒に迎えた初めての朝というシチュエーションの方が優先である。

この時点で七海はかなりぶっ壊れていた。あっさりを受け入れて流す程度には。

互いにベッドの上で正座して向き合う。真顔であった。

「あたしの角よりも立派ですね」

「そう？ 司令官の角の方が凛々しいわよ」

「……角増やせませんかね。負けた気がして悔しいです」

「一角もカッコいいのに……」

「あたしは魚か動物ですか」

などと言いながら優しく額の角を弄ぶ七海。

擦ったいのか、如月は笑っていた。

「もう、朝っぱらから手つきがやらしいわ、司令官」

「やらしく触ってますので」

クスクス笑う如月に、七海は面白そうに撫でる。

で。数分して飽きて、話題に戻る。

「思い出した。もつと愛情表現しないといけないんだった」

今まで好きの一言さえ言わなかった反省をいかして、七海は要求を強要。

なにか命じろと言うので、調子に乗った深海如月は軽く言った。
冗談のつもりだった。

「じゃあ……おはようのキスして？」

「そんなんでいいですか？ では早速」

言った途端に迫る顔再び。硬直する如月に、強引に唇を奪った。

朝っぱらから濃厚なキスをかまして、一気に顔が真っ赤になる如月は、羞恥で一瞬で元に戻ってしまった。

「もー！ してって言ったけど、強引すぎ！ もっと優しくして！」

文句を言いながら七海の胸を軽く叩く、艦娘になった如月に、七海は元に戻れるなら尚更些事と断定。

今は嫁とイチャイチャすることにした。

「優しく……？ 難しいことを」

取り敢えずもつかいしようとする、怒る如月。

ムードが足りないとか、ストレート過ぎるとか、いちやもんをつける。

……結局昼近くまで、独房は甘ったるい二人の愛の巣になっていたのだ……。

逃亡の計画

嫁とイチヤイチャしているうちに独房の期間は過ぎていた。

反省する点もない七海はしれっと出てきて、周囲の憲兵を完全に萎縮させていた。心は決めている。こんな世界、もう願ひ下げだ。

(戦う理由も……あたしは本来、個人のためですしね)

国防の思いも、名誉も矜持もない。

自分が死なないため、身内が死なないため、それだけであつた。だが、それもお仕舞いだ。七海だって分かつている。

自分はその理由さえも捨てようとしている。選ぼうとしている。

全員は守れない。自分の限界を知った。

ここにおいても、七海は分身も分裂もしない。

一人で守るには、敵が予想よりも多すぎた。

何よりも、他者に興味がなかったせいで、守る対象の悪意を測り間違えていた。

無数にいる人間たち。人類全てを皆殺しにはしないが、それにしたってハエの数が多すぎた。

苦しめる者にイチイチ報復していると間に合わない。

もつと、手つ取り早く、悪意あるものを殺せる手段がほしい。

(……武器を。もつと強い力を求めれば)

頼るといふ選択肢もあるが、それが出来るのはまだいない。

誰にも言えない秘密なのだ。あの死んだであろう連中以外には、喋ってない。

それを踏まえて言ったのだから当然として。

七海は本腰を入れる。綿密に計画を立てて、邪魔する者は全部殺して。

その為に、準備を……始めよう。

先ずは、自分についてきてくれる、そして連れていきたいものたちを選ぶ。本音を言えば全部さらいたい。けど、それは物理的にも精神的にも無理。

反発する艦娘はいるだろう。そういう子は、置いていく。

好きに生きればいいのだ。七海が居なくても、この艦娘は生きていける。

溺愛はしているが、束縛する気はない。自由に選ばばいい。

少なくとも、七海は逃避行、脱走を選ばうわけだし。

(……如月は絶対に連れていく。あとは……)

如月は絶対についてきてくれる。

あとは、あの子達だろう。

「山風、ママのこと好きですか?」

「好きだよ? どうして?」

出てきてから翌日。如月に深海棲艦になったことは秘密に、と言って彼女は仕事に戻る。五十鈴たちにお礼を言ってから、一人ずつ確認していく。それとなく。

初回は、愛娘の山風。膝の上に抱っこして、抱き締めて聞いた。

即答する山風は、理由を聞いた。

「ママ、お仕事で単身赴任するかもしれないのです。……山風、一緒に来ますか?」

適当に誤魔化しつつ聞くと、

「行くよ。一緒にいく。何処でもママとあたしは一緒!!」

彼女はすぐに言った。じゃあ、と例えばと前置きして。

「ママが……もう、ここには帰ってこなくても?」

「うん。あたしはママの娘だから。地獄だろうが一緒だよ?」

暗に、そういう意味じゃないと含みを入れて聞くと。

あのハゲの鎮守府にいた影響か、何となく……理解は、したようだ。

少し、神妙になり。振り返り、小声で言った山風。

「……地獄でも、誰もいない海でも……ね。あたしはママの娘」

「そうですか」

賢い娘だ。これだけで意味を悟ったか。

七海がもう、逃げ出すかもしれないと分かったのか、甘えるように山風はそばにいと繰り返す。

答えは得た。彼女も連れていこう。

次は、妹だ。

「弥生?」

「……なに?」

その日の昼に、一緒に執務室でご飯を食べているとき。

何となく言い出したように、七海は無表情で昼を食べる弥生に問う。

「あたし、転職したいんですけど……どう思いますか？」

「……えっ」

今度は転職という体で、聞くと弥生は驚いたようにカレーを食べるスプーンを落としました。

驚いている。七海はまだ、そういう気になっているとだけ言ってから続ける。

「弥生は、もしもあたしが此処を出ていくとしたら……一緒に来てくれますか？」

「そ、それは……そうだよ。弥生は……七海姉と一緒にいいから。行っても良いなら、行きたい」

不安そうに揺れる瞳。

七海は秘密にして、と言ってから弥生に言うのだ。

「じゃあ……来てください。お姉ちゃんと一緒に」

「……うん。いつになりそう？」

「詳しいことは決めてません。五月蠅いので、秘密にしないといけないので。弥生は……簡単に荷物、バレないように纏めてくださいね？」

「分かった。準備、しておくね」

弥生も一緒に行くと言うので、連れていく。

これで三人は確定。次は、メイド三名。

「そういうことなので淫乱村雨イド。言うことを聞きなさい」

「誰が淫乱ですってえ!! 話が見えませんか!! 主語を言ってください!」

条件反射で殴りかかってきた淫乱メイドのパンチを受けながら、七海はメイド服の村雨に言った。

いつも通り怒る村雨。可愛い。じゃない、事情を説明。

彼女の場合は深海棲艦だ。

自分が転属するかも、と適当に言うが……。

「嘘言わないでください提督」

速攻バレていた。むすつと拗ねた顔で、村雨は言い出した。

「逃げ出すんですか、此処から。あるいは、反逆ですか? どのみち、突拍子も無いですが」

「……詳しくは言えませんが。然しいつ、気がついたんです?」

村雨は呆れたように、肩を竦める。

毎度七海に振り回されていたので、経験で何となく察していたらしい。

「散々揉め事起こして、そんな風に言い出すことは、自分からですよ。転属するか

も、なんて……提督には有り得ません。その前に、それを言ったお偉いさんは血祭りですよ。今の提督は、邪魔するなら暴力で突破するような人物ですので」

よく見ている。そして、よく分かっている。

流石はエロメイドだの淫乱村雨イドだのと言われるなんちやってメイド。

心酔していないので、客観的に七海を見ている。

「流石はエロ担当とツツコミ担当の淫乱村雨イド。お見逸れました」

「殴りますよ?」

怖い笑顔で凄むので取り敢えず謝って。

村雨は、ため息をついて返答する。

「村雨は一緒にいきましよう。春雨が絶対についていくので、心配なんですよ。提督の餌食になりそうで」

「……意外ですね。あなたはあたしを本気で嫌ってると思ってました」

理由を言いながら、村雨はどこかアホを見ているような生温かい視線で七海を眺める。

嫌っていると思っていたのだが、村雨は言うのだ。

「まあ、村雨をエロだの淫乱だのメイドだのつて散々好き放題いってくれましたけど、別にそれは……この鎮守府っていう安全圏を提供してくれて、その上でのイジリですか

ら。前提は、提督が受け入れてくれた空間があつてこそでした。そこを感謝しないほど、村雨は人でなしじゃありません。感謝しているんです。最低でも、命をかけて毎度守ってくれてますし。提督の背中を見てますので」

言葉はないが、行動で見ていると。

七海の愛情は、間違いなく本物で、皆を深く愛しているのは知っている。

なので、今度は恩返しぐらいはしたいと。

「すみません、今まで誤解していて」

失礼をしていたと七海は謝り、村雨は気にしないと云った。

そして、苦笑する。

「ま、村雨は貴重なツツコミ役ですから。ボケを殴り倒すのも使命です。ツツコミ不在の恐怖を知りませんか？」

軽口を言うぐらい、村雨は信じてくれている。

そこは素直に、頭を下げた礼を言う。

次は、春雨。

「ご主人様に尽くすのです、あたしの可愛いメイド春雨」

「はいっ!! わたし、何処までもお供致します!!」

一言で事情も言わずに懐柔。チョロい。

で、ついでに。

「小春。幸せにしますので、あなたを下さい」

「分かった」

小春もプロポーズして確保。

因みに幸せの内容は。

「お嬢様のそばにいと安心するの。だから、お側にいたい」

「覚えておきます」

小春は七海の側が良いと言うので、仕えて貰うことにした。

これで、一番近い面子は聞き終わった。

次は、慎重にしないとイケない。バレる可能性がある。

七海は、ゆつくりと、行動を開始する……。

多分五十鈴は無理だ。シバかれて阻止されるに決まっている。

お姉ちゃんのような五十鈴には言い訳も通用しない。

正直、五十鈴には分かって欲しいが無理だろう。

と、思い込んで七海は五十鈴を除外していた。

由良も……きつと、五十鈴に味方すると思うので除外。

一通り考える。……艦娘は、基本的に無理な気がする。

だつて脱走だ。深海棲艦とは違い、それは裏切りになる。

誰もついては来てくれまい。早々に、冷静に判断して諦めた。

下手なりスクは抱えられない。真に信用するに足る人物のみ選定する。

……七海は、甘い。そこまでお姉ちゃんたちは、薄情ではない。

言えば、簡単についてきてくれる。そう、特に筆頭二名は。

そもそも人間に不信任は、まだ抱いている。

七海の一件で皆は、七海のために戦つても、人類の為には戦わない。

それを視野に入れていない。故に見落とす。

まあ、駆逐艦や潜水艦、空母は……友人とは言えないが、それなりの仲だった。

だが、それなりではダメだ。邪魔をされたら、排除しないとイケない。

殺しはしないだろうが、痛い目には遭わせる。それが嫌なので、真面目に脱走を企て

ているのだ。

では、残りの深海棲艦は？

リングは拒絶している。他人が気にならない彼女は、上手い飯がある鎮守府に住み着くつもりらしい。

周囲との隔絶がどうしたと言わんばかりに日々を謳歌している。

リセ。彼女は、七海の異変に気付き……多少迷ったが、聴て。

「司令官様。……ねえ、もしかして……」

リセは、七海についた。

最後の揉め事は、リセの報復であった。

人間らしい生き方をしたいリセだが、七海にこうして救われておきながら、無視するのは寝覚めが悪い。

そういう理由で、加担してくれた。

「あたしも、人間らしい生き方って言うけど……いっそ、海賊みたいに生きるのも、良いかもしれないわね。こんな時代だもの、海賊なんてあたしたち以外にはできないだろうし」

七海にそんな風に適當なことを言ったりリセだが、まさか。

逃げたあとのプランがなかった七海に天恵を与えろとは、思ってもみなかっただろう。

それはおいといて。次、パクチー。

彼女も残る組のようだ。詳しく言う前に嫌がった。

七海には感謝しているが……波乱万丈な世界は怖いので、この鎮守府に残るみたいな気配がある。

なので、ここでお別れのようだった。

つぎ、静香。速攻で握手。ついていくと頷いた。

何故か？ シンプルな理由だった。

彼女……聞けば、一種のコミュニケーションができない部類で、ここも上手く周囲と馴染めない。

顔見知りの方がいいという情けない理由であった。そりや寡黙ならこうもなろうに。

最後、翔鶴。彼女も残る。

居心地の良い鎮守府を守りたいと笑顔で言われて、速攻で断念した。

聞くまでもない。もう結論はもらっていた。

なので、逃げる際は……結構な大所帯になりそうだが、この面々で逃走をはかることにした。

次は、浮遊要塞の懐柔である。

七海に懐いている浮遊要塞たちは、正直に話すと、別にいいぜと言ってくれた。

今では翔鶴の艦載機も十分揃っている。翔鶴も最近では浮遊要塞に構ってくれないようだ。

出番終了と思っていたのか、全部が七海の手下になった。

本音で、お前らを一番頼りにしていると言うと言っていた。

何でもできる浮遊要塞。これを解析して最近では砲台小鬼なる新型も海軍は配備予定のよう。

益々お払い箱になりそうで、怖かったらしい。

一生姉貴についていきます！ と騒がしく手下たちは忠誠を誓ってくれた。

「ありがとう、浮遊要塞。頼りにしています」

こうして、着々と準備は進んでいく。

艦装も浮遊要塞が居れば問題ない。

彼らの活躍が、皆の生命線でもある。

頼られて張り切って、彼らと共により細かい計画を練っていく。

逃亡する海路、脱出の仕方、目的地。

その他もろもろ、打ち明けた浮遊要塞とバッチリ相談して、気づいている村雨にも聞いた。

「可能だと思いますよ。つていうか……提督、ゲスい事考えますね……」
「効率の問題です」

大量の姫を抱えて、躊躇わずに艦娘を襲うと言い出した時点で、覚悟は決めていた。これからは、生きるために何でもする時代なのだ。

七海は逃げたあと、どうするかを村雨には言った。
リセが言い出した、あれを。

「海軍逃げて、海賊になりましょう!!」

今のご時世、いるはずがない海の荒くれもの。

海賊として好き勝手に生きていこうと言う、無謀で……然し、割と現実味のある計画が、立ち上がったのだった。

計画実行

さて、問題はどうかやって皆で逃げ出すかだが、着々と準備を進めていく。

監視カメラは位置を微妙にずらして映らないように細工して。

知られないように浮遊要塞に新しい艀装を頼み込み。

ついでに、要となる細工も慣れない手つきで拵えて。

分からないように少しずつ、荷物を要塞に押し込んで。

そして、万端になるある日の夜。七海は不敵に笑っていた。

ここは、先の大鯨のやり方を真似ることにした。

その為には、でっち上げないといけない。

舞台を。敵を。何よりも、シチュエーションを。

七海は画策する。切り札を使うときが、来たようだ。

(始めましょう……逃走劇を)

人類に別れを告げて。

七海は皆に、冷静になりつつ適度に芝居をして、頃合いを見て合流を命じた。

その頃には秘密裏に説明され、合意した彼女たちは、静かに行動を始めた。

五十鈴たちを、騙すため、そして……傷つけないために。

その日、五十鈴は悲鳴を聞いた。

夜間の警備に出ていた如月が深海棲艦に襲われたのだ。

その時、彼女は一人で警備に出ていた。

油断していたわけではない。少々、上の空になっていた。

その少し前に、夜の廊下で大声で七海と何やら揉めていた如月は、七海を激怒させたらしい。

「もういいです!! 如月の事なんか知りません!!」

話も聞かずに、自室に閉じ籠ってしまった七海は仲裁した五十鈴にも何も言わずに、出てこない。

泣きじやくる如月も、自分が悪いと言つて説明せずに、一緒に行く筈の警備に責任を感じて自分で向かつていた。

そして、悲劇は起きた。

「如月!? 如月ッ!!」

砲撃の音。雷撃の音。次々重なる嫌な二重奏。

攻撃が直撃したのか、如月は必死に抵抗を続けている。

五十鈴が呼びかけても、反応なし。

一緒にいた由良が内線で慌てて七海を呼び出すが、七海は無反応であった。

応援に行くように支度していると、攻撃の気配が止んだようだ。

敵の反応が消えた。イ級などの群れに単機で突っ込み襲われている。

完全に慢心の結果だったが、それはどうでもいい。

「……大丈夫。如月は、生きてます……」

絶え絶えの声で、漸く応答する如月。

手痛くやられたようだ。が、鎮守府の広域電探の反応がおかしい。

如月の艤装は、真っ赤に染まっていた。

航行速度の低下に、急激な温度上昇。

直撃弾を受けて爆発寸前だったのだ。

近くには普段遠征で立ち寄る小島ぐらししかない。

そんな夜の海のと真ん中で、ノロノロ移動する如月。

要するに、轟沈寸前。早く戻れと五十鈴が言うが……。

「……多分、もう……間に合い、ません……。ごめんなさい、嘘を言いました……」

如月が、悲しそうに言うのだ。もう、持たないと。

大破している如月が、戻るまでまだ距離がある。

小島に行くにも、距離は有りすぎる。

大破寸前なのだ、本人もきつと大ケガをしているに違いない。

五十鈴が今助けに行くと言うが、彼女は来なくていいと言った。

「今来ると……爆発に、巻き込まれます……」

その頃、漸く七海に通じて、血相を変えた七海が執務室に飛び込んできた。

電探の反応を見て、真っ青になり、直ぐ様無線に取りついた。

「如月!?! 如月、大丈夫ですか!?!」

遅れた事を謝る七海だが、彼女は。

そう聞くと、如月は……こう、七海に伝えた。

「ごめんなさい……司令官……。バカなこと、言つて……」

同時に、無線から爆音。

電探から、如月の艦装の反応が、途絶えた。

五十鈴、由良は、絶句した。……シグナルロスト。

この意味は……。

「えっ……。如月、如月ッ!? 返事をして、如月ッ!!」

呆然とした七海が何度も叫ぶ。シグナルロスト……即ち、艦装の消失。

もつと有り体に言えば……轟沈。沈んだ。

七海は何度も叫ぶ。次第に泣き叫ぶが、彼女のシグナルは戻らない。

「……くっ!!」

七海は焦れつたくなつたのか、無線を叩きつけて執務室を飛び出していった。

由良と五十鈴も続こうとするが、丁度その時。

「……どうかしましたか? 提督が泣きながら走つていきましたけど?」

村雨が、出ていこうとする二名を見て首をかしげた。

用事で来たらしい彼女は、顔面蒼白の二人を見て、何事か聞いた。

端的に説明する。如月が、沈んでしまった。

そう聞いて、村雨も焦る。が、出ていこうとする二人を止めた。

「ダメです!! 出ていったら、誰が連絡を取るんですか!! 落ち着いてください!! 提督が消えているのに、お二人まで居なくなったら困りますよ!」
慌てて制止して、七海が勝手に出ていったのだから、此方は待機するべきと冷静に指摘する。

二人は村雨の言葉に、何とか気持ちを落ち着かせて、深呼吸してから、戻る。

……沈んだ。如月が、死んだ。

消えてしまった。海の藻屑に、なってしまった。

広域電探が、七海の艦装を映した。凄い速さで現場に向かっている。

深夜の時間帯。普段ならば川内が張り切っている。

だが運悪く、今日は川内は昼間の七海の暴走により、撃沈されていた。

創作料理を作ると言い出した七海が完成させた謎のブラックマテリアルを毒味で食わされ、腹痛でドックに入った。

にも関わらず痛みが抜けずに寝込んでいるのだった。

その代わりに七海たちが出る予定だったのに……。

「嘘でしょ……? 嘘って言ってよ……」

パニックを起こしている五十鈴は、ぶつぶつと小声で呟き。

由良は失神してしまった。突然の事に、二人はついていけない。

無駄に騒ぎを大きくしないでと、村雨が口を封じ、拡散を阻止して。
更に、悲劇は……続く。

「な、何ですかこいつ……?!」

無線から、助けに向かった筈の七海が、誰かと交戦していた。

小島よりも少し離れた場所で、それは起きた。

電探の反応は……未確認。判別不能の、新種。しかも仮定分類は……姫。

七海は、救出に向かう途中に、間が悪く突然出現した新種の姫に襲撃されていた。

「七海?! 逃げなさい!! 早く!!」

もう沢山だ。これ以上、誰かが死ぬのは。

五十鈴が撤退を命令しているのに、七海は拒絶した。

「嫌ですツ!! 助けなきや……あたしが、あたしがあの娘をツ!!」

如月を助けることに固執して、その未確認と戦闘に入ってしまった。

応援に、七海の不在に気付いた山風と弥生が執務室に来てしまい、事態に案の定暴走。命令を無視して此方も助けに行った。村雨が春雨と小春を叩き起こして、一緒に向か

う。

未確認は凄まじく強いようだ。七海が、一方的に押されている。

「邪魔をするなあああ!!」

怒り狂う七海が暴走しているのを差し引いても異常なしぶとさだ。かれこれ30分以上粘っている。

由良たちが出る前に、応援の娘と妹が加勢したのにも関わらず。

あの娘たちもそこそこの練度はあるのに、防戦一方になっていた。

「由良、あんたも出なさいよ!!」

「準備してるよ!! ちよつと待って!!」

五十鈴がもつと応援に行かせるように、由良にも言う。

連絡は五十鈴がするから、早く行くように言うが、由良は焦れるように呟く。

「リセちゃんが静香さんと工廠でまだなんかやってる……!!」

内線で聞いたです。二名は、何やら装備の改造を夕方から夜中になるまでずっとやってきたようだ。

先程から何人が飛び出していたが何事か逆に聞かれる始末。

専用の耐熱ヘッドフォンをして音楽を聞きながらやっていたので、走っていく姿しか見えないと言うのだ。

それはそれで、危険な行為だったが今はどうでもいい。

工場の髭や妖精はすっかり寝ているし、二人は許しを得て何かしている。

由良は苛立つように、作業の中断を要請。

彼女たちの作業が、由良と五十鈴含む艦娘の装備をする設備の機能を阻害しているのだ。

「ごめん、これだけ待って。今、鉄を融解しているから、今やめると火事になっちゃうの」
鋼材の加工を遅くまでやっていたせいで、出られない。

悉く、邪魔が入る。由良は無理だと五十鈴に叫ぶ。

「何やってんのよあいっらは!? ああ、もう!!」

思わず怒鳴る五十鈴。本当に今日は間が悪い。

そうこうしている間に、村雨と春雨、小春も到着。

未確認との接触をしたのだが……。

「いい加減に死ねえ!!」

七海が激昂して殺しにいつている。

深海棲艦、姫も三人いるのに、全く相手は退かない。

七海が奮闘しているのだが、聴て。

「きやあ!」

七海が、直撃を受けた。

続いて、七海を庇ったのか山風、弥生も直撃。

「ママ……無事？ 良かった……」

「ミスしちゃつ……た……けど……。七海姉……逃げ……て……」

そして……痛みを滲ませる声で。

彼女たちも、シグナルの光が、黒くなった。

五十鈴の見る先で、表示する画面から……また二人、静かに、消えた。

「山風!! 弥生イツ!!」

思わず叫ぶ悲痛な声に、由良も更なる悲劇を知った。

戦場でも、怒り狂う七海の獣じみた咆哮と、激昂した村雨や小春の声も無線に混じった。

だが、現実は……無情である。

戦闘の音に気付いたイ級などの雑魚が群がってきた。

混戦となる現状で、眺めるしかない二人は指示を出すも追いつかない。

動きが鈍った七海が集中的に攻撃され、小春たちは未確認と激しく戦っている。

数分経過して……。

「し、司令……」

「お嬢様……！」

「嘘よ……ね……!?」

連鎖的に、未確認が三人を撃破して、沈めた。

一瞬だった。一瞬で、消耗していないのか奴は、姫を撃破したのだ。

驚く村雨、七海に助けを求める春雨と小春も、海に消えた。

画面からまた、光が黒く吞まれた。

「……………」

ここまで死人が連続すると、声すらあげなくなる。

五十鈴も、由良も、黙って眺めていた。

悲しみが限界を超えて、何も感じなくなっていた。

嘘だ。こんなのは悪夢だ、とすがる思いで見下ろすのに。

最大の悪夢が……非情にも訪れた。

最早発狂している七海は、死に物狂いで片っ端から殺していくようで、イ級など数秒で全滅した。

無線がイカれたのか、何も聞こえない。だが、一つ言えることは。

その直後、最も恐れていた、七海のシグナルがロストするという、最大の恐怖と悪夢が、二人に現実を直視させるのだった。

謎の未確認が大切なものたちを、夜の海に消した悪夢から数日経過した。

七海たちは、M I A扱いとなり、正式に死亡が確定した。

結局、朝になって探しに行つて発見されたのは、波に漂う大破した皆の艦装の機関部や残骸だった。

未確認も、七海を殺したあとに忽然と姿を消した。それ以降の行方は不明。

詳しく調べると、死ぬ間際に全員が無理矢理外そうとしていたことが判明していた。

海の上で艦装を外せば、即座に沈んで溺れる。それを承知で最後の抵抗ではないか、という見解だった。

無惨に破壊された残骸は、如何に激しい戦闘だったかよくわかる。

鎮守府は提督の死亡により、皆がおかしくなっていた。

リセ、静香は自分のせいだと言って、事情を知ったのち、自沈した。

つまり、自殺した。彼女たちも勝手に出てつて勝手に沈んでしまった。

遺書を残して。謝るだけの内容で、下手くそな文字で書かれていた。

大半はその未確認を憎んでおり、血眼になって搜索している。

特に五十鈴と由良の憎しみは半端ではない。

性格が激変したように凶暴化しており、邪魔するものを片っ端から排除して探しているという。

……事実上の、姫園鎮守府の、壊滅だった。

「いやあ、上手くいって良かったですね」

「……一言いいですか、提督」

「はい？」

「最低ですね。真面目に」

「……合法で逃げるにはこうしかないんです」

「ま、まあまあ……。落ち着いて村雨姉さん」

「ともかく。後で五十鈴と由良も迎えに行つてきますね」

「うえ!? マジで行くんですか!? 察知されますよ!?」

「新しい艀装の用意はあります。それで襲つて拐うのです」

「うわあ……」

という会話が、何処かの島で行われていることを、皆は……まだ、知らない。

後始末

七海がM I A扱いとなつてから。

そこそこ、波紋は広がっていた。

数少ない友人たちは悲しみに暮れた。

赤松は特に、落ち込んで暫く再起不能になつた程だ。

「武蔵よ、過去の分析を全て私に回せ!! 今すぐにだ!!」

「了解した」

島村は逆に行動を起こしていた。

彼は確かに悲しみがあつた。だが、それは何時でも出来る。

肝心で、急務なのは……七海を倒した未確認の深海棲艦。新種と聞いて、彼は迅速に動く。

あの七海が敗れるほどの相手に凄まじい危機感を感じとり、古今東西片っ端から僅かなデータを手がかりに情報を集め、倒す算段を立てていた。

（渋谷提督……貴女の無念は私が晴らす。貴女を蹂躪した、かの深海棲艦を必ずや討ち取って見せよう。今は静かに……眠ってくれ）

死者に対する弔いを感じつつ、彼女を倒した脅威が他に飛び火しないように、島村は奔走した。

結果的に不明のまままで徒労に終わったが、成果もあつた。

島村独自に性能を予想で数値化することぐらいは成功しているあたり、この男は只者ではない。

だが……。

「……………倒せるのか、この深海棲艦は……………」

背筋が凍るような結果を算出して、島村は腕組みをして、唸っていた。

そばにいた武蔵すら、数字を見て目を見開いた。

「正気か相棒……!?! なんだこの数値は!?!」

「武蔵よ。貴様、これが過剰に見えるか?」

「……………いいや。無いな。寧ろこれでも、優しい方だろうか?」

一枚の紙を見せて、二人は愕然とした。

その新種は……少なくとも。

少なくとも、正気を失い暴走していた事実を差っ引いても尚、全力で襲いかかった七海相手に30分以上持ちこたえ。

練度50以上の駆逐艦二名を一撃で轟沈させ、姫クラスの深海棲艦の駆逐艦すら連続で沈め、あまつさえ恐らくは大したダメージを負わずに、最終的に七海を殺した。

後任が教えてくれた情報を纏めて算出しておいて、装甲の数値はざっと400を超えている。

火力は最低でも300は軽く凌駕し、耐久は恐らく……800は下らない。

これは、この国の主要な都市を単騎で殲滅を可能にする数値だと島村は武蔵に説明する。

「バカな……。そんなものが、姿を隠して移動しているともいうのか!？」

「残念だが、元帥殿にもお伺いした結論では、これでもまだ甘いと言われた。分かるか、この意味が?」

問うと、武蔵は真っ青になって、彼に聞いた。

「……まさか。まさか、『奴』に匹敵する深海棲艦が……まだ、存命していたのか……!？」
「ああ。機動力と隠密能力は上だろうな。終焉の可能性が、また……出てきたと言うことだ」

冷酷に、島村は遠くを見た。

ほんの10年ほど前にあった、知られざる真実を、提督になってから知った。民間には秘匿されている、ある情報。

それは、この世界は意外にも直ぐ近くに、滅びの可能性が忍び寄っていた、という事実であつた……。

姫園鎮守府。

提督の死亡を受けて、大本営は軽いパニックに陥っていた。

深海棲艦の一部が鎮守府に残っている。誰があゝの深海鎮守府に着任するのかわ。

当然、直属の上司は責任をとらされるが、生憎とその女も無視できない存在である。

人類の最終兵器。世界に数名しかいない従来型艦娘の最強の一員。

言うまでもない、国内最強の艦娘である、桜庭。彼女は何かを考えて、自分から提案した。

「私が行くわ。それでいいしよっ？」

大本營で元帥として原則、現場には非常時以外には出撃しない女が自ら、重い腰をあげた。

彼女がひとたび動けば国民の税金が湯水のように消費される。

悪燃費も加速しており、簡単に説明すれば、彼女の通常出撃は、平均的なサラリーマンが家を一軒建てるのと同じぐらいの金がかかる。

それだけ、彼女の戦いは周囲の負担が重い。

だが、その抑止力としての強さも最強である桜庭は、姫園鎮守府に後任として、着任すると言い出した。

そうしないと、抑えが利かないと言うことで他の元帥も桜庭に泣きついた。

七海が殺された件で、その海域には未確認の化け物があるかもしれないという恐怖から、対抗できる彼女の着任には大賛成だった。

あとは現場で方法を考えると告げた彼女が数日経過してから、現れたのだった。

「現場なんて久々ねえ。……はい、皆落ち着いて。今日から着任する、桜庭薫子よ。階級

は元帥。知っていると思うけど、渋谷さんの直属の上司だったわ。よろしくね」

……言葉を失った。桜庭が、姫園鎮守府に来てくれた。

この悲しみ、憎しみを唯一理解してくれるかもしれない、七海の数少ない味方だった人。

五十鈴たちは全員呼ばれて、顔を合わせて萎縮していたり、深海棲艦は気絶したり、涙を流したりしながら聞いていた。

久々だという桜庭は、元帥の証である紋章を見せながら、七海が死んだときの状況を詳しく聞いていく。

手早く執務室にあった広域電探などの機器の情報も調べてから……聴て。何かを分かって、盛大なため息をついた。

「……ねえ。この中で、渋谷さんが亡くなる前に、変なこと聞かれた人いない？」

そう質問されて、回復したリングゴが、そう言えばとおずおずと手をあげて言い出した。今の環境は良くなっているか？ という、あまり彼女が聞かない質問だったと言った。

それで何かを分かったのか、桜庭はざっと皆を一瞥して、重巡たちと軽巡を残して、全員の退室を命じた。

何か不味いことでもしたのか。今も、人間に不信感を抱いていると知られたか。

ビクビクしながら、直立不動で待っている一同。全員が出ていくのを見てから皆に聞いた。

「あなたたちは、どうやら……渋谷さんの面倒を、艦娘のなかでもかなり見ていたよね。差はあれど、他の娘よりも漏れている気持ちが強そうだから」

そう切り出してから、五十鈴と由良を見て、問う桜庭。

「ねえ五十鈴、由良。……工廠にいるはずの浮遊要塞、どこ行ったか知ってる？」

浮遊要塞の事を、二人に聞くのだ。

そう言えば、いつの間にか全員居なくなっていた。

工廠にいるはずの浮遊要塞は、生きている。

勝手に移動する事も過去には何度もあったので、すっかり忘れていた。

バタバタしていて、その存在を完全に見落としていた二人は知らないと言った。

如月が沈む前には、確か残っていたはずだが……。

同じ質問を全員にする。答えは同じ。

すると……桜庭は、面倒そうに頭をかいた。

「やってくれたわね、あの娘……。そう言うことか、やっぱり……」

あの最強の大和の魂を宿す彼女が、途方に暮れている。

何事も理解できない皆に、落ち着いて聞けと前置きしてから、桜庭は単刀直入に切り

出した。

「多分、渋谷さん……脱走したんだと思うわ。轟沈を装って、MIAにすることで……追われるのを避けるために、偽装して。要は、生きてるとは思う。けど、どこ行ったかも私にも見当はつくけど、追えないかな……」

「!？」

……何と。

桜庭は、七海が脱走したと言い出した。

何を証拠に、と五十鈴が思わず怒鳴りそうになるが。

「おかしいと思ったのよ。ねえ、部下の皆に聞くけど。本当に渋谷さんが沈むなんてあり得ると思う？ 実際本気のあの娘と戦った私が言うわ。渋谷さんを殺せる深海棲艦は、私は数種類しか知らない。そして、その数種類に匹敵する新種が居たとしても、渋谷さんなら確実に逃げられるし、突破もできる。断言するわ……多分、細工してるんじゃない。予想は、如月って子かな。先に沈んだのも、恐らくはフェイクだと思うわ」

どういふことだ。なぜ七海は鎮守府から脱走などする？

混乱する皆に、理由は兎も角原理を説明する桜庭。

「まず、どうやって偽装したか。これは単純でね……この、広域電探。こいつの原理を知っていれば、割と簡単。まあ、協力する奴がいないといけないけど」

と、執務室にある巨大なモニターを親指で指差して、桜庭が続ける。

「こいつの原理は、皆の電探と同じ原理。要するに、水上電探な訳。だから……水中の敵は発見できない。潜っている相手には意味がない。あの娘、それを知ってたから、浮遊要塞を潜水させて、如月って娘に同行させてたんじやない？ だから、これの記録には浮遊要塞の出撃した跡が残ってない。鎮守府のすぐ近くから潜ると、灯台もと暗しで、記録されないからね……。至近距離に穴があるって、よく気づいたもんよ……。これって、これの欠点だけど、特に問題ないから放置されているのに」

いわく、浮遊要塞は水中でも呼吸ができるうえに、何でもできる万能な生物。

この広域電探は、艦装の機関部や生物の出す特定の周波数により判別し、どこにいるか、何と戦っているかを記録する。

深海棲艦は体内に艦装と似た機能を持つイ級などの場合もある。

その手の類いも判別できるが、例外的に水中の相手には意味がない。

水上電探の為、水のなかは分からないらしい。対空と水上のみだと言われた。

まあ、水中の深海棲艦は大抵魚雷が主武装だし、良くて爆撃をするぐらい。

対空を発見できれば、問題はないし水上に顔を出せば直ぐ様察知できると言う。

然し、欠点として……鎮守府のごく至近距離。

浜辺近くの浅瀬などが死角になり、探知できない。

そこから入って潜れば、範囲外に逃げればわからないというのだ。

「ちよつと工廠のカメラも見たけど……上手い具合にずらしてある。出口に死角を作るように角度を調整しているみたいだわ。やってくれるわ……。どれだけ手間かけてやってるのよこれ」

証拠に、監視カメラの映像も見せる。

……微妙に何か、違和感を感じる。

当たり前で、知らぬ間に角度を調整されている。

当日の映像も見るが、何故だか半端にしか皆が映らない。

しかも、割とどうでもいい部分ばかり。肝心な場所が見えなくなっていた。

「艀装も確か、無理矢理外そうとした跡があったんだっけ？ それ、細工でもしたかな。電探の仕組み知ってるし、機関部さえ破壊すれば、沈んだように見えるしね……。実際、多少沈んでも、水中に待機している浮遊要塞の上に乗つかれば浮上できるし、艦娘そのものを探知する訳じゃないもの。まあ、如月がどうやって沈んだのかはちよつと分かんないけど、自分から攻撃受けたんじゃないかな。覚悟はいるけど、できない事じゃない。火がついたら、無理矢理自分で引き剥がして沈みながら爆風から身を守り、浮遊要塞がそれをカバーして逃げる……。全員、浮遊要塞で離脱したってことになるわね」

便利すぎる浮遊要塞の特性をよく分かっていると、桜庭はため息をついた。

解析している以上はその機能も分かっている。

生きている生き物を従わせるあたり、七海は流石と彼女は苦笑いしてほめた。ならば、と五十鈴が聞いた。

今の言い分は理解した。納得もいく証拠も見せてもらった。

だが、最大の謎である、皆を殺した新種は何なのかと聞くと……。

「……まさか、如月ちゃん？」

由良だった。黙って話を聞いていた由良は、あの新種は如月なのかと問う。

五十鈴が振り返る。由良は真つ青で、震えていた。

……つまりは、そう言うこと。

「お察しの通りよ、由良。その新種は、多分変異した如月だと思う。さつき聞いたわ。部屋と一緒に入ったときに、長い棒状の袋を持ち込んでいたって。本人が大事そうに抱えていたから、憲兵は聞かなかったんですって。職務怠慢にも程があるけど、恐らくはムラマサをその時に持ち込んで、誰にも知られることなく変異していた可能性があるわ。道理で新種な訳ね。初のお披露目だもの。知るわけないじゃない」

ムラマサ。七海を変異させた呪いの刀。

五十鈴も触れたが、彼女は変異しなかった。桜庭も触れている。

なのに、何故如月は変わったのかも、推論は立っていた。

「私は、奴の声を跳ね退けた。五十鈴もそうなの？」

「はい。五十鈴も……ギリギリ、弾きました」

「じゃあ、それは答え。如月は逆。受け入れて変異した」

五十鈴のなかで見た光景に、七海も受け入れて変異したのなら、納得は行く。

例外はあの国防のハゲで、奴は涙して受け入れたのではなく、理解した。

自分のなかには入れずに、相手を尊重した事で、共に歩む選択に至ったと言うらしい。成る程。頷ける理屈だった。

で、最後に自殺した二名も、下手すれば逃げたかもしれないと言うのだ。

あれは、静香がりせを抱えて勝手に出ていき、沈んだようだし、偽るのは簡単だろう。知らずに本当に死んだ可能性も否定はしないが。

ただ、沈んだ面々は、七海に近い人物や、七海を強く慕う者ばかり。

作偽的なものをずっと桜庭は感じていたと言う。

「で、理由は……皆気づいているでしょ。人間に嫌気がさしたんだわ。渋谷さんは、自分で皆を守る道を選んだとは思えない」

七海は散々酷い扱いをされてきた。

そのせいで、人間そのものを絶望視して、脱してしまったのだと、桜庭は指摘した。

皆が、人類に猜疑心を抱くように。見抜いた上で、説明する。

そして、唾然とする彼女たちに、桜庭は告げた。

ここの提督として、これから七海をどうするかを。

心配そうに見られるなか、桜庭は。

「……取り敢えず放置でいいわ。私もよく分かる気持ちだから。なにもしないし、敵対したら話し合ってみる。私がね。あの娘は皆を大好きなはず。絶対に攻撃はしてこないわ。必要ない限り。だから、見かけたら、直ぐに言つて。私が話をつけるから」

……桜庭は、見逃すつもりの方だった。

ホツと安堵する皆に代わり、五十鈴が礼を言つた。

これで、もしも生きているなら、殺されずに済む。

後任の寛大な処置に、一同はずつと礼を言つていた……。

偽りの裏

全ては桜庭の予想通りだった。

七海は桜庭の説明した方法で、実行して脱出。

後任に彼女が来ることも、直ぐにバレる事も、見逃すと言うことも、分かりきっていた。

簡単な分析だ。桜庭の性格上、艦娘と深海棲艦の為の脱走ならば、きっと見逃すと思う。

彼女は擁護をする一派の頭だ。理由の根本が皆のためである以上は、理解はする。

そして、彼女は自分の部下には非常に寛大で有名だった。

それも、その圧倒的な強さゆえの余裕だそう。

彼女も、当然艦娘を愛しているし、穏健派とも言える無駄な戦いをしない人。

無駄に戦えば国税が消えるという意味で、勝てる戦しか選ばない。

器の大きい人だから、理由を察してくれると思っていた。

七海は多分、赤の他人で初めて尊敬したと言っても良いだろう。

それまで興味すらなかった他人に対して、こんな感情を抱くとは思ってなかった。

深海棲艦の言葉すら受け入れる懐の深さは、凄まじいと思うほどだ。

あれは頼れる大人と言うものだ。なので、遠慮なく別の意味で頼った。

人はそれを利用すると言うのだが、まあいい。気にしない。

どうせ、行き先もバレているだろう。手の内を知られている以上は、当然だ。

我ながら迫真の演技だったと思う。

最初の喧嘩から始まって、手筈通りに進めていく。

浮遊要塞達をこっそり同行させて、適当に被弾して大破する。

その後ろで、水中でどこに沈んでも良いように待っていた球体の位置を確認して、爆

発しそうになったら無理矢理。パージ。

それっぽい遺言を残して、派手に沈みつつ、直ぐ様回収した浮遊要塞に乗かって、適当に近くの小島に移動。

浜辺に一度自分で上がって休んで、それから軽くアクビしつつ再び乗っかって移動。

如月は余裕だった。そりゃそうだ。重要な役割を、七海に任された。

「如月。あなたが作戦の要です。……お願いできますか？」

なんて珍しく気弱な恋人に甘く囁かれて、頬に優しくキスもされればやる気もでる。

(やるわ司令官!! 如月たちの未来のために!!)

如月は慣れない演技も、彼女の囁きを思い出したらなんか出来た。

渾身の声で伝えた。因みに七海も分かっている、あの反応をしていた。

内心、五十鈴たちがパニックになっているのを見て罪悪感を感じたが、その後出撃。

廊下で、隠れていた村雨に足止めよろしくと頼んで出ていく。

如月は乗っかる浮遊要塞が吐き出したムラマサを受け取り、更に新開発の装備も簡単につけた。

背負うものではなく、足に装備する機関部で、ぶつちやけ使いにくかった。

これで電探に引っ掛かる。新種として。

腕にもイ級みたいな形の腕を通す主砲を持って待ち構える。

で、深海棲艦に変身しつつ、七海が言っていた指定のポイントで合流。

で、浮遊要塞を引き連れ現れた七海に、見えない事を良いことに、受け取って肩に装備するライトで照らしてサムズアップ。

今のところ順調と言うことで、実弾使ってその場で演習開始。但し、割と本気で。

適度に外す、適度に当てるという打ち合わせの通りに続けて、声だけは必死にやっているように頑張った。

で、更に娘と妹もメイド達と参戦して、これも顔は成功したという笑顔で、皆でドンパチ始めた。

適当にやったら、機関部を向けて、七海がまず直撃。

ただ、上手く身を振ってギリギリの部分で大破を免れるように調整。

練習なしでも、上手くいった。普段からやっている動作ゆえに慣れたものだ。

悲鳴をあげて、派手に転んだ。これはただのミス。

如月が驚いていたが、気にしないでいいと起き上がった七海がジエスチャーで伝える。

臨場感は出ただろう。で、更に庇うように動きつつ、二名もわざと大破。

で、浮遊要塞が控えて、艦装が燃え上がるので、七海が馬鹿力で手早く破壊しつつ引き剥がす。

二名はお疲れ様と、七海に表情で伝えて、なるべく感情を込めて残して、溺れた。

艦装は七海が掴んで軽く投げ、海上で爆発した。

二名はさつさと小島に移動して、休みにいく。

で、如月ときゃあぎゃあ騒いでイチャイチャを再開。

口だけ罵りながら、顔はどこか嬉しそうに二人して、実弾使って遊んでいた。

で、混ざりたそうに眺めている春雨と小春に、げんなりしている村雨も怒号をあげて

おく。声だけ。

その頃、リセと静香は由良たちがもしもの時のために、艀装の前を陣取り昼間からずっと、ダミーの艀装を作っていた。

因みに作っていたのは特に予定のない増設バルジであった。

鋼鉄を無駄に使うので、妖精たちが嫌がり、よく失敗するので髭に頼んで、自前で試しに作成してみると事前に約束していた。

適当に何時間も過ごしているので、途中から音楽流して遊んでいたのもある。

気がついたら巨大な鉄板がいくつもできる始末。あれは最終的に後日誰かの装備に使われるだろう。

で、お次はメイド達が轟沈を演出。同じようにやって切り上げて撤退していく。

予想外だったのは、思った以上に雑魚が群がってきて、途中で七海は如月と一緒に掃討した。

まあ、電探上では七海が瞬殺したように見えるが、実際は飛ぶ斬撃で、如月が大半殺しただけだが。

で、最後に七海も機関部がヤバくなってきたので如月に切り飛ばして貰い、沈んだ。

手を振ってお疲れ様、と見送る深海棲艦如月に見送られ、七海も浮遊要塞と共に撤退していった。

如月も最終的に、ムラマサをまた封印して元に戻り、乗っかって、合流する島に向かった。

あとの二名は、先んじて伝えた日数と場所に向かって自滅し、そこで待っていた球体にしがみついて、逃げ出したというオチだった。

その後、一日ほどその遠征用の小島で過ごした。

七海がこの島に出来ないようにシフトを変えているので安全は確保されている。

昼間は、浮遊要塞達は水中で餌を自分で取って適度に休み、夜に再び全員で出発。

見つからないように、全員で電探を装備して慎重に進む。

幸い、他の鎮守府の広域電探でも機関部の沈んでいる浮遊要塞は察知できない。

そのまま、時間をかけて外洋に進んだ。

道中、他の鎮守府の遠征艦隊と思われるものを先んじて察知して、バレる前に全員で我慢して潜水してやり過ぐす。

で、こっそり移動して、過去に壊滅して使用されなくなった遠征用の島まで調べて向かい、到着。

設備は生きていたので、七海がさっさと修理して、現在はそこに潜伏していた……。

潜伏している割には、皆さん楽しそうに生活していた。

元々、人間の提督はあまり知らないが、遠征用の島には最低限の設備はある。

主に日にちを跨いで行う遠方の遠征は、食料などをあとで持参しないといけない。

簡単な風呂タイプの小さなドックに、保存食が大量に入った備蓄のコンテナ。

最低限の衣食住を出来るようにログハウスみたいなものもある。燃料を使ったガスや発電機もある。

水道も海水を浄化してから使えばいいし、本当に住み着いても問題はない。

時々コンテナは海を漂ってるのを発見する。運んでいる補給艦が死んだ場合などがあるそうだ。

沈まないコンテナゆえ、七海はここ数日、全身に布を被った状態で海に出ては食料のコンテナを持ち帰る。

結構遠くの島からコンテナだけ勝手に持ち出してるそうだ。

あと、よく深海棲艦の補給艦も腹にこれを飲み込んで移動している。

通商破壊作戦で補給艦を殺し尽くし、中身を持っていかない場合も浮かんで漂って

る。

理由は不明だが、連中もこのコンテナには旨いものが入っていると知っていると知つていゝのが通説だった。

ただまあ、鎮守府は一度食われたコンテナを回収などしない。気持ち悪いらしい。勿体ないと言うことで、七海はそれも拾つてきていた。

案外、食い物に関しては海賊家業でも困ることはないようだ。その辺に浮かんでゐるので。

但し、中身は不明だが。ビックリ箱のようなものだった。

「……これは、美味しそうですね」

今回持ち帰つたコンテナを破壊して開けると、大量の甘味が入つていた。俗にいう当たり。

皆が速攻で駆け寄り奪い合いを開始した。

「ご主人様、わたしこれ食べたいです！」

「待つて、それは私のぶん！ 返して！」

春雨と小春が、間宮の羊羹の真空パックを奪い合つてゐる。

早い者勝ちがここの家主、七海の決めたルールだ。

全員の衣服も、近辺の小島から奪つてきた服を使つてゐる。

こういう場所なのに、きっちり洗剤や洗濯機もあるのは素晴らしいと思う。

伊達に軍規で、遠征行ったら設備の点検と補充をしてから帰ることと決まってる。共通の着替えも、ある程度備蓄されていた。

まあ、ここは壊滅した鎮守府が持っていた廃棄された遠征の島。

しかも、周囲はかなり強い深海棲艦がうじゃうじゃいる。

そのせいで、浮かぶ資材のコンテナの数も半端ではなかった。

先ほど、七海はまた喋る深海棲艦に会ってきた。

だがこれは……七海が、深海棲艦の言葉を理解しているからかもしれない。

聞こえ方が、今までは違ったから。それに、話せるという逸話は聞いたことがない。

名前は聞いたことがある。と言うか、多分知らない提督はいない。

だが、何年前かに沈んだと大本営の資料にはあったのだが……普通に生きていた。

有名な人物。向こうから、移動している七海に接触してきた。

いわく、見たことのない半端なヤツなので気になったという。

敵意はなく、少し離れた場所の小島を根城にしている、と正直に話す。

すると。

「……そうか。貴様は我等に敵対する気はないか。まあ、したらしたで潰すだけだが

……。好きにしろ。ここは、我が嘗て支配した海だ……。先客が居るなら、構わん。そ

ちらで好きにせよ。だが、邪魔はするなよ人間。我は、あの女ともう一度この海で、全力を以て戦うのだから……」

「戦つても良いですけど、この辺は勘弁してくださいね。地形が比喻じゃなく変わるの
で、巻き添えにはなりたくないです」

しれつと、恐らくは深海棲艦の大物相手にも怯まず言い切る七海に、ソイツは面白そうに、真つ白な唇の端を吊り上げる。

「……然し。貴様は、我に恐れを抱かぬか。逆に我は興味があるぞ、人間の小娘。陸から来たのだろうか？ ならば、聞かせろ。桜の名を持つあの女、今もまだ存命か？」

「あたしの鎮守府の後任だと思えますよ。ただ、あそこは弱い者しか居ませんが」

「そうか……。弱者に興味はないが、奴が腑抜けになつていないなら、構わぬ。雌雄を決するときは、近そうだ……。嗚呼、楽しみだな……」

どこか嬉しそうに、

どうも、あの人と知り合いのようだ。というか、当たり前か。

随分と前に、七海が五十鈴たちに説明しかけた言葉。

彼女、桜庭を倒せるかもしれない数少ない深海棲艦。

または、島村が武蔵に言っていた、終焉の可能性。

そんなのが、割と近くに居たりする。ご近所さんだった。

相手が誰であろうが、七海は気にしないが、敵じゃないので。

「……分かるか？ 戦いこそが我等の本能よ。小娘、貴様も身体が疼いたら我に続け。極上の戦争を教えてやろう……」

「あまり興味が出ませんねえ……。あたしは戦いよりも優先することがあるので」

七海の言葉に、ソイツは不敵に笑った。

「フツ……それも、良い。己の渴き、かつ飢えを満たせる物があるのは、幸福の証だ……。一つ、覚えておくとよいぞ、人間。我にとつて戦争の真髄は、殺害ではない……。殺すという行為は、結果に過ぎないのだ……。重要なのは、飽くなき戦いそのもの……。貴様も、貴様の求める物の真髄を見極めよ……。それは、何時しか最高の快樂となろうぞ……」

「覚えておきましょう」

意外と深いことを言ってくれる。

どうも出会って、何回か顔を合わせているが、彼女は戦いという行為を愛してやまない危ない人種のように。

ご近所だからか、結構フレンドリーに接してくれた。

深海棲艦は、深海棲艦には優しい場合もあった。

聞けば、多くの深海棲艦と一部艦娘を連れている七海の器を認めたらしい。意味わか

らん。

時々、お土産と称してコンテナを配下に回収させて譲ってくれた。

それはいいが。

「……旨いな。なんというものだ、これは？」

だが、お願いだからその激臭放つ缶詰を持たないでほしい。

おぞましい臭いに、涙目の七海は鼻を摘まんで名前を教えた。

拾った缶詰らしいが、握力で握り潰して開けるといいうワイルドなやり方も勘弁してほしい。

「シユールストレミング、という異国の料理です……」

刺激物、シユールストレミングという世界でも有数の発酵食品であった。

そういえば、何時だったか春雨がああ暗黒物質を甘い匂いと言っていたが、深海棲艦はこういうの好きなのだろうか？

「……そうか。旨いな……」

だから素手で食うなと言うのに。

兎に角、海賊稼業を始めた海賊提督、七海。

今はご近所さんの迷惑な行為に我慢を強いられていた……。

お迎え準備

平穩に暮らしているとはいえ、海賊というのは娯樂が少ない。

当然で、孤島に住まう以上は、基本的には日々の暮らしをどうにかすれば、やることはない。

皆、いい加減に娯樂を持つてくる必要があった。

義務もない。責務もない。自由には責任が伴うが、ここは人類が近寄らない海域の一面。

お隣さんは、順調に勢力を伸ばしているようだ。

以前にも増して、漂流物が手に入る。

海外の物資も構わず彼女は襲っているらしい。この間は貨物船を沈めたと聞いた。

……洒落にならない勢力になりつつあるが、あくまで彼女の目的は、決戦だ。

そう。単なる決戦。国土を焦土にすることじゃない。侵略することでもない。強い敵と、殺しあっていたいだけ。戦闘に狂っているとさえいいか。

「物騒ですなぁ……」

「貴様がそれを言うか？」

モグモグと。名もない小さな島で、戦闘に狂っている女と愛に狂っている女は能天気
に飯を一緒に食っていた。

晴天の青空。長閑な浜辺で、火を起こして二人で膝を折って座り、肉を焼いていた。

缶詰のコンビーフである。海外産だろうか。言葉は読めないが、写真はコンビーフ
だ。

食い方を知らない彼女に、七海は適当で良いから美味しい食べ方を教えるために、コ
ンテナから拾ったフライパンで軽く焼いて、調理している。

待っている間、彼女が自慢するように言うので、相槌を打ちながら焼く。

「やはりあれだな。人類は滅ぼすべきじゃないな。損失が大きい。旨いモノを失うのは
些か勿体ない」

「はあ」

「特にちよりそー？ とかいう肉は旨かったぞ。次はそれも焼いてくれ。ほれ、持参し
た」

「はいはい」

彼女は人類を絶滅させる気はない。

ただ、個人と戦う事さえ満たされれば大人しいものだ。

大体、信じられるか？ なぜ彼女が海域を広げているか。

「肉だ。肉を食うためだ」

だそうで。貨物船を沈めて、肉を奪うためである。

自分の腹の為である。信じられない。それだけの為に、あのバカみたいな能力を發揮する。

奪ってきたチヨリソーの袋を取り出した。保存の仕方を教えているので、ちゃんとクーラーボックスに入れている。

冷えた保冷剤も七海の場合から物々交換で受け取って、入れているようだ。

「全部ですか？ 手持ちの油が少ないのですが……」

「あぶら？ ああ、これか？ 菜種油とか言ったな。持ってきたぞ」

焼かれたコンビーフを渡した瞬間に食る彼女。凄い熱いのに気にしない。

以前の間延びした口調は、どうやら復活したばかりで眠かったかららしく、今はハキハキと喋る。

ボトルの菜種油を渡された。……多少賞味期限が過ぎているがいけるだろう。

七海は自分が食わないので気にせず投入。次々炒める。

「小娘よ。肉には、酒だ。見よ！ 陸から奪った名酒だそうだ！」

で、よく冷えている日本酒も取り出す。全部奪ったものである。

すっかり気分はB B Q。肉を食らって、豪快に酒を煽る深海棲艦。

完全におっさんとなっていた。七海は未成年なので、飲めないと断っていた。

因みに深海棲艦は酔っ払うことが無いらしい。そういう性質のようで。

（あの銘柄……。ああ、島村提督の故郷のですか。今は復興して、お酒も作るんですね

……）

彼女が持っている大きな瓶の銘柄は、前にハゲが言っていた故郷だった。

いつぞや聞いたが、実はあのハゲ……。生まれ故郷を、戦火で焼かれていたらしい。

小さな港の出身である彼は幼少時、深海棲艦によつて故郷を失っている。

だが、長い年月をかけて復興した町は、今では名産品の地酒を生み出すまで回復した。

島村は、実家が焼かれても、挫けずに生きてきた。

そこには、周囲の人々と、化け物に怯まず立ち向かい、復興に携わる戦士たちが居た

と。

その人々とおかげで再生した町を見て、号泣したと何時か言っていたのだ。

彼が常に国や文化に感謝しているのは、見知らぬ人たちが失われた故郷を甦らせてく

れたこともあると言っていた。

自分出来る恩返しは、戦って、二度と焼かれぬことだと自負している。

あの屈強な精神は、生きてきた時間がもたらしたものだそう。

道理で、あの国防に全てを捧げる豪傑が出来上がるわけだ。

彼女は海外に行く船を襲ったら入っていたと肉をくわえながら言った。

で、味の方は。

「ん？ 旨いぞ？ この爽やかなながらも芳醇な米の香りとコクは、格別だ。貴様が言っていた場所を襲うのは止めよう。あと、襲っている連中が居たら殺す。この酒を失うのは無視できない損失である」

（良かったですね、島村提督。地元のお酒、美味しいそうですよ）

まさか深海棲艦が的確な味を評価するとか、そんな事を思うとは思うまい。

悦に入った彼女は、らっぱ飲みして満足して肉をかつ食らう。

どんどん焼いていく。彼女もどんどん飲んでいく。

七海はもう食べ終えていた。軽く保存食の缶詰を流し込んで、腹を満たした。

後はこの底の知れない深海棲艦を満たすだけだ。

戦い以外にも得るものがあった。彼女は嬉しそうだった。

「そう言えば、小娘よ。貴様、何時だったか迎えに行くとか言ってなかったか？」

彼女は、今度は分厚いパソコンを取り出して、渡しながら聞いてきた。

……ブロックベーコンをどうしろと言うのか。

呆れる七海は面倒なので焚き火でそのまま串を刺し、炙りながら答えた。

「行きますよ。頃合いを見て、ね」

「ほう。では、陸か？」

ヨダレを垂らしている彼女が、香ばしい匂いをあげるパソコンを見て、然し鋭く言った。

……分かっていたか。七海は参ったと認める。

「お見通しですか」

「まあな。あの桜の名を持つ女を甘く見ない方がいい。海から行けば、罠にハマるぞ。裏をかくなら、陸から攻めるべきだろう。連れてくるなら、尚更な」

七海は降参する。そう、相手は桜庭だ。

どうせ七海の魂胆など見抜いているし、それを踏まえて七海も事を起こした。

彼女ならば、真正面から来ると思っているに違いない。

だから、逆の発想で陸地から五十鈴と由良を発見して連れ去る。誘拐するのだ。

取り敢えず、二人の意見は無視。

リセ達が言うには、七海が死んだと思っていた時期は相当荒れていたそうなので、問

答無用で拉致する。

何せ、桜庭は目の前の彼女と同等。交戦すると今度こそ命はない。

下手すると、陸地を吹き飛ばすような存在だ。

自称、もう一度戦いたいと言う深海棲艦は彼女を高く評価している。

何年も前に戦ったときは、彼女は接戦の末に撃破され、沈んだ。

だがこうして復活している以上は、再度戦うと誓っている。

不敵に笑って、彼女は言った。

「あの女は、強いぞ。流星は国の名を継いだ艦。侮れぬ。……確か、貴様ら人間は我にも名をつけたそうだな」

彼女は、元々名前などない。

ただ、凄まじい強さを持った、名無しの深海棲艦。

それを、大損害を被った以前の人類は、畏怖を込めてこう呼ぶ。

「何ですか、中枢棲姫。あなたは規格外でしょう。強いなら、あなたも十二分ですよ」

「……純然たる事実を言いながら、貴様は怯まない。媚びない。大した胆力よ」

真っ白な、服か肌かも見分けのつかない姿に、一体化する髪のような一部。

深紅の瞳と、相手が竦み上がる威圧感を放つ、深海棲艦。名を、中枢棲姫。

分類は、拠点基地。こいつは、艦ですらない。

あまりにも強すぎて、分類は鎮守府と同等という破格の能力であった。要するに生きている鎮守府。移動する要塞の様なものだ。

浮遊要塞とは桁が違う。こいつは、周囲の深海棲艦を支配して、強化や治療、はたまに指揮まで全部出来る。

大半の機能が集約された、桜庭並みの超生物。だから、拠点基地。

深海棲艦サイドの最強と名高い、異次元の化け物であった。

彼女の居る場所は全てが拠点である。設備は勝手に周囲が言われずとも作る。

そう、建物を陸地に深海棲艦が新造する。必要な知識は彼女が全部持っている。

深海棲艦の拠点が増えて、人類に対して攻勢になる。それが彼女の特色。

更には自衛の能力も破格で、艦が前提で倒せるレベルではない。

彼女が生きている限り、増え続ける拠点により、艦娘たちは苦戦を強いられる。

それを打ち倒したのが桜庭であり、全ての拠点を破壊した功績で元帥になったらしい。

後にも先にも、中枢棲姫を根刮ぎ撃破したのは国の名前を持つ艦娘、大和のみだそう
だ。

つまりは、七海はそういう異次元の化け物双方と知り合いであった。

あまつさえ良好な仲を保っていた。

褒める中枢棲姫は、焼き上がったベーコンを丸かじりしながら提案する。

肉の礼に、陸までの海路を確保してくれると言うのだ。

驚く提案に、中枢棲姫は。

「……正直な話な。我の中にも、このような技術はないのだ。戦争に必要なものは揃っているが、肉を如何にして旨く食うかなどの技術は、貴様頼りなのだ。我が支配のものたちも、戦いは出来ても……肉は、焼けぬ。焦げるのだ」

「ああ……」

要は好物の焼き肉を作ってくれる奇特な奴は七海しか居ないんで、ご糞屑にしてほしいので今のうちに礼を尽くすらしい。

生の肉は、あまり美味しくないようで、缶詰や瓶詰も悪くないが、焼きたてには敵わないと言うことか。

悲しい実情だった。深海棲艦ゆえに、仕方ない事だろうが……切実すぎる。

「肉は持参するし、物資も必要なら提供しよう。貴様ほど我は出来ぬ……。そして、肉の味は戦いと同等に尊いものだ。我に出来ることは何でもする。糞屑にしてくれぬか？」

「構いませんが……」

調理の技術と等価交換と言うことのようにだ。

あの中枢棲姫が、七海に頭が上がらないという意味不明な現状があった。

別にいいと言うと、途端に嬉しそうに彼女は次の肉も取り出した。

……焼き鳥だった。缶詰の。

「そうか！ なら、次はこれを旨くしてくれ！ 冷えているのは食いあきた!!」
「湯煎ぐらいは出来るでしょうに……」

湯を沸かすため、鍋も取り出した。

中枢棲姫が加熱するために直火でやって失敗して諦めたというのを聞いて、そつちだったかとツツコミを入れたかった七海だが、何とか堪えた。

……深海棲艦専用のシエフとはこれ如何に。

胃袋を掴むと強いというのは、此方も同じだったようで。

取り敢えず、お迎えの準備を、そろそろ始めるのであった……。

で。

何人かデートを兼ねて一緒に陸地に久々に出かける。

今回は、大事な用事だ。

暇をもて余す中でも、何時もの面々で行くことにした。

より、七海の言いつけを守る嫁、妹、娘、メイドたち。

「大人の男に近づいちゃダメですよエロメイド」

「誰がエロメイドですって!?! って言うか、近づくかッ!! 村雨は男は知らないって言うてるでしょ!!」

一応、淫乱村雨イドにも言っておくと、グーで殴られた。

コブが出来る七海は、涙目で頭を抱えて、反撃に小春が立ち向かう。

「淫乱メイド。お嬢様はお前が変な男を釣らないよう言ってるだけ。心配しているのに殴るなんて流石に酷い」

「……提督。分かりにくいですって。ごめんなさい、そう言う意味だったんですか……」
ついつい、いつものノリで殴ってしまった。

慌てて謝る村雨に、七海は首を振る。

謎の色気を振り撒かないように、とたしなめたつもりが殴られた。

行いが悪いからこうなるのである。

「いえ、知らないところで村雨がラブホに消えていくなど許せませんので。主に相手を殺します」

「分かりました、遵守します。提督が殺人しないように全力で」

危ない。村雨に以前近づいて殺そうとしていた時点で察していた。

彼女に人殺しをさせないように守ろうと誓う。

一応、遠方から電車やら何やらで行きつつ、基本的に野宿か空き家をぶち壊して侵入する予定。

陸路で元、己の鎮守府に向かい、張り込みで二名を見つけ次第、襲撃して誘拐。

後は洗脳するなりして連れ帰るという算段。

「洗脳!?!」

「あ、はい。あたし、前に少しその手の書籍で学んでいます。原理さえ分かれば、洗脳なんて簡単ですよ」

危ない技術を既に会得していた。

だから、春雨や山風、弥生に小春は心酔するわけである。

納得の村雨であったが、そんなことはなく単なる愛で飲み込んで染めただけ。

難しいものはなく、単純に愛した。逆に余計に危険だが。

「では、行きましょう。紙幣は中枢棲姫に貰ったので」

貨物船に入っていたよくわからん紙で良ければと、大量の札束も彼女はくれた。

国内紙幣をたんまり受け取り、彼女たちは出掛けていく。

目指すは軽巡二名の略奪。今、ヤンデレが上陸する。
地獄のお出掛けが、とうとう開始されたのだった……。

運命は皆の味方に

準備を始めた翌日。

一行は、とうとう行動を起こす。

目標は五十鈴と由良。他の面子は、多分無理と諦める七海。

「あたしも、物理的な限界はあります。あたしは一人しかいないんです。守るのだって、上限以上は出来ません。だから、本当はしたくないですけど、選びます。あたしが居なくても、大丈夫な娘と、あたしが守りたい娘で」

支度を済ませた七海は皆に、そう言った。

元々、こうして分けたのには大きな分類がある。

七海『が』、守る艦娘。

七海『を』、守る艦娘。

大きく分ければ、この二種類である。

七海を求める艦娘たちを、今回連れてきた。

危険な旅路だった。七海が守れる範囲を考えた場合、こうするしか無かった。

彼女だって本音で言えば全員を鎮守府を破壊してでも連れ去りたかった。

けれど、それは出来ない。リスクが大きすぎた。

考えてみればいい。脱走をしたあと、敵に回す予定は世界最強の一人なのだ。

万が一でも勝ち目がないなら、取捨選択するしかない。

苦悩の末、彼女たちだけにした。

「でも、あと二人。由良と五十鈴。二人だけは、一緒がいいんです。五十鈴は……何度もあたしを心配してくれて、守ろうとしてくれた。由良は何度もあたしに対して失敗していたみたいですけど、人一倍向き合ってくれたんです。差別する気はないですよ……でも、あとのみんなは、桜庭さんがいればきつと、時が癒してくれる。あたしが死んだと思って、ずっと悔いてくれていた。だったら、あたしが迎えに行くんです。無茶苦茶だと思いません。けど、諦めが付きません。だから、あたしのワガママに、付き合ってください」

正直に話した七海に、一名除いて笑顔で頷いた。

彼女の我が儘ならば何処までも付き合おう。

救われた、守られた、幸せにされた、この命に誓って。

(はあ……。また珍道中が始まるのね……。今回も唯一のツツコミと常識人と苦労人の杵を、胃痛を堪えながらやらないと……)

唯一の良心、村雨が早くも胃痛を感じながら、警戒するように内心覚悟を決めた。

半分旅行みたいなもんだと気楽な事を言うが誘拐を企てている。流石変態。

嘗ての仲間を奪いに向かうとは、海賊のようだった。いや、自称海賊だったか。

「さあ、行きましょう！ 海賊らしく……頂戴しに!!」

号令をかける七海に続き、珍道中が本土を指して出発進行。

頑張れ村雨。お前が頼りだと、留守番二人は手を振ってお見送りをするが、せめて言ってあげて欲しかった……。

で、渦中の鎮守府では。

「あいつが復活している……か」

桜庭が、大本營の送った書類を見て、眩いた。

用事で出掛けているときに丁度届いた書類だった。

中身は……はつきり言おう。

我が国の絶滅危機と称された極秘任務で、近々決戦を予定しているという内容だった。

最近、勢力を急速に伸ばしている深海棲艦のデータが、過去にいたあの化け物と同じと言うことで、大本營は大パニックになっていた。

悲劇が、悪夢が、再び現実になる。それを避けるために、桜庭を動かす。

無論、とうとう彼女が……動き出す。遊びではない。準備運動でもない。

本気で、本当の、戦争を始めるために。

「……ごめんね。リング、パクター、翔鶴。皆にも、手伝ってもらおうわ。そういう命令が来ちゃってるから」

と、先ほど呼び出した規格外三名に、申し訳ないと謝罪してから言い出した。

三人は航空支援で、兎に角数と質で圧倒して押し潰せという深海棲艦だから出来る戦法を提案した桜庭。

皆を矢面に出す気はないと断言していた。

「それこそ、騒ぎに気付いてキレた渋谷さんが駆けつけて敵対するかもしれないし……」

ぶつちやけ、あいつと渋谷さんが同時に来たら、私も死ぬわ。確実に」

恐らくはソイツとも敵対はするだろうが、機動性と突破力で言えば桜庭すら軽く超える少女だ。

全部無視して、桜庭を殺しに来る。そういう気性だと既に知っていた。

実際に過去、ソイツを殺した彼女は三人に言うのだ。

「そういうわけだから、前線には出せないわ。と言うか、誰が何を言おうとも出ないで。その瞬間に、私も渋谷さんに狙われる。皆を危険に晒した時点で、前回よりも窮地に陥るから」

七海なら恩人であろうが嘸みつくと、身を以て皆知っている。

七海ならば有り得る。皆のためなら破滅したとしても襲いかかるだろう。

流石は彼女の上司だった者。性格も把握している。

パクチーが、恐々聞いた。自分達がいとも大丈夫なのだろうか？

決戦ともなると、援軍もたくさん来るだろうし、安全なのかと。

「あー……確かにね。皆のことは国外にはあんまり知られてないけど、私だからね。正直に言うとき。渋谷さんの手柄、私のものになってるのよ。国外に関しては。そういう風に意図的にねじ曲げたからね」

ここでいう援軍とは国外の艦娘のことで、彼女たちからすれば三人は仇に等しい。

懸念をするが、桜庭は言い切る。

新人無名の七海が行った前代未聞の行動は、他の海軍には桜庭の指示のもと、動いたに過ぎないということにしている。

そうしないと、単なる子供に何をさせていると外交に発展しかねない。

面倒になるので、最初から桜庭の命令で動いて捕獲していると。

なので、七海の手柄であると同時に桜庭の手柄。

問題は此処からで。大きなため息をついて、桜庭が皆に愚痴る。

「他の最終兵器って呼ばれる連中が、出番見つけて押し掛けてこようとしているのよね……暇してるから。ネルソンのアホは言いくるめれば良いけど、アイオワとサラトガ、後は……オールドレディにビスマルクまで来ようとしてるみたいで。シスターサラは良いけど、アイオワのバカは加減しないでバカスカ撃ちまくるもんだから、資材溶かすからはっきり言って経済破綻するのよね……。国力の差を考慮ろって言うてるのになあ、聞いてちやいなしい。頭の中にハンバーガーとステーキしか入ってないんじゃないの……」

資材はこの国持ちとかふざけるなど、関係のないことをぼやいている。

目を丸くする三人に、小声で桜庭が続ける。

次第に目からハイライトが消えて、持っているペンを握力でへし折った。

「あの革命まで来るとか言い出すし……。数万単位の燃料と弾薬が消えるんですけど？ その燃料で国内のガソリンとんだけ消費すると思ってるの？ 毎度張り合うとかワケわかんないこと宣ってくれて、あのウオツカ女は……。いい加減に潰そうかしら。自前で資材出すように言わないと。このままじゃうちの国が経済破綻しちゃう……。オールドレディは話せば分かる、ビスマルクはでかい暁だからおやつで黙らせる、アイオワはとつちめる、シスターサラは……。今度ご飯でも奢って、ネルソンのアホは適当に言い負かせばいいか」

何やら苦勞があるようで、ハツと我に返った桜庭は咳払いして誤魔化し、続ける。

「ごめんなさい。兎に角、今回はこつちも本気よ。世界中の私の知り合い……。まあ、要するに一部の私と同じくらいの相手が一挙に集まるから、大丈夫。話せば大体分かってくれるわ。……アイオワとガングートとネルソン以外はね」

出番の少ない暇人達が、我先にと舞台を求めて参上するらしい。呼んでもないのに。

前回の決戦ではそれだけ大損害を引き起こした相手なのだ。形振り構っている余裕はない。勝つためなら何でもする。

小声で最後に怖いことを言っていた桜庭だが、そういう訳で……。三人も巻き込まれることになった。

決戦の日は、近い……。

そんなことは露知らず。

肝心の五十鈴と由良は、最近ずっと沈んでいた。

ある事実に、気がついてしまったのだ。

妙に落ち込んで、澆刺とした五十鈴が嘘のように俯いていることが増えた。

周囲が心配しても何でもないと言うばかり。

その心境を知るのは、姉妹の由良だけだった。

そう。逃げ出す計画を立てていた二名は、誘いをする前に七海が逃げてしまった。

……二人を、置いてきぼりにして。

(……五十鈴は、七海に嫌われていたのかな)

漸く気づいた気がした。

そういうことだ。

肝心なときに無視されたのは、五十鈴は……七海に信頼して貰えてなかった。

そう、思い込んでいた。置いていかれたのは皆同じ。

だが、重巡たちはある程度立ち直っている。

七海は、自分が居なくても大丈夫と思つた艦娘や、敵対すると思つた艦娘は無視しようだ。

その事実が、何よりも辛かつた。

要するに、五十鈴は信じて貰えてなかつたことになる。

あるいは、七海が居なくても大丈夫と思われていたか。

慰めにはなるかもしれない。後者が事実ならば、だが。

(五十鈴は……こんなに弱かつたんだ)

今日も昼間から、カーテンを締め切つた部屋で、ベッドの上で膝を抱えて、持つていくクツシヨンに顔を埋める。あの娘が送つてくれた、トラックのぬいぐるみ。それを抱えて痛みを堪える。

仕事はする。役目は果たす。

いつか、七海が迎えに来てくれると信じて。

それが、戦っている理由だつた。

失つて気付いた。五十鈴の中で、あの少女はこんなにも大きな存在だつたことに。

置いていかれて分かつた。五十鈴は、自分で思つていた以上に弱い心をしていた。

桜庭はよい人だ。流石は元帥。手腕も采配も文句はない。

……けれど。

(今の此処は、静かすぎる……。五十鈴には、何か足りない……)

皆は桜庭も良いと、認めている者もいる。

七海のことは悲しい過去にして、前を向く。

彼女の期待通りに、居なくても大丈夫。

……他の艦娘たちは。

対して、五十鈴は？

(寂しい……。こんなに寂しいなんて思わなかった。あの喧騒が恋しいよ……)

五十鈴は、不満はないし、文句もない。

けど、寂しい。七海がない鎮守府は、寂しい。

置いていかれた。七海は何を思ったのかは今となってはわからない。

だが、期待したのなら無為だった。五十鈴は過去に囚われ、前に進めない。

七海がいて、五十鈴が怒って、振り回されて、振り回して。

その日々が、何よりも大切だったと今頃気付いた。

周囲には頭がおかしい提督だっただろう。狂っているサイコパスだっただろう。

それでも。

(五十鈴には唯一の提督だった。自慢できる娘じゃないけど、誰よりも頑張って、理解しようとしてくれた……。本当に知ろうとしてくれた、たった一人の提督だったのよ……)

傍で見っていた五十鈴には、一番堪えた。

信頼していたつもりなのに、七海はきつと、誤解していた。

五十鈴は七海がいないと、どうやら頑張れない。

いや、彼女の姉を自負する五十鈴は、妹の為に戦いたかった。

あの娘に応える為に海を共に走りたかった。

でも、もう叶わない願いだ。

七海はもういない。ここには戻ってこない。

待っていても、無駄だと分かりきっていた。

「……………」

小さなすすり泣きの声が聞こえた。

由良か。彼女も最近はずっと一人で泣いている。

こうして相部屋になったため、よく分かる。

由良も、同じ気持ちを抱いている。

人間なんて大嫌いだ。あんなの、どうでもいい。

一番大事なモノを失ったまま、二人は分かってしまったのだ。

もう、ここにいる、意味などない。

七海は、ここには、戻ってこない。

それが、辛すぎる現実だった。

……故に。我慢も、限界だった。

何日もよく堪えてきたと我ながら思う。

でも、いい加減もう……良いだろう？

戦うのはいやだ。待っているのも嫌だ。

誰かの言うことを聞くのが嫌だ。

——生きているのが、嫌だ。

「由良……行く」

「ええ……行きましょう」

そして、姉達は過ちを犯す。

深夜、二人は、お金だけ持って、鎮守府を無断で抜け出した。

事実上の、二組目の、脱走だった……。

予定とは違う陸路の逃走。

行く宛などない。強いて言うなら、死地を探す終の道。

生きるのが嫌になった二人は、取り敢えず始発の電車に飛び乗り、遠くの街に向かった。

服装は簡単に着替えてきた。けど、その内足取りも掴まれるだろう。

だから、なんだ。消えてしまえば同じこと。

「何処……行こうか？」

「遠い町よ……。誰も知らない、遠い町」

由良が億劫そうに、人の疎らな電車の座席に座って、隣に座る五十鈴に聞いた。

漠然と、逃げるなら何処でもいいという投げ遣りな答えに、軽く返答。

朝っぱらから衝動的に逃げ出した割には、冷静な判断だった。

艦娘は早々死ねない。確実に消えるなら、海に消えること。

つまりは、入水自殺というやつで。

それをするには、なるべく遠方に逃げる必要があった。

故に、二人は購入できる切符の一番遠い海沿いの町に降りることにした。

そこで、人知れずにひっそり消えよう。

この生きる意味のない世界から、永遠にお別れをするために、揺られながら数時間経過した頃。

田舎の終着駅に到着した。

今頃必死に搜索しているだろうがそれがなんだ。

適当に歩き出した二人は、海を目指した。

死ねればいい。消えればいい。生気のない目で歩く二名は白昼を闊歩する死体のようだ。

こちらも一時間ほどかけて、終始無言で歩いていると海が見えてきた。

村の中を抜けて、山道を越えて、見慣れた平和な海。

そして、終焉の海だった。

立ち入り禁止の土地を無視して侵入。

林を突き抜けて、浜辺を目指す。

そのまま進んで、海に入って、海底に消える。

「……楽になろうか、五十鈴」

「……そうね。七海も、居ないし」

漸く話した会話は、諦め。

生を、戦いを、全てを諦める言葉だった。

無気力に進んでいく足。

あと数分で、誰にも知られずに、五十鈴と由良は泡となって消える。

——その、ハズだった。

「予定よりも海路が外れましたね……。何処ですか此処は？」

「分からずに進んで来たんですか!？」

「村雨姉さん、落ち着いて……。あ、キレイな貝殻」

「いや、結構深刻な迷子なんですけど!？」

「なんか暑くないママ……。？」

「休憩しますか」

「じゃあ、如月何か近くで買ってくるわ」

「弥生も……。一緒に行く」

「私も行く。久々の上陸だから」

……何か、いた。

「……へっ?」

「えっ?」

幻覚か?

名も知らぬ海岸で、七海が皆を連れて楽しそうに喋っているぞ?

「へアツ!? 目撃者!」

何か見覚えのある村雨が驚いてるぞ?

「……おや? ここいらの艦娘ですか。面倒ですね、倒しましょう」

で、七海も気付いた。近づいてくる。殺気纏って。

ヤバイ。この流れ、知っている。勘違いしている。

多分違う五十鈴と由良と間違えてる。

慌てる五十鈴は咄嗟に叫んだ、というか怒鳴った。

「七海ッ!! 話を聞きなさいッ!!」

途端、止まる七海。驚いているのか、目を丸くした。

……凍りつく全員。何が起きている。

取り敢えず。解凍されるまで、数秒の時間を使うのであった……。

カエレ!

その出会いは、正しく運命であった。

再び邂逅する、艦娘と提督。

「五十鈴……? あなた、あたしの知る五十鈴ですか?」

怪訝そうにこちらを見て訊ねる七海。

……不味い、想定外に出会ってしまった。

今の七海は、何を考えているか分からない。

周りには知り合いで良かったと安堵しているが、村雨の視線は懐疑的。

何故、ここにいます? そういう風に、二人を見ていた。

由良は混乱していて、幻覚を見ていると思つて頭を振っていた。

五十鈴にも分からない。何故逃げた七海がこんな遠方の海岸に、過剰な戦力を連れて上陸している。

(……人間に報復する気なの?)

一番の可能性は無差別の殺戮か。

七海はそこまでしてもおかしくない扱いを受けてきた。

とうとう、心まで深海棲艦に吞まれてしまったか。

そんな悲しい予感すらした。彼女も、壊れてしまったのか。

兎に角、今できる最善は……。

「そ、そうよ。あんたの気配を察知して、わざわざ来てあげたの。さあ、連れていきなさい。五十鈴たちは抵抗しないわ」

自分達が七海の暴走を止めること。

虐殺なんてバカな真似をさせないために、犠牲になろう。

心まで深海棲艦になっても彼女の味方だから。

多少ぎこちないけど、堂々と前に進む五十鈴に、由良も言いたいことは分かっただらしい。

「な、七海ちゃん……由良たちだけで、我慢してくれないかな……?」

何でも言うことを聞くから、と懇願する由良。

はい、と言うことで突然ですがシリアス終了。

この状況、またも互いに認識のすれ違い発生中。

整理しよう。

七海は、先ず何故ここについたか。

海路を示した中樞棲姫の道案内が雑すぎて、適当に進んでいたら予定よりも大幅にずれが発生した。

で、何だか見覚えのない海岸に上陸。迷子だし陸で情報集めるかと荷物を持って駄弁っていた。

そしたら、獲物が向こうから寄ってきた。七海の視点はこうなる。

つまり、二人が死地を求めてきたとも知らずに七海は、こう受け取った。

(……他の艦娘には手を出すなと? 鎮守府に近づくのは危険だと教えてくれるんですね)

鎮守府に都合の悪いものがあるから、自滅するような事を防ぐために、自分を差し出す。

相変わらず、七海に対して優しい二人であった。

守ってくれるのは、分かる。だから、聞いた。

「あたしと同じ真似をしたんですか?」

それは、七海からすれば此方に来てくれるかという確認だった。

対して。五十鈴は、違う意味で受け取った。

脱走したのか？ 桜庭を裏切つて。桜庭程の人間を、見限つて。そう、責められている。

五十鈴も由良も、七海が無表情のまま怒りを堪えていると思つた。

七海は信じて置いていつたんだ。七海が居なくても大丈夫と信じて。

それも、裏切つたのか？ 言外に問われたと感じて、俯く。

無言のまま。なにも言えなかつた。だつて、それが事実で。

また、五十鈴も由良も、七海の思いをふいにした。

で、今度は七海も動揺する。黙つてしまつた。俯いて悲しそうに。

これは……二人は逃げ出しただけじゃない、何か相当溜め込んでいる。

辛いことがあつたのか？ 苦しいことをされたのか？ あの桜庭に？

そんなことをする人じゃないと思つたのに。そして。

「予定変更です。皆はこの辺に隠れていてください。あたしは、桜庭さんをぶつ殺しに行つてきます」

「!？」

案の定キレた。

五十鈴たちを苦しめた桜庭に速攻で失望して、勝ち目がないのに襲いに行こうとする。

桜庭の予想通りだった。

五十鈴たちはそれを聞いて弾かれたように顔をあげた。

やつぱりだ。やつぱり、七海は人間に報復をする気なのだ。

慌てて止める二人。

「ま、待ちなさい七海！ 無理よ、殺されるわよ?! 五十鈴たちだけで十分でしょ?!」

「止めて!! 落ち着いて七海ちゃん!! 由良たちだけにして、お願いだから!!」

さすがのように怒髪の七海を制止する。

七海は不満そうに頬を膨らませている。

……で、この頃に漸く村雨が、違和感に気づいて声をかけた。

「提督。多分、認識のすれ違いがあります。五十鈴さんたちを誘拐するなら、これで目的は完了しちやってます。旅行気分のところ申し訳ないんですが、一度家に戻りませんか?」

折角遊びに来たのに、と不満を言っている皆に、二人は。

「……遊びに来た?」

「ど、どういうこと……? っていうか、由良たちを誘拐?!!」

目的は自分達と分かって唾然とする五十鈴たち。

七海も仕方ないと、取り敢えず用件を伝えた。

「五十鈴。由良。こつちに來なさい。最後の二人として、此方にお迎えしますので」
命令された。願ってもない事だった。

「…………ごめん、話が見えない。まあ、行くけど……。逃げ出してきたし……」
「な、何か……分からないけど、一緒に行ってもいいんだよね？」

五十鈴と由良が困惑しているが、七海は笑顔になつて頷いた。

取り敢えず、一度家に戻つて、二人を監禁してくるから、皆は待つてと言つた。

「監禁!? あんた、海に出てどんな変態に目覚めたの!? 村雨の影響!?」

「誤解ですツ!! つていうか、その謎のキャラも言いがかりですよ!」

五十鈴も村雨がエロい知識を吹き込んだのかと一瞬真面目に思つた。

無論事実無根であり、至つて普通の深海棲艦である村雨からすればとぼちりであるが。

脇に呆然とする二人を抱えて、七海は夕方にはこつちに來て旅行に行くと言うので、それまでは適当に皆で散策してると言つた。

まあ、ぱつと見全員人間に見えるし、小春や村雨、春雨は化粧で肌も誤魔化している角もない。

事情も届いてなさそうなこんな田舎ならば大丈夫だろう。

あと、言語に関しても、翻訳機は艦装の応用で作つて、妖精よりも遙かに高性能な物

を首につけているので問題ない。

「ええ……。どんな生活してたのあんたたち……」

「意外と快適に暮らしてたんだね……」

呆れと驚きの姉妹を抱えて、満足そうに七海は海に出ていく。

「漸くです……。漸く全員揃いました。由良と五十鈴さえ居てくれれば満足です。あたしの春が来ました……!」

気持ち悪い笑顔でいう彼女を見て、二人は悟った。

（あ、これ報復じゃない。いつもの七海だわ……）

（……全然変わってないどころか、悪化してた……）

要するに誘拐が目的だったか。言うまでもないようだった。誤解していたのは二人の方。

で、そのまま飛沫を残してお持ち帰り。誘拐成功。

残された皆は、久々の上陸を満喫するべく、適当に上がっていくのだった。

で、その頃。

行方知れずになった二名に関して、早々に捜索の打ちきりを命じた桜庭。

(この所、様子がおかしかつたし……あの娘たちも、渋谷さんの所に行ったのかな) 独断を許される桜庭は、直ぐに諦めた。

艦装も私物もそのまま。財布のみを持って消えていたのを仲間が発見して報告。

内部にはおらず、カメラに出ていく所を撮影されていた。

無断外出という重い刑罰を与えないといけないが、どうせ見つかるまい。

警察に伝えれば、軍部と折り合いの悪い事で揉め事が発生する。

軽巡二隻程度、陸ならば人間でも対応はできないこともない。

大体、言葉の壁で一日もしないでコミュニケーションが取れなくなり、立ち往生は必至。

放つておいても、痛手には程遠い。

それでも戻らない場合は……まあ、そういうことだ。脱走したということ。

海に出て、七海に回収されたか。あるいはそのまま藻屑と消えたか。

それ以上の問題が起きている以上、あの二名は観察でいい。

寧ろ、問題は……。

『大和、遊びに来ちゃった♪』

「カエレッツ!!」

突然押し掛けてきた、このバカ共の対応だろうか。

国に帰れ。マジで帰れと繰り返し返すが、流暢な英語で押し掛けてきた彼女は言うのだ。

『まあまあ、良いじゃない。私と大和の仲でしょ? 日本のお観光がしたいから、拠点にさせて。経費削減で、浮いた分は日本のご当地バーガーに使うから』

『人の鎮守府をホテルの代わりにしてんじゃないわよ!! 何しに来たのよあんたは!?

アメリカに帰りなさいッ!!』

英語で罵る桜庭に、彼女は肩を竦める。

『細かいわね、老けるわよ?』

『……アイオワ。これ以上怒らせると、あんたの脳天をぶち抜くわよ?』

執務室にいる、アメリカンな露出の多い格好の知り合いの金髪の美女が豪快に笑つ

た。

連絡して僅か三日で来日しやがったこの女。しかも、同時に他の面子もだ。

呼んでもないのになぜ来た。聞けば、友の危機と聞いて黙っていられなかったと言う

が。

『あんたの頭にそんな殊勝な心掛けがあるわけ無いじゃない。食うことと暴れること以外に興味ないくせに。どうせ観光でしょ？ 今度は何処を食い荒らすのよイナゴ女』

桜庭にしてはあり得ない辛辣な物言いに、然し旧知の彼女、アイオワは笑って白状した。

『イナゴ、つてあの美味しいバッタよね？ 佃煮つていうの、美味しかったわよ。また作つてよ大和』

『二度と作つてやらないわ。あんたのせいでイナゴ不足になって郷土料理が作れないつて、うちに苦情来たの忘れたの？』

皮肉も嫌がらせも通じない彼女にため息をついた。

アメリカの最終兵器、アイオワ。

桜庭こと、大和の知り合いであり、彼女もまた切り札の一人である。

グラマーな欧米美女であり、性格は至つて気紛れで趣味は食うことと暴れること。戦いと食に飢える、どこぞの深海棲艦顔負けの面倒くさい女だった。

加減を知らない、我慢も知らない、今回も自分の目的のために来たに違いない。

あと、こんなことを言うのはあれかもしれないが。

人類の最終兵器と呼ばれる人種は、大体こういう奴ばかりである。

「あ、日本語マスターしてきたから普通に喋るわよ」

「最初からそうしなさいよ」

因みに全員日本語もペラペラ。

エリート故に、当たり前なのだが。

「ゴメンゴメン。いきなり来て悪かったわ。でも、今回はアメリカも本気よ。あいつ、うちの貨物船を何隻も沈めているし」

全く悪びれないアイオワは、苦笑ってそう言い出した。

自分等の所もずいぶん被害が出ているから、早く解決しろと上が煩いらしい。

正式な命令であると通達した。不意打ちでアイオワが来ただけで。

「上の連中なんてどうでもいいんだけどね。普段は散々閉じ込めておいて、こういうときだけ解放してくれちゃって……。次やったらあの国、滅ぼしてもいいんだけど」

「私たちが言うところ洒落にならないわ。冗談でも止めて頂戴」

「ジョークだと良いわね？」

怖い笑顔でアイオワは桜庭に言う。

彼女も彼女で普段は幽閉されているようで、不自由な生活しか出来ていないと聞いた。

相当祖国に恨みを持っているようなのは知っているが、今回はかなりフラストレーションが溜まっていた。

「ガングートも来てるわよ。喧嘩でもして、ストレス吐き出せば？」

「ええ？ あの旧式も来てるの？ 生意気ね……まだ退役してないとか」

名前を出すと途端に不愉快そうにアイオワは眉をつり上げた。

で、運悪く。

「悪かったな旧式で。貴様のような頭が食い物で出来ている小娘と一緒にされるのも心外だ」

音もなく執務室のドアが開いており、そこに寄りかかるパイプをくわえて、ロシア海軍の制服にコートを羽織った顔に傷のある銀髪の女性が、腕を組んで皮肉るように笑っていた。

「ゲツ……。いたのあなた？ 最悪……」

「それは私の台詞だぞ、小娘。貴様、大和に断りなく来たそうだな。私は手違いで連絡が遅れてしまったが貴様は完全に不意打ちだそうだな？ アイオワ、何処に常識を忘れてきた？ 弾丸と一緒にぶっぱなしたか？」

嫌味を言うように彼女、ガングートが嘲笑する。

振り返るアイオワの目付きが、怒りに染まっっていく。

「調子に乗ってるわねロートル。……まだ、実力の違いを理解できない？」

「ほざけガキが。礼儀知らずの分際で、私や大和と同等とは笑わせる」

「大酒飲みが偉そうに……」

「黙れ、クソ生意気な穀潰し」

にらみあう二名に、桜庭はため息をついて外にいけと言った。

「やるなら素手でやりなさいよ。怪我ぐらいなら何とかしてあげるから」

舌打ちして、ガングートが表に出ると誘って、怒ったアイオワが出ていった。

数秒後、外で派手な喧嘩の音が聞こえる。

ばか騒ぎはいつものこと。

もう、慣れた。毎回の如くあの犬猿は、殴りあう。

「また派手にやっているな、大和。で、余は今回何をすればいい?」

気づかなかったが、よくみると隅っこで座って同じく金髪の美女が酒を飲みながら待っていた。

またかと呆れて、桜庭はぼやく。

「で、あんたも隅っこでなにしてんのネルソン」

「ラム酒で一杯やっているんだが? 匂いがキツイか?」

「そうじゃないから。何で真っ昼間から酒を飲むの?」

聞いている部分がおかしいアホがいた。

仮にも仕事をしている人の前で酒を飲むか。

休みだと言っている彼女は、既に上気した顔で笑う。

「いや、済まん。向こうじゃ禁酒させられているんだ、余も。見逃してくれ！」

「……オールドレディの機嫌を損ねたわけか」

頼み込む彼女はネルソン。此方はイギリスの最終兵器である。

アホな上に割と単純で、最終兵器の面々のなかでは大人しいが、今回は助けに来たのも暇だからと言う理由らしい。

あと、基本的に話を聞かないので、結構他人を怒らせる。

相手の言うことを鵜呑みにするなど、善人であるのは違いないが、彼女も桜庭の胃痛の種であった。

「や、大和！ アイオワ知らない!? ちょっと用事があつた隙に逃げ出したみたいで

……!!」

「大和ー！ お饅頭どこー？ 私お腹すいたわー！」

……今思うのは、深海棲艦の皆を隠しておいて良かったこと。

あと、オールドレディが居てくれたことぐらいか。

人の鎮守府でいつもこいつも好き勝手に振る舞って来て嫌になる。

「大和、向こうは私がやっておくから……仕事を続けて」

頼れる友人にそう言われて、漸く救われた気がした。

本当に、勘弁してほしい。
切にそう思う、桜庭だった。

ロシアの画策

先ずは、存命する世界の最終兵器たちの事を語ろうか。

彼女たちは各国が誇る最強の集団であり、同時に基本的には人格に問題がある危険人物が大半である。

たまたま今回来日しているのがこの面々であつて、世界にはまだ強大な艦娘は複数いる。

どれもこれも強烈な性格をしているのは、普段抑圧されるような生活を送っている、というか強いられているからだろう。

最終兵器の良心と呼ばれる数少ない常識人、大和。

周囲と揉め事を起こす連中をうまくまとめている、実質的なリーダーにして、彼女たちにもある意味尊敬される人物。

あんな扱いされるのによくもまあ軍人なんぞ続けていると言う意味で。

人間との隔絶を気にせず、使命を全うする姿勢に、憧れさえ抱かれていた。

最終兵器の苦勞人、オールドレディこと、ウォースパイト。

淑女とも言われるが、それは国内での振る舞いが淑女なのであって、仲間内では全く違う。

各自好き放題に動く連中の尻拭いをしたり、サポートをしたりする貧乏クジ担当。

ただ、そのわりに押しが強いので、下手に敵に回すと普段の行いをネタに容赦なく責めるんで要注意。

最終兵器の被害担当、サラトガ。通称シスターサラ。

大人しく、至ってこの個性的な面子のなかでは普通の女性にして、空母で唯一、最終兵器と呼ばれる。

毎度アイオワに振り回されて、彼女の暴走の巻き添えを受けて謝るのがお約束。

ドイツのデカイ暁、ビスマルク。

甘いもの大好き。寝るのも大好き。旦那も大好き。

最終兵器唯一の所帯持ち。こう見えて旦那が母国で提督やっている。

兎に角ずっと旦那に甘やかされていたのでワガママで、プライドも高いが食い物で懐柔できる。

あと褒めて欲しいときには頑張る良い娘。因みにこんなんで、今年で22になった。色々おかし。

ロシアの酒飲み、ガングート。非常識一号。

アイオワとは犬猿の仲で、酒とタバコを好む危険人物。

細かいことを気にしない、気に入ったものは何があんでも手に入れるなどおおよそ面倒くさい性格。

一応、最終兵器最古参なのだが……それを言うとは砲弾が返ってくるので禁句。

平気で言うのはアイオワぐらいだ。

で、アメリカの問題艦娘、アイオワ。

食うことと戦いが大好きなバトルジャンキー。加減しないで吹っ飛ばした地形は数知れず。

懐事情もお構い無し。好きなように戦い、好きなように食うのがモットー。非常に迷惑な非常識二号。

ラム酒をこよなく愛するアホ、ネルソン。

基本的に人を疑わない、鵜呑みにする、話を聞いてない、気づけばラム酒で乾杯。

と、害があるのかわからないのか分かりにくい非常識三号。根は善人なので、根気さえあれば多分大丈夫。

……とまあ、今回はこんな面子だが。まだマシな分類だったりする。

もつと酷い最終兵器は、パスタを食わないとパワーが出なかったり、お気に入りのおやつのを買に行くのを邪魔されただけで深海棲艦を一带から絶滅させたり、護衛対象からおやつを貰わないと護衛しなかったりと、酷いものである。

仕方ないと言えば、仕方ないと言えなくもない。

大和である桜庭はまだしも、大半は元々民間人。

それが突然国を一人で破壊できる存在になり、監視と幽閉の日々を強いられれば反抗もするし、暴走もする。

共通しているのが、皆は大半母国が大嫌いである。

自分の人生をぶち壊した人間、特に軍人には愛想など尽きている。

従っている理由も、脅されていたり、人質がいたり、その存在ゆえに民間に戻れず、言いなりにならないと生きていけなかったり、酷い場合は言い出せないことを安全措置と称してやっている場合も有り得る。

例えば……洗脳とか。あるいは、反逆阻止の為の爆破装置だったりとか。

こんな扱いはかりされてるから、彼女たちは……いや、彼女たちも。

人間を、嫌悪している。深海棲艦も、嫌悪している。味方は、艦娘だけ。

それも、同じ境遇の面々のみ。

まあ、憎しみあっているガングートとアイオワのようなものたちもいるが。

強者の孤独と言えはいいのか。周囲にいる多数の弱者に攻め立てられる、勝手に畏怖される日々は息苦しい。

その反動で、彼女たちは勝手に振る舞う。都合の良いときだけ利用する連中に対する嫌がらせに。

自分の存在を盾にして、ご機嫌を伺うように仕向けている。

普通とは違う、圧倒的な強さに特別な存在に無邪気に憧れる子供もいる。

そういう子供には、皆は大半、こう軽蔑を込めて言う。

——なにも知らない人間の癖に。

蔑みを向ける彼女たちは、憧れと無知を酷く嫌がる。

特にガングート、アイオワは。そういう人間を見ると本当に殺しに行こうとする。

何度桜庭やウォースパイトが制止したか覚えていないぐらい、頻繁に起きていることだった。

アイオワに至っては、過去のある作戦で民間人諸とも深海棲艦を吹き飛ばして殺したことも実際あった。

避難勧告を出しているのになんの理由か、故郷から離れたくないと言う子供たちや老人がいたのだが。

アイオワは躊躇いなく、粉碎した。深海棲艦とともに、地形を破壊して。

「バカにかける情けはないの」

と、自分の邪魔をするお前たちが悪いと下して、謝罪もなかった。

遺族とて、国が抱える最終兵器の前を遮ったなどと言う事実を明るみにすると、周囲から軽蔑される。

性格は兎も角、彼女も祖国では軍部によって、英雄と祭り上げられている存在。

黙っているしかなかった。

彼女たちが悪いのか。それとも、人類が悪いのか。

きつと、頭がおかしい彼女ならば、こう言うのだろう。

「どうでもいいです」

彼女も自分の邪魔をすれば誰であろうが既に殺す。

そういう意味では、皆と彼女は似ていると言えなくもない。

そんな面々が集まる鎮守府で。

数日した頃、桜庭は改めて聞かれるのだった……。

「大和。お前、そう言えば教え子はどうした?」

それは、ガングートの言葉から始まった。

隠れていた深海棲艦がアイオワにとうとう発見され、襲いかかる前にウォースパイトとサラトガが二人で押さえ込んだ翌日の、執務室。

禁煙と言うのに聞かずにパイプをくわえるガングートは、紫煙を吐き出して聞いた。

桜庭は黙ってキーボードを叩いていた。

知っているのか。周囲は知らない、彼女のことを。

桜庭が目をかけていた、あの少女を。

「この前任だった、深海棲艦をお前の指示で連れてきた張本人はどこに消えた?」

「……死んだわ。最近、未確認に殺された」

一応、存在は知っていても事実は隠蔽しておくべきだ。

事実を込めて、桜庭は淡々と答える。ほう、と小声でガングートは反応する。

室内には、最終兵器全員が揃っていた。各々好き勝手に過ごしている。

「ふうん。大和、嘘がへタね」

アイオワが、特大のジャーキーを食いながら言った。

長い付き合いだからか、直ぐに見抜かれる。

「事実を嘘と言われるのは心外ねアイオワ」

「だって、そんな強い未確認、居るわけ無いじゃない。あなたの教え子よ？」

アイオワは軽く否定する。逆に何処まで情報が漏洩しているのか。

皆に聞くと、大体知っていると全員が答えた。

「ここ数年居なかった、期待のルーキーだったんですよ？ アメリカも気にしますよ」

「ええ。しかも、聞くところによると、あなたに匹敵する適性を持っていたとか」

サラトガとウオースパイトも頷いた。

何処から漏れたのやら。ガバガバな現状にため息をつきたい桜庭。

理由を聞いてもどうせお得意の情報収集だろう。

聞くまでもなかった。

「……で？ 私たちにまで嘘言わないで良いでしょ。本当はどうしたの？ 辞めちゃっ

た？」

誰も外にはいない、と八つ橋を食べていたビスマルクが確認してから改めて問う。

「ここで素直に辞めちゃったと聞くのがビスマルクらしいと言うか。」

「ん？ そう簡単に辞められたか？ 余はそんな話は知らないが」

ネルソンも首をかしげる。和みそうな雰囲気だが、ガングートは笑った。

「バカかネルソン。決まっている……逃げたんだらう？ お前が隠そうとするなら、お

およそ予想はつくぞ」

豪快にそう笑いながら告げる内容は、皆は想像していたんだろう。

大して驚かずに、桜庭の返答を待った。

……どうにも、同じ境遇の皆は誤魔化せない。

全員が修羅場を知っているような猛者。

隠し事は出来そうになかったので、ここだけの話にと内密を約束させる。

特にネルソンとビスマルク。口が軽い二名には、ウォースパイトが誓わせた。

その前提で、白状した。

「……お察しの通りよ。あの娘は……渋谷さんと言うのだけどね。逃げ出したわ。ご丁寧に偽装までして」

簡単に概要を説明すると、皆は共感できるように頷いていた。

アイオワやガングートは、腕組みして聞いていた。

「……頑張ったようね、その子は。偉いじゃない。殺されそうになっても、直ぐに反撃せずに我慢していたなんて」

「そうだな。見所のある娘だ。故に、惜しい人材を無くしたな大和。これは、お前の甘さが引き起こした事だ」

アイオワと同感なのはムカつくが、とガングートは言いながら桜庭の甘さを指摘した。

訝しげに見ると、ウォースパイトやサラトガが止めると言うのにガングートは続ける。

「悪いがやめる気はない。大和。貴様は甘すぎたのだ。我が祖国では、脱走は銃殺される。それほどの重罪を選ばれたのは……貴様の不手際。責任が無いとは言えないか？」

「否定はしない。けど、甘すぎるって何よ？ 渋谷さんを甘やかしたつもりはないわ」

かなり甘かったことを気付いていない桜庭が反論すると、意外なことにアイオワが口をはさんだ。

ガングートが言っているのはそれじゃないと修正する形で。

「あなたが甘いのは、周囲の人間に対してよ。本人じゃないわ。……私個人としては、その子にもう少し甘くしたほうがよかった気もするけど、それはこの際置いておく。前から言おうと思っただけ、大和。あなたは、人間に優しすぎるのよね。人間を甘やかしているんじゃない？」

そっちだった。

要は、何でもっと味方をしてあげなかったのだという糾弾であった。

桜庭は、周囲の人間たちを甘やかしているとアイオワは言っていた。

敵対するならさっさと殺して権力で闇に葬るぐらいは最低限でもしておけと、ガングートも賛同する。

挙げ句には。

「……言い方はあれだけど、実際大和は人間に肩入れしている気もするわね。私はほら、旦那がいるからまだしも」

「同感だな。余もろくな目に遭わないが、擁護する気はないぞ？　なぜそこまで庇おうとする？」

「大和には大和の流儀があるんでしようけど、彼らの増長を招くことになりかねると思うの。今回は、その甘さが加速させたと言っても良いわね。大和に足りないのは冷酷」

ビスマルク、ネルソン、ウォースパイトですら同調している様子だった。

好き勝手に言いまくる彼女たちに、呆れているサラトガ。

「……わたしは、なにも言いませんよ。ただ、最低でも大和。生きているなら、連れ戻す事をお勧めします」

行方を直ぐにでも掴んで、早く連れ戻すべきだとサラトガが言う。

逸材を野放しにして、野垂れ死にさせるのは教え子に対する事じゃないと。

「言われなくてもわかってるわよ……。けどね、日本の海軍てのは……単純じゃないの。皆好き勝手に言うけど、出来るんなら私もやってるわ」

暗に、元帥の権力でも同じ元帥がいる限りは難しいと、桜庭は愚痴った。

一人では限界がある。下手に皆の手助けを受ければ、今度は外交問題になる。無茶を言うなと反論すると。

「ほう、そうか？　ならその小娘、ロシアが貰おうか」

とんでもないことを、ガングートは言い出した。

話を聞いてないのかと驚く桜庭に、ガングートは不敵に笑った。

確認すると、渋谷七海という少女はもう戸籍上は死んでいる。

軍も除籍された幽霊の状態。つまりは、早い話が深海棲艦と逃げた死人だ。

「だったら良いだろう。死んだ人間に法もクソもない。所詮は死人さ。日本で言うなら、死人にくちなしというやつだ。……丁度良い。その娘、私が貰おう。なに、戸籍ぐらいいは此方で用意してやるし、何なら深海棲艦も受け入れてやろう。ロシアで私が死ぬまできっちり面倒見てやるさ」

「ハアッ!?　あんた、何言ってるの!？」

豪快に笑ったガングートに嘯みつくアイオワ。

流石に周囲も絶句したり唾然としていた。

突然何を言い出すかと思えばこの女。

逃げ出した七海を欲していたのだ。

「黙れアイオワ。貴様も言っているだろう。私もそろそろ引退が近いのだ。後継者探し

をしようと思っていたんだが……大和が取り逃がした教え子なら満点だ。私の跡継ぎに相応しい素質もあるようだしな。調べた限り、戦力としては最終兵器一步手前という感じか。あれは、磨けば輝くぞ……。貴重な人材を飼い殺しにする国には些か勿体無い。我がロシアが、その娘貰おうか」

信用はできると思う。

意外と亡命などにも寛大なロシアだ。言う通り、受け入れる気概はある。

桜庭も少し考える。悪くない提案だった。

……確かに、この無理解な日本や限界のある自分よりも、融通の出来るガングートのほうが、彼女の為には良いかもしれない。

「……そうね。渋谷さんの意思も勿論尊重するのよね？」

「愚問だな。何度でもアプローチかけてやろうじゃないか。私は暇だから何度でも行く。首を縦に振るまでな」

七海、知らぬところでスカウトがかかっていた。

ガングートの申し出も、信頼できる間柄。

自分では守れなかった教え子の行方を問題があるとはいえ、再び人間の世界に連れ戻せるなら。

同じ境遇で、人間を見限った彼女たちとなら。少なくとも、普通よりはうまくいくか

もしれない。

「……相手は深海棲艦連れてるのよ？ ガングート正気？」

信じられないという顔で、アイオワは訊ねるが、ガングートは鼻で笑った。

「だからなんだアイオワ。全ての深海棲艦が敵と決めつけるカビの生えた古臭い思考の貴様では無理な話だろうな」

「ぶっ殺すわよ!？」

アイオワが怒鳴って立ち上がる。

アメリカは恐らく無理だろうが……ロシアは受け入れる気持ちはあると示した。

サラトガも、微妙に嫌そうな顔をしている。

「うむ……ウオースパイト。我が国はどうだ？」

「難しいと思うわ。事情が事情だもの」

ウオースパイトも、ネルソンも無理だと話している。

「……大和。何なら、うちの旦那に聞いてみる？ 大丈夫なら、最悪うちで引き取っても

良いわ。なんとかできると思うし」

もしもダメならドイツが引き取ると、ビスマルクは前向きに言ってくれた。

因みにビスマルクの旦那はドイツ海軍の実質上の最高責任者だったりする。

なので、一応可能と言えば可能らしい。

小声で言い寄ってきたので、保険としてお願いすることにした。

……何やらキナ臭い話になってきた。

とりあえず。七海はえらい物に、巻き込まれることになっていた……。

知らぬが仏

知らぬ間にスカウトが来ている彼女だが、一方その頃。

「美味しいですね」

「美味しいです!!」

能天気には観光していた。しかも堂々と、他県に移動している。

今は寂れているが、それなりに有名な温泉街を訪れてお土産の温泉饅頭を皆で食べて足湯につかつてのんびり時間を過ごす。

あのあと、五十鈴と由良は一度拠点に連れていかれ、リセと静香に事情を聞いていた。

「……そう。七海、よく頑張ったわね。大丈夫……五十鈴は、七海の味方」

「七海ちゃん。もう、離れないわ。由良たちが、一緒に生きていくから」

優しく、姉達は抱き締めてくれた。

てつきり、叱られると思つていたのに……優しく、どこか……悲しく、微笑んでいた。「七海が人類を軽蔑している理由は、分かるから。もう、あんな連中の為には戦うつもりはないわ」

「ええ。戦うなら、個人的な理由になる。七海ちゃんの為」

人類など知るかと、五十鈴も由良も捨ててしまった。

一番大切な者を傷つけられた痛みを知る以上は、二度と人類の糧にはならない。

自由に生きると決めた。無責任上等だ。そんな理屈は人類の理由に他ならない。

人類を諦めた以上は、連中の言い分など知らない。

率先して敵対はしない。だが、襲つてくれば殺す気持ちはある。

もういい。あんな排他的種族など、愛想も尽きた。

二人は、帰りを平穏なここで待つていと言いながら、今は拠点にいる。

大がかりな荷物とともに、旅をするために戻つた七海は彼女たちと合流し移動を開始した。

夜はその辺の空き家や廃墟を占拠して、勝手に寝泊まりしている。

今時、雨露さえ凌げて金銭的なモノさえクリアすれば根無し草も夢じゃない。

服装はコインランドリーで洗えばいいし、風呂は銭湯がある。寝袋さえあれば何処でも眠れる。

随分と好き勝手に生きていた。自由気ままな旅行を楽しむ皆は、それなりに……楽しんで過ごしていた。

その間にも、世界は進んでいく。

着々と中枢棲姫は勢力を蓄えて、某最終兵器達も情報を集めては、戦いの準備をしていた。

七海一行はそんなもの知ったことじゃない。

葉桜になり始めた春の陽気を楽しんでいるだけだ。

死人が上陸して闊歩する事を知らない彼女たちは、海を探しているものが見つかる訳もない。

探し人は、内陸部で優雅に旅行をしているのだ。で、時間にしておおよそ二週間ほど。

沢山楽しんだ皆は、漸く満足して戻っていく帰り道。

……油断していた訳じゃないが。出会ってしまった。

陸の、上で。

それは、七海が某駅前を変装しながら皆と歩いているときだった。

ここは、海沿いの小さな町で、此処から海路を進むと拠点に近いとわかっていた七海たちは、夜間を狙って少し時間を潰しているときだった。

知り合いなどいない、遠い町。

なのに、そこに……七海が知っている人物たちが、懐かしい顔触れが揃っていた。

「提督ー！ 何時までも塞ぎこむのは、身体に良くないよー！ ほら、元氣出して!!」

「そうですよ。前に進む……。そう、決断なさったんですよね？」

聞いたことのある声。ああ、何カ月ぶりだろうか。

艦娘の声だ。自分のところにはいない、艦娘の声。

その声に答える男の声は、もっと懐かしい。

「……そうだよな。もう、前を向かないと。あの子は……帰ってこないんだから」

辛そうに空を見上げて、二人の若い女性に励まされて歩く男性。

見覚えのある顔つきの青年だった。いち早く七海は気付いて、皆に素早く言った。

(……皆。知り合いがいます。普通に振る舞ってください)

と言われて、皆はごく普通に振る舞うように努める。

特に小春と村雨、春雨は普通の艦娘であるように自然体で喋りながら歩いていく。

七海は、早々バレないだろう。伊達眼鏡と花粉症対策に見えるようにマスクして、髪の毛を降ろしている。

髪飾りに如月と同じアネモネをあしらって、服装も旅行者を装うよそ行きの格好を意識しているのだ。

人通りもある。人数がいても、分かるわけがない。念入りに、喋ることもしない。彼方は声を知っている。万が一発見されれば面倒になる。

(……最悪、殺さないといけなくなるんですよね)

口封じは完璧に行う為なら、七海は知り合いでも殺す。

願うのは平坦な日常。波風を起こす相手は海に沈める。

リスクを踏まえた上での言動。

その知り合いとはすれ違うように、歩行者を挟んで通りすぎる。

皆は緊張を表に出さないようにしつつ、過ぎていく。

男性と女性二人は、洒落た服をしているから、非番か何かだろうか。

遠出でもしてきたんだろう。

中々に、運命というのは意地悪なことで。

一度しか会ってない艦娘とは違い、彼は……友人とも言える間柄だった。青年は、赤松。七海の真つ先にできた知り合いであった。

どこか陰りのある表情は、七海の死後を悲しんでくれたのか。

七海は一瞥すると、話を聞く素振りをする。

感付いた如月が話しかけてきているのを聞くようにして、通りすぎる。

一瞬だった。皆の緊張が最大限に高まった。

歩いて、交差する刹那。此方に背を向けるように歩く手前の彼女、榛名は気付かない。本人も、もう一人と話していて見ていない。

七海たちと、すれ違う。その、コンマの世界で。

「……嘘？」

そんな小さな呟きを、姉である金剛がもらした。

驚愕になるその視線の先は、七海の横顔。同時に、七海がその呟きを察知して。すれ違い、目配せですぐ近くの路地に入る曲がり角を全員で曲がって。

「……気づかれました!! 皆、走って!!」

七海が聞こえる範囲で叫び、一目散に海に向かって走り出す。

背後では。

「て、提督!! 今の……今の見た!?!」
「?」

金剛が、過ぎ去った方向を指差して、教えた。

首を傾げる赤松に、叫んだ。

一度しか顔を見ていないが、写真などでは何度も見ている。

顔つきも二度の変化を経てかなり違うものの、半端に残った面影で、彼女は気づいてしまった。

「渋谷さん、渋谷さんが今歩いてた!! 何か見覚えのある艦娘連れていたよツ!!」

一緒に如月もいた、と教えると赤松は啞然としていた。

有り得ない。死んだはずの人間が、居るわけがない。

だが、懸命に追おうと提案する嫁の金剛が、見間違えをしたにしては必死に言うから。

反射的に、後を追っていた。

間違いであつて欲しい。いないで欲しい。

そう、何処かで思っていた赤松。

だつて、彼女は。七海は。

もう、帰らぬ人で。この世には、存在しないから。

もしも、存在するとすれば。それは、魂が穢れた別の生き物。

例えるとすれば。

(渋谷……!! お前はツ……!!)

曲がり角を、飛び込む三人。

そこには、がらんだ道の道があるだけ。海の方に向かう道が。

人など歩いていない。影も形もない。

「あれっ……!?!」

周囲を見回す金剛。誰もいない。

やはり、見間違いか？ 榛名も一緒になつて探すが、無関係な一般人が、訝しげに二人を見ていた。

呆然とする赤松。良かった、見間違いだつた。そうホツとして、空を見上げる。

——すると。

「……」

——いた。

「ツ!?!」

息を呑む赤松。一瞬だつた。

コンマの世界を、立ち並ぶ建物の屋上。

フェンスの『外側』に立っていた、知っている顔が、真つ直ぐと無表情に見下ろして

いた。

見慣れないレンズの奥、無機質なオッドアイが、淀みと濁りを混ぜ合わせ、赤松を見つめていた。

直ぐに消える影を、彼は見た。咄嗟に叫ぶ。

「金剛ツ!! 榛名ツ!! 上だツ!!」

叫ばれて見上げる艦娘は、意味を悟った。

壁を蹴飛ばして、三角を作るように交互にビルの壁を蹴り上がったのだ。

感覚の狭い路地だからできた荒業。上に逃げている。彼も、目撃していた。

「追いかける!! 渋谷が上陸している可能性がある!」

「了解!!」

鋭く命じる赤松。間違いない。あの顔は、七海だ。

死人が陸にいる。七海の所業を鑑みるに。

彼女は、深海棲艦を手引きして上陸させた。

そう、判断して命じた。二名は豪快に飛び上がり、一気に屋上に跳躍。

下で追いかける赤松。携帯を使って金剛が通話にして教える。

人影が、建物の上を疾走している。逃げていると。

兎に角追いかける二名と、逃げ回る謎の影。

パフォーマンスのように続ける目立つ行為だが、仕方ない。赤松は、走りながら彼女に知らせた。上司の、最終兵器に……。

追い回す二名は、ある廃墟に導かれた。

ボロボロの廃墟。立ち入り禁止の札を乗り越えて、影は内部に消えていく。

「待ちなさいッ!!」

金剛が制止するが当然無視。

そのまま、二人も侵入する。物静かな内部に、警戒しながら進む。

薄い闇が昼間でも支配する空間。散乱する瓦礫やゴミ、落書きされた壁や壊れた床。長年放置されているのは見ればわかる。

「出てきなさいッ!!」ここに居るのはわかっています!!」

威嚇するように金剛は身構えて脅す。

無論、反応は……。

「なら、どうするんですか？ あたしを、もう一度殺すんですかね？」

……あつた。

背後。入り口側に、彼女はいた。

振り返る金剛と榛名。そこには、逆光を浴びている、少女が立っていた。

上着に薄い長袖に、ジーンズ姿の少女は、メガネを外して感心したように笑っていた。「よく覚えていましたね。あなたとは、件の演習以来ですか。本当に、あたしの顔なんて一度見ただけ。変容したあとには、お会いしていない筈なのですが……」

パチパチと、場違いな拍手をして、褒めていた。

金剛は見る。夕立と、覚えている顔立ちの中間。

中途半端の混ざりあう姿を。成る程、これが彼の言っていたオーバーフロー。

それも、此方を無意識だろうか、妙に威圧する出で立ち。

身構えたまま、金剛は対応する。

「……お久しぶりです、渋谷提督。生きていたんですか？ 貴女はM I A……俗に言う殉職なさったとお聞きしました」

「目の前の事実が、現実になりますね金剛さん。そして、榛名さん」

動じない彼女は、淡々と言いながら近づいて来る。

読めない雰囲気と表情。何がしたいのか、何を言いたいのか。

全くわからない中。榛名が訊ねる。

「……渋谷提督。榛名たちを、どうするおつもりですか？」

それは、暗に妙な動きをしたら対応すると宣戦布告をしたに等しい。

死人がいると言う時点で異常なこと。

穩便に済むとは思えない。

「ええ。すみませんね。申し訳ないとは思うのです。あたし個人には、敵対する理由はないんですけど……残念です。見られたからには、消えていただきます」

と、七海は微笑みながら……姿を消す。

それが、残像が見えるほどの陸上での加速と運動能力とわかる頃には、榛名の目には追えなかった。

陸では動きの鈍い艦娘。

所詮は艦の延長にいる命では、陸上型深海棲艦すら束ねる長には勝てなかった。

鈍く、重たい音がした。

金剛の目に、辛うじて見えたのは、呆然とする榛名の真正面に移動した七海が、鳩尾に重い一撃を撃ち込み、失神させたことだった。

榛名は気を失い、倒れこんだ。

「榛名!？」

金剛が駆け寄ろうとする。

だが、それを防ぐは視界から消えている七海の蹴り。

横合いから回し蹴りが飛んでくるのを腕を交差させて防御する。

寸前だったが、間に合うも後方に仰け反る。

「……へえ。良く間に合いましたね？　もしかして、新しい改装？　成る程、限界突破なさってますか」

驚く七海の台詞とは裏腹に、余裕すら浮かばせたまま。

七海は着地して、痺れる腕を越えて睨む金剛を見る。

「な、何をするんですか……?!　私達は戦う理由などないのに……!!」

理解できない金剛は、想定以上の威力に、新開発の最終改装だと言うのに追い付けない事に愕然としていた。

たった一度の蹴りで、利き腕の骨が軋んでいる。折れてはいないが、動かない。

打ち所が悪かったようで、鈍痛がする。

「……加減しているうちに、楽にしてあげようと思ったんですけどね……」

苦笑った七海は、金剛に言った。

困惑する彼女は、ひたすらに理解できないままだった。

「その強さでは、もう加減はしません。脅威は、潰します。冥土の土産です。無益な争いを生まないため、水の底に消えてください金剛さん。見られたからには、殺さないと

……あたしには、未来がない。言い訳はしませんので、恨んでくださって結構です。口封じ、させて頂きます」

かしやん！ と、何処からともなく、大きな鎖を取り出した七海。

目を見開く金剛。あの鎖は……彼女の提督が言っていた、見せてくれた……あの映像にあつた!?

「此方も、最期に良いものを見せましょう。……憎しみの澱を飲み干した、ある人間の成れの果てを、ご照覧あれ」

クスリと笑った七海が、金剛に見せる、生涯最後の記憶は。

「永遠にさようなら、金剛さん。では、ごきげんよう。善き来世を」

……怪物となった、ある少女の凶刃であつた。

それは、ある殺人。事件にすら、ならなかつた。

表に出ることなく闇に食われた女性二人と、その大切な男性。

行方知れずになって、その後を知り得るものは誰もいない。

強いて言うなら、とうとう過ちを犯した彼女に、最強の一角は、対話は不可能なのか

と迷いを生ませる切っ掛けになり。

あるいは、その結末を知っているのは暗く冷たい海の底か、赤く染まった口を濯いでいる、白い球体の化け物だけだろう……。

エンディングA 完全殲滅

口封じ

——時を少し遡ろう。

それは、嫁二名を撃破して、気絶させたあとの続き。

「金剛……榛名!? 畜生、何がどうなつていやがる!?!」

その男は、後を追っていた。

けれど、途中で連絡が途絶えた。

何度呼び出しても、繋がらない。

走りながら、向かっていたと思われる廃墟を目指す。

男は何故こうなつたのか理解できない。

彼女は何故生きている。

彼女は何故陸にいる。

彼女は何故逃げる。

分からない、分からない、分からない。

必死に追いかけて、到着する。

急いで、中に入った。

……すると。

「一足遅かったようですね、赤松さん」

そこには、死人がいた。

愛しいものたちが横たわり、そこに腰かけて彼の到着を待っているように。

涼しい顔で、動かない彼女たちを見せつけて。

「渋……谷……!?!」

彼が目の当たりにしたのは、知っている少女が平然とそこにいて。

彼を歓迎する気はない、という意思を見せていること。

愕然とするも、落ち着くように彼は、慎重に聞いた。

彼女は死んだはず。なのに生きている。ここにいます。

その時点で異常なことなのだ。冷静に対応しないといけない。

たとえ、愛しい二人が倒れていても。彼女がやったのは明確。

激昂して、刺激すれば……自分も仲間入りするだろう。

「……生きていたんだな、お前」

「聞き飽きましたよ、その台詞は」

同じことを二人も聞いたか。

彼は、対話をする気はあると判断。

理由を問うと。

「見たからです。あたしを。出会ったからです。あたしと」

シンプルに、七海は答えた。馬鹿げた理由だった。

極めて利己的で、極めて理不尽で、極めて理解できない。

そういう理由だったのだ。

「二人を、殺したのか」

震える声で訊ねる。怒りだ。これは、怒りだ。

そんな事で彼女たちを傷つけた。

どうやら、彼女は男の知る渋谷七海ではないらしい。

理屈もない。理論もない。完全な、別人として。

彼女は、渋谷七海ではない。深海棲艦。

そう、下した。

「殺しては、いません。今は……ですがね」

七海の言葉には、世間話をするような気軽ささえあった。

自分のしたことを、分かっている……そんな様子で。

同時に、殺意があると、ハッキリ明言した。

男は、睨んだ。友人を真似た深海棲艦は、微笑んでいる。

「デメエ……渋谷を真似た深海棲艦か。よく出来ているな、外側は。だが、肝心の中身は別物だぜ。渋谷は、もつと利口な子だ。そんな身勝手な事は言わねえよ。あの子は、理屈で動いている……自分の艦娘と、深海棲艦を大事にする。そういう子だ」

「……………」

男は言った。

身勝手ではない。彼女は客観的に動ける子。

こんな自分勝手な理由で艦娘を襲わない。

そう、言う。黙って聞いている七海。

身構える彼女は……聴て、大きなため息をついた。

「分かったように、あたしを語るんですね。その割には、あたしの本質は理解できていない。赤松さん。残念ですが、やはり赤松さんも……消えてもらうしかないようです」

と、ゆっくり立ち上がる七海は……忽然と姿を消した。

目を見開く男。ザツ、と背後で音。

振り返る、誰もいない。次は、また背後から声。

「あたし個人からしたら、赤松さんには恨みないですよ。けど、知ったような口振りであたしを語るのに、変化には気付かない」

前を見た。誰もいない。

今度は右で声がする。

「赤松さん。あたしは、今も皆が大事ですよ。大事だから、何でもするんです。分かりますか？ 何時だったか、大淀さんにも言いました。同じことを。何でもすると言うのは、簡単です。然し……：……本当に何でもするというのは、こういうことなのですよ」

振り向く。光と床。

真後ろから問われた。

「理由を聞きましたね。説明した通りの理由です。理不尽でしょうね。でも、あたしも散々理不尽を受けました。ですので、その苦しみは分かります。ですが、分かっても共感はしません。分かるから、同じ痛みを与えます。それが、あたしの選んだ生き方。自分勝手なことを言わない？ いいえ、違います。あたしは、元からこういう利己的で排他的で、他人の事情など無関心の、サイコパスに過ぎません。最後まで、あなたも気づけなかった」

背後かと思つて視界をずらす。また、居ない。

声だけが、至近距離で響いている。

「あたしはもう、人間には辟易しているんです。人間っていうのは、あたしも含めて大半がクズしか居ない……。疲れました。善意を信じて生きるには、悪意が多すぎて、息苦しい。こんな世界なんて、人間なんて、死ねばいい。あなたも、そう。死ねばいい。あたしの邪魔をする、目障りな人間。出会った時点でどうせ、あなたもあたしに害を与えるだけでしょう？　ねえ、赤松さん。あたしに近づくな、死んでください。あたしには、あなたは害しか与えないから」

声だけが攻撃してくる。

死ねと。お前は、人間だから。

分かっている。ここに、陸に七海が居るだけで追つてきた。

それはつまり、関わりとうとする。同時に、桜庭にも通じたんだろう？

不都合なのだ。今の七海には、人間という存在そのものが。

七海は勝手に存在する。自由にしていくだけ。

近づかない限りは何もしないのに、どうして自分からやつてくる？

「飛んで火に入る夏の虫。あたしの本質はもう、全くの別。皆と一緒に生きていく。その為に壁となるなら、赤松さんも殺します。知つていたくせに。あたしが、皆のために

何度も血を流したことを。バカな人……考えれば、分かったんじゃないですか？ あたしは、中身がとくに普通じゃないって」

何を言っている？ 彼女は何を言っているんだ？

男は叫ぶ。何がしたい、何を言いたい。

愚問を、と七海は笑う。

「だから、要求しているじゃないですか。死ぬって言っているんですよ。桜庭さんに通じて、あたしに敵対したあなたには、もう何も感じませんから。殺すと言っているのに、理解できないんですか？」

呆れたような口調で、声だけの彼女は、そう何度も言った。

ふざけるなど反論する男。なぜそんな理屈で死ななければならぬ。

道理が通らないだろうと怒りを表すが。

「世の中、理屈と道理で生きていければ、あたしもこんな風になりませんでした。それを優先したら、こうなっただんですよ？ だったら、理屈もへったくれもない。全部好き勝手にやらせて貰います」

文句があるなら、殺せばいいと、彼女は初めて挑発した。

殺れるモノなら、殺ってみろと。

「深海棲艦と、先ほど言いました。そう、あたしは人間であり、艦娘であり、深海棲艦。

全てを兼ね備えるのですから、その誇りはとても正しい。あなたに、深海棲艦を殺せませうか？ 艦娘を殺せませうか？ 人を……殺せませうか？」

どれも出来やしないと、否定する。

単なる人間に過ぎない男には、どれも満足には、殺せないと笑った。

「いいんですよ。正しいのは赤松さん。あなたです。でも、正しいだけなんです。その先には何も無い。言葉であたしは止まりませんよ。弱いじゃないですか、あなたは。本当に弱い……。無力って意味、分かりますか？ ここに居る間違っているあたしにすら、何もできないであなたは終わり。ただ、奪われるだけ。その癖に口先だけは、攻撃の意思だけは無駄にある喧しい羽虫……。人間などそんなもの。口だけ、無駄に数が多くて嫌になります。ま、文化を拝借する以上は、有効活用してあげます。ともあれ、赤松さん。ここで死ぬあなたには、無関係でしようけど」

弱いと、はっきり指摘した。

何もできないくせによくしゃべる。

五月蠅いから、潰すと七海は言った。ウザいから、目障りだから、鬱陶しいから。

男の目には、どこで語っているかも見えないし、反論するにもその前に出鼻を挫いて喋らせない。

そして。彼の意識は、首筋に強い衝撃と共に、ブラックアウトしたのだった……。

……地獄が、始まった。

三人は捕縛されていた。

黒い鎖で簀巻きにされて、浜辺に転がされていた。

意識が戻った三人は、犯人である七海を見て怒鳴った。

「ばかな真似は止せと。が、そんなもので止まる彼女ではない。

「止めますよ。全員死んだら」

とだけ、素っ気なく言った。

身ぐるみを剥がされて、所持品も全部破壊してから投げ捨てる。

そのまま、ずるずると海の中に全員を引きずり込む。

砂の上に跡が残るが、そんなものどうでもいい。

懸命に抵抗するが、無慈悲に七海は教えた。

「その鎖は、あたしの刀から派生したモノです。無毒にはしていますが、千切ろうとして

も無駄です。その気になれば、あたしが飲み干した毒を与えて精神を毒で満たしても構いません。けど、その発狂する悲鳴を聞くのは趣味ではないので……こうして、置きます」

用意してあったのか、小型のボートに三人を放り込む。

怒鳴る男を完全に無視して、ボートが独りでに動き出す。

漕いでもない。エンジンもない。にも関わらず。

何事か分かかっていない彼らを真つ黒な色のついた汚泥で見下ろす七海は、暫く黙る。

少し水深が深くなってから、一度停止するボート。七海は指を鳴らして止めたようだ。

「何をする気だ!？」

男が怒りで吼えると、漸く彼女は目的を話した。

それは、言うなれば。

「口を封じるんですよ」

本来ならばそのまま放り込むと言うが、それは気の毒になるので止めると言つて。

教えた。口封じのやり方を。

「生きたまま、餌になって貰います。ねえ、誰からがいいですか？ 我こそはという方に免じて、残りは運が良ければ助けてもいいですよ？」

笑顔で問う七海は、海中に居る何かの生き餌にすると言い出した。

抵抗したらそのまま殺すと言った彼女は、誰でもいいと言って、聞くのだ。

「……………本当に、助けるんですか？」

そう聞いたのは、金剛だった。

睨み付けて、静かに問い返す。

七海は何も言わない。ただ、笑っている。

返答はない。止めろと言う二人の言葉に、金剛は首を振った。

「ごめんなさい。聞けません。……さあ、私を殺しなさい。代わりに、二人を見逃してください」

断固たる意思で、七海を見て金剛は自ら犠牲になるといった。

七海は無言で、鎖を引っ張り金剛を持ち上げた。

ばしゃばしゃと水面が跳ねる。下にいる生き物が、餌を欲する鯉のように暴れているようだ。

喚いて二人は言った。自分になる、金剛は見逃せと。

悲しい表情で、金剛はうつすらと涙さえ溜めて、二人を見つめた。

「……………バイバイ、榛名……………提督」

七海は遺言ぐらいいは残す時間をくれた。

で、そのまま豪快に投げ入れる。途端に大きくなる水の音。

「金剛おとおおお!!」

「お姉さまああああ!!」

悲痛な叫びが木霊した。

七海は無表情になり、海面を見下ろしていた。

怒り狂う連中の様子などどうでもいい。

それよりも、気になった。

人生で初めて、人間の形をした生き物が食われる瞬間を、好奇心で見てもたくなかった。

(……浮遊要塞は、艦娘を噛み砕くんですな)

ぼりぼり、ぼりぼりと頭から彼女だった物を噛み砕いて食らっていた。

文字通り、生きたまま餌になってもらった。

幸いなのは、頭を一撃で食いちぎったので即死したぐらいか。

汚い悲鳴を聞かずに済んだ。

見たことのない艦娘の死に様。

人間らしきものが、化け物に捕食される光景を間近で見た。

口の中で人間がガムを噛むように、生々しい音をさせて砕いていた。

原型をとどめずに砕かれるのは、見ている文字にできない程グロテスク。

ミンチになった元艦娘は、抗うこともなく、無抵抗に餌になった。それを眺める七海。自分が飼育する浮遊要塞の餌のやり方を学ぶついでに口封じだった。

人間サイズでも食えると言うから与えた。本当に食い尽くした。

問題は無さそうだった。次を与えると言うと、水中の浮遊要塞は喜んでいる。

海面を真っ赤に染めて、次を待っている。

今度は妹の番だ。泣き叫んで嫌がるので、面倒くさいから丸ごとくれてしまおう。

「待てよ!! 俺達は、金剛が命を差し出せば見逃すんじゃないのか!」

「はっ? そんな事、言った覚えはありません。ただ運が良ければと言っただけですが? 何を都合よく解釈しているんですか?」

アホらしい。嘘は言っていないし、約束もしていない。

聞いてないとか叫んでいるが、聞き流して。

「はいどぼーん」

「きゃあああああつ!!」

抑揚のない声で適当に掛け声をあげて、投げ捨てる。

悲鳴をあげて、妹は海に消える。

で、耳障りな絶叫をあげながら溺れて食われていくようだ。

五月蠅いとしか思えない。後ろでは男が叫んでいる。

「貴様ああああ!!」

「……………」

怒りで吠える男が暴れだす。ボートが揺れる。ウザい。

そろそろ面倒になってきた。取り敢えず七海は振り返り、雑に掴んで。

「がはっ!?!」

「死ね」

そのまま投入。妹も食い終えた浮遊要塞が、水中で口を開けて待つていた。

ギロチンのように、吸い込まれていく男は、断末魔の叫びさえあげずに、食われて……

数秒後には音になった。

呆気ない。普通の金魚の餌をやるのと何が違う。普通の事であった。

想像よりも簡単で、面白味もない、作業に過ぎなかった。

「……………」

真つ赤に染まった海水で口を濯ぐ浮遊要塞を見た。

満足したように回遊する。どうやら、満腹らしい。

七海も思っていたよりも退屈な作業に軽く伸びをし、ボートから浮遊要塞に飛び乗り、ボートを鎖で軽く破壊した。

バラバラにして沈めて、証拠隠滅。全て終えた。
「帰りましょよ」

と言うと、浮遊要塞はご機嫌で戻っていく。

七海も口封じを終えて気苦労が無くなり、疲れたと思いつつ帰っていった。
意外と、人を殺すのは、難しくない。そして、大して面白くもない。

そう学習して、海に消える深海棲艦。この日、彼女は、初めて人を殺したのだった。

人類破滅のカウントダウン

(……赤松君とも連絡がつかない。途中までは分かるけど……GPSも死んでるか。これは、渋谷さんに殺られちゃった可能性は高いわね)

数日経った頃。

鎮守府の桜庭は、苦い顔で自分のところに来た連絡を考える。

数日前に、個人的な端末に緊急の連絡が入った。

七海が上陸している。深海棲艦を連れて、旅行していたようだ。

服装と経緯から推察するとそうなるが、出会った瞬間逃走した。

後を追いかけていると言ったきり、途絶する連絡。

GPSによる追跡も、どこかの廃墟に向かったまま、破壊されたようで足取りが消えた。

一応憲兵が命令で調べてきた。結果は、異常などない。普通の廃墟だったらしい。

写真も持ち帰り、目を通した。違和感はない。ただ、依然として赤松と付き添いの艦娘二名は行方知れず。

何処かに消えてしまった。

桜庭は誰にも言わずに、独断で判断する。赤松の言うことを明るみにすれば、また大本営が喧しい。

折角内密にしている七海の一件が、露呈するのは避けたい。

上司として、死後の安寧ぐらいは応援したかった。

……そう、したかった。

だが、もうダメだ。彼女は人間を殺した。

知り合いである赤松を手にかけていると思われる。

殺人の味を覚えた彼女は最早深海棲艦と大差はない。

(……責任取らないとね。私の甘さが、あの娘を追い詰めたんだから)

まだ、七海が生きているのを知っているのは、重巡たちと深海棲艦、そして最終兵器たちだけ。

他は殉職で誤魔化しているが……復活してもおかしくはない。

前例の事もある。仮に決戦時、出てきても……今回はこんなに味方がいるのだ。

もういい。甘やかすのは、終わりだ。桜庭は決断した。

（ごめんなさい、渋谷さん。あなたが人類を恨む気持ちは否定しない。けどね、私は大和なの。この国を守る艦娘なの。だから、渋谷さんを殺すわ。深海棲艦に堕ちたあなたには、相応の報いを与えます。私と一緒に）

彼女を殺そう。追跡をこの日から桜庭は始めた。

重巡たちにも、深海棲艦たちにも、最終兵器たちにも言わない。

個人の人脉で、片っ端から海路と陸路を探していく。

しらみ潰しに、目撃情報やら何やらを集めて纏める。

「あの……司令官さま？　どうかしたんですか？」

翔鶴やリンゴ、パクチャーは何やら不穏な空気を感じていた。

甘さが一切抜け落ちたような、桜庭の厳しい顔に、事情を察したと言えればいいか。

どうやら、決戦に向けて彼女は準備に本腰を入れているように見えた。

三人には何も説明しないが、しかも特定の相手を想定している演習も自分で始めている。

「大和、貴様何を隠しているのだ？」

「ガングートには、都合の悪いこと」

「……ぬう」

次に最終兵器たちも感じていた。

桜庭が、何かをつかんで、七海を殺そうとしている。

そういう雰囲気を知り、皆で聞く。

すると、ならば教えてやると真顔の桜庭が七海が軍人を殺したと告げる。

お連れの艦娘もろとも、だ。流石にガングートも、渋い顔をする。

「……殺したのか。わざわざ、自分からか？ 任務で巻き添えや、邪魔立てしたわけもな

く。率先して？」

「ええ。可能性は高いでしょうね」

教えられると、ガングートは腕を組んでぼやく。

「ふむ……。まあ、殺人程度なら我が国は気にしないが……」

「言っておくけど、私は処分すると決めたわ。邪魔したらガングート……分かってる？

日本と戦争したい？」

桜庭は暗に、後継者にするのを止めると脅していた。

人を自分から殺したような人間を最終兵器には招けない。

ガングートは気にしないが、他全員が気にする。

「私も大和につくわよ。人のことは言えないけど、私は必要だから殺したのよ。自分から意味もなく襲うような、単なる深海棲艦となったなら、殺すだけ。如何に強くても、私達なら勝てるわ」

アイオワも、大和の責任をとるという意思を汲んだ。

元々反対していた彼女は、個人的には気に入るが、行動は気に入らないと言っている。他にも大体、桜庭に味方した。看過は出来ないとのこと。

「流石に分が悪いか……。なら、勝手にしてくれ。私は彼女を襲うなら手を貸さない。好きにするといい。だが、覚えておけ。それで万が一生きていれば……。私は、その少女を保護するぞ。我が国のトップもそれを認めさせた。誰が何と言おうが、気に入ったのだ。私は諦めんと大和。戦争ならば、こう言わせてもらおう。……。上等だ。貴様と血塗れになって争うのも、私は吝かではない」

「……そう。中立つてことね。じゃあいいわ。その時は引退させてあげるわガングー
ト」

素っ気なく桜庭はガングートの言い分を認めた。

余程高く買っているということだ。一度は身を引くが諦める気も毛頭無いらしい。そういう性格だ。今更だった。

知らぬ間に、火花を散らす二名と、啞然とするアイオワたち。

ガングートがそこまで気に入ったのは、初めてでは無かるうか。

リスクを踏まえた上で宣言するあたり、絶対にこいつはやる。

恐らく、平然と殺人をする度胸と気概がガングートの気質に合うようだ。

この酒飲み、そういうタイプを好んでいるようだし。
ドン引きする最終兵器たちは、それはそれと、目前に迫った決戦に備えていく……。

で、此方は。

「闘争の気配がこれまでになく高まっているぞ……。我も気分がよい。人間よ、貴様にこれをやろう」

日に日に勢力を増していく中枢棲姫が、七海の住み着く根城に顔を出して、なんかくれた。

勝手に部下たちが毎日人間たちを襲撃して領海を広げているようだが、中枢棲姫の知ったことじゃない。

何やら想定外に相手が強くなりそうで喜ぶ戦争バカが、調子に乗って他の姫をかき集めていたようだつた。

そちらに侵攻を任せて、本人は平和に暮らす七海にこれをくれた。

「……指輪？」

五十鈴や由良が気絶する中樞棲姫相手でも（この二名は初見であった。ご近所さんと知らず）、もう慣れた皆は七海に贈られたそれを見ていた。二つセットで使うらしい。

漆黒の指輪だった。不思議なことに、とても冷たい。

なのに、何だか……持っている、温かい気分になる。

金属製だろうか？ 何か、妙な臭いがするんだが。

「ヘドロみたいな臭いがしますが？」

「気にするな。海底の金属で、あの白い球が仕上げた装飾品だ。臭いのは仕方なからう」
勝手に浮遊要塞に何か与えたようだった。中樞棲姫はしれつと言った。

いわく、七海の刀と同質に仕上げているとかで、七海の刀が恋人と兼用になるなら、得物はそちらに渡す。

七海は新しく、ヘドロ臭い真っ黒な波形の手甲と具足で装備を固めた。

やはり殴る蹴るが七海には一番適している。もう、砲撃も雷撃も必要ないレベルであつた。

手足にはめて軽く練習。如月も、受け取った刀から鎖を外して、七海に手渡す。

「使うかもしれないわ。持っていて」

「そうですね。貰っておきます」

如月が変身することも知っていた皆は、ぼろぼろの得物も交換したらと何度か言っていた。

なので、このタイミングで、浮遊要塞に頼んでみた。

「にゃー!!」

了承した浮遊要塞は猫のように返事をして、一度ムラマサを腹に飲み込む。

数時間経過して、何とムラマサを別の形で量産してくれやがった。

驚いた。全員がムラマサと思われる、見慣れない艦装を配られたのだ。

中枢棲姫も笑っていた。中々憎悪の籠った装備であると。

実際、装備すると……。

「何か、凄く人間が気に入らないわね」

「……………」

リセと静香は多少おっかないことをいうのと顔が怖いだけで済んだ。

平たく大きい飛行甲板を受け取っているリセと、巨大な連装砲を担ぐ静香。

こっちはまだ、辛うじて普通であるが。

「ふうん……。深海棲艦の艦装も、悪くないじゃない」

「うん。想像していたのと、少し違ったね。食わず嫌いだったかな」

両手に嵌め込む形で取り付けた、ガトリングのような銃身を纏めている大きな機銃

と、大量の爆雷を予め飲み込んだ資材を消費して生成する機関を搭載した五十鈴と。

主砲、飛行甲板、魚雷発射管、電探、ソナー、機銃などあらゆるモノを複合して全身に纏う由良。

互いにどす黒い色合いの艦装を、ハイライトが消えた目で身に纏う。

まだ、深海棲艦にはなっていないが、装備は全部深海棲艦と同等であった。

同時に、燻っていた人間への嫌悪が加熱されて、憎しみしか感じなくなった。

そう。五十鈴が嘗てはね除けた、深海棲艦の憎しみに、二人は……見事に適応していた。

お陰で性能は、艦娘装備だった頃の数倍には上昇している。

艦載機も全部深海棲艦お手製になり、艦娘の定規ではもう、彼女たちは測定できないだろう。

「ご主人様をお守りするのですが、わたしの願いです……はいっ!!」

「こうなればもう、仕方ないわ……。戦うしかないんだよね……」

「お嬢様の仰せのままに」

メイドたちも、本来の装備に逆戻りして、純粹に強化されていた。

事の顛末は皆知っている。七海は人間を殺したのだ。

そして、何よりも……。

「殺人なんて、餌やりよりも簡単ですよ。あたしたちの生活を邪魔するならば、誰でも殺せばいいのです。邪魔する人間が大半である以上、加減などするだけ無駄と言うもの」

「そうよね……。如月たちの未来は人間とは違う場所にある、幸せだものね。あんな連中、死んでも何ら困らないわ」

如月と七海が深海棲艦に完全に適合したようだった。

なんと、その指輪を左手の薬指にはめていると、自分の意思で何時でも変身できる。

陸でも海でも関係ない。この指輪は、特に強い絆を持つペアに真価を発揮するようだ。

対になって、互いを愛し合う二人の感情が一致したからか、新しい如月のムラマサは、カトトラスのような刀身の分厚いものに変化。

更に七海と同種の具足、手甲を装備しており、機関部らしきものもなく浮かぶことすら可能にしている。

身体能力も爆発的に上がっており、如月も七海も、戦艦の一撃だって大した傷を負わなくなった。

姫に匹敵していた能力は格段に向上しており、戦う意思はなく、待っていると言った娘と妹以外は、全員が化け物となっていた。

「負ける気はしませんね。中枢棲姫、礼を言います。……利害が一致したようですので、

件の決戦時にはあたしたちも加勢しましょう。丁度、目障りな存在が一人、あなたの敵として居ますので」

「……例の女か？ 我の楽しみを奪うでないぞ？」

七海は、とうとう反撃に出る。

今までは襲われてから対処していた。

だが、今は違う。明確に見えたのだ、自分達の敵となる存在が。

生きているだけで、七海を脅かす脅威を、絞った。

彼女さえ居なくなれば。七海を構うモノはいなくなるはずだ。

とても強い。勝ったことなどない。だから中枢棲姫と共に行く。

桜庭。彼女を殺せば、少なくとも危険な可能性はずっと低くなる。

当面の目標は、桜庭の撃破だ。倒せる保証はないが、倒さないと……安定した未来などないのも事実。

賭けに出るしかないのだと、七海は中枢棲姫に話す。

「……良かろう。貴様も己のために戦うならば、我らは同胞だ。共に来い、渋谷七海とやら。我は、貴様を歓迎する」

中枢棲姫は、手を差し出す。握手をしろと言うのだ。

「……ええ。宜しくお願ひします。一緒に、互いの目的を果たしましょう」

不敵に邪悪に笑った七海は、その手を取った。

この日、最悪の深海棲艦と、最低の人間が手を組んだ。

それは、人類破滅のカウントダウン。

想像を超える、悪夢の始まりであつた……。

決戦の日

七海は考える。

自分の目的を果たしつつ、同胞となった彼女の邪魔をしない方法を。

彼女は戦争を求めぬ。結果である殺害を求めない。

七海は殺害を求めぬ。手段である戦争を求めない。

本来ならば、相容れない両者であったが、七海は一つ妥協した。

「存分に戦い終えた後なら、始末しても宜しいですか？」

中枢棲姫に確認を取った。

彼女は、戦う相手は他にもいるから、邪魔立てをしない彼女の采配に素直に頷く。

「貴様の配慮に感謝するぞ。ならば、我は勝手に楽しませて貰おう。後始末は任せろ。好きにせよ」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて」

七海は全員に通達した。それは、選んで、捨てた者の違いだ。

七海の中では、対象の天秤はもう、決まっている。

他者には一切の容赦がない。異常者特有の極端な思考で。

嘗て、自分の為に尽力してくれたものたちをも、いとも簡単に切り捨てるのだ。

嘗て、自分が全力で守ろうとしたものたちをも、呆気なく未練なく諦めるのだ。

だって、彼女たちは七海とは道を違える存在だ。

自分の糧にする以外に、道はあるのか？

言えば共に来るのか？　そこまで慕ってくれているのか？

（有り得ない……。あたしは、所詮嫌われていた。だから、どうせ敵になるだけ。あたし

が護りたいのは、皆だけ。鎮守府の皆は殺りたくないけど、邪魔になるなら……。消そう）

本音で言えば殺したくなどない。

だが、殺さないと障害になるなら……。仕方無いじゃないか。

他に、洗脳しても時間が足りない。説得するにも言葉も足りない。

選んだのだろう？　だったら、迷うな。引き摺るな。

（あたしは、人間には従わない。邪魔になる奴等は全部殺すのです。たとえ……。以前の

仲間だとしても）

そう。七海には、もうみんながいる。選んで一緒にいるみんながいる。他には何も必要ない。他の全ては踏み砕く。

(さて……あたしの戦争を始めましょう。あたしが生きるための戦いを……自由と、未来と、愛のために!!)

愛を謳おう。悲鳴と共に。濁りきった、穢れきった、腐りきった泥の華を添えて。愛を紡ごう。鮮血を浴びて。砲火を放ち、肉を切り裂き、頭蓋を砕いた海の上で。

七海は生きる。深海に交わり、適応して。

憎しみを飲み干して愛に昇華し、己の感情の赴くままに！

(邪魔な人間などあたしには要らない。消えてしまえ、あたしを阻む人類など!!)

戦いは始まる。決戦と言う、目に見える形で……。

作戦はこうだ。

中枢棲姫は予定通り、戦力を集めて派手に行動する。

彼女も欲望の赴くままに、暴れさせる。

それ自体を邪魔する気はないし、七海のやり方は別にあつた。

聞けば、どうも中枢棲姫を殺すために海外の最終兵器と一緒に防衛する気らしい。

ならば、丁度良さそうだ。

(奇襲しましょう)

陽動として、中枢棲姫の戦争を利用させていただく。

七海は、裏をかく。そう、普通の深海棲艦は選ばない、裏切り者だから出来る戦術。

——陸路による、鎮守府そのものの襲撃。

陸から堂々と、桜庭がない姫園鎮守府を襲撃し、壊滅させるのだ。

外では決戦をしているだろう。七海は裏から、港である鎮守府を破壊する。

確実に桜庭はいない。何故なら、桜庭は出ていないと中枢棲姫が陸を侵攻する。

本人にその気はないが、人間にはそんなものわかるはずもない。

無視できない相手を表に出して、本当に危険な外道は陸から皆の居場所を破壊するのだ。

当然、鎮守府の皆は必死に抵抗するだろう。だから、殺さない。

人質にして、桜庭殺害の囮にさせて貰おう。

彼女は艦娘を愛している。故に、そうすれば傷ついた身体を引きずって、応じるはず

だ。

全員に、聞いた。万が一には、嘗ての仲間を殺せるかと。

迷ったりしている村雨以外は、全員が頷いた。

だが、五十鈴は口を挟む。

「……待って。少なくとも、古鷹や衣笠は説得できるわ。知っているから。七海が逃げ出したこと。可能性は無視できない。人間に対しての不信感はあるはずよ。だから、五十鈴に任せて。川内は多分無理だから倒していいと思う」

重巡たちは、七海の味方であった。五十鈴が言うには、説得も視野にいれたいと。

由良も賛同するので、そこは任せる。他の艦娘は、どうも七海が逃げたことを知らない。

死んでいると思っっているようだし、だったら倒すついでに真実も語ろう。

邪魔しかされない人間の言いなりにはもうならないと。

七海は既に人類を諦めた。こんな連中などどうでもいい。

敵になったから、殺すだけ。シンプルな理由である。

七海の居場所を、七海は自分で壊すと決めた。

もう、人間には戻れない。艦娘にも戻れない。

皆の幸福は……深海にあったのだと気付いたから。

人類の隣には、深海棲艦は居られない。艦娘も居てくれない。逃げてしまった以上は、奪うしか手段はない。

村雨も臆て、諦めていた。七海はこういう人物だし、全ては皆の幸福と未来のため。何より、愛しているから、身を呈して庇い続けた結果がこの果てだった。

その気持ちには嘘はないし、一寸の計算もない。

純粹に愛してくれている。好いてくれている。

方法はもう、これしかない。交わらない存在は争うしかないのだと。

「もしも、自分が死にそうになったら、殺しなさい。如月にあの時命じたように、あたしが悪いんです。皆は悪くない。遠慮などしないで。迷いもしないで。命を狙う以上は、狙われると思ってください。あたしたちは、深海棲艦と同じになった。そうしないと、迫害されてきたんです。生きる場所は此処だけ。人間は、大半が敵。あの娘たちはその敵を守る艦娘と深海棲艦。……交わらないあたしたちは、自分のために奪うのが道理です。必要なら殺りなさい。あたしが、許します」

何人か死のうが最悪、最低限残ればいい。憲兵は皆殺しでいい。

わざわざ、陸上でも使える様に、小さい艦装は作つてある。

拳銃や鈍器など、強い艦娘には通用しないが幸い小規模鎮守府のあの場所なら十分だ。

もしも決戦に出払っているなら、尚更良い。数少ない艦娘を全員捕らえてやる。

人間の装備は、既に効果がない。それほど、染み渡った憎しみがこの身を焦がすのだ。勝てる。人間相手なら、陸上の艦娘相手なら、勝てる。

長のいない鎮守府など警備のいない軍備施設と大差無い。

奪い、壊す。鎮守府を。人類の要塞を。

それが、七海の立てた恥知らずの作戦内容。

人類に対する、反逆の印。

居場所を迫害され、追いやられた者の怨念返しであった。

「準備は良いですか？ 予定日は一週間後。時刻は……ぐらいです。詳しい日程を教え

ます。手際よく制圧しましょう」

元々自分の請け負った鎮守府だ。

どこに何かあるかは最低限覚えていて。

緻密に計画を練っていく七海と一同。

決戦は、一週間後。

桜庭も決意しているとは知らずに、二人の間には……最早、戦争しかなかったのだ。た。

時は流れ。

姫園鎮守府は、喧騒に包まれていた。

とうとう中枢棲姫が現れた。夥しい数の深海棲艦を従え、日本を目指している。

直ぐ様最終兵器全員に抜錨命令が出た。規模は超規模で、史上最悪と言われる次元であつた。

桜庭たちは、全員が慌ただしく出ていく。

周辺の警備を、艦娘たちに任せて深海棲艦たちは遠距離で航空支援を開始する。

「行くわよッ!! 旗艦、大和……抜錨!! 出撃するわっ!!」

最強の最終兵器、大和に続いて海に出ていく世界有数の怪物たち。

世界史にも稀な規模にたいして、惜しみ無く投入される過剰戦力。

当然の判断だが、それが罠とは知らないまま。

手薄になった鎮守府に、先んじて上陸していた悪魔たちの、魔の手が忍び寄っていく

……。

航空支援をしている以上は、足元はお留守になる。

無理矢理偵察機を飛ばしているリングが、真つ先に異変に感付いた。

(んえ……なんか、変なのがいる?)

上空から撮影しているのだが、陸路に何やらマントらしき物体で、身を隠す連中が鎮守府の方向に向かっている。

何ぞや? と思うが、生憎リングはそれを、人間のファッションと勘違いした。

深海棲艦ゆえ、文化に疎い彼女はあれは一種のコスプレなる物ではないかと思った。

実際、姿は変人だが何かしている訳じゃない。たまたま移動しているだけかもしれない。
い。

怪しいだけでイチイチ報告できないと、決戦の空気に飲まれて無視した。

一方。

(……やっぱり。偵察機は陸路には反応しない)

七海がリーダーで、その動きを追っていた。敢えて全員が、マントで姿を隠して移動する。

近頃の人間は多少怪しい動きをしても、実際被害がないなら気にしない、我関せずの空気が強いのだ。

変人とか変態と呼ばれる事案であっても、警察さえ気を付ければ、怪しいだけでなにもされない。

事実、近くに来るまでは普通にしていた。一定の距離で、マントを羽織り走って鎮守府に突撃する。

「……反応鈍そうね」

五十鈴が、近辺の空き家から顔を出して、双眼鏡で鎮守府を偵察して呟く。

鎮守府は至って通常の勤務のようだ。

決戦は遠い海の上。鎮守府は、平和そのものと言うように。

「所詮は平和ボケした憲兵です。ここから仕掛けてくるなど想定しない」
広域電探も、機関部のない艦装には反応しない。

武器として持ってきた陸上の装備。備えている通常艦装は、万が一の保険だった。海上で仕掛けてきたときの為に備えたもの。今回は襲撃がメインである。

なので、全員かなり武装は分厚い。

七海はバカにするように笑っている。

決断してからの七海は悪魔のように冷淡で、冷血で、冷酷であった。

人間の危機管理の低さに嘲笑うように言うのだ。素人が思い付く方法で打破されて情けないと。

ここまで衝突も無しにきた。順調すぎて怖いほどだ。

後は、迅速に制圧するだけ。白兵戦による、室内での戦い。

「ママ、あたし……頑張るよ!!」

「七海姉が望むなら……弥生も、迷わない」

「司令官の敵は如月の敵。誰であろうが、殺しちゃうわ」

淀んだ瞳で、決意を新たに娘と妹と嫁が言った。

嬉しそうに、七海は愛していると言いながら笑顔で抱き締めた。

「……!」

「三人もいるのよね……。バカな連中。この人を選べばよかったのに」

七海はヤル気満々の静香とサムズアップして、吐き捨てるリセを宥め。

「ご主人様。ご命令を。わたし、何時でも行けます」

「村雨も……気乗りはしないけど……。でも、これが今の世界だから……」

「淫乱メイド。何時までも迷わないで。だからお前は淫乱なのよ。ねえ、お嬢様?」

「そうです。人間の男に未練があるから迷うんです。このスケベメイドは、本当にえつちで困りますね小春」

「淫乱関係ないわよね!!? って言うか、人間の男って何!!? こちとら経験ないですけど!!? 健全ですけど!!? 毎度何なの二人してその言い掛かりはツ!!?」

くよくよしている情けないスケベメイドに活を入れると、逆に殴られた。

妹の春雨は迷わず七海の言うことを聞くのに、悪いメイドである。

「これも村雨イドの愛の形!」

「アホかあ!! こんなバイオレンスな愛の形とか村雨がお断りよ!! 毎回何で喜んでるわけ!! マゾ!! マゾなの提督はツ!!」

村雨イドのパンチを受けて喜びの悲鳴をあげる七海。

マゾなのだろう。淫乱メイドは哀れ、変態ご主人様の言いなりなのである。

「……ああ、こうやって七海は変態となつていったのね。村雨のせいで」

「由良も最近、七海ちゃんが変態になつた時期を思い出したけど……村雨ちゃん来た辺りから加速してなかつた?」

で、姉二名にも疑いの眼差しを受ける村雨。

慌てて否定するも疑惑は晴れない。なぜだ。

この面子の中では常識人で苦労人のポジションなのに、何故淫乱エロメイド扱いを受

ける。

「そんなもん、村雨イドの構成する全てがエロいからに決まっているでしょう」

「もう提督は喋るなアツ!!」

とりあえず殴る。緊張を解すためにネタにされた可愛そうな村雨は黙るまで殴る。

涙目で殴打されたが、七海は懲りない。

「ふはは、痛かろう……実際痛いのはあたしですが。無事に帰ったら村雨の制服を新調しましょうか。取り敢えずどこぞの闇落ち御曹司よろしく、漆黑と黄色の配色に……」

「どこの鉄面皮だ!!」

グーで頭を殴られて、変態は沈黙した。

頭から湯気を出してるが、その内復活するだろう。

荒い息の村雨は散々ネタにされて別の意味で疲れた。

大事なときにこの変態は自重しやしない。

兎に角……作戦を、開始する一行だった。

答え

作戦は至ってシンプルだ。

憲兵は皆殺し。艦娘はなるべく捕らえる。

無理ならば始末も可能。情けと躊躇いは捨てる。

最強の怪物は居ないのだから怯む理由もないのだ。

全力で、迅速に、外部に漏れる前に。人間は等しく皆殺しに。艦娘は各自に任せる。

「行きますよ」

人間しか想定しない憲兵は恐れるに足らず。

七海の声に頷いて。

それぞれ武器を構えて、マントを被った彼女たちの、作戦が始まった……。

細かいことなど考えない。

軍事施設の近くなど民間人は居ない。

要するに外部には逃げられない。助けも呼べない。

真つ先に七海がマントを翻して突撃する。

残像の見える瞬発力で、警備をしている門番をいきなり真正面から、勢いをつけて蹴り飛ばす。

正門に汚い血の飛沫とゴキブリを叩き潰したような音を、二人いた門番は聞いた。

聞いただけで、対応はしない。後続の如月が、新装備のカットラスで、豪快に頭を叩き割った。

反応する前に、接近した二名による制圧。スイカを割るような気持ち悪い生音をさせ即死。

さつさと二人は侵入して、支援する弥生と山風、メイドたちが続く。

最後尾のリセ、静香は目撃者がいないように見張りつつ、手早く死骸を回収して、適当に隠す。

初手は二名が機動力を武器に近寄って殺害する。

警報を鳴らされる前に、春雨と村雨が、機械系統を麻痺させる。

彼女に教えられたブレーカーを探して、落とした。

鍵などは強引に破壊して、どんどん進む。

憲兵の詰め所に侵入。何事かと驚く前に、全員を数秒で皆殺しにした。

斬殺と、撲殺。切り殺して、殴り殺す。

出来の悪い映画のような惨事をぶちまけて、進んでいく。

内部では停電か？ とお留守番の艦娘たちが騒ぎに気付かず復旧を待っていた。

こういう場合は、憲兵が何とかするのがいつものこと。

悪い意味で平和ボケしていた。

その間に制圧は広がる。悲鳴をあげることなく憲兵は暗殺され、沈黙する。

あまりの機動力に、人間の感覚では七海も如月も追い付かない。

陸上だとしても、圧倒的な加速は健在。地力が違うのだ。

呆気なく詰め所を制圧して、個人行動に切り替えて散り散りになった。

後は警備に歩き回る連中を襲って殺害していく。

如月と春雨を引き連れ、電探を頼りに気配を探って片っ端から殺していく。

手早く、瞬間的に殺すため悲鳴をあげる間もない。静かに死体を増やしていく。

気分は暗殺者のようなもの。七海は気にせず、血塗れのマントを纏って暴れていく。

艦娘たちはそれぞれ過ごしているが、電探で察知されているので動きは丸わかり。殺した憲兵から奪った無力化用の装備を使って、闇討ちして確保していく。

意気消沈している者もいた。手分けして殺して、倒して、捕まえて。

配属する人数も少ないからか、憲兵もこう見ると少ないものだ。

ものの数分で、大体大騒ぎにならずに終えてしまった。呆気ないものだ。

内部構造を知り尽くした七海が相手だ。

工廠などの人の多い場所は避けていたゆえ、最低限の鎮圧は知られずに完了。

捕まえて気絶している艦娘たちは、適当に部屋に放り込んで、放置。

七海は工廠に向かい、如月たちは執務室に、春雨たちは食堂に向かう。

それぞれ、大本営の遣いである大淀、明石、間宮を始末するためだ。

この三名は必ず殺せと七海は言った。

通じている艦娘は敵でしかないので、確実に殺れと。

数回、悲鳴が聞こえたがすぐに止む。厨房が、執務室が深紅に染まった。

工廠では、明石を殺し終えた七海がなんと妖精まで片っ端から捕まえて、釜茹でを通り越して灼熱地獄に落とすように、溶鉱炉に妖精を一人で放り込んでいた。

結構な数の妖精が襲撃に右往左往しているうちに踏み殺されて、握り殺され、叩き殺され、蹴り殺され、逃げ惑う彼らを皆殺しにしようとしていた。

「おめえ!? 一体何のつもりだ……ぐわあ!」

散々今まで揉めてきた髭も犯人に気付いて叫ぶが、まるでハエ叩きで人間が鬱陶しいハエを殺すように、七海が問答無用で楽しそうに笑って蹴り飛ばし殺害した。

赤黒い染みになって、髭は死んだ。

烏合の衆とはこの事か。予想できない襲撃に戸惑ううちに、彼らは全部居なくなつた。

残つたのは惨劇のあと。猛獣が餌を食い散らかした、血祭りの阿鼻叫喚。

そしてマントを捨てて、大嫌いだつた妖精を皆殺して憂さ晴らしした、含み笑いをし去っていく一人の少女の姿だつた……。

一時間後。特に外部に漏れることなく、制圧完了。

留守の間に、憲兵は25名程殺して、艦娘は一先ず全員確保した。

但し、深海棲艦が外で航空支援をしていたらしく、リングが気づいたような素振りを

して騒ごうとしたので七海が、三人纏めて蹴つ飛ばして気絶させた。

で、捕獲された。手元に集中していたせいで後ろの反応に遅れていた。

現在、大淀の死体を溶鉱炉に捨ててきた七海が、解体を経験して嫌そうにしていた。

人間も熔解できると、死骸は全部溶鉱炉に投げ捨てた。これで取りあえずは時間を稼げる。

監視カメラも全部回収して投げ込んで、執務室の器機も無線以外は破壊した。

スイッチを入れてみると、戦場の桜庭が支援が来ないと文句を言っているが、此方には戻れない。

中枢棲姫が全力で暴れている以上は、穴を空けられない。

で、久々に戻ってきて提督の椅子に座る七海は上機嫌であった。

目の前には、捕縛されて黒い鎖で縛られ、口にはガムテープをされる艦娘たちが、床に転がり七海や嘗ての仲間を見て驚愕して、混乱していた。

なぜ生きている。なぜ襲われた。なぜ捕まえる。なぜ憲兵を皆殺しにした。

様々な分からないことを表情で浮かべるが、七海は椅子に座って、皆を眺めていた。

見張りをする如月たちに外を任せて、五十鈴と由良を連れて漸く口を開いた。

「お久しぶりですね。元氣そうでなりよりです」

本物の七海だと知るや、何やら叫ぶように抗議を始める一同。

怒りや憎しみ、悲しみを浮かべては七海に聞こうとしていた。

「戻ってきたのは、言うまでもない。桜庭さんを殺すためです。皆には、人質になってほしいんです」

今までの経緯を説明して、最後にそう纏める。

皆はまだ騒ぐ。試しに、嘗ては仲が良かったヴェールヌイのガムテープを剥がすと。

「七海ッ!! 何てことをしたんだ君は!! 人を殺したんだぞ!」

「ええ。だからなんですか?」

怒りよりも困惑するヴェールヌイに、涼しい顔で七海は聞き返す。

害があるから始末した。それが何か問題でも? そう聞いたのだ。

愕然とするヴェールヌイ。七海はもう、殺人に躊躇いがないと彼女も理解したようだった。

七海は立ち上がり、ヴェールヌイに近寄る。恐怖で悲鳴をあげるヴェールヌイに、七海は聞いた。

『怖い? あたしが、怖いヴェールヌイ? でもね……あたしをこんな風にしたのは、あ

の連中。人間の悪意には、もうたくさん。ずっと、我慢してきたんだから……殺しても、良いでしょ?』

ロシア語で語りかけると、日本語で叫ばれた。

「ぶざけるな!! その気持ちは確かに分かる、けど殺してなんになるんだ!! 無関係だろう!!」 個人を見ると私に言った七海が、なぜそんなことを決めつける!!」

個人的に恨みがないのに殺したのは何故だ。

そう問われて、七海は個人的に邪魔になるから無関係でも殺したと言った。

個人を見たさ。自分と言う個人を。

その結果、人間は個人的に邪魔だから見境なく殺したいと思っただけだ。

だから、個人的に邪魔になるなら、ヴェールヌイも殺すとあらかじめ言っておいた。

「ひい!?!」

「……楽に殺してあげますよヴェールヌイ。ただ……折角戻ってきたのです。殺すのは……したくないんですよ。暴れないでください。もう、加減ができません。選んだ以上は……もう、止まらない。ヴェールヌイ、お願いです……静かにして。あるいは、一緒に来て。それが、あたしの本音です……」

……初めてであった。

七海は、ヴェールヌイに向かって、懇願するようにお願いしていた。

笑顔だったのに、今は凄く辛そうに、苦しそうに、悲しそうに表情を歪めて言い続ける。

自分でも決めたからには、足は止めない。止められない。

好きだった皆を殺したくはないから、大人しくしていと。
あるいは、一緒に来てくれればなにもしない。

持てる全てを行使して、必ず守ると。七海は皆に言うのだ。

桜庭さえ居なければ、後を追う者も取りあえずは消えるのだ。

平穩に過ごしたい。だから、最初で最後の攻勢に出た。

追いかける敵を始末したら、大人しく帰るから、逆らわないでと。

最後には、七海は……皆の前で、一筋の涙を流していた。

七海が、初めて、泣いた。泣いて、お願いしていた。

殺したくない。離れたくない。失いたくない。

未練を浮かべて、それでも選ばないといけない。

決めているからこそ、行動しているからこそ。

元々の提督として、仲間を消したくないのが本心なのだ。

五十鈴が七海を抱き締めて、首を振った。七海は、五十鈴の胸を借りて、泣いていた。

嫌なのだ。殺すと決めたはずなのに、寸前で迷う。躊躇う。

好きだった艦娘と深海棲艦を殺そうとする自分を止めたくて。

けれど、甘えはついてきた皆を不幸にするから、躊躇できない。

七海は葛藤しているように、静かに泣いていた。

「……ねえ。七海は、頑張ったわ。もう、この娘は限界なのよ。これ以上は、人の側には居られない。これでも妥協して、我慢して、必死にやって来た。……あんたたちは、誰に従うの？ 七海？ それとも……人間？」

五十鈴が皆に聞いた。

七海は七海で、限界を超えている。その結論が逃走だったと。

好きにすればいいと、五十鈴は言った。同時に。

「歯向かえば殺すわ。五十鈴が、代わりに。七海を苦しめる人間に味方するなら、あんたたちも敵よ」

由良も頷いた。深淵のような深い闇を湛えた二人に睨まれ、彼女たちは暫し考える。

真つ先に返答したのは、衣笠だった。むーむー言うので、ガムテープを剥がすと。

「……良いよ。衣笠さんは、七海につく」

衣笠は、唾然とする周囲を尻目に、七海についていくと言い出した。

真意を確認すると、衣笠は言うのだ。

「何だかんだ……やっぱり、心の何処かで引つ掛かりはあるの。七海をあんな風にした連中の言いなりになるのは。ほら、衣笠さんは七海の味方だったからさ。今の涙を見て決心できたよ。七海、衣笠さんも七海と生きるよ。安心して、もう……泣かなくて良いから」

衣笠はそう、苦く笑つて七海に言った。

彼女もいつも目立たないが、七海を見守った姉だった。

置いてけぼりにされて、寂しかったし、当然戻ってくれば嬉しい。

一緒に良いと言うならば、愛想もないし、七海につこう。

衣笠の拘束を五十鈴がほどいた。彼女は本気だと目を見て思ったからだった。

更に続く、七海に味方する艦娘たち。

「七海さんが泣き出すのは初めてですよね？ 私、泣いてるのは見たくないです。だから……古鷹も、ご一緒に良いですか？」

古鷹も。

「……疑問があつたんです。人間を守る自分自身に。けど、漸く答えが出ました。私も、行きます……共に」

羽黒も。

「オツケー。ななみん、鈴谷もそつち行つても良いよね？ ほら、鈴谷はななみんの友達じゃん？ 覚悟は決めたよ！」

鈴谷も。

「ん……。ぶっちゃけさ、元帥つて厳しくて息苦しいんだよね。ねえ渋谷、そつち行けば夜戦し放題とか特典ない？ あつたら私も行きたいな。正直、今の鎮守府の空気も嫌い

だしさ」

意外に川内まで。

まさかの親しい艦娘全員裏切りコースだった。

そして、他にも。

「真実を知ったから……もう、あたしも迷わない。お姉ちゃん、あたしも行く」

イムヤも、一緒に来てくれた。

何だかんだ、彼女も仲良しだった一人。

結局、結構な数が七海個人に味方した。

言葉を失う周囲に、解放された彼女たちは、本当に人間を見捨てるらしい。

……説得に応じない艦娘たちと、何やら考えている深海棲艦。

果たして、彼女たちの答えとは……。

ごめんなさい

七海は何度でも言った。殺したくない、殺したくないと繰り返す。

無情にも時間は過ぎていく。そろそろ戦場の桜庭が事態に気付く頃合い。

周辺の人間は皆殺しにしたため、応援は来ないがそれも限界がある。

果たして、彼女の願いは……。

「……降参します。提督、私はあなたの配下に下りましょう」

聴て。

一人、改めて名乗り出す。……山城だった。

ガムテープを剥がされて、彼女は深い溜め息をついた。

「分かりましたよ。私はあなたの言うことを信じます。ですので、拘束をほどいてくだ

さい」

山城が、そう五十鈴に求める。

怪訝そうに五十鈴は聞く。なぜ、応えるのか？

「簡単なことですよ。私を、戦艦として扱ってくれて、重宝してくれたのはそこにいる彼女だけです。私と姉様を、戦艦として期待してくれたのも、彼女だけ……。なら、艦娘としては、期待してくれる人に従いたいんですよ。一度も欠陥戦艦と呼ばずに、艦娘として接してもらった以上は、私は恩義だと思いません。この身に降り注ぐ多くの不幸がありました。けれど、七海提督と会えた事は、私にとっては最大の幸運だったと感じています」

山城は、姉にも聞いた。七海は信頼に値する。信じてみる気はないかと。

扶桑は暫し沈黙し……。そして、首肯した。

信じようと、扶桑も言った。

「毎回毎回、何故か大型トラック扱いされましたが……。でも、活躍の場を与えてくれたのも、彼女だけででしたね……。じゃあ、私も信じましょう。渋谷さん、不束者ですが、これからも宜しく願います」

七海に味方する、と言うよりは七海の信じることを選んだ二人。

戦艦たちも裏切り、唸って抗議する駆逐艦。何故だと聞きたいようだった。

「……逆に聞きますが。元帥が来られてからの鎮守府の空気は、どうでしたか？ 私は

……辛かったですよ。だって、元帥は……強すぎるんですもの。艦娘の出番など無くても良いくらいに」

山城は解放されて立ち上がり、転がる皆を見下ろして言い出す。

理由は、単純明快。桜庭は、強すぎたからだった。

同じ戦艦にしからないと、山城は皆に心境を吐露するように言った。

「あの人は、大和……日本最強の戦艦よ。しかも、私たちが出来ることは全部完全に上位互換で行える。その劣等感が、分かる？ 惨めになる気持ちだが、あの人は分からなかった。私達には優しく接してくれたわ。それは認める。けどね、それは自分が守る艦娘として。同じ戦場を戦う戦友じゃない……庇護する対象だったわ。そんなの、言葉で否定されるよりも辛いじゃないツ!! あの人は一人いれば、私も姉様も必要ない!! 戦艦としての出番すら、元帥は与えてくれなかったツ!! 悪意がない方がね……私には、余程精神に来たわ。優秀すぎる、文句の言いようがない精神に、無敵の強さ……。もうね、あの人はいない方が正直私は良かったのよ。自分の存在価値すら見失いそうになっていたから……」

それは、山城の苦しみだった。

欠陥戦艦と呼ばれた彼女を、戦艦としてではなく、守る人間と同じカテゴリーに桜庭は扱う。

彼女は腐つても戦艦。その気持ちをも、桜庭は考えなかつた。自分がやればいいから。優しさと言う心の暴力を、山城はずつと受けてきた。劣等感を分らない桜庭の存在を疎んでいた。

「それに比べて、七海提督はどう？ バカだし、人の話は聞かないし、暴走するし、変態だし、狂っているし、変態だし、どうしようもないけど。でも、歪んでいるから、私を求めてくれたの。必要としてくれた。戦艦として当てにしてくれた……。無意識に後ろに下げている元帥よりもずっと、私は信じられる」

「なんで変態を二回言った」

五十鈴の冷静なツツコミにも負けずに、山城に代わり扶桑も言った。

「そうね……。何故か五十鈴さんと一緒にトラックみたいな感じで毎回言われたけど、なんだかそれも慣れれば気にならなくなつたわ。一種の愛称みたいなものだと思うの。だつてほら、親しい人しかそういう事を渋谷さんはしないから。五十鈴さんが良い例よ。元帥は、真面目で良い人だけどコミユニケーションも堅すぎるのよ。ただ、部下としてしか接しない……。味気無いものだった」

苦笑して、彼女は愛嬌も七海の方があつたゆえ、共にいても苦しくないと言うのだ。要するに二人して慣れていくらしい。

「……七海、あんた帰つたらお仕置き」

「何ですか……」

ベソをかく七海のせいで、未だにトラック扱いが抜けない五十鈴。

あとでお仕置きしておくとして。

更に、あまり関わりのない空母も一名、何か言いたそうにするので剥がすと。

「提督……。あの、ついていけば、ちゃんと艦娘として扱ってくれる？」

「……善処します」

ぐすつ、と鼻を吸る七海に聞いたのは、飛鷹だった。

飛鷹はそれを聞いて、何故か安堵していた。

「そう……。元帥の知り合いつて言うあのアメリカ戦艦は恐ろしくて、生きた心地がしなかったのよ。あいつが戻ってくるくらいなら、私も此処を出ていくわ。正直、あの色物達の近くにいるのもう嫌。神経が磨り減る」

飛鷹は結構勝手な言い分だった。

桜庭がつれてきた、というか押し掛けてきたアイオワたち海外の最終兵器を嫌がった。

飢えた獣みたいな艦娘で神経質になるので、もう我慢できないらしい。

必要とはいえ、あんな獣を預かる鎮守府など我慢できないと言いつ出した。

「良いわ。私も、どうにもあの元帥のやり方は気に入らない部分もあったの。全部出番

奪つて、一人で片付けるし……。あの人一人で事足りるなら、私が居なくても良いじゃない。それよりも、求めてくれる提督と共にいきましようか。まあ、そうね……。約束して、提督。無益に人間を襲うのは止めてね。こんな大事は何度も経験するのは、ゴメンよ。私は人類と戦争する気はないし、適当に生きていければいい。少なくとも、艦娘の使命を奪う彼女よりは、あなたについていった方がまだ、意味がある人生だと思う。だから、約束するなら一緒に行くけど？」

「……。襲つてくれば、殺しますよ。それに、物資などを奪う場合も……」

飛鷹の提示する約束は、難しいと素直に七海は言った。

襲われれば殺すしかないし、生きる物資は襲つて回収するのも手段だ。

「うーん……。前者はともかくも物資はほら、方法はあるわ。そういうのは、深海棲艦の補給艦を仕留めればいいじゃない。追々考えていきましょ？」

と、前向きについていくと飛鷹も、桜庭の周囲が嫌で逃げ出すと言う始末。

最早、二極化している。抵抗する大半の駆逐艦、空母。

対して裏切り上等の不満を持っている艦娘で。

そして、尤も肝心の……。残された深海棲艦はと言うと。

考えていたようだが、しばらくしてから訴えるようにモゴモゴ言い出した。

五十鈴が先ず、パクチャーから外す。

「私もねえ……あの恐ろしい怪獣達が来てから、何度か死ぬのを覚悟したわあ……。だって、あいつら私達を……単なる深海棲艦という目でしか見てくれないものお……。捕虜みたいなの、そういう感じだったわあ。滅茶苦茶怖かったのよお？ しかもアメリカ戦艦はマジで殺しくるし……。人間って、受け入れてはくれないって、改めて感じたわあ」

パクチーの言う通り、平穩と平和を求めて降参したのに、連中は懐疑的に見てきた。仕方ないとはいえ、一名は本当に殺すつもりで襲ってきたようだ。

パクチーは言う。結局桜庭も、人間に過ぎないのだと。

真に敵意なく、偏見なく接してくれるのは七海しか居なかったと。

これが、先ほど川内の言っていた今の鎮守府の空気というもの。

七海で慣れている皆が嫌がる空気の、殺伐とした乾燥した空気だという。

続いて、リングも愚痴る様に七海に言い出す。

「いや……確かにさ、うちは旨いもの食いたいけど。あの明らかに何かしらしたら、直ぐ様ぶつ殺すみたいな目で睨まれて食い物の味が楽しめる程、うちは鈍感じゃないから……。旨いもんだって不味く感じるよ。勘弁してよ……。これじゃ、あんたがいる方がずつとうちは良かったよ？ 戦いがないだけで、環境悪化してんじやん。寧ろ餌になつてんじやんうちら」

リングも、深海棲艦として最終兵器たちに気圧されたり、居心地の悪さを感じていたらしい。

求めている環境とは全く違うと、文句を言っていた。

「……楽しんでそうな鎮守府というのは、七海さまがいた頃の鎮守府でした。今は、ただ……怖い。わたくしも、ただ……怖かった。これが、人々が言う、平和な世界なんですか七海さま？ わたくしが艦娘の頃よりも、もつともつと肩身が狭い現状だったのですが」

翔鶴は逆に聞く。こんな現実が、平和と言うのか。楽しいと言うのか。

七海は否定する。少なくとも楽しくはないだろうと。

翔鶴は、だつたらと口を開く。

「七海さま。どうか、わたくしもそちらに行かせてください。わかつたんです。楽しいと思える時間は……平和と言える時間は、皆が笑顔でいられる場所だと。それを作り出すのは、七海さまだけだと。ですから、もう一度共に参ります！」

リングも翔鶴に乗った。

「せめて、安心して飯を食べる時間がほしいよ……。あんなさあ、神経尖らせて飯食うのはもう嫌だったの。じゃ、うちもそつちいくよ。少なくともレトルトの食い物はあるんでしょ？ カップ麺とか」

「備蓄ならあります。パオーとか」

「パオー!! あれじゃん、パスタの一番高いって話の!! わかった、うちも行くから食わせて!!」

リングゴは食べたかったレトルトの食品があると聞いて目を輝かせて飛び付いた。割と現金なやつだった。

「提督う……そつちつて、平穩?」

「そ……そ……は」

「じゃ……それがいいわねえ。もう、あんな風に突然化け物に襲われるより、絶対助けてくれる提督のそばの方が安全だし安心だし……」

パクチャーも、襲われた経験がイヤになり、逃走。七海の住み処に来ると言い出した。

結局、説得には数名、特に駆逐艦が応じなかった。時間もあまり無さそうだ。

ぎやあぎやあ騒ぐ彼女たちを見つめて、七海は臆て……大きく息を吸い込んだ。

深呼吸して、ついていくと言った皆に、こう言い出した。

「皆さん。人質の演技をお願いします。余裕も無くなってきたので、そろそろ次に進みますので」

「!?!」

七海は、五十鈴と由良に言った。ケジメは、自分でつけると。

二人も、決心した七海を見て、返事をしてから……持つてきた、大きな拳銃を渡した。

人間の目玉が埋め込まれた、漆黒の拳銃。表面には血管が走り、脈動している。ギョロっと動いたそれを見て悲鳴をあげる残された艦娘。

皆に、執務室から出ていけと命じて、再び全員の口をガムテープで塞いで、七海は向き合う。

ぞろぞろと出ていく皆は、これから最大の悲劇が起ると予感していた。

時間は有限。遊んでいる暇はない。

嫌な予感に皆が泣き叫ぶ。嫌がるように、暴れだすのを七海は立ち去った後にドアを閉めて見ていた。

「作戦を変更します。皆に演技をお願いして、それで間に合いそうなので……」

決心した七海は、目玉が動く拳銃を逃げ惑う皆に向けた。

悲しそうに、だがもう迷いはない。

皆は止めてと懇願するも、七海は表情の抜け落ちた顔で告げる。

「もう、遅いです。応じる気がないなら、殺すと言ったはずでしょう？ 皆さんには、あたしの糧になってもらいますよ。もう、あなたたちは……あたしの好きだった艦娘じゃない。ただの、害ある敵なのです。始末、しないと」

言っていたことを執行するだけ。

七海の言い分は、変わってない。応じないなら殺すと言った。

だから、もういい。必要のない連中は……こうする。

「ごめんなさい。あたしの邪魔になるから、全員死んでください。ごめんなさい。もう、皆はあたしには要らない。ごめんなさい、あたしにはこうする責任があるから。ごめんなさい……ごめんなさい……」

何度も謝る。何度も謝り、涙を再び無表情で流しながら。

数回、引き金を……黙って、引いたのだった。

最終覚醒

(なんで殺したんですか。なんで守りたいのに殺すんですか)

嗚呼、変わり果てた皆が倒れる。血を流して、肉の塊になってしまった。

見ろ、あの伽藍とした目を。

自分が殺した。自分で殺した。

散々言ったのに。言ったのに。

だって、皆は七海を拒絶したから。

七海は人殺しと罵ったから。

七海をはね除けたから。

七海を化け物と謗ったから。

皆が拒絶したのは、七海がもう、人間じゃないから。

駆逐艦ゆえの幼い感性では、七海は化け物にしか見えないから。

びしびしびし、と妙な音がした。

化け物と暁に罵られた。

怪物と五月雨に泣かれた。

人殺しと電に罵倒された。

皆は涙して七海を責めた。

なんで？ 何で否定する？ いや、否定はしてもいい。

彼女たちは桜庭の采配に不満などない。

大きくて、強くて、頼りになる桜庭を受け入れた。

鞍替えしたわけだ。それも、別にいい。

七海の行動を非難するのも構わない。

めきめきめきめき、軋み始めた。

理由があつても、行為を肯定しないのが普通なのだ。

駆逐艦たちや、空母たちは、最後には恐ろしいのか震えていた。

七海を、異形の怪物のように涙を浮かべた目で見ていた。

正しい。その反応は正しいとも。

血塗れの手を差し伸べて誰が取るのか。

残っていた艦娘は比較的精神が幼い者ばかり。

七海を畏怖するのも当然だろう。

ばきばきばきばき、指輪が自分に根付いていく。

分かってた。分かってたけど……。

(なぜ殺したのですか?)

殺す必要があつたのか。

死なせる理由があつたのか?

(連れて帰ればいい。誘拐すればいい。選べたはずなのに)

でも、殺した。手っ取り早く。

殺さない選択肢を捨てたのは、誰だ。

選ばれなかったのは、七海が異常だからだ。

みしみしみしみし、神経が自分を食い荒らしていく。

駆逐艦達は、マトモだった。空母たちも、マトモだった。

残った艦娘は全員マトモだった。おかしいのは、七海だった。

時間がない? 嘘だ。作戦変更? 嘘だツ!!

怖いのは当たり前だ。逃げられるのも当たり前だ。

皆は悪くない。悪いのは七海だ。七海だけだ。

(あたしが……皆を死なせた。殺した……)

必要だったから？ 違う。邪魔だったから？ 違うッ!!
邪魔などしたか!? 一度でも、あの娘たちが七海を邪魔したのか!?
確かに糾弾されたとも! けれど、それは七海が間違っているからで!!
責められて当然の報いを受けただけで、七海は……愛していた皆を殺した!
自らの誓いを破ったのだッ!! 自分自身の手で!!
ガリガリガリガリ、力が自分を削っていく。

(……………)

可哀想。こんな女に愛されて。

遺体となった皆を、恐怖で歪む目を、七海は閉じた。

何で悲しいんだろう。こんなに胸が張り裂けそうな痛みを伴う。

人間だって沢山殺した。不愉快な害虫を殺すのと、行為は大差無いのに。

何で涙が止まらない。取り返しのつかない過ちを犯した。

分かっていたのに……。殺したくないと言ったのに。

びちやびちやびちやびちや、自分を力が汚染していく。

自分で、やってしまった。愛していた艦娘たちを……仲間を。身内を。

愛しているのにそのまま殺した。愛している者同士で天秤にかけて。

(……………あたしは、地獄行きでしょうね。海で死ねれば、深海棲艦になったかもしれないけ

ど)

遺体を抱き締めて、血塗れになる。ごめんなさい。苦しみを与えるばかりの無能なクズで。

ごくごくごくごく、想いが自分を呑み込んでいく。

涙は枯れない。ずっと、流れる。亡骸となった愛する彼女たちを、そつと横たえる。

悪魔だ。七海は、深海棲艦以上に腐っている化け物だった。

矛盾した行為を行い、優先順位など勝手につけて……。

(こんなこと言える立場じゃないのは分かっています。ごめんなさい……)

この光景は、ずつと脳裏に焼き付くだろう。人生で最大の過ちだから。

悲しみと自己嫌悪、自分への怒りと憎しみと、後悔と疑問。

どうしてこんな道を選んだ？ 戦えば良かったのに。抗えば良かったのに。

もしかしたら、違う未来もあったかもしれないが。ここは、地獄。七海が作った地獄。進もう。今更、止まれない。殺したんだ。自分で。自分で、決断したんだから。

ズキズキ痛む。心も、身体も。

(さようなら、愛していた皆。何時か、あたしを……殺してください)

七海は、物言わぬ皆を置いて、再び立ち去る。

ここにはもう、用事はない。後は、最後の敵を滅ぼそう。

奪えるものは全部奪って。壊せるものは全部壊して。

行こう。血溜まりの道を歩みながら……皆を守る、そんな場所へ。

扉を閉めて、無線機を持ち出し、七海は、執務室を後にする。

その姿の変異に、気付かぬまま。

「如月……？ 何で泣いているの？」

ブーツとしていた如月は、我に返った。

傍には弥生が、不思議そうに彼女を見ていた。

泣いている？ そう感じて頬を触れば、熱い雫が流れている。

左手の指輪が熱い。痛みすら感じるほどに。

（司令官が泣いている……。皆を、殺してしまったから……）

分かる。これは、七海の感情だった。

如月は唯一、指輪で繋がっている。一方の感情が溢れて流れ込んでいた。あらゆる感情が混ざりあつた七海の心は、崩壊しそう。

軋みをあげて、悲しみに吞まれているように、如月まで気づかずに……変異していた。「如月、落ち着いて。泣いてる理由はわかんないけど……。誰も居ないから、その姿にならなくてもいいよ」

宥めるように、武装する山風が如月に言った。

気がつけば、角が生えて色素が抜けて、皮膚がひび割れている深海棲艦になっていた。涙を止められないまま、如月は二人に言った。

「司令官を探しましょう。きつと、壊れそうになつてると思うわ」

意味がわからない二人に、言葉尽くす時間が惜しい。

如月は七海を探す。この悲しみは、癒せるかどうか分からない。

それでも、背負う。如月も、恋をした相手が悲しみに溺れるなら、一緒に溺れよう。彼女だけが背負う罪ではない。如月も背負う罪だ。姉よりも、恋人を選んだ咎がある。

苦しみは、如月にもあるべきなのだ。追いかける二名を置いて、如月は誓う。

（司令官、聞いて。如月は何かがあつても、司令官を愛しているわ。司令官を離さないと言つたもの。選んだ事を悔いているなら、如月が支えるから。泣いても良いのよ。如月

が涙を拭うもの。慰めて欲しいなら如月が何でもする。司令官のために、如月がここに
いる。抱えないで……その痛みは、如月にもあるべきだと思うの。睦月ちゃんを捨てた
薄情な妹が如月。罪なら如月にもある。だから、自分だけを責めないで。如月も責め
て)

自分だつて無実じゃない。

分かりきっている事を今更言つても、慰めになるかも分からないままだ。

それでも、言おう。何度でも。

(司令官は一人じゃない。選んだ、皆がいる。死んでしまった彼女たちも自分で選んだ
道だわ。全ては救えない。守れない。言い訳でも言い逃れでも何でもいい。司令官、如
月を頼つて。如月に甘えて。今度は、如月が司令官を守る。救われた命に誓つて)
どこにいるのか探しながら、懸命に指輪を通して七海に語りかける。

繋がっているのだ。聞こえているだろう。

微かだが、気持ちしが和らいだ気がする。早く見つけよう、そう思う如月だった。

七海は、裏手で一人で準備を始めていた。

だが、その姿は……。

「し、司令官!？」

「ママ!？」

「七海姉!？」

……まるで、最終段階のように。

七海は、完全に変異していた。また、深海棲艦に。

いいや、今度こそ深海棲艦に。

「……何か?」

訝しげに顔をあげる。

その顔は、真っ白だった。

肌色から、血の気を失い純白となった顔色。

紅と茶色のオッドアイは、再び完全な深紅に戻り、質感も見た目もボロボロになった髪は大幅に伸びていた。

地面に引き摺るほどの長さになって、白髪になったそれは、まるで老婆のよう。

極度のストレスで、人間は髪の毛が白くなるという話があるが、今の七海はまさにそれ。

顔中に根つこのようななどす黒い線が縦横無尽に走っており、最大の変化は……ずつと、血涙を流していた。

両目から、常に血を流している。ポタ、ポタ、と一滴ずつ、垂らすように血の涙を流していた。

「司令官!! しつかりして!?!」

「如月……? ああ、見回り終わりですか? ありがとうございます」

角が消えたが、代わりに流血をする七海に駆け寄る如月。

二人も直ぐに寄ったが、億劫そうに七海は言った。

「何かありましたか?」

まるで、自分の変化に気付いていない。

慌てて鏡を探しに行つた娘を首を傾げ、見送る。

如月が怪我でもしたのかと聞くが、首を振る。

手元が血塗れなのに気にしない七海は、弥生に言われて初めて血涙に気付いたようだった。

袖で拭つて、振り払う。

「あら……? 何ですかこれは?」

疑問符を浮かべている彼女に、戻つてきた娘が手鏡を渡して見せる。

変異した七海の姿を。これで、何度目か。

驚く七海は、同時に途方もない事実を言った。

「……戻れない。あたし、人間に……戻れないんですけど……」

それは、ある意味の最終通知に近かった。

三人は、言葉を失った。七海は、人間の姿に戻れないと言っている。

つまりは、何か？

——村雨や春雨と同じで、完全に深海棲艦に堕ちたと言うのか？

「……如月は戻れるのに、どうして？」

事実、如月は今は艦娘の姿になっているのに。

七海は、戻れないと何度も言うのだ。

「弱りましたね……。何ですか、このババアみたいなボロボロの髪の毛。あたしまだ1

6なのに……」

でも、こいつは大して困っていなかった。

ぼやく彼女は、指先で毛先を持って文句を言っていた。

同時に、無理をしているのを如月は気付く。やはり、皆を殺したことで……この姿に

なったのか。

二人は心配させるなど言っていた。嘗ての仲間が死んでも、最早娘と妹には他人とい

う認識のようだ。

七海さえいればいい。依存の強みは、依存先が無事ならば如何なる変化も無視できると言うことだ。

如月は恐々言った。

「司令官……。あの、さっきの事は……？」

「……………。いいんです。拒否される理由はあるので。あたしは、言ったことをするだけ。死人は死人。なにもしません。だから、あたしは前に進んでいきます。あの娘たちの命を奪った以上は、絶対に負けてはいけない。あたしは最後まであたしらしく行く。それが、あたしのやるべきこと」

引き摺っている。如月にも伝わる感情。

多分、七海は凄く傷ついた。それこそ、無意識の変容を起こす程に。

トラウマになっただろうか。如月には不安定になっている気がした。

「……………如月はここにいます。司令官、我慢するなら……少しだけよ？ 何時でも支えるから、安心して泣いて」

小声で、準備を手伝う二人を尻目に、耳元で囁く如月。

七海は、ありがとうと礼を言った。

「……………頼りにしてますよ、あたしの恋人」

「ええ。頼りにして、如月の恋人さん」

深海棲艦に墮ちた七海は、本当に人間をやめてしまった。

見回りを終えて戻ってきた皆に絶句された。

本当に深海棲艦になった七海を、深海棲艦たちは自分と同類に感じると言った。

ならば深海棲艦に至ったのだろうと、七海は結論を出した。

あまり普段と変わらないように見えるが、かなり我慢しているのは全員分かった。

仲間殺しをしたのだ。当然の報いを彼女は自分に与えている。

結果が、完全なる深海棲艦への覚醒。悲しみを抱いたまま、拒絶された通りに怪物になつた。

「でも、もうこれで戻れません。突き進むだけ」

皆にそう言う七海は、無線を入れた。

戦場で苦しむ桜庭に、とうとう宣戦布告をするときが来たから。

固唾を飲んで見守る皆を一瞥して、マイクのスイッチを押した。

「——お久しぶりです。ご機嫌いかがですか、桜庭さん？ ふふっ……本日もお日柄もよく、ですかね？」

嫌味と侮蔑をたっぷり込めて、喋った。

向こうで、凄まじい憎しみと怒りの怒鳴り声が聞こえてきた。

最後の戦いが始まった。もう、後戻りはできない。
壊れても、殺しても、進もう。
自分達の……未来のために。

殺してしまえば呆気なく

戦場は、劣勢であった。

圧倒的物量。最終兵器をもつてしても、此度の決戦は訳が違う。

(何なの、この物量は……!?)

既に応援の通常艦隊はいくつも全滅。

往来する砲弾、爆撃、雷撃を掻い潜り渾身の一撃を一齐に放つも、雑魚が邪魔をして届かない。

10年前とはなにかが違う。なぜだ。今回はこんなに頼もしい味方がいるのに。確かに理由は不明だが航空支援は途切れた。そんなものは今はどうでもいい。

相手の勢力が異常だ。前回の比ではない。規模が寧ろ膨れ上がっている。

旗艦は必死に考える。質は同等。ならば最後の分け目は物量だ。

おかしいぐらい、敵は強い。こんなのは、初めてだ。この大和の力を使っても尚、追いつまれるとは。

(何が起きているのよ!?)

旗艦、桜庭にすら分らない。

中枢棲姫。彼女を殺しえる、数少ない深海棲艦。

まるで、戦い方を知っているように。此方の手札を覗いたと言うのか。

彼女たちは、戦っていく。本土から離れた、遠い海の上で……。

「まあ、勝っても負けてもあたしには漁夫の利なので、関係ありません。確実に殺せるでしょう」

無線を仕掛ける前に、五十鈴が確認するように聞いた。

桜庭に勝てるのか？ と。あの異次元の女には惨敗している彼女だが。

七海はしれっと、皆に言った。

決戦の行方に関係なく、かなり疲弊している状況なら邪魔がいても倒せる範囲だと。

最悪、他の最終兵器も沈めておくといい切った七海は、簡単に説明する。

彼女たちは代償として悪燃費が酷い。それこそ、決戦ともなれば弾薬も燃料も尽きて帰ってくる。

共倒れしてくればいいと言うが、それも無理なので、結局自分で始末する。漁夫の利。まさにそれで、勝手にやったあとに美味しい部分だけ頂いていく。死にかけの桜庭なら、七海でも倒せる。加えて。

「翔鶴、パクチャー。如月。手伝ってください」

三名に命じた。攻撃しろと。パクチャーはお返ししていいと言われた。

殺されかけたのだから、復讐を許すと言われるも、気乗りはしない様子だ。

適当で良いと言っておく。止めは七海がやる。

取り敢えず航空支援してくればいい。空母もいるらしいし、諸とも殺せる。

最悪海外を敵に回すが、その場合は……適当に半殺しにでもする。

邪魔しなければ何でもいいから。

簡単に取り決めをしてから、無線を入れて挑発開始。

「渋谷さん!!」 なんで鎮守府の回線に……いいえ、皆はどこ!! 何をしたのツ!!」

「何を? 白々しい……聞かなくても分かるでしょう? ねえ、パクチャー?」

混乱する桜庭が応答した。なぜここにいる? と聞く辺り、生きていたことはやはり

確信していたか。

ならば丁度良い。最初の人質は、大袈裟に騒げるパクチャーであった。

「んぎゃあああああ!! 元帥助けて! 殺される、殺されるー!!」

マイクを向けて叫べと言うので、パクチャーは棒読みで叫ぶ。

あまりにも大根なので、川内に軽くジェスチャーで指示して刃物を向けてもらった。

真つ青になったパクチャーは、全力で叫んだ。

無論振りだか、迫真の演技に様変わり。

「なっ……!!? 止めなさい!! 自分が大事に思っている娘たちに何をするの!! 血迷っ

た!」

「黙りなさい。人間の味方をするような娘は、もうあたしの愛する者じゃない。そうい

う悪い娘は、死んでもらいます」

七海はそこだけは本心で、桜庭に対して反論する。

実際、それで……もう、戻らない命だつてある。

その痛みを知つて、この有り様。本当なら、全員が演技をしてほしかつた。

息を呑む桜庭は、その意味を悟つた。とうとう、七海は敵対したと。

無線越しに、反逆者として断定。処分を言い渡した。要するに死刑を。

だが、七海はそんなものには怯まない。

「殺したければ、どうぞ? その前に、ここにいる人間はもう、全滅ですがね」

「……無関係の憲兵まで皆殺しにしたっていうの!? あなたって人は!!」

怒り狂う桜庭に、七海は用件を伝える。

お前を殺すと。そう、言った。

「あなたさえ居なければ……あたしは、もう何もかもどうでもいい。死んでください桜庭さん。あたしの手でも良いし、中枢棲姫の手でもいい。けど、戻ってこないと……全部、死んじやいますけどね?」

持っていた目玉拳銃を空に向かって発砲。音を聞かせて、次に川内がパクチーをどついで倒す。

倒れる音まで入れないと意味がない。パクチーはお口チャックで一先ずお仕舞い。

「パクチー!? ねえ、大丈夫!? 確りして!!」

無線越しでは、安否など分かるまい。

焦る桜庭に言い聞かせる七海は、次を言い出す。

「次は……イムヤ。あなたです。さあ、何時まで生きられますかね……?」

「い、いやあああああああ!!」

イムヤは最初から迫真の演技でこんな感じ? という表情で首を傾げる。

サムズアップで大丈夫と示しながら、暴力を振るうような音をさせる。

實際殴っているのは適当に在り合わせて作った袋だが。

「渋谷さん止めなさい!! イムヤはあなたの妹分でしょう!?! なんで傷つけるの!?!」
「あたしに害を与えるからです。ねえ、イムヤ? 痛いですか?」

暴力を袋にふるいながら聞かれても困るので、適当に呻き声をあげていく。
更に焦る桜庭。向こうも激しく戦っているようだが、七海は再度要求する。

早く帰ってこないで、ここの艦娘が全員死ぬと脅す。

ただ、制圧した時点で半分は死んでいるが、と言っておく。

駆逐艦は大半あの世行きだと言うと、桜庭はどうとう激怒した。

「語るに落ちたわね、深海棲艦ツ!! 心まで澱に吞まれたような存在はもう、人間でも艦娘でもないわ!! ただの化け物よ!! あなたは何をしたかったの!! 勝手に逃げ出して、勝手に戻ってきて皆を殺して!!」

何がしたかった。聞かれて、七海は気付く。

(あたし……:そう言えば、何がしたかったんでしょうか?)

今ごろ思う。何をしたかったのか、自分でも今や理解していなかった。

衝動的に行動していたせいで、理屈がもはやないのだ。

何がしたいのか、自分自身が分からない。

平穩に生きたかった。皆と幸福になりたかった。

ただ、愛したかった。それだけのことすら、思い出せない。

(ま、良いです)

そんなことは重要じゃない。今はどうでもいい。

イムヤも、空砲を放って倒れる。益々怒り狂う桜庭。

早く帰ってこいと、二名を殺したような素振りを見せて、無線を切った。

怒鳴り声途切れて、お疲れ様と皆に言って、一度は終了。

「さあ。後始末をします。手筈通りに動いてください」

手を叩いて、皆が立ち上がる。

最後だ。後始末はきつちりで行う。

既にここには味方しか生きていない。

あとは、残った物資を奪って、後処理を行うだけ。

そう、つまりは。鎮守府の焼き払いだった……。

火災は簡単に起こせる。

艦装の燃料を全体にぶちまけて、金品や貴重なものは全部奪取。

あとは、軽く火を放つだけ。

火事で通報される前に燃え広がるように念入りにチェックしてから、満遍なくぶちまけた。

遺体はこれで、残らない。時間も稼げる。罪人も真つ青の海賊戦法にドン引きされた。

設備はそもそも電源が落ちているので機能しないようにしておいた。多分、大丈夫だろう。適当に過ごしながら、頃合いを見て火を放つ。

綺麗に引火して燃え上がる鎮守府。

明らかにやり過ぎだが、悪びれない七海は如月と海の上で燃え盛る鎮守府を見て言った。

いつも深海棲艦相手に人間がやっていることと大差ないと。

肩を竦める恋人はそれもそうと軽く流した。

皆はまた陸路から逃走して、遠回りで逃げる。

二名は、五十鈴たちが護衛しつつ手伝いをして後から逃げる予定だ。

機装なしでも、具足と手甲さえあれば浮かべる彼女たちは、電探を頼りに見てきた資料の情報の方角へ向かう。

無線は既に廃棄した。あとは、傷ついた連中を始末するだけだ。

「とんだ悪党ね……」

「悪党ですか。ならば、それも一興。所詮人間の言い分ですから」
自分達を邪悪と称する如月に、だからどうしたと開き直る七海。
知ったことじゃないと切り捨てる。

海上を機関部がないので走って向かう。それでもかなりの速度が出ていた。

全く疲れない。深海棲艦の身体は、海上では強いらしい。

如月も深海棲艦になっている。呼応しているのか、彼女も強くなった気がすると言
う。

「結婚指輪ならぬ、血痕指輪ですか……」

「血の痕を浴びた指輪？ 何だか、如月たちらしいわ」

結婚指輪の意味合いよりも、血痕の指輪という意味が強い。

何とも深海棲艦らしい様に、七海はどこか呆れていた。

泣くのは後でも出来る。今は、如月と一緒に桜庭を八つ裂きにする。

イビツに笑う如月に、七海はふと、言い出した。

「愛してますよ、如月。深海の世界でも……ずっと」

「ええ。如月も愛しているわ。暗い世界でも……永遠に」

愛を確認しあつて、二人は笑いあう。邪悪に、歪んだまま。

死なない。ここまで来たら、死ぬるものか。

あとには戻れない世界なのだから。この道を進むと確信したのだから。二人は往く。皆の敵を、殺しに。

結構な時間を進み、発見した。遙か向こうで、黒煙が上がっている。

大規模な決戦の最中だった。沢山の遺体が流れている。

近場に流れてきた艦娘の遺体を適当にあさり、七海は無線を奪い傍受。

すると、中枢棲姫は何か撃破したようだが、雑魚が大量に湧いているせいで逃げ切れないらしい。

つまり、彼女は負けたので、混戦状態の今ならば、紛れて襲いかかることも出来そう
だ。

気にする必要もない。無線を捨てて、七海は如月に提案。

「奇襲しましょうか」

「はい」

此方も、二人に通達。回線を変えて指示を出す。

混戦状態なので諸とも吹っ飛ばせと。

数分待つて、夥しい数の艦載機がこの先の戦場を無差別に攻撃するため、向かつていった。

陸では、ある程度は送つて自動運転に切り替えたと言つた。そんな便利な機能もあつたらしい。

で、撤退していると。それを聞いて安心した。

こつちも無線を捨てて、爆撃の様子を眺める。

そこそこ、数の暴力で打撃は与えているように見えた。

叩き落とされるまで、一分掛からないで全滅したが。

「……よし、如月」

「了解」

頃合いだ。二人は再び走り出す。

決戦の最中、殴り込みをかけてくる二名の、奇襲が始まった。

とりあえず打倒桜庭。邪魔する深海棲艦も艦娘も片っ端から殴り殺す。

全力で殴る蹴る。如月も負けじと斬殺していく。

魚のぶつ切りのような死骸が増えていく。最早人間だろうが深海棲艦だろうが見境

ない。

切り殺す、殴り殺すを繰り返して、突破していく。

途中、何か強そうなポロポロの金髪の巨乳戦艦が英語で、くたばれと罵りながら襲ってきたが。

「邪魔」

と、思い切り蹴り飛ばして即死させてしまったが。

それが、例のアメリカ戦艦とも知らず、最終兵器の一人とも知らず。

七海は機動力で圧倒し、勢いで撃破した。

この頃には、中枢棲姫と同等の化け物と言える次元の七海に、手負いの最終兵器でも勝ち目はない。

この乱戦という状況も合わせて、七海には有利すぎた。

相棒もいる。状況も有利。ならば、負ける理由もない。

突き進む先にいた、最大の脅威は、既に死に体で、沈みかけていた。

艦装は大破、本人も死にかけ、こちらは無傷。

嬉しそうに、彼女を見つけた七海は笑った。

加速する。もっと早く、もっともっと速く!!

相手が気づく。驚きの表情で、目を見開く。

「な、なぜッ……!?!」

見つけた。最終兵器、大和!!

七海の敵!! 鬱陶しい目障りな女!!

動きが鈍い、今ならば!!

「桜庭さんも、死んじゃえ」

乱入して、思い切り、首を、蹴り飛ばす。

ついでに、如月が、追撃で、その首をはね飛ばす。

虚空に、鮮血を撒き散らして、桜庭の頭が飛び上がった。

そのまま、二人はトンズラした。全速力で、逃げ出した。

ざぶんと海に落ちて流れる頭。倒れる体躯。本当に……呆気ない最期だった。

エピソード　イビツな平和

此処からは、正直言うと情報が錯綜しており、正確な事実を確認できない。故に、多分の推論を交えて語らせてもらおう。

先ず、先の決戦だが……単刀直入に言おう。人類の勝利である。但し、辛勝としか言えない多大な被害が生じた。

何より、同時に起きた小規模新設鎮守府の襲撃事件も絡まり、複雑になっているのが現状だった。

真つ先に報告すべきなのは、日本という国は最終兵器を失ってしまったこと。戦艦、大和の死亡。轟沈ではない。混戦時に乱入してきた新種の深海棲艦により殺害された。

混戦時とはいえ、最終兵器を葬り去ったその脅威は、元々は人間だったらしい。

襲撃事件の犯人とも言われる少女、渋谷七海。彼女は桜庭薫子を殺害し、逃走した深海棲艦。

だが、それにはあまりにも信憑性が欠けていた。

なぜなら七海という少女は所詮は駆逐艦しか適合していないのだ。

公式戦では全敗の彼女が、なぜ桜庭を殺すことに成功したのか？

性能差は歴然であり、当時消耗し、大破寸前だったとしても、殺すには程遠い。

当時の桜庭は決戦装備……実戦を想定していたにも関わらず殺された。

それは、何故か？ 鎮守府を襲撃した理由も不明。憲兵と艦娘を皆殺しにして、放火し逃走。

燃えてしまったおかげで原因究明もままならない。わかった上で火を放ったようだ。

燃料を室内にぶちまけて、更に引火して爆発事故にまで発展した大火災となり、鎮火まで数時間はかかった。

艦娘も殺害したのと、そもそも行方不明の深海棲艦も含めて事実の解明は出来ていない。

資料なども徹底的に破壊された形跡もあるので、確信して行っただと思われる。

深海棲艦になっていたと思われるが、それを差し引いても桜庭に勝つのは到底不可能

と言われている。

生存者の目撃情報や他国の最終兵器の証言や、艦載機の映像から解析した映像を分析する限り、どうにも襲っていた姿は彼女ではなく、別の新種と思われる。

鎮守府の無線のやり取りは確かに声紋からして、本人に間違いはない。

だが、同時に桜庭は襲ったのは二名の人に似た深海棲艦であり、どちらも恐らくは新種。

過去にデータのない、電探に反応しない新しいタイプの深海棲艦と言うことになる。

襲撃の前に艦載機による無差別空爆を受けたが、それもどうやら深海棲艦の放ったもののようだ。

つまり、あの深海棲艦はとてつもない速力と機動性を持ちながら、従来の戦い方を行わない全く別の次元に至った深海棲艦という話になる。

残された情報を集めると、渋谷七海は鎮守府襲撃事件の犯人ではある。

だが、その後の足取りは不明。そもそも彼女はMIA扱いで、既に死んでいるはずである。

然し、死人は動いて襲ってきた。ここも信憑性が薄い原因の一つであった。

実は生きていた、という線も有り得ないのだ。彼女が死んだ理由も新手の深海棲艦である。

要するに、渋谷七海と桜庭殺害の事件は別件ではないか？　と言うのが、危機的状况の大本営が出した結論であった。

更にはアメリカの最終兵器、アイオワも死亡している。

どうにも深海棲艦に挑んで撃破されているようだった。

だが、アメリカには最悪もう一名、最終兵器の空母がいる。

これはあくまで、非公式の噂らしいが……アメリカは、アイオワの死亡を大して気にしていないと言われている。

元々手を焼いていた厄介な存在であり、消沈している残されている方がいれば、問題ない。

つまりは痛手にもならず寧ろ歓迎すべき現状の様にも見えるとか。誠に羨ましいものである。

参加していた最終兵器たちは、哀悼しつつ、祖国へと帰還していった。

……注意すべきなのは、どうにもロシアの最終兵器がキナ臭い動きをしている可能性がある。

十分注意されたし。

今後の方針は、大本営にて重役の会議によって近々決定する。

最悪、此方も新たな最終兵器の選定を始め、新種の深海棲艦への対応策も検討しつつ、

国防を続けていくだろう。

歴史に残るような、然し国民には一切を秘匿されるこの大決戦の結末は、人類の辛勝という苦い戦果となるのであつた……。

それは、愚かな選択をした少女の終焉。

飲み干した筈の深海の澱が、彼女に当然の報いを与えるまで、時間はかからなかつた。痛い。リフレインする。フラッシュバックする。殺した瞬間を。壊した瞬間を。

(バカな女……。自分で壊し続けて、殺し続けて、こうなるなんて……)

今日も無様に生きていこう。それが、彼女の使命。

あの時から、どれほど時間は流れただろうか？

気がつけば、数年も流れている。新たな元号になつて久しい今日この頃。

ここは、通称箱庭と呼ばれる海域だつた。

あの日のあと、拠点に戻った七海は、自分の仕出かした呵責に堪えきれずとうとう倒れた。

己の誓いを破る行為は、自己矛盾を引き起こし、極度のストレスという形で蝕んでいった。

アイデンティティーの否定という、人間の精神を破壊する行為をしたのだ。

それから、半月は意識がなかつたらしい。

意識が戻った頃には、七海の身体に変化が出ていた。

肌は生気を失いガラスのようにひび割れ、視界はボヤけて、耳は遠くなり、において鈍くなり、声も出せなくなった。

要するに生物として生きている部分が死んでいつていた。

老衰のように、どんどんと衰えていく彼女に、周囲は激しく困惑した。

治療できないかとあらゆる手段を講じた。必要ならばたくさん調べたし、人々を襲った。

けれど、七海は良くならなかつた。悪化する一方だつた。

当然の報いだと七海は、如月を通じて皆にベッドの上で横たわって弱々しく言った。

仲間を殺して、恩人をも手にかけて愚か者には、巡って当たり前の罰なのだ。

それでも、そこまでのことからこそ、生きること諦めない。

しがみついて生きてやると宣言した彼女の言う通り、数年経過した今でも七海は生きている。

もう、人の姿すらしていないが……。

箱庭と呼ばれる海域に至ったのは、あの決戦の時に偶然にも救っていた言葉の通じる深海棲艦たちが、七海に恩返しをしに来て、それを切っ掛けに勢力を伸ばしていった結果だ。

誰であろうとも受け入れる。深海棲艦も、艦娘も関係ない。

そのスタンスの下、集った沢山の娘たち。

轟沈したのに運悪く生きていて、行き場のなかった艦娘たち。

争う意思がないのに襲われて迫害されていた深海棲艦たち。

あるいは、深海棲艦になってしまつて居場所がない元艦娘。

こうして、彼女たちは庇護する七海の下に集まり、七海を守つた。

彼女は声なき声で言ってくれた。ここが、皆の居場所だと。帰る場所だと。

深海棲艦となつた人間という唯一の彼女の言葉は、本質が寂しい皆の心に響いていった。

今では、一種の勢力として活発に活動している。スタンスは完全な中立。

誰だろうが、害があるなら全滅させる。

基本的に混成の彼女たちは、深海棲艦も艦娘も差別などしない。

それが、絶対的な世界との違いだった。故に、追い出されていた娘たちは日々増えていく一方だ。

その全ての顔をきっちり覚えている、皆にお母様と呼ばれ慕われるのが、彼女だった。無視出来ない破格の勢力に、人類は腫れ物扱いで近寄らない。

挙げ句には、彼女たちを見て擦り寄ってくる意地汚い連中もいた。

この箱庭と呼ばれる海域の領海は、ロシアである。そう、ここはロシアの領海なのだ。ふんだんに眠る海底資源に、漁業権。他国が介入できない絶対的な力。

ロシアは中立の皆を支援する代わりに、この海域をロシアに寄越せと言い出した。母は構わないと言った。互いに損害を与えない程度に、取引しようと提案した。

幾度かの妥協を互いにして、結果的にここにも街のようなモノはある。

後からロシアから押し掛けてきた人間が作ったそれっぽいロシアの情緒ある町並みである。

まあ、大抵がロシア語と日本語の混じりあった意味のわからない風景だけだ。

因みに領海に入れるのはロシアの艦船のみ。それ以外は警告なしに沈めている。

で、奇特な人間もこの中心である島には住んでいた。理由として、ここは割と平穏

だから、という理由。

祖国にいてもいつ、深海棲艦に侵略されるか分からない。だが、ここはその侵略する深海棲艦の住み処。

逆転の発想らしい。襲われたくないなら、最初からここにいればいいという結論。

なので、世界で唯一、人間と、艦娘と、深海棲艦。

その三つが手を取り合つて住んでいる場所であつた。

皆も人間らしい生活ができると、大喜び。人間サイドも平和に居られると手を取り合つた。

本当の気持ちなど、知りもしないで。

箱庭と呼ばれる所以は、ロシアという後ろ楯を持った、楽園のような場所だかららしい。

ここの実質的支配者は、人間であり、艦娘であり、深海棲艦でもある。

「司令官、起きた？」

今日も、鎮守府と日本語で記された設備の一室に、主はいた。

付き添いの妻、如月に起こされる。

相変わらず愛らしい姿の如月は彼女を起こす。

そう、広くはない室内。図書室のような全方位本棚が天井まで迫るここが、彼女の私

室である。

小さなベッドに眠る彼女は、起こされて目を覚ます。

「……………」

彼女は無機質な目で妻を見上げる。

ウイン、という音をさせて見つめられて、結婚指輪をしている如月は笑った。

「はいはい。今日も謁見が来てるわ。ガングートさんだつて」

「……………」

何も言わずに起き上がる。

彼女はガシヤンツ!! と派手に転ぶが、如月が慌てて助け起こす。

着替えも甲斐甲斐しく手伝う彼女に、主は黙っていた。

今日はガングートが酒飲みに来るとか言っていた。

(ここは居酒屋じゃないのですか?)

「そう言われてもね…………。司令官がもう飲める年だからって、今度はスゴいの持つてきたんですって。何だっけ…………スピリタス?」

(あいつはあたしをなんだと思つてやがりますか)

こここの立役者、ガングート。元々は最終兵器だったらしいが今は引退して隠居の身。

以前に七海を気に入っていたとか言つて、散々付きまとつた、面倒だが細かいことは

気にしない有難い恩人であった。

過去を気にせず助けてくれた。故に人間も受け入れる。

本来ならば人間などもう真つ平御免だった。だが、その技術と恩恵で生きている以上は妥協した。

彼女にとつては屈辱だったが、ガングートの頼みでは仕方ない。諦めることにした。

現在、渋谷七海という女は全身が殆ど金属で出来ている。

手足は深海の鋼鉄を使った義足や義手、目玉も義眼だし内臓の大半も深海棲艦と艦娘の混ざりだ。

あの謎の老衰を止めるべく、ガングートが提案した深海棲艦と人間の技術の複合……機械化と移植。

それを受けた結果、武骨な手足に声を失いテレパシーのようなもので会話するとか誰が思ったか。

老婆のようなボロボロの白髪も健在だし、歩くたびに派手に音が鳴って鬱陶しい。

随分と嘗てと比べてかけ離れた姿をしているが、原因が未だに不明の老衰を回避するには、これしかなかった。

そして、あの日の痛みもトラウマとして刻まれて、心に傷を負ったのも事実。

お陰さまで、沢山の娘を持つ今でも夢に見るし、再び同じ結果を嫌がって、人間との

接触を受け入れている部分だつてある。

あの選択肢の果てにこの様だとすれば、自分の因果だ。

化け物。それに相応しい結末だと自分でも思う。

「七海、いつまで寝てんの？ ガングートが勝手にロビーで酒盛り始めているわよー？」
部屋を開けて、五十鈴も呼びに来た。

何も言わずに目で挨拶する七海に、彼女も苦笑いした。

「はいはいおはよう。調子は悪くない？ この間目玉がどうか言っていたけど」
問題ないと如月が代わりに伝える。喋れない代わりに、七海の意味を伝えるのが如月の役目だ。

指輪を今でもしている、唯一の存在として、公私共に支えていく。

言葉通り、どんな七海でも愛していると言うのは伊達じゃないし、五十鈴も味方を続けている。

心に痛みを背負い、身体を澱に蝕まれて生きている七海は、苦しいけれど……平穏で、平和な世界を手に入れていた。

イビツでも、腐つても、欠けていても。

彼女なりの幸福を、実現していた。

君と結ばれる、物語の作り方。

そのエンディングの一つが、ここにある。

「あらそう？　じゃあ、あのバカ止めにいくわよ。ハゲと由良が押さえているけど、今ちようど暴れだしたみたい。あの酔っぱらい……いい迷惑よね」

「……………」

「ブツ飛ばして良いって。全員に伝えて」

「ええ。ほら、あんたも来なさい。如月もね」

先に行くと言って五十鈴は出ていく。

如月と七海もゆっくりと向かい出す。

恩人の暴走はいつものことだ。

互いに苦笑った七海の未来は、こうして進んでいく。

今は兎に角止めに行こう。

七海と如月は向かっていく。

この生活を、代償を支払い……続けていく為に。

エンディング A
イビツな平和
終わり

エンディングB 多くを失った果てに

彼女の消失

時は少し遡る。

これは、新たな姫を見つけて舞い上がっていた彼女に起きた分岐点。

これは、彼女が失う物語。

これは、彼女が甦る物語。

新たなページを開こう。

誰かも知らない、見たことがない世界。

彼女だけが到達した、答えの結末……。

彼女は疾走していた。

海の上を、新たな姫を捕まえるために。

敵を片っ端から薙ぎ倒し、欲望のままにシリアスも置いてきぼりにして走る。

だが、コメデイは唐突に終わりの時を迎えた。

彼女は気付く。艦載機の数が増えている。

深海棲艦の艦載機が交ざり出す。

道中進みすぎて、どうやら敵地のご真ん中に来ているらしい。

電探の反応は全方位真つ赤だった。四面楚歌。七海は冷静になった。

(……勝てない相手でもないですかね)

自分の戦力ならば問題なく突破は可能。

突き進むと決め戦闘開始。

だが、七海は知らず知らずのうちに、増長していたことを誰かは気付いただろうか？

慢心していたことを果たして、彼女含めて一人でも分かっただろうか？

彼女は確かに強い。それは、間違いない。

深海棲艦の力を有し、オーバーフローを起こす艦娘のパワー。

自他共に認める強者である。否定はしない。

が、生憎と七海も生き物であった。

七海にも勝てない相手がいくつかある。

筆頭、桜庭。本人いわく二度と戦いたくない、物理的な戦力の違い。

彼女は大和という最早艦娘なのか国という存在の具象化なのか分からない相手。要するに次元が違う。

二つ目は、潜水艦。七海は水上打撃に特化している故に潜水艦に攻撃できない。機動性をもってすれば雷撃は意味をなさないが、本来は所詮駆逐艦。

潜水艦は、一方的に手を出せる相手になる。

片方は戦わない。片方はさっさと任せる。

こういう状況だったからこそ、彼女は敗けを知らなかった。

それが、最大の敗因だろう。

彼女は、なまじ強かったせいで敗北を知らなかった。

そして、自分は負ける要因を排除しているから負けられないという自負がある。

それが、最近より恐ろしく強くなったある艦娘の言葉を借りるなら。

慢心してはダメという教えを、無為に行っている行為で。

彼女が自覚なくやっていた、増長であった……。

本来は、個人で敵地のご真ん中に突っ込むのは自殺行為。

言うまでもないが、七海はそれを常用していたからか周囲も大丈夫だろうという悪い信頼があった。

七海ならば大丈夫。どうせいつも通り生きて帰ってくる。

そう言う周りの慣れもあって、異常を異常と認識できていなかった。

七海は異常者だと分かっているのに。七海は、言動全てが異常なのだ。

それに適応してしまった周囲は、七海の異常を異常と分からなくなっていた。

故に、これは本来当たり前の結果なのだった。

(……敵が、滅らない)

七海は焦っていた。

ここは敵地のご真ん中。絶え間無く増援は湧いてくる。

対して此方は支援は来ない。一人で突っ走っている特務のせいだ。

孤立無援は慣れている筈なのに。あらゆる方向から攻撃が止まない。

殺しても殺しても無限のごとく、続いてくる。

目に入る深海棲艦は片つ端から仕留めているのに、仕留めた数の倍が現れる。

(速度をあげましょう)

もつと効率良く殺せば、もつと手早く殺せば勝てる、いつも通りの判断で続ける。周囲は姫ですらない、雑魚の群れ。蹴散らせば容易に倒せると。

その判断が間違いでであると誰かが教えれば良かったのだろう。

倒せると思つて、退かなかつた。

この時に退けばあるいは、助かつたかもしれない。

然し、七海は続行を選んだ。問題ない、毎度のことだと。

倒しても倒しても減らない数と、消耗する自分の体力。

一時間も続ければ、無傷でも引き際は見える。

七海も無理だと思つて退こうとはした。

然し、時はその頃には手遅れだったのだ。

彼女の三つ目の弱点。孤立しやすく、自滅型の性格。

瞬間的な突破力は桜庭すら超えるが、反面他人を頼ろうとしない元来の中身もあつて、七海は孤独で戦う方が楽だった。

自分に合わせられない周りとの性能の違い。

だったら、自分だけ手早く倒して戻れば問題ないという思考回路で、自分の価値など大したものじゃないという軽んじた基準により直ぐに無理をする。

様々な要因が重なり、七海は窮地に陥っていた。

「きやあつ!?!」

空爆を回避したのはいい。

だが、そこに運悪く潜水艦が到着していた。

見えない相手からの不意討ち。反応が遅れて、脚部に直撃。

(しまった……!?!)

利き足を潰された。黒煙と激痛が襲う。

魚雷による一撃が追撃で襲ってきた。

咄嗟にソナーで察知して、不格好に回避するも、アンバランスな加速により着水に失敗して横転。派手に転んだ。

背中の機関部を破損。此方も黒煙をあげる。

不味いと七海も感じる。離脱するための足を潰された。

仕方なく無線で、応援を呼ぶ。

有象無象はまだ大量にいるし、追いかけていた艦載機も健在。

切り落としていたが、結構残っている。

離れていた艦隊は直ぐに向かうと言うが……。

(少しでも逃げないと……!!)

それまで、自分が持つのか。

全くの油断だと恥じる。この物量は、七海でも覆せないとは。

逃げ回る。だが、自慢の……そして最大の武器を失い、何度も直撃を受ける。

深海棲艦になつていたせいで頑丈になつていたので、多少は堪えられた。

それも、仇になつた一因である。

だが、それも融合が解けて艦娘に戻る。傷を受けすぎたせいか。

(……油断、しましたね……)

頭は生きているが、身体が持たない。

助けに来た艦隊が見える頃には、ギリギリ離脱していたものの、七海は大破し、轟沈

寸前だった。

旗艦が見える。追いかけてきた相手を倒して、助けに入ってくれる。

まさか、出向先でこんな無様を晒すとは、己が情けない七海。

血を流しすぎたのか、視界が霞んでボヤけている。

物量に勝てない屈辱よりも、他者に敗北を見せる方が嫌だった。

皆ならまだしも、出先の艦隊に救われる。

そんなの、人間嫌いの七海には痛みでしかなかった。

(最悪ですね……。こんななら、いつそ死にたい気分ですよ……)

内心、自分に悪態をつく。

実際死にかけているのに、死にたいという気持ち。

反射的なものだったが。

それは、現実となった。

七海は轟沈寸前。

最早生きているのが不思議なほど負傷している。

そこに、助けに入った艦隊たちが来たのはいい。

然し、その時だった。

「……………!? 直上を!?! 危ない、逃げるんだッ!!」

旗艦が叫んだ。

七海はノロノロ進んでいる。その直上。

破壊された艦載機が幾つか、特攻するかのように七海に向かって突っ込んできていた。慌てて艦隊が撃ち落とす。突っ込んできていた艦載機は無事に撃墜。

七海は全く気付かず、進んでいる。ホッとする旗艦。

鬱陶しい連中が群がっているが、これならば離脱できる。

……けれども。

ドンツ!!

という、聞きなれた砲撃の音だった。

至近距離で、此方に向かって反撃していたイ級が、七海に向かって砲撃した。背を向けて、いきなり格好の的を見つけて、放つ。

「？」

音に緩慢に反応する七海は、顔をあげた。

頭から血を流す七海が見たのは、自分に向かって放たれた砲弾。

そして。

在り来たりな、当然の結末が、訪れる。

爆ぜた。綺麗に、爆発した。

七海の頭に、イ級の一撃が急所に入るように。

七海は、回避も出来ずにイ級の一発を貰った。

結果、機関部に衝撃が伝わり、臨界を超えて。

そのまま爆発して、七海が消えた。シグナルが、ロスト。

視界からも、画面からも、消えてなくなった。

「えっ……」

啞然とする艦隊の艦娘たち。

イ級が、イ級ごときが、あの七海を……殺した？ 沈めた？

あの桁違いの化け物が？ その辺の駆逐艦に、負けた？

彼女たちの提督が叫んでいる。何があつたのか説明しろと。

言った。七海が、イ級に殺された。今、そのイ級も死んだ。

救助が間に合わずに、七海はくたばった。端的に言えば、そういう事だった。

呆然と彼女たちは見ていた。呆気なく死ぬ怪物と、その結果と言うものを……。

渋谷七海の死亡は、確定であった。

戦闘の記録を残骸が浮かぶうちに素早く旗艦が回収して持ち帰った。

本人は沈んでしまっている。確実に死んでいた。

原因解明など言うまでもない、七海の個人行動のせいだ。

出先の艦隊には責任などない。傍から見れば、彼女の暴走がきっかけになったのだから。

無論、出先の提督には監督不行き届きが言われた。

然し、特務という建前がある以上は深くは追求できない。

内容を知らないのだから。そして、同行をしていない。

七海に拒絶されている以上は無理がある。

彼女は特務中の殉職、という処理をされた。

当たり前の悲劇であったが、出先の提督も責任を感じているようだった。

それ以上に……。

「あいつが七海を見殺しにしたのよッ!! よくも……よくも七海をッ! 五十鈴がぶつ殺してやるッ!!」

「お、落ち着いて五十鈴ッ!! 落ち着くのよ!!」

一番激怒する艦娘が、七海の二の舞を演じようとしていた。

あまりの剣幕に、出先から由良が自主的に退去して連れ戻した。

あのまま居れば本当に五十鈴は人殺しをしていた。

姫園鎮守府に戻され、事実を聞かされた艦娘たちは……。

「司令官……？ 司令官が……死んだ……？」

依存していた如月の精神が、壊れた。

一番溺愛し、溺愛されていた如月は、ショックで現実を受け入れられずに、翌日から幻覚を見始めていた。

「ねえ、司令官？ 皆が嘘を言うのよ？ 司令官が死んだって……そんなの、有り得ないのにね」

虚空に向かって話しかけ、恰もそこに七海が居るような振る舞いを行うので即、隔離された。

「……ママが、死んじゃった……。あたしを、置いてった……」

「弥生も……生きてる意味、無いよ……」

山風と弥生は、後追いを求めるように自傷行為に発展した。

首吊りによる自殺未遂が一度発覚したため、彼女たちは強制入院に逆戻りした。

「人間が七海を追い詰めて殺した……。そうよ、そうに決まってるわ……！ だったら、

お姉ちゃんが敵討ちしないと……!!」

五十鈴は人間に対する敵対行動により、一時拘束状態になっていた。

出先の提督を殺しに行こうとして止めた憲兵を数名血祭りにしてしまい、独房に監禁されている。

まるで七海のような振る舞いに、解体を望む憲兵も居るようだった。

「……………由良が、由良がすっかりしなくちゃ……」

由良は比較的無理をしているが現実を受け入れて、客観的に皆をフォローする役目を果たしている。

ちゃんと誤解ないように説明をして、悲しいけれど受け入れるように諭していた。

これは、悲しい事だけど、誰のせいでもない。

そう、根気よくやったおかげで、過激な行動をする艦娘は一部のみだった。

「ご主人様が……亡くなられた……」

「提督……どうして、村雨たちを置いて逝ったの……?」

春雨、村雨は戦えなくなつた。

シヨックが大きすぎて、自分を保てないように毎日引きこもっている。

「お嬢様の使命は、私が継ぐ」

小春は自分が代わりになると気丈にも、七海のように振る舞う。

ここは自分達の居場所。

七海が遺した場所を守ると、深海棲艦たちのリーダーになるように行動している。
七海は死んだ。死んでしまった。

壊れた彼女たちは、それぞれ相応の結果になった。

壊れて、憎んで、立ち尽くして、受け入れて、前に進んで。

そんな痛々しい姫園鎮守府。主のいない、哀しい居場所となったのだった。

命と引き換えに

——冷たい。

第一印象は、それだった。

ここは酷く冷たい。そして、寒い。

沈んでいく。冷たい底に、寒い底に。

(あたしは……う?)

そうだ。七海は、死んだのだった。

イ級の一撃を脳天に受けて爆発して、散った。

彼女は、死んだはず。

(死に見ると見るといふのは、ここのうのですね……)

思い出すのは、消える寸前の曖昧な記憶。

だが、分かるのは……七海はもう、生きてはいない。

(あたし……皆を、守れなかった……)

死んでいるというのに、出てくるのは後悔だった。

皆を守れなかった自分への情けなさや、置いて逝った不甲斐なさ。

どうして、あんな増長する真似をしたのか。

(知らず知らずとは怖いです……。後の祭りですけど)

結局、自分は情けない司令官で、愛するに値しない屑鉄だったのだ。

異常者に相応しい終わりだろう。

心残りはあるが……今さら足掻いても、きつと戻れないと分かっている。

七海が死んでも、大丈夫。桜庭がいる。まだ、信じられる桜庭が何とかしてくれる。

あの人に託そう。皆を、愛してくれる最強の艦娘に。最高の提督に。

(桜庭さん……。後を、頼みます……。あたしの分まで、皆を……)

死んだ自分などどうでもいい。死人はなにもできやしない。

それが七海の言い分だから。自分が死んだら、祈るしかもう出来ない。

七海の意識は……ゆっくりと、消えていく……。

……本当に？

本当に、これでいいの？

折角あたしが心配していたのに、やっぱりこうなった。

諦めるの早すぎ。もつと抗いなよ！ 皆が大切なんでしょ！

あたしを授かったんだから、もつと最高のパーティーにしなきゃダメじゃない！

悪夢を見せるのは味方じゃないんだよ!!

ほら、もつと頑張つてよ!! 戦つてよ!!

あたしが代わりに消えてもいいよ、こうなったら！

あたしの姉妹を差別しないで艦娘として扱って、接してくれたお礼もしなきゃいけないし。

いし。

村雨も春雨を、とっても可愛がつてくれたじゃない!! それをこうも簡単に諦めるの

!?

違うよね!? 愛しているって、好きだっていっぱい言ったじゃない!

じゃあそうやって死ぬことを直ぐに受け入れないでよ!!

深海棲艦にまでなつてでも、好きになろうとしたのは嘘だったの!?

あたしを飲み込んででも分かつたのは嘘だったの!?

ねえ、逃げないでよ! 諦めないでよ!!

あたしの姉妹を、あなたを愛した艦娘や深海棲艦を置き去りになんてしないで!!

あなたは母親なんだよ!?! 恋人なんだよ!?! お姉さんなんだよ!?! 妹なんだよ!?!

主なんだよ!?!

沢山の役目を担う人が、そうやって愛したんなら、無理矢理生きてでも愛してよ!!
死が別つなんて言わないで、どんな事をしてでも愛し続けてよ!!

何時もの異常なあなたはどこ!?! ねえ、どうなの渋谷七海!!

あなたの愛は、偽りだったの!?! 嘘っぱちだったの!?!

(……黙りなさいッ!!)

そうだよ。もつと怒って。

皆を愛していつて、これからも……ずっと。

あたしが代わりに沈んで、消えるから。

深海棲艦の力と一緒に、海の底に飲まれるから。

あなたは、上がって。浮上して、帰って。

そして、皆を愛していくんだよ。

轟沈は、艦が起こすもの。人間は沈まない。だって、生きているから。

あなたは、浮かび上がるのよ、七海さん。

(……夕立……)

そう。あたしは、もう一人のあなた。艦娘のあなた。

沈むのは、艦娘のあたし。人間のあなたは、戻れるわ。

深海棲艦のあなたも、ついでに引き受けるから。

……知ってる？ あなたが飲み干した、深海棲艦の力の意味。

これはね……『死』っていう、マイナスの塊。

生きている艦娘と人間の、天敵の力なんだよ。

あなたは、意思の強さで振じ伏せたけどね……普通の艦娘は、飲まれたら戻れない。

生きている人間や、艦娘とは真逆の存在だから、受け入れるとしたら、あなたのよう
に支配するか、拒絶するか、あるいは……滅多に居ないと思うけど、この『死』が内包
する痛みを理解できる人だけ。

あとは大抵、壊れてしまうか嫌がって逃げてしまうの。

あたしの姉妹は幸運だっただけ。深海棲艦になって、あなたに拾われて、愛されて

……。

きつと、最高の幸運だと思わ。

もしも、この力に意思が負ければ……あなたもあたしの姉妹のように、命を吸われて

変異していたはず。

二人は死んでから動いていたけど……あなたはきつと、半端に慣れているから、毒のように蝕まれてゆつくりと壊れていくだろうね。最悪、そのまま死んでいくと思う。

あたしも、あなたを通じてムラマサと繋がったから……見えたよ、こいつの中身が。

こんな厄介なモノは、ないほうが良いよ。

あなたは、人間だから。生きているんだから、人間として愛せばいい。

(困ります。返してください)

ダメだってば。あのね、あなたは知り合いにこいつを受けて平然としている超人が居るみたいだけど。

危ないの、これは。この力は。分かる？

下手に持っていてはいけないの。だから、回収するから。人間は人間として生きるの、オツケー？

(Nooooooooo!! あたしの深海棲艦の存在意義が無くなるでしょう!!) 返しなさい、それはあたしの!!)

いや、懲りようね!! あれだけ酷い差別されたのにまだ欲しがるの!!

あと今は割とシリアス!

そんなデスボイスのシャウトされても返さないよ!?

(か、返せエエツ!! ぽいぬ、返せエエ!!)

ぽ、ぽい!?

(あーたーしーのー! 深海棲艦の力あああああつ!!)

ひ、ひいいいい!!?

何で死にかけているのに元気なのこの人!?

頭おかしいの……つて。あ、おかしいか……。

(いえああああああ!! 返せエエ!!)

……あ、もうダメっぽいこの提督。

さっさと行こう、そうしよう。

じゃあね、渋谷七海。もう一人のあたし。

何を言おうが絶対返さないからね!! 絶対だからね!!

(Noooooooooooo!!)

「ん……」

彼女は目覚める。真夏日のような茹だる暑さの中で。

海岸に打ち上げられていた。波打ち際で、びしょ濡れで倒れていた。

「……………」

「ここは、何処だ？」

ゆっくりと起き上がって、周囲を見待たず。

見覚えのない殺風景な海岸線。青空の夏日。

ボロボロの服装の自分。何が起きた。

（……………あたしは、渋谷七海。姫園鎮守府の提督で……………あら？）

自分が誰かは覚えていた。が、何だか記憶が曖昧になっていた。

姫園鎮守府？ 確かにそんな場所の提督はやっているが……………。

（……………出てこない。自分のところの所属する艦娘の名前も、顔も……………）

違和感がある。何が起きている？ 提督ならば知っていて当然の情報が出てこない

のだ。

数分黙って思い出すも、記憶が靄がかかっている思い出せない。

七海は冷静に判断を下す。なぜここにいるかも分からない。

現状見て、多分海で何かあったんだろうとは推察。

要するに。

(あたし、記憶を喪失してませんか?)

そう言うことだった。

取り敢えず行動開始。

現状打開に、海から這い上がり、海岸を進む。

開けた場所で見たのはやはり知らない町だった。近場にあった個人経営のお店発見。

訪ねて、事情を説明。海で死にかけて難破したので電話貸せと要求。

見れば、だらだら頭から流血しているらしく、手当てしてからお店の人が慌てて救急

車を別口で呼んでいた。

「桜庭さん、助けてください。迷子です」

「うぎあああああ!! 幽霊出たあああ!!」

桜庭の携帯に直接かけて、開口一番そう言った。

桜庭は絶叫して倒れたのか、すごい音がした。

「はい? 幽霊? 生きてますよ、頭割れて流血沙汰ですけど」

「流血!?! ちよ、なんなのいったい!?! 兎に角待って!! すぐいくから! 場所は何

処!?!」

なんのことも見えないが、淡々とマイペースで七海はいつも通り語る。

お店の人に住所を聞いた。その前に救急車が来ると言われたので伝えると。

「軍部の間人が一般の病院に行こうとしないの!! 渋谷さんは艦娘でしょ!?!」

「……………はっ?」

……………何を、言っている?

「桜庭さん……………? あたしは、人間ですよ? なんであんな化け物と一緒にされるんです?」

「……………えっ?」

「……………えっ?」

……………桜庭も、驚いていた。

互いに、何を言っているのか、理解できないように。
恐々、七海は聞いた。

「すみません、どうもあたし……少し、思い出せないことがあるみたいで。何が起きたのかも、思い出せないんです。どうやら、桜庭さんが知るあたしは……今のあたしとは、異なっているみたいですけど……」

「……………何が、起きているの……………!?!」

七海は愕然として聞いてくる桜庭に言った。

自分の記憶があやふやで、途切れている部分が多い。

混乱しているが、自分に何が起きているのか教えてほしいと。

そう問われて、桜庭は息を呑む。素早く、ある質問をした。

「渋谷さんッ！ 今、どんな姿をしている!?! 教えて頂戴!」

その問いの意味を聞く前に、桜庭は信頼できる大人だ。

直ぐに鏡をみた自分を語る七海。

「……………そうですね、ボサボサの茶髪の長髪に、寸胴の小柄な子供ですが。額に大きな傷跡があつて、目の色も茶色の、無愛想なあたしです」

「ッ!!」

返答に、桜庭はいよいよ動揺していた。

意味があるのか、伝わったようで……。

「傷跡……？ それに渋谷さん、あなた……完全に、『人間』に……戻ったの……？」

「……質問の意図は理解できませんが、先程の言葉と今の言葉からして、やはりあたしは記憶の一部が抜け落ちているんですね。そして、どうもその抜け落ちたあたしは……化け物になっていた、と。何が起きたのかは、合流してから解決しましょう。桜庭さん、落ち着いて対処を。大丈夫です。多少の差異があれど、あたしは恐らく桜庭さんの知る渋谷七海です。あたし自身も困惑していますが、これだけは言えます。あたしは、あたしです。渋谷七海は、確かに生きていますよ」

彼女の動揺から推論は立てられる。

利口な七海は、自分が異常であると自覚した。

桜庭は人間ならば兎に角医者に急げと言うので言葉に従う。

電話を続けながら、サイレンを鳴らして到着する救急車を見ながら、七海は聞かれる。

「渋谷さん……あなた、艦娘は化け物だと思いの？」

「はい。連中は人間とは違う、別の生き物……妖怪等と同じ、化け物だと思います」

即答する。

その意味を、きつと何か重要なファクターだったのだろう。

桜庭は分かったと言って、電話を切った。辛そうな声で。

(……あたしの知らないあたしですか……)

どうもキナ臭い展開になってきた。

七海は、どうも……危険な状態らしかった。

搬送された病院で聞かされた。

脳波に異常あり。諸々検査をして、記憶障害を起こしているらしいと七海は聞かされる。

この額に大きな傷跡があるのは外傷のようで、強い衝撃が脳を直撃し、そのせいで記憶が消えていると言うのだ。

記憶は消えた、と言うよりは厳密に言うと思い出せない状態になり、記憶自体は健在のようだ。

健忘症とかいう症状らしい。一般的な常識や自分の詳細などには欠落はない。

但し、ごく一部の記憶に関しては消失状態。思い出せないと言うことだ。

一部とは軍属の頃の記憶であり、大半は思い出せずにいる。

そういうモノらしい。今、桜庭が医者と話している。

七海は、久々に慌てて迎えに来ていた母と対面していた。

「七海、無事だったの!？」

「生きてますよ。お久し振りです、お母さん」

全力で嬉しそうに母に抱きつく七海。

心配していた母は、海軍に行く前に暮らしていた我が子のままで安心していた。

取り敢えずは生きている。

後から、何やら軍で自分から得体の知れない実験に手を出したとか、現場で戦っているとか機密に触れない程度に教えられていたが……本人はけるつと、いつも通りの七海のまま。

不自然に冷静で淡々としている、理屈で行動して感情が薄いのが、母には懐く七海だった。

「七海、心配したのよ! もう、何してるの」

「すいません。心配させて……」

久し振りに母は七海を叱った。

こんな風に心配をかけるような娘ではないが……海軍に入り、やはり少し変わったか。

お得意の理詰めで怒ると、直ぐに反省してくれる。七海は利口であるから言えば分かる娘だ。

手間のかからない、母思いの優しい娘。

対面をしていると、聽て海軍のお偉いさんという若い女性が罪悪感を滲ませて入ってきた。

「失礼します」

母はかなり敵意のこもった視線で女性を睨む。

当然か、と眺める七海に、別室で話があると行って一度退室。

幾ばくか経過した頃に戻ってくると。

「七海、良い知らせよ！ もう、海軍辞めて良いですって。提督やめられるのよ」

母が朗報のように笑顔で伝えてきた。

それは、七海がずっとまっていた嬉しい知らせだった。

行きたくない提督の仕事を辞められる。

母と穏やかな生活に戻れるという意味だった。

「本当ですか!？」

思わず叫び返した。

念願の退役だった。逃げられる。あんな地獄から、逃げられるツ！

大喜びで、母とハイタッチする七海。

もう、あんな気持ち悪い化け物と接する事もなく、平穩に生きていけるのだ。
嬉しくない筈がない！

——違う。辞めたくない……まだ、みんなと……。

(……?)

何か、聞こえた？

いや、気のせいだろう。

七海は気にせず、目の前の朗報に喜ぶのだった。

退役の理由

七海の死亡の後の後始末。

姫園鎮守府には、後釜として元帥の桜庭が着任した。

理由は簡単だ。桜庭が自分から権力の無駄遣いをして仕向けた。

七海が死んだ事は皆に大きな傷跡を残していた。

桜庭は悔いた。教育がしつかり出来ていなかったこと。

彼女に対して出来ることをしなかったこと。

結局、自分が命じた特務のせいで殉職したこと。

死に追いやったのは自分だと感じていた。

だから、せめて贖罪をせねばなるまい。

彼女の預かっていた皆の面倒を見るのが償いだと思つたからだつた。

他の元帥も彼女の異動にはケチをつけずに認めた。

深海棲艦がいるのだ、これぐらいはしておいて当たり前。

そういう判断をしたらしい。

桜庭の着任により、姫園鎮守府はある程度は落ち着いていた。

何だか最近、深海棲艦の活動が活発化しているがそれよりも、この鎮守府の深海棲艦と艦娘たちの面倒の方が優先だった。

「五十鈴、落ち着きなさい。良い？ 渋谷さんの敵討ちなんて止めなさい。あの娘がそれを望むと思う？」

「望もうが、望むまいが……五十鈴が納得する方法はこれしかないんです！ 五十鈴は七海のお姉ちゃんだから……仇は取らなきゃ、報われない！」

「……………」

独房に赴き、何度も五十鈴に止めると言うのに、五十鈴は荒れていた。

あんなに世話を焼いていた妹が見殺しにされたのだ。

我慢しろという方が酷な話だが、桜庭は根気よく宥めて、説得する。

復讐などしたって、七海は帰ってこないと理屈で言うが、そんな彼女みたいなやり方でこの娘が落ち着くわけがない。

桜庭は言った。

「なら、根本は私のせいよ五十鈴。私を好きなかだけ襲いなさい。死地に追いやったのは私だから」

「……………ああああああああっ!!!」

見殺しにする以前の問題で、危険な任務を命じたのは桜庭の仕業だ。

それを言うのと、本当に五十鈴は襲ってきた。

泣きながら、叫びながら、感情を爆発させて襲いかかる。

何度も何度も殴られるも、戦艦に軽巡が勝てるわけがない。

手傷を負わせることも出来ずに無抵抗の桜庭をずっと殴り続けてきた五十鈴だった
が……………。

「…………元帥は、卑怯な人だったんですね…………」

一頻り殴り続けて、拳が血塗れになった五十鈴は、俯いて吐き出した。

憎しみだった。五十鈴はこう、言った。

「分かりました。恨む相手を、憎む相手を五十鈴はあなたにします。元帥を五十鈴は絶対許しません。五十鈴たちから七海を奪った人間を……………決して、五十鈴は忘れません」

「そう。それでいいのよ。私は恨まれるべき相手なの。五十鈴、気が済むまで恨みなさい」

他人に被害を出さないために、憎まれ役を買って出る桜庭。

五十鈴は殺せない相手を恨み続ける選択肢を強いられたのだ。

だから、卑怯な人。人間を優先して、艦娘を下げる卑怯で……妥当な選択だった。

五十鈴は言うことを聞く気もない、とハッキリ言った。

「構わないわ。けど、仕事はして五十鈴。後は、好きにしていいいから」

「……言われなくてもそうしますよ」

今は亡き七海の居場所を存続させるために戦ってくれと桜庭は頼んだ。

五十鈴だって、桜庭の為になど戦う気はない。

ここには、七海の思い出がある。だから、戦うだけ。

七海の残り香を保つために、思い出という最後の繋がりを守るために。

その為だけに、日々を生きると決めた。彼女を恨みながら。憎みながら。

壊れた如月、山風、弥生は未だに出てこられない。

精神が緩やかに廃人に近づいているらしく。

如月は相変わらず自分の世界に閉じ籠り、虚空を見て幻覚の七海を作り出し。

生きることを諦めた二名は死にたいと毎日呪いを吐き続ける。

何れは心が壊れて、使い物にならないことになる。

生きたまま死んだ状態になるだろうと予測された。

春雨、村雨も似たようなものだ。

此方はずっと現実逃避しており、引きこもってずっと泣いていた。餓死するから何か食べると言っても無視して泣いている日々。

長くは持たないと、桜庭が強引に突破して食事をさせて、此方も入院させた。案の定、廃人になりそうな危険な状況になってしまっている。

小春のみ、深海棲艦たちを束ねて前向きになっていた。

深海棲艦たちは、七海を弔うように毎日空に向かって、線香を焚いて手を合わせている。

人間でいう、供養に似たモノのようだ。彼女たちは、死者を弔って、生きていくと桜庭に言っている。

強い子だと思った。こういう場合、深海棲艦の方が精神的に打たれ強いのだろう。

由良も悲しみを湛えたまま、毎日過ごしている。

悲しみはあるが、彼女は帰らぬ人となった七海の為に出来ることをしている。

「由良も……何時かは、会いに行けますから」

そう告げる由良は忘れるように忙しいことばかりをする。

悲しみを誤魔化すために必死になっているんだらうと桜庭は見て感じていた。

他にも、山城は不幸という口癖を止めた。

七海という提督のそばで戦えた幸運を否定したくないからと言って。ヴェールヌイは、七海の遺品を一つ受け取り、大切に保管していた。

彼女との思い出は一度消えたが、恩人であることには違いないと言った。

皆、それぞれ七海の事を、ゆっくりと受け入れ前に進もうとした矢先に、その連絡はきた。

死んだはずの渋谷七海、その人から……。

結果から言えば、七海はどうも生きていたらしい。

理由は全くもって不明だが、奇跡としか言いようがない。

だが、無論奇跡と言えど代償はあった。

七海は、沢山のモノを失っていた。

病院で治療を受けると同時に桜庭は根回しして、少し簡易的ではあるが検査も行わせた。

搬送された病院が軍部の息のかかった場所ではなかった。

簡単な検査は行えた。だが、結果は絶望的だった。

七海はまず、記憶を欠落させていた。

自覚があるようだが、どうも海軍に入ってから記憶……特に、艦娘と深海棲艦絡みの記憶を殆ど失っていた。

自分が今まで艦娘のために何をして来たかを何もかも忘れてしまったのだ。

島村や赤松、桜庭などの艦娘を通じて出会った人間の事は覚えてしまっている。

が、その出会いなどは曖昧に補完している為に事実とは矛盾が発生しているようだ。部分的な健忘症のようなものらしいが、いつ思い出せるかは不透明。

仮に思い出せても、もう意味などない。

七海は、提督の素質も失っていた。

試しに再会した際にさりげなく妖精を同行させたのだが、見えていなかった。

無反応だったのだ。無視しているかと、彼女の知らない艦娘と言わずに会話もさせたが、常人と同じ反応をした。

つまり、妖精が見えずに艦娘の言語も理解できない普通の人間となっていた。

そして、最大の消失は。

七海は全ての力を失っていた。

艦娘と深海棲艦の力を失い、人間に戻った。

一般的な高校生に逆戻りしている。

常人となった七海は、以前の艦娘を化け物と言う言動に戻り、皆との思い出を思い出せない。

要するに、だ。

七海はもう、提督を出来ないという意味だった……。

唯一の肉親である母親に桜庭は直接謝罪した。

散々彼女に激務を与え、挙げ句には死亡寸前の事態まで起こしてしまった。

元帥がであろうことか人間に民間人に頭を下げるという異例の事態。

母は言った。

「七海はもう、十分役目を果たしました。いい加減、うちの娘を解放してくれませんか？」

詫びる気持ちがあるなら誠意を見せろと糾弾された。それもそうだろう。

桜庭は独身ゆえに娘などいない。母親の気持ちは想像するしかない。

だが、愛娘を軍部の機密という建前で隠されながら利用されるのは、義務と言えどよい気分ではない。

母ならば、噛みつくぐらいはすると思っていた。だから、頷いた。

「分かりました。私が責任をもつて、娘さんを除籍するように手配するとお約束します」
元帥ほどの立場なら、退役も簡単に出来る。桜庭は約束した。

実際、素質の消えた七海は続行は不可能。

軍部の記憶も消えているので、解放しても何ら問題はない。

多少の制限あれど、七海は自由になれる。

これ以上、彼女を追い込むのは……桜庭も心が痛かった。

(渋谷さんは十分頑張ったわ……。もう、海軍に縛り付けるのは止めないと)

償いにはならないが、桜庭は自分が全ての後を継ぐという条件で引き受けた。

七海の仕事は桜庭が後任となって続けていく。それで解決した。

あとは、艦娘たちには生きていたことは言わない方がいい。

余計なシヨックを与えるだけだ。何せ、誰だと聞かれるのが目に見えている。

だって、七海は覚えていないのだから。

あれ以上の残酷な運命を与えれば皆の心が死んでしまう。

秘匿する。それが、桜庭の決定だった。

そして。七海は、自由の身となった……。

「久々の我が家はどうか？ 七海」

「漸く帰ってきた気がします。ここがあたしの家ですから」

二週間後。七海は検査入院を終えて、日常生活には問題なしと下されて家に帰ってきた。

久々に見上げる平屋の一軒家。ここが七海の実家。母と生きていた居場所。

七海が七海のまま、娘として生きられる唯一の世界。

夜遅く、母と戻ってきた七海は、少しの間は自宅療養をしてから高校に復学する。

学校の友人たちにも一応連絡した。

海軍で理由あつて退役してきたと言うと、お帰りとそれなりには歓迎されていた。

まだ、連中には七海は価値があつたようで、困つたことがあつたら何時でも言えといつてくれた。

損得勘定の関係であつたが、互いに繋がる程度の理由はあると七海は思う。

どうせ、鎮守府の事は思い出せないし、忘れている方が日常的には楽チン。

どうでもいいと、思い出すつもりも更々ない彼女は、念願の我が家に戻つてきたのだ。

「お母さん、何か食べましょう」

「そうねえ……。折角帰つてきたんだし、母さん奮発しちやおうかしら」

「じゃ、私も手伝いますね」

親子仲良く、家の中に戻つていく。

遅い夕飯を食べようと、久々の母の手料理を楽しむにする七海であつた……。

……待つて。

確かにお母さんと一緒に暮らしたいのも否定はしない。

けど、足りない。あたしは、足りない。

これだけじゃないの。

あたしが欲しいモノは……日常だけじゃ足りない。

けど、ちよつと頑張りすぎたかもしれない。疲れちゃった……。

だから、今は……少しだけ。

少しだけ、休ませて……。

消えた記憶、消えない憎しみ

渋谷七海が提督を退役した。

そのニュースは、僅かではあるが関係者には伝えられた。無論、極秘で。

多くは深海棲艦の親玉が死んで後釜の桜庭に安堵しているのだ。

余計な混乱は招かない方がいい。

「相棒……」

「ふむ……今度、顔を見せて往こう。武蔵よ、貴様も来るか？」

「ああ。私も、彼女には大切なものを教えられた多大な恩義がある。礼を言わねば、筋が

通るまい」

桜庭の判断で知らされる事柄には国防のハゲも交じっていた。

嫌そうだったが、それなりに良くしていた彼には一報入れないといけないと、渋谷々伝

えた。

で、生きていたことを安堵する島村と相棒、武蔵。

ならば次はどうするかと言えば、恩義を通す。

どうにも、記憶を失っているようだが、然し言わねば二人は気が済まない。

生きる。生きて、戦い続けろ。この教えこそ、今の島村の生き方と言える。

言葉こそ強さの根本とも言われた。まだまだ若輩だが、いつかあの背中に追い付きた
いと思う。

七海に言われた教えは、島村の在り方を変えたのだ。

正直に言おう。島村は七海を尊敬していた。

形に問われない自由で奔放な柔軟性。

必要ならばあらゆるものを取り込む貪欲さ。

それでいて、受けたモノは必ず返す義理堅さ。

到底、島村には真似できない。

「彼女は……強かったな」

「ああ。私も何時か、渋谷さんのような流水のごとき強さを手に入れたものだ」

「流れる水か。確かに、彼女には形はないな」

二人は思う。強い提督だった。強者の有り様ではないかと島村は思っている。

その精神は水のような無形で、何者も受け止める寛容さがあつた気がする。完全に気のせいであつた。無形は無形でも、七海の中身は沸騰する汚泥だ。

死臭を放ち、周囲を汚染する単なる害悪で、島村のような大山の志とは意味が違う。

受け止めるのも自分が気に入つた相手のみで、気に入らないなら攻撃するだけ。

そういう汚染物質を相変わらずこのハゲは勘違いしていた。

だが、島村のような男に尊敬される、無形の強さは本物だつた。

強者。イカれたサイコパスは強いだろう。内面は。

だが、今の七海は人間の頃の彼女だ。また、形は変わっている。

然し、島村を覚えている七海も、島村を頼れる大人、敵わない大人とちゃんと尊敬し

ていた。

理由はシンプルで、彼の言動には一切の妥協も嘘もない、豪傑と言える魂があるから。

七海が無形の汚泥ならば、島村は対極の鋼の盾。

受け入れるのではなく、全て受け止めて防ぎきる最高の盾だろう。

最初は喧しい筋肉ハゲゴリラだったが、彼も七海に影響を与えていた。

互いに本質の相性は最悪だろうに、すれ違いを起こしながら歯車が噛み合う奇妙な関係。

多分、二人はこのまま続く。認めあっている、人間同士で。

一方、知らない五十鈴は。

(……気晴らしでもしよう)

適当に街に出掛けることにした。

辛すぎる。鎮守府には、あの娘の気配が強すぎて。

振り向けば七海はいて、五十鈴が追い回す日々が脳裏に浮かぶ。

でもそこには誰もいない。空虚な廊下があるだけで。

少し、外に出たかった。黄昏でいたい気分だった。

運命は変わる。いや、動き出す。

それは、桜庭の予想外の動きで。

口外しないといったはずなのに、ある鎮守府で情報を偶然手に入れた艦娘の行動が全てを動かす。

(……ッ!!)

ギリッ、と奥歯を噛み締めた彼女のせいで。

七海は学校に復学した。

久し振りの学友たちは、七海の額にある傷跡で大体悟ったらしい。

戦場帰りで、引退したのだと。

激しい戦いを経験していると、空気を読んでなにも聞かずに居てくれた。

担任も、今までご苦労様と労ってくれた。

(何も覚えちゃいないんですがね)

とは言えず、適当に流している日々が始まる。

一つ分かったのは、記憶のない七海がやっていた艦娘になるといいう行為は、後遺症で身体的に少し能力が恒久的に上がったままらしい。

今までは運動神経は音痴だった七海が……。

「し、渋谷ッ!! 加減しろ、危ないだろ!!」

「……」

高校生にあるまじきスピードとパワーがあつた。

無論艦娘には及ばないが、それにしたって瞬発力が凄い。

短距離走でオリピック出られるとか顧問に言われた。

止まれずに顔面から地面にスライディングしたが……。

無言で起き上がる七海は制御できない能力に戸惑いつつも、運動着についた汚れを手で払う。

学友たちは、七海の状態が以前よりも丸くなって親しみが持てるとも言うのだ。

(……丸くなった？ ああ、桜庭さんや島村さんのおかげですね)

艦娘を思い出せない七海は知り合いの影響だろうと考える。

あの信頼できるだけの能力と信じさせる言動は、記憶と共に消えた人間への不信感も相まって、徐々に回復しつつあった。

呑気に日常を謳歌する七海。平穏一番、平和が一番。

母も今日は仕事で遅くなるので、友人たちに遊びにいこうと誘われる七海。

構わないと返事をして、放課後出掛けるはずが……。

「渋谷、お前に客来てるってよ？ 女の子が校門で待ってるって」

学友の一人が、放課後にそう帰りの支度をする七海に伝えてきた。

不思議そうに、セーラー服の中学生と言っていた。

因みにここの学校は制服がブレザーである。ならば、違う学校か。

訝しげに、誰だろうかと思ひ、今日は止めておくと行って皆を見送り、校門に向かう。

生徒たちが下校する人混み。学校の名を彫られた石柱に寄りかかる、おさげの女の子

がいた。

見覚えがない七海は、鞆をもったまま面倒くさそうに自分から声をかけた。
すると……。

「……お久しぶりですね、司令官」

敵意と怒りを込めて睨み付ける少女は、彼女を司令官と呼ぶ。

穏やかではない視線に、相応の対応に切り替える七海。

こういう手合いの方が、慣れている気がした。

「はて、貴方は誰でしょう？ あたしには覚えがありませんか？」

知らない顔。ならば、容赦なく言い返す七海に齒軋りをさせて彼女は嫌みを言う。

「……額の傷。本当に死にかけてたんですね。どんな気分ですか、私の妹と同じ目に遭って自分だけ生き残ったって言うのは？」

「知りませんね。誰か死にましたか？ それは御愁傷様です。あたしには関係ありません。それでは」

素っ気なく無視して帰ろうとする七海の腕を素早く掴む少女。

逃がさないと、顔に書いてあった。

「しつこいですね。腕に指食い込んで痛いのですが」

「なら、それは私の怒りだと思ってください。のうのうと自分だけ忘れて生きていくな

んで、私は看過出来ません。せめてもう一度、思い出してもらいますよ」

過去に何か因縁でもあったか。こんな性格だ、厄介な揉め事は起こす自信もある。

意味を悟る七海は、周囲の目を気にしろと彼女に告げる。

「場所を変えましょうか。話ぐらいは聞きますよ。覚えていないですが、あたしの事ならば知る義務がありますので」

「異常者の癖に、そういう部分も相変わらずですか……。良いでしょう、だったら近場に喫茶店があります。そこで話しますので逃げずについてきてください」

先生に呼びに行きそうな空気を察して、七海は妥協すると彼女も仕方無く頷いて、移動を開始する。

その前に、名前を訊ねる。覚えていないのはどうやら知ってるようなので誰だと。

「私は、吹雪。あなたの……。最初の、艦娘ですよ……。司令官」

彼女は……。吹雪と、名乗ったのだった。

洒落た喫茶店の奥の席に、二人は座っていた。

BGMのゆつたりとしたジャズが流れる、人も疎らな店内。

適当にコーヒーでも頼む七海に、今回は代金を支払うと吹雪は言い出した。

「お気遣いどうも」

素っ気ない、頬杖をついて黒い水面をスプーンでかき混ぜる七海。

大して興味もないように、詰まらなそうに湯気を見ていた。

そのふてぶてしい態度にかなりイラついている吹雪は、不愉快そうに七海を責める。

「相変わらず、相手の感情を損得勘定で判断しているんですか、貴女は……。あの頃から全く進歩してません」

「覚えていないことを詰られる理由はありません。ほら、聞いてやるから早く話しなさい化け物。あたしは暇じゃないんです」

挑発する意図もなく、本心で言っていると吹雪は察した。

記憶が消えて、以前の七海よりも更に悪化していると思われる。

この対応が、本来の……人間の渋谷七海の性格らしい。

化け物呼びに戻っているし、下らなそうにしている彼女を見ると、凄まじく不愉快になる。

この女、やはりサイコパスの最低な人間であると改めて思った。

「ムカつきますね……。そうやって、化け物まで鎮守府の中に受け入れていたと思うと吐き気がする」

「はあ……。脱線しないで早く説明なさい。前ふりが長いのは嫌いです。帰りますよ」

完全に自分の行動も無視して本題に入れと言うか。

自分勝手な言い分に、腸が煮え繰り返りそうだった。

ため息をつきたいのは此方だ。

「艦娘殺しの提督が……」

「はいはい、そうですか。そりやすいませんでしたね。で？」

神経を逆撫でする言い方に、グツと我慢して吹雪は客観的に語り出す。

要するに、以前の事。吹雪の妹を始末した時の事を掘り返す。

思い出させるために、加害者が忘れるなど我慢できない吹雪はわざわざ居場所を突き

止めて押し掛けた。

もう一度、彼女にせめて思い出させる、あるいは教えるために。

「貴女は私の妹を殺したんですよ!? 自分だけ平穩に生きているなんて私には堪えられない!」

最後には、七海にそう糾弾する吹雪。思い出すだけで、今でも涙が流れそうだった。殺した女が忘れて生きているなど誰が受け入れられるか。

もう一度教えてやる。この恨み、この憎しみ、この怒りを！

七海は……呆れていた。心底、理解できないように大きいため息をついて、一通り聞いてから言い返す。

それは、想定以上に最低な反論だった。

「どうでもいいですよ、そんなもん。解決した話を蒸し返して今頃やつかみするの止めてください。迷惑ですのでも」

どうでもいい。どうでもいいと、七海は吹雪に言い放つ。

啞然とする吹雪に、七海は指摘する。得意の理屈で。

「聞いている限り、忘れているあたしの行動に問題点はありません。その如月という化け物を守るのは当然でしょ？ 何故なら、当時の鎮守府の最高戦力を、下手すると自爆で失うかもしれないから。エースを失うなら、天秤にかければ当たり前の判断じゃないですか。誰がその失った分を支えるんです？ 損害を考えなさい。大体、あたしの鎮守府にいるお前が、なんで島村さんのやり方にケチを言うんですか？ 所属違うなら、他所の鎮守府に喧嘩売るんがお前が言い分です。筋違いも良いところですがね。恨むなら百歩譲って島村さんでしように……。なんであたしを恨むんですか大体が？ しかも未だに。被害者面して？ バカらしい……。あたしの判断は当たり前、尚且つ妥当で安全なモノだと言えるでしょう。上の人も事故だと言うなら事故ですよ。事故以外に有

り得ない。恰も殺人のように言ってますが、お前らは人間じゃない。故に適用される法もない。良いですか、お前らは単なる化け物。分かります、この人間擬きが」

スラスラと、当時よりも酷い罵倒が飛び出した。

自分は正しい。何も間違っていない。そんなことでいちいち今頃構うな鬱陶しい。要約すると、七海はそう、吹雪に改めて言うのだ。

「……………」

ブチッ、と怒り心頭の吹雪からなにか聞こえた。

完全に怒り狂い、今にも殺そうとしてくる気配があつた。

だが。今回は……怒り狂うのは、吹雪だけじゃない。

今の七海は、嘗ての七海が激怒する単語を言っていた。

——あの時一緒にいた吹雪やあたしの嫁を、勝手な理屈で化け物扱いするなアツ!!

なにかまた、幻聴が聞こえた。

怒り狂う、自分の声？

訝しげな表情になる七海を尻目に、勝手に左手が動き出す。

七海の意味じゃない。恰もリモートコントロールされるように、突如左手は反逆す

る。

湯気をあげるコーヒーの入るマグカップを掴む。

吹雪が仕掛けてくるか、と身構えるが。

予想外の動きをする左手。驚愕の七海。

そのまま豪快に、自分の顔に向かってコーヒーをぶちまけた。

「あつつう!?!」

顔面に多少冷めても尚熱いコーヒー浴びて、驚いて慌てて紙ナプキンで顔を拭く。

悲鳴をあげて震える彼女に、呆然とする吹雪。

理解できない七海は混乱していた。何が起きたのか分からないまま、ただ震える。

言葉を失う吹雪は、取り敢えず待っている事にした……。

それぞれの事情

七海が厄介な事を受けている頃。

ボーツと、海を埠頭で眺める戦艦がいた。山城である。膝を折って、夕陽が海に沈むのを眺めていた。

今日も、仕事はない。いや、あつたが奪われた。

(私……鎮守府に居る方が長いですよね……)

最近の悩み事。それは、後任の桜庭元帥の事だった。

ここ数日、山城は出撃をしていない。鎮守府内部の仕事ばかりだ。

それも簡単な雑務ばかりで、数人が抜けた穴を埋めるために、新しく艦娘も建造された。

全員が駆逐艦だが、いかんせん態度と口が悪くて、折り合いも悪かった。入院中の艦娘たちを悪く言つて昨日は由良に叱られた。

深海棲艦がいると不満を言つては元帥の雷を落とされていたり。

どうも、駆逐艦たちにはこの居心地は良くないようだ。

曙とかいう奴には、お留守番戦艦と言われて。

霞とかいう奴には、気をしっかり持てと励まされ。但し言い方はキツイ。

満潮とかいう奴には、この空気は何でこんなに沈んでいるのかと聞かれて。

要するに、空気は最悪であつた。

(提督が居ないと、ここは機能しませんよね……)

七海が居ないとここは上手く動かない。

不平不満は種類が違うだけで全員が抱えている。

当然、山城もある。

ため息をついた。あのなかは堪えられない。

刺々しい艦娘と淀んだ艦娘しかいない。あとは張り切る深海棲艦ぐらいか。

そんな状態だから、長居はしたくない。

そういうときは、彼女が消えた海を眺める。

気晴らしに、なる気がして。

丁度、背後に足音と、声が聞こえた。

「隣、良いかしら？」

振り返ると、姉の扶桑と空母の飛鷹が、疲れた顔で立っていた。

「姉様、飛鷹さん……」

取り敢えず構わないと言つてから、何があつたか聞くと。

げんなりした顔で、飛鷹は言つた。

「曙が小春達を怒らせて、血祭りにされたわ。で、ドタドタしているから逃げてきたわけよ」

七海を侮辱することを口走つた阿呆が、深海棲艦たちに袋叩きにされたらしい。

巻き添えを嫌がり、逃げてきたと二人は言つた。

仲裁した霞が奮闘したようだが、本気で怒つた姫に勝てるわけもなく。

タコ殴りにされていたと伝える。

「またですか……。あの曙っていう娘は、何でああ口だけは達者なのかしら？」

呆れている山城。

曙は毎回懲りずにバカを言うから、練度が軒並み高いここでは毎度痛い思いをしている。鬱憤が溜まっている深海棲艦や艦娘を無闇に刺激して、大した練度もない奴が調子に

乗るなど皆に目の敵にされている。

それでも自分は悪くないと見栄をはるから更に桜庭をも怒らせる。

霞や満潮は揉めはするが大抵気遣いだし、曙と違って罵倒じやないの大きい。

つまりはあいつが問題の発生源と言うことになる。嫌われていた。

「最初の頃の七海みたいね……。あの娘の方が万倍良いけど」

直ぐに噛みつくのは七海に似ているが、七海は理屈で潰す。

曙のような稚拙な罵りじやない。あいつは単なるガキだと飛鷹は言い切る。

「まあまあ……」

扶桑が苦く言いながら宥めて、逃げてきた飛鷹は暇をしていたとも言う。

「元帥が全部片付けちゃうからね……。過保護もここまで来ると鬱陶しいわ……」

「……ですよね。戦えない艦娘って、なんのために居るんでしょうか？」

「……………」

飛鷹の言うことは正しい。

桜庭は艦娘を過保護にしていた。

遠征などの最低限は頼むし、書類も艦娘にはお願いする。

新しい面子を叱り、平穏を保ちたいのは分かるが。

正直な話、此処を纏めるのは桜庭でも無理だ。だって、彼女は強すぎる。

山城は言った。

「桜庭元帥は、存在が……艦娘のアンチテーゼみたいなモノですものね」

あの人さえ居ればいい。他は一切必要ない。

それが、皆の不満。自分の出番は既に存在すらしない。

そういう空気があった。事実、彼女一人で狭い海域の深海棲艦は今や絶滅している。

桜庭が数時間フルで戦って、滅ぼして以降は敵が寄ってこなくなつた。

伽藍とした平穏な海をこうして眺めているのは、彼女の活躍あつてこそ。

じゃあ、何か。あとの皆は要らないのか？

どうせ一人で倒せるから、適当に哨戒していればそれでいい？

彼女の存在は、皆の意義を揺るがす。アイデンティティーの否定に近い。

だから、こうして普通の艦娘である飛鷹は陰口を言うのだ。

提督としての能力の完璧さゆえ、艦娘としての性能ゆえの不満……いや、悪口を。

「やっぱり、姫園鎮守府は七海の鎮守府よね。それを痛感しているわ」

「不幸とは言いません。けど……今の状況は皆が不幸、です」

山城は、七海との出会いは幸運と言う。

それを不幸と言えば七海の、自分の否定になるから言わない。

代わりに、皆が不幸という言い方をするように心がけている。

實際、皆は不幸である。出番もなく、鎮守府のなかで腐っている艦娘からすれば、そして、眼前に立っている勝ち目のない巨大な存在が、自分たちを惨めにさせる。

「……空はあんなに綺麗なのに……」

扶桑は夕陽を見ながら呟く。

皆は、決して桜庭を提督とは、呼ばない。

元帥としか言わない。何せ、皆の提督はもう、海のなかだ。

帰つてこない。戻つてこない。二度と、永遠に。

役たたずと行動で示されるような日々。

喧しい駆逐艦。鬱憤だけが溜まり続ける掃き溜め。

七海が死んでから、全てがおかしくなつていった。

「不幸を通り越して、最悪ね……」

「本当にそう思います……」

三人はもしもを願う。有り得ない願いだ。

七海が生きていて、この世界に居るとすれば。

戻つてきて欲しかった。皆の提督は、世界中を探しても……彼女一人だから。

生きていた。色々な意味で。

「……何をしているんですか?」

漸く出てきた言葉は、意味不明な行動をする七海に対する不信感。

吹雪に問われて、七海は震えながら答える。

「知りませんよ……。何なんですか今の……。? 勝手に身体が動いて」

と、言っている最中だった。左手の反逆再び。

今度は素早く後頭部を掴んで、喋る最中に顔面を机に叩きつけた。

「ふぎやつ!」

汚い悲鳴とすごい音がして、喫茶店の店員が此方を振り向く。

吹雪が慌てて、愛想笑いで誤魔化すが……。突っ伏して震える七海はかなり痛そうだった。

一人芝居か、あるいは本気でイカれたかと思うが、顔をあげた七海は混乱しているように自分に悪態をついている。

真つ赤な鼻っ面で、怒った七海がマグカップで自分の左手を叩き割ろうとしたので流

石に止めた。

「司令官、わざとらしいですよ？ 何なんですかそれ」

「知りませんよ！ お前が毒でも盛ったんじゃないのですか!!」

七海も分ならず、とうとう右手で机を叩いて立ち上がり怒鳴った。

もう無理だ。吹雪もキレて店内だというのも忘れて怒鳴り返す。

「いきなり言いがかりですか!? そもそも私が何をすると言うんです!!」

心外な言い分に言い返すと、お前がここにしようと言いだした。

つまり最初からお前は協力者が居て、七海に一服盛ったのだ。

お前は恨みのある七海を毒殺する気なのだ。一応、七海の目線では理屈に合っていた。

「はあ!! そんな遠回しなことをする前に、だったら自分で殺してますけど!」

「やはりあたしを殺すんでしょ!!」

怒鳴る吹雪の意思をそう汲み取った七海は鞆をもってすぐさま脱走。

逃走を開始した。お会計はそちのチビが支払うと店員に言って走って逃げた。

「ちよつ……! 逃がすか人殺し!」

直ぐに追いかける吹雪も走り出す。

お金をレジに、諭吉を叩きつけて、お釣りは要らないと怒鳴って店を出た。

人に冤罪吹っ掛けて逃げるとか、相変わらず性根の腐った女であった。

(絶対償わせてやるッ！)

せめて、詫びてくれれば。

それで、もう済ませる気もあつたのに。

自分でも仕方無いとわかつている以上は、ただ伝えて忘れなくて欲しかっただけ。

別に、どうこうする気などない。あの態度を見るまでは。

もう許さない。ぶん殴って半殺しにしてやると怒り狂った吹雪が、周囲を見回して追走を開始した……。

その頃。街をボーツと歩く五十鈴が居た。

鎮守府の騒ぎも知らない五十鈴は、当てもなくさまざま迷っていた。

理由などない。気晴らしに街を徘徊しているだけで。

初夏の匂いが近い夕刻。無地の灰色の半袖とホットパンツの五十鈴はナンパもされ

たが全部無視した。

以前ならばすぐに七海がキレて血祭りにしようとするのを五十鈴が止めていた。

今はそれすら、懐かしい。もう、そうすることもないのだ。

(七海……どうして、死んじゃったの……?)

繰り返す思考は、終わらない疑問を果てなく回している。

前もよく見えない五十鈴。上の空で込み合う、ある街の駅前通り。

大きなスクランブルの交差点で、信号待ちをしていた。

赤信号を見上げて、気にせず周囲が流れ出したら……五十鈴も進む。

いつも通りのツーテール。目立つ可愛らしい顔立ちの五十鈴だが、顔色は優れず表情も暗かった。

こんな彼女に光を、希望を与えることができるとすれば。

それは、この広い世界でも一人しかいない。

例えば……青信号で一斉に渡りだした交差点を真っ先に走って逃げるように全速力で駆け抜ける少女とか。

「……えっ」

五十鈴は偶然見た。目を見開いた。

有り得ないハズの顔が、青ざめた表情で逃げ惑い、見知った顔が彼女を追い回してい

る光景を。

そんな異常な光景を、帰り道の他人は五月蠅そうに見ていたりするだけで助けに入らない。

見慣れない制服の少女は学校帰りだろうか？ 慌てて歩き出す対向の人混みに紛れて隠れた。

「逃がさない……人殺しがッ!!」

喧騒に混じる侮蔑の声。聞いたことのある、知っている声で。

艦娘の優れた聴覚だから聞き取れた独り言。

そして、あの娘に似た少女を追いかけるあの女。

……知っている。五十鈴は、知っている！

(……行かないやッ!!)

危ない。

そう、本能的に感じていた。

こちらに向かつて走り抜けている少女に向かつて人混みを掻き分けて進む。

早く早くと、強引に進んでいく五十鈴を迷惑そうにしているが、五十鈴は気にしない。

あの小柄な彼女は……見間違いや現実逃避の幻覚でなければ。

少女の影を見つけた。逃げ惑うように必死に進む彼女に手を伸ばす。

「七海ッ！ 此方よ!!」

往来する人混みのなか、五十鈴が叫んだ。

こつちに来て。助けるから。守るから、今度こそ。

五十鈴が叫ぶ声に、影は一度停止して。

向きを変えて、向かってくる。

戸惑うように然し伸ばした手を見て、彼女も手を伸ばした。

左手を、五十鈴の右手が掴んだ。そのまま抱き寄せる。

「フアッ!？」

奇声をあげて、引っ張った先で……姿を見せる彼女がいた。

額に大きな傷跡が残るが、最初の姿で彼女はいた。

「……七海ッ!!」

嗚呼、間違いない。

見間違いでも、幻覚でもない。

この娘は……!!

「はい!? あんた誰ですか!? トラック印のネギの歌姫!？」

「誰がトラックのディーヴァですって? まだ懲りないわけあんたは?」

戻って早々これか。感動台無し。罰に脳天に拳骨。あと逃げる。

「痛ッ!? 見知らぬ他人に殴られた!? え、誘拐!?!」

「五十鈴を変態と一緒にしないの! ほら、逃げるわよ!!」

今は逃げよう。七海を抱えて直ぐに素晴らしい跳躍力で、人混みを飛び越える。

周りが驚いたように見上げるが知ったことか。

五十鈴は取り敢えず妹確保。お下げから逃亡していく。

それを見た吹雪は、味方がいたのかと舌打ちして追走を止めた。

あの人は違う鎮守府の艦娘。手出しはできない。

悔しそうに、忌々しそうにしながら去っていった。

その後、逃げ切った二人は……適当な橋の上にあるベンチで休憩していた。

七海はじとつと、知らぬ女性を睨んで見上げて聞いた。

「で。一応助かりましたけど……お前誰ですか」

「七海……? 嘘でしょ? 五十鈴を分らないの?」

「五十鈴? トラックですか?」

「あんた絶対覚えてるでしょ!?!」

グリグリされた。痛い痛い。

「痛い痛い痛い!!」

「あれ……感触が違う。じゃあ、あんたやっぱ人間に……」

グリグリの手触りが違うとか言い出して戸惑う女性。

涙目で見上げる七海は鈍痛で震えていた。

「何なんですか……。あたしその頃の記憶がないんですよ……。お前も以前の知り合いならなんでこんなひどいことするんです……。あたしが何したって言うんですか……」

と、涙を浮かべて経緯を一通り説明する七海に、顔面蒼白になった五十鈴。

嘘を言うような娘じゃないのは知っている。

だったら……。

「ご、ごめんなさい！ 何も知らないで五十鈴……何てこと！」

「痛い……」

「七海、大丈夫!? すぐにお医者に行こうね!? 五十鈴が何とかするから待って!!」

真面目に凄まじい痛みを与えられて呻く七海を抱えて、五十鈴は由良のように慌てふためき、そのまま駆け足。

どうにかするべく、行動を開始して……。

「お母さん。この人五十鈴と言うんですけど、突然ですがこいつ家に居候させてください

い」

「!?」

こうなった。

啞然とする母に恐縮している五十鈴が七海の実家に居た。

そういうことらしかった。

身辺護衛

事の顛末を端的に語ろう。

七海を保護した五十鈴は取り敢えず桜庭に連絡。

何事かと忙しい桜庭に開口一番。

「何で七海が生きていたのを黙っていたのよッ!!」

敬語すら忘れて怒鳴り付けた。

ふざけるんじゃないと怒った五十鈴は、桜庭に荒っぽく語った。

ずいぶんと前に異動した吹雪が、民間人になった七海を殺そうとしていた。

一体全体どういふことだと怒鳴り付けて、極秘にしたハズの話に桜庭も問い返した。

「何ですって!?! 五十鈴、渋谷さんは無事!?! 詳しく話して!!」

今までやってきたことが事で、しかも一度は人間にも暗殺未遂のある七海。

とうとう艦娘にまで狙われたと聞いて血相を変えた。

説明を受けた通りに受けて桜庭も怒り、連絡後異動した鎮守府の提督に電話で怒鳴った。

「あんたは危機管理能力がないの!?! 吹雪を出しなさいツ!! 今すぐに! 居ないなら呼び戻せ!」

元帥直々の抗議にビビった相手先は戻ってきた吹雪を差し出して、ため息をつけてすべてを語る吹雪は、桜庭に説明した。

疲れたように、そんなことはしていない、誤解だし様子がおかしいのは向こうだと指摘する。

激昂する桜庭にも怯まない肝っ玉は大したものだが、何なら店の防犯カメラでも関係性でも何でも調べればいいと開き直る。

そこまで言うなら、と桜庭も一度は矛を収めるが……。

「あんな異常者でも助けるんですね……。正直、失望しました」

吹雪は電話越しにそう、落胆したように桜庭相手に言い切った。

「それは自分の感情を抑制できない未熟者のやっかみで良いのかしら吹雪?」

「お好きに受け取ってください。もう、私は理屈とかじゃ止まりません。許しませんか

ら、絶対。解体したければどうぞ。それこそ、命懸けで私は報復しますよ……。あんな態度取られて、許せる程大人じゃないので」

頭では分かるが絶対に諦めないと言う事実上の宣戦布告。

桜庭は止めておけと警告はした。が、解体はしないと情けをかけた。

「解体なんて甘い方法で死ねると思わない方がいいわ吹雪。あの事故はもう、終わったこと。それを蒸し返し、彼女の平穏を脅かすなら……。覚悟はしておきなさい。私じゃなく、もう一度この艦娘に倒されるといいわ」

「そうですね……。所詮は元帥も、人間の味方なんですわね」

事故であると再三言っているが、あまりの七海の態度に激怒した吹雪は止めないと
言った。

桜庭は、あくまで七海の味方。あの事故は特に過失はないのだ。

それでも認めない吹雪には、ついでにチャンスも与える事にした。

「なら、本来の憎むべき相手も紹介してあげるわ。……。あんたの妹を死なせた人でなしをね」

そういつてから、ある鎮守府の提督に向かえと差し向ける。

吹雪は意外そうな声で理由を聞いた。

「あんたのその情けない憎しみを否定するためよ。本来の相手にせめて勝ててから渋谷

さんに恨み言を言いなさい。あと、ソイツを舐めない方が身のため。……はつきり言う
と、強いわよあいつは」

筋を通してから襲えと条件をつけた。

日時は決めてやるから、行くなら堂々と行けと。

「……」

「それとも、勝てない相手は恨んでいても我慢するの？ 都合の良い憎しみね吹雪」

「何を……ッ!! 行きますよ、上等じゃないですかッ!!」

そう怒鳴った吹雪は、必ず恨みを晴らしてやると言って乱暴に切った。

最早言っても聞く気のない吹雪には、キツイお仕置きが必要と判断した。

それこそ、死ぬよりも痛みの激しい罰だ。そんな簡単な罰では足りないだろう。

終わったことで、民間人の七海に独断でちよつかいを出したのは解体程度じゃ済ませない。

先ずは部下の暴走の責任を提督に取らせる。降格処分と減俸を言い渡した。

全部吹雪のせいだ。ああいう手合いは本人よりも周囲に痛みを与える効果がある。

大人げないにも程がある。いい加減、恨む相手ぐらいしつかり見ろ。

恐らくはあの吹雪は、七海の性格が気に入らない私怨もふんだんに含まれている。

八つ当たりと報復が丁度良いから七海を狙った。そう言うことだ。

だから、けしかける。本来の相手に。桜庭は彼にも連絡した。

近々、そつちにお前に恨みのある艦娘がお礼参りに行くから、相手しろと任務として命じた。

「……成る程。承知いたしました」

男、島村は話を聞いて請け負った。

彼ならば勝てよう。吹雪をブツ飛ばしていいと言うと、全力で倒すと言った。

「島村提督……。今の貴方なら大丈夫とは思いますが、あまり無駄な死人を出さないでください」

「ええ。あの時の私は甘かったのです。甘さは、とうに捨てております」

本来の怨恨は彼に向くべきだ。

その彼も、今では無駄な解体や轟沈は出していない。

何故なら、自分が艦娘の命の処遇を決めるべきではないと悟ったらしい。

今でも、艦娘は兵器であると彼は言う。だが、今はその後こう、続く。

「私も、貴様らも、勝手に死ぬことは許されぬのだ。礎になる覚悟も必要だろう。だが、最も大切な事は……生きて戻り、戦い続けることであるのだ。私の命じていい権限は、生きろと言うこと。死を命じる嘗ての高慢な私は、恥知らずの男であった。甘ったれた男であった。良いか、貴様ら。生きろ。任務を生きたまま必ず成功させろ。万が一のと

きは、私が成功させる。失敗は許されない。ならば、成功する努力を怠るな。油断するな。慢心するな。私は、貴様らの背中で命じるだけでは足りぬと感じている。必要ならば幾らでも前が出る。貴様らも私を使い。私も貴様らを遠慮なく使う。良いか、私達が行う任務が、国民を支えていると、そして……我々が国民に支えられていると忘れるな。以上ツ!!」

生きるべし。生き残り、命ある限り戦うべし。

そう、何度も言うのだ。

死ぬことは甘え、妥協と言うようになり、今までの自分を恥じているのだ。

命を粗末にした指揮を腑抜けの所業と恥じていたこの男は、今は一人の死人も出さない。

必要になれば幾らでも自分が前に出るし、艦娘を無意味に死なせる命令を出せる立場ではないと。

それを決めていいのは守る国のみと言う訳のわからないが、兎に角生きることこそ国防と理解したようで、無謀な任務が増えたが、誰一人死んでいない。

気に入らないが、桜庭だつてわかつてはいる。

愛国者なりの、使命感だと。そして七海が言ったことを、実行しているのだ。

曲解してはいるがきつとこれも正解だ。そう思うので、以前ほど嫌悪もしていない。

前よりは艦娘ともうまくやっている。相変わらず厳しいストイックだし、無茶を言うらしいが。

「自分の甘さが生んだ結果です。私も責任を取りましょう」

憎しみを当然のことだと認めて、責任を取ると言う島村。

変わったと思う。前ならバカなことを言うと切り捨てただろうに。

甘さと受け入れる器になったと感じなくもない。

日時を言うと、島村は準備をしておくと言つて切つた。

これで一応時間は稼げる。桜庭は七海の身の安全を確保しなければいけない。

罪滅ぼしは終わつてはいない。大体島村は、結構な格闘術を会得している。

艦娘を想定した武術も知っていると聞いたことがあつた。

(下手すれば真面目に返り討ちも有り得るわね……)

あいつは強い。生身で艦娘を倒すぐらいならばできると思われる。

陸上では海上ほど脅威ではない。やり方次第で制圧は可能だ。

兎に角。桜庭は、今のうちに手を打っておく事にした……。

五十鈴は、七海の身辺護衛を任された。

聞けば、今回は吹雪の誤解であつたが、今回は狙いに来ると言っているらしい。

諦める気はないようで、言つても死ぬ覚悟をしてまで報復する気だそうだ。

大体、七海の謎の行動も、本人も幻聴が聞こえたとか、身体が勝手に動いたとか言っている。

その辺は追々後日に医者に行くとして。

その日は速攻で七海の実家に行けと言われた五十鈴。

七海も桜庭に言われて尚且つ体験していると頷いた。

「この艦娘が守つてくれるんですか？」

電話口で問いかけると、そうだと桜庭は説明した。

化け物なのにな？ と言つた途端に反対の左手。

グーを作つて自分で頬を殴る。五十鈴もビックリ。

痛そうに鈍い音をさせ殴られる……いや殴る七海。

どうも、彼女たちを貶す事を口走ると襲うようだった。

「重症ね……。また医者に行きましよう」

と、桜庭は言った。

五十鈴は鎮守府に戻り、必要な荷物を持ってきた。

首の翻訳機の充電もしておくため、充電器も持ち込んだ。

こうしないと話すら今の七海とは出来ないと言われて、ショックの五十鈴。

本当の事を桜庭に聞いた。混乱をさせないためだったそう。

記憶喪失等と聞けば、皆はもつとメンタルが危ないのは理解できるので納得はした。

兎に角、七海は今までのことも含めてまだ危険なことがある。

五十鈴が居れば、安全にはなろう。

最悪もつと寄越すと言うので、仕方ない。

実家に連れ帰り、事情を母に一から説明しておいた。

のちに、桜庭も一報を入れて生活費などは海軍で工面すると言う。

「七海が……。不安定だからですか」

七海の記憶にも関係あるとでも言ったのか。

家の中で待っている五十鈴と、勝手に着替えて五十鈴の様子を観察する七海。

電話で話す母は、聴て話し終わって五十鈴を見た。

「……。事情は分かりました。五十鈴さん、うちの娘を……。宜しくお願いします」

母は、七海の奇行が解明するまでは最低でもお願いしたいと言った。

五十鈴も頭を下げて押し掛けて申し訳ないと謝りつつ、しっかりと請け負う。

「あたしの警護ですか……。まあ、良いですけど……」

面倒そうにしている七海は、五十鈴に余計なことはするなと言っておく。

「分かっているわよ」

「そうですか」

素っ気ない対応だが、左手はずっと五十鈴を掴んでいる。

その行動と言葉の解離が記憶の混乱だと言われて納得する母。

何はともあれ、五十鈴はこうして……七海の実家に暫く居候することになった。

無事に終われば良いのだが。七海は荒事はいやだと思いが、同時に。

——五十鈴が遊びに来ました!! これで勝てる!!

という、自分のほしやいだ幻聴が聞こえた気がしたのであった……。

日常の五十鈴、変態の七海

時間は少し遡る。

五十鈴は鎮守府で色々と準備をしている頃だ。

またああだこうだと曙がごねて、小春の怒りを買って絞められている日常。

最早別の意味の……決して、楽しくも優しくもない喧騒が常のここで、一気に雰囲気が変わったのが五十鈴だった。

刺々しさが消えて、いそいそと荷物を纏める彼女を見て、ある意味同じものを求めて止まない一部と、恋しい一部は勘づいた。

真つ先に由良が疑いを持った。

「五十鈴、何してるの？」

部屋でこそそそしていた彼女がバッグを持って再び出ようとしているのを廊下で目撃。

今日は出掛けていたはずだが、夜遅くというのにどこにいくのか聞かれる。

冷や汗を流して五十鈴は桜庭に外部任務を任されたと言った。

「内容は？」

「極秘だから言うなって……」

「ふうん……う？」

怪しい。あれだけ荒れて、落ち込んでいた五十鈴が復活している。

しかも今度は周囲の目を気にしているように見える。

由良は五十鈴にそう言うが……彼女もバカではない。

すぐに原因を知るがゆえに、一つの結論に至った。

だが、同時にそれは有り得ないことで。

でも、それ以外に説明もつかない。

(……まさか?)

そのまさかだとしたら。

皆が喜ぶ。少なくとも、桜庭はともかくもこの空気を歓迎しない艦娘たちは。

深海棲艦ももろ手をあげて賛成するのだが……。

五十鈴は適当にあしらってさっさと出ていった。

その背中を見送る由良は、桜庭に言っても無駄だと悟る。

だから、決める。極秘という任務だが……規律を犯してでも調べる価値はある。知るだけの、理由はありそうだったから。由良もまた、独自に行動を開始する。

「七海。ワガママを言うんじゃないの」

「いいえ、ワガママではありません。当然の理由です」
で。

早速護衛の五十鈴は七海と揉めていた。

覚えていないとはいえ、五十鈴は七海を知っている。

せめてものお礼に、普段は忙しい母に代わり、渋谷の家の家事を代行すると言い出す五十鈴を。

「我が家で勝手は許しません。あたしがします」

一応でも出来る七海が邪魔をする。

自分の家で他人がでかい顔するなという事のように。

然し、ただ飯は許されないと五十鈴も譲らない。

理屈で言えば五十鈴の態度はおかしくないし、そう説明するが。

余計なことをするなと言ったはずだと七海は怒る。

「記憶のないあたしを知っているようですが……あたしは知らないのですよ。分かっていますか」

「分かっているわ。無理矢理思い出させる気もないし、七海を苦しませる気もない。あなたの性格は分かっているから、あなたの時間も邪魔しない」

今の七海は赤の他人。素っ気ないのも気にしないし、過度な干渉もしないと云う五十鈴。

確かに七海の嫌がることは知っているようだ。以前の親しい仲と言うのも嘘ではないと見る。

が、自分の家で五十鈴が何かするにはまだ抵抗がある。こっちはよく知らないのだから。

「よし、なら五十鈴が七海を手伝う事にする。あなたを尊重するから、五十鈴の言い分も認めてくれない？」

「……成る程。妥協案ですか。分かりました」

割と直ぐに解決した。五十鈴は筋の通ることを言いながら七海の意見もちやんと聞

く。

七海も五十鈴の意見とすり合わせをするようにするのは一番平穩だと分かり、二人は協調しながら過ごす。

何だかんだ二人は上手くやっております、数日母は見えて思う。

海軍に入つて、あの性格ゆえにろくな目に遭つてなかつた娘を心配してくれる関係の相手がいて、少しは救いがあったのだと。

他人に極端に興味のない娘が、誰かと一緒に何かをするのは、必要以外では稀であつた。

五十鈴という元々部下の彼女は七海をよく知つていようだ。

理屈的と思いきや直ぐに怒る七海を刺激せずに、寧ろ適度に甘やかして過ごす様は姉のようだ。

七海は姉妹もいないし、早くに父を亡くしている。

その分が多忙だったので、叱る相手も褒める相手もいなかったせいか、不器用で他者に氣遣いの出来ない中身になつてしまった。

本当は家族思いの優しい娘のだが、如何せん感情的な判断を無視するし、結構即物的な主義だつた。

そのせいも、孤独とマイペースを好むが、歩幅が同じ五十鈴は七海の相手には合つて

いる。

母親の目から見ても、五十鈴は悪い人じゃない。そう、海軍を嫌がる母でも思った。然し……あの我が娘の言い分は何だろうか？

「やっぱりトラック……」

「誰が物流のプロですって？ 余計な部分は忘れてなさいッ！」

「ヴェアツ!？」

五十鈴はその、足りてなかった褒めると叱るをしつかりとやってきていた。

現在、七海が五十鈴の存在をその辺のトラックではないかという意味不明な事を言うて叱られている。

(……トラック?)

なんのことだろうか？

母にはよくわからないが、五十鈴という人物は身内にトラック運転手でも居るんだろうか？

拳骨をされて呻く七海はおのれ歌姫と罵り、怒った五十鈴が耳を両手で引つ張つてお仕置きしている。

涙目で抵抗する七海だが、五十鈴は何者なのか、母は依然として分からないままだった……。

一週間程経過した渋谷の家。

朝は五十鈴と一緒に道中をついていき、学友には親戚の姉が大学に落ちて予備校に通うために七海の家に移り込んだとでつち上げて適当に説明した。

なので、自己紹介に渋谷五十鈴と名乗った。

咄嗟とはいえ、七海と同じ苗字を名乗り、人間と同じように振る舞うのは皮肉だろうか。

両親もいない、苗字もない、七海が化け物という艦娘の分際で人間を真似るのだから。本質は艦であって生きてすらいなのに、と五十鈴は内心自嘲する。

美人の姉が居るとか居ないとかで、男子生徒が羨ましいと言うが。

「こいつは口煩い姑みたいな奴ですよ」

「あんたが世話を焼かせるんでしょ？」

と、互いに呼吸のあつた感じで違和感はなさそうだった。

そして一度戻り、適当に色々と母に頼まれたことをしておく日中。

買い物、掃除、留守番、細かい作業など。

母も疲れて出来ないことを五十鈴がしてくるので助かると言ってくれた。

遅いときは一緒に夕飯も食べる。大体は共に作るが。

「五十鈴、魚の捌き方も知らないんですか？」

「くっ……！ 艦娘は戦うことがメインだから知らないのよ！」

「そうですか……。なら、敢えてこう言いましょう。無様ですねえ？ お、ね、え、ちや、ん？」

「……ぞとばかりに嘲笑ってくれて！ あんたホントに忘れてんの!？」

「忘れてますよ？ 情けない大学を滑った五十鈴姉さん？」

「そりや七海のでつち上げたもんでしょうが!!」

家事はする。けど五十鈴は料理は知らないので出来ない。

七海は前にも何度かしているでそこそこ出来る。

魚の捌き方を知らない五十鈴を嘲笑してバカにする七海。

顔を真っ赤にして怒る五十鈴は反論できずに言われるまま、言い負けて屈辱を堪える。

で、仲良く夕飯を食べるが……。

「化け物と言ったことは訂正しましょう。艦娘も人間と大差ない様ですの」

最近、勝手に身体が動くことがないと言いながら、七海は言い出した。

驚く五十鈴に、一週間彼女を見ていて七海は思ったのだ。

「見た目同じですし、周囲も人間にしか見えてないようですから。それに、バカを言うかどうかどうもあたしは自分を罰するようですね。艦娘は化け物と言うよりは妖怪か何かでしょう。人間に似た妖怪です」

「化け物からオカルトになつてるじゃない!？」

オカルトでもまだ良い扱いと言えれば言えるが……。

で、オカルトと言つて発動する久々の七海のリモートコントロール。

今回は、言っている側から持つていた箸で目玉をつこうとした。

左手を慌てて反対側から手を伸ばして制止する五十鈴。七海は驚いて絶句していた。

「ええと……この反応は知つてる気がするわ。多分、思い出せない記憶の、五十鈴を覚えていた方の七海かな? 取り敢えず、怒つてないわ。自傷行為は怖いから止めてね?」

七海ではない七海に説得するように言つてみる五十鈴。

——五十鈴は甘いです。こういう手合いはぶつ殺すに限るんですが?

なんか物騒な幻聴が聞こえた。

青ざめる七海は、幻聴の内容を五十鈴に伝えると。

「止めなさい。五十鈴は気にしないから。普通の人間はこんなものじゃない。いい?

今の七海も同じ七海よ。五十鈴の前で血を流す行為は控えて。二回目は御免よ」

真剣になった五十鈴が、幻聴に向かって叱っているらしい。

二回目の意味はよくわからないが、通じたようで幻聴は無反応だが、左手が再び動かせる。

ホツとする七海に、以前の彼女の事を少しだけ、五十鈴は教えた。

「前のあんたは……かなり人間に猜疑心を持つていたわ。散々な目に遭ったもんで、反撃も過激になつてる。だから、五十鈴たちを守るのに必死になつているの。少しでも害意を向けると直ぐ様報復した事もある。何度もね。理屈じゃない、殆ど反射で。だから、七海。自分の中にある意識を舐めないほうが良いわよ。思い出せない記憶が今の行動を起こさせるとするのなら、五十鈴の知るあの娘は……自分でも遠慮なく殺しに行く。誇張抜きで。殺人もいとわない。そういう相手しか、今まであんたの近くには居なかつたから」

おぞましい事を言ってくれる。七海は自分が恐ろしく感じた。

「なんですかそれは……。あたし、人間に殺されかけたんですか？ 前のあの吹雪とかいう奴みたいいな感じで……」

「箝口令が敷かれているから言えないわ。けど、否定はしない」

否定は肯定か。即ち、曖昧な言葉で誤魔化しているが本当に七海は始末されかけた。

思い出せない部分でさらっと死にかけていたようだった。

「うわあ……あたし、マジで好き勝手してたんですね」

「その分、皆には好かれていたのよ？ 盲目的に」

「うえ!？」

自分が好かれるなど思ってもいなかった七海は大変仰天した。

いわく、

「確か……ママと姉と、あと矢鱈恋人みたいに甘えている娘がいたわ。あとご主人様やつてた。お付きの野良メイド三人ぐらい拾ってきて」

「何ですかその変態オンパレード!? 特殊な性癖でもあるんですか!？」

野良メイドとかいうパワーワードが飛び出し、挙げ句には現役高校生でママとか言われていたらしい。

自分の知らない自分は、どうやら世紀末の変態だったらしい。知りたくなかった。

五十鈴は思い出すように夕飯を食べながら簡単に語ってくれた。

「んー……。主観で良いなら、レパートリーは多かつたわ。まずは従順なピンクメイドでしょ。五十鈴から見ても素直でかわいいと思うわね。で、後は忠誠心の高い色白な自称従者。七海をお嬢様と呼んでたわ。その娘は基本的に何でも言うことを聞いてくれる忠実な感じなの。で……まあ、もう一名が……あー……」

メイドについて語る五十鈴が歯切れが悪く困ったようにしている。

まだ何かあるのか、辟易する七海が急かすと。

「ちよつと真相は見えないけど……あんたは、淫乱メイドとかスケベメイドとかエロメイドとか毎日言つてたわよ？ 本人は毎回必死に言い掛かりだとかキヤラ改変とか叫んであんたを叩いていたけど。少なくとも、変態に覚醒していたあんたに対するツツコミは鋭かった。見てて惚れ惚れしたもの」

最大級のおかん奴がいたらしい。五十鈴ですら軽く引いていた。

無論知らない七海も引いた。

「そんな色欲の塊みたいなメイドがいたんですか?!」

「彼女は違つて懸命に言つてたけど……真相はわかんないかな。取り敢えずすごい可愛くて、艶やかな感じはするの。凄まじい色気を振り撒いてた。真似できないでしょうね、あの色気は。同性でも思うぐらい」

（完全に夜のお仕事してる艦娘じゃないですか?! 何てのをメイドにしてたんですかあたしは!?!）

なんでそんな大人の世界に首を突つ込むような相手がメイドにいるのか。

七海は夜の女王でも気取つていたのか?! 侍らせていたのか?!

「あたしはどんな変態だったんですか……」

ガツクリ項垂れる七海は過去の自分を殺したくなつてきた。

覚醒して酒池肉林でもしていたのか。本気で忘れたままでもいい気がする。兎に角、知りたくもない過去を五十鈴に暫く聞かされるのであった……。

不穏な動きと不穏通り越した動き

陸の上では、海と鈴が喧しい二重奏を奏でるとすれば。

海の上でも、砲撃と爆撃の二重奏を奏でている。

大きくここから動き出す運命の歯車。

彼女たちの未来も、駆け出していく。

最近、深海棲艦が活性化しているようだ。

桜庭は机に散乱する書類を見て唸った。

(これだけの物量……。下手すると私も渋谷さんの二の舞か)

各国の海域で巨大な深海棲艦の拠点が同時に発見された。

我が国でも複数発見されており、桜庭も出ないと不味い空気になっている。

が、問題があつた。一つ一つが離れすぎている。

同時に複数箇所 に点在する場合、桜庭でも対処は難しい。

彼女は分身も出来ないし、瞬間移動も出来ない。

距離が物理的に離れすぎており、最終兵器たる彼女であっても無理がある。

一名しかいないことが仇になった。確かに他の従来型に頼めば凌げるだろうが……。

(今度は私の体力が持たないわね……。大体、拠点一つに対しての人類側の戦力の差は圧倒的。これは、やり方を間違えたら……。最悪、本土が焼ける)

彼我の戦力の差は、桜庭と10とした場合は、拠点一つで大体2500。

有象無象の雑魚と言えど、これは日本の大規模鎮守府が全部合わさるに等しい戦力である。

桜庭ならば倒せる範囲ではあるが、他の従来型では通常の艦娘を合わせての連合でギリギリ対応できるかどうか。

博打に等しい賭けである。

桜庭は一人だ。流石に北海道の拠点を破壊してから一時間で熊本には行けやしない。距離がありすぎる。向こうは向こうで時間を稼いで貰うしかない。

(……渋谷さんがいれば)

こんなとき、あの少女がいれば。

彼女は下手すると自前で桜庭と同等の戦力を用意できるのに。

だって、そうだろう？ ここには無数の姫たちがいる。

桜庭が言えば助けてはくれるだろうが、本気は出すまい。

何故なら、この居心地の悪い鎮守府を忙しすぎて放置しているからだ。

元帥は基本的に多忙だ。イチイチ自分の鎮守府の艦娘に割いている時間はない。

そのせいで、現場の空気は最悪に近い殺伐とした状況だ。

彼女のようなカリスマはない。放置されたことによる不満も感じている。

後から来た桜庭は、どうにも……七海に比べて好かれてはいない。能力は申し分ないようだが。

大体、担当する海域から雑魚を殲滅したのは書類仕事の時間を増やすためだ。

ああでもないしないと桜庭も過労で倒れる。派手に資材を荒らしたが順調に回復はしているだろう。

あとは、倒れた彼女たちの処遇もそろそろ決めておく。

何時までも入院というわけにも行かない。ダメならダメで処置をしないと。

(……しゃーない！ 私もやりたくないけど……プライドはこの際捨てる)

ため息をついた。仕方無い、桜庭の言い分は今回は捨てた。

七海の同期で恐らくは次いで戦力を抱えるあの男の出番だ。

大丈夫、少なくともあいつは愛国者。絶対に請け負った任務は成功させる。

時間を稼ぐだけなら余裕だろう。吹雪の一件もあるが、そこは自己責任だ。

仕方無く、桜庭は受話器をあげる。多忙な桜庭の裏では。

(……次の調査を始めなきゃ)

なんか、一名ほどゆらゆらならぬ由良由良していた。

んで。

「時間が足りんか……」

重要な任務を極秘で受けたハゲは、珍しく途方にくれていた。

相棒の武蔵が眼鏡を光らせて何事か問うと。

「……武蔵。明日付けでお前に鎮守府を任せる。詳細は後から来るので、準備もしておけ。私は、三日ほど出るぞ」

「どうした？」

ハゲは、鎮守府を少しだけ任せると命じた。

外に出て、今丁度取得間近の資格を速攻で受けてくると言うのだ。

「む？ スケジュールは管理しているのにか？」

「……どうやら、あまり悠長な事は言えんらしい。近々決戦が来る」

普段ならばこんなことはないのだが、ハゲは武蔵に厳しい顔で端的に言った。

「……………成る程。貴様、前線に出るために事を急がせるのか」

「ああ。ヘリコプターの免許と大型重機の免許を急がねばな」

何かに役立つだろうと、海軍お抱えの試製ヘリコプターの免許と、大型重機の免許を取得していた島村は、不敵に笑った武蔵に言う。

武蔵は然し聞く。

「だが、相棒よ。この場合重機は必要なのか…………？」

「万が一だ。生きて帰るのは前提であり、彼女の教えでもある。ならば、考えろ武蔵。復興になった場合には、瓦礫撤去に必ず重機は使う。分かるか？ 戦火で焼かれた町に

は、人員などいないのだ。すべからず我等が支援し、助けなければならぬ。私が会得しておいて損はない。どのみち、同時並行でしていたものだ。数日の間の負担を貴様に強いるが、任せてもよいな？」

彼は戦いの後も視野に入れていた。

取り越し苦労ならば良いと言いながら、素早く身支度を始める。

「思慮が浅かったな。良かろう、この武蔵が暫し請け負ってやる」

「ああ。ミスはするな」

「応」

短く会話をしてから、島村は出ていった。

武蔵は腕を組んで見送り、数時間した後に来た内容を見て、成る程と思う。

(……奴が焦るわけだな。失敗すれば国が焼ける。敗北は即ち、奴の故郷の二の舞になるわけだ。この戦力差は、笑うしかないが……いや、だが。我が鎮守府の主力と第二艦隊、そして私が全力で抗えば桜庭元帥到着まで、かなり厳しいが時間こそ稼げるだろう。然し、まだ一手足りない。このままでは、我らは全滅するな。この穴、貴様はどう埋める？ 相棒よ……)

危険な任務になりそうだ。

武蔵は下手すると、島村が命を落とすかもしれないという予感があった……。

で。ハゲは約束通り、三日で帰ってきた。

免許取得を終わらせて、然し表情は厳しい。

「うむ……。私や貴様だけでは、補えきれないか」

「ああ。まだ時間はあるが、お前はどうか手を打つ？」

戻ってきた島村に武蔵は聞いた。

鍛えに鍛えたこの艦隊でも、物量が違いすぎる。

近海で戦えばひっくり返せるが、それは敵にそこまで駒を進められる諸刃。条件が寧ろ悪化してしまい、勝てはするが後ろが燃える。意味がない。

「……」

島村はいくつもプランを練ってみるが、全てが詰みになった。

あと一手。外部から一手さえあれば……。然しそんな強力な艦娘は居るだろうか？
調べてみるも、今度は性能と限界の壁が来る。

苦しい戦いには変わらないし、かなり無理がある。

聽て、島村はこう、言い出した。ぶつちやけ、アウトな打開策で。

「武蔵よ。こうなれば、渋谷さんの考えを聞いてみよう」

「!?」

民間人になった七海に何かヒントを貰いに行くとか言い出したのだった。

一方。ゆらゆらしている由良さんは。

五十鈴が何処に出掛けているか知ろうとこそそこそ暗躍していた。

五十鈴の私物を内心謝り勝手に漁る。なにかないかと。

で、五十鈴のお気に入りだったトラックのぬいぐるみが無いことに気づく。

更にはレシートなども押収。これは……旅行用の小道具？

怪しい。益々怪しい。

七海のお手製のあれを任務に持ち出すなど、五十鈴の性格としてはあり得ないはず。姉妹の直感で由良は至った。脳内を稲妻が走り、名探偵のように真実を推理した。

(七海ちゃんの実家!!)

理由は分からないが、今までの言動や現物を鑑みて七海の関係であるのは間違いない。

で、行くとすれば真つ先に上がるのは七海の実家。

墓参りかと思ったがじゃあなんで雰囲気は回復したのか分からない。普通逆だ。

ならば。七海の実家に、七海が居たとすれば。あの様子も全部合点がいく。

つまり、七海生きてた!!

(由良も行くーーー!!)

で、もしかしたら初めてになる、由良のキャラ崩壊。

大人しくて真面目な由良が、七海の死後ずっと溜まっていたストレスで発狂したとも言う。

お目目グルグルさせて、七海に会いたいのと五十鈴の抜け駆けを羨ましく感じてとうとう由良も壊れた。

バタバタ荷物を纏める。お金もよし、着替えもよし。

お仕事？ 元帥が敵を滅ぼしたので暇している。由良が居なくてもどうにでもなる!!

「元帥さん、七海ちゃんところ行つてきます!! 暫く帰りません! 探さないでください!!」

「ばーん! と乗り込む勢いで執務室の扉を開いて飛び込む。」

何事と仕事中の桜庭に家出するから追つてくるなど一方的に言つた。

尚、事実上の反逆であるが、暴走している由良さんには通じておりません。

桜庭は、顔をあげて大声で叫ばれた内容に、

「フアツ!?!」

と奇声をあげた。何事だ本当に。あと何でバレた!?!

止める前に一目散にバタバタ走つて逃げていく由良さん。

真面目な由良さんももうストレス限界だったのです。

「いやワケわかんないわよ!?! って言うか待つて由良!!」

誰かにツツコミを入れて追いかけようとする桜庭だが、考えてほしい。

由良さん、どこで叫んでいた?

「——お嬢様が生きっていると聞いて!!」

「何処から出てきたアツ!?!」

今度は颯爽と改造和服メイドの小春も登場。深海棲艦全員連れて。

因みに窓の外側から窓を開いて全員侵入。

ここ三階なのですが。何してるの？　つか、なんでいたのお前ら？

「お嬢様が生きているなら私達も黙ってはられない！　全員、由良に続いて！！　目指せお嬢様アーツ！！」

「待ちなさいちよつとおおおおお!!？」

小春の号令で皆様脱兎で出ていった。

各自40秒で支度して、必要なもの全部持って逃げ出した!!

どつかの天空のお城にでも向かうほど手際がよかつたのは気のせいかな？

「待ってって言うてるでしょ、おいこらアホ深海棲艦共おおおお!!」

あれが深海棲艦なのか。人類の敵なのか？

アホ極まる行動をしているのだが。

武器も持たずに恋しい七海に会いに鎮守府から逃げ出すって、艦娘だつてしない……

由良がしていた。

叫ぶ桜庭、でも既にアフターカーニバル。

その頃には憲兵をお得意の物量で雪崩れ込み押し潰して逃げていった深海棲艦の通った跡しか残ってない。

目をバツテンにして倒れて山積みにされて気絶する憲兵など誰が想像できる？
(私も想像力が足りなかった……!?)

多分誰も想像できない。

取り敢えず。由良さんと深海棲艦一同、全員逃げ出した！

上手く逃げ切れた!!

「勘弁してえええええ!!」

で。

「おい淫乱村雨イド。春雨。お嬢様生きてた。会いに行くから一緒に来て」

「……えっ?」

「ええっ!?!」

入院先の病院の外壁にヤモリ宜しくへばりついた真夜中。

小春が現れて、寝ていたメイドを無理矢理起こした。

で、事実を知らせる。仰天の村雨、春雨。
更には。

「如月ちゃん、ご主人様生きてるって!! 大丈夫、会いに行こう!!」
「すぐに支度するわ!!」

割と危険なはずの如月の病室に春雨侵入、事実を言うと言存系嫁は一発回復。

一秒で元通りのハイライトの消えた目になった。

元気になったので逃げる準備開始。

「山風ちゃん、弥生ちゃん! 提督生きてるわ! 行ける!?!」

娘と妹には村雨が向かって、病室で死にかけていた二名は大変驚いた。

が、兎に角脱走するから行こうと誘われた。

因みに全員大した疑いも持たずに、兎に角逢いたので信じた。

「あたしも行く!」

「弥生も……!!」

二名も40秒で諸々引っこ抜いて取っ払って支度完了。

細かいことは考えられないヤンデレの身内が大暴走……ではなく、大脱走をはかった。
結果、病院から数名が深夜脱走したと大騒ぎになるまで時間は必要なかったようだ

……。

んで。

「ヴェアアアアアアアアア!？」

朝っぱらから七海は自宅の庭先で絶叫していた。

現在七時よりも少し前。起床する時間なのだが……。

「どうしたの七……いぎやああああああ!!」

五十鈴も眠そうに目を擦るも、庭先の惨状に絶叫した。

まさに死屍累々。折り重なる女の子の山。

病院の入院の服みたいなものもきた奴とか、色白のメイドとか、角が生えた女性とか
いっぱいいた。

「みんな見て！ やっぱり！ 七海ちゃん生きてたわ!!」

で、一番下で顔をあげて朝イチで叫ぶお目目グルグルのポニーテールの女の子が叫

ぶ。

で、一斉に血走ったハイライトのご退場する目で見られる七海。

餓えた獣を思わせる連中に、七海は正直ドン引きだった。

——ヒヤッハー!! ナイスな展開キタコレエツ!!

あたしの嫁と娘と妹とメイドと従者とエロメイド!! 深海棲艦の皆までエ!!
あたしは無敵、これぞ愛の形なのですよおおおお!!

無意識で左手で拳つくって空に向かって突き上げていた。無駄に力強く。

顔はドン引きのまま。

「由良ああああああ!!」

五十鈴が怒鳴って、母もその声で起きてきて惨状に目を丸くした。

「七海、この娘たち誰?」

「多分忘れたあたしの身内です。本当、ごめんなさい……」

聞いていたのってこう言う意味らしい。

取り敢えず。渋谷さん家に、全員集合!! だった。

妥協案の結果

仕方無いので、本日は学校を休んだ。

広くはないリビングに全員正座。更に狭苦しい空間になった。

「五十鈴。……深海棲艦とかいう連中の見張りを」

「はいはい……」

七海が言うので、ため息をついて五十鈴は少し身構えておく。

母は一応解決しておいてとやんわり言ってお仕事に向かった。

なので、桜庭に連絡したが、どうも原因は由良とか言う艦娘らしく。

入院中の数名が脱走したのち渋谷さん家に押し掛けたので、直ぐに回収しに行くとのこと。

翻訳機の装備をしていない由良以外の全員は、互いに何を言っているか理解できない。

七海には異国の言語に聞こえて、彼女たちは七海が宇宙人のような言葉を発しているように聞こえる。

大体、人間の渋谷七海を知らない深海棲艦と村雨と春雨は、面影のある彼女を七海と分からなかった。

なぜ通じないと混乱する皆に、由良は青ざめて震える声で聞いた。

「五十鈴……七海ちゃん、まさか」

「そのまさかよ。この娘、もう提督の素質はないの。轟沈したときに、命と引き換えに色々と無くしているから」

五十鈴は極秘と言われた七海の一件を許可を得て全員に説明した。

記憶がない。力もない。素質もない。単なる人間。それが、今の七海。

皆の知る彼女ではないと。これが、現実。黙っていた最大の理由。

互いに不幸しか呼ばず、思い出せる見込みもない。

七海はかなり尖った視線で皆を見ている。警戒、そういう色。

以前には絶対に見せなかった最初の頃の色を見て、由良は嘘ではないと悟った。

「五十鈴、深海棲艦って艦娘と人類の敵ですよね？」

「……ええ」

訝しげに彼女たちを見る七海。

五十鈴は分かった。記憶を失った彼女も、結局深海棲艦の思い出を忘れたまま。やっぱり、他の連中と同じで彼女たちをただの害悪にしか見ないだろうと。

だって初期の七海はそんな気持ち微塵もないから。

殺せばいいの時期だった七海からすれば、自分で和解した彼女たちも否定するだろう。

そうすれば……信じている皆が強いショックを受けて悲しむのは目に見えている。

悲劇は、回避できない……。

「こいつらどう見ても人間でしょ？　深海棲艦って言うのは何です、新手の人類だったんですか？」

「ちよつと何言っているか理解できないんだけど!？」

あれ？

「深海棲艦って言うから怪物を想像していたのに。こいつら単なる人ですけど？」

七海は普通に人間と言っていた。

理由を問えば、妖怪扱いすると襲われるので渋々人間と認めていく方向にしたらしい。

「いや、よく見なさい！　角があるけど!？」

「角？　ああ、角……角ですね。それが？」

「人間には角ないでしょ!？」

「細かいですよ。言葉通じて全体のシルエットが人なら艦娘と同じ妖怪……じゃない、人間でしょう」

角のあるリングゴを示して聞くが、角があるから何だと言わんばかりにけろつとしてい

る。
単純にしか見ていないようで、怖くないかと聞いたのだが。

「別に? 怖いと言え、精々その見た目が完全に薄い本に出てきそうな奴でしょうね。五十鈴が言っていた例の淫乱メイドって彼女だと思いますが?」

入院の服を着ている村雨は何やら、また七海が酷いことを言っていると分かると威嚇する。

「何言っているか分かりませんが、記憶喪失だつて言うのにまだ村雨を淫乱扱いしますか!!」

七海も唸っている村雨が何を怒っているのか五十鈴に聞く。

内容を翻訳され、驚いている。

「えっ!?! 違うんですか!?!」

「違うわアツ!!」

経験で言っている言葉を分かった村雨が怒りで吠える。

当然分らない七海は驚いて五十鈴に翻訳する。

「……五十鈴。こいつ、過去に如何わしいバイトとかしてませんよね？ 凄い怒ってるし……。あたしのメイドだって言うのに、歯向かってますよ？」

「不本意なんですつて。あと、この娘は村雨。あんたが殴りあいして拾ってきた野良メイド」

名前を全員教えておくと、パクチー以外はそれっぽい名前になっていると納得していた。

深海棲艦に名付けているのは自分だと聞いて流石と自画自賛。ウザい。

「記憶なくても何時もの提督じゃない!! 心配してたのに!!」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ村雨を始め、皆が一斉に騒ぎ出す。

宥めて、代表して皆は心配していたのだ、と由良が言ったが。

「そう言えばこのポニーテールの女性は誰ですか？ 五十鈴の姉妹？」

「そうよ。五十鈴とポジションは似たようなもんだけど、甘やかしてばっかのダメな艦娘」

「さっさと酷くない!？」

七海は覚えていないまま、五十鈴に聞いて姉ポジと言われて首を傾げる。

「由良……？ いえ、知らない人ですが……。でも、五十鈴以外にあたしを好む変な艦娘

はいたんですね」

全然覚えてないと彼女に言われて、改めて記憶がないのだと表情で分かっってしまう。

更に、三人のことも言われて再びドン引きの七海。

「そんな趣味はないんですけど」

娘も妹も嫁もないないと断言して、雰囲気伝わった三人が、泣きそうな顔で七海を見上げた。

すると……。

「うっ!?!」

七海の知らない七海から、形を変えた猛烈な抗議が発生。

激しい頭痛に途端に襲われる七海は、頭を左手で押さええて踞る。

ズキズキとする強い偏頭痛。苦痛に顔を歪ませる。

……居ますよ? 全員、居ます。分かりましたか?

(分かりましたよ!! ちゃんと面倒見るんで頭痛は勘弁してくださいな!!)

……宜しい。

また、幻聴が聞こえる。駆け寄る五十鈴と由良に、大丈夫と右手で制する。

どうやら、自分の可愛い身内に貶す真似以外にも泣かせる真似はご法度のようなだ。

五十鈴にまた幻聴が聞こえ、世話をしろと言われたと言う。

「何してるのあの娘は……!?!」

五十鈴が、内面の七海にあまり過激なことはするなど叱っている。

驚く周囲に、現在の七海は以前の七海からどうも自分の身体を度々奪われて攻撃されると言うことを教えておく。

頭痛が治まり、これも七海の知らない七海からの攻撃のようだと言われ、由良も言葉を失った。

まるで二重人格だ。表と裏で揉めている面倒な状態と言えいいのか。

「と、取り敢えず……一度、正式な手続きをお願いします。あたしも、受け入れないとひどい目に遭うので、努力しますので……。逃げてきたり突然押し掛けるのは困ります。只でさえこっちは危ない目に……」

「七海、余計なことを言わないで」

うっかり、吹雪のことを言いそうになった。

五十鈴が制止したので語らないが、全員目付きが変わる。

五十鈴の言葉は正確に理解できる皆は、五十鈴が止めたという事実は分かる。

由良に翻訳しろと睨まれて、半泣きの由良に危ない目にあつたと言ってしまった。

「由良、何してるのあんたは!?!」

「い、良いじゃない別に! 由良だってね、寂しかったのよ! 由良だって七海ちゃん

実家に居候したい！ もうあんな雰囲気の良い鎮守府に帰るのは嫌なの!! 五十鈴
ばっかりズルいズルい!!」

「なんで駄々っ子になってんのあんたは……!?!」

五十鈴は留守にしているので鎮守府の変化を知らない。

逆ギレの由良は駄々をこねている。

だいぶストレスが溜まっているので帰りたくないのも本音であった。

以前よりも殺伐した空気で居心地は悪いと深海棲艦は言つて、入院している皆は戻りたくないと言い出した。

余計に拗れる問題。疲れた顔で、七海は仕方なさそうに言い出す。

「分かりましたよ……。何とか方便考えて見ますから、我が儘言わないでください……。
はあ……」

自分で蒔いた種とはいえ、苦労が増える七海はため息をついた。

これで桜庭と七海の双方は、胃痛と頭痛と悩むことになっていく……。

順を追つて語ろうか。

先ず、病院脱走組。強制送還。再検査、異常なし。完全復活。

医者が言うには、精神的な欠如を補つた結果、元通りになつたらしい。

要するに原因は極度のストレスであり、改善されれば自然と回復するのは当然で。

そのまま準備に入つた。

次、深海棲艦。強制送還。のちに交代制で護衛任務につく。

街中に深海棲艦を入れ込む行為だが、武器もないしストッパーに艦娘もいる。

大体七海の護衛という建前であるので、攻撃する場合もあり得るので已む無し。

脱走の一件で大本営は、権力の無駄遣いで色々後始末と揉み消しを行つた桜庭の助言

ありで七海の言うことしか聞かないと判断して、彼女にあるバイトを持ちかけた。

海軍の関係者ではなく、外部協力者……即ち、彼女の雇い主として。

この危険生物、ちよいと面倒見てくれと。

面倒見てくれたら提督しないでいいから。

ある程度の発言力もあげるし、最悪深海棲艦たちの指揮を執つても構わない。

ただ、機密は漏らさないで欲しいと。

桜庭ですら、言うことを聞かないが失うには価値があるので妥協したらしい。

深海棲艦のボスになつたわけだ。民間人でありながら。

で、彼女たちに命令する司令塔は七海なので普段は普通に暮らすので桜庭に従えと言われて、渋谷々了解。

次、由良。お説教と厳罰。桜庭に絞られ、後日深海棲艦の見張りを命じられた。

思惑通り七海の家に行けと言われて護衛兼用深海棲艦のストツパー。

五十鈴と同じポジションに収まった。

で、七海は今も平穩に暮らしている。

一応は……。

「渋谷さん、今日もお迎え来たわよ。ほら、あのメイドさんたちとお姉さんたち来てるって」

また知り合いに呼ばれる放課後。

毎日お迎えに数人で来ては、学友に意外と七海は関係者に美人と美少女が多いと判明して、男子生徒に紹介してくれと言われる始末。

七海自身は言われないが、彼女たちは見た目こそ少々奇抜だが、角があったり色白だったりするが、そんなもの美人ならば関係あるかという現金な言い分により無視。

思春期男子には知ったことじゃないらしい。

(そんな阿呆な……)

自分なりに男子は阿呆なのかと時々思う。

外では七海と呼べと自分の過去の性癖を隠すために徹底した結果、以前と変わらぬイチヤイチヤと困惑の毎日に戻っていた。

現在、深海棲艦たちは桜庭の所有する自家用車のワンボックスを根城にしており、渋谷の家の駐車場を借りて止め車中泊をしていた。

家のなかでは人数が多すぎて入れないので、妥協した結論であった。

生活費は基本的には母に先払いされており、風呂は銭湯、洗濯はコインランドリーと意外と生活は楽しいようだ。

七海も慣れてきた今日この頃は車中泊に向かって楽しんではいた。

深海棲艦と言えど見た目が同じで言葉が通じれば人間とやはり大差はないのだ。

「お嬢様、お迎えにきた」

「て……じゃない。七海、お疲れ様」

「ご主人様、お帰りなさい!!」

「七海ちゃん、今日もよく頑張ったね、ね?」

「ハイハイ、帰るわよほら」

小春、村雨、春雨、由良、五十鈴。

見慣れた面子は校門で待っていた。

合流してさっさと帰る。

目立つ改造和服メイドの小春と、クラシックメイド服の姉妹。

赤いスカートとブラウスとお揃いの姉妹と、美人に囲まれていた。

皆で歩く帰り道。

「お嬢様、ひとつ提案が」

「何ですか？」

「この淫乱エロメイドをそろそろネオンの街に返したい」

小春がまた学生にナンパされて迷惑だと村雨に因縁をつけていた。

五十鈴が言っていたのはどうやら事実だと思ふ七海は、キレる村雨に聞く。

「本当に普通なんですよね？」

「普通以外にないですけど!!」 村雨はごく一般的なメイドのような何かですが!」

疑いの視線に証拠を見せろというので、七海はあるモノを鞆から取り出して手渡す。

黒い紙袋に入った……如何わしいエロ本であった。因みにクラスの男子から無理を

言つて借りてきた。

うちのメイドが題材になっていると言われて確認するために、今回借りてきたのだが……。

取り出さずに中身を確認して顔を真っ赤にする村雨。内容は村雨メイド本である。

「著者はオータムクラウドなる最新の同人誌です。どう見てもこれ、貴方ですよね村雨。」

「これでも言い訳しますか？」

まさかの証拠持参に、とうとう半泣きで弁解する村雨。

「ち、違うんです……。村雨は本当に事実無根で……。健全に生きてきたんです……。信じてください……」

五十鈴も覗き、これは言い訳できないと首を振る。

春雨と由良は見ないと真つ赤になって断り、小春が覗いてやはりと言った。

「これで確定した。お前は完全な淫乱エロメイド」

「うう……。誤解なのに……」

泣く泣く否定する村雨を軽蔑する小春。

などとやっっている道中。

……奴は来た。

「おお！ やはりこの学校だったか！」

野太い男の声がした。

歩道を歩く皆に、近くでワンボックスが路肩に停車した。

運転席から、ハゲの男が顔を出す。

その顔を見て、ビックリする七海は駆け寄っていった。

「島村さん！ お久しぶりです！」

珍しい笑顔で対応する相手は国防の豪傑、島村その人であった。
助手席に戦艦武蔵を乗せてわざわざ訪ねて来たらしい。
その、用事とは……。

泥と鋼の交わり

久々の出会いに、七海は自分から笑顔を見せた。

少なくとも、満面の笑みなど見たことがない島村も驚く。

いつも表情に乏しい七海が笑っている。そして、額の傷跡。

ああ、彼女は一度沈み、死してしまったのだなと感じる。

だからこそ、教訓として刻み教えを乞いに来たのだ。

七海のような人を出さないために。

「渋谷さん、ご無沙汰している」

お連れの連中にも軽く会釈しながら車を降りる。

七海は笑うが……成る程、周囲は警戒しているのか無言で対応。

事務的な挨拶で流す。五十鈴のみ、しっかり返した。

島村は、七海がなにか用事かと聞いてくれたので端的に告げた。

「……渋谷さん。今回は折り入って貴女に頼みがあつて来たのだ。聞いてはもらえないだろうか？」

「はい。何でしょうか？」

七海は笑いながら構わないと言っている。

最近、また軍に関することをしていると聞く。

事前に確認したが、七海には多少の範囲で機密を漏らしても良いと言われた。

何でも深海棲艦の指揮を司るらしい。民間人ながら、引退しても優秀なのだろう。

後ろ髪を引かれている、大本営にはあれな気もするが、まあいい。

島村は、今回の助言を求めているのだ。話さなければ意味がない。

彼は、きつちり頭を下げて、切り出した。

「渋谷さん……私に、道を示して頂きたい！」

高校生に頼み込む現役軍人。だが、彼女は偉業を達成した人物だ。

情けないだろうが、それでも。途が拓けるなら島村は怯まない。

キョトンとする七海に、取り敢えず場所を移動するのだった。

詳細は聞いている。

吹雪の事を踏まえての護衛は分かっている。

故に、人気のない安全な場所となると、島村の車が手っ取り早い。

そのまま全員乗つけて、峠の方に移動した。

電話で何やら連絡して、帰りが遅くなると言っていた。

全員がある程度事情を知っているから、助かった。

道中、コンビニで軽食を購入してから、島村は助手席に七海を乗せた。

武蔵は後部座席で皆と駄弁っていた。小春以外は知り合いなので積もる話をしていくようだ。

「要するに相談ですか？」

「そうだな……。情けない話で申し訳ない。どうしても、私は貴女の言葉を聞きたかった」

助手席でパンを奢りで食べている七海が聞いて、島村はハンドルを握りながら言った。

島村が言うには、自分では手詰まりに陥り、引退したとはいえ七海に聞きたいと思っただけらしい。

七海の記憶喪失も把握しているが、何処までかは分からないので軽く説明。

島村は、艦娘に関する記憶や深海棲艦の記憶を失っていると聞いて少し驚いた。人間の七海を見るのは候補生時代以来で随分と懐かしい。

あの頃はなんと不出来な娘かと思っていた己が恥ずかしい。

これ程の逸材を見下してすらいた自分が厚顔無恥と覚えてしまう。

だが、それでも七海は二つ返事で了承してくれた。

本当に、有難い。

峠の夕日が見える山道を上り、駐車場を発見して停車。

この様な様で申し訳ないと謝罪してから始める。

皆にも聞いてほしいと、島村は単刀直入に、打ち明けた。

「近々、私や元帥殿は、決戦を控えている」

そう、打ち明けたから教える、如何に不利なか。

桜庭を切り札としての作戦。

適度に暈して説明しながらも、概要は伝わっただろう。

七海は真剣な表情で聞いていた。

七海の周囲も、しっかりと。真面目に相談しに来たのだ。

誰も茶化したりしない。

自分が前線に出て、武蔵が出て尚一手が足りない。

ギリギリの崖っぷちで、読み間違えれば危険なことになる。

一体、どうすればいい？ 七海ならば、どう出る？

簡単な情報も打ち明けて、改めて問う。

「渋谷さん。貴女は、私に死んではならないと教えてくれた。覚えてはいないと言うが、私は貴女に天恵を与えてもらったと思つている。故に、お尋ねしたい。貴女ならばこの局面、どう乗り越える？」

生きて帰るために。決して負けないために。

七海なら、どう選びどう戦う？

国防のために伝授して欲しいと。

七海は暫く無言で外を見て、考えていた。

沈黙して待つている皆に、聴て。

一つ目の解答を出す前に質問した。

「ええと……武蔵さん。貴方は、改装はまだ改ですか？」

武蔵もよく覚えていないと言う彼女に聞かれて肯定。

武蔵はまだ、第一改装のみであった。

武蔵の最終改装は凄まじい資材を消費する。

決戦のために備蓄している資材を使う訳にはいかないのだ。

七海は言った。姫園鎮守府の資材は使えるかと。

驚く島村。なんと七海は、桜庭は遊撃して出払うなら姫園鎮守府の資材で代用してみているのかと。

無論そんな勝手な事は出来ないだろうが、単なる参考だ。言うだけならまだ自由。

桜庭の出撃するための資材はその近くの鎮守府総出で賄う。

現在姫園鎮守府近海は、平和そのものらしいので余っているだろうそれを間借りしてみている？

そう、言った。更には。

「そう言えば、深海棲艦の装備も使う予定と言いましたが？」

「うむ……。それをもつてして、物量作戦に漸く均衡になるのだが」

後ろを振り向き訊ねると、武蔵は腕を組んで言う。

七海は、五十鈴にも確認。毒を以て毒を制する危険な事だ。

然し、五十鈴たちは慣れている。で、現在の提督は桜庭。

……つまり？

「姫園鎮守府の艦娘も助力とかしてくれませんか？」

腐っている戦力なら手伝うのはダメかと。

島村の指揮で共に戦うのは、ダメなことなのかと、
すると。

「お嬢様。お言葉だけど、それはきつと無理だと思う」

小春が、由良が何か言おうとするが、その前に否定した。

七海はどうしてと聞いたが、今度は由良が答える。

「……七海ちゃんは忘れてるからだと思うけど……。島村提督は、その……」
「信頼できませんか？」

艦娘を殺すような作戦を立てる提督。

吹雪の話で多少は聞いている。艦娘の天敵、正に外道にして邪悪と。

由良たちはそう、言いたいらしい。だから信じない。

本人もそれは、否定しないと黙って首肯。腕を組み、目を閉じる。

信じられない人だから、嫌だと由良は言うし。

「提督の命令でも、村雨は嫌よ」

「わたしも……もう……」

村雨、春雨も嫌がる。

一度は死んだ二人がもう一度死ぬのは当然忌避する。

当たり前だ、と武蔵は語る。

「嘗ての相棒はそうだったからな。そんな甘ったれた事で満足していた。皆に信じろと言うのは些か虫の良い話だな」

自分の行いは否定しない、皆の反応は自己の甘さと指摘している。その部分を分かるから五十鈴は逆に構わないと言った。小春もだ。

「島村提督は、七海と戦って変わったと思うわ。まあ、五十鈴は信じてても良いと思う。その気概は」

「私はお嬢様に従う。人間の言うことは聞かないけど、お嬢様が命じるなら」

有難い評価だと、島村は礼を告げる。意外な顔で、五十鈴は見た。

やはりこの男、己を客観的に見るほどの視野は持ち合わせている。

自分の信念を理解してくれることに感謝していた。

「ならば、その期待には応えねばならない。私は助力を受けるのだからな」

「微妙に上から目線……。まあ、良いけど」

打開するなら、島村に必要なのは手数と強化。

詰まりは、根回しだ。

「島村さん。全部背負うのは無理です。自壊しますよ。周囲を見れば、資材の工面程度なら助けてくれるのでは？」

「……ふむ。その通りだ。面目無い」

あの七海が、周りを頼れと誰かに教える。

その光景は、自滅を繰り返して壊れていった彼女とは思えないほど、的確な指摘で。彼女の変化が顕著に表れていた。

自分は周りとは波長が合わないと思っていた島村の思い込み。

甘さはまだまだあると面と向かって言われた気分だった。

そして、七海は一番大事なことを……外の夕日を見ながら、言い出した。

「あと、島村さん。ずっと、生きて帰ることを……以前のあたしに教えられたって、言いましたよね？」

「ああ。有難い言葉を頂いたよ。傲慢な私は変わった。気づかせてくれた事を、今でも私は感謝しているつもりだが」

生きるべしという言葉の意味は、今となれば真意は七海も分からない。

幻聴はなにも言わないし、言うこともないんだろうか。

ただ、追加で言いたいことも……漠然と、七海にはあつた。

「じゃあ。今のあたしからも、一つ。言っても良いですか？」

七海は、島村に言いたいことができた。

是非聞きたいと願う島村と武蔵。皆も、興味があるように耳を傾ける。

七海は視線を外に向けたまま、こう小さく……眩いた。

「死ぬのって、とつても……怖いことですよ」

当たり前の事を言った。

死ぬのは、怖いこと。そんな当然の事を、何故？

由良には、よく分からない。

小春も、分からない。

だが……。村雨、春雨は分かった。

五十鈴も分かった。

何より、島村は己の認識に穴があることを言われてハッとする。

(……まさか!?)

それは、染み付いた国防の思いの盲点。

死すら受け入れる覚悟を持っていた筈で。

それを、生きるべしと方針を変えたのは、良い。

だが、七海はこう言いたいわけだ。

確かに、生きるために尽力するとは言った。

けれど、死を恐れたとは言っていない。

島村は気付いた。根本が、あまり変わっていない。

何の為に生きるかは、分かった。

然し、彼は相変わらず死を恐れない。

自分が死んでも、死ぬまで全力で抗ったから。

戦争における敗北を、彼は受け入れてしまっている。

軍人としての根っこだろうか。死に際の感情が諦めに近いのだと。

死ぬことを、全力で抗った上で負けるなら受け入れる。

そういう意味だと分かった。

(私は、死を……恐れていないのか!?)

自分でも気付かなかった。

同時に、武蔵も同じよう。

「相棒……。私達は……」

「ああ……。どうやら、そうらしい」

戦慄していた。死を恐れない軍人は確かに強い。

然し二人は既に知っている。

死という泥に触れたことのある五十鈴や、死んだ村雨も春雨も。

あの涙した感情は、理屈では理解して共感しても。

自分のものにはしていない。だから、恐れというものが本当の意味で湧かない。

七海は死んだのだ。経験して、死を超越して生きている。

だから、忘れたとしてもわかると言うこと。

あの暗い世界で見た光景を……自分で体験したんだろう。

だから、七海は死ぬことを怖がっている。

知識や理屈で半端に触れたことのある二人とは違う。

真の意味で、死を受けたから。

だから、もう少し……生きるという意味を、考えてみてほしい。

その上で、作戦を立てるべきじゃないかと。

自分の終わりが、本当に怖くないのか。

決して満足できるモノじゃないと、教えてくれた。

故に。島村はその先に行く。

背中を押してくれた彼女の言葉を抱いて、その意味を己のモノにしたいから。

「……ありがとう。渋谷さん、私は……まだまだ未熟なようだ」

そして、前に進もう。

晴れやかな表情で、島村は七海に言ってから。

武蔵も、その意味を解して頷いた。

もう一度、改めて……そして、言葉を選んで頼み込む。

「……渋谷さん。この作戦は、とても重要なものだ。最悪、どう足掻いても私も武蔵も死

ぬかもしれない。だが、私はまだ……未練と言うものがあるようだ。死にたくはないと、今強く思う。故に、私という個人を……助けてはくれないだろうか？」

以前と同じ。七海は個人のために助けに来てくれた。

七海には、七海の理由がある。

その理由は未だに分からないが、言えることは素直に助けを求めるしか島村にはない。

この方法しか思い付かない。七海は、何やら頭に手を置いていた。

固唾を飲んで見守るなか、七海は。

——だから、島村さん。あなたには死なれたら困るんですよ。

あたしを散々助けておいて、また命懸けですか？ 全く、そう言うのは困ります。

……分かりました。あの時のお礼です。命懸けの恩返しには同じ条件で返しましょう。

「分かりました。あたしも、できることをします。だから、安易に自分を安売りはしないでください」

七海は振り返り、了解した。

そうしないといけないと、幻聴が囁いた。

驚く周囲に、なにも言えずに七海は最後に纏める。

「後悔は残ります。未練とか、そう言うのを抱えて死ぬのは最悪なんです。……覚えておいてください」

言われて頷く武蔵と島村。

こうして、また……七海は、自分から戦いに向かう。
そんな力など、無かったとしても……。

ハゲの鎮守府

死ぬのは、怖いこと。

その教えを七海はハゲに伝えた。

それは、幸運と言えよう。

何故なら、ハゲにはもうひとつ問題があつたから。

そう……。駆逐艦、吹雪との因縁であつた……。

端的に言えば、軍規的には既に処罰を終えている島村にも責められる要因はない。

随分と前の話を今頃掘り返すほうもどうかしている。

だが、恨みと言うものはそう簡単には消えるものでもない。

当然、島村もそれを理解している。だから、受けた。

逃げない。隠れない。どんと構える。己の責任から目を背けることは元来島村はない。

因縁の勝負は日程が決まっている。

同時に進めていく。七海は本当に惜しみ無く協力してくれた。

元帥を説得してくれたのだ。

最初はどうも、渋い顔をしていたが、七海は島村が嘘を言うわけがないと懸命に言っただという。

「島村提督……。私は、あなたの覚悟を侮っていたようです。お詫びいたします」
連絡を受けたとき、元帥はそう彼に伝えた。

国を守るために全力を尽くしたい。熱意は彼女にもわかってもらえたそうだ。

「武蔵の最終改装の資材でしたか。あとは……作戦を拝見しました」

一応、切り札である彼女にも自分の作戦を見てもらった。

評価は、妥当。然し、甘いと言われてしまう。

「己を前線に出すのを前提とした作戦は、命の安売りと同じです。確実に生き残れる作戦ならばまだしも、これは決戦。TPOを弁えたほうが賢明だと思いますよ、島村提督。わかつた上で持ちかけたので私も糾弾はできませんが。ですが、その気概……熱いほど伝わりました。姫園鎮守府の資材を必要な分、送ります。使ってください」

「ありがとうございますッ!!」

元帥は言った。国防の覚悟は、魂に誓って本物であると。

作戦に元帥は一部変更を告げた。それは、島村本人の出撃に関して。

「出るな、と言っても出るのでしょうか？ ならば、提案があります」

気持ちを汲んだ上で、元帥は安全性を高めると言って、予想だにしない方法を切り出した。

「……島村提督。あなたの操縦するヘリコプターに、深海棲艦を同乗させます。宜しいですか？」

「い、良いのですか元帥殿!!? それは、要するに……!」

この上ない好条件。

元帥は、島村が出撃に使う予定のヘリコプターに、深海棲艦三名を乗せると言い出した。

なぜ、好条件かというと。

「ええ。渋谷さんとの擬似的な共闘です。やってくださいますか？」

それは、七海との共闘を意味するからだ。

七海は深海棲艦たちを指揮する権利を唯一持つ。

つまりは、搭乗すると言うことは七海の意見も取り入れられる。

隣に七海が居るのと同義になるのだ。

「是非とお願ひ致しますッ!!」

なんという僥倖。

もうあるまいと思っていた七海ともう一度、任務を行える日が来ようとは!!

珍しい興奮した声で言った。彼女と共に戦うなら百人力。

多少の不利など覆して見せよう。傍で聞いていた武蔵も雰囲気察して拳を喜びで

握っていた。

一気に士気が上昇する二名。やる気は十分であった。

援軍として、頼もしい僚友が駆けつけてくれたのだ。

これは、生き残らなければなるまい。彼女の教え通り、必ず。

更に支援艦隊に戦艦、駆逐艦、重巡を一緒に連れていけと言った。

「嫌々なのですが……村雨、春雨の二名も参加するようです。あとは、五十鈴が行くと

言っています」

「おお……！」

七海が説得してくれたのか。村雨と春雨、五十鈴まで来てくれるとは。嫌々でも構わない。頼らせてもらおう。

元帥は最後に、こう伝えた。

「ああ、渋谷さんから伝言を預かっています」

元帥は、島村に終わり際に言った。

「全員で帰って来てくださいね、必ず。だそうですよ」

「……分かりました。では、私からも一言お願いします。……貴女の助力に魂より感謝を。そして、貴女に誓って……絶対に帰ると。そう、お伝えください」

島村は託された。部下の命を。

だから、帰ろう。必ず。未練を抱かないように。

防人の誇りに誓って、約束を果たすために。

電話を切って、島村は手配や何やらに戻る。

武蔵に軽く教えると、彼女は感慨深く頷いた。

「相棒よ……。必ず勝つぞ。彼女の……。渋谷さんの想いを無駄にしないためにな!!」

「応!!」

力強い返事をして、戦いに備える。
負けられない戦いが、始まるうとしていた……。

吹雪との任務の当日。

島村は忙しく準備に追われていた。

彼女のことも大事だが、決戦も妥協できない。

凄まじい速度で仕事を片付ける。流石は大佐、要領は良い。

そして、昼頃。肝心の吹雪は不満な顔で、現れた。

島村の鎮守府は現在忙しい喧騒で包まれている。

そんななかだ。対応は武蔵に任せて、時間ギリギリまでひたすら仕事をする。

鎮守府の正門で待ち構える武蔵は、小柄な田舎娘のような駆逐艦を迎えていた。

敵意に満ちた視線。だが、七海には程遠い。大戦艦を怯ませる眼力はない。

「ようこそ、我が檣山鎮守府へ。貴様が吹雪か？」

「……はっ」

堂々たる出で立ちの武蔵にも吹雪は萎縮しない。

憎き敵の艦娘としてしか、見ていないようだ。

憎しみを感じる視線を見て、成る程と思う武蔵。

嘗ての甘さ、高慢さのツケがとうとう巡つてきたのだと。

「話は聞いている。生憎と、相棒は今忙しくてな。済まないが、私が案内しよう」

「今回は……」迷惑をおかけします」

社交辞令は言えるようだが、所詮は上っ面のみ。

今にも殺しに行きそうな殺気にまみれている吹雪は、放置すれば直ぐにでも襲いかかるだろう。

背を向けて歩き出す武蔵は、道中見学でもしていけと言って、吹雪を連れていく。

それなりの規模の鎮守府には、様々な艦娘や人間がいた。

正門を抜けて、黙ってついてくる吹雪は、警戒しているが同時に観察もしている。

外道が行う鎮守府の様子を、拝見しているようだ。

知っているが敢えて無視して、一先ず荷物をおきに向かつてから、改めて案内する。

おおよそ、工廠と訓練所と艦娘たちのいる場所を連れていくことにした。

大体それで空気はわかるだろう。

取り繕う必要もない自然な鎮守府の姿を、この小娘に見せてやる事にした。

先ずは工廠だ。

多くの妖精や艦娘が仕事や調整に汗を流す巨大なガレージのような場所。

喧騒が一番大きい場所から見学を始めた。

入り口で中を示す武蔵は言った。

「うちは、特殊な艦装を整備していたり装備しているんでな。ああいう風に、先ずは身体を慣らすのさ」

指差す方向では、痙攣しながら倒れている艦娘がいた。

艦装を展開しているまま、何人も倒れていた。

驚く吹雪が何をしているのか怒りを堪えて聞く。

虐待でもしているように見えるらしい。よく言われる。

自分の意思で、強くなりたいと申し出た艦娘に与えられる大きな壁と言えればいいか。

だが、それを言っても大抵説明したとして、分かるまい。

「あれか？ あれはな……艦装の中身と戦っているのだ」

「中身……？」

そう、中身だ。

体験した方が早いと、武蔵はその辺に置いてあった鋼材を手にして、吹雪に手渡す。

鋼材にあるまじき生臭いヘドロのような色。そして悪臭。

顔をしかめる吹雪に、武蔵は苦笑う。普通はこういう反応が一般的だ。

「こいつが、うちの主武装を融解して精製した鋼材だ。試しに持つてみるといい」

吹雪は嫌そうに、受け取った。途端。

「……ひいつ!？」

小さく悲鳴をあげて鋼材を落とした。

驚きと恐怖を見せる。理解できない顔で、恐々落ちたそれを見下ろす。

「驚くのも無理はないな。お前はどうかやら、ダメな方らしい。耐性があれば、装備しても問題は無いのだが」

拾い上げる武蔵に何ともないのかと問う吹雪。

事実、何ともないのが武蔵であった。

それをもとの位置に戻して、説明する。

「こいつは、深海棲艦たちが使っている艦装と同じ素材だな。艦娘には精神を汚染する

毒になり得る場合が多い」

そう聞くと、吹雪は思わず叫ぶ。

「正気ですか!? 深海棲艦と同じものを使うなんて!! 死にたいんですか!」

「いいや、違うな吹雪。……死にたいんじゃない。私達は、生きたいんだよ」

普通は敵と同じ技術を毒いりと知って取り入れるなどどうかしている。

だが、この毒は……単なる毒ではないのだ。知っておかないといけない毒。

知らなければならぬと武蔵は考えるもの。

「この毒は……死者の思念だ。それがどうも、この素材の中には凝縮されてるらしい」
死んでいった艦娘たちの残していった未練の塊。思念の物質になったものと語る。

絶句する吹雪。今しがた聞こえたような、憎しみの声。

冷たい生肉のような感触の鋼材は、死人の感情で出来ている。

それを、あそこで倒れていた艦娘たちは精神を慣らしているのだ。

「正確に言うとな……あの訓練は、艦装の声を聞いて、どうするか問いかけでもあるんだ」

武蔵は、起き上がってまた倒れる艦娘たちを見つめて、吹雪に聞いた。

吹雪は完全にダメな方。生理的に受け付けない、拒絶している艦娘。

死者の声には耳を傾けることが出来ない艦娘になる。

そう言われて、不機嫌な顔になった。失礼極まりない言い分である。

武蔵は言外に言ったのだ。お前では無理だと。

死人の感情を受け止めるつもりのない奴は真似できないと言いたいようだ。

「あいつらを虐待したとでも思うか？ 残念だが見当違いだ。私達艦娘のある意味、戦う理由を見定める方法でもある」

「……何が言いたいんですか？」

深海棲艦が使う装備を使っても、精神が弱くない限りは呑まれる事もない。

呑まれれば戻ってもこれないだろうが、艦娘の精神はそこまで弱い者も少ない。

それ以前に戦争をしている艦娘は、精神が脆弱であれば戦つてなどいけないだろう。

あの毒の意味を理解できれば、強くなれる。それこそ、桁違いに。

声を聞いて、意味を分かろうとしたり、理解しようとしたりするのがそこにいる訓練中の艦娘。

彼女たちはまだ特訓の最中だ。精神がすり減るため、出撃はしないでずっと特訓をしている。

そして、吹雪のように相容れない艦娘。酷いときは失神したりするのだ。吹雪はまだ軽い方。

「もっと生きたいから、糧にするためにあの毒を受け止める。死人たちはな、沢山の無念

を残して散っていった……。その思いを継げるのは私達生きている艦娘だけじゃないか。吹雪は出来ないだろうが、死人の思いを継ぐのもまた、戦う理由だと私は思う」

「……………」

吹雪は睨む。やはり、理解はしたくないようだ。

普通の装備もあるし、当然あれは自主性により貫えるもの。

決して強制ではない。前は……強制の部分もあつたけれど。

「そういう割には、私の妹を無惨に死なせましたよね？」

「……初雪と白雪か。覚えているとも」

恨みを込めて問いかける吹雪の言葉に、武蔵は目を細める。

ゴミのように扱い、ゴミのように捨てた。

そう言う扱いをした連中が偉そうにという、糾弾の視線であつた。

「その一件で今回は来たのだったな……。当然の仕打ちだ。好きに言うといい」

「開き直りですか？ 最低ですね……本当に」

「お前にはお前の言い分があるろう。だが、忘れないで欲しいな。あいつらにも、問題はあつたのだから」

責める吹雪に対して、武蔵はハッキリ言った。

被害者であることは否定しないが、死んだ二人にも問題はあつたと。

死ぬほどの問題なのかと、吹雪は嘯みつく。怒りを浮かべていた。

「そうだな……。度重なる任務の放棄。致命的な遅刻に、サボリ。装備の適当な整備に、用途以外の使用。味方への誤射、護衛対象との自爆。ざっと上げるだけでこれだけあったが、まだ聞くか？ 何ならあとで証拠の書類も見せてやるが？」

物証はあると淡々と武蔵は告げる。

吹雪は齒噛みした。逆恨みの自覚があるからか、正論にはなにも言えないように。

今あげた失態の中には死ぬほどの問題もあった。事実、任務の放棄は死ぬほどの問題だ。

何せ放棄してゲームして遊んでいたのだ。仮にも艦娘が。挙げ句言いつは面倒くさいからと言うもので。

こんなもの、誰が看過できる。数度は見逃した彼の甘さと武蔵は指摘した。

「吹雪よ。逆に言うぞ。……初雪と白雪が、清廉潔白だと思っっているようだが誤りだ。あいつらにも落ち度はある。そして、その落ち度が……人々の命を危険に晒して、仲間を沈めそうになったことも事実だと、覚えておけ」

厳しい言葉に、俯く吹雪。

そのまま沈黙して次に行く二人。

二人の対峙の時は近づいていた……。

身勝手な理由たち

武蔵が吹雪に現実を教えている頃、渋谷のお家では。
実に平和であった。

「い、いやあああああー！？」

……訂正。平和じゃなかった。一部が。

裏で色々とお手伝いをしていた七海は、慣れない交渉をしていたため疲れていた。

桜庭相手に口八丁で言い訳を作って説得するのは骨が折れた。

多分見抜かれているんだらうと、素直に思う。

単なる子供が元帥相手に口で勝てるわけがない。

それも予想されていたのかと思うが、ともかく。

で、うっかりリビングに先日持ってきた借り物の物証、えつちな村雨同人誌をそのままむき出しで放置していた。

挙げ句にはそれでも認めない往生際の悪い村雨に止めをさすため、無理を言つて同人ゲームまで借りてきた。

制作者はオータム戦艦雲隠れなる連中で、サブに風雲に似ている娘や由良、春雨に似ているヒロインまでいた。

それも裸で置いてあった。で、母がそれをお休みだったので早起したら発見していた。

ゲームはDVDが見られる環境で出来るエロゲーである。

こいつのメインヒロインが村雨にそっくりで、しかも声までよく似ている。

CVは聞いたことのない人物で、然し実際代表でプレイしてくれた五十鈴いわく、

「村雨は一体過去に何してたの!?!」

と言わせるほどの迫真の演技力だそうぞ。

見た目も似ている、声も酷似。

これはもう言い逃れなど出来ないし、数々の青少年の秘密グッズを証拠に、今度こそ過去を白状させようとしていた七海は隠すのを忘れていた。

で。

「お母さん、それ村雨の趣味です」

言い訳に村雨使ってみた。母は凄い顔をした。

「いやあああああ!! 違います、村雨のじやありません!! 村雨そんなの知りません!!」

七海が全部あの淫乱エロメイドが持ち込んだ私物と咄嗟に言っ、後で本人に返すと
言っ返してもらえた。

但し、母の視線に村雨が困惑していた。

退出後彼女のみ呼ばれてリビングで大声で否定するが……。

「村雨さん……。その、七海はまだ高校生なので……こういう物はご自重願えると助かります……」

外野が村雨しかいないとか、あのエツチな村雨以外に有り得るかとか誘導しまくった。

結果、なにも知らない母は鵜呑みにして、村雨は真っ赤な顔で赤っ恥をかいた。

「あたしは悪くありません。村雨が昔にそんなエツチなモノに出演するからいけないんです。あたしは悪くないです」

「この悪魔アツ!! 誤解だっ言ってるでしょッ!!」

しれっと自室に逃げ帰る七海は先にブツを回収したので、ノーダメ。泣きベそをかいて戻ってきた彼女に身勝手な理由を言う。

七海の実家の部屋はあまり広くなく、殺風景なもの。

ベッドや机、箆筒しかないし、本棚には大量の活字の分厚い本が収納されている。

テレビもあるが、ゲーム機が接続されたまま。しかもそれもうつつすら埃を被つていた。

今日は娘と嫁と妹が深海棲艦と遊びに来ていた。

リセと静香とリンゴとパクチー。角がある連中である。

母は矢鱈色白で、角がある彼女たちに違和感があつたが。

不治の病であんな奇形を起こしているだけで、普通の人間と七海が説明していた。

本当は深海棲艦なのだが、見た目は可愛い女の子と綺麗な女性だ。言い訳は出来る。ギリギリ。

不憫な感じになつたものの、命に関わる病気ではないので大丈夫と言つて事なきを得ている。

黒い薄手の半袖を着ているリセ、大きめの白い無地の素っ気ない半袖と短パンの静香、薄いジャージ上下のリンゴと、黒いワンピースのパクチー。因みにパクチーはあだ名で通してある。

理由も適当にでっち上げ。七海はこう言うときに口がうまいと皆思った。

如月は何故か無駄に露出の多いキャミソール、山風は地味なグレーの半袖、弥生も似たようなものだ。

それに対して七海は、何故か春雨と同じクラシックメイド服だった。

最近倒れるといけないので薄手でもう一回作り直した。

以前自分で縫ったらしいので、試しにやったら身体が覚えていたのかスムーズに進んだ。

改造和服の小春も下は赤いミニスカート、上はこれが良いと小春が持参した金剛とかいう艦娘の衣装を参考にその場で作成した。よく似ている。

布が余ったので村雨もこうしたら件のエロゲーのヒロインにそっくりだった。どうして？

逃げてきた七海にキレル村雨。華麗に無視する七海に悔しそうに唸る。

「さあ村雨。認めなさい。物証を出せというから出しました。それでも尚否定しますか、スケベメイド」

「認めるかアツ!! こんなもん、他の鎮守府の村雨であって、村雨じゃないから!! 無実だから!!」

あくまで違う自分であって自分ではないと主張する。

ならばと、七海は言い分を変えた。

「村雨という艦娘が既にスケベのエロメイドという証拠です。即ち、貴方もスケベでエロメイドです。証明完了」

「言いがかりだつていつてんでしようが!! 全国の村雨に謝りなさい!」

要するに全国の村雨さんは全員エロいという暴論に当然ぶちギレる村雨。

が、生憎とそう思う顧客がいるから、こういうものがフィクションとはいえ、出回るわけで。

「そんなこと言えば、如月だつてそういう扱いよ? 気にしないけど」

七海にすりより甘える如月も似たようなエロ娘の扱いをされているようだ。

情報収集の為に何冊か購入したが、大抵似たようなものだった。

いい加減、三人娘の関係も慣れてきた。自分の性癖だ、受け入れる努力はする。

痛い思いはしたくないので。

気になってちよいと五十鈴に頼んでオータムなんたら同人誌をあさつてもらったら出るわ出るわ。

似たような感じの娘たちが紙面で次々犠牲になっていく様が。

過激な内容に興味があつて七海も自分でこっそりと五十鈴が代わりに買ってきた。

無論母には秘密である。

健全なものも不健全なものも手当たり次第。如月も春雨もたくさんあった。

「大体何で村雨だけ!? 春雨だって本あるじゃない! 差別よ!!」

と、本棚を指差してキレる村雨。

然し、内容を知らずに困惑する春雨の頭を撫でて七海は言う。

「春雨がそんなえっちなものに出るわけないでしょう。こんなに純粋なのに。ねー?」

「え……えと……ねー?」

ねー? と聞くと反応に決まって照れつつ首を傾げて同じ動作をした。可愛い。

春雨はどこぞのスケベメイドとは違って素直で大人しい可愛いメイドなので今の七海も気に入っていた。

小春も然り。村雨は別。エロメイドなど認めぬ。

「もういやああああああ!!」

という哀れな彼女は無視して。

「ママ……こういうの好きなの?」

「んー……? いえ、以前のことは未だに思い出せないのです、山風本は参考資料ですかね? 意外とこれ、性格はトレースされているので」

健全な本が多い山風に関しては、接し方の参考に購入して既に本棚の一角を埋めている。

ママという呼び方も慣れてきた。聞けば命の恩人らしく、以前はハゲのところで大変だったらしい。

兎に角厳しいストイックな鎮守府で、妥協も甘えも許さない鉄血の艦隊といえばいいか。

下手すると、普通に殺されていたらしい。俗にいう解体である。

山風は言うが、あそこは以前は地獄だったという。

勝つためなら方法は選ばず、多少の犠牲を強いても強引に進める戦法が主流。

沈んでいたりした艦娘もたくさんいた。

七海はそれはコラテラルダメージ、要は必要経費と納得した。

山風は理由を聞くが、

「当時は島村さん、加減知らないようでしたよ。ほら、あの人艦娘を確か兵器って言うてた気がしますし」

そんな気がすると言っていた。

知らぬ間に徐々に記憶が戻っているのかとも思うがそれはそれ。

勝たなければいけない場合は……それも一つの回答であると。

犠牲なしの戦争は理想であり、今まさに島村は理想の戦いを目指しているわけだ。

七海は山風に謝りつつ、否定はしないと答えていた。

無論、今は違うだろうし。弥生がそこで口を挟む。

「解体も……あった。けど、今思えば……思っていたほど、解体してない気がする……」
ただ恐怖しかなかった当時とは違い、落ち着いてきたこの頃。

冷静に思い返すと、ハゲは無闇に解体はしていなかったそうだ。

あそこは当時から艦娘の個性を認めないようで、弥生も山風も戦ってさえいれば良かった。

トラウマの原因はハゲの采配であり、それはハゲが悪いと七海は断じる。

ただ、考えてみれば……解体という最終手段は、早々しなかったと。

基準があり、任務への致命的な損害を出した場合は即日解体をしていたという。

そこでふと思いつく。

二人はそう言えば、吹雪の妹の同僚だった。

初雪と白雪だったか。

それとなく、聞いてみた。

吹雪型の艦娘がいたと思うがどういう奴だったのか、当事者である如月と共に今更聞く。

如月も多分気づいている。指摘せずにそのまま流した。

「……あいつら、今でも嫌い。あたしは」

「皆の足引つ張つてたよ……。よく揉めてたし」

酷評が飛んでいた。

初雪、白雪は解体をされても別におかしくないような艦娘であつたらしい。

反抗をするのではなく、任務に支障をきたすような人物であつたとか。

山風は語る。白雪は普段大人しく真面目なのはいい。

だが、彼女の場合は戦闘に入ると豹変するが如く、暴走を始める場合が多々あつた。手当たり次第、敵も味方も撃ちまくり、高笑いをしながら指示を無視して暴れていた。

誤射は起こるし、護衛の船を爆破させて自分も巻き込まれるし、散々だつた。

しかも本人は覚えていないという始末の悪さ。言つても気を付けても直りやしない。で、同じ味方を撃ち殺しそうになつたこともあるので、嫌がられていた。

山風も何度も撃たれたことがあるようだ。

「あんなの、何時までも生きてるほうが迷惑だつた……。あたしは毎回巻き添え食らうし。だから、その話を聞いたとき、あたしは本音じゃ如月には感謝してたよ。あいつが死んだお陰で、少なくともあたしは痛い思いはしなくて済むから……」

後ろから撃たれる被害者の台詞だつた。

まさか、そんな奴だつたとは……。二人は啞然とした。

で、自棄になって如月を巻き込んで自爆しようとしたのか。

尚更向こうが悪いじゃないかと、七海は思うし如月も心証を改める。

正直、まだ抱えていた罪悪感が薄れた。そんな奴の為に死なずに済んで良かった。

山風は、あの時は有り難うと言った。周囲の皆はなにも言わない。

その言葉に、どう反応すればいいか分からないから。

「……初雪はもつと酷かった」

弥生は、小声で語り出す。

初雪は兎に角任務の放棄が多く、遅刻もするしサボるし逃げるし隠れるし、ひどいときは勝手に味方を盾にしたと言った。

弥生は肉の壁にされたこともある。どうも、ハゲだけじゃないようだ。そう言うことをしたのは。

弥生も言った。死んで当然の奴なのだ。

「寧ろ、よく今まで生きてた。あんな風に、自分のために他人を犠牲にするような艦娘が、ずっと。解体されれば良かったんだ。……そうすれば、如月は苦しまなかった。七海姉も、苦勞しなかった。全部あいつらのせいだよ……」

憎たらしいように、怒ったように弥生は言うのだ。

自己主張の弱い弥生を使って逃げたことすらある狡猾な初雪には恨みがあったが、死

んで清々したと。

当然の報いなのだ。そう、締め括る。

(自分のために他人を犠牲にする……ですか)

——あたしもそうですけどねえ。

なんていう幻聴が聞こえた。自分もそういう類いか。

ならば、恨まれても当然かと思う。吹雪の恨みは、八つ当たりだが。

「……理由があるとしても、わたしは……信用しません」

「右に同意。村雨も、あくまで信じるに値する上官は、今は提督だけよ」

春雨と村雨はそれを聞いても意見は変えない。信じるのは、七海だけ。

「ふうん……。あたしはそつちの事情は興味ないけど、そんなものなのね。司令官様し

かあたしも信じてないけど」

「私はあ……どうでもいいわあ。人間の事情には興味ないからあ」

「それより飯のために頑張りがいいじゃん」

「……………」

リセもパクチーも同人誌を読みながら適当に相槌を打っていた。

リングは菓子を食り、静香は黙ってポーツとしている。

「……………そう。少し、気持ちが悪くもスツキリしたかも」

「如月。気にしないでいい。因果応報で死んだ奴なんて無価値のガラクタ」

罪悪感が更に薄まる。同時に増えるのは安堵だった。

辛辣な小春の言う通り、気にしないでいいと思い始めた。

七海も思う。死んで感謝されるとは思わなかった。

連中も純粹に被害者ではないということか。

世の中、難しいと……同人誌を自分も開きながら、思うのだった。

「それはともかく。村雨は淫乱。これは決定事項です。これだけのエロ本を描かれる村雨がエッチなじゃない訳がない。皆、村雨に近づくとピンク色に染まりますよ？」

「ホントにもう止めてええええええええええ!!」

知った恨み辛み

卑しいメイドの悲痛な叫びが響く頃。

ハゲの鎮守府では、体育館のような訓練所に吹雪と武蔵は訪れていた。

海上では常に演習と訓練を繰り返しているため、効率を考えて陸上にも訓練所を設置しているという。

中を覗くと、広い高い天井の板張りの室内で、コード類が壁際から延長され、個々の場所に設置された機材に繋がれHMDとヘッドフォンをつけた艦娘たちが、何やらタブレットを持っているアシスタントの艦娘と一緒になって懸命に励んでいた。

何をしているのか聞くと。

「あれはな、VRを使った訓練だ。演習だけが全てではない。資材を使わずに出来る、時代にあった訓練方法なのだよ。仮想故に敵は自在に調整できるし、時間を考えずに常に行えるのが利点だな。ただ、調整に常にペアで動かないといけないのと、専門的な知識

が必要なものが多いことが難点だが。まあ、それは追々自主的に学べば誰でも出来ること。大した問題ではない」

成る程、海上の演習以外は経験のない吹雪には全く想像のつかない世界で戦っているらしい。

視覚と聴覚を長時間使うので、効率よく訓練に励めるそうだ。

汗だくになる彼女たちは多くが歯を食い縛る。あの画面の世界で何と戦っているんだらう。

吹雪にはいまいち想像できなかつた。

丁度、訓練を終えて休憩に入る数名の艦娘が武蔵に気付いて気さくに声をかけてきた。

「武蔵さん、お疲れ様です」

「うむ。調子はどうだ、不知火」

駆逐艦不知火、陽炎。雷巡木曾だった。

皆かなり疲れているのか、少々顔色は悪いが、充実した表情をしている。

不知火は今のところ順調ではあると言うが、木曾は肩を竦める。

「よく言うな不知火。お前、一発当てるのに精一杯だろ？　ま、俺も一発が限界だがな勝てる気がしねえ」

などと軽口を言いながら、吹雪を案内しているという武蔵に聞いた。

「来客か？ 珍しい……このクソ忙しいときにあいつになにか用事か。時間厳守で頼むぜ、お客さん。こつちも今は大規模作戦前でてんでこ舞いなんだ」

「木曾、お客様に失礼よ。止めなさい」

陽炎がたしなめ、済まないの木曾はすぐに謝罪した。

厳しい顔をしている陽炎。吹雪の鎮守府の同一の艦娘とは思えないほど、凛々しい姿だった。

吹雪の知る陽炎は、優しく頼れる姉という雰囲気。気さくさもある。

だが、目の前の彼女はまさに戦う艦娘という出で立ちで一寸の隙もない。

どちらかというと、不知火に近い感じがする。肝心の不知火は……。

(……目付きが武蔵さんと大差無い。鋭い眼光……まるで猛禽類)

鷹や鷲を彷彿とさせる刃のような目力。視線を合わせるだけで相手を怯ませるには十分。

戦艦顔負けと言うか。兎に角ここの艦娘は、一見ただで分かる、戦闘を主軸とする艦娘。

はつきり言えば、かなり怖い。抜き身のナイフに似ていた。

軽口を叩いていても、直ぐに鋭さは戻る。優しさなどなく、あるのは厳しさ。

吹雪の知らない世界だった。

「ふむ……。実はな」

暫くしたら、外の一部を借りると伝えた武蔵。

理由を聞かれて、吹雪に一度聞いた。説明しても良いか？ と。

……正直、嫌な予感しかしない。然し、ここは彼の鎮守府。

どのみち、吹雪には味方などいない。

諦めて好きにしてくれと投げ遣りに言った。

了解を得て、武蔵は簡単に説明した。

要するに、昔の事でハゲに喧嘩を売ってきたので後で戦うと。

すると……。

「……………そう。随分とうちを舐めてくれるのね、あなた」

陽炎が冷えきった声で、吹雪に言い出した。

横目で睨まれ、入る感情は軽蔑と哀れみ。

下らないと言うような目で見られる。

直ぐ様激昂する吹雪だが、

「陽炎。指摘しても無駄でしょう。自分の行いの愚かさも自覚できない艦娘のようです
し」

不知火に至つては取るに足らない存在と口にした。
上から目線で腹立たしいうえに、完全に見下していた。

「お前、そんなガキみたいな理由で貴重な時間をあいつに使わせるのか!!
ふぎけんな
！」

木曾に至つては、怒りを浮かべて掴みかかろうとしてきた。

咄嗟に身構えるが、武蔵が腕を入れて仲裁した。

「木曾よ、落ち着け。これは正式な命令だ。……仕方ないだろう？」

「チツ……」

舌打ちして、矛を収める。

なんとという柄の悪さ。部下の態度がなつてないのではないか。

だが、武蔵は謝罪したのみ。

吹雪は殺気を止めずに向ける木曾や軽蔑を向ける二名を睨んだ。

「何なんですか、一体……。初対面でそんな事を言われる理由なんて無いんですけど」
「お前にはなくても俺たちにはあるんだよ」

木曾は外の、入り口近くの壁に寄りかかり、怒つたまま吹雪に言い返す。

武蔵は制止するが、今度は陽炎が反論する。

「時期も最悪ね。まあ、これは偶然でしょうから、仕方無いとしても、ここにきた理由も

理由だし、自分だけが被害者と思っっているその態度。うちの鎮守府を名指して文句を言う連中と大きな違いはないでしょ」

陽炎は事実を知ろうともしないで被害者面するなと言ってきた。

更には、

「恥を知っているなら、こんな厚顔無恥なやり方をしないでしよう。なにも知らないから、こうして行動にしている。最早呆れて、なにも言えません。任務で無ければ、私が追い払っている所です」

「コイツら……ッ!!」

言わせておけば、好き放題言ってくれる。

吹雪も流石に頭にきた。

何が事実を知ろうともしないだ。

そんなもの、ここの提督が殺したという事実さえあれば十分だろう。

あんな風に追い詰めておいて被害者面!?

ふてぶてしい連中に、吹雪が怒鳴る。

武蔵が顔を手で覆う。揉め事を起こしてしまった。

喧嘩を売ったのは木曾だが、吹雪も吹雪だ。

だから説明しても良いのかと聞いたのに。

血気盛んなこの連中は、吹雪のような手合いが大嫌いなのだ。

しよっちゆうこの手の奴等は仕掛けてくるし、いつも自分が被害者だと声をあげる。そう言うのを嫌がるので、さつき言い分はあると言っただろうに。

口喧嘩を始める四名に、武蔵は仲裁するが……。

「武蔵さん。この女に、自分の妹が何したか、教えた？」

腕組みして壁に寄りかかり、首にタオルを巻きながら水分補給する陽炎が訊ねる。

簡単にしか教えていないと答えると、今度は不知火が口を挟む。

「ならば丁度良い。あなたの妹が仕出かした事を聞いて、それでも仇などと世迷い言を抜かすなら、彼の前に不知火が相手しましょうか？　口でダメなら直接教えて差し上げますよ？」

「こんのツ！」

今にも食って掛かる吹雪だが、相手は三人。

しかも、どう見ても練度は高いだろう。

辛うじて我慢していた。返り討ちなど見れば分かる。

「バカ抜かしやがって……。大体、テメエの妹がどれだけ被害出してるかも知らねえだろ？」

吐き捨てる木曾が最低限すら聞こうとしないと言うし、武蔵は喧嘩腰をやめろという

が。

「悪い、流石に武蔵さんの頼みでも無理だわ。我慢できねえ。どんだけ利己的なんだよこの女。胸糞悪すぎて、最悪な気分だぜ」

三人はそれぞれ悪態をついて、吹雪を敵視している。

何を言っているのか分からない吹雪が言っても、戻る返事はお前の妹が言える立場か、という反論。

何があつたのか、だったら言ってみろと言うので陽炎が先ず口を開く。

「沢山あるけど、何から聞きたいかしら？ 初雪も白雪も出してる結果は味方の被害しかないけどね」

それほど多くの失態を抱えて、尚且つこの言い方。

余程嫌われていたのだろうと普通は思う。

吹雪は怒り狂い、冷静ではないので理解しないが……。

比較的落ち着いている陽炎と不知火は、バカを見る目で吹雪を見るし、木曾は早く消えろと睨んでいる。

最早一触即発だった。

武蔵は自分よりも、当時艦隊を共にしたことのあるこの三名のほうが説得力があるとして今回は黙った。

吹雪はあくまで二人は悪くないと言い張るが、それは無知故の決めつけ。子供の癩癩だった。

事実は、残酷である。

「じゃあ、教えてあげるわ。正直思いつくすのも不愉快だけど……。最初は、そうね……。民間人を殺しかけ大ケガさせた白雪の話でも聞く？」

淡々と、陽炎は語り出す。

白雪のある護衛任務の話だった。

端的に纏めると、複数の駆逐艦で護衛していた民間の船を、襲ってきた深海棲艦諸とも白雪が攻撃して撃沈させた話だった。

極度の興奮状態で、旗艦の制止も提督の指示も全部無視して戦いを拡大させて、敵を全滅させたのと同時に護衛の船まで自ら沈めて、多大な被害を出した。

幸い死人は出ていないが、白雪が我に返った頃には、止めに入った味方諸とも大損害を被り、任務失敗。

激怒した提督が解体をしようとするも、外部からの制止があり見送られて命拾いた。

いわく、擁護していた連中の横槍だと言われた。

故にここの艦娘は口だけの擁護をする連中を毛嫌いしている。

本来するべき事を目先の感情で邪魔をして、被害を拡大させるから。

「こんな事をするバカの敵討ち? ……寝言を言わないで。こっちはあいつに頭ぶち抜かれて死ぬかと思つたのよ。一緒に戦つてた友達の山風や神風も、あいつに後ろからぶち抜かれてそれつきり戦うことを嫌がるようになった……。我慢できると思うわけ?

いいわ、百歩譲つてそれを許したとしましよ。でもあのバカのお陰でね、その船に乗つていた妊婦さんが危うくお子さんを亡くしそうになつたと後で聞かされたわ。あなたの妹は大したものね? 敵を殺すことだけ考えてれば任務の内容を無視して戦うんですもの。妹が妹なら姉も姉。あなた、一体何しにここにきたわけ?」

痛烈に批判して、苦情を受けたという陽炎は、自分の事を置いておいても、無視できない被害が出たと嘲笑う。

もう、笑うしかないらしい。陽炎はこれはあくまで陽炎の体験したひとつの過ぎないと言つた。

「私もありますよ。初雪のおかげで、私の友人だった弥生が盾にされましたよ。長月は雷撃の身代わりをさせられましたよ? 攻撃を避けるために味方をシールドにしたあの女の仇討ちとは笑わせる。じゃあ、同じことをしても良いですよね? 友人の仇討ちに今すぐ倒しても。そうでしょう? 自分だけ棚上げする気ですか?」

不知火は当時一緒に戦っていた一人だが、初雪がイ級の攻撃を受け流すために味方を

シールドにして回避するという外道な事をしたのを知っている。

しかも、当時一番練度の高い初雪は、躊躇いなく実行したのだ。

理由も最低で、自分の時間をドックに入れて削られるのが嫌だったというあまりにも身勝手なものだ。

そんな僅かな時間の為に、弥生や長月は死にかけてた。

おかげで弥生は次の任務で、作戦成功のための囷にされた。

弥生はその時の恐怖で暫く動きが鈍り、提督が役に立たないと判断してしまったのだ。

提督も提督だが、原因は初雪のせいだ。

だから不知火もあいっらには恨みがある。当然仇討ちなどと抜かすなら吹雪も同類だ。

悪党が一丁前に抜かすとは片腹痛い。こいつも結局奴等と同じで身勝手な艦娘だと分かった。

初雪も監査中と知った上でそれをした。解体できないと知つての上だった。益々ゲスであると思ふ。

「俺はあいっら二人に殺されかけたよ。役割として整備を命じられた初雪の野郎がしなかつたせいで、肝心なときに魚雷が発射できなくてな。そこを狙ったように白雪にズド

ンツ!! ってな。あいつら、俺を殺そうとしたんだろうな。俺は特に奴等とは不仲だったのを知っていたからな……。陰険なやり方しやがったもんだ。今でも腹が立つぜ。文句があるなら直接言えっの……」

木曾は二人の被害が直撃したパターンであり、真面目に轟沈しかけた。

本当にあの世寸前まで二名に追い込まれて、瀬戸際に生き残った。

だから一番怒る。吹雪の言い分が、何よりも腹立たしいと。

「なあ、長女さんよお？ お前も俺みたいな経験あるのか？ いや、それこそねえか。知らないからそんな下らないこと言っつてここに乗り込んできたんだろ？ 言つとくが、あいつらが残した恨み辛みはこんなもんじゃねえぞ？ うちの鎮守府始まって以来の問題行動しかない歴代トップだけ奴等は。あそこまで行ったのは他には望月と龍田ぐらいなもんだぜ？ 俺たちだけじゃない。あいつらに苦しめられた艦娘は大半だ。それを踏まえた上で喋りな。じゃないと、お前……生きて出られるかも分からねえからな」脅しをかけるように、木曾は言った。

話を聞いているうちに真つ青になっていく吹雪に、良い様だと多少は満足したのか、訓練に戻っていく。

不知火も陽炎も、精々死なないように気を付けろとだけ残し背を向ける。

「今なら、八つ当たりで渋谷提督にも勝てそうです……!」

「友達の恩人と戦うのは気が引けるけど、訓練だし。何より、目標だから頑張ってくるわ」

そう互いに話し合ってから戻っていく。

因みにこの二人、ここでの娘と妹の数少ない友人であった。

深海棲艦状態の七海を仮想で相手にしており、案の定惨敗しているがその内勝てそう
な有望な二名である。

「……分かったか吹雪。これが、現実だ」

武蔵は時間がないから次に行くと言って、精神が折れそうな吹雪を連れていく。

吹雪は嘘だと思いつながら進んでいく。

間違っている自覚があるとはいえ、あの言葉は既に致命傷なのであった。

喰われた

眞実は残酷。その意味を吹雪が知る時間よりも少し先の未来。

七海は、前々より受診すると言っていた病院に付き添いと共に向かった。

軍属の病院で検査を受けたのだが……詳細は相変わらず不明。

異常はないが、異常な行動を取るようになったと言えばいいか。

しかも目に見えて条件もハッキリした。

七海のリモートコントロールは、身内に対する悪意の反射だと医者を実演されて言っていた。

試しに医者が、付き添いで一緒にいた五十鈴を化け物と罵ると、先んじて検査と言って断ってからやったのだが。

勝手に七海の左手が動きだし、医者を絞殺しようと腕を伸ばした。

槍のような速度で、然し五十鈴に掴まれて阻止される。

唾然とする七海本人と医者。また勝手に動いた。

——おいヤブ医者、ぶっ殺しますよ？

またなんかいつているので、五十鈴に説教してもらった。

リモートコントロールが起きる都度幻聴が聞こえるとも言っていると、どうも記憶が回復傾向にあるようだ。

思い出せない七海の内面が、漏れ出して暴れていると言うべきか。

詳しくは七海の経歴もあって判断は難しいと言っていた。

兎に角、無理して思い出すとまた暴走するので、大人しくしていけと結論付けられた。

五十鈴は微妙な顔をして、七海は考える。

記憶が戻りそうなのか。……だったら、丁度良いかもしれない。

七海はいい加減分かっていった。近々ハゲと共に再び戦場に向く。

だが、今の七海には何も無い。素質も、力も、記憶も。

基礎的な知識すら欠落した自分が、己が知る経験を皆に与えないという保証はない。

死ぬのは怖いと言った。そう、とても怖いことと思いついていないが知っている。

でも、自分にはもう何も残っていない。努力じや何も出来ない無力な子供。

なのに、七海は戦うという道を選んだ。身の程知らずと知っておきながら。

愚策だと思ふし、無謀だと思ふ。無茶だし、無理だ。

出来っこない。七海は単なる人間になつてしまつたのだから。

家に戻る。五十鈴は道中、ずっと考え事をしてゐる七海を見て感じる。

(不味い……。また何か思い詰めてる)

経験上知つてゐる、七海がまた一人で何か仕出かす前兆。

自分だけで判断して、自分だけで背負おうとしている。

少し休むと言つて、七海は自分の部屋に引きこもつた。

嫌な予感がする。無理をしなければいいがと、五十鈴は思うが見守る。

無理矢理聞き出せばまた嫌がつて黙つてしまふ。なので静観する。

一応由良にも気を付けるように言つておいた。今はこれでいい。

だが、五十鈴は油断してゐた。今の七海は、初期の七海に近い。

今までの教訓は抹消してゐる。

だから、行動も初期の思つたらすぐに戻つてゐることを失念してゐた。

七海は決めた。今のままでは、全滅する。

自分が無力なせいで、あの恐ろしい経験を知り合いにさせてしまう。安請け合いました自覚もある。ならば、打開するにはどうすればいい？

聞けば以前、自分は深海棲艦の親玉をやっていたそうだ。

素質もない。力もない。記憶もない。ないない尽くしの今の七海に出来ることは

……。

(もう一度、戦う力を手にいれるしかない……!!)

七海は既に指揮の権利はあっても能力はない。

素人そのままで戦場に出れば皆死ぬ。

島村も、艦娘も、深海棲艦も。

死ぬのは怖いと知るなら、回避したいと思うのは自明の理。

それが、他人でもだ。

(幻聴が起きてくればなんとかなるはず……)

聞こえる条件は知っているのだ。

無理矢理聞き出してやると、自室に引きこもり、以前の自分を表に引き摺り出す作戦を敢行した。

要するに、自分の記憶を強引に思い出そうということになる。

痛みが伴うし、最悪殺されてもおかしくない。そういう奴らしい。

だが、それしか持たざる自分には手段がないのだ。

医者止めると言ったが止める気はない。無謀だろうが、実行する。

(起きなさい、前のあたし！ 何時までも寝ていないで早く戻ってきてください！

じゃないと如月に口に言えない事をしますよ!?! 同人誌みたいな!! あんな感じであ

の娘の身体を弄びますよ、いいんですか!?)

因みに想定するのはハードなタイプの同人誌。

確実にキレて襲ってくるはずと計算して、予め左手は寝転ぶベッドに紐で縛ってあった。

……で。

——あたしの嫁に何をする気ですって？

案の定挑発に乗って起きてきた。

途端に動き出す左手。暴れるも、紐が食い込み阻害する。

(如月だけじゃありません！ 山風も同人誌みたいにしてやります！ 洗脳してあたしの奴隷に仕立てますよ!?! 弥生もえつちな妹に調教して一生遊んであげますよ!?! 春雨もあたしのお世話意味深にして、小春は……同人誌ないや、じゃあ村雨は……ああ、あの娘は元々エッチな娘でした。じゃあいいや)

逆鱗と思われる事を兎に角矢継ぎ早に叫ぶと、激昂して荒ぶる幻聴。

——あの淫乱エロメイドは兎も角、皆を弄ぶとか、お前絶対ぶつ殺すツ!!
ガツンガツンと左手が暴れだし、偏頭痛が強烈に襲ってくる。

痛み出す頭を堪えて、呼び出すのは成功した。

此処からは痛みと変態との戦いだ。どう聞き出すかが問題であるが……。

(残念ですが、あの娘たちを可愛がれるのはあたしだけです。お前にはあの娘たちの柔らかな肢体は味わわせません！ 全部あたしが美味しく頂きますよ、意味深で！)

——殺すツ!! マジで殺すツ!! 皆の純潔はあたしが守るんですよオツ!!

あかん、刺激しすぎた。だが、想定している範囲ではある。

だから言った。いや、挑発した。コイツなら、以前の自分ならば。

全員守ってきたんだろう。愛してきたんだろう。

今の七海も、前の七海も、同じ人間である。

入れ替わっても何にも問題などないし、今の方が問題なのだ。

(悔しいですか？ 羨ましいですか？ 手始めに従順な小春と春雨からあたしの色に染め上げてみましょう。良い声で鳴いてくれるでしょうねえ?)

——お前、殺す……ツ!!

怒り狂う幻聴が、いよいよ左手以外にも支配しようとする。

頭痛も悪化するし、耳鳴りや吐き気もしてきた。どうやら本気で怒っているようだ。分かるとも。それだけ愛しているんだ。比例して憎しみも強くなる。

そういう人物だったと皆して言っていた。サイコパスみたいな奴だったと。

上等だ。サイコパスでも何でも、死ぬよりはずっと結果は救われる。

自分では何もできないなら。そろそろ以前に戻ろうと思う。

そつちのほうが、きつと自然な形だし……愛するという行為を先ず分からない今の七海よりは、幸せになる。

そんな確信があった。

だから、七海は幻聴に言った。

(……いい加減、戻ってくださいよ。皆待っているんですよ？ あたしじゃなくて、そつちを。あたしなんていう偽者よりも、愛しているあなたを。ねえ、そうでしょう?)

……まさか。その為に、こんな方法を？

幻聴は一瞬で落ち着いた。

無理矢理呼び出したのだ。あまり悠長には出来ない。

手短に要求する。戦いが始まる。お前が戦えと。

皆のために。お前の愛している者を守るために。

お前の望むように振る舞え。お前は七海。七海はお前。

同じ人間なら、どっちでもいい。

目を覚ませ。記憶を解き放て。

早く、皆の中心に帰るのだ。

前の七海が作ったのだから、責任持って全員愛してみせろと。

……………。戻りたいのですが、こうやって少し出るので今は精一杯なのですよ。

と、幻聴は告げた。

どうも思ったよりも深く閉じられる場所にいるので感情が昂らないと出てこれない。

色々引き換えに拾った命なので、難しいと思うと言うんだ。

方法はないかと訊ねると、無いこともないと。予想の範囲なら、できると思う。

幻聴は説明する。但し、人間をもう一度止めるという意味合いになると。

……お母さんを悲しませると思います。化け物になるので。

幻聴は言った。深海棲艦になればいいと。小春のような姿になると。

七海は、それを聞いて少し迷うが……。

(…………死ぬよりはずつとマシな気がしますよ。知り合いに死なれるのは、あたしも嫌で

すので。大丈夫、お母さんなら……あー……大丈夫。多分)

生きてりやどうにかなる。どうにかする。

母は母のまま。後で謝るとする。

死なれるよりは、多分何とかできると思う。

また先走る判断で、なら良いと勝手に決める七海。

軽はずみな行動を適当な理屈をつけて決定した。

どうすればいいか。一か八かの博打だが、価値はあると幻聴が言うので、手段を聞いた。

そして、限界なのか徐々に聞こえなくなる幻聴に言われる。

……取りあえずは、皆に変なことしないように。次いつたらマジで殺す。

と脅して沈黙した。

頭痛も治まってきた。冷や汗を沢山かいた。後で着替えるとして。

先ずは行動を始めよう。方法を覚えているうちに、七海はまた相談せずに突っ走り出す……。

小春を呼んだ。彼女が一番忠実で話が分かり、秘密を言わない。

「お嬢様、何か用？」

自室に招いた和服従者に、七海はわざとこう言った。

「小春、あなたにしかな言えないお願いがあります。助けて下さい」

頭を下げ頼むと、表情を引き締めて小春が何でも言ってくれと言った。

「……今、何でもって言いましたよね？　じゃあ、何でもいいんですか？」

「お嬢様のお望み通りに私は働くから。何なりと」

思った通り。滅茶苦茶小春は良い娘であった。

耳元で囁いてお願いをすると、分かったと頷く小春。

理由は聞かない。七海が望んだから行動するのみ。

言われた通りに頑張る従者。何度も礼を言う七海に、クールに言った。

「私はどこぞの淫乱エロメイドとは違う。有能だから」

村雨が聞いたらキレそうな事を真顔で言った小春は一度鎮守府に戻り、あるものを勝

手に持ち出した。

とても大きいモノなのだが、風呂敷に包んで翌日にはこっちに持ってきた。

抱えて朝っぱらから七海の部屋に持ち込んだ。

「バレてない？」

「平気。邪魔した悪いやつは気絶させてきたし、防犯カメラは位置をずらしてきた」

若干不安な台詞を言うが、風呂敷を開きながら小春が言うので信じよう。

「開帳される風呂敷の中身。それは……。」

「にゃー!?!」

「静かに。……久しぶりですね、浮遊要塞。あたし、覚えてますか?」

白い球体で、剥き出しの口に前歯の生えた深海棲艦。

浮遊要塞だった。何でも出来る深海の明石とも言える頼れる存在。

それを一匹誘拐してきたのだ。

寝ている間に連れ去られて驚く浮遊要塞に、七海は優しく問う。

驚いたのか、浮遊要塞は一度七海に近づきどついて感触を確かめて、知っていると分かかって大人しく鳴いた。

プカプカ浮いている球体に、七海は予め小春には言っておいたお願いを口にする。

「浮遊要塞。いきなりで悪いのですが……あたしを深海棲艦にしてください!」

「にゃー!?!」

自分が化け物になる選択肢。

これしかない七海は迷わず選んだ。

全てが欲しい。もう一度戦える全てが。

だから、頼みの綱に頼み込み。

よく分からないが、懐いている七海の頼みならすぐに聞く。

んで。

「にゃー!」

「ファッ!?!」

深海棲艦になるなら一度食われろと言うのか。

七海の前で大口を開けて、そのまま。

浮遊要塞は、奇声をあげて驚く七海を。

小春の前で、一口で捕食するのだった。

姫園鎮守府の憂鬱

本当の予定では、浮遊要塞にムラマサという装備を受け取り、変異する予定だったが、何を血迷ったのか浮遊要塞に七海は喰われた。

理由が見えずに驚愕のまま、腹に落ちていく。

どうしてこうなった。七海は生臭い夜に、沈んでいく……。

少し時間を遡る。

浮遊要塞を取りに一度戻った小春。

お願いという使命を果たすため、全力で事を進める。

七海の周囲に深海棲艦が集まり、出入りしているので多少は鎮守府の殺伐とした空気

も穏やかになった。

まあ、依然として七海の生存を知らされていない他の艦娘は落ち込んでおり、此方の動きに気づく様子もない。

桜庭のもたらしした平穏を与えられて、自分の存在意義を見失いそうになっていた。普段ならば桜庭に戻ったと報告するが今回はせずに真つ直ぐ工廠に向かう。

喧しい謎の珍獣がいるので、目撃しないようにちよいと工夫した。

「おいそこの深海棲艦、おめえなにぶちまけてるんだ!? 俺らを殺す気かッ!!」
髭がなんか叫んでいた。

道中、ドラッグストアで購入した虫除けをなんと妖精目掛けて散布したのだ。

火気厳禁だつていうのに、今は火を使わないから良いだろうと反論して、妖精たちを追い払う。

逃げ惑う妖精たち。追い回す小春。

奴等が窓を開いて熱を逃がして作業するから室内にはモスキートが沢山いて正直夏場は辛い。

網戸を作れという無言の圧力だった。

「うわあああああ!?!」

髭も虫除けの餌食となり、逃げ回っていた。

コイツらもモスキートの餌食になるのに蚊取り線香の一つも使わない。

夏場の厳しきと言うものを教えてやると、小春は黙って人払い。

妖精たちは整備を終えた休憩時間に急襲され、皆逃げ帰っていった。

取りあえずはオツケー。次、防犯カメラの位置を軽くずらす。

適当にあさつての方向に向けておいた。

で、休みの日なので爆睡するプカプカ浮いている浮遊要塞を素早く風呂敷に包み込み捕獲。

無理矢理背負い込み、踵を返す。無表情のまま、お仕事完了。

廊下に出て、そのまま戻ろうとすると。

「あら……小春さん？ 何ですか、その大きな荷物」

とぼとぼ廊下を俯いて歩く空気が梅雨のような湿った山城を発見。

気ついて不思議そうに見ていた。

「山城……」

面倒なのにあつた。

どうせ哨戒以外は出撃のない平和で退屈な日々。

忙しいのは桜庭と装備を個人で纏める深海棲艦と、五十鈴ぐらいなもの。

他は至って変わらない時間を過ごしている。

目撃者が居るとなると、面倒なことになる。

小春は簡単に理由を嘘八百で言った。

「野外任務。敵地の基地に隠密行動をしに行くの。私は深海棲艦だからそれも出来る」

「はあ……。要するにスパイですか？　っていうか、それ私に言ってもいいんですか？」

「黙ってないと山城もトラップの荷台に積まれる」

「……黙っておきます」

暗に口外したらお前は鋼材に戻されると脅すと、聞きたくないと言を振る。

時間もないので軽く会釈して通り過ぎようとするが、山城が呼び止める。

「……最近、由良や五十鈴が居ないんですけど。なにか知ってますか？」

そう言えば入院している連中と五十鈴たちの事は皆知らないままだった。

振り返るも、教えない小春は知らないと言を振り、山城はどこに行くのか念のため聞く。

「執務室ですよ……。今日の秘書は私なので。ああ、行きたくない……。元帥の近くに
いるとお腹が痛くなるのに」

真つ青な顔で嘆いていた。

相当桜庭が苦手らしい。ストレスが溜まるのだそうだ。

ならば、丁度良い。行きたくないなら、こう言うのはどうだと小春は言い出す。

「はい？」

疲れた山城が聞くと、小春はすたすた山城の背中に回って、

「(うううう)と」

うなじに手刀を鋭く打ち込む。

戦艦なので強めに入れていく。

「はう!？」

何故か艶っぽい声をあげて、気絶する山城。

ぼったり倒れる。で、小春は近くを通りかかった衣笠を見つけて声をかける。

「……………ん？ 何、小春？ 今、衣笠さん虫の居所が悪いんだけど……………」

むちゃくちゃ不機嫌な衣笠が面倒そうに言うので、山城が体調悪くて倒れたと言った。

医務室に引き摺っていくので手伝って欲しいと。

「あ……………山城さんとうとう限界かあ……………無理もないよねえ……………あの人、完璧すぎて、出番すらないし」

衣笠も白目を向いて気絶する山城を見てぼやく。

皆は桜庭のあまりの完璧超人に、自分なんか居なくても良いと半分自棄になっている。

駆逐艦ならば幼いからまだしも、ある程度精神の成熟した艦娘には桜庭の存在は大きすぎる。

戦いを否定された艦娘の精神は不安定になりやすく、そこに七海の死亡がまだ覆っていない皆の心はかなり沈んでいる。

やる気もないし、やることもない。

本来なら喜ぶ平和が、逆に艦娘には苦痛になっていた。

「衣笠さんもちよつと休もうかな……。どうせ暇だし、やることないし」

重巡の衣笠と、小春で山城を持ち上げて医務室に運搬していく。

衣笠にも荷物を問われたが、野外任務と伝えると、やることあるだけマシと言われた。

「七海の暴走が懐かしいよ……。あんな騒がしい鎮守府はもう帰ってこないけど」

(お嬢様生きてるし。多分、近いうちに帰ってくる)

どこか懐かしむ衣笠と共に、そう確信する小春は医務室に向かうのだった……。

医務室に行くと、ベッドが埋まっていた。

山城は非常用のソファアーベッドに転がっていた。

「姉様……提督が……。提督が……。瑞雲に乗って……。帰って、きた……」

などと囁かれている様子だが、内線で衣笠が体調悪いので、休むと伝える。

桜庭はお大事にと伝えて書類仕事を捌いているようだった。問題ないらしい。

普通はこんなに練度の高い艦娘がいつぺんに腐ることなどないがこの元帥は規格外。

七海ならまだしも、彼女の場合は普通の艦娘では追い付けない次元だ。

腐つていても不思議じゃないし、問題もない。

小春はさっさと出ていった。その様子を、羨望の眼差しで見送る衣笠。

通夜のような空気で、医務室は満たされる。

古鷹や羽黒、飛鷹がすることもないまま座っていた。

「そっち、非番？」

衣笠が何気なく問いかける。

飛鷹は紙飛行機を作って、飛ばしていた。

「まさか。全部仕事をあの人に持っていていかれてるだけよ。時間潰しに医務室でお昼寝しようと思っただけ」

真面目な飛鷹にしては有り得ない台詞。然し、本当に大半の艦娘は仕事が無いのだ。

どこの世界に、空母や重巡が暇をして、駆逐艦が働く鎮守府がある。

敵が根絶やしにされたという事実は、戦いを生業とする大型の艦娘の意義を奪ってしまふ。

辛うじて軽巡ぐらいだろうが、その軽巡である某忍者は現在自分の部屋で爆睡している。

あいつは夜間警備があるのでまだマシンなほうだ。

信じられるか？ 今の姫園鎮守府は、当日の休みすら普通に取れる。

書類も当日の秘書さえいればなんとかなるし、桜庭の多忙さ以外は仕事がないのですることもない。

戦時にあるまじき時間のあまり具合。寝坊しても文句は言わない。言う暇が桜庭にはない。

退屈か、激務か。二極化しているのが今の姫園鎮守府の実態であった。

「戦い……無いですね」

「平和は良いことの筈なのに……」

羽黒も古鷹も、何だか寂しいように衣笠には見える。

折り鶴を作って暇を潰す飛鷹も、つまらない顔をしている。

「私達、一応艦娘なんだけど。出番がないなら、何してろって言うのかしらあの人は」

「さあ……う？ 衣笠さんもそこらはさっぱりだね」

待機も任務の一つと言えば聞こえはいいが。

その方が一さえ今は有り得ない。この規格外が絶滅させたから。

自由をもて余す皆は、その自由の使い方など知らない。

艦娘には本当ならこんなことはあるはずがないから。

あることを目指しているのが普通なのだ。

それを、努力もなしにすんなり手に入れたら、この様だ。

人間じゃないから、普通がよくわからないからか。

どのみち、気分は最悪だ。

「暇ね……。七海のお墓参りでも行こうかな……」

最低限の人数さえいれば運営できる。

飛鷹は、折り鶴にマジックで『エロい妹、瑞』とか意味のわからない事を書いて呟く。

七海が殉職してから全てが終わった。

深海棲艦には違う仕事はあるのか、頻繁に出ていくし。

由良と五十鈴は長期任務でいないと言うし。

戦う以外の役割がある艦娘ならまだ救いがあった。

だが、空母に他に何が出来る？ こんな小さな鎮守府で。

彼女たちに、この過ぎていくだけの時間のなかで、何をしろと元帥は言うのか？
少なくとも飛鷹には理解できない。

「でも、お墓参りって言っても……」

「場所、教えてくれないよね……?」

羽黒と古鷹の言う通り、桜庭はそう言うことを頑なに教えない。

プライベートの事は家族から止められているとか言っていた。

要するに娘を死なせた海軍は二度と近寄るなという意思表示なのだろう。

ダメか、と飛鷹は折り鶴をおいて他になにか聞いた。

「演習は?」

「やってきたわ」

「装備の手入れ」

「終わってる」

一通りやることも終わっている日々。

衣笠が聞けば全員そんな状態だそう。

「はあ……」

ため息をつく衣笠が覷される山城を見て、代わりに秘書に行こうかと言うが。

一応内線で聞いたが特に要らないとのこと。もう少して終わるらしく。

「相変わらず嫌味な有能さね……」

飛鷹が皮肉げに言った。

また、することがない。

何時だったか由良が暴走していたぐらいで、平穏な日常の世界。

で、今頃忘れ物をしたようで、廊下のほうで小春が走っている音がした。

すると……。

「暇だから小春の後でもつけてみようかな」

と、あまりに暇すぎて唐突な事を飛鷹が言い出した。

義務でやることは終わっている。もう、あとは休暇よりも暇な毎日だ。

どう足掻いても、時間が余るので、外出ついでに小春の尾行でもして時間を潰そうと。

珍しい不真面目な事に、周囲は目を丸くする。彼女は遊びにいくようなものと言っ

た。

「単なる時間潰しよ。適当に切り上げて、出掛けてくるわ」

そそくさと準備をする飛鷹。柄にもないことをしだす。

それぐらい、ぶつちやけ暇だった。

元帥に内線で許可をもらい、また走っていく小春の尾行をしに出てってしまった。

「……いたた」

山城も目を覚ました頃、古鷹も羽黒も飛鷹がとうとう不真面目に走ったと心配してついでいく。

衣笠も一緒にいくと、退屈がイヤになり飛び出していた。

(みんな……不幸よね……)

止める間もなく全員出ていった。

呆然と見送る山城に、内線が鳴った。

何かと思つて対応すると元帥が今日の書類はあとは自分でやるので山城も休んでいろと言われた次第。

またすることがない。で、姉はストレスで現在寝込んでるのでどうしようもない。

結局……。

(私も何してるんだろう……?)

飛鷹の気紛れについていく自分がいて、軽く落ち込むのだった。

番外編 補足説明一回目

ここは彼女たちが綴る物語ではない姫園鎮守府。

有り体に言えば舞台裏である。なに？ どういう意味かって？

今回は番外編。作中語りきれない補足説明をするのだ。

此処からは作中演じてきた役のような前提で話をする。

なのでここでの彼女たちは所謂作中の彼女たちとは違う、メタを多発しながら解説をしていく。

苦手な方は、要注意。

では、始めよう。

君と結ばれる、物語の作り方。

舞台裏のお話である……。

姫園鎮守府、執務室。

そこを急遽収録スタジオに改装工事を行った。

出演者は台本のチェックと、衣装の確認、あとマイクテスト。

で、一通りオツケー。

よく見る提督の机に、来客のソファを対面に置いて、間に高級で木目の美しい重厚な机も鎮座。

床はフローリング、壁も木材の壁にして。

窓の外は……取り敢えず昼間に設定。照明は明るく、準備は万端。

カメラを二人で扱う山風と弥生が終わったと仕草で確認。

その他諸々、艦娘たちが忙しく働いて、一通り完了。

……収録を開始する。

「えー……あれ？ マイク入ってなくないですか？ 衣笠、マイクが死んでるんですけどー？」

喋った途端に音を拾わないマイク。

トラブル発生、初っぱな修正して撮り直し。

もう一度収録を開始する。

「……はい。と言うわけで、ここまで読んでくださった読者の皆さま方、本当にありがとうございます。今回は番外編。君と結ばれる、物語の作り方。その補足説明の放送をしたいと思います。お送りするのは、本作の主人公を務めております、渋谷七海です。今回は宜しくお願いします」

「七海の教育とツツコミはお任せ。軽巡、五十鈴よ。宜しくね」

提督の机とセットになった椅子に座る、白い軍服のオーバーフロー状態の七海。

そして、その隣に立っている制服姿の五十鈴で今回はお送りする。

「先ず、気がつけば今回で90話などというすごい数になっていますが、ここまで読んでくださった読者の皆様に深く感謝の気持ちをも、作者に代わってお礼を」

「頭のおかしい主人公の物語を読んでくれて、本当にありがとう。まだエンディングが一つしかないから、もうしばらく続くと思うから、また良かったら読んでくれると嬉しいわ」

二人で頭を下げ、続ける。

「今回はいい加減、細かい補足をしないと書ききれないという情けない事情もあるので、ここで邪道ながら番外編とさせて頂きます」

「結構話が続いていて、入れられるかも不透明になりつつあるから、こんな風に舞台裏なんていう形で解説していきたいと思うの。因みに本編じゃ全く関係ない独立した話だから、言いたい放題言うから気をつけてね?」

「あと、作者がこんな話を書くのは慣れていないので不手際があると思います。なので今回は作者の言い訳も聞く為に、こんなものを用意しました」

七海はそう言ってから、足元からなにかを取り出す。

机に載せたのは……イ級のぬいぐるみ?

「これが作者の分身です。文句がある場合は、あたしたちがこいつに直接訴えを起こします。物理で」

「!?!」

動くぬいぐるみ、嫌がるように身を振るがその場で七海に殴打されて絶叫した。

「いぎやつ!?!」

「そうそう。こうやって殴るたびに気色悪い悲鳴をあげるから、そこも気をつけて。作者登場なんてやったことないから、メタも良いところだけ目を瞑って貰えると嬉しいかな」

五十鈴がそう切り出し、解説が始まった。

「先ずは……というか、補足が必要なのはどこでしょう?」

「おいコラ七海」

「冗談です。作者が補足したいのは、主に深海棲艦や艦娘に関する本作の設定のこと。両者との人間の関係性と、あと多分語れないと判断したので昔の島村さんの状態とかですかね。今回は長くなりそうなので、前者を主に解説します」

「全部語りなさいよ!」

「長くなりそうなので勘弁してください」

五十鈴に置いてあったイ級が持たれて殴られる。嫌な音がした。

「おいコラ作者」

「んぐはあ!」

殴るのを無視する七海が語り出した。

「では先ず、深海棲艦に関してですね。種類に関係なくぶっちゃけ、正体は作中触れてません。何故生まれるのか、何故戦うのか。何処から来るのか、なぜ人類を襲うのか。あと、珍獣……じゃない、妖精に関してもあり関係がないので根源は敢えて触れていな

いそうです。パクチーの時に彼女が、自分のことを何一つ覚えていないと言いましたが、あんな風にそもそも何故、深海棲艦である皆があたしや艦娘に通じる言葉を喋れるのか？ それは、わからないままとなっています。仕様だそうです」

「補足になってないでしょうが！ 作者アツ!!」

「ぎゃあああああ!!」

怒る五十鈴に豪快に二つに折られるイ級。

骨が折れるような耳の痛い音がする。

「然し、作中出てきている村雨、春雨に関して。更にバッドエンディングで少し触れましたが、同じ条件の存在も確認されています。この元々艦娘だったのが、轟沈して深海棲艦になった場合です。死ぬ間に未練のようなものを残したことが分かっているのが今の知れる範囲です。前提として、本作では深海棲艦は喋れても片言で、辛うじて喋れる程度しか出来ないとなっています。普通に皆喋るので忘れがちですが。なので最初、あたしも驚いたわけです。この場合は、艦娘だったことが関係しているのでは？ と曖昧なままにしてあります」

「明確に語るってことを知らないわねあんたは……」

淡々と語る七海の隣で死にかけ痙攣するイ級ぬいぐるみ。

五十鈴は机に再び置いた。

「そこを語り出すと、話の軸がすり替わるから、というのが理由だそうです。あくまで本作品は頭のおかしいヤンデレが、周囲と関わりながらエンディングを目指すお話です。ですんで、戦闘の描写もあまり重要ではないので、軽めにしております」

「元帥も七海も、ガツチリした戦闘の描写がないからね。基本的に一方的にすぐに終わるか、説明だけで語るから薄いし」

「それも仕様です。戦いを軸にした成長の物語ではないので、対人を重点に書いているとこのぬいぐるみは申しております」

「ぬいぐるみの目標だから、なんとも言えないけど……。これからも、そのスタンスは変わらないわ。ご了承して頂けると有り難いかな」

ピクピク痙攣しながら頷くぬいぐるみ。

口から鉄臭い赤い綿が出ていた。

「艦娘に関してはちゃんと説明しているわね。人間に艦の魂を注ぎ込んだのが最初、と言われているけど。昔は随分厳しい時代だったみたい」

「そうですね。翻訳機がないとコミュニケーションが取れないのも、安全性と人道を優先した結果、人の部分が欠落した結果です。肉体を人工的に精製してそこに魂を注ぎ込んだのが本作の一般的艦娘に当たります」

「……作中触れているけど、これを人間扱いしろって言うのも少し無理がある気がする

わ」

「まあ、どう見ても人間じゃないですものね。あたしは初期には化け物と言っていて、途中で皆が人間がいいと言うので変えました」

「他の人はどうなの？ 出てこないけど」

「真つ二つです。基本的には、赤松提督のような人間とする擁護の一派。あとは、島村さんの兵器とする一派。一度ありましたが、この二つは凄く折り合いが悪いです。あんな感じで毎回対立しています。あたしは完全な中立と言うか無視しているので無関係です。あたしはあたしなので」

「そうよね……」

あまり触れる機会が無かったが、と七海は不満そうにぬいぐるみを拳で潰した。

「ああんっ!？」

「喘ぐな変態作者。でも、派手に揉めてたもんね……。元帥は擁護の一派だっけ？」

「そうです。そのボスに値する偉い人です。従来型と呼ばれる古い艦娘を束ねる本作の最強ですのぞ」

「あんたバッドエンディングで殺したじゃない如月と」

「あれは、奇襲と消耗していた状態、更にはあのエンディングの時に変容した状態の恩恵です。他のルートでは不可能です」

首を振る七海に改めて聞く五十鈴。

「そういえば、あのエンディングで最後あんた謎の老衰してなかった？ あれは結局何だったの？」

「あれはですね、今のルートで死ぬときに夕立が語っていましたが深海棲艦の力と言うものです。根源は不明ですが、明かされているのは深海棲艦のパワーの源。作中では泥と例えています。憎しみや恨みなどが凝縮された猛毒と思ってください。あたしはその毒を飲み干して支配していたのですが、最後に皆を殺めてしまったせいで精神が折れて、支配していた毒に逆に蝕まれてしまった。そう言うことです」

「五十鈴ははね除けたけど、やっぱりあれ猛毒なのね？」

「ええ。ですので島村さんの鎮守府で特訓している艦娘は頑張っている方です。普通は五十鈴や桜庭さんみたいにはね除けてお仕舞い。自分のものには出来ません」

「……えっ？ じゃああのハゲ、理解していたけどあれ相当おかしなこと!？」

「普通に考えても作中あんなこと人間で出来るのは島村さんだけです。普通の人間には到底無理な芸当です。如何にあの人のメンタルが強固かよくわかると思いますが」

「負けたら飲まれるって言ってたけど、そういうことか……」

驚く五十鈴。七海は再びぬいぐるみを持ち上げた。

「理解すれば、割と優しく力添えしてくれます。なので作中の戦力は島村さんの鎮守府はかなり高いです」

「理解者を探しているってことになるわけね」

「そういう一面もある、と思っただけならば」

逃げられないぬいぐるみ。

左右に揺れて無駄な抵抗を続けている。

「じゃあ、次に行くけど……深海棲艦にも戦いを望まない一派はあるのかしら？」

「一派と言うほどじゃないですが存在はしますよ。ただ、この世界の人類も艦娘も深海棲艦は皆殺しにするべきと言う前提が成り立っています。言葉が通じるとは思っただけですね」

「……仮に通じても襲うって、春雨言っただもんね……」

「はい。普通は向こうから襲ってくるので、艦娘も応戦する世界ですよ。思い込みがあっても何もおかしくないでしょう？」

「話し合いと言う概念がまずない世界、だもの。無理もないわね……」

「そして、仮に連れ帰ってもあの反応が当たり前。あたしが散々な目に遭っているのは皆様知っているでしょうが、あたし以外がやっても似たような扱いを受けます。迫害は当然にしても、あらゆる場所で深海棲艦は、人類と艦娘に袋叩きにされる運命が、この

作品の世界なのです。連れてきた奴も当然漏れなく攻撃されてしまいます」

こいつがそういう世界が好きなので、と勢いよく机に叩きつける七海。

内臓が破裂する音が響いた。

「はあい!？」

口から赤い綿が更に飛び出た。

「村雨も夢で言っていました。深海棲艦になったあとは、居場所などどこにも無いのです。もう一回死ぬしかない。それが結論と思っただいて構いません」

「そう言えば元帥と同じ最終兵器の連中も皆を殺そうとしている事もあったっけ」

「あの人たちも深海棲艦と似たような扱いをされていますが、人間ですから。しかも強いので我を通すが出来るのです」

「成る程……。そこは立場の違いもあるってことね」

「ですので、この世界は戦いを望まない、なりたくてなつたわけじゃない深海棲艦たちは、迷子のようなモノなのです。あたしのしていることは、人類への裏切り行為と言われても否定は出来ないのですよ。しょうがないのですけどね」

「いいわ、ありがとう。簡単だけど、こんな感じで、今回は補足してみたわ。どうだったかしら? まだ分かりにくかったら、ごめんなさい。一応補足もまだ予定しているから、その時に補足の補足をさせて貰うわね」

「はい、と言うことで今回の解説はこの辺で終了いたします。長々とお付き合ひ頂きありがとうございました」

「次回は多分普通の話よ。まだ未定だけど……それでは！」

「お疲れさまでした！」

「……五十鈴に……折檻されるのって、最高だなって……思います」

「五十鈴、ぬいぐるみなんか眩いてますよ？」

「あらそう？　じゃあ、最期に特大のお仕置き、お望み通りにしてやるわッ!!」
「ファッ!!」

「——あーっ!!」

互いの非

こうして、順調に……いいや、不安を残しつつも進んでいく七海たち。

一方、彼の所ではどうなったか。

時間を大きく巻き戻す。

渦中の吹雪と、ハゲの出会いは……寸前にまで迫っていた。

陽炎たちがどうも周囲に拡散したようだ。

向かう先々で、凄まじい敵意と殺気を放たれる吹雪。

四面楚歌とは、今の自分だろうと漸く意味を悟った。

武蔵もなにも言わない。自分で招いた結果。自覚しているだろう。

決戦前の鋭い空気のなかを、下手に刺激する真似をした彼女の落ち度。

当然の罰が、彼女に下ったのみ。

故に気にしない。一応、注意はした。

吹雪よりも手元に集中しろという、庇うと言うよりは規律を重んじるという意味で。

顔面蒼白で、吹雪はついてくる。

武蔵は一通り見せてから、彼女に言った。

「言質だけでは、信用できないだろう。悪いが、お前も自分から飛び込んだ当事者なのだ。……当時の資料を持ってくる。物証を見てから、改めて考えろ」

憲兵の詰め所に訪れた二人。武蔵が少し出払う。

すると、憲兵すらも吹雪に対して厳しい顔をしていた。

この短時間で、憲兵にすら伝わっていたか。

成る程、人間にもどうやらあの人でなしは慕われていると、わかった気がした。

同時に、人でなしと書いているのは自分だけで本当の人でなしとは即ち吹雪のこと。

恥知らず。逆恨み。そういう視線に堪えかねて、俯いた。

嘘だと思いたい。だが現実には嫌でも彼女に突きつける。

吹雪の行動の間違いを容赦なく。

武蔵が戻ってきた。手元には分厚い書類を抱えて。

「これが、あの二名が起こした不祥事の全てだ。無論、記しているのは相棒だが、ちゃんと憲兵が中身を確認して残したものだ」

と言つて、武蔵が寄越した書類を力なく受け取る。

机を借りて、暫し無言で目を通した。

……見なければ良かった。率直に言えばそれが感想で。

(……酷すぎる)

如何に妹たちがいい加減にやっていたか、よくわかる内容だった。

認めざるを得ないと言うよりも、あの対応の理由を納得せざるを得ない目を疑う内容ばかりで。

もしも吹雪がその場にいれば……姉として、最早己の手を汚してでも被害を食い止めると誓えそうな内容が多々ある。

なんと言うことか。もう、吹雪は分かってしまった。

この恨みは、見当違いも甚だしい。なんとという理不尽か。

文字一つ一つが雄弁に語る。白雪と初雪の怠惰と暴走の記録。

失礼にも程があつた。元帥はこれを知っていたのか。だから、けしかけたのか。

現実を見ろという意味で。これを見て、それでも間拔けな恨みを晴らそうとするのかと。

恥知らずとは吹雪のような奴を言う。恥ずかしい。目を背けたくなつた。

全てを見終わる頃には、怨念など羞恥で上書きされていた。

(私は……何を言っていたんだろう?)

現実を知ろうともせず自分の感情を優先して乗り込んで。

忙しいと言うのに、島村の時間を拝借して。

現実を見て、目が覚めた。いや、もっと悪い。

自分のすべき事を、履き違えていた。

今まで酷使していたと思い込んでいただけ。

悪だと勝手に仕立てていただけ。

悪は、自分の妹たちだったのを認めないで。

艦娘なら分かるだろうに。だが、評判を聞く限り外道だと思つていた吹雪には届かなかった。

決めつけて責めていた。彼は……主張は兎も角、我慢していた。

この手を焼く愚昧たちに、散々苦勞をさせられていた。

(人柄は兎も角も……。今回の一件は、私の思い込み……)

死んだ話はまだしもだ。解体をされない方がおかしいと言うのは誰が言ったか。

誠に事実で、これは解体を決定されても異論はないレベル。

……あれは、悲しい事故だった。漸く、吹雪の中でも決着はついた。

吹雪は両手で顔を覆った。恥ずかしさで死にたくなかった。

「……吹雪よ、どうする？　本当にあいつと一戦交えるか？　予定ではそうなっているが？」

「いいえ、必要ありません。ですが、武蔵さん。申し訳ないのですが、少々お時間を頂けませんか？」

問いかけに顔をあげた吹雪は、もう熱く黒い感情はすっかりと、抜け落ちて冷静な本来の吹雪に戻っていた。

任務の時間は、最低限の時間でいいと。自分から申し出た。

「……ほお？」

意外な目で彼女を見る武蔵。

様変わりしていた。書類の内容をしつかりと吟味して、頭を冷やしたようだ。

本来の彼女はこういうものだ。落ち着けば、対応は変わる。

「……私自身を含めて、大変ご迷惑をおかけしました。吹雪型の長女として、深くお詫び申し上げます」

立ち上がり、深々と武蔵に謝罪する吹雪。

愚妹の代わりに頭を下げるという姿に、周囲は意外そうな顔をする。

己の非を物証を拝見して素直に認めるあたり、彼女の元来の性格は真面目なようだと。

確かに子供のような言い分だったが、落ち着いて話をすれば、こうして改める。

武蔵は答えた。

「……気にするなどは言えないな。あいづらへの恨みは、かなり周囲に残っている。暫し、堪えて貰うぞ吹雪」

「はい。当然のことです」

……己の不始末で無くても謝れる。

もう、問題は解決しているようではある。

ハゲはそろそろ戻ってくると言うので、その足で……二人は、執務室に向かうのであった。

執務室。整理整頓の行き届いた室内で。

膨大な書類を捌き、自身も何やら分厚いマニユアルを読み耽るハゲが顔をあげた。分厚い筋肉の巨漢。小柄な吹雪からすると白い軍服のゴリラのような大男。

帽子を取って、聳え立つ大山の如く堂々と座って待っていた。

机を挟んだ前で敬礼する吹雪に対して、厳つい顔を引き締めて問う。

「よく来たな、吹雪。此度は出迎えが遅れて申し訳ない」

「いえ。此方こそ、身勝手なワガママにお時間を割いて頂きありがとうございます」

僅かに目を細める島村。案内の武蔵は軽く首肯する。

彼女の判断で当時の資料を見せた、と島村は受け取った。

「そうか……。件の話だったな。して……」

日程はどうする？ と聞こうとするも。

吹雪は自分から、その必要はないと言い出す。

「島村提督。此度は自身の事も含めて、多大なご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありませんでした」

姿勢を保ったまま、吹雪は吹雪型の長女として、謝罪を行った。

自分の逆恨みや、愚妹たちの言動全てを、非として彼に頭を下げた。

「……………ぬう」

島村も流石に想定外だった。

思わず唸る。弱ったもので、この短時間で心を入れ換えたようだった。

武蔵が補足する。少々現場の声を聞いて、揉めたがダイレクトで苦情を聞いたのだと。

成る程、あの頃の艦娘にも話を伺っていたか。

だが、全てを吹雪たちのせいにされても、島村も困るのである。

非は、少なからず此方にもあると自負するから。

「頭を上げるのだ吹雪。私にも、私の言い分があるのでな」

存外穏やかな声で、怒声を覚悟していた吹雪は訝しげに顔をあげる。

多大な迷惑をかけているのに、何故この人は落ち着いているのか。

それを、直ぐに吹雪は知ることになる。

何故なら、意外すぎる事をこの男は言い出したから。

「……貴様の妹に関して、私は重大な失態を犯している。それはな、安易に解体などという措置を奴等に下したことだ」

「!？」

何を言い出すかと思えば、この男。

当然の措置を……重大な失態と己で言った。

正気を疑う吹雪。今となればそれが寧ろ推奨される事案であることは分かっている。なのに……それを、島村は失態と認めている。

理由がわからず、混乱する吹雪に、武蔵は悟つて口を挟む。

「相棒よ……。流石にそれはどうだ？ あれ程ならば、言いたくはないが……」
「聞け、武蔵。確かに初雪、白雪の二名の言動は看過出来るものでは無かった。それは私も同じだ」

そこは島村もわかつてなどいる。

彼は言うのだ。以前ならば、吹雪を一方的に怒鳴っていたらうと。

「だったらー」

吹雪は自分を怒鳴るべきだと強く言った。

それだけの事を妹も吹雪もしたのに。

然し。

「だがな……。私にも、分からないのだ。果たして、解体という措置が、正しかったのかと。以前ならば当然、然るべきと言えただろうな。けれど、今はどうにも考えるのだ。国防の為に存在を、私は潰すという判断が、正解だったのか。強いて言うなら、後悔をしていると言えばいいか。あの時深く考えずに決めたあの決定は、最適解だったのか。今の貴様に聞きたい。吹雪よ。直系の姉として、率直に答えてくれ。私の判断は、

正解だと思うか？」

……悔いているのか。当初の吹雪の望み通り、島村は。

だが、実態を知ればそれはどう考えても……。

「……そうですね。事実を知って、当時の艦娘たちの声を聞いて、物証を拝見して。その上で私が言つて良いのなら……正しいと、言えると思います。なにも知らずにいた私なら激怒するでしょうが、幾分と頭も冷やしたので、今は妥当と、言えると思います」
少なくとも吹雪ならば誰もが制止しても、自分が代わりに殺すぐらいの事をした。

つまり、あの瞬間の如月の行動も、七海の判断も、吹雪は真相を知った今は、肯定できさる。

あれは、事故だった。その前に、あの二人はどうしようもなかった。

そう言うことなのだ。痲癩のように喚いている自分はどうもない。

情けなど要らないほど、愚妹は腐っていたと。もう分かった。

「そうか。貴様も、正解だと思うか……」

何故か納得できないように、島村は腕を組んで渋い顔をする。

何故そこまで後悔しているのか逆に聞いた。すると。

「……私はな。貴様の元々の上司である渋谷提督に一度、命を救われている。そして、此れからも命を救われるだろう。その彼女が、示してくれた教えがあるのだよ」

あの異常者が、島村を助ける？ 思わず目を見開く。

彼は言った。生きることが国防であり、言葉こそが強さの秘訣。そして、死を恐れると。

彼に天恵をもたらした言葉なのだそうだ。絶句する吹雪。

(あのサイコパスの司令官が……!?! た、他人を助けるために言葉を送った!?! 打算じゃなくて!?! しかも一回助け、また助ける!?! い、意味がわからない……。どういふことなの……。?)

彼女の内面を正確に把握する吹雪だが、またもすれ違いが発生する。

ここで、島村が個人を助けに来たとさえ言えば、打算であつたと吹雪は気付いた。

それはそれで、彼女の利己的な性格を分かっている吹雪ならば当然だが。

が、余計なことを言わずになぜか武勇伝に話が発展して、自分のことのように意気揚々と語る島村。

自慢げに如何に七海が強いかを説明すると、更に困惑する吹雪。

(……あの人に認められるって……。島村提督は、只者じゃないんだ……)

あの無関心、理屈的排他的サイコパスが信頼し、一目置いている豪傑なのかと。

今は、艦娘を無闇に殺さず、誰も死なせず相手の言葉を聞いて理解する努力をし、生きて次に戦うために全力を尽くしている堅物。

鎮守府の厳しいながらも充実し、周囲から慕われている様子を見てきたこともあつて見事に勘違いした。

「彼女の教えは、理屈にも理に適っている。そうだろう？ 死を恐れない者は、無謀なことをする。自分を安売りするのだ。そして、死に際に自分は万策尽きて倒れるのだから後悔はない……そう思い込んでいた。前の私は、まだまだ未熟な若輩者に過ぎなかった。生きるための努力はするが、死なない努力にまでは至っていない。渋谷提督は道に迷った私に教えてくれたよ。万策とは、あらゆる手段。自分の見栄や面子など関係なく行うことだと。言葉ではなく、行動で万策を尽くすのだと。おかげで……私は、誰もが背を越させる事は無さそうだ」

誇らしく語る島村に、言葉を失う吹雪。

まさかの島村の器を見間違えていた。

島村は言う。彼女の教えに解体という愚行は背く。

異動なり何なり、あるいは性根を叩き直すことも出来なかつたとも言えないと。

安易な解体という手段を選んだ自分は甘ったれていたのだと。激しく今でも悔いている。

これ程の人物でも尚、正解ではないと思うのか。

啞然とする吹雪だった。

「吹雪。済まなかった。私の甘ったれた判断が、貴様の妹が使うべき国防の未来を奪ったのだ。これは、私の失策である。好きに罵ってほしい」

「いや、罵るもなにも謝るのは私の方で……!?!」

「否……断じて否だツ、吹雪よ！ 貴様だけの責任ではない！ 提督としての私の判断も愚かだったのだ!!」

「えええええ!!」

完全に此方が悪いのに逆に謝罪された。

どうしろというのか。対応に困る二人を見て、武蔵は内心溜め息をついた。

両成敗という判断にならないのは、互いが完全に自分の過ちと思っているからか。

謝罪合戦になる前に訂正をいれて、これで……やつと、解決した。

いや、皆がそれなりに受け入れられる結論に至ったと言うべきか。

吹雪は七海にはもう関係ないのでなにもしないと誓った。

でも認める気もないが。

島村は、吹雪に誓う。

艦娘の命を、己の采配で決めないと。その権利はないと。

ただ、生かすために戦うと。そう、声に出した。

結局互いに詫びをいれて解散した。平和的話し合いで無事に終わった。

無事じゃないのは、深海棲艦の腹の中にいる、彼女のみとなるのだった……。

生誕の日

状況を説明しようか。

先ず、目の前で七海が喰われた。浮遊要塞に。

小春は能天気にも眺めていたが、予定と違うことに気付く。

(……ムラマサ受けとるはずじゃ?)

確か以前使っていたぼろぼろの刀は死んだときに喪失しているようだ。

なので、小春が説明して教えた通りなら何かしら受け取ると思っていたのに。

念のため、色々勝手に工廠から持ち出しては来たが。

何かあるといけないので、使えそうな資材は無断で拝借している。

使わないなら後で返すので問題ないとして。いやあるが。

大口で飲み込んで、だんまりの浮遊要塞。

プカプカ浮いたまま、無言で回れ右。

呆然と眺めている小春に、何かを要求するのだった。

で。

万事問題ないと思っっているのはこの自称有能従者のみ。

道中、隙だらけだった。

前提が、七海が現在軍属の仕事をしていることを母は知らない。

ただ、周囲の彼女たちの世話を受けていると同時に何か手伝いをしていると、七海は簡単に言っている。

全部など言えるはずもない。機密の事もある。

母は海軍を毛嫌いしているし、七海の一件が無ければ多分全員追い出すぐらいはしていた。

それをしないのは、全員が七海を純粹に心配しており、同時に強く慕っているのも分かるから。

伊達に高校生相手にママだの姉だの言っている異常な空間に慣れていない。

閉鎖的空間だったと説明を受けているから受け入れた。

日曜日だが母は仕事で外出しているので出会わない。

代わりに五十鈴と由良が小春と家の中で出会い、荷物を聞いた。

小春は代わりに先日買ってきたクッションと説明して、暫く寝るので近寄るなど言っていたと即興で人払いをしていた。

指示される前にする辺りは優秀だが、まず小春は尾行されている事に気付くべきだった。

由良と五十鈴が、母の代理でスーパーに買い物に行こうと、護衛を小春や深海棲艦、泊まり掛けの如月やメイド二名に頼んで行ったのだが……。

「あんたたち、仕事サボって何してんの？」

五十鈴が反対側の道の角、丁度物陰に隠れている女性を発見。

目立つ巫女装束の山城、ブラウスに赤いスカートの飛鷹、制服姿の古鷹と羽黒に衣笠。恐々、ある平屋を観察しているではないか。

五十鈴が気付いて声をかけると、驚く皆。

「五十鈴!?! 生きてたの!?! 自力で脱出を!?!」

「ちよつと、何で勝手に死んだと思ってるの。あと脱出って何?」

飛鷹が長期任務でないはずじゃ、と言うものの。

五十鈴は七海の事を知らないと知ってるので、何しに來たと無視して聞く。で、飛鷹が暇潰しに鎮守府に戻ってきた小春の追跡をしていたと白状。

由良も溜め息をついて、鎮守府に保管していたのかと呆れるが。

山城が、気になることを言っていた。

「お、おかしいわね……？　小春さん、確か野外任務って言ってたけど。それに、スパイがどうか……」

山城にそんな事を言っていたと言う。

違和感に気付く五十鈴。自分達には代わりに荷物を持ってきたと言ってたが？

（小春の奴……：相手によって言い分を変えてる？　どういうこと？）

一度鎮守府に戻ったのも気になること。

由良は早く戻れと追い払っている。任務の事は言えないと言いながら。

バツチリ平屋から出てきているのを見ている一行は気になるようで家に近づこうとするが。

「いい加減にして。ダメだって、由良が言ってるでしょ？　元帥さんに報告するよ!」

七海の平穩のために、生きていることを暇潰しという理由で知ろうとする皆に、由良が本気で怒る。

自分だって気付いて押し掛けたくせに、棚上げである。

あの家は、任務の対象が暮らしてるから許可のない艦娘は近寄るのも違反なのだと叱る。

「……………まさか」

任務の対象、という言い方が不味かった。

山城は気づいてしまう。だって、あの家に小春が入っていくのも見ていた。

小春である。深海棲艦である。そして、深海棲艦が入れる人間の住宅。

小声で呟いて、道の角から遠目で眺める山城は立ち上がった。

由良の落ち度であった。

「由良、バカ！ 言い方!!」

「……………あつ!?!」

五十鈴が分かって怒るも時は遅い。

山城が進もうとするのを、慌てて二人で止める。

「山城、行くなつてば!! デリケートな問題だつて言ってるでしょう!?!」

「邪魔しないで五十鈴! 私の予感が正しければ……………」

戦艦に軽巡が二隻で敵う訳がないが、ここはお姉ちゃんとして頑張る。

買物かごを持って巫女装束の女性を足止めするというシユールな光景。

察しの悪い他の面子は呆然と攻防を驚いて眺めている。

「邪魔だア……退けえええええ!!」

「軽巡舐めんじやないわよ!!」

気合の入る山城のパワーを踏ん張って受け止める五十鈴。

何気に凄い勝負であった。あと山城の咆哮は出来れば運命の海戦で聞きたかった。

仕方無い、由良が隙を見て携帯で応援を要請。また自爆する。

「由良、だからバカ!」

「えっ!? 不味い!」

「焦ってパニックってんでしょ!? 状況を見なさいよ!」

「……………ああっ!」

押し止める五十鈴が仰け反りながら言った。

アプリで艦娘襲来、増援を求むと送る由良が我に返った。

裏口から出るように言うのに気を向けていたから、そもそもの行動の自爆に気づかなかった。

応援を呼ぶと言うことは即ち、バレると言うことだ。

「……五十鈴さん。もう無理ですって。諦めましょう?」

「そうですよ。どの道、何時かは知られることですから」

で、背後に回っていた応援が呆れたように皆に声をかけた。

振り返ると、クラシックメイド服のメイド喫茶の淫乱エロメイドとピンクメイドがいた。

「淫乱エロメイドじゃないから!! メイド喫茶も知らないわよ!」

「誰も言っていないよ!」

キレ気味に虚空に吠える彼女に古鷹が思わず叫び返した。

本来ならば入院中のハズの二名がいる。

「村雨さん……春雨さん……? なんで、此処に……?」

羽黒の目に映る有り得ない人物たち。

それは、あの二名のメイドだった。

「あれ? 二人とも入院中じゃ……って、嘘でしょ!」

「じゃあ、あの家って!!」

飛鷹も衣笠も分かった。

この二人と、小春がいる。メイド服で。

つまりは?

……七海の実家!!

そう、皆の心のなかで答えが一致した瞬間だった。

とうとう他の艦娘にも居場所が知られた。生きているのもついでに。

五十鈴の責める視線に、由良は小声で謝罪するのだった……。

ここは、どこ？

周囲が闇一色のこの世界は、何？

上下左右の感覚すらない無重力空間のような世界だった。

その癖なんか、周囲が妙に騒がしい。

怨念じみた呪詛が聞こえる気がする。

いや、間違いない。怨念の声が憎しみを吐き出している。

誰でもない、複数の女性の声で。あらゆるモノを憎んでいるのか。

(はあ……)

七海にはあまり関係ないか。

他人事の恨みなど興味はないし。

なのに、七海にも見せるのだ。

目の前に、ホログラフィーのように浮かび上がる映像。

……それは。今までの七海の受けてきた仕打ちだった。

沢山の悪意を受けた。差別を受けた。迫害をされた。

忘れていた憎悪を思い出させるように、七海に声たちは要求する。

愛してる者を貶す悪意を知っているだろう。

お前にも憎しみはあるのだ。愛の裏に隠された熱くたぎる憎しみが。

愛すれば愛するだけ、それを奪うもの、狙うもの、否定するものをお前は許さない。

人間という存在が、お前の愛している艦娘と深海棲艦達を傷つけるのだ。

殺せ！ 人間を殺せ！！ 全ての人間を、お前の愛と憎しみに誓って殺すのだ！！

そう、声高々と演説のように七海に言うのだ。

(…………?)

当然、愛も分からない、憎しみも覚えていないサイコパスには理解できない。

何を言っているのか、まるで処理できずに首を傾げて、思い出す。

そうか。今の自分ではやはり分からない。

だから、愛も憎しみも分かる七海に選手交代。

以前の七海ならば、きつとどうにかするだろう。

暗に、声たちの言い分は事実だと解している七海は、自分の中の自分に託す。

(……すいません。やつぱり、あたしには愛情つて言うのが理解できないみたいです。ですんで、後は任せますよ。あたしには、きっと誰も守れないから。人間は無力だから。お願いします。……皆を、守つて)

彼女は急に眠たくなった。

どうやら、今の七海はここまでのようだった。

ゆつくりと、目を閉じる。

声が、どんどん響いてくる。自分のなかに入ってくる感覚。いや、錯覚か。

五月蠅い声を子守唄に、七海は閉じていた蓋を、強引に抉じ開ける。

深海棲艦の泥を、毒を、己の内部に取り込むと言う意味で。

そして、何よりも。

こんな無差別な殺戮衝動に近い物より、余程危険な物体が、抉じ開けそこから顔を覗かせる。

……お前ら、あたしのお母さんを殺すとか言いましたか？ 言いましたよね？

声たちの主張を拡大解釈して、母を狙う敵として認識。

要するに自分と敵対すると定義して激怒して、言つた通り憎悪を爆発させた。

内側から破裂し、中身をぶちまけるように同質の感情が膨れ上がる。

お望み通り、愛憎に誓って殺す。

但し……。

……お前ら、絶対にぶつ殺すっ!!

殺す相手は、この忌々しい何かだったが。

蓋を強引に破壊する。邪魔なまわりついでにいるガラクタを取っ払う。

ふざけるな。コイツらは、七海がきつと一番最初に愛した人を殺せと言った。

許せない。コイツらが何であろうが許せない。

七海に命令した。七海に指図した。七海に押し付けた。

人間が憎いなど今更だろうが、それ以前にもっと憎い奴等が目の前に居るじゃないか。

母を殺せと、烏漣がましく七海にさせようとする、世界で一番、憎いと思つた連中がツ
!!

「お前ら、殺してやるツ!!」

そうだ。思い出せ、忘れるな!

自分の抱いていた疑心を。不信任を。

自分が貰っていた愛情を。自分が放っていた愛情を。

自分が感じていた感情を。自分が信じていた心を。

七海の心を肯定している！ 七海の想いに、応えているッ！！
ならば、もつとだ！ もつと、力を寄越せ！！

目障りな連中を皆殺しにする憎しみを、愛を与えてやる！
だから、七海の中で力と成せ！

戻つてこい、憎悪を糧にする深海の汚泥よ！！

これが、渋谷七海の愛憎の結論だ！！

『全員、必ず殺してやるッ！！』

「——おぎやああああああああああ！！」

それは、生誕の雄叫び。

小春が眺めていると、浮遊要塞が突然、赤ん坊のような雄叫びをあげた。

甲高い絶叫に身を竦める小春。

近所にも響く大声量。外で揉める皆も気づいて、一斉に家に直ぐ様戻る。バタバタ足音が聞こえるなか。

小春の目の前で、誕生は行われる。

浮遊要塞が、吐き出すように口を開き。

上半身から、乗り上げるように這い出す人間が……いや。

深海棲艦が、いた。

「いやあ……：我ながら、無理したもんですよ。久々に顔を出せばこれですか」などと、朗らかに言いながら這い出て、倒れる。

生臭いヨダレまみれの、イビツなヒビの入った笑顔で、笑った。

急いで、五十鈴たちが駆けつける。

部屋の扉を開くと、そこには。

「お嬢様、お帰り。どう？ 調子は？」

「絶好調ですよ。お陰さまで、完全に復活しました」

落ち着いた小春の問いかけに、答える。

だが、その姿は。

純白の長髪、純白の瞳に、色白な肌。

軽く身震いしてヨダレを払い、立ち上がる。

見覚えのない外見。

絶句する五十鈴たちに気がついて笑いかける。

「皆、お久し振りです。完全復活……もとい、生まれ変わった渋谷七海です。人間から晴れて、再び深海棲艦となりました。あたしは……そう。型は浮遊、種は機動要塞、名を浮遊棲姫と名乗りましょう」

新しく生まれた、七海の姿があつた……。

浮遊棲姫

啞然とした。皆は、言葉を失った。

騒ぎを聞いて如月も来た。他の深海棲艦も来た。

彼女の堕ちた姿に、皆は……絶句していた。

(……そうか。前の七海は……相談をするつてことを、知らないから……。記憶喪失でそこまでリセットされていたのを見落としていたのね……)

五十鈴はいち早く原因にたどり着く。

七海の悪い癖。誰にも頼らない、相談しない。

悪癖が、記憶喪失で戻っていて、すっかり抜け落ちていた。

多少なりとも言うようになっていた以前の彼女に慣れすぎていた。

記憶喪失という状態に慣れてない艦娘の盲点でもあった。

「あれ？ 山城に飛鷹、古鷹に羽黒に、衣笠まで。お見舞いですか？」

「えっ……!!? あ、うん……お見舞いって言うか……」

七海は朗らかに実家によく来たかと歓迎するが。

困惑する衣笠。問題はそこじゃない。

だって、彼女は名前を言い当てた。

全部忘れていないはずの記憶喪失なのに。

「七海!!? あんた、思い出したの!?!」

「はい? ……ああ。あたし一応、記憶喪失なんですっけ? 大丈夫です。思い出してますよ。ただ、すいません。どうも、記憶喪失の頃の記憶があやふやで、言うなれば記憶喪失時代の記憶喪失になったみたいで。よく覚えてないんですよ。ただ、何となくの流れは分かります。素質も力も記憶も失いましたが、ご覧の通り力と記憶は取り戻しました。まだ、あたしは戦えます。皆の隣で。皆の後ろで。皆のために。皆と一緒に!」

額の傷跡を前髪をあげて見せると、傷跡はそのままだった。

それでも戦うと言うのか。一度死んだというのに。

「……あれ? 提督、何ですかその傷跡?」

山城が聞いた。七海は事情が異なることに気づく。

浮遊要塞にも反応して怒り、小春の言動にも怒りが見えて、現場は混乱している。成る程、どうも思っている以上に事態は混乱しているか。

七海は大きくその場で手を叩いた。

——ガキインツ!!

「!？」

おおよそ、生身とは思えない重低な金属音。

発生源は、七海だった。

「落ち着きなさい。事情が混乱しているようなので冷静に。分かっているのは同じ。代表以外は黙って聞くようにしなさい。あかし、五十鈴、小春、山城。あとは、補足するなら如月。以上呼ばれた者は、それぞれ事情を順々に説明すること。良いですか？

揉めないで下さい。どうも、自分の家でバカをしたせいで、ご近所にも迷惑をかけているので。これ以上の失態は許しません。はい、返事」

……この、淡々としながらいち早く自分の状態に気付ける性格。

間違いない。七海は、帰ってきた。この人は、本物の渋谷七海。

皆の知る、彼女だった。

整理をするため、先ずは……七海が自分の状態の説明を始めた。

七海は全てを失った。

漠然としか思い出せないが、どうにも単純に理屈として判断して、手っ取り早い方法で戻ったようだ。

即ち、もう一度人間を辞めること。そして、深海棲艦に堕ちること。

結果、賭けのようだったが、七海は勝った。戻ってこれた。

新しい生命として。

「先ほど名乗りましたね。浮遊棲姫と言います。分かりやすく言うと、今のあたしは完全な深海棲艦です。まあ、人間に擬態はできませんけど。ほら」

指を鳴らすと、一瞬で七海に元通り。茶色が髪と目に戻り、肌も戻った。

但し、擬態と言っており本質のそれは、完全に移行しているようだ。

「理屈はややこしいので省きますが、自覚する限りは従来型艦娘と同じです。然し、強いて言うなら魂を汚染されて覚醒していると思うので、人間には戻れません。正真正銘、

深海棲艦。あたしは、皆の敵」

深海棲艦が人間に擬態して、ここにいると。

試すように笑う七海に、五十鈴は眉をつり上げる。

見限るなら、早めにしろという意味か。もう戻れない道を選んだから。

どういふ深海棲艦なのかをわかる範囲で説明した。

簡単に言うなら浮遊要塞の棲姫バージョン。

浮遊要塞の機能をそのまま拡張、増大した感じで自分も浮けるらしい。

証拠に少し地面から浮かび上がる七海。ホバークラフトのような感じで僅かに浮いている。

その気になれば自由に浮遊出来るが疲れるのでしないとのこと。

つまりは、機動要塞の自称は伊達じゃない。

後ろの浮遊要塞も、七海に向かって吠えている。

「この子の……要するに浮遊要塞の魂を少し分けて貰ったのです。本来、あたしの変異はこの子の腹で鍛えた艦装による変異。本体に入れば後戻りは出来ないと分かっていたんですけどね。何分、あまり時間もないようなので……」

いわく、近々来るであろう決戦に、七海は復帰する気だった。

深海棲艦たちが前に出るのに、自分が出ないわけにもいかないし。

何よりも。

「あの人たちに死なれるのは、あたしも困ります。まだろくすっぽ恩返しも出来てないのに。恩着せしておいて死ぬとか、永遠に借りを返せなくなるので」

決戦の話もこの際打ち明けて、五十鈴も行くというので守ると意気込む。

相変わらず自分勝手な言い分で、勝手に人間辞めて深海棲艦に逆戻りして。

七海の癖は変わらないと皆、ため息をついた。

記憶喪失と知らない山城たちも驚いたが、戻ったから良いらしい。

「まあ、以前と違って艦娘じゃないのと、妖精はきつと見えません。見えなくても関係無いです。どうせ、一度は死んだのですし。ならばこの身を、村雨や春雨のようにするの
も一興。所詮人間じゃ、誰も守れない。なにもできないあたしに、なんの意味がありません。しょう?」

「七海……」

五十鈴は、艦娘になれないなら深海棲艦になっても、戦おうとするのは皆のためと分かった。

守られるだけじゃ嫌だと思っただろう。

以前の愛情を理解しない自分を消して、無理矢理戻ってきた。

また一步、七海は派手に壊れてしまっていた。

自分のやりたいことをやりたいようにした結果が、浮遊棲姫という新たな深海棲艦の

誕生。

また、世界に強大な新種が現れる。

彼女は、それでも愛そうと腹を括ったのだ。

皆から離れないために。愛したからには、死んでも尚愛するために。

七海の出した結論は、世界を敵にしても愛を叫ぶという選択肢。

さっきの金属音も、一時的に掌に金属を纏っていただけ。

装甲の部分展開、なんてことも普通にできる。

如何に七海が危険な存在になったか、よくわかる。

「まあ、あたしが知るのはいくらぐらいです」

七海は自覚できる事を全て打ち明け、皆が順々に話していく。

五十鈴、小春、山城、如月も時々知ることを補足して、大体全員が理解した頃。

七海は、こんなことを言い出した。

「さあ、どうしますか五十鈴たちは？ 艦娘なら、新しい深海棲艦を見逃せませんよね？」

七海は改めて、声に出して確認する。

新たな脅威を目の前にして、皆は……艦娘はどうするのか？

そう、聞いた。暗に敵対しても、七海は責めないと言っている。

自分を客観的に見て、当然の仕打ちと思うのだろう。

「島村の事はどうする気？」

「大丈夫ですよ。だって、この姿は島村さんに死なれたら困るのでなつたんです。あの人は、国の敵じゃないなら、受け入れると思いますよ？　じゃないと互いに今、生きてませんので」

五十鈴の質問に笑って答える。

懐の広い、器の大きい護国の漢と七海は評価する。

人間への不信を思い出しても、個人的には島村を信用すると。

それも踏まえて、村雨や春雨にも問う。

「島村さんを信じない二人も、いいんですよ？　あたしを見限つても」

そう聞くと、言葉に詰まる艦娘と違つて。

二人は、即答した。

「甘く見ないでください。村雨はそんな薄情な女じゃありません」

「わたしはご主人様のメイドです！　何処にでもついていきます！」

見くびるなど怒る村雨。必死にすぎる春雨。

二人とも、一緒にいると言いつつ出ず。

更には……。

「司令官？ 如月には聞かないの？」

傍にいた如月がからかうように聞くと、七海は不敵に笑った。

「あたしの嫁が裏切るとでも？」

「あら、裏切るかもしれないわよ？ つて言うか……然り気無く如月をお嫁さん認定してくれるのね……」

今まで愛しているとは言ったけど嫁とは言わなかったとぼやく如月。

顔は真つ赤だった。

「ご託は良いです。如月はあたしの嫁です。嫁なら傍に居なさい」

「ああ……！ 強気な司令官も素敵……！ 何だか如月、新しい趣味に目覚めそう!!」

もう如月はダメであった。目がハートマークになっている。

速攻寄って速攻決めた。

「提督、本物の淫乱っていうのは如月ちゃんですからね？ 村雨は健全ですからね？ 分かりますか？」

ドン引きしながら傍に控える村雨が指摘して、春雨は言う前からもう近くにいた。

「分かりませんね。白露型のスケベボディの村雨イド」

「いい加減ブツ飛ばしますよ？ もう一度記憶喪失になりますか？」

案の定の扱いに静かにキレる村雨。

七海は鼻を鳴らす。

「殴って忘れるほど、あたしの愛は脆くなどないですが?」

「うわあ……臆面もなく……」

村雨は真つ赤になりながらもどこか嬉しそうに、メイドは味方する。

「あ、小春。好きです。来なさい」

「お嬢様の仰せのままに!!」

思い出したような告白をされて小春はすつ飛んで七海に味方した。

色々台無しだった。

「告白が軽いわよ!」

思わず突つ込む五十鈴だが、艦娘たちも悩みを止める。

「ふふふふ……幸運が来た! 提督の傍なら私は戦艦の誇りを失わないで済むわ! う

わはっ!!」

「同感ね……。七海となら、一緒に世界と戦うのも悪くはないわ。あんな居場所のない

時間よりは」

奇声をあげて喜ぶ山城と、退屈はゴメンと飛鷹もさっさと味方した。

五十鈴がそんな簡単に、と言うが……。

「オーケー七海。衣笠さんも一緒に行くよ! 深海棲艦でも慣れてるからバッチこい

！

「私もご一緒するよ、七海さん」

「……遅くなりましたね。わたしも……嬉しいですよ」

衣笠、古鷹、羽黒も七海についていくと言い出した。

深海棲艦たちは言うまでもない。深海提督だ！ と喜ぶばかり。

で、残った五十鈴と由良だが……。

「はいはい……。まったく、また勝手に人間やめて……。世話の焼ける妹だこと……」

「由良もあんまり悩んでは居なかったけど。一緒よ七海ちゃん。ね？ ねー？」

呆れる五十鈴も、上機嫌の由良も実は悩んでいなかった。

どうせ七海だって、わかって聞いたはずだ。

付き合いも思い出した以上は知っている。

それに。

「二人ならそう言うと思ってました」

「じゃあ聞くな！」

笑顔で知っていたと言うのだ。

建前上聞いただけと笑う七海。

五十鈴も由良も、苦笑いして次第に皆で笑い出す。

もう、今更何が起きてても驚かない。

聞けば七海らしい暴走で、みんなが知っている七海が帰ってきた。

それだけで、今は十分だ。戻ってきた事のほうが嬉しかった。

慣れっこのいつものこと。これが、姫園鎮守府の日常だから。

「さーて！　じゃあ、日曜ですけど……いっちょ、桜庭さんに喧嘩を売りに行きましょうか!!」

戻った報告に押し掛けてやると、鎮守府の状態を聞いて決心した前任が立ち上がる。

人の鎮守府居心地悪くしてんじゃねえと軽く怒った七海の、電撃作戦である。

「皆、行きますよ！　あたしの復活祝いに、桜庭さんには犠牲になってもらいましょう!!」

さっさと全員で支度して、鎮守府に逆に押し掛ける。

お返しをしてやろうという悪い笑みに艦娘は乗り気だった。

五十鈴も言うだけ無駄なので諦めて好きにさせる。

聞いた状態はあまり宜しくないなので、前任に改善してもらおう。

皆は支度して、日曜に飛び出していった。

目指すは、全員で抗議活動だ。打倒、桜庭を掲げていざ、抜錨！

「浮遊棲姫、出撃しますッ!!」

空が爆ぜる日

後先考えずに突撃していった一行であったが。

取り敢えず鎮守府に到着。全員に紛れて七海も侵入。

浮遊要塞は風呂敷の中だ。

深海棲艦に囲まれて詰め所を通りすぎて、兎に角執務室を目指す。

で、道中艦娘たちがとうとう深海棲艦と一部がクーデターを起こしたと勘違いして桜庭に報告。

疲れたように書類を終えて一休みしていた桜庭に悲劇が襲う。

ばーん！ と豪快に扉を開いて、堂々と名乗る。

「どうも！ 桜庭さんお久し振りです！ 完全復活したんでお礼参りに来ました！ 覚

悟してください!」

「一体何事オ!? えつ、何なの本当に!? 渋谷さん!? 何で鎮守府に!」

仰天の彼女に、七海は皆に命じた。

あの人が放置した恨みを晴らすべし。

嫌がらせしてやれと。

「帰ってきて早々何しようつてのアホ深海棲艦共オツ!! 止めんかア!」

三々五々散って行って、悪事を働き(いたずらだが)、胃痛と頭痛に悩むがいいと、皆様全力で悪乗りしていた。

怒鳴る桜庭が追いかけるが然し七海が立ちはだかる。

「記憶が回復したのを知らせに来たの!?! って言うか方法あったでしょ!?! 自分の立場わかってる!?!」

「MIAですよね? その辺はあたしのいない間に鎮守府の居心地悪くした桜庭さんへのお返しとして、任せます! 頑張ってください!」

「ちよつ、ちよつと待って……!」

混乱する桜庭に、ノリと勢いで逃げ出す七海。

背中を見せて、走り出す。

お礼参りに、鎮守府に混乱を招くのだ!!

「このクソ忙しいときに追加するの止めてええええ!!」
悲痛な桜庭の叫びが、幽霊騒ぎに発展する姫園鎮守府に響くのだった……。

で。

簡単にその後の流れを整理しよう。

七海、悪乗りしていたが事情を聴かれ捕縛されて大本営に直送。

七海はあくまで既に民間人。許されるのは深海棲艦のみ。

艦娘の指揮はできないと桜庭が怒って、それを聞いたお嫁さんが。

「そんな理屈は！ 如月が！ 許しません！」

と、どこぞの榛名のような事を言って浮遊要塞に目の前で喰われた。

桜庭の言うことよりも七海を優先すると言い出して、真っ先に同じ方法を選びやがった。

制止する前に実行、一口で丸飲みされて、絶叫する桜庭。

艦娘が喰われたのだから、当然だが小春が徐に工廠から持つてきていた高速建造材を口の中に放り込む。

時短してまあ落ち着いてみていろと示した。

んで、おぎやる浮遊要塞。誕生する深海棲艦。

「はい！ 艦娘如月改め、深海棲艦如月です!!」

「何でさああああ!!」

頭を抱えて苦悩する桜庭。理解不能なことが続く。

吐き捨てられて床に転がり、元気なまま立ち上がる如月改装、深海モード。角が額に二本、左に三本生えて、七海によく似た純白の髪の毛と色白の肌。

目の色も紫に変容しており、それ以外は普通の如月である。

「これで自他共に認める深海棲艦！ 司令官のお嫁さんよ！」

意識もハッキリしており、自分は艦娘よりも深海棲艦であると主張する。

元通りになるのか心配する桜庭だが。

「如月、おいで」

「はい？」

手招きしている七海に無防備に近づき、何と！

「ちゅっ」

「ひあ!？」

皆の目の前で頬にチュューしよった。七海が。
驚く如月。

で、一瞬で顔が真っ赤になって一発元通り。

何となくチュューしたら戻りかなという思い付きでやったら戻った。

皆さん絶句するなか、羞恥で怒る如月。ニヤニヤ笑う七海。

いつも通り百合しているイチヤイチャ空間であった。

これで問題ないと言い切る七海も七海であるが。

「ママにしかあたしは従わないもん!!」

「弥生も……七海姉と一緒にいい!」

鎮守府にいた娘と妹も参戦。

桜庭の命令は聞かないと止めるも無視して同じく喰われた。

そして流れ作業で高速建造材を放り込む小春。

またも吐き捨てられて床に転がる。

「ママ! あたしも深海棲艦になったよ!!」

「弥生も……! 七海姉と妹だから……!」

で、二人も深海棲艦に変異してしまう。

色素の抜けた髪の毛は同じだ。

山風は角がないが目の色が真っ黒になり、弥生は角の代わりに背丈が少し大きくなった。

色白の肌も健在で、七海にチューされるもとに戻るようにだ。

「そんな……ラブコメみたいな展開が……!?!」

わかる範囲を超えて頭痛がする桜庭。兎も角全員大本営に直送する。

これ以上は深海棲艦になるなど致命していく。そうしないと量産されそうな勢いだった。

こうして見ると、七海は好かれる艦娘と深海棲艦にはとことん好かれるらしい。

七海のためなら元帥にすら平然と歯向かう一同の目付きは本気であった。

あれは、下手なことをすると漏れなく皆は裏切るだろう。

(渋谷さんのハーレムには手出ししないほうが賢明だわ……。被害が甚大になる……)

割と笑えない規模の戦力でハーレム築いていた七海。

桜庭は大本営で、出来る限りの事をしておいた。

同時に、七海の母には記憶が回復して、そのせいかどうも復帰したいと願っていると正直に説明した。

本人が何やら、戦う気満々で、しかも周囲の部下たちが躍起になっている。

なので、正式な提督には復帰できないが予備隊のような感じで就職してもらおうと。そう語ると……。

「……あれが、私の知らない海軍での七海ですか」

一度顔を合わせた母は、そう呆然と桜庭に言った。

ある軍の病院で色々と検査している待ち時間に丁寧に説明していると、そう言い出す。

「……元氣ですね。あの娘が、あんな風にはしゃぐのは……あの人と遊んでいる小さい頃以来です」

見ている窓の外では、七海が五十鈴に追われていた。

五十鈴にトラック運転手とからかい、怒らせて笑いながら逃げている。

あの人、とは恐らくは亡くなった父親だろう。

事故で亡くなっているらしいのは知っている。

七海を見ている母の顔は、穏やかなものだった。

検査の結果は、母には言えないが完全な深海棲艦。

如月たちは一時的な変異だが七海は手遅れであった。

分類は浮遊要塞に近い、姫レベルの強大な能力を有する。

新種と断定されたが、何分戸籍のある人間が変異したもので、対応は慎重にやった。

一応桜庭の助言ありで現状維持になった。

周囲の艦娘たちの名目が監視になったぐらいで、あとは変化なし。

させると、次は人類に牙を向くと脅した結果だ。

実際可能性はあり得るだろう。

貴重なデータの損失も踏まえると失う価値は大きいとして、過度な接触を控えるぐらいには収まった。

尽力した甲斐もあって、平穩は最大限確保している。

「七海はきつと、あの人達と戦うために選んだのでしょね」

前の七海なら有り得ない理由だと母は言った。

他人に無関心で排他的な少女が、誰かの為に再び、今度は自分の意思で戦いにいく。

七海の気持ちを尊重すると、母は言った。強制ではない今回は、自分からだ。

ならば、それが七海の決めたことなら異論はないと。

「……海軍の生活は、嫌なことばかりでも無かったみたいで、良かったです」

嫌がっていた当初と違い、五十鈴に胴体に腕を回され締め上げられるなどの、じゃれあいをする相手がいるのは良いことと母もわかる。

由良が慌てて助けに入り、白目を剥いて泡を吹いている七海を見て何故そう思うのか

は別として。

母は言った。これからも、七海を宜しくお願いしますと。

海軍は嫌いだが、七海の周囲にいる人々は七海の味方と、接していて分かった。

桜庭も、礼を言ってから七海に伝える。

母が帰ったあと、顔をあわせてから。

「深海棲艦になったことは、言ってはダメよ。渋谷さんは人間なんだから」

「はい。覚えておきます」

まだ人間として見てくれるらしい。

素直に、それには感謝する七海。

再び日常に戻っていく。今は、平穩に暮らしたいと七海は言った。

戦うのは、作戦予定日までないから。

そう、桜庭も思っていた。

……そんなわけが、無いのだが。

作戦予定日は、あくまで人類の予定であり。

深海棲艦には、なんの関係もないのだ。

後日。今まで通り生活している七海たちに。

戦時という事を思い出す、最悪の事態が引き起こされた……。

それは、平日のことだった。

学校の授業中、七海は普通に授業を受けていた。

見慣れた風景。平和な時間。

それは……唐突に壊される。

突然、けたたましく鳴り響く警報が学校どころか、街全体に響き渡る。

皆は何事かと周囲を見回す。すると、乱暴に教室の扉が開かれる。

血相を変えて青ざめる生活指導の教師が駆け込んで叫んだ。

「み、皆さん早く避難してください！ 空襲です、空襲が来ます!!」

……突然鳴り響くのは、空襲警報だった。

深海棲艦の艦載機が、本土に上陸して、空爆を行っているらしい。

既に隣の町は空爆の餌食になっている。早くシエルターに避難しろと。

訓練か？ と生徒たちは首をかしげるが。

一名が、携帯が死んでいると驚いて叫ぶ。

通信が破壊されて連絡できないと知って、各々慌てて調べると、緊急避難速報という別途のものが届いていると違う生徒が叫ぶ。

即ち、訓練ではない。本当に空襲が来ると。

知らせに来た教師は既に隣のクラスに向かっていた。

教師は慌てずに早く避難をしろと誘導するが。

……自覚をしたのであろう、途端。

——うわああああああ!!

生徒たちは、間近に死ぬという実感を感じて、パニックに陥りながら一斉に逃げ出した。

真面目に訓練を受けても、非常時に冷静とは限らない。

ここはそれなりに海から離れている立地。空爆などされたことはあるのだろうか。

無いから、他人事と思うからこの反応なのだろう。

今のご時世、余程内陸でもない限りは平和ではないのに。

平和ボケした高校生など、自分が化け物に殺されると思うとパニックになるものだ。

教師が誘導する前に一目散に逃げ惑っていく。

対して、七海は？

「……………ふあああ」

能天氣に欠伸をしていた。

鳴り響く空襲警報をまるで気にせず、教師の声などまるで無視。勝手に判断して勝手に動く。

非常時に備えて、海軍の無線機を持ち歩いている。

一応これでも外部協力者。これぐらいは持っている。

「渋谷、何している!? 早く逃げろ!!」

「先生が逃げてください。あたしは引退してますが一応軍人やつてたんです。取り乱す前に、民間人は避難しててください」

成る程、七海には役目があるのかと判断して、教師は健闘を祈るとか言つてマジで逃げた。

我が身かわいさだろうが、生徒を置いていくとは……。

七海はそつちのほうがり易い。

生徒と教師の怒号と悲鳴が聞こえる中、一人になった教室で無線機を起動。取り敢えず鎮守府に連絡すると。

「この周波数……七海?! 聞こえる?!」

イヤホンから入る声は……五十鈴?

家にいるはずの彼女がなぜ鎮守府に?

「例の決戦の話！ 連中、予定よりも早く仕掛けてきているのよ!! 五十鈴も今から急いでハゲのところにいくわ! そっちは……嘘っ!! 今そこ、空爆されている!! 別動隊ってこと!! バカ、何無線なんかしてんの!! 避難しなさい七海!!」

ああ、そう言うことか。

大体分かった。七海は、指示は多分出ていつている桜庭に従えと言う。いつもの癖で。

空爆警報が喧しいが、全く気にしない七海は家に今、浮遊要塞はいるかと聞く。

「浮遊要塞!?! 多分いるんじゃない?! 確か、小春と村雨と春雨、あとは何時もの三人がそっちにいると思うけど!」

本来なら、島村の支援にいく三名もこっちにいたか。

それは、不味い。色々。

焦る五十鈴が言うにはもう桜庭は向かっているし、大慌てで皆が迎撃に出ているとも言う。

だから無線していないで、早く逃げろと急かす五十鈴。

「お嬢様、大丈夫!?!」

で、無線していると窓から小春がいつもの格好で、大きな風呂敷抱えて現れた。

どうもどさくさ紛れで侵入してきたようだ。

「あー……小春来たんで、こっちは何とかしますね」

時間もないので手短かに、七海は五十鈴にこう言った。

まさかの台詞だった。

「こっちの艦載機は、あたしが何とかしますので。終わったら合流しましょう。座標、送ってください」

「はあ!？」

言いたいことだけ言って、勝手に切った。

避難などするわけない。だって、七海は戦えるから。

空爆している艦載機風情、敵じゃない。落とせばいいんだろう。

「お嬢様、必要と思って浮遊要塞連れてきた」

風呂敷から浮遊要塞を取り出して、冷静に働く小春。

流石の働きに、べた褒めの七海は上機嫌で笑った。

もう少しで学校付近に艦載機が到着すると、道中見ていた小春が言った。

「で、えっちメイドと春雨イドは?」

「こんなときまで誰がスケベですか!! 怒りますよ!？」

噂してたら追ってきたのか窓から村雨と春雨、嫁と娘と妹も全員来た。

警報が鳴ったので全員で、七海を助けに来たらしい。浮遊要塞持ってきて。

怒る村雨に愉快そうに七海は言った。

「まあまあ、村雨。そう可愛らしいお顔で怒らないで下さいな。鼻血が出そう」

「この人は……!」

マイペースに浮遊要塞を撫でて、頭が痛い村雨達を見て、説明した。

「そんじや、あたしの家や学校が吹っ飛ばされる前に応戦しましょうか。決戦が早まりました。このまま、全員で応援に行きます。……車とか使えないので、鎮守府までは頑張つて走りましょう」

武器は浮遊要塞に仕舞つてある。

非常時と言うのに全く動じない彼女たちの、決戦が……始まろうとしていた。

陸軍と海軍

取り敢えずは迎撃に向かう。

無線を背負つて、それぞれ得物を受け取り構える。

頭部に電探も装備した。

予備の弾薬はたんまり浮遊要塞の腹に収まっている。

鎮守府に再度連絡。深海棲艦は全員もう居ないと、対応した由良が教えてくれた。

出撃命令が出ていない由良は決戦のなかでなにもできないと歯痒いように言つていた。

「ありますよ？ 手伝いをしてほしいんです。由良、あたし以外の皆の艤装を用意しておいてください。あと、浮遊要塞にありつたけの燃料と弾薬に鋼材、高速修復材を確保しておくようにあたしが言つていたと伝えてください」

由良に、今から空爆をする艦載機を撃破しつつ向かうので、浮遊要塞に出来ることを

お願いしておく。

勝手に資材を使うのはご法度だろうが、今回は大目に見てもらおう。

無駄遣いする訳じゃない。必要だから、向かうのだ。

相手が予想よりも早く仕掛けてきたから、後手になった。

だが、七海はポジティブに考える。後出し出来るなら、不利を覆す対応をすればいい。

現在この国は、海軍が海上で深海棲艦を叩くのがメインだ。

然し陸軍もしつかり存在するし、空爆などの対応は基本的に陸軍の役目と昔習った。

つまりは上陸されたら海軍の出番はなく、不手際を責められるだけとか忌々しように

教官が言つてたのを思い出す。

本当に何処でも陸軍と海軍は仲が悪い。まあ、そんな事はどうでもいい。

七海がすることは自分の実家を守ることと学校を破壊されるのを阻止すること。

他はどうでもいいので、放置しながら知り合いを助けに行く。

救助？ 避難誘導？ それこそ陸軍が勝手にやっついていればいい。

知ったことじゃないので無視する。

今は、浮遊要塞に必要なものを収納して、準備しておく。

そのまま海に出られるのは七海だけ。皆は装着の時間も必要になる。

最低限の手筈は整えておけば時短にもなるう。

由良は分かったと言つて、無線を切る。七海たちは学校から走つて飛び出し、遠方の黒煙をあげる都市部を目指す。

「提督！ 走つていくつて、相当距離がありますよ!!」 前回みたいに電車とか生きてないんですが!」

村雨が、そんな事を言うが知っている。

前回は電車などを使つて鎮守府に向かった。

今は非常時。あんな爆撃されているなら無事ではないだろう。

艦娘や深海棲艦と言えど、頑張つてもそこまでは速く走れない。

時間が掛かりすぎる。歩道を疾走する皆は、逃げ惑う市民とは逆方向に向かう。

こんなときでも自家用車で逃げようとするから車道は渋滞し、酷いところでは事故すら起きている。

予想できる混乱に七海は呆れながら如何にここが平和ボケしていたか痛感する。

陸の連中がまだ来てないから、自分勝手に我先にと逃げていく市民たち。

こういうときは大抵人間はエゴが出る。

助けてと呼ぶ声があった。七海は鋭く迷つた春雨に命じる。

「春雨、無視しなさい。命令です」

「……はこ」

助けるな。役目は違う。そう、七海は言つて無視させた。

振り返れば親切な若者が倒れた老人を救っている。

そういうのは、余裕のある奴がやればいい。

七海は皆に言つた。

「あたしたちは、ヒーローじゃないんです。誰彼構わず救える余裕などない。理由もなく他人を助ける余裕があるなら、戦いなさい。あたしたちは戦うために今、向かつているんだから」

外道の台詞だった。救助などする理由は無いから、役目を全うする。

そういう、ある種機械のような判断を下した。

間違いではない。戦うための力がある。

勝てば被害が減る。シンプルな理屈だ。

だから、たとえ目の前で死人が出ようが怪我人がいようが全部見捨てる。

役目は違う。そう、七海は何度も言つた。

走りながら、流れに逆らう。逆行は流石に手間取る。

七海はどうせ渋滞しているから車道に出ると言つて方向を変えた。

こんな恐慌状態だ。白い球体が浮かんでいても、誰も気にしない。

それよりも、早く逃げたいと言う恐怖に従い必死に、懸命に逃げていく。

気にする前に焦る感情のおかげで派手な見た目でも問題はなさそうだ。

然し、中々進めない。爆撃の範囲はどんどん広がっていく。

というか、なんでこんな陸地なのにあれほどの爆弾を抱えてこれた？

爆弾は銃弾ではない。複数持てるほど、連中の艦載機は高性能なのか？

おいそれと嵩張る爆弾を腹に下げて来ているにしては、被害が広すぎる気がした。

「ご主人様……。あの艦載機、もしかして陸軍の人たち……襲ってませんか？」

「……ああ」

学校から数キロを駆け抜ける頃、駅前近くに到着して一度休憩。

シエルターは、駅近くにあるが、幸い皆は人気のない裏道の部分に隠れている。

ちらほら陸軍の軍服を着た軍人たちが、避難誘導をしている。

内陸部に入り込まれると、陸軍では対処できない。

深海棲艦には、通常兵器は通じにくい。

妖精が作るか同じ深海棲艦の装備でないと、意味がない。

皆は武装しているが、軍人に見つかると揉めるだろう。

艦装の技術は、陸軍には一部にしか伝わってないらしい。

良くて、あきつ丸とかいう艦娘が陸軍の関係者だとか。

故に、艦載機程度にも陸軍は蹂躪される。海軍は手柄を欲して渡さない。

それも不仲の一因とか以前に聞いた覚えがある。

連中も歩兵の装備をしているが、艦装の技術や深海棲艦絡みの装備とは違う。はつきり言えば、通じないだろう。

敵も知っているのか、春雨にはあの遠方の煙は、都市部の破壊と応戦する陸軍の奮闘の狼煙に見えるらしい。

一理ある。だから毎度国民には陸軍も海軍も空爆がある度にバツシングされるのだ。

あの黒煙は、連中の惨敗の証なのだろうか。まあ、どうでもいい。

そう言えば、母は無事だろうか？ どうせ無駄だと思いが携帯を見た。

やっぱり死んでいる。こういう場合は災害などとは違い、早々復旧はしない。

とても気になるが、自分も言ったのだから我慢しておく。

母の職場は幸い、車でかなり離れている。向こうは見た感じ煙が上がってないので空爆はされてないだろう。

ここで食い止めれば、の話だが。

警報が鳴り響くなか、隠れている皆は空を見上げる。

まだ頭に装備している電探にはなにも引っ掛かってない。

然し連続で走ったせいで皆は疲労している。

陸上では海の上とは違って、皆も下方修正を余儀なくされる。

無理強いは出来ないと思いつつ、七海は考える。

此方から襲うのはいいが、街に被害を出す前に叩くとなると足場が必要になる。

皆は飛べないので、撃ち落とす作業になるので、高い場所のほうが射程が延びる。

その分、足場を破壊されたら一卷の終わりだが……。

暫し考え、下す。

「……仕方無い。陸軍をちよつと手伝いますか」

自分達だけではらちが明かないので、仕方無く陸軍と一緒に戦うことにした。

近くにいる陸軍の軍人に話しかける。

「な、何だね君は!?! 早く避難するんだ!! って、深海棲艦!?!」

「落ち着いてください。あと、銃口向けるのも止めてください。これも含めて、海軍の者です」

浮遊要塞に突撃銃を向ける男性に、素性を話す。

所謂海軍の外部協力者で、空爆の対処をしたいがこのままでは進まない。

そつちを手伝うから、そつちも手を貸せと。

七海は取り敢えず桜庭の名前を出して、その部下と同じ立場と言つてから、そつちのお偉いさんに話して融通つけてくれないかと言つた。

「ま、待つてくれ！ 部隊長に少し話をつけるから。然し……まさか、海軍の元帥殿が……。かの最終兵器、大和と名高い彼女か……」

桜庭は陸軍にも有名らしく、男性は指揮を執る部隊長とやらに無線で相談していた。

こつちも、キテレッツな格好の一団だが一応海軍。無理と思うが桜庭直通の周波数で入れてみると。

「だあー!! このクソ忙しいときは何よ!? 自分のところの判断は自分でしろっ!! 以上ー!」

激戦続きでキレている、桜庭が怒鳴つて出てきた。

周波数を見ないでそのまま受け取つたか。同情する七海はならばと言り返す。

「自分で判断していいなら陸軍の方々と一緒に任務しますので。じゃ」

「つて、その声渋谷さん!! え、何どうしたの!! ハゲの所に行くんじゃないの!?!」
なんで皆、忙しいと彼をハゲと呼称するのか。

桜庭は驚いて確認して何事か聞いた。

ハゲの所に行きたいけど、自分のところの街が空爆されてて迎えないと説明した。

自分の家がブツ飛ばされる可能性を危惧していると素直に。

「あー……はいはい。そういう娘だもんね渋谷さんは……。オツケー、手短で良いなら大丈夫よ。陸の連中に繋いで」

事情は分かったと言った桜庭を、現場にいる男性を呼んで手渡す。

恐る恐る対応する男性は、

「さ、桜庭閣下!? お、お話は伺っております!!」

本当に桜庭が出てきて、こんな下っぱ相手に話をするという事態に驚愕していた。

で、部隊長とやりに繋いで、何やら応答をする。

数分かけて、話をつけたのか。

「大丈夫よ。一緒に行動して頂戴。流石に私が相手だと陸の将校も大きく出られないからね。手柄を全部そっちにやるって言ったら大喜びしてたみたい」

「こんなときまで戦果争いですか……」

いがみ合いも程々にしてほしい。

だが、すんなりと話をつけてくれたのか、うってかわって協力的な軍人。

部隊長と呼ばれた大柄の男性が表情を引き締めて問う。

「うむ。話は分かった。では、そちらはどうする予定で? あまり時間もない。私の届く範囲で支援する」

寛大な処置に感謝すると七海は礼を言った。

此方は艦載機を撃ち落とすから、市民の誘導と移動に乗っかっていつてほしいと。そう言うのと、控えている彼女たちは艦娘か？ と聞かれて首肯。

浮遊要塞に関しては、桜庭が捕獲してなつかせたと説明。疑わずに信じて尚更驚いている。

桜庭が出てきたせいも、妙に大人しい陸の軍人。

「ふむ……。うら若き乙女たちが戦うと聞いていたが、本当だったとはな。では、貴女は提督か？ 階級は？」

「すみません、訳あって一度退役しているのです。ですが、最終的な階級は大佐でした」全部は話せないと言うものの、階級は大佐と言うと自分と同じかと大変驚いていた。

高校の制服をきている子供が大佐だ。そりゃ驚くだろう。

「……退役しても尚、戦うか。幼いながら天晴れな気概。感服致しますぞ」
「いえ、別に……」

「ご謙遜を。見栄のために命を張るような風でも無さそうだ。これでも人を見る目には自信がある。貴女は勇敢な方なのだ」

じゃあ、こいつの目玉は節穴か腐っているという意味だ。

完全に間違っている。勇敢でもない、気概もない。

ただ利己的に判断して、使えそうだから陸軍に寄っていただけだ。深い理由もないし、そうしたいからそうした。それしかない。

褒める部隊長に、首を傾げる七海。何を言っているか、理解できない。

兎に角、早く乗れと言うので、用意してくれた軍用の車に乗った。

「これも乗せていくのだろうか？ ……見たところ深海棲艦のようだが、海軍の所有物で良いのか？」

「にゃー！」

プカプカ浮いている浮遊要塞を指差して、運転手は聞いた。

敵意はなさそうで、舌を出して呼吸してるそれを見て、ドン引きだった。

「気にしないでください。飼い主は今ではあたしです。暴れませんが、何か食べ物とがあります？」

海軍の所有物、というか元帥に飼われている深海棲艦と言うと絶句した運転手。

桜庭の陸軍での扱いが多分悪化した瞬間だろう。

「れ、レーションでいいかい……？ いや待て、こいつが食うのかこれ？ てか、生きてるの？」

ひきつった顔でレーションをくれたので浮遊要塞にあげる。

声をあげ喜んでた。初めて運転手は深海棲艦を間近で見られるらしい。

素で喋るぐらい、迫力がないと言っていた。

それから、発車する軍用車。

彼は光栄に思うべきだ。

眼前に人間に擬態する新種と侍らされている深海棲艦たちが居るので。

因みに一行には生粋の艦娘は誰もおらず、全員漏れなく深海棲艦。

なのに陸軍と共闘するという歴史的な光景があった。相手は知らないが。

「……レーシヨン、美味しいか。そうか……。俺はレーシヨン、美味しくないと思うんだけどな……」

何だか気の抜けた運転手は運転しながら何なら全部持つていけと沢山くれた。

今だけは仲間と有難い事を言ってくれるので、遠慮なく皆で頂く。

「脂っこいですね……」

あまり美味しくはない。然し、炙って食べれば美味しい気もする。

そんな初めてのレーシヨンであった。

「酷い味だろ？ でも栄養素はバツチリなんだ。また今度鎮守府に配属されたらあげるよ。俺、近々憲兵の仕事につくからさ。名前教えてくれればそこに行こうかな。出せば行けると思うし」

新人という彼は、意外ときさくな人であった。

後悔すると思うと先んじて告げてから、あの名前を言った。すると、新人の運転手は。

「ああ、あの深海棲艦がいるっていうヤバい鎮守府？　つてことは、君か。命知らずの女子高生つて。意外と若いね……。しよつちゆう死闘とかドンチャン騒ぎしているつて酷い噂しか聞かないけど、君だつたんだ？」

知っていたらしい。懐かしいあだ名を出されて肯定。

実際見ると、案外怖くはないと彼は言う。

移動中、配属されたらまた会おうと、気軽に言っていた。

陸軍にもまだ、感じのよい人はいると思いつながら、七海たちは戦場へと向かっていく

……。

空爆の裏側

時間は、七海を学校に送っていった後から始まる。

一度野暮用で鎮守府に戻ると、五十鈴は送っていつてから直ぐに出ていった。ちよつと取りに行きたいモノを思い出して、向かった。

その後、自宅では母は仕事で留守であり、残っている面子はメイドと三人娘。他は鎮守府にいる順番であつた。

自宅で一通り家事を終えた皆は好き勝手に過ごしている。

小春が同人誌を読みふけて、村雨はやはり一流のスケベとか意味のわからない事を言い出してキレる村雨が、だったら自分である証拠を出してみろと口喧嘩をする見慣れた光景。

春雨はのんびりお茶を啜り、三人娘は七海のベッドでおいに包まれ二度寝をしてい

た。

そんな平和な時間は、簡単に破壊された。

まず、五十鈴の視点では。

鎮守府にある程度時間がかかったが到着。

皆に野暮用と既に知られているので気にせずに準備をしている頃。

突然警報が鳴り響いた。何事かと慌てて五十鈴が執務室に向かうと、もう桜庭は居なかった。

代わりに秘書をしていた由良が教える。

「し、深海棲艦の巨大連合艦隊が……日本中に同時に出現したって……」

呆然と呟く由良は、頭が追い付かずにパンクしていた。

何でも本来此方から仕掛けるはずの拠点から次々雑魚の群れが現れて、本土に侵攻しているらしい。

予定よりも、連中が早く動き出した。監視をしていた艦隊から通達があり、全国の担

当する鎮守府では現在迎撃中とのこと。

もう桜庭が出撃して、一番近い艦隊を移動がてら撃滅して次に向かっていているという。
(流石規格外、後手でも迅速ね……)

由良のように動じずに予め準備してあった装備ですつ飛ばして向かっていったという。

冷静沈着。そこは流石は元帥。伊達じゃない。

ただ、由良たちの鎮守府では大半は留守番である。

残っている深海棲艦は、七海の指示を待っているが……七海は現在学校だ。

連絡しようと由良が自分の携帯で電話をするが何故か通じない。

仕方無く五十鈴が待っていられないと、待機中の皆に通達。

「あんたたち！ 話は聞いてるわね!? 準備だけでもしときなさい！ こっちはハゲに連絡するから！」

と、自己判断で命じて共同任務の島村に無線で確認をする。

コール一回で彼は出た。

「此方姫園鎮守府、軽巡五十鈴です！ 島村提督、聞こえますか?!」

「おお、五十鈴か！ 私だ！ そちらはどうなっている!?!」

応答した島村は、焦りを感じさせる声で、状況を聞いた。

こっちは現在桜庭は出撃中、七海は学校だが連絡が何故か通じないと。

「何だど!?」だが、遅れは取り戻そう! 現在、此方でも敵艦隊と交戦中! 聞こえるか、陽炎! 不知火! 第一艦隊、第二艦隊は貴様らに任せる! 応援が到着するまで持ちこたえろ! 全員奮起せよ! 絶望するな! 諦めるな! 決して死に急ぐな! 私も応援を連れて必ず向かう!!」

と、力強く指示を出している。

どうやらもう足止めと時間稼ぎはしているようだ。

足の速い駆逐艦と高速空母で無理矢理足を止めていると言った。

相棒の武蔵も重量編成で出撃していると言うので急ごう。

「今は私にも敬語はいらん! 五十鈴、どうにか渋谷さんに連絡をつけろ! 私はヘリコプターで今すぐそちらに合流する!」

「了解! うちの深海棲艦にも先に向かわせるわ! 五十鈴も準備してあの娘たちと一緒に向かう! ヘリの給油も明石にやらせるから! 戦っている座標はどこ!」

権限などないが、本来の代理である秘書の由良が小春たちにも通じないとパニックになっっていた。

一度通話しながら、片手で由良の頭を拳骨で殴る。

「痛あ!」

落ち着けと睨んで、涙目になりながら由良は頷き、一度工廠に向かうと出ていった。準備を手伝ってもらったために彼女は留守番の艦娘たちに声をかけに行く。

一方五十鈴は座標を聞いて、通信を終える。

自分の装備を代わりに準備してもらいつつ、此方も代わりに全体に指示を飛ばす。大丈夫。まだ、遅れは取り戻せる。焦りは禁物。

冷静になりながら、準備を慌ただしくやっている、無線が鳴った。

表記の周波数は……なんと七海で。直ぐ様出る。

彼女はやはり学校にいるようだった。

同時に、駆け足で戻ってきた由良がドアを開いて五十鈴に叫ぶ。

「五十鈴、大変だよ！ 街が……七海ちゃんのいる付近の街が空爆されてるって!! 今、大騒ぎになってる!!」

一般の電話が死ぬわけだ。地形ごと吹っ飛ばされたんだろう。

空爆をされていると聞いて、五十鈴は納得する。

海軍の無線は特殊な経由をするため、多少のことじゃ通じなくなることはない。

由良がやっていたのは普通の携帯。そりゃ無理がある。

別動隊が居たらしい。早く避難しろと言うが……。

「はあ?」

聞き返す前に、無線を切られた。

何か、浮遊要塞がいるかと聞かれ、居るなら小春たちと空爆をどうにかすると云つていた。

出来なくはないだろう。彼女たちは全員深海棲艦。

陸上でも対応可能な装備もあるし、出来るのは分かる。

しかも、突破して合流するから後で座標を教えろとか言い出す。

本来なら島村の鎮守府で指示を出す手筈が、戦えるからつて七海は直接来る気満々だった。

やはり五十鈴含めて皆が居るなら、自分も戦うつもりか。

その為に深海棲艦になったのだ。おかしい話でもないか。

仕方無い。七海がそう言うなら、任せる。

七海は言い出したことは大体実行する。今回も、あのハゲと一緒に前線に出る。

(まったくもう！ 兎に角、急がないと!!)

動ける皆はさつさと出して、自分も出撃する。

後方支援のリセと翔鶴とパクチーは、島村操るへりから艦載機でカバーする。

二名ほど海の上では戦えないので妥協した結果だが、島村操るへりは航空機をざつと

1000は放つ戦力になる。

正直あいつが潰されると一気に瓦解する。命綱は島村なのだ。

三人ほど足りないが、五十鈴がなんとかしよう。

「軽巡五十鈴、出るわ!!」

ありったけの燃料と弾薬を詰め込んで、深海棲艦と共に五十鈴は抜錨していった……。

一方、その頃。

何も知らない、電話が通じないことも知らない皆は。

突如鳴り響いた空襲警報に、ビックリしていた。

「これは……!?!」

小春は持っていた同人誌を仕舞ってから外を見た。

村雨は慌てて立ち上がろうとして足が纏れて無様に両手を広げるように顔から転んだ。

スカートのなかの白い下着が見えた。

流石本作スケベ担当。シリアスの裏側の焦るときも色気を振り撒くのを忘れないあげとやい。

(何か分かんないけど殺すッ！)

顔をあげて虚空に殺意を向けるがそれは無視して。

丁度スカートの中身が見えた春雨は、

「ぶふーっ!」

驚いてお茶を霧にして吹き出した。汚い。

三人娘は揃ってベッドから転がり落ちた。

「空襲警報!」

如月が真つ先に行動する。

起き上がって以前聞いていたリビングに向かい、柵に入っていたラジオを起動。

すると、ここいら近辺に空爆が来ると言う情報が流れていた。

沖合いに突如現れた空母がかなりの数の艦載機を陸地に向かつて放つたらしい。

時は遅く、隣の都市部は空爆の被害を受けている。

陸軍が出勤して応戦しているが、戦況は悪いだろう。

慌てず避難を誘導する放送を途中で乱暴に切り、部屋に戻る。

おろおろする山風と弥生。初めての内地の空襲にパニック状態になっている。

「淫乱メイド！ この非常時にパンチラして妹を悩殺する暇があるなら準備して！」

「誰が淫乱……ああもう、分かっているわよ!!」

咳き込む春雨を擦りながら、村雨も怒鳴る。

小春はプカプカ浮いて寝ている浮遊要塞を叩き起こして、告げる。

「弥生、台所行つて火の元消してきて！ 山風、戸締まり！ 春雨、必要なものを持って

！ 村雨は……取り敢えず色目を使わない!!」

「事故にも因縁つけるなア!! 真面目にやっつて言つて言つてるじゃない!!」

各々、我に返つて素早く動いて準備をする。

携帯を取り出す村雨に、小春は怒る。

「バカ雨！ こんなときに携帯なんて無意味！ どうせ回線が死んでるから通じない

！」

「バカって言うな！ 一応念のために持っていくだけよ！」

色々機能があるでしょ、と怒鳴り返して全員戻ってくる。

風呂敷に浮遊要塞を包んで首から背中に回して背負う。

バタバタと皆で玄関に向かって出ていく。

鍵は村雨が持っているので施錠。

「お嬢様の高校に行く！ 助けに！」

「鎮守府じゃないの!？」

小春は七海を助けに行くと言っていた。

春雨も驚いて叫ぶも、無視して小春は逆方向に走り出してしまふ。

本来の任務である七海の護衛を優先して、他はどうでもいいと判断したのか。

あるいは、空襲で七海が死ぬのを恐れているから真つ先に助けに行くのか。

どつちにしろ、事情が分からない。非常時の無線を持ち歩くのは七海だけ。

七海のところに向かうのは、当然とも言えると落ち着いて考えて皆は納得する。

考えてみれば、見る限り遠方の隣の都市部はもう一目瞭然で破壊されていた。

あれでは電車なども使えない。つまりは、向かうに向かえない。

「もう！ 提督ばかり優先して！ そんなに提督が好きなのかしら!？」

悪態のように言うものの、村雨が次いで走り出していった。

続いている三人娘や妹がそれを見てぼやく。

「村雨だつてママが好きなくせに。もうそろそろ素直になれば？」

「スケベとかエロいとか淫乱とか……。あれは単に七海姉の愛情表現だし……」

「そうそう。事実でも良いじゃない？ ちゃんと司令官は愛してくれるわよ村雨ちゃ

ん」

この溺愛されて既に愛情で洗脳されている娘と妹と嫁がそう言うし。

「姉さん、ご主人様は皆大好きだし、愛してるよ? 姉さんだって感じるでしょ?」

最愛の妹メイドにすら言われて村雨は困った。

わかつてはいるけど、どうにも……。

「……分かつてはいるけど……。村雨のプライドが、ね? 許せないって言うか、ボケを放置するなっていう謎の使命感が提督には働くのよ。村雨だけ何時までも淫乱メイドとか言われるの納得できないし、あんなセクハラ紛いの愛情表現よりはもう少し優しくしてくれないかなって思うんだけど」

否定はしない。結局村雨も七海のメイド。

毒されているし、とつくに親愛ぐらいある。

けど、納得できない。

謎の村雨嬢とか淫乱村雨イドとか、言いたい放題毎度言ってくれる。

最早ぶれないお約束になっっているのがムカつく。

「多分村雨に好きって言っても聞かないから、ママはセクハラするんだと思う。村雨、ツンデレだし」

「ツンデレ!? そんなものないけど!? 新しい属性の付与も止めて!」

山風が何か言い出したが、それも言い掛かりである。

至って真面目でツツコミで苦勞人。そういうポジのハズですが……。

「兎に角、漫才している間に司令官を迎えに行きましょう!!」

如月の言う通り皆は急ぐ。

彼女の安全を確保するため、懸命に走るのだった……。

命懸けの信頼

海上を五十鈴はトップスピードで疾駆する。

邪魔な雑魚を急所に当てて一撃で葬り、道中の消費した弾薬を計算しながら合流に向かう。

艦娘でただ一人、助力を名乗り出た彼女は、兎に角急ぐ。

空爆されていると言う七海の街。迎撃すると、七海は告げた。

一体どういう手段でやるのかは皆目見当もつかないが、きつと上手くはやるんだろう。

自分の役目は、戦うことだ。来るであろう、彼女のために。

リングと静香しかいない三人の艦隊。彼女たちも出来合いの艦装と言えどかなり規格外の物を持ち出している。

何でも最近残骸を回収したレ級を参考にしたとかで、二名揃って尾っぽがついてい

た。

ウツボみたいな機械の頭を模した尾っぽ。詰め込んで、胴体に回して固定している。

静香はどこか無言で不安げな顔をして、リンゴもどこか余裕の無さそうに五十鈴に聞いた。

「ねえ……その、島村とかいうハゲ、信用できるん？」

「大丈夫よ。あんたらが敵対しない限りは、向こうからはしないわ」

五十鈴は大丈夫と断言した。リンゴは本当か疑っている。

無理もない。今まで散々皆は七海と共に迫害を受けてきた身だ。

疑心を持つのは当然で、深海棲艦たちは正直言えば桜庭も信じてはいない。

いわく、恐ろしいらしい。本能的に格上と分かるがゆえに、殺される気がして。

相手にはその意思はないと分かるけれど、信用はできない。

完全に信じられるのは、同じ迫害を受けている七海だけ。

深海棲艦に堕ちてまで愛してくれる七海だけ。

だから、彼女は信頼される。言動が一貫しているから。

だが、単なる人間である島村は？ 本当に後ろから撃たないのか？

なぜ、言い切れる？

「理由は、あいつ、春雨が来たときから……一度も七海を責めたことがないのよ？」

「……マジで？ ああ、そう言えば春雨が真つ先に来たんだっけ？」

「ええ。あの姉妹は、特別だから」

春雨と村雨の姉妹を島村は見ても、決して否定も拒絶も、攻撃すらしなかった。

彼女たちを完全に受け入れた、数少ない人間である。稀有な人物と言える。

単純な理由で、島村の戦う理由は護国の為で。

ここにいる深海棲艦が、国を焼いたのか。

答えは違う。だから、味方として受け入れた。

襲ってくるから戦うという彼も一貫した流儀がある。

国を焼き払うから奴は立ち上がる。シンプルな理由だから信用できる。

「逆言えば、あんたたちが一度でもこの日本という国を敵視すれば……あいつは間違はなく、迷いなく殺しに来るわよ」

「わお、白黒ハッキリしてる……」

信用というよりは、七海得意の理屈的な判断であると五十鈴は説明する。

護国の天秤は、深海棲艦というくりではなく、襲ってくる深海棲艦は敵という結論ならば、襲わない……大人しい深海棲艦とは？ 答えは、今の皆である。

彼は国のためなら深海棲艦だろうが同胞として迎え入れる懐の大きさがあると、五十

鈴は語る。

故に、春雨と村雨はああ言うが、個人的に忌避するだけで、敵とは見ていない。分かりきった話なのだ、と言った。

「じゃあ、提督があんなんでもハゲは受け入れる可能性が高いんかな」

「まあね。だから七海も信用してるのよ。あれだけひどい目に遭わされているのに、元帥と島村は信じているみたいだし」

リングは納得したように頷いた。わかる話に、すんなり頭に入った。

要するに七海が信じている以上は、取り敢えずは信じてみると。

何かあれば、それこそどうなるかも分かっている。

「見限って七海がああハゲ殺しに行くだけよ。知ってるでしょ？ 七海はもう、思い出しているから悪意には過敏に反応する」

「あー……有り得るわ。あの人、もう人間に愛想尽きてるもんね」

逆鱗に触れば、誰であろうが勝算も無視して襲いに行く。

それが、七海という人物の内面だから。

静香も分かったと頷いて、暫く敵を葬り進んでいく。

連絡が入るのは……もう少しあとになってからだった。

無線が鳴った。

開くと、島村が鎮守府で現在給油と準備に入ったという報告だった。

道中消耗した弾薬の量と移動した距離を手短に纏めて五十鈴が伝える。

島村も憔悴していた。

「な、なんと言うことだ……！ 日本各地で襲撃が発生しているだろ！」

聞けば、全国で防衛している内側に空母やら戦艦やらが別動隊で出沒して、海沿いの街を空爆したり破壊していたりするようだ。

守りに入っていた連合艦隊の内側、近海に手薄になった所を殴るという人間の戦術のよなものだ。

偶然にしては、出来すぎていないか？ 五十鈴が思わず問うが、

「いや……連合艦隊を囿にしたこのやり方は、過去にも数回あったらしい。以前はもつと被害は甚大だな。陸軍と海軍がまだ、対立が激しい頃はよくあったらしい。今回は、教訓が活かされて、これなのだ」

ハゲに言わせると、これでも少ない方だ。

以前は互いに足を引っ張りあい、更に被害は拡大していた時代もある。

少数の本命の空爆が寧ろ範囲が狭まっていると。

海軍は必死に防衛をしている。大体、深海棲艦は神出鬼没。

こういう、不意討ちなどが起きた場合は、後手に回るのは人類の技術の限界でもある。

島村は齒噛みしていた。

「五十鈴よ、渋谷さんとは連絡はついたか!？」

全国の被害に絶望しつつ、島村は五十鈴に聞いた。

五十鈴は一瞬迷う。ああは言ったが、七海のことを彼は何も知らない。

あの騒動は、基本的に知る人物以外には言っていないようだ。

大丈夫と七海は笑っていったが……この男、信頼できるか？

だが、それも刹那。七海を五十鈴は信じている。

そして、五十鈴もこの漢の護国の誇りを信頼したい。

だから、全てを彼に打ち明けた。

七海の近辺の街も空爆されている。

七海はそれをどうにかして、此方に合流する気なのだ。

戦っている地点を、後で教えて、自分も戦うのだと。

そう、隠さずに彼に伝える。

島村は驚愕していた。

「ま、待て……！　渋谷さんは記憶を取り戻したのは分かった。だが、彼女は艦娘の力を失っているハズだ！　我が鎮守府で指揮をする予定ではなかったのか!?　合流する、つまりは共に戦う気なのかあの人は!?　無理だ、人間には……そんなことは不可能だ!　いくら渋谷さんとして、私のようにヘリコプターを操縦するわけでも無いのだろう!?　どうやって戦う!?　　どうやって戦場に辿り着くと言うのだ!?!」

陸軍と迎撃するという話のようだが、それも五十鈴は初耳だ。

取り敢えずは現場で何とかすると信じて、概要を教える。

予想通りの返答だった。激しく困惑する島村。

鎮守府の艦娘だって、知らないものがあるのだ。

生きていたという事しか知らない。

五十鈴は部外者である彼に、真実を口にした。

即ち、七海の言葉が現実かどうかを確かめる意味で。

「……島村提督。落ち着いて聞いて。七海はもう、人間じゃないの」

「ツ!?!」

荒唐無稽な事を真剣に言った。

そう、聞こえただろうか?　息を呑む島村。

だが、この男は……聡明であった。

流石は七海の適当な思い付きで真実に辿り着く漢。

現状と、五十鈴の言葉の意味で、理解した。

然し、それは。……常人には、並大抵の覚悟では選べない方法だった。

「まさか……まさか、彼女は!? 深海棲艦になったというのか!?」

「ええ、その通りよ」

ヘリコプターの無線で、叫びながら五十鈴に問う。

後部座席で準備していたリセやパクチー、翔鶴も聞こえた。

ああ、人間に五十鈴が正体を明かした。

同時に、コッソリと艦載機の支度をした。

相手は、島村。七海の敵になるかもしれない、人間。

今までの経験上、知れば大抵敵対する。だから、皆は後ろで身構えた。

最悪、任務を終えたあとで、彼を仕留める気でいた。

七海の敵は皆の敵だと分かっている。

害悪となるものは消す。それを、同じ存在になった今は、決意している。

それに気付かない島村は、愕然と呟いた。

「な、なんと言うことを……。あの圧倒的憎悪を、再び己の身に流し込んだというのか

……。何故だ……。? 何故、渋谷さんはそこまでして戦おうとする……。!?」

島村とて、常人の部分はある。

狂人の行動理由など、想像できない部分もある。

そうだとしても。彼もまた、普通ではない。

あの憎悪を生身で堪えられる強靱な精神を持つ、本物の防人。

発破をかける五十鈴が言えば、簡単に答えに行き着く。

「本当に分かんないの!?! 違うでしょう!?! 島村提督、あなたにはわかるはず! 人間をもう諦めているあの娘が、あんたは……あんただけは、受け入れてくれると笑顔で言っただから! 一緒に戦ってくれるって、信じているって、五十鈴に言ったのよ!!」

七海が信じる島村という漢の国防の誇りなら、理解できるんじゃないの!?!」

怒鳴るように、五十鈴は叫ぶ。

分からない? 本当は? いいや、それこそ有り得ないのだ。

何度島村は七海と関わった?

本質は交わらないものの、七海の性格はもう、理解している頃だ。

七海は凄惨な目に遭った。人間には諦めしないと五十鈴は言う。

それでも尚、島村という漢の事は信じている。信じられる。

その理由を、目を大きく見開いて……彼は感じ取った。

「……………私たちの、ためか? 私達を死なせないためか!?! 私達が生きて帰ってくる

為に、渋谷さんは再び深海棲艦になったというのか! たった、それだけのために人間を捨てたと!」

「あの娘には、それだけなんて言う軽いもんじゃないの! 五十鈴に言つてたわ。あなたに死なれたら、ずっと助けられてきたお礼が出来なくなるって。だから人間やめてでも一緒に戦うって。無論、それ以外にもある。けどね、少なくとも……七海がもう一回深海棲艦になったその理由に、あなたは絶対入ってる! 打ち明けてもいいって、七海が自分で言つたぐらい、あなたはあの娘が信用できる数少ない人間なのよ! その意味を、分からない程あなたは愚かじゃないって、五十鈴も信じる!」

自分を軽んじるな。そう、五十鈴は怒った。

たった、それだけ? そんな軽い理由ではないはずだ。

七海は恩返しできないとは言った。

然し、五十鈴が考えるに既に彼女は島村に全幅の信頼を置いている。

彼の護国の、国防の魂を信じられると感じているから、ああ言った。

敵でも受け入れる人物は、恐らくは七海と桜庭、そして島村の三名ぐらいなものだろう。

記憶を失っている時ですら、七海は彼を信頼できる大人と言っていた。

彼女は、記憶喪失であつても、興味が無い異常者でも、信用をすると言える人間。

それが、島村という漢。

命を賭けても、人間やめてでも加勢する、桜庭並みに感謝もしている相手。

「……私個人を助けるために、もう一度共に戦ってくれるのか。前回は命を賭けて、今回は……人であることを辞めてでも。私は、彼女にそこまで尽くしてもらえぬ人間なのか……!?!」

島村は、背後で見張っている三人の前で苦悩を始めた。

自分の器を客観的に見ても、七海の言動は……恩義を超えている。

ここまでくると、理屈ではなく感情的な問題になる気がした。

三人は様子がおかしいことに気付く。

彼は、自分の器量が本当に七海の命懸けに相応しいのか混乱していた。

つまりは、何か。島村という人間は、七海にとってもそれほどの存在であるのか？

「……ひとつ言うなら、あんたは七海が本気で信用できる大人なの。この際、細かいことは気にしないで。ただ、あの娘がここまでする相手は元帥ぐらいしか居ないってことも、忘れないで欲しい。強いて言うなら人徳よ。それも間違いなくあんたの。だから、七海を信用して。お願い」

五十鈴が説得するように言った。

島村も、数秒、その言葉を考える。そして、答えを出した。

「成る程……。どうやら、私は……。私の思っていた以上に、あの人に影響していたらしい。私も若輩者と常々思っていたが、最低でも命懸けをするほどの信頼をされているのか。……。了解したツ!! ならば、たとえ彼女が如何なる深海棲艦であろうとも、私は誇りを持って、その信頼に応えよう!! 我が力は民のために、我が命は国のために、そして……。我が誇りは、信頼の為に戦おう!!」

雄叫びをあげて、島村は五十鈴に誓う。

七海が己を出して信頼するならば、彼もまた誇りに誓って戦おう。

如何なる深海棲艦になろうとも、彼女が信じてくれると言うなら。

応えるのが信頼への返答。それが、島村の答え。

「ありがとう。あの娘を信じてくれて」

「いや、礼を尽くすのは私の方だ。渋谷さんに誇れる軍人になれるように精進する。今

は、勝つぞ五十鈴よ」

「……ええ!!」

五十鈴も海を駆け抜ける。

彼はやはり、信じてても良い人間であつた。

力強い返事をして、戦いに赴く防人たち。

渦中の七海も、戦いを始めていた。

市街戦

五十鈴がハゲに詳しい事情を話している頃。

陸軍の軍用の車に乗る皆は、現場に向かっている。

逃げ惑う市民たちを、他の隊員たちが必死に誘導している。

邪魔な乗用車を器用に回避しながら、突き進む。

血塗れの人間たち。沢山の怪我人。怯え、竦み上がる人々。

前を見れば、黒煙をあげ燃え盛り、破壊される街が遠くに広がり、軍人たちが手持ちの火器で懸命に抗っている。と運転手の無線に入った。

火薬、硝煙、焦げた肉のような悪臭……。そんなものの中を進んでいく。

皆が知らない、海の上でしか戦わない彼女たちが初めて目にする世界。

暴力に対抗できずに蹂躪される、無力な人間たちの世界だった。

「よく見ておくと良いです。これが、あたしたちが負けたら広がる地獄と言うことを知っておいてください」

七海は大して動揺していないようだった。

彼女だつて早々見たことのない光景だが、想像の範囲である。

艦娘が負けるとはそういう意味で、本土を焼かれるとはこういう意味だ。

戦争とは、明確な終わりはない。

特に深海棲艦など加減も知らないはず。

大半が焦土になるなら人間は逃げるしかない。

人間に出来ることは、皆無。特に民間人など、一方的に殺されるだけだ。

これを、虐殺と言うのだが七海は虐殺程度じゃ動じない。

皆は青ざめて流れる風景を凝視していた。

鎮守府に居るときは想像することすらなかった、戦争の真実。

敗北の光景が、目の前にあり、自分達の役目を思い出す機会になつただろう。

七海は興味などない。他人がいくら傷つこうが無関係であるし、今回も邪魔だから

取っ払うだけ。

障害にならないなら無視していたし。そんな価値しかこの残酷な現実にはない。

運転手が速度をあげる。爆撃が通り過ぎた区域に侵入したと言つた。

アスファルトは派手に捲かれて、大穴がそこらじゅうに目立つ悪路を進む。窓の外から見える世界は、黒と山吹色の色に染まる。

燃えている建物を消火する軍人。誘導を終えて、救助をしている軍人。

現代の都市部が破壊されると、大半は機能がそのまま死ぬ。

下水道が破裂して汚い噴水を作り、道路を汚物で汚している。

悪臭を堪えながら向かっていく。海は、まだ都市部を抜けないと出てこない。

「……おいでなすったか!! 来たぞ、飛行機だ!!」

陸軍では艦載機を飛行機と呼ぶのか、そう叫ばれる。

運転手の見ている眼前は、無数の小さな影が飛び交って、下から火花が散っている。

ここが最前線。後方に停車すると、皆は武器を準備しておく。

時折爆発して煙が此方に流れてくる。一度見えなくなる視界。

「なんであんなラジコンみたいなもんでこんな被害が出せるんだよおい!!」

突撃銃を用意して悪態をつく運転手の言う通り、深海棲艦のサイズは大体小春が良い例で、良くて成人女性と同じぐらい。

本来の飛行機をそのままラジコンにして、戦力を維持したモノと想像すると分かりやすい。

要するに陸軍は人を殺せる自分達の火器が通用しないラジコンと戦っているのだ。

その癖、機動性は本物と大差なく目まぐるしく移動する。

殺傷能力も変わらない。逆を言えば、艦娘はそれだけ頑丈と言うことにもなるが。

(……成る程。艦上爆撃機、艦上戦闘機ですか。道理で、こんな被害を出せるわけですね)

七海は一見して分かった。連中が相手にしているのは爆撃機と戦闘機。

爆弾を落としたあとに機銃で艦載機は応戦しているらしい。持続的に出来るわけだ。

艦娘には効果の薄い機銃でも、人間には十分致命的。

更には乗ってきた戦車の装甲程度なら、機銃でも事足りる。

この甚大な被害のうち、破壊された戦車の爆発も交じっている。

だから二次被害が出ているようだった。

ドアを蹴り開けて七海は飛び出す。

……蹴り飛ばしたら、ドアが諸とも吹っ飛んだ。

「おわっ!?! 何!?!」

「すいません。あたし、特殊な訓練を受けているので加減間違えてしまいました」

驚く運転手に、豪快に吹き飛ばしたドアを見て、謝った。

啞然とする運転手。怪しまれないように口八丁で言いくるめる。

提督とは選ばれた人を示し、有事には自らが戦うと吹き込み、自分の異常性を正当化

する。

嘘は言っていない。ハゲは自分でヘリコプターの操縦士として往くし、桜庭は言うまでもない。

詰まりは嘘じゃない。事実を言っただけ。極論だが。

「提督って……すげえ……」

司令官の立場は伊達じゃないと言っておくと呆然と呟く運転手。

皆も車を素早く降りて銃を構えた。

七海も降りて指示を出す。隣の浮遊要塞と一緒に浮かびながら。

「つて、何か浮かんでる!?!」

「海軍驚異のメカニズム。そういうことです」

プカプカ浮いているのも、海軍驚異のメカニズムで済ませる。

艦娘関係の技術は驚異のメカニズムと言っているのでこれも嘘じゃない。

最早怒濤の展開についていけない運転手は、小声で言った。

「海軍は……宇宙の民だった……?」

絶対違う。

取り敢えず、皆の装備を確認する。

主砲は火力が高すぎて、周囲の建物を破壊する恐れもあった。

逃げ遅れた市民を巻き込んで死なせると面倒なので車中で一度全員交換しておいた。

如月は単独で動けと命じた。

彼女は特に対空射撃は上手である。

故に、威力の高い10cm連装高角砲を持たせておいた。

村雨と春雨は多少状況に動揺して手振れを起こしている。

なので、少し小さめの8cm高角砲を任せておく。

こっちは反動も小さいし、使いやすい。

弥生と山風は、小春と行動する。

ただ、小春は少々手癖が悪く、撃ちまくっても当たらない。

妹と娘も、主砲はまだまだ七海から見れば甘い。

なのでこの際、多少の周囲の被害は目をつむる。

25mm単装機銃を渡した。弾幕で撃ち落とせと命じた。

浮遊要塞が溜め込んでいた艦装だ。間違はなく陸上でも通じる。

走り回って撃ち落とすだけであり、普段と内容は変わらない。

緊張しないでやれと、皆に落ち着くように再三言いつける。

「市民の避難は、他の方々にお任せしましょう。あたしたちは、兎に角片っ端から叩き落

とせばいいんです。役割は分担しますので、そちらも宜しくお願いします」
運転手を通じて、部隊長に伝令して、皆はそれぞれ……作戦を開始する。

七海は全体の把握と指示を担当する。

ついでに言えば、唯一空戦を生身でこなせる貴重な存在である。

浮遊要塞を引き連れ、飛翔する。

加速して、眼下で人間が空を飛んできると叫ぶ隊員を見下ろした。

どこぞの漫画みたいなもんだが、まあ気にしないでおこう。

取り敢えず、両手の掌を合わせる。武器を取り出す動作だ。

生憎と、七海こと浮遊棲姫は、口から取り出すなんて芸当はできない。

出来るのは、浮遊要塞と共通の艦装を並行して取り出して使用するぐらいか。

但し、人である以上は艦娘の装備だつて普通に使える。

機銃だろうが主砲だろうが何でもござれだ。

まあ、七海が知識のみで振り回すので……。

(えっ? 追尾しないんですかこれは!)

相当な数を見て面倒くさいと、先程の自分の考えを忘れて、バカみたいなものを持ち出した。

12cm30連装噴進砲。両手で持ち上げて、飛行しながら上空で弾幕を張った。

が、この装備……要はミサイルをぶちまける火力が高過ぎる装備で、てつきり追尾すると思っていたが、見た目こそド派手な音と煙をあげて射出するが、全然見当違いな方向にすつ飛んでいった。

半分は大空へと舞い上がって行ってしまふ。

言葉を失う七海。当たると思ってたんだが……。

「あれえ……?」

この装備、艦娘が艀装で使うとちゃんとある程度は追尾するのに、七海が使うとただ直進するだけ。

なぜ? と首を傾げる。然し、ド派手が幸いとなったのか、艦載機の一部が逃げた。いった。

見ただけのハリボテだったが、一応役立った。多分。

下では、走り回る春雨と村雨が、必死に上に向かって撃ちまくる。

陸での反応は海とは違う。同じ感覚でやっていると当たらない。

周囲のビルの外壁に巨大な弾痕を残してしまう。

「あ、当たらない……!!」

「なんで……!?! なんで何時もなら当たるのに!?!」

焦る村雨、混乱する春雨。

あらゆる状況が未知だった。

助けを求める市民の声、応援を感謝する人間の声、焦げる肉の生臭さ、硝煙の嗅いだことのない空気に、鈍る感覚。

初めての陸戦は、彼女たちが一番対応が出来ていなかった。

小春、山風、弥生は。

「弾がある限り、撃ちまくるッ!!」

「弾幕、弾幕しなきゃ!」

「どうせ当たらないから、下手な鉄砲も数撃てば当てられる……!」

三人揃って瓦礫の街を駆け回り、姉妹の分まで数にものを言わせて撃墜する。

そこに、装備が類似しているからと救助を終えた陸軍も加勢する。

「良いぞオ、艦娘さん!! リロードの間は任せろ! ぼさつとするんじゃねえ! 俺達も続くぞ! 化け物の飛行機なんぞに、人間が負けてたまるかよお!!」

階級が偉そうな男性が部下たちに命じる。

突撃銃と艤装の機銃が合わさって、凄まじい銃声を奏でながら皆で一斉射撃を開始。弾丸の嵐となった下方からの突き上げに、低空飛行で応戦する艦載機が主に落ちる。爆弾を落とされても、人数と弾数という分かりやすい壁によつて落ちる前に空中で爆発。

爆風を受けるが怯まない彼女たちと共に、軍人たちの折れそうになった心に火を灯した。

深海棲艦、元艦娘、人間による稀な共同戦線が出来ていた。

(…………ふうん？ 意外と、差別しないのね…………陸軍つて)

一人、屋根を伝って進む如月はその様子を眺めていた。

彼女は冷静に、一発を確実に当てていた。

使った弾がイコールで、撃墜した数だ。

淡々と、狙った相手を撃破して進む。

市民は助けない。一切無視して、戦いに集中する。

この地獄のなかでも、如月はいち早く適応している。

怖くなどない。心配などない。

同じ戦場に七海がいるのに何を恐れ、強ばる理由がある？

必要なのは冷静な判断と、冷酷な心。

市民を全て構わない冷たい心と、ぶれない意思が勝利の鍵。

だから、如月は余裕がある。慌てない、惑わされない。だから強い。

(救助は任せればいい。如月は落とすだけ。あんな爆撃、怖くなんてないもの)

慢心しない。油断なんて以ての外。七海の命令通りなら、死ぬことなどない。

右往左往する姉妹に、如月は珍しく怒鳴った。

「もう!! 村雨ちゃんと春雨ちゃんは少し落ち着いて!! 焦っても当たらないわ! もう少し互いをカバーしないとダメ!!」

余裕がないから、二人は余計に焦ってミスする。

意識しると、如月に叱られて、然しその程度で直せるほど二人の動揺は小さくない。

七海に通達。メイド姉妹が足を引っ張っている。

迎撃には不向きと進言。実際、反撃の銃撃を受けて瓦礫の陰に隠れている始末。

これでは、役に立たない。

「了解。作戦を変更します」

七海も応戦しながら進言を受けて、作戦を切り替える。

都市部での戦いは、まだ終わらない……。

番組が違います

順調に市街地での戦いを続けていく皆だが。

艦載機たちにある変化が現れる。

現状、最も脅威となる存在は誰だ？

豆鉄砲を繰り返し返す人間？ 無駄な攻撃を行う艦娘？

それは、どうでもいい。取るに足らない。

ならば、数の暴力で弾幕を張る集団？

奴等はまず手こずる。だから、後回し。

じゃあ、残りは？ この二人に、絞られた……。

如月は気付いた。

何か、狙われている。

自分に対しての集中砲火を感じる。

かなり速度を速めて駆け回っている彼女を、艦載機は動きを変えた。

(嘘……!!? パターン変えてる!!?)

今までは兎に角、片っ端から破壊して殺してを行っていた。

だが、今は明確に如月に狙いを絞って襲ってきている。

足場を破壊したり、瓦礫を落としてきたり。

そういう狡猾な方法に切り替えてきた。

人間たちを無視して、集中砲火。その標的にされている。

まさかとは思った。然し、敵の動きは統率されて、乱れぬ動きに変化している。

如月も、不利を悟った。此方の手数が足りない。物量で潰される。

「司令官、そっちに合流するわ!」

「ダメです! 来ないでください!!」

七海と打破を目論むも、七海は却下した。

何故かと言えば、七海は空戦しており、しかも苦戦している。

浮遊要塞諸とも、夥しい数の艦載機に包囲されて、機銃を浴びていた。

見上げると、抵抗こそしているが、停止する七海と浮遊要塞を中央に、全方位を周回するように回る艦載機が継続して攻撃している。

如月よりも七海のほうが過激に襲われている。

「司令官!! 待つてて、今行くから!!」

「ダメって言ったでしよ! 如月は自分の役目をしなさい!!」

機銃を受けて蜂の巣になりながら、救援に向かうと言えば怒る。

来るな、一緒に攻撃されてしまう。

物量は負けているんだから、少しでも多くを撃ち落とせ。

現状如月が頼りになる。後は個人じゃ遊撃出来ない。

メイド姉妹は仕方無く救助の支援を命じたし、三人は応援に向かう艦載機を皆で落としている。

増えやしないが、継続はされる。悪化しないうちに早く減らしてという意味で。

(……如月に助けさせてよ……!)

強がりと言っている。知っているとも。

七海は弱味を人には見せないし、外にも出さない。

こんなときにも、自分を犠牲にして役目を強いるのか。

合流すれば、自分を襲う艦載機も合流して悪化してしまう。

重要なこと。大切な役目。冷静な判断。

分かっているから、心ではそう思っても行動には移さない。

指示通り、自分を襲う艦載機を撃ち落とす。

助けに行きたい。護りたい。けど、敵が邪魔!!

「もう……鬱陶しいのよオ!!」

油断も慢心もしない。だが、怒りは感じる。

腹が立つ。こんなカトンボみたいな艦載機が、如月の行く手を阻む。

本当に、如月は本気で怒った。稀に見るほど、激怒した。

ぶんぶん五月蠅い。チヨロチヨロと目障りな!

深海棲艦がここまで鬱陶しいと思うのは初めてだった。

よく狙う。砲撃、当たる。爆発。また、反撃。無視する。

もういい。多少の被弾がどうした。機銃のシャワーで死ぬ程、如月は柔くない。

回避を下げて、効率を攻撃に回す。どうせ数で負けているならもつと手早く減らせば

いい。

「春雨ちゃん、武器貸して!」

使っていないなら貸せと無線を用いて怒鳴る。

両手で構えているから速度が遅い。

だったら二つ使えば、倍の速度で減らせるはずだ。

春雨は、怒る如月に怯えて、素早く外して投げて寄越した。

受け取り、直ぐに遊撃を続ける。

自分を追いかけるカトンボを目に入るモノから凄まじい速度で叩き落とす。

その間も移動し、高所を陣取り迎撃もしていく。

「如月、何を言ってるんですか!? 貴方は……!」

「分かってるわ! 全部殺して、直ぐに行くから!! もう少し堪えて司令官!」

七海が気づいた。如月が捨て身に走った。

此方を助けたいが為に、防御を捨てている。

「止しなさい! 自分を守ることを優先して! あたしはまだ大丈夫ですから!」

「そう言つて、過去大丈夫だった事があつた!? 無いわよね!? 良いから、如月にも戦わ

せて!」

強がりと言うなど、逆に怒られる。

確かに今はキツイが、死ぬほどじゃない。

七海の頑丈さは伊達じゃないと自分では思うが、見た目が悪い。

けろつとしていたが頭から足から、学校の制服に至るまで血塗れであり、掠り傷を大

量に拵えているもので、小春も気付いて血相を変えた。

「お、お嬢様がピンチ!? 弥生、山風! 助けに行く! 続いて!!」

いけない。あの七海優先二号が作戦を無視し始めている。

娘と妹もバタバタ走って激戦区に向かってきている。

作戦が崩壊し始めた瞬間であった。

「コラー!! 作戦を無視するんじゃないですよ! 役割分担! 役割分担しなさい!!」

七海が怒鳴るも、陸軍たちも七海が血塗れで流石に焦り出した。

七海がピンチだと全員血相を変えて助けに行きたがる。当たり前であった。

なにせ普通の人間だと思われている七海は、血達磨になれば普通は危険と判断する。

案外大丈夫なのだが、軍人たちは。

「おおい!? 提督さんが囲まれているぞ!! 誰か、無事な戦車探せ! 気を引くんだ!

ダメならどっかに機関砲あったらだろ!! あれを持ってこい!! どうせ効かないんだ、

多少火力あったほうが効果がある! ありったけの弾薬をお見舞いしてやれ!!」

七海から引き剥がすために、陽動に戦車を使うとか言い出した。

想定外の流れに別の意味で慌て出す七海。

(待つてください!! 戦車って、まさか撃つんですか!? あたし動けないのに!?)

爆風の餌食になるので止めてと連絡するが、陸軍も聞いてない。

「なに、最悪うまくやるさ!! こう見えて、陸軍つてのも練度は高いんだぜ提督さん!

任せてみる！」

撃たないから、囷に使うなりするというのが本当だろうか？

どう見ても救うためにタンクを持ち出す気満々だが……。

歩兵も加わり、撃ちまくる。流れ弾が七海まで飛んできている。

戦場だからか、皆さん興奮していて細かいことを気にしなくなっている。

七海の周辺にいる艦載機の邪魔をさせないと追ってきて呆気なく合流。

折角分断したのに、塊になってしまう。

しかも増援も到着した。相手の。

一層激しくなる銃弾と砲弾の往来。

七海はけろっとして浮遊要塞が取り出したシールドで前面をカバーして防いでいる。

正直、囷にされている気がする。

「司令官から離れなさいよオツ!!」

キレているのか、吐き捨てる如月が自分を追い回していた艦載機を粗方撃破して、何と。

その陸軍が持ち出した連装の機関砲を脇に抱えて、ばら蒔いていた。

弾を切らして、武器を投げ捨ててそつちに切り換えていたようだ。

後ろでは、艦娘ならばやはり人間では抱えて放てないガトリングも扱えると援護射撃しながら感動している。

(セーラー服と機関砲!?)

被弾して見た目満身創痍、実際はあんまり効いてない如月を見てどこぞのドラマみたいなタイトルを思い浮かべる七海。

まあ、ぶち当たる割には派手な音で弾かれているので効果はあるまいが。

「ご主人様、大丈夫ですかー!？」

「あんだけ群がっつれば当たるでしょ!!」

大体の救助を完了した村雨が適当に撃ちまくり、群がるので今度は当てている。

春雨は春雨で、一緒にいる隊員と何やら組み立てている。

……それは。

「は、春雨止めてください!! そっちで死んじゃう!! あたしそれで死んじゃいます!!」

可愛い顔して春雨さん、使い捨てのロケットランチャーを必死に組み立てていた。

一掃する気のようなだが……それは、危険なんじゃ？

春雨は周囲に、七海は特殊な訓練を桜庭の下で受けているので宙に浮けるし、あれだけ撃たれているが生きている。

つまり七海は不死身なのだという意味のわからない理屈で周囲を無理矢理納得させていた。

事実、嘘は言っていない。訓練は受けてる。撃たれても深海棲艦だからへっちゃら。けど違う。ロケットランチャーはいけない。死んじゃう。

実際に七海が浮いている、袋叩きで生きているのを見ているので七海だったら大丈夫と謎の説得力を獲得していた。

「大丈夫ですよ！ ご主人様なら生き残れます!! ちよつと爆発するだけです!!
今助けますね!!」

いや、普通に考えても無事じゃないだろうが、艦載機の銃撃の雨よりはマシか。

直撃するわけでもないし。見た目は怖すぎるが。

「助けるって言いながら何故構えるんですツ!? 春雨、あたしに恨みでもあるんですか!?」

肩に担いで、スコープを覗く。

メイド服の美少女がロケットランチャーを構える戦場。

最早、意味がわからない。理解できずに七海も混乱する。

「ありません! あるのは感謝と愛情だけです!」

「じゃあ先ずはそれを下げましょう!! あたしはだから大丈夫……」

と、吹っ飛ばすのは止めろと言うのに。

台詞の途中で、手持ち火器最大でやるほうが、ガトリングがあまり効果がないのが分かった皆様は、此方も応援が到着して、七海の周りにいる連中が残りの艦載機の大半だと部隊長が教えてくれた。

もう少しだけ、頑張ってくれと。皆で吹っ飛ばすから。

と、言われた。無慈悲に。春雨の出任せが浸透しちゃったらしい。

(Noooooooooo!!? ロケットランチャーって、あたしはどつかのゲームのゾンビと同じ扱いですか!? あんまりなんですけど!?)

ゲームでお馴染み、最強の使い捨て武器、ロケットランチャー。

それをまさか、至近距離で同じ部隊の仲間に救出の為に撃たれる。

……意味が分からない。

「ママ、今助けるよ!」

「七海姉、待つてて……!」

「お嬢様は私達が守る!!」

「ガトリング効いてないなら、こつちを使うまでよ!」

おいそこ、機銃の弾薬終わったからって、そつちはグレネードランチャー構えるな。

銃弾ダメなら爆弾って、考えが安直すぎるだろう。

結論から言おうか。

七海を救うべく、皆様でありつただけの火力をぶちこんで吹っ飛ばした。

浮遊要塞が隙を見て七海を捕食して保護し、何とかやり過ごした。

その後、爆風で蓄積したダメージのせいで動きの鈍った艦載機たちを、弾薬を補充した皆で難なく撃破。

ボロボロになった七海は、浮遊要塞が何でか飲み込んでいた高速修復材を頭から浴びて全快。

同様に皆も全快して、啞然とする陸軍たちに敬礼して、迎撃作戦は終了。皆で全ての艦載機を撃破して街を守った。

まあ、コラテラルダメージは出てるが……。

その後、無事だった車両で鎮守府まで送迎をしてくれる手筈なのでお願いして。「流石は提督さん。自らを差し出す覚悟、お見逸れしました」

とお褒め頂くが、なんとも言えない微妙な気分を味わうのだった……。

拔錨、艦娘たちも

彼女たちが街から鎮守府に向かう頃。

ハゲが操縦するヘリコプター、三隻で向かった五十鈴たちは、合流地点に到着した。島村は、偵察と思われる艦隊は撃破したと五十鈴に報告する。

だが、控えにはまだ本隊は無傷で存在しており、相変わらず数の不利は覆らない。挙げ句にはやはり拠点を潰さない限りは有象無象が次々増援に来ると思われる。

「拠点の攻略、あんたは出来ないの!?!」

五十鈴は聞いた。武蔵が既に艦隊に追い付いてバトンタッチして、第一艦隊たちは一時撤退して仮の拠点を近くの小島に設置して、明石や速吸が応急処置と補給をしているらしいが。

そのまま物量で潰される前に先手は打てないか。その可能性は、否だった。

「無理だな……。相手は我らが慣れている雑魚とはいえ、質よりも量で攻めてきている。

渋谷さんの助力もまだだ。予定よりも、水上打撃力も低い。元帥殿が到着する時刻までは、前線維持と作戦は決まっている。勝手に進めはしないし、第一この戦力では此方がやられる可能性が極めて高い。物量作戦を侮るな、五十鈴。貴様とて同時に二桁の潜水艦は相手にできまい？」

「……成る程」

冷静な判断だ。拠点を破壊するには破壊するだけの戦力がある。

流石の最終改装の武蔵でも、遠距離で巣穴をつついて逆襲されたら対応できない。

持久戦。そして、切り札による一撃必殺。これが、作戦の概要。

まさに護りを主軸とする島村の戦い方だった。

防衛に徹する皆は、交代制で艦隊を出す。

不意打ちによる国土襲撃も、自分のところの対応で遅れた地元の鎮守府が漸く余裕ができて対応。

先ほど、七海の街を空爆していた艦隊を倒したと報告が入ったらしい。

五十鈴には連絡が来ないが、恐らくは無事だろう。七海が空爆で死ぬわけがない。

と、慢心だろうか？ いや、違う。

(これは信頼と思いたいわ。あの娘は絶対に来てくれる。下手すると、約束以上の事をしながら……)

七海はここに来るだろう。一段落した決戦は、然し一時間後には再び始まった。今度は主力艦隊だろうか。戦艦やら空母やらが多数いる重量編成が複数進んできている。

小島に着陸したヘリコプターと、全員揃った島村艦隊による激戦が幕をあげた……。

此方は、鎮守府に向かう七海達。

スピードをあげて進んでいく彼女たちは、漸く姫園鎮守府に到着。

直ぐ様札を言ってから、飛び出す皆。憲兵もこの非常時にはなにも言わずに通した。

話は桜庭から聞いている。顔を出したら揉めずに通せと。全員通して工廠へ。

「お待ちしてました!! 皆さん、早く艀装を装備してください……って、渋谷さんぼろぼろじゃないですか!?! 皆さんも!?! 何があつたんです!?!」

明石が驚いて、煤汚れた皆を見て聞くも、答える暇などない。

とくに七海は制服がそこらじゅう破けて大変危ない格好だった。

「七海ちゃん!? もう、着替える時間はあるでしょ!? こっちにきて!」

「えっ、あたしは別に着替えとかいらない……」

「非常時でも女子高生なら恥じらいは必要なの!!」

待っていた由良が七海を回収して、手早くお着替えさせておく。

村雨の事を言えないような格好はダメと怒る。そんな場合でもないのに。

工廠の隅つこで、妖精たちを追い払ってさっさと着替えさせた。

「……何ですかその目は?」

「……似合ってるね」

如月たち睦月型の制服を長袖の状態を着させた。

不貞腐れる七海が睨んで見上げてきた。

由良は思った。似合う。可愛い。高校生……?」

「由良なんか嫌いです!」

「ごめんなさい!」

意図を分かったのか七海に涙目で嫌いって言われた。ちよつと凝視してただけで。

そう言えば体型気にしていたんだった。

今は人間に近いので元のドラム缶に近い体型なので色々悲しい。

「私も少し着替えてくる。流石に……恥ずかしい」

「如月は良いけど……え？　ダメ？　はーい」

小春は用意する前に自前の改造和風メイド服を自室に調達に戻り。

如月は気にしないと云うが由良に叱られて手早くお着替え。

その他皆様もお着替えに少々お時間を頂いていた。

その間に、浮遊要塞が次々七海の近くに寄つてきた。

言われた通り、たつぷりと資材を蓄えているとジエスチャーで報告。

ついでに要らないであろう武器も予備で常備しておいたと。

「ありがとう。久々の戦場ですよ。頑張りましょうね」

「にゃー!!」

七海の言葉にヤル気満々で、浮遊要塞も浮かんでいる。

遅れたお詫びだ。浮遊要塞も丸ごと連れていく。

鎮守府の警備には皆がいるので良いだろう。コイツらは最近海に出ていない。

戦える深海棲艦は全員連れていく権利がある。浮遊要塞も然り。

なので言うことを聞いてもらった。

「じゃ、由良も準備しておくね」

「待ちなさい」

然り気無く、由良まで一緒に出ようとしていたのではないか。

彼女には命令は出ていない。勝手な出撃は重罪。ダメ、絶対と七海は言うのに。

「聞こえませんか。由良はなんにも聞こえませんが。ずっと前に近海は元帥さんが深海棲艦絶滅させているから、なんにもいない死の海です。だから、鎮守府で腐るぐらいなら、由良も戦力になります。七海ちゃんの言うことに従います」

「じゃあお留守番なさい」

由良はどうせ平和な近海の警備するぐらいなら、戦力が少しでも欲しい決戦の舞台に行くとか言い出した。

七海は止めろと言うのに。

「あーあー聞こえませんかー」

「由良ああああああ!!」

耳を塞いで聞かない。

確かに理屈的な判断ならば由良が正しい。然し、軍は上の命令は絶対だ。

命令違反は最悪解体にもなり得る。危険なのでやるべきではない。

なのに……騒ぎに気付いた艦娘たちが集まってきていた。

「あら、七海じゃない。大騒ぎになってるけど、出撃?」

飛鷹だった。ちゃっかり、艀装を装備している。

まさかとは、思った。恐々何しに来たのか聞いた。

「待機任務も飽きたから一緒にいくわ。艦娘は戦ってなんぼよ」

「フアツ!?!」

あの真面目な彼女まで一緒に行くとか言い出している!?

更には。

「当然、衣笠さんもお供するわよ!」

「ふふふ……来たわ。出撃の時が……提督とまた一緒に艦隊が!! 幸運だわ! 最高の幸運が遂に私達にも……うわはあつ!!」

ガツポーズの衣笠や控えて微笑む古鷹、羽黒。

妹のキャラ崩壊に心配そうに見ている姉の前で奇声をあげてる山城。

要するに、七海の味方と言っていた皆様であった。

「七海ちゃん、元帥さんに通達お願いね? 出撃させろって。じゃないと、クーデター起こすから」

「……何ですか……」

脅された。笑顔の由良に。

七海が勝てないことを知ってて。

桜庭に、七海の援護を許すように言えと。

じゃないと、不満が爆発して勝手に出ていくと七海に言うのだ。

五十鈴が聞いたら全員ツツコミを受けるだろうが、生憎と平和と言う名前の窮屈な時間を強いられた皆はフラストレーションが溜まっている。

戦いのない世界は自分の行動で手にいれないと不満しかない。

そう、学んだ結果だと七海に言つて。

逃げようとした七海を、素早く由良が脇の下に腕を突つ込み抱き締めて捕獲。

「由良たちのお願ひ……聞いてくれるよね？」

「うう……五十鈴、由良がいじめてきますよお……」

渋々、虚空の五十鈴に助けを求めて項垂れる七海は無線で再び呼び出す。

コール一回で応答あり。

「渋谷さん!? 迎撃お疲れ様! 鎮守府に着いたと思つていいのね!? で、何か陸の連中が何だか私を化け物みたいに言つてるんだけど、何言つたの!? いい加減な事言つたのなら後で怒るからね!? で、今度は何!?!」

一方的に捲し立てる彼女に、無事に到着して、準備している。

だが、一部が七海の援護を許せと脅してきた。

現在、由良に捕まつてお願ひされているので許してと。

と言うか、解放してと懇願する。

「由良……!! 渋谷さんに何してるの!! それは許すから早く離してあげなさい!! 渋谷さんはぬいぐるみじゃないのよ!」

怒鳴る桜庭は、然し援護には文句は言わずに許可を出した。

あつさり出したことに驚きつつも、由良は七海を離さない。

取り敢えずお許しが出たので、これで問題はない。

「じゃあ七海ちゃんは由良たちが美味しく頂きますね元帥さん。許可ありがとうございます
ました」

「ちよ、美味しくってなに?! 由良……!」

物騒な単語に焦る桜庭の声を由良は横から無線を切った。

意味はわからないが静かに戦慄して真っ青になって見上げる七海に。

……由良さん、七海のカチなピンチを間近で受けたせいかな、キアラ崩壊をまたも起こしている。

妹という獲物を狙う危ない目付きのお姉ちゃんがそこにはいた。

「……七海ちゃんは、いつも一人で突っ込んでいつて、皆に心配をかけるよね? だから、今回ばかりは由良たちが……しっかりと、面倒見てあげる」

ヤバイ覚醒をしていた。

姉としての心配が暴走して七海を手元に置いておくとかいう結論に至っている。

真つ青を通り越して真つ白になる七海。人間のままで。

「き、如月助けて!! 由良に変なことされそうです!! 如月!!」

取り敢えず身の危険を感じて、嫁にヘルプ。

嫁はすかさず由良に向かって陰りのある笑顔で威嚇した。

「由良さん……? 司令官、怖がっているんですが? やめてもらっても良いですか?」

「大丈夫、なにもしないから。ただ、一緒に抜錨するだけ」

とはいうが、この肉食の目付きをした由良が言つて何が納得できるのか。

見れば山城も久々の実戦で恍惚とした表情で笑っている。怖い。

飛鷹も何やら珍しく血に飢えているような雰囲気になっている。怖い。

余程戦えない時間が不満だったのか、大なり小なり皆さん好戦的だった。

羽黒や古鷹ですら、妙に気張っている。たぎっているのだろう。

にらみ合いをする両者。飛び交う火花。助けにはならなかった。

「こ、小春ううううう!! 春雨ええええ!! 村雨ええええ!! 助けてえええ!!」

由良が怖いお姉さんになってるんですううう!!」

絶叫し、メイドたちにすら助けを求める七海。必死だった。

雄叫びを聞きつけ、颯爽とお着替えを済ませて再登場の小春。

「お嬢様に狼藉を働くなど!! 由良、万死に値するッ!!」

戻ってきて早々、由良を見つけて突撃してくるメイド。

由良たちとこのあと、時間が無いのにまた数分揉めるのだが……それは、置いておくとする。

兎に角、予定以外の艦娘も引き連れて、皆は……決戦へと赴いていった。

ハゲの言葉

多少のゴタゴタこそあったが、無事に抜錨した七海率いる艦隊。

正直に言おう。

(……なにこれ?)

陣形が訳の分からないことになっている。

中央に七海が困惑しながら乗っかる浮遊要塞。

その隣には円形を描く浮遊要塞。

さらにその周りにはメイド三名、嫁と娘と妹。

更に外側には扶桑、山城、飛鷹、衣笠、由良、古鷹、羽黒。

という七海絶対逃がさないウーマンによる過保護陣形の出来上がり。

困惑している七海は漸く五十鈴に連絡。

五十鈴は戦闘中なのか、焦るように出た。

「七海!? 無事だったのね!」

「無事じゃないです……」

という泣き声で言われて何事かと焦る五十鈴だが、説明を受けると……。

「由良、聞こえてるでしょ? あんた、七海に近づくの禁止。泣かせるような奴は鎮守府に帰りなさい」

「嫌だよ。五十鈴に言われる筋合いはないし。七海ちゃんは由良たちが手厚く保護しながら行くから良いの」

無線を聞いているであろう由良に、超低い、超冷えきった声で脅す五十鈴。

戦いながら完全に由良に対して激怒していた。由良は涼しい顔で言い返す。

「間違った甘やかしかたをするなアツ!! そりゃ単なる束縛でしょうが!!」

過保護と束縛を履き違えてた由良に怒鳴り、五十鈴が七海の解放を要求。

お前ら勝手に大体何で出撃してるんだボケと怒るが、正式な許しは得ていると由良は笑う。

「脅されました……」

「七海を脅しておいてその言い種は許せないわ! あんた顔見せたらブツ飛ばしてやる

!! 覚えておきなさいよ!!」

七海がシクシク泣いているので五十鈴お姉ちゃん、マジギレした。

由良の暴走に、決戦そっちのけで姉妹に対する怒りのボルテージが上昇。

由良であろうが、無意味に七海を悲しませる奴は絶対許さない五十鈴。

由良は脅してなどない、お願いと言っただけと白々しい言い分で流すが……。

「由良、お前は今後お嬢様に対する第一級特定危険人物として排除する。第二級特定淫乱メイドよりもその処遇は重たいと思つて」

「おいそこ、何で村雨を引き合いに出してるの？ 村雨は爪先から毛先まで健全ですけど？」

小春が、由良を七海に対する束縛行為により危険人物と断定したり。

「司令官に暴力を振るつて良いのは事実を言われて怒る村雨ちゃんだけよ。由良さんは、心の暴力を振るうから、今後は如月たちが魔の手から守るわ」

「如月ちゃん、ちよつと待つて。事実じゃないから。言い掛かりだから」

如月までも、今の由良は危険と言つて七海を守ろうとしている。

挙げ句には。

「ママが凄く怖がつてる……。今の由良は村雨と一緒にママに変なことしようとしてるんだ！」

「山風、村雨が提督にされてるのよ？ 真逆だからね現実。聞いてる？」

山風までも、由良は危ないと言ひ出す始末。

更にこう、あるメイドは証言する。

「あの目付き……ご主人様のお部屋にあつた、ええと……どーじんし？　つていうのに出た姉さんと同じでした。あれは、ケダモノの視線です」

「春雨、いつの間に村雨本を読んだの!?　健全なやつだよね!?　エッチなのじゃないよね!?!」

従順な春雨ですら言うのだ。

もう間違はなく由良は七海の事を狙っている狩人だ。

「一応そういうシーンのない健全ですけど姉さんがシヨタ……?　という主人公を襲っている本でした。姉さん最低です」

「違うのおおお!!　あれはフィクション!　フィクションだから!!　村雨は無実だつて知ってるでしょ姉妹なんだから!」

「でも全国の村雨という艦娘が……わたしには、如何わしい艦娘にしか思えないの。だって、本の後書きに、ノンフィクションだって書いてあつた。もう、わたしも姉さんがどういう人か……分かんなくなつてきちゃつた……」

「Nooooooooooooo!!　おのれオータムクラウドオツ!!」

まさか身内にまで困惑させる内容を描くとは!

絶叫する村雨は置いておくとして。弥生は黙つて七海を慰めてるし。

五十鈴も隅っこで苦惱する村雨を無視して、皆に聞いた。他の艦娘はどうしたと。

「川内は夜勤で眠たいそうで、寝ています。鈴谷とイムヤ、瑞鳳や祥鳳は空爆された街の方の救助と支援に向かっていて、他の駆逐艦は警備と待機任務。ですんで守りは大丈夫ですよ」

手薄にはなっていないと教えて、五十鈴は分かったと言ってから、座標を教える。飯の拠点らしき小島らしい。五十鈴が事情を打ち明けているので、心配ないと教えてくれた。

深海棲艦と知っても尚、やはり受け入れてくれた。

信じてよかったと思う七海にここで、島村に切り替わった。

「おおー！ 渋谷さん、無事だったか!!」

「ご心配おかけしました。遅れてしまい、申し訳ないです。事情は、聞いていると思いますが」

安堵するように出た島村に今まで陸軍と共同して艦載機の空爆を迎撃していたと伝える。

「なんと!!? 不仲という陸軍と!!? 相変わらず……梓に囚われない柔軟で臨機応変な対応をするのだな……。兎に角、迎撃を感謝する。あの街には、私も思い出があるのだ。」

焦土にならず済んで、何よりだ……」

何でも何度も顔を出している郷土料理の老舗があるらしい。

島村は気に入っている飲食店が吹っ飛ばずに済んで良かったと安堵していた。

まあそれ以上に街が消えずに残っている事にほっとしている。

七海のやり方を素晴らしいと言いつつ、島村は言った。

「此度は、私たちの為に……人間を辞めてまで救援に来てくれたことに、無限の感謝を。ありがとう、渋谷さん。私は、貴女と戦える瞬間を、誇りに、光栄に思う。良き戦友を持てた事を」

「止してください。あたしは、一度助けられたじゃないですか。あの時、真っ先に来てくれた一人だったでしょう？」それは大本營で暗殺されかけたとき。箝口令の敷かれたあの話だ。

人間に対する不信感を抱くなか、雄叫びをあげ助けに来た漢が、彼だった。

憲兵相手にも怯まず白兵戦で対峙してくれたのは、誰でない島村。

人間同士の争いにも、迷わず七海を選んでくれた豪傑程ではない。

七海はこれでも感謝しているのだ。数名の人間たちは、少なくとも絶望しないでいい。

深海棲艦になつてでも、助ける理由も、加勢する理屈も、助力する感情もある。

七海を救ってくれた大人。だから信じる。だから自分を賭ける。だから、この道を選べた。

「……私は、貴女のような強靱な信念を持つ人間ではない。自分が戦える力を失ったとき、果たして同じ立場で……同じことを選べるだろうか？」

全てを一度は失いながら、もう一度立ち上がった。

絶望することなく、諦めることなく、代償を支払いながら……それでも。

これぞ、強者。

なんと憧れる。初めて、島村は思った。

七海のこの、揺るがない信念。まさに、島村が目指す動かざること山の如し。

その体現であった。なんという強固な志。一片の迷いもない精神。

高校生という幼き齡で、この境地に至れるとは、最早生まれつきの心の在り方か。

羨望を抱く。素直にそう思う。強い人。本当に、島村は誇らしい。

そんな人に、救われたと言ってもらえるとは。

少しは強さの秘訣を、自分も持てただろうか。

「選べますよ。いえ、絶対に同じことをすると思いません」

七海は島村に向かって即答する。

周囲の意外そうな顔を一瞥して、柔く微笑む。

それは、島村も同じように意外に感じる。

「島村さんは、あたしの私見ですが、愛国者です。誰よりもこの国に尽くして、戦おうとする。だったら、記憶喪失になったぐらいで、その魂の在り方を果たして忘れてしまおうでしょうか？ あたしは、あたしです。記憶を失いながらもあたしのままでした。人間、早々己の在り方は変わらないんですよ。あたしがこんな風に今、戦いに赴くように。島村さんもまた、あらゆる手段を講じて立ち上がると思います。だって、そんな安いのじゃないでしょう？ 周囲の人に感謝しながら、必ず復活して、また戦うんじゃないですかね？ ほら、魂に刻んだ国防の誓いは、記憶を超越している感じしませんか？」

「……………」
軽く言っているが、暫し考える。

成る程、自分の誓いを鑑みるに……立ち上がるだろう。

記憶を失っても、諦めの悪い己のことだ。

骨身に染み付いた生活習慣と、自分の癖を見れば、真実に辿り着く。

自分の根源が、どこにあるのか。辿っていけば、分かる。

「……………そうか。私もまだ、未練があるからか」

「そう言うことです。あたしも、未練があつたんですよ」

そう。結局は、やり残した心残りがあるから。

まだ、国に己の感謝を伝えきれていない。

愛している文化に、恩返しは終わってない。

自分は、まだ愛している。愛されていたいと思う。

戦い続ける理由が、魂の中にある。

「愚問だったな。私は私だ。早々、我が魂は朽ちぬし、折れぬ」

「ええ。だから、あたしが強いなら、島村さんも十分強い人です」

七海が言うのと、どこか気力が湧いてくる。

改めて自覚した。足りない。自分はまだ、満足するほど生きてはいない。

まだ生きたいと、互いの魂は叫んでいる。だから、戦う。

「ありがとう渋谷さん。最高の賛辞と受け取っておこう」

尊敬さえしている人物に、自分も既に同じ高みにいると言われる。

嬉しいと言うよりは、益々誇らしい。自分は一つ、成長できた。

その実感が、分かるから。

七海は言った。遅れた分は、過剰に戦力を連れてきた。

艦娘と深海棲艦の混成艦隊に、島村は。

「援軍、心より感謝申し上げます」

と、皆に言ってから、不意に。

名前を聞いているからか、特定の二名を呼んだ。

「……山風。弥生。久しいな。私の声が、聞こえているだろうか？」

元々の、自分の部下。見捨てて、囷にした張本人。

びくりと未だに反応する二名は、強ばって困惑して七海を見た。

「大丈夫。あの人はもう、誰も沈めません」

七海は笑顔で言った。七海を信じるつもりだが、今更何を言うのか。

怖がっている二人に、島村は。

「貴様たちはさぞ、私を恨んでいるだろう。その恨みは正しいものだ。私は、言い逃れをする気はない。果たしたくば、何時でもその償いをする。あの頃の私の、甘ったれた采配が、貴様たちの将来を奪うかもしれない。許されることはない」

戸惑う弥生、山風。

何と島村は、二人は悪くないと言いだした。

以前の事は、全ては己の非として認めていた。

聞いている艦娘たちも、絶句した。あの島村が、自分の甘さと断じたのだ。

これが、七海の言っていた変化か。驚きを隠せない。

「これだけは、然し言わせてほしい。……済まなかった。貴様たちの命を消耗品にしようとした、傲慢な男はもういない。甘さを私は捨てたのだから。渋谷さんに誓おう。二

度と、艦娘の命を弄ばないと。貴様らは、生きるのだ。渋谷さんと共に。そして、戦ってくれ。貴様らの戦う理由のために。それが、この国の明日を作ると私は信じている」
こんなことを言える立場ではないと言いながら、謝罪した。

二人は、目を丸くした。謝られた。あのハゲに。

自分達に逆に生きろと言うあのハゲは、それだけ言えればいいと告げた。

どうすればいいか分からないまま、代わりに七海が答える。

「分かっています。二人は、あたしが守ります」

だから、信じる。こんな風に変わった島村を。

七海はなにも言わないでいいという。二人も気持ちの整理がつかない。

ただ、以前ほど怖くはないし……恨みも少し軽くなった。気がした。

取り敢えずは戦おう。今は、勝たなければ。

皆は向かう。ハゲたちが戦う、決戦の舞台に……。

海上決戦 前哨戦

遅ればせながら、合流するべく仮拠点の小島に向かう。

道中、多少雑魚に出会すが七海が動いた。

「決戦が控えているんです。なるべく、消耗は抑えてください」と、ふわふわ浮きながら皆に言った。

初めて見た者もいる、七海の浮遊。

啞然とする艦娘たちに、七海は掌を合わせて武器を取り出す。

浮遊要塞が、失われた艦装のムラマサを新しく製造してくれていたようだ。ある程度は共有する艦装から再びムラマサを持ち出す。

久々の得物をお初にお目にかかる。で、取り出すと……。

「……」

言葉を失った。なんぞこれ？

いや、形状は見れば分かる。分かるが……。

自分が持っているそれを皆にも見せる。

目が点になった一同。

「……何で、斧？」

思わず七海が呟く。

巨大な、人間ならばぶつ切りに出来そうな半月の刃を外側に向けている、刃が円を描く、真つ白な斧。

柄も不思議な感触がする。この手触り……もしかして、木製？

金属がメインの艤装において、まさかの深海の木製ときたか。

深海に樹木などないだろうし、何処から製造した？

「ついでに白黒のお面被って雄叫びあげれば死神の代行者とか出来そうだね……」

などと由良が感想を述べる。そんな感じで番組が違う。

重さも軽々と扱える。巨大な割には羽のような軽さ。

で、やっぱり鎖が柄の終わりについてる。今回は純白だ。

以前は漆黒の鎖や得物だったが、今は真逆の純白となった。

これも変化だろうが、取りあえず試し切り。少し待っててと言ってるから、垂直上昇。

「……前みたいなの衝撃波出るんですかね」

とか呟きつつ、左手で持ち上げ水平に振るう。すると……。

出た。真っ白い軌跡を残照が描いてそのまま発射。

前よりも太く、広く、分厚い衝撃波。

遠くにいた、戦艦たちに向かつて直進し、恐らくは電探には映らないであろう一撃は。

水平線に、連中を上下に艦装ごとぶった斬り、破壊した。

鮮血と爆発を撒き散らしてその一撃が走った線には誰も残らない。

一撃で皆殺し。消える反応。沈んでいく艦隊。

多少取り回しが悪くなったが、まさかの全体攻撃。

全員絶句した。こんな攻撃ありか。流石七海専用。

自慢するように浮遊要塞たちが鳴いているが、落ち着け。番組が違う。

決して七海は死神の世界には行かないし、虚ろな怪物ではない。

お面もないし、変身もしないし、瞬間移動も出来ない。浮けるけど。

「……これ、勝てる気がする」

と、呆然と如月がぼやく。一応ずっと準備していた決戦なのだ。

なんか、みんなして勝てる気がした。

で、そんな感じで斧を振り回す処刑者七海を連れて向かった小島。時間をかけてきたものの、消費弾薬はゼロ。全部七海が処刑した。

リーチの長い斧を肩に担いで、そのまま到着。

浜辺に上陸する。小島には既にヘリコプターが着陸しており、中でハゲが指示を出している。

で、周囲の艦娘たちはハゲの鎮守府の艦娘のようで、その到着に言葉を失う。

あの人、ハゲと武蔵が絶賛している元提督にして深海棲艦の主、七海。

滅茶苦茶強そうだった。滅茶苦茶恐ろしい見た目していた。

無表情で斧を担いで、浮遊要塞と姫レベルの深海棲艦を三名何故かメイドで連れてきた。

シミュレーションで見た姿とは違って、睦月型の制服を着ている少女。

戦々恐々と、艦娘たちは恐れを抱く。成る程、これは……武蔵が褒めるだけある。

なんという威圧感。鳥肌を感じてしまう、特に意識など向いてないのに恐怖が襲ってくる。

直に感じるこの強烈なプレッシャー。只者ではないと見る。

戦いの合間に、皆がそんな風を受け取っているのも知らずに。

「エロメイド。出番ですよ」

「誰が、エロメイドだッ!!」

指を鳴らして指示を出す七海に、村雨がキレていつも通り殴った。

派手な音があるが、傷ひとつ負わない。痛みだけ与える。

愕然とした。姫の深海棲艦にグーで思い切り豪快に殴られて無傷。

格の違いを見せられた気がした。

浮遊要塞が口から出しているチューブで給油しているなか、ブツブツ文句を言う村雨たちがさっさと休憩中の連中の機装に燃料を補給していく。

艦娘たちは、その光景に如何に七海が強者か目の当たりにした。

嬉しそうにハゲと一緒に来て、おぞましい数の艦載機で援護してくれた深海棲艦と親しそうに話している。

普段、敵に回している奴等がどれ程恐ろしい存在であるかを援護で体験したわけだが。

七海がいます、共に戦った重巡や戦艦の姫も大人しいもんだ。

全員直ぐに寄っていったって輪になった。中心にいるのは七海で、笑顔で接している。

一緒に艦娘も到着した。予定以上に工面して味方を増やしてくれたらしい。

「戦艦か。今じゃ有難い。頼りにしてるからよ、お二人さん。あの渋谷提督の艦娘なん
だろ？ 俺達の命、預けるぜ」

今は提督じゃないが、便宜上提督と呼ばれる彼女の指導を受けた艦娘。

どういう存在か、戦いの合間に会話しに行った木曾は興味があった。

「やってやりますよ！ 提督との折角の共同戦線……負けるわけにはいかないし！」

「戦艦の火力だけは自慢だから……あ、装甲も武蔵さんには勝てないけど、そこそこ自慢
よ？ 速力も結構盛ってきたから役立つと思うわ」

と、山城と扶桑が言うので、彼女は笑った。

ネガティブが強い姉妹と以前聞いたが、この二人はポジティブで強気だ。

これならば、頼りになる。バシバシと背中を叩いて木曾は言った。

「良いねえ、その啖呵！ 気合い入ってるじゃねえか！ 気持ちで負けるってことは無
さそうだが、お前らの背中も任せな！ 俺の自慢の雷撃で決めてやつからよお！」

思っていた以上に、彼女たちは戦意高揚状態で、全体の士気を上げるには十分だった。
考えてみれば、この過剰な戦力を、七海は個人で所有するわけだ。

深海棲艦たちは、敵に回せば厄介なことこの上ないが、味方にするなら百人力。必ず来ると言っていた、その言葉に偽りはなかったと言うこと。

「上等よ！ 此方だつて死ぬ気はないから！ 全員沈める勢いでやるわ！」

「……山城、少し落ち着いて。久々だからつて、興奮しすぎよ？」

扶桑が宥めるが、妹はずつとこの調子。

ちよつと興奮しているぐらいが丁度良い。

現在、七海と島村が話し合っている。

七海が大量の資材と装備を持ち込んだおかげで、より長期戦も可能になった。

と言うか、高速修復材まで持参したので、大破して撤退を余儀無くされている艦娘も直ぐ様回復した。

全員、浮遊要塞のゲロシヤワーを浴びて悲鳴をあげているが全快した。

「そんなモノまで収納できるのかあの生物!？」

「予めお願いしておいて正解でしたね。ありつたけ持つてきたんで、全員回復して修理しましょう」

島村も、想像以上の物資の持ち込みに計算を改めた。無論、上方修正で。

嬉しい悲鳴があがる。これは、凄い。七海の到着で、膠着していた戦況が好転した。

明石もパーツと鋼材が足りないと嘆いていたが、ならば使えと次々吐き出す浮遊要

塞。

口を半開きにしている明石の前に、山積みになされる鋼材。

更には装備そのものは交換という方法で時短する。

で、浮遊要塞自体も戦力になるし、艦載機もたつぷり蓄えている。

「司令官様。ごめんなさい、結構消耗してしまっただわ……」

「相手の物量が多すぎるのよお」

「でも、これならまだわたくしたちは戦えますねー！」

リセ、パクチー、翔鶴の艦載機も補充して再び発艦。

本人たちも、まだ疲れてはいないと言うのもう少し頑張ってもらおう。

で、壊れた艦装の山をかき集めて、二匹程七海は隔離してお願いしておいた。

「ここに、高速建造材があります。そして、こっちはジャンク品がたくさんあります」

山になったそれと、最低限の建造材を残して、七海は説明しておく。

真つ二つの艦載機、折れた主砲に、爆発しない魚雷。曲がった機銃。

で？

「お得意のリサイクルをお願いします。高速建造材はあるだけ使って良いので」

現地生産開始。足りない武器ならリサイクル。浮遊要塞を侮ってはいけない。

生きた工場みたいなもので、こんな芸当まで出来る。

「にゃー!」

了解と、浮遊要塞たちと早速七海はリサイクルの作業を開始。

自分が戦場に出なくてもまだ大丈夫と島村に言われて、裏方に回っている。

それでも、二人目の司令塔。裏方に専念すると、回る回る。

凄まじい効率のよさで、全体の士気の向上も含めて段違いだった。

五十鈴が戻ってきて、由良を発見して軽く血祭りにしていたが、それはそれ。

リサイクルをしながら、深海棲艦たちの指示を出して、自分はひたすら小島の中を
いったり来たり。

艦娘たちは、島村の指示で艦隊に組み込まれて戦っている。

今回は特別に指示に従うと言って任せた。一度ぐらいは信じようと思ったようだ。

七海は補充して、生産して、修理して、治療して、励まして、指示出して、相談して。

五十鈴も休憩をかねて、リサイクルを手伝う。

「流石に、あいつは手腕は良いわ。見事なモノよ。艦娘の特性をよくわかっている」

自分の折れた主砲を口を開いた浮遊要塞に放り込んで、七海に五十鈴は言った。

数の不利を、七海が到着するまでよく持たせたと褒めている。

聞けば、七海よりも上手かもしれないと冗談のように言うが。

「いえ、間違いないですよ。あたしは、一度死んでいるので意味ないですし」

自分は死んだから、負けているのでダメであると言っていた。

五十鈴は微妙な顔をしているが、七海はそう客観的に見て思う。

彼の優秀な指揮に、高い質を組み合わせれば、それは即ち最高の艦隊になる。

七海は質をカバーするためのモノであり、戦いは彼に任せると言った。

時間も既に夕刻だ。夕日のなか、疲労を見せる皆は交代しながら仮眠すら取っていない。

数時間経過したが、断続的に相手は襲ってくる。だが、此方も物資はたくさんある。

一度島村の指示で、一部が離脱して物資を持って帰ってきた。

いわく、浮遊要塞という嬉しい誤算があるので有効活用していくと。

浮遊要塞も、適度に休憩しながら、七海がその分をカバーしていく。

武蔵も、長時間の戦いを終えて一度帰投した。

「渋谷さん。何かから何まで、本当にありがとう。私達は、これでまだ戦える」

艦娘たちは、決戦をしながらも誰一人傷ついていなかったし、諦めてもいなかった。

一度簡単に食事をするとき武蔵は、缶詰を浜辺の焚き火で湯煎しながら言った。

物量に対してローテーションで応戦する皆は、小島にハンモックを張って寝ていた。

島村も、休みを取ると武蔵と指揮を交代してこちらに来た。

「お疲れのところ済まないな、渋谷さん。此方は至つて順調だ。いや、油断はしないが

……寧ろ、当初の計画よりも好調とも言える」

「遅れたぶん取り戻しているだけですよ」

と、軽くまた作戦会議に戻る二人。

そこいらで焚き火をしながら食事をとり、夜の海に出撃していく皆。

夜は、駆逐艦の独壇場。皆の出番でもあった。

「か、陽炎!!」

「えっ……あなた、山風!! どうしてここに!?!」

娘と妹は、ずっと手伝いをしていたが戻ってきた旧友と久々の対面をしていた。

驚く山風と、駆け寄っていくぼろぼろの陽炎。

最も長く戦っていた陽炎は、直ぐに戻ると言っていた。

「不知火……」

「弥生、お久し振りです。元気そうで何よりですよ」

「……そつちも元気そうで良かった」

「元気ですよ。まだまだ戦えますから」

向こうでは、頭上からゲロシャワーを服を着たまま浴びた不知火が、弥生と話している。

確かに元気そうだった。

休憩を半時間取ってから、再び出るといふ皆。

相手は夜も艦載機を飛ばすが、此方も同じ事は既に来る。

夕刻から寝ていた三人が再度発艦をしている。早めに交代したから、十分戦えそう
だ。

「然し、連中の物量は底無しか……？ これほど削つてまだ断続的に続けるとは……」

「想定している範疇とはいえ、おぞましいモノですね。桜庭さんはいつ頃？」

呆れているのか感心しているのか、島村はなんか固形物のレーションみたいなモノを
食べていた。

因みに先ほど七海が貰ったものとは違って、美味しかった。

七海が食べながら問うと。

「深夜には到着する予定だ。向こうも順調と聞くが、予防線は張っておこう」

「同感です。非常時ともなれば、あたしが出ます」

「任された。渋谷さんの命は、私が預かろう」

「任せます」

最大の戦力である七海を非常時の切り札として、二人で膨大なパターンの作戦を練つ
ていく。

その頃。

「お嬢様……と、ハゲ。私達も少し暴れてくる。戦艦が出ているというから」
小春が、遊撃の艦隊で出ていくという。

何故か島村をハゲと呼んで、気にしないと無礼を言う彼女に言った。

「ハゲ、お前の所の陽炎とか言うのと、あの目付きの悪いのが一緒にいくつて言うから、連れていく。構わない?」

「許可する。我が艦隊の艦娘を任せるぞ、駆逐古姫」

「私は小春という名前がある。名称で呼ばないで」

面子は村雨、春雨、友人と共にもう一度戦うという陽炎、不知火と娘と妹。

お供に如月も一緒に出ていくと言っていた。

名前で呼べとハゲと言ったくせに、小春は怒る。

「そうか、失礼した。……託すぞ、小春とやら」

「お願いします、小春」

「お嬢様の仰せのままに。ハゲ、ついでにお前にも勝利を持ってくる」

「ああ。頼んだぞ!」

恭しい挨拶をして、彼女も出ていった。

夜の海に皆は出ていくのを見送りながら、二人は再び話し合う。

切り札が到着するまで、あと少し。

そして、
相手もまた……切り札を投入してくるのであった。

補足説明会 二回目

ここは、物語の舞台裏。ある鎮守府の執務室を改装している。

姫園鎮守府の艦娘たちが、今回も説明会を開催するために準備に追われている。慌ただしい鎮守府。出演者の衣装もマイクもカメラも大丈夫。

細かい事は……今回は裏方の五十鈴に任せればいい。

全員が忙しく働くなか、本番は徐々に近づいていた。

今回は補足説明会の二回目。本編では語れない事をメタ的に説明する。

いつもと違い、兎に角メタ発言が多発するのでご注意ください。

あとは、何やら謎のぬいぐるみが出てきたりする。

こいつはイ級ぬいぐるみ、作者の代用品で登場するのであしからず。

そんな感じでお送りする、補足説明会。

それでは、スタート。

場所は姫園鎮守府執務室。

外の光景は夜、内装は今回は……待て。なぜお風呂になっている!?

タイル張りの床と天井、回る換気扇、湯気をあげる浴場。壁には……なんか描いてある。

火のついた大きな蚊取り線香……? いや、何故? 兎に角、そんな中。

頭にタオルを載つけた、微妙に湯気でシルエツトしか見えない主人公たちの登場である。

「はい、とうとうトータルで100を突破した長編となりました事をまずは喜びましょう。君と結ばれる、物語の作り方。主人公、渋谷七海です。今回は作者の趣味で銭湯に改装した執務室よりお送りします。因みに裸は見えません。湯気で全部隠れてるので

あしからず」

「もつと強く、美しく。司令官のお嫁さん、メインヒロインの一人の駆逐艦如月よ。今回は宜しくお願いします」

「あたしに、構わないで……。ママの娘、駆逐艦山風です。なんか今回は無理矢理呼ばれた……。宜しく」

「別に、怒ってないです……。妹の弥生、です。宜しく願い……。します」

今回はこの面子でお送りする。

尚、全員全裸だが、白いヴェールで見えないので皆様ご想像にお任せします。

見えているのは、優雅に風呂の中を回遊するイ級ぬいぐるみ、作者のみで……。

「如月、撃ちなさい」

「はーい」

パアンツ!!

「ぎゃああああ!?!」

天井から突然振ってきた連装主砲が、泳いでいるイ級をぶち抜いた。

プカプカ浮かんでいる死骸が一匹。まあ、無視していく。

「なんでお風呂にしたんですか。ぶつ殺しますよエロ作者」

「……一度で良いから、書きたかった……」

浮かぶ死骸の言い訳を聞いて皆様軽く怒った。

嫁と娘と妹の砲弾の抗議を受けながらお送りしよう。

「さて。今回は補足説明二回目です。今回の補足は、島村さんの鎮守府、檜山鎮守府の事を説明したいと思います」

「語ることもなくてないよ……。どうせ、皆だつて分かつてるでしょ？ ただの外道だよ

あのハゲ」

と、作者を撃ちながら吐き捨てる山風。

「まあまあ。山風の作中の扱いは、理由があるんですよ。但し、作者の思想ですけど」
「あんたが！ あたしを！ こんな風に！ 不幸にしたんだ!! 死んじやえ!!」

二刀流で連射。イ級は死なないゆえに全部直撃。絶叫している。

「とまあ、本作で不幸な目に遭つたうちの娘と妹も交えて語りましょう。では、始めます」

一通り不満をぶちまけて、タイルの床に転がるぬいぐるみ。

口から生臭い綿をぶちまけて痙攣していた。

皆は湯船に浸かりながら説明を開始する。

「まずは、島村さんが登場した理由ですね。本来はあの人は、ただの悪役でした」

「最初は、報告会が初登場だったかしら。名前は結構序盤から出ていたけど。あのときはまだ、典型的な悪役にしようと思っていたのよ」

如月がそんなことを言いながら、湯船にオモチャの家鴨を浮かべて言った。

「ええ。あの人は本作におけるヴィランとして、作者は登場させたつもりだったんです。本当は」

「だから、正直な話をするといメージはよくあるブラックな鎮守府その物だったの」

「そうなのです。ですがまあ、皆様知っての通り……現在では、あの愛国者の国防の豪傑みたいな扱いになってますね。正反対になってます」

「何でそうなったの？ あたし、納得できないんだけど」

「弥生も……何だか腑に落ちない」

二人は不満そうに七海を見て聞いた。

「ああ、簡単な話です。……あたしのせいです」

「え？ どういうこと？」

「まあ、あたしを中心に進めていくと、どんどん思考がヤンデレ特有の危険な行動になる

過程で、あたしのほうが悪役みたいな事を繰り返していくようになります。で、主人公がそんななのに同じような相手を出すのもキャラが被るので、途中から逆転して、あたしと真逆になるように描いているんですよ。これでも」

「言われてみれば……作中は、人間には人気あるよねあいつ……」

山風が思い出すように呟いた。

「あたしのほうが余程悪党ですから。利己的排他的と何度も強調していますし、実際作中の多くの人間にも嫌われています。ですので、島村さんは真逆の存在として、修正を受けているんです。ですんで、全部真逆でしょう?」

「……そっか。七海姉は、自分のところの艦娘と深海棲艦の味方。あの人は……人間の、国の味方」

弥生も納得した。言われてみればそうだった。

「ですので、島村さんの鎮守府は簡単に言うくと、昔はブラックな鎮守府そのままだったんです。但し、それは根本に国防の為に揺るがない信念があった。それも、事実です」

「艦娘は兵器と言っているのはどうして司令官?」

「根本が明らかですからね。島村さんの言う人間の定義は、国の中で育まれた命のこと。艦娘は正確に言えば違います。一度言ってますが、島村さんの前に艦娘はいるんです。後ろにいる人々とは扱いが全然異なるわけですよ」

「成る程……。じゃあ最初は向こうじゃ消耗品だったんだ？」

如月が二人に問うと、首肯する。

「向こうは……。凄い昔は、厳しかった。死んでも任務は成功させる。失敗は許されない。お前たちは所詮は道具だって、威圧的な態度で命令してた……」

「うん……。任務のためなら死んでも良いって何度も言ってた。成功のために、使えない艦娘を犠牲にする事も多々あった。無理矢理出撃もしたし、死にかけて経験も一度や二度じゃない。でも、弥生が言ったと思う。あの人は、解体は早々なかったよ。ちゃんと基準があつたし、基準に満たすまで説教したり独房に入れたり、異動させたりして反省もさせてた。それでも改善しなかったり、一度でも取り返しのつかない事をした場合は無理だったけど……。それに、自由も……。結果さえ出せばある程度は認めていたし。やることさえやれば、それなりに暮らしていたと思う。だけど、とんでもないストイックな鎮守府だったから、性格の不向きはあつたかな……。セクハラとか、一度もないし本人も規律に厳しいから、文字通りのブラックな鎮守府という感じ。それに個性は、絶対認めなかつたのが一番辛かった」

と、二人は顔色が悪くなりながらも教えてくれた。

あくまで兵器、道具という認識で扱っていたんだろう。

「……確かに司令官とは対極ね。厳しいストイックな鎮守府と、司令官が暴走するバタ

バタ鎮守府。シリアスとコメディ並みに違うわ」

「で、戦う理由も扱いも全部逆。そんなんでよく対立しないもんですよね。ただ、わかっ
てほしいのは……島村さんは、悪人じゃないです。悪人は、あたしです。あの人は、作
者の想像する人間の味方を具現化したものになってますので。正義か悪かは、立場によ
り違うと思いますが……あたしが艦娘と深海棲艦の味方なので、向こうの言動が悪に見
えるでしょう。ですが、思い出してください。あたしが、何をして来たか。そして、艦
娘擁護の連中が名前だけ出てきてますが、何を島村さんにして来たか。……人間からす
れば、悪は此方なんです」

七海はそう言つて、死にかけているぬいぐるみに向かって振り返る。

「作者は思うんだそうです。人間の味方と、艦娘の味方とは……本当に相容れるのか？
本作の艦娘の扱いは、どう足掻いても人間にはなれません。真実を知れば、多くの
人々は思うでしょうか？ 作者の出した答えは、あたしが受けてきた迫害の数々だ
と言うこと。あたしは深海棲艦というモノでしたが、この立場を艦娘の味方する提督
と、民間人に置き換えれば、同じことが起きると作者は考えました。人類の味方と、艦
娘の味方は、本作では交わらない。あたしが初期に艦娘は化け物と言っていました。普
通の人からすると、化け物と言われて、果たして反論できますか？ 反論するとして、そ
の内容は？ 感情的ではなく、理論的に人間と声を張つて言えるでしょうか。少なくとも

も、軍部には……艦娘を道具にするだけの理由は過去にありました。あの苦痛を再び受けないために、候補生時代に道具と刷り込まれるのです。島村さんの扱いは作中でも波紋を呼んでいます。納得していただけるとも思いません。あくまで本作の中では、島村さんの鎮守府は間違っつてはいないと、作者は思い描いたそうです」

それぞれの主張はある。彼女は彼女の、彼は彼の。

この問題は、描く人のそれぞれが出る。

あくまでも、この作品での彼は悪はないと言うこと。

「でも、今は違いますよ。あの人も、変わったんです。どうも微妙なすれ違いを起こしながら、気がついたらこんな風になってました。あたしは信じられる大人として、島村さんはあたしを強い人間として……」

「勘違いってことよね。毎回発生しているけど」

如月が苦笑する。

不貞腐れる山風と不満そうな弥生がぬいぐるみに言った。

「なんで、そう言えば選ばれたのがあたしたちなの？ 他にも艦娘いたのに」

「そう……。クローズアップされるのが、弥生たちだったのが納得できない」

自分達の初登場が酷い奴から捨てられるような形だったのが気に入らないらしい。

「そんなの……山風の怯える顔が……書きたかったからに決まっている……。弥生は……怒ったような表情を……笑顔に……」

「二人とも。殺つてよし」

ゲスな理由を明かしたぬいぐるみ、七海の許可で再び砲弾のご褒美が直撃する。

「ぎゃああああああつ!!」

酷い音がした。ぬいぐるみ、痙攣しながら倒れている。

「とまあ、島村さんの過去の状態を簡単に説明しました。関係ないことも少し語りましたが、如何だったでしょうか？」

「あの人の存在は、言ってしまうえば司令官とは違った立場だから、言い分も合わないのは仕方無いの。けど、明確に言えるには……悪があると言うなら、それは立場によつて異なると言うこと」

「この物語は、ママとあたしたちが主役だから」

「艦娘と深海棲艦の視点で、これからも進んで行きます……」

と、そろそろ時間なので纏める。

「そんな感じで纏まった所で、今回はお開きとさせて頂きます。ここまで長話にお付き合ひ頂きありがとうございます！」

「そろそろこのルートも終了間際。次は人類ルートか、艦娘ルートになると思うわ。人

類ルートは最終兵器メインで、艦娘ルートは……うふふ。皆さん知ってのあの指輪がテーマになるかも、だって」

「まだ予定ですけどね。それでは、補足説明会を終わらせて頂きます。ありがとうございます！
いました！」

「山風の泣き顔は良いぞう……。わかるか、諸君。山風は泣かせるもの……」

「山風、殺りなさい」

「うん！ 死ねこの外道作者ー!!」

「フアツ!?!」

「
ア
ー
ツ
!!
」

オールマイテーターにはジョーカーで勝つ

その連絡は、二人が相談しているときに武蔵から入った。

砂の上を走る音が聞こえて、彼女が駆け寄ってきた。

「相棒、哨戒に出ている陽炎から入電だ！ 新たに敵の艦隊を確認だそうだ！ レ級が12隻も来たとか言ってるぞ!!」

流石に焦るのか、武蔵は引き続き指揮を取りながら島村に言った。

島村の表情が引き締まるのを、七海は見た。

焚き火を見下ろして、深く息を吸って、吐き出して。

「レ級……か。連中め、まだ余力を温存していたか……」

思案するように、呟く。そこには、微塵も焦りはなく。

至って冷静な漢がいた。

「らしいですね。どうしますか?」

七海も大したことではないと分かるから、焦らない。

慌てることはない、武蔵を島村は宥める。

「然し……!」

「落ち着かんか。大戦艦たる貴様がレ級に怯んでどうする。想定しているなかではまだよい方だろう」

下らないミスを生みたいのか、と逆に叱られて武蔵は幾分落ち着いて、言った。

「だが、二つの艦隊を全てレ級で編成している。聞けば、全部がエリートと言っている。慌てない方がおかしい規模だ。私とて、こんな集団とは戦った事はない。確かに現状は優勢だろう。状況は夜、回避と速力に優れる駆逐艦。だが一撃でも直撃すれば、一発大破だ。夜の装備を持っていったとはいえ、明かりで照らせばリスクが高まる。あの三人がいても、駆逐艦だろう? もつと言えば、如月たちは普通の艦娘だ。レ級の軍団では、厳しいと思うが」

と、相手が脅威であると説明するが……。

「……武蔵よ。貴様は、二つ。二つの大きな事象を、見落としているぞ。気付いているか?」

口を挟むように、島村は言い出す。

その言葉に、武蔵は目を細めた。

「見落とし？ 相棒、私は何を見落とししている？ 勿体振らずに教えてくれ。皆の命がかかっている」

己の認識が甘いならば、改善すると言っている武蔵に、顔をあげて振り返る島村。その表情は一切の油断もなく、淡々と事実を確認する。

「二つ。貴様は、己の存在を過小評価している。貴様はかの大和型の一人。その最終改装だろう。その貴様は今、消耗した艀装の整備が終わり、補充も済んでいる。そして、最大の見落としの、二つ。貴様は、今誰の目の前でその言葉を言っているのだ？」

珍しく、島村は表情を崩した。

不敵な笑み。武蔵に向ける、豪胆な笑いだった。

その意味を、武蔵は解する。

「……ああ。そう言うことか。了解だ。任せておけ、必ずや守ってみせるぞ！」

つまり、武蔵は既に再度の出撃が可能で、彼女は最終改装を終えた大戦艦。その武蔵たる艦娘が、エリート級のレ級に負けると思ふか、という激励と。

目の前で、邪悪な笑みを浮かべている少女がいた。そう言うことだ。

「分かりました。浮遊棲姫、出撃致します」

七海もふわりと浮かび上がった。

武蔵たちも、七海がこの時点で新手の深海棲艦と通達されている。最高の味方として、ハゲの鎮守府の面々には受け入れられていた。

何せ予想を裏切る大量の救援と、増援を引き連れてきた恩人。

救われた、という気持ちと彼女の信念は本物だと皆分かっていたから。

深海棲艦でも、共に戦う事が出来ていた。

「無線を貸してください」

武蔵が艦装を取りに向かう間に、七海も受け取った。

「村雨、服は破けてませんか?」

「第一声がそれってふざけてるんですか!? 真っ先に無事を確認しなさいよッ!!」

からかう声に本気でぶちギレた村雨が怒鳴っていた。

無事なようだ。言うまでもない、信じていた。

あの娘たちが夜の世界で、戦艦の攻撃を受けるほど弱くはない。

事実として、既に散々実戦を経験している皆には、多少万能な戦艦が来た程度じゃ、怯

まない。

こつちには嘗て、それ以上におっかない駆逐艦がいて。

そして今は、もっとおっかない深海棲艦がここにいる。

「小春、報告は聞きました。大丈夫そうですか?」

「大丈夫。陽炎たちが焦ってるけど、山風と弥生が宥めて今は時間稼いだ。彼方の艦娘は、統率は良いけど動揺しすぎ」

「普通はレ級相手なら動揺します。うちはほら、あたしを皆知ってますし桜庭さんも知ってますしね」

言うほどピンチでもない。上には上がいる。で、その上は全員味方。

小春は動じないで淡々と語る。如月たちにも一言言っておく。

「如月、後でチューしてあげます。直ぐ行くから頑張ってください」

「分かったわツ!! 如月頑張るからご褒美頂戴司令官ツ!!」

一言言うと、激しく戦闘中に興奮している嫁。

これでやる気はこれ以上なく高まっただろう。

「……どう見てもエロいのは如月ちゃんじゃ……」

などという村雨の独り言が紛れていた。

「山風、陽炎さんを確りと守るんですよ。お友達なんでしょう?」

「うん! 今度はあたしが、陽炎を支える番だから!」

「弥生、不知火さんに合わせて戦いなさい。無理はしないこと」

「分かってる……! 不知火、大丈夫。七海姉がすぐに来るよ」

娘と妹にもちゃんと言いつける。友達はちゃんと支えろと。

誰も死なせない。だから、同じ艦隊として呼吸を合わせれば負けない。

「(ご)ご主人様！ レ級怖いです！ 助けてください!!」

「はいはい。すぐ行きますから逃げるなり応戦するなりしてください春雨。何でそんなに慌てるんです?」

唯一、一番ビビリである春雨がパニックになっていた。

性格的な問題だろうか、横よりは苦手なままのようだ。

「だって、レ級ですよ!! 深海棲艦のオールマイティーですよ!! さつきから爆撃と雷撃と砲撃がスゴいですよ!! わたし回避で精一杯なのですけど!!」

「とか言いながらあたしを呼ぶ余裕はあるんですね……」

「ご主人様、わたしまだご主人様に可愛がって貰いたいですー!!」
「すぐ行きますのでべそかかないで」

死にそうだからか、素直に助けを求める春雨。可愛いので許す。
そうそう、と重要な事を聞き忘れていた。小春に七海は聞いた。

「村雨の服の破損具合は?」

「本当にぶれないですね提督は!! 村雨の無事も聞いてくださいよ!!」

村雨だけ、いつも通りに聞いた。

キレている時点で無事なのは分かっているのでそつちじゃない。

重要なのはこの可愛い生意気な淫乱メイドがどこまで破けているか。それに限る。主に後でいじり倒すために。

「スカートがかすった砲撃で破けているみたい。これはギルティ。淫乱確定」
「そつちも冷静に報告すなアツ!! 睨まれる覚えはないわよ?！」

「どうやらスカートが一部裂けているようだ。」

「これは期待できる。流石は村雨、謎の村雨嬢は伊達じゃない。」

ぐるぐる、という本気で怒っている時の唸りが聞こえたが小春が追撃する。

「お嬢様の気を引きたいからって、わざと服にだけダメージ入るように回避しているのは見てわかっている。この卑しいエロメイド。お前は夜にやはり本性を現す。最早お前はツンデレサキュバスと言うべき?！」

「待てエツ!! そんなもん微塵もないわ! 誤解を生む言い方するな! 新しい属性も追加しないで! 提督が調子に乗るから!!」

「村雨、毎回可愛いですねえ。そんなことしなくてもあたしは簡単に釣れますよ?！」

「ほらあ! また調子に乗る! 良いから早く来てください! 真面目にヤバイんですよ!」

「ぎゃあぎゃあ騒いでいるが、島村はあれが七海のところの接し方だろうと思うので気にしない。」

七海は皆を大切にしている。大切にしているから、戦う。それもまた、護国になるのだから。

七海は数分で向かうから、無理な反撃はしないで到着を待てと言って無線を切った。

「ふむ。深海棲艦は、渋谷さんに任せても宜しいか？ 戦力は十分だろうか」

「ええ。一応、後続も想定して数名うちの艦娘を連れていきます」

「了解した。此方は武蔵が行こう。指揮は私に任せてほしい」

「はい。あたしが照明弾などで照らします。その間に皆さんが反撃を。浮遊要塞も三体ほど一緒にいきます」

「承知した。健闘を祈る」

簡単に役目を伝えて、出撃していく。

取り敢えず七海は。

「怖いことする由良なんて嫌いです！」

「待つて!! 許して、一緒に行くから! 償うからあ!!」

姉妹に絞られた由良に嘘泣きして連れてきて。

「五十鈴、由良の見張りを……」

「由良、あんたはまだ七海に何かする気なの!」

「しないよ!? 誤解だから、避けないで七海ちゃん!」

五十鈴は同行する由良の監視を。

「山城、期待しますね」

「提督の背中では山城がお守りします！ 必ず！」

一緒に行く山城は大喜びだった。

とまあ、この三名と浮遊要塞を連れレ級に襲われる皆を助けに、武蔵も連れて向かっていく。

七海の出番が、とうとう来るのだった。

で、すつ飛ばして向かう一行。

砲撃の音が聞こえてくると、七海は加速して浮遊要塞と共に先行。

「派手にぶちあげますよー！」

「にゃー!!」

浮遊要塞含めて四つの主砲から、照明弾を夜空に向かって連射した。

どんな原理かは自分でも分からないが、取り敢えず照らし出す。

空にあがり、破裂する閃光。一瞬照らされる、レ級軍団。

驚いたように、此方を振り返る。

「そんじゃ、素敵なパーティー始めましょう!!」

笑って、両手を叩いて大きな探照灯を両手で持ち上げて、上空からライトアップ。

浮遊要塞たちは、集中砲火を浴びるのであろう七海を護衛するために待機していく。

突然の乱入に、レ級たちは一斉に七海に向かって砲撃を始める。

当然、かなりの機動性で攪乱して逃げ回る。

襲う艦載機は浮遊要塞が撃ち落とし、後方にいる皆が照らし出された一体目掛けて。

「フツ、武蔵の一撃は伊達じゃないぜ……受けてみるオツ!!」

「邪魔だ、退けええええ!!」

武蔵と山城が全力でぶちこむ。

更に、襲われていた皆も此方に合流する。

「渋谷提督、スゴい……」

「あの状況で笑うとは……肝が据わってますね……」

慌てていたので精神的に疲れている陽炎と不知火が七海を見て呆然と言う。

笑いながら照らし出して、回避が間に合わずに直撃している七海。
いや待て、直撃!?

ライトアップが一回途切れ、陽炎が大丈夫か聞いた。

「大丈夫みたい。って言うか、相変わらずの自己犠牲ねあの娘は……」

呆れた五十鈴が七海に無線で聞くと、笑ったまま痛くないと言っている。

生きていると言うよりは、何かに興奮しているというか。

復活したライトアップ。再び照らされるレ級。

……何か、七海の姿が髪の毛と肌色と目の色が純白になつてるのは何故?

深海棲艦になつたと、冷静に支援砲撃を入れる五十鈴が陽炎たちに言った。

あれが、今の七海の本性。深海棲艦、浮遊棲姫。

「司令官、如月たちも火力上げたいから浮遊要塞貸して……」

雷撃で支援していた如月たちが、補給をかねて増強をお願いする。

此方に向かって移動する浮遊要塞。

友人二名の目の前で。

「陽炎、見ててね。あたし、強くなつたから!」

「弥生も、不知火の足を引つ張らないよ!」

と自慢気に言っていた二人が食われた。浮遊要塞に。

如月も一口でばくりと。突然の捕食に絶句する二名。

で、残りの浮遊要塞が高速建造材を吐き出して小春たちに渡して、その場で投入。
んで。

「ただいま！」

「大丈夫、生きてるよ」

吐き捨てられる山風、弥生。深海棲艦バージョン。

如月も角生えて復活した。

「うっそ!？」

「深海棲艦になったんですか!？」

驚く陽炎と不知火。

島村は一応話し合いで聞いていたが、生々しい方法にドン引きだった。

武蔵は目をそらして、気にしないことにした。

「これなら、みんな大丈夫です。さあ、一気に畳み掛けます！ あたしと島村さんに続い

てください!!」

七海がバカスカ撃たれて血塗れになりつつ、時折ゲロシヤワーで回復しながら力強く

言った。

頼もしすぎる味方の戦力に、負ける気がしなくなった一同。

そのまま、一気に反撃に出た。島村の指揮と、七海の深海棲艦の存在。

この二つが合わさったとき、手に負えない最悪で最強の集団が出来上がると、皆はただ……知らない。

結論から言えば、時間稼ぎをしている最中に相手の拠点がいきなり爆発した。

闇夜に見えるオレンジの光。あれは、破壊の炎だろうか。

切り札、桜庭がなんと予定よりもかなり早く到着していた。

連絡を入れるのが遅くなってしまったと詫びをいれて、そのまま攻撃。

で、一撃で拠点を地図から消した。物理的に消し飛ばした。

「遅れてごめんなさい。時間ないから直ぐ行くけど、後で報告書をお願いします島村提督！」

流れ作業で全国を回っては破壊している彼女は次の拠点に自分の足で向かっていった。

どうも寝ずに戦っているようで、かなりイラついているのか加減しなかった。

結果、時間が短縮されて呆気なく敵の拠点は消滅。そう、消えて滅した。

異次元の艦娘に島村ですら口を半開きで報告を聞いていたと言う。

……そんな感じで、レ級倒している間に拠点消えたのでお仕舞い。

増援は確認できなかったのも、もういないだろう。

作戦成功。犠牲者、無し。大成功。

「本時点で、作戦を終了する。……貴様ら、ご苦労だった!!」

島村は、最後にそう締め括り、作戦を終わらせたという。

その頃には、とつとつ七海たちは役目を終えたと判断して帰っていたが。

海上決戦は、案の定桜庭が全て終わらせた。皆は役目をやり遂げたのだった。

エピローグ 海と艦と人の世界で

こうして、皆の戦いは終幕した。

七海やハゲが知るよしもないが、問題点も色々浮上したらしい。

日本と言う国が最終兵器を一人しか所有しない事。

負担を全て彼女一人に背負わせていること。

世界では、最終兵器のあまりの酷使に事実上の謀反を起こして人間同士の戦争になっていること。

艦娘が勝ち目のない、深海棲艦よりも強大な同類と戦うことになっていること。

桜庭が、阻止する為に奔走することは、別の世界で語ろう。

それは、次の世界のお話だから。

ただ、この世界ではより凄惨な結果になった、と簡潔に綴らせてもらう。

結局、人類同士の戦争の因果は消えないし、性悪説の人類などこんなものだろう。

深海棲艦を忌避するよりも先ず、自分達の共食いを何とかしないと本当に死滅してしまっただろう。

まあ、そんな利口な生物ならそもそも艦娘を頼らずとも自分達で何とかするだろうが……。

兎に角、決戦は無事に終わった。

少なくとも、個人的な平和と平穏は戻ってきた……。

「新しい深海棲艦ッ!?!」

……訳がなかった。

七海が驚くのも無理はない。

なんと、何人も新しい深海棲艦が発見されたと言う。

桜庭が全国津々浦々を巡っているときに降伏してきた、拠点にいたと思われる言葉の通じる深海棲艦。

それが複数、発見されて決戦を終えて後始末をしている七海に押し付けられた。

勝手に資材を使った事が桜庭にバレて、叱られたが今回の七海の活躍のお礼に帳消しになった。

陸軍との共闘による迎撃作戦。決戦の規模において、完勝に近い戦果。

これは、全国においても唯一の結果だそうだ。

死傷者皆無の完勝で、しかも突破した敵も一隻も居なかった。

他では艦娘轟沈、提督死亡に市街地爆撃とかなりの被害が出ているなか。

七海だけは、陸軍と一緒に戦って戦った挙げ句に島村と共に完璧で理想の戦いを終えた。

人類、深海棲艦、艦娘。この三つが同時に戦えば、無敵と言っても過言ではないと周囲に知らしめた。

共闘するのが土台無理な話とはいえ、結託すれば誰よりも理想の戦争が出来る。

七海たち深海棲艦を利用しようと他の軍人が画策していたらしいが。

「どうにも、古だぬきを一扫しないといけないみたいね。ついでに潰すか」と、ある事件で奔走して疲れきった桜庭が、重たい腰をあげてしまった。

七海は知らないが、この事態は世界の海軍が危惧する人類破滅の崖っぷちを意味する。

裏であった大事件のせいもあり、その一言で連中は疎み上がったとか。

これ以上、最終兵器を刺激してはいけない。

只でさえ今回は桜庭が居なければ本気でこの国は焦土になっていたのだ。

仮に戦争となれば、深海棲艦よりも甚大な被害が出るだろう。

切り札が牙を向いた場合は……桜庭だと保険がない。

殆ど善意で守られているようなものなのに、本気で桜庭が戦えば……大本営も地図から消える。

なので、正規の方法でアプローチすることにした。

その交渉を時々しつつ、七海は日常を謳歌して……。

「渋谷さん空飛べるの!?!」

「すげえ! じゃあ掌から光線出せるか!?!」

「出せません。飛べますけど出せません」

被害がなかった学校で翌週、どうやら七海の活躍が広まったようで、しかも美化されているようで街を軍人として救った英雄みたいな扱いにされていた。

提督は有事になれば、己を前に出して戦うと適当なことを言ったが、この場合は話が違う。

どうしてこう、現代社会は拡散するのは早いのか。七海は軍の訓練を受けて死にかければ手に入るとそのまま言った。

「海軍は化け物の巣窟か!？」

「巣窟ですよ。あたしよりも強い人はゴロゴロ居ますし」

事実を言うのと、戦慄する学友たち。

実際島村も桜庭も七海よりも精神と物理で強い。嘘は言っていない。

皆は思った。海軍は、怪物の巣窟であり、提督も紛れもない軍人なのだ。

額の傷は伊達じゃない。まさに、七海は引退しても強いのだ。

なんだかんだ、人間とも上手くやっている。

学校でも今まで通り、新しく来た深海棲艦も面倒を見ているし、学校の男子にも人気があった。

放課後。いつも通り校門で待っている皆と共に家に帰る。

昇降口を抜けて向かっていくと……。

「君、このメイドは歩く淫乱。童貞を奪い、若い男の生気を奪うサクユバスだから、近づいたら危険。腹の上で死ぬことになる」

「あるかあ! こちとら健全に生きてるって言ってるでしょうがッ! あることないこと言いつらすな青少年に!! ほら、みんなして鼻血垂らしてるじゃないの!」

小春が見慣れた、メイド服の村雨を青少年の天敵と教え込んでいた。

周囲には学年問わずに男子が集まって話して、皆は囲まれている。

最近では一種の名物になっていよう、お迎えメイド隊とか言われていた。

「さ、流石村雨さん！ あのクール系メイドの小春さんに容赦なく怒鳴る！ 俺達が恐れ多くて話しかけられないのに、堂々と怒れるなんて！ 高校男児の夜のお供は伊達じゃない！」

「あらゆるジャンルを網羅する夜の女王と巷では言われる、かの伝説、鹿島さんと双璧の存在……。エロゲーとエロ本の表紙を何度も飾るだけの事はある！」

「見ろ、あのキレのあるツツコミを！ 弄られも出来るしツツコミも出来るだけじゃない！ あの仕草、あの表情、言うまでもない体つき……まさにパーフェクト！ 完璧だと思わないか!？」

「村雨さんはメイドが一番と言ったな……？ バカめ、と言ってやる！」

「村雨さんはメイドだけが全てではない！ それを我らが教えてやろう！」

妙に盛り上がった解説をする一年生が、小春とやり取りをする村雨を見て皆に教えていた。

「い、いやあああああ……！！！」

周囲から万能エロメイドとか言う謎の通り名までつけられて、青少年の性欲を甘く見ていた村雨はここ最近ずっとこんな扱いであった。

高校生を侮ってはいけない。

真つ青で毎回否定し修正しているが多分もう手遅れだろう。

「姉さん……」

「うわあ……」

「弥生は聞こえない、聞いてない……」

「村雨ちゃんはずンデレだから仕方無いわねえ」

春雨、山風はドン引き。

弥生は耳を塞いで聞こえないふり。

如月は苦笑いして村雨はずンデレと言うので余計に拗れる村雨万能説。

エロの化身扱いに、そろそろ村雨さんのライフは尽きそうだった。

「はいはい。皆、そろそろ行きますよ」

遠目で呼ぶと、人混みを掻き分けて小春が参上。

「お嬢様、お帰り。では、帰ろう」

七海が歩き出すと、慌てて皆がついてくる。

今日は由良と五十鈴は遅れている。もうそろそろ到着すると言うが。

大蛇のように、七海を先頭にナンパする男子生徒もしつこく続くので伸びていく。

主に村雨が。春雨はメイド服のままいち早く逃げて七海に近寄るので言い寄ること

はない。

小春は全部無視。嫁と娘と妹はどう見てもアウトな外見なので流石に言われない。稀に弥生と如月と春雨を狙うロリコンがいると七海がスチールの空き缶を握り潰して威嚇するので、まあ大丈夫。

村雨は押しきられると弱いので毎回言い寄られては困惑している。真面目な少女なのでこれこそ仕方無いが……。

「モテモテですねえ村雨。やっぱり夜のお仕事してたんでしょう?」

「……わたしは知らないだけで、実はしていたんじゃないと最近思います。あの異性のモテ具合は異常なので……」

と、妹メイドが怪訝そうに姉を見て言うが、案外間違ってもなさそうな気がする一行。そんな話をしている頃。私服の白い無地の半袖とジーンズ姿の五十鈴と由良が走ってこっちに来た。

「いたいた! もう、なに油売ってるのあんたたちは」

「遅かったね……つて、今日もスゴい行列。これ全部村雨ちゃん狙い?」

肩から鞆を下げている由良と、手ぶらの五十鈴がこっちにきた。で、コッソリと此方狙いの男子も居るわけで。

「ああ、渋谷さん! ご無沙汰します!」

「ん? ああ、田島くんか。こんには」

五十鈴に渋谷の名で呼ぶ男子。

七海の親戚と偽っている五十鈴は、由良も似たような感じで親戚扱いで誤魔化している。

因みに小春も渋谷の名字を名乗り、弥生と山風もそうだ。

如月だけは名前が名前なので、名字と言うことにして遠縁の親戚にしている。

深海棲艦たちは漏れなく渋谷の名前を借りて過ごしているのだ。

要するに男子からすると、この皆さん全員七海の親戚であった。

気付いた五十鈴が、運動部の男子と仲良く話している。

割とさばさばしている五十鈴は運動部に人気がある。

逆に由良は、文化部の連中にモテる。優しそうな見た目が良いらしい。

「し、渋谷さんのお姉さん……。どうも」

「あれ？ 大滝くんじゃない。久し振り」

恐々声をかける男子に笑顔で対応する由良。

こんな感じで、毎度歩いて帰る皆にはオマケが大量についてくる。

「小春さん！ 今日こそは俺とお付き合いを！」

「断る。私はお前に興味などない」

「ストレートにお断り……。だが、それがいい！」

「お前は変態？　村雨と同類なら切り捨てるけど」

小春もMな奴にはクールな態度でモテる……ようだ。

慇懃無礼だが……何が良いのだろうか？

「村雨、いつまでも悩殺しないで早く帰りますよ」

「悩殺してないからね!!　毎回七海は何でそう村雨をいじめるの!」

いじめられて怒鳴ると周囲は受けもいるのかと新しいジャンルを発掘する。

泣き声に等しい訴えが妄想を拂らせる。真つ青になつて訂正するも既に遅し。

遅れていた村雨は、追い付く頃には俯いて今日もまたオカズにされると嘆いていた。

たくさんのオマケも、駅前を過ぎると大体居なくなる。

道中同じ方向の電車組が多いので、最後はいつも皆だけ。

「娯楽は娯楽です。本物の村雨は清廉潔白。あたしが知つてりや良いのですよ。知つて

ても訂正はしませんけど」

しれっと、最低な事を言いながら春雨の頭を撫でている七海。

何だか危ない顔をした春雨は恍惚としていた。妬いた三人が自分もやれとせがむ。

「みんなして……村雨を誤解するんだ……。何で村雨ばかりこんな目に遭うの……」

（あんたの新作、今月ランキング一位って知らないからそう思うのよ……）

（ホントにモテるのね村雨ちゃんは……。七海ちゃんと言うのも強ち間違いない気

がしてきた)

(深海棲艦で一番モテるから、仕方無い。村雨は淫乱メイドだから)

五十鈴、由良、小春は慰められる村雨を見てそう思わずには居られない。

結局、目に見えるものが全ての人類など、こんなもの。

見た目が大差無いなら、皆人間のなかで生きていける。

艦娘と深海棲艦しかいないこの面子を受け入れたのは知らないから。

知れば拒絶するだろうし、知らぬが仏とも言う。

即物的な人類はそう言うもの。

信じるのは、一握りの存在だけでいい。

(……あれ? 島村さんから連絡来てた)

携帯が震えるので確認すると、ハゲは来週、決戦のお礼をしたいので全員に奢るから、

何か食べにいかないかという誘いだった。

気前の良いことだ。二つ返事で了解した。

あとは、母から。家にいる新人の萩風が何やら料理の試作品を作っているという一

報。

早く帰ってきてくれという話らしい。

「みんな、少し早く帰りましょうか」

と、皆に事情を話して駆け足で七海は帰る。

背後には、艦娘と深海棲艦。周囲は人間の世界で。

これからも、七海は皆とこの日常を生きていくだろう。

信じられる一握りの人たちと共に。

深海棲艦として。人間として。そして、普通の高校生として、ずっと……。

エンディング B お仕舞い。

人類ルート 人間のお友達

異国の少女

深海棲艦の世界を進んだある少女は、それなりの幸福を手に入れた。片や、血塗れの死骸の果てに。片や、怪物となり人間に紛れて。

これは、彼女が人間に寄り添う世界。人間として戦う世界。

……但し。

戦う相手は、異なるかもしれないが……。

皆様は、こう考えたことはないだろうか。

確かに世界には共通の脅威である深海棲艦が支配している。

だが、世界は広い。本当に人類が、手を取り合うなんて出来るだろうか？

出来ると言った人は、恐らく同じ敵がいるならいさかきをしてる暇などない……と、思っていたりしないか？

指摘通り、いがみ合っていれば諸とも滅ぶ世界規模の脅威ではある。

では、質問を変えようか。

——人間が、理屈通りに生きられる生き物だと思うか？

理屈では指摘は間違つてはいない。寧ろ正解だと子供でもわかる。

が、それは七海が言うような、理屈のみで語つた世界だ。

知っているだろう。人間は、理屈のみで動けば異常者扱いされる。

世界は、感情の方が強く働くもの。感情の薄い人間はおかしいと言われる。

それを踏まえて、もう一度問おう。

本当に人類が、手を取り合うなんて出来るだろうか？

その答えが、このルート。人類の戦いを選んだ場合の世界になる。

愚かな人間の性を見るだろう。人類は言うほど利口じゃない。

その理由を、とくにご覧あれ……。

それは、七海が他の鎮守府に向かえと言われた、深海棲艦に成り立ての頃。言われた命令に従おうとするが、突如その命令は撤回された。

「ごめんなさい渋谷さん。どうも……そんなこと言っている場合じゃないみたいで。暫くは、鎮守府に待機してて。絶対、深海棲艦たちと出撃しないで。あなた自身も。分かった？ これは、厳命よ」

翌日、焦る桜庭が慌てるようにして連絡してきた。

決して外に出るな。艦娘のみで通常の任務のみをこなしている。

厳命と言った桜庭に首を傾げて、然しキナ臭いにおいを感じとり従う。

あの桜庭が、憔悴しきった声色で言っている。

大事の予感がした。自分も巻き込まれたような、大きな渦を。

(厄介な事になりそうですね……)

仕方無く中止になったとホツとする皆にお留守番と言われたので、待機していることにした。

で、哨戒とか遠征とか適当にこなしつつ……。

「村雨……。いけませんね、ご主人様に無断でこんなエッチなモノに出演しては」

と、よいネタを発見して早速暇潰しに村雨をからかうことにした。

街には出ての良いと言うので、変装して五十鈴と一緒に面白い物をしていたとき。

如何わしい暖簾の向こうに気紛れに何故か入った七海は、あるものを見つけてしま
う。

何となく、興味があつて入った暖簾の向こう側。そこにはエツチなモノしかない男の
世界で。

なのに、コーナーの一面にあつた物を見つけて、思わず手に取り目を丸くした。

五十鈴を呼びつけ、嫌そうな顔で入ってきた彼女にそれを見せて、啞然とする彼女に
頼み購入してもらつた。

五十鈴は外見にも問題はない。変な目で見られたと文句こそ言われたが、それ以上
に問い詰めることがある。

「なっ……!?!? なんですかそれは!?!?」

「同人誌です」

顔を真っ赤にして、表紙を見て驚く村雨。

執務室の掃除をしていた村雨や小春、春雨が働くなか。

思い出したように妹とメイドがいる前で取り出して邪悪に笑つた。

「……とうとう、あたしも物証を入手したのでですよこの淫乱スケベメイド。まだ言い逃

れをしますか?」

と、絶句する三人に中身を見せる。既に五十鈴が拝見しており、いわく。

「あの娘は前に何やってたの!?!」

と思わず言ったぐらいのドロドロな中身だそう。

自分は読めないのです、これでも否定する気かと村雨本人に突きつけた。

「ち、違……! 村雨こんなの知らない……!!」

狼狽える村雨は徐々に後ろに逃げていく。

村雨本というジャンルらしいが……。

「姉さん……? わたしの知らない間に、何してたの……? もしかして、秋雲ちゃん?」

思い当たる節があるのか、春雨は慌てて七海の背後に回って中身を見ないようにした。

恥ずかしがる春雨はかわいい。それはいい。

「えつ、秋雲……? まさか、それ作者オータムクラウドですか提督!?! 開催地書いてありますか!?!」

たじろいでいた村雨だが、彼女もどうやら覚えがあるようだ。

同人誌の作者はサークルオータムクラウド。

売られていたらしい即売会の開催地もあったので教える。

村雨が青くなつていく。彼女の言う通りだった。

「うわああああああ!! 秋雲にやられてたー!ー!ー!」

教えると、途端に絶叫して頭を抱える。

……どうやら、今回は……冗談ではない。真面目に被害にあつていたようだ。

「おい、淫乱スケベメイド。お前、何したの。白状しなさい。正座して、今すぐに!」

七海から同人誌を受け取り読み終えた小春が怒ったのか、村雨に怒鳴った。

丸めた同人誌で、苦悩して唸る村雨を叩いて、命令した。

「ええ、聞いてないよう……。どうして、村雨のは出さないつて言ったのに……」

泣く泣く大人しく正座する村雨と、事情を知る春雨が説明した。

以前、つまりは生前に所屬していた鎮守府では多忙で遊んでいる暇などなかった。

それは聞いたが、時折の非番で時間があつた二人は、同じ鎮守府の艦娘、秋雲なる奴に一度スケツチをお願いされた。

コスプレの一種だと当時二人は思ったが、恥ずかしがつて春雨は拒否。

然し押しきられた村雨は渋々了解して、請け負ったそうだ。

で、何に使うのか聞くと……どうやらそっちの事に使おうとしていたようだ。

騙していた悪人秋雲には使用するなど口を酸っぱくして約束していたと。

で、死後の現在。村雨は既に遅かった……と。

「時期的に、多分村雨たちが死ぬ前。その前にはもう、勝手に売り出したんだと思います……。酷い、酷すぎるよ秋雲……。すみません提督、それは紛れもない村雨本人がモデルです……」

しくしく泣いている村雨が白状した。今回は、七海の言い分が正しいと。

真正正銘、自分だと認めてしまった。凄く泣いている村雨。

春雨も自分が餌食にならないでよかったと言う安堵と、姉が犠牲になった一件への事で微妙な顔をしていた。

「そう。最早語るに落ちた。お前はもう、穢れている。お嬢様に害があるから、今後一切近づかないで。お前はやっぱり淫乱だった」

「……………仰る通りです……。村雨は、知らぬ間に淫乱にされていました……」

仁王立ちする小春が、正座して俯き敬語になった村雨に引導を渡そうとしている。

七海もこれには口を挟んだ。ネタにする気が、真面目に追い詰めている。
それは、良くない。

「村雨が淫乱でもあたしは寧ろ歓迎です。村雨。あたしはとつくに穢れているので、大丈夫ですよ」

立ち上がって、同人誌を貰って静かに閉じる。

涙目の村雨が顔をあげる。

そこには、申し訳なさそうにしている七海がいた。

「自分でも知らない間に実際被害にあつたんですね。もう、生前のことは触れないでおきましょう。……二度目の人生を楽しめと言ったのは誰でもない、あたし。それを、掘り起こして弄るなんて最低な行為でした。村雨、ごめんなさい。二度と言いませんから……」

七海は迂闊な自分の行為を強く恥じていた。

なんと言う事をしていたのか。彼女の心を傷つけてしまった。

小春にも、今後はそういう事は絶対に言うなど命じた。

自分も反省しているから、小春も普通にしておけと。

不可抗力で餌食になったのもう手遅れなので、この先は村雨を大切にしようと思つた。

「え、えええ!! いや、村雨はそこまで言うほどじゃ……!?」

頭まで下げて謝る七海に逆に困惑する。

小春も、そう言うことならと素直に謝罪してくれた。

だが、七海は謝っている。自分の落ち度と思っっているから。

「お詫びをしないと、いけません。あたしの責任です」

「いえ、お嬢様だけじゃない。私も責任を負うべき。だから、私もする」
二人して村雨に償いをすると言つて聞かない。

漸く改善された扱いが、今度は謝罪させてとお願いされる始末。

途方に暮れる村雨だったが、春雨が提案した。

「だったら姉さん。折角だし、皆で久々に出掛けようよ」

無論二人の奢りで、と言つた。

それぐらいなら重たい空気にならずに済む。

有難い助け船に、村雨はそれでいいと言うので。

結局、お詫びデートをすることになったのだった。

(……デート?)

村雨いわく、何か変な空気になっているけど気にせず、進めていった……。

で。街でイチャイチャしている皆。

休日の歩道を歩く四人。天気はすっかり夏日で、燦々と降り注ぐ日光が服を汗ばませる。

人通りが多い都市部に來ている皆は、七海は半袖とロングスカート。

小春も同じお揃いの服装で、村雨はいつもの制服、春雨はサマードレスだった。

「さあ、何でもワガママ言ってもいいんですよ村雨」

「そう言われても……」

好きな場所で奢ると言うのだが、大して趣味もない村雨。

以前も七海に任せきりだったが、今回は自分の意思が優先。

どうするべきか迷うが、適当で良いかと春雨と相談して、本屋やゲーセンで良いと

言った。

ただ、前みたいにナンパされても我慢してとだけ言われる。

「村雨も提督が怪我するのは見たくないです」

「……善処します」

護衛に小春が行くと言うので、安心して出掛けていった。

出会は、本屋であった。

春雨と村雨が、料理の本を見に行つて、小春も気になるのか近くで違う本を立ち読みしていた。

七海は一度トイレに向かい、探している頃だった。

『あの……すいません。ちよつとお尋ねしたいことが……』

と、近くで女の子が誰かに話しかけているのが見えた。

ただ、流暢な英語で話しかけているので、呼ばれた男性は無理無理とジェスチャーで応答してそそくさと去つていった。

小柄な少女だった。腰まである金髪に、不安そうな碧眼が揺れる。

白いミニスカートのワンピースで、頭には海兵隊の帽子を被つていた。

(……艦娘?)

七海は訝しげに見た。街中に見慣れない異国の言葉を話す艦娘らしき少女がいる。

見覚えのない姿。首には、翻訳機がない。つまりは……。

(海外の従来型艦娘ですね……珍しい)

従来型艦娘には、翻訳機が必要ない。故に着けずに出掛けても言葉は通じる。

同じ国の言葉なら。英語は無理だろう。七海は飛鷹に習つたのである程度は分かるけど。

その少女は、おろおろして周囲を見回して、村雨が目に入ったのか向かっていく。彼女は制服なので、分かる人物には分かる。

案の定、村雨に英語で話しかけている。驚く村雨と春雨、異変に気付いて駆け寄る小春。

七海も直ぐに向かって、

『うちの娘は、英語は通じませんよ。日本語、喋れますか?』

後ろから同じく英語で話しかける。

振り返る少女は、目を丸くした。

『あれ!? 言葉通じる!? あなたイギリス人!?』

『どこを見ればイギリス人に見えるんですか? 発音のおかしい単なる日本人ですよ』

呆れたように話しかけて、こっちで対応すると目配せする。

任せる三人に、七海は何か用事か聞いた。

『ラッキー! よかった、分かる人がいて……。あなた、海軍の人だよね!? 大本営つ

て、どこにあるか分かる? あたし、迷子になっちゃって……』

日本語は分からないという彼女は、年齢が近いように見えるのか気さくに話す。

何やら大本営に向かいたいらしいが……。

『地図も読めないのに、なんで一人なんですか。ここは真逆ですし、随分と離れていますけ

ど』

苦言を呈する七海は、地図を取り出す少女に丁寧に見える。行き方も場所も。

大体わかったのか、安心したように彼女は言う。

『実を言うと、ゴトとかアークとか、レーベとかとはぐれちゃって……。あ、今は連れの名前ね。そんなわけであたし一人で電車乗り間違えてここに来ちゃったのよ』

『……はあ』

要するに本当に迷子か。

呆れている七海に、礼を言ってから去り際、異国の少女は笑顔で名乗った。

『ありがとう、親切な艦娘さん。あたし、イギリス海軍の駆逐艦、ジャーヴィスって言うの。また逢えたらお礼するね』

向こうも艦娘と分かっていたか。

ジャーヴィスと名乗るイギリス駆逐艦は、パタパタ走って消えていった。

ジャーヴィス……聞いたことすらない名前だった。

七海はもう大丈夫と三人に言ってから、また買い物再開する。

のちに、この少女……通称ラッキージャーヴィスと呼ばれる彼女との再会は、意外と早いのであった。

軍事バランスの崩壊

「気に入らん」

そう、言い出したのはロシア海軍の一人だった。

ある国の海軍総本山に緊急召集を受けて数名、久々に集まった面子の中で、真っ先に火蓋を切った。

「アイオワの戯けめ。あのバカがとうとう仕出かしてくれた。おかげで世界の軍事バランスが派手にぶち壊れたぞ」

「……でしようね。まさか、アメリカが最終兵器を自ら解体して、新たな選定を始めるとは……」

イギリスの女性も憂いを浮かべてそう言った。

此度の事件は、世界の軍事バランスを崩壊させてしまった。

ある最終兵器が仕出かした、最悪の出来事。

しかも、アメリカという大国が自滅して、だ。

大国の損害は恐らくは保険があるが、問題はそこではない。

「アイオワも庇ったシスターも死んだそうだと。セーフティが仇になったな。呆れてモ
ノも言えん」

「んー……で、どうするのだ？ 正直、アイオワが死んだのは因果と言うものだ。気にし
ても仕方ないだろう？」

もう一人、イギリスの戦艦が冷たいながらも的確に物を言う。

事実、自滅したアイオワという存在よりも、広がった波紋と言うものが大きい。

混乱に乗じて、ならば我らもと最終兵器の選別を名乗る諸外国。

残されたものたちは、勝手を言い出す連中をどうするか考えるべきだった。

「国際的には、一応基準はあるわ。ドイツじゃそれで私は選ばれたわけだし」

「問題はアメリカだ。アメリカの対応を切っ掛けに、他の国が自分達まで最終兵器を持
とうとしている」

アメリカが、最終兵器の不在を契機に新しい最終兵器を何名も選んで勝手に戦力を増
強した。

国際的な取り決めはあるが、あくまで上限や細かい取り決めのみ。

最終兵器は切り札だけではない。人類同士の見栄や、抑止力も兼ねている。

今までは純粹に最強だった者だけが居たのを、多少自国の基準を甘くして、数を出そうとしている。

戦力に変化はないが手数が増える。つまり、他国への牽制も出来る。

おかげさまで、危機感を抱いた諸外国も、次々適当な認定で持ち上げようとしている。

国際的な取り決めは守るが、どう見ても強さが足りない。単なる艦娘を最終兵器に認定しているわけだ。

有事に役立つかも分からない有象無象ならハリボテと大差がない。最終兵器の意味が薄れる。

最終兵器の乱立。それが、皆が危惧している軍事バランスの崩壊。

最終兵器は、本当に戦える最終兵器でないと意味がない。

「正式な基準を踏んでいるのは我ら以外では北歐、スウェーデンぐらいなものだ。あそこは軽巡で一人推薦している」

ロシアは言った。

国際的な基準では、強さという部分の規定がない。一番重要な部分は自国に任せている。

国によって事情が違うし、変に決めると逆に少なすぎる。因みにそれが今の日本にな

る。

「あ……軽巡ねえ。珍しいじゃない。普通は戦艦でしょ？」

大抵は火力を優先して、戦艦を優先する。

過剰な強さを持つが故に、通常の空母など無意味に等しい。

「おいビルマルク。貴様、そう言いながら一人潜水艦を増やそうとしているだろ。重巡と駆逐もいるんだってな？　そこまで盛るんだ。当然、貴様は引退するんだろうな？」

「えっ？　するけど？」

ロシアの言葉にドイツの最終兵器、ビスマルクは首肯した。

相変わらず、読みあうと言うことをしないばかり正直な奴であった。

既に決定してゐらしく、皆に説明した。

「私ももう、何年もやったしねえ……。いい加減、旦那が子供ほしいって五月蠅いのよ。こつちが忙しいと襲えないって文句言うし」

「止める、夫婦の営みの愚痴など私達に言うな！　聞きたくない！　だったら、跡継ぎに

任せて早く隠居しろ！」

ロシア代表は文句を文句で返す。流石は唯一の既婚者。

そういう事情ならば仕方無いと皆は頷く。

「そうだぞ、ビスマルク。お前は幸せに最も近いのだ。そろそろ戦場から離れ、平凡な世

界に帰るといい」

「そうね……。戻れるうちに戻った方が賢明よ。私も、もう戦えないから……。後は後輩に任せるわ」

イギリスの二名も、祝福すると同時に一人はもう自分も限界だと白状した。

「ほう？　戦えないと言うと……。足か、貴様は」

「ええ。重たい艦装の負担が限界に近いの。アイオワの事じゃないけど、イギリスは私が引退するわ。ネルソンは続投する。まあ、軍の監視からは逃げられないから、どのみち数年は見張られることになるでしょうけど」

昔から足が若干不自由だった戦艦は、海軍とこの際だからと交渉して引退すると言った。

規定的に、その方が好都合なイギリスは了承しているそうだ。

「他にも、新しい最終兵器の選定に邪魔で言うことの聞かない先代は無理矢理引退させているみたい」

「本当に呆れた連中だな……。今度は従順で多少弱くても良いから従うものを連れてくるか。ふんつ、質が下がる。私も引退が近いが、他国がこれでは、おちおち隠居もできん。もう暫くは続ける事にした」

ロシアはあくまで、最終兵器が有象無象で溢れるのを阻止したいという事だ。

少なくとも、イギリスとドイツは真つ当な選別で跡継ぎを選んだ。

そこは信用できるが、出来ないのはアメリカ。

また人格と強さに問題のある奴を選ぶと皆は言った。

そして。

「大和。いい加減、お前も何か言え。仮にもその名を狙うバカな有象無象の審査を我らがするんだ。リーダーも、何か意見があるだろ？」

ずっと沈黙していた最終兵器のリーダー、大和はため息をついた。

ロシアの最終兵器の言い分は大体正しい。だから、わざわざ全員を日本に来日させたのだ。

「私も、もう一人じゃ無理があるから……何人か候補選んでもいい？」
疲れたように、大和は皆にそう聞いた。

何故イチイチ確認をとるのだ、とロシアは聞いた。

「ごめんなさい。多分、最悪な人選だと思う。正直言うと、私の教え子だけ……。何て言うか、国内でももう孤立しまくってて、疑心暗鬼になってるのよ。人間の味方があの娘にはいてほしいっていう、お節介。それと、私が全部背負うのキツイから、二人ぐらい増員したいの。大丈夫、めちゃくちゃ強いから。うん……強いけど、兎に角危ない娘だから、ガンガード。あんた近寄らないでね。絶対噛まれる」

「ほう……以前聞いた、例の深海棲艦と一緒にいる大和の教え子か。貴様の口振り、期待できそうだな？」

人格は予め最低最悪と言っておく。

それでも推薦するのは、それほどまでに強力な存在。

「ちよつと大和、本当にその娘は大丈夫なの？ また人類と戦わない？」

「ぶつちやけ、何度も人を襲ってるわ。けど、条件はハッキリしているからそこさえ刺激しなければいける。理屈的な娘だし信用できるけど何分、完全に利己的な性格だから、無関心な部分が強いの。面倒な事は自分からはしないと。けど、支えてくれる人がいないと鎖のない猛獣なもので、ストッパーを跡継ぎたちから探せればいいと思うわ。あの性格についていける新しい艦娘が居れば……だけど」

襲う条件は自分に危害を加える、または悪意を持って攻撃する。

それ以外は至って無関心なので、まだ扱いやすい。

「ええ……。大丈夫なのかしら……？」

と、イギリス戦艦は言うが、兎に角皆は集まってきた。

アメリカ不在の最終兵器の選定が、近々始まるのだった……。

で？

「可愛いですなもう」

「止めてー!!」

相変わらず平和な日常だった。

執務室のお掃除をしているメイドたち。

七海の鎮守府では、扱いが変更された村雨が毎日七海に口説かれている。

弄りが消えると、途端に甘やかしな態度になる七海は村雨を無意識で口説いていた。

顔を真っ赤にして耳を塞ぐ。

「く、口説くのは禁止！ 村雨を口説かないで！」

ニコニコしながら仕事をする七海は呼吸をするように村雨を可愛いと褒める。

真面目な顔をして何を恥ずかしいことを言うのか。

そういうのはダメと言うのに。

「春雨、あたし口説いてます？」

「いつも通りですよ？」

と、妹が言うし。

「村雨。慣れた方がいい。弄りがないお嬢様は大体タラシ」

小春も冷静に言うし。どうしろと。

「可愛いものを可愛いと言うのは、美味しいものを美味しいと言うのと同じことです」
「明確に相手がいるって部分が違う！　そういう事言つて、村雨をどうする気なの!?!」
手込めになんてされなさいよ!?!」

毎度この人は、皆を可愛がるのが日常茶飯事になっている。

ドロドロな愛情なのは分かるが、いとおしそうに見るのは止めてほしい。恥ずかしいので。

「そんなことしませんよ？　ねー?」

「ね、ねー?」

春雨と顔を向きあつてそんなことを言う七海。照れても一緒にやる春雨。

イチヤイチャしまくつた。

「お嬢様、私は?」

「小春が可愛いのは知ってます。今日は一緒に寝ましよ？　山風も弥生も如月もみんな

来るので」

「むっ……。独占できないのは残念だけど、構わない。久々に夜這いしに行く」

本日の夜は哨戒に出ている三人娘と春雨と小春で同じ部屋で寝るらしい。だらしのない顔をしている七海を見て小春は不満そうに言った。

「コラー！ 夜這いしにいくな！ 健全にしなさい!!」

春雨が思わずツッコミを入れると、

「お嬢様。春雨ももう普通だから拉致って行くけど良い？」

「!？」

小春は、相変わらず恥ずかしがる春雨に痺れを切らして、寵愛を受けさせて洗脳してやるとか言い出していた。

驚く春雨。一緒に寝ると言うことは……風呂とかも一緒なんだろう。

「待つて、春雨は遠慮します！ 健全がいいから!」

「五月蠅い。お前もお嬢様の大奥に入るの! お前の主が誰か、身体に教えてやる!!」

嫌がる春雨に近づき捕まえて、小春は怒鳴った。

実力行使に移った。

今のうちに七海の愛を深く刻み込んでやるとニコニコ受け入れ態勢の七海に、じたばた抵抗する彼女を豪快に持ち上げて、近づける。

「い、いや……い」

流石に染まるのは嫌だ。

普通の扱いに漸くなったのに、次は七海色に染め上げるとか嫌だ。

日差しが眩しい朝に、七海に向かって抜錨とか絶対にお断りなのに!!

誰か、助けて……。

——いやあああああああ!!

「……へえ。あたしがどういう存在か知ってて、お誘いしているんですか?」

深夜。皆と寝ていた七海は、内線によって起こされる。

普段は鳴らない番号だった。

ぐっすり皆が寝ているなかを起きた七海は、呼び出しを受けた。

相手は、鎮守府に真夜中一人で訪れた、桜庭だった。

夜分にごめんと謝りつつ、人気のない執務室に呼び出して、こう言ったのだ。

「渋谷さん、私と一緒に最終兵器やらない?」

と。上記の台詞は、七海なりの嫌味であった。

人間たちがとうとう、七海のような存在まで使わないといけないのかという嫌味。

桜庭はそれもあると、白状した。

予感があったから、驚きはしない。事情を口外しないと約束してから教えてくれた。

「実はね、アメリカの方の最終兵器の一人が大統領のご子息を作戦中に殺したのよ。次期大統領つて言われていた、軍の最高司令部の人を」

なんと。アメリカの最終兵器は、最近ハワイの方であった大規模作戦中に、責任者であった大統領のご子息を、殺害したらしい。

これは、本当に秘密なことで、アメリカでは作戦中の殉職と言う形で報道されている。余りの酷使に加えて、無謀な作戦を立案して実行。

本人が死にかけてしまい、激怒した際の行動だったらしい。

確実に勝利するために、最終兵器を桁が三つほど上の戦力と単体で戦わせて、言うなれば囷にした。

人類の切り札を、強靱なシールドにしたわけだ。

そして、満身創痍の彼女を更に戦いに駆り立てたせいで逆鱗に触れて、司令部施設ごと粉々に吹っ飛ばされた。

元々自分の国に強い怨念があった彼女はその後解体。つまり、処刑された。

彼女を庇って、一緒に通常の艦娘と戦った空母も国家反逆罪で処刑されたと言う。

「それはまあ、良いんだけど……」

「いいんですか?」

「終わったことだしね。問題は、居なくなったあとのこと」

アメリカが最終兵器を失って、新しい候補を選んで就役させてしまった。

で、数が以前の倍に増えたのを他国が危惧して、自分達まで最終兵器を祭り上げて、乱立している。

おかげで、最終兵器という存在そのものが、弱体化している。

本当に強い最終兵器以外の有象無象が紛れてしまつて、有事に役立つかも不明。

細かい事情は省くが、日本も桜庭一人では心許ないので、強さを優先して候補にした
いと。

全世界から勝手に名乗っている連中を一度、残っている実力の確かな最終兵器が審査して、本当に相応しいかを測る任務がある。

言うなれば、最終兵器の候補生として。一緒に来ないかと。

「……面倒ですね」

「でも、見返りは大きいわ。最終兵器つて言うのは、リスクが高いけどその分、同じ境遇の味方がいるわ。少なくとも、私が一緒の立場になれる。それじゃ、足りないかな?」

「……………別に、桜庭さんと一緒でも良いですけど。少し、懸念材料があるので」
なる気はないが、候補生としてならまあ構わない。

最悪、辞退しても良いならという前提を出した。

「まあ、他にも居るから最悪辞退しても問題もないか……。いいわ、その条件を呑む」
後は継がないが、力添えはする。そういう約束で、七海は参加する。

桜庭は礼を言いながら頼んだ。七海は翌日、大本営に向かった。

日本の最終兵器の候補生の一人として、様々な艦娘たちと出会うことを、まだ知らない。

事前調査

愛ってなんだ？

奪うことか？ 縛ることか？ 支配することか？

違う、そんなものは愛じゃない。愛ならばなぜ、傷つける。

違うというならなぜ、悲しませる。

違うというならなぜ、苦しませる。

愛は美しいモノなんだろう？ 現実の愛はどうしてこんなにも醜いんだ。

綺麗なモノなんだろう？ 現実の愛はどうしてこんなにも汚いんだ。

いや、違う。もつと美しい愛があるはずだ。

見たい。もう一度、綺麗な愛を紡ぐ人たちを見たい。

あの時のように。幸せな時間を、自分以外で見たい。

応援したい。守りたい。幸せを見たい!!

現実には薄汚い愛しかない。

そんなヘドが出るようなモノを愛と嘯くな!

こんなもの愛じゃない!! もっと綺麗で純粹で、幸せになるためのものが愛なのに!!
嘘だ!! リアルには嘘の愛しかない!! こんな世界の愛は全部嘘なんだ!!

だから。だから、空想に走った。ご都合の愛。純粹な愛。綺麗な愛が一杯ある。

この世界は最高だった。空想ゆえに、どんな愛でも互いを惹かれるモノさえあればいい。

邪魔なものは所詮はスパイス。二人の為の調味料。

引き立てる以外には必要ない。

なのに、調味料の分際で、美しいモノを破壊する話など大嫌いだ。

つまり、リアルは大嫌いだ。調味料が、二人の愛を台無しにする!!

嫌いだ。現実なんて、こんな世界なんて!!

調味料が、端役がでしゃばって愛を滅茶苦茶にする!!

二人の幸せを、ぶち壊す!!

憎い、そういう世界が、そういう奴等が全て憎い!!

間違つてなどない。自分は純粹な愛が見たいだけ。何もおかしくない。

……けど。こんな薄汚い世界で、出会ったんだ。

なんて純粋な愛を謳う人だろう、そう思った。

包み隠さず好きと言つて、愛する人のために命懸けで巨悪と戦う女の子。

ああ、分かる。一度は見た。あの人のように、惹かれる人たちの幸せな箱庭があつた

！

でもやつぱり、世界のヘドロが彼女の愛を邪魔をする。

彼女たちの幸せを、奪おうとする。

許せない。あんな甘く優しい日々を穢す連中は、許せないツ！！

あの人には、幸せになつて欲しい。一度は間に合わなかつた。消えてしまつた。

一度は巨大な悪を逃してしまつた。逃げられてしまつた。

だから、今度は間に合わせる。必ず。

この美しい愛を謳う彼女たちを、ずっと見ていたい。

友人になつて、彼女たちの幸せを祝福したい。

奪つた家族がいう愛は、真つ赤な嘘。

奪われた家族がいう愛は、純白の真実。

自分は手遅れになつた。もう、目の前で失いたくない。

自分がそうしたいから、そうする。

祝福を。彼女たちに、永遠の祝福を!!
永久に幸福が、続きますように!!

事前調査、報告書。

イギリス駆逐艦『ジャーヴィス』。

備考。過去に親族に対する殺人未遂あり。嚴重注意。

家族が殺された。

深海棲艦に殺された。

高校生の頃、海軍が侵攻を許したせいで、両親は死んだ。

姉だけは残った。姉は心配してくれた。

姉は優しい。それが苦しい。

姉は強い人で、自分は弱い人。

姉は前に進んだ。自分は立ち止まった。

姉は受け入れた。自分は逃げた。

高校の終わりに、お酒に手を出した。

それから数年は、ずっとお酒ばかり飲んでいた。

今も飲んでいる。ずっと飲んでいる。

飲みたいから飲むんじゃない。

飲まないと生きられないから飲む。

姉に止めろと何度も言われた。

その都度止めないと言い返した。

止めない。止めたら死ぬしかないから。

止めなくてもその内死ぬ。でも、お酒を飲むお金も必要。

艦娘とかいう海軍の仕事を募集していた。応募したら受かった。

それからは、ずっと酒浸り。仕事でもお酒しか飲まない。

便利な体。アルコールをいくら取っても死ぬ心配がない。

戦うときも、痛みを感じない。意識が朦朧とするけど、戦った。

知らない間に大抵勝てた。自分は物理で強いらしい。

姉も、心配して艦娘になった。似たような艦娘になった。

姉はまだ、酒を止めろと言った。もう正論は通じない。

艦娘はアルコールじゃ死なない。戦場で撃たれて死ぬだけ。

それならそれでいい。死ぬなら死ぬで、別にどうでもいい。

姉はいい加減、自分に構う事をやめて欲しい。

自分を過保護に心配して。大丈夫、死ぬだけだから。

どうせ生きながらアルコール漬けになった死人。

価値などないし、あっても自分で認められない。

姉は自分の幸福を掴まないとはいけないのに。

もう、十分だから放っておいて。

丁度良いチャンスだったから、海外に逃げた。

姉がそれでも追ってきた。勘弁してくれ……。

イタリア重巡『ポローラ』。

備考。重度のアルコール依存症を発病。要注意。

自分は普通だと思う。

大した長所もない、普通の女の子。

一般的な家庭で生まれて育って、高校生やって。

何か母国初の榮譽ある何とか艦娘とかいうモノに選ばれた。

素質があるらしい。両親も喜んでくれたので、戦うことにした。

自分のため、家族のために。

スウェーデン軽巡、『ゴトランド』。

備考。並大抵の相手に動じない根気よさと強靱なメンタルが突出している。期待。

高飛車だと、よく言われる。

当たり前だ。自分は選ばれた人間なのだ。

何をしてでも完璧にしないと気がすまない。

だから人知れず努力するし、選ばれた人間としての責任も果たす。

逃げない、折れない、挫けない。それが信条。

傲慢？ 役目を果たさない奴が生意気を言うな。

文句があるなら結果を出せ。ならば見ろ、この優秀な数値を。

口だけを動かすなど笑止。結果を出してこそ、選ばれた人間。

弱者には分かるまい。この結果は、才能などではない。

挫けぬ努力の証、即ち秀才である。天才じゃない、秀才。ここ重要。

才能はないので根性でカバーした。そしたら出来た……こほん。

兎に角。努力で築いたものなので信用してよし。敬つても良いのよ？

アメリカ戦艦『コロラド』。

備考。高飛車で攻撃的。他者を直ぐに威圧して見下すため、トラブル続出。要注意。

この面子、本当に大丈夫だろうか？

妹が心配で何とか滑り込んだけど、どう見てもいがみ合いしてる……。

妹は相変わらず泥酔で、話を聞いてないし、戦艦は妹に突っかかるし。

制止すれば、今度は此方に飛び火する。

艦隊として生き残れるだろうか……。

もうたぶん無理な気がする。

マトモなのが軽巡さんしかない。あの駆逐艦たちは……凄く怖い顔を時々している。

空母がないから、代わりの役目を自分が果たす……のはいいけど、話を聞いて戦艦の人。

気合いだけでそんなに載せるの無理。限界あるから。特訓しても無理、自分重巡。

聞いて、話を聞いて。お願いだから。一緒に特訓しても限界を見て。

……お腹が、痛い。お薬ください……。

イタリア重巡『ザラ』。

備考。根気があるがストレスを溜めるため、心労で倒れる回数が激増中。要医者。

騒がしい。喧しい。鬱陶しい。

どうでもいい。自分で決めて、自分で行動する。

コイツらの面倒は見ない。自分でやれ。

合わせるのは必要なときだけ。分析はしている。

鉄屑以下が一人。知り合いが一人。お人好しが一人。高飛車脳筋が一人。不幸属性が一人。

足手纏いがいるが、最悪見捨てればいい。こいつは死んでも良さそうだ。

死にたいって、自分で言っているらしいし。

敵じゃない。敵じゃないのは分かった。

全員、割と理解ある……とは違うか。

鉄屑は無関心、知り合いは寧ろウエルカム、お人好しは受け入れ、高飛車はかかって

こい、不幸はビビってる。

っていうか何だかかってこいって。なに？ 実力の程を見せる？

勝ったら飯でも作って振る舞ってやってもいい？

……リンゴ、潰す気でやってよし。小春、殺れ。

ドンパチ始めた。悪人ではないようだ。なので一応、招こう。

自分の鎮守府に。

日本駆逐艦『夕立』。

備考。非常に危険な艦娘。異名が狂犬。

無数の上位深海棲艦を従えており、本人もオーバーフローという現象を起こす暴走がある。刺激して暴れだせば大和以外では制止不可能。

更には一時的に深海棲艦にもなるといふ。その脅威は未知数である。

無関心ならば被害が出ないと大和からの報告あり。

決して立ち入るな。近寄るな。敵対を禁ずる。

以上、候補艦娘全ての事前調査を報告する。

翌日。

荷物を纏めて、七海は大本営に向かった。

既に到着して化粧室で軽く着替えた。

今回は桜庭より、私服で良いと言うので何故か春雨のメイド服を借りてきた。

何分急な話だったので、荷物も最低限で着替えもない。

軍服以外は着替えがないので、困った。

とりあえず、行けと言われた部屋を目指して廊下に出る。

ホワイトプリムとクラシックな漆黒のメイド服。

成る程、軍人しかいない大本営では目立つ。

が、今は海外の艦娘が沢山いるから悪目立ちはしない。

道中、廊下で話し合う知り合いを見かけた。島村だった。

緊張しているのか、強張っていた。

見慣れない軍服の顔に傷のある、腕組みをして不敵に笑いタバコをくわえた女性に敬礼している。

「ほう、貴様……この私に向かって、堂々と国防を謳うか。面白い、ならばその誓いの程を見せてもらおう」

「然し、それは……ッ!？」

島村が敬語で話している。と言うことは、階級は上か。

廊下を行き交う人たちは、プレッシャーを放つ女性に竦み上がっているのか近寄ろうとしない。

七海は興味があつて、離れた場所で立ち止まって、聞き耳を立てている。

あの豪胆な島村が腰が引けるとは、相当な実力者かもと興味深そうに壁に寄りかかり、資料を読むふりをして聞く。

「案ずるな。これは外交には関係ない。あくまで、私と若造。貴様との問答よ」
「……」

女性は何やら島村を試そうとしているようだ。

島村は神妙に頷くのを横目で盗み見た。

「時間は取らせん。一つ、私が貴様に問うのだ。正直に答えろ」
「……自分などでよければ」

女性の質問に島村は、重々しく答えた。

廊下で何をやっているのか不思議な光景だが……妙にそこまで空気が重い。
張り詰めていた雰囲気のかな、彼女は問う。

「若造。私がこの国を焼くと言ったら、貴様はどうする？」

その問いは、恐らくは目上の軍人に対して、あの島村がどう出るか。

無礼も踏まえて、どういう対応をするかを見たいのかと思つた。
笑っている女性は、彼の出方を窺っている。

「! ……ならば、決まっておりますよう」

島村は質問を聞いて即答した。

同時に腰を低くして、何と身構えたではないか。

女性はニヤリと更に笑つた。

「ほう……戦うか。私と、迷わず。勝ち目がなくとも？」

「無論です。自分は、如何なる存在であろうとも、日本を焼く者と戦います。それが、自分の役目」

様々な違反をすべて無視して、島村は脅威に対しては立ち向かうと言い切つたのだ。

立場も上、強さも上。冷や汗を流しているのを見るに、如何に危険かよく分かった。暫し、女性は真顔に戻り見つめて、再び笑った。

「……素晴らしい。久々に見た良い眼だ。曇りのない信念と覚悟、見せて貰った。この私を前にして、迷いなく身構え闘志を見せる胆力。言葉を偽らずに戦いを選ぶ気概。気に入った、気に入ったぞ貴様。名を問おう」

島村に名を訊ねる女性に、彼は構えを解いてから、名乗る。

「自分は……島村。島村健志と申します。階級は大佐になります」

「島村か。覚えたぞ、若造。よし、決めた。島村大佐、私がロシア式の武術を教えてやろう。貴様も何か技術があるようだしな。今度遊んでやる。良いか？」

何だか一転して、楽しそうにしている女性に、誉れと敬礼する島村。

あの人も海外の艦娘だろうか。話は終わったようなので離れる七海。

その背を、女性は一度振り返り眺めていることを知らないまま、彼女は去っていった……。

乱闘騒ぎ

呼ばれた部屋は、第一会議室と書かれているプレートが掛かっていた。既に中から喧騒が漏れている。これは……言い争い？

(日本語じゃない……。やっぱり、海外の従来型が来ているんですかね)

正直、入るのを面倒に感じるほど、喧しい。

然し七海は仮にも軍人。命令には逆らえない。

渋々入室。すると……。

想像通りの光景だった。いや、もっと酷い。

かなり広い室内の中央で、備品を破壊しながら結構な数の艦娘が、何やら乱闘を起している。

人の壁が出来ていて、先まで見えない。

あらゆる言語が交ざりあって、カオスになっている。

あの壁は、仲裁できずに右往左往している連中のようで、その向こうでは凄まじい怒声が響く。

多分、英語。そこは辛うじて分かる。ふぎけるなどか、ぶつ殺してやるとか。そういう物騒な単語を叫んでいるようだ。

近くにいた、日本の艦娘……丁度知り合いがいたので声をかける。

「鳳翔さん、何事ですかこれ？」

それは割烹着姿の妙齢の女性、鳳翔だった。

七海が従来型になったときに一度顔を合わせたきりだが、一応は知り合い。

今は本名で呼ぶなど言われたので艦娘名で問いかける。

鳳翔は途方に暮れていた。七海が声をかけると、助かったように言う。

「ゆ、夕立さん……。あの、喧嘩してるので止めたんですけど……」

「全員血祭りで？」

「しませんよ!？」

これでも一応は階級は中将。桜庭よりは下だが立派な役職。

なのだが……如何せん相手は海外の艦娘。

事情が見えないので、迂闊に止めるべきかも分からないし、悪化させる可能性がある。

喧嘩の理由は不明。鳳翔が到着の時点で室内はこんな感じだった。仲裁している艦娘も加わって余計に拗れる乱闘。七海はほつとけと言った。

「この英語の発音の感じだと、相手アメリカですよ。あたしが習ったのが丁度こんな感じなので、ギリギリ分かるぐらいで言葉は相手には通じてません」

「……………多分、聞き取れる限りはドイツの娘だと思っただけど…………」

多国語を分かる鳳翔いわく、相手は恐らくはドイツ艦娘。あとフランスとイタリア。なんかドイツと手を組んで、アメリカを攻撃しているようだ。

他にも色々な言語が飛び交う。最早これは収拾がつかない。

七海は冷静に、諦めろと首を振る。

派手にガラスが割れる音がした。人様の総本山で何してるんだコイツら。

ぎやあぎやあ罵倒が飛んでいる室内で困惑する艦娘と、仲裁する艦娘と、静観している艦娘。

よくやる、と呆れている頃に、ドアがまた開いた。

『……………案の定来てみればこれか。小娘共が意気がつて調子にのつて…………。殴られないと分らないか』

と、先程の顔に傷のある艦娘が入室してきた。

凄い憤怒の表情で、ロシア語を呟いている。

七海はその様子を黙って眺めることにした。

鳳翔が直ぐ様助けを求めると、

「鳳翔……だったか？ 大和の知り合いだとかいう。任せておけ。私が戦いと言うものを……教えてやるツ!!」

と、人混みを掻き分けて進軍。数秒後、ひっくり返ったような悲鳴が聞こえた。

あと、重たい音も。これは、殴ったか何かしたか。然し重低音過ぎる。

(あの体格……あの人戦艦ですよ。相手死んでませんか?)

七海よりも大柄で、腕つぶしも強そうな人だった。

今の音を聞く限りは予想するのは戦艦の艦娘。

それが殴打したとなれば、下手すると死にそう。

仮にも、最終兵器の候補生と言えど……。

いや、大和の知り合いとか言ってた。詰まりは、桜庭の知り合い。

要するに、彼女最終兵器だ。多分。ロシアだろうと七海は推測する。

「ああ、そんな暴力で解決だなんて……!?!」

「寧ろ暴力以外でどうしろと？ 喧嘩の仲裁で効率が良いのは互い以上の武力で双方潰すことですよ。確実に終わります。で、そのあと正論で論破してそれでも歯向かうならもう一回潰すと尚完璧です」

口元を両手で覆つて青くなる鳳翔に七海は冷酷に言った。
甘すぎると。興奮している相手には大抵言つても止まらない。

だつたら、ああいう風に殴ればいい。それが一番確実で手っ取り早い。

鳳翔は啞然としている。

七海は妥当な判断と思ひながら、恐らくは壁の向こうで血祭りにされている連中の声を聞いていた……。

で。

結構な数が、彼女に鎮圧されて憲兵に捕縛されて床に転がっている。

頭から血を流していたり顔が歪んでいたりする。応急処置は受けたが痛そうだ。

で、割れた窓は速攻で予備に替えて、破壊された備品は皆で片付けて。

心底呆れている先程の女性が、腕組みをしてそれぞれ座ったり立つたままの皆の視線の前にいた。

どうやら、他の部屋にも似たような連中はいて、似たような事をしていたらしい。さつき、建物全体がぐらっと揺れた。桜庭が怒って介入したんだろうと女性は言った。

流石に大和の名前は知っているらしく、海外の艦娘は一同震え上がった。

ここにいる日本の艦娘は鳳翔と七海、その他数名。

七海を見て嫌悪感を表すが、それだけ。襲つては来ない。

その辺の分別は互いについているので、良かった。

鳳翔は大人なので七海を表立つては嫌悪しない。腹の中ではどうだが知らないが。

「貴様ら、私の予想通り一緒にすればこれか。この低脳共が」

開口一番、女性は流暢な日本語で罵倒を吐き出す。

海外の艦娘は、それぞれ持つてきたのか翻訳機らしきものを片手に、罵りを受けたと知って睨んだ。

一緒にされたのが不愉快なのだろう。

「なんだ、生意気な目をするな。ならばなぜ己の品格を下げる真似をした？ なぜ止めなかった。なぜ見ていた。貴様らはこれでもここに呼ばれるぐらいの実力は最低限あるだろう。挙げ句には諸国に知らせずに、自称最終兵器と名乗っている奴等もいるだろう？ 言うなれば国の顔。ならば言うが、貴様は己の国に泥を塗るのか、目先の感情で。」

「バカが、恥を知れ」

ぐうの音も出ない正論だった。

自分の立場を弁えなかった自称最終兵器の一团に容赦なく罵る。

七海は詳しくは知らないが、少なくとも女性の言い分は間違いいではないと思う。

仮にも国の代表が乱闘騒ぎなど普通は起こさない。しかも勝手な理由で。

「知っているだろう。最終兵器には、国際的にも規定はある。そもそも勝手に名乗れるようなモノではない。この時点で乱闘を起こしたアメリカのバカ娘。貴様は失格だ。出ていけ。アイオワの後継ぎには出来ん。短絡的な思考をする戯けは必要ない。とつとと帰れ、目障りだ。そして喧嘩を売ったドイツのお前。もうお前も権利はない。私たちが審査をする旨は聞いているハズだ。私が却下した時点でお前は用が済んだ。早く消えろ」

七海は知らない。そういう基準なのかこれは。

桜庭は取り敢えず来いとしか言ってなかったのに。

で、女性は数名指差して退室を命じた。失格らしい。

不愉快そうに、然し言い返せない一同は黙って背後で待機していた憲兵に引き摺られていく。

痛いとか丁寧扱えとか叫んでいるようだが、

「貴様らにはそんな丁重さなど必要あるまい？　ここは日本で、貴様らの勝手を振る舞える場所じゃない。こういう連行されるような危険な猛獣にはこれで十分だろうよ。……済まないな、手間をかける。大和が指定の場所にこのバカ共を捨てておけと言つていた。宜しく頼む」

女性は憲兵に頭を下げて、憲兵達は敬礼して、連中を持っていった。

閉じられるドアを見送つた彼女は、今度は止めなかつたのと静観していた連中に矛先を向けた。

「では、次にいこうか。なぜ貴様らは止めなかつた？　理由があるなら聞こう。言い訳を聞いてやるが、自分から言える者はいるか？」

一瞥して、女性は責めるように一同に問う。

皆、視線を逸らした。かなり威圧的な態度に、怖がっているようだった。

あの血祭りを見たあとでは仕方無い。七海はアクビをしながら、聞き流す。

退場できるならそれでもいい。早く帰りたい。下らない命令を受けたものだともう思つていた。

怖いものはない。寧ろ失う方がよい気がした。

「おい、その侍女。貴様、能天気にあくびとは良い度胸だ。ならば、貴様から言え」
で、目敏く女性に見られて呼ばれる。七海は億劫そうに女性を見た。

女性は睨んでいる。確かに結構なプレッシャーにはなるが、七海は生憎他人の感情などどうでもいい。だから、素直に答えた。

「止める理由がないからですが？」

真つ向から、理由などないと言い返した。

「……なに？」

意外な返答に女性の眉が上がる。

殺気が放たれたような気もするが、だからなんだ。

知ったことじゃない。七海は続ける。

「ですから、特に制止する理由など無い、と言ったのです。連中が乱闘をするなら止めろと、誰かあたしに言いましたか？ 生憎、あたしは単なる軍人です。命令以外は何もしません。そして、あたしはこの部屋に向かい待機しろと言われたのみ。ですので待機していた。あたしは自分の任務を遂行しています。それが何かあたしの落ち度によって、落ち度が発生した場合責任を取りましょう。然し、あの乱闘はあたしが来た時点で既に起こっていたもの。つまり、原因はあたしじゃない。乱闘を止めることは命令に入っていない。だから止める理由も無い。勝手にやっていたばか騒ぎなど、あたしには何の因果関係など無いんです。故に、止める理由が無いと言ったのですが。何か間違っていますか？」

「……………」

七海は、こう言いたいわけだ。

自分の任務しかしてない。それ以外は関係ない。

七海は一切関与しないのに、同室にいた以外に関連しない彼女を連帯責任に巻き込むなど。

「見なかつたふりでも言いたいのでしたら、それこそ言いがかりですよ。見て判断しただけです。自分にとっては不都合でしかない事案に突っ込んでいく程、あたしは暇ではないので。お気に召さないなら結構です。失格にでも何にでもしてください。あたしは何だつて構いません。単なる命令ですから。失格になればそれで終わりですので」

淡々と、女性に向かって説明した。挑発とも言える内容を。

よくあれほどの実力差を見て恐怖しないと周りが目を疑っていた。

怖くなどないし、興味も無い。

「……………そうか。成る程、理屈になつていないような理由だが、分からなくもない。良からう、今回は見逃してやる。だが、次はないぞ侍女」

何でか見逃された。何なんだ一体と思いつつ、七海は成り行きに任せた。

女性は七海の顔を見てから、呆れているように見えたのは……………気のせいだろうか？

兎に角、とても穏やかとは言えない空気は続いていく……………。

共に戦う艦娘たち

ロシアの女性に、詰問されて過ごす時間。

女性は、ガングートと名乗った。

察しの通り、ロシアの最終兵器と言っている。

彼女は、世界中の艦娘たちを集めて、自分の仲間に対応しいかを審査すると言っている。

正直な話、厄介な空気しか感じない。

この話し合い自体が、一種のふるい落としを兼ねているようで、次々と脱落していく。数少ない見逃された彼女は、減っていく室内を見て何も思わない。

寧ろ、自分が立ち去りたいとも思う。面倒くさい。

が、見逃されているせいか、その逃げられる仲間には入れないようだ。

思い通りにならない。

臆て、半分ほどに減らしたのち、ガングートは言い出した。

「最低限。貴様らは最低限の素質ぐらいはあるのは認めよう。だが、試練は続くぞ。次は実戦試験だ。貴様ら、今から次の部屋に向かえ。そこで、自分達で艦隊を作れ。試験を共に乗り越える仲間を見つけろ。そして、リーダーを定めるのだ。但し、時間制限は一時間。同国の艦娘は二名までだ。分かるか？ 仲良しこよしではここで詰まる。かといって先程のような事をすれば時間制限で脱落する。然し適当な仲間を引き込めば勝てなくなる……。さて、貴様らの采配を見させてもらおう。精々足掻けバカ娘共。社交性やら協調性やら足りぬ貴様らでどこまでマトモな艦隊を作れるかな……？」

愉快そうに笑ったガングートに指示されて、渋々向かい出す皆。

七海は聞いてなかった。窓の外を眺めていて、聞き流していた。

「おい、貴様。早く行け。寝ぼけているのか」

ガングートに言われて、アクビをして向かっていく。

その様子に、ガングートは思わず聞いた。

「貴様……やる気あるのか？」

「任務ですので」

質問には答えないが、言外に任務でなければやらないという意味だろう。

最早言葉もないガングート。大和の説明通り、自分からは得にならねばこの態度。慇懃無礼という諺を思い出す。

最後尾に出ていった彼女を見送り、別室でモニタリングしている皆に一報。予定通りに進行中、次に向かう。

他の部屋にいた連中も、一堂に会して集まり、指示通りギスギスした空気の中で模索している。

翻訳機があれば、言葉は通じる。ただ、揉め事を起こせばもう次はない。慎重に行うも、だが時間制限という壁もあり、自分達のプライドもある。

一番は、勝てない相手と組まないようにすること。

それが、一番の探りあっているポイント。

まあ、大体が民間上がりの素人に過ぎず、こう言うときには提督をしている軍人は重宝される。

早々に鳳翔は回収されて次の部屋に。残った海外艦娘は一番の狙い目が消えて困っ

ていた。

その他、日本艦娘は全てが提督を兼ねているのであつという間に消えた。

残ったのは……窓際で眠そうにしているメイドだけ。

唯一、日本艦娘で取り残されたのは七海のみ。

仕方無い。相手は悪名轟く狂犬で、しかも深海棲艦の女王。

誰が勝つために、敵の親玉を仲間にする。散々人間を血祭りにしたような犬を。

皆、怖がつて近寄らない。故に、残される。

七海は自分からは動かない。退場しても最悪構わない。

怒られはするだろうが、最悪どうにかする。

取り敢えず面倒臭い事は避けたい。

皆が戦々恐々と声を掛け合い、価値観の違いでにらみ合いをしているのを見つめていた。

残り、半時間。どうするのかわかりかかっていると、命知らずとも言える一人が声をかけた。

『ねえ、あなたももしかして本屋さんの時の艦娘さん？』

流暢な英語で話しかけてきたのは……。

『……おや、そういうあなたはジャーヴィス、でしたか？ お久し振りですね』

白いミニスカートワンピースに海兵隊の帽子。長い金髪と碧眼。

知っている顔だった。名前は……確か、ジャーヴィス。

イギリスの駆逐艦だったか。

『やっぱり！ あなたも来てたんだ！』

ジャーヴィスは嬉しそうに、七海の両手を取って笑った。

久しぶり、と微笑んで挨拶してから本題を切り出す。

『夕立って言うんだね。一緒に組もうよ、あたしたちと！ あと一人でクリアできそう

なんだ！』

『……へえ？ あたしの評判を知っての事ですか？』

あまりの無邪気さに、七海は嘲笑うように聞いた。

こんな爆弾を内部に引き込むなど正気かと、聞く意味で。

その意味を、ジャーヴィスは。

『知ってるよ。深海棲艦を預かっている人なんですよ？ だから何？ そんなのどうで

もいいよ！ あたしは夕立にお礼したいし、知り合いが試験に落ちるのは見てられない

しー！』

ケラケラ笑ってどうでもいいと言っていた。

他の連中もジャーヴィスがどうにかすると言うし、責任は取ると言った。

何をそこまで気に入ったのかは分からないが……七海は澁々、ジャーヴィスの誘いを受けた。

根負けした。無邪気に誘う彼女には悪意は感じない。

お返しをしたいと言われれば、仕方なくもついていく。

『はあ……。そこまで言うなら、全部任せますよジャーヴィス。責任は取りませんからねあたしは』

お前が言い出したので面倒なことは全部やるならという条件で請け負った。

途端に大喜びするジャーヴィス。跳び跳ねて歓喜している。

『ラッキー！　これで何とか出来るよ！　提督経験者が居ればまだ頑張れる！』

結構計算しているようだったが、七海の知ったことでもない。

勝てなくてもよいし、七海の責任にはならない。

そういう約束で一緒に入ったのだ。

ジャーヴィスは次に行こうと、七海の手を取って向かいだした。

こういう、距離感を無視する相手は嫌いなのだが……ジャーヴィスが素直に喜ぶからか。

澁々、七海も黙って引つ張られていった。

そして。

「大丈夫なんですかこれは？」

肝心の艦隊の連中が、不安になる奴らばかりだった。

確かに、七海の存在を説得して認めさせる事には成功している。

だが、なんだこれは。勝ち目あると思っっているのか？

こんな偏った編成で？

「失礼ね。このビッグ7の一人がいるのに、何が不満なのかしら？」

尊大な態度で此方を見下すアメリカの戦艦に。

「まあまあ、落ち着いて夕立さん。この人はこう言うのがデフォルトだからさ」と、宥めるスウェーデンの軽巡に。

「……………ポーラは、何でも良いですよ……………」

ポーツとして泥酔している、真つ昼間から酒臭いイタリア重巡妹に。

「ポーラ!? 今日はお酒飲まないって……………ああ!? 蓋がない!？」

慌ててピンを奪い取り、愕然とするイタリア重巡姉。

『ゴメン、あたしまだ日本語わかんないから……コロラド、通訳して』

日本語分らないジャーヴィス。

待っていたのは、まさかの空母のいない艦隊であった。

空をどうするのだ、と七海は聞いた。

水上打撃力に特化しすぎて、足元と頭上がお留守になっている。

「あ、空母居ないけど水上戦闘機と爆撃機なら使えるよ。私とザラが空母の代わりに飛ばすけど、やっぱり不安かな？」

スウェーデン軽巡がそう能天気と言うが、空母と軽巡と重巡の搭載数は格段に違う。

銀髪で、ほくろのある綺麗な女の子。青い制服の彼女は、ゴトランドとか言うらしい。

上手な日本語で、七海に空母がいなくとも大丈夫と笑う。

何でも、日本の刀を持った師匠と呼ばれる戦艦が、すごい性能の航空機を教えてくださいたい。

瑞雲とか言う、七海もよく知るあの艦載機。

(瑞雲って確かに傑作でしょうけど、果たして優秀でしょうか……?)

数値を知る限りは普通の水上爆撃しかできない至って通常の艦載機だが。

そう言えば新しく瑞雲教とかいう怪しい宗教団体が最近出来たとかどこぞで聞いた。ゴトランドは既に入信済みか。弱ったもんだった。マトモそうな人なのに。

「これでも防空巡洋艦だからね。空の守りはゴトに任せて！」

七海の知る、五十鈴のようなもの。似たような感じだそうさ。

逆に水中はジャーヴィスが爆雷ぶちこむので問題ないと言うし。

潜水艦を殺すのは十八番。ヘッジホッグが火を噴くとかよくわからない事を言っていた。

『イギリスにいる頃から、潜水艦ぶつ殺すのは得意なの！ あたし、こう見えて逃げ足も自信あるんだ。あとは……そうだね、自分で言うのも何だけど、ラッキーな方だと思うわ。結構幸運だから、いざとなれば運試しにも勝てる、かも！』

と、コロラドと言われた袖なしブラウスにデニムスカートの戦艦が通訳しながらジャーヴィスは言った。

可愛い顔してぶつ殺すとか恐ろしいことを笑顔で言う辺り、可憐な見た目によらず好戦的だった。

問題は……。

「……」

ポーツとしてこの泥酔重巡。虚空を眺めて話を聞いていない。

魂が抜けている。姉のザラと名乗る女性が頭を下げ謝るが、元からこういう生活をしていよう。

「た、戦いはこれでも妥協するぐらいには強いんです！ 怒っても聞きませんけど、ザラもフオローしますから！ すみませんすみません!!」

必死に謝罪する姉とは裏腹にボケーツとしている妹。

眉がつり上がっているコロラドは腕組みして仏頂面になった。

ゴトランドも気にしないとは言うが、ポーラという重巡を心配そうに見ていた。

こう言うとき、ハッキリとモノを言うのは大体こいつである。

「役に立ちそうにないですねこいつ。追い出しませんか？ 足を引つ張る不安要素は排除すべきかと」

七海であった。迷わず置物になるポーラを切り捨て、空母を入れるべきと指摘した。

七海の指摘は間違いじゃないと、コロラドも賛同する。

「その虹彩異色の駆逐艦の言う通りね。努力する気持ちもない怠け者など、我が艦隊には不必要。即刻、切り捨てなさい。私は、戦う艦娘としてここに来たの。負け犬に興味などないわ」

「同感です。屑には用事はありません。ザラさんは兎も角、この女……話すら聞いてないところを見る限りは、やる気そのものの欠如と見て良いかと。ジャーヴィス、こいつ

の代わりに空母を見繕ってくれませんか？」

失せろと言うコロラド。屑と淡々と吐き捨てる七海。

ザラはぐうの音も出ないと認めていた。事実、ポーラの評価は頗る正しい。

ゴトランドが言い過ぎと言つてから、軽く謝るが撤回はしない。

『えっ!!? いや、もう空母は皆いないと思うよ? ほら、艦隊の中核だし……手遅れじゃないかな?』

ジャーヴィスも話をフラれて困る。

急に言われても、周囲も完全に艦隊を作り終えて次の部屋に向かっている。

残っているのは、無駄に敵意をむき出しにする残り物で、これも地雷にしかならなさそうだった。

「別に、ポーラは構いませんよ……。ほら、どうせ役立つ事はないですし……」

本人もこんなダウンナーでは途方にくれるしかない。

時間もない上に、そろそろ次に進まないと言き添えて失格になりそうだった。

「はあ……」

大きく溜め息をついて、おろおろするザラに向かって聞いた。

ポーラは、酒を与えれば役に立つか。

「えっ?」

「ですから、非番などで勝手に飲むのはこの際、妥協しますよ。戦闘中に泥酔さえしなければ。まあ、この様子じゃ恐らくは慢性的なアルコール依存症なんでしょうけど……。仕方無い、あたしがこいつを医者に連れて行きます。軍医なら、アルコール抜くぐらいは何とかしてくれるでしょう。最悪、監禁でも軟禁でもして酒を抜きます無理やりに。禁断症状がなんですか。そんなもの、ドックに放り込んで徹底的に素面になるまで繰り返すまでです。コロラドさん、こいつはやる気がない前提で使いまししょう。日本には、バカとハサミは使おうという諺があります。あまり、軍人としてはやりたくない戦術ですが、本人がやる気がないなら致し方ない。痛い目を見てもらって反省させれば良いかと。時間も惜しいので、爆弾を抱えて申し訳ないのですが妥協はしてもらえませんか？」

恐ろしいことを言い出すと、ポーラが一瞬で驚愕と恐怖で青ざめた。

七海は要するに、本人がこんなならば周囲が勝手に役割を押し付けて使えばいい。やる気を出さない限りは非情に扱おうと提案した。

「随分とハッキリ言うわね、貴女は。その姿勢、嫌いではないわ。なし崩しとはいえ、こんなこぶつきでは大層戦いにくいとは思うけど、それでも共倒れよりは万倍良いのも事実だし。良いわ、受け入れましょう」

コロラドは割り切ると言って、受け入れた。

ポーラが何やら今頃言い出すが、七海は理屈で封殺した。

お得意の理論武装による精神攻撃。ポーラは一分後には泣き出した。

「夕立……事実でももう少し言い方つてものが……」

ゴトランドが少々苦言を呈するが、

「甘やかすとこの手合いは必ず増長します。アルコール依存症など、本来ならあり得ないモノを抱えるのであれば、優しさなど不要。叩いて強制的に矯正させます」

バツサリ切り捨てて、ザラには痛みでアルコールを抜くと言うと、それでいいと許可が出た。

ジャーヴィスも酔っぱらいにはよい薬と言って助けないし、結局ポーラも続投した。

但し、それはただ辛く厳しい茨の未来の幕開けだった……。

立案、ABC作戦!

愛情は、何が正しいと思う?

正解はたくさん見てきた。けれど、どれも納得できるものじゃなくて。

所詮は幻想。二次元の世界。都合のよい、理想しかない訳だが。

それにしたって、なぜこんなにも解答は溢れているのに自分は納得できないんだろう?
?

間違えたからか。失ったからか。逃げてしまったからか。間に合わなかったからか。

でも、当時の自分は無力だったのだ。今考えても、結果は変えられたか……。

言い訳か。手遅れになった今だから言える、情けなく見苦しい言い訳。

悲しいけど、失った愛情は戻ってこない。時は戻らない。二次元とは違う。

でも。また、出会ったのだ。自分が少なくとも、その調和を見ていたいと思える愛の姿を。

嘗て見ていた、混じっていたあの幸せな世界が、そこにはあつた。

素晴らしい。美しい愛があり、そこには確かに幸福が詰まっていた。

……なのに。

世界が、また、愛を阻む。邪魔をしているらしい。

何故？ 何故愛を潰そうとする。

ただ、幸福な時間を過ごす無害な世界を破壊する。

脅威という。バカを言う。脅威なのはお前たちの方だ。

なにもしない人達を蹂躪して迫害する邪悪な存在が、何を言う。

殺そう。殺してしまおう。端役が主役を追い出す恋物語が出来ないように。

今度は、間違えないように。主人公とヒロインが愛を貫く、その為には。

——読み手が作者を襲って、余計な端役を削らせることだから。

七海たちの艦隊は、リーダーをコロラドに決めた。

最初はジャーヴィスが七海を推薦したが、

「嫌です」

と速攻拒否して、立候補したコロラドに決定した。

コロラドは言った。自分がリーダーになったからには、怠けは許さない。

ビシビシ鍛えていくとノリノリで言っていた。

実際、高飛車ではあるがコロラドの指導は的を射ており、七海的にはやり易い。

然し、ポーラは相変わらずやる気がない。なので、七海がザラと共に医者に連れていった。

無駄に抵抗するので、面倒臭くなった七海が一発腹に蹴りを入れて失神させた。

流石重巡。蹴られた程度じゃ大した傷は負わない。ザラは真つ青になったが。

で、三日ほど入院してアルコールを抜いた。強制禁酒で、ポーラは漸くシラフになった。

「お酒……」

「ポーラ。仕事中に飲むなって言ったでしょう。次は腕をへし折りますよ」

「ひいっ!?!」

あまりに酒を寄越せと五月蠅いので、暴力による支配を執行した。

正直、野蛮な上に流儀じゃないのでやりたくないが、ポーラが公私を弁えずに飲酒するので、最早仕方無い。

口で言つて止める次元は過ぎている。後は叩いて教えるしかない。

もう虐待か何かだと自分でも思う。然し、甘やかせばまた元通りなので、自分を殺して進める。

大本営で過ごしていた海外艦娘たちは、試験のために全国の鎮守府に預かつてもらい、当日まで過ごす。

受け入れ先でも早速問題が発生しているようだったが。

いざこざが発生しているとしても、七海の知ったことじゃない。

七海の鎮守府でも、ジャーヴィスたちを受け入れていた。上からの命令なので逆らえない。

特殊な事情は皆はわかっているとは言うが、イマイチ信用は薄い。

七海は暴れたら追い出すと脅してから、先んじて鎮守府にいる艦娘と深海棲艦に、客人が滞在すると通達。

なるべく隠れていると言っておいた。

問題があればその場で対応すると約束して、招き入れた。

その矢先の、出来事であつた……。

『あ、同人誌の艦娘！ やっぱりあの時のエッチな駆逐艦だ！』

「い、いやあああああー！ー！！」

招いた当日に、ジャーヴィスがメイドな村雨を発見して英語で指差す。

ある真夏日の昼下がりに、隠れている深海棲艦以外の、数少ない犠牲者が出てしまった。直感でまた自分が餌食になったと察知して悲鳴をあげて耳を塞ぎ、踞る村雨。

廊下のお掃除をしていたのだが、客室に案内している最中に村雨を見つけてジャーヴィスは七海に聞いた。

二次元のお得意様、ジャパニーズエロ艦娘村雨かと。

『知ってるよ、あらゆるジャンルで確実に一冊は存在する謎の村雨嬢！ イギリスにいる頃から愛読してたんだよね！ 実物間近で見るのは初めてだけど、可愛いー！』

踞る村雨相手に走って近寄り、どんな顔をしているのかりアルで見たいとお願いしているが。

村雨はこれ以上そういう題材にはなりたくないの、必死に抵抗。そもそも何を言っ

てるか分からない。

唾然としている周囲と、すごい目で睨んでいる七海にジャーヴィスは気づかない。

絶対に視線を合わさないで聞こえない見ないを貫く。可哀想に、苛めに等しい光景だった。

本屋で真つ先に声をかけたのも、知っている顔だったから。

ジャーヴィスは所謂、二次元オタクという人種であり、エロでも何でもありの雑食だそう。

同人誌も趣味に入り、村雨は特にお気に入り題材だそうだが……。

『ジャーヴィス……。あたしのメイドに、何してるんですか』

プルプル震えている村雨に嫌がらせに近い行為を自覚なしにしているジャーヴィスに、七海がキレた。

この娘、七海のメイドにちよっかいを出した。有罪。

客人だから何だと言わんばかりに近づいて、後頭部を左手でワイルドに鷲掴み。で、英語で聞いた。

『二次元と、三次元は別物。分かりますね？ うちの村雨は、至って健全な艦娘です。混同すると、このまま粉碎しますよ。この見境のない茹だった頭を、この場で』

目元に陰りがある七海の劍幕に、案内中の皆も絶句した。

凄まじい殺気とプレッシャーを放ち、今にもジャーヴィスを殺そうとしているような感じだった。

めちやくちや怒っている。村雨が涙目で七海を見上げていた。

「提督う……」

「村雨。気にしないでくださいね。この変態駆逐艦は今すぐ血祭りにしあげますので」訂正。今すぐ殺そうとしていた。

そのまま壁に顔面から叩きつけようとしている。かなり本気で。

慌てて制止する周囲。ジャーヴィスも顔面蒼白で、既に白目を剥いて気絶していた。

ジャーヴィスですら一発で失神する程の重圧。これが、日本の提督と言うものらしい。

村雨が掃除に戻り、七海は連中に言った。

「うちの娘たちにセクハラしたら殺しますよ。あたしの鎮守府で、皆を悲しませたらお前らもその場で処分しますからね」

処分の意味は、恐らくは殺すという意味だ。

七海が一同に警告した。深海棲艦、または艦娘に少しでも不敬を働けば殺してやる。

忘れるな、自分は駆逐艦である前に提督であり、ここの長なのだ。

「ポーラ。ここでは、あたしが指示を出します。抵抗したら独房に入れてアルコールを抜きます。ザラさん、妹がバカをして倒れる前に医務室に行きなさい。心労は艦娘でも天敵です。ゴトランド、瑞雲の使い方はうちの艦娘と練習なさってください。結構な数の瑞雲が余ってます。山城、扶桑、由良、鈴谷などに聞くと良いと思います。コロラドさん、後で作戦を決めましょう。一応で良ければ提督の経験と知識、お貸します」

ジャーヴィスを掴んだまま、七海はそう皆に通達。

万が一、何かしたら……命はないと思えと脅した上で。

「ここは、世界でも稀な深海棲艦と共存している鎮守府。あたしがその調和を保っている以上は、あたしの判断で皆様の処遇を決めます。良いですか、深海棲艦を見かけても決して攻撃したり罵倒したりしないでください。したら、ジャーヴィスみたいになりません。怪我させたら生きたまま解体します。脅しかどうか……試してみますか？」

七海の顔は、真夏と言うのに背筋に悪寒が走るほど冷たくて。

それほど、この皆を大切にしているという意思と、家族のように愛している証拠なのだろう。

恐ろしい女だと皆は思う。逸話通り、他人に対する異常な攻撃性は間違いない。

だが、噂とは違い根拠はあった。身内のためという、分かりやすい理由。

コロラドは頷く。ゴトランドは笑顔で了承。ポーラは絶句して、ザラは血の気が失せ

ている。

そんな危険な巣穴に……皆は訪れてしまったことを、後悔したり受け入れたり様々だった。

さて。

問題は、最終兵器たちの課題だ。

第一試験はまず、先代との戦いという一番ハードルの高い試練だった。相手は一人。此方は六人。それで演習で争うというシンプルなものだ。

「力押しで勝てないの?」

執務室でそれぞれに軽く軽食を振る舞いながら、話し合う。

コロラドが自分達も仮にも最終兵器の候補生なのだから、勢いで勝てないか七海に聞いた。

「コロラドさん、貴方はどうもあたしの上司を侮つてませんか?」

アイスのブラックコーヒーを飲むコロラドに、冷たいお茶を飲む七海は聞き返す。

相手は、何と大和……要するに桜庭だった。七海は正攻法で勝ち目などないと断言する。

一度交戦経験のあり、尚且つ深海棲艦にもなれると知る皆に教えてやった。

「あたしの上司は、あたしが深海棲艦になっても手も足も出ません。以前は、手加減状態で一時間ほどなぶられてました」

これを見れば分かると、以前残していた映像を皆に見せた。

自分の変化も分かるし丁度いいと、テレビに映して拝見する。

数分後には全員真っ青になった。僅かにゴトランドと復活したジャーヴィスは震えている。

「……これでも馬鹿正直に突っ込みますか？」

早送りして、最後に血祭りの自分が映されるところまで見せて、改めて問う。

全員首を振った。勝てる訳がないというお通夜みたいな空気になっていた。

「……いくら私がビッグ7でも、無理なものはあるわ。見てて気づいたことを言っても良いかしら？」

コロラドが、映像を見て絶望的と思う理由を明かした。

それは……。

「あの人の主砲の口径、映像だけでも分かったのだけ……。多分、私の国でいう、20

インチ……センチに直すと、恐らくは50は下らないわね……」

コロラドいわく、普通の戦艦が使える口径じゃないらしい。

巨大で射程が長く、威力も申し分なし。寧ろ過剰なレベル。

自分だって16インチが最高なのに、大和はそれ以上の武装を軽々使っていたと。

補足する七海は更に追い詰める。

「正解です。大和の主砲は、試製51センチ連装砲。あたしが調べ、体験した限りでは世界でのサイズが使えるのは彼女のみ。撃たれた感想で言えば、回避しても爆風でこっちの艦装が吹っ飛びます。範囲も普通の艦娘じゃ広すぎて逃げ切れずに終わります。巻き添えを受ければ直撃せずとも全滅は余裕です。空間攻撃って言うんでしうか。砲撃するだけで、その一帯を粉碎するので想像以上に危険な代物ですかね」

砕けた言い方をすれば、対戦相手は世界最強の万能戦艦。

この国で最低でも一番強い人。一人で十分。

「……どうやって勝つていうの……?」

ゴトランドですら、目が死んで既に白旗。無理だと諦めていた。

最低限、勝たなくても良いから評価をあげれば良いとコロラドは上から目線で励ます

が……。

「あの……ザラは、まだ死にたくはないんですけど……」

「姉様と同じです……。ポーラもあんな怪物に沈められるのは嫌です……」
『つて言うか、詰みじゃないこれ？ 攻略不可能だと思っけどなあ……』

皆には演習だというが、簡単に彼女の戦いは相手に死を自覚させる。

これが、最終兵器の意味だと七海は皆に言うのだ。

「まあ、ルールを簡単に調べましたが、大抵の事は大丈夫みたいです。だから正直に言います。あたし、秘策があります。あたしが共倒れするという条件になりますが。勝てると言えば、勝てるかもしれません。お互いの手の内は知っているんで向こうも何かしらしてくると思いますけど、博打になります。やってみますか？」

七海は皆に聞いた。博打で良いなら、五分五分ぐらいで何とかすると。

驚く周囲に、搦め手を通り越して卑怯その物だと説明した。

「ついでに皆様にも被害が出ます。無差別範囲攻撃なので。全滅だつても否定はできないのですが」

何が言いたいのか、コロラドとジャーヴィスは分かったらしい。

質問をして来た。

「夕立。貴女は無事に帰つてこれるの？」

「深海棲艦になつていれば理論上は可能です。ただ、協力してもらえるかなどの課題はあります」

細かいことがまだあると言うが、とりあえずは大丈夫。多分。

『夕立、それ要するに自爆……』

『どのみち勝率は皆無に等しいのですよ？ 捨て身の一つぐらいしてみないと。やってみる価値ありますし』

英語で応答する七海に、名言を言われたジャーヴィスはならばと言い出す。

『オツケー！ その作戦に乗るよ！ あたしたちが遊びでやってるんじゃないって、大和さんに見せよう！ 平気だよ、宇宙行ってないから！』

『似たようなものですって』

オタク特有のネタの交ざりあつた会話をしつつ、コロラドも現状それしかないならと了承。

ゴトランドも、ダメ元なら賭けてみようと乗ってくれた。

姉妹のみ、嫌そうだがゴトランドに説得されて渋々オツケー。

で、内容を七海は漸く明かした。

それは……。

「世の中には、使つてはいけない兵器があります。ABCというモノですね。アトミツク、バイオ、ケミカル。当然これとは別物ですが、然しあたしは敢えてこの三つに例えます。危ない、バイオ、クッキング。略してABC作戦。あたしの知り合いに、大和を

唯一倒した料理人がいます。その人達に力添えをしてもらいましょう。高濃度暗黒汚染物質による毒殺。それが、ただ一つの活路です」

「愚かな惨事を繰り返す、バカがいた……。」

鎮守府夏休み 前編

皆が鎮守府に来てから、暫く経過した。

周囲の話は聞くが、どうにも他の候補生たちの戦績は宜しくないようだ。

先代があまりにも強すぎると言うのを差し引いても、侮っているせいか惨敗が大半だとか。

日本艦娘の場合は、我が強すぎる周囲が警告を聞かずに調和が取れずに負け、評価が下がる。

下がれば皆との軋轢が広がる悪循環。エリート意識の強い皆は、協調性皆無だった。

(下らない……)

七海は対しての己の艦隊を判断すると、まあ空気は悪くない。

順番待ちになっている試験だが、映像を見たせいで寧ろ慎重になっているぐらいか。

全員が正攻法じゃ無理だと悟っているので、やり方が違う。若干一名以外は問題無さそうだ。ポーラ以外は。

この足を引つ張る重巡が酒を抜いてもやる気を出さずに適当にやっている。

周囲が訓練をしているなか、一人だけ埠頭で海を眺めていたり。

コロラドが怒つて叱つてもけんもほろろ。

根本的な問題のようなので、盾にでもするしかない。

フオローする気はないし、動かないなら囷にでも使えばいいと皆に相談しておいた。

無気力上等。ならば、地獄を見せてやるまでのこと。

ポーラが逃げ回つても無駄なように、徹底的に追い詰めることにする。

提督の視点からしてあの性格は修正は無理だ。ザラが加減してくれと懇願するが無視した。

「痛みを与えると云ったはず。ポーラ、喜びなさい。あたしが、深海棲艦になつて死ぬという感覚を教えてあげましょう」

七海がそのふざけた態度に対してイラついたので、キツイお仕置きに発展。

一度海に引きずり出して、本気で殺しにいった。

ポーラは絶叫して攻撃に堪えていた。

結果、やり過ぎた。

ポーラは暫く再起不能になったようで、夏の酷暑もあり見事にぶっ倒れてしまった。艦娘でも熱中症は無理だった。鎮守府の皆とはそこそこ仲良くやっているが全員が消耗している。

何か対策を考えようと七海は思案していた。

異国の慣れない暑さに、海外の皆はへばっている。これでは訓練にもならない。

「暑い……………どうなってるのこの国……………。猛暑日ってなに……………」

ゴトランドが理解できないと嘆きながらクーラーで冷えた部屋から出なくなつた。

『梅雨つて言うんだっけ？ 確かに酷い湿気よね。あたしは平気だけど』

ジャーヴィスは扇風機で遊んでいるがそれなりに順応している。

「くっ……………。こんな暑さに、この私が負けるなど……………！」

「炎天下で何してるんですかコロラドさん。普通に死ぬので止めてください」

暑さなど気合いで超えるとか言っていたコロラドは炎天下で演習してて倒れた。

変な意味で自分にも厳しい。で、ドックに担がれ暫くお休み。

「……………」

「ザラさんも、具合悪いなら休んでください」

既にゾンビになってハイライトが消失しているザラは、何やらポーラにお見舞いをしようと思いい物に出掛けて、戻って早々ダウン。

ミイラ取りがなんとやら。次々倒れる艦隊の面子。大本営から通達が入ったのは丁度その頃。

あまりの猛暑に、試験を受ける皆の体調が崩れたので延期するという知らせだった。日本の艦娘ですら、見事に入院騒ぎになるレベルだとか。

「ありや……」

折角手配していた秘策の料理。

某男性提督は黒い歴史が来るぞとか叫んでいたが、例の闇色シェフたちのご厚意は受け取った。

最低限の物資は揃った。

ちよつと戦場に持ち込むには準備が足りないので加工している時間が欲しかったので、これは幸運。

『ラッキー！ つてことは、遊ぶ時間もある!?!』

『ええ。準備もあるので少し息抜きもどうぞ。元氣あるなら』

梅雨明けした初日にジャーヴィスはオタシヨップに行くとか言い出して飛び出していった。

凄くイキイキとしている様子で。日本語分からないがオタクの閃きでどうにかするとか言ってるので放置。

七海は着々と進めていた。で、ある程度終わると。

……加工に使っていた材料が余った。主に食べるもので。

暗黒物質シェフ、比叡さんと磯風さんに教わったレシピをアレンジして、より毒性を増した七海お手製ブラックマテリアル。お二人のお手製も含めてたんまりと作成した。

……一応、分類は料理。大丈夫、食える。頑張って試食した。

臭いで一回気絶して、食って一回気絶した。お腹痛くてドックに自分で向かった。

これなら桜庭でも倒せるだろう。……お二人の奴は食べてないけど。

気にしない。死にはしない。相手は最強の艦娘だからと根拠のない自信で忘れることにした。

取り敢えず。この暑さの対策をどうするかが、早急な課題であった……。

世間は変わらず夏休み。

皆は持ち場からは離れられない。

だったら、海で泳げば良くね？ と解決策を思い付く。

鎮守府のすぐ近くの砂浜で泳いで涼もうという計画だった。

敷地内なので問題ないし、何かあればすぐに戻れる。

こいつは名案だと七海は早速計画を練る。

日程の調整から、周囲と相談してあれこれ決める。

ついでにバーベキューもやろうとリングが言い出して、艦娘も深海棲艦も自由に参加してもよいという計画になった。

食うものは七海の余りも処分できるし、涼めるから最高の娯楽と皆は大喜びだった。

当日、日焼けが嫌だという一部とクーラー最高だぜ的な艦娘が代理で仕事をしてくれる。

そっちも万事問題ない。七海も無論参加する。

「あんたにしては、名案だったわね七海」

と、五十鈴も褒めてくれた。

当然ジャーヴィスたちも参加して交流も深めたいと言っている。

主にジャーヴィスとゴトランドが。ポーラは未だに体調が悪く、ザラは看病で欠席。

コロラドはと言うと。

「丁度良いわ。深海棲艦の実力とやら、お手並み拝見と行こうかしら。かかってらっ

「しゃー！」

と、挑戦状を叩きつけた。上から目線で。

困惑する一同に、勝てば当日に飯でも作ってやろうとコロラドは言う。

「自慢じゃないけど、下積みは長いからね。味の保証はするわ。疑うなら先ずこれを食べてからにしないな」

と、吹っ掛けてきた早々、厨房を借りて簡単にハンバーガーを持つてきた。手作りらしい。

リングが恐る恐る受け取ったそれをかじる。そして、

「めっちゃ美味い！」

と愕然とした。驚く皆にコロラドは、自分は天才じゃないので出来ないことは言わな
いと豪語する。

いわく、あくまで秀才。努力によつて選ばれたものという自負。天才じゃないので注
意という。

裏付けされた努力があるから、大口は叩かない。出来ることを自慢するだけ。上から
目線で。

「なに、演習しようって言うてる訳じゃないの。ちよつと勝負したいだけ。とくに……
そこの生意気な和装のメイドとね」

「私はお前に興味などない」

コロラドは、小春を一瞥して言った。小春は鬱陶しいと切り捨てるが。

あの生意気な小春と一戦を交えてどちらが強いか見たい、と言うようだ。

「私が興味があるのよ。深海棲艦の駆逐艦の性能とやらを」

「なら、村雨でも良い」

「なんで村雨を巻き込むのよ!？」

行くか悩んでいた村雨に飛び火して、騒がしくなる。

因みに嫁と妹と娘は行く。メイドも行く。

五十鈴や由良も参加。深海棲艦は全員参加。

他にも暇をしている艦娘たちも集まって、大きなお祭りのようになりそうな予感がした……。

で、だ。

泳ぐとなれば……当然水着は必要になる。

服屋に買いに行くのも暑いので面倒臭い七海は、纏めて発注するから個人で支払って

用紙を持ってこいと言った。

サイズもちやんと見てこいと指示して。

「逃げるな村雨！ サイズが測れない！」

「いいいいいやあああああ!!」

メジャーを持った小春に村雨が追われていた。

執務室の中を走り回るメイド服の二名と、冷たいお茶をすする春雨と七海。

あと何時もの三名。バカを見ている目で村雨を眺めていた。

「自分でやるって言ったでしょうが！ 何で小春がイチイチやるのよ?」

「恥ずかしがって適当な数値を言うから。正直に白状しなさい。一番の乳がでかいのは

村雨、お前でしょ」

顔を真っ赤にして怒る村雨を見て、小春は事実を突きつける。

周囲から嫉妬の視線を受けて怯む村雨。弥生や如月、春雨の目付きが怖い。

実際、この普段の面子で一番の巨乳は誰か。村雨である。

七海は体型すら変化しているのでどちらかと言えば山風に近く、一番虚しいのは弥生であった。

「嫉妬なんかしてないよ……嫉妬なんか……」

とか言いながら殺意すら籠る目に村雨はたじたじ。理不尽な怒りが襲ってきた。

見事な連山……いや、弥生が平原ならばあれは最早山脈。恨めしい高い山。詰まりは憎しみがふつつつ沸いてくる。抉れば良いのに。

「な、何でこんな理不尽な目に遭うの……」

村雨はすっかり落ち込んでいた。体型ばかりは仕方ないだろうに。

マイナスしてキツイ水着になろうとも具体的な数字は誤魔化す予定だった村雨の計画は頓挫した。

結局きつちり計測されて、七海が予め渡したカタログで選んだ水着を発注。

七海は注文したそれらを見て思った。

「如月と弥生は……もう、背德的ですね……」

これが仮にプールにいたら小学生にしか見えない。

只でさえ小柄な二名が着ていると、既に……いけない香りがプンプンする。

「弥生は……幼くない。幼くないよ……」

「司令官はそつちのほうが好きなの？ だったら如月も頑張っちゃおうかな？」

妹は自分は幼くないと言うが無理があるし、嫁は何を頑張る気なのか。

少なくとも、七海はロリコンじゃない。寧ろ昔は自分がロリコンの餌の方だった。

「なんで……姉さんだけ育ったのかな……。わたしも白露型なのに……」

自分の胸元を見てため息をついて嘆く春雨。

上の姉たちは大半発育がよろしいようで、悲しいが春雨には遺伝していなかった。

小春はなんだかんだ、山風よりも少し小さい程度。全く気にしていない。

「あたしはママとお揃いだから気にしないし。ね？」

「そうは言いますが……あたし、ビキニつてのは初めてですよ？ 似合わなくても笑わないでくださいね」

ドラム缶だった以前とは違い、凹凸のある今の体型で大胆なビキニを選ぶのは躊躇いがあった。

が、娘と春雨とお揃いにすると言われれば、阿呆の七海は条件反射で決定していた。春雨も七海とのお揃いという甘言にほだされて、受け入れて我に振り返々としていた。

性格的に恥ずかしいのであったが、時は遅かった。

七海も相変わらず周りに流される女であった。

村雨もお揃いであるがサイズが一回り巨大なのは……触れないでおこう。

「体型なんて気にするだけ無駄。お嬢様は気にしない。どうせ、私含めて見てほしい相手はお嬢様だけな訳だから、お嬢様を選び好みしない以上は悩まないでいい。春雨も、弥生も、落ち込まないで。村雨は……知らない」

「村雨だけ扱い酷くない!？」

小春の言う通り、見てほしい相手は七海。

その七海はそんな細かいことはどうでもいいので、どうしようも無いことをうじうじしていても時間の無駄。

みんな好きだ。平等に。だから、皆もそんなことは忘れ初めてのイベントを楽しもう。

小春はそう纏めて、村雨以外を慰める。

村雨が何で自分だけと不満を言うが、

「お前は真逆でしょう? 苦しみがわからない村雨に言うことはない。巨乳な自分を恨んで」

と、バツサリ切られた。またも突き刺さる妬みの視線。

「もういやあああああー!!」

今日も村雨は絶叫する。

セクハラが終わっても、結局村雨は……エロいという自分の属性と、宿命からは……逃げられないのであった。

鎮守府夏休み 中編

それは、違う日の大本営。

試験官をしている、ガングートが昼飯をため息をついて食べているところに訊ねてきた。

茹だるような猛暑日が続き、ロシア出身のガングートも流石に堪える。

半袖に半ズボンのラフな格好で、彼女に試験の様子を窺った。

延期中と言えど、毎日問題ばかりを引き起こして、とうとう民間人まで巻き添えにした阿呆が出た。

即刻強制送還した。何を血迷ったのか、ナンパされた程度で激怒して、ぶん殴ってしまった。

涼みにプールに行っていた矢先に、真っ赤に染めてしまったらしい。

最早品格も糞もない。どいつもこいつも夏の暑さにイラついてキレイやすくなっているとガングートは言う。

「それに対して、お前の教え子はどうなっているんだ大和。慇懃無礼が服を着て歩いているんだが？」

「だから、そういう娘だつて言つたでしょ。あの娘は自分勝手の体現者」

桜庭はこれでわかつたかと言つた。

そう指摘するガングートは、軽くあつた限りの印象を述べる。

極めて利己的で排他的。損得勘定に効率優先、だが怯まない胆力と無関心は長所にもなる。

割り切りの良さもあるので、悪い原石ではないと褒める部分は褒める。

「あれは、中々の逸材だな。この国には、面白い奴と骨のある奴がいる。……悪くないな、この国の軍人は」

道中、筋骨隆々のハゲにも出会い、国防の志も見せて貰つたと満足しているガングート。

「我が祖国に欲しいぐらいだ。特にあの人間、聞けば深海棲艦の艦装の汚染にも堪えたどころか共感して我が物にしたとか言うじゃないか。惜しいものだな……忠誠をロシアに誓ってくれば、さぞ頼もしい」

「ハゲ……？ ああ、島村提督？ 無理よ。あの人、日本を愛しているから」
食べながら聞いていた桜庭の言うことも尤もと頷きつつ、欲しいとガングートは呟いた。

余程魅力的な人材なのだろう。調べて評判を聞いても、尚欲するとなれば。

「実力もあの娘も申し分ない。人間としてはあれだが、子供ながら軍人としての素養は最低限揃っている」

「でしようね……。あの娘は、あんたが気に入るような性格だし」

総合して、問題も起こさずに淡々と任務と割りきる彼女の姿勢を高く評価しているガングート。

実際自分と戦うのが楽しみだと笑うが……。

「そう？ じゃあ私と代わって欲しいくらいよ。真面目にね……」

途端に目元に闇が墮ちる桜庭。一瞬でダークな見たことのない彼女に変貌した。

目を丸くするガングートに、桜庭が弱音を吐いた。非常に稀な、弱気の彼女。

理由があるのか、心配になったガングートが聞くと。

「……あの娘の性格はわかったでしょ？ 勝ち目がないなら、ルールに反しない限りのあらゆる手段を使ってくるって。ええ、本当にあらゆる手段で……。実際見たあんただから言うけど、あの娘……本気で私を殺すつもりみたいなの。生きて帰ってこれるか自

信がないわ」

手段の選定をせずに自滅をしても桜庭を打倒しに来ると彼女は箸を止めて言った。驚くガングート。あの最強と名高い大和がビビっている。

単なる駆逐艦程度に、戦いたくないと。生きて戻れる自信がないと。

最大の弱音だろうか。啞然として、そこまで嫌がる理由を詳細に問い詰める。すると。

「彼女、お手製のバイオ兵器持ち込んだらしいわ」

「待てエツ!! 私の気のせいか、おかしいな単語が出たぞ!?!」

まさかの戦争のルールを無視した外道な手段だった。

思わずツツコミを入れるガングート。

が、桜庭は事実と言つて途方に暮れる。

いわく、嫌な予感がして調べた結果、互いに手の内を熟知していると踏んだ上で、艦娘ではなく人として再起不能にする手段を選んだと。要するに、毒殺。

教え子だからこそ、万が一でも勝ち目がないならどうするか知っている。

不安が的中して逃げたいと彼女は嘆く。

「何てことをしようとしてるんだお前の教え子は!?! 仮にも教官だったお前を毒殺!?!」

真つ向勝負じゃないのか!? 協力して打開するとか、負けても良いから評価をあげる戦

術とか色々他にやり方はあるだろ!? 何でいきなりバイオ兵器で殺そうとするんだッ
!?!」

「艦娘として、仲間が誰も勝てないなら人間として殺せばいいって言う結論になったよ
うね……。私の教え子ながら、本当にえげつない方法を選んでくれたわ。文字通り、あ
の娘は目的のためなら何でもする。私を毒殺ぐらい、十分あり得る。あるいは、私の過
去を徹底的に洗って弱点を突き止めて、執拗に責めて精神を殺しに来るか……。元帥の立
場を利用して当日までに仕事を増やして忙殺とか、考えるだけで恐ろしいことをするの
が私が鍛えた駆逐艦、夕立なの」

読んで字の如く。何でもする。それが桜庭であつても。

寧ろ桜庭だからこそ遠慮しないで全力でぶつかると。

毒持ち込んで。悪い意味で。

「鬼畜かッ!! 下克上という文化を真に受けた外国人かッ!! 今すぐ止めさせろそんな
こと!!」

ガングートがあまりにも外道なことに抗議するも……。

「無駄よ。だつてそれ、公式には……。バイオ兵器じゃないから」

「……。何っ?」

桜庭は言った。そんなもの、あいつが理解しないわけがない。

邪魔されないように、ちゃんとルールに則ったモノを持ち込むだけ。

そう。規定では、許される範囲なので制止は無理。何故なら。

「箝口令出ているから言えないけど……一応、それは」

と、気になる単語を言ってから真つ青の桜庭が告げる、毒物の正体。

「それはね……戦鬪糧食、だから……」

遠い目をした桜庭は、炎天下の青空を見上げて……心が既に死んでいた。

こつちもならば容赦はしない。彼女の弱点を攻めてやろう。と、一応対抗策を考えている昼下がりがだった。

で。

鎮守府夏休み、開催。

相変わらずの炎天下。焼けるような砂浜に皆はいた。

鎮守府の敷地にある小さな浜辺で、海水浴を朝っぱらから開いていた。

水着の美女と美少女の楽園がここにはあった。

然し……。

『死ねよにゃー……!!』

もうふざけている若干一名が、膨らませたスイカ柄のビーチボールを青いビキニにパレオをつけた五十鈴に向かってぶん投げた。

油断していた五十鈴はストレッチ中に顔面に直撃して、吹っ飛ぶ。

白いセパレートに麦わら帽子のジャーヴィスが、先手必勝で物流のプロフェッショナルに攻撃した。

「……………」

いきなりの攻撃に、無言で起き上がる五十鈴。

このチビ……調子に乗っている七海とそっくりだった。

ことあるごとにトラックだのディーヴァだのと英語が分からないからって流布しまくってくれたお子様。

お陰さまでゴトランドには本場のマイクと中型トラックの模型を友好の証にプレゼントされ。

コロラドからは、ネギで味噌汁作ってみたから味見してくれネギの歌姫と言われて。

完全にそう言う扱いだつた。似ているけど別人です本当にありがたいがとうございました。目元に真つ黒な影を落として……五十鈴はキレた。

「ジャー……ジャー……ヴィス……ジャーッ!!」

怒鳴り声をあげて追いかける。大笑いして逃げるジャーヴィス。

客人だからって知るか。毎度七海みたいな扱いをしてくれて!

教育が必要なのは彼女も同義だつたのでお仕置き開始。

遊んでいた。

「彼女も相変わらずですね……」

呆れる七海が、ビーチパラソルを突き立てながら呟いた。

眺める先では、おいかけっこに発展した二人と、コロラドが既にBBQの準備をしていた。

水着の深海棲艦たちが群がって早く飯をくれとねだっていた。

胃袋を攻略した深海棲艦とは大胆なピキニのコロラドはもう打ち解けていた。

どうも、素直に尊敬の眼差しを送るリングと良きライバル関係に知らぬ間に至っていた静香とは特に仲よしだそうだ。

「良いわ。但し、この私にビーチバレーで勝ったらよ。約束したからね?」

コロラドが言うのと、上等と皆は張り切っている。

リングと静香、更には結局楽しいのか翔鶴とブルーのシンプルなセパレートのゴトランドも交ざり、楽しそうな雰囲気に向かっては過ごしている。

姉妹は不参加。一部以外は順調に過ごしているので空気は悪くない。

此方は？

「……」

「もう、勘弁して……。お腹痛くなってきたんだけど……」

潜水艦と似たようなスクール水着みたいな姿の弥生が、被った麦わら帽子の怨念じみた視線でビキニの村雨を睨んでいた。主に一部分を凝視して。

ゼッケンには平仮名で名前を書かれた弥生とお揃いの如月は余裕の表情だが。

「司令官、似合う？」

「似合いますよ。然し、本気で背徳的な姿ですけど」

ニコニコしながら蠱惑的に七海に問いかける如月。

面白いのか、誘惑してきた。妙に艶かしいポーズをとって、

「そうかしら？　じゃあ……如月と危ない夏の夜、過ごしてみる……？」

「……」

と、露骨に誘う。七海も何だか誘惑されている。こいつ嫁にもとことん弱いのである。

誘われれば、飛んで火に入る夏の七海。

猛暑にあてられてラリったのか、見事に吸い寄せられて……。

「止めて。お嬢様は私達がお守りする」

と、救世主小春が割って止めた。

ワンピースの漆黒の水着が似合う小春が、お揃いの青と黒の色合いのビキニの七海を怒る。

「お嬢様、我に返って。それはいけない」

「……ハッ!? あたしは一体何を……!?!」

七海は自分を取り戻し、如月は残念そうだった。

ツツコミの村雨は現在弥生の呪詛を受けて瀕死になっていた。

「夜になっても激しい運動はいけない。脱水症状になる。準備はするから、予定を立てて。熱帯夜に迂闊な事はいけないと思う」

待て、ツツコミはソコじゃない。行動をまず止める小春。

「あと嫁にだけ寵愛は不平等。頑張るなら全員しないと不公平」

止める、それ以上七海を加熱させるな。

真面目に準備すれば一夜の過ちを企てるだろうがッ!!

「可愛がるなら皆一緒。お嬢様の器量なら出来る」

「ふ……ふははー… ふははははははは!! 我が夏の夏が来たああああ!!」

ヤバイ覚醒したアツ!?

要請が変態を刺激して蠱惑なハーレムツ!?

誰かこの二人止めて!?

「つて、止めんかそこお!! 何を真面目に計画してんのよ! 健全な話で不健全な展開

にしようとするなアツ!!」

おお! ツツコミの村雨復活!

茹だった二名を拳でぶん殴るツ!!

熱い砂に顔面からダイブするダブル駆逐艦! これは痛い!

普段ならば止める春雨も大胆なビキニをパーカーで隠そうと必死になっているから

余裕はない!

如月は凄く残念そうにため息をついている!

悪いがこれは健全な話なのでエロいのはご法度です。

おや? 山風と弥生の動きが不穏だぞ?

何やら怒ったような顔でなにか仕込んでいる?

村雨に向かって何かを取り出した……な、なんだあれは!?

巨大な水鉄砲……圧縮してぶっぱなす当たると痛い圧縮水鉄砲じゃないか!

恨めしい弥生と七海を殴った事を怒る山風が、殺意を込めて水を圧縮している！

説教している村雨は、背後の二人に気付かないようだが……おっと如月も参戦した模様！

悪い笑顔で圧縮しているが、小春と村雨が夏の過ちについて口論しているせいで双方気付かず！

七海だけが気付いた……自分から笑顔で小さく手を振っているだと！

この女正気か!?

足音を殺して接近する三人の美少女、ここで春雨が発見した！

「ね、姉さん後ろ!!」

漸く声がかかる、訝しげに振り返る村雨、そこには!!

「折角のチャンスを邪魔しないでツ!!」

「滅べ……巨乳駆逐艦!!」

「司令官は、皆のモノよ!!」

三々五々好き放題言つて圧縮した水を村雨の顔面目掛けてぶっぱなす!!

凄いい水圧が村雨を襲う……!!

「きゃ……!!?」

悲鳴をあげて吹っ飛んだ！

完全に身体が宙に浮かび上がったようだ！ これも痛いッ！！

「フツ……村雨。あたしの身内は狂暴です」

どやツと笑う七海が起き上がった村雨を見て言った。

最早変態の霸道は止まらず。とでも言いたいのか。

「おのれ……この、身内に見境のない変態のロリコン提督……！！」

悔しそうに呻く村雨に、小春も言った。

「所詮村雨は、ハーレムの敗北者……。私達に勝てる道理もない」

「敗北者……!? 取り消してよ……その言葉を……！！」

最大限の侮辱をされ訂正を求めるも小春は首を振った。

「取り消すつもりなどない。悔しければ軍門に下ればいい。そして共に真夏の酒池肉林に……」

と、言っている最中だった。

この様子を逃げ回りながら見ていたジャーヴィス。

その視線を追って、本作品最強のツツコミが突如襲来した。

矛先をこちらに向けて、走ってきた。

バイオレンスを予見して目を逸らす春雨。

そして、皆に鉄槌が下った。

「いい加減に、しろおおおおお!!」

最強のお姉ちゃん、五十鈴のダイナミック轢き逃げが発生。

エロい事を企んでいたスケベな駆逐艦どもは、仲良く燦々と降り注ぐ日光を浴びて、仲良く空に舞い上がるのだった……。

鎮守府夏休み 後編

危うく夏の魔力で取り返しをつかない過ちを実行しかけた一行は各々勝手に遊んでいる。

コロラドたちがビーチバレーを始めているようで、コロラドチームには戦艦繋がりで山城たちが加わった。

「なんで私がこんなけた違いな人と……不幸だわ」

とか普段よりも水着補正で幼く見える山城がぼやくが、

「不幸と思うなら、改善するように努力なさい。嘆く暇があるならば、身体を動かして現状を変えないと何時までも変わらないまま。山城、口だけ不幸と言っても、行動をしないとただ怠惰に不幸を甘受するだけの無能となるのよ」

とか、上から目線でアドバイスして今度お参りでもいけと言っていた。神頼みでもないよりは万倍可能性はあると彼女は堂々と指摘する。

「不幸と言うのはね……二度と取り返しのつかない事を言うの。山城はまだ間に合うでしょ？　なら、今のうちに足掻いておくことをお勧めするわ。後悔しても遅いときが、人生必ずある」

……少しだけ、悲しそうに一瞬コロラドは山城に声色を落として教えた。

一瞬だったが、山城は首を傾げるだけ。その意味は、普通の艦娘には……わかるはずもない。

コロラド、扶桑姉妹に相手はゴトランド、五十鈴と色違いの水着の由良と泳げずに暇していた、フリルの多い群青色の水着のリセ。

次の試合で深海棲艦たちとぶち当たる予定だ。初戦は艦娘もかかってこいと挑発されて由良が乗った。

「夕立の部下の実力、見せてもらいましょう。日本の提督がどれほど有能か、見物ね」余裕の笑みで笑っているコロラド。すると。

「七海ちゃんの指揮はとつくに一人前よ！　それを由良が証明して見せる!!」

虚仮にされたと怒った由良がそう乗っかり、

「良い度胸ねアメリカ戦艦。司令官様の侮辱はあたしの侮辱よ。姫と呼ばれる強さを見

るがいいわ!」

同じく貶されたと感じたりセもムカついて本気になっていた。

ゴトランドがだからこれがコロラドのデフォルトと言つても聞かない。

そのまま試合を開始していた。

飯のために本気になる一団と誘われて本気になる一団で賑わっていた。

観戦している皆を尻目に、一方その頃。

七海たちは既に泳いでいた。

正確に言うくと、大きな瑞雲の形をした浮き輪の上に乗った七海は寝そべって漂い。

近くで皆が遊んでいる状況であつた。

五十鈴とジャーヴィスが第二ラウンドに発展しているが……。

『軽巡? いいえ、トラックです』

「もう大体なに言つているかフイーリングで分かつたわよ!? この娘は、まだ言うか!!」

最早ジャーヴィスは五十鈴をそういう目でしか見ておらず、またもネタにされているのを勘づく五十鈴の攻撃が始まる。

真つ赤な手足の生えた浮き輪で浮かんで漂いながら圧縮水鉄砲を構えて放つ。

然し、ジャーヴィスは余裕で回避する。運悪く後ろにいた村雨に直撃。

「ぶはあ!？」

「あつ、ごめん村雨!」

散々オモチャにされて心がいい加減折れそうな村雨はこの時点でクラゲのように流れているだけ。

目が死んでいた。ツツコミがそろそろセクハラで死にそうだった。

謝罪されてももう心に余裕がない。哀れ村雨嬢……。

『遅い! つて、言ってみたかったんだよねー! 一度でいいから!』

笑顔でなにか言うので七海が翻訳。

「五十鈴には速さが足りないそうですよ」

「速さッ!？」

水上の速さと言われて五十鈴もならば弾幕だと連射モードに切り替えて応戦開始。

逃げ回るジャーヴィスが笑いながら泳いで離れる。

『弾幕薄いよ! なーにやってんの!』

「弾幕が薄くてアクビが出るって言ってますよ」

「ごんの娘はアッ!!」

五十鈴が更に怒って向こうは向こうで戦っていた。

なんだかんだ楽しそうである。

で、此方は小春たちが好き勝手に泳いでいる。

村雨が死んでいる以外は、至って平穏な空気であった。

今のところは……。

昼頃。

ビーチバレーの激闘を経て、コロラドと艦娘と深海棲艦には、確かな絆が出来ていた。引き分けとなった勝負に、コロラドはどのみち面白かったので一緒に作ろうと言って仲良くやっていた。

「頂きますー！」

「こちら、リンゴー！ それはまだ生焼け……ちよー!？」

BBQをしているのだが、リンゴが早速貪っていた。生焼けの野菜。

静香やパクチーも一緒に食べているが、行儀の悪いのはリンゴ一名。

リセも翔鶴やゴトランドと焼きそばの準備もしている。

大きな団体となつた彼女たちを、パラソルの下でレジャーシートを敷いた上に座つて眺める七海。

まさか、あんな光景が見れるとは思わなかつた。少なくともあの二人は悪意がないのは分かつた。

仲良く準備をしている光景を遠目で見ていると。

『あれ。夕立、一人?』

ジャーヴィスが麦わら帽子を被つてこつちに来ていた。

隣に座つても良いかと聞くので了承。

彼女の手には二人ぶんの麦茶があつた。

グラスを受け取り礼を言つて軽く飲んだ。

ジャーヴィスも腰を下ろした。隣同士で皆を一緒に眺めていた。

『紅茶の国が麦茶とはまた、なんとも言えませんね?』

イギリス出身なのに気が利くと七海が言うと、ジャーヴィスは笑つた。

『イギリス人が全員紅茶好きな訳じゃないよ。あたしはコーヒーのほうが好きだしね。

偏見はいけないと思うよ、夕立』

『それは失敬。何分、イギリス人に馴染みがないもので』

思い込みは良くないと言われる始末に、詫びを入れる。

するとジャーヴィスは不意に真面目な顔で七海に突然言い出した。

『……そう。偏見や思い込みはいけないんだよ。夕立みたいに、全員が直ぐに訂正する訳じゃないし、寧ろ自分の都合で改悪する連中のほうが大半だから。夕立だって、知ってるでしょ。深海棲艦に対する迫害や区別、受けたんだと思うけど』

急に何を言ひ出すかと思えば、ジャーヴィスは表情を引き締めて七海に聞いた。

『ここにきて、あたしも周囲の様子を見て分かったよ。皆が幸福になっている世界が、此処なんだって。差別も区別もない、優しい世界。種族なんてどうでもいい、本当の意味で夕立が皆を大切にしているって……見てて、あたしは強く感じた。尊い時間だと思う。だからこそ、周囲との軋轢って言うのかな……目に見えるよね、そういうのが』

ジャーヴィスの表情は初めて見る真剣なモノで、七海は何が言いたいのか分からない。い。

彼女は七海に言った。それは、七海も十分理解できるもの。

『普通の人間には、深海棲艦を受け入れるなんて出来ないよ。共存も無理。だってあいつらは、自分の都合で幸せな世界をぶっ壊しに来る、大多数の邪魔な生き物だからね。夕立、あたしは夕立の作っているこの空気、すごく好きだよ。皆が幸せになれる、唯一の時間と日常だと思うんだ。だからもしも……憲兵や、コロラド、ゴトランドやポーラ、ザラが夕立や深海棲艦、ここの艦娘を傷つけたら教えて。あたしがいつら全員殺すか

ら。あたしの手で』

ジャーヴィスはいきなり、自分の艦隊の仲間どころか異国の憲兵まで何かしてきたら殺すとか言い出した。

驚く七海に、ジャーヴィスは。

『気に食わないの、特に憲兵のああいふ態度。裏でこそそそ夕立の想像で陰口言つてたり差別するみたいなの顔して睨んでいたりって……。よく自分でも我慢できたと思うよ。でもさ……あたしにも、限界つてもものがあるわけ。あのなめ腐った態度、吐き気がしてきたわ。夕立の鎮守府でマトモなのは夕立たちだけ。あいつら纏めて全部腐ってるのよ』

心底うんざりした顔になり、ジャーヴィスは吐き捨てた。

この顔……本気でそう思っている顔だった。七海は見た。

ジャーヴィスの綺麗な碧眼が……不自然に瞳孔が開かれて、光が消えている。

見覚えのある瞳。これは、如月や山風、弥生と同じ……あるいは、自分と同じか。

腐った同類のにおいがした。ジャーヴィスは今まで人前ではそんな片鱗見せもしなかった。

だが、二人きりになった途端に、本性を現した……そういうことか？

『何が目的なんですか？』

七海は敢えて問う。同類に似たかもしれないが、所詮は親しくもない他人。

何がしたいのか、ジャーヴィスに用心して聞くのは信用しないと言う言外。

ジャーヴィスはそこで腐った碧眼のまま、ひび割れて笑う。

『目的？ そうだね……。強いて言うなら、居心地の良い空気を外野にぶつ壊されるのが我慢できないことかな。さっきも言ったけど、あたしこの鎮守府の空気が凄く好きなんだ。皆が楽しそうに、心のそこから笑いあっている、幸福を感じている……。互いに愛し合っている、そういう雰囲気。けど、周りが決まってこう言うときに壊しに来るんだよ。経験上、実を言うと一回失敗したことあつてさ。ああいう最低最悪の未来に、自分が納得できないし受け入れるのも正直堪えられない。せめて、あたしが居るときぐらいは力添えするよ。夕立は皆を幸せにできる人。あたしはそれを見たい。だから、邪魔立てする人間は殺してでもその愛と幸福を続けてほしい』

『勝手なことを……。』

ジャーヴィスは要するに、自分が七海たちの空間が気に入っているから敵対する人間を殺したいようだ。

自分のためと言えば自分のため。勝手に居心地の良い空間を維持したい。

つまり言えばそういう意味であり、ジャーヴィスの言う空気が余程大切に見える。

決して、七海のためじゃない。あくまで利己的。己のワガママ。

物騒な事を提案するぐらいには、ジャーヴィスは派手に失敗していると予想した。

七海は別に互いの利害は一致しているし、好き勝手なことを言っているのは同じと言った。

『駆け引きのつもりなら、此方の利益しかない事を言い出す事もない。ジャーヴィス、貴方はめちやくちやですよ』

『めちやくちやでも何でも、あたしがそうしたいんだからしようがないじゃん。本気でこの場所、気に入ったんだもん』

と、相変わらず七海と全く同類の目をした彼女は自棄のように一気飲みした。

からんと、グラスに入った氷が涼しげな音を出す。

『……まあ、良いでしょう。此方に損害を出さない限りは、何かあれば教えるぐらいはしますけど……殺るなら勝手にしてください。あたしは関与しませんよ』

『オツケー。良いよ、あたしが好きで殺ることだし。大丈夫、人間なんて艦娘じゃなくても簡単に殺せるよ。ナイフ一つあれば十分。一回出来なかつたけど次は成功する』

七海は言った。好きにしろと。巻き込まない前提で。

ジャーヴィスもその気はないし、自分だけが滅びれば良い。

自分の激情が優先である限りは彼女を巻き添えにする気はない。

あくまで自分の都合を先にとる。

約束をしてから、ジャーヴィスはついぞと言って七海に言い出す。

『今度戦う、夕立の先生のことだけ……一個、言っておくよ』

余計なお節介と前置きしてから、七海にこんな事を警告するように、冷えた声色で告げた。

『……信用しない方がいいよ。どうせ、あの人は夕立を裏切るから』

と、なにか知っているように七海に突きつける。

流石に看過できない事を抜かすので理由を聞けば、

『結局、あの人は人間の味方。どんなに良くしてくれても夕立みたくにはなれないと思
うわ。そうでしょ？ ほら、大和さんは深海棲艦じゃないから。あくまで立場は元帥

……万が一の時は、どうせ軍人としての自分を優先するんじゃないかな。最高位の立
場って言うのは、簡単には裏切れない。人間と教え子、天秤にかけるなら人間につくよ。
絶対だね。平時はどんなに助けてくれても肝心なときには平気で見捨てる。ダメだよ
夕立。迂闊に信用したら。本当に信頼できるのは同じ世界で生きている皆だけ。自分
が好きな人だけ。愛で結ばれた人だけ。他は全部、皆を壊しに来る敵でしかない。覚え
ておいて』

話はそれだけと言ったジャーヴィスは、立ち上がって去っていった。

七海は啞然としていた。桜庭を敵と言い切ったジャーヴィスではなく。

自分も最悪、敵として扱ってもよいと言外に言ったジャーヴィスの態度にだった。七海の対応を知っているのにそこまで言い切るジャーヴィスの態度。

(ジャーヴィス……貴方、何なんですか……?)

さっぱり理解できないまま、夏休みは続いていく……。

勝てば良いのです

酷暑の続くなか。

夏休みを満喫している皆の中、ジャーヴィスの本性を垣間見た七海。意外なものゝ兎も角、そろそろ準備を再開する。

相手は最強に相応しい国の具象化。正直言うと、毒殺で倒れない可能性もある。艦娘としてではない。人間として倒せば行ける気がしたが、油断はしない。

執務室で、仕事をしながら訓練している皆とは違い、作戦の要をコロラドに任されてしまい、あれこれ考える。

秘書の五十鈴がドン引きしていた。七海が、人殺しの計画を練っている。

「七海、その毒はダメ。海洋汚染を引き起こすわ」

「……ダメですか。確かに宜しくない劇物ですが……桜庭さんは絶対これにも堪える

……」

書類に纏めたりリストには、古今東西結構な種類の劇薬を纏めて、実戦に持ち込めないか思案していた。

五十鈴も流石に桜庭相手に七海が如何に恐れているかが分かるが、行き過ぎというのが率直な感想。

七海は何やらプライドをへし折って、髭にまで教えを聞いているレベルだった。

「はあ!? 艦装を融かす!? いや、出来ないことはねえけど……。お前さん、何持ち出す気だよ?」

「王水を少々」

「バカ野郎ツ!! そんなもん人様に向けんな!! 演習でも大被害だボケエツ!!」
勝ち目がある方法ならば片っ端から試そうとしていた。

今回は強力な酸性の液体で桜庭を融解させてみるとか言い出している。

髭も思わず怒鳴り散らす。そんなもの、艦娘だろうが確実に死ぬ。

「お前さんは怪獣でも相手する気か!! 人間、あくまで相手は人間な!! 落ち着けて少しは!!」

「桜庭さんは……。人間なんですか? 怪獣と大差無いですけど」

「強さならな!! 一応人間だろうよ! いくら規格外でも!」

「なら確実に足止めできるように、砲弾にじゃあ液体窒素混ぜるとか」

「徐々に用意できる範囲に狭めるなア！ 軍の立場を悪用するんじゃない！」

で、砲弾に液体窒素混ぜて氷像にしてやるとか言い出して、ダメ出しを受けた。

ダメだ。勝ちを狙うと、大抵が人道に反する。いや、そんなもん七海はどうでもいいが。

「取り敢えずは視覚、聴覚、嗅覚を最低限麻痺させて……あとは電探の感度を殺せばワンチャンあるかないか……。でも、どうやって毒の成分を接種させるかが問題。何かよい案はありませんか？」

議題を打倒桜庭を掲げて、メイドと三人娘と会議を開いていたある日。

涼しい執務室で、お菓子を食べながら如月が手をあげて提案。

「司令官。人間は必ず呼吸するから、その手の方向で吸わせれば良いと思うの。煙幕に混ぜるとか」

「……成る程！」

余計な入れ知恵を嫁がして、煙幕に某シェフが焼いてくれた干物の暗黒物質を粉末にして混ぜてみた。

目潰しと同時に毒も強制的に接種させる。至近距離ゆえに回避も不可能。七海も食らうがなんとかできる。

更に春雨も外道な事を言い出した。冷たいお茶を啜りながらえげつないことを言った。

「電探の電波を殺すなら、金属片を空中に散布すれば良いんじゃないですか、ご主人様」
「……チャフ、と言うやつですか。ふむふむ」

一種の電波障害を起こす金属片をばらまいて電探を無力化する。

一理ある。手投げ弾として持っていけば嵩張らない。

で、山風も案を出す。饅頭を食べていた。

「目潰しって言ったけど、やっぱり急激に燃焼させて強い光を出すのにするの?」

「それはそうですね……マグネシウムあたりにしようかと」

これも自分で鎮守府で何とかする。設備さえ借りれば自作も十分可能。

弥生もよい考えがあると七海に提示。

「……いくら規格外でも、艦装の構造は同じはず。電撃は通ると思う、金属だし」

「ああ、足元海水ですものね。それも視野に入れましょう」

電流流して感電させるのもありと受け入れる。

で、啞然とする村雨はさておき、小春も一個言った。

「結局は接近しないと始まらない。艦娘の装備ではどうせ勝てないわけだし、凍らせるとかありであろうお嬢様」

「あつ、小春もそう思います？ あたしも同感です。ただ、液体窒素は却下されたので多少効果は薄いですが別の薬品が入手できるとコロラドさんから聞いたのでお願いしておきます」

最早演習の話ではなく、桜庭を如何にして殺すかと言う物騒な話題にシフトしている。

行き着く先は海洋汚染とかその手で、挙げ句には浮遊要塞を装備扱いで何匹か持ち込んで持久戦も辞さないとか言い出す始末。

「世の中には島風という艦娘がいます。自立型主砲ユニットを持つ駆逐艦です。あたしも駆逐艦。同じような装備なら許されます。ルールに従っているので問題なし」

島風が良いなら浮遊要塞持ち込んでも良いじゃん？ という勝手な理屈であの万能生物を持ち込むらしい。

村雨は和気藹々と元帥殺害計画を練っていく皆を見て思う。

(これ……演習よね？　なんでこんな怪物退治みたいなノリになっているのかしら……？　確かに大和さん強いけど……薬品とかもうそれ悪役の思考じゃ……)

正々堂々は無理。正攻法も無理。だからなんでもする。

何時もの七海のノリに皆様すっかり毒されているが、何度もいう。

桜庭は人間である。艦娘の前に一人の大人で、女性で、教官である。

教え子は言った。怪獣みたいなもの。人間が勝てるわけないからできる道具は全部使用する。

この時点で致命的な認識のズレ発生中。教え子は教官を人間として見てなかったのだった……。

艦隊の皆に計画を打ち明けた。絶句された。

「夕立、落ち着きなさい。人殺しをする気なの!？」

コロラドには止めておけと言われた。

「いや、明らかに過剰攻撃じゃ……」

冷や汗を流してゴトランドが困っていた。

「これでも生きてるって……大和さんって、もしかして日本発祥って話の蜥蜴の怪獣に近いんじゃない?？」

ザラは七海がこれでも勝ち目は半々と言われて怯えていた。

「く、口から放射線吐き出すんですか……ビームみたい……？」

ポーラに至っては怪獣決定だった。

『どっちかっていうとマジで宇宙行ってるよねこれ……。強酸受けて艤装が溶けない可能性あるってどう言うことなの……？』

ジャーヴィスもドン引きだった。相手に。

映像のせいで皆様のイメージは某あんぎゃー！ と鳴いている蜥蜴の怪獣に近い感じになっていた。

七海も正直、どれがどこまで通じるかが分からない。

それほどまでに経験値と性能の差が有りすぎて。加減も見えてこない。

「最低でも判明している確実なことは、私達の攻撃は先ず通じない堅牢な装甲と、大火力超射程の主砲が相手にはあることね。それに加えて個人で全て賄える多様性もある……。成る程ね、最早相手は人間の姿をした怪獣と同じでいいわ。それぐらい倒すのは絶望的ってことじゃない」

要点を纏めるコロラドは怪獣でもいいと言い切った。

未知数の実力でも前提が勝てない相手なのだ。

逃げてでも追いかけてくると言えば、ポーラも渋々戦う気になったようだ。と言うか。

「日本の怪獣と同じって言われると、ポーラも凄く納得しました。死にたくないの、全力で抗います……」

ポーラもザラも、演習でも死ぬ思いは変わらないと悟ったようだ。少なくともも人生最大の強敵と言う認識は間違いない。

怪獣大和をどうするか。倒すのは博打でも如何にして無事に乗りきるか。

課題はソコであった。七海が聞く限り、他の彼女が相手した艦隊はもの見事に壊滅している。

それこそ、リアル怪獣キングが大暴れしたのとほとんど差がないほどには惨敗していたように。

「ええ……。夕立さん、本当に毒ぐらいで勝てるのこの怪獣？ 核兵器使えないの？」

ゴトランドが既に相手が人型怪獣大和として認識されていた。

畏怖を通り越して単なる脅威になっている。

「……でも、映画見たことあるけど耐性あるのよゴトランド。やつぱり超低温で氷像にしてから砕くとかしないと勝てないかもしれないわね。夕立が言うには、それでも倒すので精一杯で、殺すのは到底無理って話だし」

いつの間にやら彼女の扱いが謎の超生物大和に変化しており、海外艦娘の皆は怪獣退治の空気になっていた。

コロラドが余計な話をしたせいりでリアル怪獣キングと同類と確定されてしまった。落ち着け。彼女は人間だ。人間で十分だ。怪獣じゃない。

言い出しておいてあれだが、本気の桜庭と戦ったことがない七海も何だかモンスターとして見た方が対処が楽な気がしてきていた。

まあ要するに自分の先生はモンスターであると。そんなわけあるかと誰もツッコミを入れない。

無知は怖い。想像が加速してどんどん膨れる超生物大和のスペック。

不意に。ジャーヴィスが、真剣な顔で皆にこう言い出した。

『……あたし思ったんだけど。これさ、殺すつもりでいかないと皆無事じゃ済まないんじゃないの?』

その言葉が、七海含めた全員の理性と良識のリミッターを解除した。

事実、桜庭が相手した相手は大ケガをしている。言い換えれば、瀕死になった。

つまりは。こっちが加減しないのを知ってるから、向こうも殺しにくるんじゃないと。

ジャーヴィスは皆にそう聞いた。ってことは?

怪獣映画宛ら。敗北は……即ち、全員その場で死ぬと言うこと?

「じよ、冗談じゃないわ!! 私ほ嫌よ死ぬなんて!」

コロラドが真つ先に反応した。真つ青な顔で拒否して。

「こ、殺しに来るんですか!？」

「本気で……!?! でも、あんなに強いなら……有り得るんじゃない」

姉妹も血の気が失せていた。

死刑宣告を受けたような表情をしている。

「……割とありそうだね、あんなに強いんだもん。認めてほしければ屍を越えていけつて言うのかな。日本で言う、下克上……だよね」

ゴトランドが半端に知っている言葉を言い出し、全員が死ぬ気がかかってこいという意思だと盛大に勘違い。

殺すつもりでこないと、潰されるとパニックに陥った。因みに七海もだった。

実際半殺しにしてオモチヤに一度されているので濃厚に分かる恐怖。

『ちよ、アンラッキー過ぎるんだけど!! いつもの幸運が肝心なことに役立ってないよ!』

半泣きでジャーヴィスも頭を抱えていた。

経験のある七海が否定できないと答えると更に加速する恐慌状態。

「も、もう手段の選別できないじゃないですか!?! 殺されるぐらいなら殺す気概がないと死ぬのは此方ですよ!?!」

七海が皆に通達。こうなれば全員で死ぬ気で桜庭を殺りに行くしか助かる道はない。あらゆる方法を準備するので、手伝えと。一同死にたくないの初めて一致団結した。

殺るしかない。攻撃こそ最大の防御。捨て身上等。怪獣相手ならば覚悟も決まった。「良いですか、全力で抗いましょう。生きるためなら何してもいいのです。我が国はこんな格言があります」

血相を変えている皆に、死人の顔色の七海はある格言を持ち出す。

それは……。

「勝てば良かろうなのです!!」

勝てば何してもよいと言う最低な言葉。

兎に角。この日、怪獣桜庭討伐が決定したのだった……。

「大和オツ!! お前の教え子が液体窒素やら王水やら硫酸やら手配しているとかいいう情報が入ったぞ?! 何がどうなっている!?!」

「あんぎやあああああ!？」

肝心の桜庭がキヤラ崩壊起こしているのはまた、別の話……。

白いいさな

……勝てない。

夕立が告げていた。殺しに来ると思え。

殺される。下克上、その言葉の通りなら負ければ即ちあの世行き。

これほど過酷な世界だったとは。甘く見ていた、と言うつもりはない。

元より覚悟はしていた。辛い道程を。けれど、これはあまりに残酷で。

実際戦った夕立ですら怪獣と言うほどの壁。あれは人間じゃない、怪獣。モンス
ター。

映像を振り返る。ああ、改めて分かる。

決死の抵抗が佇む怪獣には全く歯が立たない光景。

この佇む怪獣が大和で、抗っている小さな存在が自分達。

死力を尽くした総攻撃が傷ひとつ負わせることが出来ない絶望。

たった一撃で根刮ぎ破壊され蹂躪されていく人間たち。

これが、最終兵器。最後の、終わりの、切り札。

(……抑止力を兼ねると言っていたけど、これがその意味……)

最終兵器は絶対でなければならぬ。挑む気力を奪う存在でないとならない。

今の自分達のように。パニックになり、逃げる選択肢があるなら選ばせる。

そういう存在が、自分達が挑む相手。

……勝てない。そう、思う。

努力で今まで何とかしてきた。歩みを止めない事で、天才に匹敵すると思っていた。

彼女は才能はない。あるのは時間と負けない精神力。努力という、行動が強み。

そう自負する彼女でも、この壁は諦めが鎌首をもたげた。高すぎる、大きすぎる。

自分達が如何に馬鹿げたことをしているか、改めて分かりやすい喩えで自覚する。

生身で怪獣に勝てと言うのか。仲間がいる。一致団結して、手段を問わないと決めた。

だが……。

(何をしても良いとして。何をしても、果たしてあの人を倒せるの?)

問題は自分達の行動ではない。結果なのだ。

通用するのか、しないのか。それすら手探りで、有効な手段を未だに掴めず。

あの怪物は、聞けば過去には島を吹っ飛ばすような芸当もしたらしい。

地形を地図から消す。一人の艦娘が。なんの冗談だ。

笑えない。笑えなさすぎる。

(最低限で、地形を変えろ。私でも出来ない。ビッグセブンたる私ですら) 何をどうすれば島を消せる。それこそ歩く核弾頭みたいな物じゃないか。成る程、最終兵器の価値はここにあるのか。納得してしまった。

どう足掻いても怪物、歩く核弾頭、モンスター。人間相手ではない。

人間以上の存在に、自分達でどうしろと？ 勝てないのはわかってる。

演習だと言うこともわかってる。けど、目標は少なくとも認めてもらうことで。

相手の真意が、基準がわからない以上は結果を出すしかないのに。

ちっぽけな人間が熱線で総辞職するように。

その気になれば、自分達など一瞬で海の藻屑。

加減されているからなんとかなるのに、相手も最初から臨戦態勢。

(無謀すぎる。夕立がいても、仲間がいても。手をとっても。蹂躪されて死んでしまう) 他の皆は加減されている。故に死なない。だが自分達は加減しないからされない可能性があつた。

相手は先代最終兵器。正式に認められた世界最強の集団の、リーダー。

そのトップであり、夕立の言葉を借りるなら。

「あたしの上司は艦娘なのか国の具象化なのかあたしには区別ができません。強いて言えば人類が作り出した移動する理不尽。あたしも正直、二度と海の上で出会いたくない相手ですし」

国という存在の擬人化か。大和、確か日本の古い名前だったか？

詳しくは知らないが多分、あの人は最強であるからあの場所にいる。

その教え子が、深海棲艦の力を秘める彼女、夕立。別名、狂犬。

心を通じた友と呼べる彼女たちを纏めるカリスマのような子供。

皆を溺愛していて、人類に対して疑心暗鬼を隠そうとしない迫害されても負けない人。

教官が彼女ならばこの教え子も納得する。

(努力ではもう頭打ち。皆を守るのがリーダーの私の役目)

自分で立候補したのだ。その責任からは絶対に逃げない。折れない。諦めない。

艦隊の先導として、皆の安全を確保するのが自分の役割。

自分の性能では既に落ち着けない。冷静に数字を見て思うのは、全員が同時に襲つても返り討ち。

その未来しかない。夕立の秘策は自爆だ。だが、自爆を以てしても五分の確率で皆殺

しにされる。

その時点で詰みに等しい。それは、それだけは回避しなければ。全員死にたくない。そう言っただろう。

(私は死ねない。死んではいけない。それは、私がなにもできなかったことになる)
アメリカの最終兵器になると誓った。

取り返しをつかない不幸を二度と繰り返したくないから。

だから、力が欲しくて努力をして、漸く候補生に選ばれた。

下積みが長いとはそういう意味だ。選ばれなかった時期の方が長いし、若干調子に乗ってるのも否定しない。

だが、それも終わりなのか。勝てない怪獣相手に、なす術もなく皆は沈むのか。
(……いいえ。私にはまだ、出来ることがあるじゃない)

まだだ。まだ、自分は諦めない。

何でもするなら、形振りなど気にしている余裕はない。

勝つんだろう。勝ちたいだろう。認めてほしいだろう。

だったら！ 夕立が言うように、自分に出来ることを全てやり尽くす!!

それが、たとえ自分を捨てる真似だったとしても！

それでも、勝ちたい!! その為に、強くなりたい!

(力が欲しいッ!!)

周囲にいるじゃないか。

圧倒的な力を持つ駆逐艦を超えた彼女が。

あれさえあれば。あの力さえあれば！

ビッグセブンの自分だって、怪獣に勝てるかもしれない!!

(そうよ……！　私はコロラド、ビッグセブンの魂を継いだ艦娘！　それにあのパワーを追加すれば……国の擬人化が相手だろうが戦える!!　きっと、皆と共に勝利できるはずよ!!)

勝てば何をしても良いのだ。

ならば、変則的なパワーアップでも文句は言われまい。

やってやる。リーダーとしての責任のために。

認めてもらうために。生きるために。

何よりも、目標を叶えるために!!

翌日のことだった。

それは前触れなく突如起きた。

「司令官!! 大変よッ!!」

朝起きた私室の七海を、寝間着の嫁が慌てたように叩き起こす。

早朝に、眠そうに目を擦る七海は意識が半分飛んでいる。

「何ですか如月……? 今朝も可愛いですよ……?」

「あら、そう? ……じゃなくて!! 工廠に血の池が出来てるのよ! 誰か襲われたん

じゃない!? ちょっと来て!!」

急かす如月が、工廠に血の池が出来ていると言って慌てている。

七海も一瞬で覚醒して、そのまま部屋を出る。

一緒に寝ている娘と妹は無事。メイドも一緒なので無事。

ならば、誰? 焦るように走って向かうと……。

「おお、来たか嬢ちゃん! こりや何事だ!」

工廠の髭が妖精を集めて何やら騒いでいる。

髭に言われて現場を見た。

「……………これは」

思わず呟く。如月は真つ青になって震えているので優しく抱き寄せた。

大惨事。まさにそれに等しい光景であった。

見慣れた鉄の床が生臭いにおいで充滿しており、肉らしき物体が無数に散らばった真つ赤な絨毯。

広範囲にぶちまけたように広がり、引き摺るように跡が残っていた。

方向は……海の方向。誰か殺されて、海に捨てた？

丁度その頃、浮遊要塞も騒がしくなっていた。

七海を発見して猫のように激しく鳴いている。

なんだと思つて近寄ると、一斉に防犯カメラを示して鳴いてから、ぐるぐると一斉に動いて一ヶ所を示した。

そこには普段、ムラマサが置いてある場所なのだが……そこに得物が消えていた。「ムラマサがない!?!」

浮遊要塞は違つたと七海に顔を振つた。

要するに、防犯カメラを調べろと言うらしい。

憲兵も慌ただしく現れて何事か七海に聞いたが七海も知らない。

髭たちも朝来たらこうなつていたと如月に伝えたと言う。

よくわからないが……兎に角防犯カメラを回収して、皆の安全を確認するのだった。

憲兵が確認に向かう中。七海は大本営に一報入れて事件発生と報告。

直ぐに調査に向かうと返答を受けて、取り敢えず映像を見ると……。

(……コロラドさん?)

映っていたのは寝静まった深夜に工廠に勝手に侵入していたコロラド。

私服の彼女は、監視も込めて浮遊要塞の近くに置いてあるムラマサに近づいていく。

案の定気付かれるが素早く殴って気絶させたのか、墜落して黙る浮遊要塞。

で、難なくムラマサに近づき、徐にそれに手を伸ばして……。

一瞬で、ムラマサに食われていた。

正に一瞬で、動体視力に優れた七海ですら理解できない速度で鮮血をぶちまけて捕食されて死んだ。

手にした瞬間、ボロボロの刀身が……突然巨大化、肥大化したのち変形して、コロラドに襲いかかった?

(何ですか今の……!?)

普段使いなれたムラマサが持っただけで襲いかかる異常な光景が記録されていた。スローにしてもう一度そのショッキングな物を再生すると。

コロラドがムラマサを手にした途端に、ムラマサの刃が急激に変動。

刃が急速に独りでに肉を経て、筋を経て、骨を経て。

巨柄はそのまま刀身のみが大きな生物に変容して、振り返りコロラドを頭から丸飲みしていた。

そして豪快に口を閉じて、漏れた血が床に広がった。

だが、その形は……。

(白い鯨……!?)

気持ち悪いデカイ純白の鯨に似ていた。

背骨は剥き出しの骨のまま、頭部には大きな窪みがあつて目玉がない。

シルエットは鯨そのものだが小さい腕が生えており、這いずるようにそのまま自分を赤く染めて出ていった。

背鰭や尾びれはないし、骨がそのまま途中で肉が無くなり尾っぽのように伸びている。

口を開いたときに見えたが顎の上下に浮遊要塞で見慣れた前歯が二重になって並ん

でいた。

なんだ今の化け物は。七海はそう思った。

丁度憲兵から内線が届く。

コロラドだけが行方知れずと言われて、呆然と七海は映像をどう言えればいいかわからないまま聞いていた。

「……………どうしよう」

コロラドが、死んだ。喰われて殺された。

あまりの想定外に、七海は頭が真っ白になった。

なぜ、コロラドがムラマサに手を出したのかは分からない。

なぜ、ムラマサが鯨の怪物になったのか、コロラドを食い殺したのか。

それも分からない。だが、言えることは。

——確実に、コロラドという女性は……死んだという事実だけであった。

そして。残酷な運命は、動き出す。

彼女に迫る、究極の選択肢。

彼女の身内を受け入れた嘗ての知り合いを殺すのか、単なる艦隊の仲間を殺すのか。海に響くは鯨の雄叫びと、少女の絶叫。

白鯨は咆哮する。狂犬は何を選び、何を捨てるのか。

愚かな白鯨と、狂った獣の戦争が、幕開けていく……。

鯨の行方

数時間して、現場に大本営から応援が来た。

来たのは、良いんだが……。

「ぎゃあああああ……！！」

運悪く来ていたのはまさかの対戦相手。

大怪獣、大和さんであった。

皆は悲鳴をあげて逃げ出した！！

「なんで!?!」

桜庭は意味がわからず途方にくれるのだった……。

で。諜報班が何やら工廠を調べている間に。

久々に顔を合わせた桜庭は、青ざめていた。

執務室で、連絡を受けてもう一人も同行して一緒に事情を聴いている。

「あのね、渋谷さん？ 私、人間なのよ。これでも、一応。確かにあの時は事情あつて酷い事をしたけど、理由は知ってるよね？ なのに何で皆して私を怪獣呼ばわりしてるの？ 殺さないわよ？ 下克上とシチュエーション似てると思うのは無理ないけど、私はそんな気はないから。勘違いして、殺しに来るのホントに止めて。良い？ 王水は死んじゃうから。液体窒素も死んじゃうから。硫酸は艤装は頑張れば大丈夫だと思うけど、私が死ぬから。あと真正面突破が無理だからって、劇物持ち込むのも止めて頂戴。箝口令敷かれたでしょ？ あれは食べ物じゃないの。毒物なの。良い？ 万人が死んじゃうモノは食べ物じゃないの。分かる？」

「最後のは止めません。あたしは食べました。失神はしましたがいけません。なので止めません。戦闘糧食です。爆弾おにぎりです」

「ガツデエムツ!!」

諸々ルール違反としてダメ出しを受けたが糧食は止めない。

桜庭もどさくさ紛れの説得に失敗して唸る。

自分が皆に怪獣扱いされてメンタルが死んだのに、教え子は大差無いと本人に向かつて言った。

皆は怯えて出てこない。本人が決して殺さないと言うが信じてない。

「まあ、気持ちには分かる。というか、大和。そうは言うが実際大きな違いもあるまい。コイツらは至つて真面目に取り組んで打破する方法を模索していたようだ。他の舐めていた連中とは違い、真剣に取り組んだ結果がああ奇行ならば納得するさ。何が通じるか分からないから片っ端から試す。道理じゃないか。お前の本気を知るのは私達だけだ。そして、評価の詳細も私たちしか知らない。……大体の原因が見えて来たぞ私は」

あの時のロシア艦娘。ガングート、という七海から見れば大柄な女性だった。

二人して半袖の軍服を着用して、ガングートは窓際で断つてから葉巻を吸っていた。

「貴様、名を渋谷七海と言うのか。覚えてぞ。私はガングート。祖国では大和と同じく最終兵器の身だが、ここは貴様の鎮守府だ。公の場でもない。礼儀は気にするな。今は非常事態。無礼も許す」

「ありがとうございます」

自己紹介した際に目上の人だろうに、氣遣つてくれた。

桜庭も今回は試験官として来たので立場は候補生として接して良いと言った。

なので今回は軍の階級も気にしない、互いに最終兵器同士という話になった。

色々調査をしているようだが、詳しいことを知っているのかガングートは桜庭に言った。

「分かるか大和。これが、本来あるべき最終兵器の在り方と言うものだ。戦う前から戦う気力を根刮ぎ奪う圧倒的存在。それを怪獣と言うならば怪獣だろうさ。私もお前も等しく怪獣だ。映画の内容は此度の縮図と言えなくもない。私達が怪獣、コイツらが抗う人類という立場で考えれば、おのずと理由も見える」

分かりやすい立場の違いと言って、わざわざ映画を流して一時停止しながら説明しているガングート。

因みにこういう映画は好きだそうだ。

「だからって!! だからって、顔見た途端に泣かれて逃げられたのよ!? 酷くないこの扱い!? 私仮にも大和なんですけど!? 皆に優しくしてるのに殺されるって言われた気持ちがあんたに分かるかアツ!!」

ぶちギレた桜庭はガングートに机を叩いて怒鳴る。

……机に細かいヒビが入った。七海もビビって逃げ出そうとした。

あんなに分厚い木製の重厚な来賓用の机が……いとも簡単に……。

「待って!!」 渋谷さん、私は本当に何もしないわ! 怖がらないで!」

「無理です、桜庭さん来ないでください死にたくありません」

「止めてええええええ!!」

絶叫する桜庭は置いておく。

ガングートは至って冷静に、取り敢えず映像を見せると小さい別のモニターで確認した。

ショッキング極まりないあの記録を見て、顔をしかめた。

「不味いな……」

と、終わってから小声で呟く。

気を取り直した桜庭も冷静に拝見して眉をつり上げた。

「とんでもない相手になったわね、コロラド……。どうする？ 私たちで対処する？」

「いや、だが……。元はコイツらの仲間だ。挙げ句にあいつは人間だぞ大和」

「……渋谷さんの時とは違うわ。日本もあなつた場合のデータはない。ムラマサの記録は、あくまで打ち勝った場合のみだからね。うちの国でムラマサを拒絶したならまだしも、喰われるなんて程に負けた相手がいないのよ」

「優秀な人間が逆に仇になったか……」

何やら七海の知らないところで処遇を上の人として決めているようだが。

なんのことが聞けば、恐らくはなんとコロラドは生きている。

捕食されたが、七海の変容と違って暴走に近いらしく物理的に行つたと。

一先ず安心したのも束の間。

なんだか、不穏な気配を感じる。

まるで、ああなつた場合は……最初から決まっているような雰囲気で。

思わず口を挟む七海。

「桜庭さん。……あれは、あたしの所有物です。責任なら、管理しなかつたあたしが取るべきでは？」

と、自分の不手際ではないかと言ひ出すも。

「管理はしてたわ。浮遊要塞の近くは逆に下手な鍵つきの金庫よりも安全だからね。不用意に近寄れば浮遊要塞に袋叩きにされるハズ。渋谷さん以外にはムラマサを触らせないようにしてるし、危険だつて前提で周囲も知っている。なのにコロラドは自分から手にした。この時点で、コロラドの過失になるわ。何せ攻撃して黙らせたから、不意はない。狙つてやつたのよ」

厳しい評価にぐうの音も出ない。正論だつた。

適当においてあるように見えて、浮遊要塞の付近は何体も危険な深海棲艦が待機する、下手な艦娘や人間では返り討ち必至の安全な地帯。

管理という意味では、生きている防犯システムの浮遊要塞程確実なものはない。

七海によくなくなつてゐる事も吟味して、桜庭は判断した。

「然し、理由が理由だ。お前も関係ないとは言えない。クソ真面目なコロラドのことだ。最早手段の選定も出来ないほどに追い込まれたのだろう。お前が他の奴等に加減していればこうもならなかつたはずだが？」

「言うわねガングート。あれでも遊び半分程度には手加減していたんだけど？」

ガングートはコロラドの事情を鑑みているようだが、桜庭は容赦がない。

「バカを言うな。貴様の言う手加減は相手の艦装を木つ端微塵に吹き飛ばして瀕死にさせることをいうのか？ 前から思つていたが大和よ。お前は弱者の感情に疎すぎる。誰しもお前と同じ高みに行けると思うな。お前は、強すぎるんだ」

「……分かりたくても、私は所詮大和だから。多分、無理じゃないかな……。それに、強くなければ、優しくいられないの。強いから、優しくできるの。……ガングート。弱くてもね、選んじやいけない道もあるのよ。渋谷さんだって、私に勝てなくてもそれ以上の事はしなかつた。他の娘も選ばなかつた。けど、コロラドはした。……なら、禁忌の道を自ら向かつた。既にそれはもう艦娘じゃない。渋谷さんの時とは、理由が違うもの。私はあの娘を生かす理由はないと思うわ。他の艦娘と人類、ここの深海棲艦の敵になるだけ。早く追いかけて処分しないといけないでしょう？」

桜庭は言った。コロラドを……殺す？

七海は耳を疑った。まさか、あの穏健な桜庭がいきなりそんなことを言うとは。

理由を直ぐに聞いた。すると、桜庭はプライベートだからなるべく皆には言うなど前振りした。

当事者である七海だから教えると言ってから、説明してくれた。

「コロラドはね、家族を……妹を二人、戦争で亡くしているわ。双方艦娘だったんだけど、以前あった大戦で。その時はコロラド自身は民間人で、そもそも疎開していたから事情を知らなかったみたい。でも、音信不通になった姉妹の事を知らずに、彼女も散々努力して艦娘を目指して……知ったのは後だったそうよ。それで、どうもその時に誓っていたって話らしくて。死んでしまった妹たちに誇れる艦娘になるって。誰よりも強く、誰よりも立派な存在に。それが、最終兵器という立場になること。目標って言えば聞こえはいいけど、もつと言えば努力で全部越えてきたせいで、出来ることは全部する癖がついているのね。方法の取捨選択を……追い込まれて、出来なくなつたのが原因じゃない？」

追い込んだのは紛れもない自分達だが、と桜庭は言った。

つまりは……コロラドは、勝てないと絶望して手っ取り早く恐らくは確実にパワーアップできる方法を選んだ。

七海を、見ていたから。自分も出来ると信じて、失敗してしまった。

「コロラドめ、自分で才能はないと言いながら何故大和の教え子を真似た。早まった真似を……。この娘は特別なのだと見てわからないのか。常人に深海棲艦を笑って迎えるような精神力があるわけなからう。言うなれば才能があるから出来た芸当なのだと。焦りで視野が曇ったのか、あるいはそこまでして勝ちたかつたのか……」

コロラドの行為を非難しながらガングートは痛ましいと言い、桜庭に処分は早計と反論する。

だが事情など完全に変異して意識があるかもわからない相手に関係ないと冷酷に桜庭は言った。

ふと、思い出す七海。ジャーヴィスがこう言っていたのを。

大和は有事には絶対に裏切る。味方じゃない。彼女は軍人だから、人間だから。何時だって、人間の味方にしかない。

要するにもう、コロラドは人間じゃないと、桜庭は言いたいのか……？

(…………ふざけないで)

そう考えると無茶苦茶腹が立った。

七海はここにいる全ての艦娘も深海棲艦も人間として接している。

それは、同じ艦隊の皆も無論人間として対応しているつもりだ。

理屈では桜庭は正しい。危険なリスクは冒さずそのまま殺す。妥当な判断だ。

然し、その言い分は……七海の深く愛する皆に對して、あまりに気に食わない理屈。結局桜庭は自分が守るのは敵対しないからであつて、人間として見ていない。

七海の言い分は無茶苦茶だと分かる。支離滅裂だと。

だが、だからどうした。桜庭は一度間違えただけで、殺せと言うのか。

冗談じゃない。コロラドは生きているんだらう。あの白い気色悪い鯨の中で。

あるいは鯨その物で。形など知つたことか。コロラドはコロラド。

無理矢理元に戻せば良いんだらう!?

「桜庭さん。これ以上、口出ししないでください」

七海は不意に、自分でも驚くほどに低く冷たい声で桜庭に告げた。

俯いた彼女を訝しげに見た桜庭は絶句した。

七海が、見たことがないほど激怒している。

表情を見せないよう俯くまま、続ける。

「これは、あたしたち候補生の問題です。同じ艦隊の面子として、あのリーダーには何と
してでも帰つてきて頂きます。化け物だらうが鯨だらうが人間に戻れば良いんですよ？
う？ だつたら、あたしも深海棲艦化して、戦争してでも必ず連れ戻します。コロラド
さんは人間なんです。おいそれと、殺人なんぞをあたしの見ている場所でさせると思
いますか……?」

初めて反抗した。桜庭は七海が邪魔をしたら今度こそ本気で殺しに来ると分かった。あの反応だ。自分のところの深海棲艦と艦娘に敵対した人間に対する強烈な拒絶反応。

報復寸前で我慢している姿だった。僅かに震える七海に警鐘が鳴り響く桜庭。

(……ヤバイ!! 渋谷さんの前でこれは禁句だった!!)

余計な事を察知された証拠だ。

ガングートは意外そうに見ているが、好機と分かかって便乗する。

七海を責任もって手伝うからお前は引っ込んでいろと。

同じ立場が味方したせいで更に桜庭はピンチになった。

下がらないと、此処から生きて出さない。七海はそういう空気を教官に放っていた。

「わ、分かった……分かったから。一先ずガングートと渋谷さんに任せるから。お、落ち

着いて……」

滅茶苦茶殺気を放っていた。七海は怒らせると自滅もいとわかない危険生物となる。

慌てて降参して、事なきを得たが。

試験は延期。兎に角今は、コロラドの対応を優先するのだった……。

ジャーヴィスの秘密

……ジャーヴィスは予見していたのか？

桜庭が人間を選ぶと。なぜ分かった。

付き合いななど無いに等しい相手なのに。

不自然なことを言い出すジャーヴィス。

きつと、あいつにも何かあつたのだろう。

今回はガングートがいるが、なるべく自分達で何とかしろと言うのが方針だそうだ。

それも含めて、見ているから基本的な事は決めておけと言われた。

まだ、誰も知らない。七海だけが知っている。

打ち明ける相手を考えろ。七海は自分に言い聞かせる。

伝えて信じてもらえるか。そして、対応をどう出てくるかを予想しておく。

結果。ジャーヴィスのみに、打ち明けることにした……。

『……へえ。コロラド、深海棲艦になったんだ』

その日の夜。桜庭から試験の延期を言われて各々過ごしているなか。

コロラドの謎の失踪。理由を聞かれても機密で言わなかった七海は唯一、真夜中にジャーヴィスを埠頭に呼び出して打ち明けた。

白いサマードレスのジャーヴィスは真夜中でも気にしないで来てくれた。

寝静まった夜を座って眺める半袖と半ズボンの七海の隣に立って、そう呟く。

理由も含めて全てを明かした。約束通り、桜庭が敵対したので教えておくと。

『ほらね、言ったでしょ？ あの人は所詮は軍人に過ぎない。コロラドが人間の形をしなれば結局化け物扱いで殺すって。あたしの言うこと、信じてもらえた？』

ケラケラ笑って、海を眺める七海に英語で言った。

他の連中には何も教えない。何故なら、ゴトランドはまだしも姉妹は深海棲艦を怖がっている。

経路上、ああいう人間に言えば確実に殺すと言い出してしまうのは知っているから。

ウエルカムだったジャーヴィスにのみ、話しておいた。

『あたしだけ？　じゃあ、正解だよ夕立。他の奴等は絶対に助けけない。断言する。あいつらは殺せつて言い出すよ。知ってる顔でも今が化け物なら意味なんてないって。どうせ襲ってくる。だから殺す。信用できないよ、普通の感性じゃ』

自分は違うと言いたいのか、先ほど置いておいた荷物からペットボトルのアイスコーヒーを取り出して一本渡す。

くれると言うので有りがたく貰っておく。

嫁たちは、気にしないでいいと言っておいたら全員黙った。

だが、コロラドと仲良くなっていた皆はひどく心配していた。

聞くと、七海以外で数少ない仲良くなれた人間なんで心配なのだと言っていた。

そう言えばすっかり飯の關係で友好的になっていた。

コロラドの努力が皆に伝わったのか何なのかは知らないが、兎に角友人と言えると
言ったのだ。

だったら、七海の役目は必ず連れ帰る。それに限る。

皆のためであり、同時にコロラドを化け物と言われることに不愉快さを隠せない自分
に若干の戸惑いもあった。

なぜ、自分は大して気にしないのにこんな気分になるのか。よくわからないままだつ

た。

『ゴトランドはまだしも、ポーラたちはビビっている。ああいうのはいざ戦うとパニクになって制止を聞かないよ。ねえ、どうする夕立。……邪魔だしあの三人、殺す?』
『人殺しをする気はないですよあたしは。邪魔立てするだけで始末するなど非効率な。殺るならせめて事故に見せかけるとかしないと無理でしょう』

ジャーヴィスは既に邪魔な連中を殺しに行こうと誘う始末。

仲間意識など欠片もない。七海に良く似ているが、ここまで過激ではないと自分で思う。

コーヒーを煽るジャーヴィスは、軽く舌打ちして分かったと言った。

……この反応。気に食わない連中を皆殺しにしないと収まらないのか。

呆れたように七海は疑問があると決める前に聞いた。

『ジャーヴィス。貴方、一体何があったんですか。興味などないのですが、些か無視できないレベルで物騒なことを言っているのです。せめて理由を教えてください。何でも殺せばいいんじゃないですか』

理由を言えと。ジャーヴィスの過去など知ったことじゃないが、何分これからは共に対応する。

すれ違いを防ぐ意味でも此方にも根拠ぐらい言っしてほしいと。

すると、ジャーヴィスは自分も腰を下ろして、海を見て切り出す。

『夕立は、家族で死人っている？』

いきなり質問をされた。切り込んだ内容に横目で睨むと、ジャーヴィスも真剣な顔で語る。

『いきなりでゴメン。けど、結構重要なもんでさ。これがあるかないかでかなり変わってくるんだよ。教えて』

そういう話なのだと暗にジャーヴィスは七海に説明する。

家族の話はあまり言いたくはないが……仕方ない。唯一の協力者として妥協して教える。

父が幼少の頃に交通事故で死んでいる。姉妹や兄弟はいない。一人っ子。

ジャーヴィスは黙って聞いていた。そして、話し終えると自分から言った。

『あたしには、お姉ちゃんがいんだ。結構、年の離れてて。あたしが10の時にはもう成人して、就職してた』

そう言い出すジャーヴィスの表情はどこか寂しそうで、悲しそうだった。

過去形。つまりは、もういない。同じく死んでいるという意味だろうか。

七海も黙って聞いていく。それは、ジャーヴィスの過去。

ジャーヴィスが愛情に拘る、理由だった……。

ジャーヴィスは、自分の本名も明かした。

人間としての名前は、アリス。アリス・ガーネット。

割と良い所のお嬢様と自分で言っていた。

要は良家の令嬢。次女として、普通に育っていたと言う。

年の離れている姉と言うのは既に就職して一人立ちしていた。

子供の頃は、とても仲良しだったそう。

そして、姉には……婚約者が何時しか出来たそう。

ジャーヴィス……いや、アリスも何度も会ったことがある、とても真摯な眼鏡の青年。

医者を目指していたという婚約者は、アリスにも凄く優しく接してくれていたという。

姉と、婚約者と、妹のアリス。その三人の空間は、当時のアリスにとってはかけがえない時間。

『あたし……その人なら、お姉ちゃん任せてもいいかなって本気で思ってた。この人が義理のお兄さんになったら、凄いい嬉しいって。家族が増えるって、幼いなりに喜んでい
たんだよ』

と、アリスは七海にそう言うのだ。後悔を浮かべながら。

然し、悲劇は訪れる。

それは、家を出て独立してる姉に対して、突然両親が持ち込んだ縁談。

相手は豪商で、脂ぎった汚い中年のおっさんで、見合いをしろといきなり突きつけた
のだそうだ。

それまでは、独立してるなりに時々は応援している両親が、突如豹変したかの如く、姉
を束縛して家に連れ戻し、強引に事を進めていた。

当然、アリスも会ったことがある豪商の中年。

言い方は悪いが潰れたヒキガエルみたいな顔をした気持ち悪いおっさんだったとい
う。

『単なる変態だったんだ、ソイツ。お姉ちゃんを単なる性欲処理の相手にしか見ていな
い感じで。あとで知ったんだけど、あの野郎愛人が沢山いて、離婚も何度もしている最
低な男だった。それを知って……あいつらは、無理矢理お姉ちゃんを……ッ!!』

あいつらとは、多分両親のこと。凄まじい怒りを露にしているアリスに、七海は促す。

当たり前だが、婚約者は何度も姉に会いに来た。どうということなのか、理由を知りたいと訊ねた。

だが、両親はお前など勝手に姉が決めた婚約者。此方には正式な結婚相手がいる。

二度と来るなど追い払ったそうさ。で、それが本人にバレた。

知ってしまった姉は激怒し、両親に怒鳴り喧嘩になった。

あとで両親がそんな風になったわけは、豪商がアリスに似て美しい女性の姉に目をつけて金をやるから姉を寄越せと言いついて出てきてきたから。

金に目が眩んだ両親は口では姉のため、愛している娘の将来を案じていると言いつつ、事実はその通り。

姉は結局ふざけるなど勘当を覚悟で家を飛び出していった。

妹のアリスに、こう残して。

——アリス。騙されてはダメよ。愛しているなんて口ではいくらでも言える。言葉ではどうにも出来ること。アリスは……本物の愛は行動で……示してね。

荷物を纏めて婚約者の自宅に逃げ出した。所謂、逃避行。

だが逃がすまいと両親も追いかけて回して自分達の都合で利用しようとした。

姉と婚約者は国中逃げ回って、最終的に国外に逃げ出した。

……船で。

『ここからは、在り来たり。深海棲艦にお姉ちゃんとお兄さんの乗った船が襲撃されて、轟沈。二人とも帰らぬ人になりました……っていう。笑えるでしょ?』

アリスは七海に笑いかける。然し、表情は悲しみに歪んで今にも泣きそうだった。

悲劇はここで終わらない。姉と婚約者の死を知った両親は今度は彼女を将来のフィアンセにしようと同策していた。折角得た金の繋がりを保とうと手段を選ばなかった。アリスは当時、混乱して泣き叫んでいて何もできなかった。

姉が死んだ。義理の兄になるはずの人も。

なのに、悲しむことなく用が済んだと言わんばかりの両親の口先に、遂に幼いアリスは激昂した。

こいつらのせいで姉が死んだ。深海棲艦だけが憎いのではない。豪商だけじゃない。全ての元凶は……愛を騙って姉を我が物にしようとした、憎き両親たちだった。

挙げ句には幼いアリスまで利用しようとした。それに気付いて、アリスは怒り狂った。

『あたし、一回殺人未遂で捕まってんの。その頃に。幸い、あたしの行動理由が理解されて親戚の弁護士が庇ってくれたり、当時の年齢もあってなんとかあったけど……。ま、人殺し寸前まで行つたから。あたし今は自分で艦娘やつて生きてるけど、本当は孤児なんだ。親を殺そうとしたんだから当然だけど。当たり前だけど、後悔はしてないよ。殺

せればよかったとは思うけど、そうすると今頃死んでるだろうし。仕方無い』

と、そういう経緯があつて、姉のように何でも無い普通の愛を育み、ただ平穩に大人しく生きていくだけの存在を狙う奴等は許せない。

絶対に殺してでもアリスは守ると。もう自分が後悔をしたくないから。

誰かの悪意と欲望で、愛が破壊されるのを見たくないから。

その為なら、人を殺すことだって許される。

愛を奪う人間など死ねばいい。殺してやる。ジャーヴィスに戻った少女は、言う。

『夕立。コロラドを連れ戻すのは夕立しか出来ないよ。深海棲艦を受け入れることに抵抗のないあなたにしか。あたしも手伝う。コロラドの事は……まあ、気持ちは分からなくもないし、亡くなった姉妹のために努力したつていう気持ちも尊いと思うの。コロラドがバカらしい事をして深海棲艦になってたら助けなかつたけど、そういうことならあたしも動く。そんで、きっちりあの怪物をぶつ殺すのをやつてもらおう』

一気にコーヒーを飲み終えたジャーヴィスは、了承してくれた。

どんな困難でも一緒にやろうと。コロラドを助けることに異論はない。

ジャーヴィスの理由を聞いて、人間の悪意を知っているのだと言うことに、七海はどこかシンパシーを感じていた。

成る程、彼女もまた……悪意に翻弄された経験があつた。散々ひどい目に遭つた。

その気持ち、よくわかる。七海も、助かると言ってるから。

『アリス。あたしの名前、聞いているでしょ？ 七海。あたしは、渋谷七海。呼び捨てで良いです。あたしも、名前で呼びます』

これから共に戦うのだ。他人行儀な言い方は止めようと自分から言い出した。

珍しい事に、七海は自分から他人に寄っていた。その悪意に対する殺意や憎しみは分かるからか。

ジャーヴィス……否、アリスもまた……驚いたのは一瞬で、にやツと笑って告げる。

『オツケー。そういうことなら分かったわ七海。それじゃ……コロラド、一緒に連れ戻そうか！』

二人は互いに握手をする。人類を信じないサイコパスと、愛を奪う人間を憎む人殺し擬き。

その二人がこの夜、奇妙な関係になりながら……手を取り合った。

ムラマサで村雨が訂正してきた

結局、作戦についてはガングートに二人で対応すると伝えた。

理由を聞かれて、残りは必ず仕留めろと言い出すとジャーヴィスが力説していた。何やら思案顔でガングートは聞いていたが、聴て。

「……貴様の言い分もあながち間違いではないな。イタリアの二人は恐らくは無理だろうさ。だが、ゴトランドまで弾いて良いのか？ 奴は順応性が非常に高いぞ。言えば力添えはする筈だ」

ゴトランドは精神的な意味では最もマトモと言い方は悪いが、と教えてくれた。だが……。

『要らないです。あたしと夕立さえ知っていればいい。どうせあいつも、向こうに行く。普通じゃあ、ダメなのですよ。コロラドを助けたきや、生半可な気持ちじゃ連れ戻すこ

となんて出来ないから』

英語を解するガングートはジャーヴィスの濁った碧眼で見上げられて苦い表情になった。

「ジャーヴィス……貴様のその対人の好き嫌いはなんとかならんのか？ なまじ社交性が高いせいで貴様は表面上ばかりが上手く適応して、浅い上つ面ばかりが上達する。いざというときは貴様の方が裏切るだろうに……」

浅い対人関係ばかりを築いて、有事に見捨てるのはジャーヴィスの方だと。

それを翻訳機を通して聞いていたジャーヴィスは笑って否定する。

『あたしは、信じますよ。友愛、親愛。綺麗じゃないですか。混ざってない澄んだ気持ちなら、ね。でもこの艦隊にいるのは、やる気のない泥酔している役に立たない重巡と妹に振り回され胃痛と戦うシスコン重巡、あとはごく普通の精神がタフな軽巡だけ。……あたしが信じててもこの面子が果たして賛同しますかね？ 信頼が、深海棲艦に堕ちたリーダーに保てると思います？ 無理ですよ、あいつらじや』

そう。無理なのだ。七海やジャーヴィスとは三人は違いすぎる。

完全に破綻しているジャーヴィスと、愛に狂うサイコパスだから深海棲艦になった相手でも連れ戻すという選択肢が選べる。

当たり前のリスクのある、下手すれば自滅するだけの未来を。

当然ながら連中は嫌がるだろう。死ぬかもしれないのだ。

そこまでの義理もない。殺してしまえばいいとどうせ言うよ。

大体、七海が連れ戻すのもコロラドに同情したという訳でもない。

大半の理由は自分の都合であって、彼女を案ずる気持ちは自覚する限りは薄い。

ジャーヴィスも最後は自分の感情優先であり、細かい理由などない。

少なくとも、理屈で助ける道理がないのに助けようとする。

そんな二人が、おかしくないわけがない。

『あたしたちは、あたしたちの理由で動くだけ。あいつらは関係ない。必要ない。邪魔なら殺す。それだけです』

ガングートの眼前で平気で仲間を殺すような事を選ぶ奴等を殺すと言い切る。

溜め息をついて、ガングードは頭を抱える。

言うだけ無駄か。この二名は全体から見ても上位の危険思想の連中の一員であり、とくに夕立は狂暴な存在ゆえに手出し無用とすら言われる始末。

一度決めたら邪魔すれば誰でも噛みつく。実際大和には噛みついた。

手に負えない犬と小娘。見事に頭のネジが外れていた。

「……分かった。勝手にしろ。ただ、仲間割れしても私は責任を負わんぞ。評価も下がるのを覚悟しておけ」

反対する連中には最初から言わないという確かに合理的だが不安なやり方を迷わず選ぶ二名。

今は逃げた鯨の行方を探しているが、発見したら教えてやると言われたので現状は待機している。

二人はさして気にせず報告を終えて出ていった。

消えた仲間のために、邪魔な仲間を犠牲にする。

救いには代償を。仲間には仲間を支払う。

本当にこの艦隊は大丈夫なのか。心配になるガングートであった……。

それは兎も角。

延期になったが故に、皆は不安になっていた。

コロラドはどこに消えた。あの血痕は誰だったのか。

消去法で言えばコロラドだが、事情を知りそうな七海はなにも言わない。

姉妹はどうなるのかという不安であり、ジャーヴィスの予想通り自分の心配が優先ら

しい。

早く帰りたいと嘆くポーラと、解決を他力本願で願うザラ。お話にならない。
(役に立たない連中……)

言わなくて正解だった。

七海は自分だつてそうすると思いつつ、過ごしていく。

ゴトランドはコロラドを探しにいこうと言うが、勝手を慎めと叱られて悄気ていた。
意外なことに、ゴトランドはこの艦隊で最も仲間意識が高いようであった。

流石は唯一のマトモな感性の人間。ザラは判断は普通でも思考も一般人のせいで意味がない。

仲間意識と言うよりは知り合つたばかりの同僚みたいな他人行儀。

だから自分が危険なら自分を先にとる。

良くも悪くも民間人の考え方。だから弾く。

現在、コロラドは行方不明で、居場所はわからない。

その間に、七海は減つてしまった戦力の補充を浮遊要塞にお願いしておく。

ムラマサを持っていかれたので深海棲艦になれなくなった。

代替品をくれなしかと頼んでみると快く請け負ってくれた。

で、数時間もすると出来上がったのが。

(……指輪?)

錆色の鉄臭い指輪だった。

指先で摘まんで持ち上げると、何だか滴る赤い液体。

……待て。これ、血じゃないか。なんかの。

これをつけろと。これで変身できると。浮遊要塞は妙に自信満々で渡してきた。

(この子の作る深海棲艦の艦装は妙なものが多いいのは今に始まった事でもないですが

……今回の一際、生々しいと言うか際物ですわ……)

真夏にピッタリ怪談話か。と、思いながらつけてみる。

……途端に凄まじい悪寒が七海の背筋に走る。

!?

ぞわつとした感触は、一瞬で全身を巡った。

強烈な寒気と、気持ち悪い何か七海の中を血流に乗って一周したような。

慌てて外すも、既に左手の薬指から取れなくなっていた。

一体化しているのか、嵌めた部分からどす黒い毛細血管が、指に根付いていた。

「……とうとう呪いの装備扱いですか。何てことでしょう」

七海は融け合っている指を見て諦めた。意味がわかった。

あのムラマサは慣れている七海ですら平気で変容させるだけの出力がある。

抵抗できないコロラドが一瞬で喰われた程度には化け物になってはいるわけだ。浮遊要塞も当事者の一人であり、事情を知る。

これはつまり、こうでもしないとコロラドには勝てないという巻き込まれた浮遊要塞の意見。

一応聞いておくとやはり毒を以て毒を制する。そうしないと無理。

浮遊要塞が腹のなかで鍛えた業物。本人が言うなら事実なのだろう。

その辺は浮遊要塞を信じることにしたが。

(どうせこれも危険な代物。使い時を間違えるとあたしも鯨と同類になり得る)

使ってきた直感が虫の知らせを起こしている。

この指輪は、今までとは違う。鯨になったコロラドを想定している前提の猛毒。使い方を誤れば七海も同じ結末になると分かっている。

皆を残して消える気はない。コロラドを見殺しにする気もない。

リスクが自分だけで済むなら構わない。そう、七海は軽く考えていた。

いい加減分かるべきなのは……七海の背後にいつもニコニコ這いずる彼女が。

「……」

工廠で佇む七海を、小さく開いたドアの隙間から無言で真つ黒な瞳で見つめているのを自覚するべきだった。

んで。

「司令官。如月も行くわよ。指輪を頂戴。結婚指輪で」

「血痕指輪？ 如月、何を言ってる」

「ちよ、う、だ、い？」

「あつ、はい……」

本作品メインヒロイン……？ の嫁さんであった。

嫁さん、七海がまた良からぬ事を考えていると自前の嫁スピレーションで察知して、ストーリーキング。

主人公の知らぬ間に知っていて、脅すように生産していた血痕指輪を増産させて自分も装備した。速攻で。

そして？

「なにか問題でも？」

「おい嫁。深海棲艦になつていいとは言つてませんよ!？」

無事、このルートでも何時もの深海如月に覚醒したのだった。

と言うか嫁さん、あんたこれで三回目だよ……。

ここ人類ルートなのに何で覚醒するのあんたは……。

「最近ね、あのジャーヴィスつて人に付きつきりよね? 構つてくれないから、如月はとつても寂しいのよ司令官?」

「フアツ!？」

あ、ジャーヴィス優先させ過ぎて嫁が病んでた。

病みすぎて発情期来ちやつてる。久々のエロサキユバスになつているようだ。

因みにここ、深夜の七海の自室。ベッドの上。寝静まった周囲。起きているのは二人だけ。

……つまり?」

「司令官のお嫁さんはね、放置されると寂しくて枕を涙で濡らすの……。責任、取つてね? 司令官」

「待つて、待ちなさい嫁! 何をする気ですか!？」

そつちの意味で覚醒していたツ!!

「……言わせるの? いけず」

「顔を真っ赤にして言うような内容なんですか!?　こら如月、駆逐艦がそんなことしちゃダメ……」

……ここから先は、いろんな意味で樂園となりそうな予感がする。

割愛しても宜しいだろうか?

(しないでください!!　過去最高にあたしの貞操が!　純潔が嫁に現在進行形で奪われそうなのですが!!　これ絶対ダメなパターン!　逃げられない!　逃げたら負け!　責任寧ろ取りたい!!　けどこの話全体的に一応健全!!　どうすりゃいいんですか!?)
勢いと若さでナニをすればいいんですか!?)

おいお前、実は喜んでるだろ。

嫁が発情期だからって受け入れる気満々だろああん!?

普通ここはな、困惑しながら断るんだよ!

先送りでも何でもして、シリアスに戻すんだよ!

それをお前は……!

正直に言えよ。

お前、大きなお友だち向けのことしたいんだろ?

(はい)

はいじゃねえよ!?　迷わず即答しやがったこの女ツ!!

待てよそこ、完全に発情してやがるこの二人!!

指輪ある、自他共に認める嫁、嫁なら駆逐艦でも合法、双方駆逐艦だから合法とか互いに考えてやがるツ!?

(司令官は……一番最初に如月が貰うのよ……)

待てやそこおとおお!!?

畜生、ヤンデレが発情にメーター振り切りやがった!!

このままじゃ放送できない内容になってしまいうじやないか!!

「如月。下さい」

「喜んで」

止めろ主語なしに通じあうの!

余計に卑猥に聞こえるだろうがアツ!!

お前ら駆逐艦ツ!! 両方違法ロリ!!

手エ出したら不味いつてわかってんのに進んでるんですけど!?

互いに不味いなら今更? ロリコン上等?

バカか! 主人公とヒロインが揃ってロリのロリコンとか意味わかんねえわ!!

(イケイケゴーゴー! 結ばれちゃいなよー!)

何か今、別の部屋から変態の所業を応援する駆逐艦のメールが聞こえたんですけど!?

ジャーヴィスツ！ 悪乗り止めろオツ！！

お前も喜んでるだろ!? 初の既成事実じゃねえよ!?

いや止めようよナニやろうとしているのわかつてんのに!

何? これも愛の証? 相思相愛なら問題ない?

あるわあ!! ふざけんな、本当に誰か止めて!!

「外野が五月蠅いけど……」

「ええ。気にしないで行きましょう」

行くなアツ!!

こうなれば仕方無い……。

メタも大概なこの流れを断ち切る、ジョーカーを切らせて貰おう!

はい、ここに一個ムラマサみたいなオモチヤがあります。

鏢の中心に何か時計の文字盤みたいなものがある、何時ものムラマサのオモチヤです。

然しこれは、深海棲艦の艤装のオモチヤ。

こうして、長身と短針と一緒に時計回りに回すと……。

——訂、正! 訂、正! 訂、正! 訂、正!!

って大きな音が出てメイド達が起きる仕組みなのです!

「お嬢様ツ!? それと如月!? 抜け駆けは不公平と言った!! 脱水症状になる!!」

「あわわ……お、大人の關係を、ご主人様と如月ちゃんがやってる!!」

「驚くのも怒るのもそこじゃないわよ!! そつちも、だから止めろつて何度も言わせるなアツ!」

小春と春雨と村雨が目覚ましから訂正の聲が聞こえて飛び起きた。

怒る小春と、顔を真っ赤にして手で覆う春雨。

で、やらかそうとしている二名を発見、村雨が素早く立ち上がり割つて入り双方どつき倒した。

ナイス村雨! 流石色々な意味でエロいしスケベで可愛いのにツツコミ出来る本作の常識人!

「喧しいわアツ! この諸悪の根源が!!」

……ん? 何かこつちに飛んで……?

どかーん。

あーっ!?

追記。大丈夫、健全。

血痕指輪で、パワーアップ。

嫁、深海棲艦。七海、深海棲艦。

貞操、無事。発情期、訂正。

村雨が全て終わらせた。なので大丈夫

……以上!!

暗い声

沈め、沈め……。

海の底へと。悲しみの澱へと。
黒い声が聞こえる。

波を超えて、ここまで来た。

力が欲しくて、ここまで来た。

願いがあつて、ここまで来た。

黒い声が呼び掛ける。

沈め。沈め。

静かな海を、守りたかった。

優しい海を、護りたかった。

沈む、沈む。

皆が、沈む。

深い闇に。見えない黒に。

呑み込まれる。吸い込まれる。

消えていく。光が。見えなくなる。世界が。

嗚呼、黒い世界が……広がっていく。

強くなりたい。強くなりたい。

誰にも負けない。誰にも負けない。

負けたくない。負けたくない。

認められない。認められない。

もつと強く。もつと強く。

強くなりたいッ!!

(あ、ああ……！ ああああああああああああああああああああつ！)

コロラドには、勝てるだろうか。

ふと思う七海は、勝算を改めて考えてみた。

あの巨体に至った訳だが、恐らくは武装としての機能はムラマサは死んでいない。

下手すると勝手に増えることも否定できない。

村雨に阻止された一夜の過ちは結局お説教をされて制止されて。

秘密を嫁に知られた。深海棲艦になってしまって、角が生えた如月は自我を保てているのが幸いだった。

指輪を見せて、ムラマサが消えていることを知らない一同にムラマサの改良版と云っておいた。

コロラドを連れ戻すため、こんな手段まで選んで。自分でも罪悪感があった。

ジャーヴィスと共に、彼女を取り戻す。それは決定事項。

白い鯨との戦いは……まだ、先になりそうだった。

……足りない。

足りないのだ。あの怪獣を倒すには、力が足りない。

何れ程強くなればいい。何れ程大きくなればいい。

戦艦とは、大きな体躯と大きな主砲で戦うものだ。

砲弾の直撃にも耐える堅牢な装甲と、圧倒的な火力を持つ戦場の花方。
なのに。

小さい？ 彼女は、戦艦にしては小さいと言うの？

(違う……。私は戦艦。ビッグセブン)

小さいくせに大きいと名乗る。笑わせるな。

お前は小さい。見ろ、子供が16インチの巨砲を頑張つて背負っているぞ？

(違うッ！ 小さくない！ 頑張つて扱えるようにしたのよ!!)

その割には不恰好だな。自分だつて分かつてるんだろ？

上には上がいる。勝てない相手があの怪獣だつて。

認めろ。お前じゃ無理だ。分かるか？

お前が想像した大きなモノを与えてやったぞ。

故郷に居るんだろう？ 何もかも飲み込む大きな鯨が。

伝説みたいなものにすぎらないと戦えないとお前は諦めた。

バカな女。お前にはどうせ皆が愛想を尽かした。

お前はもう、最終兵器には戻れない。

お前はもう、人間には戻れない。

お前は主力戦艦には、なれない。

(黙りなさいよ!! 私は……諦めてない! 出来ることをしているじゃない!!)

出来ること? 人間を捨てて化け物になることか?

人間のまま戦わないと意味がないのに、ならどうしてお前はこれを選んだ。

分かっているくせに。ここから先は才能がある奴しか前にいけない。戦えない。

お前は努力じゃもう追い付けないと分かったから、あの時に手にしたのだ。

結果、お前は無様に人を失ってこの様だ。

分かるだろう。お前はもう、人間じゃない。

人の姿を失ったものを、世界は人間とは認めない。

お前は単なる深海棲艦。人類の敵だ。

(……深海棲艦、ですって?)

そうとも。お前は、自らの行いの意味をまだ分らないか?

お前は自分が何を仕出かしたのか理解できないか?

ならば、教えてやる。

お前は、怪物には怪物の力で対抗しようとした。

だから、お前は手に取った。呪いの力を。

然し残念だったな。お前には使うことなどできやしない。

精神の弱いお前に何ができる。憐れだな……自分の器を知らない身の程知らず。

(何ですって!?)

事実を言ったただけだ。無理なんだよ。容量が足りない癖に欲張りやがって。

相手は経験と素質、才能と努力で勝ち取った能力なんだぞ。

対してお前がやったことはなんだ？

努力を放棄し、時間を惜しみ、安易な方法を楽観視して選んだ。

全部足りないのだよ。コロラド、その存在では扱えきれない力がこの世界だ。

自分で自覚していたのにな？ 才能がないって。素質もないって。

なのに、その二つを要求されるモノを手に入れて逆に喰われたんだよ。

お前は、もう人間じゃない。深海棲艦の白い鯨だ。

肉が削ぎ落ちて骨が見える化け物。お前は鯨の亡霊になった。

ほら、絶望しろ。もう分かったんじゃないか？

怪物の誕生日にお前は死んだ。もう手遅れ。

諦めろ。無駄なことはするな。受け入れろ、自分のやったことを。

そうして存在を全て明け渡せ。そうすれば楽になれる。

鯨の怪物。巨大な影になって深海を泳ぐ純白の獣。

認めろ、コロラド。人間を捨てたお前はもう、仲間のところには帰れない……永遠に。

(……そんな)

そうだ。もつと絶望して未練を断ち切れ。

もつと闇を見て心を黒く染めろ。

もつと苦しんで自分を壊していけ。

聴てはお前は新たな姫に生まれ変わる。

その時、望む力は手に入るのだ。

白いいさなが、あの忌々しい連中を呑み込む白き闇になるのだから!!

獣の力か。

(厄介なものを手に入れましたね……)

七海は如月と共に秘密に特訓に明け暮れていた。

周囲には新しいこの事は言わない。機密と先んじて告げ何も言わなかった。それでいい。この力は、リスクが高すぎる。

正に姫をも超える怪獣に等しい能力を受け入れたが……。

「司令官、まるで半分別の生き物みたいね」

と、コツソリと変身している七海を見て、同じく変異する如月が笑った。

今は二人は真夜中の近海に哨戒で出ている。新しい反応には気にするなどと言っておいたから騒ぎにはなるまい。

だが、如月が見ているものは本当に七海なのか。

「事情は聞いたわ。いさな取りするなら、これぐらいしなないとね。生け捕りだし、尚更上から押さえつける能力が必要になるわ」

「でしようね。然し、改めて見ると今までとは全く系統の違う能力のようですが」

ひどい見た目だ。七海の左腕は爪が異様に尖鋭化しており、腕そのものが艦装に似た別の生物になっていた。

一番近いのは古鷹の艦装のように腕をそのまま覆い隠すようなモノ。

だが、五本の鋭い熊手のように変形している左手は黒い粘着性のある分厚い皮で覆われており、ネチャネチャという粘着の音が聞こえて、表面はヘドロ臭い粘液で湿っていた。

腕にかけても全体的に粘液で覆われた生物艤装になり、肩まで侵食している。

両足に装備された連装砲を含めて別の生物に吸収されて、形こそ同じなもの、質感も色合いも生き物に近くなっている。

足全体も恰も爬虫類のような見た目になっていた。

傷がつけば流血する。痛みも感じる。感覚もあり、最早一体化に近いのかもしれない。

シヨツキング極まるおぞましい姿だった。顔や上半身は影響を受けないのが幸いか。ただまあ、内面では結構悪影響出ているらしく、神経が尖りつつあって、鋭敏になった。

まさか、ソナーなしに正確に聴力だけで水中の様子が分かるとか、気配だけで艦載機の数も分かるとか誰が思う。

挙げ句にはこの艤装、自己再生も出来るようで、放っておくと勝手に治療する。かなり早い。

額に二本、左のこめかみに三本角が生えて、全体的に深海棲艦の白い肌と髪の毛になり、妙な黒いひび割れ模様が顔に走る嫁が笑っていた。

「カエルみたいね。海水堪えるカエルって何だか気持ち悪いかも」

「こんな鋭い鉤爪のあるカエルは国内には居なかったはずですが。如月、カエルは止め

なさい。あたしも傷つきますよ」

「じゃあ……鯨」

「誰が半分に斬られて生きてるんですか。死にますよ」

「司令官が分裂するなら歓迎だけ……」

「プラナリアな訳ないでしょう」

などとうでもいい話をしながら進んでいく。

如月も自身が変わ化したことにより、何がどうしてこうなったのか、20cmの主砲を平気で扱っていた。

言っておくが重巡の主砲である。如月は一応古い方の駆逐艦。……あれ？

しかも使わなくなっていた在庫から、矢鱈命中精度が悪いが射程の長い海外の余り物を勝手に持ち出し装備。

七海が練度の上があった今はもう使わないのでハゲの鎮守府に輸送しようと思っていた性能がピーキー過ぎる代物である。

戦艦と同等の射程のブツを簡単に扱う如月。しかも上手く調節しているのでよく当たる。

「どう？　じゃじゃ馬でも、扱う艦娘次第で化けるのよ？」

硝煙をあげる203mm連装砲を構えて自慢気に如月が笑った。

「嫁、それ使っていいです。好きになさい」

「ありがとう」

扱えるなら好きにしている。

腐るよりは数倍良いし、これが鯨に通じるかは不明だ。

巨大な白い鯨が想定する相手。火力はある方がいい。

七海も接近しないと自慢の物理火力を活かせないので、殴る蹴るの殴打の方が威力は高い。

あとこの鉤爪、凄まじい切れ味だった。刺す、切る、抉る、大体できる。

しかも相手の艦装を易々と切断する程の刃であり、鋼鉄だろうが知ったことかと言わんばかり。

試しにその辺の戦艦を急襲。振るってみた。

「あら……何かしら。妙なデジャブ……」

と如月が呟く前で、戦艦を斬首。骨ごとバツサリ切り捨てる。

倒れる首なし死体。爪は返り血を滴らせている。

ギロチンみたいな一撃だった。

「次は誰の首を飛ばすの司令官？ ジャーヴィスさん？」

面白くなってきたのか、朗らかに笑いながら彼女は恐ろしいことを言い出した。

悪影響と思われる、性格の凶暴化。七海も殺しを楽しんでいるのか、気分がいい。前にあつたのとは訳が違う、確実に殺したという手応えが楽しいのだ。

成る程、新しい艀装は獣のような野性を活性化させているようだ。

殺戮衝動と破壊衝動。それがあるから戦いは楽しい。

吞まれないようにしているが、嫁は直ぐに吞まれて物騒なことを言い出すのが玉に瑕。

「如月。ジャーヴィスに嫉妬するんじゃないやありません。あたしの嫁は如月です。親愛と多分友愛を間違えないように。ライクとラブは別の感情。分かりますね？」

と言うが、不満そうに唇を尖らせて拗ねる。可愛い。

「そういつて何時か混同するのよ……」

「客人と永遠の嫁を一緒にして自分で悲しくなりませんか？」

暗に如月は七海のもの、ジャーヴィスは良くて友達ぐらいの違いがあると言われて、少し機嫌が直る。

自分で卑下するなという七海のラブコール。

「じゃあ結婚して司令官。良いでしょ？」

「ん？ 別に構いませんよ。まあ、この騒動が終わったら大本営に押し掛けて、ちよいと指輪と書類と勝利をかつさらってくるのもアリです。如月が第一の嫁ですし、式をあ

げるなら如月からですかねえ」

何やら某怪獣が聞いたら阻止しに来て、鎮守府正妻戦争が勃発しそうな物騒なことを如月に告げる。

「然り気無く次に行く準備してるのね……嬉しいけど」

「ええ。これでも嫁と妹と娘とメイドは全部あたしの身内です。結婚しないわけ無いでしょう？ ほら、如月。嫉妬する暇があるならうちに嫁ぎなさい。花嫁修行ぐらいしないとめとつてあげませんよ？」

「はいっ！ 焼き餅焼く前に花嫁修行してきますっ！」

……真顔で全部回収する気だったこの変態。

不穏すぎる事を言いながら、兎に角今は鯨に備える。

鯨との戦いは……一刻一刻と近づいていた。

鯨の報せ

新しい覚醒はジャーヴィスには伝えておいた。

同時にガングートにも一報を伝える。

桜庭にはガングートから言っておいてくれるという。

此度の一件はガングートが七海たちの世話をしてくれる。

対処に乗り出した二人には捜索は任せておけと言ってくれるので一任する。
で。

「司令官は如月のモノよ。それ以上仲良くすると……如月は貴女を殺すわ」

嫁が凶暴化の悪影響が進んでいる。普段なら大本営に直送されて検査されるので詳細がわかるが今はできない。

いつ、コロラドが出てくるか分からず対応が一般的な艦娘にできるかも不明。

ガングートが特別に教えてくれた。

コロラドが変異した姿は……既知の深海棲艦に似ている。

「太平洋深海棲姫。一度ハワイの方で出現した戦艦だ。ただ、そいつは歴とした姫。人間の姿をしていた。艦装のようなモノであの白い鯨がいたんだが……奴は喰われて鯨になったしな。本体の形状は正直予想はつかない。生きてはいるだろうが」

という大型の新種だと。

待機して何時でも抜錨できる態勢にしておかないと横槍が入って出来なくなる。

対応策としては無理矢理だが理解はしてもらえた。問題は普通の艦娘の変異だがこれも既にデータはある。

村雨たちの存在が如月の奇行にも対応してくれたのは幸いだが……。

『大丈夫。あたしは、友達だから。同じように人間に大切なものを奪われた奴等同士の』
如月が執務室で相談していたとき、同席してジャーヴィスに放った敵意にも朗らかに言った。

自分の過去を喋っていいと言うので概要を如月に教えると。

「……そう。ごめんなさい、てつきり司令官を利用するのかと思って」

大人しく殺気を引っ込める。簡単に信じたのはジャーヴィスが実際、何なら試してみるかと提案したからだ。

『良いよ？ ポーラでも殺ろうか？』

『止めなさい。今はコロラドさんが先決です』

と、七海に良く似た殺意を笑顔で切り出すジャーヴィスに、七海が制止する。

それを肌で如月は感じていた。同じだ。全く同じ迷いのない真つ黒な殺意が見えた。邪魔な障害認定の他の三人はもういない方がジャーヴィスは楽でいい。

ことあるごとに、始末しようと言っている。

本性を見せても互いに問題ない。七海も友達だからという発言を否定しない。

気さくに名前呼びあっていると七海が自分から如月に教えた。

本名はアリス。アリス・ガーネットと、彼女は言うらしい。

『如月、あたしが信用できないなら殺してもいいんだけどさ。ちよつと時間頂戴？ 最

低でもコロラド連れ帰って来るまではあたしも死ぬわけにもいかないし』

自分から消してもよいが時間をくれと言う辺り、七海と同質の中身が異常な人間。

歪んでいる。歪んだ海外の駆逐艦に、彼女はなにもしないと云った。

「司令官の同年代のお友達って、見るのは初めてだから。そういう人は、大事だと思いう理的に判断して、殺すのを撤回した。

そういうのは良くないと七海にも言われる。

『あははっ。愛されてるね七海。嫉妬は愛情の動かぬ証拠だよ。大事にしてあげてね』

『言われずともしてますよ』

ですよねー？ とジャーヴィスは笑っているが普通は無理だ。

ここにいる三人は破綻している艦娘だから、何にも違和感はない。

白い怪物と戦うという荒唐無稽な事を計画しているし、一応戦艦が相手なのだ。

それを駆逐艦だけでどうにかしようという無謀と、ガングートの助力が果たして間に合うのかも分からないのに。

三人は念入りに立てていく。残った三人は待機命令で大人しくしているが不安は募っていた。

そして、運命は動き出す。

二日後。ガングートから緊急の入電。

遠方の外洋で、電探に反応しない巨大な白い鯨と戦っているという情報が入ってくるのだった。

鎮守府では直ぐ様準備に取りかかる。

留守番を五十鈴に命じて、正式な命令と言われてなにがなんだか理解しないまま五十鈴は請け負い。

「ちよつと七海!?! 何事なのよ?!」

「ごめんなさい、こつち側の問題なので」

利口な五十鈴は、暗に七海の言う言葉が今請け負っている関係と、居なくなつたコロラドの事だと経験で悟つた。

で、どうにも事情がわかつてない他の三人と違つてジャーヴィスのみが意思疎通が取れている。

つまりは二人で対処する問題であり、他は部外者になるということ。

五十鈴はなにも聞かずに任されて、一緒に抜錨と命じられました三人も困惑していった。

「へっ……? 出撃? 何でですか?」

「待機命令じゃ……!?!」

ポーラとザラはとくに理解できていない。

ゴトランドは雰囲気で分かつたのか、七海に言つた。

「戦う準備、しておくね」

ガングートの指摘通り、ゴトランドは意外と適応力が高かった。

呆然としている姉妹とは違って、察する洞察力に優れているのか。

ともあれ、如月も何故かついていくが気にするなと言って、挙げ句には。

「みんな、お供を」

工廠で浮遊要塞たちをお願いして同行してもらおう七海。

漸くただ事ではないと分かるポーラとザラ。真つ青になって行きたくないと言うが命令だ。

拒否すればどうなるかなど分かったことであり、従うしかない。

装備して示される海域に向かって飛び出していく。

その背中を、心配そうに窓から見送る五十鈴だった……。

外洋に向かう途中、文句や質問をする姉妹を全部七海とジャーヴィスは無視した。

ただ、旗艦代理である七海は冷たく言った。

「お前らの意見は聞いてない。黙って従いなさい」

一方的に通達する。そこには微塵も信用していないという意味合いがあった。やることを全部決めておいた。どうせ意見のないお前らは従うだけでいい。

その態度にザラは反論するが……。

「五月蠅い。お前らの意見は決まっているんですよ。単なる民間人上がりが、なに言うんですか」

七海は前を見ながら、吐き捨てる。

ゴトランドも仲裁はせずに意見を聞くと今はなにも言わない。

「民間人上がりって……あなたもそうでしょう!？」

「ええ。ですがこれでも、士官学校で最低限の教育を無理矢理受けさせられた正規の軍人ですが何か?」

義務で学ばせられたと言って、ただ民間人のまま戦場に立ったザラとは違うと、ハッキリ告げる。

「それなりの経験はしているんですよ。死にかけた経験も一度や二度はありますし、見れば分かるでしょう? あたしは散々周囲から迫害されました。区別され、差別され、誹謗中傷や心無い行為も受けている。お前らにそんな経験ありますか? 心底人間が嫌になる、そんな瞬間が」

自分は良いが周囲にそれをするから対応しないといけなかった。

七海は自分の評価の扱いをそう、理由として話した。

自分の行いの結果だから受け入れる。それは良いとして。

「決めつけと言いましたね？ ならば問いますがザラさん。あなた、うちの深海棲艦を未だに怖がっているでしょう。敵意はない、武器もない、力もない。物証を見て、本人を目にしておきながら。まだ、自分が殺されるかもしれないと」

七海は自分がそうであると言うのだ。

ザラが鎮守府の深海棲艦を受け入れる気などなく、忌避したいという気持ちと同じ。

ザラはこの案件においては、全く信用できない。何故ならばその態度が雄弁に語っているから。

「そんなの……当たり前じゃないですか！ だって、深海棲艦は……」

「深海棲艦は敵ですか。当たり前ですか。ならハッキリ分かりやすく教えます。……そんな人間に、あたしが言うわけ無いんですよ。お前は最初から、信用する価値がない。言動を確認するまでもなく、明確な答えを表している」

ザラは普通に考えて完璧な返答をした。

至つてマトモな、万人の答え。だからこそ、最大の誤答をしてしまう。

まだ口論してる二人に辟易して、ジャーヴィスが口を挟んだ。

『もういいよ七海。だから言ったのに。コイツら殺せば後が楽になるって、あれほど』

然り気無く名前で呼び、いつの間にかそちら側に居たことを教えつつ、翻訳機を通じてジャーヴィスの言葉を聞いたポーラが速度を落として距離を開いた。

今、ジャーヴィスは。ポーラとザラを、殺そうとしていた。

そう、言った。

「ひっ!?!」

ザラですら、ジャーヴィスの声色が本気のそれと感じ取って短く悲鳴をあげた。

鬱陶しい虫けらを見ているような視線で一瞥してくるジャーヴィス。

「……………命令ですので。殺しはしませんよ。邪魔さえしなければ、の話ですけど」

七海も会話の内容を否定しなかった。要は命令でないなら沈める理由もあると。

邪魔するなら結局殺すと。この駆逐艦たちは本気で言っていた。

ポーラは最早喋る余裕もなかった。下手に言えば逆鱗に触れてそのまま死ぬ予感が

あった。

「…………止めようよ。仲間内で言い合うの。意見が違うのは分かるけど、夕立さんもジャーヴィスさんも短絡的過ぎる。協力を強要しても、二人ともなにもしないよ? となく、私は言いたいことが理解できたけど…………」

ゴトランドがそこで仲裁した。

互いに言いたいことは分かったと言ってから、改めて問う。

「……居なくなつたコロラドさんの事だよ。この出撃。で、きつと……コロラドさんは襲つてくる可能性があるんじゃないの？ 多分、深海棲艦になれるって話の夕立さんがそこまで言うなら……コロラドさんもそっちに流れちゃったとか。それで、理由あつて鎮守府から消えちゃった。合つてる？ 現状の情報を纏めた限りはそんな感じになると思うんだけど」

……訂正する。ゴトランドは、恐らくこの残つた面子の中で最も利口で、最もマトモだ。

中立の立場から、客観的に見て意見が言えて、まとめることが可能なリーダーに向いている性格。

七海とは違つて、相手の言葉を聞こうとする姿勢があつた。

驚く姉妹に対して、二人は大体合っていると隠さず肯定した。

如月と浮遊要塞はその為の戦力としていっていると云つた上でコロラドのプライベート以外の事情を漸く話した。

みるみる様子が変わっていくザラとポーラ。

聴て、ザラは全てを聞いてから怒鳴つた。

「な、何を言っているか分かつているんですか!!? そんな鯨のお化けみたいなものを連れ戻す!! 滅茶苦茶ですよ!!」

案の定の言葉に二人はやっぱりかと諦め聞き流す。

想像通りの展開に自分の予想は合っていたと分かった。

ザラは連れ戻したとしてどうするのか聞いた。

七海は知っていると言い返す。

「あの装備、元々はあたしのですよ？ 使い方を知らないでも？ あんなもの、意識のないコロラドさんを叩き起こして内部から屈服させるだけ。精神力の強さを問われませんが、負けず嫌いであろうコロラドさんなら応援すれば何とでもするでしょうし。意識がないなら叩き起こす。無理なら仕留める。二つに一つです。何か他に質問は？」

七海の所有物なのだから、当然扱いも知る。

何気無く、もしも無理なら殺すとジャーヴィスにも向かって言った。

結局は博打だ。無理とジャーヴィスと七海が判断すれば……その時は遠慮なく殺しておしまい。

その辺の分別もついている。駄々のように無駄な足掻きも危険なのでしない。

今はまだ可能性があるから進める。ダメなら桜庭の言う通り、殺す。

責任がある以上は、抗うが必要以上にしがみつかない。

互いに子供とは言え、戦場に居るのだ。

言い出した以上は決着も自分達でつける。

軽く頷いたジャーヴィスも、了承した。

こう言われると、ザラは何も言えない。

絶対に取り戻すと、激昂して桜庭に噛みついた時とは違い、冷静になった今の七海には。

ジャーヴィスも努力はするが悪足掻きはする気もない。

コロラドが内部にいないならもうそれは深海棲艦。ただの怪物。

踏ん切りは……大事なのだ。

何も言えずに完封されて、押し黙る。

俯くザラに、そんなだから言わなかつたんだとジャーヴィスが容赦なく追撃して喋らせない様に釘まで刺した。

ポーラも言うことは聞くとだけ言って、ゴトランドのみ神妙な顔で思案していた。

そんな分離している彼女たちに……戦いは近づいていた。

艦喰らう獣

外洋の戦いは到着頃には熾烈を極めていた。

残骸と思われる艦装の欠片が波に漂って其処らから黒煙が上がっていた。

……艦装だけ浮かんでいた。

「悲惨ですね……」

『思つたよりも通常の艦娘が派手に刺激したんかな。この有り様は予想外だよ』
砲撃の音が聞こえる。遠くでまだ戦っているようだ。

電探に反応あり。ジャーヴィスの言う通り、通常の艦娘が交戦していた。
にしては、何やら様子がおかしいが……？

愕然とするザラ、ポーラを尻目に移動して取り敢えず様子見。

少なくとも此方は部外者の存在は目障りであり、死んでくれた方が後腐れもないと七海はジャーヴィスに言う。

更には知られれば邪魔されるし、向こうの指図も受ける道理もない。最悪人類同士の戦いになるだろう。

何やら向こうの艦隊から通信が入るが七海は取り合わない。

ゴトランドも言いたいことは理解している。故に文句はない。

本音を言えば艦娘とは演習じゃない、本当の戦争は皆も避けたいのだ。

目的が目的である以上は、接触も控える。

見殺しにするのかと言われれば作戦のためであるので無論、肯定。

どのみち、消えてくれた方が寧ろ好都合とジャーヴィスと七海は判断した。

遠方で停止して、ゴトランドに七海は言った。

「瑞雲を飛ばしてください。観測しながら判断します」

「了解。でも、瑞雲で良いの？ 一応一通り持つてるから偵察機でもいけるけど」

「万が一此方にコロラドさんが仕掛けた場合は先制で一撃ぶちこみます。襲ってくるならブツ飛ばして捕まえるだけです」

観測しつつ、今は見ていると作戦を簡単に教えて、ゴトランドも承知。

飛ばしながらゴトランドは、違和感に気付く。鯨の反応が電探に映らない。

目視では戦いの様子がギリギリ見えるが、広い範囲のそれに反応がない。

七海に聞いてみると、当たり前だと言った。

「あれ、元々単なる刀ですよ？　電探の仕組みは知っていると思いますが、単なる生物となったあれには反応しないのは当然かと。言わば深海棲艦に類似した別の生物と
思つて下さい」

生き物に反応しないのは納得できると理屈を説明した。

成る程とゴトランドは頷いて飛ばしていく。

一応腹には大きな爆弾を抱えている。仕掛けるなら頭上から爆撃してやるのみ。

何も無傷で捕らえるなどと言っていない。死なない程度には痛みを与える。

まあ、あの様子じゃ大した傷も負つてないだろうが。

ガングートにも連絡。到着したが通常の艦娘が戦っている。

暫く様子を見ておくと。了解されたのでゴトランドの報告を待つと。

「うわあ!？」

目を閉じ神経を集中していたゴトランドが突然悲鳴をあげた。

驚きの声で。何事が問うと。

啞然として、ゴトランドは七海に言った。それは……とても恐ろしいことを。

「なんか……背骨剥き出しで、背鰭とか尾びれのない手足が生えてて目玉のない気持ち悪い真つ白な鯨が……近くにいる深海棲艦とか艦娘とか、片っ端から襲つて食べてるんだけど……。艦娘はまだしも、人っほい戦艦とか、イ級とか見境なしに全部襲つて……」

「!？」

ザラがビクリと硬直した。ポーラは一瞬気を失いかけた。

如月も思わず口元を両手で覆う。

ジャーヴィスはあちやあ、と右手で両目を隠して七海はそう、と頷いた。

『これは意識ないね。ハッキリしたわ。七海、取り敢えず潰す方向に切り替えよう』

『ムラマサに完全に意識を取り込まれていると見て良いですね。悪い方向に一段階、と』

現状を聞いても大して驚かない二名に、ザラは正気かと怒鳴り付けた。

目の前で艦娘が捕食されてる……餌になっているのになぜ助けない。

呵責はないのかと泣き叫ぶように糾弾するも。

「……はっ？」

七海は理解できない目でザラを見ていた。

何を言うのかまるでわからないと言う表情だった。

如月も流石に理由を聞くと。

「今行けば諸とも餌ですよ？ それでも良いならザラさんは勝手に助けに行ってください。許しますので。ああでも、ザラさんが喰われても助けないので、ムラマサの腹で来世を夢見て消えてくださいね」

凄まじい身勝手な理由が出てきた。何で知りもしない不都合な因子を助けるのか。

自分達の任務に不都合になるだけでメリットはない。死んだ方が良いと言っただろう。

改めて淡々と効率を優先して説明している七海にジャーヴィスは理由を付け加える。『最悪敵対して殺せば、残骸が増えるだけじゃない。そうすると後々面倒臭いじゃない？ だったら見殺しにして知らん顔しとけば良いの。だってこっちは任務の遂行中。足止めご苦労様、あとは邪魔くさいからとつとと死んでねっという展開。悪くないよね七海』

『いえ、最高の手段かと。コロラドさんは悪くないですし。吞まれているムラマサが喰っているので意識の無いであろうコロラドさんにはどうすることも出来ません。ですんで、罪はない。此方もノーリスクで障害の排除ができる。俗に言う、漁夫の利と言います。賢い漁師は己の手を煩わせない。正しく理想の流れです。ですんで全滅するまで放置です。ゴトランドさん、監視を続けてください。残酷なら、目を背けても構いません。動きがあつたら教えてください』

……コイツらは、人間か？ 本当の化け物がここにいた。

到底理解できない、したくない無神経を通り越して外道の思考ですらあった。

他者を自分達にとつては効率の問題にしかせず死んだ方が有難いから早く死ねとまで言う始末。

ジャーヴィスは笑っていた。七海は追加で如月とゴトランドを危険に晒すわけには
いかないとも言うが。

如月はそれで納得した。してしまつた。何故だ。何故する。なぜできる。
ゴトランドも、この言い方には苦言を呈するも内容は否定できなかった。
此方の安全を確保するために見殺しにする。

効率の言い分は理解できないが、ここは所謂緊急避難と言えなくもない。

ゴトランドと如月は死なせないと七海は無表情で言っている。そこは信用できると
思う。

ただ……他の理由が、あまりにも常人の感覚とかけ離れているが……。

「この……人殺しツ!! 何でそうやって、あなたは他人になにも思わないの!?! 頭がお
かしいわ!!」

とうとう我慢できずに、ザラが素で叫ぶ。頭がおかしい、人殺しと。

久々に罵られた言葉。如月が一瞬で殺気立って、主砲をザラに向ける。

ジャーヴィスも同時に、左右から向けられる殺意にザラが怯む。

ポーラはもう許容範囲を超えて、単純に恐怖に支配されていた。

逃げたい。逃げないと、この仲間のふりをした連中に殺されるか、あの鯨の化け物に
喰われるかの二つだけ。

余裕がない、半分錯乱状態に近かった。

「五月蠅いわね。司令官、もういいでしょ。こいつ始末するから」

『やっぱり目障りだね、お前ら。死んじやえはいいよ、今ここで。あたしたちの手で』

二名に加えて浮遊要塞まで全部が口から伸びる砲身を向けていた。

四面楚歌。七海の代理をしている艦隊において、二人は異端視されていた。

至つて普通の感性が、ここでは一切通じない。通じないことを目指しているから。

懐かしい罵倒に、ポカンとしていた七海だったが。不意に、思い出したように爆笑を始めた。

腹を抱えて、付き合いの長い如月すら見たことのない大爆笑で、ザラの言ったことを単純に笑っていた。

何がおかしいと怒るザラに、濁ったオツドアイに涙を浮かべて腹筋が痙攣している七海は、少し待つてと言つてから顔をあげた。

笑いすぎてお腹が痛いと、顔を赤くしていた。

「はーっ……。笑つた笑つた。初めてかもしれませんが、こんなに笑つたのも。然し、面白い事を言いますね。ザラさんは芸人の才能でもあるんですか？」

皮肉でも何でもない、誉め言葉として七海は言つた。

それが逆にザラには気持ち悪いと感じた。この女は何を言い出している？

七海は心底愉快そうに、ザラに向かって切り出した。

「頭がおかしい。嘗て、あたしに同じことを言った艦娘が居ました。今考えてもマトモな感覚の普通の人でしたよ。死んでますけどね。解体されたんじゃないですか、行方知りませんが」

思い出す、あの出来事。彼女の言葉。

真つ先に七海を異常と指摘した眼鏡の艦娘。

酷く懐かしい。

「ご指摘通り、あたしは異常者ですよ。ええ、それがなにか？ 別におかしなことでもないでしょう？ 理屈で生きているって言うのは、こういうことですよ。そして、多くの人間の感覚でもありますよね？」

異常者と認めながら、おかしいことはないと言う。

何故か？ 何故なら……。

「人間なんて、一握りのマトモな奴と大半の勝手な奴しか居ません。あたしも、勝手な人間です。自分の理屈で生きています。自分の感情が一番です。然しその行為の何をもつてすればおかしいと？ 世の中、自分が死にそうなら誰だって他人を見捨てます。何で緊急避難という概念があると思います？ そんなの、あたし以外の人間がそういう行為をするために必要だからに決まってるじゃないですか。あたしは代理の旗艦です。

不用意なリスクを減らす義務があります。同時にあたしは人間として、身内として見て
いる如月や友達のアリスを死なせる気もない。なら、これが最も妥当な判断だとわかり
ませんか？ ですがザラさん。お前がそう言うのなら、勝手に出ていけと言ったでしょ
う。あたしに文句をいう前に、助けたければどうぞお好きに。あたしは、責任のある立
場なので感情を優先しません。無茶を言っている手前、安全策も同時に選ぶのみ。気に
入らないなら、個人行動でもしてくださいな？ あたしたちは、お前らなんか必要な
いつて何度も言ってるじゃないですか。協力してくれる人がいれば十分なんですよ。
元々、予想通りの感覚でしかないお前らに期待している事もないですし……居なくても
大差無いのですよ。ですから、分かりきった事を今さら言っている、鈍い一般人は救助
でも増援でもお好きに。ほら、あたしみたいなサイコパス嫌でしょう？」

長い言葉を言ううちに、嘲笑いになっていく七海はザラを挑発していた。

バカらしい事を今頃言うその鈍さに笑ってしまったのだと。

自分の考えは人間の身勝手さのうちであるという屁理屈。

大切な連中を死なせる気はないがどうでもいいお前らは知ったことじゃない。

自分の立場で最善を選んだだけという理屈に、気に入らないなら早く消えろという言
葉。

何もかも、一般人の枠から出ないザラには耐え難い苦痛であった。

同時にポーラも限界に達した。殺される。このままではこの子供に殺される!!
「う、うわあああああああつ!!」

ポーラはいきなり絶叫して、取り乱したように一心不乱に逃亡を開始した。
奇しくもそれは、お食事の中の鯨のいる方向で。

ゴトランドが危険と言うが聞かずに逃げていった。

「ポーラッ?! ……じゃあいいわ、ザラが皆を助けに行くから!」

ザラも妹を追いかけて、勝手にすると行って……離脱していった。

ゴトランドも止せと言うのに怒り狂ったザラは聞かなかつた。

ゴトランドが必要なのに何故挑発をすると流石に怒るが……。

「あいつ、とんだ素人ですね。あの人数を救助しながら離脱など出来ないって少し考えればバカでも分かるのに……。死に行くような戯けに付き合つて死地に行くことでもないの、無視でいいですよ。勝手に野垂れ死にするでしょう!」

呆れている七海が小さくなる背中を見て肩を竦めていた。

旗艦としてあんな無策に付き合いきれないという判断だった。

『死ぬかなあいつら? 死んだらラツキーじゃない? 本当に、七海の言った通りになればスゴいけど』

勝手に死ぬなら死ねと追い払って清々しているジャーヴィス。

ケラケラ笑って手を振っていた。

「死ねばいいのよ。司令官に齒向かう邪魔な人間は……。全部海の藻屑になればいいの」

恐ろしい表情でぶつぶつと小声で独り言を言っている如月。

完全にアウトな面々しか残ってなかった。

ゴトランドはため息をついた。

この面子、通常と異常で見事に分裂して事実上瓦解した。

自分も理解できる部分が、理屈に納得できてしまう異常軍団だったから加勢しなかった。

死にたくないと言うのも事実であり、ゴトランドも故郷には家族がいる。

遠い異国の海で死ぬのはごめんだ。七海に従えばこれ以上の無謀には出るまい。

その予感は正しかった。数分後。

「ああ……」

ゴトランドは上空から見た。

懸命に救助するザラよりも先に、錯乱していたポーラが狂ったように撃ちまくり。

発見されて、大口の開いた鯨に吸い込まれていく様子を。

足掻いても無駄なように、穴は海水ごと周囲の艦娘と深海棲艦を丸飲みしていく。

大きな体躯の純白の絶望は止まらない。

ザラが気付いて助けようとするも、浮かんでいる艦娘たちが次々吸収されていく。怪我人を背負っていたザラも背後の追いかける穴の引力に抗えない。速度が遅すぎた。

聽て、最期まで怪我人を手放すことなく。ザラも……吸い込まれて消えていった。見上げている顔は……絶望一色。

それは、自分への無力さによるものだったのだろうか。

「だから言ったのに。バカな連中」

『格言にあるじゃん。正直者がバカを見る、ってね』

無神経な二名は気付いてもどうでもいいように、ガングートに一報入れていた。

ザラとポーラが勝手な行動して勝手に死んだと。

此方の言うことを言っても聞かないので好きにしろと言ったら本当に出ていったと。

「お前という女は……! ああもう、帰ってきたら艦装の録音装置を提出しておけよ!

今は現場で何とかしろ!」

と叱られた程度で済んだ。頭を抱えるガングートが簡単に想像がつくゴトランドだった……。

残酷な方法での大団円

見事に目撃者は全滅した。足止めしていた連中は喰われた。

あいつらも喰われた。なので残ったのは軽巡一隻と駆逐艦三隻、あとオマケ。で、相手は巨大な白い鯨。ゴトランドが深呼吸して報告する。

剥き出しの背骨のある背中に連装主砲を複数確認。

側面には無数の回転式機関砲、細くなる先端に向かうにつれて副砲も幾つか。

「……って、待って!? あゝの鯨、よく見たら左右に五連装のガトリング背負ってない!? まさか、C I W S!?!」

ゴトランドが思わず悲鳴をあげた。

満腹になったのか、一度甲高い雄叫びをあげ緩慢に動き出す鯨。

潮吹きを行いながら七海に背を向けて移動開始。

「どうやら食事をしていたようだ。主食が艦娘と人間、深海棲艦とは笑えないがあのムラマサ。」

ゴトランドが言ったC I W Sとは、アメリカなどの一部の大型艦娘が搭載しているという機銃の一種に当たる、らしい。

要は飛んでくる艦載機やミサイルを迎撃する機関砲。夥しい数の弾幕を継続的に行う補助機装と言える。

が、問題は射程が短い故に可動式で、広範囲をカバーできること。

側面に相当な数が生えているので、迂闊に接近しようものなら蜂の巣にされる。

ジャーヴィスがイギリスでも数名搭載していたと七海に教える。

『あー……側面から行くのは無理だね。あたし達じゃ数秒で穴だらけにされて死んじゃう』

ジャーヴィスが困ったように呟く。

指摘通り、死角を補うために設置されているようで飛び込めばそのままお陀仏になるだろう。

ゴトランドもぶちこまれる弾丸の嵐は無理と否定する。

「正面から行けば……私達も食べられちゃうよね」

ゴトランドが流石に不安そうに言った。

実際喰われるシーンを見ているゆえに、自分に変換されるのは容易い。

大口を開けて海水ごと吸収する渦潮の如き吸引力でさようなら。

近寄りたくはない。七海にどうするか聞けば。

「じゃあ先ずはその大口を裂きましようか」

「裂くうッ?!」

七海は言った。正面突破。

一番リスクの少ない突っ込んでいく戦法で行くと。

で、飲まれる前に逆に八つ裂きにしてやればいいと言い出す。

「顔から飛び上がれば脳天は近いはず。頭蓋ごと叩き割って動きを止めます。そうでもしないと多分中身のコロラドさんが目を覚まさないでしょう。動きを止めるので協力をお願いします」

動きを止めるのに既に全力で殺しに行つてるとゴトランドは控えめにツツコミを入れるも……。

「ムラマサなんかどうなるうといいんですよ。今は一つ悪化している方向で対応するので、半殺しでも何でもしないと、駆逐艦と軽巡と浮遊要塞じゃ勝ち目ないです。喰われない為には先ず脳ミソを刻む。何をしてくるか分からないので多少過剰でも問題ないかと」

本当に助けるつもりなのかこいつ。

初手から抹殺前提の作戦になっていた。

と言うか、刻むとか裂くってどういう意味かわからない。

ゴトランドが刃物はどうすると言うと……。

「——これで納得しませんか？」

ボソツと七海が何かを呟くと。

生々しい音をさせて、左腕が肥大化した。

粘着性の皮膚が腕を覆い隠して、鋭い鉤爪が生えてきた。

同時に足も艤装ごと皮が飲み込み一体化。黒い粘液を垂らした気持ち悪い両生類み

たいな姿になった。

で、背後でもメキメキという骨の軋みが聞こえて振り返る。

「あらあ？　じゃあ、お嫁さんも当然本気で良いのよね司令官」

……角生えた如月が邪悪に笑って七海に聞いていた。

色素の抜けた髪の毛や肌色。真っ白な少女は、愛しい彼女に微笑む。

左手の薬指に、毛細血管が根付く指輪をしながら。

「ええ。最初から全力で殺しにくつもりで。戦争ですから。意識があるかどうか、早急に確かめます」

ゆつくりと左手の鉤爪をゴトランドに見せる。

軽く見ても20cm以上は伸びている。これなら、分厚い表皮でも易々と裂けるだろう。

骨も簡単に碎けると実証したらしい七海は笑った。

『おお！ こんな腕、前に見たことあるよこれ！ 確かアーミーとか言う漫画だった！』

あたしと同じ名前の黒幕が出てくるやつ！』

ジャーヴィスがカツコいいとか訳のわからない事を言いながら二次元には珍しくもない腕装備とか言っていた。

（オタクって人種スゴいな……。いや、二次元っていう世界が何でもありなのかな……。）
凄まじい適応力のあるゴトランドですら若干引いたのにジャーヴィスはあっさり受け入れた。

オタクという人種の性か、と思うが恐らくはジャーヴィスしか無理である。

ナチュラルに早々に慣れてしまい化け物扱いしないゴトランドも大概であるが。如月の深海棲艦に変異したのも気にしないことにしておく。

「それじゃ、離脱される前に襲いましょう。ゴトランドさん、爆撃お願いします」

兎に角。臨戦態勢の皆は優雅に去っていく鯨に戦争を吹っ掛けた。

七海が前衛。ジャーヴィスが遊撃。如月とゴトランド、浮遊要塞が援護。

こういうポジションで始める、鯨との戦争。
こうして、殺しあう見慣れた世界は幕をあける……。

初手はゴトランドの爆撃。

去っていく鯨に向かってありったけ瑞雲を飛ばして上から攻撃開始。

巨大な身体の上で派手に爆発が起きて、鯨が絶叫した。

先制攻撃成功。が、派手に爆発したわりには効いてない。

煙が上がるも、傷は穴が空いたがそれだけと言うゴトランド。

「嘘……!?! 全然効果ないの!?!」

普通ならば軽巡や重巡にも威力のある爆撃が穴が空いただけで直ぐに塞がる。

治癒能力があるらしい。

驚くゴトランドに、遠慮なく203mm砲を当てていく如月と口から伸びた砲身で撃ちまくる浮遊要塞。

数の暴力で向こうの側面のガトリングが届かない範囲から当てていくが、やはり効いていない。

表皮が分厚いのか、砲弾を受け止めていた。

「何でもありなのあの鯨!？」

どンドン撃つのも効果がない。如月が悪態をつきながら続ける。

鯨の動きはその巨体ゆえに緩慢であり、主砲を此方に向けてきた。

背部で展開、回転する主砲。修正までに時間がかかると分かった。

一斉に向けるのはいいが、前を見た方がいい。

一番怖い悪夢が、海面から半分顔を出している鯨に急速に接近していた。

水飛沫を残して跳躍して、眼前に躍り出た小さい影。

「お久しぶりです、コロラドさん。あたしが分かりますか？」

一応声をかけながら、思い切り顔を左手で薙いだ。

真横に一闪。超至近距離からの刃物による、斬るといふ攻撃。

深々と食い込んで、巨体に対しては小さい切り傷だろうが、見事に裂けた。

で、ジャーヴィスも追い付いてその傷に向かつて砲弾をぶちこむ。

『久し振りだねコロラド。いきなりで悪いけど、ちよつと半分ぐらい殺すからゴメンね

?』

笑顔で連射して塞がる前に熱で内部を焼く。

容赦の欠片もない、無慈悲な連携攻撃。

——おおおおおおおおおっ!!

苦痛の咆哮を鯨はあげた。

悶えるように、身体を激しく左右に揺らす。怯んでいるようだ。

ならばと七海は更に攻撃。

飛び上がり、適当な高さで速射砲を連続で空中で放ち、その反動で思い切り蹴り飛ばした。

強化された蹴りは、表皮を破ることこそないが衝撃は貫通しているのか、鯨は蹴り上がってなんと水中から完全に水上に蹴りあげられた。

10mは超える巨大な身体が、小さな七海の蹴り程度で持ち上がり、ひっくり返って墜落。

派手に飛沫をあげて着水する七海は、違和感を感じた。

(……何ですかこの軽さ？ 中身は空洞とでも言うんですか?)

蹴り飛ばした時の感触が、あまりにも軽かった。

見た目に反して、この鯨は軽すぎる。蹴つ飛ばしてよく分かった。

先程、多量の海水ごと貪っていたと聞いた割にはまるで空気だけ入れて膨らませた袋

のような不自然な軽さ。

引っくり返った鯨は完全に海上に浮かんでいる。艦娘のような海上浮上をしているのだ。

幸い、背中が海水に接しているので、武装は大概浸っている。

これは、チャンスか。無防備な腹が今、空に向かっている。

手足をバタバタさせてもがいているが、起き上がるには少し時間がかかるはず。言うなれば仰向けになった亀と同じ。弱点の部分が丸見えだ。

更に残酷な事を思い付く七海は、ニヤリと犬歯を見せて笑った。

悪影響特有の攻撃衝動が、七海を加減しない思考とマッチング。

誰にもこの悪夢は、止められない。

「如月、浮遊要塞を連れて急ぎ此方に来なさい!! 今すぐ!!」

ジャーヴィスがどうするか応戦しながら待っている、七海は名案があるとジャーヴィスに言った。

向かってくる如月を待つ間に聞いたジャーヴィスは。

『わお! 七海ってばえげつない! オツケー、援護するから好き勝手にやっちゃって!!』

やりたい放題の提案に、ジャーヴィスも嗜虐的な笑みで了解。

直ぐ様すつ飛んできた嫁と浮遊要塞に、取り敢えず刃物を出してくれと要求。

無いなら今すぐ資材使って作成、刃渡りが長いものと無理な注文も浮遊要塞は景気よく返事して十秒で拵えた。

武骨で長大な刀身の包丁だった。

出刃包丁に似ているのを主砲を浮遊要塞に収納して担いだ如月が何に使うか問う。

その前に、ジャーヴィスが浮遊要塞に乗っかっていて、浮遊要塞が指示を受けて爆弾を作っていた。

ゴトランドが何をするのか、猛烈な嫌な予感を感じつつ聞くと……。

「今こそ好機です！ この鯨の土手つ腹をかつ捌いて、鯨の解体ショーにしましょう!!」
引っくり返った鯨の腹の上に跳躍して飛び乗った七海は、最高にハイテンションで最悪な方法を言った。

即ち、体内に在るであろうコロラドを無理矢理生きたまま鯨の腹を捌いて引きずり出すとか言い出した。

あまりの手段に、然し最も有効な手段とも直感したゴトランドはイヤそうにしたが合わせると返事。

本当に七海は手段の選定をしない。

一番効果的な方法なら何でもするし、事実この相手ならば持久戦は不利と分かるゴト

ランドも我慢するしかない。

何をすればいいと言うゴトランドに、取り敢えず此方の作業が終わったら尾っぽの方角をありつたけ爆撃してくれと言われた。

七海は、如月と一緒に腹を捌くと言っていた。

出刃包丁を肩に担いで如月と上等と笑っていた。目が軽く狂気を湛えている。

ジャーヴィスは中身を確認して、何もない場合は爆弾をそのままから投下して再生した所を内側から破裂させるとかいう猟師も真つ青な方法を大喜びで試そうと言っている始末。

ジャーヴィスもこの二名のハイテンションに毒されて興奮していた。

で、言うまでもなく暴れている鯨の真つ白な腹を目掛けて。

「ムラマサアツ!! 呑み込んだコロラドさんを返せエツ!!」

と、恐ろしい怒鳴り声をあげて、笑顔のまま長い爪を遠慮なくぶつ刺した。

魚を捌くような感じだろうか? 文字通り、解体をおつ始める。

振り上げた左腕。根元まで突き刺さる鉤爪。途端に痛みで絶叫する鯨。

「ひゃーっはっはっはっは!! 司令官の望むままにいいいい!!」

悪影響特有の衝動に吞まれている如月も狂氣的な雄叫びをあげて出刃包丁を突き立てた。

で、互いに頭と尻尾にかけて突っ走る。豪快に生きたまま鯨の腹を切り開いた。読んで字の如く。切って、開いた。二人してバカ笑いしたまま。

——ぎやあああああああつ!!

鯨が最大限の痛ましい悲鳴をあげていた。

一層激しく抵抗するのを、ジャーヴィスが上から違う部分攻撃して邪魔をする。

ゴトランドは思わず耳を塞いだ。何て声だ。痛みで叫ぶような悲鳴に聞こえる。

(残酷すぎるよ、コロラドさんを助けるためとはいえ……)

頭上に飛行する瑞雲たちは撮影していた。

鯨の血は真つ青で、それを噴水のように吹き上げながら、走り回って裂いている悪魔

の駆逐艦たちを。

頭から青い鮮血を被り、場違いに感動して見下ろしている血塗れのジャーヴィス。

裂いてから、七海が腹の中を確認しに傷口から入っていき、再生する傷を切り続ける

如月。

大きな傷からは、グロテスクな鯨の腸が見えていた。

ドン引きだった。まさか生きている深海棲艦みたいな鯨の解体を見ることになろう

とは……。

数秒後。七海が血塗れで顔を出した。何か言っている。

「何か、さつき喰われた連中が消化されないで無事なようです。ついでに救出しますね」と、報告していた。

聞けば、喰われたばかりなのが幸いしてか、腹のなかで全員無事らしい。

と言うことは……？

「ほら、ザラさん！ バカやってショックなのは分かりますけど、落ち着いてください！生きてますから、お望み通り怪我人出すのを手伝ってください！！ ポーラは死ぬ前にお酒浴びるほど飲みたいなら帰ってから好きなだけどうぞ！ 今時間が無いって言ってるでしょうが！！」

先ずはパニックになり叫んでいる姉妹を放り出した。

外に出て、漸く血塗れで七海が助けてくれたと分かってから、我に返って直ぐに手伝う。

艦娘たちが次々運び出されて、海に放り出されていく。

グロイが何かのおとき話宜しく、全員無事であった。呆然としている皆を尻目に。

「へっ……!!? なんで私、生きてるの!!? 喰われたのに!!? どういうこと!!?」

「どうもこうもないでしょう!! あなたが勝手なこととしてこうなっただんです!! 反省な

さい!!」

最後に、何か騒いでいるコロラドが生きて出てきた。

担いでいる七海に怒鳴られて、七海も脱出。で、情けない仕上げに入る。

『赤ずきんみたいに、腹のなかに石入れてやるッ!! こっちは爆弾だけど!』

で、再生していく傷口よりも先にゴトランドとジャーヴィスが爆弾を体内に投下した。

相当な数を代わりに押し込められて、傷口が治り漸く起き上がる白い鯨。

怒りと憎しみの雄叫びをあげ、反撃しようと試みるが……。

「皆さん、速力一杯で撤退!! 急いで!!」

全員に爆発するぞと脅して、血相を変えて離脱していく。

慌てて逃げて、狙いを定めるが……。

どつかああああああああんっ!!

……逃げ終えた頃に、どうにも遠隔操作式だったらしい爆弾が大爆発。

凄まじい威力と爆発で、鯨が木っ端微塵に吹き飛ばされた。

遠方からでも大きく見えるほどのキノコ雲が出来ている。

致死量を計算して詰め込んだと七海はジャーヴィスとコロラド、啞然とする姉妹とゴトランドに笑って告げる。

「あ、ありがとう……。あと、ごめんなさい……」

撤退していく最中、無事だったコロラドは助けしてくれたお礼を小声で皆に言った。

色々あつたが、取り敢えず全員無事であつた。

七海と如月が何か化け物になつてたが。

「いえいえ。成功して良かったですよ。さて、じゃあ帰りましょうか」

人間に戻つた七海が満足したように笑いながらそう言つて、精神的な疲弊の大きい姉妹とゴトランド、コロラドを連れて、皆で帰つていった……。

その後の動き

……さて。

こうして、何とか無事に戻ってきた戦いは大団円となった訳だが、生きていれば、大団円とは限らない。

七海は、それを痛感するのだった……。

先ず、ガングートに連絡。紆余曲折あつて、全員で帰ってきたと。

死んだと言うのに何が起きたか理解できないガングートは置いといて。

同時に桜庭が何故か帰港した鎮守府に待ち構えていて。

七海も見たことのない鬼の形相をしていた。当然全員戦慄した。

怪獣が怒りを見せている。自覚のある七海、コロラド、ジャーヴィス、ザラ、ポーラは死を覚悟した。

例外のゴトランドも小言は言われると覚悟をしていたが想定以上に相手の怒りが強いのに驚いた。

結局全員が殺されると思ってガタガタ震えていた。

で、その予感はずしかった。

「……夕立。とうとう、取り返しのつかないことをしようとしたわね?」

一段と強い殺気を向けられて、七海は仲間を犠牲にしようとしたことと理解した。

だが、否定する材料もないし、怒鳴られる覚えもない。

説明しても理解しない姉妹が悪いと悪びれない。

詭弁でもなんでもいいから言い返すと頭を回転させている七海に、桜庭は。

「……ムラマサ、持って帰ってきた?」

と、凄い怒りを見せて問う。

全然見当違いの言葉に呆ける七海。

「はい？ ムラマサ……？ あっ」

しまった。そう思った。

そうだった。あれは、変異した七海の装備。

突然変異の原因を究明するべく、回収するべきだったのに。

まるごと、ブツ飛ばしてしまった。海の藻屑に。

「……………夕立。変異したムラマサ持ち帰らないと原因分かんないでしょう？ 何でぶつ殺しちゃうの!!」

戻ってきたばかりの工廠で、全員桜庭に怒鳴られた。

一番大事な証拠の回収を怠ったとして、七海は一番キツく叱られて。

で、コロラド。ゴトランドの肩を借りている彼女も怒鳴られた。

「コロラドツ!! あんたはどうして勝手なことしたの!? そんなに艦隊の仲間を信じられなかった!? それともそうしてでも勝ちたかったわけ!? 夕立が今回は死に物狂いで頑張ったから帰ってこられたけど、普通は……普通はもう、二度と戻ってこられないのだからなかったのツ!! 私も提案したけど、あんたは最悪殺されても文句は言えないような姿になってさ迷ったのを自覚なさいツ!! 軍法会議にかけられてもおかしくない違反をしたんだから、覚悟はしておくことね」

此度の彼女の行動は、審査に大きく響いているときつちりと言われて、謝罪しかでき

ないコロラド。

自分の愚かな行動の結果は受け入れると、頷いた。

で、次はジャーヴィス。

「……ジャーヴィス？ あんたは、夕立に何回仲間を殺せつて進言した？ 聞けば随分と仲良くなつてゐるみたいねえ？ じゃあ、性格も熟知したのに言つたわけだ。ん？

……私は生憎、騙されないわよ？ あんたが社交性の裏で何考えているか知つてゐるわ。一番矯正しがいがあるのは、あんたみたいね」

ジャーヴィス、顔面蒼白。夕立に入れ知恵しているのがバレていた。

折檻を言い渡されて、死刑宣告を受けたのと同等の罰が待つてゐるだろう。

次、ザラ。

「……いや、まあ。ザラ……あんたは、正直に言うわ。イタリアに帰りなさい。向いてないからこの仕事」

ザラには、表情をどこか諦めに近い感じにして彼女は言った。

ザラは目を丸くした。それは、試験官直々の辞退の勧め。

何故か、そう聞くと。

「話はガングートから聞いたわ。どうも、一回喰われたらしいわね？ その原因は、あんなの感性も一部ある。言いたくないけど、良くも悪くもあんたは民間人の感覚が強すぎ

る。軍人の思考がまるで出来てない。感情論だけで先走ってるのは前から見ててあつたけど……もう、限界ね。辞めなさいな、艦娘。今ならまだ間に合う。身を引いたほうが長生きできる。あんたみたいな、一般的な思考の艦娘は長生きしないの。真つ先に戦場で死ぬからね。死ぬ思いはしたでしょ？ 恐ろしいと分かつたんじゃない？

悪いことは言わない。十分ザラは頑張った。これ以上、無理しないで。穏やかな人生を生きたほうがきつと、幸せになる。元々ポーラを追いかけて艦娘に志願したんでしょ？ なら、引き際も理解なさい」

優しい言葉で、この世界から辞退しろと。死んでしまう前に退けと、そう教えた。

詳しく言えば、七海のやったこともしょっちゅうこの世界じゃ必要になる手段。

言い方は悪いが常套句とも言えるのだ、そう桜庭は説明した。

ついてこれずにキレて不協和音を広げて分離するなら、マトモなうちに戻れと言うこと。

ザラは、迷うように聞いていた。

次、ポーラ。途端に彼女は疲れた顔になった。

「ポーラ……。あんたはもう、例外。艦娘になつてアルコール依存症が悪化してるみたいじゃない。言うだけ無駄だから何も言わない。あんた、不合格が満場一致で決定したから。イタリアに帰れ。最近夕立が叩いて矯正しているから大人しいだけで、バッチ

り数値じゃレッドカード出てるのよ。いい加減ザラに迷惑かけないで自立しろ。大体、あんたはここじや大人しくしてるけど、死にたがりの真似も多かったじゃない。どうよ？ 本気で死にかけた気分は。これが戦場だって分かったなら、投げ遣りな生き方も自分で何とかするように」

辛辣な評価で、不合格が通知された。

一同妥当と思う。やっぱりアウトだったか。

アルコール依存症なんて普通に無理だろうし、七海もこれでも全力で叩いたが直らなかった。

つまりは無理だったと言うことになる。ポーラも分かっていたのか、大人しく帰ると諦めていた。

最後、ゴトランド。

「お疲れ様、ゴトランド。大変だったでしょ、この面々纏めるの。夕立は見ての通り効率ばつかり優先していくし、ジャーヴィスはこれだしコロラドも勝手なことするし、ザラもポーラも一般人だし……。負担大きすぎてごめんなさい。心底気苦労がよくわかるわ。先代も似たような連中が多いから……。兎に角、ゴトランドは評価は高くしておくから」

唯一労いを受けた。実際仲裁は疲れるので苦笑いしておく。

疲れた顔の桜庭は、大本営にこのまま全員検査を受けるので向かうと告げる。

他の鎮守府の艦娘の救助なども含めて色々やることがあるので、回収されていく。

「あ、如月。あなたも来なさい。分かったわね？」

「……」

隅っこで眺めていた如月もバレているので来いと言われて渋々同行。

こうして、全員が呼ばれてあれこれ始末をすることになったのだった。

結論から言えば、コロラド、七海、如月は重度の汚染を受けていた。

とくに魂の汚染は三者とも無視できるレベルではなく、深海棲艦の特性を引き継いでしまっている。

コロラドは意識が途中から消えており、救出されるまで殆ど覚えていない。

長期間、ムラマサに喰われたまま徘徊しており、深海棲艦も捕食したせいで一段と汚染濃度が高い。

七海は元々慣れているとはいえ、攻撃衝動による凶暴化が付与され、如月は理性の消失という重大な欠陥が出た。

但し、不思議なことに七海と如月は対になっているらしく、互いが互いに引き合うよううで一緒にいる限りは暴走しない。

七海は耐性が既にあるのである程度自制できる。

問題はコロラドで、半端な状態で吞まれたので深海棲艦の憎しみに負けており、機能に一部弊害が出ている。

いわく、性能が根本的に上昇はしているが通常の艦装が反応しなくなってしまうていた。

七海の鎮守府で少数生産される、深海棲艦用の艦装しか装備できなくなった。

毒気は抜けているが、膨大な力を制御できずに困惑していた。

それは追々解決するとしても。

原因のムラマサは、後日戦闘区域の海底で発見された。へし折れた状態だったらしい。

で、改めて七海立ち会いのもとで浮遊要塞の腹の中で再生してもらい、現在解析中。

桜庭も一度手にして、中身を覗いたが力なきモノに持たれると食らいつくと中身に白状させていたとか。

詳しくは機密なので知らない。聞いた限りじゃそういうことらしい。

政治的な意味では、桜庭がアメリカと交渉したようで何やらキナ臭い話になっているように。

ガングートが舌打ちして七海に教えてくれた。当事者なので、軽くだが知る権利はあるとか。

「アメリカは、コロラドの事をどうやら最終兵器にする気のようなのだ。どうも、桜庭の教え子……つまり、貴様の存在を向こうは既に認知している。その対抗策に、コロラドを受け入れこちらに対する一種の有効なカードにする気なんだろうな……。世界にはまだ貴様とコロラドしか、深海棲艦に堕ちた従来型は居ない。貴重なモルモットの確保とも思っているんだらうよ。気に食わん。アメリカめ、ロシアや日本と戦争でもおっ始めるとか言わないといいが……」

コロラドの母国から横槍があつて、彼女に厳罰は与えるなど言われているようだ。

ガングートが懸念している意味が恐ろしいことと分かる七海は、ゾツとした。

人類同士の戦争の当事者など勘弁願いたい。

七海の戦果にもアメリカは口出しをしており、マイナスを振り切つて大きくプラスに強要されている。

利害の一致で、コロラドと七海はセットでいたほうが先方の好都合な部分になるそう

だ。

「面倒ですね……」

「ああ。全くもつてな。貴様はコロラドと親身にしておいた方がいいぞ。不利益になればアメリカのことだ。何をしでかすか分からん。私も個人的には貴様を気に入っている。庇つてやつても良いが、そうなると……フツツ。アメリカの連中は眉をつり上げるだろうさ。面白い。戦争はご法度だが、そういう戦いなら腕が鳴るな。私を倒せるかどうか、奴等に思い知らせてやるのも一興」

「生臭い感じしかしらないんですが!？」

ガングートは不敵に笑う。

戦争は避けたいがそれ以外のちよっかいなら上等だとか言っていた。

何をやる気なのか、怖いことになるので聞かないことにした。

政治的な世界には七海を巻き込まないでほしい。

平和な世界で生きていきたいので。

コロラドは取り敢えずお咎め無しにされた。色んな事情ありで。

で、ジャーヴィスはとくに何も無い。説教とお仕置きで済んだ。

まあ、仲たがいを加速させたとして、本人のメンタルが一時的に死んでいたが。

イギリスはとくに看過しないとされており、公平な評価を求めているので彼女はマイ

ナス。

次は姉妹。姉は辞退して、妹は不合格で国に帰っていった。

こういう世界はもう懲り懲りと言って、穏やかに生きていくと決意したらしく。

艦隊を去っていた。

最後、ゴトランド。

一応、一足先に合格ラインを突破していた。

普段より評価の高い彼女は、この任務により桜庭と戦わずとも正式な最終兵器に就任していた。

が、仲間が心配と言って一緒に怪獣退治に出てくれるという。よい娘だった。

残った連中が何をしでかすか分からないと胃薬常備で参戦した模様。

七海は、桜庭に個人的にこう、呼び出しを受けて言われた。

「渋谷さん。今回は、本当にお疲れ様。色々あったけど、あの二人のことは気にしないで。あれが普通の対応だから。寧ろ、ジャーヴィスやゴトランド、コロラドっていう仲間を大切にしてほしいな。コロラドの為に命懸けで、また深海棲艦になつてまでよく頑張ったわ。渋谷さんに聞かせては、ちょっと周りが五月蠅いから評価は分かんないけど……ただ、深海棲艦を受け入れてくれる人は、他にも出来たよね。だから、言う……あの娘たちは、信じてあげて。貴方の仲間や、お友達を信じてほしいの。同じ苦しみを

知っているジャーヴィスや、親しくやっているコロラド、なんだかんだ受け入れてくれるゴトランドは、敵じゃない。あなたの味方をしてくれると思うから」

人間を信じてみると。そこにいる、仲間という人間を。

七海の不信感を知っているけど、信じていい人間だから。

……七海もバカじゃない。ジャーヴィスはとつくに信じている。

コロラドも、仲良くしているから少しは信用している。

ゴトランドは微妙だけれど、その内信頼するかもしれない。

漸く、同年代の友達や仲間と言えるような間柄が出来た。

一人じゃない。今は、頼ってもよいと思える人がいる。

七海はその信じてもいいと思う艦隊の仲間と挑むのだ。

最強の試験官、大怪獣大和。倒すと決めた。絶対に倒そう。

……どんな手を使っても!!

「桜庭さん。取り敢えずお忙しそうなので、早めに試験の再開をお願いします。元気なうちに殺しますので」

「おい待てそこお！ 殺すって何?! まだあの毒物使う気なの?!」

「当然です。あとは多忙なうちに急いで日程を組みます。ガングートさんもお仕事の邪

魔してくれるそうです。面白そうだからと」

「あの女は悪魔か!! 挙げ句には私の事まだ怪獣とか言うの!?! 止めて、本当に死んじゃうからストレスで!」

「死ぬならちやんと海に還ってください」

「ちよ、本気で勘弁して!!」

「嫌です。容赦しませんので、大怪獣大和さん」

「あんぎゃああああ!!」

時間稼ぎの対抗演習

「ええい、暴れるな大和！ 無駄な抵抗をするんじゃない!!」

「離せツ!! 離してツ!! あの娘をどうにかしないと私のライフがゼロよ!!」

「させるか！ 貴様には手加減と言うものをこの際だ、叩き込んでやるツ!!」

「まるで訳がわからないんだけど!? 何の話よ、この裏切り者オツ!!」

……何やら桜庭が無駄な抵抗を画策しているようだが、それはまた別のお話である。

試験がまた延期になった。

桜庭が後処理で忙しいのに相手してられるかとガングートを決闘でライフをゼロにして、命令として権力を無駄遣いした。

要するに七海の忙殺を企てたお返し。

時間稼ぎであった。実に大人げない。

「……夕立が夕立なら、教官も教官ね……」

戻ってきたコロラドが、執務室でため息をつけてソファーに腰かけて言った。

現在、命じられた任務のための準備に入るため、再び鎮守府に滞在しながら過ごす昼時の週末。

七海がレトルトでなんか作ると言つて併設されたキッチンで適当に仕上げてお昼を持ってきた。

「……好きな注文を選ぶ範囲で選んだのが……」

『……夕立。このカレー……真っ黒なんだけど?』

海軍式カレーを注文したジャーヴィスは皿に盛られたそれを見下ろして呆然と聞いた。

……漆黒のカレーだったのだ。具材はあるが、匂いが実にスパイシー。

あまりにゴトランドが換気をするぐらい、強い刺激臭がした。

目に染みる。ジャーヴィスはこれはなんだと七海に聞いた。

『それですか？ 詳しくは知りません。市販されているレトルトにレシピ通りに香辛料を加えたら真っ黒になりました』

しれつと七海はお澄ましで告げ、注文通りだと言つて聞いてくれない。

このレシピは因みに……普通のレシピだった。大丈夫、ひえーと悲鳴が上がる物じゃない。

それは桜庭にぶつける爆弾おにぎりの中身だからこれは喰える。多分。

キッチンから戻ってきた七海は軍服の上からエプロンを外して自分も食べる。

来客用の机に四人で集まっているが……。

「これが冷や麦……。冷やした麦じゃないんだね」

「冷えた麦が食えると思つたんですか？」

「いや、もつとこう……デンジャラスなものかと」

ゴトランドは冷や麦を頼み、適当に仕上げておいたものを提供。

味の保証はする。美味しいだろう。市販品だし。

ゴトランドは実物を、違うものを想像していたという。

コロラドが見下ろすのは至つて普通のラーメンである。

食べたことがないと言うのでインスタントで作って出してみた。

オーソドックスに、塩ラーメン。野菜を多くしておいたが。

「……箸は、使えないの。ごめんなさい」

と、フォークで食べていた。

戻ってきてから、妙に落ち込んでいるコロラド。

失態を横槍で帳消しにされたことと、仲間が誰一人責めないで慰めるばかりで申し訳ないせいだ。

七海ですら、気持ちはわかるけど方法は考えるべきであった、程度の苦言で終わらせた。

それほど、コロラドの憔悴っぷりは見ていてわかった。

散々謝って、心配かけたと友人の深海棲艦にも詫びていた。

自分の変化も罰だと言って受け入れて今は生きている。

変わらず人間と言ってくれる七海たちの有り難みを噛み締めながら。

それはそうと。

「で、本題に入りましょうか」

自分用のお茶漬けを流し込みながら七海は切り出した。

議題は、桜庭の往生際の悪さが放った時間稼ぎの一件をどうするか。

明らかな職権濫用だが、そうでもしないとイケない程多忙なのだが容赦なく七海は止めをさそうとしていた。

で、その内容は。

「対抗演習……確か、深海棲艦と艦娘の連合艦隊を相手して最低でも勝ってこい、だっけ？」

器用に箸を使って冷や麦を啜る私服のゴトランドが聞いた。

そう、鎮守府の艦娘と深海棲艦の交じった十二隻からなる連合艦隊と戦い、勝利せよと。

此度の罰はこれで帳消しにしておくから、勝たないと挑戦を受けないとか言い出した。

中々に外道な事をしてくれる桜庭。言うなれば、姑息極まりない。

逆を言えば七海の殺意が本気すぎてあの宇宙に向かつていく大怪獣大和ですら怯んだと言えるわけだ。

皆は途方に暮れていた。

涙目で激辛となったカレーを食べるジャーヴィスも言う。

『ぶっちゃけさ、連合艦隊にまず勝てるのあたしたち。数が三倍いるけど』

此方は四隻。向こうはその三倍。

普通の艦娘なら余裕でも、七海の下にいる深海棲艦も必ずいる。

此方は一名最終兵器、二名深海棲艦擬き、候補生。

……無理がないかと。

リーダーとしては名折れと辞退して、現在はリーダーを務めるゴトランドがフオークでラーメンを食べるコロラドに聞く。

艦装は慣れたか。コロラドはぼちぼちと答える。

普通の艦装が使えなくなったコロラドは現在七海の指示で作成された深海棲艦の艦装を調整している。

で、頭数が減つたのを各々カバーするために、また責任をとるとコロラドが譲らないので過剰な武装を積んでいる。

最早鯨の時と大差無いほどの火力を出せるが威力がありすぎて本人が小柄なこともあつて反動で転ぶ。

奮闘して踏ん張るぐらいいは出来るようになったが、まだまだ大怪獣相手には動きが固かった。

なので、前哨戦と言えるこの対抗演習では役目を何としても果たしたいコロラド。

ジャーヴィスは無理な気がすると言っていた。

いわく、確かに此方にはここの提督の七海がいる。

七海は全員の練度と装備を頭に叩き込んでいたので一見有利に見えるが。然し実際は、編成は向こうで決め、七海は当日まで中身が知れない。

挙げ句には深海棲艦単体の質は、此方と大体同じ。

その辺の連中と違い、的確に自分の性能を連携で活かせるから手強い。

数も負けている。この程度の不利は覆せというが……。

極めつけが、二名ほどが非常にやる気が乏しい。物凄く嫌そうな顔をした。

「あたしに皆に手を出せと言うんですか!? あたしはそちの手出しはしませんよ!」

「どっちの手出しならするの!? 普通逆だよね!? やったらいけない方に手出しもダメだよ!」

たとえ演習であつても決して手出しなどせぬと最初は断固抵抗していた。

ゴトランドも思わずツツコミを入れるほど動かなかつたが、コロラドの説得により数時間経過した頃に踏ん切りをつけてくれた。

が、現在も顔にはイヤだとハッキリ浮かんでいる。

普段死ぬほど溺愛している皆に攻撃をするなら死んでやるとか言っていたので余計に困る。

『正直言うかねえ……。あたしも、ここの皆には任務とはいえ、攻撃したくないんだよね。つてか、マジでやりたくない』

乗り気じゃないジャーヴィスは、幸せな空間を訓練だとしても、自分から襲うのは嫌だった。

自分のアイデンティティーの否定に近い行為であるし、何がよくて人様の楽園を侵略しないとイケないのか。

こういう嫌がらせみたいな内容はやる気など出ない。

ゴトランドが何を言ってもこの二名はやりたくないと言うばかり。

いや、公私混同はしないので行動はする。が、やる気はない。

コロラドも心配をかけた友達と戦うのは気が引けるが、バカをやつてでもここまで来たのだ。

今さら退けないので努力を続ける。

ゴトランドはため息をついた。七海が一番の切り札なのに、この態度。

(溺愛しているのは知ってるけど……極端だなあ……)

とことん大事にするのはいい。が、し過ぎて過保護になっていた。

ジャーヴィスもなんだかんだ拒絶はしないが、この対応。

コロラドはどこか無理をしているし……。

(……食べ終わったら胃薬飲もう)

流石の鋼メンタルのゴトランドも慣れないリーダーとしての責務で胃痛を覚えてい

た。

唯一の合格者として、足りない部分をどうにかしようとしているが、既に前途多難だった。

一方、急に任務で対応演習をしろと言われて悩んでいる皆は。

「私にお嬢様と戦えと言うの!?! 嫌、絶対戦わないツ!! 寧ろ、お嬢様に武器を向ける裏切り者を私がこの手で始末するツ!! お嬢様は光……! 私がお慕いするただひとつの光!」

「小春、あんたは少しは落ち着きなさい。演習だつて言ってるでしょ」
「お前も裏切り者かアツ!?!」

小春が似たような態度で暴走していた。

大半の面子が集まり、作戦を練っている。

が、此方も七海やコロラドと戦うのを嫌がっていた。

とくに七海に関しては。

「司令官は……如月の初めての人になるかもしれない人なのよオ!!」

嫁の如月もキレた。まとめ役の五十鈴に襲いかかる。

小春と如月が同時に襲撃するも、五十鈴は至つて冷静である。

「暗黒に帰りなさい赤いロリコン」

華麗に身を翻して回避。

二名のうなじに素早く手刀を軽く打ち込む。

「ぐふっ!」

「どむっ!」

意味不明な断末魔の悲鳴をあげて二名は撃沈。倒れて気を失う。

白目を剥いていた。

「……何でこう、みんなして嫌がるかな」

五十鈴は呆れていた。

正式な命令だと言っているのに、大半は七海に対する反逆とか言つて辞退するとか言い出している。

相思相愛ここに極まる。互いに愛するが故に決して敵対しない。それが皆の答えである。

食堂で昼を食べながら相談するのはいいがやる気が乏しい。軽巡や重巡はいいが、駆逐艦が半分ほど逃げようとしていた。

「ご主人様と演習……。姉さん、わたし出なくてもいい？」

「村雨に聞かないでよ……。一応村雨は出るよ。他に居ないから」

春雨は七海に絶対忠誠なので、良いと言われないと戦わないと控えめに言っただけ。動かない。

村雨は逆に演習ぐらいは喜んで受ける。強くなった良い所を披露したいので。

「おのれ村雨……。お嬢様に愛されながら砲を向けるなんて……。実はヤンデレだった……。？」

「おい待て。変な属性の付与は止めて。村雨は普通です。病んでません。普通の女の子です」

もう復活した小春が痙攣しながら見上げて戦慄していた。

すかさず否定する村雨。違う、村雨は至ってノーマルなメイドだ。

病んでないし、それは別の姉妹がたまにやってる。村雨はエロ担当であってヤンデレじゃない。

「エロ担当でもないから。普通担当だから。没個性でいいの」

小春が言う前に先んじて潰す。断固否定。村雨は、普通の女の子。

バカなことを言っているなか、山風は。

「……ママと戦うの、やってみようかな」

前向きに検討していた。

意外なことに、山風はやる気に満ちていた。

「弥生も……七海姉に、頑張れるって見てほしい」

弥生も自分から出るといつてくれた。

元々戦えなかつた二名は自分はもう戦えると、七海に見せたいと。

そういう理由で率先して立候補していた。

深海棲艦たちも、捉え方次第と二人を見て思ったのか、臆て出ると手をあげる。

「ま、待つて……。私も出る、お嬢様を……お守りしなければ……」

「あんた、裏切る気満々でしょ。ダメよ」

「ダメと言われて止まる私ではない。お嬢様の為ならば、海の中だろうが敵陣のど真ん中だろうがお嬢様とお風呂の中だろうが往く」

突然元気に復活。

立ち上がって小春も立候補。却下されたが。

「スカートじゃないだけまだ良い……良くないわ。何をゲットする気よあんたは」

「お嬢様のハートをゲットする」

どこぞのマスターか。

「じゃあ如月も出るわね。司令官との一騎討ち張らせて貰うわ」
「皆で戦うんだから勝手な真似しないの」

こっちも復活、嫁。

出番が来たと叫びそうだった。

律儀に全部にツツコミを入れていく五十鈴。

兎に角、面子は集まりつつあった。

対抗演習の時間まで、あともう少し……。

追記。

「ああ、そう言えば。見たことない映画なのですが、面白そうなので自分で買いました。見ますか？」

一段落したので七海が特撮購入したので見るかと誘ってきた。

純粋に面白そうとジャーヴィスとゴトランドが見ると言うので、コロラドも一緒に鑑賞。

視聴を終え二時間経過。

「……あの。あたしの気のせいですかね……あの戦艦と戦っている怪獣、さつき変身しましたけど……。変身する前の人、誰かに似てませんか？ 割と最近、うちの鎮守府で見かけたような……」

何処かで見たとような女性が、大怪獣に変身して戦艦と戦っている映画だった。

宇宙の彼方に行くような次元の戦艦と海で戦争しているのはいいが。

どっちも誰かを彷彿とさせると、七海は青ざめた顔で皆に聞いた。

「き、奇遇だね夕立さん……。私も見た覚えあるよ、あんな感じで島を吹っ飛ばす女の……」

血の気失せたゴトランドもひきつった笑顔で頷く。

小島で懸命に抗う海軍を口から熱線吐き出して、諸ともブツ飛ばす怪獣を見たシーンで悲鳴をあげたゴトランド。

これはホラー映画じゃない。ただの子供向けの特撮。

『な、何か珍しい事もあるんだね……。あたしも、見たことあるかも……。怪獣も、あの戦艦も……』

艦首に巨大ビームを搭載してぶっばなすシーンで白目で気絶していたジャーヴィスも乾いた笑いで言う。

見覚えある。どこかで……知っている気がした。

「……………」

コロラドに至っては終始失神したままだった。

背もたれに寄りかかり微動だにしない。生きているだろうか……？

怪獣のBGMと戦艦の主題歌が脳内に繰り返している。

一度見た映像がフラッシュバックしそうになるのを懸命に抑える三名。

丁度、電話が鳴った。大袈裟に反応する七海が、慌てて受話器を取った。

「あつ、もしもし渋谷さん？ 私だけど」

……不意打ちで、今一番聞きたくない声が聞こえた気がした。

「出たあああああアツ!!」

「!?!」

七海、トラウマ再発。絶叫してそのまま執務室から飛び出していった。

受話器を投げ出して、一目散に脱走した。何事か分からず驚く相手。

で、ジャーヴィスが次に恐々出て。

『う、宇宙いく方の戦艦が攻めてきたああああ!!』

声聞いて速攻で逃げた。

唐突の英語に相手も更に困惑する。

何なのか問い質すように聞く頃に、ゴトランドが運悪く出た。

『か、怪獣が喋ったあああああ!?!』

先程の映画のワンシーンを鮮明に思い出してゴトランドですら錯乱した。

母国語で叫んで彼女も逃げた。相手は啞然としていた。

何が起きているのか理解できずに、取り敢えず一回電話を切った。

で、時間を空けた。その頃には気絶したコロラドも回復していた。

再度電話、自分以外に居ないのでコロラドが仕方なく対応。

「……もしもし?」

訝しげに相手は喋る。

んで。

「……」

声を聞いて、コロラドは再び失神した。

彼女もちよつと今の状況では無理があった。

倒れる音がして、電話口の相手は。

(……声聞くだけで逃げられるの、私は……)

目が死んでいる大怪獣、桜庭であつた……。。

キスすれば変態も高ぶる

皆さん、各々戦いたくないとかやる気でないとか言っているが、結局任務であるので拒否できない。

そうこうしている間に、当日は……来てしまったのだった。

振り返ると、結構な特訓をしてきたものだ。

これぐらいは勝てないと、宇宙怪獣大和には到底敵わない。

いつの間にか某元帥のイメージが肩に水晶の角柱が生えたスペースモンスターとなっっているが割愛。

大した違いなどあるまい。

で、向こうの艦娘たちの出方が七海しかわからない上に、肝心の七海は……。

「腹切りにて、自刃致します。さようなら」

「止めてええええ!!」

皆に最後まで手を出すのは性的なこと以外は嫌だと駄々言つて。

拳げ句にはムラマサ量産して自分に刺そうとしていた。

ゴトランドが寸前で制止して、七海は珍しくメンタルがブレイクしている。

いつも以上にオッドアイが濁っていた。

「何かがあたしに囁いているんです……。皆に手を出したら、あたしは死ぬしかない」と

……。あたしはきつと、遠い世界でその禁忌を犯しているんです、絶対そう……。」

「落ち着いて。大丈夫、皆生きてる。平気な顔してご飯食べてるでしょ?」

前日の食堂で、机に突つ伏して痙攣している七海は意味不明な事を呟いていた。

ゴトランドがバカを言うなど言つて目の前を指差す。

「お、お嬢様に……。お嬢様に味方しなければ……。私はお嬢様の従者なのに……。」

「小春、あんたはいつまで言つてるの。往生際が悪すぎ」

「五十鈴には分かるまい、この……。私を通じて出ている愛の力を……。」

「精神崩壊起こして宇宙さ迷つてろ」

向こうも似たような一名が七海を求めて死んでいた。

突つ伏して、ぶつぶつ文句を未だに言う。

五十鈴が冷静に拉麵啜りながらツツコミを放棄していた。

本当にラブラブ過ぎて胃もたれしそうな相思相愛っぷりであった。

「宇宙のパワーがあれば……五十鈴さんをトラックにして運送業に押し付けて退かせるかしら……」

「如月、あんた喧嘩売ってる?」

こつちもぐつたりの嫁が、まだ踏ん切りがついてなかった。

割と酷いことを普通に言っていた。

因みにそんな便利なスイッチはない。

割り切りの良い五十鈴や他はもう、腹は括った。

出来てないのは本人とこの二名と……。

『アンラッキー過ぎて笑えない』

ボーッと虚空を見ているジャーヴィスだった。

力なく背凭れに寄りかかり、こつちもまだ目が死んでいる。

訓練中に、運悪く村雨と出会い、七海に入れ知恵したら怒ると叱られたらしい。

只でさえ最近はスケベが加速して、今度は大人しい春雨にちよつかい出しているの

に。

「わたしは寧ろウエルカムですので!!」

とは、満面の笑みの春雨談である。

嬉しいらしく、自分から七海の部屋に遊びに向かつて食べられそうになっていた。

そういうときはジャーヴィスは役に立たないので、ゴトランドが止めていた。

(漸く分かった。夕立さんの人種……これは、変態だ)

毎度ぐへぐへ笑いながら脱がそうとするのを後ろからうなじに手刀をぶちこんで失神させる。

春雨には五十鈴と村雨がお説教しているので良いとして。

要するに七海はただの変態なのだと分かったゴトランド。

ツツコミが翌日から遠慮がなくなった。

で、コロラドはと言うと。

「腰の踏ん張りは、放つ前に入れていくんですよ。放つた後じや吹っ飛びますよ?」

「一応意識はしてる。基本だし、でも反動が大きすぎて身体が浮き上がる。どうすれば

いい?」

「ウエイトの問題ですかね……。もつと重たくするとかは?」

「そうすると肝心な時の機動力が犠牲になってしまう?」

山城と静香と一緒に自分の艀装の話に夢中であった。

如何にして、砲撃をスムーズに、的確に当てるか。

議題に対して静香も何やらイラストで指摘していた。

慣れてないのか汚いけれど、中々の確なようで。

コロラドは演習相手のことも忘れて相談している。

「……なら、偵察機との連携は？」

「私は同じ艦隊で戦っているの。連携は自分一人では意味がないと思うし、知つての通り此方は空母が居ないわ。だから、偵察機は自分のものと仲間のもので照らし合わせ、やっている。でも……どうにも、慣れないから。手際が悪くて、どうにも……」

「他の艦娘と情報の共有は大事ですけど、だからって任せるのもダメです。自分の判断を信じるときも必要です」

艦上の偵察機がないため、あまり空からの情報は当てにできない。

で、それをを用いた戦術も出来ないこともないがまず制空権が無理。

空母がないのが戦艦にも大きく響くとコロラドは山城に言っていた。

情報の共有もそうだが、自分の判断も信じるとアドバイスする山城。

まさか、あんなネガティブな山城に落ち込んでるとはいえコロラドが励ましを受けるとは。

顔だけあげた七海は驚いたように眺めていた。

コロラドはまあ、心配は無さそうだ。

問題は自分とジャーヴィス。手出ししたくない。

と、その様子にいい加減手を焼くゴトランドを見て、渋々村雨が声をかけた。

「提督……やる気出してくださいよ。折角なのに」

「嫌です……。出ません……」

再び突つ伏す七海に、少しは成長したのを見せたい村雨。

なのに彼女がこうでは、意味がない。

仕方無い。本当は、こんなふしだらな真似はしたくなかったが……。

自分のキャラ崩壊を覚悟し、淫乱と言われることも覚悟する壮絶な彼女の決意。

七海のためだ。多少の犠牲は目を瞑ろう。

大丈夫、もう反省して淫乱とは言わないから。

こういうことを人前でするのは死ぬほど恥ずかしいが、仕方無い。

自分でやるしかない。嫁も従者も嫌がつてばかりで動かないし。

(村雨の良い所はこんなじゃないけど……)

これも一部にしていくしかない。

ととと、と移動して突つ伏す七海に顔を近づける。

「?」

いつも以上に死んだ目の主は、億劫そうに見上げていた。

何だか元気ない。当然か、溺愛している面々と砲火を交えると言うのだから。ならば、特效薬で一発元気にしてくれよう。

恥ずかしくて死にそうな村雨。顔は真っ赤でお目目ぐるぐる。

異変に気づいた七海が何事か聞く前に。

村雨、一大決心を実行した。

「む、村雨の良い所……見せてあげるから、頑張つて♪」

ちゅっ。

「フアッ!?!」

奇声をあげて、七海が一発復活した。

見ていたジャーヴィスが椅子から転げ落ちた。

五十鈴が食べていた拉麺を吹き出した。

ゴトランドも目を疑った。コロラドは気付いてなかった。

嫁と従者も顔をあげた。目が血走っていた。

……簡単に言うとは。

突っ伏す七海の頬に、気合い入れてもらうために村雨がチューした。

で、本人は顔から湯気出して悶えていた。可愛い。

両手で顔を覆って、痴女みたいな真似をしたとやっぱり後悔していた。

……が。

『ユリきたこれ!!』

ジャーヴィスが立ち上がって突然元氣澆刺。

良いものを見れたと見事にやる気全開になっていた。

興奮していたが、七海は？

「村雨、嫁に来ませんか？」

「来ません!!」

村雨口説いていた。

真顔で悶える可愛い村雨を自分のメイドにするとか言いながら、然しジェラシーが燃

え上がる二名が横槍。

「村雨、抜け駆けは卑怯!! お嬢様、私もする! 顔を貸して!!」

「如月もするわ!! 司令官、寧ろもつと過激でも良いからこつち来て!!」

水を得た魚のごとく。人前と言うのに騒がしいバカは、調子に乗る。

「ふ……ふはは!! ふははははは!! 演習でも何でもバッチこいですよ!! あたしは

最早無敵だああああ!!」

村雨のカンフル剤が効きすぎた。

食堂で高笑いしながら、某社長のような雄叫びをあげて、俄然やる気になった。

で、皆様の前で当然騒げば、こうなるも必然。

「七海、ギルティ」

「!?」

目元に陰りが入り、背後を幽霊のように取っていた五十鈴お姉ちゃん、武力介入。

三名に、お仕置き敢行。スケベは大概にしなさいという罰であった。村雨は無罪で済んだ。

「ヴェア!?」

「ファツ!!」

「あおん!?!」

で、当日。

鎮守府正面海域に、演習のために皆様集まったは良いが……。

「夕立さん、やり過ぎ」

「村雨のベーゼの為なら過剰でも何でもするんですよ!!」

七海の殺意が本気すぎた。

予定通り、三人は通常艦装なのはいい。

コロラドも、調子は悪くないと言うが。

問題はこのバカであった。

腕を組んで、ゴトランドの苦言も聞き直る。

それもそうで、この女ありったけの浮遊要塞を持ち込んでいた。

あの万能生物を、全部自分の艦装扱いで。皆さん猛々しく吠えております。

七海、勝つために手段など選ばない。

勝利すれば、村雨の唇を奪うとか訳のわからない賭けを吹っ掛けて、相手が困惑している間に推し進めて勝手に決めた。

可哀想な村雨、唇以外とはいえ、初めてのキスを七海にあげたらガチで狙われてしまった。

今度は自分から奪ったるとマジで好戦状態の七海は本気でやるとうって変わって言うていた。

「あわわわわわ……」

突然景品にされた村雨は真っ赤な顔で右往左往していた。

狙われる。負けたら有無を言わずにあの変態にファーストキスを奪われる。

淫乱なのはあのスケベドッグであると同思うがなにも言うまい。

村雨は別に嫌じゃない自分もいて、負けても勝っても得しかない気がして困る。

「勝つ、絶対に勝つ!! お嬢様を奪うのは私!!」

「そう、如月たちよ!! 小春ちゃん、気合い入れていこうね!!」

「言われずとも!!」

で、勝ったら七海を好きにしている権利一日券と言われてアクティブになっている一
同。

何と、七海が勝てるもんならば勝ってみろ、勝ったら七海をやろうとか言い出して皆
様戦意高揚状態に移行。

大半がキラキラという意味不明な精神状態が此処にはある。

深海棲艦も、艦娘も、冷静な数名以外は全員野獣であった。

「うわあ……」

困惑している村雨やいきり立つ皆を見て、五十鈴はドン引きであった。

鶴の一声とはまさにこれ。七海の提案で嘗て無いほどの高まりを感じる。

「ふふふ……提督を一日自由に……。全員に配るなら、チャンスはあるわ……。！　んふふふふ!!」

近くにいた山城が異様に怖い顔している。不気味に笑っていた。

そう言えば山城もなんだかんだ七海とは仲良しであった。

その割にはあまりつるんでいない様子だし、何やらヤバイことを考えているようだ。

此方の面子は、第一艦隊に旗艦が五十鈴。如月、小春、村雨、山風、弥生。

第二艦隊に、旗艦が山城。そこに衣笠、由良、翔鶴、リセ、パクチーだった。

急遽面子を変更して、結果として航空機で絶滅させるといふ此方もガチな編成になった。

皆、それほど七海の権利が欲しいらしく……。

「良いじゃん良いじゃん！　衣笠さんもたまには七海と遊ばないと!!」

「七海ちゃん……あれもこれも……何でもいいんだよね……」

衣笠はまだいいが、由良はキャラ崩壊を起こしている。

五十鈴に代わって妹を目一杯愛でたいのか顔付きが激変している。

見たことがないぐらい、ギラギラしていた。

此方の面子も、じゃん拳で最後には決めていた。

つれ回すことを計画するもの、一緒に一日中遊びたいもの、取り敢えず何かしたいものでバラバラだった。

ひとつ言えることは。

(全員ろくなこと考えてないわ……)

という、五十鈴の気苦労がかかりそうな予感だけであった……。

地獄のパーティー

さて、こうして興奮状態の皆が演習に臨む。

ギリギリして臨戦態勢の中を、演習開始。

変態同士の共食いが、幕開けしてしまった……。

ゴトランドは旗艦であるが、今回は二つに分ける。

相手は航空戦力が圧倒的なので、その場で相談して決めた。
軽巡たちをゴトランドとコロラド。

空母たちをジャーヴィスと七海で対応する。

理由として、僅かと言えど爆撃が可能なゴトランドと、火力なら勝てるコロラド。

駆逐艦ならば対処は簡単と、ゴトランドは侮ってた。

理屈で言うならその通り。が、よく考えてほしい。

あの面々の中で、深海棲艦どれだけいる？

小春、村雨、変異する如月。

この三名は深海棲艦の姫とそれに同族の相手。

とくに危険な従者と嫁は、七海が本隊に向かつていくと気付くや無視されて怒った。

「五十鈴！ あいつらを撃破して早くお嬢様と戦おう!!」

「そうよ!! オマケよりも司令官と愛し合いたいものよ!!」

戦闘を愛し合いとか如月は言い出していた。こっちも油断している。

目標はあくまで七海。それ以外は全員オマケ。

という、認識であった。完全に慢心であるが、それを勢いでカバーできるのが深海棲艦。

村雨のみ、いきなり本命とぶつからずにホツとしていた。

「ママは、向こうみたい……」

「ん、大丈夫……。先ずは生き残ろう」

寂しそうな娘と妹はそれなりに冷静で、五十鈴も頭痛がするが取り敢えずは戦艦が居

ると警告しておく。

数が居るとはいえ、射程が違いすぎる。先ずは接近を試みよう、こつちも交戦開始。ゴトランドの強い抗議により、浮遊要塞を三つまでに減らされ、他は戻っていった。後方の空母艦隊を任されたジャーヴィス、七海は単純である。

『あたし突撃して、空母撃破します。援護は任せますよ』

『オツケー』

七海先行、浮遊要塞とジャーヴィス援護。以上。

シンプル極まる連携で、突っ込んでいく。

一方、時々使う足底艀装をはめたりセは偵察機を飛ばして、そこから見えた映像に絶叫した。

「し、司令官様が凄く速さでこつちに突撃してくるんだけど!？」

そう言えば初めて七海とは演習する深海棲艦たち。

艦娘と違って、その脅威を味方でしか知らない。

血相を変えて叫ぶリセと、悲鳴をあげるパクチー。

「ちよおつ!?! こつちの攻撃全部回避してるじゃない!?! 何あれ、残像見えてるう!?!」

上からの爆撃と雷撃と銃撃を凄まじい機動性で避けて、こつちに向かって突っ込んでくる。

パクチーとリセはパニツクに陥った。翔鶴は普段青いの更に青ざめている。

「えっ……。艦載機の迎撃、無傷で突破されて……。う？ どういう、事……。う！」

夥しい数の艦載機で片っ端から七海一人を攻撃しているのに、一発も掠りもしない。で、常識外の速力と言うよりは速度で突破された。

苦笑いの艦娘たち。それはそうだ。

速度という意味では、七海は誰よりも速い。

と言うか、艦娘の概念じゃない。ただの怪物だ。

航行ではなく、疾走や跳躍と例えるような短距離ランナー。

瞬間的な運動性能、持続的な機動性。速度じゃ基本的に勝てない。

後続のジャーヴィスと浮遊要塞よりも前に、至近距離に突っ込まれる。

慌てる皆に、山城はコメント。

「提督の場合、駆逐艦のほうが対応楽ですよ。射程が短いから必然的に接近するし、近づけば艦載機の自爆が怖くて攻撃できなくなる。相性分かってますねえ」

空母と潜水艦は七海には勝てない。

速すぎて、動きが追えない。攻撃手段が通じないから。

ならば、どうする？ 決まっている。

「白兵戦しようか」

由良が提案して、衣笠は主砲を構える。但し持ち方がおかしい。何でメリケンみたいに持っているのか。

何でも、七海の得意レンジに入るともうそれは殴りあい物理になるらしく。

文字通り、殴ったほうが手っ取り早いし簡単だそうだ。

まあ、速度が追えないので勝てるとは言っていないが……。

「ええ……」

山城ですら、ボキボキと両手の骨を鳴らしていた。

啞然とする翔鶴に、戦艦ならば当たるのかと言われて試しに撃つてみた。

翔鶴は見た。分身のように呆気なく避けている七海を。忍者か。

真剣に狙っても無駄だと皆は言っている。

彼女に当てたくば、至近距離で弾幕張るのが一番確実。

それも踏まえて機銃は増設している三人。

空母たちは艦載機しかないものでどうしようもない。

と、思うのがパクチャーたちだが。

山城はこう、アドバイスする。

「資材泣かせになりますけど……こういう方法もありますよ」

と、移動しながら中距離にまで入りそうな頃合いに、由良と共にありったけ瑞雲を

放った。

偵察機、戦闘機、全部。で、由良も悪い笑顔で、とんでもないことを言い出した。

「艦載機全部七海ちゃんに突撃させちゃおう」

「!？」

詰まりは、どうせ意味がない艦載機を質量爆弾の弾幕にして突撃させて迎撃の壁にする。

数はあるのだ。全部飛ばせば少しは傷ぐらい入りそうな気もする。

言葉を失う翔鶴たちだが、あのスピードならそれもありと直ぐに分かった。

下手な鉄砲なんとやら。スピードには数だというごり押しの答えを得て。

中距離にノコノコ入った七海に、足止めの1000近くの艦載機が突進してきた。

足止めすれば、砲撃も当たる。七海の弱点は足なのだ。

七海も気づく。上から見上げる限り一杯の艦載機が突貫してきた。

ヤバイと思うが、だが怯まない。急ブレーキして、方向転換。

逃げて時間稼ぎ。追いかけてくる艦載機が追い付けずに着水、爆発。

ジャーヴィスが見たのは大蛇の如く伸びる艦載機の群れが七海を追い回している光

景であった。

(どっかの映画みたいな世界に……)

あんな光景を見るのは無論生まれて初めて。

ぶっちゃけ二次元みたいな光景に言葉が出なかった。

応戦している山城たちだが、迂回してそれでも縮める七海に、次第に自爆して艦載機が減ってくる。

特攻させてもやっぱり当たらない。速すぎる。

然し、体力は迂回させて運動させたので少しは減ったはず。

ジャーヴィスたちもレンジに入って横槍してくる距離になった。

幸い、ジャーヴィスと浮遊要塞は普通の範疇にいた。

動きはやはり格段に良いが、火力は駆逐艦の程度のまま。

常識外は七海だけになっている。

空母たちの艦載機がジャーヴィスを襲うために向かっていく。

彼女ならと思ったが……こっちも対空砲火がとても高い。

迎撃されて、数分で全滅してしまった。

「う、嘘……本気でやったのに……」

リセは愕然とした。艦載機が全滅という理解できない状況に脳内が真っ白になった。

たった二隻の駆逐艦とオマケで消えるという予想外に戦意喪失。自分で白旗あげて降参した。

翔鶴も艦載機のない空母は案山子と言つて、早々諦める。パクチーなどは言うまでもない、ビビつて降参。

深海棲艦たちは無理と首を振つた。七海には追いつけない。

然し、ジャーヴィスもまた、脱落してしてしまう。

『いったあ!?!』

頭に艦載機の迎撃に紛れて衣笠が放つた一撃が直撃し、出血。

碧眼に流血が入つて見えないと、バタバタしていて、七海が無理すると言うので身を引いた。

火傷と裂傷か。大したことはないし、その浮遊要塞が何とかしてくれたんだろうが。

『アリス、怪我したなら退いてください。あたしが後は頑張ります』

本名で呼ばれて、心配しているようで、これ以上は良いと七海は何度も言った。

甘い判断だろうが、任せろと言うので甘えることにした。

実際、ジャーヴィスは役目を果たしている。空母たちの武器を奪つたので最低限。故に、もういいかという諦めというか、七海の戦いを見ることにした。

事実、七海はと言うと。

「殴りあいであたしに勝てるんでも!?!」

「それを見せるのが私たちですよ!!」

距離を詰め、現在三人と白兵戦の真っ最中。

パワーはあるが動きの鈍い山城に自慢の足を掴まれて持ち上げられた。

迂闊に飛び蹴りを放つたのを防御された。

「捕まえた………この距離なら逃げられない!!」

ウサギみたいに跳んだり跳ねたり忙しい七海だが、これならと思う。

山城は右手で右足を掴んでいる。が、七海の利き足は左。

宙ぶらりんになった七海は、にやっと笑って山城の顔面を豪快に蹴っ飛ばした。

「げふう!?!」

ちよつと女性の出しちやいけない声をあげて怯み、手放す。

瞬間に、両手で逆立ちの要領で着水して、そのまま身体を捻って遠心力をつけ、踵を

横顔に叩きつけた。

山城の端正な顔にめり込む踵。で、仰け反って仰向けに倒れる。

「山城さん!?!」

由良が助けに入るも、飛び起きた七海が既に復活。

身を低くし素早く足払いをかけて、こっちも仰向けに転ぶ。

「きじゃんっ!?!」

子犬みたいな声をあげて、転倒する由良。

邪魔に入った衣笠は、七海が軽く足で払って、向こう脛を蹴られて悶えていた。結構痛い。動作がイチイチ速い上に見えないほどコンパクトにやるので厄介。

思わず膝をついてしまう衣笠。足止めは済んだ。で、体勢を立て直す由良は見た。

悪魔のような表情で、顔面を踏みつけてこようとすする邪悪な笑みを。

これは、知ってる。以前の特訓の時に受けた経験があった。

足には大きな連装速射砲。で、今は由良は倒れている。

この場合、顔を踏みつけてぶっばなす予兆だ。

(また顔なの!?)

大ケガじゃ済まない。七海はまたしてくるのか。

「七海ちゃん降参する!! 顔を踏むのは止めて!」

思わずそう叫んだ。

一度やられると分かるが相当怖いし痛いのだこれは。

由良のトラウマと言ってもいい。

青くなっている由良に笑顔で頷く七海は。

「じゃあ山城ですね」

と、起き上がろうとしていた山城に向かって飛び込んで。

「ごんっ！」と拳骨で殴って再び転倒させて、足をあげた。

「ちよ、提督、タンマー！」

「……」

「本当にタンマーするんですか!?!」

山城も反射的に叫んで、本当に止まった七海に思わず突っ込んだ。

予想外な反応だったが、タンマー終わりと勘違いした七海が再度実行。

顔踏んで、じたばたしている山城に向かって連射開始。

「いぎやああああー……ー!?!」

凄まじい雄叫びをあげて、山城の頭部が硝煙で曇り見えなくなる。

数秒で済ませたが、山城の顔は煙が晴れる頃には、粘性の赤い物体でベタベタになっ

ていた。

砲弾を痛くないものにしておいたと振り返って笑ってる七海が由良に言った。

「だつたら降参せずとも、と思うが……」

「目が、鼻がああああ?!」

転がつて苦しんでいる山城の様子からして、痛くはないが刺激物を仕込んだのは明白

だった。

唐辛子か何かだろうか……？

随分と苦しそうだった。

「衣笠は……」

「無理。七海、容赦無さすぎ……」

衣笠は、立ち上がろうとして痛そうに顔を歪める。

何か、かなり痛いようで骨にヒビが入ったような感覚で立てないと訴える。

「遠慮ないね、七海……。衣笠さんは参ったよ」

「そうですか？　じゃあ、由良を連れて鎮守府に戻っててください」

重傷にはする七海は、制圧に成功。呆然としている深海棲艦と共に戻れと言った。

山城も漸く立ち上がった。唇がタラコよろしく腫れている。これは酷い。

美人が台無しになっていた。

「うう……何て仕打ちをするんですか……」

呻く彼女に後で責任はとると七海は謝って、ジャーヴィスも頭から流血したまま合

流。

七海以外は全員メンタルとバイタルで凄いダメージを負っていた。

戻るときに気を付けるように告げて、わざわざ浮遊要塞を護衛に全部命じて、自分は演習に励む。

ぼろぼろの皆は、唯一元気な七海を見送って帰っていく。

空母たちは惨敗。ジャーヴィスも軽傷で降参している。

一方、その頃嫁たちは……。

「うにゃあああああ!?!」

新手の猫に似た断末魔の叫びを残して、ゴトランドが倒された。

皆で袋叩きにして、七海を出せという要求を呑まなかった故に手加減しないで制圧。

コロラドは因みに終始無視されていた。

そして、目的の七海が到着する。

一層凶暴化する駆逐艦共と、取り残されて対応に困り迷うコロラド。

そして、変態の最終決戦が始まろうとしていた……。

補足説明会 三回目

ここは、ある鎮守府の執務室。

現在、いい加減慣れてきた皆様による改修工事が進んでいる。

気がつけば説明会も三回目。ここまで長く続くなど作者も思わなかったのは秘密。これでもエンディングが足りない。まだ予定は多いのだが……。

「七海ー？ このぬいぐるみ、なんか独白してるけどどーするー？」

「五十鈴、丁度いいんではらわた取り出して三枚におろしておいて下さい」

「ぬいぐるみを!？」

「裁縫のハサミはあたしの部屋にあるのでー」

「……はいはい。分かったわよ」

「!？」

待つて、いつも思うけどどうしてこんな酷いことをするんですか。

なにもしてない、言つてない善良な深海棲艦を仕留めるんですか!?

「は？ あんたが善良？ 何処が？」

「!?」

何か聞き返された!? そんな変な質問した!?

「いや、あんたは邪悪でしように」

バツサリ切られて、凶悪な得物を何故か後ろからぶつさす。

「フアツ!？」

「魚つて捌くときに色々やり方あるんでしようけど、あんたの腹に突き刺すの可哀想だから、此方で済ませてあげる」

「こつちの方が苦しい!!」

片方の刃を突っ込んで深く突き刺し、そして。

無情にも……その断罪は、行われた。

あつー!!

改修を終えた執務室にて。

内装は通常、夏の終わりを彩る風景を窓の外に設定しつつ、今回はお送りする。

「今回で早いことで、三回目。どうも、皆様。海外に向かう英雄たちの戦が始まる今日この頃。君と結ばれる、物語の作り方。主人公、渋谷七海です。此方は国内で海外の艦娘たちと着々とラスボス撃破に向かいつつある佳境です」

「こんにちはー！ 本編じゃ未だに日本語喋れないけど補足説明会じゃメタで日本語喋ってるイギリス駆逐艦、ジャーヴィスです！ 決め台詞はなし！ 正確に言うとおたしはジャーヴィスとは少し異なる経緯なので」

「今は普通の鎮守府の提督は大変な時期ですので、少しでもうまくいくようにお祈りしています」

「こつちも大変だけど、ラスボス分かっていただけマシと言えはマシだからねえ」

と言うことで、今回は提督の机に座る軍服の七海と来客用のソファアに座って優雅にコーヒー飲んでる軍服のジャーヴィスでお送りしていく。

尚、ジャーヴィスの前にある重厚な机の上には解体シヨールにより犠牲になったイ級ぬいぐるみが転がって痙攣しているが割愛。

真つ赤な綿を裂かれた腹から出しているがご安心を。生きてます。あとぬいぐるみ。

「さて、今回の補足説明のネタは？」

「今回は、人類ルートにおける、最終兵器の詳細について、明かしていきたいと思えます」

「あー……詳細そう言えばよく説明してないもんね、この魚雷。長いこと出てるのに」
ジャーヴィスの軽蔑の碧眼がぬいぐるみを見下す。

多少動くが今回は初手から捌かれたので抵抗できない。

「人類ルートという最も出番の多いルートですら、語ってないのと語れないと抜かしております。情けない雑魚ですね、このぬいぐるみは」

「お仕置きであるの鯨みたいにお腹に爆弾詰めてあげようか？」

「それは今回のオチでお願いします」

「!？」

処刑決定。

兎に角、始めていこう。

補足説明三回目、今回の説明は最終兵器についての説明を行っていく。

先ずは、概要と七海は切り出した。

「本作における、そもそも最終兵器とは。各国が持っている対深海棲艦の為の、切り札です。国際的に取り決めをされている艦娘が、それぞれ国内で選ばれたのち、諸外国に到達して初めて認定される、名誉ある称号であり、肩書きです」

「作中じゃ、民間人が多い気がするけど？」

「ああ、そこが語りきれない部分でして。作中、舞台は日本であり主人公はあたしです。つまり、触れることのない設定でしたので入れる機会が少なかったのです。ですが、今回の人類ルートにおいて触れる予定だったんですが……」

「妙な軌道修正したせいで入れる暇が無かったと。作者が、太平洋深海棲姫をどうしても出したって考えて、コロラドが犠牲になる風に無理矢理修正したんだよ……」

「皆様もよく知る、白い鯨です。本作では擬似的な変容に過ぎませんでした、一応あれと似たような鯨になります」

「CIWSついてたけどね」

「超兵器過ぎる気もしましたが、味方がルート中最も過剰な戦力ですからね。それでも

あつさりと撃破されましたが」

「七海、話ずれてる。コロラドやあたしもそうだけど、元々は民間人なんだ。あたしはああいふ事情でも一応は良家の娘。まあ、触れてなかったけど、あたしは独り立ちするための食い扶持稼ぎに艦娘やってるんだけどさ」

「コロラドさんはコロラドさんで別の事情があつてやつてますが、敢えて触れないでおきましょう。掘り下げると終わらないので」

何故、民間人が多いかと言うと。

「日本とイギリスとかアメリカじゃ事情が異なるの。あくまで日本じゃ、廃れた技術つてなってるけど、イギリスじゃ居るんだよ、民間人から応募して艦娘になる人も。ここじゃ、ポーラがそれだったかな」

「日本と違って、海外では求人を出して、民間人から集めている部分もあるのが本作ですね。ポーラで少し言ってますが、適性あつて戦えれば多少の問題あつても採用されます。彼女は重度のアルコール依存症でしたし」

「それでも艦娘やってるのがスゴいよ。どんだけ人手足りないのイタリア……」

「日本は主流艦娘の生産が軌道に乗ってますので低コストで大量生産が可能なのです。イギリスじゃどうですつけ？」

「ん？ イギリスも居るよ、普通の艦娘。多分。あたし、民間人だから詳しくは知らない

けど」

「ですよね……。いくら候補生と言えど所詮は民間人。情報規制もされてます」

「その割には七海、コロラドの情報普通に喋ってたよね？」

「お話の展開上仕方無いんです。ご了承を」

「うわあ……」

その辺は作者の技量不足。本当に申し訳ない。

「要するに纏めると、海外と日本じゃ事情が違うから成り立ちも違うんだってことかな」

「ええ。しかも、最終兵器がまだ居ない国もあります。スウェーデンがそうです」

「ゴトランドの故郷だっけ？ あっちはちゃんと手順踏んでるのに再試験とか気の毒に

……」

「向こうの状態は作中触れることはないと思います。あたしが海外行かないので」

「七海は軍人だもんね。当たり前か」

「その民間人が否かで揉めてましたもんね」

「こそ。ポーラとザラは民間人の感覚が強すぎて、結局帰っちゃったし」

「アリス……いえ、ジャーヴィスはまあ、あれですし」

「頭おかしいもんね。自分で言うのも何だけど、人殺ししようとしてた人間なのに艦娘

やってるしね」

「理由あれど、人殺し未遂でも艦娘してないと向こうも万年戦力不足、と言うことですよ……」

「世知辛い……。しかも、さつき名譽あるとか何とか言ってるけど、前に誰か言っただけだった？ 最終兵器にはろくなやつ居ないって」

「はい。人格に問題あっても、強ければ本来は採用されます。ええ、ただ強ければいいので。本質は結局力なのですよ」

「じゃあ何で今このルートでこんなんしてるの!？」

「アメリカが問題起こして、周囲が好き勝手に混乱に乗じてやらかした結果、改革をしようと言うことで始まったのがこのルートの切っ掛け。マトモな奴を採用しようと先代が関与しているのと、引退をしたい人との利害の一致です」

「うわ……」

「あとは、詳細言うともっとダークになるので言いませんが、最終兵器の扱いは深海棲艦と大差無いです。差別と区別と糾弾的の的にされます。原因は本人の人格的問題や単純な僻み、恐怖など多岐に渡りますが」

「セーフティに人質取ったり監禁したりもするんだっけ？ 因果応報かもしれないけど、人間扱いされてないね……」

「普通にしても、大きな違いがないのが最悪だそう。詰まりは本人が如何にマトモ

でも迫害されて、いざつてときだけ利用される、可哀想な最強の集団。それが、本当の最終兵器たちの立場」

「こんな目指しているのあたしたち!？」

「いえ、人類ルートは改善されているので大丈夫ですよ。……多分」

「ちょ!？」

目を逸らしている七海に、愕然のジャーヴィス。

ニタニタほくそ笑みを器用に浮かべたぬいぐるみに、入っていたコーヒをぶっつけた。

「ぎゃああああ!？」

「救いも何もないじゃん!! 対立ばっかじゃん!!」

「そうですよ。人間と対立している、最強の個人が最終兵器の本質です。ですが、だからこそ仲間とは仲良しなのです。境遇が何処の国も変わらないので」

「あー……だからあの怪物が軽口言えるんだね」

「そういうことですよ。政治的な意味でも、その国の代表みたいな部分もあるんで面倒臭いモノでもあります。代わりに給料が破格に高給なのと、ある程度対立を加速させるのを承知ならば好き勝手に振る舞えます。報復が無論ありますけど、暴れだしたら人間には制止は不可能ですんで」

「強者の孤独……か」

「因みに、最終兵器には従来型しか居ません。どの国でも、主流艦娘では強さも顔としての面子も足りませんので。やはり人間の世界には人間が居ないと意味がないのですよ」

「普通の艦娘は無機物扱いが当たり前って言ってる世界だからなあ……」

「まあ、概要はこんなもんですかね？ ジャーヴィス、他に質問は？」

「疲れた顔のジャーヴィスは、七海に新しいコーヒーを入れてもらい、痙攣するぬいぐるみが八つ当たりに、七海に雑巾絞りを受けていた。

「ぎええええ!!」

「……あ。そう言えば、従来型艦娘は主流艦娘よりもずっと強いんだよね？」

「ええ。少々言っています、大体その辺の姫と同等ですよ。最低でも」

「だよねえ。だから多少の不利でもどうにかしろって無茶ぶりしてくるし。あたしも潜水艦殺す得意だし、やっぱ装備も専用なの？」

「その通り。最終兵器の方々や従来型は、主流艦装が使えません。本人の能力が高いのでそれに合わせて専用装備を珍獣が頑張って作っているらしいですよ。気紛れにしか普段はしないくせに、こういうときだけ忠実だそうで」

「妖精さんエ……」

「主人公が深海棲艦の艦装使っている時点で説明のチャンスがないというのが問題で

す。ねえ、雑魚?」

雑巾絞りを受けて、ピクピクしている持っていたそれに聞くも、

「だが……謝らない」

「ならば死ね」

もう一度雑巾絞り。絶叫。

「じゃあさ……聞いてもいい? あの宇宙行つてる戦艦の強さ。何度も作中バカみたい
に強いつて言ってるし、怪獣扱いされているけど具体的にどこまでいくの? あたした
ち姫と同じぐらい強いんでしょ?」

「……聞きたいんですか? 絶対に後悔しますよ? この雑魚が、前提が勝てるもんな
ら勝ってみろつて仕上げた本作品文句なしの最強の人で、コンセプトがブラックな昭和
ヒーローとか、金色の時間の王様みたいな理不尽ですけど……」

「その次元なの大和さん!? どう足掻いても絶望しかないけど!! 何その時間旅行して
殺そうとしたら四倍になって逆襲されるとか、そもそも挑む時点で勝てるわけないレベ
ル!」

「少なくとも、生身の一般人が怪獣に挑むのと同じぐらいには無謀ですよ」

「……………一応、聞きたいかな……」

人類ルートラスボスの具体的なスペック、初公開。

但し、彼女は某怪獣キングに人間がたった一人、生身の素手で挑むぐらいの無謀さがある。

簡単に言えばジャーヴィスのツツコミ通りである。

覚悟は出来た？ 本当に見る？

……では、どうぞ。

最終兵器、大和。スペック一覧。装備なし、基本。

耐久 1200

火力 520

装甲 550

雷装 440

回避 310

対空 480

搭載 280

対潜 260

速力 測定不能

索敵 330

運 0

「勝てるわけないでしょうがああああ!!」

ジャーヴィス渾身のツツコミ。

だから勝てるわけないと言ったのに、律儀な奴であった。

「何なのこの水準!?! 本当に艦娘!?! もうこれは番組違うよね!?! 怪獣か宇宙行つて

るって正直に言いなさいぬいぐるみいいいい!!」

とぬいぐるみに叫ぶが、これが装備なしの本作品最強の存在である。

弱点だつてない訳じゃない。

「勝てる方法がありますよ。数字だけが全てじゃないのです」

冷静に指摘する主人公、然し。

「ぶつちやけると、人間として倒すしかありません。要は精神的な意味で、ガリガリ削つていくと多分倒せます。人類ルートは倒せる方法をあたしが容赦なくやって、尚且つ皆さんが追い討ちに精神を削っているので胃痛とストレスに苛まれていて、かなり弱体化している状況になってます」

「方法がそれって事実上シリアスじゃ犠牲なしには無理って意味じゃん!!」

「仰る通りです。ギャグ補正と言うメタがないと無理です。皆でやつても無理です。勝てないものは勝てないのが本作。努力で勝てる壁じゃないのは言うまでもないかと」

「コロラドの努力って……」

「勝率が上がっても小数点ですしねえ。如何に知恵出して苦しませるかが勝利の鍵。運0は伊達じゃない」

「アンラッキー過ぎる……」

コロラドの努力も無駄じゃなかった。

怪獣には確実に胃痛を与えるので意味はあった。間違いなく。知りたくなかった驚愕の数値に、此方も精神が折れてしまった。

ここいらでお開きになると投げ遣りにジャーヴィスは言った。

「……何か、前途多難な展開にならないといいけど……。それじゃ、今回の補足説明はこの辺で」

「最後までお付き合い頂きありがとうございます」

「無事にあたしたちが怪獣倒せるかどうか、見守ってくれると嬉しいな……」

「勝てるの良いですが。それでは、また次回に！」

「お疲れ様でした……」

「良いじゃないか、艦娘の一人や二人！　つて言ってみたかった。大和は強いから大和なんだ！」

「……忘れてた。お腹に爆弾詰めないと……」

「!？」

「……これでいいや」

「良くないよ!?　オチで殺すの止めて!？」

「爆発オチか……」

「聞いて下さいジャーヴィスさん!!」

「聞こえない、聞こえない……」

「ちよっ!」

どおおおおん!!

「あんぎゃあああああ!？」

お仕舞い。

姉の威厳で更なる高みに

七海が好き勝手食い荒らしている頃。

此方では、はつきり言えばいじめが発生していた。

「ううううわああああ!?!」

進撃の駆逐艦が、ゴトランドを袋叩きにしていた。

主に二名、姫が目の仇にしている気がする。

反撃するも、飛ばした艦載機はとつくに旗艦の軽巡に落とされていた。

確かあれば、ゴトランドに似ている防空軽巡みたいな役割が出来るらしい。

事前に聞いた話じゃ、侮ると蜂の巣も有り得るから警戒は怠るなど言ったのに。

無意識で舐めていたゴトランドは猛烈に攻撃を受けていた。

因みに、七海を差し出せとかお前はお呼びじゃないとか散々その二名が吠えていたが

聞いてない。

背後の普通の駆逐艦はどこか呆れていたし、今回の景品さんとか七海が襲おうとしている彼女は止めても無視されていた。

軽巡は頭を抱えていたし、大丈夫か七海のところの艦娘たち。

とは思っているのもつかの間、正直に言おう。

(この艦娘、凄く実戦に慣れてる！ しかも格上と!!)

戦ってわかったのは、この艦娘は連携が非常に上手い。

性能が上の格上に対する動きを初見で把握して上手に渡り合っている。

厄介な連中だ。この性能はゴトランドとコロラドで勝っている。

が、艦隊とは連携が鍵になるし、向こうは恰も嫌がらせのような行動をしてくる。

一人ずつ仕留める気なのだろう。

援護のコロラドが当てにくい、中距離や近距離でゴトランドのみを狙ってくる。

大物相手にも怯まない、中々統率されている。厳しい。

コロラドも混乱していた。攻撃が全部避けられる。

(狙いは悪くないのに、どうして?)

大丈夫、砲撃はスムーズにいつている。

なのに、あの疾走する駆逐艦たちは華麗に避ける。

機動性では小型艦ほど小回りが利いて接近されたらそれだけ不利になる。

基礎をよく押さえてるし、殴りあいになれば向こうは火力と装甲が阻む。

故に回避に徹して倒せるゴトランドだけを狙っていくのか。

「ゴトランド、大丈夫!」

「全然大丈夫じゃないかも!! なんか一人、変な娘がいるよ! 多分、夕立さんのお嫁……うにやー!」

二人を分断して、近寄れないように群れでゴトランドを孤立させて囲って殴る。

分散させようにも、撃った後には狙った場所に誰もいない。

背中に目玉でもついているのか。電探に砲弾は映らないだろうに。

ゴトランドの情報は、若干一名明らかに射程のおかしいのが紛れている。

多分、如月というお花の髪飾りの艦娘と言うと本人が黙らせに来た。

気安い奴は嫌いらしい。

(もしや……この艦娘は優れた直感を持つている? 確か、心眼とかいう第六感)

と、コロラドが思うほど本当によく動く第一艦隊。

実際は大したもんじゃない。種明かしは簡単である。

五十鈴の指示は、落ち着いて対処すれば勝てない相手じゃない。

但し戦艦は徹底的に無視していくと。

何故なら戦艦を倒せる火力がない。

此方は良くて五十鈴と妙な武器を持ち込んでゐる如月。

火力と射程の異様に高い得物だが、なぜあんな長物使えるんだろうか。

兎に角、コロラドは後回し。旗艦のゴトランドを撃破に絞る。

で、回避できるのはここの変態に慣れているから。

もつと近距離で、もつと素早く飛びかかつて演習中でも良からぬことをする変態よりは、もつと避けやすい。

ぶつちやけ砲弾は直進しかしない。奴は急な方向転換も普通にする。

何が言いたいかと言えば、余程危ない変態を相手しているので砲撃ならば慣れっこ。速度に対する反応は七海により十分鍛えられていた。

最近妙に発情期のあの娘に比べればいくら規格外の戦艦と言えど。

基本構造は大差無いのだから、セオリーが通じると踏んだがその通りであった。

結果、位置と攻撃さえ気遣えばどうとでもなるコロラドは無傷で、ゴトランド大破。倒されてしまった。

「よし、旗艦撃破……」

ノロノロ撤退していくゴトランドを見送り、興奮状態の駆逐艦たちは何やら反応する。

電探に一瞬映る影。刹那で消えて、また映る。

この移動の仕方は、メインイベントが向こうから来てくれたか。

「あらあら……。ゴトランドさんを倒すとは、五十鈴も上達しましたね」

派手に飛沫を飛ばして、着水して停止した音。

背後を振り返ると、無傷の七海が待っていた。

いつも通りの笑顔で、もう一人は倒されたのか居なかった。

「あら、七海。ジャーヴィスはどうしたの？」

「彼女は怪我したので、棄権して貰ってます。でも、残念ですね。山城たちは全滅です

よ」

「……でしようね」

無線で聞こえていた、気の毒な山城の絶叫。

この娘、また加減しない暴力を振るったようだ。

コロラドが警戒しながら寄ってきた。

一度止まる戦い。戦力差は更に倍加した。

砲口を向けているが皆戦意が高まる第一艦隊。

対して、驚きと称賛の表情のコロラド。

そして、ぶれない七海と五十鈴。

双方、にらみ合いをしていた。

「降参するなら、今のうちですよ五十鈴。今のあたしには、コロラドさんもいます。ジャーヴィスも、ゴトランドさんも見ています。一人じゃないあたしに、勝てると思つてます?」

余裕の降伏勧告。七海は既に然り気無く、自分には心強い味方がいると自然に言えていた。

今まで他人を、とくに人間を頼つたり信じなかつた七海。

その彼女が、自分から言い出している。まさに劇的な変化。

五十鈴はどこか嬉しそうに、目を細めていた。

「そう……。変わったわね、七海。今回は良い意味で」

「?」

自覚ないのか、首を傾げるがそれはいい。

友達という存在や、同じ立場の仲間が出来たのだ。

艦娘では決してなれないかけがえのない人たちがいる。

七海は、もう少なくとも艦娘と深海棲艦だけが味方じゃない。

他人に興味のなかつた彼女にも、親しい人がそばにいる。

姉として、喜ばしい限りだと自然と微笑みが浮かぶ五十鈴。

妹が珍しく正しく成長している姿を見て、笑顔になっていた。

……が。

「ああ、降参しないからね。あんたに勝たないと村雨の貞操が危ないから」

村雨を虎視眈々と狙っているのは知っている。

不純同性交遊は認めない。絶対だ。

「やはり最後の敵は五十鈴でしたか。村雨を寄越しなさい。あと後ろの嫁と妹と娘も従者も。全部あたしのモノですよ」

「いい加減になさい。あんたは発情期か。片っ端から手を出そうとして。合意でも何でも、成人するまでは絶対に五十鈴は認めないわよお姉ちゃんとして」

性教育の出来てない変態に、お仕置きを兼ねてかかってこいと言う。

背後の嫁と従者が無言でターゲットを五十鈴に変えていたが。

「そこ、無言で裏切らないの。あんたらは茹だった頭を冷やしなさい」

振り返らずとも分かる。あの二名は言うまでもない。

村雨が顔を真っ赤にして、二人を宥めているが……。

「村雨、お前は黙ってお嬢様に全てを捧げていればいい。私も続く」

「そうよ。自分だけしておいて抜け駆けはズルいんじゃないの？」

聞いてない。ダメだったこの二人。

啞然とするコロラド。コイツら、要するにそういう関係らしい。

まあ、人それぞれだから文句はないが……。

「折角、頑張ってるの見てほしいのに……。ママが見てくれない……」

「シヨック……。かも……」

山風と弥生が、バカをして見てくれないと不満そうに七海に文句を言った。

途端に我に返る。

「……。そうでした。目先の村雨に先走って、皆の活躍を見るはずだったのに。流石は謎の村雨嬢……」

「提督、淫乱なのは提督です。村雨じゃないです。引力ないからね」

淫乱じゃないと否定しておく。その扱いはしない約束なのにと怒ると直ぐ謝る。

ハツとして、七海は一瞬迷って。

一度、鎮守府に通達。春雨を呼び出す。

「はーい？ 何でしょうご主人様？」

「春雨、今から言う支度を早急にお願ひします」

提督として、何やら命じているが。

なんと、ご褒美あると自分を見失うので欲しがる艦娘全員に七海は一日券を出すから予約用の準備をしておけと言ひ出した。

要するに、真剣になるので余計なものはあとでいいやという七海の妥協。

当然皆は大喜びだった。ロハで入手できたのだ。

平等にしようという七海の提案で、皆は更にやる気アップ。

最早殺気立っていた。喜びで。

「夕立……」

「何も言わないで結構。自覚してます」

最初からそうしておけという、コロラドの指摘は分かっているので反省しておく。

取り敢えず、気を取り直し再開する。

最終決戦が、とうとう始まる……。

と、思いきや。

「じゃあ、とつとと全滅させますか」

七海がいきなり本気を出してきた。

深海棲艦に変化して、巨大化した鉤爪を纏う姿に変身。

「司令官がその気だったら、如月も本気で行っちゃおうよ！」

此方も変身した深海如月に、一同呆然。

そう言えば知らなかった。言つてないので。

角生えた如月が、邪悪に笑つておつ始める。

七海が真正面から飛び込んでくる。

相変わらず速い……じゃない。

(ちよ、何この速度!? 見えないじゃない、分かんない!?)

五十鈴は直ぐ様理解した。

七海の手がまた上がっている。もう、此方では捉えきれない。

遠方で水柱をあげたと思つたら、直ぐ目の前にいた。

巨大な爪が、振り上げられている。

ちよと待て。直線で軽く見積もつても100Mはあるのに。

艦娘の感覚ですら、追い付けない超速度。防ぐので精一杯だった。

狙いはやはり五十鈴。リーダーを初手で倒して烏合の衆になった皆を片付ける気だ。

コロラドも分かっているのか、攪乱に切り替えて撃つてくる。

邪魔立てする戦艦の砲撃とその中を縦横無尽に駆け回る七海。

成る程、よく考えた。火力ならばどちらも致命傷。

当たれば終わりというその思考は、変わらないか。
だが……。

「あんたの癖は分かっているのよ!!」

五十鈴は逃げない。振り上げたその左腕、肘の部分を狙って艤装の増設しておいた機銃を掃射。

七海の反応速度ですら回避不能な超至近距離の攻撃に、なんと彼女が、被弾。撃たれた七海は苦悶の声をあげて一度退いた。

撤退する最中も、どうやら見えるらしい如月と小春が追撃。

驚く山風や、弥生と村雨。

距離をあけた七海は肘を負傷して、関節を潰されて膝をついた。

「夕立!」

「すみません……。急所を貫つたようです」

立ち上がる七海は、直ぐに元の姿に戻った。

左腕は、肘に弾痕を残して負傷。流血していた。

動かせないと訴える彼女に、コロラドは何が起きたか分かんないらしい。

再び襲う七海は何時よりも、目に見えて遅くなっていた。

激痛で鈍っていると五十鈴は感じる。焦りが彼女にも見えていた。

「五十鈴さん、流石ね。司令官の癖をよく知ってる」

応戦する如月が笑って言った。

彼女は深海棲艦になったまま。性能は今は如月が勝っている。

五十鈴は言うのだ、経験が勝ったと。

「速度で惑わされるけど、結局七海だもの。効率優先の、性能頼りの戦い方をするじゃない」

詰まりはマジで心眼だった。

七海の慣れない変形により、蹴り技主体から大振りの攻撃になったせいで、増設機銃でも追い付けるほどには遅くなっていた。

移動速度が上がっても、攻撃速度は落ちている。

更に大物を振るう宿命で、咄嗟の回避が出来ない。

特に超至近距離での場合は致命傷。七海は反応出来ても重くて鈍ったのだと指摘する。

で、七海は元々捨て身が多く、その時最も有効な方法を必ず最短で通る。

つまり言えば、さつきならば五十鈴を真っ先に倒すために慣れない変形のまま、突っ込んでくる。

後ろにコロラドがいるという安心感が、深海棲艦のまま突っ込むという手段を選ばせ

た。

七海の最大の武器は、蹴りによる機動性。あらゆる速度で惑わすスピード特化。故に、山城もやつたがカウンターに弱い。捕まると何とかならない場合はこうなる。素手という軽さが重要なのに、鉤爪なんていう重たいものを使うから。

だから、反撃で痛手を受けるのだ。

小春たちが本気になって、七海を追い詰めている。

一撃でも貰うと、七海は動きが鈍化する。

無傷だから速いのであって、怪我すると気が散るので散漫になるのも知っている。

「あの娘は、便利なモノがあると直ぐ頼る。それじゃあ、あの人には勝てないわ。五十鈴にも対応されるんじゃないやねえ」

お粗末と笑う五十鈴は、姉としての確かな観察力があって、事実性能は負けたが経験で勝っていた。

敢えて、使うと相手に思わせて使わないという選択肢。

それを出来るようにするだけで、七海は強くなれる。

山風や弥生にすらポコポコ撃たれ、村雨も遠慮なくぶちこみ。

結果……。

「あんたは後で、お勉強ね。今はお疲れ様」

「あたし……負けちゃったんですか……」

満身創痍で、ボロボロになった七海は、かなり持ちこたえたが、臆て倒れた。が、五十鈴も思う。……弾丸、消耗し過ぎた。

偉そうなことを言つて、倒れる七海を抱き抱えるのは良い。

然し、向こうにはまだ余力のあるコロラドが自棄つぱちで残っていた。

後回しにした、つけがきた。

此方も七海の反撃で皆結構傷ついている。

(一人なら勝つてた。でも、今回は此方の負けね……)

気絶する七海をお姫様抱つこで持ち上げて、素直に降参しよう。

皆ももう無理と言うので尚更。

こうして、対抗演習は七海たちの勝利で終わった。

沢山の反省点と、改善点が浮かび上がって。

また、皆は一步……ラスボスの怪獣に近づいた。

追記。

「提督を着せ替えするんです!!」

「衣笠さんはカラオケ行くからね」

「七海ちゃんとお買い物!!」

「ママ、映画いこうよ映画!!」

「弥生は動物園……!」

「えっ? わたしもいいんですか?」

「村雨は……別にいいんですけど……」

「お嬢様、一緒に一日中惰眠を貪ろう」

「如月は……お風呂かなあ?」

各々、終わったあとに好きなこと要求していた。

若干一名懲りてないので、お仕置きが実行され無事に済んだという……。

発動！ 大怪獣退治！

……時間稼ぎには成功している。

やっぱり勝つよね、と半分諦めのラスボス。

大本営にて、一名は既にメンタルが死にかけてきた。

もう、本当に勘弁してほしい。

(誰か、私を人間扱いして……)

彼女、桜庭は孤立していた。

最終兵器の試験も、残すところ見苦しい桜庭の延期以外は全員終わっている。

残ったのは件の戦いのみ。

で、試験に受かって正式に名乗りを出して仲間入りした彼女たちは、最後の試験を国に帰る前に見ていくと先代と話して、決定していた。

今まで散々候補生を蹴散らしてきた常勝無敗の大和が、最後の戦いを飾ってくれる。他国のお偉いさん関係者はさぞ素晴らしいものになると思っているようだが、そんなわけあるまい。

相手を聞くまでは。戦う相手は四隻。

一人は、新しいリーダーにして、唯一の合格者。

仲間を心配して逗留しているという少女、スウェーデンの艦娘ゴトランド。

一人は社交性の高い明るい性格の駆逐艦。

その仮面に騙されている奴等が多いイギリス艦娘、ジャーヴィス。

……ここまではいい。

問題は、後の二名である。

キナ臭い問題を起こして、国に介入されているという噂がある彼女。

ビッグセブンを継いだ数少ない戦艦、アメリカ艦娘コロラド。

最大の問題は、試験官大和の教え子。

狂犬の異名を持ち、深海棲艦すら束ねている異形の子供。

その性格も極めて悪質にして陰険、挙げ句には狂暴な駆逐艦、夕立。

この二名は、黒い噂が絶えない現在、世界各国から滅茶苦茶警戒されていた。

何せ、経済大国アメリカと、世界で唯一深海棲艦を率いている日本。

その二国の艦娘が一遍に最強と名高い大和と戦うのだ。

どんな死闘になるのか、ある意味政治的にも注目の一戦らしい。

が、そんなものは本人たちには関係ない。

試験を担当する桜庭は……死んでいる。

理由は単純で、今までの人生で最も肩の荷が重たい注目の戦いに、不安要素しかない

七海が、何をしてくるか見当がつかないこと。

後は単純に教え子の悪意が大本营に拡散しているからだだった。

任務を終えて、七海からガングートに一報が入っていた。

あと、一週間だけ時間が欲しいと。最後の準備をしたいので。

そう言われて、勝手にガングートが許してしまつて、桜庭に何も言わないで放置して

いた。

「ガングートオツ!!」

「ふははははは!! 無駄な足掻きは見苦しいぞ!! いい加減諦めろ大和! 貴様の死は

決定したのだ!!」

腕組みをして高笑いしていたガングートいわく、七海はこう、伝言を言つたらしい。

——絶対殺す。

と。

所謂、宣戦布告。教え子が教官を超えるべく、ぶつ殺すと挑戦状を叩きつけてきた。彼女にしてみれば脅迫されているに等しい。

とうとう七海は精神攻撃にも手を出した。演習のお返しと言うことか。

ガングートを通じて、今まで先に試験を受けて桜庭に半殺しにされてきたであろう彼の連中に、ある映画を見せてもらったそうだ。

あの、桜庭の声を聞いて皆さん逃げ出した件の映画である。

で、同じ立場のガングートに職権濫用である台詞を付け加えて貰った。

「この映画の内容を、よく考えてみるといい。お前らは、戯れに過ぎなかった。大和にとってはな」

映画の内容と、自分達の受けた仕打ちを鑑みるという言葉は、桜庭にそっくりな役者が出ている映画を使ってある意味のトラウマを刺激していた。

立場はぶつ飛ばされる人類、ぶつ飛ばすのはあの海から来た巨大な怪獣。

それと戦う戦艦も、最後は怪獣に破壊される。

ちっぽけな人類とは即ち挑んでいく候補生、破壊された戦艦は成長した未来の自分達。

詰まりは、何が言いたいのか？

「分かるか、小娘。貴様らは蹂躪されるだけの人類にしかねなかった。奴が本気にな

れば、貴様らなど如何に成長しても、あの大怪獣大和には勝てん。こんな風に、無惨に瓦礫となるだけだ。良かったな、あいつが戯れで終わらせてくれて」

惨敗した記憶に更に乗せする客観的眞実。

例えるなら、お前らは人類とするなら、大和は大怪獣。

挑んで生きているだけ、有りがたく思えと。

事実本当にこれぐらいの差があつたから余計に悪い。

ガングートは言つた。

大怪獣を敵に回した場合は、大抵こうなる運命で、軽く蹴散らされた幸運を喜べ。

間違つてない現実に、合格した皆は一斉に桜庭を大怪獣と認識するようになった。

まあ、ガングートがしたことは刷り込みであつたのだ。

主に弱つていく桜庭を見ているのが愉快で、同時に本当に何でもする七海の気概が気に入つて助力した。

使えるものは誰でも使う。容赦なく教官であつても追い詰める。

中々見上げた根性であつた。

結果として、大本営に滞在する皆は廊下で桜庭を見かけると悲鳴をあげて逃げ出す。

更に周囲に桜庭が本気になるると余裕で国ぐらい滅ぶと誇張して話して回り、拡散した

噂が桜庭大怪獣説を加速させ、本気を知らない大本營の大半の軍人も成る程有り得ると納得してしまい、とうとう誰も桜庭を人間扱いしなくなつた。

大抵が怪獣、宇宙行つてるかもしれない戦艦など有名で分かりやすい例えにされて、彼女は知り合いにすら最後の試験で本気を出すなど言われてしまう始末。

実際、何一つ間違いなく、否定材料がないこともある。

全部一人で実行可能なので、味方にすら自重しろと言われて誰も彼女の話の聞かないのだ。

「面白がつてるでしょ、この状況をオ!!」

「何を言うんだ。お前が加減を知らないからこうなつたんだろう? 私は嘘は言つてな

いぞう」

「ぐぬぬぬ……」

胸ぐらを掴んで凄むと、けんもほろろに反論されて悔しそうに自分の落ち度も自覚する。

然し、周囲を利用した精神攻撃とは本当にやるのがえげつない。

おかげで胃薬がお友だちになり、同じ元帥からは苦言を言われて、部下にすら怯えられる日々。

物理的にも戦いに制限をかけられて、精神的には寝不足と胃痛とストレスでぶつ倒れ

る寸前。

(汚い……汚すぎる。渋谷さんにこんなこと教えた覚えはないのに……)

マジでそれが彼女が殺す気で戦いに挑むというのは分かるけど。

せめて、教官の状態ぐらいは……察してほしかった。

で、此方から時間を稼いでいる彼女たちも最終準備に時間を費やしていた。

コロラドやジャーヴィス、ゴトランドで決闘みたいな状態で演習して、同じ性能相手に戦えるように特訓して。

七海は五十鈴に教わっていた。深海棲艦になったことによる弱点。それが必ず攻められる。

使わないという方法を覚えろと。実践された七海は素直に取り入れ、それを補うために技術を欲した。

自分に合っている戦い。彼女に黙って付け焼き刃でも良いから片っ端から手を伸ば

した。

本格的に始動する鎮守府。

七海に頼まれて、深海棲艦たちが大丈夫なので海岸沿いで劇物を生成して、加工していく。

一応料理の筈が、艦娘たちは一切近寄れない魔境となったのは言うまでもない。

艦娘たちは通常任務の他に七海がガングートに頼んで入手した何やら装備を資材で作って量産。

小細工で苦しめるといふ基本方針は変わってないらしい。

で、本人はその一週間を不在にしていた。

修行に出ていくとか言って、知り合いの多分最も現状七海にパワーアップさせるに相応しい漢の鎮守府に向かっていた。

そんなこんなで一週間があつという間に消費されて。

メンタルもバイタルも弱体化ギミックを受けまくって死に体の本作最強との戦いが、始まろうとしていた。

運命の日。大本営が沢山の関係者や他の提督たちも最後まで聞いて見学に来ているなか。

大怪獣は……見るからに元気がなかった。

「……………どうして、皆私をあのでっかい蜥蜴みたいに言うの……」

大本営で陰で蜥蜴みたいなイグアナみたいなアダ名で呼ばれていると知って、もう桜庭のメンタルライフは尽きていた。

自分の強さをこれ程呪う日がこようとは。

弱い人たちの気持ちに漸くわかる気がした。

目からはハイライトが消えており、ため息で呼吸しているかのような。

寝不足と胃痛とストレスで、既に桜庭は軍医のお世話になっていた。

その軍医ですら、若干及び腰で本音を言っても桜庭だから大丈夫とかいう意味不明ながら説得力がありすぎる理由でお薬出しているだけであつたが。

ギミック効きすぎて死にそうだった。

艦装を背負い込み、呆然と海上に立ち尽くす。

上空には中継の飛行機が無数に飛んでおり、映像をリアルタイムで届けている。

多くの提督や、合格した同胞が見守るなか。

緊張しているのか、ゴトランドもガチガチに固まっていた。

「と、とうとう来たね……。か、勝てるかな……。？」

戦うのが正直皆は怖いと思う。

弱体化を知らない皆は、蹂躪されてしまうという恐怖があった。

ゴトランドは、港で準備しながらこの日のために皆で頑張ってきたのだから、負けないと思う。

勝てるとは、言っていないが……。

フオーメーションはバツチリ。装備は……過剰かもしれないが相手は大怪獣。

加減なんて寧ろ失礼と思考が麻痺っていた。

積めるものは全部積んだ。準備は万全。あとは全力で抗う。

挑むじゃない、抗う。死なないために。この時点で既におかしい。

「頑張りましょう。負けられないのよ、私達は」

コロラドも、気合いは十分だった。少し気負い過ぎているように見える。

ゴトランドがリラックスして落ち着いていこうと言うと、深呼吸していた。

『来ちゃったねえ、怪獣退治……。皆して死ぬなって言ってたよ、案の定……。』

以前の知り合いとたまたま会ったジャーヴィスが言うには、死ぬ確率が高いから気を

つけてと励ましを受けたと説明する。

そつちも合格しているようだが、青ざめていたと苦笑う。

「その様子じゃ、良い感じにあの人にはダメーシ入ってますね。こうしないと、試験にす
らなりませんから。仕方ないです」

七海は昨日戻ってきたばかりだが、意外と元気そうだった。

周囲に三つの浮遊要塞を浮かべて、何やら白いボディに飾りをつけている。

一つは桜と団子。

一つはロケットとチョコレート。

一つは……何故に麻婆のレトルトパック？ それに雨の天気図のもついでる。

今まで何をしてたのかゴトランドが聞いた。

情報共有はしているし、彼女は共に演習は出来なかった。

かなり多忙だったのもあるが、皆の装備に彼是追加を持つてくるので忙しかった。

「ん？ ああ、付け焼き刃ですが、格闘術の基礎を叩き込まれてきました。知り合いに、
あたしよりも白兵戦強い人いるので」

「えっ……」

さらつと言うが、七海が陸上で人間相手に負けていたというのに驚く一同。

ジャーヴィスがどんな奴なのか念のため聞くと。

「筋肉もりもりの、逞しいナイスガイなハゲです。滅茶苦茶生身で強いですよ。あたし、何度か骨を折られて死にかけました」

「……夕立さん、知り合いに人間止めてる人多くない?」

逞しいハゲの巨漢であり、格闘術では七海は惨敗してきたと。

艦娘なので、負傷しても直ぐ治せる利点を活かして、無理矢理教えてもらったと。

白兵戦の技術も取り入れ、特に間合いの取り方を教わったとか。

主に、深追いし過ぎない引き際も含めて。

ゴトランドですら、七海の知り合いは人間止めてるのがまだ居るのかと思う。

深海棲艦に怪獣、挙げ句生身で艦娘に勝てる巨漢。

この国の連中は戦闘民族か何かかとジャーヴィスも感じた。

コロラドに至っては気にしたら負けと思うので流した。

「ですので、出来ることは全部しました。あとはあの怪獣を倒すだけです」

コロラドは浮遊要塞が何か聞き覚えのある声で、ぶつぶつ言っているが気にしないで
おいた。

七海も、コロラドがくれた取って置きの隠し玉を準備してある。

準備万端。あとは、頑張るだけ。

「それじゃ……皆!! 死ぬ気で頑張ろう!! 絶対に勝つぞー!!」

発破をかけるように、ゴトランドが三人に言った。
皆で拳を掲げて、気合いを入れて叫ぶ。

『おおー!!』

「ええ!!」

「……はい」

一致団結、もう怖くない。

そして、皆は抜锚していった。

目指すは勝利……出来るといいなあ、という願いで。

最後の戦いが、今始まる……。

恐怖と絶望のBGM

こうして、ラストバトルのゴングが鳴った。

見守るのは鎮守府の皆や、今回彼女にあれこれ技術を叩き込んだ某ハゲと相棒も見ていた。

丁度近くに単独で行動していた五十鈴が通りかかり、声をかけた。

「あら、武蔵さん。……と、島村提督」

そこには何時もの露出の多い格好の武蔵と軍服を窮屈そうに着ている巨漢、島村がいた。

中継される大本営ではそこから映像が流れており、五十鈴はたまたま移動しているときに二人を発見した。

「ぬっ……？」

「おお、お前は五十鈴か。久し振りだな。件の輸送の時以来か」

二名は五十鈴よりも背丈が大きい。
見下ろす形で気付いていた。

「ご無沙汰しています。先日はこちらの提督が……」

「いや、良い。社交辞令は要らぬぞ、五十鈴」

お礼をわざわざ遮って、妙に厳しい顔で島村が腕を組んで思案していた。

武蔵も一瞬表情を崩すが、また険しくなった。

何やら不安そうな雰囲気、近くの部屋に向かおうと五十鈴は誘われた。

話があるらしい。何事かは分からないが、先日まで妹がお世話になっていた。

評判は無視して、五十鈴は誘いに乗った。

兎に角、始まった最後の試験に臨む彼女を見なければ。

五十鈴と共に、個人的に借りたらしい部屋にあるモニターで様子を三人で見る。

一応別室の皆には用事ができたと一報を入れておく。

で、海上を走っている七海が見ながら、重苦しい空気のなかで島村が口を開いた。

「五十鈴よ。端的に聞こう。貴様、勝てると思うか？ 渋谷さんが」

「……」

あの男が、桜庭に強い警戒心を示していた。

強張った顔は、どこか豪傑に相応しくなく、弱気な感情が見えている。

この勝負を、直接七海を指導した者として言えば。

「……正直言うと、五分で負けます。良くて相討ちに持ち込めるか否か……かと」

「ふむ……。やはり、貴様もそう見るか。相手は元帥殿、経験値も性能も上。果たして、私の教えは通じるだろうか……？」

提督として、如何に不利な戦いかはよくわかるようで、彼ですら敗戦が濃厚と言っている。

聞けば、桜庭の体調が芳しくないようだが、それを差し引いても無理がある。

活路はあるか。そう言われると沈黙を選ぶしかない。

五十鈴も元々、言っては悪いが勇姿を見るので精一杯だと思う。

七海が如何に努力しても勝てない怪獣と七海がビビっている桜庭だ。

厳しいと言わざるを得ない。

「相棒よ。貴様、渋谷提督が簡単に負けると思うか？ 必ずや一泡吹かせるだろうよ。

私はどんな策を練ってきたかを見るのが楽しみだ」

うってかわって、何処か期待している様子で武蔵は言った。

勝ち負けは大事だが、大切なはその内容。

七海ならば、きつと元帥の期待を裏切らないと。

実際は勝つためマジで彼是したせいで桜庭が死にかけているが……割愛していく。

五十鈴も絶対に嘸み付くのは同感だ。

喉笛に嘸みつくか腕に嘸みつくかは分からないが、狂犬らしく牙は必ず剥く。

勝敗よりも、過程を見ろと言われて島村も漸く表情を崩す。

五十鈴は気になって向こうで何をしていたのかを聞いてみた。

戻って直ぐに試験だったので中身を知らない。

すると、島村は誇らしげに笑った。

「ああ、格闘術の基礎的になるが、技術を少々鍛練していた。切磋琢磨の良いものだった。とても充実していたと思う」

「全くだ。あんな楽しい鍛練があつたとはな。何て物覚えの早い方だ。砂が水を吸うような速度だった。あれは、教えるほうが楽しくなってしまった。最後は最早戦争だった」

……あかん技術を学びに行っていた。

七海の白兵戦の能力向上のために、彼に訓練をしてもらったのか。

元は我流の七海の喧嘩戦法に、正しい技術を教え込んだという島村。

因みに。

「私も実際手合わせして思ったが、彼女は攻撃的なやり方が好きなようだ。久々に、良い蹴りを受けた。まさか、吹っ飛び意識まで飛ばされるとは。実戦で鍛えた脚力は素晴ら

しい破壊力を誇るのだな」

「実際にあの娘とやりあったんですか!？」

自分で戦って、肋にヒビが入ったそうだ。今も包帯を巻いているとか。

七海も大怪我して、無理矢理治癒して武蔵とも何度も特訓していたという。

そもそもこのハゲ、勝ったのか。あの狂犬相手に。

その時点でこいつも人間やめている気がした。

「はつきり言えば、渋谷提督は捨て身の突撃が主でな。主体の蹴り技を封じるカウンターに滅法弱いのだ。同時に、相棒にも全敗していた。こいつは複数の格闘技が使える。柔道に切り替えたなら彼女にはよく刺さる」

「……………やっぱり」

二人も気付いていた。

七海の弱点である、カウンター。妨害にも滅法弱い。

更には、護りに徹した持久戦も苦手な部類だそうで。

「世の中には蹴りの格闘技もある。海外のほうで、私も詳しくは知らないが……。確かかぼ、何とかだったな。渋谷さんの戦いは、全く手を攻撃に使わない。速度を助ける補助としてしか使用しないのだ」

素早く弱点を速度を乗せた一撃で打ち込み、急所に入れることで一撃の軽さをカバー

する。

故にそこを封じられると、攻めきれない。だから、絞めや寝技の柔道に負ける。

丁寧に見える二人に、五十鈴は負けたことにより彼女に何を学ばせたのか。

それを知りたかった。

「強いて言うなら、間合いの取り方。引き際の見極め。その二つを重点に叩き込んだ」

「うむ。渋谷提督の速度は申し分なし。あとは守りを固めた」

映像の七海が戦いを始めていた。

映像が切り替わる。七海は前衛、中衛にジャーヴィスとゴトランド、後衛にコロラド。

そういうフォーメーションのようだ。

前衛ゆえに、やはりいきなり突っ込んでいく。

愚直なまでに前衛を好む突撃思考。

狂った犬のように飛びかかる。

対するは、艦載機を飛ばして待ち構える……なんだあれは？

「……え？ 何あれ？」

思わず五十鈴が画面を見て眩く。

見慣れた桜庭は良いとしてその背中にあるのは……山城の艦装より巨大な軍艦の塊

？

今回のは見たことがない。なんと言えば良いのだろう。

山城の艦装を一回り更に大きくして、分厚く各種補助腕をくっ付けて可動式にして。全方位に突き出ている主砲や機銃の数々は剣山かなにかに見える。

飛行甲板は両面に補助腕により接続されて、魚雷は下部に妙に大きく長いのがかなりの物量で搭載。

その他必要な機材は頭部に拡張されて、榛名に似た髪飾りをしている。

「ん、想像通りだったか」

「そのようだな」

武蔵は同じ大和型の艦娘であり、艦装の基本構造は同じかもしれないと踏んでいた。

見た感じだが、専用機に改造してそのまま拡張して大きくしたようなもんらしい。

七海が少しでも内部の構造を知りたいので簡単に教えておいたと言った。

可笑しいものではないのか。驚いて目を点にしたが。

艦載機が爆撃の迎撃を繰り出すが、中衛の二名は翻弄できるが、七海は近すぎる。

防戦している二人を無視してもう突撃していた。

対して、コロラドも遠距離で撃ちまくる。七海には一切当たらない。

というか、野性じみた反射速度で、反応して振り向かずに器用に退いて足止めしてい

るようだ。

怪獣も砲撃をしようと構えるが、七海が即座に邪魔して副砲が良いところか。

それも、副砲じゃ七海には届かない。軽く避け、後ろの砲撃が当たる。

「定石で、手堅いやり方だ。見事な連携じゃないか」

「ああ。斬新さや奇抜さはないが、現実性と信頼性は高い陣形だろう。悪くない」

二人の評価も上々であった。

七海が避ける囲をやつて、邪魔しつつ艦載機は中衛で抑え、コロラドで殴る。

成る程、攻撃させない陣形で応戦しているのか。まだ、様子見でいい。

が、桜庭が動いた。

映像で、何と至近距離の七海に向かって弾幕を張った。

七海の機動性を殺すため、一面にばら蒔く弾丸の壁。

「CIWS!?! 初見だが……スゴいな相棒」

「ああ。この場合の近接防御には最適解。元帥殿も分かっておられる」

「……」

何というか、専用機にチューンアップされた艦娘に本当に皆は評価される戦いは出来るのか。

どう見ても遊ばれているようにしか見えない五十鈴。然し、彼女は気づいた。

(あれ、浮遊要塞は……?)

七海が何でもすると言って持っていた万能生物がない。

どこに消えたあの目立つたこ焼き。

あと、そう言えば見学に来ていた嫁と従者とメイドが、浮遊要塞に餌あげに行つたきり帰ってこない。

油でも売っているんだろうか。

それは、兎も角。ハラハラする場面に突入した。

七海が避けている間に反撃に出よう、という思いだろうが。

とうとう、七海が大人げない事を始めてしまった。

その弾幕に向かって、拡大された七海は素早く何かを取り出して投げた。

投げる場所は弾幕の中で、反攻に出ていた桜庭が何やらぎよつとしているのが映る。

球体を投げたのは一瞬だが、武蔵はそれが何だか分かったようだ。

「り、陸の手投げ弾か!？」

驚く彼女に、島村も反応。

陸軍の手榴弾。それを、七海は取り出して投げたらしい。

で、画面が小さく光った。弾幕の間で刹那、激しい閃光が走る。

七海も目を閉じているように見えた。

すると、桜庭の様子がおかしい。

目を両手で押さえて、悶えている。ああ、と五十鈴は分かった。

あれ、五十鈴たちが量産して七海以外にも皆隠し持つてる奴だ。

「せ、閃光手榴弾……!? 何と言う代物を!」

島村、驚愕。七海は本当に閃光手榴弾を用いて、教官に目潰しを躊躇わずに行つた。

予想外の手段に啞然とする二名。内心、五十鈴は謝つた。

(ごめんなさい、セオリーが出来ない娘で……。皆で倒そうつて言う発想にはなつたん

だけど、皆で全力で何でもするから倒そうつて発想だから……。外道でごめんなさい

……)

悶えている桜庭。止んでしまう弾幕。好機と七海、再度突撃。

んでもつて、悶えているその手を上から豪快に蹴つ飛ばして仰け反らした。

確かに引き際と間合いの取り方は分かっている。ばか正直に攻めずに搦め手を使つた。

が、これはどうなのか。痛そうにしている教官に、一斉にぶちこむ砲撃。

艦載機がコントロールを失い、墜落していく。

三人が一斉に攻撃している間に、五十鈴は見た。

(あつ、浮遊要塞! 海中に隠してるのね!?)

七海がコツソリと違う手榴弾や物品を海面から顔を出した浮遊要塞から受け取っていた。

で、激怒したのか怒り狂ったように桜庭が煙を突っ切り登場、反撃。

……それだけで、桜庭の周囲の空間が真っ黒に煙で見えなくなつた。

大きな波も彼女を中心に発生している。凄まじい反動であつた。

慌てて逃げていく後衛と中衛。

が、間に合わずに爆風に飲まれた。

それに気付くも、七海はもう一度煙のなかに突貫。

双方、見えなくなり……数秒後。

その姿に、皆は言葉を失つた。

……何と。

桜庭が、七海から逃げていた。

後退ではない、完全に逃走。

バカバカ撃ちまくるも、全部避けられて追い回されていた。

七海も風が煙を流している頃に画面に映る。

両手には、今度はビーカーらしきガラスの容器を持っていた。

再び拡大される師弟は、最早どつちが強いのかも分からない。

必死な形相の桜庭が何か、邪悪に笑っている七海に叫んでいる。聞こえないが、島村は読唇術でも使えるのか翻訳してくれる。

「毒物を持ち込むなって、あれほど言った……？」

「……毒物!?! 待て、本当か相棒!?!」

あ、バレた。五十鈴は頭を抱えた。

五十鈴は聞かれる前に白状。

一応、戦闘糧食。ヤバイシエフが作ったけど。

大体察してくれた二名は青ざめて目を背ける。

例のあれであった。そりゃ誰でも逃げる。

で、画面ではビーカーを思い切り投げつける。

素晴らしい動きで必死に回避するも、先回りして七海が違う手榴弾をまた投げた。

反射的に撃ち落とす。今度はそれは煙幕だった。

新緑色のカラフルで何やらキラキラと細かい粒子が混じっていた。

風に乗る、桜庭の方に流れた。

フラッシュと思ひ込み目を塞ぐ桜庭はまんまと直撃。

飲まれて消えて、数秒後登場。

「……元帥殿、土気色になって凄く震えてないか……？」

島村の言う通り、動きが鈍くなって、ガタガタ震えているようだ。で、まとも接近してくる七海。

手榴弾が怖くて弾幕が張れない彼女にまんまと至近距離に飛び込む。

また蹴飛ばす。今度は防御され、捕まる。

両手で掴まれて宙ぶらりんになる。

同じミスを、と五十鈴は失態と思った。

丁度、皆が先程の砲撃の巻き添えになって大破してしまったというテロップが、画面に流れる。

ピンチじゃないかと、見ていた皆は大体思った。

だが、そうではない。

これも、ちゃんと七海は……沢山の人たちのおかげで、学んでいた。

「殺す気!! 私を殺す気なの!! 死んじやうって言ったでしょ!!」

「生きてますが?」

「今すぐ病院行きたいぐらい、具合悪いけどね!!」
現場では。

度重なつた七海の外道戦術にキレた桜庭が、怒ってぶっぱなした一撃で皆倒されてしまった。

七海も現在捕獲されてピンチ。

で、叱られていた。

「……までやっていいとは言っていないわよ!? 私を何だと思ってるの!」

「ゴがつく蜥蜴」

「いい加減にしなさい!!」

両手で、激しく揺さぶられて視界が揺らぐ。

降参しろと桜庭が言うが、七海は笑っていた。

皆倒されてしまったのに、ニコニコ不気味に。

「あたし、今回は人間として、皆と挑んでいるんです。深海棲艦にはなりません」とは、さつき言っていたが。

なぜ笑えると不審に思う桜庭に、七海は言った。

「……一つ聞きますが。人間のあたしって言うのは、どんな立場ですっけ?」

その言葉に、血の気が失せる桜庭。

猛烈に嫌な予感がした。で、見事に的中。

七海の後ろで、ゆっくりと浮遊要塞が現れた。

ニヤニヤ気味悪く笑っている、変な飾りをしていた奴等が。

七海の武装として持ち込まれた奴等が。

大口を、開いた。

「お嬢様、やつと出番？」

「こんにちは、元帥様……。司令官に意地悪したお礼参りに参りましたわあ」

「ど、どうも……。いつもお世話になっております……」

で、口から誰か這い出してきた。

落ちるように着水して、立ち上がる三名。

……深海棲艦。小春、如月、春雨。

七海の溺愛している、従者と嫁とメイド。

いきなり援軍で登場した。

「……………えっ？」

「あたしは、提督ですよ桜庭さん。つまり、人として皆と戦います。さあ、仕切り直しと
いきましよう」

呆然とする、彼女の目の前で。武装した姫が。

蜥蜴の恐怖と絶望のBGMを奏でて、現れるのであった……。

大和、沈む（メンタルが）

視点を變えて、振り返る。

先ず戦う前に、七海は提案した。

フォーメーションには文句はないが、白いたこ焼きを海に隠す。

補給と回復を目処に入れておくので、という理由だった。

この日のために、たつぷりと作った資材を腹に貯めて、若干余計なものもその場で捕食しているが。

「ねえ、タ立？ その白いのから、聞き覚えのある声があるのだけど？ 何したの？」
とうとう我慢ならずニコラドに聞かれた。

一緒についてくるこの三つに、何を仕掛けたと。

七海はやはりニコラドは気付くか、と正直に白状した。

それは、ニコラドの一件で出来るかもしれないと思ったがやらなかった最後の切り

札。

万が一の保険であった。この時は信用していたので素直に言っておいた。即ち、提督さんの本気モード。というか、身内を誘拐して連れてきたと。装備のなかに。

「夕立さん、無事なんだよね？」

「無事ですよ？ 嫁ー、お返事は？」

思わず皆が大丈夫かゴトランドが聞くと、浮遊要塞から聞こえる声。

「如月は大丈夫よー」

「ね？」

嫁が口の中から声だけで応答していた。

丁度、餌をくれに来てたのでキャットフードをさらさらあげてから、ついでに喰わせた。

で、ちゃっかり普段の装備なら入っているので内部で装着。既に戦える。

『本当は応援に来てたんじゃ……』

『いいんですよ。提督として戦うんです。皆と一緒にじゃいけないとは聞いてませんし』
ジャーヴィスにもそういつて、気にしない。嫁たちなので合意なら何してもいい。

全員無事なのは聞こえるし、気付かれても不味いので隠しておく。

と、やり取りして。皆唾然としていたが。

で、戦闘開始。事前に決めていた戦術で行い、弾幕来たら例のやつを使う。フラッシュで目潰しして、全力でみんな叩き込む。

但し七海は射程が極端に無いのと、ある理由でやらない。

そこまでは、良かった。そこまでは。

が、なんか皆の無線にこんな怒声が入り込む。

「私は……人間だつて言ってるでしょうがああああああ!!」

怪獣、激怒。追い詰めすぎて逆上した。

とうとうぶちギレ起こして、何と容赦なく51cmの主砲を皆にぶちこんできた。

怒号を聞いた時点で三人は長い髪の毛が一瞬で逆立つて狼狽した。

怪獣の咆哮により連携を忘れてパニックになりかけて、撃たれたと分かり直ぐ様散開

……したはいい。

然し、怪獣の一撃は誰にも直撃しなかった。

逃げる前に、皆のいた空間のど真ん中に着弾、大爆発。

海面を揺らして空気を揺らして、凄まじい衝撃波で一帯を空間で攻撃。

余波を食らって逃げ損ねた皆は巻き込まれて、海上をバウンドして吹っ飛ばす。

重量級のコロラドですら、易々と紙切れのように舞い上がって、倒れた。

七海のもとには、うわーとかきやーとかうにやーなどの悲鳴が聞こえた。

彼女は近い位置にいたので無傷で、全員が多分ダメと思つた七海は撃つた後の煙のなかに突入。

艦装を頼りに、反動で軽く踏ん張っている怪獣に急接近。

その間に、例のやつのお二つ目を用意していた。

恐らくは、効果はあると思う。危ないので試食してないけれども。

それに気がついた桜庭が何か言う前に、七海は脅すように、聞こえるように無線の周波数を合わせて告げる。

ブラフだった。

「桜庭さーん、王水のお届けですよー?」

「うわああああああ!」

流石に色々具合悪いときには効果覲面。

王水という完全な劇物持つてきたと嘘を言つて、取り敢えず追いかける。

悲鳴をあげてあの桜庭が七海から逃げた。

当たり前だ。王水持つてきたと言つて追いかけて、逃げない奴はいない。

で、煙から抜けて応戦する彼女に怒鳴られるが無視して投げた。

大丈夫、中身は某シエフお手製のコンソメだから。

……試しにスプーン入れたら、スプーンが気泡を出して速攻で融解したけど……。
で、先程受け取っておいた二つ目の手榴弾を投擲。
向こうも焦っていて予想通り撃ち落とす。

フラッシュと警戒したのは運の尽き。

残念ながらそれは粒子にした金属と、もう一人の駆逐艦シエフが丁寧につてくれた
サンマの薫製を粉末にして混ぜこんだ煙幕であつた。

チャフとスモークのダブルパンチが風に乗り桜庭を包む。

艦装に付着すると電探が麻痺すると聞いたので、頑張つて作った自信作。

シエフも自信作。二人の自信を受けて、死人の顔になつた大怪獣。

ガタガタ震えている。まだ立つた。結構しぶとい、流石怪獣。

で、もう一発蹴つ飛ばそうとして捕縛されて、前回に戻る。

突然の身内召喚に、言葉を失う怪獣。

……増えた。予想できなかつた、まさかの増援。

「元帥、お嬢様を離せ。さもないとお前の顔にハバネロの濃縮液をぶつける。還元しているから痛い」

「ええ。それに、王水もまだありますよ？ さあ、離しなさい……。如月たちが、笑ってるうちに、ね」

「……すいません。今は、言うこと聞いてあげてください……。この二人、かなり怒ってるので……」

宙ぶらりんの七海を離せと怪獣相手に平気で要求する。

手には、ビーカーの液体と試験管に入った真っ赤な液体を持つて脅す。

如月は笑ってるが目付きは敵対している彼女を本当に殺すという意味があり。

無表情の小春も、そのまま投げつけてきそうな雰囲気があった。

春雨のみ、何も構えずにお願いしてくるが。

「……ちよ、待つて。何で増えるの？ どこにいたの？ って言うか、増援とか聞いてないけど。渋谷さん、本気で殺すつもりじゃないよね？」

「次第によりますよ。あたしは、あくまで人の選択肢を選んでいるだけ。提督で、艦娘です。故に、部下を呼ぶのは自然なことですよ。あたしにしか出来ない、あたしだけの戦術です」

質問には答えず、従えと暗に七海も笑っていた。

絶句するメンタルが限界突破の桜庭は、頷きながらゆつくりと、七海を丁寧而降ろす。理解できない戦法に、見ていた多くの軍人も言葉を失った。

笑っていたのはロシアの戦艦や、裏をかいたと驚きながら称賛するハゲぐらいなものか。

同胞もドン引きであり、況してやお姉ちゃんは。

（ああああああああ!! 遂に仕出かしたあの娘はああああああ!!）

正々堂々を木っ端微塵に吹っ飛ばした瞬間であった。

最早試験じゃない、単なる戦争。

怪獣退治に選べる大半を迷わず持つて行って、その場にいた身内まで登場させやがった。

頭を抱えるしかない。沢山の見物者がいるのに、このやり方。

いつも通り過ぎて笑えない。本当に何してくれたんだあのバカ。

苦悩するお姉ちゃんを知らずに、更なる悪夢は続く。

「仕切り直し……? えっ、まだやるの? まだ何かあるの……?」

心底嫌そうに、恐る恐る聞いた彼女に、七海は言った。

「ええ。宣戦布告はしたはずですよ。必ず殺すと。ですので、世界最強の桜庭さんには暫く死んでもらおうかと。動かないでくださいね、一応。まだ続いているので」

パチン、と左手で指を鳴らすと、浮かんでいた浮遊要塞が突然移動を開始した。離れていく彼らに、身構えようとして。

「司令官が動くなと言ったでしようッ!」

突然ヒステリックに叫び、如月が持っていたビーカーを投げた。

装甲で思わず防御した。音を立てて割れるビーカー。

すると、変な臭いと白い煙をあげて、当たった場所の塗装と金属が融解した。

「うえええ!」

なんと、世界最強の大和の鋼鉄が、熔けた。

ビツクリして、当たった場所を確認する。

強力な酸性の液体だろうか？ 硫酸だって数秒は持ちこたえる装甲なのに一瞬で

……。

「……あの人、これをコンソメと言い張るんですか。すごい威力ですね、飲まなくて良かった……」

「これコンソメなの!?! 嘘でしょ、どう見ても危険なモノですけど!?!」

これも一応糧食。大丈夫、食べ物。……多分。

「一応コンソメって言っていましたよ。さっきのは嘘です」

「……そんな、バカな……」

桜庭、膝から崩れ落ち両手もついて俯いた。

如月に七海が勝手に怒るなど叱ると、思いつき頬を膨らませた。可愛い。

じゃない。七海は交渉に入る。

「さて。こんなことをしている理由は、あたしたちに演習などという苦痛を与えたことに対してのお返しです。あの程度で済ませるほど、あたしは優しくないのです。あたしに皆を撃てと命じた事は重たいんですよ桜庭さん」

「本当に……勘弁して……。私をあの蜥蜴にしただけでいいじゃない……。ビーム出せないから……。熱線吐かないから……。あと何とかエンジンとか関係ないから……。それ違う世界の大和……」

かなり、精神的な意味で折れてしまったのか、教え子の前で彼女は泣き言すら言い出した。

一種の公開処刑であった。多くの連中が見ている前で、教え子は教官を辱しめていた。

で、凄いい笑顔で笑っている鬼畜がいた。これでも主人公です、これでも。

「何でしょう、今すぐくあたしは気分が高揚します……！ これぞ下克上！ 下からの反撃にあの桜庭さんが苦しんでいるなんて……！ 最高ですね!! 頑張った甲斐がありました!!」

鬼だった。本気でゲスな教え子がいた。

凄い笑顔で、項垂れて再起不能なレベルに凹んでいる教官に懲りずに追い詰める。

「あと言えば、怪獣って言いますけど、実際そうじゃないですか。島を吹っ飛ばす、地形を変える、海を割る……。あたしが調べてもらった限り、大きな違いがないんですが？」

「止めて……。本気出したらそうなたちやうのよ……」

「へえ、要するに天災扱いですか。益々大怪獣ですね」

死に体の精神を上から踏み潰すことをしていた。

遠慮ない精神攻撃に加えて見てていたたまれない公開処刑。

浮遊要塞が、戻ってきたことにより桜庭は更に追い込まれる。

「あの……夕立さん、いい加減もう止めようよ……。見ててこつちが胸が痛くなるから……」

何と、大破した仲間が全員浮遊要塞に乗っかって無傷で戻ってきていた。

ゴトランドが制止に入るが、七海は全然止まらない。

顔をあげて、理由を察して桜庭の顔は真っ白になっていた。

浮遊要塞が蓄えていたのだろう。高速修復材を。

それを使って、帰ってきた彼女たちは、目を逸らしていた。

「はい？ 止めませんよ。あたしに皆を撃つて言うのは、皆さんを撃つて言うのと

同義。許しませんよ、自分の教官だからこそ。仲間を大事にしると自分で言ったのに」
「演習ぐらい、いいんじゃないの……?」

控えめにコロラドも言うが、屁理屈で潰された。

怒っている七海は、それを理由に如何に彼女が大怪物に相応しいか理屈と根拠と事実を用いて徹底的に突きつけた。

数分に渡って続く精神攻撃に、次第に倒れていく桜庭は最後には、そのまま俯せになつて横たわつた。

否定する部分がないので、聞いている多くの軍人は何も言えなかつた。

大抵皆が知っている認識を、精神が弱つてる人間相手に真正面からぶつけて、逃げ道を塞いで追い詰め論破して倒した。

「桜庭さん。良いですか、貴方は一番強いんです。その自覚しないで試験に当たつて、周囲に恐怖を撒き散らしたのは……」

『も、もういい!! もういいよ!! 十分だつてば!! 正論で大和さんをそれ以上いじめちゃダメだよ!! この人壊れちゃうから!!』

ジャーヴィスが、痙攣している彼女にまだ足りないのかくどくど言いまくる七海を止めた。

それ以上はいけないから、ここまでにしておけと。

友人の制止に渋々口を閉じた七海は、最後に聞いた。

「桜庭さん。あたしたちの勝ちで良いですよね？ 全員合格ですよね？」

腕を組んで見下ろす七海の冷たい視線に、震えながら頷く怪獣。

……試験終了。この勝負は、教え子たちの初勝利。

というか、大和の初敗北にして、トラウマレベルの内容だった事に世界中の軍人たちは同情したと後に言われている。

その教え子は、後日最終兵器に任命された際に、その鬼畜な性格と苛烈な方法を、こ
う揶揄されたという。

——冷血、冷酷、冷淡な鉄の女。あるいは、深海の無慈悲な女王、と。

エピローグ 人としての在り方

……世界最強。

文字に起こせば何と陳腐なモノだろうか。

誰もが分かる、なりたくてもなれるのは一握りという、所詮は凡人には夢のまた夢。なれるわけがないという、大人になれば皆が理解する道理。

……なのに。この女は、なりやがった。

世界最強と謳われる大和を仲間と共にメンタルを打ち倒し、敗北させて暫く再起不能にした。

おおよそ、常勝無敗にして絶対王者と言われた彼女は、己の教え子によって公開処刑を受け、病院に送られた。

公式戦において、彼女は誰かに負けたことなどない。そんな記録はない。

その日までは。

この日、歴史は動いた。動いてしまった。

「怪獣、討ち取ったり。これで、あたしに歯向かうバカな人間は居ないでしょう。あたしも、最強の一員ですから」　　演習後、あるインタビューを受けた際に、無表情の彼女はこう、答えたという。

「あたしは、他の方々みたいに温情なんざありません。良いですか、一つ言っておきます。……今日以降、あたしや他の大人しい最終兵器に喧嘩を売るような真似を試してみなさい。あたしは、本気で反撃しますからね。抑止力なんてしません。戦争をしたければ、自分の国を焦土に変える覚悟をもって挑みなさい」

全世界に向かって、世界最強を唯一倒した彼女は最終兵器を侮ったら、容赦はしないと。

それは、のちに新世代の種族を越えて束ねることになる、最終兵器の言葉であり。

世界を震撼させる、恐ろしい宣戦布告であった……。

結末を簡単に語ろう。

先ず、インタビュアの後に七海は殺された。

「……七海。あんたは……」

終わった途端に襲撃され、関係者に一礼して首根っこを掴み、ズルズル抵抗する妹を持つていく軽巡五十鈴。

目元が完全に真っ黒で、嘗て無いほど激怒しているお姉ちゃんに流石の七海も怯えた。

「き、如月!! 小春!! 助けてください!!」

呼ばれた二名は当然向かった。

その他、良くない空気を感じて皆が一斉に止めに向かった。

だが、あまりの言動に怒髪のお姉ちゃんには通じない。

ある一室をお借りして、盛大な物音と悲鳴をあげてバトルを演じて。

呆然と見送った仲間の前に、白目で口から泡をふいた七海を猫掴みして持つてきた真の無敵が落ち着いたように持ち運んでいた。

謝りに各方面に行くから付き合えと、彼女だけ連れて出ていった。

慌てて皆が室内を調べると、目をバツテンにして、気絶する艦娘と深海棲艦が山になつていた。

五十鈴が一人で行ったらしい。幾度めか分からない絶句シーンであった。

で、ボロボロの教官はお医者者に急患で運ばれた。

未知の劇物の過剰摂取で、二週間ほど床に伏していた。

詳細不明の猛毒により、一時的に動けなくなつたと聞いた。

漸く痛い目にあつて、弱者の声を分かつたかとロシア戦艦は復活した本人に大爆笑していた。

本当に、容赦ない教え子により二度と彼女とは演習しないと桜庭は言っていた。

死にたくないらしい。色々な意味で。

で、世界中を驚かせた彼女もまた、裏でガングートが揉めたり渋る連中を軽く捻り潰して、正式に就任。

数日後に、合格者一同の顔合わせになった。

ジャーヴィスやコロラド、ゴトランドの知り合いも大体合格していた。

が、あの狂犬の艦隊でよくぞ無事だったと恐れられていた。

最強たる大和を追い詰めて愉悦していた鬼畜の駆逐艦。

怪獣と噂された彼女も、己の敗北によって一応人間扱いに戻されたのはなんたる皮肉か。

代わりに、教え子が新たな脅威として周囲に警戒と恐怖を植え付けていた。

七海は気にせず相変わらず話を聞かずに、ポーツとしていた。

ガングートが何やら前にある教壇に立つて演説しているが、窓際で外を見ているメイド服の彼女には関係ない。

というか、興味が無い。そこに寄ってくる、友人の姿が。

『お疲れ様、七海。ガングートさん話長いねえ』

『……アリス。いいんですか、他のお友だちとお話ししなくて』

私服の半袖とジーンズのジャーヴィス……ではなく、今はアリスか。

彼女もコソコソ小声で話しかけてきた。

他にも友人がいる社交性の高い彼女は恐ろしい存在と言われる七海を友達と普通に言える数少ない同じ立場。

ゴトランドは頼もしいが胃痛を覚えると言つて、コロラドは恩人みたいなもんだと言っている。

仲間であつて、友達じゃない。友達は、アリスだけ。

皮肉でも何でもなく問う七海に、笑つてアリスは言つた。

『話し終えたよ。まあ、向こうはあたしの本名知らないけど。知ってるのは七海だけ』

『光栄ですね、それはどうも』

素っ気ないように見えるが、七海にしては柔らかいほうで、多少なりとも自分で話をするぐらいは警戒しない。

アリスはこれも終わったし、イギリスに帰ると言っていた。

『暫くは逢えないね。非常時になれば、また顔を合わせると思うけど』

『……そうですね。今度はゆつくりしましょう。結局、任務ばかりで満足に遊びに行けなかったし』

共に出掛けることもなかった、友達同士。

次はプライベートで遊ぼうと、七海は自分から言い出していった。

笑顔で了承するアリス。約束と二人でしつかり決めた。

『次はオタクの底力を見せてあげるから。いつか、イギリスに遊びに来てね。あたし歓迎するよ。どうせ独り暮らしだもん』

家とは完全に隔絶されているアリスは自立しているし、自分も日本に遊びに来ると言っていた。

七海も歓迎して、今度は実家で遊ぼうと誘った。

艦娘ですら知らない人間の七海に、アリスは触れることが出来る唯一の存在として。『互いに艦娘として、忙しいから逢えるのはいつになるかなあ……』

『早くて来年とか？ 深海棲艦の動きによりますが……あたしたちが出るのは極端ですから早々ないかもしれません』

忙しい大役を背負ったのだ、気軽にはきつと会えない。

こんな腐った世界でも、自分にはまだ得があるから守るだけ。
そういう性格の二名は、永遠の別れではないと言いながら笑いあう。
隅っこで話している二人と共に、最後の式が始まろうとしていた……。

七海は無事に、桜庭と同じ立場に就任した。

鎮守府に戻り、仲間と友と別れて、階級はそのまま日々を過ごして。

時々日本中で発見されるようになった敵意のない深海棲艦の亡命先として受け入れて。
て。

徐々に規模が膨れ上がりながらも平穩に暮らしていた。

そして、時は流れて二年が経過した。

高校を無事に卒業して、相変わらず騒がしい毎日の七海は、18になった。

見た目は変わらず、中身は悪化して、大きな戦いは基本的に桜庭や他の同期がやって

しまう。

いわく、特務優先にしろと。唯一の役目を果たせと言うので、最近では海外の深海棲艦まで受け入れていた。

「提督、食事が出来たわ。準備なさい」

最近来たのはフランスの深海棲艦で、フランスパンとか最初に七海が言っただけで怒らせたのは良い思い出。

豪勢な朝飯だが、フルコースみたいな量は無理だと言うのに。

「バカね。食べられないなら皆で食べればいいのよ。ほら、待ってるんだから早くなさい」

と、急かして何故か好感度が高い美人な戦艦さんは、寝起きの七海をあれこれ手伝って支度する。

因みに室内には増えまくった身内が嫉妬と焼き餅の視線で唸っているが、今日は彼女が順番なので我慢。

七海を怒らせると順番を飛ばされるので、七海の言うことは絶対なのである。

現在、世界中から集まった深海棲艦は最早50名を超えていた。

鎮守府も設備が足りないのです、改装して既に中規模に拡大されている。

艦娘も増えて、所属する艦の合計は90ほどになっていた。

初期からは考えられない人数である。

で、世界的にも稀な深海棲艦が普通にいる鎮守府として有名な場所でもある。

現在の最終兵器は全世界で凶暴化の一途を辿っており、それは人間が懲りずに彼女たちを束縛するせい。

言うことを聞かせようとして、無理強いをするのでそう言うときは、先駆者の七海に倣って物理で反撃して黙らせるか、本人にSOSを出す。

七海は受けとるや、自分のところの身内をけしかけて、彼女たちを苦しめる悪の人間を成敗しているという、最早戦争相手は人間の方が多いという本末転倒な事態になっていた。

最終兵器も人間だと思う。今ではすっかりトゲが消えた七海は随分と優しくなつたと言われる。

ごく一部の、最近艦装にレールガン搭載していたりレーザー載っけていたりする、近代化改修を行って大々怪獣にパワーアップしている彼女を除いて。

そんな彼女にも、未だに勝てない相手もいる。

通称世界最強の軽巡、五十鈴。まさに天敵であり、やり過ぎにお仕置きを出来る艦娘。

あとは、既に位は少将に昇った豪傑、島村。別名、筋肉要塞。

七海が何度挑んでも素手で勝てないこいつも意味不明な強さになっており、先日など

公開試合で七海を血祭りにあげて、一方的に伸してしまった。

見ていた連中は奴も実は深海棲艦ではないかと噂しているが割愛。

七海の苛烈な攻めをものともしない強固な意思はまさに要塞。

何より、文字通り何でもする狂犬にルールを順守させることが出来る貴重な軍人。

そういう意味でも別格の器と称されていた。

「りしゆりゆー……。まだ眠たいんですけどお……」

「はいはい。分かっているわよ、寝坊助さん。可愛い顔をして、お客さんがくるって言ったでしょう。忘れちゃったの？」

眠そうに目を擦る彼女を甘やかすフランス戦艦さん。

とくに嫁が嫉妬しているが戦艦さんはその嫁まで一緒になって世話を焼いていた。

お客さんの話を聞いて、七海はいきなり覚醒した。

「……って、そうでした!! 近々あたしも向こうで決戦あるからって……!! 如月、行き
ますよ! 小春、不貞腐れてないで例の準備を! 春雨、お茶用意なさい! 村雨、掃
除! 山風は弥生と一緒に食堂で間宮さんのお手伝い!」

二年経過して漸く決戦の話が舞い込んできた。

海外の方で反撃する作戦に過剰にぶちこんで殲滅するという要請があつて、七海もお
呼ばれているのだ。

そこには、久し振りの仲間と友人も一緒と聞いている。

去年一度、久々に一週間も滞在して派手に遊んで以来の再会。

それが、今日鎮守府に来るのに。

慌てて支度をする皆。七海の指示での的確に始動する。

わざわざ作戦たてるためにこつちに来てくれたのだ。

寝惚けてて忘れていた。

リシユリユーという名前の戦艦に言われ、皆は一斉に行動開始。

バタバタしながら、お迎えの準備をする。

道中、五十鈴に寝坊して叱られたが、何とか手早く終えた。

まあ、そんなんはもうよく知っている間柄だが……。

で、三人はもう来ていた。予定よりも早い。

「……もう、この光景も慣れちゃったね……」

「良いじゃない。七海の人徳の結果だもの」

「そうそう！細かいことは気にしない。愛し合っているなら問題ないじゃん」

玄関にキヤリーケースをもって待っていた皆に、七海は走って迎えにいった。

「ぜーぜー言いながら、久々に見た皆は変わってない。」

「お、お待たせしました……。皆さん、お久し振りです……」

待つていた皆も久し振りと、挨拶しながら笑つていた。

ゴトランド改め、本名マリー。

コロラド改め、本名メリッサ。

そして、いつも通りのアリス。因みに日本語マスターしていた。

皆は元気そうであつた。

「一年ぶりね、七海」

「久し振り！ 元気にしてた？」

「寝坊してたんじゃない？ でも、皆相変わらずイチャイチャしてていいねここ」

メリッサも、マリーも、アリスも。

今では本名で呼ぶほど仲良くなつていた。

普段は軍の連絡しかしないが、実際会うと嬉しいもの。

懐かしい顔ぶれに笑つて七海も喋つていた。

「作戦の話は……まあ、あとでいいから。先ずは何する？」

マリーが荷物を皆に運んでもらいながら、久々だし遊ぶかとか言い出している。

少しは時間あるし、と乗り気のメリッサとアリスも、談笑しながら向かつていく。

人間としての仲間を持ち、自然と笑えるようになった、彼女と共に。

人として繋がりを得た、彼女はもう壊れない。

大丈夫、七海には仲間も友達もいる。

共に苦楽を分かち合える、大事な存在が。

これからも、それを守って生きていくだろう。

この救いようのない、嫌な世界でも……ずっと。

人類ルート 人間のお友達 お仕舞い。

グランドルーツ ハーレムハッピーエンド
グランドルーツ ハッピーエンドハーレム

時は遡る。それはまだ、彼女が出先にいる頃。

海上を爆走する変態は、迫り来る艦載機の攻撃を気にもせず突き進む。

零戦の機銃が火を噴くが全く効果がない。

(ひゃっはー！ 幼女おおおおお!!)

(ひいひい!! 来るな、来るな!! 死ねこの変態!!)

銃撃が雨霰と襲いかかるが悉くを無視する。

相手は身の危険を感じて必死に抗う。

深海棲艦初の幼女。絶対連れて帰る。欲しい。

思考が完全に性犯罪のそれ。最低極まる。

(ちよお!? お姉ちゃんなんか怖い来る!)

(……来るなど……言っているのに……)

ムラマサが拾う声に、なんか別の声が入り込む。

抵抗する幼女操る艦載機。然し悲しいかな、変態には届かない。

分身の術で呆気なく回避されて、慌て出す幼女がどうやらお姉さんらしい深海棲艦に助けを求めたようだ。

(ふむ？ あなたもどうやら此方の声が聞こえるようですが。率直に申します。妹寄越しなさい)

(お断りします……)

言葉で解決しようと提案するのに一蹴された。

戸惑う声は、逆に言葉が通じるからと問う。

なぜ、襲ってくると。

(そんなもんあなたの妹が幼女だからですが。先に手を出したのは妹さんですよ？ 故に頂きます……じゆる)

(うわああああああ!! じゆるとかいった！ じゆるとかこいつ本物だああああー!!)

絶叫する幼女の声。涎が出てしまう。いけない、本音が。

ああ、然しなんと可愛い。欲しい。お持ち帰り。

益々戸惑う姉らしき人物。妹が仕掛けたのは謝るが誘拐はあんまりじゃないかと。説得する、というか泣き落として止めてと懇願。

(お断りします断固。大体、お持ち帰りは幼女だけじゃありません。漏れ無くあなたもですよお姉さん)

(お姉ちゃんに何する気だこのロリコンツ!! 死ねエ!!)

一層激しくなるも足は止まらない。更に加速、妹絶叫。

阿鼻叫喚となった深海棲艦らしき声の主。姉も自分は人身御供で良いから妹は見逃せとか言い出す始末。

健気すぎる。余計に戦いから遠ざけねばと謎の使命感を感じる七海。

(大丈夫です。妹さんはうちできっちり面倒見ます。烈風欲しいならたくさんあげます。平和も約束します。平穏も誓います。ですので両方来なさい。っていうか、来い)(うぎやああああああ!! 命令形できたあああ! 本性現したロリコンは、マジで死んじゃえエ!!)

妹さん、落ち着いて。こいつは平常時がこれだから。

取り敢えず変態は向かう。目指せ深海棲艦の姉妹! 見目麗しき幼女の元へ!

(カエレッツ!!)

恐らくは電探に反応があつたあの島が魅惑のロリがいる島に違いない。

無人島だろうに、夥しい数の艦載機が懸命の猛攻を加えるも変態の覇道は止まらな
い。

高笑いしロリコン棲姫はどうとう見える範囲にまで迫っていた。

(止めて下さい……わたしの妹を、奪わないで……)

(奪わないですよ。一緒にお持ち帰りです)

(……………)

(お姉ちゃん迷わないで!? 一緒ならいいやって顔しないで! みんなはどうするの
!?)

なんか迷っているらしい。というか、今なんていった?

(皆……? ほう、妹……まだ愛らしいお姫様が居るんですか、居るんですね?)

(ぴぎやああああああ!!)

ネットトリボイスで問いかけると再度、絶叫の妹。

可哀想に、人生初のロリコンが迫っていてしかも突破されそうになってパニックになつていた。

聞こえるぞ、愛らしい怯える声が！ 七海は観念しろと降伏勧告を出す。

(うるさいロリコン！ お前なんか皆で潰してやる!!)

キレたのか妹、誰かを呼ぶ声で救援要請。

すると。

(……なにこいつ？ 変態……?)

(何なの、あなたは？ 人間……じゃないようだけど)

(何じゃ、騒がしいのう……)

(我は、眠い……)

(待って、話せばわかると思うの。話を聞いてくれない?)

次々と違う女性や少女の声が割り込んでくる。

感動したように七海はニヤリと変態の笑みを浮かべる。

ならば聞かせてやりましょう、と自分の素性を明かした。

自分は戦う意思のない存在を保護している。

もしも戦う意思がないなら保護して亡命の手配するかどうか？

そう聞くと、一名が息を呑んだのが聞こえる。

(まさか……あなた様は、噂で聞いた『狂犬』の異名って言う渋谷提督では……?)

(ええ。あたしは渋谷と言います。あたしを知るなら艦娘ですね。深海棲艦になつてい
るなら、そのまま大人しくしてください。迂闊に外に出ると殺されます)

此処にもいたか、元艦娘。深海棲艦になつてしまった最悪のパターンで。

その彼女は皆に言う。彼女は本当に此方を保護しようとしているのだと。

人間相手にしよつちゆう噛みついては揉め事を起こして嫌われている、狂人。

深海棲艦、艦娘に人間も兼ねる世界で唯一の化け物。それが彼女。

但し、彼女が戦う理由は保護した深海棲艦や艦娘を人間が排除しようとするから。

阻止するために率先して人間を襲う異端者が、今から来るロリコン。

彼女は指摘した。特に狙われている幼女に。

(ほっぽちゃん……悪いこと言わないから、投降しませんか? 大丈夫だと思えます。

あの人、話じゃ半殺しにするぐらい狂暴で手に負えない提督と伺っておりますし。深海
棲艦が実際に居るそうです。あの人の鎮守府)

(ろ、ロリコンを信じるの!?! 嫌だよ私は!! 絶対いやらしいことしてくる!)

(否定しません)

(そこは否定して!!)

成る程、この妹北方棲姫か。確か今から排除していく予定の。

じゃあ尚更不味いじゃないか。彼女のことを周囲に教えるのは、艦娘瑞穂。今はどうも違うようだが。

(北方棲姫……でしたか。ではほっぽちゃん、言うことを聞かないとペロペロしますよ)
(喧しいわこの変態!! 何が目的だ!)

(あなたですよ)

(言うと思ったよ!!)

漫才か。

そうこうしている間に接近。焦る北方棲姫。

カエレと何度も叫ぶが、元艦娘の説得力は半端ではないようだ。

ここも、どうやら迫害されたり戦う気がないのに襲われて虐殺未遂を受けてる深海棲艦の集まり。

その理不尽の酷さは身をもって体験している。

(……瑞穂さん。この人どう聞いても誘拐目的だけど……信用できる?)

(大丈夫だと思えます。実際……極秘なのですが、彼女は人間に殺されそうになったことがあると、生前耳にしました。私は元艦娘ですので、向こう側の事情もある程度は把握しています。ですので断言しますが……海軍は、一度でも深海棲艦に堕ちた艦娘や穩

健派の深海棲艦も、皆殺しの風潮が強いです。いえ、それしかないのです。残念ですが、港湾さん。そして皆さん。これが最大の幸運で、最後の好機だと私は思います。見たでしょう？ 私が艦娘に沈められそうになったところも。このお方以外では不可能だと思ってもらって構いません)

姉は港湾棲姫だった。

彼女に問われ、肯定する。

案の定瑞穂はやはり襲われていたか。

箆口令が敷かれているあの事件も知っているあたり、最近までは生きていたと予想。それに仕方無い、変異している可能性が高いのなら見分けもつくまい。

七海も口を挟む。言う通りで、救いはないから亡命したいなら早く決めろと急かす。今からそつちに知り合いの艦隊が北方棲姫を殺しに向かっている。

ここらでその幼女が暴れすぎたと教えると。

(私悪くないもん！ そもそも近づいてきたから襲われないために襲っただけじゃん！)

経験上自衛の為に先んじて襲って倒すか。

戦いたくなくとも襲わねば襲ってくる。確かに正しいが。

(自衛が先に手エ出してどうするんですか。それ逆に自滅ですよほっぽちゃん)

(そんな……)

愕然とする北方棲姫。

見つかる前から倒せればいいが結局逃げられて増援が来ていては無意味だ。殺るなら確実に殺せとアドバイスしておく。

(お仕置きにペロペロの刑です)

(やっぱりカエレ!!)

気を抜くとセクハラされてキレル北方棲姫。

皆、どうやら変態のようだが好意的な存在ではあると気付いたようだ。

突撃して、沿岸に到着。とつとと突撃して上陸。

一人が、上がったと報告すると最大級の悲鳴をあげた。

(……いいよ。こっちは個人的に降参する。一応ね)

(宜しい。で、どこに居るんですかあなた?)

浜辺にはいない。どこで見ていたのか。

見回していると、ざぶつと遠方で音。振り返ると、海面に顔を出した幼女がいた。

(見える? 此処だよ)

(……ああ、あなた潜水艦ですか。潜水新棲姫)

(海軍はそう呼ぶけど、こっちは個人的な名前はないけどね。好きに呼んでよ)

潜水新棲姫。白いワンピースの長い白髪少女が軽く腕を振っていた。

笑顔で返事をしておく。無表情だったが、また潜水していった。

見張りをしておくとのこと。なので任せておこう。

で、七海は変異を解いて歩き出す。浜辺の奥は林になっていた。

(ロリコンが……ロリコンが私を狙いに……！)

(生きるか死ぬかの瀬戸際じゃ。諦めよチビ。ワシは受け入れるぞ)

(同じロリの癖に！ お前も餌食になればいいんだ!!)

(構わんぞ。死ぬよりはマシじゃろうて)

のじゃロリもいると見た。今回は豪勢な拾い物をした。

聞こえてくる喧嘩の声を聞きながら、七海は歩を進める。

目指せお姫様。かわいい子は歓迎。存分に愛でよう。

思考が完全にロリコンとなった変態が、彼女たちと出会ったとき。

誰もが予想しない、というか出来るわけがない未来が幕開けする。

刮目せよ。これが真のエンディング。グランドルート、全員が幸福になれるハッピー

エンドの開幕を。

艦娘も深海棲艦も、人間は別としても。人間はほら、利益さえあれば敵対しないので。

酒池肉林をするべく、己のハーレムの居場所を作るグランドルート。

名付けて姫園の女王。

変態が自分の欲望と愛情を構わず存分に他の女性にぶつける割と遠慮のないルートになるんでご注意ください。

因みにとっては何だが。この邂逅が世界の軍事バランスをまたもぶつ壊すとは七海は思っていない。

今回は相当な数が後にほっぽちゃんとかあだ名を貰って毎日ぬいぐるみ扱いされぐつたりする幼女の元を集っていた。

そのなかに、無視できないお姫様も交じっていたりする。

(中間棲姫って……嘘でしょ……!?! 中枢棲姫と同類と仲良くしてるってこと……!?!)

後日。報告を受けた上司の桜庭は唾然とした。

大本營で報告を受けた彼女が見たのは、笑えない深海棲艦の連中がうじゃうじゃ姫園鎮守府に逗留している事実。

そのなかには桜庭と同等の存在、中枢棲姫と同類の危険な深海棲艦、中間棲姫。

更に過去には大規模決戦となったフランスの深海棲艦や、イギリスの轟沈駆逐艦と思われる深海棲艦。

海外の深海棲艦が大勢いた。慌ててすつ飛んで帰ってきたのはこれが理由だった。

任務を切り上げ、桜庭は各国に一報を入れた。

(予想よりも過剰に集まってる……。これ、ロシアもアメリカも黙ってない。不味いことになったわ……)

頭を抱える桜庭。要するに、だ。

七海は、頑張りすぎたのであった。

世界の対応

「大和。貴様は、世界の軍事バランスをなんだと思っているのだ？」

それは、世界中から集まってきた世界最強の面々が、一同に顔を合わせたときに真っ先に出た発言だった。

連絡を受けて速攻で来日した一同は一斉に大和を、桜庭を責めた。

大本営の大会議室。

広い室内には大勢の女性や少女がいた。

各々好き勝手に過ごしながら、端末に繋いだイヤホンを耳に突っ込みながら聞いているた。

各自手にしたのは翻訳機であり、母国語に変換されて聞いている。

喋れる奴は必要ないが、今回は各国の若輩者も来ているためにこの様な措置をしたと

いう。

そこに会する最強の異名と国のプライドを背負った面々は、項垂れる彼女に厳しい目を向ける。

「聞いてないわよ、本当に。日本が深海棲艦ここまで集めているとか。いつの間にな酒落にならない戦力にしたの？ 大体、黙っているにしたって、戦力に換算して精々私らの半分くらいじゃないの？」

アメリカ代表の艦娘がロシアに続いて発言する。

犬猿の仲だろうとも、此度の一件は賛同されても仕方あるまい。

そこまでの事を日本海軍はやらかしていた。諸外国に糾弾されてもおかしくはない。僅かな期間にこれほどの過剰な戦力としてカウント出来る深海棲艦が居れば良くない反応も納得する。

「貴様、抜け道を発見したつもりか？ うまく考えたというか、普通に考えれば先ず出来ん芸当だろうよ。確かに貴様の教え子しか実行はできないな。それは我が国も認める。偉業だとも。素晴らしい行いだ、それ自体は私は称賛したい」

だが、ロシアはあくまでこう言った。

教え子が行った業績は正しく前人未到の偉業であり、責められる謂れはない。

寧ろ歓迎すべきだと。

「はあ？ 何抜かしてるのよあんたは？」

「貴様は黙っている、アメリカのバカ娘。私はこう言いたいのだ。……出し抜けは良くないな。極東が深海棲艦の激戦区としても、だ。それを差し引いても、技術の進歩を自分達が独占するのは良くないだろう。なあ、大和？」

アメリカ代表がその行為を責めているのに対してロシアは黙っていたのがよくないと。

自分等だけ甘い汁を啜るのはズルいんじゃないかと。要するに。

「なに？ あの娘が獲得したデータでも欲しいの？ はいはい、良いわよあげるわガングート。ただ、尋常じゃない負担がのし掛かるからね」

「覚えておこう。話が早いのは貴様の美点だ。見返りは何がいい？」

「……そうね。何かあれば、あの娘を助けてほしいのよ」

「なんだ、そんなことか？ 安すぎるぞ、大和。取り引きは公平でないと私は気が済まない」

「……それはどうかしら」

「ほう……？」

桜庭は顔をあげて呆れていた。

毎度ロシアは即物的過ぎる。日本が独占するデータがほしい。

知り合いゆえに遠慮もない。探りあひも要らない。

見返りを渡すから要求したものを寄越せと直球で言つた。

「ちよ!?! 大和、何でガングートには良いのよ!! じゃあ此方にも寄越しなさい!!」

「あんたはダメよアイオワ。結果が見えてる。どうせ取り引きじゃなくてあんたの場合
は脅迫でしょ。分かつてることを言わせないで」

次々に皆が寄越せと言いつ出しているが、桜庭は信頼できるロシア、イギリス、ドイツ、
スウエーデン、その他数名に止めた。

案の定不公平と不満が出る。元々データの権限はその全てを桜庭が持つ。

国に許可は貰っている。政治的にも任せることが可能な友好国に限るだけ。

「アメリカがどうしてダメか、分かる? アイオワ……あんた、場合によつてはあの娘を
力づくで従えるつもりでしょう?」

「!!」

横目で睨んだ桜庭にアメリカ代表のアイオワという艦娘は怯む。

世界の軍事バランスを先導したいアメリカは、教え子の努力を根刮ぎ奪う魂胆だろ
う。

そう、彼女は判断した。利益が絡むと、特にアイオワは貪欲になる。

戦うことと食うことが大好きな破綻している性格の彼女は配慮に欠ける。

そして、教え子との相性も最悪だろう。間違ひなく戦争になる。

「底無しの欲望なんか向けてみなさい。あの娘は絶対にあんたを許さない。同時に、私もね。あの娘に従う艦娘も、深海棲艦も。全員があんたを殺そうとするわよ。ガングートはなんで良いのか？ 決まってるじゃない。ガングートは線引きがしっかりできる。利益と不利益の匙加減がきっちりしているのよ」

「当然だろう。利益のみ欲しているのに、清濁共に呑み込んでなんの意味がある。阿呆が。私は全てを奪うほど貪欲ではない」

彼女を追い詰めて全てを搾り取るアメリカは、教え子を預ける身としても大人としても許せない。

あれは、七海の破滅覚悟の努力と愛が成して達成したこと。軽んじる真似をするアメリカには渡す気はない。

公平にしろとロシアは言ったが、やはり求めるのはあくまで敵の情報と一部の装備のみ。

他は必要ないと断言する。

「……………言うじゃない大和。無理矢理聞き出すわよ?」

「やってみなさい。私の敵になりたいのなら好きにすればいい。その時は……………灰塵にするけど」

「面白い。私も加勢するぞ。ロシアも相手してみるか小娘風情が」

暗に従わないと政治的な反撃をしようとしようと、途端に殺気を纏う桜庭。

豪胆に笑ってガングートも強欲さを控えないとぶち殺すと脅していた。

他所の国も止めろと仲裁した。見れば分かる。桜庭は本気で怒っているのが。

「アイオワ、止めましょう。過去とは違うんです。今、人類同士での戦争に発展すれば負けるのは此方ですよ。勝てるんですか、大和に」

お付きの空母が宥める。個人的に欲しいだけと釈明したがフォローにはならないか。

本当は何がなんでも情報を聞き出せと命令されているが言うことを聞かないのはいつものこと。

寧ろ、アイオワは単にガングートの特別視が気に食わないだけと思われる。

自分勝手な言い分だが、アイオワはそういう人物なので言うだけ無駄だった。

「……ふんつ。良いわ、今回は身を引く。けど、深海棲艦を認める気はないわ。アメリカは」

強がりのように、アイオワは言うしかなかった。

分かっていると。大和が本気になれば、恐らくはアイオワは確実に死ぬ。

それも、経験値の差で。彼女の経験を侮ったら最後、人類最高最大の砲撃を叩き込まれる。

腕組みしてそっぽを向いた。嘲笑うガングートは小馬鹿にする。

「だから貴様は何も得られないのだ。深海棲艦は殺す。そういう固定された考えしか浮かばない浅はかな小娘に何が出来る」

「何を……!」

挑発するか。勝者の余裕が苛立った。

振り返りキレそうになるが、今度はイギリスが割って入る。

ドイツも、アメリカや他国の言い出す条件はそもそも不公平と指摘して口論に発展していく。

結局全員が欲しいのは七海が持っている深海棲艦の情報だった。

先輩方が揉めていると、不意に。

流暢なイギリス英語で、ある一人の若者が桜庭に聞いた。

『大和さん、その夕立って言う子の鎮守府に行きたいんですけど、良いですか?』

それは、あまりにも身の程知らずの言葉。

秘密にしていると言う他国の軍に介入すると言う前代未聞の質問だった。

流石に自国の上司が何を言うかと叱るが、その若者は言った。

『あたし、そういう情報とか軍事バランス? とかいうのはどうでもいいんです。ただ、見てみたいんですよ。純粋に。深海棲艦を愛しているっていう、その人を。興味がある』

んです』

そう言う、イギリス駆逐艦、ジャーヴィス。

海兵隊の帽子に慣れない長袖の軍服を着用するまだ高校生の新人。

艦娘になって、数年の七海よりは経験があるがまだまだ駆け出しのひよっこ。

「ジャーヴィスとか言ったな小娘。貴様、何に興味があるんだ？ 試しに言ってみろ」

ガングートが意外そうに見ている桜庭に代わり問う。

面白い事を言い出す若者は、言い切った。

深海棲艦という未知の存在を愛していると言うその感情。

そして、その環境が個人的な理由だと正直に。

「ほお……良い見識じゃないか。常識を打ち破るか」

深海棲艦は絶対に殺す。そういう世界共通の認識に喧嘩を売るようなスタイルの

ジャーヴィス。

笑顔で行きたいと申し出るその気概に、ガングートは気に入った。

桜庭も、彼女の詳細は知っている。七海によく似た性格の、然し取り繕うことが遥かに上手い新人の駆逐艦。

周囲が愕然としているのにけろっとしているあの光景はそっくりだった。

「んー……ジャーヴィスだっけ？ 分かったわ。あの娘を刺激しないと約束できるなら

手配しても。ただ、死に場所になるかもしれないよ。あの娘、人殺しに躊躇いがないから。評判は聞いての通り、狂犬そのものだから」

警告はしておく。七海は刺激されると血の気が多いので直ぐ様襲いかかる。

最悪、殺しに来てても文句は言うな。あと、七海を殺すなど。

詰まりは、襲われたら素直に死ねと言う過酷な条件付きだった。

「大和……それは、いくらなんでも……」

「正気じゃないわ!! 殺しを容認するの!?!」

イギリスの艦娘とアイオワですら、気を疑う。

有り得ない。彼女がそこまで厳しく一方的な条件を出すなど。

それほどまでに、その教え子は価値があるのか。

「落ち着け。当たり前の事を聞くな」

ガングートがそれを宥めた。理由も添えて。

現状唯一の先駆者である彼女の芸当は誰にも真似できない。

その重要な存在に、秘密込みで接触させるのだ。寧ろ寛大な処置に感謝すべきだと。

大和なりに譲歩していると言った上で、続ける。

「良からう。大和、私も向かうぞ。その娘に危害を加えないか見張っておいてやる。

ジャーヴィスとやら、保険も含めて容認されたことを感謝しろ。貴様はもしかしたら、

誰も経験のない世界に飛び込むかもしれん。……楽しみだな」

ガングートも共に向かうと言い出す。七海を他の連中から守る護衛として。

取り引きに応じると、そういう意味だった。

『ありがとうございます！ 全然構いません！ ぶつ殺されても何にも問題ないです！ 見たことも聞いたことも誰にも言いませんから！』

大喜びのジャーヴィス。ああ見ると打算無しにただ、見たかったのだと思う。

実際裏などないし、その愛がどういふものか、自分が夢見る世界なのかを見たかっただけ。

自分勝手な理由は七海に似ている。

すると、同じ艦隊に所属している一名も心配なのでお供すると言い出してしまふ。

スウェーデンの軽巡。此方もまだ新人だったがメンタルはとても頑丈で打たれ強く器量の広い若者。

物分かりもよく、冷静で仲間思いとおおよそ精神は完璧だった。

「……だったら、こつちも合法でいけばいいんでしょう!? コロラド、任せるからあんた行きなさい!!」

「うええ!! 私か!?!」

「……アトランタ、一緒をお願いできる?」

「な、何であたしまで……」

で、悔しいのかアイオワも無茶を言い出して自国の後輩を無理矢理行かせた。

驚く小柄な女の子……いや、女性。憧れの先輩に言われて入って早々パワハラ受け命懸けの任務を遂行する。

お付きも心配なので、一人こっそり追加しておいた。

新人たちに行けと言うが、大和が再三脅しておく。

来れるものなら来てみる。キレたら殺しに来るぞ GANGUOT と。

そう言われると尻込みする皆。

結局死にたがりの奇特な連中が様子を見学していく次第になった。

但し本人にはこう言った。基本的に合法のスパイなので怪しい動きしたら追い出せ。

今回に限り、GANGUOT 以外はなにしても許す。殺さないようにだけしろ。

任務として拒否権もあるのだが厳命されて、自分のハーレムを邪魔されて最高に不機嫌な七海は出迎え早々。

「魂胆見え見えの連中を入れるわけ無いでしょうが。帰れッ!!」

自分からなんと来客に襲いかかってしまっていた。

事前に彼女が拒否したら戻れと言われていたので反撃できず、GANGUOT が宥めるまで一方的に追い回した結果、大半は剣幕にビビって直ぐに逃げ出した。

大爆笑のガングートは気に入ったと同志のように歓迎してくれていたが、本人は不満そうなのは言うまでもなかった。

対話の意味

時は遡る。

七海は先ず、全員を出先から安全に鎮守府に連れていこうとした。然し今回は大きな問題があった。

人数が多すぎる。ざっと20名はいた。

一部は案の定陸上型。武器がなく戦えない深海棲艦も結構いる。

しかも、大半無視できない矢鱈強いのが複数。

なんで隠れていたかと言えば、瑞穂が遠方で轟沈、変異した際に一緒に数名も死亡。同時に同じく変異してしまい、混乱しながら北方に逃げてきた。

道中、似たような状況の言葉が通じるので和解した深海棲艦や艦娘と合流して避難していた。

しかもよく見れば普通の艦娘までいる始末。彼女等も轟沈したが運悪く生き残った

が、戻れない。

一緒にいるのが見た目深海棲艦のせいで裏切り者扱いで諸とも襲われたとか。そのせいでここまで人数が膨れ上がった。

(……連れ戻す。絶対に、死なせない)

七海は覚悟を決めた。出先の艦隊には特務の邪魔だから近寄るなど命令。

彼女たちも邪魔立てすると七海はキレると知っているので引き返して。

彼女たちに、約束を絶対に守るからこれから何が起きても決して暴れないでお願いします。

「正直に言います。これは、あたしにとつても綱渡りです。あの人は十分信用してませんが、皆様が我が国の敵と判断されれば、あの人は命を賭けて皆様を殺しに来ます。無論、あたしも無事じゃ済まないと思います。ですから、決して暴れないで。あたしが守れるように行動してくださいさると助かります。最悪、あたしも国家反逆罪で処刑も有り得ますので」

本当に切り札を使うときが来たのだ。

いや、彼を七海から頼るのは初めてか。それでもいい。

彼なら、彼ならば。救ってくれる。助けてくれると信じよう。

その気高き国防の魂と、防人の使命を胸に抱くあの人を。

彼女は無線をいれた。時間がかかると言いながら、ある人に助けを求める。

桜庭には後で土下座して謝罪する。謝らないといけないこともするから。

七海は、深呼吸して……その男性に、一報を入れる。

「……了解した。私が直ぐに向かう。座標をそのままに、絶対に島から出てはいけない。私が、貴女を必ず迎えに往くまで」

その男は、連絡を受けるや直ぐ様立ち上がった。

椅子を弾き飛ばし、傍らで書類を整理していた大戦艦、武蔵に向かって低い声色で告げた。

「武蔵。これより数時間、貴様に代理を託す。急務で悪いが、私にはやらなければならぬ事が出来た」

真剣な表情で、緊急任務を発令。北方に自ら船を出すと言い出した。

護衛に待機任務をしている艦娘を呼びつけた。

「……どうした？ 今の入電は外部か。何事だ相棒よ？」

武蔵がその様子にただならぬ気配を感じ、眼鏡を光らせ問う。

代理は当然行うとしても、この男……島村の気合いの入り具合は大事の証拠。内容を不躰と断りつつ訊ねた。すると。

「……恩返しの時と言うことだ。渋谷提督が、特務の最中らしいのだがな。どうやら、立ち往生しているらしい。私に助けを求めてきた」

振り返る彼の顔は、とても誇りに満ちていた。

それは歴史に残るような偉業に微力でも力添え出来る、誉れ。

彼女の特務、即ち深海棲艦の保護。彼女にしかできない最重要な任務。

それに、ただの人間でありながら……助力を求められた。助けてくれと言って貰えた。

それは、島村という男を特務に参加させてもよいという彼女の信頼の証だと、彼は誇らしげに教えた。

「私を、信頼して貰えている。分かるか武蔵。これが、何れ程の意味を持つか」

普通ならば裏切り者と謗られ、貶められ、蔑まれ、迫害される内容だ。

然しそれを役目と、大任として預かる彼女が本来部外者の彼に力を貸してくれと。

助けてほしいという、初めての言葉を使った。

裏を返せば、七海は彼を絶対に信じているから。

この大任に関与しても、攻撃しないと。自分を信用してくれるという前提で連絡を跨越した。

言葉はなくとも、そこには絶対的な強者にして密かな目標ですらある人物の命懸けの信頼があるのだ。

島村は喜んだ。自分が、とうとう彼女に助力できるときが来たと。

言葉を頂き、天恵を与えてくれた恩師とも言える少女が、窮地に陥っている。

それを救える、脱することが出来るのは島村だけだと、彼女が言った。

「渋谷提督が私しか、託せる相手がいらないと言った。そうだろう、通常ならばこれは立派な反逆だからな。だが！ 私は……往くぞ。恩師を見殺しになどしない。いや、この任務は我が国にとっても重要な意味があると思っている！」

多くの深海棲艦がいると聞いた。そのなかには、かの中枢棲姫と同等の深海棲艦、中間棲姫も居るらしい。

どうやら寝ぼけているようだが、敵意はないと七海は言っていた。

話を聞いてくれる。対話しても、彼女は拒絶しない。

また、この国は深海棲艦について知ることが出来る好機なのだ。逃す事は出来ないだろう。

拳を握り、彼は相棒に胸を張って誇る。これは、誉れある任務なのだ。

自分しか彼女たちの帰還を保証できないと言われれば、それは大きな役目である。

七海の未来は今、この男の肩にかかっていた。

「中間棲姫……!?! 凄まじい相手と和解したと言うのかあの方は?! 成る程、よくわかった。行ってこい相棒! 貴様が往かずに誰が往くのだ! これこそ、貴様にしか出来ぬ大役! 誉れある行動を、我ら艦娘に誇れる男になってこい!!」

「応!」

背中を叩いて、武蔵は豪胆に笑って送り出した。

提督の帽子を被り、軍服のネクタイをキツくして彼は出ていった。

堂々としている背中を見せて。力強い、漢の広い背中だった。

(良かったな相棒よ。貴様は恐らく、この国で深海棲艦と対話できる数少ない人間になれるだろう。対話こそが強者の秘訣と教わったのだ。ならば、その教え通りに言葉で繋がって見せろ。我等艦娘では砲火でしか交われない我等の敵と、貴様は違う方法で対話してみるがいい。その背中を、我々に見せてくれ)

艦娘にはできない方法。普通の提督には忌避される方法。

けれど、それがもしも正解の一つならば? 行う価値は十分ある。

少なくとも、彼女はそれを行える絶対的な強者。その彼女が救援を呼ぶならば。

嘗て命懸けで共に海に出た者として。同じ誇りを抱く提督として。

義理と恩返しを果たそう。それが、あの男の流儀。受けたことは必ず返す。

武蔵もまた、胸を張れる背中に笑っていた。見送った先で、非常時の為の停留してある船を出港させる島村。

この船で、彼女たちを迎えにいく重要な役目を請け負った。死なない、必ず生きて戻ると誓った。

「貴様ら……往くぞッ!! 抜錨するッ!!」

気合いをいれて、彼もまた海に出た。

目指すは、恩師のいる北方の孤島。

救援任務を、遂行するために。

数時間後。その豪傑は、約束を果たしに来た。

検査を受ける前の深海棲艦を、信用しているのか。

そう心配していたり怯えていたりしたが意外なことに。

「待たせてしまったな。渋谷さん、ご無沙汰している」

「島村さん！　ありがとうございます!!」

船の無線から届いた声は穏やかな男性の声だった。

七海はずっと大丈夫、信用できる人だと言いついて聞かせていたが彼は告げた。

必要な手配もしておいた。戻ってすぐに大本営で検査をしたいので全員乗船せよと。

七海が何度も危険なことに巻き込んで申し訳無いと謝罪するが、彼は誉れある任務に出れて光栄だと言っていた。

七海が一人ずつ、船と島の間を往復して、全員を乗船。

最後に自分は護衛に回ると言つてそばについた。

暗くなってきた夜の海で、然しこの大きな貨物船に似た船の中は明るく、穏やかな空気があった。

木製の箱に入った荷物が載っていたが広いスペースに放り込まれた皆は、見張りもなく各々呆然として座っていた。

前方には操舵をしている彼の後ろ姿が窓越しに見えた。

「み、見張りもないんだけど……なんで？」

誰かが言った。これ、ちゃんと陸地に向かっているのかと。

本当に信用していいのかと。

彼女は深海樓艦に変異できるのは見たから分かった。一応は同類。信用はしている。然しあの男は単なる人間に過ぎない。信じていいのか。

今頃不安になる皆に、内部スピーカーで彼は聞いていたのか話しかける。

「安心するがいい。貴様らの安全は私と彼女が保証する。そこには食料も用意してある。勝手に食べてもらつて構わん。毒など入つておらん。警戒するのも無理はない。条件があるのなら、貴様らに少し話を聞かせてもらいたい」

強いて言うなら、対話を望む。彼は、そう切り出した。

話し合い。平和的な解決。その席を先ずは用意したいと言いつ出していった。

疲れているだろうから、そこまでややこしい事は聞かないが是非話が聞きたいらしい。

七海と同じ、言葉で疎通をしようとする。そのやり方に皆は大変驚いた。

見張りがいないのも、信用してもらつたためらしく。

「どこの世界に銃口を突きつけて話し合いを提案する阿呆がいる？ 信用されるならリ

スクがあつても、誠意が見えなければ意味がない。私はそう思う。貴様らを信じる渋谷さんを信じている。故に交戦する気のない貴様らに見張りは要らぬ。違うか？」

理屈でそうだろうが、然し実行するには相当の覚悟が無ければ出来ないだろう。

下手するとそのまま騙されて死ぬことになる。なのに、無防備に彼は背中を向けた。これこそが、あの男の誠意だと瑞穂は皆に言う。並大抵の人間には真似できない。

悪名高い島村提督とお見受けすると聞くと、彼もまた驚きながら質問をした。

「貴様らは、何なのだ？ その根源を聞かせてもらえぬか？」

深海棲艦の根源。言い換えるなら、何者なのか。

その問いかけに深海棲艦は分らないと首を振った。

記憶がない。分からない。気がつけば、海上に、陸上にいた。

一人きり。誰もいない孤独の場所で、突っ立っていた。

共通することは深海棲艦は皆始まりはそれで。

一部は逆にハッキリ言い切る。艦娘。沈んでしまった、死んだ艦娘。

正確に所属していた鎮守府を教える。沈んだ日時、当時の艦隊の仲間。詳細に全部を。

「……そうか。どうりで普通の艦娘も居るわけだ。貴様らは死しても尚、死にきれなかったのか……」

同情するのではない。どこか、考えるように彼は呟く。

知らなかった。そして、腑に落ちた。こちらを知るのは仲間だったから。

そこから続く言葉は、ならば現状は理解しているだろう。

その死にきれなかつた命は居場所などない。除籍された艦娘は戻れない。

予想だが、生き残つても復帰は絶望視していい。死んだ艦娘など提督が拒否する。

そして、深海棲艦ともなれば元々艦娘でも殺される。そう、教えた。

「……そうですか」

瑞穂も理解していた。そんなことだろう。

居場所などない。救いがない。深海棲艦には、生きる権利など……。

「諦めるな。良いか、決して死ぬことを受け入れるな。貴様らとて、死にたくはあるまい。助言してやる。渋谷さんに続くのだ。彼女は貴様らの居場所を作る偉大なお方なのだからな」

誇るように、彼は言った。七海に続けば居場所がある。

「何故ですか？」

瑞穂が問う。彼は語った。

代償はあるだろうが、死ぬことは決してない。そこは保証する。

七海は人類から見ると異端者。その居場所を守る為なら敵対も辞さない。

彼女の悪名は反撃による、迫害への抵抗だと説明する。

「滅多に渋谷さんは自分から無意味に襲つたりしない。勘違いするな。反撃しなければ、保てないのだ。常識や固定された意識と戦うと言うのは、そういう意味なのだよ。

今の世界では貴様らは存命すら許されない。故に抗う。たつた一人で、同じ軍人が、艦娘が、深海棲艦が相手でも。分かるか？ 渋谷さんが戦っている敵とは……言うなれば世界、時代、あるいは認識という時間がかかる大敵なのだ。私ですら絶望しそうな果てのない争いを、彼女は悪意に潰されそうになりながら抵抗している。私は、そう感じた。それが、先駆者と言うものなのだろうな」

先駆けとは良くも悪くも目立つもの。

理解されないもの。排除されても仕方ない。大多数がそう言うのだから。

然し島村はそれをよしとしない。大多数が言うからなんだというのか。

真実は、国防とは、そうではない。

「貴様らと僅かだが話して私にすら理解できたぞ。この任務は、間違いではない。貴様らと言う存在が亡命した事は、無駄ではないと証明をしないといけない。私にもその責務が出来た。人間が現金な生き物と私も認めよう。恩恵が無ければ更に追い立てる。だが、そんなことに意味がないと分からないのだ」

この亡命した事は国に必ず役立つと彼はちゃんと理解している。

故に、彼女たちを確実に連れ帰る。彼女らが生きるためには人間もまた、必要だから。「共存などは夢。所詮は絵空事……と笑いたくば笑えばいい。愚かな者は笑うだろうが、私は笑わぬ。知っているからな、それが夢でも綺麗事でもなく、一部であろうが現

実になると。貴様らは生きていい。生きて、生き延びたその意味を考えて実行するのだ」

島村は七海の行為を肯定する。敵ではない者を殺すのは国防ではない。

国防とは侵略する相手と戦うこと。戦いの意識がない者を殺す虐殺は、彼の戦いではないと否定した。

「僅かであつたが、ありがとう。礼を言う。私の戦いの理由を再確認できた良い機会であつた。次は、酒でも共にしながら話そう。楽しみにしているぞ、貴様ら」

どこか満ち足りたように、話ができて光栄だと礼を言う始末。

彼もまた、深海棲艦に対して戦争以外で対処できる希少な存在なのだ。

切り上げたのは、高速ですつ飛ばして帰ってきたので、一番近い軍港に、予め呼んでおいた大本營の連中が全員引き取って検査するため、待機していたからだつた。

無論当事者として彼は後日向かう。七海は今すぐに。

結果として、全員が七海が言う通り面倒を見るとして、小さな居場所に押し込まれて騒がしい毎日を送ることになつたのは言うまでもなかつた……。

窮屈な居場所

こうして、多くの深海棲艦が姫園鎮守府に着任した。

出先から戻ってきた七海よりも一緒に出ていた五十鈴と由良が先に帰ってきた。

あの娘がまた深海棲艦拾ってきたと出先で聞いて愕然とした。

今度は20以上。内心五十鈴は思う。

(定数以上拾ってくるなんての!! 住まいはどーすんのよ!)

明らかに鎮守府の着任限界以上の深海棲艦が集まっている。

多少余裕があると言えど、流石にこんな人数は賄いきれない。

だと言うのに大本営は七海以外では無理なことを言うのだから、預かれと押し付けた。

結果として、大量の女性が一度に増えた。

艦娘たちは、とうとう七海に怒った。

嬉しそうに困惑したり恐縮したりしている深海棲艦や拾った艦娘たちがついてきているのだが。

正門で、五十鈴が出迎え……。

「こんのお馬鹿ッ!!」

怒鳴つて早々、鉄拳制裁。頭に拳骨を叩き落とす。

「フアッ!」

怒られるとは思ってなかった七海、見事に直撃。

頭を押さえて踞る。啞然とする一同の前で、五十鈴は説教を開始した。

由良が怒り心頭で周りが見えない彼女に代わり、苦笑いで待っていてほしいと説明する。

七海が無茶をいって、規模以上の人数を集めてしまつて、現在部屋割りを直している。後は過ごせるように大本営から届く荷物も悪いけど皆で搬入もお願いすると。

当然、深海棲艦も殺潰しにはなれない。

それなりに仕事を与えられ、元艦娘も今も艦娘もここに所属になり、要するにまた戦える。

大本営からは生活費などは工面されつつ、実験や研究の対象にもなる。

ただ、お望み通り襲われない平穏な生活も約束されたのだ。

と、由良は皆に語りつつ、後ろで喧嘩をする七海と五十鈴。

「あたしは悪くありません！ 何故ならあたしは悪くないから！」

「屁理屈を言うなアツ!!」

五十鈴に頭を掴まれアイアンクローされて絶叫する七海。

お仕置きなので気にしないといいと由良がフォローする。躰であつて体罰じゃない。

そもそも部下が上司を体罰とか意味不明すぎる。

一同絶句。あの七海が単なる軽巡に力負けしている。

姉妹のようなものなので気にしないでとこんな風なドンチャン騒ぎの鎮守府で申し訳ないと謝るのも由良だった。

ハゲも大本営に向かい、彼女たちから得た情報を桜庭に伝えた。

すると、彼女は言った。七海の行為を助けてほしい。

いざとなれば今回のように、島村の助力を受けないとこれからはやっていけない。

詳細は言えないが世界にも目をつけられている七海は、要注意の人間。

これまで以上の悪意が全世界から向いている。僅かで良いから、共に居てくれと。

主張の異なる対立の立場の彼にも、彼女の補佐を優先するように特務を与えた。

最後に、桜庭に言われた。

「今回はあの子を信じてくれてありがとう。島村提督、私の教え子を……宜しくお願い

します」

頭まで下げられて、元帥ともあろうお方が何を仰るかと彼も流石に動揺した。

だが、逆を言えば七海の立場はそれほど追い込まれているという意味となる。

承った彼は、厳命であると同時に自らの誇りに誓って、新たな可能性を模索する事も考える。

戦うだけが全てではない。新たな選択肢の先駆者を潰させる訳にはいかない。改めて腹を括った。

……彼も正直に言えば興味もあつた。戦争以外で関わる、深海棲艦と人間、艦娘の在り方に。

どう変わる。どう流れる。気になって仕方無い。その未来が、国の明日を豊かにするかもしれない。

いや、もつと言え……敵を皆殺しにせずとも、深海棲艦と人類が共闘もあながち夢じゃない。

そんな気がした。七海は既に実行している。

彼女は本当に自由なやり方で何者にも出来ないことをやっている。

敵が居ない、平和な海。最終的にはそうなればいい。

全滅するまでしなくとも、結果として、そうなれば同じじゃないか。平和に越したこ

とはない。

故に、彼は彼女の覇道を支持する。目標は同じだと、信じて共に戦えることを嬉しく、誇らしく思う。

実際はそこまで七海は考えていないが、深読みと誤解は悪化していく。

単純に深海棲艦可愛い、欲しい、お持ち帰り。そういう発想。

最低すぎる。高尚な国防の誓いと、低俗な変態の欲望。

何もかも真逆な癖に、妙に歯車が一致する奇妙な関係。

そんな二人の間は至って良好であった。

話は戻るが、正門で例の如く嫁と妹と娘とメイド三人がお出迎え。

新人の深海棲艦。彼女たちも目を丸くする。本当にいた。しかもクラシクなメイド服で。

人一目で同類と互いに認知した。そして牽制の一撃をお嬢様命の変態二号がぶち當てる。

「よく来た、歓迎する。盛大に。最初に言っておくけど、ここはお嬢様の箱庭。お嬢様の意志に背く行為は私が許さない。お嬢様の寵愛を拒否した場合は物理で愛情を身体に叩き込む方向でいく。この隣の淫乱メイドのように無駄な抵抗は一切禁じる」

「誰が淫乱よツ!! 新しい面子の前でまで誤解を招く事を言うなア!! いい加減その言

い掛かりを止めなさい！」

無表情で親指で隣のツータールメイドを指差す小春。

今回は改造和服メイド服は洗濯して補修しているので同じクラシクなメイド服で登場。

で、安定のエロ艦娘村雨はキレてグーで殴る。笑っているピンクの髪のメイド春雨も穏やかにしていた。

五月蠅い感じだが雰囲気は悪くない。そう皆は思う。

「小春、今日は普通のメイド服ですか？ 可愛いですよ」

「ありがとう。お嬢様に誉められるのが一番嬉しい」

相変わらず呼吸するように皆を愛でる七海。

頬を赤くする小春に微笑み、一度春雨も見た。

途端に警戒する村雨。微妙に身構えていた。

「な、何ですか……？ 村雨は何も言ってませんよ」

「今日は一段とエロいんですがシャンプー変えましたか？」

「セクハラするなって何時も言ってるでしょうが!!」

案の定だった。

(何でそういうことだけ直ぐに気がつくかなこの変態は!!)

真顔でセクハラされて怒った村雨にはたきで叩かれた。そのまま顔面から地面に倒れる。

羞恥と怒りで顔を真っ赤にし呼吸が乱れる村雨を手のひらで示して春雨が補足する。

「こんな感じでいつもご主人様は皆さんをしつかりと見ています。何かあつたら、直ぐに報告してください。怒ったご主人様に勝てる人間は此処には居ませんので」

嫌な部分で信頼していいと言われても困る新人たち。

暗にこの鎮守府における憲兵などの人間も、七海には勝てないという春雨の暗い警告。

微笑んでいるが、皆はわかった。この三人も迫害を受けて、七海に守られているのだと。

崇拜するような春雨が言うのだ。ほぼ間違いない。

「……まあ、驚いたでしょう？ 突然こつちに来いとか言われても。大丈夫。五十鈴たちは普通の艦娘だけど、七海の部下だからね。深海棲艦も慣れっこよ。っていうか、七海で慣れているから偏見もないしみんなおんな仲間。そこに区別も差別もするなつて、七海が口酸つぱくして言ってるから。ああ、けど注意があるわ。こいつ言うこと聞かないと誰彼構わずセクハラするから、そのところは気をつけて。こいつは本物の変態よ」

ここでは七海は等しく人間扱いすると、目をバツテンにし気絶する彼女を猫掴みで持ち上げ見せつける五十鈴が言った。

ため息交じりであつた。変なやつじゃない。ただの変態。

同性であろうが何だろうが兎に角直球で愛情表現(過剰なスキンシップ込み)をする、倫理も常識もない脳内まで蕩けきつた発情期のバカ犬。自分はその姉みたいな立場の代表。

彼女は言動の一致が基本的なので嘘も偽りもない。

故に心配せずとも一切皆を傷つける気はない。

但し愛情表現にセクハラしてくる。さつきみたいな。

と、目が点になる皆の前で五十鈴はボロクソに言った。

これが証拠と、ずっと黙っていた三人に自己紹介させてみる。

「駆逐艦如月よ。司令官のお嫁さんだから、あんまり近づかないでね? ……司令官は如月のモノだから」

「駆逐艦弥生……。七海姉の、妹……。戦いは得意じゃないけど、一緒に出るなら……。その、宜しく……」

「あたしも? 面倒くさい……。あたし、山風。ママの娘。ママ困らせることしないでよ。その時はあたし怒るから」

嫁、妹、娘。全員駆逐艦。要するにロリコン。自分も駆逐艦。ロリコンのロリ。言うまでもなかった。言葉が出てこない。話と全然違う。なにこの変態オンパレード。

マトモな艦娘は周囲に居ないのか。

「いるわけではないでしょ。七海は全員大好きなの。自分が死んでも皆を優先するような頭してるのよ。一応注意しておいて。この子、追い込まれると直ぐに自分を擲つから」

五十鈴が彼女はこういう人物と一通り説明して、啞然とする周囲に案内すると引き連れて入っていく。

確かに平穩で平和だろうけど何か違う。絶対致命的に違う。

艦娘優先の思考なのであまり無茶も言わないで欲しいと由良もコツソリと付け加える。

そろそろ続く一同は、こうして姫園鎮守府に着任した。

別の意味で、身の危険を感じながら……。

その後、大本営から客人も様子を見に来るから受け入れろと命令された。

各国の最終兵器の方々。詰まりは桜庭の同僚。お偉いさんだが、立場は気にしないでいい。

無理を言つてる以上は強くは出ないと各国は了承している。

此方は少々大本営が予算で何やら持ち込んでいた。

キャンピングカーだった。小規模にあるまじき人数になつたんでこれ使え、との事。

海外の重要なポストの割には失礼極まる客員相手に安い宿であつた。

最悪深海棲艦が車中泊しろと言われ、複数のワンボックスも宿の代わりに寄越していった。

聞けば七海が行つた行為は世界も警戒するような次元であり、七海も自分と同じ海外の従来型艦娘をいれる気はない。

追い払つてもよいというから早々追い回して撃退してしまつた。

皆を好奇の目に晒す事も極度に嫌がり追い払う。

然し、若干一名にその辺にしると制止を喰らつて停止。

なんとあの七海が、言うことを素直に聞いた。

指図が大嫌いな七海が。七海が言うには、多分桜庭と同じく格上の歴戦の猛者。

追い回していた、割と本気でぶつ殺そうとしていた七海の放った一撃を、割り込んで片手で防いでいるのを皆は目撃した。

騒ぎに気付いて慌てて宥めに行ったのだが、そこでは本人も信じられないような表情で見えていた。

ロシア海軍の制服を纏った、左頬に傷跡のある銀髪の女性は豪快に笑ってロシア語で何か話していた。

その場にいた唯一翻訳できる駆逐艦いわく、こう言っていたそうだ。

『悪くない一撃だったぞ小娘。殺気も十分ある。威圧感も妥協なし。然し、軽いな。その体軀では仕方なしとはいえ、貴様の牙は軽すぎる。速度は大和を超えると云ったのは納得したが……まだ未成熟じゃないか。だが、気に入ったぞ貴様の啖呵とその態度。磨けば光る。貴様は素晴らしい原石と見た』

放り投げるように解放した女性は腕組みして、挑発した。

かかってこい、腕前を見てやると。じゃれてやろうというか。

で、バカにされたと七海は感じて反射的に飛びかかる。

鳩尾を蹴り飛ばそうと突っ込むが、呆気なく速度に対応されて掴まれた。

再び七海は理解を超えた。陸上で七海を超える反射速度。掴んでまた放り投げる彼女は指摘する。

『甘いな。貴様は本能で戦っているようで中身は理屈か。現状最も効果のある箇所を最短、最速で攻めて一撃の軽さを手数でカバーするのは宜しい。だが、フェイントもなしに素直に攻めては愚直に過ぎる。真正面から攻撃するなら鳩尾は有効だろうな。そして、貴様はこう考えているはずだ。そのまま前のめりに倒れたところを喉笛を潰して終了、と。自分の速さに自信があるのは良いが、過信がある。未熟者が、私に通じると思うか?』

反射速度で追い抜かれたら意味がないと指導していると翻訳された。

何度か繰り返し、悉くを防がれて七海は素直に相手の技量を認めて従うと決めたらしい。

尊敬に値する、との事。人格も実力も。

大半は何しているか見えずに呆然としているのに、彼女は余裕だった。

若輩者が多いらしく、波々受け入れた残った逃げなかつた連中の世話も焼いている。

工廠立ち入り禁止と執務室立ち入り禁止を受けているが。技術的なモノを信用しないための措置である。

歓迎するしかないと諦めた七海はちよつかい出したらぶつ殺して追い出すと全員に脅してその女性ガングートも賛同したのもいい。

丁度良かったので節分も一緒にやっていた。

は、いいが……。

「じゃばにーず、えろかんむす？」

「誰がですかツ!! 違いますよ!!」

イギリスの駆逐艦が、村雨相手にセクハラして本人が激怒した。

長袖のミニスカートワンピースの金髪碧眼の女の子は、慣れない日本語でそう聞いた。

誰が日本のエロ艦娘だ失礼な。節分に落花生を代用して準備していた村雨は頭に来た。

通じてないが、ふざけるなど翻訳機で分かって慌てて謝罪するそのイギリスの駆逐艦。

名前をジャーヴィスと言うらしいが、背後を気を付けた方がよかった。

『おいそこのオタク。あたしのメイドをエロ艦娘とはいいい度胸ですね』

『夕立ごめんなさい、あたしが悪かったです! この通り!!』

英語で怒っていた七海が追い出すと脅すと土下座してジャーヴィスは謝った。速攻だった。

この人種、オタクらしく色々やらかしていた。

アメリカの軽巡、某まな板空母に似た髪型の少女にもその後絡んでいた。

『えー……アトランタさんは、裏表のない素敵な艦娘です。はい復唱』
『てんめえ……あたしを何だと思ってるんだ……!!』

ダウンナーな雰囲気なんか駆逐艦の制服を無理矢理大人が着ているような女の子、アトランタもキレていた。

一人で居ることを好む割と口は悪いが大人しく静かな艦娘。

声が似てるからってギャルゲーのヒロインのネタを振ってはいけない。一般人分らないので。

『みなさーん、ここに変態がーつてのでも良いよ?』

『誰がパツケージヒロインだ!! ブツ飛ばすよ!』

わざわざ七海が知っているので気の毒に教えてやると怒るアトランタ。

ジャーヴィスとにらみ合っていると、節分しているせいで、襲撃を受けた。

『あいた!』

暁が外国のお客様と遊びたくて落花生を投げていたのだ。

で、此方に凄むアトランタ。当然お子さまの暁はビビる。

すると、七海が怒気を放ってアトランタが怯える。

『ちよ、いや……ナイトメア? あたし、被害者じゃん……?』

七海をナイトメアと呼ぶ彼女は恨むのジャーヴィスで良くないと責任転嫁。

ジャーヴィスも再度ピンチになった。

『アトランタ、今回は手伝います。そのゴールドモザイクを普通にモザイクに仕上げますので』

『話分かるじゃん、ナイトメア！ 良いよ、そのバカオタクぶつ飛ばしてやろう！』

ダウナー軽巡と狂暴ナイトメアのチーム結成。

結果、ジャーヴィス大ピンチ。節分の鬼の代わりに外に叩き出される。

その後、ジャーヴィスの裏返った絶叫が聞こえるのは……騒いでいた皆が予想した通りだった。

節分つてそういう祭りじゃねえから!!

節分。それは家の中から災いの元である鬼を追い出す一種のお祭り。

海外の連中から見ると、人に豆をぶつける祭りである。

本当は由緒正しい所以があるが、そんなもんでもいい。

要するに鬼のお面被った奴に全員で豆をぶつけて袋叩きにする。

そういう祭りだろう？

「違うわア!! いじめ! それ単なるいじめ! いじめ! ダメ! 絶対!!」

海外の一人、ガングートが文化を知らずにそう五十鈴に問うと五十鈴が思わずツッコミを入れる。

皆が逗留して一週間ほど経過。見事に狭い、暑苦しい。

その分だけマンパワーは余っているので出撃なども深海棲艦や艦娘も行っている。

有難い話でこの一週間で新人の皆はここは普通じゃないと分かってくれた。

……いや、わかつてしまったと言うべきか。

あの発情期のエロ犬が早速ちよっかいを出して皆を追い回していた。

困惑し逃げ回る皆を助けるために、新人の艦娘や深海棲艦が庇うとそつちに襲いかかる。

世の中、敵意のない襲撃も怖いものと思い知った皆は七海を叩きのめす事も覚えた。匂いを嗅いでくるわ遠慮なく触るわでセクハラに堪えかねて一名キレてぶちのめした。

ほっぽちゃんであった。約束通りペロペロされて絶叫、ぶん殴って失神させた。

あのロリコン、真面目にほっぽをぬいぐるみにして持ち歩こうとしていた。

姉の港湾棲姫、名前を貰って『湊』という呼び名で呼ばれる姉が制止すると此方はおっぱい祭りと称し揉まれる。

巨乳ロリとか意味不明な扱いをされて、揉みしだかれて暫く再起不能になった。羨ましいらしい。

抵抗空しく弄ばれた気弱なお姉ちゃんは、五十鈴の天罰が下って殺された七海に然し悪くは思わない。

なんというか、本当に愛情表現なのだと。セクハラはするが本気で嫌がればすぐやめる。

ほっぽ？ ああ、彼女の場合は嫌がるのを前提で追い回して本人が叩き潰されるのを
楽しんでいた。

いわく、

「あのロリコン、下着に変なの買ってきた！ 何これ、紐？」

衣料品を自腹で奢ってくれたようだがサイズを計測する際に無理矢理やつたらしく。

ほっぽが首の方向をあらぬやり方でへし折った。なのに生きてる甦る。

「あたしはア……不死身だあああああ!!」

「ぎゃあああああ!!」

某ゾンビ神よろしく白目を剥いて復活。

ほっぽは思わず腹にパンチして逃げた。直撃して七海は気絶した。

約束した通り烈風や零戦を沢山くれるのはいい。しかも高性能。

けどこの普段のコミュニケーション、何とかならないものか。

兎に角喧しい、騒がしい。七海の謎のハイテンションが毎日続く。

皆と接しているのが余程嬉しいのか走り回って騒ぎ立てる。

仕事は大人しく丁寧かつ迅速にこなして出撃も完璧にしている。

俗に言う、仕事はできるが休みは五月蠅い。そういう子供。

なのに皆の事は確実に見ていて、悩んでいると直ぐに聞き出して解決しようとする。

素振りの時点でバレル。海外の連中がなにもしないかと心配していれば最悪追出すと安心させる。

戦えるか分からないと悩めば真摯に向き合って一緒に戦ってくれ。

言葉で此方と向き合い、行動で応えてくれる。良い人、但し変態。

そういう総合的な評価になっていた。

節分に関しても蘊蓄言っても分かんないだろうから鬼のお面被った奴を袋叩きにする。

と、適当に教えていた。面白ければ良いとか抜かす。

「七海ちゃん、間違った文化を教えるのは止めようね？　ねっ？」

今年の鬼は七海が率先してやっていた。因みに自分がぶたれたいだけと見た。

同じく鬼をやっている由良がセクハラ目的で迎撃しないと追い回すとか言っている

キャラ崩壊の七海を落ち着かせる。

深海棲艦とか艦娘が増えて益々暴走しているこの妹。

毎日満面の笑みで皆に襲いかかり、殴られては幸せそうにぶつ倒れていた。

マゾにでもなってしまったのか。反応を楽しんでいると言うか、じゃれあいなのだろうが。

「せつつぶうん!!　と叫びながら変身するんですよ」

「待つて、先ずはそのオモチャを置こうね七海ちゃん」

何処からか持ってきたオモチャを構えてお手本とか言っていたがそれで鬼にでも変身する気か。

今回のためにゲーセンで予めクレーンで獲得したらしい非売品。

尚、要らないのでジャーヴィスにあげたら大喜びだった。限定版は貴重だそうだ。

「せつつぶうん……？」

「それ、ドイツの重巡が間違えた奴じゃん……多分」

喧嘩を終えて、合流したジャーヴィスとアトランタを加えて節分開始。

由良は後は任せて自分も鬼の役目を全うしにいった。

日本語は分からないジャーヴィスがたどたどしく喋り、流暢に言うアトランタは問題はない。

あと、アトランタにも色々問題があつたので意外と気が合うと分かつた七海の態度は若干軟化していた。

孤独を好む性質と静かな空間を好むのが、深海棲艦と艦娘が関わらない時の普段の七海。

アトランタがそんなバカなど言うがこの古くからいる艦娘はそう語る。

今七海は発情期。発情期の犬は五月蠅い。だからキヤラ崩壊が起きている。

普段はもう少し静かにセクハラするから、と苦笑していた。

「変態なのは同じなんだねナイトメア……」

呆れはするが、アトランタも、色々あつて同郷のコロラドとは上手くいっていない。彼女は来て早々、くそ真面目に情報を探ろうとして七海の逆鱗に触れた。

工場の立ち入り禁止を破つたため、怒り狂つた七海に襲撃されあつという間に鎮圧。文字通り、叩き出されて強制送還。ガングートも手伝つてまた一名脱落した。

アトランタとは相性も悪かつたので内心ホツとしていた。五月蠅いのと余計なお節介が帰つたので。

ジャーヴィスも微妙なオタク文化に詳しい七海とは仲良くは……出来ている、のか？ 少なくとも深海棲艦、艦娘には非常に友好的で自分から交流を持つとうとしていた。ただ、英語なので何を言っているか分からない。

幸い元イギリスの艦娘にして深海棲艦、ジェーナスが居るので何とかなっていた。

七海がボギーと呼んでいる少女だ。本人は誰が宇宙の練習艦だとツツコミを入れてはいた。

何故かジャーヴィスとは服装などが似ているが、本人たちは面識はない。偶然だろう。

ともあれ、彼女たちやガングートも細かいことは気にせずに普通に接してはいた。

あとはゴトランドとかいうスウェーデンの軽巡も、当たり前のように接する。

深海棲艦やらなどの違いは、会話できていれば何でも構わないと自分で言っていた。

「節分……ああ、節分か！ 知ってるよ、厄払いのお祭り！」

事前に何か勉強しているので一番誤解なく過ごしている。

深海棲艦や艦娘たちと現在落花生で代用しているそれらを配っていた。

間違えているのは……。

「どうした!! 私を撃退したいならその軽い攻撃を万倍にしてから言うんだな！」

「ちよつと、受け止めてどうするのよ！ 逃げるのが鬼の役目……」

「敵前逃亡は死刑だ！ ロシアに銃を向ける敵に背を向けるような臆病者は一人もいな

い!!」

「厄払いって言うてるでしょ!! 厄は払われなきや意味ないの!!」

お面をつけたガングートが袋叩きにされていたが、ちつとも逃げない。

五十鈴が教えているのに払いたくば全力で来いと寧ろ歓迎。

笑顔で腕組み仁王立ち。堂々たる出で立ちに駆逐艦が格好いいと遊んでほしいよう

で投げる。

五十鈴は狼狽していた。厄払いしない節分とは何ぞやと苦悩している。

で、此方は……。

「司令官が鬼なら、当然如月も鬼よ」

「が、がおー……」

「弥生、それ長門のセリフ」

「私は鬼じゃない、姫。格下にされるのは遺憾……」

「落花生が足りなくなってる……姉さん、そっちにある?」

「はいはい、持ってきたわ」

何時もの面子がジャーヴィスとアトランタに交ざって楽しんでる。

セーターにスカートに鬼のお面をした如月、弥生と山風。

改造和服メイド服に戻った小春も、お面をつけた。

メイド服の姉妹は裏方でお仕事を励んでいた。

そこそこの集団になった一行は鎮守府を歩き回る。

此方は此方で全体的の見回りや深海棲艦の一部（主にほっぽ）が意趣返しに艦載機で落花生で攻撃してきたりする。

が、アトランタが過剰に反応した。

「敵襲……直上!?!」

なんと艤装をロツクさされているのに無理矢理展開しようとしていた。

無論陸地では出来ないので苦しげに呻いて膝をつく。

代わりに小春が持つていたはたきで叩き落とす。

「反応は良い。けど、パツケージヒロイン。お前は艤装は使えない。その状態でやると反応が強いから少し落ち着いて」

「あたしは裏表のある優等生じゃないから……あんたまでその扱いはマジで止めて……」

アトランタはだからギャルゲーのヒロインじゃないのにいつの間にか伝播していた。

犯人のイギリス人は落花生をポリポリ食つてて聞いてない。

「そう言えばアトランタ。服は大丈夫ですか？」

「サイズは良いよ。悪いね、ナイトメア。世話してもらつて……」

「おきになさらず」

過剰に反応するアトランタに動じない七海はけろつとしていた。

皆も驚いてはいない。話は聞いた。

何でもアトランタ、以前演習中に事故で味方に誤爆されたらしい。

空母のなんたらとかいう奴に相手もろとも巻き添えを受けて死にかけた。

事故であるが、何分アトランタがこういう性格なので結局和解できずに凝りが残つた。

で、気まずいので相手も謝りたくも謝れない。話しかけにくいのだ、アトランタ。

そのまま相手は家庭の事情で艦娘を引退してしまつたと。

それ以降、アトランタは結構浮いていた。

なんか怖い艦娘。無愛想だし、喋らないし、避けておこうと皆に思われて孤立。

責めないが、言外に怒つていられると思われる誤解。アトランタも気にしないが、こういう扱いは流石にキツイ。

今回、ある先輩に急遽寄越され、着替えなども満足に用意できないままこちらに来た。そもそも荷物を持つてきた方が少ないが。大体大本営が用意していた服などを借りている形。

本来は付き添いで良いと言うのに無理強いされてしまつたのだ。顔を立てる意味でも拒否できない。

仕方無く、大本営で借りてきた服を先日着ていたらキツすぎて苦しかった、と。

此度はアトランタは巻き添えを受けていた。不幸にも程がある。

今は七海が用意した長袖とジーンズ姿だ。サイズは分からないのでとりあえず大きめにしておいた。

「日本の大本営もさ、何であたしに駆逐艦の服を寄越すのよホント……」

「ああ、やっぱりそうだったんですか」

此方も間違つて送られたのを律儀に着ていたからあんな格好だったのだ。

色々不幸な人なので、あの過剰に反応するのかもしれない。

溜め息をついて流れて溜まっていた鬱憤を愚痴っていたアトランタに皆は励まして、今に至る。

対してジャーヴィスは何にも問題はない。能天気過ぎている。

『夕立、胡桃もうない?』

『落花生です』

食べ終えた彼女は落花生を胡桃と勘違いしていた。

胡桃を鬼に投げるとか怪我するだろうに。確かに天然の胡桃は鬼胡桃と言うけれども。

ジャーヴィスも鬼をやっているが此方は投げられた落花生を砕いて食べていた。香ばしいとのこと。

全体を見回り、一頻り投げ終えて戦いは終わった。
が……。

「ふははははは!! 私を倒すには百年早いぞ小娘たち!! 次は胡桃でも持つてくるんだな! 無論鬼胡桃、即ち山に自生する堅い方をな!!」

「……胡桃が食べたいだけじゃ……」

「そうとも言うな。あれは良いぞ五十鈴とやら。酒のツマミにもってこいだ」

「そう……」

ツツコミが機能停止していた。結局最後まで仁王立ちして受け止めていたそうだ。疲れた表情の五十鈴は兎も角も、ガングートは満足していたようだ。

片付けを終えてしめに恵方巻きを食べると食堂で人数分用意していたのだが。

『恵方ロールは一気食いが礼儀だつて食通漫画で言つてた! ジャーヴィス、いきます!!』

『落ち着いてください!! 恵方巻きは一気食いはまず無理です!! ジャーヴィス、窒息しますよ!』

ジャーヴィスが間違つた日本の文化の知識を披露したり。

尚、当然無理だった。

「……食べる? この棒状の寿司を? あ、あたしはいいや……寿司は好きじゃないし」

『美味しいね恵方ロール! アトランタ、要らないならあたしが貰うよ!』

『今度は沢山食べるんですか!』 ちよ、ジャーヴィスそつちはあたしの……!!』

ジャーヴィスがアトランタの恵方巻きを食べようと、七海の恵方巻きを食べたり。

「祭りの終わりはやはり酒盛りだ!! 落花生で一杯やるか!!」

「いつぱいの間違いじゃないのよ! ちよつと、飲むなら場所を弁えて!」

酒豪のガングートが酒盛りを始めた。
喧しい節分になるのだった。

世界に全力で喧嘩を売るスタイル

ドンチャン騒ぎも終えて、任務を終えた艦娘たちにも恵方巻きを食べてもらい、節分は無事に終わった。後は精々バレンタインぐらいだろうか。

その前に片付ける問題もあることなので、始めてみようと思う七海であった。

そもそも現在の鎮守府滞在の皆の能力を簡単にまとめた。

数値化されたそれらを見ながら、七海は嫁と二人、夕飯前の仕事に入った。

秘書を務める如月は、不満そうに頬を膨らませる。

「大体、まーた女の子拾つてきて……。司令官には如月がいるのに」

「お仕事なんだから仕方無いでしょう。無視して殺されるのを見るほどあたしは無情ではないんです」

嫁と二人の時は発情期はなりを潜めて、普段通りの感情の薄い七海に戻る。

最も長く愛している女と共に過ごすのだ。この時は他者に現を抜かす気はない。

これでも、一応は如月は『特別』にしようととも思い始めていた。

これ程までに増えてきた深海棲艦や艦娘。

勿論平等に愛しているが、家族愛に似たそれと唯一、違うのは恋愛。

恋をしているのも否定するのも止めようと何処かで思つてもいる。

いい加減、曖昧なままで過ごすのも彼女に悪いし、答えぐらいはしっかりと出す。

現状今までは大して困らなかつたが、身内が増えるならハッキリさせておこう。

「ズルいよ、司令官は。如月が何しても怒らないと思つてるから好き勝手に浮気するし」

「ワガママ言うんじゃありません。後にも先にも嫁は如月、あなただけですよ」

書類を見下ろして、不貞腐れる彼女に涼しく言う。

普段は好きとかは言うが愛しているとは滅多に言わない。

しかも嫁とも言わない。なのにこの時はさりと云った。

「へっ!？」

ぼんっ! と顔が一瞬で赤くなる如月。

焼きもち焼いていたら七海が珍しくストレートに告げた。

七海は自分のなかでは淡々と整理をつけていたが、それを声には出してない。

要するに嫁は初めて今聞いたのだ。

「ん? 何か?」

顔をあげた彼女はいつも通りの七海でおかしな様子はない。

おかしいのは如月だった。

「ねえ、今の聞き間違い? 今さらっつと……」

「ああ、嫁ですか。大丈夫ですよ、あたしの嫁はあなただけです。安心してください。家

族は増やしても嫁は人生で一人で十分です」

「ふああああああっ!？」

何かスゴいこと言い出してる!？」

奇声が出た如月。顔は真っ赤で湯気が出る。

プロポーズ! 今普通に呼吸するようにプロポーズしてきた!!

と、パニック状態の如月。両手を頬に当てて悶えている。

詰まりは、長い人生で如月は既に嫁決定ですかそうですね。か
ちよつと待て。

「待つて!!? 色々待つて!!? 何、突然!!? どうかしたの司令官!!?」

「五月蠅いですねえ……。どうもしませんよ。今まで曖昧だったんで普通に返答したんですよ。嫁なんでしょう? あたしも全然構いません。指輪も出来ない体質ですし世間は同性結婚は不可能ですけど、以後宜しく。何か質問は?」

「クーデレみたいに真顔で愛を囁かないで!! 司令官はヤンデレでしょう!!? 落ち着いて、キャラが違うわ!!」

机に両手をついて迫る嫁に、呆れた顔をしている七海は自分の言っていることを理解していない。

ように見える。従来型故に支給される指輪をつけると諸々問題あって死んでしまう。

世間は女同士じゃ結婚は不可能。だからなんだ。自分の色恋沙汰に他人を入れる気はない。

当人が納得していればいい。シンプルな話。如月に応える。以上。

「以上じゃないから!!? ムードは!!? シチュエーションは!!? なんで二人きりとはいえお仕事中にプロポーズするの!!?」

珍しく如月の全力でツツコミが炸裂。七海があまりにも淡々と答えるもので、動転し

ているのは嫁の方。

もう少しロマンチックなシチュエーションが良かったと抗議する。

「あたしにそんなもの求めないでくださいよ。さっぱりなものですんで。わざわざ場所を整えてやっている暇あると思いませんか？ 一応多忙なんですよあたしも」

「そーだけで！」

「まだごねますか、如月。これ以上言うとな今すぐ唇にキスして黙らせますよ」

「止めて！ ファーストキスはもう少しムードあるときにしたいわ！」

開き直ってやがった。しかも全力で今まで以上に恐らく甘いことを言っていた。真顔で。

因みに七海はキスの経験はない。嫁も同じく。何てこと言うんだこの人。

ぎやあぎやあ騒ぐ嫁は、もう少し考えろと散々抗議していた。

「世の中はね、空気も大切なもの!! 如月もそういうのはこんな味気ないものじゃなくて……いや、十分嬉しいけど！ でもでも、もっと方法あったわよね!!」

「情緒ですか……あたし、そういうの苦手なんですよね。正直」

金剛じゃないが、抗議だっただけで済む。

基本的に七海は恋愛の情緒なぞ知るはずもない。

初恋が如月なのだ。相思相愛の、一方的な信愛や家族愛ではなく。

ちやんと通じた恋愛と言うのはしたことがない。

ボリボリと頭をかいている七海は困ったように如月を見た。

「マトモじゃないのは知ってますが、やはりうまくはいきません。イビツな人間じゃこれが限界でしょうか」

「……司令官」

七海なりに考えた結果のようだが、案の定理屈で続いた結論故にこうなってしまう。不器用と言うか、如月も言いたいことは分かる。未経験の事は七海は分からない。

実践しようにも感情という温度に鈍い彼女では、こんな台無しにしかならないのだ。

「上手にやりたかったんですけど。所詮はサイコパス、異常者に告白やらプロポーズやらの機微を感じろと言うのも土台無理な話だったんですかねえ……」

自分でも分かっていたように自嘲し、書類に戻る。

七海はそういう人物だ。答えるにも言葉や行為で示せばいい。

ただ、そのみで判断してしまうから失敗した。あの七海が自嘲的に笑うなど初めて見た。

如月も何を言えば良いのか迷う。

よく考えれば、異常そのものの恋愛。

女同士。人間と艦娘。司令官と艦娘。子供同士。

何もかも普通じゃない。普通には行き着かない。

自覚する。如月は同じだ。恋愛に関しては七海と同類の白い目で見られる異常者。

それでも七海は返答した。愛していると。嫁は如月ただ一人。それ以外は誰もいない。

伝わったのは間違いないが、だが……結局二人には明るい未来なんか無いのも事実。想像していなかったと、如月は思い立った。この先の未来、二人はどう歩めばいい。

「……司令官」

「何です？」

深呼吸して、彼女は椅子を一度下がって持つてきた。

そして、机に向かって目を落とす彼女の隣に置いて座った。

書類は見えないで、真剣な彼女の横顔を見る。

薄暗い室内。手元の光源のみで書類を見ている七海。隣に座る如月。

天井の明かりは小さく、暖房が効いている静かな執務室。

窓の外は既に真っ黒で、夜の帳が下りている。遠くでは忍者が戦を求めて海に出ていく声も聞こえる。

何故かそのあとヴェアアア!! という悲鳴も聞こえたが。何をした川内。

そんな室内で、如月は問う。愚問だろうけど。

「如月たちは、幸せになつてもいいの？　いえ、なれると思う？」
「……どんな返答がお望みですか」

書類を読み終えてファイリングして、七海は再度顔をあげる。

その表情は……冷たい。冷めた表情だった。

複数ある返答のうち、どれを聞きたいと前以て言う辺り、意図を分かちてしまった。

そう、受け取った。

「本当は司令官の気持ちを知りたいけど、今は……見解かな」

楽観的な意見は聞きたくない。現実を知りたい。

予想できる、そして半分予感している答えを聞いた。

七海は冷静に教える。それは、悲しく空しいこと。

「無理ですよ。なれませんが、諦めてください」

お得意の理屈的な判断。

艦娘には人権はない。人間じゃない存在が無理を言えると思うか。

人間社会もろくに知らない人擬き。模倣しただけの別の別の生き物に、なにがある。

艦娘は人間じゃない。いくら七海が言おうが世間は、世界はそう答える。

それが現実で、それが常識で、それが摂理。

希望など在于りやしない。だから、諦める。そう言った。

「微塵も容赦ないわね」

「そう言えと言ったのはあなたですよ」

甘言で未来を夢想したかったのなら悪いと謝った。

然し七海と如月が生きているのは現実で夢じゃない。

甘えたこと、綺麗事で生きてはいけない。

「なあんだ……やっぱり、艦娘が人間の真似事なんて無理なんじゃないの」

「期待するだけ無駄です。誰が認めるんですか、そんなものを」

「そうよね……知ってたわ」

そう、知っていた。敢えて目を逸らして考えなかつただけ。

その未来に光などなく、夢も理想も希望もない。同じ時間が地続きになっているのみ。

七海らしい、一切の優しさのない答えだった。

「じゃあどうするんですか？」

「決まっているじゃない。作るしかないわよねえ……如月たちの楽園を」

ならば、次だ。どうやって望む未来を手に入れるか。

簡単だ。無いなら作れ。自分の手で。望むままに。

それが……二人なら、今の環境ならば可能ではないか。

七海はそう思う。以心伝心、如月も感じ取った。現実がダメなら世界を変えてやる。

常識をぶつ壊して、倫理を無視して、自分達を認めさせる。力づくで!!

人間の都合なんか知るか。勝手に言ってる。こつちも勝手にやってやる。

戦争上等。文句があるならかかってこい。全員ぶつ殺してでも無理矢理許可させてやればいいのだ。

「やっぱり司令官はこうじゃないと。人間相手に怖じ気付くなんて有り得ないわ」
「ええ。あたしもそう思います。無いなら作る。それだけのことですよ。当然です」

元より居場所がないものたちの鎮守府。

狭くなってきたし、この人数が入るには少々手狭すぎる気もしていた。

濁ったオツドアイと茶色の瞳が、邪悪に互いを見て笑った。

世界の中心で愛を叫ぶ？ バカらしい。彼女たちの愛こそが二人の世界だ。自分の愛情が第一で何が悪い。自分の感情が優先でどうして悪い。

人間だってそうしたんだ。此方だって同じことをしてやる。お互い様。

そうと決まれば、あとは有言実行。言ったら実行。即決である。

「愛しているわ司令官。取り敢えず如月は第一夫人ね」

「夫人はあなただけと言ったでしょう。あたしの恋を受けていいのは如月一人」

世界が警戒する程の戦力になったらしい。

それなら殊更丁度良かった。全部ぶち壊して混沌にしてやろう。

笑える話だ。避けていた化け物の存在が群れて世界と争えるような次元にまで増長した。

人間じゃないなら、人間の真似事なんか要らない。人間の理由なんか海に沈め。

七海はもつともつと深海棲艦や行き場のない深海棲艦を受け入れる。

如月は幸せになれないなら人間の世界には未練などない。

じゃあ、自分達で好き勝手にやった方が気が楽じゃないか。

居場所が欲しければ作り出せ。生み出せ。奪い取れ。

もういいだろう。これだけ皆が集まった。これだけ力が手元にあるんだ。

自分達の都合でそろそろ動き出そう。七海は如月に囁いた。

悪魔の笑みで、深海棲艦よりもほの暗い事声色で。

「如月。いつそ、あたしたちで何処かに島でも奪って、新しい場所を考えませんか？」

「最高に冴えているわ司令官。そうしましょうよ。如月たちの未来の家を探しましょう」

……とんでもない事を言い出した。

纏めると、七海たちは人間に反旗を翻す。

そういう思考になってしまっていた。いい加減、もつと互いの要求に向き合おう。人間は迫害する。自分等はお前ら嫌い。じゃあ先ずは離れる。

でも管理下には置きたい。言うこと聞くの嫌だ。じゃあすり合わせして妥協する。国防に手を貸せ。なら好き勝手に生きる為に支払いしろ。

そんな感じで生きていけばいいじゃないと。

さて、これには皆様大慌て。翌朝、七海は早速桜庭に喧嘩を売った。

電話で開口一番。

「鎮守府狭いんでお引越します。予定地探すので手伝ってください。じゃないと暴れます」

「朝っぱらからなに突然!! えっ!! 暴れる!! 待つて、落ち着いて渋谷さん! 何があつたの!」

言葉で説明。人間嫌い。鎮守府狭い。

新しい新天地、探すの手伝え。じゃないと皆で暴れてやる。

「いきなりすぎ!! 分かった、要求は理解したから!」

「されなきゃ困ります。じゃないとガングートさんにチクってロシアに逃げます」

「止めてええええええ!! 海外に逃げられたら日本がどうなるか分かつてるのちよつと

!!

「勝手に滅べ、国際的に♪」

「ハミングしながら最悪なことを言うなアツ!!」

「選ぶしかないんですよ桜庭さん。あたしはもう我慢はやめます。好きにします」

「なんて事を……!」

「暫くは大人しくしますが、時期が来たら動き出しますよ。いいですか、忘れないでくだ

さい」

「うぐぐ……」

「こればかりは止めません。このままじゃ未来がないのはわかってます。俗に言う巢立ちの時のなのです」

「どこぞのドードーか!! つまり裏切り!?!」

「裏切る気は無いですが、将来的にはいつそ専門の鎮守府の設立などを企てています。海軍を脅して」

「脅してって……あ、でもそういうこと……」

未来的には規模が間に合わないから専門でどうにかしたいという教え子の相談。

と、桜庭は解釈した。悪くない提案だった。

確かに現状トラブルが多すぎる。人数も増えすぎた。

そう考えると、増築よりもいつそ新天地に……と言うのも元帥の立場と今の彼女たちならば可能か。ギリギリ。

「オツケー。分かったわ、探ってみる」

「……えっ？ いいんですか？ 半分裏切り上等だったんですが」

「冗談だつてぐらいは分かってたわ。任せて、準備しておく」

本気でした、とは言えない。桜庭はあっさりとおツケーしちゃった。

これが、のちに真面目に世界に喧嘩を売った結果になろうとは……誰が思っただろうか。

取り敢えず今の敵は、アメリカの戦艦だった。

戦いの幕開け

各国の艦娘たちが集い、共同生活を始めて二ヶ月が経過した。

季節は春に移行して、同時にそろそろ皆も異常な空間に慣れてきた。

アメリカ軽巡、アトランタ。イギリス駆逐艦、ジャーヴィス。

そして、七海。この三名が最近よく行動する従来型艦娘である。

深海棲艦たちも、二ヶ月もすれば、鎮守府の生活にも適応してきた。

基本的には、七海が居れば人間は怖くない。

そう、全員が間違いないと分かってくる。

同時に、七海も決して無敵ではないことも理解した。

少なくとも、規格外の化け物であることは違いない。

が、世の中には更なる化け物があるらしい。

「皆様に良いものをお見せしましょう」

そう、何時だったか笑顔の七海が海外の艦娘に映像を見せた。

何かの記録だったのか、見ていた若い世代が全員真つ青になって絶句していたのを深海棲艦たちは見た。

七海はのちに皆に語った。自分が嘗て、深海に堕ちたときに彼女の上司に半殺しにされた。

その時の映像だと。一種の公開処刑の様子だった。

彼女の上司、桜庭と言うらしい女性に齒向かうのは言わば世界最強に逆らうのと同じ義。

死にたくないなら、止めろと釘を刺していたようだ。

「あたしの行動は歴とした任務なのです。しかも特務。それを邪魔すると言うことは、国益を損じる。どういう意味か……分かりますよね？」

最悪桜庭を敵に回して、生きていられるなら好きにしろという意味だ。

最低限、ここでの許可は彼女の上司が認可している。何かすれば報告すると脅していた。

七海も一方的に蹂躪されて二度と戦うかと言わしめた怪物の中の怪物。

各国の艦娘は、それを見て以来、大人しいものだ。

不信感があるなら出ていけ。此方はお前らなど必要ない。

寧ろ邪魔だから消えろと、日々笑顔を艦娘と深海棲艦に向ける一方、海外の客人には

慇懃無礼で素っ気ない。

どうも、海外の艦娘が一部を除いてかなり七海は嫌いらしい。

その中でも、アトランタとジャーヴィスはそこそ仲良くなっていた。

性格に難点だらけの七海と難なく付き合えるのには姉代表、五十鈴も驚く。

「よくもまあ、あの娘についていけるわね……」

と、今でも感心していた。まあ、七海も基本的に対人関係は悪い方で、マイペース。

そんなキレやすく面倒臭い彼女の歩幅を理解しているアトランタと、単純に興味と思考が似ているせいで互いに悪影響で感化して悪化しているだけのジャーヴィス。

現在、七海はそんな感じで毎日騒がしく過ごしていた。

裏では、嫁となった如月以外は未だに知らない凄惨な計画を進めながら……。

四月の事だ。

七海に上司から直通の連絡が入った。

執務室で、仕事をしている最中だった。

例の件、軍部と国に認可させてきたという朗報。

そう、例の裏切り上等のお引越計画であった。

桜庭の深読みで、国際情勢を鑑みて、隔離が妥当と見た彼女に裏を、七海は現場の調和を保ちながら進めている。

「二ヶ月で認可されたんですか!？」

「そりゃあね。二ヶ月でもまた増えているじゃない深海棲艦。これ以上はお国もヤバイって危機感あるみたい。言うまでもなく、此方は全員黙らせたわ。私に一任されているしね、元々この一件は。私も含め何人かで管理できるなら、構わないってさ。結果も上々だもの。裏方は任せておいてね」

「ありがとうございます……」

上司は所属する海軍ならいざ知らず、政治にも強いらしく、あっさりと短期間で難題を解決。

日本という国に集った深海棲艦は戦力としてカウントすると最早ここは超大型鎮守府と比肩できる程の戦力に膨れ上がっていた。

それを、七海は個人で有すると思われている。

例えるなら、他人から見ると七海の戦力は佐世保や横須賀の鎮守府と同等。

割と笑えない規模に成長しており、桜庭も一枚噛んで管理に携わると言っていた。子供が持つていて良いモノじゃないし、そもそも七海はそんな気もない。

ただ、皆が幸せになればいい。それだけの話。

子供の発想が、日に日に周囲の大人を巻き添えにして、肥大化していく。

それは臆て、国をも相手取るような大事に発展することをまだ、七海は知らない。

深海棲艦たちは、二ヶ月でまだ増えている。

最早日本中で発見される穏健派の深海棲艦を、一手に七海は面倒を見ていた。

並行して、深海棲艦にも穏健派という戦いを避けたい一派がいて、ごく一部であるが認識を始めていた。

無駄な資材を消費せず、時間も手間もかけずに海域を案内できる存在が居たとしたら？

その結果が、七海の場合にいる深海棲艦。話し合いだけで、海域の情報をくれる。

何人かは、なんの因果か海外の深海棲艦も度々交ざる。流れ着いてしまったようだ。

当然何を言っているのか理解できない七海。七海が解るのは、英語とロシア語と日本語だけ。

なので代わりにバイリンガルのガングートが通訳してくれた。

前回はイタリア。今回はフランス。各国で轟沈した、元々艦娘の深海棲艦だった。

「まさか、あの怪物が艦娘だったとはな。いや、怪物というのは無礼だった。失言を済まないな」

ガングートも感心する。ロシアもなぜか、この計画には賛同して極秘に手伝いをしてくれるようだ。

桜庭が、他の国にも既に漏洩しているかもしれないとは言う。

諜報を得意とするロシアが真つ先に嗅ぎ付けるので、桜庭は見返りの件を引き合いに出した。

無論、ガングートは協力する。面白いという理由で。

「悪くない……悪くないぞ大和。お前が真顔で無茶を言い出す日が来るとは、これは波乱の予感がする。世界が変わる、時代が動く……！ 良いじゃないか、激動の新時代か!! この戦争に、新たな局面を生み出す火種になる！ 分かるか大和、お前の教え子が、歴史に名を刻むかもしれないこの意味が!!」

「はいはい、分かった分かった。要するに、ロシアもその歴史的快挙に名を列ねたいと」「そう言うことだ。素晴らしい、素晴らしいぞ!! まさか、生きていて鮮血と硝煙以外で解決策を見出だす人間がいるとはな!! だから世界は面白い!!」

深海棲艦を殺すという固定された常識は、もう七海には通じない。

この楽園を見てみるとガングートは桜庭に言った。

「私もお前とは長い付き合いだが、お前を侮っていたようだ。教育者としてのお前の器を見誤っていた」

「渋谷さんが勝手に始めたのよ。私はその後押しをしただけ」

「謙遜するな。その基盤はお前の教えがあつてこそ。お前も、あの小娘も……必ず我が国が助けてやる。任せておけ」

ガングートの言葉はイマイチ七海には分からない。

結局利口でも世界を知らない七海には事の重大さが分からないまま。

七海は、大きな流れの中心で、その中心が安定するには新天地が必要不可欠。

故に、日本は深海棲艦を、七海と桜庭の下に置いて、生活を保障する。

代わりに此方の戦力と真相究明を協力する限り、権利を認めても良いと。

そう、まだ正式ではないが認める気になっていた。

七海の頑張り……頑張り？ が、とうとう実を結んだ。

少なくとも、上は認めたのだ。あとは、有象無象をぶちのめして突破する。

最も数が多く道程が果てしない苦行。それでも、諦めない。七海は変態だから。

……因みにこの説明を受けていたが、七海はこの狭い鎮守府から引越しをできればいい。

世界情勢？ そんなものどうでもいい。

安全な場所を。安心できる時を。それだけを求める。

「シンプルね。その信条が渋谷さんの強みか」

「？」

余計なことを一切省くサイコパス特有の思考がプラスに働いている。

感心する桜庭の意味が、七海には処理できない。

取り敢えず、新天地を外部に邪魔される事はない。

国内では海軍も国も許可した。

問題は、それが気に食わないアメリカなどの諸外国。

邪魔立てする気満々らしい。なので、気を付けろと警告された。

「もしもよ。もしも、海外の最終兵器が襲ってきたら。渋谷さん、戦いなさい。いつも通り。極秘と言えど、正式な決定に直接関係無い、現場だけで判断して襲ってくる可能性は高いから。細かいことは私がやる。だから、皆で抗って。殺しても、文句は言わせない。仕掛けてきたら、……始末なさい。良いわね？」

「了解です」

なら、いつも通りぶつ殺せばいい。

愛する皆を狙う輩は悉く七海の敵に過ぎない。

お墨付きであるならば、遠慮もしない。容赦なくぶつ殺すのみだ。

変わらない声色で、七海は嚴命を承つて受話器を置いた。

連絡を終え、電話を切る桜庭も、これ以上は物理で對抗するしかないと思う。特に、最終兵器同士がぶつかると言うことが、危惧が、現実になりつつある。表に出ることがない、過去の繰り返し。

また、人類は戦争を始めるのだ。今度は、個人単位で。

(アイオワ……言つたハズよね。私の部下に何かしたら反撃するつて。あのバカ、本当に懲りないなんて流石に私も何も言えないわ……。もういい。最低限国と他の元帥の許可は得てる。こうなりや、お望み通り戦争してやろうじゃない。新型だか何だか知らないけど、アイオワに教えてあげなきや。……私に、大和に勝てる戦艦も、艦娘も、誰一人居ないつてことを)

アメリカの最終兵器が、何やらキナ臭い動きを見せているのは察知している。

あのバトルジャンキー、なんと七海の家族に政治的な攻撃をしようとしていた。

仮にも他国の、それもただの一般人を誘拐して監禁しようとしていたのだ。

それを自国のエージェントに命じたのが、アイオワである。

立場の悪用に加え、独断専行。その他多岐に渡る看過できない行為の数々。

温厚で、余裕を持つことを心掛ける桜庭もこれには静かに激怒した。逆鱗に触れた。言うまでもないが、阻止した。桜庭本人が出向いて、エージェントを血祭りにした。

軍人なのに、暴力で解決した。

国民に身勝手な感情論で手を出したバカ女の差し金は潰され、本人はしらを切っている。

なので、桜庭も今回は本気で制裁を加える。物理で。

アイオワが焦れて本人に手を出した場合。アイオワは、確実に死ぬ。

世界最強の艦娘と自負する桜庭の意味が分かっていないアイオワに思い知らせるのだ。

その行為の、代償と言うものを。

んで。

『……』

こつちも何だか目敏く気付く奴がいる。

ジャーヴィス。アトランタ。七海と行動する海外の二人。

真つ先に気付いたのはジャーヴィス。

アトランタが、自分のところの先輩が何かしているのでジャーヴィスに仕方なく相談した。

何だか、アトランタを通じて情報を引き出そうとするも日々そこそこ居心地良く過ごす彼女は、適当に報告していた。

で、それに焦れたのかアイオワが何か仕出かした。良くないことをしていると、お付きの空母が教えてくれた。

それを言われても困るアトランタは、話せる数少ない相手のジャーヴィスにリーク。丁度七海が連絡を受けた頃、与えられた部屋で一服する二人は語る。

『アイオワさんが？ それ、ヤバイんじゃない。多分、戦争になるわね』
『マジか……。あの人ろくなことしないわ……。』

英語で話す彼女たちは、後輩、若輩者の立場で話す。

ちやぶ台に湯飲みでコーヒーを啜るジャーヴィスは制服。

アトランタは今回は由良の制服を借りていた。胸がキツイが由良が聞いたら怒るので秘密。

コーヒーカーップにラテを入れて飲むアトランタは頭を抱えた。

『あの人、人格が破綻してるから何するか分かったもんじゃないんだよ。あー最悪だ、ま

た何かあたしが巻き添え受ける……』

心底嫌そうに漏らす。アトランタからみてもアイオワは頭がイカれている。

同じく頭がイカれているジャーヴィスは、真剣な顔で言った。

『そつちの先輩がヤバイのはイギリスも知ってる。……どうする？ あたしは、夕立と一緒に戦うけど。アトランタは好きになよ。夕立と敵対したら、命ないと思う。あ、違うか。日本と戦つたらだ』

ジャーヴィスはあつさり個人的に七海に味方すると言い切る。

イギリスなどは関係無い。ジャーヴィス自身の意思で、七海につく。

アトランタは巻き添えのとぼちちりを受けるのは嫌だ。

国じゃなく、自分の意思で選んだジャーヴィスに聞く。

『随分と簡単に決めるじゃん。良いの、立場失うよ？』

『要らないよ、そんなん。あたしはあたしのやりたいようにする。ここの空気をぶつ壊す相手は誰だろうがぶつ殺して、守る。ここは、あたしの夢でもあるから』

『……夢？』

夕立、深海棲艦、艦娘。全部ある尊い世界。

理想郷とも言えるここを、ジャーヴィスは守りたい。

ただ、それだけだ。

アトランタには、夢のために戦うとだけ言った。

『……あんた、割り切り良いよね。羨ましい。あたしは迷ってるのに』

と、言いながら机に突っ伏す。

くよくよしていて、決められない。

『どつちが被害少ないかでしょ？　じゃあ間違いなく夕立の方だよ。此方には、何せ宇

宙いく戦艦がいるんだから』

『宇宙行く戦艦?!』

アトランタは苦勞を背負いたくない。無関係なのに痛い思いも嫌。

避けるにも、自国との板挟みで苦惱すると、ジャーヴィスは誘う。

日本には宇宙行く戦艦、大和がいる。アイオワ風情、簡単に粉碎すると薄い胸を張って断言。

顔をあげて、驚く。何と、七海の上司はあの海外で有名な戦艦であったか。

それは、知らなかった。

愕然とするアトランタに、オタク文化で根拠はないがきつとそうだと事実無根の話をジャーヴィスは刷り込む。

『夕立の先生は、世界最強の艦娘……うん？　艦娘か、あれって？　いや艦船か……一応』

『艦船か疑う次元なの?!』

『……いや、だつてさ。アトランタ知ってる？ 大和つてさ、元々日本の古い名前なんだつて。詰まりは……国の具象化……？ ううん、擬人化的なジャンルかな……？』

『えっ……国？ あの人、一国扱いだったの……?!』

想像で話しているジャーヴィス。

尚、オタク故にアニメのネタが桜庭と勘違いしているが違う。

番組が違う。普通に違う。それ違う大和さん。

桜庭は歴とした人間。多分。きっと。めいびー。

(またこのルートでも人間やめてるの?!)

何か聞こえたが無視する。

ガタガタ震え出すアトランタ。国の具象化とかなんだ、妖怪か。

(ナイトメアの先生は何なのよ……)

(恐らくは怪獣みたいなものと思われるわ)

(じゃ、ジャーヴィスの声が脳内に!?)

血の気が失せているアトランタ。

ジャーヴィスの何か囁きが聞こえた。

兎に角、アトランタも即決。アイオワ見捨てる。

無理、絶対無理。ジャパニーズ妖怪とかジャパニーズ怪獣とか勝てるわけがない。戦争になれば此方も撃たれる。死にたくない。

『よし、自棄だ。夕立に味方する』

『あたしもそうする。楽園を壊させないために』

結局、後輩たちはバカな先輩を見限った。

アイオワは知らなかった。自分が、四面楚歌だと言うことを、まだ……。

やベーコンビってレベルじゃなかった

上司に、警戒を言われて、七海は決意した。

皆を守る。だけど、それはきつと一人では無理だろう。

相手は桜庭と同じく、最終兵器。アメリカの代表なのだ。

規格外の戦闘能力を有する、化け物に間違いない。

今までの相手とは訳が違う。どうすれば、守れるか。

真剣に考えた。いつも通り、自分だけで思考する。

七海の悪い癖。一人で勝てないと分かるのに抱え込む。

何も言わないで、自分がそうしたいからそうする、そんな少女。

だが、この世界は違う。決定的に。

ガングートがいる。アトランタがいる。何より、ジャーヴィスがいる。

ある世界では友達と言える稀少な存在になった彼女が。

本当の名前を明かしてしまえるほど、信頼できたジャーヴィスたちが幸運にもここに
いる。

ガングートもそうだ。嘗てあつた最悪の結末にて、唯一最期まで面倒を見てくれた。
国を越えて、生にしがみついた愚かな女を助けてくれた恩人がいた。

また、言葉を深海棲艦と交わした豪傑もいた。

あの男は、この世界では七海を助ける特務を賜つた。

ならば、あの男もまた彼女に手を差し伸べる。

島村という男は、たとえ彼女が深海棲艦に堕ちたとしても、決して敵対しなかつた。

共に戦うことを誉れと誇つてくれた。この世界には、人間たちが揃つている。

条件は整つた。国が相手だとしても、彼女は負けない。負けられない。

ピースはもう、手元にあるのだ。彼女が完全なる理想郷に辿り着く、好条件。

三つの世界を乗り越えて、渋谷七海は、皆が幸福になれる世界を目指せる。

人間が、揃つた。ならば次は、深海棲艦。

人間を諦めて深海棲艦にならず、人間を信じて深海棲艦に至るとすれば。

それは、今までにない最強の深海棲艦が誕生するだろう。

愛に狂うイカれた彼女の、新たな、そして最後の覚醒の序章を、始めよう。

それは、鎮守府に閉じ籠り皆に鬱憤が溜まっていると七海が考えて、ローテーションで出かける計画を立てていた。

尚、客人たちは既に激減して、もう殆ど残っていない。

七海が追い出してしまった。脅しや露骨な扱いに堪えかねていた。

残っているのは深海棲艦に適応したり仲良くしたりしている連中のみ。

結局、環境に我慢できずに帰っていった。

アトランタ、ジャーヴィス、ガングートなど一部は七海も軟化した態度で接していた。

ガングートは元々粹外だが。その彼女も、渋い顔で桜庭と連絡を取っていた。

「ふむ……アイオワめ、本当に日本と戦争を始めるようだな。個人で国に喧嘩を売るとは、血迷ったか。大和、だが良いのか？ あいつ、他にも面子を集めているようだ。此方で把握しているだけで、カナダやブラジル、オーストラリアに……」

顎に手を当てて、片手で携帯を持って鎮守府の裏で通話しているのを見回りしている時に見かけた。

忙しそうなので、関わらずに無視したが何やら裏でも大きなことが起きているよう

だ。

自分のことなのに気にしない七海は嫁とイチヤイチャしながら戻っていった。

それに気付いて横目で見送るガングートも続ける。

「あのバカめ、バルト三国まで連盟を組もうとしているようだったぞ。安心しろ、バルト三国は潰しておいた。ブラジルもな。裏手でロシアにも妨害仕事を働いたようだからな。報復しておいた」

電話先で、見境ないアイオワに呆れている桜庭のため息が聞こえた。

裏工作でロシアに挑むとは無謀な。特殊組織など世界有数の強力なロシアと知っての狼藉か。

嘲笑うガングートは言った。

「次はカナダを消す。連中め、例の話の候補地に選んだ場所に細工をしたらしい。賄賂でもって、業者に口添えしたようだ。オーストラリアも此方の作業に横槍を入れて妨害しているが、どうする？ 私が判断していいなら、根本から捻るが？」

要は皆が直接気に食わないアイオワは反省と報復を物理で行うため、敢えて放置。

それよりも外側の協力者を知らない間に排除していく。ロシアの本領発揮であった。

「……分かった。バカの教育は我が国に一任してもらおう。本当の恐怖を、我が国の流儀で叩き込んでやる」

桜庭に、此方は関係者の身辺警護をするので、排除を宜しくと頼まれる。

電話を切ったガングートは非常に凶悪な笑みを浮かべていた。

こういう作業は昔から面白い。まるで戦争。武力でなく、権力の殺しあい。

楽しい。目立たず、然し確実に結果が見えるこの戦争は本当に楽しい。

だいぶネジが吹っ飛んでいるガングートだがこの人一応味方です。一応。

次々に指示を出す最中。ふと、気付く。アイオワがまた動いた。

見張られているとも知らず、また勝手にやらかした。

尚、既にアイオワは身内から諦められ、国から関与してないこいつの独断と見捨てられ、孤立無援なのを気付いていない。

頭がハンバーガーとコーラで満たされている極めつけのバカなので、こういう裏工作に向かない。

だから、周囲は潰されているのを理解できず苛立ち焦れて、更に過激になる。悪循環の繰り返し。

(ふむ……教え子に入れ知恵しておくか。派手に荒立てて、あのバカを挑発してやろう。大和にも一報入れておけばいい。あいつは単純だからな、追い込まれば自分で何れは襲ってくる。大義名分さえあれば、畏と知っても乗るだろうさ。分かりやすい。アメリカの面汚しめが、私や大和に勝てると思ったか)

パワーに全部能力を注ぎ込んだ知性の足りない子供なので、煽れば更に激怒する。

扱いやすい、そして救いようのない愚者に、ガングートは嘲りを交ぜつつ、出かける七海に入れ知恵を凶った。

七海はそれでも出かける。ガングートにも言われた。

気を付けろ。どうやら、もうこの鎮守府は見張られている。

出かけるなら、荒事に備えろ。細かいことを気にせずに、余裕がないから攻めてくる。故に、七海は二人を誘う。

「アトランタ、ジャーヴィス。奢ります、観光しましょう」

暇をもて余す二人は、相談をしようと思っていたのに出鼻を挫かれた。

大事なことだが、ガングートに二人も言われる。

取り敢えず、大事になるから用心しておけ。七海がどういう女か、自分で確かめろ。

七海も、アトランタとジャーヴィスがもうある程度は打ち解けているとは見ている。

たまには気晴らしでも良いだろうと誘ったのと、何かあればお国が黙ってないという
ある意味の身代わり。

半分が変化、半分がいつも通りという微妙な心境の違いだった。

『デカイ、ヤバい、怖い！ すごーいカブトムシー！ ……つて、なに？ 驕り!? うん、
行く行く!!』

特撮の変身音をオモチヤを使って真似ていたジャーヴィスはオタク故か直ぐに反応。
カブトムシのアイテムを荷物にしまっている。最新の悪党のアイテムらしい。

「いや、あれ……主人公？ なんで金属のイナゴ使ってるの、意味わかんない……」

ジャーヴィスに誘われて最新の話を観ていたアトランタも、暇だし心配なので行くと
答えた。

画面では、お笑い芸人が金属のイナゴを纏って奮闘するも、高笑いする邪悪な社長に
蹴飛ばされて横たわっていた。

イナゴを使うヒーローはありなのかと、真剣に悩んでいた。

準備をしている二人をおいて、今回は嫁と妹と娘とメイドたちと久々にいく。

代理は、五十鈴に任せておく。

「宜しくお願ひします。帰る頃には血塗れでしょうが」

「……七海、あんた何する気なの？」

不穏な単語をわざと言つて、経験上身構える五十鈴は不可抗力という意味を悟る。

七海がするんじゃない。七海がされるのだ。そして、これは囷にして誘きだすという作戦でもある。

ガングートに補佐をお願いしておく、五十鈴も解せたのか気を付けろとだけ言つた。

伊達に一度は暗殺未遂を乗り越えていない。今の七海は皆を守るためなら遠慮なく反撃する。

多少、軟化してもあの激情は早々直らないだろうから。

執務室で、喜ぶ皆を見ながら五十鈴は小声で七海に言つておく。

「帰つてきなさい。必ず、皆で。誰一人欠けないで」

「……はい」

戦争になるかもしれない。五十鈴も、七海も、アトランタもジャーヴィスも、ガングートも。

皆分かつていた。これは所詮、狼煙に過ぎない。これから発生する戦いの序章。

強大な個人と戦うための、始まりに。

七海がこうやって、五十鈴に素直に白状したりガングートに根回しするだけ変化していった。

以前はもつと感情的で、暴走している状態だっただろうが、今は幾分冷静になっている。

故に警戒できた。反撃の準備をする。

派手にしても、軍部が口止めと情報封鎖をできるバックアップもある。

最悪桜庭が居るのだ。負ける理由などない。

妙に身構える皆と、なにも知らない周囲の面子との久々の外出が、始まった。

おめかしする六人と、普段通りの制服のジャーヴィスとブラウスにジーンズのアトラ
ンタ。

そして、何気に動きやすい白露型の制服の七海で出掛けた。

何事もなければ、別にいい。そのまま楽しむだけ。

でも、多分それはないだろうと分かっている。

(心苦しいですね……皆の笑顔を曇らせるのは……)

どこか上機嫌の小春や、村雨も笑っている。春雨など大喜びだった。

無邪気な弥生、山風、如月だけが不穏な空気を察知して、音もなく七海に近寄る。皆で騒ぐ往來の歩道。近場の、商業施設を目指して歩いている。

そんな中、嫁は春物の服で七海の傍で囁く。

「準備は出来ているわ、司令官。皆浮かれているみたいだけど、そうも言えないんですよ？」

「お見通しですか、流星は嫁」

「ふふふっ」

然り気無く、武器を持ってきている如月は不敵に笑う。

分かっているんだろう。このお出かけは台無しになると。

でも、その台無しは……必要なこと。七海の苦心も、分かってくれる。

後で土下座でもなんでもしよう、如月は言っていた。

アトラクタも、ジャーヴィスも出来れば何も無いことを祈っていた。

誰しも、荒事にはなりたくない。けれど、それは……起きてしまう。

ある意味、予定通りで。

巻き込まれたのは、姉妹だった。

小春が自販機で購入して、皆も道中にある公園に寄つて暫し遅れた花見も兼ねて散策している頃。

村雨と春雨に、見るからに怪しい黒いスーツに黒いサングラスに帽子の男たちが、声をかけた。

何人もいる彼らは、道を教えてほしいから少し先まで送つてほしいと言われる。

春雨が七海に一声かけて、微妙に警戒している村雨も無礼なので一応教えるために案内する。

背中を向けて、戻つてきた無警戒の春雨と共に歩き出す。

公園から出て、近くの建物の陰を通りかかった頃だった。

村雨は、隣に立つて案内していた春雨とは違い、警戒心が強い。

春雨は七海の溺愛により愛でられた結果警戒心が欠落している。

なので気付かないが、背後で言うなれば殺気を感じた。がちやがちやという小さな金属音も。

軍属だからこそ、聞き覚えのあるその音は、危険を察知して隣の妹を庇って咄嗟に倒れることに成功した。

その音と、嫌な気配は。人間が使う、拳銃の音と。

七海に対する、普通の人間の嫌悪感とそっくりだった。

「春雨！」

庇って倒れる刹那、村雨は見た。

此方に武骨な大型拳銃を、消音装備をつけて銃口を向けているエージェントと思われる連中を。

数回、銃撃を受ける。倒れて回避できたが、起き上がる前に愕然とする春雨は言葉を失う。

無言で銃口を向けてきている知らない大人。呆然として、反応が遅れる。

「春雨、逃げ……」

素早く起き上がった姉が助け起こす。

台詞の途中で、間に合わないとは何かのように愛する妹を庇った。

効果があるから使う大型拳銃。撃たれば、死ぬかもしれない。

村雨は思わず目を閉じる。怖い。やっぱり、人間なんか最悪な存在だった。

せめて妹だけでも、と思った……その瞬間。

「ご主人様が来たよ、姉さん」

「……………へっ？」

何故か普段通りの妹の声。

驚いていたが、取り乱していない彼女は大丈夫と笑っていた。

……………うん、いつも通り。春雨が警戒心が欠落しているのは、何故か？

それは、ご主人様がとつても迅速で確実に強い狂犬だからである。

どぐしやあつ!!

呆けた声を出して、振り返る。丁度、凄い音がした。

同時に、男の一人が何かを回避して、近くの外壁に、何かが勢い良く飛んで突き刺さった。

……………公園にあった、ベンチ？ 大破してバラバラになっていたが金属の足だけが、刺さっている。

「落ち着いて、ナイトメア!! 死ぬ、それ死んじやうから待つて!! ジャーヴィスもそれ死ぬって言うてるじゃん!!」

で、男たちの更に背後。アトランタがパニックになりながら必死に宥めて止めていた。

が、そこには……………取って置き危険生物が、二名ほどいた。

『お前ら絶対ぶっ殺す……』

ベンチを投げたのは片手でもうひとつベンチを持っているジャーヴィスだろうか。綺麗な碧眼が濁った状態で、英語でそう罵っていた。無表情で。

「春雨、村雨……30秒下さい。その生ゴミを捨て置きますので」

七海に至っては完全にキレていた。

オッドアイは血眼で血走り、左手にはなんとバス停の標識を担いでいる。

根元にコンクリートのついた、鈍器である。

殺意しかない装備で、倍加した狂犬と誰も知らないが、殺人未遂経験者の人殺し擬きのコンビが、タッグを組んだ。

挙げ句には如月まで呆れたような顔で、スタンガンを構えており、逃がさない布陣が出来ている。

唾然とする皆をおいて、アトランタだけが悲痛に叫ぶ。

「うわあああああもういやだあああああ……!!」

一つ、追加しておこう。

アトランタは、苦労人の胃痛粹だった。

兎に角、狂犬と人殺し擬きを止めるため、アトランタが頑張る次回に、合掌ツ!!

血塗れの報復

(待つて待つて待つて!? ナイトメアもジャーヴィスも変わりすぎなんだけど!? 何事なのこれ!!)

アトランタは混乱する。

さつきまで公園でコーヒーの味について語っていたジャーヴィスと七海。皆も和氣藹々とアトランタと雑談していたのに。

それが、春雨が道案内をしてくると告げた途端に、二人して。

『ジャーヴィス、殺しましょう』

『夕立、話が早いね』

『なにその超展開!?!』

残っていた皆をアトランタに押し付けて、近くにあったベンチを片手に一つずつ、両

手で持ち上げるジャーヴィス。

従来型ゆえに身体能力も破格であるが、往來で超人の真似事をし出す。理解できないアトランタが何事か聞いても無視して走り出す。

何が起きたかと言うと、二名はちやんと気付いていた。

七海は、金属音がする違和感を微かに。

ジャーヴィスは経験で知る、クソツタレの気配を肌で感じた。

互いにこれが例のクソ野郎と思つて、追いかけた。

で、案の定物陰で襲いかかっていた。

アトランタはこういう空気を知らないので鈍い。

が、割愛するがジャーヴィスの過去はあの世界と全く同じ。

察知能力ははずば抜けて高い。

即ち、愛を破壊する人間はぶち殺す。自分が破滅しても、自分がその世界を好きだから。

七海は通常通り。敵対者は殺す。ヤンデレを侮るからこうなる。

要するにイカれた駆逐艦が二名ほどアトランタには任されていた。

で、キレたジャーヴィスがベンチを投擲。運悪く外れたが、怒髪の二人には関係ない。

周囲が呆然とするが、小春が悟る。

「皆、お嬢様に続いて。あいつらは、私達の敵だから」

嫁がスタンガンを持ち出していた。それを横目で見た。

詰まりは、何時もの人間の襲撃。今回は全員が目的。

そう思われるので、小春は妹と娘に攻撃していいと言った。

見れば分かる。拳銃で武装しているなら、一般人じゃない。

単なる、敵と言うことなのだから。

「何時までも守られるあたしたちじゃないよ！」

「許さない……ッ！」

一気に乗しい空気を壊されて激怒の身内。

小春は一番最初に七海に追い付く。

「お嬢様、相談が。どうやら、挟撃されている。どうする？」

「……アトランタ。後ろからも来てます。死にたくないなら応戦なさい!!」

小春が、背後にも似たような格好の連中がいると最後尾から先頭に躍り出て伝える。

深海棲艦の察知能力を侮るなかれ。直ぐにバレていた。

で、巻き添えのアトランタに七海は怒鳴った。

「えっ!? どういうことなのナイトメア!」

「あなたも巻き添えなのです、ほら!!」

先制攻撃した男たちは、立ち上がった二人よりも七海に銃口を向ける。

周囲の人間が見ているのに、お構い無し。大騒ぎになり、逃げ惑う人々。

閑静な公園の周囲が一瞬で戦場に変わる。

発砲され慌てて屈んで避けるアトランタ。

エージェントたちに下された命令は一つ。

七海の周囲を全員殺せ。誰であろうが関係ない。

アトランタですら、同国の艦娘がいてもアイオワには最早知ったことじゃない。

適当な報告しかしないような役に立たない後輩など、必要経費で死ねばいい。

向こうに感化されている裏切り者を処罰するだけと言う最悪な自分勝手な理屈で無

視した。

流石、自国の国民を経費で殺す女と言える。自分が正義だとしても言いたいような言い

分である。

アトランタは完全にとぼつちり。全く悪くないのに殺されそうになった。

「ひゃあああ!」

艦娘なので銃弾は見て回避できるが、メンタルがこの面子で一番脆く一般人に近い、

ダウンナーの性格のアトランタ。

異常な空気には弱く、混乱しているばかりだった。

悲鳴をあげて、右往左往していた。

七海は何とバス停の標識を大きく風いで銃弾を弾いた。

大振りなのに相手が撃つ前に軌道を判断し、防御している。

ジャーヴィスに至ってはベンチを叩きつけて盾にして防ぐと言う酷い雑な方法で凌ぐ。

衝撃で壊れるベンチ。

挟撃されている以上はアトランタでダメなら、嫁たちに託す。

「如月！」

「はーいー！」

名を呼べば以心伝心。嫁は娘と妹と共に迎撃する。

武器を探して、弥生と山風は錆びている遊具を無理矢理ぶっ壊して鉄パイプを用意していた。

「行くわよ、弥生！ 山風！」

「うん……！」

「分かった!!」

かなり不機嫌の三人は、現れる数名のエージェントと対峙する。

で、此方は……乱闘だった。

「提督ダメ、死んじやうわ!!」

「情けはかけません!」

村雨が必死に殺人はダメと言うのに聞きやしない。

エージェント相手に、標識を鈍器のように振り回して襲っていた。

春雨は能天気に応援しているが、往来で大乱闘を引き起こすなど前代未聞。

ジャーヴィスも新しく、何処からか自転車を持ってきて、投げつけた。

銃撃で応戦するも、密集していた三名ほどが質量と速度を殺せないまま自転車に直撃して横転。

そのまま、ジャーヴィスは走って駆け寄りジャンプ。のし掛かる自転車の上から勢いよく踏み潰す。

絶叫と自転車の断末魔の叫びが響いた。

此方は標識のせいで外壁にひび割れを作る悪魔が、凶器をぶん回して戦う。

小春も参戦して、飛んでくる銃弾を素手で捕まえ防御をカバーしていた。

「ありがとう小春」

「お嬢様に怪我させないのが従者の役目」

割って入るタイムリングといい、抜群のコンビネーション。

何人もいたエージェントの内、二名は標識の風ぎ払いで横に吹っ飛び痙攣して倒れ

た。

吐血しているが、本当に躊躇いが無い。殺すなどアトランタと村雨が言うので咄嗟に無意識で加減しているだけだ。

殺意その物は全く衰えていない。

逃げ惑う人々が通報して、数分後には、原付のお巡りさんが到着。

「何をしているんだ!!」

子供と大人の殺しあい。怒鳴り声をあげて参戦するも、スーツ姿の連中は警官を見て一目散に撤退を始めた。

長閑な街中で戦争など冗談じゃない。子供なのに、なぜかバカみたいな身体能力で応戦している。

「君達も止めなさい!! 過剰防衛だぞ!!」

「五月蠅い! 軍部の揉め事に民間が口出しするんじゃないですよ!!」

標識を振り回す七海が身を引く連中を追いかけようとするも、仲裁する警官があとには任せろと言う。

背後では、如月と弥生と山風が三人で後続を叩き潰す。

駆逐艦といえど、戦闘の経験が違う。拳銃ごときで愛に溺れた艦娘は脅せない。

撃たれるも難なく鉄パイプで弾き、如月が素早く接近してスタンガンで怯ませ、二人

で一緒に殴り倒す。

倒れたら次に行き、先行して如月が手際よく鈍らせて思い切り二人で殴打して撃破。アトランタは目を閉じて耳を塞いで屈んで震えている。パニックになっていて意味がない。

応援に来た警察と、艦娘と逃げようとするエージェント。

意味のわからない三つ巴になっていた。

『邪魔だよ日本の警察!! そいつら捕まえないならあたしたちがやる!』

『落ち着きなさい!! これ以上したらどう見ても死ぬ! よく見るんだ!』

『じゃあ死ぬばいいのよ!! 殺される覚悟があるから殺しに来たんだ、殺されたって文

句言えるか!』

『己の殺人を正当化してはいけないんだ!! 君の言い分は艦娘のものじゃない、人殺しの理屈なんだぞ!』

自転車に潰されたエージェントを念入りに四肢の骨をへし折って、逃走を阻止していたジャーヴィス。

極度に興奮しており、止めに頭蓋を踏み砕こうとして、羽交い締めに使われていた。

英語の喋れる警官が懸命に止めるも聞きやしない。

軍部の問題なのに口出しすると言われても、これが警官の役目。

公務執行妨害で捕まえれば、今度は軍部が警察に介入する口実ができてしまう。警察と海軍は現在も不仲。しかもジャーヴィスは海外の艦娘。

これ以上は下手に動けず足踏みする。

「逃がさない……っ！」

応援の警官が奴等を追いかけるが、間に合わない。

車に乗って逃走したのを見た。七海は邪魔立てする警官に退けと怒鳴るも、向こうも捕まえると威嚇する。

すると、そばにいた小春が動いた。動いてしまった。

「邪魔しないで、人間の癖に。お前らの正義は、人間の都合。私達には、関係無い」

なんと警官の顔面に飛び蹴りを入れた。無論、加減はしたが吹っ飛ぶ警官。

もう、ここまで来たら止まらない。小春は倒れた警官が起き上がる前に、七海に言う。

「お嬢様、行こう。私達を殺そうとする人間は、皆殺しにする」

「ええ、行きましょう」

起き上がり、七海と小春の足を倒れている警官が掴む。

小春も七海も蹴つ飛ばして走り出す。

が、それを見ていたジャーヴィスも真似た。

『喧しいって言うてるのよ、退けエ!!』

邪魔をしている警官の腕を掴んで、記憶にある一本背負いを真似た。

柔道を習う警官も、過剰なパワーで持ち上げられて叩きつけられたらひとたまりもない。

背中を強打。呻いて鈍ったのをジャーヴィスも突破した。

倫理も糞もない。邪魔なら警官ですら無視するのが今の七海たち。

人間は信用できない。警官がああいう手合いに何ができる。

自分達でぶつ殺すか捕まえるのが一番確実なのだ。邪魔するなら警察も排除する。

「提督、ああもう……!!」

頭を抱える村雨。興奮し過ぎて話を通じない。

ジャーヴィスも同類なのか、常識のある行動ができるのは村雨だけだった。

一応鎮守府に連絡しておく、五十鈴と繋がった。

すると、ガングートが裏はやっておくから、今は犯人を追いかけると言った。

警察が捕まえても自分達がやってもいい。とにかく逃がすな。そう言うのだ。

「そんな滅茶苦茶な……!」

何名かは離脱されている。

警察も追いかけているが、それ以上にジャーヴィスと七海と小春が、追撃している。

下手すると七海は陸上でも乗用車よりも素早い。

七海とジャーヴィスと共に走りながら言った。

此方に合わせたのは何か理由があるのかと。

同じような発想に至ったのは打ち合わせなどしていない。

その場の判断が全くジャーヴィスと七海は同じ。相手を殺しに行く。

ジャーヴィスは漸く笑って、過去のことを簡単に話した。

愛を奪われる苦しみを知っている。そして奪う人間を嫌悪して憎む。

故に、七海の作る楽園を穢す相手を許さない。殺しても勝手に守る。

歩道では通行人が邪魔なので建物の屋根を飛び移り、追いかけるながらジャーヴィスは言うのだ。

『夕立の愛は尊いものなの。可能性なんだよ、この世界の新しい。それを下らない感情論で奪われるぐらいならあたしは何度だって人間を殺そうと思える。愛は、世界を救う』

と思うから』

真剣に語る彼女に納得した七海は、頷いた。

本質は七海と同じく勝手な女。だからこそ、気が合う。

波長が重なってもう一人の自分のようにシンクロした行動ができる。

彼女たちの前では、愛こそが真実であり、事実である。

守るべき矜持は自分の愛情。それだけ。他は必要ないと切り捨てる。

『奇遇ですね、あたしもそういう考え好きですよ』

『やっぱあたしたち、馬があうって奴かもね』

『珍しいこともありますねえ』

などと言いながら、小春が逃げたワンボックスを発見したと叫ぶ。

先回りするように、暴走する車両の先には如月たちが向かっている。

道路を爆走するワンボックス。滅茶苦茶な運転をしている。

如月に通達。ワンボックスを破壊するから手伝え。

七海は速度を落とさざるを得ない道なりを探し、道幅が狭くなつて、渋滞が起きていて嫁から報告を受ける。

曲がる兆しがないし、この辺はどうも逃げ道もない。一度入れば、抜けだせない。

路地にも入らず、渋滞に自ら入るワンボックス。見事にハマって、脱げ出せなくなつ

て立ち往生。

後続に挟まれて身動きがとれないようだ。

七海は下に着地。また近くのバス停の標識をぶんどった。

助走をつけて、渋滞を起こしている車道に向かつて跳躍。

残った二人と合流する嫁たちも到着して、配置につく。

七海は関係無い車の屋根に落ちながら、ワンボックスを目指し……。

「お礼参りの時間ですよゴラア!!」

一際大きく飛び上がり、標識の上を下に向けて、落下。

怒鳴りながら目指す着地点は……ワンボックスの屋根だった。

ばこおん!!

人前で、ワンボックスの屋根に爆音をさせて、標識が墓標の如く突き刺さった。

七海はそのまま、フロントガラスの前に落ちる。

絶叫する中の人。狂う七海が化け物のような動きで、フロントガラスを叩き割り、侵入。

数秒後には血塗れになるような報復を開始した。

突入を見てから渋滞を良いことに群がる深海棲艦と艦娘。

駆け寄って、女の子たちがワンボックスに恐ろしい顔で次々侵入して悲鳴の阿鼻叫喚

を道路で作る。

尚、見ていた無関係の一般人にも地獄が波及して通報騒ぎ。

真つ青になり、そこでも逃げ出す人々。

数分もすると、車内で逃げ出すこともできずに血祭りにされてしまった襲撃者。

車から堂々と出てくる皆は……スッキリしたような表情で、真つ赤に染まりながら全員笑っていたのだった。

幸福な一時

……やり過ぎた。

結果として、七海たちの行為は世間を賑わせることになった。

白昼堂々、艦娘を狙ったテロリストとの激闘。

それが、軍部がマスコミに流したフェイクだった。

あの事件は、町中に潜んでいた艦娘排除の過激派を叩くため、極秘任務として発令されていたもの。

テロリスト相手なので、一切の容赦なく叩き潰したと警察にも海軍は話していた。

尚、ジャーヴィスに関してもイギリスが渋々口添えした。

彼女は現在出向しており、日本の海軍に現地で協力しただけ。

ジャーヴィスの上司が、派手に暴れた後輩に呆れつつも、過去を知るゆえに仕方なしと判断した。

相手も相手だ。目撃者が多数いても、テロリストの話を見た民衆は胡散臭くも受け入れた。

何せ先に発砲している所を見ている一般人もいた。それのおかげのようだ。

本来であれば、国内にテロリストを入れるなどと言う事態は陸軍の怠慢と言われる。

内部の荒事は陸の管轄。陸が対処すべき事案だと非難されたようだが。

事情が事情だった。七海たちが暴れすぎた結果、犯人は大半が瀕死に陥った。

生き残った一部も警察に搬送中に怪我を引き摺り逃走。

そのまま自殺したらしい。徹底的な口封じとガングートは言った。

陸軍もこの異常な襲撃は、テロリストに間違いないと認めた。

同時に引き金は海軍なのだから、自分の尻拭いはしろと関与を拒否。

情報を集める前に、自分等で潰してしまった。それで、やり過ぎた。

そういう話になった。七海は無罪放免。当たり前だ。

自分のところの戦力を奪いに来たテロリストを撃退しただけ。

彼女から手を出した訳じゃないのは村雨と春雨が証言している。

ただ……また。また、七海の悪名が増えた。

今度は、野良犬と言う渾名がついたらしく、周囲の人間はドン引きしている。

人間相手でも加減せずに食い散らかす。七海のイメージはどんどん悪化していった。

ジャーヴイスも、今回は見逃すが次回は少しは遠慮しろと苦言程度で済んでいる。

アトランタには、二人がしつかりと謝った。やり過ぎた、ごめんなさいと。

「……いいいんだよ。結果的にあたし守ってもらったんだもの。ただ、シヨックなのはさ……」

アトランタは酷く落ち込んでいた。

それはそれで、此度のテロリストを差し向けたのは案の定アイオワ。

勝手に判断して、真面目に宜しくない連中に金を渡してけしかけたのだ。

七海がやり過ぎなければ拷問でも尋問でもして、吐かせていたとガングートは言うが。

「いや、これは寧ろ好機か……? ああバカはどうせ認めない。言質などそもそも取れるかも分からんならず者相手では、妥当な終わりとみた方がいいな。うむ、証拠よりもっと小娘を追い詰め自滅させる方が確実だな……」

アイオワはどうせ、そんなものは知らないと白々しい言い訳を並べて逃げるのは目に見えている。

周囲が止めると言ったところでもなにもしていないと見え見えの嘘を言つて聞かないのはもう皆知っている。

理由も分かった。アイオワは七海が気に食わない。ただ、その為にこんなことをして

いる。

どうやら、経験の浅い七海が自分よりも強くなるのが嫌なようだ。

そんな子供じみた馬鹿げた理由なのだが、問題がある。

七海の行いをよく思わない、内心ではアイオワを応援している諸外国が、どうにも七海の方にちよつかいを出すところロシアに潰されるので、アイオワの支援に切り替えたようだった。

妨害ではない。支援に回る。

既に自国と同僚には諦めがついているが、裏では諸外国がアイオワに責任を押し付け漁夫の利を狙おうとしている。

そういう性格のアイオワは、利用されているのを分からずまだ仕掛けてこようとするのだ。

アトランタはアイオワから裏切り者と一方的に謗りを受けて、攻撃の対象にされてしまった。

同時に、ジャーヴィスも同じく始末する障害物。そういう認識のようだ。

アメリカは裏切らず、嫌がついていた先輩に狙われると言う不幸を背負ったアトランタ。

逃げたいがアメリカに戻れば、アイオワが多分直接何かしてくる。それこそ、無事

じゃいられない。

どうするか迷うアトランタ。すると、七海が。

「なら、ここにいてくださいアトランタ。守りますので」

と、しれつとアトランタに言ったのだ。

この鎮守府にいる限りは、誰であろうが死なせない。

アトランタもそうだ。殺そうとするなら、こつちが殺してやる。

七海は、構わないとアトランタに言うのだ。

「そのアイオワだか浪岡だか知りませんが、頭の中までジャンクフードで出来てるようなバカ女はぶつ殺します。そうすれば、アメリカに安心して帰れますよね」

「ナイトメアがいうと、背筋が凍りそうだよ……」

自分の目的、アイオワの殺害を決めた七海が終わるまでは逗留すればいいと事もなく許してくれた。

彼女も、皆と戸惑いながらも仲良くしてる。じゃあ別にいい。一緒に居たって。

単純明快の判断で、あの剣幕も理由と理屈をアイオワのせいと嫌でも分かったアトランタは思う。

彼女は世界を相手に戦う気なのだ。これぐらいの気概がないと務まらない。

取りあえずは、彼女は狂犬だが狂ってはいない。そう、思うことにする。

こうして今回は幕を閉じる。

テロリスト事件は失敗し、方向を定め、相手にはまだ無数の支援が残っているし、もしかしたら他の連中も襲ってくるかもしれない。

引き続き油断のできない展開だが、計画は続けていく……。

で。

「お出掛けが潰されあたしは非常に不満です。故に中でできることをしましょう」

テロリストに襲撃を受けて外出を潰され一週間経過した。

後処理を、桜庭が反撃の準備と計画の進行をガングートと共にするので任せろ、と言うので頼る。

することのない七海は、鎮守府の中で出来ることを探した。

「司令官、温泉に入りたいわ！」

「採用オツ!!」

嫁が入浴剤を持ってきたので皆で大浴場あるんだし風呂でも入ろうと言い出した。

生臭い臭いで一時期汚れまくったせいで、未だに若干血生臭い皆さんを綺麗にするべく、七海は採用。

艦娘たちは話は聞いているし、大変だったのであれこれ助けてくれたが臭いのはどうしようもない。

一回服は全部処分しジャーヴィスは母国から新しい制服を仕入れていた。

あとは回数を重ねて、臭い消しをするだけ……なのだが。

「如月、何かしらこれは？」

「無論、ナニよ」

「どっから持ってきたアツ!!」

五十鈴が如月が持っていた物を没収して把握。

……入浴剤ではなく、完全にそっちのあれだった。

いや確かに入浴剤ではあるが、お前は何時から大人向けの物を持ってきていたのか。

五十鈴がすかさず却下。普通の入浴剤を使えと怒る。

「これが如月たちの普通よ!! 愛情表現なの!!」

「どこの世界でそっちの店で使うような物を愛情表現って言えるのか説明できるならね

執務室で、歌姫トラックフィンガーが炸裂し、頭部が破壊寸前の七海を見ながら呆れているアトランタ。

ジャーヴィスも風呂に入るなら良いものがあると言い出した。

既に道具を入れている風呂桶を完備して。

『あたしに良い考えがある』

「待つて、それ失敗する。不安になる台詞だから止めてジャーヴィス」

小さい頃に来たロボット司令官の台詞のような気がしてアトランタは嫌がる。

ほああああ!! とかいいながら爆発しそう。

因みに室内にはメイドと深海棲艦たちも何人かいる。

「村雨は淫乱じゃないの、分かった!？」

「嘘を言うな。白状しなさいエロメイド。お嬢様に擦り付けるなどなんと言うことを

……お前には感謝の気持ちがないの!？」

「姉さん……」

「春雨、違うから。村雨じゃないからあ!!」

七海がエロい道具を持っていたのは村雨を庇うためであり村雨こそ黒幕と言われ信じる妹。

相変わらずであった。村雨は渾身の否定を続けているが小春は信じてくれない。

『じゃじゃーん！ 見よ、日本の温泉のもと！ ホワイトボーン温泉！』
「!?」

ジャーヴィスが自慢気に取り出したのは、日本の温泉の入浴剤の粉末。
ホワイトボーンと言われ、アトランタは字面通りに受け取った。

ホワイトボーン、即ち白骨。

「骨エ!？」

『ああ、うん。なんかこれ、あんまりにも気持ちよくて長風呂するじゃん？ そうすると、肉体が温泉に溶けて骨だけになる、呪いの温泉だつて』

「いい、いい！ あたしは遠慮する!! 死にたくないし!!」

要はオカルトアイテム。ジャーヴィスが言うには呪われた秘境の温泉。
それを入浴剤にしたもの、だそうで。

真つ青になるアトランタ、全力で拒否。

だが深海棲艦がそれを阻む。

「逃がすわけにはいかない。パッケージヒロイン、お前も連れて逝く」

「待てエ！ 誰だ今あたしを裏表のあるメインヒロインつて言ったの!!」

禁句を言つて挑発。小春がアトランタの傍に一瞬で間合いを侵略。

思わず反射的に反応したアトランタの腕を掴む。

「……あつ」

「素敵な艦娘なら遠慮は要らない。秘密の殴り書きを暴いてあげる」

時は遅い。捕まったアトランタ、ずるずるとそのまま連れていかれる。

「い、いやああああああ!! ナイトメア助けて!! あたし死んじゃうよー!!」

七海に助けを求めるアトランタ。

ジャーヴィスがナイス小春とサムズアップして共に向かう。

「ジャーヴィス、お前も一緒に入る。真つ白モザイクになるといい」

『……よし、翻訳できた……ん? モザイク? ゴメン、あたしそれはゴールデンの方だ

よ?』

すたすたとドアを開け、誘拐されていた。

フェードアウトするアトランタの絶叫。今日も絶賛とぼちりであった。

で、此方は。

「みんな聞いてください。今度お出掛けするときには温泉旅館にします。入りたい温泉の入浴剤がここにあるので、村雨以外は試してみてください」

「何で村雨だけダメなのよ!?!」

深海棲艦たちに温泉の入浴剤を配って、好きなものを試してみると言いながら、解放された七海は提案する。

村雨がダメなのは、泊まり掛けなどすればどこの男とご休憩に行くか分かったものじゃないから。

村雨は七海の専属。誰にも渡さん。

要するに泊まり掛けだとラブホに行きそうな村雨は連れていけないので、とのこと。「言いがかりを止めろオ!!」

キレる村雨。久々のストレートのセクハラだった。

グーで殴った。

「久々の村雨パンチ……!! これがあるから村雨にはセクハラしたくなるんですよ!」
「このロリコンのマゾヒスト! 変態、変態! 変態ツ!!」

顔を真っ赤にして怒鳴る村雨に発情して喜ぶ七海。

本当に救がない、いつも通りの光景であった。

「平和ねえ……」

「そうだね……」

「うん……」

嫁と娘と妹は着替えを持って先に風呂に向かう。

ドンチャン騒ぎの室内は、エロ目的で春雨、村雨に抱きつこうとして五十鈴にお仕置きされる七海や、嬉しそうに風呂場に向かう深海棲艦たちの日常があった。

騒がしくも尊い穏やかな時間がある。

それが、何れだけ幸福か……もう、皆はよくわかっている。そんな風景であつた……。